
ゾディアックブレイヴ・ストーリー 黒翼の白竜 ～小説FFT獅子戦争～

今野 ミーヤ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ゾディアックブレイヴ・ストーリー 黒翼の白竜 ～小説FFT獅子戦争～

【Nコード】

N1671M

【作者名】

今野 ミーヤ

【あらすじ】

名作ゲーム「FINAL FANTASY TACTICS（FFT獅子戦争）」PS版の全編小説化に挑戦。原作のセリフや設定はなるべくそのまま取り入れつつ、行間を想像で膨らませてます。『アクションシーンは少年漫画のように、恋愛（あくまでも異性間）・叙情シーンは少女漫画のように、背景解説は歴史小説のように』が指針です。

舞台は中世イヴァリース王国、時は王位を巡る内戦・“獅子戦争

”の真っ只中。騎士の名門・ベオルブ家の御曹司ラムザ、その瘦身に秘められたる実力は、彼の胃袋と同様に底知れない。権力者達の陰謀を憎み流浪の剣士となったラムザは、“異端者”の汚名を着せられながら、内戦の黒幕達に人知れず立ち向かう――。

原作キャラほぼ総出演、創作キャラも多数。笑いあり涙ありの、超長編大河小説……になるといいなあ。

※第三子誕生に伴い、当分の間（年内ぐらい？）更新不定期になります。

0-〔0〕 歴史学者アラズラム氏によるはしがき

戦士は剣を手に取り

胸に一つの石を抱く

消えゆく記憶をその剣に刻み

鍛えた技をその石に託す

物語は剣より語られ石に継がれる

今、その物語を語ろう……

はしがき

アラズラム・J・D (中世畏国史研

究家)

読者諸氏は“獅子戦争”をご存じだろうか。

今からおよそ四百年前にイヴァリース王国(畏国)を二分した、後継者戦争である。

隣国オルダリア(鷗国)との“五十年戦争”の敗北から一年後、国王オムドリア?世はわずか二歳の王太子を遺して病没した。

事実上の王ともいえる後見人の地位を争ったのは、王妃ルーヴェリアの実兄・ラーグ公と、前王デナムンダ?世の従弟にあたるゴルターナ公であった。

前者が白獅子、後者が黒獅子を紋章としていたため、この内戦は

後世“獅子戦争”と呼ばれるようになる。

しかし、混乱したイヴァリースを平定したのは、ラーグ公でもゴルターナ公でもない。

平民出身の若き武将ディリータが、オムドリア？世の養女・オヴエリアと結婚し、王太子オリナスを排して畏国王の座に就いたのだ。畏国人に最も親しまれている英雄譚である。

現在でも、特に田舎へゆくと、聖アジョラと十二使徒の次に武勇王ディリータを崇拝している、という人々に少なからず出会う。

だが、目に見えるものだけが“真実”とは限らない。

本書は歴史の陰に消えた一人の若者の半生を浮き彫りにする。

彼は、当時騎士達の棟梁として名高かった名門・ベオルブ家の末弟であった。

昨年公開された（長年、グレバドス教会の手によって隠匿されてきた）“デュライ白書”によれば、彼こそが真の英雄だという。

一方で教会によれば、否、彼は神を冒瀆し国家の秩序を乱した元凶そのものだという。

果たして“真実”はどちらにあるのか。

もともと、本書はあくまでも“フィクション歴史小説”であって“ノンフィクション史書”ではないし、“デュライ白書”の解釈を巡っては未だ諸説ふんぷんとしており、学会での統一見解を得るに至っていない。

（“獅子戦争”と“デュライ白書”に関して詳しくは、拙著「デュライ白書・四百年目の真実」「獅子戦争の謎」を参照されたい。）
とはいえ、本書は“獅子戦争秘話”として、まことに興味深い娯楽読み物に仕上がっているばかりでなく、中世畏国史を立体視するための格好の入門書となろう。

0ー〔0〕 歴史学者アラズラム氏によるはしがき（後書き）

原稿用紙千五百枚分ぐらいまで、手書きの下書きがあります。メ
ッチャ長いお話ですが、気長にお付き合い下されば幸いです。

ラムザ君やアグリアスさん達と同年代ぐらいの若い読者の皆様、
どうぞ感想お聞かせ下さい。（勿論、もっと大人の方やアルマ以下
の更に若い世代の方も大歓迎ですけど！）作者は既にヤンチャ坊主
二人の母ちゃんで、ラムザ君の倍も年食ってます。すっかり所帯染
みてしまつて、青春の日々の瑞々しい感性は鈍っておりますわ。ラ
ムザと愉快的仲間達（?!）が現役若人の皆様の目にどんな風に映
るのか……？ドキドキです。

序章 王女誘拐 [1] オーボンヌ修道院 礼拝堂（前書き）

なるべく、ルビ対応モード（縦書きPDF）でお読みになることをおすすめします。

序章 王女誘拐 〔1〕 オーボンヌ修道院 礼拝堂

黒珊瑚海のほとりに佇むオーボンヌ修道院は、未明から春雨に包まれていた。

十二世紀以上も昔に建立された古風な本堂は、長年海からの霧にさらされて、粉を吹いたように腐食している。

ファラ教寺院から改装された時に？^はめ込まれた彩色硝子の^{ステンドグラス}大窓は今、薄暗い雨天の自然光よりも、内側からの燭台の灯りによって照らし出されていた。

「……我ら罪深きイヴァリースの子らが、神々の御力により救われんことを……」

広い礼拝堂の中では少女が唯一人、幼子の聖アジヨラを抱いた聖母ファティマの肖像の下に跪いて、一心に祈りを捧げていた。

清潔な、純白の絹の長衣^{ローブ}をまとった少女は、細い指を組み、低い声で神々と聖人達を讃える言葉を唱え続ける。

深く頭を垂れるにつれ、長い亜麻色の髪が緋色^{マント}の外套の上を滑って、華奢な肩の前に流れた。

聞こえるか聞こえないかの穏やかな波音と、緑青の浮いた瓦屋根に当たる雨滴の響きとが、堂内の静寂を一層厳かなものにしていった。と、――。

少女の後ろで礼拝堂の扉がゆっくりと開き、絨毯を踏む二種類の足音が彼女に近寄った。

高く固く、きびきびとしているのは、整った顔立ちの若い女騎士の軍靴が立てる音。

柔らかく軽いのは、真っ白な顎鬚を豊かにたくわえた老神父が、法衣を引きずる音だ。

「さ、出発いたしますよ、オヴェリア様」

女騎士は少女の背に、姉のように優しく声を掛けた。

オヴェリアと呼ばれた少女は、きつく重ねた両手を胸に押し当て、

小さく溜め息を吐く。

「もう少し待って、アグリアス……」

女騎士・アグリアスは、なおも促した。

「すでに護衛隊が到着しているのです」

老神父もオヴェリアをたしなめる。

「姫様、アグリアス殿を困らせてはなりません。さ、お急ぎを……」

「でも……」

オヴェリアが躊躇していると、扉が荒々しくもう一度開き、黒い鋼の鎧を身に着けた

初老の剣士を先頭に、六人の兵士達が礼拝堂に入ってきた。

「まだかよ！もう小一時間にもなるんだぞ！」

隊長とおぼしき黒い鎧の剣士の張り上げただみ声が、静謐な礼拝堂の壁にこだまする。

「無礼であろう、ガフガリオン殿。王女の御前ぞ」

アグリアスの凜とした声が、雑音を払うように透った。

ガフガリオンの右隣に従う瘦身の青年が、いち早く片膝をつき、オヴェリアとアグリアスに向かって丁寧な御辞儀をする。兵士一同も慌ててそれになった。

が、隊長のガフガリオンは立ったまま頭を下げたのみだ。

「これでいいかい、アグリアスさんよ。……こちらとしては一刻を争うんだ」

この態度には腹に据えかねて、アグリアスはガフガリオンの髭面を睨んだ。

「誇り高き北天騎士団にも、貴公のように失敬な輩がいるのだな」

ガフガリオンは平然としたものである。

「辺境の護衛隊長殿には十分すぎるほど紳士的なつもりだがね……。それに、オレ達は北天騎士団に雇われた傭兵だ。あんたに礼をつくす義理はないんだ」

「……傭兵だと？」

言われてみれば兵士達は装備もまちまちだし、北天騎士団の旗印で

ある青地に白獅子の紋章も見当たらない。

「無礼なのも道理よな！」

柳眉を逆立てたアグリアスの眼差しは、しかし、ガフガリオンの傍らに控える青年に向けられて、和らいだ。

イヴアリース
畏国人には、髪も瞳も薄茶から栗色にかけての色合いの者が多い。だがこの若者は珍しく、目の覚めるような明るい金髪だ。

といっても、アグリアスの注意を引いたのは、黒い革鎧と淡い黄金色の髪との鮮やかな対比ではない。

どこことなく、彼は他の傭兵達とは異質な雰囲気を漂わせているように感じたのだ。

立ち居振る舞いも違う。

先程の敬礼にしても、周りの兵士達は取って付けたようにぎこちなかったが、彼だけはごく自然な物腰だった。

仲間達が皆、不躰にアグリアスの美貌に見とれているというのに、青年はまだ面を伏せていた。

ふと、注目に気付いてか。

顔を上げてアグリアスと視線が合うと、目だけで微笑する。

碧い、秋の空のように澄んだ、涼やかな瞳をしていた。

改めてよく見れば、面差しにまだ少年とっていいあどけなさの残る年頃だ。

青年剣士の容貌に意外な印象を持ったアグリアスだが、彼女よりもっと驚いてまじまじと目を見開いたのは、オヴェリア王女の横に立つ老神父である。

（このお人は……！？ いや、まさか……？）

「わかりました。参りましょう」

ようやく立ち上がって兵士達の方へ振り向いた王女の声で、老神父は我に返った。

「どうかご無事で」

老神父は王女のために、指で聖印を切る。

「シモン先生も」

オヴェリアが名残惜しそうに、老神父の手を握った。

その時。

「アグリアス様……、て、敵がッ！」

三度目に扉が開いて、矢傷を負った女騎士がよろめきつつ礼拝堂に駆け込んできた。

「ゴルターナ公の手の者か!？」

シモン神父は女騎士を支え、早速、癒しの魔法の呪文を唱え始めた。

「数は？」

アグリアスが尋ねるのへ、

「十五人ほど、正門の前に。他に、弓兵が幾らか潜んでいるようにでした」

と報告して、女騎士は咳き込んだ。

「わかった、ご苦労。治療が済んだら、お前はそのまま王女のお側を離れるな」

言い置いて、アグリアスは早くも礼拝堂を飛び出している。

「ま、こうでなければ金は稼げんからな」

ガフガリオンはおもむろに、ほとんど白くなった口髭を撫でる。

負傷した女騎士が、胡散臭いものを見る目付きでガフガリオンを見上げた。

「なんだラムザ、お前も文句あるのか？」

傭兵隊長ガフガリオンは、金髪の青年を斜に見やった。ラムザと呼ばれた青年剣士は、首を横に振り、真っ直ぐな眼でじっとガフガリオンの漆黒の瞳を見返す。

「……僕はもう、騎士団の一員じゃない。あなたと同じ傭兵の一入だ」

「……そうだったな。よし、行くぞッ！」

ガフガリオンを始めとする傭兵達も、駆け足で礼拝堂の扉から出て行く。

彼らの――、というよりは、その中のたった一人の後ろ姿を見送ったシモン神父は、女騎士に回復の魔法をかけ終わると、誰にと

なく問うた。

「ラムザ……、ラムザと言われたか？」

「え？ ええ、そのようでしたか」

女騎士が答える。

「おお……。では、やはり……！」

口の中で呟かれた感嘆は、王女と女騎士の耳には入らなかったろう。

「神よ……」

オヴェリア王女は震える指を組み、避けられないだろう流血の場面を想って、神々の加護と許しを祈る。

「ご心配召されるな。あのお方がおいでになる限り、悪いようにはなりません」

シモン神父は落ち着き払って請け合った。

（まこと、かのお方のご子息なれば……）

老神父の胸中を窺い知ることのできないオヴェリアは、“あのお方”というのを、王女付きの近衛騎士隊長アグリアスのことだと受け取ったらしかった。

「ラヴィアン！ アリシア！」

東西方向と南北方向の廊下が交わる地点で、アグリアスは特に信頼を寄せる部下の名前を呼んだ。彼女より幾分年少の女騎士が二人、駆けてくる。

「北側、異状無し」

アグリアスの右から来た、黒髪で小柄な、活発そうな方がラヴィアン。

「南側、異状無し」

左から来た、栗色の巻き毛、ふっくらと女らしい体付きの、大人しそうな方がアリシア。

「よし、お前達も来い」

「「はいっ！」」

並んで走りながら、ラヴィアンが尋ねる。

「アグリアス様あ、あの連中の戦力、どうぞ覧になります？」

「さて、な。戦力どころか、同士討ちになりかねん。ラーグ公も舐めて下さることよ、あのような破落戸ころつぽまがいの者どもばかり寄越されるとは。恐れ多くもオヴェリア様は、一国の第二王位継承者なのだぞ」

アグリアスは苛立たしげに言った。

「でも、あの隊長さんと金髪の剣士さんは、かなりの使い手みたいでしたわ」

と、アリシアが口を挟んだ。

「あ、シアちゃんもあの子に目え付けたんだ？ もー、面喰いなんだから」

「何の話をしてますの！ ラヴィーちゃんたら、こんな時に……」

「ねー、後で突撃面談インタビューしちゃおうよ。何から訊こっか？ 星座とか？」

アグリアスは我知らずフツと笑みを漏らした。

アリシアとラヴィアンコンビの二人組は、士官学校生時代からの大の親友同士だ。茶目っ気がありすぎて、近衛騎士隊の中で普段一番叱られやすいのはこの二人である。が、有事の際も平常心を失わず、一番安心して大事な仕事を任せられるのもこの二人だった。

「好きにするがいい、“お客”が帰った後ならな。我々近衛隊だけで戦うつもりでいろ。油断するな！」

アグリアスはキュツと口許を引き締め、活を入れる。

「はい」

「はいっ！」

二人の年若い女騎士達は、揃って元気に返事をした。

0－〔2〕 オーボンヌ修道院 正門前

小雨の煙る中、近衛騎士達と傭兵達は、修道院の正門前で襲撃者達と対峙した。

「黒獅子の紋章だど！？ばかな……、ゴルターナ公はいったい何をお考えなのだ。ここまでして戦争を起こしたいのかッ！」
アグリアスが愕然として叫ぶ。

真紅の地に黒獅子を染め抜いた、南天騎士団の紋章の盾を持つ騎士が、長剣の切っ先をアグリアスに向けた。

「その女ッ、無駄な抵抗はやめておけ！おとなしく王女を渡すんだ。さもなくば、その綺麗な顔に傷がつくことになるぞッ！」
美貌の女騎士は、形の良い薔薇色の唇に不敵な笑みを浮かべる。

「顔でオヴェリア様の護衛隊長に選ばれたわけではないぞ。貴様らこそ、おとなしく引き返したが身のためだ」

言って、愛用の珊瑚の剣を抜く。柄頭に桃色珊瑚の装飾を施した、優雅な見た目ながら切れ味鋭い剣だ。

「フン、真っ正面から攻めてくるとはな。ゴルターナ軍も能無しばかりだぜ」

ガフガリオンも剣の鞘を払う。血の染み込んだように赤黒い、不気味な刀身が現れた。

「ならば、ここは我々だけに任せておくのだな」

「それでは金が稼げんのだよ。ラッド、ラムザッ！オレについてこいッ！」

ガフガリオンが走り出したのが合図となって、攻守両軍の距離が一気に縮まった。

「いいか、一人残らず殺るぞッ！生きて奴らを帰すなッ！」

「何を言うか！殺す必要はない、追い返すだけでいい！ここで奴らを殺してしまつては、まさにゴルターナ公の思うつぽ！」

ガフガリオンの物騒な命令をアグリアスが咎めた時には、傭兵達の幾人かは既に敵兵と刃を交えている。

「そんな器用なマネができるもんかッ！」

ガフガリオンの血紋剣が敵剣士の顔面を真っ二つに断ち割り、新しい血に濡れた。

敵方も、正式な騎士の格好をしているのは指揮官以下三、四人のみで、他はならず者風の傭兵ばかりだ。

一番年若いラムザを与し易しと見て斬りかかった兵士の一人は、渾身の打ち込みを苦もなくいなされて、たじろいだ。

腰の引けたところへ、すかさず反撃が来る。

受け止めた、つमりの曲刀は一刀のもとに叩き折られていた。その勢いのまま脳天に振り下ろされるかに思われた剣は、眉間すれすれでピタリと止まる。

が、助かったとわかる暇もなく、兵士は下腹に強烈な膝蹴りを喰らって昏倒した。

ラムザの後ろで近衛騎士が呻いた。

立ち木の上から矢を射かけられたのだ。

しかし、守り手にも弓兵はいる。先程ガフガリオンに名指しされた長身の若者、ラッドだ。

丈夫な櫟の弓の弦をいっばいに引き絞ると、狙い過たずに樹上の射手を撃ち落とした。

受け身を取って着地した敵兵は、まだ氣力を残しており、ガフガリオンを標的に定めて弓に矢をつがえた。

「ほう、やる気か？」

剣の届く間合いではないのに、ガフガリオンはふてぶてしく鼻で笑った。

「神に背きし剣の極意、その目で見るがいい……、**“闇の剣”ッ！**」
ガフガリオンがその場を一步も動かず剣を振るうと、血染めの刃から禍々しい衝撃波が放たれる。

不可思議な脱力感に襲われて、弓兵は前のめりにくずおれ、こと

切れた。

（“暗黒騎士”^{ダークナイト}か。ますますもって気に食わん！）
アグリアスが舌打ちする。

相手の生命力を吸収し己の力とする“暗黒剣”を会得した者は、
疲れを知らず、戦場で倒れることがないという。が、まっとうな騎
士達の間では非道の技として忌み嫌われる。

アグリアスのような“聖騎士”^{ホーリーナイト}であれば、その気持ちはなおのこ
と強い。

「神の家の門前を血で汚すは不本意。命までは取らぬゆえ、私に
倒された方が楽だぞ」

アグリアスの珊瑚の剣がほの白く輝いた。

「不動無明剣」！

清冽な光が突き抜け、離れた位置にいた弓兵が二人、金縛りにあ
ったように体の自由が利かなくなつて、膝をついた。

“聖騎士”とは、高位の騎士に与えられる、単なる名誉の称号で
ある場合もある。しかしアグリアスは、祝福の儀式を受け神の加護
の下に“聖剣技”を振るうことを許された、真正正銘の“聖剣騎士”^{ホーリーナイト}
なのだ。

ガフガリオンの“暗黒剣”とアグリアスの“聖剣技”の威力を見
せつけられて怯む兵士達を、敵の指揮官が叱咤した。

「じじいと女隊長に攻撃を集中しろ。取り囲め！」

敵剣士達が、ガフガリオンとアグリアスの周りに群がる。その分、
混戦になつていた戦場に兵の密度の濃淡が生まれた。

「ラッド、頼む！」

ラムザが相棒を呼んだ。

「あいよ！」

雨に濡れた草地の上を、危なげもない素早さで。敵兵の手薄にな
った間隙を縫い、ラムザは駆ける。

ラムザを足止めしようとした弓兵達は、一瞬先にラッドに腕を射
抜かれた。

槌を持った傭兵の小手を水もたまらず切り落とし、騎士の一人を体当たりで突っ転ばせ、その反動でラムザは一足飛びに敵の指揮官との間合いを詰めた。

「……ッ!？」

ガッ!

紅い盾に描かれた黒獅子の紋章に、ミスリル 霊銀の剣が深々と食い込んだ。予想外の特攻を咄嗟に防いだ、この指揮官の反応速度も鈍くはない。

盾を持った左腕がしびれるほどの、重い斬撃だ。

しかも、間髪入れずに二の太刀が繰り出される。

ギインッ!

今度は剣の腹を打ち払って、辛うじてかわした。

一見文弱そうな白面の青年なのに、通常の剣技だけならばアグリアスやガフガリオンに勝るとも劣らぬ強さだろう。

「小僧、何者だ？」

数合切り結んでから、騎士とラムザは離れて間合いを取り直し、にらみ合った。

ラムザは張りのある、沈着な声で言う。

「知りたくば、自分から名乗るものだ」

騎士同士の一騎打ちでもあるまいに、と思いながら、

「南天騎士団騎士、レザレス」

つい、答えさせられてしまう威圧感すらあった。

「ラムザⅡルグリア。傭兵だ」

手入れの行き届いた長剣を構える姿に、一分の隙もない。

「……それだけか？」

「それ以上でも、以下でもない!」

ラムザが走り、再び激しい剣の応酬となる。

アグリアスの隣にいたラヴィアンは、大きな目を丸くした。

「あらら、やるねえ少年。可愛い顔してさ」

そう言ったラヴィアンも、攻め手の傭兵達の目には、“王女の身辺を飾るお人形さん”くらいにしか映らない。

「このアマツ、よそ見してっと……」

傭兵達が背後から同時に飛びかかろうとすると、ラヴィアンの体が独楽のように回って、左の裏拳でまとめて二人薙ぎ倒した。

「……危ないよねっ」

アリシアもアグリアスとラヴィアンの横にいたのだが、だんだんと一人引き離されて、塀際に追い詰められていた。

見るからに非力そうなアリシアは、先程から防戦一方だ。

攻撃をかわし、受け流す体さばきは悪くはないのだが、少しずつ後退するうちに、とうとう背中が壁にぶつかる。

「今更、神様にお祈りか？観念しなッ」

早口に何事か呟くアリシアを見下ろして、巨漢の傭兵が広刃の剣を振りかぶったところへ、

「サンダー雷撃”ッ！”」

青白い稲妻が宙を裂いて直撃した。

口の中で唱えていたのは魔法の呪文で、味方を巻き込まない場所へ誘導したのもアリシアの計算である。

目を白黒させてふらつきながらも、傭兵は剣を振り下ろしたが、勢いがまるでない。

アリシアは軽やかに脇をすり抜けつつ足払いをかけ、とどめに後頭部を剣の柄で打ち下ろした。

「剣だって、使えないわけじゃありませんのよ」

近衛騎士達とラムザの意外な実力に目を見張ったのは、攻め手ばかりでなく、ガフガリオンも同様だった。

（こいつあとんだ番狂わせだぜ）

横目で盗み見ると、ラムザとレザレスの攻防は、余人には介入の余地がない。それも、優勢なのはラムザの方だ。

（“後の連中”は何をやってやがる……？）

ガフガリオンの思惑をよそに、ラムザの猛攻は続く。

ラムザの色白な頬には次第に朱の色が差してきたが、反対にレザレスの顔からは血の気が引いている。

（こんな奴が何故、一介の傭兵に甘んじている！？）

ラムザの剣は、傭兵にありがちな我流の喧嘩剣法ではない。正式な武術の基礎をみっちり叩き込まれた、揺るぎのない太刀筋である。

その上で、型通りの道場剣術に留まらない勘の良さも持ち合わせている。

“五十年戦争”以来の混乱の収まらない、現在の畏国イヴァリースでなら、剣一本でいくらかでも栄達の道は切り開けるはずだ。

（ラムザ……？ルグリア……？）

漠然と、しかし間違いなく、どこかで見た記憶がある。

意志の強そうな、真っ直ぐな瞳——だが、碧くはなかった？——。小手先の駆け引きなど通用しない、正確でひたすらに速い打ち込み——まるで疾風かぜのような——。

……、“風のような”！？

「ッ——！」

レザレスの腕にひときわ重い衝撃が響き、黒獅子の紋章の盾がばつくりと割れた。

「ハアッ！」

気合い一声、ラムザの靈銀ミスリルソードの剣がレザレスの右肩を貫く。

「ぐう……ッ」

壊れた盾を捨てた左手で、レザレスは熱い血の吹き出す傷口を押さえた。

目の前にいる金髪の青年の面影と重なる顔を、いつどこで見たか、今やはっきりと思い出す。

五十年戦争後期、リオファネス城奪還戦の最中に。

新参の少年兵だったレザレスの目に、“その人”の姿は崇拝に近い憧憬の念と共に焼き付けられた……。

（ご嫡子は二人だが、庶子にもう一人男子を儲けられたのだったな）

“そう” だと考えれば、この青年の強さにも頷ける。が、しかし。（何故だ……！ ならば何故、こんな所においてになる！？……これもダイスダーグ卿の計画の一部なのか……？）

深手を負ったレザレスに、ラムザはそれ以上追い撃ちをかけようとはしない。

「く……、退けっ。退くぞ！」

レザレスは、半数ほどに減った手勢をまとめて、森の方へと退却してゆく。

「逃がすな！」

とガフガリオンが傭兵たちに号令し、

「追うな！ 我らの役目は王女の御身をお守りすることだ。徒に戦い我が身を損なうは不忠と心得よ！」

と、アグリアスは近衛騎士達に逆の命令を下した。

結局、まだ息のある者を剣士達が庇い、弓兵達が追撃を牽制しながら、襲撃者達は森の入口まで逃げていった。

停めてあつた韋駄鳥チヨコボに乗って駆け去ってゆく影が、降りしきる雨の中にかすんで消えた。

深呼吸して息を整えたラムザに、ラッドが目配せする。

「相変わらず“器用” だなあ、ラムザ」

「ラッドこそ。……、それより、」

ラムザは抜き身の剣を下げたまま、黒い鎧の傭兵隊長に近付いた。
「ガフガリオン、おかしいと思いませんか？ 敵の引き際が良すぎる」
「ああ？ 思ったよりオレ達が手強いんで、ビビっただけじゃないのか？」

「そうでしょうか。それに、アグリアス殿も仰ったように、黒獅子の紋章を押し出して正面から強硬に攻めてくる……というやり口も腑に落ちない。これは……、」

言い終わらぬうちに。

裏手から、絹を裂くような悲鳴が上がった。

「離しなさいっ!」

オヴェリアの声だ。

「しまった!! 陽動か!」

矢のように飛んでゆくアグリアスを、ラヴィアン、アリシアらの女騎士達が追う。

ラムザとラッドも、弾かれたように、海に面した裏口へと向かった。

「こっちへ来るんだ! おとなしくしないかっ!」

黒髪の若い騎士が、オヴェリアの腕を手荒に引いて、舟着き場へ下りる通用口から屋外に出て来た。

金の縁取りのある茜色の鎧の上から羽織った、白い外套マントには、南天騎士団の黒獅子紋が縫い取られている。

「誰が貴方の言いなりに……!」

抗うオヴェリアを、黒髪の騎士は、

「うるさいお姫様だ」

無造作に鳩尾を拳で突いて、気絶させる。

「ま、待てッ!!」

息せき切って駆け付けたアグリアスだが、オヴェリアを肩に担いだ騎士相手に“聖剣技”を使うわけにもいかない。

「悪いな……。恨むなら自分か神様チヨコボにしてくれ」

悠々と捨て台詞を残し、騎士は韋駄鳥チヨコボにまたがって、海岸の切り立った岸壁に沿った棧道を駆け下りてゆく。

アグリアスに追い付いたラムザが、走り去る騎士の横顔を目にし、アッと驚愕の叫びを発した。

「デリーター!?」

その声の届かぬ距離ではないだろうが、黒髪の騎士は振り返らない。

「他人の空似か……?」

ラムザは呆然と騎士を見守る。

遅れて辿り着いたラッドが、弓弦に矢をつがえた。

「どうする？ オイラなら、韋駄鳥チヨコボでも乗り手でも狙えっけど……」
アグリアスが手でラッドを制した。

「よせ！ 王女に万一のことがあってはならん。射るなら、浜に下りてからだ。どこかに舟を用意しているはず。海へ逃げる前に……」

「あーッ！」

その時、ラヴィアンが素っ頓狂な声を上げて騎士を指さした。

思いがけないことに、黒髪の騎士とオヴェリアを乗せた韋駄鳥チヨコボは、
棧道を逸れて岩場を駆け上り始めたのである。

「何イッ！？ ……無茶な！」

修道院の近くで、岸壁を深い谷が分断している。対岸へ渡るには、
陸路を取るにせよ海路を取るにせよ、大きく迂回しなければなら
ない。

騎士は、その谷を韋駄鳥チヨコボで飛び越えるつもりらしいのだ。

だが、峡谷の幅は※十五歩ドーマ（※約九メートル）以上、海面からの
高さはおよそ※四十歩（※約二十四メートル）。

「やめろーっ！ オヴェリア様を殺す気か！」

声を限りに振り絞るアグリアスの警告を無視して、黒髪の騎士はい
よいよ韋駄鳥チヨコボの速度を増す。

「ハイアーツ！」

掛け声と共に韋駄鳥チヨコボは断崖を蹴り、翼をいっぱいに広げた。

韋駄鳥は騎乗用・貨物輸送用に、畏国イヴァリースで一般的に利用されている
大型鳥である。毛色は普通黄褐色で、原種に近いものは赤褐色や黒
色を呈する。走行能力に優れ、翼は退化しているのだが、滑空程度
なら出来ないこともない。

折しも海から吹き上がる風に乗って、騎士の韋駄鳥チヨコボはぎりぎり、
向こう岸の岩棚に爪をかけた。
が、――。

雨水を吸った苔に覆われた、崖っ淵をつかみそこね、足場を崩す。

「きゃっ……」

アリシアが口許を押さえ、思わず固く目をつむった。

あわや真っ逆様に谷底に転がり落ちるかに思われた瞬間、

「ハイッ！」

騎士は見事な平衡感覚と手綱さばきで韋駄鳥チヨコボの体勢を立て直した。

一步、二歩。韋駄鳥チヨコボは尾羽と長い首を不器用に振って、岩棚をよじ登る。

平らな細道まで登り詰めると、何事もなかったかのように軽快な速歩で、木々の彼方へ遠ざかってゆく。

「……なんてことだ」

アグリアスはがっくりと力を落として、その場に膝をつき、唇を噛む。

「すげえ脚力だなあ。野生種の韋駄鳥チヨコボか？」

ゲルミナス山岳地方の狩人の子として育ったラッドの目には、騎士とオヴェリアを乗せた韋駄鳥チヨコボの姿がまだ見えているらしい。

「韋駄鳥チヨコボも大したものだ……が、あれだけの騎手もそうざらにはいない。矢っ張りデイリータだ……生きていたのか……？」

半ば独り言のようにラムザは唸る。

「え、何、何？君、今の奴のこと知ってるの？ね、ね、どういうこと？」

ラヴィアンがラムザの脇腹をつついた。

「僕の方こそ知りたいくらいだ。どうしてあいつがゴルターナ軍にいるんだ……？どうして……？」

明るい黄金色の髪から滴る雨を拭おうともせずに、ラムザは黒髪の騎士がオヴェリアを連れ去っていった方角をじっと見据えた。

聖歴一二一〇年、金牛の月一三日。

オーボンヌ修道院より、王女オヴェリア誘拐さる――。

イヴァリース

畏国全土を大乱の渦に陥れる、“獅子戦争”の幕開けである。

が、今まさに歴史の分水嶺となる事件に立ち会っていることを、

この時の青年剣士ラムザが気付く由もない。

0ー〔2〕 オーボンヌ修道院 正門前（後書き）

距離の単位・ドーマやセクタって、メートル法ではどのくらいでしょう？この作品の中では、「ドーマは歩数で距離を測る方法から生まれた単位」と勝手に想像して、1ドーマ＝大人の一步の幅（約0.6メートルくらい？）としてみました。

第?部 持たざる者 登場人物紹介（前書き）

だんだん膨大になってきました。初めに読むものではないかもしれませんが。物語の途中で忘れた時に見る、索引のようなものでしょうか。

第？部 持たざる者 登場人物紹介

(順次追加)

☆：原作に登場 ★：創作キャラ 数字は初登場章ー〔節〕。
名前のみが登場は含まず

〔ア行〕

★アニー、ベティ、キャリイ 2ー〔2〕
ベオルブ家の城下屋敷で働く女中^{メイド}達。キャリイのみホヤホヤの新人。

☆アルガスⅡサダルファス 2ー〔1〕
ランベリー近衛騎士団の騎士見習い。いつも気持ちに余裕が無く苛々しがちなのは、”裏切り者の孫”として蔑まれてきたため。

☆アルマⅡベオルブ 1ー〔4〕
ラムザの妹。イグロス貴族学院に通う。ラムザ曰く「悍鳥^{じゃじゃチヨコ}のお喋り大魔女王」。かなりお兄ちゃん^{ブラコン}子。

★イクシ (イクシャルⅡオルファイン) 4ー〔4〕
北天騎士団の(不良)騎士。”美”を価値判断の基準とする男。

☆イズルドⅡティンジェル 5ー〔1〕
神殿騎士。いろんな意味で剣呑な少年。メリアドールの弟。

☆ウィーグラフⅡフォルズ 3ー〔2〕
反乱軍・骸旅団の団長。

★ウォーゼル 5ー〔1〕
ラムザの同級生。ナツシュの”宿命の好敵手”^{ライバル}。虚弱体質の魔道士。

★エストレーラ (エスト) 6ー〔3〕
ラムザの父・バルバネスの三姉。着道楽。激情家。

★”えび天”^{チヨコボ} 1ー〔4〕
ラムザの韋駄鳥。長距離走用。赤い尻尾がご愛嬌。^{チャームポイント}

☆エルムドア侯 (メスドラーマ||エルムドア) 3ー〔6〕
ランベリーの領主。”銀の貴公子”とも、”銀髪鬼”とも呼ばれる。

☆オヴェリア||アトカーシャ
オムドリア?世王の異母妹・養女。アルマとは共にオーボンヌ修道院で学んだ友人同士。

★オルキム 4ー〔1〕
ドラコニア城の若い司祭。^{ベシヤ}紗国人の血を引く。ザルバッグの幼馴染。ラムザの家庭教師役でもあった。

〔カ行〕

★ガストン^{クラスメイト} 1ー〔1〕
ラムザの級友・悪友。直情径行、喧嘩っ早い。突き技を主体とする剣術・槍術と、騎射が得意。

★ガラフ (ガラハット||ギヤリコ) 4ー〔4〕

北天騎士団の（不良）騎士。斜に構えたニヤニヤ笑いが特徴。トレードマーク

★カルダックⅡベオルブ

ラムザの祖父。先々代ドラコニア伯。

★ギターⅡハイラル 3ー〔1〕

ディリータの父。セラモニア是領貴族の下で隠密として働いていた。

☆ギユスタヴⅡマルゲリフ 3ー〔6〕

骸旅団副団長。残虐な振る舞いのため騎士の位を剥奪された。

★クララ （クラリエッタ）

ダイスダーグの妻。子宝に恵まれず、ラムザとアルマを子供代わりのように思って、（いらぬ）世話を焼きたがる。

☆クレセント”三日月” （ボコ） 3ー〔5〕

ウィーグラフの韋駄鳥。チヨコボ五十年戦争末期にバルバネスからウィーグラフに贈られた。

☆クレティアンⅡドロワ 5ー〔1〕

アカデミー士官学校の、ラムザ達の八期先輩。超優等生_{エリート}な”伝説の卒業生”。

★ケルガー

ラムザがドラコニア城に住んでいた頃の剣の師。”無冠の英雄”と呼ばれた老剣客。

☆ゴラグロスⅡラヴェイン 4ー〔5〕

ギユスタヴ肅清後の、骸旅団副団長。

☆ゴルターナ公 （ダクスマルダⅡゴルターナ）

ゼルテナアの領主。

〔サ行〕

★サーシャ 1ー〔1〕

ラムザの級友・“追っかけ”。エルムドア侯など、ラムザ以外の美男子情報にも耳ざとい。回復・補助系魔法担当。

☆ザルバッグⅡベオルブ 1ー〔4〕

ラムザの次兄。現北天騎士団団長。

☆シド （シドルファスⅡオルランドウ） 5ー〔4〕

南天騎士団団長。バルバネスの無二の親友。

★”銀竜”^{シルドラ} 5ー〔3〕

ラムザの韋駄鳥^{チヨコボ}。純白の軍鳥。

★セヴィ （セヴェリーニⅡブランシュ） 5ー〔1〕

ラムザの同級生・好敵手^{ライバル}？ゼルテナアの大貴族の家系。御婦人^{レディ}の扱いほどには、韋駄鳥^{チヨコボ}の扱いは上手くない。

★ソフィア （マリーソフィアⅡラーグ）

バルバネスの前妻。ダイスダーグとザルバッグの母。先代ラーグ公の従妹。

〔タ行〕

☆ダーラボン （ボーアダムⅡダーラボン） 1ー〔1〕

王立士官学校の兵法学の教官。温厚篤実。話がくどくて退屈なことで定評がある。

☆ダイスダーグⅡベオルブ 1ー〔4〕
ラムザの長兄。ベオルブ家の当主。ラーグ公の軍師。

★タイラーⅡワット 3ー〔6〕
(↓ ” マッチョマン十人衆 ”)

★ダリウスⅡバリンテン 5ー〔3〕
フォボハム領主・バリンテン大公の甥・養子。

★タバサ 2ー〔3〕
南洋人の農婦。ワインバーグの妻。ラムザがマンダレーナ村に住んでいた頃のご近所さん。

☆ティータⅡハイラル 1ー〔4〕
ディリータの妹。アルマの親友。内気でもの静か。

☆ディリータⅡハイラル 1ー〔1〕
ラムザの級友・幼馴染み。ちよっぴりおボケなラムザを補佐する、
クラスメイト
頼れる参謀役。……というか、ほとんど“世話女房”状態である。
ブレイン
後の“英雄王”。

〔ナ行〕

★ナツシュ 1ー〔1〕
クラスメイト
ラムザの級友・信奉者。王立魔法院の学長の孫。背が低く、体力
ファン
が無いのを気にしている。攻撃魔法は優秀。

〔ハ行〕

★ハールーシャⅡラーグ（ハル） 4－〔1〕

ラーグ公の長男。ドラコニア城でラムザ、ディリータと共に育てられたが、オルダリーテ鷗国の刺客の手にかかり命を落とす。

★バスカークⅡウオルフォート 3－〔6〕

北天騎士団で一番若い千騎長。バルバネスの副官だったイスタークの孫。なかなか、喰えないお兄さん。

★バトー（バティストウータⅡダルハン） 4－〔4〕

北天騎士団の（不良）騎士。豪放磊落な巨漢。許婚のシャアラ（九歳）が泣き所。

☆バルクⅡフェンゾル 3－〔3〕

神殿騎士団の一員。機工士。

☆バルバネスⅡベオルブ（バネス） 1－〔4〕

ラムザの父。元北天騎士団団長。五十年戦争末期に病死。

★ファティマⅡルグリア 1－〔4〕

ラムザとアルマの母。ロマンダ呂国人移民村出身の神官医だった。五十年戦争末期に戦死。

★プリマヴェーラ（プリマ） 6－〔3〕

バルバネスの長姉。ラムザとアルマの祖母代わりのような女丈夫。王都に住む。

★フローラ

バルバネスの次姉。温厚で、のんびりしている。

★ベリンダ 1－〔3〕

女傭兵。赤魔道士。

〔マ行〕

★筋肉達磨^{マッチョマン}十人衆（☆？ グローグの丘のレア敵） 3－〔6〕
タイラー^{リーダー}ワットを頭とする”格闘集団”。団体名は会う度にコロコロ変わる。

★マルガリータ（名前のみ☆） 1－〔1〕
ラムザ達の二期先輩。北天騎士団に所属。ダーラボンの娘。外向的な性格。

☆ミルウーダ 4－〔5〕
骸旅団の女剣士。

☆メリアドール^{ティンジェル} 5－〔1〕
神殿騎士。困ったちゃんなイズルード（弟）を見守る、世話好きお姉さん。

〔ヤ行〕

〔ラ行〕

☆ラーグ公（ベストラルダ^{ラーグ}） 4－〔1〕
ガリオンヌの領主。ベオルブ家の主君。

★”紫電”^{ライトニング} 1－〔3〕
槍使いの傭兵。

★ラムザ^{アンセル}（赤毛のラムザ） 5－〔5〕

主人公である金髪のラムザの幼馴染。アンセル村の庄屋の息子。

☆ラムザⅡベオルブ 1ー〔1〕

この物語の主人公。元北天騎士団団長・“天騎士”バルバネスの三男。天使の笑顔、武神の剣技、花虫モルボルの食欲を兼ね備えた、恐るべき少年。

★リユカ (リユカオンⅡハーディーズ) 4ー〔4〕

ガストンが心の師と仰ぐ、“立派な不良騎士”。北天騎士団に所属。

★レオンⅡローラント

リユカの異母弟。北天騎士団の千騎長の跡取り。

☆ローファルⅡウオドリング 3ー〔3〕

神殿騎士。無口、無表情。

〔ワ行〕

★ワインバーク 2ー〔3〕

南洋人の農夫。気は優しく力持ち。バルバネス、ファティマの旧知。

？ 第1章 士官候補生達の初陣 [1] 王立士官学校（前書き）

ここで一気に、おマヌケ度がアップします。

生真面目な方には、ごめんなさい。

第一部後半にかけては、シリアス色が濃くなります。

？ 第1章 士官候補生達の初陣 [1] 王立士官学校

“五十年戦争”終結から、およそ一年。

事実上の敗北は戦地より帰還した騎士達の職を奪い、王家や貴族に対する忠誠心を放棄させ、盗賊に身をやつす者、王家に対して謀反を企てる者など、大量の凶賊や逆賊を生み出した。

そのため当時の畏国は、強盗や殺人が日常茶飯事に起きるほど治安が乱れており、幾人もの英雄や魔道師を輩出したこの町もまた、例外ではなかった。

“獅子戦争”勃発の一年前。

聖歴一二〇九年、魔法都市ガリランド。

“英雄王”ディリータと“知られざる英雄”ラムザの物語は、ここから始まる――。

） ・ ） ・ ） ・ ）

王立士官学校アカデミーの新二年生が大講堂に集められたのは、※白羊の月（※太陽暦三月下旬〜四月中旬）一日のことだった。

「……昨夜もイグーロスゆうべ行きの荷車チヨコボがやられたんだとさ……」

「それも、骸旅団むくろりよだんの仕業なのかしら……？」

雑談に沸く生徒達を、遠くから眺めたならば。真っ先に目に留まりやすいのは、前方左端近くにいる、見事な黄金色の髪の少年だろう。

栗色や灰褐色の頭がひしめく中で、そこだけ明るい光が差しているように、柔らかな金髪に包まれた優しい面輪が目立って見える。

「これから何が始まるんだろう？知らないか、ディリータ？」

金髪の少年は、左隣にいる黒髪の少年に話しかけた。

「いや。ただ、ある程度の想像はつくが」

「というと？」

「ラーグ公がこの町へおいでになる」

魔法都市、学園都市の誉れ高いガリランドは、イヴァリース 畏国西部を占めるガリオンヌ領に含まれる。

領主のラーグ公家は、五十年戦争の引き金となったデナムンダ？世を祖とする、王家の分家である。同じくデナムンダ？イヴァリース 世の流れを汲む、ゼルテニア領のゴルターナ公家と並んで、畏国屈指の大貴族だ。

ラーグ公が居城を構える成都イグーロスは、王都ルザリアに次ぐ巨大な城郭を持ち、五十年戦争終結後の混乱の中にあっても比較的治安は良い。

「ラーグ公が……？何故？」

「ラーグ公だけじゃない。ランベリーの領主・エルムドア侯爵もだ」「それは初耳だ。……公式訪問じゃないな」

イヴァリース 畏国は元々、七つの小国を統一した連合王国であった。

ルザリア、ミュロンド、ゼルテニア、フォボハム、ライオネル、ランベリー、そしてガリオンヌ。

このうち現在では、ルザリアはアトカーシャ王家の直轄領、ミュロンドはグレバドス教皇領だ。他の五つの地方の領主達は、王家と教会に服従を誓っているものの、今なお小国の王に準ずる権力を持つ。

五大領主同士の首脳会談ともなれば、一大外交行事である。数週間、時には数ヶ月前から旅程が公表され、沿道の町や村が接待の準備で大わらわになるのが普通だった。

イヴァリース 「今の畏国はどこもかしこも“危険地帯”ばかりだ。騎士団は八は面六臂の大活躍だが、実際には猫の手も借りたい……」

「で、猫よりマシな僕たち士官候補生か」

金髪の少年は首を傾げた。

「おかしな話だな。騎士団は人員整理リストラを続けているんだろう？ 人手不足なの？」

新三年生はとくに春休み返上で、街道の警備に立ってる。この上、ろくな戦力にならない僕たち新二年生まで駆り出されるなんて」

「手も足りないが、もっと足りないのは“おあし”の方だ」

オルダリーア
鷗国への賠償金や、諸外国からの戦争借款の返済などで、国も地方も財政破綻寸前なのだ。

「一時的に傭兵で増員しようにも予算がないから、封地持ちてもちの騎士こまを徹底的に使い倒す。それも、人海戦術みたいな単純労働なら、体力だけはある若い奴らにやらせた方が費用対効果が高い……。実地研修という名目の、タダ働きさ」

黒髪の少年は肩をすくめた。

金髪の少年は頭を振る。

「無理もない。外国相手の戦と違って、平民の反乱の鎮圧に平民の義勇兵は募れまいし」

ここ半年ほどで勢力を拡大した骸旅団も、元は骸騎士団と言い、五十年戦争末期に編成された平民の義勇兵団だった。

それが終戦と同時に何の報酬もないまま解散させられたため、反貴族を掲げる革命軍にそっくり転じたのである。

「去年の三年生を半年繰り上げ卒業させた程度じゃ、追っつかないらしい。僕らに至っては二年で卒業させられる可能性もあるぞ」

「へえ……。それにしても、ディリータは事情通だなあ。いつもいつも、どこからそんな情報を仕入れてくるんだい？」

「ん？ まあ、色々とな……」

黒髪の少年が言葉を濁した時、生徒達のざわめきが潮の引くように静まり始めた。

講堂の入口に、学長と、白獅子の紋章の外套マントを着た北天騎士団の騎士が現れたのだ。

「一同、整列ッ！」

学長の一声で、生徒達はぴたりと口をつぐみ、背筋を伸ばした。騎士が壇上に上がり、咳払いをする。

「士官候補生の諸君、任務である！」

諸君らも知っているとは思うが、昨今、このガリオヌの地には野蛮極まりない輩どもが急増している。

中でも、骸旅団は王家に仇なす不忠の者ども。見過ごすことのできぬ盗賊どもだ。

我々北天騎士団は、君命により骸旅団せん滅作戦を開始する。

この作戦は大規模な作戦である。北天騎士団に限らず、イグロス城に駐留するラーグ閣下の近衛騎士団など多くの騎士団が参加する作戦だ。

諸君らの任務は後方支援である。

具体的には、手薄となるイグロロスへ赴き、警備の任についてもらいたい」

騎士がそこまで話した時、講堂に若い女騎士が急ぎ足で入ってきた。

女騎士は壇上の騎士に、ひそひそと何事か報告する。その後しばし、騎士と女騎士、学長の三人で、小声の相談が交わされた。

生徒達の間にも、低い囁き声がさざ波のように広がった。

「静粛に！」

話がまとまって、学長が二度手を叩く。

壇上の騎士は拳を振り上げた。

「士官候補生の諸君、装備を固め、剣を手にとるがいい！」

我々北天騎士団によって撃破された、盗賊団の一味がこの町へ逃げ込もうとしているとの連絡を受けた。

我々はこれより、町に潜入する奴等の掃討を開始する！諸君らも同行したまえ！

これはせん滅作戦の前哨戦である！

以上だ！ただちに準備にかかれッ！！」

学長が話を継ぐ。

「あー、只今から諸君には、五人一組で市街地の巡警に当たってもらう。各班、加えて一名ずつの卒業生が付くが、彼らの役目はあくまでも班長の補佐・監督だ。

各班の行動は、分隊長に相当する班長が責任を持つこととする。総員、^{アカデミー}学校指定の剣術着を着用の上、改めて第一運動場に集合しろ。

なお、弓・自動弓などの飛び道具及び、魔法の錫や杖の携行は禁ずる。魔法科選択の諸君も、^{アカデミー}学校指定の長剣もしくは短剣を装備するように」

魔道士系の生徒達が不安そうにどよめいた。

「私語は慎め。行動開始！」

士官候補生達は駆け足で講堂から退場し、それぞれの寮に支度に戻った。

半刻後。

揃いの剣術着に身を包んだ士官候補生達は、運動場に整列した。各組の列の前に立つ担任教官の後ろに、北天騎士団の青い制服を着た、去年の卒業生達が並んでいる。

「えー、オホン。一組の皆さんの受け持ちは、河口地区です。それでは、班分けを発表いたします……」

一番左端の二列と向かい合ったのは、温厚篤実で知られた兵法学の教官・ボーアダムⅡダーラボンである。

「何、大丈夫です。私が普段講義の中でお話してきたことを思い出して、冷静に、落ち着いて対処すれば、いかなる局面においても心配はいりません」

緊張した面持ちの生徒達を勇気づけようと、ダーラボンがこう言うのと、何人かの生徒は下を向いて忍び笑いだした。

ダーラボンの講義は、くどくて退屈なことで定評がある。下手な魔道士の唱える“催眠”^{スリプル}よりも高い確率で、生徒達を居眠りに陥れ

るのだ。

「では、一組第一班。班長ラムザⅡベオルブ」

「はい！」

黄金色の髪の少年が、よく透る声で返事をした。

「副班長ディリータ、以下、ガストン、ナツシュ、サーシャ」とダーラボンが名簿リストを読み上げた。

「はい、今呼ばれた人達はアタシについてきてね」

若い騎士達の中から、すらりと背の高いなかなかの美人が前に出た。男子生徒達がおおーっ、と騒ぐ。

ダーラボンの一人娘・マルガリータだ。

父親とは対照的に、華やかで外向的な少女で、去年の三年生の中では人気者マドンナだった。

「お静かに！ 第二班……」

ダーラボンの悠揚迫らざる声は、列から離れた五人の士官候補生達の耳にはすぐに聞き取りづらくなった。

校門を出ると、マルガリータは待ちきれなかったように喋り始めた。

「元気にしてた、ラムザ君？ 相変わらずの柳腰ねー」
言って、すぱんとラムザの尻オーパーを叩く。

ラムザはヘナヘナと、大仰に萎れて見せた。

「久方振りの挨拶がそれですか？ これでも大分逞しくなったつもりだったんですけど！」

「毎食十五杯ものお代わりが、この細い体のどこに消えるのかしら。士官学校七不思議の一つだわね」
アカデミー

ガストンがチツチツと指を振る。

「先輩、甘いつすね。近頃じゃ二十杯は余裕つすよ」

灰色狼を連想させる、銀褐色の髪と鋭い琥珀色の瞳を持つ少年だ。

「ラムザ、てめーなら、ぼったくり酒場に恐怖の女帝として君臨できる！ 可愛いツラして、客の三倍飲み食いしやがるだろ」

「んー、僕はお酒は弱いから無理だな」

ラムザは軽く受け流した。

ガストンは去年もラムザと同じ組で、互いに気心が知れているから、きつい冗談も遠慮無く言えるのだ。

が、ナツシユは、言葉が過ぎると思ったのだろう。頬を紅潮させて、一生懸命に弁護しようとした。

「あ、あの、ぼくっ！ぼくは、ラムザ君はとっても、凛々しくて男らしいと思いますよっ！

お父上の若い頃の肖像画に瓜二つですよ、ほら、軍学教室に飾られてる……。髪と目の色が違うだけで。

一緒に組クラスになれただけでも感激なのに、こうして行動を共に出来るなんて……。本当に、夢みたいに光栄ですーっ！」

頭一つ分下からラムザを見上げる、緑灰色の団栗眼が潤んでいる。

ラムザは、つつ、と引いてディリータの肩に抱きつく。

「ごめん。悪いけど、僕はもうディリータと、離れられない仲間なんだ！」

「バカ、本気に受け取られたらどうする！」

ディリータは慌てて親友を突き放した。

ナツシユも真っ赤になった。

「ぼっ、ぼくの方だって恋愛感情なんかじゃありませんよ！別にちやんと、す、好きな女の子だっているしっっ！

そうじゃなくて。何てったってラムザ君は、あの“風神”バルバネス將軍の御子息で、現北天騎士団団長・ザルバッグ様の弟君ですから。

ぼく、バルバネス様に憧れて士官学校アカデミーに入ったんですよ。みんなだっけそうじゃない？」

ナツシユはガリランド王立魔法院の学長の孫だ。魔法の成績は校内でも最上層だが、剣術や騎乗術などの運動能力では、歴代の最低記録を日々刷新している。

今からでも王立魔法院に転校した方が良いのではないか、と家族

や級友達から度々勧められるが、本人の意志は固い。
クラスメイト

「俺は親に無理矢理押し込まれただけだぜ」

ガストンは、もっと実戦的な武術を教える私塾に行きたかったようだ。

動体視力は抜群で、騎射と、突き技を主体とした剣術・槍術が得意だ。

最大の武器である目を悪くするからと、ろくに本を読まず、机上の学問は赤点すれすれまで怠^{サボ}っている。

「あたしは……、学校にいる間は、結婚させられなくて済むから……」

サーシャは寂しそうな顔をした。

「結構いるよね、そういうコ」

マルガリータが相槌を打った。

「アタシの友達にもいたわよ。縁談もろとも親父さん蹴飛ばして来たってコ。」

近衛騎士隊の一員^{メンバー}に選ばれて、今度、王女様がいるド田舎の修道院に行くことになったんだって。

これで親父さんも当分諦めるだろうって、せいせいしてたわね」
ナツシュが気まずい思いをしたのも束の間。

一転して、サーシャはうきうきとした笑顔をラムザに向けた。

「でも、あたしもラムザ君の大鼻^{フアン}員よ！

セヴェリーニ君派は、おボケだとか垢抜けないとか言うけど。あたしは、ラムザ君の方が天然素材のいい味出してると思うの。」

同じ班になれて嬉しいわ。よろしくね！」

と、積極的に握手を求める。

「はあ、どうも御丁寧に……こちらこそ」

ラムザは間の抜けた挨拶を返した。野暮天と言われる所以だろう。

「しっかしよー、教官^{センコウ}ども、どーゆう基準で班分けしやがったんだ？」

ぼやくガストンに、デイリータが答える。

「今後の作戦も同じ顔触れでこなすのだとしたら、ごく定石的な分隊編成だろう。」

ラムザと僕が剣で前衛、お前が弓。攻撃魔法にナツシュ、回復・補助系魔法にサーシャ……という配剤だと思うが」

「理屈はそーだろーがよ。トロくせえチビと女に、札付きの不良だぜ？ 厄介モンのお守り押し付けられたみてーだな、大将」と、ガストンはラムザの胸を小突いた。

「それだけラムザ君は、先生方からも信頼されてるってことでしょ」

サーシャは気を悪くした様子はない。白魔法が並よりは使える程度で、攻撃能力に秀でたところの無いことは、重々自覚している。

「ダーラボン先生の講義でさえ居眠りしない優等生だもの……あら、ごめんなさい」

サーシャはマルガリータに謝った。

マルガリータは、ぱたぱたと手を振る。

「いいのよ、気にしないで。」

うちのオヤジ、一応千騎長なんて肩書きは持ってるけど、実戦経験もほとんどないし。

エリディ布斯以前の軍学なんか、とっくに時代錯誤よねえ。あれじゃ皆、眠くもなるわ」

魔法都市ガリランドが生んだ大魔道師・エリディ布斯は、“ジャ魔法”や“三竜神”召喚など、数々の古の上級魔法を復活させた。

エリディ布斯と彼の率いる魔法兵団は、魔法戦史上に新時代を記したのである。

ことに有名なのが、五十年戦争後期の、リオファネス城奪還戦だ。
“魔法反射”で回避することが出来ないという“最上級”魔法の特質を活かして、呂国軍の重装歩兵隊を壊滅に追い込み、北天騎士団を中心に編成された畏国軍を勝利に導いた。

しかし、エリディ布斯自身はその戦の中で行方不明となり、以降の消息が知れない。

伝説の竜人族^{ドラグナー}の末裔を探して海を渡った……とも、禁断の邪法によって不死身となり、今もどこかの地下迷宮^{ダンジョン}の底で魔道の研究をつづけている……とも噂される。

「そうかなあ？ 聖アドロメル以来の兵法学の基礎は普遍的だと思うし、近代魔法戦の解説だって充実してましたよ。僕には、ダーラボン先生の講義は面白くて分かり易いです」

「ありがと。オヤジが聞いたたら、涙流して喜ぶわ」と、マルガリータは涙を拭う真似をする。

話しながら歩くうちに、少年少女たちは、太い運河を跨ぐ石橋のたもとまで来た。

「さあさ、ここから先は、お仕事よ。……ってことで、ラムザ君マルガリータは、ポンとラムザの肩を叩いた。

「はい？」

「キミが班長^{リーダー}なんだからね。みんなに一言！」

「ああ……、」

ラムザは級友^{クラスメイト}達を振り返り、にっこりと微笑んだ。

「じゃ、ぼちぼち行こうか、みんな」

……、……。

今度はマルガリータの方が、大袈裟によろめいて見せた。

「しっかりしてよく。普通は、『締まっていこうぜ！』とか何とか言うものじゃない？」

「え？ だって、変に力むと上手くいかないでしょう。ダーラボン先生もそんなこと仰ってたじゃありませんか？」

だが、少なくともナツシュにだけは気合いが入ったようだ。両手をぐっと拳に握りしめ、尊敬の眼差しでラムザを見上げる。

「実戦を前にしてこの余裕……、流石ですねっ！」

「違う！ ただのボケナスだ！！」

と、ガストンが頭を抱える。

「これこれ、この笑顔がたまらないの〜」^{スマイル}

サーシャは幸せそうに、しみじみと何度も頷いた。

ラムザは海老茶色の頭巾フールドの上から、ポリポリと頭を掻いた。
「駄目かなあ……。それじゃディリータ、副班長サブリーダーってことで、代わりによろしく」

「丸投げか？やれやれ……」

ディリータは革手袋をはめた右手を前に伸ばした。

「締まっていこうぜッ!!」

「「オーッ!!」」

五人の士官候補生達とマルガリータは、手と声を一つに重ねた。

？－1－〔2〕 魔法都市ガリランド 河口地区

魔法都市ガリランドは水路の美しい、瀟洒な街並みの街だ。

王立士官学校や、王立魔法院、聖キュクラオン医学堂など、歴史の古い学校を数多く抱える学園都市であり、グレバドス教の聖地・ミクロンド島への巡礼の船が出る港町でもある。

同じく大都市であっても、貿易都市ドーターや機工都市ゴークとは違い、出稼ぎ労働者や逃亡農民などが郊外に無秩序な貧民窟街スラムを作ることもない。舗装道路や下水道などの公共設備インフラも比較的行き届いている。

とはいいいながら、敗戦後の財政難は他の諸都市と大差ない。

観光名物の運河も、最近濁りがひどくなった。

「ねえ、どうして市内の巡回が必要なのかしら。城門と水門を閉めて、あとは港を封鎖すれば、ならず者だって引き返すしかないんじゃないの？」

サーシャが素朴な疑問を口にした。

ラムザとマルガリータが前列、ディリータとガストンが後列に立ち、戦闘力の低いナツシュとサーシャを間に挟んで、六人で川沿いを見回っているところだ。

「ナツシュの地元だよな。説明してあげたら？」

と、ラムザが指名する。

「えっ！？ば、ばくがですか？」

急に呼ばれて、ナツシュは飛び上がった。

「えっとね、そのつまり……ガリランドは、攻めるのも守るのも難しい街なんだ。」

何百年もかけて街区が少しずつ拡張されてきたから、城壁も道路も、水路も、何重にも入り組んでる。

大型の海賊船とか、重装備の軍隊の大部隊は侵攻しにくいよね。

でも、細い通用口や用水路が無数にあって、軽装備の犯罪者が個別に出入りするのには防ぎきれないんだ」

マルガリータが補足する。

「そう……例えば、」

と、川面に浮かぶ木箱に小石を投げつけた。

ざぶん、と木箱は裏返し、空っぽの中身を見せてゆっくりと回転しながら流れてゆく。

「ああいうゴミの陰にでも隠れて泳げば、舟が通れない小さな橋の下とか、ご家庭用の細い水路にも入れちゃうでしょ。

城壁にくっついて建ってる家だと、屋上に梯子がかかってたり、家の中に抜け穴が空いてたりすることもあるのよ」

とマルガリータは、家々の赤い瓦の屋根を指差した。

「あたし、地上の道路や物陰にしか注意を払ってなかったわ。気を付けなくちゃ」

サーシャは深く頷いた。

「あの、先輩……、」

今度はナツシユが質問する。

「入れることは入れるとしても、そもそも、どうして盗賊達は街に逃げ込もうとするんでしょう？ 袋のネズミじゃありませんか？ 警備隊のいない小さな村とか、森に隠れようとしそうなものですけど」

「はい、ラムザ君答えて」

と、マルガリータはラムザに振った。

「え、僕ですか？ こういうのは……、」

「いつもデイリータ君を帳面代わりにしてたら、脳ミソが退化するわよ。食っちゃ寝の花虫モルボルになっちゃうわよ！」

「そこまで横着は……」

「……してないつもりなのか？」

相棒に白い目で見られたラムザは、ちょっと肩をすくめた。

「大丈夫だよ。自分で備忘録メモ取っても、取ったこと自体忘れるけど。デイリータから聞いた話は忘れないから」

これは彼の特技かもしれない。ガストンほど本嫌いではないが、文章になったものを一人で読むよりは、同じ内容でも他人から口頭で解説された方がよく覚えているのだ。

「木を隠すなら森。人を隠すなら都会さ。」

人口密度の低い場所だと、かえって追跡は簡単だ。焚き火の煙とか、金具や髪に光が反射したりとか、ちよつとしたことが遠くからでも目立つ。猟犬に匂いを追わせても、他の雑多な匂いに紛れなくて辿り着きやすい。

それに、狩人や木こりみたいに山暮らしに慣れてる人でなけりゃ、野山に入るのは官憲に追われる以上に危険だよ。道に迷ったり、魔^モ獣に襲^スわれたり、食べ物や寝場所を見つけれなかったり……。人里で水や物資を補給しようとしたら、これまたすぐ目立つ。滅多に旅人も来ない小さな村の人達って、噂話に飢えてるだろ？ちよつとでも怪しい素振りを見せたら、あつという間に話が広まって、最寄りの街の警備隊に通報されちゃうよ」

サーシャが納得する。

「わかるわ……。うちの封地^{むら}のおばさん達だって、一晚泊まった行商人の出身地から家族構成から、子供の頃のあだ名や奥さんの得意料理まで知ってるもの」

「都会の方が“よそ者”が紛れ込み易いのさ。」

ガリランドは特に、巡礼者が多いだろ。巡礼なんて、ありとあらゆる職業や年齢層の人達がするからね。知り合いの家に匿ってもらってほとぼりが冷めるまで待つとか、船の積み荷に隠れて密航するとか……。何とかしてミュロンド島に行きさえすれば、そこから全国どこへでも、外国にだって逃げ放題さ。狙い目だよ」

ラムザはデイリータを振り返り、

（これで合格^{オッケイ}？）

と手振りで尋ねる。

デイリータは首を縦に振った。

その時、

「おい！今の――、」

ガストンが横道の細い路地を覗き込んだ。

「人が通った」

士官候補生達に緊張が走る。

先刻、外出禁止令が出され、市内の通りは昼下がりだというのに無人になっていた。

少年達は次の路地まで走った。

「止まれ！」

ちらりと見えた人影に、ラムザはよく透る声で命じた。が、相手は立ち止まらず、かといって慌てて走り出すわけでもなく、家々の陰に消えた。

少年達はもう一つ次の路地まで走る。

少し待ってから、三本向こうの小路に、頭巾のついた外套を目深に被った“何者か”が姿を現した。

今度はガストンが、

「おい、止まれつつってんだよ！聞こえねーのか！」

こちらの方がお尋ね者かと思われるような、どすのきいた声で警告した。

外套の人物は、矢張りのろのろとした歩みを止めない。

「チツ……」

ガストンは長剣の柄に手をかけた。

「あ、ちよっと待った」

ラムザは手の平をあげて他の班員達を止め、走って“何者か”を追った。

ラムザは外套の人物を追い越し、斜め前から声を掛けた。

「もしもし、おばあちゃん？」

頭巾の中から、深い皺の刻まれた顔がラムザを見上げた。

「はあああ？人違いじゃないかね。あたしにや、女の孫は一人もおらんはずだよ」

女に見間違えられたのはとりあえず気にしないことにして、ラムザは大きな声でゆっくりと話した。

「孫じゃありませんよ。僕らは北天騎士団の巡回パトロールです。今、盗賊が街に近付いてるんです。危ないですから、今日はお家にいて、外に出ないで下さい！」

「はあ？　そうぞく？　相続するほどの財産なんかうちにあるもんかね。今夜食べる物もないから、こうして娘夫婦の店に残り物をもらいに行くんじゃないか」

とんちんかんなことを言う老婆に、ラムザがもう一度説明しようとする。

「コラあっ！！」

麵麴屋パンの主人が、長いのし棒を手到店から飛び出してきて、腕まくりした。

「お袋に何しやがる！　ろくに話も聞かねえでしょっ引くなんざ、俺が許さねえーっ！！」

「え？　ちよっとっ……！！」

パシッ！

ラムザは、振り下ろされるのし棒を“白刃取り”した。

「しょっ引いてませんっつ。ご主人、落ち着いて……！！」

ディリータ達が駆け寄ってくる、が、それより先に。

パコーン！

店から追いかけてきたお上さんの片手鍋が、麵麴屋パンの主人の頭を直撃した。

「あんたこそ、ろくにヒトの話も聞かないで、何を士官候補生様に御無礼働いてんだいッ！」

お上さんは、ラムザに平謝りに謝った。

「申し訳ありませんねえ。母は耳が遠くって、市役所の合図の鐘も聞こえなかったんだと思います。この人だって親孝行だけで、そうじゃなかったら、お上に盾突こうなんて大それたことはこれっぽちも……」

「わかります、そんなことだろうと思いました。ここまで来たら、おばあちゃんもあなたの方ご夫婦の家にいた方が安全でしょう」

ラムザは、恐縮している主人に微笑みかけた。

「ご主人、すごい力ですね。しっかりお義母^{かあ}さんを守ってあげて下さい」

「いやあ、悪かった。あんたさんこそ、女の細腕で俺の力を止めたあ恐れ入ったな。流石、騎士になろうってえ方々は鍛え方が違うねえ。あんたさん方に警備してもらえりゃ、街の衆も大安心ってんだ」

と、主人は調子良く“よいしょ”したつもりだが。

ラムザは苦笑した。

「いえまあ、それほどでも……男ですし、僕」

カコーン!!

再び、お上さんの片手鍋が一閃した。

「すみませんね、うちの人、ほんつとにそそっかしくて!」

「いえ、いいんですけど……ご主人、大丈夫ですか……?」

母と夫を急かして店の中に戻ろうとするお上さんを、マルガリータが呼び止めた。

「一応、手荷物とお家の中点検^{チェック}させてもらいますね」

老婆が持っていた編み籠を調べ、麵麴^{パン}屋の店内を一通り見回した。その間、三人に不審な挙動はない。

「はい、結構です。戸締まりしっかりしてね」

士官候補生達は再び、川沿いの道に戻った。

「まったく、人騒がせだぜ」

ガストンがぶつくさ言う。

「先輩、さっきの麵麴^{パン}屋のご亭主の話ですけど……、一般市民をしよっ引いたりもするんですか?」

と、ナツシュが尋ねた。

「うーん、騎士団^{アタシたち}だって、性善説に立てたらいんだけど。実際

に盗賊団が、養老院を隠れ家アジトにしてたりとか、孤児院の子供達を連絡員に使ってたりとかいう事例ケースがあったのね。だから、お年寄りや子供といえども念入りに取り調べる傾向になってるわ」

「そうだったんですね……、うわっ！」

突然、ナツシュは叫んでラムザの袖を引いた。

三、四本先の横丁からまたしても人影が現れたのだ。
が、向こうも海老茶色の剣術着を着た士官学校生達アカデミーだった。

呼び子で“異状無し”の合図を送り合って別れる。

「ビビッてんじゃねーよ、この臆病野郎チキン！」

ガストンがナツシュの首を右腕で絞め、左拳をこめかみにねじ込む。
「だってだって、緊張してるんだよう。魔法が使えなかったら、ぼくなんて……」

ナツシュは今にもベそをかきそうだ。

「いいんだよ、ナツシュは魔法を使えば」

と、ラムザは明るい、穏やかな声で言った。

「校長先生は魔法の錫ロッドを持つなど仰っただけさ。魔法を使うこと自体を禁止したわけじゃない」

「ええっ？でも……」

「今回の戦場は狭い市街地だ。遠隔攻撃は味方や一般人を巻き込む恐れがあるから、ってことだろう」

ガストンが鼻をこすった。

「そーだなー。警告無視つうことで問答無用で攻撃してたら、さっきのバアさんなんか一発であの世行きだったぜ」

「錫ロッドを持たなければ威力が落ちるから、一撃即死の心配はなくなる。それと、接近戦では物理攻撃力の低い魔道士から狙われるだろ。一目で魔道士とわかる武器は持たない方が、危険リスクが分散される。……っていう目的だろう。」

大丈夫だよ。ナツシュの的ターゲットの制御は正確なもの。うっかり味方を撃ったりしないだろ」
と、ラムザはナツシュを励ました。

「は、はいっ！矢っ張り、ぼくには魔法が本分ですからね！」
ナツシュは少しだけ勇気がわいたようだ。

「……と、そういう考え方でいいんでしょうか？」

ラムザはマルガリータに確認を取った。

「うん、間違っていないと思うわよ。暗記力には一抹の不安を感じさせるけど、思考力はあるみたいじゃない。安心したわ」

ガストンがまた愚痴をこぼす。

「……にしてもダッセェよな、この稽古着。いかにも見習い君です、って感じでよ」

ディリータがまた答える。

デザイン

「意匠はさておき、実用的ではあるな。動き易いし、見分け易い。

今のような場面で、出会い頭に同士討ちになることもあるまい」

「味方だけじゃなしに、敵さんにもバレバレじゃねーか。俺が盗賊だって、正規の騎士隊よりやお子様部隊を突破しようとするぜ？」

マルガリータは、左右に油断無く目を配りながら話す。

「まあね。でも、キミ達にもそんなに荷の重い相手じゃないわよ。

骸騎士団時代からいる連中は、結構強いみたいだけど。かなり戦死なり逮捕されるなりしてて、もう百人までも残っていないはずだわ。他は、その辺のゴロツキが大樹の陰に寄ってきただけよ。

骸旅団って元々は、裕福な貴族とか、貴族御用達の大商人しか襲わない方針だったみたいなのね。でも今回の奴らは、騎士団との正面衝突を避けて、お百姓さんや旅人ばかりをカモにしてきたの。

ろくろく武術の心得もない烏合の衆よ。女子供と思って甘く見てくれた方が好都合かも」

マルガリータは声を低めた。

「……なーんて言ってるうちに、今度こそ前方に不審な集団を発見。ラムザ分隊長殿、どうします？」

緑の頭巾を巻き、剣を携えた男達だ。逃亡中の盗賊団員と見てよいだろう。

「先輩とガストン、サーシャはこのまま前進。僕はディリータ、

ナツシュと橋を渡って水路の左側に行きます」

「ご名答！」

ナツシュとサーシャは、納得がいけないという顔をした。

「え、え？ 兵力は分散しないのが基本じゃあ……？ ぼく達たださえ少人数なのに？」

ディリータがラムザの隣に並びながら、ナツシュに解説する。

「この通路の幅では、自由に動き回れるのは二人がいいところだ。少ない戦力でも充分敵を食い止められる。むしろ一カ所にまとまれば、回り込まれて挟み撃ちにされるぞ」

「なるほど！」

ナツシュは、ぽんと一つ手を打った。

薄汚れた身なりをした十人ほどの盗賊達は、抜け道を探して右往左往しつつ、結局は水路沿いに真っ直ぐラムザ達の方へ向かってきた。

「なんだ、ガキどもじゃねえか。くくッ、ツイてるぜ！」

一味の首領^{ボス}とおぼしき男はほくそ笑んだ。

「いいか野郎ども、このガキどもを倒せばいいんだ！ そうすりゃ逃げることができるぞ！」

気にすることあねえ！ 一人残らず殺^やっちまうぞッ！」

と、けしかける。

が、仲間達は気が進まないようだ。少年少女達が強そうに見えたから……ではない。

「えー、勿体ないんじゃないですかい」

「こんな上玉、滅多にお目にかかりやせんぜ」

「この嬢ちゃんは生け捕りってことで……」

盗賊達が涎を垂らさんばかりに、穴の空くほど見つめているのは

――、マルガリータでもサーシャでもなく、ラムザだ。

「……」

長剣の鞘に手をかけ、ラムザは数歩前に入る。

ディリータがラムザの肩をつかんだ。

「ラムザ、気を付けろ！ むやみに前に突っ込むなよ」

「侮るな、ディリータ！ 僕だってベオルブ家の男子だ！」

盗賊達の間で電光のように衝撃が走る。

「何イッ……！？」

「こいつが……！！！」

「……男だってエッツ！？」

がくつ。

ラムザは出鼻を挫かれた。

普段は引っ込み思案なナツシュが、思わず声を上げる。

「あのねーっ！ 性別なんかよりもっと、驚くべきことがあるだろうっ！
ベオルブ家だよ？ あのベオルブ家……！」

改めて、盗賊達がざわめいた。

「ベオルブ家だと！？ 北天騎士団長の……！！？」

「こいつら、士官学校アカデミーの候補生達か！」

ラムザは精一杯、盗賊達を睨み付けた。

「そうだ！ 僕は“天騎士”バルバネスの三男、ラムザⅡベオルブ。
ラーグ公の軍師・ダイスダーグと、北天騎士団団長・ザルバツグの
弟だ！」

大人しく投降しろッ！ さもなくばここで朽ち果てることになるぞ
ッ……！」

美少女としか見えない優しい顔立ち、華奢な体付きのラムザが声を
張り上げて、盗賊の首領ボスはあざ笑うばかりだ。

「おまえたち、ひよっこどもに何ができるといふんだ！ 苦労知ら
ずの貴族のくそガキどもにオレたちを倒せるものかッ……！」

薬売りのような荷を背負った男が、首領ボスにすり寄った。

「ギリアムのアニキ、こいつあ※小野豚うりぼーが“火の玉の爪”ボムをしょっ
てきやしたね（※ 「カモネギ」。“火の玉の爪”は赤唐辛子の

一種。ベルベニア活火山地方の鍋料理に由来する慣用句。）。そん
な大家いいとこの坊々なら、人質にすりゃあ逃げるのも楽になるってもんだ。

後は身代金むしり取るもよし、売っ払うもよし。どっちに転んでも大儲けでさあ」

「ふふん、それもそうだ。よし、その“別嬪”のお坊ちゃまだけは生かしておけ。顔に傷付けるなよ、値が落ちる！」

ところが今度は、期待が外れた仲間達の方が息巻いている。

「つべこべ言わずに殺^やつちまいやしようぜ！」

「だまぐらかしやがって！」

「皆殺しだーっ！」

ガストンはちらりとラムザを横目に見て、舌打ちした。

「あーあ、黙ってりやいいのによー」

ガストンの隣で、マルガリータもぷりぷりと怒っている。

「んもー、失礼しちゃう。こっちに本物の可愛い女の子が二人もいるってのに、見向きもしないだなんて」

「見向きされても困りますけど……」

サーシャのつつこみを聞き流して、長剣の鞘を払い、白獅子の紋章入りの盾を構える。

（何だよ、勝手に見間違えなんて……）

ラムザも長剣を抜き放つ。

「おい、ラムザ……」

「くどいぞ。ディリータまで僕を見くびるのか？」

「見くびっちゃあいない。一人で美味しいところを持っていく気かと、言っているんだ。“いつも通り”にやろうぜ」

ラムザは肩の力が抜けるのを感じた。

慣れているつもりでも、容姿のことをつつかれるとつい、熱くなっていたらしい。

「そうだね。よし、行くぞッ！」

「応ッ！」

二人は腰を落とし、滑るような足取りでゆるゆると盗賊達との距離を詰める。

「“あれ”をやる気か」

ガストンがにやりとした。

「模擬戦じゃみんな、“あれ”にはかなわないのよね」
サーシャもしたり顔だ。

「え、何よ“あれ”って？」

尋ねるマルガリータに、ガストンが顎で示す。

「“あれ”っすよ！」

ラムザとディリータは、全く同じ歩調で前進する。

先頭にいる盗賊の間合いに入った。

盗賊は、二人の少年達のどちらを先に相手にすべきか迷ったが、
ギリアムと呼ばれた首領^{ボス}の言葉に従い、ディリータに斬りかかる。

「ターッ！」

少年達がすつと左右に分かれた。

すれ違いざま、ラムザの剣が胴を薙ぎ、ディリータの剣が盗賊の
剣を打ち払う。

「ぐっ」

二人同時に振り返る、が、ラムザの方が一瞬早い。

盗賊は、今度はラムザの剣をはね飛ばそうとした。その時には、
もう一人の盗賊がディリータの背後で剣を振りかぶっている。

キンッ！

刃のぶつかった音は軽い。はね上げられたというよりは、自ら勢
いに乗った形で、ラムザの剣は弧を描き、ディリータを狙う盗賊の
肩口に吸い込まれた。

ラムザに受け流されたために剣を振り上げすぎ、がら空きになっ
た胴を、ディリータが逆袈裟に斬り上げる。

「……っ、……」

二人の盗賊は声もなく、水路に転げ落ちる。

派手な水飛沫が上がり、緑の水面に赤い輪が広がった。

少年達はサッと剣を一振りして刀身の血脂を払い、再び、呼吸を
合わせて歩みを進める。

まるで一対の光と影のように。

「へえ！こっちも負けてらんないわね」

マルガリータは武者震いした。

サーシャの白魔法が発動する。

「たゆとう光よ、見えざる鎧となりて小さき命を守れ……、「物理^{プロ}防御^{テス}」！」

サーシャ自身と、一步離れた位置にいるマルガリータ、ガストンを包む空気が陽炎のように揺らめいて、目に見えない防壁を形作る。

「よっしやあ！」

「物理^{プロテス}防御」の魔法がかかると、ガストンは早速、自分から仕掛けに行く。

「あ、こら」

マルガリータは素早く横に並び、側面からガストンに斬りつける剣を盾で防いだ。

「物理^{プロテス}防御」の魔法は武器や拳などによる打撃^{ダメージ}を軽減してくれるが、完全に無効化するものではないのだ。

「攻撃は最大の防御」とばかりに押しつけて押し切るのがガストンの攻撃方法^{スタイル}だ。

試合では、全く反撃の暇を与えずに相手を叩き伏せることも多い反面、負ける時は一撃で無防備に決定打を喰らいがちだった。

しかし、ラムザは知っている。

血の気の多い猪武者と思われるガストンは、実は意外なほど「騎士らしく」女性や弱者を庇おうとする。

マルガリータとサーシャを置き忘れて無茶はしないだろう。そのことが結果的にガストン自身の安全にもつながると見込んで、彼を対岸に残したのだ。

もつともマルガリータはサーシャとは違って、ガストンに援護^{フォロー}されるよりも、援護する側に立てるだけの実力の持ち主だが……。

「武器のお手入れが悪いわね」

盾で受け止めた剣を押し返して、マルガリータは挑発する。

襲いかかってきた盗賊の、錆と細かな傷で曇った広刃剣を難なく叩き折り、返す刀で首筋を斬り下げた。

「命取りよ？」

得意の上段突きで一人仕留めたガストンが、ひょうつと口笛を吹く。

一方、ラムザとディリータの戦いぶりをまごまごしながら見学しているだけのナツシュに、民家の物置の屋根を伝って盗賊の一人が忍び寄る。

それに気付いたサーシャが、足元の小石を拾って投げつけた。

「ウツ」

小石は膝に命中し、盗賊は足を踏み外して歩道に墜落する。

「へ？あわわ！」

ナツシュは慌てたが、すかさず体当たりで水路に放り込んだ。

陸に這い上がろうとしたところを、ラムザがもう一度、思い切り蹴落とす。

盗賊は意識を失って、だらりと水面に浮かんだ。

「サーシャ、有難う〜」

コンビネーション

ラムザとディリータの連携攻撃よりは、マルガリータと、なかなかずくガストンの方につけ入る隙ありと見て、盗賊達が対岸へ流れる。ラムザ達も橋を渡り、盗賊達を挟み撃ちに追い込む。

「ナツシュ！」

ラムザの声がかかると、ナツシュはここぞとばかりに呪文を唱えた。

「まばゆき光彩を刃となして、地を引き裂かん！ “雷撃” ツー！！」

青白い電光は、丁度盗賊達の真ん中へ炸裂した。

「うわーっ！」

「ぎゃあっ！！」

盗賊達は腕や胸を押さえ、ばたばたと地面に倒れる。

何とかまともに立っているのは、首領のギリアムだけだ。

「そこまでよっ」

マルガリータが、長剣の切っ先をギリアムに向かって突きつける。

「クソッ、まだだ！」

ギリアムの視界の端を、小さな影が横切った。中二階の窓から逃げた子猫を追って、子供が外に出て来たのだ。

ラムザ達がアッと言う間もなく、ギリアムは積み上がった木箱を駆け上って、子供を左腕に抱え込み、その喉元に剣を当てた。

「動くな！こいつの喉笛搔っ切るぞ！」

五、六歳ほどの男の子は、何が起きたのかもわからないまま、体を強張らせている。

「剣を捨ててこっちに來な、お坊ちゃん」

「……」

ラムザは長剣と、鞘に入っただまの短剣を手放し、ゆっくりとギリアムに近付く。

「他の奴らは動くなよ！そうだ、そのまま……、？」

ラムザの隣にいたはずの、ディリータの姿がない。

（いつの間に？）

いや、それよりも。

（いま、どこにいやがる……？）

ギリアム自身の影が、ラムザの足元に伸びている。その肩越しに、もう一つの影が動くのが見えた。

「！」

ザシュッ！

ディリータが、ギリアムの左肩の付け根に斬りつけた。

ギリアムの腕から離れた子供を、ラムザが飛び込んで抱き止める。

ギリアムは振り向いて、ディリータの頭を横薙ぎにしようとした。

が、ディリータは身を沈めてかわし、ギリアムを体当たりで突き飛ばす。

背中から地面に落ちたギリアムを、マルガリータとガストンの剣が十字に首を押さえつけ、起き上がれなくした。

「……殺せよ」

ギリアムは投げやりに言う。

「いい心掛けだぜ。そんなじゃあ……」

ガストンが剣を振りかぶり、心臓の上に突き立てようとするのを、

「よせ！」

子供を両腕で抱えたラムザが止めた。

「もう決着はついた。命のある者は捕虜にして、騎士団に引き渡そう」

ラムザは男の子を地面に下ろし、長靴ブーツにまつわりついてくる子猫を拾い上げて、腕に持たせてやった。

「大丈夫かい」

「うん、ありがと！」

「お礼ならディリータに……あの黒髪のお兄ちゃんに言うといいよ」
ディリータは盗賊達の意識がナツシュの“雷撃”サンダーに向いている隙に、こんなこともあるかと思ひ、一人、脇道に隠れたのだ。

「お姉ちゃんたち、強いねえ！ カッコ良かった！ 士官候補生の人？」

「お姉ちゃん……？」

ラムザは周りを確認したが、どう考えても、子供の視線の先には自分しかない。

先程、子供を助けるために駆け込んだ時、海老茶色の頭巾フードが脱げてしまっていた。一本に束ねた、背中の半ばくらいまである明るい金髪が、そよ風になびいている。

「そうだよ。お兄ちゃん達は、王立士官学校アカデミーの生徒さ」

ラムザはさり気なく、“お兄ちゃん”という所を強調した。

「あのね、僕、僕んちは靴屋さんなんだけど、剣を練習して強くなるんだ。僕もウィーグラフ様みたいに騎士になれるかなあ？」

男の子は無邪気に尋ねる。

ラムザは返事に詰まった。

ウィーグラフフォルズは平民の義勇兵から騎士に叙せられた数

少ない一人であり、大戦末期の民衆の英雄^{ヒーロー}だった。

だが現在は逆賊・骸旅団の団長、即ち騎士団と士官候補生達の仇敵なのだ。

幼い子供はそのような社会情勢を知らないのだろうか。あるいは、平民達は騎士団よりも反乱軍を秘かに支持しているのだろうか？

「……、」

ラムザが口を開く前に、玄関から走り出てきた母親が男の子の頬を平手で打った。

「今外に出たら死んじゃうって言ったでしょう！」
泣きながら、男の子を抱きしめた。

男の子の目にもみるみる涙が浮かんた。

「だって、ニヤーは僕の友達だもん。ニヤーだって外に出たら死んじゃうんでしょ。放っておけないよ……」

ラムザはしゃがんで男の子と目の高さを合わせ、秋の空のように澄んだ碧い瞳で、にこりと微笑んだ。

「自分じゃない誰かのために勇気を奮うのが、騎士道の基本だよ。

……って、僕は父さんから教わった。

君にも立派な騎士の素質があるよ」

「うん」

男の子は得意げに笑った。

「でもさ、靴屋さんだって大事なお仕事だと思うなあ。君の父さん達がいい靴を作ってくれるから、僕達だっていい働きのできるんだよ」

と、ラムザは自分の^{バトルブーツ}軍靴を撫でさすって言った。

「うん！※韋駄鳥^{チヨコボ}に履かせる鉄の爪がないと、王様の軍隊が負けちゃう（※七王国時代の伝承に基づく童謡の一節）んだよね！」

男の子はもつと得意げに笑った。

「じゃあね、僕矢っ張り靴屋さんになるから、僕が大きくなったらお店に来てね。今日のお礼に、お姉ちゃんにぴったりの靴を作ってあげるから！」

「そ……そりやどうも。楽しみだな」

ラムザは苦笑いした。

お喋り息子が余計なことを口走らないうちに、ということだろうか。母親は礼もそこそこに、男の子を抱え上げて家の中に戻った。

「ケツ、何が騎士道の基本だ！

勘違いするなよ、オレたちが負けたのは、お前らが強いからじゃねえ！

オレたちだってな、山ほど肉と麵^{パン}麩^{ミスリル}を食って、靈銀の剣と鎧^{ミスリル}を持つてりや、今頃ふん縛られてヒイヒイ泣いてんのはお前らの方だったぜ！」

ギリアムは悪態をつき続けている。

「ほほう、そーかよ。腹いっぱいメシ食って、いい武器防具を装備さえすりや、ガキンチョ人質に子分ども見捨てて逃げようなんつー腐った根性も直るのか」

ガストンはギリアムの背中を踏みつけ、後ろ手に縛った縄をきつく絞った。

「なあ、大将。やっぱ、この場で斬っちまった方が親切ってもんじゃねーか？ どーせ縛り首か鉋^{ミスリル}山送りだろ」

官営の金山や靈銀鉋^{ミスリル}山、炭鉋^{ミスリル}等では、危険な部署の作業に囚人を従事させる。事故や病気による死亡率が極めて高く、年期が限られていても実質は緩慢な死刑に等しい。

「まだ、そうとは決まっていな」

ラムザは剣を拾い、ガストン達に近付いた。

「病氣療養中の国王陛下が快癒なされば、恩赦が発せられる可能性が高い。罪状にもよるが、罪一等を免ぜられてまっとうな暮らしに戻る道も……」

ギリアムは乾いた笑い声を立てた。

「ハ！これだから、いいとこ育ちの坊々はよ。

まともに働いておまんまが食っていけるもんなら、誰も盗賊なんざしちゃいねえ！

飢え死ぬか、盗っ人になるかってとこまでオレらから年貢を搾り取った当のお貴族様が、それでお慈悲を垂れてるつもりか？

虫唾が走るぜッ！」

ペッ、とラムザの色白な顔に唾を吐いた。

「まっ……」

「てめえ!!」

ガストンがギリアムの喉に剣を当て、マルガリータが盾を背中に押し付けた。

「死にたかったら、どうぞ。手伝ってあげるわよ。命が惜しいなら、大人しくなさい」

「けっ……」

ギリアムは、ぷいとそっぽを向いて口を閉ざした。

「ひどいなあ！ 気にしちゃいけませんよ、ラムザ君！」

ナツシュが手巾でラムザの頬ヘンカチを拭う。

「別に、僕は平気だよ」

ラムザは全く動じずに、穏やかな声で言った。

「そっ、そんな寛大なことでいいんですか！？ ベオルブ家三百年の名誉にかけて、ここはもっとビシッと！」

「ナツシュ、言ってることが矛盾してるよ。」

さっきは、ベオルブ家の名前を出せば無傷で降参してくれるかなって思っただけで。

本当は僕なんかまだまだ、名乗る方がベオルブ家の面汚しになるぐらいの未熟者さ。

……だいたい、僕は慈悲なんかかけちゃいない。筋を通せと言ってるだけだ」

ラムザは真っ直ぐな目で、ひとりと盗賊の首領ボスを見た。

「たとえ飢え死ぬとしても、最期までまっとうな仕事を勤め上げる人もいる。そうすべきだとは、それこそ僕らの言うことじゃあない。

……が、剣を手に取り、他人から奪ってでも生き延びる道を選んだのなら、投獄生活に耐えてでも生き延びるだけの意地は見せろ。」

それが、お前が剣でねじ伏せてきた人達に対する落とし前つてもんじゃないのか」

「……」

ギリアムは黙り込んだ。額や脇の下から冷や汗が流れる。

(な、何だ……？ 世間知らずの、ひよつこのくせに……！)

そう思おうとするのだが、静かな瞳に宿る気迫を跳ね返すことができない。

この少年は、よしんば剣に倒れようとも、虜囚の辱めを受けようとも、見苦しく泣き叫んだり呪いの言葉を喚き散らしたりはしないように思われた。

(くっ……、これが“騎士”ってやつか!!)

程なく、北天騎士団の若い騎士達の一隊と連絡がついた。

騎士達は、捕虜達を数珠つなぎにして市庁舎の牢に引き立て、死者については川岸に並べて人相や所持品等の記録を取り始めた。

「お手柄だったな、君たち。……、おや」

記録係の騎士は、ラムザの優しげな顔に目を留めた。

「そうか、どこかで見た気がすると思ったら。君かい、ザルバツグ將軍の妹君というのは！」

まさに才色兼備、兄上達も将来を楽しみになさっていることだろう。いや、悪い虫がつかないように心配のし通しかな？ ははは！」

「……」

マルガリータが手を横に振った。

「妹さんなら、イグーロス貴族学院に通ってるわよ。こっちは弟」

「え？ まさか……！」

騎士は冗談だと思ったらしい。が、ラムザが申し訳なさそうに頷くと、気の毒なほど青ざめた。

「あーあ、あんた一生ヒラだわね。天下の北天騎士団団長殿の御令弟に無礼を働いたとあっちゃねえ。^{フアーラム}“天意のままに”！」
と、マルガリータは指で聖印を切る。

「うわーっつ、謝る！この通り！！どうか兄上達には内密に！」
「どうぞ、お気になさらず。子供の頃からずっと、慣れっこですから」

とは言ったものの、級友達の所に戻るとつい、溜め息が漏れた。
「どうしていつも、こうなのかなー……。女子とは制服だって違
うのに……」

サーシャも着ている女子の剣術着は黒だ。

「髪を切れば、もっと男っぽく見えるのじゃありませんか？」
とナツシュが助言する。

ラムザは曖昧に答えた。

「んー、前に一度だけザルバッグ兄さんみたいに短くしたら、アル
マに大不評だったんだ」

「？アルマって……」

ガストンがからかう。

「こいつの“最愛の女”だ」

「妹だってば！まあ確かに、世界一好きな女の子には違いはないけど
ね、今のところ」

ラムザは顔を赤くして弁明した。

「切っちゃうなんて勿体ないわ、こんな綺麗な金髪なんだもの」
サーシャがラムザの髪の手を取って言う。

「え、綺麗？金髪って綺麗？本当にそう思ってくれる？」

「ええ、とっても素敵。ね、お近付きのしるしに、後で三つ編みに
させてもらってもいい？」

「うん、喜んで！ありがとー！」

ラムザはサーシャの手を取ってぶんぶんと振った。

「こら、浮かれてる場合か。まだまだ任務は続くんだぞ」
ディリータが冷静な声で注意した。

「ごめん。勝って兜の緒を締めよ、だね。じゃあ、引き続き見回
りに行く前に、みんなもう一度装備を点検して」
と、言ったラムザ自身が、長剣の鰐元が鞘からはみ出していること

に気付いた。

「あ、あれ？」

二、三度入れ直そうとするが上手くいかない。

「ちょっと貸して」

マルガリータがラムザの長剣を抜いて調べる。

「実戦の後には、多少曲がっちゃうのが普通よ。この位の歪みなら、むしろ軽い方ね……少し時間が経てば元に戻るわ。刃こぼれも全然してない。流石ね」

ふと見れば、マルガリータは比較的柔らかい革製の鞘に剣を仕舞っているが、鉄ごしらえの鞘のデイリータとガストンは、血糊を拭っただけで抜き身のままの剣を手にとって提げている。

「ドラコニア城にはいい刀鍛冶がいますから……」

ベオルブ家の本拠地・ドラコニア城は、別名“白竜城”“臥竜城”とも呼ばれる名城である。ドラコニア伯爵領は七王国時代には独立国だった時期もあり、城と城下町は小さいながらも軍事・産業上の機能が充実している。

「剣もいいけど、キミの腕が、よ。“騎士の棟梁”ベオルブ家の名前に恥じないわね」

とマルガリータが誉めると、ナツシュも感動して誉めちぎった。

「本当です！すごいですね、ラムザ君は！

ぼくなんかじゃ、たとえ“^{ヘイスト}加速”の魔法がかかってたって、あんなに素早く力強くは動けないですよ。流石は“風神”バルバネス様の御子息です！

こちらは人的損害も物的損害も皆無^{ゼロ}ですし、完璧^{パーフェクト}ですね！」

しかし、ラムザの表情は晴れない。

「ちつとも、すごくないよ。」

本来は、あのぐらいの力量^{レベル}の相手なら全員生け捕りにできるぐらいでなけりゃ。しかも、確実に生け捕れる自信がなくて、息の根を止めるつもりで戦ったのに、仕留め損ないもした。

……まだまだだな」

「そういう飽くなき向上心が、更なる強さにつながるんでしょねえ」

と、ナツシュはますます感心した。

「ところでさ、何で同級生なのに僕には丁寧語なの？ 対等^{ため}でいいよ」

「いえいえ、恐れ多いっ！ ラムザ君の実力と家柄をもってすれば、ゆくゆくは千騎長にも、万騎長にもなれちゃうんですから！」

ガストンが横からナツシュの肩をつかんだ。

「ほおーう、泣く子も黙るガストン様にタメ口きくのは恐れ多くねーのか」

「はっ！？ い、いやそれは！ 変に敬遠しないで、同級生として親しもうと！」

「そりゃ、あんがとよ。仲良くやろーぜ」

ガストンはナツシュの額を人差し指で弾く。

「痛っっ」

ナツシュの団栗眼に涙がにじんだ。

ガストンにしては手ぬるいな、とラムザは思った。

剣にしる槍にしる、拳にしる、ガストンの突きの速さ^{スピード}と破壊力^{パワー}は折り紙付きだ。試合でも喧嘩でも、何度となく対戦相手に血反吐を吐かせてきた。

が、真剣で生身の人間の喉を突き破ったのは今日が初めてだろう。その手応えの重みが、日頃の威勢の良さを鈍らせているようだ。

顔色の冴えないガストンとは反対に、ナツシュとサーシャは直接敵に止めを刺さなかったためか、勝利に昂ぶって頬を上気させている。

（僕は……）

ラムザは、革手袋をはめた手を握ったり開いたりしてみた。

剣が鞘に入らないのを、ラムザは最初、自分の手が震えているせいかと思ったのだが、そうではなかった。

刀身の歪みのことは、言われてみれば常識である。にも関わらず

そこに思い至らなかつたのは、矢張り気が動転していたらしい。

（ディリータは？）

幼い頃から陰になり日向になってラムザを支えてくれた相棒は、普段の沈着さを些かも欠いていないように見えた。

（大人だなあ。僕もしっかりしなくちゃ）

ラムザはもう一度、剣の柄頭を押した。

チン、と小さな音を立てて、ミスリル霊銀の刃は鞘に収まった。

？－１－〔２〕 魔法都市ガリランド 河口地区（後書き）

作者の独断と偏見により、ベオルブ家の家格が原作より高めです。ラムザはイグーロスの城下屋敷よりも、主に本拠地のドラコニア城でザルバッグに鍛えられてきた……という設定です。

ドラコニア城のイメージは、イギリスのチェプストゥ城。砦としての堅牢性と、居住性とのバランスのとれた、実用的な感じの名城だと思います。ウォーリック城やウィンザー城などに比べると、それほど近代化・観光地化されていないくて、中世気分にとっぷり浸かってみたい方にはイチオシです。

？－1－〔3〕 下町の酒場

燭台の灯りを吹き消して、ラムザは寝台ベッドの上に仰向けに寝転がった。

夕食後、兵法書や空想魔学小説など数頁ページめくってみたのだが、目で文字を追うだけで、内容が頭に入ってこない。

「ラムザ？……もう寝てるのか？」

同室のディリータが戻ってきて小声で尋ねた。

アカデミー士官学校の学生寮は二人一組の相部屋だ。

「いや。起きてるよ」

残照と月の光だけでも、室内はお互いの表情がわかる程度に明るい。が、ディリータは廊下の燭台から火をもらってくると、窓の鎧戸カーテンと帳を閉めた。

「考え事か？」

「うん、ちよつとね」

「昼間のことか」

「ああ……」

ディリータはラムザの寝台ベッドに腰掛けた。

「幸い、戦死者は出なかったようだ。……現時点ではな。重傷が三人。二組のウォーゼルが意識不明で、医学堂病院で手当を受けているそうだぞ」

「ウォーゼルが？あの虚弱体質で、治療に耐えられるかな……」

魔法治療も万能ではない。体機能を活性化させ内・外傷の治療を早めることはできるが、その分急速に体力を消耗させる。重傷者にケアルジャ”最上級回復魔法”などの強力すぎる魔法を施すと、却って衰弱死させることもある。

「ウォーゼルの心配もいいが、お前こそへたばるなよ。今日は晩飯を十杯しか食わなかったろう。……矢張り、後味が悪いか」

「うん。予想してたのとは逆の意味だね」

「というと？」

ラムザは、サーシャに三つ編みにされた髪を指に巻き付けながら話した。

「もつともつと、衝撃シヨックを受けるだろうと思ってたんだ。肝臓レバーの腸詰ソーセめとかなんて、気持ち悪くて食べられないんじゃないかって……。

確かにまだ、ピリピリした緊張感が残ってるけど、いつもの狩りや剣術大会の後と大差ない。初めて一人で小野豚うりぼーを仕留めた夜の方が、まだしもドキドキしてた」

「平常心を保っているということだろう。騎士の卵としては、いい傾向じゃないのか」

「そりゃあ、父さんの……“天騎士”バルバネスの子としてだけなら、そうかもしれない。

でも僕は、母さんの子でもある。

母さんは、戦乱の絶えないこんな時代だからこそ、病気や怪我に苦しむ人達を助け続けた。失われる命が一つでも少ないように……。

母さんのこと、一日だって忘れたつもりはなかったのに……僕、いつの間にか母さんと心が離れてしまったのかな、って」

ラムザの母・ファティマクレリックルグリアは、軍医としては領へ従軍したこともある神官医だったのである。

「デイリータは、どう？初めて人を斬った感想は」

「勿論、気持ちのいいものじゃないさ。だが、治安維持は誰かがやらねばならない大事な仕事だ。僕達が逃げるわけにはゆくまい？

……もつとも僕の仕事は、不特定多数のガリランド市民を守ることじゃないが。亡き親父さんから、お前のことを頼まれてるからな……。お前に害を為す奴は、職業的ビジネスライクに斬る。それだけさ」

デイリータは、七歳の時に黒死病ペストで肉親のほとんどを失って以来、妹のティータと共にベオルブ家に引き取られて育った。ラムザの幼馴染みであり、世話係でもある。

ラムザは起き上がり、女性的な仕草で指を組んだ。

「デイリータ、頼もしい。その渋さクールでもって忠誠を誓われちゃ

「つたら、貞節ガルドの固い高貴な姫君でもイチコロだな。

僕を追っかけ回していると見せかけて、実は君の隠れ支持者ファン……つて女の子は少なくないと見たね」

「バカ、真面目に答えたのに茶化すな」

「真面目な話さ。そろそろ白状したら？」

「何をだ」

「君の多様性バラエティーに富んだ情報の中には、女の子をたぶらかして聞き出したものも含まれてるんじゃないかい？ ティータに気苦労かけないように、ほどほどに慎むべきだよ」

ディリータは鼻で笑う。

「何を言い出すかと思えば……」

「あれあれ？ じゃあ時々、図書館に行くふりをして僕にも内緒で行方をくりますのは、一体どこに出掛けているんだい」

ディリータは笑うのをやめた。

「……知っていたのか」

「親友といえども、踏み込まれたくない私事プライベートはあるだろうからね。

ディリータが自分から話してくれるまで、訊かないつもりだったんだけど。あんまり度重なると、心配になってくるじゃないか」

参ったな——という顔をして、ディリータは黒髪をかき上げ、ラムザの手を引っ張って寝台ベッドから立ち上がらせた。

「じゃあ、お前も連れて行ってやろう。丁度いい。今日もこれから、情報を仕入れに”行く予定だったんだ」

「ふーん、紹介してくれるんだ。で、相手はどこの深窓のご令嬢？」

「誰が女の家だと言った。酒場さ」

「酒場あ!？」

ラムザは目を丸くした。

「酒場といっても、ピンからキリまである。娼館や賭場に近い性質の、ガラの悪い店には入らないぞ。僕が行き付けにしているのは、大衆的な定食屋兼宿屋みたいところさ」

「へえ……。やましいお店じゃないんだったら、もっと早くに僕を

誘ってくればいいのに。友達甲斐がないなあ」

「※天蠍の刻（※午後八時〜午後十時頃）の閉門時間に間に合うとは限らないんでな。端から、管理人室の前を通らずに、無断外出してたんだけだ。」

クレティアン以来の天才様に、首席卒業をふいにする危険を冒させるのは忍びなからう」

ラムザは愉快そうに笑い飛ばした。

「僕の首席卒業なんて、入学したその日からフイになってるよ。ガストンが押しかけ親衛隊長に就任した時点で、素行点がとくに最低評価だろ！」

ディリータはラムザの頭に、北方風の毛皮のつば無し帽子をポンと載せた。

「第一、お前みたいな“金髪美少女”を連れ歩いてちゃ、目立ちすぎて諜報活動にならない」

「道理だ」

ラムザは苦笑し、長い黄金色の髪をくるくると丸めて帽子の中に押し込んだ。

「市民の生の声を聞くには、士官学校生の身分は伏せておいた方がいい。僕はいつも、町人の私塾生だということにしてあるんだ。お前もそのつもりで、なるべく余計なことを話さずに僕に調子を合わせてくれ」

「了解！」

ラムザは長剣と短剣は持たず、虹輝鋼の小刀だけ革帯に差して、使い古した地味な外套を羽織った。

ディリータが、表の札を“就寝中”にして扉の掛け金を下ろし、露台に続く非常口の扉を開けてから、部屋の灯りを消す。

「懐かしいな、この緊迫感。ディリータと“夜の冒険”に出掛けるなんて何年振りだっけ……。二人仲良く“布団巻きの刑”に処せられたのも、今となってはいい思い出だな」

幼い頃、ラムザとディリータはしばしば、夜更けてからこっそりと

マンダリア平原に遊びに行ったものだ。

蛍やカブト虫を捕ったり、“流れ星の欠片”を拾おうとしたり。またある時は、満月の夜にだけ入口が見つかるという“竜の墓場”^{ドラゴン}を探したりもした。

「今度はバレないさ。お互いに、ひつつき虫の妹達から解放されてるからな。夜中に布団に潜り込みに来て、『お兄ちゃんがいない！』なんぞと大騒ぎされる恐れはない」

「ははっ、そうだね！」

共犯者達は笑い合って露台^{ベランダ}に出ると、猫のように身軽に、手すりのすぐ側まで枝を伸ばしている木蓮の木に飛び移り、地面に下りた。

「さて、校門を通らないとすると、どこから？」

「第二厩舎の裏の塀に、びっしり蔦が絡みついている。いつもはそこをよじ登るんだが……、今日は二人だ。人目につかない所なら、どこからだって出られるじゃないか」

「ああ、“例の手”を使うのか」

二人は、適当な広さがあり、かつ人の目の届きにくい場所を探した。

「よし、ここにしよう」

ディリータは塀に背を向け、脚を前後に開いて腰を落とし、組んだ両手を前に伸ばす。

「さあ来いっ」

「うん、行くぞッ！」

ラムザは助走をつけて、右足で地面を蹴った。ディリータが両手を高くはね上げるのと呼吸^{タイミンク}を合わせて、左足でディリータの手の平を蹴り、背丈の倍以上の高さもある塀の上に跳び乗った。

ディリータが投げた縄^{ロープ}をつかんでラムザが塀の反対側に飛び下りると、縄^{ロープ}のもう一方の端を握っているディリータが入れ替わりに塀の上に引き上げられる。塀を乗り越えたディリータは、手を離し、受け身を取って着地した。

「ちょっと鈍^{なま}ったかな」

ラムザは小首を傾げた。塀の上の槍飾りに引っ掛けて、袖口にかぎ裂きを作ってしまったのだ。

「名門・ベオルブ家の御曹司がこんな盗賊まがいの技に熟達するもの、いかななものかと思うが……」

「あれれ？ いつも大脱走作戦を計画立案してくれた、名参謀殿がそれを言う？」

ラムザはディリータと肩を組んだ。

「連帯責任だろ。さ、案内してくれよ」

「応」

ディリータはラムザの背中を押して、下町に続く道を歩き始めた。

往来には冷たい、早春の夜風が吹いている。

が、酒場の扉^{ドア}を開けると、調理場の香ばしい熱気と、人いきれとの入り混じった、生暖かい空気が流れてきた。

「お、いらっしやい！ ゆっくりしていきな」

頬に笑い皺のある、恰幅のいい店主が、陽気な声でディリータを迎えた。

既に顔馴染みのようだ。

「あらまあ、お兄さんも隅に置けないわね。可愛い彼女連れてきたじゃないの」

お上さんに冷やかされて、ラムザは頬を赤らめ、むきになって否定した。

「“彼女” じゃありません！ 男ですっ」

給仕をしている三人娘の長女が、ディリータ達の座った席^{オーダー}に注文を取りに来る。

「ふーん、残念ねえ。二人とも格好いいのに、何も男の子同士でくつつかなくたって」

「そ、そういう意味じゃなくて……」

「ふふっ、ごめんね。冗談よ。何になさいます？」

ディリータは壁に掛かった献立表は見ずに、

「とりあえず、羊の串焼き肉を十本と、ふかし芋を一山。それから、
林檎酒シードルを一杯だ」

ラムザは、

「僕には……、蜂蜜入りの温牛乳ホットミルクってありますか？」

「あるわよ。かしこまりました！」

地下水が豊富で、酪農も盛んなガリオンヌ地方では、水分補給の
目的で酒類アルコールを摂取する必要性は薄い。女性や子供は、香草茶ハーブティーか脱脂
乳ルクレをよく飲む。

養蜂は、煤の少ない上等な蠟燭を作るための蜜蝋の採取と、果樹
——主に林檎——の受粉を主目的に行われていた。蜂蜜は副産物の
扱いで、甜菜糖や楓糖メイプルシロップなどよりも安価な甘味料だった。

「髪の長さは関係ないみたいだな」

ふてくされて頬杖をついたラムザの後ろを、槍を担いだ傭兵風の男
が通る。酒瓶の注ぎ口に引っ掛かって、ラムザの帽子が落ちた。

「おっと、ごめんよ、嬢ちゃん」

帽子を拾った男は、ラムザと顔を合わせると目をしばたかせた。

「あれ……、あんた、前に会ったつけ？」

酒場の三人娘の次女が、空いた杯コップを下げる肘で男の背中を小突い
た。

「ちょっとお兄さん、ナンパしても無駄よ。その子、男の子だって」
「そんなんじゃないやねえよ。本当に、どっかで……？」

早くも身元が割れてしまうだろうか、とラムザは身構えた。

男は二十代半ばのようだ。歴戦の傭兵ならば、どこかの戦場で父
や兄達の姿を見る機会もあったろう。

が、男は意外な方向から質問してきた。

「ぼうず、すげえ金髪だなあ。眼も青いのか……呂国人ロマンダかい？」

「僕はガリオンヌの生まれですよ。でも、母は呂国人ロマンダの移民村の出
身でした」

「移民村？どこの？」

「ルグリア村です」

「ルグリア！」

男は手を叩いた。

「それで思い出した！あんた、ファティマさんにそっくりなんだよ。懐かしいなあ！」

「！」

似ているはずである。ラムザの金髪碧眼も、優しい細い顔の輪郭も、母親譲りなのだ。

「ファティマ？ファティマⅡルグリアって、あの“ベスラの聖女”ファティマ様？」

壁際の席で一人で食事していた少年が、振り向いた。

他にも何人かの客が振り向いたが、ラムザの顔を一瞥しただけで、また銘々の食事や会話に戻る。

が、十四、五歳ほどの、体に見合わぬ大剣を背負った少年だけは、ラムザの横まで来て、無遠慮にしげしげと顔を覗き込んだ。

「へーえ、兄ちゃんはこの顔に騙されたのか」

「騙された、って……」

「おいらの兄ちゃんも傭兵でさ。一遍、戦場でファティマ様に傷治してもらってから、えらい熱の上げようだったんだ」

槍使いの男は笑った。

「ははっ、顔に惚れたわけじゃないだろ。そりゃ、顔もすげえ美人だったけどな！」

ゼルテニアをオルタリア鷗国に取られてからの野戦病院なんぞ、“まだ死体になってねえ死体置き場”みてえなもんだったからな……。

医者も足りねえ、薬も足りねえ。水や食い物でさえ、戦える奴が優先で、ろくに回ってこなかった。

深手を負って熱出してる奴が、毛布もなしに床に寝かされて震えてたりな。そのまんま朝には冷たくなっていたり……。

そんな中でも、あの人が来ると、パツとみんなの気持ちが明るくなるのさ。大丈夫だ、生きて帰れるぞ……って希望がわいてくる。のぞみ

不思議なもんだったよ」

「ふーん。聖母様の慈愛の力ってやつ？」

ファティマとは、“神の子”聖アジョラを生んだ地上での母の名である。

「慈愛ってえか……、元気でお茶目な聖母様だったぜ！

働き者でよ。ずっと休まずに手え動かしながら、口では誰か彼か励ましたり、叱ったり、冗談言って笑わせたり」

生前の母の姿が目に見え、ラムザの口許がほころんだ。

「あの、良かったら、もっと話を聞かせてもらえませんか？ファティマさんは地元の有名人ですけど、詳しいことはよく知らなくて」
いいよね、とディリータに目で訊く。

ディリータも目で頷いた。

「おいらも！おいらも聞きたいね」

と、大剣の少年は早速、麦酒エールの杯コップをラムザ達のいる卓子テーブルに移した。

「いいともさ。おいしい、ネエちゃん！皿、こっちに持ってきてくれ」

「はい」

酒場で働くには幼いのではないか、と思われる三女が、薄切りの焼ロき豚ストロークと焼き野菜を山盛りに載せた皿を運んできた。

ませた顔付きをしているが十二、三歳だろう。酔客の騒動トラブルに巻き込まれたらどうするか——とラムザは心配になった。

が、見ると、調理場で忙しく立ち働いている二人の若者も店主の息子達らしい。彼らの丸太のように太い腕が、妹達の安全をガッチリと保証しているようだ。

「ぼうず達も食えよ。遠慮はいらねえ」

「んじゃ、お言葉に甘えて」

とすぐに手を伸ばしたのは、大剣の少年だ。

「それじゃあ、話してやろう……」

「まずは、ぼうず達に質問だ。」

北天騎士団は畏国最強だっって言われてるが、強さの秘訣は何だと思っイヴァリスう？」

ディリータが当たり障りなく答える。

「バルバネス様やザルバツグ様のような、人望のある將軍様方が、優れた統率力を發揮してきたから……というところかな」
リーダーシップ

「兵士の訓練の完成度も高いと聞いています」
と、ラムザ。

「傭兵だって、本当に強い奴しか雇わないんだろ？」
と、大剣の少年が付け加えた。

「おう、そいつあ兄貴の自慢か？」

「小父ちゃんを誉めてんのさ。小父ちゃんも北天騎士団で仕事してたんだろ？」
おい

「まあな。弱いつもりはないが……、だが実を言やあ、全員が全員取り立てて強いってわけじゃねえ。兵士の実力の平均値は、どこ行っただってそんなに変わらないもんさ」

「……？」

大剣の少年は怪訝そうな顔をした。

「強い大将に、強い兵隊。その辺が誰でも考えそうなことだろう。だがな、あっちこっち渡り歩いた中で俺が一番感心したのは……、北天騎士団は他のどの軍団よりも、裏方の質が高いんだ」

「へっ！？」

大剣の少年は間の抜けた声を上げた。

「意外か？ だったら、覚えとけ。戦の勝敗なんてな、おっ始める前の下準備で半分以上決まってるみてえなもんだ。“王様の軍隊どうして負けた……” って童唄、ありゃあ、シャレにならねえ本当の話だぞ」

七王国時代のこと。精強で聞こえたランベリー王国の騎兵団が、ゼルテニア王国に侵攻しようとした。

ところが、ゲルミナス山岳地方を進軍中に、韋駄鳥チヨコボの爪を保護する鉄の付け爪の替えが足りなくなってしまった。土地の肥沃で柔ら

かいランベリーでは、韋駄鳥チヨコボの付け爪は薄くて軽いものが主流だったため、ごつごつした岩場の多いゲルミナス山中では想定外に消耗が早かったのだ。

韋駄鳥チヨコボ達は脚を傷めて疲労してしまい、“無敵”騎兵団は真価を発揮することなく、山道を抜けた所で待ち構えていたゼルテニア軍に大敗を喫した。

「戦が長引いた時ほど、後方支援の有難味がよくわかるぜ。

北天騎士団は、兵糧や水や、薪や、毛布テントやら天幕やといった物資の輸送体制がしっかりしてる。

それを下支えしてる工兵隊も優秀だ。橋に、道路に、防御柵……工事がてきぱき早くて、しかも手抜きがない。

随行する職人、商人も、正式に許可をもらってる連中は誠実だったな。武器防具メンテナンスの修理だの、備品の補充だのも、無料ただか手頃な対価ですぐにできる。

そして、怪我をした時に世話んなる医療班だ。人材・資材とも、どこよりも充実してたな」

「ふーん？それって、ラーグ公とベオルブ伯がお金持ちだからってことじゃん？いい人材スタッフを雇ったり、上等な物を買付けたりする資金が豊富だったってことだろ」

ガリオンヌ領は、五十年戦争の全期間を通して、一度も他国の侵略を受けていない。盗賊団の増加や、成人男子の人手不足の影響はあるものの、全国平均と比べると農業生産量の減少幅は小さかった方だ。

ゼルテニアとランベリーはオルダリア鷗国の、フォボハムはロマンダ呂国の、ライオネルは東方の海洋民族達の略奪に、それぞれ曝されている。

「それもあるが、ここの使い方が違うのさ」

と、槍使いの男は頭を指差した。

「前置きが長くなったな。

俺が初めてファティマさんの名前を知ったのは、畏国軍が是領を放棄した頃だから……今から八年ぐらい前になるか。

国境近くの砦を包囲してた時のことだ。さしもの北天騎士団も、食糧事情が悪くなってきててな。量だけは充分なんだが、毎日毎日、変わりばえもしねえ豆粥ばかり続いてた。

冬場でな……、知ってるか？長いこと青菜や果物をまるきり食わねえと、だんだん疲れやすくなって、傷の治りも悪くなるんだ」

ディリータが合いの手を入れる。

「壊血病……といったか。遠洋航海の船乗りが罹りやすい病気だそうだな。血管や骨が脆くなって、終いには歯がグラグラになって抜けてしまったりもするとか……」

「よく知ってるじゃねえか。俺らもそれが心配になった。陣地の近くで採れる山菜なんかを粥に混ぜてたんだが、それもすぐに採り尽くしちゃってな。」

ところがだ。味方に疲れが見え始めたある日、粥に入ってる豆に、ひよろひよろ根っこが生えてるじゃねえか。何だこりや、兵糧が傷んだのかと思ったら、わざと芽を出させたって話なんだな。豆萌芽しフアティマすると、青菜みてえな栄養が出来るんだと。

聖母様の知恵だフアティマっていうんで、天使のお告げでもあったのかいて訊いたら、違う、腕利きの医者フアティマの女先生さ、ってな。

半信半疑だったが、食うと少し元気が戻ったような気もした。

どうやら本当だったらしい、とわかったのは、降伏した敵さんの陣地に入った時さ。

結局、砦の中の連中は栄養失調で足腰立たなくなっちゃってな。

一戦も交えねえで白旗上げたんだ。

兵糧の中身は、俺らとそんなに変わらなかったみてえだ。ただ敵さんは、城内の青物は雑草から木の芽まで食い尽くしてたんだが、倉庫に豆だけはまだ山積みにしてた。萌芽しを作ろうって知恵者はいなかったんだな」

「へえーえ……萌芽しが勝負を決めたのか」と、大剣の少年は感心する。

「それ一回限りじゃないぜ。他にも、北天騎士団で仕事してると、

時々けつたいなもんが支給されたよ。妙な味のする香草茶ハーブティーだの雑炊だの、寄生虫下しの薬むしだの……。材料は必ずしも高価なもんじゃねえ。どっちかつつと、こんなもんが食えるのか、薬になるのか……って思うような、その辺にいくらでも生えてる雑草だったりするんだぜ。

それが、面白えようにピタピタと効いてなあ。敵さんや他所の軍団が、病気や栄養失調で落伍者をぼろぼろ出してる時でも、俺らはいい体調で働けるんだ。コンディション

わかるか？十の力を持っても三か四ぐらいしか出せねえのよりは、七の力のうち五か六ぐらい出せる方が勝つ。

北天騎士団にや大した“勝利の女神”がついてる……って、評判になったもんさ」

槍使いの男は果実酒の杯コップを傾けながら、我がことのように自慢げに語った。

ラムザは鼻が高かったが、母の功績が過大評価されるのは面映ゆかった。

「軍師のダイスダーク様も医学に精通していらっしゃるそうですね。北天騎士団全体に、衛生管理を軽視しない意識が浸透しているのでしょう」

ダイスダークの名を聞くと、男は少し顔をしかめた。

「あのお方が詳しいのは、薬よりや毒の方さ」

ベオルブ家の長兄は謀略家と思われており、末端の兵士達には好かれていないようなのだ。

デイリータが、表情は変えずに、卓子テーブルの下でラムザの膝をそっと叩いた。

余計な口を挟むな、という意味だろう。

ラムザは聞き役に徹して、丁度運ばれてきた食事に取りかかることにした。

「あ、追加で、僕にもこれと同じ焼き豚ローストポークと温野菜ホットサラダ一皿お願いします」
「何だい？一緒に食べばいいのに、水くせえな」

「いや、僕こう見えて、人一倍食べるんで……」

槍使いの男はトンと胸を叩いて、話に戻った。

「……頭つつうよりも、こっちの問題かもしれねえ。」

北天騎士団には、前例だの形式だのにこだわらずに、役に立つもんはどんどん取り入れようって気風があるんだ。

ファティマさんだけの話じゃねえ。例えば工兵隊でもな、紗国戦争ペシヤの時に東国で吸収した技術を、真っ先に本国で応用したのも、北天騎士団だったんだぜ。

名案や能力があれば、女でも外国人でも、年寄りでも若造でも、大事な仕事を任される。

人のやる気を引き出すのは、必ずしも高い給金とは限らんさ。

”男は己を知る者のために死す”っていうじゃねえか。剣士だけじゃないぜ。工兵や職人だって、自分の仕事を高く評価して信用してもらえりゃ、もっともって努力していい仕事をしてやろうって気になる。

……北天騎士団の強味はそういうところにあるんだろうと、俺は思うぜ」

大剣の少年が先を促した。

「ねえねえ、話ってそんだけ？ファティマ様本人に会ったことってないの？」

「おい、おい。会ったことなけりゃ、顔を知ってるわけがないだろう？」

槍使いの男は左腕をまくった。

「見てくれよ。ファティマさんに治してもらった傷だ」

稲妻形の、青黒い古傷の跡がある。

「こいつのおかげで”紫電”ライトニングなんて呼び名が付いちゃったが……。刺青じゃないんだぜ。」

敵さんの棘付き棍棒にやられた所に、下手な白魔道士がいい加減に”回復魔法”ケアルかけてくれやがって。どえらいことになったのさ。

壊れた鎖帷子の破片とか、包帯代わりに巻いた青い軍旗の切れっ端とかが中に入ったまんま、骨も折れたまんまで、傷口が塞がっちゃまって。膿が溜まってパンパンに腫れて、痛みで夜も眠れなかった。仲間は、腐毒が体中に回る前に切り落とすよりはマシか……って諦めかけてた。勧めるんだな。俺も、命落とすよりはマシか……って諦めかけてた。そこに金髪の美人の女医さんが来て、今痛み止めが全然無いけども、それでも良かったら手術するって言うんだ。もう一遍傷口開いて、異物全部出して、消毒して骨接いでくっつけ直すって。

『大丈夫よ。剣士おとしでしょ。我慢できるわね』なーんて、棘一本抜くぐれえの気軽な調子でポンと背中叩くから、つかうかとその気にさせられちゃまって……。

ムツチャクチャ痛かったぜ。でもな、何もかも終わったら、『よく頑張ったわ。強いわねえ』って、母ちゃんみてえに頭撫でて、ニコツと笑ってくれてな。そしたら、スーッと体中楽になったよ。

後は勿論、この通り！」

と、男は左腕を回した。

「すっかり元通りに戻って、こうして今も傭兵稼業しょうばい続けられる。

次の日になってから、あれがファティマさんだって聞かされてよ。以来俺も”信者”の仲間入りさ。

奥方を亡くしたバルバネス將軍が隠し女房にして、他の再婚話を一切受け付けなかった……ってのも、よくわかるぜ。

ただの器量好しじゃねえんだ。あの人の知恵と活動力バイタリティーは、千人の軍隊に匹敵するぐらいの戦力にゃなってたな！」

大剣の少年は、ディリータとラムザの皿からも勝手に串焼き肉と粉吹き芋をつまみながら、相槌を打つ。

「ふーん……。でもさ、そんなすごい人だったらバルバネス様も、隠してないでちゃんとした奥方にしてあげれば良かったのにな。

そしたらファティマ様、ベスラで死ななくて済んだんじゃないかなあ」

「……」

その話題になると、ラムザは今も胸が痛む。

「さあ、どうだろうな。ファティマさんの性格じゃ、たとえ伯爵夫人になってたって、前線で怪我人看続けたんじゃねえかな。

バルバネス様だって、正妻だろうが妾だろうが、自分の女房の身代金だけ払って助けるわけにやいかなかったろ。ベスラには何千つて捕虜が残されてたんだから……」

その時ラムザ達の後ろで、タン、と杯を卓子に打ちつける音がした。

「はん！バルバネス様じゃないよ。ほんつとのあんぽんたんのストコドッコイ野郎は、国王陛下さ！」

ラムザ達ばかりか、周りの客達までギョツと驚いて注目した。

角の席で一人で飲んでいた女は、^{ライトニング}“紫電”と同じく二十代半ばほど。左目の下に涙黒子がある。赤い髪が映える黒い帽子と黒外套^{マント}、丈の短い上着に股引^{タイツ}、革の長靴という出で立ちは、流れ者の魔道士らしい。

「何だい？口に出して言わないだけで、みーんなそう思ってるだろ。」

王様だのお貴族様だのの身勝手は今に始まったことじゃないけどねえ。ベスラの戦の顛末を初めて聞いた時にゃ、あたいは涙が出たよ。腹が立って腹が立って……ファティマさんとバルバネス様がお気の毒でねえ」

槍使いの^{ライトニング}“紫電”は大きく頷いた。

「俺もだよ、姐さん。」

俺達傭兵は金のために戦うもんだが。あの時ばかりは、ビタ※一文^{ガメル}（※一ガメル＝百分の一ギル・十三世紀当時）ももらえなくても、命落としてでも、ファティマさんを助けられたらと思ったよ」

ベスラ要塞は、ランベリー領とルザリア領の境界に位置する、軍事上の要所である。四年前の聖歴一二〇五年、五十年戦争中最大の激戦地の一つとなった。

ベスラ要塞を奪われれば、オルダリア 鷗国軍に占領されたランベリー領を取り戻す拠点を失うのみならず、王都ルザリアさえ風前の灯火だ。

雲霞のごとく押し寄せるオルダリア 鷗国の主力軍に対し、ベスラの守備隊は善戦した。”銀の貴公子”メスドラーマⅡエルムドア侯爵率いる東天騎士団と、北天騎士団も再三に渡る攻撃を加えたが、包囲軍は撤退しなかった。

オルダリア 鷗国軍を指揮するラナード王子も、ベスラ要塞の重要性を熟知していたのだ。

エルムドア侯は遂に、オムドリア？世王の親征を請うた。

オムドリア？世王は病弱のため、ルーヴェリア王妃が総大将に立ち、実質の総司令官は王妃の実兄・ラーグ公が務める見込みだった。ところが、王妃とラーグ公の専横を恐れた元老院が、王族のクロード伯を強く推した。

文人肌のクロード伯は、前線に来て損害の甚大さに肝を潰した。ベスラ要塞を放棄してゼイレクレ川を防衛線とすべきである——と王に進言し、軍事に疎い王はこれを認めた。

「ふざけた話だぜ。それまで何のために何千人も死人を出しながらベスラを守ってきたんだか、まるでわかってやがらねえ。

將軍様方から下っ端の兵士までみんな、冗談じゃねえって思った。クロード伯が臆病風に吹かれて帰るってんなら、一人で帰りやがれ。俺達は戦い続ける、ってな。

けど王様の命令じゃ逆らえねえ。ぼろくそに追撃されながらゼイレクレ川まで退いたぜ」

イヴァリース 悲劇は畏国軍の最後尾で起きた。

合図の鐘の音もなく、突如として、要塞の裏手にある人造湖の水門が開いたのだ。

増水したセベレス川はオルダリア 鷗国軍の先鋒隊と、それ以上に多くの畏国軍の後軍の人間達、軍鳥達を飲み込んだ。

何故水門が開いたのか——意図的なものだとすれば誰が命じ誰が実行したのか、聖歴十七世紀現在では明らかでない。

王室編纂の正史では、水門はオルダリーア鷗国軍の投石機の流れ弾が当たって決壊したことになる。が、当時の投石機の飛距離と破壊力から考えると信憑性は薄い。

民間伝承ではここでもクロード伯が犯人に仕立てられているが、これも現実味に乏しい。

クロード伯の軍はベスラ要塞から最も遠い場所に布陣しており、わざわざ退却の流れに逆行して開門のための兵を差し向けるのは無理がある。かといって、守備隊の将兵は皆ランベリー領の人間であり、クロード伯の命令に従う義務も義理もない。

最も有力な説は、ベスラ要塞の守備隊が自らの判断で開門したというものだ。中世史研究家のアラズラム・J・D氏も近著『ベスラ戦史』七王国統一から教皇捕囚まで』の中で詳述されている。

守備隊長はエルムドア侯の臣下だったため、東天騎士団の安全を最優先して、他の友軍の被害を顧みなかった、ともいう。あるいは、オルダリーア鷗国軍の攻撃に耐えきれなくなり、開門を遅らせたくとも如何ともし難かった、ともいう。開門した時には既に鐘楼は焼け落ちていた、という証言もある。

いずれにせよ、輸送隊、工兵隊、傷病兵とそれを看護する医療班、付近の農村からの避難民など、数千人にのぼる非戦闘員達が、溺死したり要塞側の岸に取り残されたりした。

「仕方ねえっちゃあ仕方ねえんだがな……。確実に追撃を断ち切れるし、水門を落とすとかないけりや、逆にオルダリーア鷗国軍に後で水攻めに使われるかもしれねえ。

せめてもう※一刻（※約三〇分）待ってくれりや、敵味方の損害数は逆転してたと思うぜ。だが、味方に見捨てられた格好になった守備隊に、もっと踏ん張れってのは酷だろう。

殿軍は平民の義勇兵団で、文字通り死力を尽くして戦い抜いたらしい。それでも、多勢に無勢、※半時（※約一時間）ともたずに全滅したそうだ。

逃げ場も身を守るものも無くした連中に、オルダリーア鷗国兵は容赦ない虐殺

と略奪を働いた……」

ラムザは傭兵の男の話にいたたまれなくなり、視線を逸らした。その隙に大剣の少年はさり気なくラムザの皿に手を伸ばしたが、「あれっ？」

後から注文したというのに、あっという間に野菜の切れ端一つ残っていない。

「兄ちゃん、見上げた食いっぷりだね。もしドーターに行くことあったらさ、”くだおれ亭”に寄ってみなよ。名物”お好み焼き大食い”、兄ちゃんなら新記録出せるぜ！」

「ちよいと、真面目な話の腰を折るんじゃないよ」

ラムザ達の卓子に移ってきた女魔道士は、これまた勝手につまみの干果物を取ろうとした大剣の少年の手を、ぴしゃりと叩いた。

「ごめんごめん。あんまり愉快な話じゃないんだもん。その先はおいとも耳タコさ。でも、一応聞いとうかな。兄ちゃんの最期のことで、何か新しくわかるかもしれないし」

傭兵の男、”紫電”は続けた。

「やっとの思いでゼイレキレ川の後ろに布陣し直した俺達の所に、王都から急使が来た。

矢っ張りベスラを死守せよ、ってな。

ラーグ公が王様にベスラ要塞の大事さを納得させて、総大将に就くことになったんだ。王都の北側でドグーラ峠を守ってたゴルターナ公も、この時ばかりは政敵の肩を持つたらしいな。

けど、遅えってんだよ。俺達や将棋の駒じゃねえ。間違えました、はいやり直し……なんてえ間にも、千単位で命が消えてるんだ。

それでも実際、ゼイレキレ川の岸に長々と陣を敷くのは得策じゃない。どうにか鷗国軍を押し返して、ベスラの駐屯部隊を孤立させることに成功した」

鷗国軍は、なまじ大軍であるだけに補給事情が悪く、疲弊していた。

ランベリー地方の穀倉地帯を占領したものの、不作の上に抵抗軍

や盗賊団が頻繁に出没して、兵糧が思うように集まらなかったのだ。加えて、ベスラを攻め落とした時の私略の不公平や、要塞の管理権を巡って内輪もめを起こし、諸將の足並みが乱れていた。

イヴァリース
対する畏国軍は、祖国存亡の危機感から、上下心を一つに団結していた。数の上ではやや劣勢ながらも、有利な戦いを展開できたのだった。

「城方が飢えるのを待って、城攻めが始まった。ラーグ公の騎士団の大部分は、平野でラナード王子の本隊と戦った……、北天騎士団のバルバネス將軍とダイスダーグ將軍も含めてな。城攻めの方の大將はエルムドア侯とザルバッグ將軍だ。ベスラ要塞を包囲した俺達は、信じがたいもんを目にした……」

要塞側の將軍は苦し紛れに、捕虜達をずらりと城壁の上に並べて盾代わりにした。

ベスラ守備隊のランベリー兵達、農民達。皆幽霊のようにやせ細り、生気のない顔をしていた。

城門の真上、最も目に付く所に立たされたのが、ラムザの母・フアティマだった。

待機か？総攻撃か？……兵士達は固唾を飲み、しんと静まり返って号令を待った。

その沈黙を破ったのはフアティマの声だ。

『北天騎士団に栄光あれ！祖国畏国の自由を勝ち取られんことを！』
と叫ぶなり、自ら城壁から身を投げたのだ。

イヴァリース
畏国軍は奮い立った。

『撃て！！』と号令が飛び、投石機と弓矢が一斉に唸った。

捕虜達にも、燃え尽きる前の蝋燭のように、なけなしの勇氣と力が湧き上がった。オルダリーア 鷗国兵に体当たりし、武器を奪って戦おうとする者もいれば、敵を道連れに城壁から飛び降りる者もいた。

騎士も、歩兵も、傭兵も、雄叫びを上げて城壁に殺到した。たちまち要塞の麓に死体が折り重なり、しまいには梯子が無くとも城壁に登れた……というのは、流石に話に尾ひれが付いているだろうが。

城内に入り込んだ決死隊の手で城門が開かれると、すかさずザルバッグ率いる精鋭達が突入した。先頭切って縦横に剣を振るうザルバッグは鬼神の如くで、オルダリーフ鷗国兵は見る見るうちに道を空け、白旗を掲げ始めた。

やがて、それら降伏の白旗に代わり、イヴァリース畏国の双頭獅子紋旗が次々と打ち立てられた。本丸の頂上にまで畏国の国旗が翻るのを見るや、オルダリーフ押され気味だった平野の鷗国軍も本格的に退却に転じた。

バルバネスの軍が猛追し、一時はラナード王子の軍鳥を射倒すところまで肉迫したようだ。イヴァリースが、惜しくも日が暮れて逃げ切られた。

戦績は、死傷者数では畏国軍の方が多かったものの、戦果では大勝だ。国王は特にザルバッグの戦功を讃え、聖騎士の称号を賜った。

「……っていったって、本当の功労者の第一等はファティマさんさね。それにそもそも、陛下が最初にクロード伯みたいなボンクラを送って寄越さなけりや、攻城戦なんてしなくて済んだんだ。

ベスラで散った兵隊さん、お百姓さん達……犬死にさ。浮かばれないよ」

女魔道士は溜め息を吐く。

ディリータは、串焼き肉の最後の一本を大剣の少年に譲って、首を振る。

「そうでもないさ。元々は必要のない戦だったが、大局的には、ベスラの戦いのおかげで畏国軍は勢力を盛り返したんだ。イヴァリース

騎士団の武勇と、ファティマさん達捕虜の献身が国民を感動させて、それまで以上に義勇兵が集まるようになった。”風神”バルバネス將軍や、”銀髪鬼”エルムドア侯の戦ぶりがラナード王子の心胆を寒からしめて、後々の講和に結び付いたとも言える。

彼らの尊い犠牲が、確実に、イヴァリース畏国の独立を守る礎になったんだ……」

ラムザは俯いて、そつと鼻をすすった。気付かれないようにしたつもりだったが、傭兵の”ライトニング紫電”は目ざとく見ていた。

「ぼうずも泣いてくれるか。涙無くして聞けない話だろう、なあ」と肩を叩き、ラムザの杯コップになみなみと果実酒を注ぐ。

「あの……」

ラムザは辞退しようとしたが、デイリータが

（もらっておけ）

と目配せして、自分の杯コップにも酒を受けた。

「聖母様に乾杯だ！」

”紫電”が音頭を取り、たまたま集まった五人の男女は杯を掲げた。

（デイリータは飲み慣れてるのか？ 存外、ガストン並みの不良かもな……）

少し舐めてみただけで、かなり強い酒だとわかる。

士官学校アカデミーの食堂で用意される飲み物は、脱脂乳バターミルクや混合果汁ミックスジュース、酒精度数の低い麦酒エール、林檎酒シードル等で、祭日や特別な行事の時だけ葡萄酒ワインが出る程度だ。

ラムザは、蒸留酒はほとんど飲んだことがない。

「ファティマ様、可哀想だよね。結局、死んだ後もベオルブ家のお墓に入れてもらえなかったんでしょ」

ファティマの自己犠牲は大衆の知るところとなり、”ベスラの聖女”ともてはやされた。

騎士達は初めのうちこそ、この”美談”がベスラでの彼らの武勇譚に華を添えると考え、積極的に語り伝えた。

ところが、ファティマの名は彼らの予想を超えて大きくなり始めた。墓所が決まれば巡礼者が詰めかけそうな勢いだった。

騎士達はやがて、一婦人の献身が彼ら自身の武功よりも人口に膾炙することに、不満と危機感を募らせた。彼らは一転して、彼女の”自殺”は神に対する背信行為であり、グレバドス教徒としての埋葬はまかりならぬ——等と主張し出した。公的な場では黙殺し、私的な場では、バルバネスとの関係を皮切りに、有ること無いこと誹謗中傷した。

もつとも、騎士達がファティマを貶めようとすればするほど、下

級の兵士や傭兵達は彼女に同情を深め、かえって熱心な”隠れ信者”になったものだが。

「でもねえ、その埋め合わせってわけじゃないけど、ファティマさんの二人のお子さん達は、ちゃんとベオルブ家で育てられてるってねえ。当主のダイスダーグ様にこの先もお子さんが出来なけりゃ、いずれ正式に養子縁組するんじゃないかって話だよ」

「えっ？ファティマ様って子持ちだったの！？」

大剣の少年には初耳だったようだ。

「そうだよ。年子の男の子と女の子だってさ。その男の子の方が、今この街の士官学校アカデミーにいるっていうじゃないか。そんな噂を聞いてないかい？」

ラムザはむせて咳き込んだ。

「うゝっ……、げほごほっ！」

「あら坊や、大丈夫かい？それ、酒神果蒸留酒バツカスリキュールだろ。口当たりがいけど、結構強いんだからね。ゆっくり飲みなよ」

「はあ、どうも……それで、噂ってどんな？」

ラムザは恐る恐る尋ねた。

「それが何だか、取り留めがなくなっただけ。」

女みたいに綺麗な、優しい子だっても聞くんし。かと思えば、目付きの悪いお兄ちゃん達を束ねてる、不良の首領ドンだっても聞くんし……」

つまみの乾酪チーズを運んできた、酒場の三女が、うずうずした様子で話し掛けてきた。

「ベオルブ家の三の若君、ラムザ様でしょ。あたし、見たことあるよ。颯爽と白韋駄鳥チヨコボを走らせてるところ！」

ドキドキ……。

ラムザは不自然でない程度に顔をそむけた。

「銀髪で、キツと目が吊り上がっててね。んー、格好いいって言えなくもないけど、野性的ワイルドっていうか……ちよつと怖くて近寄りがたい雰囲気だったなあ」

（それは多分、ガストンだな……）

ラムザは時々、自分の軍鳥・”銀竜”^{シルドラ}をガストンに貸していた。

二女が手を止めて振り返る。

「あら？胡桃色^{くるみ}の巻き毛の子じゃなかった？とってもお洒落で上品なんだけど、韋駄鳥^{チヨコボ}の乗り方はへっぴり腰だったわね。魔獣^{モンスター}や悪党を相手にするより、女の子のお相手をする方が得意そうに見えたわ」
(それはセヴィだ……)

長女も立ち止まった。

「変ねえ。あたしが『あの子だよ』って教えられた子は、黒髪だったわ。遠目にちらっと見たんだけど、知的な風貌で、運動神経も悪くなさそうだったわよ。ずっと昔に見たクレティアン様とどこことなく似てて、比べられるのもわかる気がしたんだけど？」

(それはディリータ！)

クレティアンⅡドロワは、ラムザ達より八期上の卒業生だ。在学中、全科目試験全回首席、当然首席卒業という、士官学校^{アカデミー}の”伝説の卒業生”の一人である。

「「よくわからないわねえ……？」」

三人娘は揃って首を傾げた。

「おい、こっちに麦酒^{エール}一つ！」

「あ、はい、ただ今」

^{ウェイトレス}給仕達はそれぞれの持ち場に戻る。

ラムザはホッと胸を撫で下ろした。

「親しい友人達が”影武者”の役を果たし、素顔はあまり知られていないようだ。」

^{ライトニング}”紫電”がニヤリと笑う。

「ベオルブの末の御曹司の噂なら、俺の耳にも入ってるぜ。」

とんだヤンチャ坊主で、お堅い家長のダイスダーク様の眉をひそめさせてる、とか……。

だが、次男のザルバツグ様のご気性には合うらしいな。手を焼きながらも、大層可愛がってらっしゃるそうじゃないか。

ま……、そう聞きゃあ、姿形はどうか知らないが、なかなか小気

味のいい兄ちゃんなんだろうって想像はつく」

貰ったからには飲まなければならぬような気がして、ラムザは無理に飲み干したのに、”紫電”^{ライトニング}はもう一杯酒を注いだ。

大剣の少年は身を乗り出した。

「へえー、面白そうじゃん。どうせならおいら、そのラムザ様の下で働きたいなあ」

こちらは勝手に酒瓶を取って自分の杯に^{コップ}注ぎ足し、景気よくあおる。酔ってきたのか、声が弾んでいる。

「本当はさ、バルバネス様かウィーグラフ様のところで仕事ができたらなって思ってたんだ。でも、おいらが出稼ぎに出始めた頃には、バルバネス様は病気で引退しちゃってさ。すぐに戦が終わって、ウィーグラフ様は”逆賊”になっちゃまし。

一時期は、いっそ骸旅団に入ろうかな、っても思ってたんだけど……」

ラムザは驚いて、大剣の少年の顔を見た。

「えっ!? じゃあ、一步間違えば、今日死んでたかもしれないじゃないか!」

この図々しいが屈託のない少年と、命の取り合いをすることもあり得たのか。

「まっ、おいらの腕なら、士官学校^{アカデミー}の坊々どもなんかにゃ負けないけどね!」

と、少年は自信たっぷりだ。

「それじゃ、結局入団しなかったのはどうして?」

「ん。骸旅団に荒らされた村を見たんだ。

あくどい貴族しか襲わないって聞いてたのに……。確かに、領主の屋敷が一番ひどくやられてたよ。でも、周りの農家からも、家畜とか若いネエちゃんとか、手当たり次第に持ってたみたいなんだ。教会の銀の燭台とか、アジョラ様の像まで盗んでったんだぜ。

なーんだ、ただの強盗じゃん。正義の革命軍のすることじゃない

や、って思っ

「それ、やったのウィーグラフさんじゃないと思うよ。副団長のギュスタヴじゃないかねえ」
と、女魔道士は言う。

「ギュスタヴってのは、残酷な振る舞いが目に余って、騎士の位を剥奪されたって男さ。

敵に降伏を呼び掛けておいて、皆殺しにしたり。軍隊とは無関係の村を略奪して、焼き払ったりとか……。女にも手が早くってね。

ただ、組織運営の才能みたいなのはあるんだ。小さな盗賊団や博徒の集まりを次々抱き込んで、骸旅団を大きくしたんだよ。

騎士団時代から仲が悪かったのに、縁が切れないっていうのは、ウィーグラフさんも部下に恵まれてないのかねえ……。

ミルフィだっけ、ミランダだっけ？あの人の妹さんも結構な女丈夫で、切り盛りが上手かったはずだけど。一人じゃ兄さんを支えきれないかねえ」

ライトニング
”紫電”がふむふむと頷いた。

「反乱軍の宿命だな。ある程度の大軍団に成長すると、食い詰め者どもがわらわら群がってくる。雪だるま式に人数が膨れ上がって、統制が利かなくなり易いんだ。

手段を選び好みしていると、子分どもを食わせていけなくなって、内部分裂が始まっちゃったりしてな」

「だけどウィーグラフさん自身は、今でも潔い人だよ。

あたいは、ウィーグラフさんが直接指揮を執ったって襲撃事件の跡を見たよ。

貴族じゃなくて、教会の領地だったんだけどね。その司祭ってのは、黒死病ペストでお坊様不足になった時に、食い扶持にありつきたくて俄入道した手合いでさ。ろくに経文も読めなくせに酒好き女好きで、がめつくて、散々村人をこき使ってたらしいんだ。

ウィーグラフさんはエセ坊主と、坊主が雇ったゴロツキどもだけ倒して、嫌々番をさせられてた村人は一人も殺さなかったってさ。

それどころか、没収した坊主の私財を村の人達と分け合ったそうだよ。勿論、元から教会にあった物には一切手を付けずにね。――義賊の心意気じゃないか。

騎士団の連中は骸旅団の悪い話ばかりあげつらうけどさ、それだけが全部ってわけじゃないさね」

大剣の少年は瞳を輝かせた。

「そっか！おいら、骸旅団に入ろうとは思わないよ。でも、少なくとも、ウィーグラフ様とは矢張り戦いたくないや」

槍使いの”紫電”は苦笑する。

「俺だって御免だぜ。思想信条は抜きにしてもな。……あの人は、鬼のように強い」

「あれ？小父ちゃん、臆病宣言かい？」

”紫電”は少年の頭にポンと手を置いた。

「勇気と無茶とは別モンだ。生き延びるには、自分の力量をわきまえとくこったぜ」

ラムザはゴクリと唾を飲んだ。

「会ったことがあるんですか？」

「ああ。先の大戦中に、友軍としてな。

俺の所属する傭兵隊の陣形がバラバラに崩れて、今にも全滅するか……ってところへ、骸騎士団が敵軍の横っ腹から突っ込んできたんだ。

一瞬で形勢逆転したぜ。

”無人の野を行く如く”だの、”麦を刈り取るように”だのって表現がピッタリだった。

右に左に、一太刀毎に一人ずつ叩っ斬ってくんだ。韋駄鳥にぶっ飛ばされた奴は命冥加さ。怪力なんだか技なんだか、鉄兜を乳酪みたいなにサクリかち割っちまうんだぜ。

敵の隊長が歩兵達の後ろで呆氣に取られてると、ウィーグラフさんは※二十歩（※ 十二メートル）以上も離れた所から、気合い一声、そいつに向かって剣を振るった。地面から青い火柱が吹き上が

ったみてえに見えたと思ったら、隊長殿は韋駄鳥チヨコボもろともポックリあの世行きさ。……音に聞く”聖剣技”ってやつだ。

味方ながら寒気がしたぜ。この人だけは敵に回したくねえ、と思ったよ。

あれより強いのだと思ったら、俺がこの目で見た中じゃ、ザルバツグ將軍ぐらいなもんだ」

ディリータが質問を投げかける。

「万が一、どうしても戦うとすれば？」

「そうさな……。まず、絶対に一対一さしじゃ闘やらねえ。何人かで示し合わせて、味方がどんだけ倒れようが、相討ち覚悟で絶え間なく攻撃し続けるんだな。防御まもりなんざ考えたら、確実に死ぬ。

弓や魔法で遠くから袋叩ふくろきにするのは無理だぜ。今言った”聖剣技”があるからな。

”聖剣技”ってのは、闘気を直接相手の体に叩き込む剣法だ。避けることもできねえし、盾でも鎧でも防げねえ。射程距離が長い上に、広い範囲をまとめて攻撃も出来る。おまけに、当たり所が悪けりゃ一発で全身が麻痺したり即死したりもする……。って超絶必殺技さ。

唯一勝ち目があるとすれば、剣を壊しちまえば”聖剣技”は使えねえってあたりか？

だが、あの人は普通の剣技も特級品だ。懷に飛び込めば強烈な反撃シターの餌食になるだろう。俺なら槍で、何とか剣の間合いの外から狙ってみるが……。その前に、逆にこっちの武器えものを叩き折られちまうかもな。

とにかく、隙なんてもんがねえよ」

「……」

女魔道士が首を振る。

「……あの人を”逆賊”にしちまったのは、ダイスダーグ様の失策だね」

”紫電”が答える。

「ああ……。先代のバルバネス様には、義勇兵達の戦後の処遇についてもお考えがあったらしい。帰る場所の無え連中が山といる一方で、人手のかかる復興事業もごまんとあるんだからな。

だが、終戦間際にバルバネス様が亡くなると、跡を継いだダイスダーグ様はそういう計画を一切白紙撤回しちゃった。

その結果が今の有様だ……。盗賊の被害に遭った農民、商人。盗賊になった元義勇兵。それに、騎士団の騎士、兵士。何千人死人を出したろうな。ますます人手不足がひどくなって、畑の作柄は悪くなるわ、道路や橋の修理は進まねえわ……。義勇兵を屯田兵や工事の人足として雇い続けてた方が、よっぽど安上がりだったはずだぜ。ラーグ公の知恵袋だっていうが、その程度の計算がわからなかったもんなかな」

「……それは、」

ラムザは長兄を弁護しようとしたが、ディリータがまた、目で止めた。

「あたいはね、お貴族様は嫌いだけど、バルバネス様だけは尊敬してたんだ。

みんなが暮らしやすい国造りを目指して、むらのもん農民、まちのもん商人職人、イヴァリース移民や異教徒の声にまで耳を傾けてらした。そんな領主様が、今の畏国イヴァリースに何人いるだろうねえ。

先だって王様が、オリナス王子様のお誕生会の席で倒れっちゃったろ？ラーグ公とゴルターナ公はもう、禿鷹モンスターみたいに王子様の後見人の椅子を取り合ってるよ。領民が飢えや魔獣にバタバタ薙ぎ倒されてるのをほったらかしてさ。王様はまだまだ、今日明日危ないってご病状じゃないのにねえ。

大戦が終わって少しはマシになるかと思ったら、ますます嫌な世の中になっちゃったよ。かといって骸旅団も、天下を取るほどの器じゃなかったみたいだし……」

女魔道士は溜め息を吐く。

「ラムザ様がいるじゃん」

と、大剣の少年が言った。

「さっき話に出てきた、そのラムザ様が、次のドラコニア伯爵様になればさ。きっとバルバネス様と同じか、それ以上に、おいら達のこと考えてくれるお殿様になるよ。」

だって、ファティマ様の子供ってことはさ……、体を流れる血の半分は、おいら達とおんなじ平民だもんね」

(……、……)

ライトニング
”紫電”が頷く。

「そう……だと願いたいぜ」

ドキドキ、ドキ……。

(うわー、僕、期待されちゃってるよ……。頑張らなくちゃ)
ラムザは杯に残っていた果実酒を、ぐっと一息に喉に流し込んだ。
ふーっと、目眩がする。

(あれ？あれ、れ……)

ドキドキ、ドキドキ……。

動悸が激しいのは、緊張感のせいではなかったようだ。

「ちよつと坊や、顔が真っ青じゃないか。酒が苦手なら、断つていいんだよ？自分の体なんだからね？」

「あ……いえ、大、じょうぶ……」

と、言いかけたところで目の前の光景が渦を巻き始め、ラムザはふらりとディリータの肩にもたれかかった。

「おい？しっかりしろ！おい……」

耳元で呼び掛けるディリータの声と、酒場の喧噪とが混じり合い、潮騒のような意味のわからぬ響きとなって、遠ざかってゆく……。

？―1―〔3〕 下町の酒場（後書き）

アラズラム先生、ごめんなさい。

「時代考証に基づいた迫真性」は追求してないです……。 「現代的感觉のままですんなり物語に入り込めるような、親しみやすさ」重視のつもりです。

例えば、2節のマルガリータの「デイリータを帳面代わりにして……」という台詞。羊皮紙や紙は貴重品ですから、本当は、授業風景は「帳面に羽根筆」じゃなくて、「石版に石墨」か、「蠟板に金属の筆」では……？でも、それじゃこのネタが使えない……。

士官学校の規律だってもっと厳しいと思います、無断外出は難しいと思います。寝る前に点呼ぐらい取るだろう！でも、「特別じゃない、どこにでもいる、ちよつと悪戯好きの高校二年生」ぐらいの雰囲気が出るようにと、割り切っちゃってます。

同様に、酒場でも。伝票書いたりできないでしょうから、本当は注文の度にお客さんの方が勘定場で先払いする方式だと思います。それだと会話が中断しちゃうなー、というだけの都合で、給仕さんが注文取りに來てます。

食事の種類だって多くないだろうし……。三食おやつ付きどころか、一日二食ぐらいだろうし……。じゃが芋や赤茄子など新大陸産の食べ物の中世風世界には馴染まないかも、とか……。でも、もう開き直って、食いしん坊ラムザ君は今後も、三食におやつに、午前のお茶にお夜食にと、いろんな美味しい物を食べまくります！（って、ホビットかい！）

？－1－〔4〕 追憶く父の遺言く

——ラムザ。ラムザ……！

ディリータが遠くで呼んでいる。

（うん……？僕、どこにいるんだっけ？）

足元に枯れ野、頭上には碧い晩秋の空。

波静かな黒珊瑚海を見下ろす、ガリランド市郊外の丘の上だった。
韋駄鳥チヨコボに乗ったディリータが、草原をひた走りに走ってきて、急

停止した。

「ラムザ！何をしている、こんな所で！」

「何って、風見草セルセタを探してるんだ。来週末にも、父さんのお見舞いに帰ろうと思ってるね。ディリータこそ、何だって急に？」

「悠長なこと言ってる場合じゃない！親父さんが御危篤だ。お前に会いたがってる！」

「えっ……！！」

白い小さな花を咲かせた風見草セルセタを一束、懷に押し込むと、ラムザは口笛を吹いて韋駄鳥チヨコボを呼んだ。

「幼年学校には僕から事情を説明しておいた。すぐに帰るぞ！」

「わかった！」

のんびりと草の実をついばんでいたラムザの韋駄鳥チヨコボが、あたふたと駆け戻ってきた。ラムザは手早く鳥具を締め直し、鞍にまたがる。

「近道するぞ。遅れるな！」

「ああ！」

ディリータとラムザは、韋駄鳥チヨコボの腹を蹴った。

イグーロスにあるベオルブ家の城下屋敷までは、大人の足で歩いて二日。韋駄鳥チヨコボを速歩はやあしで駆けさせても、半日の道程である。

林立する石灰岩の塊を避け、小川を飛び越え、急斜面を駆け上り駆け下りて。

二騎の韋駄鳥チヨコボが風のように、マンドリア平原を疾駆する。
流れ去る景色の速過ぎることに、ラムザは気付いていた。
(ああ……これは夢だ。父さんとお別れした日の……)

騎士として最高位の称号”天騎士”を戴く偉大なる勇者・バルバネスⅡベオルブはその日、最期の時を迎えようとしていた。

「戦況は……どうか……？」

束の間、浅い眠りから覚めたバルバネスは、枕元に控える次男・ザルバッグに問うた。

「我ら北天騎士団の奮迅の働きにより、ランベリーを奪還いたしました。オルダリア鷗国軍がゼルテニアから撤退するのも時間の問題でしょう。すべては順調です。ご心配なく」

長男・ダイスダーグも報告する。

「レナリオ伯に送った密使が戻って参りました。父上のご提案に伯も同意するそうです。」

股肱の臣たるレナリオ伯の説得があれば、ラナード王子も必ずや和平に応じましょう」

既に遺言により、ダイスダーグはラーグ公の軍師に、ザルバッグは北天騎士団団長に就任することが決まっている。

「そうか……、ならばよい。これで……長き戦いも……終わる……」

四人兄妹の末娘・アルマは、拭っても拭っても溢れ落ちる涙を抑えきれずに、顔を覆う。

「お父さま……」

「よいよい……泣くな、アルマ……」
イヴァリース

畏国軍の双壁をなす騎士団の將軍として、使命を全うしたという満足感が、バルバネスの表情を穏やかにしている。

が、蒼白くこけた頬にたたえられた微笑は、僅かに曇った。

命の灯の尽きる前にもう一目会いたい人間が、二人いる。

うち一人が、今も前線を離れることが出来ないのは承知している。

無二の友にして南天騎士団団長、”雷神” シドルファスⅡオルラ
ンドウ。

そして、もう一人は――。

「ラムザはどこだ？こんな時に……！」

父の心残りを読み取ったザルバッグは、苛々と足を踏み鳴らした。

「ダイスダーク、ザルバッグ……わしの自慢の息子達よ。」

ラムザを頼む……。お前達とは……腹が違うが……わしの血を分
けた息子だ……」

と、バルバネスが諦めて兄達に託そうとした時。

気ぜわしい足音が廊下に響き渡り、寝室の扉が勢いよく開け放た
れた。

「父上ッ！！」

息を弾ませ、つんのめるようにして父の病室に転がり込んできた
ラムザは、火照りと日焼けとで、うなじや耳まで真っ赤にしている。
ダイスダークが冷やややかな一瞥をくれる。

「騒々しいぞ」

「も……申し訳、ありま、せ……」

ラムザは細い肩を荒く上下させて、咳き込む。

「ラムザ兄さん、ひどい格好よ」

アルマが、ぼさぼさに乱れた金髪を指で梳かしつけ、汗で背中に張
り付いた上着から、砂埃や枯れ草を払い落としてやる。

「だって……間に合わ、なかっ……たら！」

バルバネスは目を細めた。

「ラムザ。よく来てくれたな……。よく……顔を見せてくれ……」

「父さ……、あ、いえ。……父上」

ラムザは父の病床に身を屈めた。

「久しぶりだな……。いい面構えになった。」

わしの若い頃に、瓜二つと……評判だが。学生時代のわしは、も
っと……利かん気で、偏屈だった。こんな、優しい……深みのある
目は、しておらんだろう……。

母親似だな……この目は……」

バルバネスはラムザの兄達に眼差しを移す。

「お前達には、不服もあるうが……わしを墓に入れる時は、これ達の母と……ファティマと共に、眠らせてくれぬか……。」

ソフィアも、許してくれよう……」

ラムザとは年の離れた二人の兄は、先代ラーグ公の従妹・マリ―ソフィアⅡラーグの子である。

「それは、セルセタ風見草か……？」

バルバネスは、ラムザの懷から覗いている白い花に気付いた。

「はい。母さんに教わったお薬湯を、差し上げようと思って」

差しのべられた父の手に、ラムザはしおれた小さな花束を握らせる。
「でも、ご病状がここまで、進んでいるとわかっていれば……、もっと早くに、帰ってくるのでした……！」

「もう二週間も前から、何度も手紙をやったろう」

「えっ!？」

ザルバツグの言葉は、寝耳に水だった。

「そんな……、寮には手紙なんて、一通も届いていません!ディリータが今朝、迎えに来てくれて、初めて知ったんです」
バルバネスは頷く。

「ディリータはいい子だ。身分は違うが、お前の片腕として役に立とう……。」

春からは……アカデミー士官学校だな……。ディリータにも、編入の手続きをとっておいた。ふふふ……、学長は目を丸くしていたがな。

お前に生涯仕える味方となろう……。仲良くな……」

「は、はい……父上……」

最後の力と想いの限りを込め、バルバネスは、まだ十五にもならない末息子の手を取る。

「よいか、ラムザ……。」

我がベオルブ家は……代々王家に……仕える武門の棟梁……。騎士の魂は我らと共に有る……。」

ベオルブの名に恥じぬ騎士になれ……。不正を許すな……。人と
して正しき道を歩め……。

お前はお前の信じる道を……歩むのだ……。

それが……。ベオルブの名が示す、真の騎士道だ……」

「はい。父上……」

雨上がりの秋の空と同じ色をした、澄んだ碧い瞳で真っ直ぐに父を
見つめ、ラムザは両手で固く父の手を握り返した。

「アルマを頼んだぞ……」

「はい……」

兄の肩に頭を預けて泣き続けるアルマの、蜂蜜色の髪を、ラムザは
優しく撫でた。

「兄達に負けぬ騎士になれよ、ラムザ……」

それが、天騎士バルバネスの最後の言葉になった。

——ラムザ……。

「はい……。父さん……。……ん……。？」

瞬きして、ラムザは意識を取り戻した。

屋根裏部屋の斜めになった天井に、蠟燭の炎に照らされたディリ
ータの影が、ぼんやりと大きく映っている。

「気付いたか。具合はどうだ、ラムザ？」

「う……。ん？」

ラムザは寝台ベッドの上で上体を起こした。

長靴ブーツと靴下、上着を脱がされ、きつちりと三つ編みに編まれてい
た髪も解かれている。

「……僕が気を失ってる間に何したの？」

毛玉だらけの古い毛布を裸の胸にかき寄せ、ラムザはわざとジト目
でディリータを見た。

「それが、寝ずに介抱してやった人間に掛ける言葉か」

ディリータは濡れ手拭いを、ぞんざいにラムザの顔に叩き付けた。

「ごめん。わかってるって。有難う」

ラムザは笑って、顔を拭いた。気分がすっきりとした。

「今、何時いまだろう……」

天井窓から月は見えない。

※人馬サジタリウスの二の刻ぐらい（※午後十時半頃）だろう」

「ええっ！？ 閉門時間どころか、消灯時間まで過ぎてるのか！」

ラムザは跳ね起きた。途端に、頭が割れるように痛み、寝台ベッドの端に座り直した。

「あいた、た……」

「慌てるな。これを飲め」

ディリータはラムザに、清々しい香りのする冷たい香草茶ハーブティーを一杯手渡した。

「酒の強さはお袋さんに似なかったんだな」

「いいだろ、別に……。お酒に強いのと賭け事に強いのは自慢にならないって、父さんが言ってたじゃないか」

バルバネスは、どちらも弱かった。

香草茶ハーブティーを一服すると、ラムザは改めてゆっくりと立ち上がった。

「すぐに帰らなくちゃ」

「まあ、待て」

ディリータが座ったまま引き留める。

「校門だけじゃない。街区毎の木戸だってとくに閉まってるぞ。今、外をうろつけば立派な不審者だ。今夜は泊まっていこう」

「やれやれ、無断外出の上に無断外泊か！」

「夜が明けてから、走り込みロードワークがてら朝市で果物など買い食いしてゆく連中に混じって帰る方が、目立たないぞ」

「でも……」

「いざとなれば、バレた時の言い訳も何通りか用意してある。

ガリランド市内にも、お前の親父さんお袋さんに恩のある人間は山ほどいるんだ。予め何人かに、それぞれ別の脚本シナリオを設定して、口裏を合わせてくれるように依頼してあるのさ」

ラムザは呆れた。

「……前々から思ってたんだけどさ。君の頭脳を悪いことに使ったら、完全犯罪も夢じゃなさそうだな」

「誉め言葉と取っておくぞ。未来のドラコニア伯爵にして北天騎士団団長殿の参謀長を務めるには、そのぐらいの周到さは必須だろう」
「うん、頼りにしてるよ。といっても、僕がダイスダーク兄さんの跡取りになるとは決まってるじゃないけどね」

ディリータは涼しい顔をする。

「ならせてやるさ」

「うわっ、問題発言！ちっとも顔色に出ないだけで、君も相当酔ってるだろ」

ラムザは声を立てて笑い、ディリータの額をコツンと軽く手の甲で叩いた。

「クララ義姉^{あね}の前では、口が裂けても言うなよ。今からだって、お子様を授かる望みはあるんだ。気にしてらっしゃるんだから」

ラムザは上着を羽織り、提灯^{ランタン}に火を灯したが、帰り支度ではない。

「^{トイレ}廁はどっち？」

「突き当たりの階段を下りて、裏口の外だ」

提灯^{ランタン}を手に、真っ暗な廊下に出る。ラムザ達がいるのは、二階の角部屋だった。

床板はすり減り、少し傾いていて、踏むとみしみしと軋んだ。足音を忍ばせて端から端まで歩き、階段を下りる。

一階の酒場は、営業中の賑わいが嘘のようにひっそりと静まって、後片付けの最中だ。

「あら」

床の食べこぼしを掃除していた、店主の二女が、箒を動かす手を休めて声を掛けてきた。

「お兄さん、気分は良くなった？」

「ええ、何とか」

「槍使いのお兄さんが心配してたわ。閉店間際まで、貴方が目を覚ますのを待ってたのよ」

「あの人達も、ここの宿のどこかに部屋を借りてるんですか？」

「ううん。傭兵の斡旋所を兼ねてる、もっと大きな宿に泊まってるんですって。食事だけ食べに来てたのよ」

「そうでしたか……。残念だな。もっと話がしたかったのに」

皿を洗っていた長女が、愛想よく微笑んだ。

「またいらっしやいよ。あのお兄さん達、時々来てるのよ。そのうち、きっと会えるわ」

「そうですね。きっと……」

厠トイレの小屋は、家々の壁に囲まれた狭い裏庭に建っていた。

息を詰めて扉ドアを開けたが、目や鼻にツンとくるほどの臭気はない。むしろ、柵からずらりと吊り下がった乾燥花ドライフラワーの芳香剤ポプリの匂いがきつすぎるくらいだ。

さらさらと水音が聞こえる。汲み取り式ではなく、便器の下は直接、暗渠の下水道につながっているのだ。

地下の暗闇からすうすうと吹き上がる風が、ラムザにドラコニア城を彷彿させた。

ドラコニア城は、北側に川を背にした山城だった。厠トイレは北側の城壁に、※三十歩ドーマ（※約十八メートル）以上も下を流れるイルグリス川に張り出して作られていた。冬には強い川風にさらされ、尻が冷えて、長く座っていられない。

（あれは……月のない夜だったな……）

七つの子供だった頃のことだ。

夜半に目を覚まし、一人で小用を足しに行ったラムザは、厠トイレの穴から漆黒の深淵を見下ろして、立ちすくんだ。

暗闇が怖かったのではない。夜行性の動物や、見えない障害物に注意を払いはするが、闇に住む悪霊の類を徒に恐れはしなかった。

落ちる心配をしたのでもない。高い所は大好きで、よく大木や塔の天辺に登っては母や兄に叱られたものだ。

あの時はただ、はるか崖下で轟々と渦巻く川の音が、ぶ厚い石壁に陰気に響いていた。住み慣れた田舎の家とは比べ物にならぬ、ド

ラコニア城の巨大さと、ちっぽけな己の儚さとが、夜の冷氣と静寂の中で深々と身に染みた。

自分は場違いな所に来てしまったのではないか……？

母の許を離れ、見知らぬ土地と人々の中で暮らす心細さが、不意に堰を切ったように押し寄せたのだ。

こっそり引き返して、中庭の茂みの陰で済ませたって、誰にも見つかからないさ。そんな弱気が心に芽生えかけた。が……。

——僕は騎士になるんだ！

小さな胸に言い聞かせ、”敢然と立ち向かった”ものだった。

——なるって決めたんだもの！

（ああ、そうだ……。そんなこともあったっけ）

足下から這い上る冷氣に、ぶるっと一つ身震いすると、あの日の感覚が甦った。

部屋に戻ると、ディリータは外套マントを敷いて床に寝転がっていた。

寝台は一つだけで、椅子も背もたれのない小さな丸椅子が一脚あるきりだった。他に空室がなかったのだろう。

「さっきのは冗談だって。一緒に寝よう」

「そうはいかんだろ」

ディリータは横になったまま答えた。

「何だい？君の方は冗談抜きに、自分の理性に自信がないとか？ああ、僕ってば罪な美形」

「……バカか？」

ラムザはディリータを助け起こす。

「遠慮するなよ。身分のことをとやかく言う奴が見てるわけじゃないし」

「……」

「明日はイグーロスに向けて発つ。街道だって安全は保証されていない……というか、僕らが保証する立場なんだぞ。しっかり体力を回復しておかないと。つまらない小競り合いで命を落としたら、未

来の名参謀になれないだろ」

「……それはそうだ」

ラムザとディリータは上着を脱ぎ、灯りを消して、背中合わせに布団に潜り込んだ。

「そういや、食事と部屋の代金って、ディリータがもう払ってくれたのかい？」

「いや。」ライトニング紫電”さんがお前に済まながって、全部おごってくれたんだ」

「えっ？それは……なんか、こっちこそ申し訳ないなあ。僕らの方がよっぽどお金持ってるのに……」

「本当は”僕らの”お金じゃない。親父さんやダイスダーク様からもらってるだけで、自力で稼いだんじゃないからな。借りだと思うなら、立派な騎士になることで返すんだな」

「うん」

自分よりも年下の少年が、生活の糧を得るために傭兵になっているという事実を、ラムザは重く受け止めていた。ドラコニアの、イヴァリースとして畏国の人々がより豊かに、安全に暮らせるように力を尽くしたいと、改めて思う。

「ディリータ。色々思い出したよ」

「ん？」

「騎士になるっていうのがどういうことか、考える機会は何度もあった。ドラコニア城のザルバッグ兄さんの下で勉強を始めてから、もう九年も……」

今更、一朝一夕にぐらつくような決意なら、とっくの昔に挫けていたさ」

ラムザ達は今日、初めて戦闘で人を殺めた。それは、特別な一歩ではある。だが、いつかこの日あることを予期して修行してきた年月の長さを、また、それ以上に長いだろうこれから騎士として生き続ける人生を思うと、必ずしも大きな一歩とはいえない、と感じる。

「マンダレーナ村を出る前の日の晩に、母さんは言ってくれた。」

父さんの子だからって、どうしても騎士になる義務があるわけじゃない、って。

もし僕が嫌なら……騎士になることに疑問を持ったなら、これしか道はないんだと思い詰めなくていい。例えば、母さんみたいに医者になったっていいんだ、ってことを忘れないで……ってさ。

「だけど僕は、自分の意志でこの道を歩き続けてる」

辛い時や、どうすればいいかと悩む時はあっても、やめたいと思っただけは一度もない。

「昼間のあいづらも、そうだと思うんだ。

盗賊になるのがどんなことか、別の生き方が出来ないか、散々考えたろう。

その上で矢っ張り剣で道を切り開こうというのなら、こっちだって、培ってきた全部を剣に込めて応えるまでさ。

勿論命さえあれば、今どんな奴だろうと、これから別の道を生き直せる可能性はある。なるべくなら、殺したくない……。

でも抜き合わせる以上は、僕だって命を譲る気は少しもないよ。

生き抜いて……守りたい人も、約束もある……」

ラムザは、近頃とみに母に似てきた妹アルマの笑顔を思い浮かべた。

「母さんは、僧院の中で祈りと労働に明け暮れることだけが神様に奉仕する道だとは考えなかったんだ。

母さんの、医者の仕事は人の命を助ける。でも、戦や飢えや、病気の流行を生み出している、大きな……世の中の仕組みみたいなものを変えられなければ、救いきれない命の方が多い。

逆に父さんの、騎士の仕事は人の命を奪うけど……、どうせ誰かが責任を引き受けなくちゃならないんだ。だったら、出来るだけ犠牲が少ないようにと心を砕く人がやった方が、現実問題として、失われる命を減らすことに貢献できる。

それがわかってたから……母さんは、父さんの妻になり、騎士としての仕事を支え、僕ら兄妹を生み育てた。

その心が、今の僕の心とかけ離れているとは思われない……。そ

れとも、僕は母さんの心を汲み誤ってるかな？」

背中動きで、ディリータが声を立てずに笑ったのが伝わってきた。

「そんなもの、僕の方がお前よりよくわかるはずがないだろう。

ただ、僕の理解する限りでは……そうだな……、親父さんとお袋さんがこの場にいれば、そのままお前の思った通りに進めと、背中を押すだろうよ。誇りを持ってな」

「うん」

ディリータは、今度は声に出して、自嘲気味に笑った。

「結局、お前はそうやって一人で答えに辿り着くんじゃないか。僕が手伝う必要なんかない」

「何言ってるんだ。ディリータのおかげだよ。

今日だって、ディリータがきっかけを作ってくれたから、考えがまとまったんだ。あれこれ他人ひとの話の聞いたり、昔のこと思い出したりしてさ。

君の支援サポートには、いつも……感謝してるよ……」

ラムザの目蓋が重くなり、とうとう閉じた。

再び目を開けると、すぐ鼻の先に、縫いぐるみの飛猫モイグリの顔があった。

（何だこりゃ？”モグちゃん”……？）

ラムザはまた違う夢の中に彷徨いこんだようだ。

マンダレーナ村の田園風景は、一面、黄金色の夕日に染まっている。

幼いラムザとディリータは、大きすぎる木剣を抱えて、干し草の山の上で午睡していたのだった。

妹のアルマが二人の間に窮屈そうに割り込み、ラムザの腕を枕にして眠りこけている。お気に入りお気に入りの縫いぐるみの”モグちゃん”をしっかりと抱き締めて。

ディリータの妹のティータも、兄の背中にしがみついて、安らか

な寝息を立てている。

「ラムザ。矢つ張りここにいたのね」

ファティマと、ディリータの祖母が子供達を迎えに来た。

「あれ、まあ……この子はまた、坊ちゃまに怪我をさせて！」

「平気。かすり傷だよ。僕より、ディリータの方がね……」

欠伸を一つして、ディリータが起き上がり、寝ぼけ眼をこする。

片方の目の上が腫れて、大きなたんこぶが出来ていた。

「あら。”回復”^{ケアル}してあげましょうか？」

「大丈夫だよ、小母さん。すぐ治るって」

「そう？じゃあ、”おまじない”だけでいいわね」

ファティマはディリータのたんこぶの上に、癒しの精霊を表す古代神聖文字の形を指で描き、膏藥をすり込むように三度撫でる。

ラムザはファティマの割烹着^{エプロン}の裾を引いた。

「母さん、僕にも」

「かすり傷だって言ったのは誰？こんなの、唾付けておけば充分です」

ファティマは腕白息子の頬を舐めた。

引き摺るほど長い木剣を腰に差し、それぞれの妹を負ぶって、少年達は家路につく。

「ディリータ！明日はマンダリア平原に行こうよ。ティータとアルマにも、赤韋駄鳥^{チヨコボ}の古巣を見せてあげよう！」

「うん。また明日な、ラムザ！」

ラムザは、なだらかな丘陵地の上に広がる、高い夕焼け空が好きだった。

黄金の海のように輝いて波打つ、麦畑や牧草地の間を歩くのも好きだった。

そして何より、妹の小さな柔らかい体と、厚くて固い母の手の、温もりが好きだった。

「母さん」

「なあに？」

ラムザはファティマの胸に顔を埋める。

「わかった。夕御飯、合鴨の香草煮^{ハーブシチュー}込みだ」

「そうよ。いっぱいお食べなさい、腹ペコ騎士^{ナイト}君！」

ファティマはいつも、いい匂いがした。

^{おしろい}白粉や香水の匂いを嗅いだ覚えはないけれど、作りたての料理や、清潔な石けんの泡や、爽やかな香草^{ハーブ}の香りを身にまといていた。

——ラムザ……。

頭を撫でているのは、夢の中のファティマだろうか。現実のデイリータ^タだろうか。

清々しい香気の源は、枕元の水差しの香草茶^{ハーブティー}か、それとも、ファティマの服に染み付いた練り薬か。

いずれともわからない。

ラムザはただ、心地よい安心感に包まれて、一層深い眠りに落ちていった。

？－1－〔4〕 追憶（父の遺言）（後書き）

キャラ成分表示その1・ラムザ

この物語は、筆者がゲームをプレイした際の個人的な感想や、取った戦法、たまたま起こったハプニングなどを素に構築されています。

？女顔…最初に全身イラストを見た時に、随分やせっぽちで、女の子みtainな可愛い顔してるなあ、と。本当はラムザ一人じゃなく、登場人物達みんな、可愛い感じの絵なんですけど。

？大食い…十代の少年、それも体育会系はウソみたいに山ほどメシを食う、という印象があつて。この「白韋駄鳥の貴公子」然とした奴がご多分にもれずそうだったら、ギャップが楽しそうだなと。この話を考え始めた頃には、皿洗いと印刷工場という体力資本系アルバイトを掛け持ちしていて、私自身が腹ペコ大魔神化していた、という影響もあります。

？金髪碧眼…汎用キャラ達が茶髪の中、ラムザの金髪はフィールド上どこにいても目立ちます。畏国では少数派なのかな？と。本当は、目は茶色ですが…。ラムザが困難な旅を続けられた背景には、”異端者”にされる前からそもそも、”妾の子”ってことではみ出し者扱いに慣れてた、という要素もありそうです。どうせならと、母ちゃんは異民族、しかもそのことは一目瞭然という設定にしてみました。

？真っ直ぐ…序盤から、素直な好少年だなあとは思ってたけど。感心したのは、ルザリア城の城門前で。なんたって正直の頭にバカの

付く奴！！例えばディリータだったら、聖石云々よりまず、「僕がライオネル城にいたという証拠がどこにある？」とか何とかシラきってみるでしょ！確かにコイツは、権謀術数ぐるぐるな政治の世界には向かない男です。いえ、責めているのではなく。大好きですとも、こういう人。

？お茶目…ひたむきなのはいいけど、潔癖すぎて近付きがたい奴かも、と始めは思いました。イメージがガラッと変わったのは、鉄巨人のエピソードで。あ、結構お茶目かつおボケな面もあるんだ！と、一気に親近感がわいて、想像が膨らんで……気付いたらこんな話が出来てました。ただ実際は、あのエピソードの方が例外的で”浮いてる”くらいなのでしょう。原作よりかなり、ヤンチャで、悩みの少なそうな（いわゆる、晩飯のこと以外に悩みがない）奴になったかもしれない。その分、ディリータの屈折率が上がったかも……。

？ 第2章 武門の子として 「1」 マンダリア平原

マンダリア平原は別名”獣ヶ原”とも呼ばれ、平坦な草原地帯に牙のように張り出した石灰岩の林は、野生動物や魔獣^{モンスター}達の格好の隠れ家となっている。

※白羊の月の初め（※太陽暦三月下旬）とはいえ、日向を歩いていると背負い鞆と背中の間が少し汗ばんでくるような暖かい日だった。

快晴の日差しを避け、五人の士官候補生達は、岩陰に車座に座って早めの昼食を摂っていた。

「すごいですね、ラムザ君は……。

ぼくなんかじゃ、たとえ”加速”^{ヘイスト}の魔法がかかってたって、ここまでの勢いじゃ食べられませんよ……」

紅一点のサーシャよりも小柄なナツシュは、自分の口へ匙^{スプーン}を運ぶのも忘れて、真向かいの華奢な少年が口と手を動かすのを眺めている。

「ぼくもこのくらいいっぱい食べたら、大きくなれるのかなあ……」

「普通は縦よりや横に伸びるぜ、こんだけバカ食いしてりゃあよ速さ^{スピード}だけではラムザに食べ負けないガストンは、とくに食後の香草茶^{ハーブティー}も飲み干して、枯れ草の茎で歯の掃除をしている。

「オラオラ、ポケツと見てねーで、てめーもとっとと食べえ！ただでさえ、俺らは遅れてんだぜ」

「うー、ごめん……。イグーロス城三周って、城市^{まち}の外壁のことかな？」

今まで黙々と匙^{スプーン}を動かし続けていた、ディリータが答える。

「だろうな。ラーグ公のお館のことなら、二十周ぐらいは走らされそうだ」

イグーロス城警備を命じられた、王立士官学校^{アカデミー}の新二年生達は、

今朝、班毎に魔法都市ガリランドを出発した。

マन्दリア街道の半ばほどにある宿場町に一泊し、二日かけてイグーロスまで徒歩で移動することになっている。

成都イグーロスの城門に一番に辿り着いた班の者には、体術の成績に五点追加。最後に着いた班の者は、補習としてイグーロス城三周長距離走。マラソン——と言い渡されている。

「この班にや、ウオーゼルと最下位どんケツを争う体力なしが居やがるかなー。ウオーゼルが療養中の今となっちゃあ、最有力ぶりつかす候補だよなあ」

と、ガストンがナツシュに圧力プレッシャーをかける。

「……、っ、っ!!」

ナツシュは慌てて雑炊を飲み込み、充分にふやけていなかった干し肉の塊を喉に詰まらせた。

ラムザは十九杯目のお代わりを鍋からよそいながら、ナツシュに微笑みかける。

「焦らないで、しっかり食べていこう。順位は気にするなよ。完歩することだけ目指そう。」

途中棄権者を出した班も、どうせ全員に補習長距離走マラソンが課せられるんだ。だったら、無理に速度ペースを上げて結局脱落するよりは、とにかく歩き通した方が望みはあるってことさ。

……それに、」

と、ラムザは表情を引き締め、北天騎士団から貸与された揃いの青い袖無し胴着の裾をつまんで、ぴんと広げてみせた。ラーグ公の白獅子の紋章が縫い付けられている。

「行楽じゃないんだ。道中、野盗や魔獣モンスターに遭遇する危険性がある。いつでも戦って勝てるだけの体調コンディションを保つのも、責任のうちさ。仮免とはいえ、僕らも騎士団の一員になったんだから……。」

と、いうことで、充分に体力回復する必要はあるけど、歩くと苦しくなるほど食べ過ぎてもいけないぞ。腹八分目にね」

ナツシュは緑灰色の団栗眼をまん丸くした。

「八分目……なんですか、それで!？」

「コイツが『腹ペコで目が回る』なんつった日にゃ、三十杯でも軽い!」

去年一年間、組も寮の棟もラムザと一緒にだったガストンは、今更驚かない。

「ほんと、胸のすくような豪快な食べっぷりね!これなら、お料理の作り甲斐があるわ」

サーシャはうつとりと見とれている。

「ね、今度お休みの日に包み焼きなんか焼いたら、食べてくれる?」
「うん、食べる食べる!有難う」

ガストンが呆れる。

「まだ食う気かよ?週末毎に十個は弁当だの菓子だの貰ってんじゃねーか!」

「大丈夫だよ、ちゃんと全部食べてるよ。……っていつでも、一部は必ずディリータが”毒味”してるんだけどね」

ディリータが苦笑する。

「一度も、実際に毒や惚れ薬が入っていたことはないんだが。念のためにな」

サーシャは、今初めて気付いた、という顔をして一つ手を叩いた。
「その手があったわね!ねえナツシュ君、無味無臭の惚れ薬なんて知らない?」

「ないよ、そんなもの!そもそも、いわゆる媚薬じゃない惚れ薬自体、反魂の薬と並んで、王立魔法院でも開発不可能なんだから!」

「蘇生薬として知られる”不死鳥の尾”や、”蘇生”の魔法は、心臓停止状態から回復させる強心作用があるだけだ。一旦脳死状態にまで陥った者を復活させる技術は、旧文明時代から今日に至るまで実用化されていない。」

「やだ、怒らないで。本気じゃないわよ。」

ラムザ君も、警戒しないだね。食べてくれるだけでいいの。一臍^フ臆^フとしては、爽やかな笑顔を側で見てるだけで、もう十二分に癒さ

れてるのよ。日頃の疲れも、悩みも吹き飛ばわ〜」

「しかし……そうだな、」

と、食べ終わったディリータが立ち上がった。

「サーシャ、荷物を開けてみていいか」

「あら、どうして？ 着替えの包みは開かないでね」

「そんなつもりじゃない。それなら、ナツシュ、お前でもいい」
ナツシュは背負い鞆リュックサックを差し出した。

「はい？」

ディリータはナツシュの荷を解く。

水筒、包帯と消毒用酒精アルコール、精製薬ポーション、魔力回復薬エーテル、筆箱と帳面ノート、替えの下着と靴下、折り畳み式の提灯と蠟燭ロウソク、縄、非常食……等々。

「矢張りな。重い物から先に詰めていったらう。潰れない物であれば、軽い順に下に入れた方がいい。重心が高い位置にある方が疲れにくいんだ」

ディリータが荷造りし直した背負い鞆リュックサックを、ナツシュは背負ってみた。

「あ、本当だ！ さっきまでよりずっと軽くなったような感じがする」

「サーシャもそうだろう。根性だの幸福感だのは、疲労感を麻痺させるだけで、肉体疲労が本当に減るわけじゃない。」

「すごいわ、ディリータ君。よく気付いたわね」

サーシャが感心して、荷物を詰め直す。

ラムザは満足げに頷いた。

「本気でお婿さんにするなら、僕よりディリータの方が”お買い得物件”だと思うな。隅々まで気配りが細かくてさ、大事にしてもらえるよ」

「ディリータ君でも、あたしには高嶺の花すぎるわ」

サーシャは明るい笑い声を立てたが、寂しそうな目は笑っていなかった。

食事を終えた少年達は、雪解け水の小川で鍋と各自の食器を洗い、その水で焚き火を消した。

日除けの布を垂らした革帽子を被り、リュックサック背負い鞆を背負って、また歩き始める。

サーシャは櫂オークスタッフの杖を、ナツシユは先端に黄水晶をあしらったサンダー雷精錫ロッドをつき、ガストンは小型の自動弓ボウガンを担ぐ。

「薪と食材が無くなった分、楽になったわね」

「最初っから乾麺パンとかの固形食だったら、もっと荷物が少なかったのに……。歩きながらも食べられるし……」

ナツシユは級友達の足を引っ張らないようにと、頑張って早足で歩く。

アウトドアクッキング「野外調理も訓練の一環だろ」

”一番よく食べる者の責任”ということで、丸底の大鍋はラムザが背にくくりつけている。

草原の中の街道を※三里セクタ（※約二・三キロメートル）ほど歩くと、分かれ道にさしかかった。立て札の文字が大分薄れているが、左は”マンドリア街道本道”、右は”旧ユードラ街道”と読める。

ユードラ街道とは、紀元前後の古代雄帝国時代に造られた幹線道路の遺構である。聖歴十三世紀現在の街道よりも、概ね広く直線的で、高低差が大きいのが特徴だ。

ユードラ雄帝国街道の一部は、現在でも主要道路として使用され続けている。が、山間部や沿岸部、湿地帯や砂漠地帯では、崩れ落ちたり埋没したりなどして失われた区間が多い。また、後代に砦や街の建設のために石材を転用し、裸地になっている場合ケースもある。

”戦場では道を知る者が勝利する”のよね。ここで違う方に進んだら挽回できなくなっちゃうわ」

と、サーシャは洒落のつもりで、ダーラボンが兵法学の講義をする時の決まり文句を持ち出した。

「こっち……ですよね」

ナツシユは錫ロッドで、石畳の新道を指した。

旧街道は、道幅は広いが砂利道だ。石材は切り出されて、新街道

の舗装、沿道の村々の建物や用水路などに使われたのだろう。

が、全く人通りが絶えているわけではなさそうだ。荷車の轍や、
韋駄鳥チヨコボの足跡と糞などが残されている。

「……」

ガストンが、鷹のような鋭い琥珀色の瞳を、旧街道の延びる先に凝らす。

「どうした？」

と、デイリータが尋ねた。

「なんか……、あつちに※六里セクタ（※約四・六キロメートル）ぐれ
え行った道端に、韋駄鳥車チヨコボが横倒しになってっだろ。何だろなーと
思ってよ」

「ええっ！？見えるの？」

読書家のナツシュは、やや近眼である。

「ガストンが言うんだ。間違いないだろう」

ラムザも目を細め、手をかざして遠望した。それと覚しき物は見えるが、何であるかはつきりと判別はつかない。

しかしガストンは、視界が良好ならば※十里セクタ（※約七・六キロメートル）先の人間や動物の特徴も見分けられる。

「粗大ゴミの不法投棄かしら？」

と、サーシャ。

「韋駄鳥チヨコボが付いていなければ、そうかもな。見えるか？」

と、デイリータが更に尋ねる。

「ちよっと待ちな……」

ガストンはラムザの肩を踏み台にして、背の高い石灰岩の一つに登った。

「見えねーな……、いや！一緒にぶっ倒れてら。けど、死んでんにしても時間は経ってねえ。全然食われてねーから」

動物や旅人の死骸が放置されていれば、付近に住む赤山猫レッドパンサーなどの肉食獣が二、三日で骨だけにしてしまう。

「転覆事故？それとも強盗の仕業か？人影はないかい？」

ラムザが矢継ぎ早に訊く。

「……よく見えねーな、草とか岩とかが邪魔で……。けど……。人も倒れてるみてーな……?」

ラムザは迷わずに旧街道を歩き出した。

「行こう!」

ディリータと、岩から飛び降りたガストンがすぐ後に続く。

「ええーっ? 本当に? 見間違いだったら……」

ナツシュは慌てて、引き止めるつもりでラムザ達を追った。

六里^{セクタ}も寄り道すれば、草原を斜めに横切って本街道に戻っても※二、三刻(※一時間ー一時間半)は遅刻する。

「その時は僕らがイグーロス城三周すればいいだけだろう! 逆にもし遭難者がいるのに見過ごしたら、北天騎士団の名折れだぞ!」ラムザは振り向かず^{びり}に答える。

サーシャがナツシュの背を押した。

「行きましょ。どうせ最下位^{びり}になるなら、名誉ある最下位^{びり}になってもいいじゃない」

ナツシュはカッと頬を赤くして恥じ入った。

「ごめん。その通りだよ」

※二里^{セクタ}(約一・五キロメートル)ほど進んで、ガストンはもう一度、岩の上に立って観察した。

「やべえ。かなり血が流れてるぜ! 強盗事件みてーだな」

「何だって!? 生存者は?」

「わかんねえ! 十人以上倒れてるが、ざっと見たところ、動いてる奴はいねえな」

少年達が急ぎ足で更に※一里^{セクタ}(※約〇・七六キロメートル)ほど行くと、事故現場に近づく複数の影が岩々の間に見え隠れした。

「……小鬼^{ゴブリン}?」

ガストンが叫ぶ。

「いや、人間だ! 緑の頭巾を巻いてる!」

「骸旅団か!」

走り出そうとするラムザとガストンを、デイリータが冷静に呼び止めた。

「待て、その前に。ナツシュ、^{ヘイスト}加速”だ」

「はい！」

息を整えて呪文を詠唱するナツシュの周りに、四人の級友達^{クラスメイト}が集まる。

「翻りて来たれ、幾重にもその身を包め……、^{ヘイスト}加速”！」

五人全員に、一度に魔法がかかった。

「よしッ！」

少年達は魔法の助けも借り、全速力で駆け出した。

ぽつりぽつりと新芽の萌える枯れ草の草原に、血痕と、^{チヨコボ}韋駄鳥の羽根が散らばっている。

車輪の外れた^{チヨコボ}韋駄鳥車の横で、五人の盗賊達が、捨て置かれた遺体から武器防具や衣類、かつら等を？ぎ取ろうとしていた。

「こいつ、まだ息があるぜ。どうする？」

盗賊の一人が、十六、七歳くらいの少年剣士を蹴り転がした。

「構やしねえ。身ぐるみ？いで放つときゃあ、^{レッドパンサー}赤山猫が始末つけてくれるだろ」

「けど、こいつの口から侯爵のことがバレねえとも限らねえぞ」

「そうだな……。小僧、恨むならてめえの運命を恨むんだぜ」

棍棒を持った盗賊が少年の頭を叩き割ろうとした、その時。

一本の矢が風を切って手首に突き刺さり、棍棒は地面に落ちた。

「ぐあっ……！」

「ん！？しまった、北天騎士団のやつらだッ！」

^{アカデミー}士官学校の剣術着の上に青い袖無し胴着を羽織った少年達が、駆け付けた。

「その少年から離れろッ！大人しく降伏すれば良し、刃向かう場合は容赦しない！」

盗賊達はうろたえ、気絶している少年をうち捨てて後退った。――

ーが。

「ああん？なんだ、よく見りゃガキばかりじゃねえか」

「しかも、そのうち二人はカワイユイ女の子とくりゃあ……、」

「当然！返り討ちだあー」

頭目格の盗賊が舌なめずりした。

「知ってるかあ？金髪の別嬪さんってな、東国で人気があるんだぜえー。たっぷり可愛がってから売り飛ばしてやる！」

ラムザはうんざりと溜め息を吐く。

「またか……」

ガストンがサーシャを小突いた。

「良かったな。今度はちゃんと、勘定に入ってるぜ」

「ちつとも良くないわよ！」

サーシャは鳥肌を立てて身震いする。

「だ、大丈夫っ。サーシャは、ぼく達で守るからっ」

ナッシュは息を切らしながら、サーシャの前に立つ。

その間にもディリータは、倒れている少年の脈や、外傷の程度を確認した。

「大事ない！服に付いてるのは他の奴の血だ」

「そうか」

ホッと一安心して優しい笑みがこぼれたが、

（いけない、いけない）

ラムザは再び、厳しい顔付きで盗賊達を睨んだ。

「未遂で済んで良かったな、お前達。余罪が無ければ死刑は免れられるだろう。」

もう一度だけ言うぞ。武器を捨てて、大人しく投降しろ！」

「へっ、誰が青二才どもに捕まるか！」

盗賊達はじりじりと、士官候補生達を取り囲む。ガストンが自動弓^{ガン}に向けて牽制する。少年達は背負い鞆^{リュックサック}を脇に放り捨てた。

「確かに僕らは未熟者だ……。手加減なぞしてやれない。かかってくるなら、覚悟はいいんだろうな？」

「うるせえっ、覚悟すんのはてめえらだッ！」

味方が一カ所にかたまっているうちに、サーシャが魔法をかけた。

「たゆとう光よ、見えざる鎧となりて小さき命を守れ！」物理防御
「御”！”」

棍棒を拾い直した盗賊は、ディリータに殴りかかる。
クワアンツ。

ラムザが丸底の鉄鍋を盾代わりにして、棍棒の軌道を逸らした。
二撃目には横からラムザを襲う棍棒を、ラムザはかわしつつ、同じ方向へ後押しするように、遠心力を乗せた大鍋の縁で打った。

ガコォーン！

景気のいい音を立てて、棍棒は※七、八歩ドーマ（※約四・二〜四・八メートル）も吹っ飛ぶ。

「チッ！」

盗賊は革帯ベルトに差した短剣ダガーを抜いた。

盗賊は革帯ベルトに差した短剣ダガーを抜いた。
広刃剣を手にした盗賊が二人、ラムザとディリータの左右に回り込もうとする。

ラムザは鉄鍋を盗賊達の方へ投げつけ、剣を抜いて、ディリータと背中合わせに立つ。

残る二人の盗賊は、ナッシュとガストンに向かっていった。

「ウオーッ！」

大男が鎚フレイルを振り回してナッシュに襲いかかる。

ガストンは大男の腕を狙う。

腕の力だけで弦を引き絞れる、主に狩猟用の小型の自動弓だ。貫通力はさほど無いが、照準を定めやすいのが長所メリットである。

矢は籠手に当たり、負わせた傷は浅かったが、振り下ろされる鉄球は大きく的外した。

ナッシュはすばしこく大男の脇をすり抜け、雷精錫で背中を撃つ。サンダーロッド
ナッシュの腕力では、打撃自体は肩叩き棒で強く叩いた程度の痛みダメージしか与えられない。が、雷精錫の先端の黄水晶が輝いた。

ビシヤアッ！

黄水晶から電光がほとばしり、鎚を伝って盗賊の体を貫く。

サンダーロッド 雷精錫には、呪文を唱えなくとも”サンダー雷撃”の魔法と同等の雷を生

む仕掛けがあるのだ。

「ぐうつ……！」

一撃で巨体を倒すには至らなかったが、大いに利いているようだ。

斬りかかってきたもう一人の盗賊の剣を、ガストンは自動弓の銃ボウガン身で絡め取るようにして払う。剣が盗賊の手から離れた。

ガストンは自動弓ボウガンを放り捨て、腰の長剣を抜く。盗賊は、背負っていた、今し方盗んだばかりの長剣を抜いた。

「トオッ！」

盗賊が突きを繰り出した。ガストンはかわした、が、袖無し胴着を引っ掛けた。

ビィッ！

青い厚手の布が鮮やかに裂ける。

予想以上の切れ味に気を良くした盗賊は、ニヤリと笑った。

「けっ……、上っ等だぜ！」

ガストンも、不敵に笑い返した。

「う、うう……」

剣士の少年は意識を取り戻し、血糊のこびりついた頭を振って、剣を杖に立ち上がった。

「……援軍か？ た、助かった」

目の前で、金髪の、今まで見たこともないほどの”美少女”——としか少年の目には映らなかった——と黒髪の少年が、盗賊三人を相手取って絶妙の連係攻撃コンビネーションを展開している。

（うひょー、綺麗なコだな。しかも強い！）

修羅場の真っ只中にいるにも関わらず、思わず目を奪われた。

しかし、”少女”の死角で盗賊が剣を振りかぶるのを見ては、傍観者ではいられない。

「危ねえっ！」

少年は剣を握り直して戦おうとした。が、頭と脇腹が激しく痛み、足元がふらついた。

「うくっ……！」

「……！」

少年が飛び入り参加したために、円滑な動きを乱されたものか。

少女”はかえって、避けられたはずの剣を肩に受けてしまった。

（やべっ……！！）

一瞬、ヒヤリとしたが、刃は青い袖無し胴着の下に着けた肩当てに当たり、怪我はなかったようだ。

黒髪の少年が、よろめく少年を背中ですき飛ばすと同時に、盗賊の剣を防いだ。

「下がってろッ！」

庇われた格好なのだが、少年は自尊心を傷付けられた気がした。

（何だよ、邪魔者扱いかよ？）

だが実際、下手な手出しは”いらぬ節介”かもしれない。互いの背中を守りながら戦う二人は、頭の後ろに目が付いているのかと思うほど、ぴたりと息が合っている。

（くっそー、こいつ、彼氏かな？）

少年は、ますます面白くなかった。

決着は、盗賊達に隙が生じた一瞬についた。

少女”の剣が一人の頸動脈を断ち切った。

他の二人に動揺が走った瞬間、短剣を持った方の盗賊の頭を、黒髪の少年がポンと斬り落とす。最後の一人は、振り向いた”少女”に心臓を、黒髪の少年に眉間を突かれて絶命した。

一方で――、

小柄な魔道士の少年が、鎚を持った大男から逃げ回っていた。呪文を唱える好機をつかめずにいるようだ。

白魔道士らしき”もう一人の”少女が、地面に転がっていた大きな鉄鍋を投げつけた。

「えーいっ！」

鉄鍋はすっぽりと大男の頭に被さり、弧になった細い取っ手が首の後ろに掛かって、顔を覆った。

「うっ!？」

視界を遮る鉄鍋を外そうと、大男は焦つてもがく。その隙に、魔道士の少年は充分な距離を取って、サンダーロッド雷精錫を高く掲げた。

「まばゆき光彩を刃となして、地を引き裂かん！」サンダー雷撃”ッ!”

魔法の雷が、大男の盗賊にとどめを刺した。

ただの初級魔法でも、並の魔道士の唱える中級魔法よりはるかに強力だった。

サンダー雷撃系魔法の威力を増幅させるサンダーロッド雷精錫の効果を差し引いても、飛び抜けた魔法の才能をうかがわせる。

また、魔道士の少年達の横では――。

目付きの鋭い銀髪の少年は、太腿から血を流していた。

業物を手にして強くなった気でいる盗賊は、優位を確信し、不用意な大技を仕掛けてきた。

少年の琥珀色の瞳が、キラリと光る。

「エアーツ!!」

傷を負った脚で、構わず大股に踏み込み、目にも止まらぬ突きで盗賊の喉を突き破った。

「身の程知れてんだよ」

息絶えた盗賊の胸を踏み付け、剣を引き抜く。

(すげえな、こいつら! ダテに畏国最強の騎士団イヴァリースってはいわれちゃいねえや)

青の胴着に白獅子の紋章をつけた”北天騎士団員”達を、剣士の少年は賞賛の眼差しで見た。

「その……、ありが……」

礼を言いかけた少年に、金髪の”少女”が警告を発した。

「後ろッ!」

振り向くと、

「あつ、こ、この野郎っ！」

赤山猫^{レッドパンサー}の群れが、血の匂いに引かれて集まってきていた。

赤山猫^{レッドパンサー}は通常、一頭の雄と五、六頭の雌、その子供達で二歳未満の幼獣^{ハレム}が一つの群れを形成し、縄張りを守りつつ狩りをする。ただし、一家^{ハレム}を持たない”はぐれ雄”は、一頭だけで新天地を求めてさすらう。

今、死肉を漁りに来たのは、典型的な規模の群れだ。

成獣と去年生まれた子供達、併せて十頭ほどが、腕や足など遺体の一部、もしくは全部を運び去ろうとしていた。今年生まれたばかりの赤ん坊十頭ほどは、岩陰から遠巻きに見学中だ。

「放せよっ！」

剣士の少年は赤山猫^{レッドパンサー}達に石を投げた。

「ガルルルウ……」

数頭は、くわえていた遺体を放し、背中の毛を逆立てて唸った。が、他の何頭かは、”今日の糧”を確保したまま急いで逃げようとする。

「うおわぁーっ!!」

少年は無茶苦茶に剣を振り回しながら、赤山猫^{レッドパンサー}達の群れに突っ込んでいった。

「ギャアーオ!!」

群れの主である、一際体の大きな、立派なたてがみのある雄が、牙をむき出して少年に飛びかかった。

「「ッ!!」」

ラムザとデイリータ^{ボス}が少年を援護する。

赤山猫^{レッドパンサー}はデイリータの二の腕に噛み付いた。

「デイリータッ!？」

「平気だ!!」

”物理防御”のおかげで傷自体は浅かったが、赤山猫^{レッドパンサー}の牙には毒がある。牛や野生の韋駄鳥^{チヨコボ}など、彼らが自分の体よりも大きな獲物を仕留められるのは、この毒あればこそだ。

死に直結するほどの猛毒ではないものの、徐々に体力が衰える。
時間をかけていられる相手ではない。

「フウウウーッ」

「グルルーツ」

レッドパンサー

赤山猫達は次々と、絶え間なく少年達に襲いかかる。斬り払い、蹴飛ばして一時的に退けはするが、しなやかで機敏な野獣の体は、人間以上に急所を捉えるのが難しい。

ボウガン
ガストンが自動弓を拾い上げ、矢を番えた。

ボス
「ナツシュ、あの頭に一発ぶちかましてやれ」

「駄目だよ！ラムザ君達にも当たっちゃうよ」

「当てさせねーから、さっさと呪文唱えやがれ！」

レッドパンサー
引き金に指をかけ、ガストンは雄の赤山猫に意識を集中した。

「まばゆき光彩を刃となして……」

ボス
群れの主はラムザの喉を食い破ろうとしたが、胴体を傷付けられ、爪も革手袋に引っ掻き傷を作っただけだ。

（今だ！）

ボウガン
着地した前足を、自動弓の矢が貫いた。

「ギヤウッ！」

レッドパンサー

赤山猫は暴れたが、前足を地面に釘付けにされている。

サンダー
「……地を引き裂かん！」
「雷撃」 ツツ！！

レッドパンサー

ナツシュの魔法は、雄の赤山猫と、側にいた二頭の雌を撃ち倒した。

「ギヤンッ！！」

「ギヤアッ！」

ボス

主と、首に傷を負っていた一頭の雌が、断末魔の悲鳴を上げる。二、三度のうち、手足を痙攣させた後、ぐったりと動かなくなった。

レッドパンサー

他の赤山猫達は”食糧”を諦め、命からがら退散する。

ボス

数日から数週間のうちには、別の雄がこの”寡婦”集団を見つけ、新たな主となるだろう。そして、幼獣達の中でも雄の個体は、遠からず新たな主に追い出されるか殺される運命にある。

「全部揃ってるみたいだな……。良かった」

ラムザはバラバラにされた遺体を目視で確認し、獣達を追う必要なしと判断した。剣の血を拭い、戦闘終了の意思表示とする。ジェスチャー

グレバドス教徒は、ひとたび死んでもこの世の終末の日に神の力により甦ると信じており、亡骸は大切に棺に納めて土葬する。そのため、獣に食われる、火災で灰になる、墓泥棒に掘り返され野ざらしとなって風化する……等々、復活のよすがとなる亡骸が失われることを恐れた。

「フミユウ……」

「ニイイ……」

二頭の赤ん坊が群れに戻らず、死んだ雌の赤山猫レッドパンサーを起こそうとするかのように、体をこすりつけている。

「可哀想なことしちゃったかな……」

ナツシュは後味が悪そうだ。

「可哀想だと思ったら、こうしとけ！」

ガストンはずかずかと近づいて、幼獣達の首を刎ねた。

「一ぺん人肉の味を覚えた奴は、生きてる人間も襲うようになる。うちの所領むらでも去年、ガキンチョ二人食われてんだ！鶏や羊なんざ数も数え切れねーよ。

獣に情けはかけてらんねーぜ」

ガストンの言動について、読者諸氏の理解を得るには、この時代の階級制度及び騎士道精神の一端を解説する必要があるうか。

まず第一に、この時代、狩猟は騎士階級のみの特権であり、また責務でもあった。

山野の動植物は全て、領主である国王、騎士、もしくは教会の有物であり、農民達が自由に捕獲・採集することは出来ない。薪や山菜、木の実を採るにも、所定の期間と分量を守らねばならなかった。平民で狩りを許されているのは、領主から任命された森守と、一部の山岳地方の狩猟民だけである。

ガリオンヌ地方では、平民が身を守るためやむなく猛獣などを殺

した場合は正当防衛と見なされる。が、それとても、領主に届け出ず勝手に肉や毛皮を処分すれば”密猟”扱いとなり罰せられる。まして、家畜や農作物を守るため農民達に許されている自衛手段は、柵を作ったり、大きな音や焚き火で脅すなどして、追い払うことまでだ。

地方によっては、村を石垣や生け垣で囲うことすら、”外敵から領民を守るといふ騎士の職務を不当に代行する行為”として禁止されている。

だが現実的には、殺傷しない限り、一度”餌場”を覚えた野獣たちは何度でもしつこくやって来る。山猫類による家畜・家禽の被害、また鹿や野猪、^{ワイルドボー}赤韋駄鳥等^{チヨコボ}による畑・果樹園の食害は深刻だった。

騎士達が職務通りに”害獣”を駆除してくれなければ、餓死者を出したり、子供や若い女性を売ったり、あるいは窮乏のあまり一揆を起こしたりする村もあったのだ。

さて、第二に。騎士は戦いが本分ではあるが、無益な殺生を好んではならない。そして、故あって命を奪う時にも、なるべく苦しみを長引かせぬよう、速やかに止めを刺すことがせめてもの慈悲である——とされる。

次世代を担う子供と女性を殺すことは、特に騎士にあるまじき悪逆非道の行いである。狩りの際にも、繁殖年齢に達していない幼獣と、妊娠・子育て中の雌は避ける掟^{ルール}だ。

ただし、人命や農作物に被害を与える、いわゆる”害獣”や魔獣^{モンスター}はこの限りではない。凶獣^{ベヒーモス}のように、教会から破門宣告を受け、”たとえ妊婦・赤児といえども”容赦なく根絶すべし、と布告されているものもある。

^{レッドパンサー}赤山猫は群れで生活するが、自分の子以外に乳をやることはない。肉を消化できる月齢に成長しておれば、稀に祖母が”孫育て”してやることもあるが、乳飲み子が母を失えば、餓死するか他の獣の餌食になるしかない。

当時の騎士道的考え方では、親の^{レッドパンサー}赤山猫を殺したのは”有益な殺

生”であるし、その子を親と共に葬ったのは”慈悲”ということになる。

野生生物が激減している、聖歴十七世紀現在の動物愛護の考え方とは相容れないだろう。

元はといえば人間達の自業自得なのである。農民達は住処である山野を開拓して農地に変え、騎士達は餌となる草食獣を狩った。赤山猫達^{ドバンサー}が日々の糧を”侵略者”達の庭に求めるようになったのは、当然の結果であった。

だが、あくまでも当時の騎士階級に所属する少年として見た場合、農民達の生命・財産をおびやかす野獣達を退治することは、責任感の強さの表れといえよう。

「みんな、大丈夫だった？デイリータ君、”浄化”^{エスナ}してあげましょうか？」

と、サーシャが声を掛けた。

「いや、僕のことはいい。それより、そっちの奴を看てやってくれ」

士官候補生達は、応急手当の基本程度は習っている。

デイリータは毒消しの丸薬を水で飲み込んだ。二の腕の外傷は、ナツシュが手伝って包帯を巻く。

「うっ……そーいや、肋が。イテテ……」

剣士の少年は少し大袈裟に^{オーバー}、脇腹を押さえてしゃがみ込んだ。

戦闘の緊張から解放されて、痛みを思い出したのかも知れない。が、幾分かは、女の子に優しくされたいがための演技のようだった。

「俺の方も、屁でもねーよ。見た目じゃ派手だが、ほんの表皮^{かわ}一枚だぜ」

ガストンは、太腿の傷に自分で血止めの軟膏を塗りながら言った。

ラムザが軽口を叩く。

「うん、ガストンは血の気が多すぎるからね。ちょっとぐらい放血した方が、安全になって丁度いいよ」

「てめー、後でシメる！」

サーシャは剣士の少年の横に座り、頭と脇腹に手をかざした。

「清らかなる生命の風よ、失いし力とならん。」
「回復^{ケアル}」！

治癒能力を高める魔法の効果で、痛みが治まり、頭の傷口もふさがった。

ラムザが、少年に水筒の水を差し出した。

「無事で良かった。さ、飲んで」

「え？……いいのかい？」

「？」

少年は水筒と、ラムザの顔を交互に見比べ、恭しく飲み口に口を付けて中身を半分ほど飲み干した。

「助かったぜ！有難う！！」

剣士の少年は、ラムザの手を両手でしっかと握って礼を言う。

「い、いや、どういたしまして……」

ラムザは何となく気圧されて、思わず半歩身を引いた。

「……ん？」

少年はラムザを、頭の天辺から爪先までよくよく眺めた。

「チッ……。何だ、男^{やろ}じゃねえか」

パツと手を離して露骨に顔をしかめると、唾を吐き捨てて袖で口を拭う。

「な、ななな……、」

ラムザは呆気にと取られて二の句が継げない。

「おい、てめえ！」

ガストンが少年の襟をつかんだ。

元々、吊り目吊り眉で精悍な顔付きをしているので、凄むと相当な迫力がある。

「お、おお、おう、やや、やる気か？」

少年は腰が退けている。

「『何だ』はねーだろ、仮にも命の恩人に向かって！」

そりゃ確かにラムザは、剣ぶん回すよりや、女物^{ドレス}着て舞踏^{ダンス}踊って

た方が似合いそーな面^{つら}してやがるけどよ！」

「……」

ナツシュが、ぱたぱたと手の平を振った。

「ガストンってば……。何も今、そういう形でシメなくても……」

”追い撃ち”をかけられたラムザは、細い肩を落としてうなだれる。

「何でかなー……。声聞けばわからないかなあ。身長だってそれなりにあるのに……」

ラムザの背丈は※五尺八寸ケルターカーク（※約一七一センチメートル）ほど。

ディリータやガストンよりは※一寸カーク（※二・九五センチメートル）

ばかり小さいが、畏国人イヴァリースの成人男子の平均が※六尺ケルター（※約一七七センチメートル）ほどだから、十六歳の少年としては背の低い方ではない。

「元気出して、ラムザ君！近頃じゃかなり男らしくなったと思うわよ。

去年の今頃なんて、どう見ても女の子が男装してるみたいな違和感があったもの。女のあたしより可愛くって、妬けちゃうくらいだったけど……」

「……」

サーシャの慰めにならない慰めの言葉に駄目を押されて、ラムザはしよげ返った。

「いいよ、いいよ……。どうせ僕は、どうしようもない女顔だよ……」

ディリータが肩を叩く。

「全くだ。どうにもしようがないんだから、くよくよイジケるな。

……そんなことより、」

と、ガストンに首を締め上げられてへどもどしている少年を助けて、尋ねる。

「ここで何があった？」

少年の顔色が変わった。

「そ、そうだ！侯爵様が……」

「侯爵？ランベリーの領主、エルムドア侯のことかい！？」

ラムザは横たわる亡骸の中にエルムドア侯の姿を探したが、「銀の貴公子」と讃えられた侯の銀髪は見当たらなかった。

「ああ、そうだ。侯爵様は奴らに誘拐されたんだ！なあ、あんたら北天騎士団の騎士だろう？手を貸してくれ！」

ラムザは頭を振る。

「残念ながら、まだ正式な騎士じゃないんだ。僕らはガリランド士官学校アカデミーの士官候補生さ」

「な、何だ……。そうなのか……」

少年は失望の色を顕わにした。

「まあ、待って。骸旅団せん滅作戦の間だけだけど、北天騎士団の準団員には違いない。

君の力になれると思うよ。詳しく話を聞かせてくれるかな」

「オレはアルガス……。ランベリー近衛騎士団の騎士……。だ」

ラムザのよりはくすんだ金髪を短く刈り込んでいる少年剣士は、歯切れ悪く自己紹介した。

アルガスが身に着けている鎧や剣、長靴ブーツなどは、上等だが使い古された、旧式なものばかりだ。服には仕立て直して丈を合わせたらしい線や、虫喰い穴を繕った跡がある。

「騎士……？」

ディリータが訝しがった。

「……いや、騎士見習いさ。なんだよ、お前らだって一緒じゃねえか」

アルガスは口を尖らせた。

「僕はラムザⅡベオルブ。こっちは親友のディリータだ。それから、サーシャ、ナツシュ、ガストン。みんな、士官学校アカデミーの二年生だよ」

アルガスは驚いてラムザの顔を見直した。

「ベオルブって……あの北天騎士団の？」

「うん。”風神”バルバネスの三男坊さ」

「そいつはすごい！なんて幸運なんだ、オレは！」

「???」

アルガスは途端に愛想笑いを浮かべて、もう一度ラムザの手を強く握った。

「いやあ、道理で強いと思ったぜ。”ガリオンヌの守護神”北天騎士団団長・ザルバグ將軍の弟か！」騎士の中の騎士”ベオルブ家の御曹司が力を貸してくれるなら、もう侯爵様は助かったも同然だ。感謝するぜ！」

「……」

士官候補生達は、アルガスの調子の良さに開いた口がふさがらない。が、エルムドア侯救出には協力を惜しまないつもりだ。

ディリータが話を進める。

「まず、状況を説明してもらおう。襲撃があったのはいつだ？」

「え……と……、オレがどのくらいの間気を失ってたか、わからねえから……」

「なら遡って、今朝から何をしたか順番に思い出してみてくれ」

「今朝は……日の出の頃にみんなで礼拝をして、軽く朝飯を食べた後、すぐにガリランドを出発したんだ。※白羊アリエスの刻（※午前六時〜八時頃）のうちだな……」

「徒歩で？」

「いや、全員韋駄鳥チヨコボでだ。荷物は韋駄鳥車くるまに載せて……」

「すると、※金牛タウロスの刻の終わりから双児ジエミニの刻の初め頃（※午前十時前後）までにはここに来られたろうな」

韋駄鳥チヨコボの速さは、並足でも人間の倍ほどだ。※一時とき（※約二時間）の間に※二十五里セクタ（※約十九キロメートル）程度の道程を行ける。

ラムザも頷いた。

「士官学校生の一番早い班が分かれ道付近を通過する前に、最初の事件は終わっていただろうな。戦闘の動きがあれば、流石に誰か気

付いたのじゃないかと思う。そっちから逆算しても、せいぜい※双^{ジエ}児の刻の前半（※午前十時〜十一時頃）までの出来事だろう」

現在は、既に※巨蟹^{キャンサー}の刻の半ば（※午後一時頃）を過ぎている。

「犯人達が韋駄鳥^{チヨコボ}を奪って逃走したとなると……今から徒歩で追いかけても無駄だな」

と、ディリータが淡々と分析する。

「そんな！早く手を打たないと、侯爵様が奴らに殺されちまう！そうになったら、オレはいたい……」

取り乱すアルガスを、ディリータがなだめる。

「まあ、落ち着けよ。死ぬと決まったわけじゃないだろ？誘拐したからには、”奴ら”にも何か狙いがあるはずだ。何かの要求があったかもな」

ラムザも言う。

「それに五大領主の一人が誘拐されたなんて大事件は、どのみち僕らだけじゃ手に負えないよ。

僕らに今出来るのは、時間が経たないうちになるべく現場の状況を観察して、記憶しておくこと。そして、騎士団に報告することだ」

「……わかった」

ディリータが質問する。

「ところで、”奴ら”というのはどんな連中だった？今倒した盗賊どもは、最初の襲撃にも加わっていたのか？」

「いや……違う。顔は全部は覚えてないが、最初に襲ってきた奴らは、もっと装備がしっかりしてた。だが……こいつらと同じで、緑の頭巾やら襟巻^{スカーフ}きやらを目印につけてたな」

「人数は？」

「さあ……オレ達の一行より多かったが、倍まではいなかったと思う」

「味方の人数は？」

「侯爵様とオレも含めて十四人だ」

「なら、二十人から三十人程度ということか」

ラムザが言いづらそうに告げる。

「じゃあ……お気の毒だけど、生存者は君と侯爵様だけってことだね」

盗賊達以外の遺体は、十二体あった。

アルガスは顔を歪め、座り込んで地面に拳を打ち付けた。

「畜生……！」

遺体を見て回ったガストンが唸る。

「かなりの手練れがいやがるな……。さっきの雑魚どもとは段違いだぜ」

一太刀で肩口から骨盤に到達するまで斬り下ろされたり、胴体を真っ二つに切断されたりなどしている遺体があった。

「ああ……。ただの山賊とは思えなかった。軍隊みたいによく統率が執れてた。武器防具も本格的だったし、韋駄鳥チヨコボの扱いにも慣れてた。元騎士とか、傭兵の集団じゃねえかな。

指揮者リーダーは恐ろしく腕の立つ男だった。痩せぎすで、頬がこけてて、見るからに狡猾そうな面構えの奴さ」

デイリータとラムザは話し合う。

「ウィーグラフではないな。ウィーグラフは四角張った顔で、がっしりした体格だ」

「うん。それにウィーグラフなら、”聖剣技”の被害者がいるだろう」

亡くなった人々の死因は、いずれも物理的な外傷によるものだった。

ガストンは韋駄鳥チヨコボの足跡を辿った。

「犯人どもは、川から来て川から逃げやがったんだな」

足跡と臭いを消すため、また人目に付かないための用心だろう。

砂利道の旧街道はおよそ七十歩ドーマ（※約四十二メートル）先で、川を横切る浅瀬道フォードになっている。岸边は周囲の平野よりも※十尺ケルター（

※約三メートル）以上くぼんでおり、低木や枯れ草の茂みの中に、大勢の人間が潜んでいたらしい踏み荒らした跡があった。

川底の泥の上に、消えかかった韋駄鳥チヨコボの足跡が残っている。

「御丁寧に二手に分かれてやがる。川上に向かう足跡が多いみてーだが……」

「定石では、数の少ない方は囷だよね？」

と、ナツシュ。

ディリータは考え考える。

「そうなんだが……。この上流※十里セクタ（※約七・六キロメートル）ぐらいの範囲で、四本もの川が合流している。実は多い方が目くらましで、更に人数を分けて追手を迷わせるつもりかもしれないな。」

骸旅団は緑の布が目印……。だが、逆にそれさえ外してしまえば、普通の農民漁民や騎士と区別はつかない。侯爵様お一人なら、舟や荷車の荷の中にも隠せる……。かえって、少人数の方が怪しまれず行動しやすい利点もある」

「侯爵様を連れ去る班グループと、盗品を処分する班グループが別々に存在するかも知れない……。」

追跡には人手がいるな。ザルバッグ兄さんに、大規模な搜索隊を出していただかないと」

サーシャは横倒しになっている韋駄鳥車チヨコボの中を覗き込んだ。

「空っぽだわ……。侯爵様の持ち物なら、さぞかし豪華な品々が積まれていたでしょうね」

美しい彫刻に覆われた、それ自体が贅沢な値打ち物である長持が三つ、錠を打ち壊されて引つ繰り返っていた。

「そうともさ。侯爵様ご自身の身の回りの品だけじゃない。道中世話になる貴族や教会への贈答品もいっぱいあった。衣類や武器、宝飾品に銀器……。路銀の金貨も三袋」

「それだけあれば、他の人達の遺留品には目もくれないよねえ」と、ナツシュ。

「遺留品といえば、見たところ、犯人側の死体や遺留品がないな」と、ラムザは気付いた。

「敵が全く死者を出さなかったわけじゃないだろう？」

「多分……。オレは戦闘が始まってすぐにやられちゃったんで、後のことはわからない」

「そうか……。みんなで探してみよう」

アルガスもふらふらと歩き出したのを、デイリータが止めた。

「ちょっと待て。お前は休んでいた方がいい。食べられそうなら、これを食べておけ。朝飯以降、何も腹に入れていないんだろう」と、携帯食の固焼菓子と水筒を渡した。

「ああ……。そういや」

ラムザも固焼菓子と干し肉を差し出した。

「ごめん。忘れてたよ。」

サーシャ、君も探さなくていい。アルガスの側についていて。まだ、見えない内傷があるかもしれない。急に具合が悪くなることもあるから」

「ええ、わかったわ」

しばらくの後――。

「全っ然ありませんね……」

ナッシュは手ぶらの両手を広げて見せた。

四人の少年達は、人が倒れていたらしい血の跡を五カ所発見したが、他にめばしい痕跡はない。犯人達は、死傷者は勿論、手掛かりになりそうな物は注意深く回収したようだ。

「矢まで無くなっている。徹底的だな」

骸旅団の犯行であることを誇示する暗緑色の矢が三本残っていた。他は、遺体や地面に刺さっていた矢も全て抜き取られていた。

この緑の矢羽根の矢は、骸旅団の団員同士の合図や、犯行声明文を結び付けた矢文などに使われる物で、規格が統一されている。それ以外の、戦闘中に用いる矢のほとんどは、団員達が各自で準備しているのだ。

矢の形状や材質は、地方により、また個々人により異なるため、製作者・使用者を特定する物証となり得るのだが……。

「クセえのはこいつぐれーか」

と、ガストンがぽんとラムザに放って寄越したのは、深緑色の布を紐で巻いた包みだった。

ナツシュが感心する。

「あ、すごい！どこで見つけたの？」

「川原の草ん中に落ちてた」

ラムザは手の平の上で重さを確かめた。

「お財布……じゃないな。軽い。何だろう？」

紐を解き、包みを開けてみた。

中から出てきたのは、古びて擦り切れた革手袋が片一方。

アルガスが、ポカンと口を開けた。

「いや……それは、奴らのじゃない。オレの手袋だ……」

「あ、そうなんだ」

ラムザは少しがっかりして、アルガスに革手袋を包みごと返した。

アルガスは不思議そうに、革手袋を手にとって眺める。

「何でここに……？二週間くらい前に、片っぽだけなくしたんだ。

そう、なくした方の右手だぜ、こいつは……」

「……え？」

ナツシュが首をひねる。

「韋駄鳥チヨコボの鞍袋に入れてたのを忘れてて、それが何かのはずみに落ちたとか？」

「いや、そんなはずない。荷物は出発の前に一から詰めた。だいたい、この包みの布はオレのじゃない……」

「はあ？どーゆーこった？」

ガストンは頭を掻く。

じつとアルガスの顔を見ていたディリータが訊いた。

「……お前達、今日どこに行く予定だった？」

「え？オレは知らないぜ。お忍びの旅だか何だか、随行員にも旅程は秘密なんだ」

「じゃあ、旅程を把握していた人間、あるいは、そもそも計画した

人間が誰だかわかるか」

「侯爵様と、秘書役も兼ねた司祭様、それに近衛隊長は全日程をご存じだったと思う。……それが何か？」

アルガスと士官候補生達はディリータの思惑がわからず、次の言葉を待った。

「旧街道沿いに大きな街は少ない。終着点のイグーロスを除けば、大修道院のあるレーゲンデと、ベオルブ家の本拠地・ドラコニア城くらいだ。それだって、マンダリア街道の本道を進んで、もっと近くまで行ってから曲がる経路ルートを選んだ方が、道路の状態も警備体制も良かったはずだ。

何故、敢えて寂れた旧街道に進路を取ったのだろうか？ 単に道を間違えたとも思われない……」

ラムザが口を開いた。

「つまり、こういうことかい？」

誰かが犯人達に旅程を漏らして……もしくは、そもそもこの道を通るよう仕向けて、待ち伏せを手引きした、と？」

アルガスの顔が青ざめた。

「ま、まさかオレを疑うのか！？ 一人だけ生き残ってたからって？ ディリータはアルガスの反応を確かめるように、ゆっくりと話した。

「お前がもっと権限ある立場の人間だったなら……そうだ。だが、たかだか騎士見習いでは、極秘の旅程の知りようもないだろう。まして、計画に参加できるわけもない」

「お、おう。当たり前だぜ。オレはどうせ下っ端さ……悔しいけどな」

アルガスは面白くなさそうにぶすつと言う。

「そうだね。それに、本当の共犯者だったら、わざわざ『自分のだ』なんて怪しまれることは言わない」

言いながらラムザは、内心舌を巻いていた。

（ディリータは用心深いな）

相棒を尊敬し、また空恐ろしくも思うのは、こんな時だ。

アルガスを検索から外したのは、てっきり体力的・精神的負担を
氣遣ってのことだと思っていた。

だがディリータは、念入りに証拠も目撃者も消した犯人達がアル
ガスに止めを刺さなかったのが、単なる偶然ではない可能性に配慮
していた。もしもアルガスが何らかの形で事件に加担しておれば、
証拠を隠滅する恐れがある……と考えたのだろう。

「この手袋は、参考のために騎士団に提出するよ。それでいいか
い？」

「ああ。オレには何も、やましいところなんかないぜ」

ラムザは革手袋と包みの緑の布を、リュックサック背負い鞆にしまった。

「さっきの連中を生け捕りに出来なかったのが悔やまれるな。訊
問すれば、もっと何かわかったんだろうけど……」

ディリータが首を横に振る。

「贅沢言うな。僕らの力量では、レベルまだまだ……。他に救援が望めな
い状態では、一人ずつ確実に仕留めていかなければ、味方に損害を
出していただろう。」

それに多分、後からおこぼれを拾いに来た連中は、最初の襲撃計
画の内容を深くは知らなかったろうと思う……。」「

（……、”生かしておいた”かもしれないアルガスを始末しようと
していたんだからな）」

「そう……か。まあ今回は、もう仕様がな。生け捕りは今後の
課題だな。」

さて、残る問題は……」

ラムザは周囲を見回した。

「亡くなった方々をこのままにして、僕らがここを離れるわけには
いかないね」

アルガスがうなだれる。

「ああ。また獣や盗賊が来るかもしれない」

ナツシュが提案する。

「半分ずつに分かれましようか？三人が残って番をして、三人が騎士団の方々を呼んでくる、というのは？」

ディリータは素早く組み合わせを考えてみたが、

「いや……分散するのは矢張り危険だな。何かあった時に対応しきれない」

サーシャがラムザをつついた。

「ねえ、班長は信号弾をもらってるんじゃない？」

「うーん、ここはどここの騎士団の駐屯地からも遠いよ。信号弾や狼煙を上げても気付いてもらいにくいと思う。それも、犯人達の計算のうちだったんだろうな……」

「じゃあどーすんだよ？」

と、ガストンが苛々して言う。

ディリータは腕組みして、少しの間思案した後、

「……ナツシュの魔法で氷漬けにしておけば、人にも動物にも手は出せないだろう。並の魔道士では溶かせないと思う」

ラムザはポンと手を打った。

「それだ」

ガストンがヒュウツと口笛を吹く。

「ディリータ、てめー、やっぱ頭いいなー」

「お前と違って、本を沢山読むからな」

「いーんだよ、俺は肉体派で！」

ラムザがまた軽口を叩く。

「そうだよ、取り柄は人それぞれさ。今日だってそもそも、ガストンが知能と引き替えに鍛えてきた視力のおかげで、事件を発見出来たんだし」

「てめー、マジでシメる……！」

ガストンの裏拳を、ラムザは取り押さえた。

「冗談はおいといて。騎士団の調査のためには、なるべくこのままにしておいた方がいいんだろうけど……、」

「人間らしくお弔いしてあげたいわよね」

「うん、そう思うよ、サーシャ。体が硬くなってしまわないうちに、見苦しくないように整えて差し上げよう。」

ディリータが詳しい記録を取ったよな？」

「ああ。倒れていた場所を小石や縄で囲ってわかるようにしておいて、一カ所にまとめよう」

ナツシュも言う。

「ぼくとしても、その方が……。流石に、十回以上も強力な魔法を唱えるのは無理がありますから」

少年達は黙々と、倒れている韋駄鳥チヨコボの横に遺体を集めて並べる作業に取りかかった。

二人一組で遺体を運び、両足は真っ直ぐに揃え、手は胸の前に組む。顔に付いた血や泥を拭い、目蓋と顎を閉じて、表情を穏やかにする。斬り飛ばされたり赤山猫レッドパンサーに食い千切られたりした手足を合わせ、盗賊に？ぎ取られた鎧やかつらも元の通りに戻す。

亡くなった人々は、騎士や見習い騎士ばかりではなかった。司祭、侍医。風流人のエルムドア侯らしく、豎琴ハープ弾きの楽士もいた。

最年少者は、十一、二歳の小姓の少年だ。

「流石に女はいねーか。まさか、こいつが情人いろだとかつつたら、侯爵様だろーが何様だろーが見捨ててるぜ？」

「ガストン、失礼だよ！」

相方の怖さも忘れて、ナツシュは怒った。

「ナツシュ。ガストンにも、同じくらいの年の弟がいるんだ」

「あ……、そうなの？」

乱暴者のガストンでも、あどけない死に顔がいたたまれないのか、とナツシュは意外な一面を見たように思った。

「侯爵様は女を連れ歩く必要なんかねえよ。どこに行ったらってモテモテだからな」

アルガスは羨ましそうに言う。

「洗練された美男子様だそうね！一度でいいから御本人にお会いし

たいわゝ」

サーシャが、このような時にも関わらず、うっとり夢見がちに言った。

ラムザとデイリータは、下穿き以外全て？ぎ取られた、一番ひどく略奪されている遺体を運んだ。

(……！？)

(……)

デイリータがラムザにそっと頷く。

「アルガス、この方は？」

「近衛隊長だ。オレの直接の主だった」

アルガスは盗まれた衣類や武具を、亡くなった主人に着け直した。
「近衛隊長の剣か！切れ味がいいはずだぜ」

ガストンは、彼が倒した盗賊の使っていた剣を鞘に収め、アルガスに渡した。

「……。この剣、オレが持っていていいか。コイツでみんなの仇を討ちたい……！」

「……、わかった。そうするといい」

ラムザは剣を握り締めたアルガスの手を、軽く押しやった。

アルガスは革帯ベルトを、鞘が右に来るように腰に巻く。

「あれ？君は魔法剣士かい？」

通常、剣士は右手に剣、左手に盾を持つよう訓練される。ただし、魔道士は心臓に近い左手に杖や魔法具を持った方が魔力を制御コントロールしやすいとされ、魔法剣士は例外的に、魔力のこもった剣を左手に持つこともある。

「いや。ただの左利きさ。悪いかよ？」

聖アジョラを神聖雄帝国ユードラに売り渡した”裏切りの使徒”ゲルモニークが左利きの魔法剣士だったため、グレバドス教文化圏では、左利きには不吉な印象イメージがつきまとう。

「別に悪いとは言っていないよ。僕も実は、小さい頃左利きだったんだ。魔法の才能は伸びなかったんで、ザルバッグ兄さんの特訓で

右利きに直されたけどね」

盗賊達と赤山猫^{レッドパンサー}の死体も一カ所にまとめた後、少年達はしばし黙
祷を捧げた。

「えーと。じゃあ、強めにいきますよ」

ナツシユは深呼吸して呪文を唱える。

「無念の響き、嘆きの風を凍らせて忘却の真実を語れ……、”^{リザガ}上級
凍気魔法”！」

十七人と三頭の亡骸は、即席の氷の棺の中に閉じ込められた。

？
一 第2章 武門の子として 「1」 マンダリア平原（後書き）

この物語は推理小説ではありません。読者の皆様は事件現場の状況を頭に入れておこうとなさる必要はないです（笑）。

？―2―「2」 成都イグーロス ベオルブ邸

明けて翌々日。※白羊の月（※太陽暦三月下旬～四月上旬）四日、
※金牛^{タウロス}の刻（※午前八時～十時）――。

「あら。ラムザ坊ちゃんたら、公然と欠課^{おサボリ}？さあさあ、先生方に
告げ口されなくなったら、買ってらっしゃいよね」

イグーロス城から城下町に出て程なく、五人の士官候補生達とアルガスは、果物売りにつかまった。

「違うよ。僕らは特別な用事があるんだ」

アルガスは、ラーグ公の軍師でありラムザの長兄でもある、ダイスダーグに目通りを願っていた。今朝、許可が下り、これからベオルブ家の城下屋敷に向かうところなのだ。

「ふうん？まあ、いいわ。」

林檎、美味しいわよ。^{アダマンナッツ}亀甲果も甘くて身がしまってるわ。お友達
の皆さんもいかが？」

「うーん、いい匂い！でも、今は本当に用事の途中なんだ。残念だ
な。休みの時^{オフ}だったら、籠一杯もらうよ」

「ふふ、是非そうして。またね」

果物売りと別れ、大通りを東へと歩く。建物の間から、士官学校^{アカデミー}
生達が市街地を囲む城壁の上を走っているのが見える。

「矢^{おサボリ}つ張り、欠課に見えるかしら……」

「厳しすぎやしませんか？ぼく達の班以外みんな城壁三周なんて……。
。ガストンでもない」と、あれ”はなかなか気付きませんよね。
ぼく達が顕彰されただけで充分だと思えますけど」

ラムザ達は、昨日の午前中まで北天騎士団の事件調査に同行した
後、特別にイグーロスまで韋駄鳥^{チヨコボ}を貸し与えられた。

今朝の朝礼で、遭難者を救助したラムザ達五人が表彰された一方、
他の士官候補生達は”たるんでいる”として全員罰課を課されたの
だ。

「“政治的配慮”というやつさ」

と、ディリータがぼかして言う。

「……？」

ラムザがくすりと笑う。

「セヴィの班が最下位びりだったんだ」

ナツシュは納得した。

「ああ……。セヴェリーニ君のお父上は、ゴルターナ公陣営の大物ですからねえ」

「うっかり恥をかかされると、外交問題に発展しかねないものな」

少年達はラーグ公の家臣達の住まう屋敷町を通り抜ける。

ガリオンヌ領内の主立った貴族達は、イグーロスに城下屋敷を持っている。普段は自分の封地の城塞に居を構えている者でも、治安や利便性、また社交上の観点から、妻子——特に娘は城下屋敷に住まわせることが多い。

イグーロス貴族学院は、そのような貴族の子女に教育を施すために設立された。

その貴族学院と、大聖堂も通り過ぎる。

「おいおい、まさかとは思うがよー……、」

ガストンは、左手に延々と続く高い塀をちらちらと見上げた。

「うん。ここだよ」

ラムザが指差した、城下でも最も広い敷地を持つ大邸宅の屋上に、ベオルブ家の家紋である”黒翼の白竜”の旗が翻っている。

ラムザは門衛達に手を振った。

「ただいま！」

直立不動の姿勢で彫像のように立っていた、二人の衛兵の顔がほころんだ。

「若様！お帰りなさいませ！」

「お久し振りッス！背、伸びたッスね。ディリータ君も！」

ラムザは門衛達の横を通りながら、ひょいと背伸びする。

「あ、やった！追い抜いてる」

門衛達は笑って、ラムザの頭を押し戻した。

「今のはバレバレッスよ、若様ー」

「でも、本当に大きくなられましたねえ。次の冬頃には、冗談抜きに追い抜かれそうですよ」

門をくぐって、級友達は驚く。

「大っっ……きい！」

ナッシュが子供のように感嘆した。

「てめーん家だちって小さくはねーだろ」

「うん、でも、これは……規模が違スケールうよ！」

手入れの行き届いた庭園と、厳めしく壮麗な館。

「これで、もっと広い本宅があるっていうのがびっくりよね……」

「んー、どっちが本宅とも言い難いよ。今は、当主のダイスダーグ兄さんがいるここっちが本宅……かな？」

ラーグ公が最も信頼を寄せる臣下であり、公の幼馴染みでもあるダイスダーグは、私プライベート的な時間のほとんどをイグーロスの城下屋敷で過ごす。

次兄・ザルバグは、ドラコニア城の武骨で飾り気のない造りを好んでいるようだ。

亡きバルバネスも、城下屋敷よりはドラコニア城に滞在する期間が長かった。

「ドラコニア城はね、広いことは広いけど、ごく実用本位で、華やかさはないよ。」

中庭なんて、ただの草地の運動場だし。他の庭の植物も全部、籠城戦に備えて食用か薬用なんだ。勿論、毎日の料理にも使ってる。

屋内の装飾品だって少なく、大広間の軍旗とか盾とか、全部”見せる収納”なんだよ。戦があるとみんな持ってくるから、がらーんと寂しくなっちゃってね……。

僕はドラコニア城の方が性に合うなあ。城下屋敷こっちは綺麗すぎて、

四六時中お行儀良くしてなくちゃいけない気がしてさ」

ラムザは肩をすくめて、ペロリと舌を突き出す。ガストンが声を立てて笑った。

「……」

アルガスは、緊張して声が出ないようだ。

ラムザはアルガスの肩を軽く叩いた。

「近道するよ。庭を通って行こう」

「おっ……、おう」

ラムザ自身、妹のアルマと共に初めて城下屋敷に連れて来られた時には、緊張と不安で言葉を失ったものだ。

母子三人で暮らしていたマンダレーナ村の家は、少々大きめの農家を診療所に改装した、つましいものだった。

母のファティマが村人達から尊敬され、大切にされていることに不自然は感じなかった。近隣の村々の中でも唯一人の”お医者先生”だったからだ。だが実の所、時折ふらりと現れては子供達と遊んでゆくだけの父の”偉さ”は、幼いラムザには実感出来なかった。

ベオルブ家の本宅といっても、村長さんの家より一回り大きいくらいかな、という程度に思っていた。

実際に足を踏み入れた城下屋敷は、子供心に想像していた王宮をもはるかに上回った。

建物自体の荘重さもさることながら、大人達の慇懃な態度と、その裏に見え隠れする冷ややかな侮蔑と好奇心の色とが、ラムザを畏縮させた。

ファティマが一緒でないことが心細かった。

バルバネスの背中もまた、遠く感じられた。

そこにいるのは、草笛や、風車の作り方を教えてくれる”父さん”ではない。

大將軍で伯爵様の”父上”だ。

泣いてしまいたかった。腕にすがりついてくる、小さな妹がいなければ。

いつも明るく物怖じしないアルマが、片腕に縫いぐるみの”モグちゃん”をきつく抱き締め、もう一方の手に固くラムザの手を握って、うつむいて歩いていた。

——アルマ。アルマ、大丈夫だよ。お兄ちゃんがついてる。

強く手を握り返して囁くと、今にも泣き出しそうな顔をしていたアルマが、にっこりと笑った。

ラムザも笑った。不思議と心が落ち着いて、何事にも負けない気がした。……

「……あれ？」

中庭の椎の木の下で、若い女中^{メイド}が三人、洗濯籠を足元に置いて梢を見上げている。一人が木に登ろうとするが、長い裳^{スカート}が邪魔になって登りにくいようだ。裾をたくし上げて縛ろうとする。

ラムザは友人達を振り返り、シーツと口の前に人差し指を立てると、忍び足でそうっと女中^{メイド}の少女達の後ろに近付いた。

「アニー、ベティ。どうしたの？」

女中達^{メイド}は飛び上がって驚いた。

「きゃ！やだ、若様！いつの間にお帰りになってたんですかあ？」

「名前、覚えてて下さったんですね。嬉しいですうー」

「えーと、もう一人の子は新人？」

年長の二人の女中^{メイド}は、恐縮して後ろに隠れている少女の背中を押した。

「この子はキャリイっていいですよ。今月入ったばかりですよ」

「……お初にお目にかかります……」

消え入りそうな声で挨拶した少女は、アルマと同じ年頃だろう。

「で、何があったの？」

「アルマお嬢様の肩掛け^{ショール}を風に飛ばされちゃったんですよ」
キャリイが頭を下げる。

「……申し訳ございません……」

アルマの赤い肩掛け^{ショール}は、※十歩^{ドールマ}（※約六メートル）ほどの高さに引っ掛かっている。

「ああ、あれか。ここは、ドラコニアきつての木登り小僧と呼ばれた僕の出番だろ」

と、ラムザは長靴^{ブーツ}を脱ぎにかかる。

「えーっ？結構ですう！悪いですう、若様にそんなことしていただくなんてえ……」

「じゃ、心配だから、下でじいーつと見守ってる」

と、ラムザはしゃがんで、悪戯っぽくアニーを見上げる。

「……それはあ……ちよつとお……」

「嫌だろ」

ラムザは笑って長靴^{ブーツ}と靴下を脱ぎ捨てると、するすると木に登り、あつという間に肩掛け^{ショール}を枝から外して戻ってきた。

「わあ、有難うございますうー！」

ラムザは肩掛け^{ショール}を手渡しながら、新入りの女中^{メイド}に微笑みかけた。

「この辺り、丁度風の通り道なんだ。覚えといて、キャリイ」

「は、はい……有難うございます……」

館主の末弟に声を掛けられたのは勿論のこと、会ったのも今日が初めて少女は、頬を染め、上の空で返事をした。

ラムザ達が通り過ぎると、女中^{メイド}達はまだ耳に届く所で、黄色い声を挙げてはしゃいでいる。

「ねっ、ねっ？とおーっっても綺麗でしょお？」

「それに気さくだし、逞しいしいー！」

ガストンがラムザの金髪頭を押さえ付けた。

「そつがねーな、この女つたらし」

「え？別に、女の子限定ってわけじゃないよ。ベオルブ家で働く人全員の顔と名前ぐらい、覚えてるよ」

ディリータが相の手を入れる。

「人の上に立つ者の心掛けだろう。一人一人気に掛けられていると思えば、やる気も起こるし敬意も湧く」

ラムザは笑って、首を横に振る。

「そんな、深く考えたことないな。僕はただ、人と話すのが好きっ

ていうか……しょっちゅう顔を合わせる人の名前も知らない方が、気持ち悪くないかい？」

サーシャが、ふふ、と笑う。

「誰にでも友好的なのはいいけど、女の子にはあんまり優しくしすぎない方がいいわね。自分だけ特別なのかと勘違いしちゃうかも。

あ、でも、あたしはちゃんとわかってるから。これから優しくしてね！」

「そういうものかな？ みんなに同じように接していれば、誤解は生じないと思うけど……」

ナツシュが腕組みして、うーんと唸る。

「いや……確かに、マズいかも……」

アルガスも顔をしかめた。

「くっそー、ここにも一人、モテざる者の苦勞を知らねえ野郎がいたか」

少年達は噴水の前で立ち止まった。

「じゃあ、ディリータと僕はアルガスに付き添うとして……君達はどうする？ 庭を見ていく？ 客間に案内しようか？」

「ぼくはもう少しお庭を見て歩きたいですね」

「そうね、お天気もいいし」

「おー、適当にぶらぶらさせてもらうぜ」

「わかった。じゃ、ここで待ち合わせにしよう。また後でね」

アルガスはラムザ達の後について回廊から館の中に入り、三人の士官候補生達は庭の散策を続ける。

ラムザの長兄・ダイスダグは、ラーグ公と同年の三十七歳。ラムザにとっては、兄ではなく父であってもおかしくはない年齢だ。

実際、数年の内にも養子縁組をして義父ちちと呼ぶことになるかもしれない。

そのようなつもりで、ラムザは年の離れた長兄に接してきた。

「初陣を勝利で飾ったそうだな。兄として嬉しいぞ。

他の重臣の方々も、さすがベオルブ家の血を引く者と誉めておいでだったぞ」

「……ありがとうございます」

「なんだ、嬉しくないのか？」

「いえ、そんなことはありません。お褒めの言葉、有り難く存じます」

ダイスダーグは家族の前ですら”政治家”の顔をしている。

人間臭い遊び心のあった父とは違い、打ち解けた笑顔を見せることもなければ、怒りも哀しみも表に現すことが少ない。

ラムザは幼いうちこそ、どうにかしてこの堅物の長兄を笑わせたり、慌てふためかせたり出来ないものかと、あれこれ悪戯を仕掛けてもみた。

だが最近では、こちらも私情を顕わにせず、儀礼的な会話に終始することに慣れてきた。

ラムザはそのことを寂しく感じているのだが、ダイスダーグの方はどうなのだろう？

長兄の本心がわかる、という自信はない。

「報告があったと思いますが、エルムドア侯の韋駄鳥車チヨコボが襲われ、誘拐されたとのこと。いかがなされますか？」

「うむ。ザルバッグに捜索隊を出すよう、すでに手を打っている。

また、いずれ、奴等から身代金の要求もあろう……。侯爵殿が生きておいでならばな」

アルガスは席を立ち、ダイスダーグに丁重に頭を下げた。

「お願いします、ベオルブ閣下。何卒、私に百の兵をお与え下さい！」

「……………」

「何卒、お願い申し上げます。奴等に殺された仲間の仇を私にッ！」
ダイスダーグは、黒檀の卓子テーブルを指で軽く叩いた。

「手を打ったと申しておる。それがわからぬわけではあるまい。

ここは貴公が暮らす土地ではない。ガリオンヌのことは我らに任せておくことだ」

「し、しかし！」

食い下がるアルガスを、ダイスダーグは一喝する。

「身分をわきまえぬか、サダルファス殿！貴公は騎士の称号すら持たぬ一兵卒にすぎぬことを、忘れておいでか？」

「くッ……………」

アルガスは唇を噛み、のろのろと腰を下ろす。

「お前達士官候補生には、予定通りこのイグーロス城の警護についてもらおう。

なに、それほど難しくはない。”危険”がこの城市にまで及ぶこととなかなろうよ」

ラムザ達が再び庭園に出ると、級友達は噴水の脇の長椅子に座って待っていた。

「よお、どーだった？…………って、聞かぬ一方が良さげなフンイキだな」

アルガスは苦虫を噛み潰したような顔をしている。

「ごめんね。無い袖は振れないんだ。ラーグ閣下に今動かせる騎士団もみんな手一杯で、僕達士官学校生が動員されるくらいなんだよ。」

たえ君が千騎長でも、兄さんの返答は同じだったと思う。断り方が丁寧になるぐらいで…………」

ラムザは慰めたが、ディリータは、同情するよりもむしろ咎めるような調子で言った。

「ああいう心づもりなら、事前に僕らに相談してほしかったな。

昨日、騎士団の方に念を押されたろう。この一件は他言無用だと…………」

五大領主の一人ともあろう者が盗賊の小集団に不覚を取ったと知れば、威信が失墜する。事件が表沙汰になるだけで、たとえエル

ムドア侯の命は助かって、政治生命が危うくなる恐れがあった。今朝も、ラムザ達^が”強盗の被害者”を救助したとは発表されたが、エルムドア侯誘拐^{について}は一言も触れられなかった。

「なるべく少数精鋭で、隠密裡に、早期に救出することが望ましい。仮にお前が將軍級^{クラス}だったとしても、大兵を出動させて人目を引くべきじゃないところだ。

……軍師たるダイスダーク様は、そういう短慮を嫌う。

兵を与えてくれ……というのではなく、兵の一人として搜索隊に加えて頂ければお役に立ちます……とでも申し出れば、便宜を図って下さったかもしれないものを。

まあ、今からでも遅くはない。今度はもっと慎重に、搜索隊の責任者の方^にでも、話を持ち掛けてみたらどうだろう」

「……」

「自尊心が許さないか？だが、イグロス城で客として無為に過ごすよりは、たとえ一兵卒でも、現場に出た方が功名を立てる機会^{チャンス}はあるはずだぞ」

その時、ナツシュが突然大声を挙げた。

「あっ、思い出した！」雪華騎士団^{せっか}”だ！”

「なあに？ナツシュ君たら、急に」

「アルガス君の名字だよ！どこかで聞いた気がしてたんだ。雪華騎士団のサダルファス家でしょう？」

ナツシュの興奮は、ガストンには理解できなかった。

「そんなに有名なのか？」

「有名も有名！兵法学の教科書にも出てたじゃないか！」

ルオフォンデス地方の旧家であるが、初代は七王国統一戦争時代^{ロマンダ}に呂国から家臣団ごと移住してきた、亡命貴族だった。

不可能と言われた雪山越えの経路^{ルート}を使って、敵の背後を突く。土囊に水をかけて凍らせ、一夜にして防壁を築く。……など、北国出身だけあって、冬場や寒冷地での戦で特に力を発揮してきた。

六芒星のような、雪の結晶の紋章が家紋である。

「すごいなあ！侯爵様の御一行に加わるくらいだから、只者じゃないだろうとは思ってたけど！」

アルガスは、ぷいとそっぽを向いた。

「そうさ。オレの家も昔は、ベオルブ家みたいにみんなから尊敬される家柄だったんだ」

「……？」

水路に架けられた橋の上に立ち、アルガスは水面に映る影に目を落とす。

「先の大戦の時に、オレのじいさんが敵に捕まってなあ……。」

じいさん、自分だけ助かるために仲間を敵に売ったんだよ。そう、自分の命を救うためにね……。

でも、敵の城を出たと勝手に背後から刺されて死んじゃった……オレみたいな見習い騎士にな。

そんな話を、じいさんの仲間だった一人が命からがら脱出してきて、方々に吹いてまわったんだ。

もちろん、オヤジは信じなかったよ。

でもな、みんなその話を信じた。そして、みんな去っていった……」

…

「知らなかった……。ごめん。それで……、」

ナツシユはまた余計なことを言いそうになり、慌てて口を手で押さえた。

アルガスのみすぼらしい身なりのことだ。

豊かだった父祖の代の残り物なのだろう。

没落したサダルファス家では、家宝家財もほとんど手放さざるを得なかったはずだ。骨董的価値のある物は人手に渡ってしまい、手元に残ったのは、売るには傷みすぎている物や、単なる時代遅れの中古品ばかりだったのではないか。

なまじ材質は良いだけに、安物の新品を身に着けるよりも貧乏くさく見える。

「サダルファス將軍が味方を裏切ったというのは、一つの”解釈”にすぎないんだ」

と、ラムザが話し始めた。

「事実だけ順に並べると、こうなる。

まず、サダルファス將軍——アルガスのおじいさんが、部下や友軍の騎士十数名と一緒にオルダリーフ鷗国軍の捕虜になった。

それからしばらくして、オルダリーフ鷗国軍の裏をかいたはずの行軍計画が正確に読まれ、雪華騎士団の残りの部隊と友軍の二つの騎士団が壊滅的な打撃を蒙った。

その後で、身代金受け渡しや捕虜交換もなしに、サダルファス將軍一人が突然解放された。そして、直後に雪華騎士団の生き残りと思われる見習い騎士に暗殺された……。

最初の戦闘で捕虜になった他の騎士達は、後の戦闘で捕らえられた人達と併せて身代金が支払われ、全員が故郷くにに帰った」

ラムザは一旦言葉を切り、友人達の顔を見回した。

「一番単純な解釈としては、サダルファス將軍が軍事機密を明かすのと引き換えに身柄を解放してもらい、味方の恨みを買って殺された……という風になる。

でも、別の解釈も成り立つだろう？

たまたま、敵軍に読みの鋭い策士がいたのかもしれない。あるいは、機密を漏らしたのは一緒に捕虜になった別の騎士かもしれない。あるいはサダルファス將軍だったにしても、自分だけ助かるためじやなく、味方をタネに脅されたのかもしれない……。

それを、オルダリーフ鷗国軍側が……または味方の誰かが、サダルファス將軍に疑いを向けさせ、名声を貶めようと仕組んだ可能性もある。

怪しいのは、將軍を暗殺した見習い騎士が行方知れずになっていることさ。口封じのために始末された……とも、そもそも、とつくに戦死した人に変装した殺し屋だった、とも考えられるんだ。

元はといえば、サダルファス家ロマンダが呂国を追われたのも、大功を立てすぎて他の貴族から疎まれ、無実の罪を着せられたからなんだ。

「ここでも歴史が繰り返されたかもしれないのさ」

アルガスはじつとラムザを見つめ返した。

「随分詳しいじゃねえか」

「……他人事と思えなくてね」

ラムザは鮮やかな黄金色の髪を指で梳った。

「……」

アルガスも、くすんだ金髪をちよいちよいと撫で付けた。

「オヤジは、誰と名指しでこそ言わないが、じいさんと一緒に捕虜になった連中の何人かを疑ってる。でも、先代の侯爵様に真相究明を願うことが出来なかった……」

そうさ。ウチは元々、てき鷗国の同盟国からの亡命貴族さ。よそ者さ。妬みや疑いを買いやすかった。特にあの頃は、ロマンダフォボハム領が呂国軍に侵略されてたからな。

事実がどうあれ、寄ってたかってじいさんに不利な証拠をでっち上げられるんじゃないかって、心配したんだ。うっかりすれば、名誉毀損で返り討ちに遭う。辛うじて残った地位や財産や……命まで失うかもしれないかった。

オヤジはもう結婚していて……オレはまだオフクロの腹の中にもいなかったけど、姉上は生まれてた……」

だから、オヤジはじつと我慢して……とき時機を待つことにした。手柄を立てて、もう一度押しも押されもしない身分になってから、じいさんの名誉を回復しようと……」

アルガスは金髪頭を振り、唇を噛んだ。

「オヤジは軍才が無かったわけでも、臆病だったわけでもない。でも……でも、もう人が付いてこなかったんだ。ちよっと旗色が悪くなるみんな、オヤジを置いて勝手に逃げちまう。」

功の立てようもないうちに、オルダリーア鷗国との戦いは終わっちゃった……」
アルガスは小石を拾い、水路に投げ込んだ。金色の鯉が逃げた。
った。

「身分か……。たしかに、オレ一人じゃダイスダーグ様には会え

んよなあ……」

と、そこへ――。

階段状に引かれた水路の上流から、明るく弾んだ、若い娘の声が降ってきた。

「兄さん！」

ラムザによく似た――ラムザより更に一回り華奢な、蜂蜜色の髪の毛の美少女が、輝くばかりの笑顔で手を振っている。

ディリータとラムザは同時に、声のした方を振り仰いだ。

「ティータ！」

「アルマ！」

赤い晴着を着た蜂蜜色の髪の毛の少女は、水路に沿った白い石段を駆け下りてくる。その後ろを、薄紫の晴着に漆のような艶やかな黒髪の毛の少女が小走りで追う。

ガストンが、ひゅうつと口笛を吹いた。

「さっすが、ラムザの妹！上玉だなー！^{ハイレベル}」

「誉めたって、やらないぞ」

ラムザは鼻を高くする。

と、見る間に蜂蜜色の髪の毛の少女は水路を飛び越し、花壇の中を近道して、人工の滝の縁に上がった。

「え、ええっ？うわーっ！」

両腕を広げて飛び下りてきたアルマを、ラムザは駆け寄って間一髪で抱き止める。

「ラムザ兄さん、お帰りなさい！戻ってるんなら、真っ先に可愛い妹に挨拶に来るのが礼儀^{キス}ってもものでは、もう」

首に抱きついて所構わず接吻^{キス}してくる妹を、ラムザは引きはがして地面に下ろした。

「アルマ！おっ前なあ。もっと普通に、大人しく登場できないのか？」

黙って立ってれば可憐な深窓の御令嬢なのに。友達の前で、恥ず

かしいじゃないか！」

「ああら、それを言ったらラムザ兄さんこそ。

黙って立ってれば笑顔の甘い貴公子様なのに。モルボル花虫も真っ青の大食いと、天晴れなまでの舞踏ダンスの才能の無さで、何人の女の子を幻滅させてきたと思ってるの？

一緒に宴席パーティーに出るのが恥ずかしいわよ」

「別に、女の子にモテるのが騎士の仕事じゃないだろ！」

兄妹のやりとりを聞いていたガストンが、吹き出して拍手した。

「くっ……あーっはっはっは！さすが、ラムザの妹だ！いーね、いーねえ。可愛いだけのただの箱入りお姫さんよりや、百倍上等だぜ」
「まあっ、御理解頂けて嬉しいわ」

？刺とした生命力に溢れた飴色カaramelの瞳をきらきらさせて、アルマは笑う。まだ顔付き体付きも大人になりきっていない十四歳だが、既に得も言われぬ艶あでやかさがある。

「この悍鳥じやじやチヨコのお喋り大魔女女王を、これ以上増長させないでくれ！」
ラムザはガストンの胸を叩く。

「だいたい、礼儀って言ったら、クララ義姉上あねのご機嫌伺いが先だろ。義姉上はどこだい？」

「クラリエツタ様は王都にいらっしゃいました。国王陛下のお見舞いと、王妃様のお話相手に」

と、答えたのは、後から来た黒髪の少女だ。

「ティータ」

ラムザは、実の妹に対する以上に優しく微笑んで、ディリータの妹の額に軽く口付けした。

「会う度にますます貴婦人らしくなるねえ。この気品としとやかさ、誰かさんとは月と銭亀ギルガメの違いだよ。素質の差かな。それとも努力の差かなあ」

ティータははにかんで、首を横に振る。

「ラムザ兄さんっっ！」

アルマはラムザの耳をつねった。

「ほら、それだからお前は百年かかってもティータの足元にも及ばないんだ！爪の垢でも煎じて飲めよ」

サーシャがくすくすと笑う。

「とつても仲がいいのね。何だか羨ましいわ」

「あらっ、素敵な方ね。……でも、ご存じかしら？ラムザ兄さんの彼女と認定されるためには、ティータとわたしとから成る選考委員会の審査を通過^{パス}しなくちゃならないってことを」

「まあ……、頑張るわ」

「こら、アルマ！サーシャまで！サーシャはただの級友^{クラスメイト}だって」

「本当の本当にー？わたしに隠れて女の子とお付き合いするなんて、許さないんだから」

「お前、少しは黙ってろよ」

ラムザはアルマの唇に人差し指を当て、その上に音を立てて接吻^{キス}した。

兄妹とも美しいだけに眩しく、ナッシュとアルガスは思わず目を伏せた。

「紹介が遅れたけど、こいつが僕の妹のアルマ。こっちは、ディリータの妹のティータ」

アルガスが鼻の下を伸ばして、揉み手する。

「いやあ、最初にアルマちゃんを見て、こんな可愛い子は畏国^{イヴァリース}中探しても滅多にいないと思ったのに……もう一人いるとは恐れ入ったぜ」

「誉めたって、やらないぞ」

すかさず、今度はディリータが言った。

「そして……、」

ラムザの視線の先に、引き締まった骨太な体格の、軍装の武人がいる。悠然とした足取りで水路沿いの階段を下り、近付いてきた。

「お久し振りで。ザルバッグ兄さん」

「うへっ……！？」

見習い騎士達は、慌てて姿勢を正した。

「ああ、構わん。楽にしてくれ」

ラムザの次兄・ザルバッグは、二十八歳の働き盛りだ。

前王デナムンダ？世から『畏国イザアリースの守護神はガリオンヌに在り。ベオルブの名の下にこそ、勝利がある』と絶賛された、常勝將軍である。

陽気でざっくばらんな気性は、父のバルバネスに近い。若き故か、父よりは短気だろうか。腕白な弟を叱る時は、いつも怒声より先に拳骨が飛んできた。

「聞いたぞ。早速二度も手柄を上げたそうだな。それでこそベオルブ家の一員だ。亡き父上も喜んでおいでだろう」

「……ありがとうございます」

「ふふっ、あいかわらずだな。こんな言葉じゃ素直に喜べんか」
ラムザは首を横に振った。

「僕一人の功ではありません。ここにいるみんなのおかげです」と、級友達を紹介する。

ザルバッグは頷いた。

「そのようだな。君達のおかげで、侯爵殿誘拐事件の貴重な証言者を失わずに済んだ。よくぞやってくれた。礼を言う。」

然るべき褒美をやりたいところだが、事件の性質上、目立つことはしてやれんのだ。すまん」

ナツシュは緊張と感激に震えながら、裏返った声で答えた。

「いつ、いいいいっ！」 聖將軍”ザルバッグ様から直々にお誉めの言葉にあずかっただけで、この上もない栄誉でございますっつ！」

ザルバッグはからからと笑って、ナツシュの肩をポンと叩いた。

「が……そうだな。事件が一段落したら、うちで一緒に晩飯でもとうだ。弟がどんな学校生活を送っているのか、聞かせてくれ」

アルマが横から口を挟んだ。

「わたしも是非お伺いしたいわ。ラムザ兄さんってばヤンチャな上におボケだから、”武勇伝”に事欠かないんじゃないやありません？」

「ははっ、そりゃーあもう……」

と、ガストンが意地悪くにやにや笑う。

「余計なこと言うなよ」

ラムザは、妹と悪友をつついた。

ザルバッグが咳払いする。

「それは楽しみだ。たつぷりと話してもらいたいものだな」

ラムザは肩をすくめて、天を仰いだ。ディリータが、クツと笑いを囁み殺す。

「ディリータ。たくましくなったな。お前の活躍の話も聞いたぞ。

ティータが嬉しそうだった。なあ？」

ザルバッグがティータの肩を押すと、控え目な少女はやっと兄に話し掛ける機会^{チャンス}を得た。

「ディリータ兄さん。お元気そうでなによりです」

「ティータこそ元気そうでよかった。学校には慣れたか？」

「ええ、みなさん、とてもよくしてくださるので……」

ティータはアルマと共に、イグロス貴族学院に通っている。

「ラムザ様も、お変わりなくてよろしゅうございました」

ラムザは面喰らった。

「えっ！？何だい、急に改まって？」ラムザ兄さん”でいいよ」

ティータは頭を振り、黙って微笑んだ。

ザルバッグは手を上げた。

「ゆつくり話していたところだが、これから盗賊狩りなんだ。すまん」

「ご武運を、兄さん」

立ち去りかけたザルバッグは、ふと思い出したように振り返る。

「骸旅団から、身代金の要求があった」

「なんだって!？」

と、アルガスが身を乗り出す。

「……どうも腑に落ちないことがある。

骸旅団は反貴族を掲げる無政府主義者どもだが、貴族やそれに仕

える者達以外には手を出さない義賊だという。

「そんなやつらが金目当てで侯爵殿を誘拐したとは考えにくいな」
アルガスは声を荒げた。

「ばかな！ やつらはただのならず者だ！」

「ふむ。なるほど末端の連中は、単純に強盗やゆすりばかりに近いこともする。」

だが今まで、幹部級クラスの構成員メンバーが関わった事件で身代金が要求されたためではない。やつらはむしろ、大金その他いかなる交換条件にも応じず、標的ターゲットを容赦なく抹殺してきた。”天誅”などと称してな。第一、これまで狙われてきた貴族達は、領民に評判の悪い、叩けばいくらでも埃の出るような輩だった。……不正を取り締まるべき我々が言うのも歯がゆいが。

で、あればこそ一部の平民達は骸旅団を英雄扱いし、協力もしてきたのだ。

然るに、エルムドア侯はランベリーの領民達に広く慕われておいでだ。先の大戦では武将として鷗国オルダリーアの侵略軍からよく民を守った。また信心篤く、教会の福祉活動なども手厚く支援していらっしゃると聞く」

「その通りです！」

と、アルガスが熱を込めて言った。

「そんな侯爵殿を誘拐すれば、骸旅団は支持基盤を失うのではないかな？ 一時的に身代金で大きな収穫を得ても、長期的には自分らの首を絞めることになる……。」

どうも今回の事件は、今までのやつらの行動様式パターンから大きく外れているようだ」

ラムザは質問した。

「身代金受け渡し場所は、どこに指定してきたのですか？」

「マンダリア平原を南下した、ガルシディア湾沖の小島の一つだ。あの海域には、盗賊どもの根城がある」

「では、侯爵様もそこに？」

「そうだと話は早いのだがな。その可能性は低いと見ている。さる安全な場所に監禁しており、身代金受け取りを確認してから解放する……としか言ってきておらん」

「……」

「情報収集のために放った”草”（スパイ間諜）の一人が戻ってこない。大事に巻き込まれたと考えられるが、”草”ごときに捜索隊を出す必要はないと、重臣の方々はおっしゃるのだ」

「どこで消息を絶ったんですか？」

「ガリオンヌの東端、貿易都市ドーターだ」

ランベリー領とルザリア領からの陸路の玄関口であるだけでなく、水路を通じて広く国内外から人と物の集まる街だ。

「……城の警護なんぞ、退屈だぞ。そう思わんか？」

ザルバッグは意味ありげにニヤリと笑い、大股に歩み去った。

サーシャは緩みきった両頬グループを手で押さえた。

「ああ、ラムザ君と同じ班うちで良かった！あたしの実家の身分じゃ、ベオルブ家の晩餐にお呼ばれするなんて普通あり得ないわよ。

ザルバッグ将軍、遅しいわね。素敵！間近でお会いするとドキドキしちゃう。あれで生涯独身を誓ってるなんて、勿体なさすぎるわ！」

ザルバッグは”聖騎士”の称号を賜る時に、生涯の貞潔を宣言して剣の聖者アドロメルに常勝の加護を誓願したのだ。

「うん、格好いいだろ。ザルバッグ兄さんはいつでも、僕の目標だよ」

ところが、先程まではしゃいでいたアルマは、打って変わって真剣な表情だ。

「……行くのね？」

「うん」

ラムザはあっさりと答えた。

「あ。もうお城に戻るんですか？」

と、ナツシュは呑気に尋ねた。士官候補生達は当分、イグーロス城の兵舎に寄宿することになっている。

が、アルガスは意気込んでラムザに詰め寄った。

「行くんだな！ドーターに！！」

「うん」

ラムザは事も無げに頷く。

「オレも連れて行ってくれ！」

「えええっ！？危険ですよ！無茶ですよ！専門の間諜が消されちゃうような犯罪組織相手に、僕らみたいな見習い騎士が追跡に乗り込んでも！木乃伊取りが木乃伊になりますよ！」

ラムザは両手をぱたぱたと上下に振る。

「落ち着いて。アルガスも、ナツシュも。」

僕は確かにドーターに行く。でも、敵の隠れ家に潜入して侯爵様を助け出そうなんてつもりじゃないからね。事件の調査と解決はあくまでも、ザルバッグ兄さんが派遣する搜索隊の仕事だよ」

「……………」

「つまり、さ。”草”一人に搜索隊は出せなくても、ベオルブ家の御曹司が行方不明になったんだったら…………どう？」

ラムザは悪戯っぽく笑った。

「兄さんとしては、ドーターで詳しい捜査をなさりたいんだろうね。」

ドーターは国内最大級の貿易都市だ。畏国イヴァリス一犯罪者の多い都市とも言われている。当然、骸旅団も何らかの活動拠点を持っているだろう。

でもあの街は、一応ガリオンヌ領の一部ではあるけど、ラーグ閣下の干渉を嫌う。

人と物の活発な交流が最大の長所うりなんだから、規制緩和すべきだ………っていうのは表向きの理由でね。実は、盗品とか密輸品とかの闇市場も大きくて、街の有力者達も大なれ小なれ不正な利益を上げているのさ。

だから犯罪取り締まりに協力的じゃない……んだけど、ラーグ閣下も強く言えない。この財政難のご時世に、ドーターからの税収は貴重な財源だからね。微妙なんだ。

ってことで、ここは一つ兄さんに、搜索隊を出しやすくする口実を提供して差し上げればいいんじゃないかな？」

ラムザは妹と友人達に微笑みかけた。

「わかるかい？特に危険はないし、人数も必要ないんだ。僕はドーターで適当に”かくれんぼ”してればいいだけ。気を付けるべきはせいぜい、敵に捕まって僕の分まで身代金が上積みされないように……ってことぐらいかな」

「あの……でも！」

と、ナツシュが心配そうに言った。

「命の危険はなくても……、それじゃ、とっても損な役回りですよね？」

ザルバッグ様はわかってらっしゃるにしても、他の人から見れば、勝手に持ち場を離れて周りに迷惑かけた……ことになるでしょう。

でも、非難されても本当のことは言えない……侯爵様が誘拐されたことは秘密なんですから。士官学校アカデミーの成績にも響くかも……。

いくらザルバッグ様でも、そんなこと要求してらっしゃらない……、いえ、要求しちゃいけないと思います！」

「ナツシュ。あれを見て」

と、ラムザは館の壁に掛かったベオルブ家の旗を指差した。豊穰と繁栄を象徴する緑の地に、翼竜が天に向かって羽ばたく図柄だ。

「ベオルブ家の家紋は”黒翼の白竜”。護法の神竜なのに翼が黒いのは何故だと思う？」

「……。何故ですか？」

「正義を求める者は自らの手を汚すことを恐れるな”っていう教えなんだそうだよ。

矛盾に聞こえるかな？だけどさ、例えば人からバカにされたり、恨まれたりしてもやった方がいいこと……誰かがやらなくちゃなら

ないことも、時にあるだろう。

我が身の不名誉、不利益を厭うな。正義を志す清い精神と、現実的な対処能力を持って、理想の実現を目指せ……って意味なんだってさ。

ザルバッグ兄さんは僕を試しているんだと思う。ベオルブ家の理念を実行する覚悟があるかどうか……。ここで応えなかったら、兄さんの弟じゃないよ」

ラムザは意気軒昂と言い放つ。

「本当に、損な役だよな。だから、みんなを巻き込むつもりはないよ。

ただ……ディリータ。君にだけは付き合ってもらいたいな。申し訳ないけど」

「申し訳なくなんぞ思わなくていい。お前の行く所ならどこへでも行く。当たり前だ」

ディリータは頼もしく笑った。

「ちよーっと待ったあ！」

と、手を挙げたのはガストンだ。

「俺は小難しいこたあわかんねーが、一つだけはハッキリわかる」と、ラムザの肩をつかんだ。

「すっげえ面白そうじゃねーか。城の警護よりや百倍面白え。その話、俺も乗ったぜ」

「え、ちよっと……」

「だいたいよー、てめーも箱入りお坊ちゃまってワケじゃねーが。ドーターみてえな治安の悪イ街に行くにゃあ、それなりの水先案内人が要るんじゃないのか、ええ？」

「あの……だから」

「ああ？まさか俺を置いてくつつーなら、今すぐ教官どもに通報して、イグーロスから一步も出らんねーよーにしてやるぜ？」
と、ガストンはラムザの襟を締め上げる。

「そんな、強引な……！」

「ラムザ君！ぼく……ぼくも是非、お供させて下さいっ！」
ナツシュは思い詰めた目をしている。

「ぼく……さっき恥ずかしかったんです。ザルバッグ様からお誉めの言葉を頂いた時。」

最初に分かれ道でガストンが事件に気付いた時、ぼくらの仕事じやないって思ったんです。次の村に着いたら騎士団の人に報告すれば充分だろうって……。でも、それじゃきっと間に合わなかった。

ぼくは、そう……自分が最^{びり}下位になりたくないなんて、つまらない名誉のためにアルガス君を見殺しにするところだったんです」

「恥じる必要はないよ。あの時点では、緊急性は誰にも判断できなかった。それに結局、君は一緒に来たる。君の魔法もすぐ役に立ってたよ」

ナツシュは激しく首を横に振った。

「今の”黒翼の白竜”の話、ジンとききました！ぼくも自分の名誉よりも、ラムザ君と侯爵様のお力になることを大事にしたいです！今の治安状況でドーターまで旅をするだけだって、結構危険ですよね？ぼくの魔法を役立てて下さいっ！」

ガストンが小バカにしたようにナツシュの頭を押さえ付ける。

「やめとけ。てめーみてえなトロくせえチビが付いてきたんじゃ、逆に足手まといだぜ」

「そんな。お荷物だったら途中で置いていっても構いませんから！ねえ？」

サーシャもラムザに近付いて、笑う。

「あたし達、とっくに巻き込まれてると思うわ。軍隊では確か、”脱走者”が出たら分隊ごと連座じゃなかったかしら？どうせイグーロスに残っても罰を受けるんだったら、あたしも一緒に行きたいわね。ラムザ君の側にいると、楽しいことがいっぱい起こりそうな予感がするの」

「サーシャ……」

「回復魔法の使える仲間がいると便利よね？」

アルガスが、ふうつと深呼吸した。

「矢っ張り、オレも行く。イグーロス城でじっと待つのは嫌だ。もしドーターで盗品が売りに出されていたら、どれがそうかわかるのはオレだけだよな？ 少しでも、侯爵様につながる手掛かりを探したい」

「みんな……」

「いいんじゃないか？」

と、ディリータが頷いた。

「そう……か。ディリータが言うんなら……」

と、ラムザも頷く。

「わかった。みんなでドーターに行こう！」

「「オーツ！」」

見習い騎士達は拳を振り上げた。

「ティータ、すまない。僕らは行くよ」

ディリータは妹の頬を撫でた。

「私のことなら心配しないで。自分のことだけ考えてね」

「大丈夫。無茶はしない。必ず戻ってくるからいい子でいろよ」

黒髪の兄妹は固く抱き合った。

ラムザは制服の裾をつまんだ。

「さて、まずはこの格好を何とかしないと。みんな、僕の部屋に来て。服を貸すよ」

「弓も一丁借りられりや有難えな」

と、ガストンが言った。長剣は腰に差しているが、自動弓は城に置いてある。ボウガン

「うん。自動弓でも半弓でも長弓でも、使い易いのを持って行つてよ。ボウガン

サーシャの分は……アルマの服じゃ小さいよな。特に胸が」

「一言多いのよ！」

アルマは兄の脛を蹴った。

「ごめん、サーシャとナツシュも、二、三日は僕の服で我慢して。ガリランドに着いたら、魔法用品店で魔道士用の服を買おう。」

路銀は心配しないでね、全部僕が持つよ」

「わあ、本当？ 実は前から欲しかった長衣ロブがあるのよ。ラムザ君の奢りだなんて、嬉しすぎ！」

サーシャは指を組み、幸せそうにその手に頬ずりする。

「おいおい、遊びに行くんじゃないねーんだぞ」

とガストンは、先が思いやられる、という顔をした。

「あ、そうだ。アルガスも着替えていけば？」

「え？ オレは別に……元々私服だぜ」

「それ、着たきりだろ。留守の間に繕って、お洗濯してもらったら？」

襲撃事件の血の跡は一度洗っていたが、まだ染みが残っていたし、布地が破れたり擦り切れたりした所もそのままだった。

「……、うん、そうだな」

アルガスはホツとした。一人だけ薄汚れた古着を着ているのは居心地悪かったが、自分から服を貸してくれとは言いがらかった。

「じゃあ、着替えたらずぐ出発だ！」

アルマ、机の上に書き置きを残していくから。後でみんなが騒ぎ始めたら、”見つけて”ザルバツグ兄さんに持って行ってよ」

「もう行っちゃうの？」

「僕らが外出許可をもらっているのは午前中いっぱいなんだ。昼休みが終わる頃には、士官学校アカデミーのみんなが気付く。それまでになるべく遠くまで行きたい。」

じゃあな。心配しないで待ってろよ」

ラムザは妹の頬に別れの接吻キスをすると、友人達の背を押して歩き始めた。

アルマは大袈裟に溜め息を吐く。

「残念ねえ……昨日から折角、ティータと二人で、ラムザ兄さんの大好きな木苺ジャムの甘煮パイの包み焼を沢山焼いておいたのに。プリマヴェ

「ラ伯母様から頂いた野薔薇茶でお茶をしていく時間もないの？」

ぴくり。ラムザの肩が動く。

「林檎と干し葡萄^{レーズン}のも、軟乾酪と杏子^{クリムチーズ アプリコット}のもあるのよね……。あと、燻製肉^{ベーコン}とじゃが芋^{ポテト}のとか、ほうれん草と卵のとかも……」

ラムザは立ち止まり、くると振り向いた。

「それは御馳走にならない手はないな」

「ふふっ、そうこなくっちゃ！」

アルマは勝ち誇って手招きしている。

アルガスが頭を抱えた。

「一刻を争うんじゃないのかああ!？」

「諦めろ、こーゆー奴だ。何が”黒翼の白竜”だかなー。”食欲の花虫^{モルボル}”の間違いだらって」

ガストンがアルガスの背中を叩く。

「まあ、まあ……今食べておけばお昼ご飯なしでも済むよ。食べながら今後の打ち合わせをするってことで。」

御馳走になろうよ。アルマの料理はね、見た目おっそろしく不細工だけど、味は一級品なんだ」

「しっつつれいね! まだ今回の出来映えを見てないでしょ! これでも腕を上げたんだから!」

「おいおい、そんなこと言うと、恥の上塗りになるぞ? 『これで腕を上げたってのなら、前はどんだけぶきっちょだったんだ?』って話に……」

デイリータが笑った。

「いいじゃないか。見た目だけ良くて味が悪いのよりはずっといい」

「デイリータに言われると、もう動かしがたい客観的事実なんだって感じね……」

ナッシュが微笑む。

「御馳走になれるんですたら、どんなのでも有難く頂きますよ」

「ナッシュ、二言はないね? 男と男の約束だぞ!」

「……そこまで念を押されると不安になってきました……」

ディリータはもう一度笑った。

「奥の庭の東屋に用意してくれ。あそこなら、”作戦会議”が他に漏れる心配がない。」

僕らはその間に着替えてくる」

そして、まだ渋っているアルガスの肩を押す。

「さあ、行こうぜ、アルガス」

級友達もディリータに付いてゆく。

兄達の背中を見送るティータの口許から、花の蕾のほころぶように、密やかな笑顔が広がった。が、それを恥じるかのように、ティータはすぐに顔を伏せ、いそいそと厨房に向かった。

「……」

アルマが目でラムザを呼び止める。

「ラムザ兄さん、有難う」

「え？何のことだい」

アルマは微笑んだ。

内気で寡黙なティータは、本当は寂しくても、兄達を引き止めることが出来ない。またディリータも”仕事”柄、主人であるラムザを差し置いて妹の許に留まることは出来ない。

ただ食欲に負けただけなら、『道中で食べるから包んでくれ』と言っても良かったはずだ。小さなことだが、ラムザはここでも、自分の名誉よりもティータへの思いやりを優先したのだろう。

「ティータはああ言ったけど、本当は……」

「ティータがどうかしたのか？」

「身分が違うって、学校でいじめられることが多いのよ」

「……。そう……。それでかい？急に様付けなんてするから何だろうと思っただよ。」

雑音に負けないでほしいなあ。僕達四人は”戦友”なんだ。身分の壁に風穴を開けるためのね。

……って思ってたけど、ティータには荷が重かったかな。ディリ

「タやお前に合わせて、無理してきただけなんだろう。だったら、これ以上我慢しなくていいよ。ティータが幸せになってくれる方がいい……」

「あ。それは、違うの……、」

アルマはもどかしそうに言いさして、深々と溜め息を吐き、ラムザの両肩に手を置いた。

「……矢張り、いいわ。ラムザ兄さんみたいなお子様に話したって、しょうがないもの」

「はあ？何だよ、それ。妹に子供扱いされたんじゃ、たまらないや」「だって、ほんつとに子供なんだから！」

アルマは背伸びをして、ラムザの金髪頭を撫で付けた。

「ごめんね、兄さん。余計な心配させちゃって。ティータのことは大丈夫よ、わたしがついてるから。安心して」

「心配なんてしてないさ。オトナのアルマがしっかり面倒見てくれるんだろ。」

「……でも、あんまり無理するなよ。今日は僕が添い寝してあげなくとも一人で眠れる？」

ラムザはくすくす笑いながら、アルマの蜂蜜色の髪を撫で返した。

「幾つだと思ってるの、もう！」

アルマは頬を赤らめて、兄の手を払いのけた。

「兄さんこそ、周りの期待に応えようと何でも背負い込みすぎよ。」

兄さんは兄さんなんだから、ベオルブの名に縛られることはないわ」

「まるで、母さんみたいな言い方だな。ははははは」

アルマは年を追う毎に、母の面影が濃くなる。ラムザはふと、亡き母に語りかけているような気持ちになった。

「縛られているんじゃない。僕の意志でしていることさ。」

流石ベオルブ家の一員とか、父さんに似てるとか言われるのも、嬉しくないわけじゃないよ。でもさ……ちょっと悔しいんだ。

誉められる時は、母さんのことは忘れたように誰も口にしない。

なのに、けなされる時は、二言目には決まって『所詮妾の子』って言われてしまう」

「……ラムザ兄さん」

「母さんを否定されたくない。それに、母さんを愛した父さんを……。二人が選んだ道は間違いじゃなかったって、この身で証明したいんだ。」

そのために僕に出来ることが……。僕にしか出来ないことがあるのなら、何だって喜んでするよ。他ならぬ、僕自身の誇りのために。

……そして、」

ラムザはおどけて、アルマの鼻の頭に口付けした。

「同じ血を分けた、可愛いアルマのために。」

どうだい？妹想いの優しいお兄ちゃんがいて、アルマは幸せ者だねえ」

「……全っ然。木苺の包み焼^{パイ}に全面降伏する腹ペコ大魔神なんか、ちっとも頼りにならないわ」

「やれやれ、手厳しいな」

ラムザは肩をすくめて笑い、首を振ると、茱萸^{ぐみ}の植え込みの間の小道を、自分の部屋のある東の棟へと辿る。

「お兄ちゃん……」

アルマはそっと呟いた。春風が、赤い裳^{スカート}と蜂蜜色の髪を揺らして吹き抜けた。

（知ってるわよ。ラムザ兄さんが髪を伸ばしてる理由^{わけ}くらい……。）
次兄に強く憧れるラムザは、ドラコニア城で騎士道修行を始めたばかりの頃、何でもザルバッグの真似をしたがった。長かった髪も、惜しげもなく短く切ってしまった。

——似合わない！勿体ない！もうお揃いの髪留め^{リボン}が付けられない！
アルマが散々文句を言っても、その時は全く取り合わなかった。
だが、異邦人の特徴を示す金髪碧眼が一部の人々から軽蔑されることに気付くと、かえってまた髪を伸ばすようになった。

これ見よがしに長い黄金色の髪をなびかせて歩くのは、母の存在

を皆に忘れさせないため。自分は母の血を恥じてなどいない、むしろ誇らしく思う——という声明メッセーなのだ。

（女の子みたいに見えるの、気にしてるくせに……。

わたしも男だったら……、せめて兄さんのように明るい金髪と碧い目を持っていたら、もっと兄さんの負担を軽くできたのに……）

アルマの髪と目も、光に透けると並の畏国人イヴァリースよりも大分明るい色合いなのがわかる。が、呂国人ロマンダの血を引いていることは、ラムザほどに一目瞭然ではない。

（わたしだって、”天騎士”バルバネスと”ベスラの聖女”ファティマの子。兄さんと同じことは出来なくても、兄さんの役に立てるんだったら、どんなことでもする……！）

大きな籠バスケットと卓子掛けを持って引き返してくるティータと、ラムザがすれ違う。

アルマには会話の内容は聞こえなかったが、二言、三言言い交わして、ラムザがティータの額に口付けするのが見えた。

ティータは俯いて、小走りに駆けてきた。アルマが目に入らなかったようで、もう少しでぶつかるところだった。

「ごめんなさいね、ティータ。ラムザ兄さんってば、気が利くん
だか、鈍感なんだか、よくわかんないわよね」

ティータは寂しそうに微笑んだ。

「ううん。いいの、アルマ。ね、お茶を用意しましょう」

「うん……」

二人の少女は並んで籠バスケットを持ち、奥の庭へ続く蔓薔薇つるバラの門アーチをくぐった。

？－2－「2」 成都イグーロス ベオルブ邸（後書き）

キャラ成分表示その2・アルマ

「？じゃじゃチョコ…」異端者”の兄に強引に付いてきたりとか、「わたしも男だったら…」という台詞など、相当気が強いことを窺わせます。「ティータにはわたしがついてるから」なんて、末っ子なのに姉貴肌だし。これはラムザも『どっちが年下だかわかりやしないわ！』なんてお世話されてきたっばい……。ただ、ブレイブの低さを考えると、”口では強がってるけど本当は弱い、健気な女の子”という見方の方が妥当のような気がします。……描きやすい方（作者の地に近い方？）になってしまいました（苦笑）。

？お兄ちゃん命（でも一線は越えない）…第三部、四部の二人の強い絆を説明するために、構想のごく初期には、アルマをラムザの彼女にすることも考えました。実は血のつながりがなくて……。とか。実の兄妹で禁断の恋（！）とか。でも、その案は早々に捨てました。倫理的に云々よりも、離れている時間が長すぎてつまらないからです。それにラムザの彼女には、「この人以外あり得ない！」って人が他にいましたから。

何せ、仲間になってからラストバトルまで、ズーっとお世話になりっぱなし。”相性”も拔群でお互いに回復系の技も利きまくりで、なくてはならない相棒でした。ああ、これはきつとバトルを離れて日常生活でも仲良くなりそうだなあ、と思いましたもの。

決定的だったのは、うっかり”除隊”しそうになった時に思い留まらせる台詞。え？仲間になる時、そんなこと言ったの！？それは、ちよつと……青春真っ只中のラムザ君に、つつい別の期待をさせてしまいうな……。他意はなかったんですか？それとも……。ちよつぴりあったかも。という路線で進みます。

？ラムザと同腹…と、いうわけで二人の絆はあくまでも兄妹として、生活環境やアイデンティティーの問題を共有している所に求めることにしました。原作では誕生日によっては年の差が一歳未満になっってしまうので、本当はラムザとアルマの母ちゃんは更に別のはず。でも、それでは二人の関係が弱くなりすぎる気がして……。同腹という設定にしたため、アルマと、その友人であるティータ、オヴェリアの三人は原作よりも一歳年下です。ちょっと幼い感じになったかも（特にオヴェリア）。

アルマ恋人説を放棄したことで、他の女の子達との関係も明快になりました。このラムザ君にはティータ、オヴェリア、ラファなど、年下はみんな”妹みたい”に見えちゃうのです。ついつい『可愛いな、守ってあげたいな』と思う反面、きっぱりさっぱり恋愛の対象外、という……。

しっかり者のお姉様方に弱いラムザ君、第二部以降どうなりますことやら？

五人の士官候補生達とアルガスは、午後の光を背に受けて、砂利道のユードラ街道を※双児^{ジエミニ}の方角（※南南東）へ向かって歩いていた。

イグロス城から※八里^{セクタ}（※約六キロメートル）ほどの間までは村々が続き、開けた牧草地や小麦畑、果樹園が沿道に広がっている。人通りはまばらで、時折、付近の農民達や行商人を見かける程度だ。

幌のない、二頭立ての荷韋^{チヨコボ}駄鳥車がラムザ達を追い越し、少し行き過ぎて止まった。

「おお。やっぱし、ラムザ坊ちゃまとディリータ君でねえか」

赤銅色の肌、胡麻塩頭の農夫が、布帽子を脱いでラムザに挨拶した。

「あ、ワインバーグ小父さん。お久し振り」

「元気にしてなすったかね。ああ、ますますおっ母^か様に似ておいでだなあ」

「そうですか？近頃じゃ、父さんに似てるって言われることの方が多いけど」

「そら、その笑った時の目許がそっくりだ」
ワインバーグは白い歯を見せて笑う。

「学校のお友達の皆さんかね。もうガリランドに戻りなさるだか？ドラコニア城には寄っていかれただか。町の衆が、ラムザ坊ちゃまのお帰りになるのを楽しみにしてるだよ」

「ごめん。今はちょっと……兄さん達に、居場所を知られたくないんだ」

ラムザは唇の前に人差し指を立てた。

「はっはっ、わかりました。また”秘密の冒険”ですだね」

「まあね。小父さんは村に帰るところ？」

「ああ。一緒に乗っていきなさるかね？」

「うん、有難う。助かります」

ラムザは屈託なく友人達を誘った。

「ね、乗せていってもらおう。小父さんの家はイルグリットにあるんだ」

イルグリット村はイグーロス城から※およそ三十五里（※約二十七セクタキロメートル）の距離にある。マンダレーナの二つ隣村で、無人の”獣ヶ原”との境目に近い。

「え？あ、はい……」

ナツシュやアルガスは驚いたようだ。

「乗り心地はあんまり良くねえですが……」

ワインバーグが断るまでもなく、十三世紀当時の道路状態と車両製造技術では、韋駄鳥車チヨコボは揺れが激しく、あまり速度スピードも出せない。乗り物としては、鞍を置いて韋駄鳥チヨコボの背に直接乗った方がはるかに快適だ。

韋駄鳥車チヨコボは専ら荷駄の輸送用に使われた。農民や漁民達は荷台に同乗することもあったが、騎士や富裕階級は”そのような格好悪いこと”はしないものだ。女性や子供でも、鞍籠ミニを利用するか、小型韋駄鳥チヨコボに乗るかした。

「サーシャと、もう一人ぐらい……ナツシュは御者台に座らせてもらったら？」

「おんや、そっちの方はお嬢さんでらしたただか。近頃、物騒ですだからなあ」

ラムザの服を着たサーシャを見て、ワインバーグは言った。

治安が悪いので、用心のため男装して旅をする女性が増えている。そうでなければ、ラムザが”男装の少女”と見間違われることももっと少なかったろう。

畏国中世イヴアリスの中でも、十二世紀末から十三世紀前半は、女性の男装タブーに対して禁忌の意識が薄かった時期である。黒死病ペストと五十年戦争・獅子戦争による深刻な人手不足のために、社会の様々な分野で、それまで男性の仕事とされてきたことを女性が担うことが珍しくなく

なっていたのだ。

武家や商家で主人亡き後、幼い子供が成人するまでの間、夫人が経営を切り盛りすることもよくあった。女性の騎士・兵士の割合が最も高かったのもこの頃だ。

また、グレバドス教ミクロンド正教派ではそれまで、尼僧は婚礼や葬儀などの祭詞を執り行う司祭になることは出来なかった。が、末期患者や死者に接することの多い僧侶達は一般市民に比して黒死^{ペスト}病に感染し易く、死亡率も高かった。特に被害の甚大だった一一八九年から九一年の大流行の時には、臨終の儀式や葬式を行う司祭が大幅に不足したため、九一年春、遂に法皇庁は尼僧にも司祭の資格を認めることとした。

時代の潮流が反転するのは、一二四〇年代頃である。

東方の紗国^{ペシヤ}の後宮で女官達に男装させることが流行し、畏国^{イヴァリース}の花街も、畏国趣味な東洋風の男装の遊女達で溢れた。

グレバドス教会は男装を”異教徒の悪しき風習”として糾弾し、遊女達のみならず、女性騎士・司祭達をも宗教裁判にかけ始めた。その頃には人口も回復し、むしろ失業者が増えていたため、男性達はこの機を捉えて”合法的に”女性を職場から締め出しにかかった。

かくして女性達は再び、以前よりも強固に、※”かまどと紡ぎ車”（※家庭内労働の代名詞。炊事裁縫）に縛り付けられる身となったのである。

「……」

ナツシユは小柄な体を更に小さく縮こめて、ワインバーグとサーシヤの間にちょこんと座った。

「安心して、ナツシユ。ワインバーグ小父さんは、とっても温厚で親切な人なんだよ。いざっていう時には牛鬼^{ミノタウロス}だって素手でひねり潰せるくらい、力持ちなんだけどね！」

「ああああっ、すみません！警戒してるとかじゃないんです。ただ、大っきい人の横に並ぶと……圧倒されちゃって……」

ワインバーグは南洋人だ。背丈は※六尺八寸ケルターカーク（※約二メートル）

を越し、肩幅は一人でサーシャとナツシュを合わせた分ほどもある。グレバドス教会は人道的立場から、奴隷の売買を禁じている。だが現実には、”仕事の斡旋” 結婚・養子縁組の仲介” 等の名目で、畏国でも奴隷貿易が続けられていた。

ワインバーグも、少年の頃”人狩り”に遭い、家族から引き離されて畏国に連れて来られた、元奴隷だ。
イヴァリース

畏国語を習得し、グレバドス教に改宗しても、また主人から解放されたり金を貯めたりして自由民になっても、彼ら”蛮族”に対する偏見は根強い。冷遇され、犯罪に走る者も少なからず、そのことで一層外国人への不信感が強まるという、悪循環が生じている。

だが、ラムザの祖父・カルダックⅡベオルブⅡドラコニア伯は、外国人の移民や解放奴隷を積極的に受け入れ、幾つかの開拓村を作った。ラムザが幼少期を過ごしたマンダレーナ村は、そのような移民村の一つである。

「ははは、身長せいは関係ねえですだ。男は中身ですだべ」

「それを言ったら……ますます……」

サーシャが櫂の杖でナツシュの肩を軽く叩く。
オークスタッフ

「ナツシュ君には魔法があるでしょ。歴史に残るかもしれないわ。」

”小さな大魔道士” ナツシュ！ って」

「うんっ……、そうだね。頑張るよ」

ナツシュは雷精錫サンダーロッドを握り締め、キュツと一文字に口を引き結んだ。

他の四人の少年達は、荷台の編み籠や麻袋の間に場所を見つけて座った。

「よいしょっと」

ラムザは韋駄鳥チヨコボの糞の詰まった籠の隣に腰を下ろした。

韋駄鳥チヨコボの糞は良い肥料になる。市場に農産物を売りに行った農民

達は、復路には籠や壺にいっぱいチヨコボの韋駄鳥の糞を持ち帰るのが常だ。

貴族や商人の屋敷の厩舎から回収したり、往来で子供達が拾い集めたものを少々の駄賃で引き取ったりするのだ。

韋駄鳥チヨコボの糞は固く乾燥していて、悪臭は少ない。飼料の穀類や木の実、牧草の残り香がして、気の持ちようによっては香ばしいと言えなくもなかった。が、矢張り泥臭い、いわゆる”田舎の香水”の匂いである。

アルガスなどは鼻の頭に皺を寄せ、なるべく糞の籠から離れて、風上の隅に陣取った。

「皆さん、しっかり座りなすったかね。さあ、出発しますだよ」少年達を乗せた韋駄鳥車チヨコボは、人の歩く速さの二倍ほどの並足で、ゆるゆると進む。

「アルマ嬢ちやまもお元気ですか」

「元気すぎて困ってる。あの悍鳥じゃじゃチヨコに嫁の貰い手がつくかどうか、心配だよ」

ラムザの声は高くはないが、よく透る。揺れる韋駄鳥車チヨコボの上でも、雑音に紛れず、普通に会話できた。

これも文武の鍛錬の賜物だろう。

「長年」王宮キングスの畏国語イウフリースユを教わってきたので、たとえば言葉遣いを崩しても、発音や抑揚がはきはきと明瞭で美しく、聞き取り易い。

また、武術の基本となる姿勢や呼吸法がしっかりと身に付いているために、特に意識しなくとも、いつも背筋が伸び、腹の底からよく響く声が出た。

「はっはっは。坊ちやまの前だから余計に元気なんですよや。」

嬢ちやまは昔っから、お兄ちやまが大好きでらったものなあ」

マンダレーナ村で暮らしていた頃、ラムザがディリータと二人だけで遊んでいると、アルマはしばしば嫉妬心をむき出しにしてディリータに食ってかかった。

実の兄同様にラムザにも懐いていたティータとは違うところだ。大人しいティータの手を引っ張って、ラムザ達の行く所どこへでも、ついて行きたかった。

「いい加減、兄離れしてほしいよ」

ばやくラムザを、ガストンが冷やかす。

「てめーの方が妹離れ出来てねえんじゃねーか？ま……、今日会って、あれなら並の女なんか霞んで見えるってのは認めるけどよ。ムコに行き遅れるぜ？」

「別に……、僕だって、早く妹の子守りから解放されたいさ。ただ、父さんから後を頼まれた以上は、悪い虫がつかないように監督する責任があるから」

ワインバーグが膝を打った。

「おお、虫といや。売れ残ったのでよろしけりや、林檎、好きに召し上がって下せえ。虫が食ったり傷が付いたり、見映えは悪いですが、味に変わりはねえですよ」

「やった！いただきます」

ラムザは友人達に一つずつ林檎を放って寄越し、自分も早速、一個にかじり付いた。

「……」

アルガスは、チヨコボ韋駄鳥の糞の臭いのする所で物を食べる気にはならないようだ。

しかし、ガストンはお構いなしだ。袖口で無造作に表面を拭いて――ディリータから借りた服なのだが――丸かじりする。

「おっ……いける。オッチャン、いい味してるぜ、これ。おいアルガス、いらねーんならもらってやるぞ」

「あ……いや」

と、アルガスも慌ててかじる。

「ラムザ、もう一個くれ」

ガストンは食べ残した芯を道端の草むらの中に投げ捨て、入れ替わりに二個目の林檎を受け取った。行儀が悪いのだが、不良少年らしい野性的な仕草が、御者台から後ろを盗み見たナツシュの目には、男っぽく、格好良く映った。

ナツシュも真似をして、なるべく大きく口を開けてかじりつく。が、思わず情けなく眉と口をすぼめてしまった。

(……酸っぱい……)

普段、皮をむかずに林檎を丸かじりしたことなどなかった。

ちらりと横を見ると、少年達よりは上品にだが、サーシャも美味しそうに皮ごと林檎を食べている。

(……ぼくって矢っ張り軟弱者なのかな?)

ガリオンヌ地方特産の、”紅晶竜”^{カーバンクル}という品種の林檎だ。小ぶりで皮がつやつやと赤く、歯応えは固く、酸味が強いが芯の周りには蜜が多い。

ラムザはもう三個目を頬張っている。

「うん、美味しい！去年は当たり年だったみたいだね。よく売れたでしょう」

「作柄は良かったんですが、秋の終わりに嵐に遭っちゃまいましてなあ。売り物になるんは一昨年より少なかったですだな」

「そうでしたか……」

「だども、落ちた分からこさえた酒や甘煮^{ジャム}もいい出来ですだ」

二つの丘に挟まれた森を抜けて、ドラコニア領に入ると、村人達から度々声を掛けられるようになった。

「あつ、ラムザ様！」

「ねえ、来月の花祭り、うちの村にも来てくれる？」

「また韋駄鳥^{チヨコボ}に乗せてね！」

大人達は礼儀^{マナー}を守って、自分から貴人に話し掛けることはせず、ラムザに気付いても黙礼するだけだが、子供や若い娘は遠慮がない。

「若様、これ割って！」

アダメンナッツ
亀甲果^{アダメンナッツ}が一つ、荷台に飛び込んできた。

アダメンナッツ
亀甲果は鱗模様の固い殻に覆われており、通常は、鋸や鉋で切るか、金槌で叩き割るかなければ、甘い果肉を取り出すことは出来ない。

が、ラムザは虹輝鋼^{オリハルコン}の小刀^{ナイフ}を抜くと、亀甲果^{アダメンナッツ}を宙に放った。

「ハッ！」

気合い一声、真っ二つに割って投げ返す。

「おおっ、すっげー！」

「ありがとー！またね！」

歓声を挙げる子供達に、ラムザは笑って手を振る。

「身を隠さなくていいのか？」

と、アルガスが尋ねた。

「小父さんはこれでも、知り合いの少ない道を通ってくれてるよ。

ドラコニア城に近い村に行ったらもう、とっても素通り出来ないさ」

サーシャが振り向く。

「人気者なのね、ラムザ君」

ディリータが答えた。

「しょっちゅう城を抜け出しては”領民達と親睦を深めてきた”かな」

ラムザは笑った。

「ザルバッグ兄さんにはたっぷり叱られたけどね！おかげで、僕がどこで何をやってようが、ドラコニアの人達はもう一々驚いて兄さんに報せたりしないよ。

飴売りや小鳥売りについて行ったりとか……芋掘りもしたし、工事現場で漆喰セメント混ぜたりもしたし。そうそう、密漁と知らないで仕掛け網引き上げるの手伝って、一緒に逮捕されたこともあったっけ！あれは参ったなあ。みんな執行猶予になって良かったよ」

ワインバークは腹を揺すって笑った。

「はっはっはっ。お館様は……先代のバルバネス様は、寛大でらったものなあ。専門プロの密漁者は厳しく取り締まったが、村のもんが少々ご領地の山川のお恵みにあずかるのは、大目に見て下すっただ。ああ、勿論、今のザルバッグの若殿様もですがね」

と、ワインバークは意味ありげに一呼吸置き、

「去年の鮭しゃけはよっく太って脂がのって、旨かったですよ。燻製にしたのがまだありますで、持っておいきなされ」

「また、僕も共犯者になるってこと？」

「おんや、まっさか、兄上様に告げ口なさるかね？ここでお会いし

たんをばらされたくねえのは、坊ちゃまの方でねえですか」

「その通りだよ、まさか！喜んでもらうよ」

イルグリット村に着くと、ワインバーグは鮭の燻製や乾酪^{チーズ}、干した芋や野菜の薄片^{チップス}などの保存食を袋いっぱい、ラムザに持たせた。

「こんなに沢山……、小父さん達が食べる分はちゃんとあるの？ 潔斎月が明けたばかりで、一番蓄えが少ない時期なのに」

「なんの、なんの。大丈夫ですよ。水くせえことは仰りっこなしです。ここは、坊ちゃまの村でねえですか」

「だからこそ、決まった分以上に貰うつもりはないよ」
級友達とアルガスが首を傾げる。

「「……？」」

「あ……、このイルグリットと、あと二つの村の収穫の一割で、僕^{アカデミー}の学校の学費とか韋駄鳥^{チヨコボ}の餌代とか賄ってもらってるんだ。ベオルブ家全体の収入から決まった額を出すより、この方が領地経営の練習になるからって、父さんが生前に決めてくれてさ。領内の他の村より付き合いが深いんだ。なるべく、お祭りとか結婚式とか、滅多にないけど揉め事の調停の時とか、顔出すようにしててね」

ガストンが、ひょうつと口笛を吹く。

「村三つ丸ごと財布代わりかよ。とんでもねーな」

アルガスがひがみっぱい目でラムザを見る。

「もしや、女の子の一割も……」

「そういうマネはしてないって！」

ワインバーグの妻のタバサが、林檎酢と、木苺^{ジャム}の甘煮の小瓶もリュック^{リュック}に入れながら、笑う。

「一割どころか、おむつも取れてねえ赤んぼから八十過ぎたバアさままで、みーんなラムザ坊ちゃまの大鼯^{フアン}だべ。坊ちゃまのお役に立ちたくてうずうずしてるだよ。たーんと持ってって下せえ。貰って下さらねえ方がガツカリだわさ」

「有難う、小母さん。じゃ、遠慮なく貰っていくよ」

「坊ちゃま、今夜の宿はもう決めてなさるだか？ うちの村に泊まっ

てって下さりやええに」

「ここは……、騎士団の人達も真っ先に思い当たると思うんだ。それより、”あっち”の方が見つかりにくいよな、デイリータ？」

「ああ……、そうだな」

と、デイリータは頷く。

ワインバーグ夫妻に礼を言って別れを告げ、少年達は更に東を指す。

「で、ここを※巨蟹^{キャンサー}の方角（※南）に進むと、往路^{いき}に通ったアダマンド。※白羊^{アリエス}の方角（※東）に進むと、アンセル村んだけど……」

ラムザは分かれ道で立ち止まった。

西日が傾いている。日没まで※半時（※約一時間）ほどを残すのみだ。

「じゃあ、今夜の宿はアダマンド……」

と言いかけたナツシュの頭を、ガストンが小突く。

「……のわきゃねーだろ！ もろに騎士団と鉢合わせて連れ戻されるぜ。アンセルだよな？」

アダマンドはマンダリア街道の主要な宿場町の一つだ。イグーロス側からガリランド方面に向かう旅人の多くが一泊する。アダマンドより東は魔獣^{モンスター}の出没する荒野で、しばらくは農村も宿場もないのだ。

「んー、確かに、アンセルに行けば、いきなり大勢で押し掛けても快く泊めてくれる友達がいるけどね。」

でも実は、ここで道を逸れて※宝瓶^{アクエリアス}の方角（※北北東）に進むと、デイリータと僕の”秘密基地”があるのさ。良かったら、今日はそこにみんなを招待したいなあ、と思って」

ガストンは興味津々だ。

「ほおーう？ 面白そうじゃねーか」

「要するに、野宿の一種だよな？」

と、気乗り薄なアルガス。

「まあ野宿っていうか、屋根があって、雨風はしのげるよ。色々野営用品を常備してて、結構快適だと思うけど。今の季節だとちょっと寒いかな？夏だったら最高なんだけどなあ」

「木の上の小屋とか……ですか？」

と、ナツシュが尋ねる。

「もっともっといいものさ！」

サーシャが手を叩いた。

「楽しそうね！行きましようよ」

「え……、いいの？」

ナツシュは心配そうだ。

「あら、どうして？野営なんて、士官学校の実習以外じゃ初めてよ。ワクワクするわ」

「だって、女の子はサーシャ一人だよ」

ガストンがナツシュとラムザを見ながら、

「あー、そーいや。男の数に入らねーよーなのが約二名いるもんで、忘れてたぜ」

「「そりゃないよ、ガストン！！」」

サーシャはくすりと笑った。

「あたしは何にも心配してないわ。みんなの騎士道精神を信じてるわよ。それとも、誰か疑わしい人がいるのかしら？」

「誰、って……」

ガストンとアルガスの視線がぶつかった。

「おい、おい。少なくとも俺は白だぜ。別に、俺の好みじゃねーし」

ガストンは両手を挙げ、きっぱりと、つまらなさそうに言い切った。ナツシュは思わず、抗議した。

「そんな言い方ってサーシャに失礼じゃない！？こんな可愛くて、いい子なのに！」

「ああ？何だ？ちょっかい出した方がいいっつーのか？」

「はっ!？ い、いや……そういうわけじゃ……」

「何も、サーシャが悪いつつってんじゃねーや。ほらよ、俺はガサツだからな。苦手なんだよ、ケナゲで繊細な女の子、みてーなのは。すぐ泣かせちまう。もっと鼻っ柱が強え女の方が、気楽でいーんだよ」

ラムザが釘を刺す。

「……アルマは絶対駄目だぞ?」

「ベオルブ家のお姫さんに手エ出すほど命知らずじゃねえって」
アルガスが咳払いする。

「オレはどうせ、彼女いない歴十六年さ。だが、覗き見や下着泥棒に走るほど落ちぶれちゃいないぜ」

ディリータが付け加える。

「治安について言えば、街道を離れた荒野の中はかえって安全だ。盗賊だって、稼ぎのいい所で”働く”からな。密猟者は、通報を恐れて互いに姿を隠す。魔獣モンスターには気を付ける必要があるが、交代で火の番をすれば大丈夫だろう。凶獣ベヒーモスや牛鬼ミノタウロスのような、今の僕らの手に余るほど凶暴な魔獣はこの辺りには出ない」

「目撃情報が入り次第、北天騎士団が退治して回ってるんだ」と、ラムザが誇らしげに言った。

「じゃあ安心だわ。ね、行きましょ」

「まあ、サーシャちゃんがいんなら……」
と、アルガスも態度を軟化させた。

枯れ野に踏み込み、疎林に分け入って、歩くことおよそ※半刻（※約十五分）。辿り着いたのは――、

「ラムザ君、これって……!？」

「そう!」 飛空艇”の残骸さ!」

聖歴紀元前、大空を艇ふねが航行し、街では人間の数よりも多くの機械仕掛けの人形・”鉄巨人”達が働く、黄金の時代があった。

力仕事や単純作業等を”鉄巨人”達が担っていたため、奴隷階級

は存在せず、人々はこの物語の舞台である十三世紀当時よりも——そして、十七世紀現在よりも——豊かな文明生活を楽しんでいたという。

が、繁栄は長くは続かなかった。

魔洗石、マテリア発雷晶等の動力資源や、エクトラズム霊銀、エネルギ金剛鋼、ミスリル虹輝鋼等の貴金属の埋蔵量が残り少なくなるにつれ、各国間で激しい争奪戦が頻発するようになった。

紀元前三三年、北方の機工帝国・覇国が、自動侵略兵器・パラメキア“究極機甲”オメガを前線に投入。僅か半年余りで、諸外国に対し圧倒的優位を確立した。

対して紀元前一九年、ランベリ蘭王国軍は“究極機甲”攻略の切り札として、人工生物兵器・アルテマバスター“究極魔兵”を開発。これが、覇帝国一国のみならず、全人類の悪夢の幕開けとなる。

“究極魔兵”の甲殻は魔震銃の弾丸を弾き、マキヤノン魔砲、オーラキヤノン霊子砲等の魔法波を吸収する。マテリア雑食性の生物でありながら多量の魔洗石を必須栄養素とする“究極魔兵”は、アルテマバスター魔洗石を動力源とする当時の機械兵器の“天敵”と言えた。

ところが、実戦を繰り返す中で膨大な量の魔洗石を喰らった“究極魔兵”達は、想定外の成長と変態を遂げた。ランベリ蘭王国軍の制御を離れて国境を越え、各地の魔洗石鉱山や魔洗炉、工業地帯等は無差別に襲い始めたのだ。

“魔洗動力”エネルギと“鉄巨人”労働力に支えられていた当時の都市機能は、たちまち麻痺した。

人々に残された道は二つしかなかった。即ち、魔洗動力に頼らない前近代的な生活水準に戻るか。あるいは、軍事力を結集した一部の隔離避難所都市に籠もるか、である。

後者の道を選ぶことが出来たのは、軍人、政治家、フアラ教聖職者、資産家等、ごく一握りの特権階級だけだ。しかも、籠城戦に勝ち目は薄かった。

当時の機工技術の粋を集めた“究極機甲”オメガの戦闘能力が通用しな

い敵なのである。ほとんどの物理兵器、化学・生物学兵器は、一時的に”究極魔兵”^{アルテマバスター}達を追い払う程度の効果しか持たなかった。

結局、一番有効だとわかったのは、”魔法剣”による白兵戦だった。単純な物理攻撃、魔法攻撃とも防ぐ彼らの甲殻だが、剣に魔法力を乗せた”魔法剣”ならば切り裂けたのだ。

無数の貧しい農村の若者達が、莫大な報酬や避難所都市の市民権を約束され、困難な肉弾戦に送り出された。そして、続々と戦場に散っていった。

屍山血河の上に辛うじて安息を取り戻した避難所都市。^{シエルター}だが、”地獄の宮殿”^{パンデモニウム}と俗称される地底鉱床で卵を産み落とし続ける”太母”^{マザー}を倒さぬ限り、真の平和は訪れない――。

この偉業を成し遂げた英雄こそは、聖アジヨラと十二人の”星宮”^{ゾディアックプレイヴ}の勇士”達――アジヨラの死後に使徒となったアデスを除き、”裏切り者”^{ランベリ}ゲルモニークを加えた十二使徒――であった。

『蘭国王が召喚した魔神を、聖アジヨラと使徒達が高い霊力で調伏した』――というのは、文明が衰微した後世の人間達の理解力で再構築された”神話”^{シエルター}なのである。

アジヨラは、国家や避難所都市に属さない自由戦士団の長^{リーダー}だった。都市に見捨てられた辺境の人々の士気を鼓舞して”究極魔兵”^{アルテマバスター}達と戦い、機械兵器や魔兵器の侵略にも都市の特権市民達の支配にも怯える必要のない、自由で平等な世界の実現を訴えた。

一大革命勢力の頭領となったアジヨラを、特権市民達が見逃すはずがない。”太母”^{マザー}が滅ぼされるや、雄帝国皇帝とファラ教聖職者達は結託してアジヨラを捕らえ、一方的な裁判の末にゴルゴラダの丘の上で処刑した。

特権市民達は国家間の資源争奪戦を再開し、勝者なき自滅の道を突き進む。魔洗文明崩壊後の世界に残された人々は次第に、アジヨラの教えを基礎に設立されたグレバドス教会の下に集い、復興の道を歩み始めた。

しかし、アジヨラの死後十数世紀。戦乱の絶えない中世畏国^{イヴァリース}は、

未だアジヨラの説いた理想世界には程遠い。

（紀元前後の魔洗大戦について最新の知識を得たい読者には、アラズラム・J・D氏著『聖アジヨラの実像に迫る』をお薦めする。また、一般書としては生命魔学の専門用語が多すぎるくらいがあるが、T・アイマン博士著『究極魔兵^{アルデマバスター} 解体新書』も良い参考書になるだろう。）

飛空艇は斜め右後方に傾き、半ば地中に埋没していた。左の翼が折れ、胴体との間に三角錐の天幕^{テント}のような空間を作っている。天井や壁の強化磁器板^{セラミックスタイル}があらこちらで？がれ落ち、巨大な魔獣^{モンスター}の骸のように骨組みをさらしていた。

「すっげえ！いいーな、これ……。でっけえー！」

崩れた壁の穴から内部に入ったガストンが、感嘆する。

「だ……。大丈夫なんですか？」

ナツシユは及び腰だ。

「大丈夫だよ。周りの草木にも何も異常はないだろ。それにほら、古い燕の巣が見えるかい。毎年、普通に子供が巣立ってるよ」

旧文明の機械の残骸には、動力源である魔洗石^{マテリア}や発雷晶^{エクトラズム}が残っていることがあった。

形状や量にもよるが、魔洗石^{マテリア}には強い催奇形性がある。動植物の巨大化や突然変異、凶暴化を誘発し易い。遺跡に隠れ住んだ盗賊や修行僧が発狂した、化け物に変身した……。等々の怪談には実話も多いのだ。

また、発雷晶^{エクトラズム}は自然発火しにくい^{エクトラズム}が、稀に落雷や山火事が引き金となつて大爆発を起こすことがあった。

魔洗石^{マテリア}や発雷晶^{エクトラズム}の作用の知られていない時代には、古代の悪霊の呪いであるとか、聖アジヨラを処刑した雄帝国^{ユードラ}に対する神の怒りであるとかいう解釈がなされていた。

信心薄い無法者^{アウトロー}達でも、いや薄ければこそ、崇りを恐れて旧文明の遺物には近寄らない。

「……」

ナツシュは注意深く、飛空艇の中に一步を踏み入れた。と、すぐに、

「うわあっ！て、鉄巨人っっ！！」

飛び退って尻餅をついた。

ディリータが笑う。

「ただの案山子^{かかし}さ。とつくに壊れていたのを、組み立て直して立てておいたんだ」

二カ所の船室の入口に立ちはだかる鉄巨人達は、全身が錆に覆われ、よく見ると腕や頭に蜘蛛の巣が張っていた。

”鉄巨人”^{ミシディア}とは言うが、^{ミスリル}霊銀の軽さと耐腐食性、^{アダマンタイト}金剛鋼の硬さを取り入れた超軽硬合金製だろう。そうでなければ、千年以上もの歳月の間に影も形もなく朽ち果ててしまったはずだ。表面の錆は、後から降り積もった土砂が付着したもののようだ。

ラムザは鉄巨人の頭にかかった蜘蛛の巣を払いながら、穏やかな声で尋ねた。

「ナツシュは空想魔学小説は読む？」

「冒険王メサの伝記くらいなら読んだことがありますけど……」

旧文明時代の機工学や魔洗学について書かれた書物は、空想魔学小説と総称される。文明の衰えた後世の人間には、荒唐無稽な作り話^{ロマンダ}としか思えなかったのだ。十二世紀頃から、^{パラメキア}呂国や新覇国で遺跡の発掘調査が盛んとなり、事実であることが明らかにされ始めたが、“空想”の名称はそのままになっている。

「じゃあ、飛空艇の内部構造もある程度わかるかな。これは小型の貨物船らしい。武器は搭載していないよ。

それに、事故や戦闘で墜落したわけじゃないな。何度も修理を重ねた末に、いよいよ古くなって廃棄されたみたいだ。積み荷も備品も空っぽさ。良くも悪しくも、何にも残ってなかったんだよ。

……こいつらも、」

と、ラムザは鉄巨人の胴を手の甲で叩いた。ポウン、ポウンと虚ろ

な音が響く。

「中はがらんどうさ。捨てられた時から、抜け殻だけだったんだ」
ナッシュは縮めていた首を伸ばして、辺りを見回した。

「よく、ここを”基地”にする気になりましたねえ」

「僕らだって最初は怖かったよ。遠くから石を投げて、慎重に様子を見たりしてね。ダイスダーグ兄さんの書齋で、飛空艇のことを色々調べたりもしたよ」

「ダイスダーグ様も、空想魔学小説を？」

「兄さんにとっては趣味娯楽じゃないみたいだ。いずれ古代の機工技術を軍事利用できないかと、研究中なんだよ。現に最近ロマンダ呂国や、ライオネルの機工都市・ゴークじゃ、”銃”が復元され始めたそうだし……」

ダイスダーグは先見の明があったというべきだろう。

ミクロンド正教派は”神罰によって滅びた”旧文明を悪と見なし、古代の機工技術の復興に否定的だった。このため畏国は後世、銃を始めマキヤノン魔砲、オーラキヤノン靈子砲等の機工兵器の開発で、ロマンダ呂国や新覇国に大きく遅れを取るようになる。

「わあっ！」

ナッシュがまた、怯えた大声を挙げた。

「今度は何だ？」

と、ガストンが呆れて尋ねる。

「へ……蛇っっ」

ナッシュが指差す天井の梁から、長さ※六尺ケルター（※約一・八メートル）もある大蛇がぶら下がっている。

「あ」

ラムザは駆け寄り、抜き打ちに大蛇の鎌首を切り落とした。

「やったね。夕御飯が豪華になるな」

「たっ、食べるんですか!？」

「大丈夫、毒はないよ。あっさりした、鳥肉みたいな味がするんだ」
まだのたうっている胴体を取り押さえ、窓の外に血を絞り捨てる。

「ラムザ君って……結構、野生児……？」

「見かけによらないヤンチャっぷりが、また魅力なのよね」
後から飛空艇に入ってきたサーシャは、楽しげだ。

「さてと。日が暮れないうちに、夕食と寝床の準備をしておかな
くちゃ」

「あたしが腕をふるうわ……って言いたいところだけど、野外料理
は自信がないわね……」

サーシャが困ったように言うと、思いがけない仲間が名乗りを上げ
た。

「オレがやるよ。慣れてる」
アルガスだ。

「わあ、そうなんだ。君はもう、野戦の経験も多いのかい？」

「いや……、そういうわけじゃねえ。ただ、ランベリー領が鷗国に
占領されてる間、あっちこっちの知り合いの所を転々としてたから
な。旅慣れてるだけさ。」

オフクロも姉上も早いうちに死んじまって、自炊するしかなくて

……」

「……そうだったんだ」

ディリータはアルガスの身の上話には興味を示さず、事務的にて
きぱきと采配する。

「それじゃあサーシャとナツシユは、薪と、寝台の敷物代わりにす
る枯れ草を集めてくれ」

「寝台は幾つ分ですか？」

「そうだな。二人ずつ、三交代で火の番をすることにして……、」
「じゃあ四つ……」

「いや、二つだ。夜は冷え込む。サーシャは仕方ないとして、野郎
連中は二人か三人で固まって寝た方がいい」

「わかりました」

ディリータは、ガストンには水桶と鋤を渡した。

「お前はその水瓶に、向こうの小川から水を汲んでおいでくれ。それと、これだけの人数がいると、便所トイレの場所を決めておく必要がある。穴を掘って、目印にこの旗を立てておいてくれ」

「おう、任しとけ」

ラムザは棚から、様々な薬味ハーブや香辛料スパイスの入った小箱を下ろした。

「じゃあ僕は、アルガスを手伝うよ」

ディリータが苦笑して手を横に振る。

「お前は食卓テーブル周りの掃除と灯りの準備くらいにしておけ。調理助手は僕がやろう」

と、アルガスに向かって、

「こいつの手先ぶきっちゃは、妹以上だ」

「えー？アルマと同じで、見た目はともかく、味は悪くなく仕上がると思うんだけど……」

ガストンが、ポンポン、と肩を叩いてラムザの手から調味料の小箱を取り上げ、ディリータに預けた。

「……僕ってそんつなになぶきっちゃよ？」

「てめーに比べりゃ、五歳児の方が百倍器用だ！」

とつぷりと日が暮れた頃、少年達は、焚き火の周りに六つの椅子と二つの小卓子テーブルを並べた食卓に着いた。

卓子テーブルの横に座ったサーシャが雑炊を、ラムザが香草茶ハーブティーを配る。

「いいわね！こういうの、憧れてたのよ。秘密の仲間だけで、焚き火を囲んで……」

「いかにも青春の一項ページって感じだよねえ」

サーシャとナツシュは満足そうに頷き合ったが、アルガスは不機嫌な顔をして言った。

「オレは、敢えて野っ原で寝ようって気が知れねえな。宿屋はともかく、農家でも騎士の家でも、”呂国野郎ロマンダ”や”裏切り者のサダルファスの一族”は納屋にだって泊めたがらなくてな。すぐそこに村の灯りが見えてるのに、オヤジと二人、震えながら夜明かしするこ

ともザラにあった……」

その場の空気が、ずーんと重苦しく沈み込む。

「そっか……、ごめん。でも、大丈夫。今夜は僕がしっかりあっためてあげるから。寒い思いはさせないよ!」

と、ラムザがアルガスの背中にひしっと抱きついた。

「やめろおおおおっ、気色悪いーっっ!!」

アルガスはもがいて振り解く。

ラムザの友人達が大笑いし、若者の集まりらしい陽気な雰囲気に戻ってきた。

皆で食前の祈りを捧げた後、熱々の雑炊を吹き冷ましながらすする。

「おいっ……しい!」

ラムザは、目を丸くして感心した。

蛇の肉と、干した野菜と芋、荒く砕いた堅焼き^{パン}麺麭を煮込んだ雑炊だ。

「ディリータの味付けじゃないだろ、これ」

「ああ。アルガスだ」

「そうね、味付けも火加減も丁度いいわ。それに、お肉を一度炙^{ポイント}つてあるのが秘訣ね」

表面は香ばしく焦げ目が付き、中は柔らかく旨味が閉じ込められている。

ラムザは尊敬の眼差しでアルガスを見た。

「ありあわせの物だけでこんな美味しいお料理が作れるなんて、天才的だなあ。僕が女の子だったら、喜んでお婿さんにもらっちゃうよ」

「いらねえよ、こんな大飯喰らいの女房は!」

「そんな、つれないこと言わないで。尽くすからあ」

「うげっ……、離れろーっっ! お前、オレに何か恨みでもあるのかよっっ!？」

「恨みだなんて、ぜーんぜん。最初に女の子と間違われたことなん

か、これっっぽっちも根に持っていないからねえー」

ラムザは、逃げるアルガスを追い詰め、首筋に接吻した。

「ぎいえええー！！」

アルガスは身悶えする。

「あははっ、あー面白かった。もう充分だ。これ以上仕返ししようとは思わないから、安心して。でもさ、本気で感服するよ。美味しい御飯を作る人に悪い人はいない！」

「てめー、よくそれで、ガキの頃に食いモンに釣られてかつさらわれなかったな」

と、ガストンが呆れる。

ナッシュもラムザに深く同意した。

「うん、美味しいです。立派な特技だと思うよ、ぼくも」

「騎士の卵が料理が得意だからって、何の自慢にもなりやしねえよ」と言いながら、アルガスの口許が緩んでいる。

士官学校生達アカデミーが初めて見る表情だった。

アルガスは出会った時からずっと、しかめっ面をしていた。調子のいい愛想笑いを浮かべることはあっても、くつろいだ自然な微笑みなどは見せず、いつも苛々と落ち着きがなかった。

エルムドア侯の安否や、今後の自分の立場を案じ続けていたからだろうか。あるいは、級友という共通点を持つ他の五人の仲間には入りづらいと感じていたのかもしれない。

ようやく打ち解けてきたということだろう。

士官学校生達アカデミーの心も和んだ。

食後の後片付けも、翌日の朝食の仕込みも終え、少年達は焚き火を残して提灯ランタンの灯りを全て消した。

「じゃあ、寝る前のお祈りをしようか」

ラムザは懷中方位磁針コンパスを引っ張り出して方位を確かめた。

グレバドス教の祈禱は、太陽の方角、又は聖人の祭日などにはその生誕地や縁の大聖堂の方角に向かって捧げるのが正式な作法だ。

屋内や雨天時でも正しい方位を知るために、信心深いグレバドス教徒は懷中方位磁針コンパスを持ち歩く。数珠ロザリオと並んで、信者が好んで身に帯びる貴重品である。

「いいもの持ってるな」

アルガスが羨ましそうに横から覗き込んだ。

「いいだろ」

ラムザは素直に見せびらかした。

「ザルバツグ兄さんが、新年の贈り物の日に下さったんだ。僕の誕生日でもあるんだけどね。アルマもお揃いのを持ってるんだよ」

※磨羯の月の十日（※太陽暦一月一日）は、大晦日から十一日間続く新年行事を締め括る後祭りの日だ。正月の飾り輪リースや魔除けの枝と共に、使い古した農具工具や文具、人形などを焚き火にくべる。そして一年を新たな気持ちで迎えられるよう、家族の間で新調の衣類や日用雑貨を贈り合ったり、職人の親方が徒弟に仕事道具を与えたり、領主が領民に宴会を振る舞ったりするのだ。

「ちよつと見せてくれよ」

アルガスの関心はベオルブ家の兄妹の絆より、方位磁針コンパスの贅を尽くした材質の方にあるらしい。

鏡のように磨かれた靈銀ミスリルの蓋には、螺鈿細工で”黒翼の白竜”の家紋が？め込まれている。飛竜の緑の瞳は緑玉エメラルドだ。ここにはないが、アルマの方位磁針コンパスの竜は紅玉ルビーの瞳を持っている。

蓋を開けると、もう一枚水晶板の内蓋があり、中には小さな畏国イヴァリース地図を背景に、聖印の形をした金塗装メッキの針が揺れている。磁針の支え針は伝統あるオーボンヌ修道院の位置に立ち、三大聖地――聖アジョラの生誕地ベルベニア、昇天地ゴルゴラダ、教会の総本山ミユロンドーの地点には金剛石ダイヤモンドが輝く。そして、十二方位に対応する十二の月の守護宝石が地図を丸く縁取っている。

裏面には、『我が親愛なる弟ラムザへ ザルバツグより 聖歴一二〇六年正月に』と飾り文字で刻まれていた。

「いいな」

アルガスは溜め息を吐いてラムザに方位磁針コンパスを返した。

「あれ？方位を確かめるんじゃないかったの？」

「え？」

「君、呂国旧教派だろ。その数珠ロザリオは」

ラムザに指摘されたアルガスは、首に掛けている数珠ロザリオを、慌てて服の内側に押し込んだ。

「姉貴の形見さ。オレは別に……こだわってないぜ」
言い訳がましく言う。

「隠さなくていいよ。咎めてるわけじゃない。」

僕の母さんだって、呂国旧教派とミュロンド正教派のちゃんぽんみたいな修道院の出身だったし。ドラコニア領内にだって、呂国旧教派ロマンダもフアラ教徒もいるよ。

僕の方こそ、こだわってないから」

呂国旧教派とミュロンド正教派は、グレバドス教の二大宗派である。
る。

呂国旧教派は、雄帝国の弾圧を逃れて呂国に移住した、ごく初期の信徒達から広まった宗派だ。土着の精霊信仰や土地神信仰と融合した一方で、教会内に偶像や宗教画を飾らない、身分の高い僧でも清貧に徹するなど、草創期のグレバドス教の精神を忠実に守っている面もある。政治からは距離を置き、離島や山奥の修道院で、学問・芸術・手工業技術と共に発展してきた。

他方、ミュロンド正教派は三世紀に、衰勢著しい雄帝国が国内統一のための国教会として創設した。誕生当初から、世俗の権力との関係が密接だったのである。概して教義は排他的で、規律が細かく厳しい。政治的威信を顕示するために、教会建築や儀式は次第に壮麗・華美になっていった。

両派は長年、互いに非難・反目し合ってきた。

雄帝国の版図を継承した畏国では、ミュロンド正教派が多数派を占める。五十年戦争中、少数派である呂国旧教派は、敵国の宗派として迫害されることもしばしばだった。

「君の守護聖人は？」

ロマンダ

呂国旧教派は、誕生月や出身地毎の守護聖人を重視する傾向がある。毎日の礼拝も、守護聖人に祈ることが多いのだ。

「いや……、オレン家^ちだってもう、ほとんどミクロンド正教派の慣習に合わせてるんだ。一緒でいい」

「そう？じゃあ……」

ラムザは地中の道を通っている——と当時は考えられていた——太陽の方角を指差す。

「あっちだ」

ディリータと並んで跪く。

ナツシュとサーシャも姿勢を正して指を組む。

アルガスは何故か指は組まず、数珠^{ロザリオ}の聖印を握り締めて俯いている。

そして——。

「ガストン……」

銀色狼のような横顔の不良少年は、傲然と腕を組み、あさっての方を向いていた。

「俺^{てめえ}にや神様に懺悔することも、頼みて——こともねーよ。いつだって自分の力で、後悔しねえ生き方してっから」

「……。（どこから来るんだろう？この強気は）」

ナツシュは呆れるよりも、ほとんど感心した。

「ああん？てめー、何か言いてえことあんのか？」

「あああ、あるような……ないような……」

ナツシュの襟を締め上げるガストンの手を、ラムザが押さえた。

「お祈りするって何も、自分の行いを反省したり、神様にああして下さいこうして下さいってお願いすることばかりじゃないと思うけど……」。

僕が子供の頃に教わったのはさ。一日の最後のお祈りの時は、その日あった嬉しかったことを全部思い返して、今日も一日生きていられて良かった……って神様にお礼を言えればいいんだ、ってさ。誰

かから親切にしてもらったこととか、美味しいものを食べたこととか……。そうすれば幸せな気分でぐっすり眠れて、次の日も元気に楽しく始められる、ってね」

サーシャがくすつと笑った。

「ラムザ君の元気の秘密がわかる気がするわ」

「まあ、強要はしないけど……。君も今日一日、いいこといっぱいあっただろ。例えば、世にも可愛いアルマに手づからお茶を入れてもらったこととかさ。天に感謝して然るべき僥倖だと思わないかい？」

「……。 (どっから来るんだ？ この兄バカぶりは) 」

ガストンは銀褐色の髪をくしゃくしゃと掻いた。

「……。 ふん」

指を組んで、琥珀色の眼を閉じる。足は胡座のままだが。

六人はしばし、黙って思い思いに祈る。

「……。 それじゃ、僕らは先に休ませてもらうよ。後は頼んだ！」
飛空艇の翼の下に設けた寢床の一方にサーシャが潜り込み、もう一方にラムザとディリータ、ナツシュの三人が身を寄せ合って横になる。

「おう、安心して寝てろ」

見張りの一番手は、ガストンとアルガスだ。

この物語のイヴァリースは、？？のイヴァリースとはパラレルです。考え始めた頃は？？が出るずっと前で……内容によってはリンクさせるつもりでしたけど、主に二つの観点から、連続性はないという立場を取りました。

第一に、こっちのイヴァリースにはヒト型以外の知的種族が住んでいそうな感じがしません。”民族”が”種族”と違うのは、どんなに文化習慣や姿形が異なるように見えても、必ずといっていいほど、民族間にまたがって生まれてくる子供達がいるということ。他にも知的種族が色々いて、ヒト族内部での差違は相対的に大したことはない……みたいな世界ではちよつと起こらなさそうな問題のあれこれが、結構キープポイントになってしまったので……。

第二に、私の感じたところでは、ルカヴィはオキュリアよりもずっと怖い。初めてルカヴィに遭遇した時の『うげげえっ!!』って焦りは、かなりなもんでしたわ。

他のゲームで、思いがけない場所で・または強さの中ボスにぶつかった時は、いわば、将棋をやってて予想外の所にポンと飛車や角が切り込んできたような感じ。どんなに強くとも――それこそオメガやアルテマバスターでも――、世界の理ことわりの中にある存在だって意味では、安心して戦える敵(?)といえます。でもルカヴィに遭った時は、いきなり将棋盤が引っ繰り返って、ルールも知らない別のゲームが始まっちゃった、みたいなショックを受けました。段違いの強さもさることながら、ここまでの世界観の中からコイツが出てくるかよっ!?!という……。 (ま、よくよく思い返せば前振りはあるのですが。) ソイツがゲームのルールを超えない存在であることを知っている私ですらそうだったのだから、実際戦ったラムザ君

達の驚愕と恐怖は筆舌に尽くし難いものだったでしょう。

で……ありながら多分、ラムザにとってそれ以上に怖かったのって——世界が突然引っ繰り返ったってことでは——ジークデン砦の戦いだったろうなと思います。アレに比べりゃルカヴィだってなんぼのもんじゃない、って感じでしょうね。

そしてまた、私らみたいな”氷河期以降”の人間にとって身近な”怖さ”って、感覚的にこっちだって気がします。盤石のルールの中でベストを尽くせばなんとかなる、って安心感がなくて。ルールを根底から揺るがすものと、あるいは、ルールそのものと格闘する羽目になる……みたいな。

そんなこんながテーマになっちゃったので、整合性の折り合いを付けるのが難しくなりました。??ファンの方には違和感がありでしょうけど、歴史・地理等かなり別モノです。ごめんなさい！

？－2－〔4〕 焚き火の番 ？ガストンとアルガス（前書き）

小分けにしてみました。

？－2－〔4〕 焚き火の番 ？ガストンとアルガス

※天蝸スコーピオの刻（※午後八時～十時頃）――。

常緑樹の葉陰から青白い月光が降り注ぐ。

夕食の間は気にも留めなかった小川のせせらぎが、今ははっきりと聞こえる。

獣の遠吠え。梟の鳴き声。薪のはぜる音。……

「似てねえな……」

特に会話もせず、時々暗闇を見回したり、枯れ枝を火にくべたりしてきたアルガスが、ぼそりと呟く。

ガストンはアルガスの視線を辿った。子供のように屈託のないラムザの寝顔がある。

「ああ……、ラムザが兄貴達に、ってことか？

もろにお袋さん似みてーだからな。親父さんに似てきたとかつーのは、一種の世辞だろ。女顔コンプレックスに劣等感持ってたから、そいつ」

アルガスはまだ首を捻る。

「あの南蛮人のおっさんも言ってたよな、母親似だって。けど、ちつとも似てねえじゃねえか」

「あん？」

「今朝ダイスダーグ様にお会いした時、控えの間に肖像画タペストリーの織物が掛かった。若い頃のバルバネス將軍と奥方の。」

奥方はほっそりした美人だけでも、こいつとは顔型タイプが全然違ったぜ。髪と眼も焦茶色ダークブラウンだった」

十三世紀頃の畏国の絵画は立体感に欠け、一枚の絵の中でも尺度や視点が一定でなく、写実的とは言い難い。それでも、大まかな特徴は充分に伝わる。

「ああ……。そりゃ、先妻のマリーソフィア様だ。先代のラーグ公の従妹で、上の兄貴二人のお袋さんさ。もう二十年近くも昔に亡くなってる。

こいつと妹のお袋さんはファティマつつつて、北方系の神官医だ
ったそうだぜ」

「……！？バルバネス將軍が再婚してたなんて、聞いてねえよ」

「そりゃ、そーだろーさ。ラーグ公のお許しが下りなくて、公式の
場じゃあ一遍も奥方として出せずじまいだったらしい」

アルガスは眉をひそめた。

「……妾の子か？」

「平たく言や、そーゆーことになるな……」。

親父さんにや、何も隠すつもりは無かったみてーだが。軍医とし
てしょっちゅう戦に付いてってたんで、騎士団の人間にや割と顔が
知られてるんだぜ。名医だったって評判だ」

アルガスは顔をしかめたまま、頻りに首を横に振る。

「……わからねえ……」

「そーか。わかんねーか」

ガストンは薄く笑った。

「って、何がわからねえか、わかるのか？」

「おおよそな。こいつがどーして、あっちこっちで人気があんのか、
ってこったろ？」

外国人の血を引いてる、妾の子だ。爪弾きにされててもおかしく
ねーのに……」

アルガスは頷いた。

ベオルブ邸の使用人達や、ドラコニア領の領民達の歓迎は、ただ
の社交辞令とは思われなかった。

兄達と腹違いであるならば、先程見た家紋入りの方位磁針が持つ
意味も殊の外重い。

畏国の法では、許可無く他人の紋章を使用すると処罰される。非
嫡出子は通常、母の家系の人間と見なされるため、勝手に父の家の
紋章を身に着けることは出来ないのだ。

ベオルブ家の紋章の入った日用品を贈る、というのは、私的な兄
弟愛の表現では済まされない。正式に当家の一員と認める、という

お墨付きを与えたことになる。

ラムザは同性でもハツと目を奪われるほどの美形だし、剣の腕も立つ。が、それだけで人望を集められるものだろうか？

「俺だってな。最初は、鼻持ちならねえ奴だと思っただぜ。」

そう……去年の、入学式の日のこった……」

ガストンは焚き火をつつきながら語り始めた。

「間違っマントて妹の外マント套着て来やがってなあ、このボケは。今だって女顔だが、一年前はもつと線が細っこくて、ちよつと強く抱き締めれば折れちまいそう……ってな風情でな。誰が男と思うかよ。」

野郎どもが色めき立っただぜ、ありや一体どこの御令嬢だ、ってな。そしたら、付属の幼年学校から進学してきた奴らが大笑いしやがって。ありやあ男で、ドラコニア伯爵の弟だ、ってよ。

ま……当然、新入り組は面白くねーわな。

士官学校生アカデミーつつうと、富裕層リッチの坊々ばっかりって印象イメージがあるかもしんねえ。基本は、百騎長以上の家の跡取りってことになってるが……。

だが実際にや半分ぐれえの奴の家じゃ、学費が負担になってんじやねーか？ サーシャや俺ん家ちみてーにな。百騎長以上の家でも、大戦中に戦費の持ち出しが増えて借金抱えてるとこは少なくねえ。それ以下の、子供を選良エリートの仲間入りさせたくて無理して入学させたようなどこは、もつとだ。成績が良くても、学費が払えねえで入学を諦めたり、中退したりする奴もいるんだぜ。

そーゆう中にだ、家を継ぐ必要もねえ妾腹の三男坊がだぜ、偉っそーにピッカピカの白韋駄鳥チヨコボなんぞで乗り付けやがってよ。

どーせ、顔だけで気に入られた踊り子かなんかのガキだろうー。ろくな度胸も剣才もねえのに、兄貴の金と人脈コネで進学してきたんだろー。こんな女みてーなひ弱そうな奴が、大將軍の息子つっただけで、将来千騎長ゆくゆくだ万騎長だって肩書きもらうのか。それでもって、俺らに死ねと命令すんのか――。

……そう思ったら、どーにも腹の虫が収まなくなつてよ。

俺アこう見えて、ここらじゃちよいと名の通った暴走族^{ソク}だったんでな。同じよーにムシヤクシヤしてる連中に声掛けて、一丁からかってやろうぜ、って話をまとめんのはわけなかった。

六人……、いや、七人か。一人は、適当に用事作ってデイリータ引き離す役だ。ラムザ一人だけ呼び出して、武道場裏の、人気^{ひとけ}のねえ倉庫に誘い込んだ……までは順調だったんだがな」

ガストンは自嘲気味に笑った。

「ひっぺがして本当に男かどうか確かめてやれ、ってつもりだったのさ。『兄上に言いつけてやる』なーんて泣き言ぬかそうもんなら、マジでヤキ入れたろーと思ってたぜ。それが、ひよいひよい逃げ回って全然捕まらねーんだ。

あの手品みてーな戦い^{ケンカ}の仕方は、初めて闘^やった時にゃ驚くぜ。しつかり組んだつもりなのに、するつと抜けられちまう。逆にこっちは、ふわつと撫でられたかなってぐれえでもう投げ飛ばされてんだ。おまけに騎士の卵にしちゃ、足払いと膝蹴りとか、足技の使い方がやたら上手くてな。ま……、そーゆう”反則技”使い慣れてるって時点で、ただの箱入りお坊ちゃまのわけがねえって気付くべきだったぜ。

そのうち、『そんなに僕の裸が見たいんだったら、みんなで水遊びする?』なーんつつて表に飛び出してな。パツと上着と長靴^{ブーツ}脱ぎ捨てて、池に飛び込みやがってよ。

※白羊の月の頭(※太陽暦三月下旬)だぜ。飛び上がるほど水が冷てえ。どーせ長くは入ってらんねえってわかっててもな……、『イルギリス川の河童小僧と呼ばれたこの僕に、水中戦で勝てると思う方が間違ってるよ』なーんて挑発されたんじゃ、岸でモタモタしてんのも癪^{イヤ}だろ。池ん中まで追いかけてった俺らを、あいつは烏賊^{ビスコデ}妖怪^{イーモン}みてーにスイスイ動き回りながら、片っ端から水ん中に叩^{たた}っ込んでってな。すっかり寒中水泳に付き合わされちまったぜ。

全員ずぶ濡れになってカチカチ歯が鳴り出した頃に、自分からす

っぽんぽんになって”証拠”見せてくれたけどよ。あん時や、負けたと思っただぜ。……って、モノのデカさにじゃねーぞ？

負けたのに、悔しいよりや、楽しくなっちゃまってな。笑いが止まんなかったぜ。面白え奴に会ったなーと思ってよ……。あいつも一緒に笑って笑い転げてた。

で、大笑いしたら腹減ったっつーんで、詫びがてら街に繰り出して、好きなだけおごってやるつつたら……。これがまた、細いに似合わず食うわ食うわ。林檎だろ、揚げ菓子だろ、焼き鳥にふかし芋に、蒸し麺麭に……。

おまけに次の日、俺らは全員風邪引いたっつーのに、こいつ一人だけピンピンしてやがってよ。ものの見事にバカを証明してくれやがった」

ガストンは愉快そうに、今度は声を立てて笑った。

枯れ枝を膝に押し付けて割り、ガストンは焚き火に投げ込んだ。炎が大きく燃え上がり、鋭い琥珀色の瞳を照らす。

「簡単なこった。こいつが他人ひとに好かれる理由わけなんざ……。こいつが他人ひとを好くからさ。

こいつは、外見みでだの肩書きものさしだのを基準に、他人ひとに媚びたり威張ったりしねーから。

だからこっちにとっても、ラムザはラムザだ。伯爵令息様だろーが、韋駄鳥チヨコボの骨だろーが……。そんなん、どーだって変わりやしねーんだよ」

ガストンは顔を上げ、アルガスの目をじっと見た。

「てめーはどーよ？」

「あ？」

「昼間の、じーさんの話さ。じーさんの無実を信じた奴は、親父さんの他に誰もいなかったのか？ 本当に、ただの一人もか」

「……」

「俺にはどーも、じーさんが実際に裏切ったかどうかよりや、裏切

ったと周りの連中が信じた……か、信じたふりして離れてった、そ
っちの方に問題がありそーな気がすんだがよ。

つまるところ周りの連中は、じーさんや親父さんその人でなしに、
”名門サダルファス家”の権力について来てただけだった……って
ことになんねーか？」

「何ィ！？」

アルガスは声を荒げ、気色ばんでガストンの襟を掴んだ。

ガストンはその手首をガツシリと押さえ、落ち着き払って尋ねる。
「だから、そーじゃねえって反論があるなら、聞かせてくれや。

じーさんはこんな風に勇敢だったとか、尊敬されてたとか……そ
ーゆう話はどのぐれえ知ってんだ？」

アルガスは握り締めた拳を開き、力無く首を左右に振った。

「じいさんが死んだのは、オレが生まれる前だ。オヤジは、じいさ
んの話はあんまりしたがらねえ……」

ガストンは肩をすくめた。

「俺にはどっちでもいいんだぜ。てめーのじーさんが英雄だろーが、
裏切り者^{もん}だろーが。

じーさんは立派な奴だったって信じるんなら、自分もそうなら
うとか、名誉回復してやろうとか、思やあいい。矢っ張り裏切り者^{もん}
だったって思うんなら、血がつながってようが自分は自分、そうはな
らねえよーに頑張りやいいだけじゃねーか。

どっちみち俺は、目の前にいるアルガスって男しか見てねーよ」

「……」

もう一度、ガストンはラムザの寝顔を振り返った。

「もし、そのじーさんの話の主人公がこいつだったらな。

そんなデタラメ話、誰が信じようが俺は信じねーぜ。他の奴らが
どんだけ悪口を言いふらそうが、伯爵家の御曹司でなくなるうが……
こいつがこいつである限り、俺なら見捨てねーよ」

ガストンの、鷹のように鋭い目が笑った。

「俺みてーな悪タレをして、そう言わしめる。そーゆう奴だぜ。ラ

ムザはよ」

ラムザは、何か美味しい物を食べる夢でも見ているのか、もぐもぐと幸せそうに口を動かしながら、くるりと寝返りを打って向こうを向いてしまった。

？－2－「4」 焚き火の番 ？ラムザとディリータ

※磨羯カプリコンの刻（※午前〇時～二時頃）――。

「どうした、ラムザ？」

焚き火に照らされて、吐く息が煙のように輝いて見えるほど、夜気が冷え込んでいる。朝までには霜が降りるだろう。

「別に。ちょっとこっちに座ってみたくなったのさ」

ディリータがサーシャにもう一枚毛布を掛けてやりに行った隙に、ラムザはそれまでディリータが座っていた場所に席を移していた。

「どっちでも変わらんだろ」

と言いながら、ディリータはラムザのすぐ隣に腰を下ろす。

「どっちでも同じなら、僕がこっちだっていいはずじゃないか」

ラムザは微笑んだ。

ディリータが座っていた場所の方が風上で、夜風が冷たい。

「過保護なんだよ、君は。僕の世話ばかり焼いてて、お婿に行き遅れるぞ」

寮にいても、時々夜中にディリータが布団を掛け直してくれていることに、ラムザは気付いていた。

「ディリータも言ってたけど、もっと自分のことを考えるべきだね」

ラムザは外套マントを広げ、ディリータの肩を抱き込んだ。

「男と一つ外套マントにくるまっても嬉しくないぞ」

「嬉しくなくても、あったかいだろ」

ディリータは仲間達をはばかり、ラムザの耳元に口を寄せて囁いた。

「ところで、ラムザ……」

ラムザはくすぐったそうに首を引っ込めた。

「何だい？男に耳打ちされても嬉しくないよ」

「嬉しくなくても、聞け。」

ザルバッグ様のお言葉のことだ。気付いているか？お前にドータ

ーに行け……という以外にも含みがあったぞ」

ラムザは頷き、矢張り低い声で答えた。

「わかってる。搜索隊を”出す必要がない”……というよりも、
出されては困る”とお考えの方がいる可能性があるんだろう」

ゼルテニアと隣接するランベリーの領主・エルムドア侯は、今のところゴルターナ公寄りのようである。ラーグ公の臣下の中には、政敵が失脚なり落命なりしてくれればむしろ好都合、と考える者もいるだろう。ことによると、積極的にエルムドア侯誘拐に手を貸した者がいても不思議ではない。

「妨害が入るかもしれん。北天騎士団の搜索隊が成果を上げるまで、のんびり観光旅行……というわけにもいくまい」

「うん。ただイグーロスに連れ戻されて謹慎処分、くらいならいいけど。」

見る人によつては、僕だって充分厄介者だもんな。この機会に消えてくれれば、手を叩いて喜ぶお方も一人二人じゃないだろう……」

ラムザは金髪頭を掻いた。

「まずかったと思ってるよ、みんなを巻き込んだのは。」

あの場は空つとぼけておいて、後で君と二人だけで抜け出せば良かったんだよな。

つい、はしゃいじゃってさ。ザルバッグ兄さんがこういうこと任せて下さるの、嬉しかったから……。アルマ達の手前、不安がらせるようなことは言えなかったし。

明日にでも、みんなに話した方がいいかな？ 少なくともサーシャだけでも、ガリランドに留まってもらうとか……」

「やめておけ。気付いていないなら、敢えて知らせない方がかえって安全だろう。」

だいたい、危険だと言えば尚更ついて来たがるような連中だ。……アルガスはどうかわからないが」

「でも……」

「おい、ラムザ」

ディリータはフツと笑った。

「"みんな"と言いながら、僕は最初から別枠のようだが」

「え？だってそりゃ、君はもう十年來の相棒じゃないか。君をおいてけぼりにしたら、後で『どうして僕を連れて行かん』って、こんな目をして恨み言言うだろ」

と、ラムザは両手の指で目と眉を吊り上げた。

「するか、そんな顔？」

「する、する！去年の入学式の日なんかさ。

ガストン達と街でおやつ食べて帰ってきたら、君が校門の所でぶんむくれて、土人形ゴレムみたいに立ちはだかって。ちゃんとディリータの分にお土産もあるってのに、『そんな問題じゃない！』って、ものすごい剣幕で怒るんだもの。

焼き餅なんか焼かなくなつて、僕の一番の親友はディリータだつてのにな」

ラムザはふざけて、ディリータの頬に唇を押し付けた。

「バカ、だからそういう問題じゃない。お前の甘ブラコンったれ妹と一緒にするな！」

「ははは。わかつてるよ」

ディリータは頬を拭う。

「とにかく。僕の気持ちができるなら、あいつらの気持ちも汲んでやれ。人数が多い方がより安全になるのは、確かだ」

「そうか……。うん。そうする」

ラムザは頷いて、微笑んだ。

ディリータは振り返り、アルガスが熟睡していることを確認して、話を続ける。

「それから、もう一つ。奴の動きには要注意だ」

「まだ、アルガスを疑っているのかい？」

「お前はどうか？」

「始めはね……。今はもう、疑ってないよ」

「旨い飯を作るからか」

と、ディリータは茶化す。

ラムザは声を殺して笑った。

「違うって。もっと前からさ。」

最初是不審に思ったよ。隊長殿の剣を受け取った時、これでみんなの仇を討ちたい……なんて言った割には、アルガスはその後ちっとも仲間のことを話題にしなかった。悲しいとか悔しいとか、どんな人達だったかとか……」

特に涙を堪えているようにも見えなかった。それどころか、どこかホッとしているような――しかし、そのことを後ろめたく思っている素振りもあった。

「でも、アルガスの名字を聞いて謎が解けた。騎士団の取り調べの中でサダルファスって名前が出た時、すぐに思い出したよ。雪華騎士団の団長殿の家だったな、って。」

”裏切り者の孫”ってことで、日常的に辛い仕打ちを受けていたんだろうな。亡くなって悼むよりも、解放感の方が先立ってしまうほど……。

だけど、そんな自分を申し訳なく思う気持ちも持っているんだ。いい奴じゃないか」

ディリータは首を傾げる。

「さて、どうだろう。上司、同僚からいじめられていたなら、敵に売り渡す”動機”はあったかもしれないということだ。しかし、”手段”があったかという面から考えると、奴よりはるかに怪しいのは……、」

「……近衛隊長殿だね」

ディリータと二人で運んだ近衛隊長の遺体は、一行のメンバーの中で最も温かく柔らかく、外傷が少なかった。他の者達は喉や心臓などにしっかりと止めを刺されていたのに、彼だけは頭部への打撲傷からじわじわと内出血して、後から死に至ったもようだ。だからこそ盗賊達も真っ先に目を付け、身ぐるみ装備品を？ぎ取ったのだろう。

近衛隊長ならば、移動計画の立案・実行の責任者だ。詳細な情報を誘拐犯達に流すことも出来たはずである。助命と何らかの見返りを約束されていたが、打ち所が悪かったのか。あるいは裏切られて処分されたのか……。

「でも、どうして……？ 近衛隊長なんて、よほど侯爵様の信頼が厚くないと任命されない役職じゃないか？」

「その”まさか”があり得るほど、今のランベリーは政情不安定だ」
五十年戦争末期にオルダリーア鷗国軍に占領されたランベリー領では、都市や農村の荒廃が激しい。また大勢の騎士達が、現在の国境をまたいでゼラモニア是領地方に持っていた領地を失っており、戦後、騎士達の身分と実勢力とが一致しなくなっていた。高位高官でも巨額の借財に苦しむ者もいれば、武力財力に比して現在の地位に不満を持つ者もいる。

「犯人どもに買収されたのではなく、次期侯爵候補の誰かの密命で、積極的に犯人どもと接触を取っていたのかもしれない」

エルムドア侯は独身である。侯を尊敬する素朴な領民達が信ずるような、二十代半ばにベスト黒死病で亡くした最初の奥方を今も愛しているからだ——といった叙情的な理由からではないだろう。現に、恋人と噂される女性は何人もいる。

臣下の娘を娶るにせよ、他領から嫁取りするにせよ、婚姻を結べば縁戚は政治にも多大な影響力を及ぼす。家臣達の勢力均衡が危ういため、迂闊に再婚出来なかったのだ。

だがエルムドア侯が再婚せず、子が無いために、後継者候補が乱立し家臣達の派閥争いが激化する——という二律背反も抱えている。エスカレート

「エルムドア侯が亡くなっても、責任を問われるどころか、新侯爵様から手厚く取り立てられるかもしれないわけか。しかし……、」
「ああ。そうそう虫のいい話はない。誘拐犯達にしろ”黒幕殿”にしろ、律儀に共犯者に報酬を払うより、口封じのために始末してしまった方が安全だ。生かしておいて事後の捜査を攪乱させる目的でもなければ」

「それなら、わざわざ他の人達と違う殺し方をして注意を引くのは

失策じゃないか？」

「真犯人にとって、別の容疑者を仕立て上げるのは、捜査の目をくらます良い方法だ。その点も踏まえて、ザルバツグ様の含みを肝に銘じておくべきだろう」

スケープゴート
「生け贄か……。アルガスもかな？」

「恐らくは……。主人の企みの一翼を担っている可能性もないではないが、さして忠誠心があるようにも見えん。証言も正直で、特に調査結果と矛盾している点はない。奴は何も知らないと見ていいだろう。」

僕が注意すべきだと言うのは、奴の功名心だ」

ラムザはアルガスの枕元に置かれた古い剣を見やり、頷いた。

「あの隊長殿の剣、元々はサダルファス家の物だろうね。剣のこしらえとか、鞆の装飾とか、ロマンダ呂国風だ。」

アルガスが決意してるのは多分、仲間の仇討ちよりも、サダルファス家の再興なんだ。華々しい手柄を上げて、侯爵様に認められたところだろう。功を焦って先走らなければいいけど……」

ラムザは唸った。

「アルガスが無茶をしないように見守りつつ……。骸旅団の手にも”黒幕殿”の手にもかからないように……。意外と難しい旅になりそうだな……」

「なあに、心配するな」

ディリータの手がラムザの喉に触れた。

「僕の目が黒いうちは、この首は誰にもやらんさ。……誰にも」
言いながら、するりと指の輪を縮める。

暗褐色の瞳に炎の影が踊り、一瞬、何かの魔物のような形を結んだ。

「……ディリータ？」

ラムザは首をすくめてディリータの手を払いのけ、吹き出し笑いした。

「あつぶないなー、もう……。今、目が据わってたよ。お酒も入っ

てないってのに」

「すまん、すまん」

薪のはぜる音がして、得体の知れない影もはじけて消えた。

「わかってるって。頼もしいよ。君と一緒にいてくれれば、きっと今回だってみんなが無事に帰れるさ」

「ああ。任せてくれ」

その時後ろで、ナツシュとガストンに挟まれて眠っているアルガスが、ナツシュに押し潰されて寝苦しそうに呻いた。

ラムザとディリータは振り返り、そっと笑い合った。

再び、二人黙って焚き火にあたる。

（僕の真意を知らねじるか？ラムザ……）

ディリータこそ、ラムザに功を立てさせたい。そのために、アルガスや級友達を利用するつもりなのだ。

ラムザは純粹に、次兄から任務を託されたことを喜び、期待にこたえたいと願っているようだ。表立って賞賛されることは無くとも、それどころか、イグロロスに戻ってから士官学校アカデミーの教官達やラーグ公の叱責を受けることになるうとも――ザルバッグが事情を説明し、とりなしてくれるとは思うが――エルムドア侯救出の助けとなれば満足だろう。

だが、ディリータにはそれだけでは面白くない。何とかしてラムザに、直接的に侯爵救出に参加させるなり、骸旅団の大物を仕留めさせるなり、人々をあつと驚かすほどの活躍をさせてやりたい。

功名にはやるアルガスや、血の気の多いガストンなどは、放っておいても”余計なこと”に首をつっこみ、ラムザを前線に引っ張り出してくれるだろう。やり過ぎないように適度に手綱を締めてやる必要があるが。

侯爵誘拐の”黒幕”が誰であるのかも、実はディリータには見当がついている。

（ガリランドで行われた非公式の会談というのは、オリナス王子

の後見人問題についてだろう)

病弱なオムドリア？世王は、オリナス王子誕生の前から既に、数年以内に亡くなってもおかしくないと噂され続けてきた。

オリナス王子は僅か二歳。今、王位継承すれば、王子が成人するまで二十年近くは、後見人が国政の実権を握ることとなる。

後見人にはルーヴェリア王妃の実兄・ラーグ公が最有力視されているが、元老院と保守的な貴族達はゴルターナ公を推している。

エルムドア侯との会談の結果がラーグ公にとって思わしくなかったか。もしくは、会談そのものが罠だったとも考えられる。

ザルバッグの話を聞いた時にディリータが思い巡らせたのは、もはや『黒幕が誰であるか』ではなく、『誰であるかをザルバッグが知っているかどうか』だった。

(知らない)

と、見た。

知っているとすれば、ザルバッグも”ぐる”であり、これは任務や試練などではなく陥穽だ。

が、そうでなければ、ラムザの名と実力を宣伝する好機である。チャンス

エルムドア侯を抹殺したい”黒幕”にとっては予想外の事件になるハプニングうが、侯を救出したのがラムザやザルバッグとあれば、結果的に不都合とはならぬはず。今はまだ、”最強の切り札”ともなり得るラムザという札を、カード簡単に捨てはしまい。

ナツシュが自発的に同行を申し出たのも有難かった。ナツシュの祖父はガリランド王立魔法院の学長であり、”黒幕”やラムザを厄介払いしたい者達でも不用意に手出し出来ない。たえラムザがなると言おうと、ディリータは何とかしてナツシュを丸め込んで仲間に加え、ラムザを守る”盾”にしようと思っていたのだ。

(と、いっても危ない綱渡りだ)

ディリータには焦燥感があった。

ラムザの命運は、王位継承問題と深く結び合わされている。街を歩き回ったり、教官や学友達と広く交際を持ったりして情報

収集に努めているのも、ひとえに王妃や元老院、ラーグ公とゴルターナ公の最新の動向を把握しておくためだ。

後見人問題は、早ければ年内にも決着するだろう。その時まで、ラムザの地歩を出来るだけ確かなものにしておきたい。

ディリータはたかだか十六歳の少年にすぎないが、能う限りの手段を講じて、大人達の思惑がどのように転ぼうともラムザを守り抜く覚悟でいた。

（俺の存在はそのためにある）

ラムザとディリータの関係は対等ではあり得ない。ディリータはラムザの下僕であり、剣であり盾であり、駒である。

ディリータ自身、そう心得ている。

ただ当のラムザだけが、幾つになってもディリータを親友ともだと言
い、相棒だと言う――。

それでいい、とディリータは思う。

（お前はただ真っ直ぐに、天の高みを見上げていればいい。俺が、
お前が羽ばたくための黒い翼になってやる）

ディリータはラムザの翼。ラムザの道具、ラムザの所有物もの、だが
――。

（本当は、お前こそ俺のものなんだ。

お前を天の頂に導くのも、地に突き落とすのも、俺次第というわけさ……）

ディリータの心を満たす暗い悦びを、ラムザは知らない。

？－2－〔4〕 焚き火の番 ？ラムザとディリータ（後書き）

うつひゃー！屈折してます……。

キャラ成分表示その3・ディリータ

？頭脳明晰・第一部で色々解説役になっている辺りや、第二部以降の、政治家達も教会関係者達も欺く立ち回りを見てみると、知識も知恵もずば抜けているのだろうと思わせます。それに多分、「努力すれば将軍になれる？……」という台詞が窺わせるように、ラムザの父ちゃんはディリータを、副官ではなく、指揮権を持たない参謀・助言役みたいなものを想定して仕込んできたでしょうね。ディリータもそれを心得ていて、武術も勿論鍛えはしたでしょうが、主に知能に磨きをかけてきたんじゃないかなーと思います。

……それにしても、頭のいい奴を描くのって難しいよう。作者は切れ者どころか、学生時代は天然ボケと呼ばれた種類の人間でして、脳ミソを絞り尽くしても彼の賢さをどこまで表現出来るんだか……。

？「俺に任せろ！」…彼の強味でもあり、弱点でもありそうです。頼りにされればされるほど張り切っちゃうタイプかも？涙ながらに『貴方だけが頼りなの！』なんてすがりつかれようものなら、もう全世界を敵に回そうとも恐れはしない、みたいな（！）。”他人のために力を尽くす”という点では、ある意味ラムザ以上に、切ないぐらい一途な奴にも見えます。

ただ、『項羽と劉邦』の項羽に近いようなというか……なまじ才能に溢れているために、なんでも一人で出来てしまう・やりたくなくなってしまう、そのことがかえって彼の行動力に限界を作りそうな、危うさを感じました。

ラムザは多分、素直に自分に足りないものを認め、他人の手を借りることが出来る。そのために結果として、自分一人だけの力よりはるかに大きなことも成し遂げられるでしょう。でもディリータは、対等な立場で、自由意思で協力し合う……とか、自分よりも優れた才能を持つ者に辞を低くして助力を乞う……とかいうの、苦手そうですね。オーランにも命令調だったし。どうしても、”利用するか・されるか”の上下関係、競争関係になっちゃうようです。

まあね、孤軍奮闘で、他人に頼らない癖がついてるのかもしれないけど……せめてラムザとオヴェリアには、もう少し信じて協力してもらっても良かったんじゃないかなー、と思いました。

？秘密主義……うーん、オヴェリア様の胸中お察し申し上げます。いくら一生懸命でも、時代が求める人材でも……、隠し事の多い男には安心して一生を委ねる気にならないよねえ。っていうか、そもそも、”委ねる”形になっちゃうのがイヤかも……。

ラムザだったら『黙って俺について来い！』っていうより、『君と一緒に来てくれると心強いよ、有難う』とか言いそう。（バカ）正直者のラムザとなら、何でも率直に相談し合って、二人で共同作業って感じになるだろうけど。ディリータとだと、彼の周到なお膳立てに一方的におんぶに抱っこされることになりそう……。

（それは、私は非力かもしれないけど……、貴方こそ、私を信じてはくれないの？少しは、貴方の背負っているものを分かち合える相手だと思ってくれないの？それじゃ、”愛してる”なんて言っても、一方的に所有したいだけで、私の人格を尊重してくれる気はないってこと？）ってな気持ちになってきっちゃうかな……。

……と、作者はラムザに近い系の、温和で裏表の少ない（単純な？）男の嫁ですので、つついという目で見えています。

ところで、ラストシーンのアレは……オヴェリア、死んでませんよね？歴史の必然性からいって？

ディリータは入り婿になって王位を獲得したのですから、二人の

間に子供が生まれ、成人するまでオヴェリアが生きててくれないと、政権が不安定になっちゃう。そしたら五大領主を失って弱体化した畏国は今度こそイヴァリース鷗国オルタリアや呂国ロマンダに呑み込まれちゃってて、ディリータが”英雄王”の名を残す暇もなかったのではと……。

それに矢っ張り、彼、ワンマンな感じだから。オヴェリアの方が、非力でも・非力な故に様々な人材を寛容に受け入れる”器”の役を果たすことで、補う必要があったんじゃないかな……？

箱入りお姫様育ちのオヴェリアでも、長い年月を積み重ねるうちには、ディリータの”正しさ”や、苦労や悲しみに寄り添えるようになったらうと思います。せめて今際の際までには、「愛してるわ、貴方を許すわ」とか何とか言ってくれたものと信ずるのですが……。

？―2―〔4〕 焚き火の番 ？サーシャとナツシュ

※宝瓶アケエリナスの刻（※午前二時〜四時頃）――。

「何を縫ってるの？さつきから……」

月の光と炎の明かりを頼りに、針仕事に精を出しているサーシャの手許を、ナツシュは飽きずに眺めていた。

「”勇気が出るお守り”よ」

サーシャは縫い上げたばかりの小さな巾着袋の口に紐を通し、麻袋から乾燥香草ドライハーブの芳香剤ポプリを一匙すくって詰めた。

「この端布と香草ハーブ、出がけにアルマさんからもらってきたの。ラムザ君の昔の服の切れ端と、いつも普段着に使ってる芳香剤ポプリ。

……あとは、これ」

サーシャは手巾ハンカチに包んだ、きらきらと光る細い金の糸のようなものを見せた。

「それ、何？」

「ラムザ君の髪の毛よ。この前、三つ編みにしてあげた時に梳き溜めておいたの」

黄金色の髪を一筋くるくると丸めて巾着袋に入れ、固く口を絞って飾り糸で縫い合わせると、

「はい、これはナツシュ君の分よ」

と、サーシャは巾着袋の紐をナツシュの首に掛けた。

「えっ！？……ぼくに？」

「ナツシュ君も、ラムザ君の大鼻屑ファンでしょ」

「う、うん……、ありがとう」

ナツシュは”お守り袋”をキュッと握り締めた。清々しい香りが立ち上る。

「あ、本当だ。いつものラムザ君の匂いだ」

「いい匂いよね」

サーシャはうっとりと言った。

「女の子みたいな可愛い顔してたって、人一倍武術の鍛錬に打ち込んでるんだから。どんなにか汗臭いだろうって思うのが普通じゃない？それが、側を通ったら爽やかーな石けんハープと香草の匂いがあるんだもの。もう、クラクラツときちゃうわー！」

サーシャは早速、二つ目の巾着袋にする布を切り出している。

「まだまだいっぱい作って、女子寮の友達にも配ってあげなくっちゃ」

指折り数えてみて、

「……十五個ぐらいいは要るわね。旅の間に全部縫い上がるかしら……」

「そんなに！？……すっごい人気なんだね」

「当然でしょ。あの顔あの性格、あの強さで、超名門・ベオルブ家の御曹司なのよ？騒ぐなっていう方が無理だわー」

「はは、は……競争率高そうだねえ」

「あら」

サーシャは苦笑した。

「あたし達、誰も競争なんてしてないわ。仲良く夢を共有して楽しんでるだけよ」

「“淑女協定” ってわけ？そうは言っても……」

「……ううん」

苦笑すら消えて、サーシャは顔を曇らせた。

「女の子同士で、セヴィ君がいいとかラムザ君の方が格好いいとかいう話題で盛り上がるのって、本気で結婚したいとかいうのとは全然次元の違う話よ。」

……わからないかしら？士官学校アカデミーに来てるって時点で、あたし達全員、とっくにラムザ君のお嫁さん候補としては失格なのよ」

「……？ごめん。わからないよ」

「つまり、ね。ラムザ君は、マリーソフィア様の子供じゃないのよね……」

ラムザの二人の兄達は、単にラーグ公やルーヴェリア王妃の臣下・幼馴染みであるばかりでなく、又従兄弟でもあるという強味がある。またマリーソフィアの姉妹達が王族や、他の五大領主の家系に嫁いでいるため、国中のあちらこちらの有力貴族達と縁戚関係があるのだ。

しかし、修道院育ちの孤児だったファティマを母に持つラムザには、そういった母方の後ろ盾が何も無い。

「だから……ね。ラムザ君が次代のドラコニア伯爵になるとしたら、その不利を補うために、家格が上のお家からお嫁さんを貰う必要があるのよ」

「……あ！」

ナツシュにも合点がいった。

士官学校アカデミーに在籍する女生徒は、おおそ二種類に大別される。

一方は兄弟のいない”跡取り娘”で、むしろ婿を取って家督を継がねばならない。

もう一方は身分の低い騎士の娘で、本人の才能、もしくは良家の子弟と縁の出来ることに期待を託されている。

いずれにせよ、成る程、ラムザの結婚相手にはなり難い。

「ベオルブ家自体が超名門なのに、それより上っていったら……侯・公爵家か王族ぐらいしかないよねえ」

「そうよ。内々に候補は絞られてきてるみたいなんだけど、噂に聞くとところじゃ、溜め息の出るような顔触れが勢揃いよ。

筆頭に挙がってるのなんて、どなただと思う？」

「……さあ？ 誰？」

「オヴェリア王女様……」

「えええっ！？」

サーシャは慌ててナツシュの口を押さえ、自分の唇の前に人差し指を当てる。

「しーっ！」

二人は仲間達を振り返った。四人の少年達は、皆ぐっすりと眠り

込んでいる。

ナツシュは声を潜めて、

「まさか！いくら何でも、王家直系の姫君を陪臣に降嫁させるなんて……！？」

「ベオルブ家は、元々王家直参よ。ラーグ公家が分家する時に引っこ抜かれちゃったけど。ガリオンヌ領は戦火にさらされなかったから、実質的には五大領主にも引けを取らない有力貴族だわ」

「そ、それじゃ、ひよっとしてひよっとした暁には、ラムザ君は”伯爵様”どころか……」

「そうよ。”国王陛下”……ね」

王太子オリナスに万一のことがあれば、第二王位継承者であるオヴェリアが女王となり、その夫も共同統治者として国王の座に就く。

「ものすごーくビミョーな政治的思惑の絡み合ってる話みたいなんだけど……」

ラーグ閣下としてはオヴェリア様を、ご自分のコントロール統制下における配下なり同盟貴族なりと結婚させたいのよね。オリナス王子様に何かあった時とか、後見人がゴルターナ公に決まった時の備えとして。

本当は、ハールーシャ様が生きてらしたら一番だったんでしょうけど……」

ラーグ公の長男のハールーシャは、四年前、オルダリーア鵬国の刺客と思われる凶賊の手に掛かって暗殺されている。

「少なくともエルムドア侯爵様とか、バリンテン大公家のダリウス様とか、ゴルターナ公の義理の甥のセヴィ君とか……には取られないわよね。だけどベオルブ家だって、あんまり力を付けすぎると離反するかもしれないし……」

でも王家と元老院の方では、逆にそれを期待してるみたいなの。ほら、大きな声じゃ言えないけど、今は王妃様とラーグ閣下タッグの発言力が強すぎるでしょ。王家とベオルブ家が強力に連合を組めば、ラーグ公家を押さえ込めるかもしれない、って……。

おまけにダイスダーグ様にとっても、ラムザ君は諸刃の剣なのよ。

今でこそお子様が無いから、大事な後継者だけど……もしお世継ぎが生まれれば、一転して目の上のこぶになるかもしれないのよね」

「ほえー……。何だか、複雑怪奇だねえ……」

「ただ、どこの陣営にとっても、ラムザ君は操り易い”安全札”^{カード}だ
って思われてるみたいね。母方の親戚が余計な横槍を入れてくる心
配がないから。人脈^{コネ}を求める格下の家から見れば短所^{デメリット}なことが、格
上の家から見れば長所^{メリット}にもなるのよ」

サーシャは溜め息を吐いて、傾いた月の浮かぶ夜空を見上げた。

「オヴェリア様は、来年の春には十六になれるわ。早ければオヴェ
リア様のお誕生日を待って、正式にダイスダーク様との養子縁組
と、オヴェリア様との婚約も発表して……未来のドラコニア伯爵様、
堂々の初お目見えかしらね^{デビュー}」

「ね？ 遠ーいお空のお星様と一緒に、ラムザ君は。誰だって、あ
あ綺麗だなあって見とれることは出来ても、誰にも、手を伸ばして
自分のものにする事なんか出来ないわ。

素敵な夢の中の住人よ。少女時代の楽しい思い出に、胸の奥にし
まっておきたいだけ。

だって……、目が覚めたら、素敵でも楽しくもない現実が待つて
るんだもの……」

サーシャは縫い物をする手を止めた。何度か口を開きかけては、
唇を噛む。

「……？」

ナツシュがじっと待っていると、不意に、サーシャは後ろで眠っ
ている仲間達を振り返った。

「……ガストン君って、結構友達思いよね」

「えっ!？」

「喧嘩っ早い、元暴走族だって聞いてたから。もっともっと怖い人
かと思ってたわ。でも、意外と優しいじゃない。むしろ、正義漢っ
て言ってもいいぐらいじゃないかしら?」

「……そうかなあ？充分コワイと思うけど……」
道中何度も首を絞められたり、ど突かれたりしてきたナツシュは、
首を捻る。

「あの……、もしかしてサーシャ、ガストンみたいなのが好み……？？」

サーシャは苦笑して、首を横に振る。

「ううん。それは、あたしから見たって矢っ張り、気性が荒っぽい
と思うわよ。積極的に付き合いしたい感じじゃないわね。でも……
でもね……」

例えば、ガストン君と結婚しろって言われたら、最初はかなり戸
惑うわよ。慣れるまで時間がかかるでしょうけど……、でも、どう
しても付き合いきれないってことは無いと思うのよね。少なくとも
……あたしをお嫁さんにしようって人と比べたら、”百倍”親しみが
持てるわよ……」

ナツシュは引きつった微笑を浮かべた。

「……あ。サーシャって、もう婚約者フィアンセがいるんだ……？」

「”婚約者”フィアンセなんかじゃないわよ！」

ナツシュがびっくりするほど激しい、嫌悪感をむきだしにした口調
で、サーシャは言った。

「ただの、”借金取り”なのよ……！！」

サーシャは抱え込んだ膝の上に顔を伏せ、何度も首を振った。

「……。あたしの家、借金があるのよ。平民の武器商人に。」

始めはね、全然、家計が苦しいってわけじゃなかったの。むしろ
村が順調に大きくなって。畑を広げるつもりで、水路を延長して、
水を汲み上げる水車を作る工事をしたのよ。五年ぐらいもあれば無
理なく返せるはずの金額だったの。まさか……次の年に、黒死病ペストで
いきなり村の人口が半分になってしまっなんて、思いもよらなかった
のよ……」

ディリータの両親も犠牲になった、聖歴一二〇〇年丁度の大流行の
時のことだ。

「その頃から、鵬国との戦の旗色も悪くなって……。父様も兄様も精一杯働いても、恩賞が貰えるどころか、戦費がかさむ一方になっちゃったの。」

村のみんなだって、これ以上は無理ってぐらい頑張ってくれたのよ。お婆あちゃんや子供達まで、少しでも村の収入を増やそうとして、一生懸命畑の草むしりしたり、籠を編んだり……。母様とあたしも、月が沈むまで糸を紡いで、機を織って。でも、焼け石に水なのよね。もう、新しく借金を増やさないだけでもやっとな……。利息を払い続けるのも難しいぐらいの状態なの。

それで……。その武器商人が、あたしをお嫁さんに貰えるなら、結納代わりに借金全部帳消しにするって言うのよね……。――

「……。その武器商人の、跡取り息子のお嫁さんに……。ってこと？」
「ううん。本人の、よ。父様よりも年上で、太鼓腹で、年中脂汗かいてるオジサンよ……。ううん、気の合う人だったら、容姿そんなことなんかは気にならないでしょうけど……」

サーシャは顔を伏せたまま、自分の両肩をきつく抱く。

「勿論、初婚じゃないわよ。あたしが結婚すれば四人目ね。」

最初の奥さんは、体を壊したのに仕事を休ませてもらえなくて、薬代を惜しんで医者にも診せてもらえなくて、病気が重くなって亡くなったそうよ。

二番目の奥さんは、八つ当たりで気まぐれに殴られるのに耐えられなくなつて、逃げ出して尼僧になったんですって。

三番目の奥さんは……。あたしも何度か会ったことあるわ。お化粧してても、いつもどこかに痣や火傷の跡があるのは誤魔化しきれなかった……。我慢強そうな人だったけど……。浮気を疑われて、白状しろって、真冬の河に沈められて……。溺死だか凍死だかしたそうよ。立派な殺人事件だけど、お役人に賄賂を握らせて……。普段はしみったれたのに、そういうところには気前よくお金をつぎ込むのよね……。真相はどうか知らないけど、奥さんが悪かったってことになって、お咎め無しよ。

……そんな人と、どうやって付き合ってたらいいの……？」

「……、」

ナツシユはサーシャの肩に手を伸ばしたが、触れるのがためらわれた。

「父様が……最後の時間稼ぎに、士官学校アカデミーに入れてくれたの。武器商人の方では元々、騎士の娘が奥さんなら商売に箔が付くって算段みただったから。士官学校卒ならもっと価値が出るとか、人脈が増えるとか言いくるめたのね。借金は増えるけど、一発大逆転がない限り、どうせ返しきれないのは同じだもの……。

でも、矢っ張り奇跡なんて起こらないのよねえ。父様や兄様が大手柄を挙げることもないし、あたしの成績はさっぱりだし。男の子達の家だってお嫁さんの持参金に期待してるぐらいなのに、借金引き受けてまで、取り立てて美人でも賢くもない女の子をお嫁さんにするって物好きはいないわよね」

サーシャの声が泣き笑いになっている。

「父様は、しばらくの辛抱だなんて言うの。相手はもうおじいさんって言うてもいい年なんだから、未亡人になってから改めて、もっとマシな二度目の結婚生活が出来るだろうってことね。

兄様は……もっと若いから……。骸旅団があいつの家を襲ってくれないかな、とか、いっそ村ごと骸旅団に入って直接ぶち殺しに行こうか、とか口に出すこともあるのよ。……でも、兄様こそ昔から思い交わしてる婚約者フィアンセがいるのに。本気でも困るけど……、本気じゃないなら、そんなこと言わないでほしい……！」

サーシャが着ている、ラムザの服の袖に涙の染みがにじんできた。「あたしだって、騎士の娘……！わかってるわよ。あたし一人のために、村の人達みんなを盗賊にしたり、飢え死にさせたりするより……、それとも父様や兄様に、土地財産も騎士の位も手放して農民になってもらったりするよりも……、あたしがみんなのために我慢しなくちゃならないんだってことぐらい。

わかってても……、でも、怖いのよ……！いけない希望をちらつ

かされたりしたら、挫けそうになるじゃない……!!」

鼻をすすり上げて、ふと、サーシャは泣き止んだ。

「……いい匂いね。本当に。気持ちがすっきり落ち着いて、明るくなるような……。」

この芳香剤ポプリの配合ブレンド、お母様の秘伝だそうよ。ラムザ君の印象イメージにぴったりね。

……それとも、逆なのかしら？ いつもこんな匂いに包まれてるから、明るく笑っていられるのかしらね……」

サーシャが借りてきたのは、ラムザが去年着ていた服だ。ずっと長持ちにしまわれていたので、香草ハーブの芳香剤ポプリの香りが濃く染み込んでいる。

二重に折り返した袖口に顔を埋めて、サーシャは深呼吸した。

「思い出だけじゃ生きていけないって、言う人もいるけど。あたしはそうは思わないわ……。」

世の中にはいい人もいて、楽しいこともあるって知ってるだけで、世界の見え方が全然違うわよ。知らないよりずっと、救われるわ」

「……。サーシャ。あの……。あのさ……。」

喉元まで出かかった言葉を飲み込んで、ナツシュは頭を振った。

「どうして……そんな話をぼくに？」

「……、ナツシュ君なら……笑ったり怒ったりしないで聞いてくれると思ったの。」

寮の友達とかが相手じゃ、かえってこういう話って出来ないのよ。下手したら、あたしよりもっと条件の悪い人だっているかもしれないんだから。騎士の娘でも、高級娼館とか、言葉も通じない紗国ペシヤやガンダリアの雅国の後宮ハレムに売られちゃう子もいるんだもの。

あたしなんて……本当にそう、もう少しはマシな再婚が出来る可能性があるだけでも、多分恵まれてる方なのよ。なのに……あたし、まるで弱虫で……」

ナツシュは苦笑した。

「ぼくは、これ以上ないってぐらいの弱虫だもんねえ。絶対、ヒト

のこと笑えるわけがないよ」

「あら」

サーシャは微笑んだ。

「そんなことないでしょ。ナツシュ君、人一倍努力家じゃない。知らないかしら？ ウォーゼル君との熱い最下位脱出戦たたかいの物語は、一部で静かな感動を呼んでるのよ！」

「は、はは……あれは、ウォーゼル君の方が熱血してるんで……ぼくはただ、引きずられてるだけっていうか……」

「ふふ、謙遜しなくたっていいわよ。あたし、ナツシュ君からも勇気をもらってるわ。どんなに力が小さくても、諦めずに頑張り続けることが大事なんだって、思わせてくれるもの……って、誉め言葉になってないかしら？」

でも本当よ。あたし、ラムザ君だけじゃなくて、ナツシュ君とも同じ班で良かったって思ってるんだから」

「……そう……。こんなぼくでも、少しは力になれてるんだったら……嬉しいよ」

涙を拭ったサーシャは、うきうきと浮き立つような口調で話した。「あたし、今からもう、この旅がずうっと終わらなければいいのにつて気がしてるの。人生で一番の大冒険じゃないかしら。きつと、一生の思い出になるわよ。」

ラムザ君、ナツシュ君は勿論だけど、ディリータ君ガストン君、アルガス君……みんなの格好いい姿を、すっかり胸に刻み込んでおくわ。そしたら、この後離ればなれになって、もう二度と会うことがなくても……、心の中では、ずうっと仲間にいるのと同じよね……」

穏やかに微笑んで、サーシャは針仕事に戻る。

「……」

ナツシュはサーシャからもらった芳香剤ポプリの巾着袋を、大切に懐にしまった。

（そりゃあ、ぼくなんてラムザ君と比べたら……チビで弱虫で、ト

口くさくて……。得意なことといったら魔法だけ。それだってまだまだ、お父様やお祖父様を納得させられるほどの腕前じゃないし……。でも……。でもね……)

炎の明かりに照らされたサーシャの横顔を盗み見ながら、ナツシユはそつと溜め息を吐く。

(……。)”最上級雷撃魔法”^{サンダジャ}が使えるようになったら言おう……)

――――。

計器板に赤い魔洗灯^{ランプ}が並んでいる。

(あれ……。？どこだろ、ここ……)

まだケツから五機も追ってきてやがる。

今更、戦闘艇の一機や二機盗まれたぐらいでガタガタ騒いでる場合じゃなかりうに。

それとも……。俺の目的を知った上で、どうあっても足止めしようつてか？

(”俺”……。？”僕”……。は……。？)

魔砲の魔洗燃料も、魔震銃の残弾数も心許ない。あとは魔力変換^{エーテル}機関だけが頼りだが……。

その上に。

一時の方角で、闇夜の空に火の玉が閃く。

一度、二度……。三度。一瞬浮かび上がる、有機的な輪郭^{シルエット}。

超大型の三頭竜^{ティアマット}！？ 索敵器に映ってねえ。”魔法反射”^{リフレク}の応用か？

戦闘艇と変わらない大きさのそいつが、行き違う刹那に雷を吐く。

バリバリバリッ！！

機体がバラバラに分解しそうな衝撃。緑の魔洗灯^{ランプ}の数が一気に削られた。

三連雷撃……。ッ！あんの狂魔学者ども、”あいつ”以外に幾つ化け物造りやあ気が済むんだ！？

くそっ、一撃で決めなけりや危ねえ。魔力変換機関^{エーテル}でまとめて仕留めてやる。使うのは……。”最上級風撃魔法”^{エプロジャ}だな！

機首を急上昇させて宙返り飛行し、眼下に”風撃波”^{エアロブラスト}を叩き込む。音も無く――、切り裂かれ、爆発する五個の機械と、四個の人造生命体。

ドンッ！

遅れて爆音が、次に爆風が届く。

計器板が真っ赤になった。

魔力変換機関の回路が断線^{ショート}しやがったか。チツ、帝国空軍の最新鋭機が聞いて呆れる。うっかり”あの魔法”なんぞ撃つてりや、自爆してたぜ。

……つつつても設計者の責任じゃねえ、か。”この剣”再生出来るほどの魔力を持ってる人間なんぞ、帝国広しといえども俺ぐらいだろ。

”あいつ”の取り巻き連中なら別だろうが、ありやもう人間やめてるからな……。

……何だ？地平線が赤い。

夜明けの光……のはずはない。俺は西へ向かって飛んでいるんだぞ？

ミュロンドの空が燃えている！

しかも、その向こうに口を開けてる暗黒の領域は……、”時空転位”^{デジヨ}の歪みか！？

市街地の大半を食い千切っているあの規模。

……どうやら、”あいつ”の言ってた”その時”が来ちまったみたいだな。

――我らは皆、将棋盤^{チェス}の上の駒のようなもの。たとえ”滅世使”^{ディアボロス}達といえども、この世の理という規則^{ルール}に縛られた存在だ。だが、もし……将棋盤^{チェス}そのものを引っ繰り返す手を持った者と戦わねばならないとしたら……、お前ならどうする？

――どうって、別に……いつもと変わらんだろ。力の限り食らいついてやるだけさ。蟻の群れが象を倒すことだってある。将棋^{チェス}の駒だ

って、百万回もぶつかりや痛いだろうぜ。

——はは、は。お前らしいな。じゃあ、もしもの時はお前に頼むとするか。

——あ？

——お前にしか……頼めない。

あの中にいるのは、”あいつ”なのか……？それとも、”奴”なのか……？

どっちにしろ、やることは一つ。

俺は、必ず約束を守る。

だから……、待っている！——

※双魚の刻（※午前四時〜六時頃）——。

大きな欠伸を一つして、ラムザは目を覚ました。

（何だろ、変な夢見ちゃった。空想魔学小説の読みすぎかな？）

隣で眠っているデイリータを起こさないように、そろりと寢床を抜け出す。

サーシャが気付いて、挨拶した。

「あら、おはよう、ラムザ君。寝起きがいいのね。折角、接吻^{キス}で起こしてあげようと思ってたのに」

「え？遠慮しとくよ、そ、そんな」

「ふふ、それは冗談として。また髪を三つ編みにしてあげるのは、遠慮しないわよね？」

「あ、うん。じゃ、ちよっと朝の運動した後でね」

ラムザは飛空艇の裏手を流れる小川のほとりに下りてゆく。長い髪をきっちり一本に束ね、冷たい雪解け水で顔を洗った。

軽く準備体操をしてから、まずは剣の素振りを始める。突く、薙ぐ、払う。上・中・下段、左右、前後と、様々な基本動作を二十回ずつほど試すと、次にそれらの動きを組み合わせた型練習に移る。

ようよう白んできた薄明の天地の狭間で、ラムザの長剣が時に鋭

く力強く、時にゆったりと滑らかに、銀色の軌跡を描く。体裁きに無駄がなく、舞いを見るように美しい。

「うわー、”決まってる”なあ……」

「あれで舞踏^{ダンス}が大の苦手っていうのが、嘘みたいよねえ。『必修じゃなくなつて助かった』なんて、心底ホッとしてるみたいだっただ……」

ラムザの”剣舞”に見入っているナツシュとサーシャの後ろで、デイリータがむくりと起き上がった。

「あ、おはよう、デイリータ君」

「ああ、おはよう。疲れは充分取れたか？」

「うん、ぼくはぐっすり眠れたけど……、デイリータ君達こそ睡眠時間が二回に分かれちゃって、眠くない？」

「なあに、平気さ」

デイリータは長剣を腰に差し、体のあちらこちらの筋を伸ばしながら、徐にラムザに近づく。

ラムザの背後※十歩^{ドーマ}（※約六メートル）ほどまで来て、突如剣を抜き、無言で斬りかかる。

カンッ。

ラムザは振り向き、デイリータの剣を払うと、即座に踏み込んで肩を狙う。

キンッ。

デイリータは素早く退いて白刃を受け流し、小手を撃ちにゆく。

丁々発止、息もつかせず切り結んでいるように見えるが、これも対戦形式の型練習だ。

「すごい……。ぼくの三倍ぐらいの速度^{スピード}出してるよ」

ガストンが欠伸を噛み殺しながら、観戦に加わった。

「ああ？ あいつら、毎朝やってるぜ。今日なんかほーんの肩慣らし程度だろ。」

日の出前から起きて、最初に走り込み^{ランニング}か韋駄鳥^{チヨコボ}の足慣らしだろ。

それから素振りに型練習に、対戦に。それも剣だけじゃなくて、槍と、素手の組み打ちでもだ。夏にや最後に、河に飛び込んで水練もやってたなー」

「あっ……」

型では喉を突くところで、ディリータが下段突きを繰り出した。ラムザがディリータの剣を下に打ち払い、そこから、自然な流れで自由対戦にもつれ込む。

「あの二人、お昼休みにもやってるわよね」

「放課後にもやってる……」

「息が合ってるはずよねえ」

「強いわけだよ」

「ついでに、腹も減るわけだぜ」

と、ガストンは伸びをして、コキコキと肩を鳴らした。

「休暇にゃ、ザルバッグ様や現役の騎士の人らにも稽古つけてもらってんだろ。」

『兄さんはオバケみたいに強いよー、どうやっても勝てないんだ』
なーんて、へらへら言ってくれやがるけどよ。天下の北天騎士団団長殿と”仕合い”になるつつうだけで、ヤツらも充分化けモンの仲間だろうって」

チャッ。

激しい撃ち合いの末、ディリータの剣がラムザの首の横、ラムザの剣がディリータの心臓の前、※半寸カーッ（※約一・五センチメートル）ほどで止まった。

「……どっちが勝ったのかしら？」

「相討ち……？」

「ラムザの方がちよびつと早かったみてーだが……」
にっ、と笑ってディリータが剣を引いた。

「お前の勝ちだな」

「試合だったらね。でも、踏み込みが浅かった。実戦だったら君の勝ちだな」

と、ラムザも剣を引く。

「それを言えば、実戦だったらその五歩ぐらい前で足をすくわれていただろうよ」

「ああ、何だかゴチャゴチャわかりづらいなあ。何でもありの喧嘩^{ルール}方式で、もう一遍やろうか？」

「いや、今朝はこのぐらいにしておこう」と、ディリータは仲間達の方を振り向いた。

アルガスが突然、がばっと跳ね起きる。しばらくはボーツとあらぬ方を凝視していたが、

「……ん？お前らいつの間に、みんな起きてんだ？」
瞬きしてやっと、辺りを見回した。

アルガスは、朝は弱いらしい。

「おはよう、アルガス。今日もいいお天気だよ。いっぱい歩こう！」

にこやかに手を振ったラムザの背後で、朝日が丘の上から顔をのぞかせ、枯れ草の荒れ野に金色の光を投げかけた。

？－２－〔４〕 焚き火の番 ？サーシャとナツシュ（後書き）

はい。ベオルブ家を伯爵にしたのは、主にこのためです。ラムザを、オヴェリアの婿候補に名前が挙がるくらいの身分にしておきたかったんです。

ああ……、ディリータの不幸がいや増しに増す設定ですね。ゴメン！それでも矢張り、オヴェリアを守るのはキミだけだから。頑張れディリータ！負けるなディリータ（涙）！！

？― 第3章 義賊 [1] 前編 スウィージの森

魔法都市ガリランドの東側には、山脈に囲まれた原生林地帯が続く。

「聖歴紀元前後まで”幻の珍獣”飛猫モイグリが生息していたと言われる、スウィージの森である。

飛猫モイグリは、白い猫のような体に、薄紅色の蝙蝠こうもりのような翼を持つ動物で、空気の清浄な深い原生林の奥にのみ、隠れ住んでいたという。五世紀頃に絶滅したとされるから、この物語の舞台となっている十三世紀初頭には、もはや召喚魔法によって幻界から呼び出す他には、その姿を見ることは叶わなかったはずだ。

縫いぐるみの原型モデルとして、小野豚うりぼーと並んで子供達に人気があるのが飛猫モイグリだ。が、疎林の中で今、旅姿の少年少女達を取り巻いているのは、そんな可愛らしい代物ではない。

「チッ。こんなところで魔獣モンスターと遭遇するなんて、ツイてねえ」
くすんだ金髪の、左利きの剣士の少年が舌打ちした。

「ぼやくなよ、アルガス。城の警護よりはマシさ」
黒髪の少年が肩を鳴らし、長剣を抜き放つ。

「ケッ、命がかかってんのに、よくそんな事言えるな……」

左利きの少年・アルガスが顔をしかめると、銀褐色の髪に鷹のような琥珀色の瞳の少年が、自動弓ボウガンの弦を引き絞りながら鼻で笑う。
「命懸けっつーほどの相手かよ。盗賊退治の練習台にや、おあつらえ向きじゃねーの？」

「一人一殺！……ってえ言いてーとこだが、」

鋭い琥珀色の瞳で、少年は紅一点の少女と、小柄な魔道士の少年をちらりと見やる。

「頭数に入らねーよーなのが約二名。一人二殺だな」

結び上げた焦茶色の髪を頭巾で包み、動き易い厚手の麻ロープの長衣サンダーロッドを着た少女は、雷精錫を握り締めて固くなっている魔道士の少年の両

肩を揉んだ。

「ナツシュ君、落ち着いて！ほら、魔獣分類学の講義思い出して。

小鬼には凍気系魔法、火の玉には炎熱系魔法よ！」

「サーシャこそ落ち着いてってば。火の玉に”炎撃”なんかかけたら、ますます手に負えなくなっちゃうよ！」

魔道士の少年・ナツシュは、緑灰色の団栗眼で少女を見上げて言い返す。

ナツシュの背丈は、一行の他の少年達の鼻先に届かない。少女のサーシャと比べても、目の高さより少し上くらいだ。魔道士の被る、羽根飾りの付いたとんがり帽子の天辺が、やっと他の四人の少年達の頭と並んでいる。

「おしゃべりはそこまでだ。来るぞッ！」

鮮やかな黄金色の髪 of 少女が、黒髪の少年と共に前に出て、女性にとしては低いがよく透る声で仲間達に注意を促す。

……いや、もとい。

この一行の中で、”少女”はサーシャ唯一人だ。

これは、一見少女のように優しげな顔立ちをした、華奢な少年なのである。

武門の棟梁・ベオルブ家の末弟に生まれ、幼少の頃から修練を積み重ねてきた”彼”の剣技には、少女のそれとは見紛うべくもない力強さと俊敏性が兼ね備えられている。

「ゴブゴブ……。ゴブッ……」

一匹の黒小鬼を頭に頂く六匹の小鬼達は、じわりと包囲の輪を縮めた。

小鬼は体長※四尺（※約一・二メートル）ほど。人間の子供くらいの大きさの魔獣で、元々は、多少知能の高い山猿といった程度の存在だった。

旅人や村人に与える被害といっても、たかが知れていた。夜陰に乗じて、少しばかりの食糧をくすねる。木の実や石を投げつけたり、猛獣の声真似をしたりして、人間や韋駄鳥を驚かす。——というぐ

らいだった。

白昼堂々、武装して殺人強盗を働くようになったのは、矢張り近年、人間が悪い手本を数多く示してしまったためらしい。山に食べ物が少なくなったせいもあるが、旅人の持っている食料品や、畑の作物、放牧地の家畜等をたびたび奪うようになった。

山猫や狼とは違い、人肉を喰らう目的で人間を襲いはしないのが、せめてもの救いといえた。荷物、特に食料品をばらまきながら逃げれば、大抵、逃げおおせることが出来る。

「ゴブツ！ゴブゴブツ！」

奇声を発して、手に手に短剣や包丁、鉈を”装備”した七匹の小鬼ゴブリンが、少年達に躍りかかった。

自動弓ボウガンで一匹の心臓を射抜くと、琥珀色の瞳の少年・ガストンも長剣を抜いた。

次の矢を番えている時間は無い。

チャンツ！

双方の”大将”同士が真っ先に剣を交えた。

小鬼ゴブリンは見かけによらぬ怪力の持ち主だし、身ごなしの素早さは野獣並みである。

しかし攻撃の型が単純で読みやすい分、人間の山賊よりは余程、あしらうのは簡単だ。

カキインツ。

ものの数合と撃ち合わぬうちに、黄金色の髪、碧い瞳の少年は、手入れも何もされていない曲刀を難なく弾き飛ばした。

黒小鬼ブラックゴブリンは素手で殴りかかってきたが、少年は父・”風神”バルバネスの名に恥じぬ、疾風のような中段突きでこれを迎え撃つ。

長剣の切っ先は、暗褐色の短い体毛に覆われた胸板を貫き、背中へ突き抜けた。

「ラムザッ！」

黒髪の少年が、一匹の小鬼ゴブリンの腕を斬り落とすなり、黄金色の髪の少年を突き飛ばす。

親友——というよりは将来の主を庇って、真っ赤な口を開けた火の玉に斬りつけた。

屍蟬から生まれる悪霊が火の玉である。直径※二、三尺（※約六〇〜九〇センチメートル）の炎の塊で、あてもなく漂いながら、雨に遭うなどして立ち消えるまで、動物や人間を見つけては焼き殺そうとする。

「闇に生まれし精霊の吐息の、凍れる刃に散れ！」
「氷撃」！
ナツシュの魔法が小鬼の一匹を撃ち倒して沼に沈め、火の玉の炎の勢いも弱めた。

「とどめだっ！」

アルガスが、一回り小さくなった炎の塊に斬りかかる。

「待てっ！」

ラムザが止めた時には既に遅く、アルガスは剣を振り下ろしていた。
「え？」

ブワッ。

火の玉は破裂し、すえた臭いのする油が飛び散った。

「うあっっ！！」

アルガスと黒髪の少年は腕や顔に、煮えたぎった油滴を浴びてしまった。

「アルガス君、ディリータ君！大丈夫？」

救護係のサーシャが、沼から”氷撃”で凍った氷水をすくって掛け、すぐに火傷を冷やす。

「ゴブゴブッ。ゴブーッ」

生き残りの小鬼達は退却を始めた。それぞれ、武器を壊されたり手傷を負ったりして、戦意喪失している。

が、小鬼達の引き連れてきたもう一体の火の玉は、炎と煙をちろちろと吐きながら、少年達に近付いてくる。

小鬼自体は人肉を喰らわないが、他の肉食の野獣や魔獣と”共同戦線”を張ったり、死霊や火の玉をわざとつつき出して人間を襲わせたりして、強盗の助けにすることもあった。

水を嫌う火の玉は、沼の縁を遠回りしようとしている。

「よし、今のうちだ!」

ラムザ達は沼の対岸から、氷のつぶてを投げつけて火の玉を攻撃した。

ジュワァー……。

火の玉は、水蒸気と黒煙を上げて消滅する。

「はあー、何とか撃退しましたねえ」

息を弾ませて胸を撫で下ろしたナツシユの背中を、ガストンが勢いよく叩く。

「だから大袈裟だっつーんだ、てめーらは。

ミノタウロス ドラゴン
牛鬼とか竜相手なら相当根性要るけどなー。小鬼 ゴブリン ごとくにビビッてんじゃねーぞ」

「げっ……げほごほっ」

「シャキツとしやがれ、軟弱モン!」

サーシャが、アルガスとディリータに”回復” ケアル の魔法をかける。火傷は治ったが、獣脂の腐ったような油が服に染み付いてしまったので、アルガスは気持ち悪そうにしている。

「宿に着いたら、お洗濯してあげるよ」

ラムザは何故か、少し嬉しそうだった。

「ガストン君は? 怪我はなかったかしら?」

「おう。屁でもねーぜ」

ガストンは先程、左腕に小鬼 ゴブリン の体当たりをくらっていた。

「本当に大丈夫かい? 見せてみて」

ラムザが、ガストンの袖をまくり上げ、赤く腫れている所を確かめた。

「……うん、後でちょっと痣になるくらいかな」

ラムザはガストンの左腕に、癒しの精霊を表す古代神聖文字を指で描き、膏藥をすり込むように三度、その上を撫でた。

「気休めみてーなもんか?」

「そうでもないよ。本当に痛みが軽くなるような感じがしないかい

？」

アルガスが眉をひそめた。

「それって、異端呪術じゃないのか？」

「異端ってことはないだろ。呂国旧教派の”おまじない”じゃなかったっけ？僕は母さんから教わったんだけど……。でも、呂国旧教派の君が知らないんだったら、もしかして、母さんが育ったルグリア村だけの習慣だったのかな？」

「いや……。知ってるさ。ガキの頃、お袋や姉貴がよくやってくれたぜ。けど、それを見た連中に異端だって言われて……」

「……。そっか。呂国旧教派は別に、異端の邪宗ってわけじゃない。でも、オルダリーア 鷗国との大戦中には、良く思わない人もいたもんな……。ロマンダ

僕の育ったドラコニアでは、織物が基幹産業の一つだね。ロマンダ 呂国旧教派の修道院とか、大事にされてたんだけどな」

ラーナー海峡を挟んで畏国の北方に位置する呂国では、古くは祖霊・自然霊崇拜が盛んであった。イヴァリース

ユードラ 雄帝国がグレバドス教を厳しく弾圧した紀元二世紀頃、多くの信徒達が海を渡って呂国に逃れた。ロマンダ それから数世紀かけて、グレバドス教と、土着の精霊・土地神信仰との融合が進んだのである。

これには、聖アジヨラの第一の使徒・預言者バリアスの伝説が一役買った。

バリアスは天使や聖霊の声を聞き、彼らの導きで様々の奇跡を行ったったといわれる。各地の精霊や土地神は、バリアスと語り合ってグレバドス教の神々に帰依したことにされ、いつしかグレバドス教の守護聖霊に加えられていったのだった。

今では守護聖霊に”格下げ”されている海竜や武神将、氷精などは、元は異教の神々だ。リヴァイアサオーディン

一方、三世紀末に雄帝国の国教となったミクロンド正教派は、今度は異神教や他宗派を激しく迫害する側になった。ユードラ

ミクロンド正教の神々や天使、聖霊の力を借りた魔術以外は、邪

法、悪魔の術として徹底的に排除した。魔獣モンスターの技を研究して編み出された”青魔法”が禁止されたのは、国教制定から一世紀と経たない紀元四世紀半ばのことである。当時は、幻獣や自然霊を呼び出す召喚魔道士も、異端者として極刑に処されたり、国外追放されたりしたほどだ。

だが、五・六世紀頃になると、ミュロンド正教派の布教活動も穏健路線に方針を転換する。

その要因の一つが、聖アジョラの生誕地・ベルベニアでロマンダ呂国旧教派の修道院文化が花開いたことだった。

ロマンダ呂国旧教派の修道僧達は、真摯な祈りと労働の日々を送る。神学のみならず、品種改良などの農業技術や、木工・彫金細工、織物・染め物などの手工業技術においても、ロマンダ呂国旧教派の修道院が旧文明崩壊後の文化の最先端を担っていた時代だったのである。

ベルベニア市民は元々、聖アジョラを処刑した当の雄帝国が国教にしたミュロンド正教派を胡散臭く思っていたし、実利的な面からも、ロマンダ呂国旧教派を支持した。

聖地ベルベニアで勢力を拡大するためには、ミュロンド正教派も妥協せざるを得ず、ロマンダ呂国旧教派に由来する守護聖霊などを取り入れたのだ。ベルベニアはまた、ファラ教の聖地でもあったため、ロマンダ呂国旧教派経由でファラ教神話とも接近した。

光と闇の二大天使、アルテマとラグナロクも、前身はファラ教の光明神と暗黒神である。

グレバドス教の創世神話では、絶対神が原初存在・ゾディアークを造り、ゾディアークが十二柱の従属神と、最後に二大天使を生み出したことになっている。

が、原型であるファラ教神話では、ゾディアークとは”世界”、”混沌”そのもののことだ。ゾディアークの肉体と力、魂が二つに分かれて、光の神アルテマと、闇の神ラグナロクが生まれたという。光明神アルテマと、暗黒神ラグナロクは、それぞれ天使と悪魔の軍団を率いて、霊界で絶えず闘争を繰り返している。アルテマがラ

グナロクを滅ぼして完全な勝利を収める時、善男善女は甦って永遠の楽園に生きる。——という終末神話は、グレバドス教にもほぼ同じ形で継承されている。

「さあ、この森を抜ければドーターまでもう少しだ。もう一頑張りだよ、みんな！」

ラムザは澄んだ、張りのある声で仲間達を励まし、先頭に立って元気に歩く。

三十九歳の”風神”将軍バルバネスが、十七歳の新米神官医クレリックだったファティマに初めて出会ったのは、これより十八年前のこと。

聖歴一一九一年、是領セラモニアにて。……

(つづく)

？― 第3章 義賊 「1」 前編 スウィージの森（後書き）

ああ、初めてやってしまいました。” 続く” です。

ここで、若かりし日のラムザの両親（＋α）と五十年戦争の話が入ります。題して「ラムザの父ちゃん純情編 Part 1・遅れて来た青春 運命の出会い の巻」……！？

前・後編といいながら、ここからの方がずっと長いです。次、更新まで時間かかります。

？－3－〔1〕 中編 遭難くバルバネスとファティマ？（前書き）

予告に反して”中編”です、すみません。矢っ張り長いので。あんまり”つづく”で分けたくないのですけど……。

それにしても、お笑い色が足りないと私も息切れがします、ぜーはー。あと一山……ドーターに着きさえすれば……！

？－3－〔1〕 中編 遭難くバルバネスとファティマ？く

——バネス。バネース！すっかりなさい。騎士の中の騎士、ベオルブ家の男の子でしょう……。

バルバネスは夢うつつに、長姉・プリマヴェーラの声を聞いたような気がした。

柔らかな唇が口をふさぎ、温かい、渋い風見草セルセタの味のする薬湯が喉に流し込まれる。

（ああ、またか）

風見草セルセタは造血・滋養強壮の作用があり、外傷や消耗性の熱病などに効くと言われ、多くの飲み薬の基剤ベースに使われる。

幼い頃、バルバネスは風見草セルセタの苦い、薬くさい味が大嫌いだった。薬湯を残していると、寝入った隙に、長姉に口移しで無理矢理飲まされたものである。

「プリマ姉上！風見草セルセタは勘弁してくれと言ったはず……だ？」

焚き火の弱い光に浮かび上がる、まだあどけなさを留めた白い顔は、姉のものではない。

だいたい、長姉プリマはとくに五十に手の届こうという大年増のはずだし、バルバネスも五つや十の少年ではなかった。

「何わがまま言ってるんですか、いい年した小父さんが？意識が戻ったんでしたら、ご自分で飲めますね」

明るい黄金色の髪を引つ詰めた若い神官医クレリックが、バルバネスの手に薬湯の椀を渡した。

泥に汚れてはいるがまだ新しい法衣の、肩の線が、二の腕までずり落ちている。

随分と華奢で、優しい顔立ちをした少年だ。

「ほら、ぐーっとお飲みなさい、ぐーっと！男でしょう！」

「ム……」

神官医クレリックは荒れた小さな両手でバルバネスの手を包み、大ぶりの椀を

口まで押し付けた。

きつい苦みのある薬湯を飲み干して、ほうっと一息つき、反動で大きく息を吸い込んだ時、バルバネスの鼻腔を微かな甘酸っぱいような匂いがくすぐった。

(……! 女……か!?)

平時ならば、薬草と石けんの匂いに紛れて気付かなかったろう。だが、戦地のむさくるしい男所帯に長いこと身を置いていると縁遠かった、異質な匂い――若い娘の体臭は、僅かでも嗅ぎ分けられた。改めてよくよく観察すると、喉が平らだし、肩幅の割に胸に厚みがあるように見えるのは、法衣が大きすぎて布が余っているせいだけではないようだ。

昨年・一一九〇年の秋から今年の春にかけて黒死病が大流行し、臨終や葬送の儀式を行う司祭が不足したため、法皇庁はこの春から、尼僧にも司祭の資格を認めることとした。この少女は、成りたてホヤホヤの女性司祭のようだ。

「お嬢さん、今、何時なんどきだね？」

山際の薄明かりは朝焼けか、夕焼けか。

万に一つは、

――”お嬢さん”じゃありません! 男です!

と怒られるかもしれないと思ったが、

「※双魚バイシースの二の刻くらい(※午前四時半頃)でしょう。これから夜が明けるところです」

と答えた声は矢張り、あまり高くはないが澄んだ女性の声だ。

「小父さんが目を覚まして下さって、ほっとしました。ここにいる人達の、暫定の指揮者リーダーを引き受けて下さいますか? 一応、この中じゃ小父さんが一番の年長者みたいですから」

「ふむ?」

バルバネスは、焚き火を囲んで朝を待っている人々を見回して、
(む、いかな)

顔にこそ出さなかったが、これは相当に気を引き締めてかからねば

なるまいと思った。

是領戦線ゼラモニアは一進一退を繰り返している。

そもそも五十年戦争の起こりは、鷗国国王デイワンヌ？世が世継ぎを残さずに亡くなったことに始まる。王位は？世の従弟にあたるヴァロワ？世が継ぐが、？世の叔父にあたる畏国国王デナムンダ？世がそれに不満を持ち、宣戦を布告した。

……というのは口実に過ぎず、真の狙いは国境に面した鷗国領土・是領への侵略であった。もともと独立国であった是領には、十一世紀末に鷗国の武力行使によって併合されたという歴史がある。鷗国の支配に不満を持つ是領の貴族や諸都市が畏国に介入を求めた、というのが開戦の真相であった。

一時は鷗国の首都・ブラへ進軍した畏国軍だったが、デナムンダ？世病没後の僅かな混乱を、ヴァロワ？世は絶好の機会と捉えた。鷗国軍の態勢を立て直し、畏国軍を是領まで追いつすことに成功する。

二年に渡る膠着状態の後、ヴァロワ？世は血縁のあった呂国に依頼し、畏国を北辺から挟撃させた。しかし、デナムンダ？世の跡を継いだデナムンダ？世は勇猛果敢な戦士であり、自ら騎士団を率いて呂国・鷗国の両軍を相手に健闘した。また、呂国で黒死病が大流行したこともあり、僅か三年で呂国軍は撤退することになる。

五十年戦争はここに至って、再び、是領で泥沼の膠着状態を迎えていた。

さて、バルバネスの今見たところでは、涸れ川の岸边でうつらうつらと眠ったり、あるいは眠れずに呻いたりしている二十人余りの人々のうち、約半数は是領人だ。服装からして、是領軍の歩兵・弓兵と、畏国軍に所属する傭兵・工兵がいるらしい。鷗国人の捕虜が三人、荷運びの南洋人人足が二人。畏国人四人は、疲労や傷病のため、前軍からいつの間にかはぐれて、中軍に混じっていた者のよう

だ。そして、バルバネスと、この呂国人の血を引くらしい金髪の神官医の少女と。

「一人、畏国軍の騎士の方がいらっしやるんですけど。まだ若くて、地位はそれほど高くないんだそうです。直接の部下でもない人達が従ってくれるかどうか知らない、って……。それより、小父さんに年の功でまともしてもらった方が上手くいくんじゃないかっておっしゃるんです。

小父さんは、かなり経験を積まれた傭兵隊長さんですよ？そのお年で現役でいらっしやるってことは」

「うん？……まあ、な」

愛用の、ミスリル ドラゴン 霊銀と竜の革で出来た甲冑と”ディフェンダー ミスリル 護法剣”は、今は輸送隊に預けていた。ありふれた革鎧に、無銘の霊銀の長剣と短剣という、傭兵のような出で立ちをしている。

体力が資本の傭兵稼業は二十代前半が全盛期だ。遅くとも三十前後までには、それまでに稼いだ金を元手に畑を買ったり酒場を開いたりなどして第二の人生を始めなければ、雇ってくれる軍団がなくなる。

もしバルバネスのように四十近くなっても傭兵でいる者がいるとすれば、ほとんどは、戦士としてよりは指揮官としての能力を買われてのことだ。

「こんな時、どうすればいいと思われます？

とりあえず、皆さんの怪我はなるべく、自力で動けそうな人の足を中心に手当てしておきました。

元気な人でも、この崖をよじ登るのは難しいと思うんです。大きな怪我をしていないのなんて、あの背の高い方の荷運びのお兄さんと、わたしくらいなんですよ。それに……、」

「うむ。後軍は鷗国軍の追撃を食い止めるために、橋や栈道を落としたり、罾を仕掛けたりしながら進んでいるはずだ。崖の上の道に戻っても、本隊に追いつくのは難しきろう。

かといって鷗国軍が来るのを待っていても、向こうも急いでお

るからな。わざわざ手間暇かけて、敵軍の負傷者を救助してくれるとは期待できん。だいたい、それまで三日はかかる。こんな水も食糧もない場所におっては日干しになるか、魔獣の餌食になるだけだ。モンスター人里なり味方の軍なりに辿り着くまで、何とか山の中を歩いてゆかねばならんな」

バルバネスは前軍から秘かに後軍に移り、直接後軍の指揮を執つてオルダリア鷗国の追撃軍を迎え撃つつもりだった。

細い山道を行軍中に、友軍——いつ寝首をかかないともわからぬ”友”だが——である是領軍と共に崖崩れに巻き込まれ、※五十歩ドーマ(※約三十メートル) 以上も急斜面を滑り落ちた谷底に取り残されてしまったのである。

「足の治療を優先したのは、良い判断だ。君自身が？」

「はい」

「そうか。うむ、君はきつと良い医者になるぞ」

「ありがとうございます」

クレリック神官医の少女は、にこりと微笑んだ。

バルバネスも微笑み返そうとしたが、胸に鈍い痛みを感じて、顔をしかめた。

左腿の切り傷は薄皮が張る程度まで魔法治療されていたが、利き腕の右腕と、肋骨の何本かにひびが入っているようだ。

「すみません」

「いや、なに。これしきの怪我ならば、剣を振るうのに差し支えない。心配無用だ」

バルバネスは、ぽんぽん、と少女の金髪頭を軽く撫でた。

馴れ馴れしかったか。とも思ったが、少女はもう一度、さつきよりも自然な笑顔になった。

「わたし、ファティマといいます。ルグリア村のファティマ。小父さんは？」

「私は……、」

バルバネスは咄嗟に、偽名を名乗った。

「……ラムザだ。ドラコニアのラムザ」

イヴァリース

畏国の何処でもいい、標準的な大きさの村に行って、村中の子供達を集めたでしょう。その中に必ず一人や二人は、ラムザとか、ラムゼス、ラムゼンといった名前の男の子がいるはずである。

聖アジヨラよりも千年も昔に、矢張り魔神を倒したといわれる第一次”ゾディアックブレイヴ星宮の勇士”。その中でも一番人気の、ラムゼセウスⅡ”並ベび無き勇者”に因んだ名前である。

イオウルブ

ベオルブ家の家名の元にもなった二刀流の大剣豪の名を、バルバネスは拝借したのだ。

「よろしくお願いします、ラムザ小父さん。きっと、生きて帰りますよね」

「ああ。こちらこそよろしくな、ファティマ君」
バルバネスも、今度は微笑み返すことが出来た。

夜が明けると、バルバネスは怪我人達を起こして、告げた。

「……というわけだ。なるべく尾根伝いに歩いて、軍団に追いつこう」

イヴァリース

オルダリーア

畏国人の若い騎士が、オルダリーア 鷗国人捕虜の言葉を通訳して尋ねた。

「彼は、この涸れ川沿いに歩いて行った方がいいのではないかと言っています。道が開けているし、どこかで水も手に入るかもしれない、と」

「川は、滝になったり地下水流になったりしておれば行き止まりになってしまふ。遭難した時は高い方を目指すのが基本だ。見通しが利いて進路が決めやすくなる。無駄足を踏む可能性が減るぞ」

オルダリーア

若い騎士は、バルバネスの言葉をオルダリーア 鷗国兵に通訳してやった。

オルダリーア

本当は、バルバネスは通訳なしで鷗国語の会話が出来る。だが、学のあるところを見せると、身分を悟られてしまうかもしれない。多数派である是領兵がゼラモニア バルバネスの首を手土産に、捕虜を案内役としてむしろ鷗国軍と合流しようとすることも考えられた。

オルダリーア

「さて……、厳しいようだが、自分の足で歩けなくなった者はそ

の場に置いて行くぞ。他人を背負い続けられるほど体力に余裕のある者はいない。食糧と水の手持ちも乏しい。

歩き通せる自信が無ければ、山中で孤立するよりは、この場でオルダリーア国軍が来るのを待った方が少しは望みがあるが……、諸君、どうする？」

今、自力で歩ける者で、残りたいと希望する者はいなかった。

この辺りの山岳地帯は、ドラゴンベヒーモス竜や凶獣などの凶暴な魔獣も棲息する危険な土地なのだ。

崖崩れの時に即死したり、夜の間に息を引き取ったりした死者達は、野獣・野禽にとっては貴重な”食糧”である。オルダリーア鷗国軍が来るまでのおよそ三日間ここに留まって、全く襲われないと仮定するのは虫が良すぎる。

だが――。

両足が完全に潰れて絶対に立ち上がれない、瀕死の重傷者が一人いた。医者の方ティマも、限られた魔法力と薬を最大限有効に使うために、助からないとわかっていいる彼には治療を施していなかった。

バルバネスは瀕死の若者の傍らに膝をつき、意思を確認した。

「待つか？それとも、楽にしてほしいか」

若者の口が微かに動いた。バルバネスは頷き、方ティマを振り返る。

「頼む」

司祭でもある方ティマは、若者の両手を胸の上に組ませ、聖水を一口含ませると、最期の祝福を与えた。それから、これは臨終の儀式のうちではないはずだが、彼の両手をしっかりと自分の手で包み込んだ。

ファアラム「天意のままに！」

バルバネスは一太刀で、若者の頸動脈を断ち切った。

歩ける者達が、後ろでごくりと唾を飲む。

「我らは必ず、生き延びるぞ。彼らの分もな」

バルバネスは手を動かせる者達に、死者達の名札と遺髪を回収させた。

グレバドス教徒は終末の日の復活を信じて、遺体は丸ごと土葬にする。が、近年、戦死者の遺体を全て収容するのが難しくなったり、黒死病ペストの死者の埋葬が間に合わず、衛生上火葬にせざるを得なくなったりする事態に直面していた。そこで法皇庁は、神が土から人間を作ったという神話に基づき、遺髪や遺骨の一部と、故人をかたどった土人形があれば復活に足るとする見解を打ち出したのだった。

次に遺品であるが、形見としては回収できない。水や携帯食、武器や衣類など、使えそうな物を必要に応じて生存者達に分配した。

「さあ、行こう」

こうして、負傷者ばかりの混成集団の山中行軍が始まった。

昼前のことだった。

一行は、申し訳ばかりに泥水の残る水溜まりを発見した。雀の涙ほどでも、補給が出来ることで、一同の心は明るく浮き立った。

ところが、泥水を濾して煮沸かしたファティマは、出来上がった白湯を真っ先に、荷運びの南洋人の青年に差し出したのである。

「どうぞ、ワインバーグさん」

それまで牛や犬と同じように扱われてきた、赤銅色の肌の青年は、少なからず驚いた。ファティマ自身が最初に、舐める程度に一口飲んでいたから、毒味に使うつもりではないのはわかる。

他の者達も驚いた。殺気立った、といったもよい。

「何ですか？ おっしゃりたいことがあるんですたら、ハッキリどうぞ」

特に喧嘩腰でもない、穏やかな口調でファティマは言った。

「その……、序列に従うべきではないのか？」

と口を開いたのは、畏国人イヴァリースの若い騎士だ。

「いや、何も、私が優先されたいという浅ましい気持ちから言うのではないぞ。騎士は我が身を捨てても他人を救うべきもの。私個人

としてはむしろ、後回しにしてもらって構わないと思っているのだが……、このような寄せ集めの集団は、規律をしっかりと守らねば簡単にバラバラになってしまうだろう」

「序列だの規律だのって、どういうことですか？

騎士だとか工兵だとか、捕虜だとかいうことですか。あるいは、イヴァリース 畏国人だとか是領人だとか、セラモニア 南洋人だとかっていうことですか？」

夏の空のように眩しい碧い目で、ファティマはゆっくりと一行を見回した。

「皆さんが身分と心中なさりたいんでしたら、そういうことを基準にしてもいいんですよ。

でも、今のわたし達には、もっと大事なことがあるのじゃありませんか。

おくに 故郷に帰ればどれだけの地位名声や、使用人や、財産をお持ちなのだとしても。生きて戻れなかったら、それが今何の役に立ちます？ わたしは医者として、皆さんがより確実に、一人でも多く生きて帰れるような選択をしたいだけです。

ワインバーグさんは今朝から、大きな荷物を運びながら、怪我の重い人に手を貸したり、下草を刈り払って後の人が通りやすくしたり、とてもよく働いて下さってます。今このお兄さんが倒れてしまったら、わたし達みんな、ものすごく困るのじゃありませんか？

もしも、このワインバーグさん以上に他の皆さんの力になれるという方がいらっしゃるなら、どうぞ名乗り出て下さい。これ、皮肉や反語じゃありません。本当に、少しでも生き残る確率を上げる方法を採りたいんです」

我こそはと手を挙げる者は、いなかった。

「どうぞ」

ファティマは改めて、ワインバーグに白湯を渡そうとした。

が、巨体の青年は首と手を横に振った。

「いんや……、そういうことでしたらば、わっしよりも先に水を飲む資格のあるお方が、二人おいでになるだ。ラムザさんと、あんた

さんですだよ。

わっしがなんぼ働くちゅうても、ラムザさんがこっちとおっしゃる方へ付いてっただけですだ。道のわかるラムザさんがおられなんだら、皆さん方行くも戻るもならねえで立ち往生ですだべ。

それに、皆さん方の怪我の手当てをなさるあんたさんが真っ先に倒れてしまわれたらば、後の人方もみーんな共倒れですだよ」

バルバネスも同意した。

「そういうことだな。君自身が、一番に飲みたまえ」

その時、捕虜であるオルダリーア鷗国人の騎士が大きく頷いて、片言のイヴァリース畏国語で言った。

「女、生き残るべき。オルダリーア鷗国、畏国、騎士の心同じ」

一同は目を丸くした。

「えっ……」

「おっ……」

「「……女ア!？」」

どうやら、気付いていた者は四分の一もいなかったらしい。

司祭は男という、先入観もあったろう。その上、化粧っ気も飾りっ気もないだけでなく、動作や口調がきびきびとして少年のように元気が良く、全く色気を感じさせない娘だったのだ。

「何だね、君達は。こんな可愛いお嬢さんに、失礼だろう」

とは言ったが、知られずに済むにこしたことはないと思い、バルバネスは皆の前で彼女の名前を呼ばずにいたぐらいだった。

「いや……、すまなかった。知っていれば、もっと早くに荷を背負ってやったのに」

と、若い騎士がすぐに謝った。

「いいんですよ、仕事の道具は自分で持ちたいですから。両腕が使えない方に持ってもらうのは難しいでしょう」

「いや、かえって、腕以外は何ともないからな。疲れたら、いつでも遠慮無く言ってくれ」

「ありがとうございます。でも、こう見えて、体力は本当に人一倍

なんですよ。わたし自身は大丈夫なんですけど……、」

ファティマはもう一度、一同に念を押した。

「わたしの魔法力も、手持ちの薬も、限りがあります。普段なら怪我の重い順に手当てするところなんですけど。今は、治る見込みが薄いと判断したら、もう痛み止めも何も差し上げられませんから。予めご了承下さい」

一同が神妙な顔で頷くと、ファティマはにっこりと微笑んだ。

「でも逆に言えば、わたしが治療を続けてるからには、必ず回復するってことですよ。勝手に諦めないで下さいね」

怪我人達に、ほんとと安堵の笑みが広がった。

「さあさ、お待たせしました。お湯、どうぞ」

ファティマは鍋の湯を器にすくって配り始めた。

つい先程まで奪い合いの口論になりそうだった怪我人達は、互いに誰がどのくらいの傷を負っているとか、どんな特技があるとか話し合いながら、譲り合って大事に白湯を飲む。

バルバネスは感心した。

（ほう……。空気が変わった。これはこれは、頼もしい”副官”ではないか）

ここまでは、それぞれに我が身の心配をするだけの、ただの”寄せ集めの集団”にすぎなかった。だが今は、目的意識を持って何が必要かを自ら考え協力し合う、有機的な”組織”になろうとしている。

ファティマは皆に厳しい現状を認識させながら、しかも連帯感と希望を持たせた。

（身分と心中なさりたいなら……。か。この娘の演説、王宮の石頭どもにも聞かせてやりたいわ）

十二世紀初頭、七王国統一を果たしたデナムンダ？世王は、畏国
国内の度量衡と通貨、主要な道路や運河の規格も統一した。
アカデミー

また、各地の有力貴族の子弟を王都に集め、士官学校で共通の文

武の教養を身に着けさせた。開校当時は、生徒達は王家の人質の役割も兼ねていたほど、まだまだ地方毎に独立自尊の気風が強かったものだ。

しかし、建国からおよそ三十年後の”紗国戦争”^{ペンヤ}の頃には、将兵は皆同じ畏国人^{イヴァリース}という意識を持つようになっていた。物資の輸送や、作戦伝達なども軍団の出身地方によらず円滑^{スムーズ}に行われた。頑丈な一枚岩となった畏国軍は、軍団毎に規格のまちまちな塔国^{トゥルギース}と楽国の豪族連合軍を破り、東方交易路上に五つの植民市を獲得する大勝利を収めた。

紗国戦争後、国内分裂の恐れはなくなったと見なされ、士官学校^{アカデミー}は王都ルザリアの本校の他に、五大地方それぞれに分校が作られた。入学対象者も千騎長以上の家の長男から、百騎長以上の家の長男と希望すればそれ未満の家の子弟や、次男以下の男子や、女子にも門戸が開かれた。特に魔法都市ガリランドに設立されたガリオンヌ分校は、魔道士系の教授陣が優れていたことなどから、他の地方からも越境入学者が入るほどの名門校になった。

士官学校教育がより多くの騎士の子弟に浸透することで、畏国軍^{イヴァリース}は一層精強になるものと期待された。

がー、バルバネスは思う。

まさに紗国戦争^{ペンヤ}の勝利と、士官学校教育^{アカデミー}の普及こそは、今日の畏国軍^{イヴァリース}の弱体化の根源だったのではないかと。

規格が統一されたことで、戦略・戦術的発想や、組織の編成から柔軟性が失われたのだ。

是領^{ゼラモニア}に駐留するようになってすぐに、バルバネスは、物資輸送や兵の移動が計画通りに進まないことがあまりに頻繁であると気付いた。原因を調査した結果、畏国^{イヴァリース}や紗国^{ペンヤ}とは全く異なる、是領^{ゼラモニア}の地理的条件の特殊性が明らかになったのである。

例えば是領^{ゼラモニア}で、『甲村と乙村の間は何日行程』という情報を得たならば、『どちらからどちらの方向へ』『移動手段は何で』『いつ

の季節の話か』の確認を怠ってはならない。

どうということか――？

是領^{セラモニア}が山がちで、冬の積雪量の多い土地柄であるためだ。

当たり前ながら、登り坂と下り坂とでは所用時間が違う。

また、平板で広い道であれば、徒歩で二日の距離は韋駄鳥車^{チヨコボ}なら一日で移動できる。が、韋駄鳥車の通れない急勾配の細い山道^{ルート}などを経路^{ルート}に含むならば、そのような単純な換算は出来ない。

雪深い是領^{セラモニア}では、冬季には雪に閉ざされる峠道もあるし、逆に、凍った湖や川の上を通る冬だけの道もあった。また、春の雪解けの頃には川が増水し、橋が流されたり、浅瀬道^{フォード}が水底に沈んだりもする。

そういった事情を考慮せず、畏国^{イヴァリース}本国の感覚で『行きに五日かかった道なら帰りも五日で間に合うはず』『韋駄鳥車^{チヨコボ}を使えば人が運ぶより半分の時間で済むはず』『秋に通った道ならば春にも同じように通れるはず』……といった前提の下に計画を立てれば、その通りに実行出来るわけがない。現場責任者を叱責したり、交替させたりしたところで、解決しようのない問題なのだ。

ところが中央政府の”机上の秀才”達は、現地の実状に即して計画を変更するよりは、理論通りに計画が実行できるように橋や道路を整備すればよい、と考える。

平坦な草原や沙漠が国土の大半を占め、年間の九割は晴天という紗国^{ペシヤ}ならば、それで上手くいった。が、是領^{セラモニア}ではそうはいかない。

たとえば、毎年のように雪解け水に流される吊り橋がある。畏国^{イヴァリース}軍の工兵隊が大量の石材と労働力を投入して、立派な石橋を架けたが、増水時の激流に耐えられず、数年で壊れてしまった。

流される度に吊り橋を架け直す方が、合理的だったのだ。橋の地元では『畏国^{イヴァリース}の石橋』という言葉が、”見かけ倒し””無用の長物”の代名詞になってしまった。

バルバネス達が昨日通った山道も、本来もつと道幅が狭かったのを、畏国^{イヴァリース}の基準に合わせて拡張したものだった。

一週間前の大雨で地盤が緩んでいたことは確かだ。が、元々の道幅であれば崩れるほどではなかったろう。無理に山肌を削ったために脆くなっていた部分が、荷重超過^{オーバー}で崩落したのだ。

崖崩れは”天災”ではなく、”人災”だったのである。

(つづく)

？－3－〔1〕 後編 北極星くバルバネスとファティマ？く（前書き）

前・中・後編という分け方をしながら、文量が1…2…4以上というバランスの悪さ！反省してます。こんな時の”しおり機能”をご活用下さい。

え？ところで、？の間違いじゃないかと？？上・下というところでしょうか。？はもっと後で別にやります。題して「ラムザの父ちゃん純情編Part 2・熱烈プロポーズ大作戦！の巻」……、いえ、忘れて下さい。

ファティマが女性であることがわかれば、邪念を抱く者がいるかもしれないぬ——とバルバネスは心配したのだが、取り越し苦労だったようだ。むしろ、一人でも異性がいると思うと、目を気にして行儀よくなるものらしい。

（意外と可愛い連中だな）

と、バルバネスは見ていて可笑しくなってしまう。

ファティマが、手が上手く使えない者のために水筒の水を飲ませてやったり、装備の緩みを直してやったりしていると、誰かがすすさず

「そんな雑用は俺達に任せて、ファティマさんはお医者さんにしか出来ない仕事に専念して下さいよ」

と、手伝いを申し出る。

そのくせ、いざ自分がお世話される番になると決して、自分で出来るだの他の者にやってもらうのだのと、辞退はしないのだった。

考えてみれば、良いことも悪いこともしようのない怪我人ばかりなのだ。ファティマは年頃の娘である以前に、彼らの命綱を握っている医者なのであって、うっかり不届きな真似をして見放されるような危険は冒せない。

「女だってわかったからって、急に特別扱いしないで下さい」

とファティマは言ったが、結局、薬箱も皆で交替しながら背負ってやっている。

結果的にこれで良かった、とバルバネスは秘かに胸をなで下ろした。

気丈に振る舞ってはいるが、ファティマは相当に疲労を溜め込んでいるはずだ。昨夜も一晩中、誰彼の介抱に追われて、一睡もしていないのだ。

しかし、じっとしてられない性分なのだろうか、ファティマは

少しでも手が空くと、他の者達の手助けをしようとする。

※獅子シオの刻も後半に差し掛かった頃（※午後三時頃）から、ファティマはずっと、是領兵セラモニアの少年に肩を貸して歩くようになった。

始めに、自力で歩けなくなった者は置いて行くと行ったのだから、これはかなり”おまけ”だ。彼は一行の中で一番の重傷者で、時々うとうとと立ったまま居眠りしかけては、ファティマに引きずられるようにして前に足を運ぶ。

まだファティマよりも少し低いぐらいの背丈で、大人の男では、肩の高さが合わないので代わってやる事が出来なかった。

落伍しかかっている少年の後ろから、一頭の竜ドラゴンが襲いかかってきたのは、日没の※半時ほど（※約一時間）前のことである。

牛よりも一回り大きいぐらいの、若い緑竜グリーンドラゴンだった。魔法の炎や凍気を吐く種類タイプでなかったのは幸いと言えたが、それでも、魔獣モンスターの中でも最強の部類に入る。

走ろうとしたが、足がもつれてファティマ諸共転倒した少年は、足首を挫いた。

「逃げて」

観念して、少年はファティマの肩を押しやった。

が、ファティマは立ち上がると、竜ドラゴンの方に向き直って両腕を広げ、ぎらぎらと光る獣の瞳を睨んだ。

「ガウッ……、グウウ……」

竜ドラゴンは牙を剥き出して唸り、威嚇する。

「ファティマ君！」

先を歩いていたバルバネスとワインバーグが、斜面を駆け下りてきた。

バルバネスは右手に長剣を、左手に短剣を握っている。怪我をしていない左手に長剣を持った方がいいのかもしれないが、慣れないことをして咄嗟の時の反応が遅れると危ない。

ワインバーグは枝を刈り払うための鉋しか持っていなかったはず

だが、今は是領人^{ゼラモニア}の歩兵から戦斧^{バトルアックス}を借りてきていた。

「うおおーっっ!!」

バルバネスが注意する暇もあらばこそ。ワインバーグは戦斧^{バトルアックス}を振り上げ、竜^{ドラゴン}に向かっていった。

「ガアアアッ!」

竜^{ドラゴン}が大きく口を開けて吠えた。

ワインバーグは戦斧^{バトルアックス}を振り回したが、武器の方に振り回されている感じた。

竜^{ドラゴン}は鞭のように尻尾を一振りして、ワインバーグを弾き飛ばした。
「うわっ」

踏み潰そうとしてくる前足を間一髪で避け、ワインバーグは跳ね起きる。

(しまった)

命——とまではいかなくとも、腕の一本ぐらいは捨てなければなら
ないだろう。と、バルバネスは覚悟した。

本当は、いきなり挑み掛かってはいけなかったのだ。睨み合いで
勝ち、竜^{ドラゴン}が諦めて引き返してくれば、一番良かった。攻撃を仕掛
けてしまった以上は、竜^{ドラゴン}の方もどちらかが倒れるまで戦い続けるだ
ろう。

ワインバーグは、力はあるが武器の扱いは素人だ。

当然である。長年、奴隷として荷運びの仕事ばかりしてきたのだ。
実戦は勿論のこと、喧嘩すら、故郷の南の島にいた遠い子供時代以
来したことがない。

バルバネスはというと、これまでに何十頭という竜^{ドラゴン}を狩ってきた。
毎年冬になると、領民達の安全を守るためと、騎士団の訓練のため
に、ドラコニア領内の猛獣狩りを行っているのだ。

実は、『ベオルブ家の騎士は竜^{ドラゴン}を一人で仕留めてこそ一人前』と
いう伝統があり、バルバネスも十七歳の時を初めに、何度か一人だ
けで竜^{ドラゴン}を倒したこともある。

といっても、何本でも槍を補充してくれる従者や、形勢が悪くな

った時には援護してくれる弓兵が後ろに控えていてのことだ。

若い頃よりも持久力の衰えた今、体調も装備も万全ではない状態で、実質一人きりで竜ドラゴンを倒せるか――？

一瞬、横目で確認すると、ファティマは動けない少年の側を一步も離れず、両腕を広げてキツと竜ドラゴンを睨み続けている。

(倒さねばならぬ！)

竜ドラゴンは頭を低く下げて、突進してきた。

「おおおーッ！」

バルバネスはかわそうとせず、むしろ前に踏み込んで長剣を振り下ろした。

が、頭突きにはね飛ばされて、背中を強かに木の幹に打ち付けた。
「ぐっ……」

みしり、と肋骨のひびが深くなった。

今度はワインバーグが、竜ドラゴンに横から飛びかかる。

「おりゃあぁーっっ!!」

竜ドラゴンは長い首を振り、これも二本の角のある頭で突き飛ばした。

斜面の上から見ていた弓兵の一人が、もどかしそうに言った。

「おい、誰かこいつに矢を番えてくれ！」

両手の無事な者が、自動弓ボウガンの弦を引き絞ってやった。片腕を三角巾で吊った弓兵は、他の者の肩に自動弓ボウガンを置いて照準を定める。

「こっちだ！」

両腕の使えない若い騎士が、大きな石を蹴った。

石は竜ドラゴンの頭に命中した。うるさそうに見上げた竜ドラゴンの左目を、矢が貫く。

「グガアアアッ！」

傷を負ったことドラゴンで竜は一層、死にもの狂いに暴れ始めた。長い首と尾、前足、退化した翼など、全身を使って休みなく攻撃を繰り返してくる。

バルバネスとワインバーグも竜ドラゴンに幾つか傷を負わせたが、あと一步急所に届かない。

斜面の上の者達が投げる石は、致命傷になり得ないばかりでなく、
竜をますますいきり立たせる。それどころか、

「うっ！」

狙いを外した石の一つが背中に当たって、ワインバーグはよろめいた。

すかさず、竜は後ろ足で立ち上がり、前足でワインバーグを張り倒す。頭を岩に叩き付けられたワインバーグは、気を失ってのびてしまった。

「げっ、何やってんだお前!？」

「お、おい、仲間割れしてる場合か？」

「自分で言うな!どーすんだよ!！」

牙を?いてワインバーグに止めを刺そうとする竜の鼻面に、バルバネスはありったけの力を込めて短剣を突き立てた。

「ギアアオーッ！」

左手を短剣から離し、のけぞった竜の首を、両手でしっかりと握り直した長剣で切り裂く――、いや。

ガキインッ!!

竜は長剣の刃を、頑丈な上下の顎でガッチリと挟み込んで止めた。

「ッ……!!!!」

バルバネスは歯を食いしばって押す。ひびの入った右腕の骨が、悲鳴を上げる。

自動弓の二本目の矢は……、外れた。

「「ああっ!」」

竜はじりじりと、バルバネスを地面に押さえ込もうとする――、と。

「グワアッ!！」

突然、竜は叫んで、くわえていた長剣を放した。

何が起きたのかは、考えなかった。

「かあっ!！」

バルバネスは竜の首を薙いだ。人間の腰ほどの太さもある首が両断

され、まず頭がドサリと落ち、それから胴体がドツと地響きを立てて倒れた。

斜面の上で息を詰めていた者達が、おおーっと歓声に沸いた。

「……はあっ」

大きな溜め息を吐いて、ファティマが崩れるようにその場に座り込んだ。腰が抜けてしまったらしい。今更のように、色白な顔が青ざめて、肩が震えている。

「おおーい、大丈夫かー？」

一同が斜面を下りて近付いてくる。

「大丈夫かね、ファティマ君？」

バルバネスはファティマの横に膝を付いた。

「はい……助かりました。あの、でも……」

ファティマはバルバネスの右腕に触れ、折れてずれた骨をはめ直した。

「ごめんなさい。今、魔法力が全然残ってないんです。回復したら、すぐに治しますから」

「私は何ともない……とまでは言えんが、まあ、何とかなる。大丈夫だ」

ファティマに庇われていた是^{ゼラモニア}領人の少年の両眼から、どっと涙が溢れた。

「すみません！すみません……」

ファティマは、にこりと少年に微笑みかける。

「大丈夫。諦めないでって、言ったでしょう」

少年はファティマの胸にすがりつき、わあわあと声を上げて泣きじやくった。

「「あっ……」」

ファティマは少年の背中を優しくさすってやる。

（わー、思ってたより胸が大っきい……）

（着やせして見える体型^{タイプ}だったのか……）

(ガキの特権かよ、このヤロー……)

羨ましそうに見ている若者達に、バルバネスは言った。

「おい、諸君。何をボサツと突っ立つとる。焚き火の準備だ。折角、食いきれないほどの晩飯の材料が手に入ったんだぞ」

と、竜の巨体を振り返る。

「あ……!!」

手が無事な者は手を叩き、飛び跳ねられる者は小躍りした。

「やった!」

「ひゃっほう!」

ある者は薪や枯れ葉、石を集めてかまどを作り始め、ある者は竜の肉を解体しにかかる。

「うーん……?」

ワインバークも目を覚ました。是領人の歩兵が謝る。

「すまん!悪かった!許してくれ!」

「ああ、気になさらねえで下せえ。皆さん方が力を貸して下さったから、ラムザさんも竜を仕留められたんだべ。いやあ、死人が出ねえで良かった、良かった」

微かに川の流れる音を聞きつけたファティマは言った。

「あの、どなたか、水を汲んできて下さいますか?胃もたれ予防の香草茶を淹れますから。まさか、そんなものが役に立つなんて思ってもみませんでしたけど……」

「あ、僕が」

と、黒髪の青年が大鍋を左手に提げて沢に下りていった。

バルバネスは竜の頭に近付き、短剣を回収した。

(……ん?)

耳の穴の奥に何か刺さっている。引き抜いてみると、杭だった。天幕を設営する時に使う、頭が鉤状になっているものだ。

誰かが棒手裏剣代わりに投げたのだろう。誰が?

(……。確か……。)

バルバネスは、水を汲みにいった黒髪の青年の後をそろりと尾けた。

右腕を吊った青年は、左手だけで大鍋を川に浸し、水をすくう。バルバネスは気配を消して彼の背後に忍び寄り、杭を握り締めた左手を振りかぶる。

「!!」

黒髪の青年は鍋を手放して振り向き、バルバネスの手首をがっしりと取り押さえた。バルバネスの手から杭が落ちる。

「あ……、失礼しました」

青年はバルバネスの手首を放す。

「いや、こちらこそ驚かせてすまなかったな。君は左利きか？」

「いえ。右利きです」

「ほう……すると、利き手でなくともあんな技が使えるのか。大したものだ」

バルバネスは杭を拾い上げ、青年に返した。

「さっきはこれに命を救われたようだ。礼を言う、ええと……？」

「ギータ。ギータⅡハイラルです。……ベオルブ將軍」

バルバネスの目が、ずっと細くなった。

「それを知っていたとは……、君は何者かな？」

ギータと名乗ったこの青年を最初に見た時、イヴァアリス 畏国人とゼラモニア 是領人

とどちらに分類すべきか、バルバネスは迷った。顔立ちはイヴァアリス 畏国風だが、

鴉の濡れ羽のような漆黒の髪だったからだ。黒眼黒髪は、オルダリーア 鷗国を中

心とする東方民族の特徴である。

イヴァアリス 畏国による是領統治が始まってから三十年も経つ。イヴァアリス 畏国人入植者

と現地民との間に生まれた二世達が、彼のように働き盛りの年齢になっていた。が、父母の身分などにより彼らがどちらの国籍に属するかで、待遇に差が付くことがあり、近年揉め事トラフルが起こりがちだった。

「將軍の騎士団に雇われた傭兵です」

そのことは、服装から察しがついていた。だが、
「それだけか？」

崖崩れで亡くなった人々の持ち物を回収した時、彼は工兵の荷物から杭を何本か懐に収めていた。他にそんな物を欲しがる人間はいなかったのも、何に使うつもりだろうと不思議に思ったのを、バルバネスは覚えていたのだった。

「それだけです。……今は」

「と、いうと……それ以前は？」

ギータは、真っ直ぐにバルバネスの目を見た。

「ゼラモニア是領貴族同士の抗争に巻き込まれて、家族を失いました。仇を討つため、その政敵の下で訓練を積み、隠密になりました」

「ほう。それで、本懐は遂げたのかな？」

「はい。……ですが、虚しくなりました」

仇の屋敷に入り込み、素性を隠して共に働く間に親しくなった人々を、ギータは斬った。後には、かつての自分と同一ような孤児達が残された。

ギータは実は、禍根を断つために女子供まで皆殺しにしようとしたのである。だが、主人は止めた。『そんな必要はない。それよりも、彼らを殺してしまったら誰がこれから畑を耕すのか』……と言うのだ。

主人の言葉の正しさは、すぐに立証された。ほんの一週間後、ギータの留守中に主人は殺され、山賊が辺り一帯の土地を支配した。

すると住民達は、何の抵抗もせずに山賊達に言われるがまま従った。

そして更に数週間後、イヴァアリス畏国軍が山賊達を包囲すると、今度はあつさりイヴァアリスと畏国軍になびいた。

ゼラモニア是領の人々は、あまりにも頻繁に、暴力的に支配者が交替するごとに慣れてしまっているのだ。恩讐にかかずらうことなく、その時々々の支配者に合わせなければ、生きてゆけない。それがわかってい
るから支配者側も、抵抗しない限り下々の者達を無駄に斬りはしない。

イヴァアリス仇討ちを志したギータは、ゼラモニア是領では例外的な存在といえた。半分畏国人だったからかもしれない。多くの是領人達は、親兄弟を殺し、

妻や姉妹を奪っていった者にでも、ただ黙って服従する。貧しさ故に、農民も貴族も隙あらば他人の土地財産を奪い取ろうとし、また、奪い合いに余計な労力を取られるが故に一層貧しくなるという悪循環――。

「本当の仇は、長引く戦そのものであったと、悟りました……」

「なるほど……。それで、どうして北天騎士団に？」

「殺しの技はもう使いたくなかったのですが。他に仕事の口がありませんでした。ならばせめて、戦を終わらせてくれそうなお方の下で働きたいと思ったのです」

「私が、そうだと？」

ギータは大きく頷いた。

「ベオルブ将軍と、南天騎士団のオルランドウ將軍だけだったと聞き及びます。ロマンダ呂国軍が撤退したこの機会に、ゼラモニア是領を独立の中立地帯として、オルダリーア鷗国と停戦すべきだ……と提言なさったのは」

ギータも今話したように、ゼラモニア是領の人々は簡単に、力のある側サイドに付く。現在手にしている支配権を惜しんで、ぐずぐずと引き時を逃すと、ある時点で雪崩を打ったようにゼラモニア是領人達が寝返り、植民地ばかりかイヴァリース畏国本国までオルダリーア鷗国に併吞されてしまう恐れがあった。

三十年の間に血縁関係も深まった。イヴァリース畏国の技術や、公共設備投資によって農業生産力も高まった……と、王宮の高官達は言う。そんな”絆”や”恩義”など天秤に掛けて何ほどでもない、ゼラモニア是領の風土と生活の厳しさを知らぬだろう、とバルバネスはなじりたい。

小便がすぐに凍って氷の小山になるような、冬の寒さを。木の皮草の根、凶作の年には死者の肉さえ食べずにはおれぬひもじさを。体験したことはおろか、間近に見聞きしたこともない連中には、危機感がなさすぎる……と思う。

「デナムンダ？世陛下や、王宮の石頭どもを説得するに足る力が無かった。お恥ずかしい限りだ。が、そのような至らぬ私に力を添えてくれるのであれば、歓迎するぞ。傭兵といわず、恒久的に部下として働いてもらおう。……といっても、生きて帰り着けれ

ばの話だが。今はまず、無事に畏国軍イヴァリースに合流できるよう手を貸してくれ」

ギータは目を見張った。

「……信用して下さるのですか？」

「何だね、いكانのか？ 例えば鴟国軍オルダリアの刺客ならば、昨夜のうちにでも寝首をかくのはたやすかったろう」

バルバネスはつると顔を撫でた。

「私は、やりもせんうちに一から十まで見通せるような千里眼は持っておらんのでな。何事もまずは試してみて、様子を見ながら修正していく方針だ。君の使いどころと待遇は、追々考える」

「は、はい……ありがとうございます。微力を尽くします」

斜面の上から呼び声がした。

「おおーい、大丈夫かー？ 流されたりしてないよな？」

「ああ、今戻る」

バルバネスは応えると、大鍋を拾ってギータに渡した。

「行こう」

日が沈む頃には、三カ所の焚き火を囲んで、一行はたっぷりの焼き肉にありついた。

傷病の回復に効くという、肝臓レバーと軟骨は皆に均等に行き渡るように分け、あとは胸や腿の肉など、銘々に好きなだけ炙って食べる。

ドラゴン 竜の肉は身が締まって相当に歯応えがあるし、味付けは塩と香味ハーブ料が少々あるだけで、臭みも強い。が、怪我人達はそんなことはお構いなしに、夢中になって頬張った。

「うっめー！ 俺、秋祭りの時でもこんないっぱい肉食ったことねえよ」

「俺も！ 生まれて初めてだぜ。一遍でいいから腹一杯、食い放題に食ってみたかったんだ」

「あー、もう明日死んでもいいー！」

「バカ、生きて帰るために食ってんだろ」

特に是領兵の若者達は、遭難者とも思われぬ明るい笑顔になった。
陽気に故郷の祭りの歌など歌い出す者もいた。

「ああ、土砂崩れに流されて良かったなあ。あのまま歩いてたつて、毎日薄ーい豆粥二杯きりだったもんな」

「ついでに、美人のファティマさんに手当てしてもらえるし……だろ？」

「何だよ！お前こそ大した怪我でもないくせに、ファティマさんが見てる時だけ痛そうな顔しやがって！」

そのファティマは、両腕が使えない畏国人の騎士の隣に座って、焼き肉を食べさせてやっている。

「あつ、ほらまた。先生はご自分のことだけして下さいよ」

「あの、わたしはもう充分食べましたから」

「別にいいではないか、このぐらい……」

「ダメダメ！今は騎士様だからって優遇は無しですよ。ほい、”あーん”」

年中空腹を抱えている是領兵達や、大男のワインバーグ以上に一番よく食べているのは、しかし何とバルバネスだった。

「すげー……。剣だけで竜倒したのも、只者じゃないけど……」

「全然、腹も突き出てないし。どういう鍛え方してんだろな……」

「ラムザさん！そのお年で傭兵続けてられる秘訣って何スか？」

皆は満腹になるまで食べ、食べ終えた者から、睡魔に負けて次々とその場で眠り込んだ。

ふと気付いた時には、起きているのは最後まで食べ続けていたバルバネスと、ぐっすりと眠る怪我人達に湿布を貼り直したり、外套をかけてやったりしているファティマだけになっていた。

「ラムザ小父さん、何をなさってるんですか？」

怪我人達の間を一巡りしたファティマは、バルバネスの隣に腰を下ろした。

焚き火は一つを残して、二つは消した。

「星を見て、方角を確かめておるのさ。君も神官なら、天文学も学んだろう」

ファティマははにかんで、首を横に振った。

「実はうろ覚えです。今、人手不足ですから、おまけで合格させてもらえたんでしょうね。わかるのは黄道十二宮くらいです」

「あれは知っているな？」

と、バルバネスは三日月の沈んだ闇夜の空の一点を指差した。

「北極星だ。真北を示す、不動の道しるべの星だよ」

”聖母様の灯火”……

「うむ。船乗りなどは、そう呼ぶこともあるな」

バルバネスは、地面に木の枝で描いた図と、懷に持っていた地図とを照らし合わせた。この地図も軍事機密に属する物で、大勢の前で大っぴらに広げるわけにはいかない。

「皆、思ったより頑張って歩いてくれたようだ。明後日には追い付けるだろう」

「そうですか。良かった」

ファティマはバルバネスの右腕を取り、癒^{フェアリー}しの精霊を表す古代神聖文字の形を指で描いて、その上を膏藥をすり込むように三度撫でた。

（痛みが引いた……？）

確か、^{ロマンダ}呂国旧教派の”おまじない”だったはずだ。ただの気休めではなく、それなりの魔力のある者が行えば、自分の体力と引き換えに他人を回復させることが出来るという。

「すみませんでした、さっきは」

「ん？」

「無茶でしたよね、矢張り……。睨み合いで負けなければ、自分よりずっと力のある猛獣でも追い返せるって聞いたことがあって。何とかなるかと思ったんですけど……」。

医者のが残れば、小父さん達も捨てていくわけにはいかないでしょう。ラムザ小父さんやワインバーグさんまでやられてしま

ったら、後の人達にはどうすることも出来ません。自分では責任の取りきれないことを、してしまいました」

「……は。はは、は……！」

バルバネスは笑った。

「え？」

「謝ることではないだろう。それより、君は怖くはなかったのか？」
「怖かったですよ、とっても。思い出すと、寒気がします」

「それなのに、逃げようとは思わなかったのか。どうしてだろうな？」

「どうして、って……逃げ切れるとは思えなかったですよ」

足を挫いた少年を連れては、だ。彼を置いていくという選択肢は、そもそも思い付かなかったらしい。

バルバネスはもう一度笑った。

「無茶だったかもしれない、確かに。だが、大局的にはあれで良い」
「……？」

「戦には往々にしてそういう時がある。戦術的にはその局面で引いた方が無難だが、戦略的には前に打って出た方が良い、という時が。」「負け癖がつく」……というのかな。一度消極的な道を選んでしまうと、その後もずるずると弱気な方にばかり流れて、結局もっと大きなものを失うことがある。

私の……、」

言いかけて、バルバネスは口をつぐんだ。

長男のダイスダークは、理詰めを考えすぎて、そのような呼吸を読むのは上手くない。例えば先程の場面なら、戦力を温存しようとして冷静に少年を犠牲にするだろう。結果として士気を下げ、今後^{チームワーク}も待ち受ける様々な困難を乗り越えていくのに必要な、団体行動の力を台無しにしてしまったのではないか。

作戦計画を練る段階なら有能でも、現場に立つ指揮官としては、次男のザルバッグの方が向いていると思う。ただ、ザルバッグは――まだ子供だから致し方ないだけかもしれないが――逆に直感に頼

りすぎる傾向があり、二人を上手く組み合わせて一人前というところか、とバルバネスは見ていた。

「はい？」

「……いや。とにかくあれで、諦めずに皆で帰るのだという結束力が強まったと思う。食べ切れんほどの食糧が手に入って、体力気力も回復したしな。」

だいたい、ああいう咄嗟の時の行動は、考えて制御出来るものではない。考えなくても動けるよう、普段から体に覚え込ませるしかないのだが……、敢えて他人を見捨てられるように訓練することが、人として望ましい在り方だとは思えんよ。

君は折角、素晴らしい力を持っているのだ。そのままで良い」

「そう言って下さって、気が楽になりました。そうだと嬉しいのですけど」

微笑んだファティマの横顔を見て、バルバネスは気になっていたことを尋ねた。

「ところで、ファティマ君。一つ訊いてもいいかな」

「何でしょう？」

「君のご家族は、今どこにいるんだね？」

ファティマは答えず、じっとバルバネスの目を見た。

「……小父さんのご家族は？」

「私のか？母と、息子が二人。上の奴は君より少し年上で、下の奴はその半分ぐらいの年だ。ドラコニアに住んでおるよ。口うるさい姉三人は、それぞれ他所へ嫁いで、元気にしておる。妻は……四年前に亡くした。元々体の丈夫な方ではなかったが、下の奴を産んだからは特に病気がちでな。私はこの通り、戦場を駆けずり回っておって……最期を看取ってやることも出来なかった……」

「そうでしたか……。きっと皆さん、小父さんが無事にお帰りになるのを待ちわびていらっしやるでしょう。必ず生きて帰らなくちゃいけませんよ」

「ああ。……それで、そう言う君の方は？」

ファティマは星空を見上げた。

「お母様と、お姉様がいっぱい。……ってことになるんでしょうか。わたし、尼僧院で育ったんですよ。今は……みんな、神様の御許にいます……」

「そうか。……そうだろうな」

家族がいれば、若い、美しい娘を危険な戦地には行かせないだろうと思っていた。

「え？わかりました？」

「ああ……、去年の秋からの黒死病で、幾つもの僧院が全滅したというからな」

黒死病は呂国軍の置き土産だった。呂国では去年の春から秋にかけて大流行し、呂国軍撤退の要因になった。黒死病は通常、菌を媒介する蚤と、蚤を運ぶネズミの活動が鈍る冬には流行が終息するものだ。が、運悪くこの年の畏国は暖冬で雪も少なかったため、黒死病が春まで猛威を振るった。

「最初に熱を出したの、わたしだったんです。村の外で倒れていたおばあちゃんを僧院に連れ帰って、介抱してるうちに急に気分が悪くなって……。次の日にはもう、ルグリア村全体に蔓延してました。看病に行った修道女達もどんどん罹って。」

それから三日間ぐらいのことは何も覚えていません、意識が朦朧としていて……。熱が下がって気が付いた時には、もう、亡くなった修道女達や村の人達が、お葬式も出来ずに僧院の中にそのままになっていました。最後まで生きていた院長先生が廊下に倒れてらして、水を差し上げたらすぐに息を引き取ったんです。

しばらくして、レーゲンデ大修道院からいらしたお坊様方がみんなのお弔いをして下さって、適当な落ち着き先が見つかるまでわたしを預かって下さることになったんですけど……。丁度軍医の募集があったので、是領に来ました」

黒死病の感染経路は二種類ある。菌を保有する蚤に刺されて免疫

腺から全身に広がる場合と、患者の吐いた血などから接触・飛沫感染し急性の肺炎を起こす場合で、特に後者の致死率が高い。大雑把に言って、ある地域で流行が始まった時、後から罹った者の方が助かりづらかった。

「一度死に損なった命だから、いつ捨てても惜しくはないと思っているのかもしれないが、しかし……、」

「まさか。折角拾ってもらった命ですから。大事に持って帰るつもりですよ」

ファティマはきっぱりと首を横に振った。

「わたし、聖母祭の日の朝に尼僧院の門の前で拾われたんです。それで、”^{ファティマ}聖母” って名前が付けられたんですよ。

泣いてはいなかったそうです。お腹いっぱいお乳を飲んだ後みたくで、すやすや眠っていたって……。ちゃんと産着と肩掛けにくるまれて、籠に入れられて。

だから、捨てられたのだとは思いません。本当に”捨てる”つもりだったら、へその緒も切らずに川に投げ込んだり、野山に置いていって獣の餌にしたりした方が手間がかからなかったでしょうから。それで……。養女に欲しいっていう方は時々いらしたんですけど、^{おねえさま}修道女達が全員一致で反対したんですって。自分で言うのと恥ずかしいですけど、この子は可愛すぎるから、養女に出したらきつと売られてしまう、って。今は善意で申し出て下さっても、生活が苦しくなったり、戦災ではぐれたり、さらわれたりすればわからないって……。^{おねえさま}ルグリア修道院の修道女達って、一度売られた方がほとんどでしたから」

グレバドス教会が推奨するように売・買春を完全に禁止することは、不可能だ。需要あるところに供給ありで、厳しく取り締まれば地下に潜るだけだ。が、誘拐、人身売買や詐欺など、他の面での犯罪性が明らかな店は、ドラコニア伯爵領内ではもれなく摘発するようになっている。

そのような店から保護した女性達をただ故郷に送り返しても、家

族が受け入れてくれなかったり、貧しさからまた売られたりして、水商売に戻ってしまうことが多い。そこで尼僧院に預けて、機織りや薬草の栽培などの技能を身に付けさせ、社会復帰の一助としているのだった。

「大人になって、自分で生計を立てるか旦那さんを選ぶようになるまで、みんな育てようって。本当に大事にしてもらったんですよ。」

たくさんの方から助けてもらった命ですから、なるべく有意義に他の人の助けになれるように使いたいと思ってます。そのためにはまず、自分が生きて、元気でいなくちゃいけないでしょう。捨てる気なんてさらさらありませんよ、勿体なくて」

「そうか。いや、失礼なことを言った」

「でも……そうですね。もしどうしても、わたしが命を捨てることでしか助からない人がいたなら……その時は、わたしの命はその人にあげるためにもらったのだと思うでしょうね」

バルバネスは首を横に振った。

「いや、いや。君も是非とも、生きて帰らなくては。これから君の家族になる人達のためにもな」

「えっ!？」

バルバネスは笑って、焚き火の周りで眠りこけている若者達を見回した。

「見たろう、連中のざまを。君のようないいお嬢さんは、男どもの方が放っておかんよ。それとももう、一生を神様に捧げると決めているのか？」

「いえ、そういうわけではないですけど……司祭の資格を戴いたのは、軍医の募集条件だったからで……。自分の家族を持つのがずっと夢でした」

この時代のグレバドス教会は、末端の司祭達の結婚を禁じてはいない。むしろ、七王国時代までの一夫多妻の慣習を改め、一夫一妻の規範を示すために、教区司祭は妻子のある者の方が相応しいと思

われていたほどだ。

「でも、憧ればっかり膨らんじゃってるようなところ、あると思います。理想が高すぎて、結局結婚出来ないかもしれないかもしれませんね」

「理想というと……、矢張りあれかね、身分と背が高くて、顔と頭と運動神経も良くて、とかいう……」

「そんなのじゃありませんよ」

と、ファティマは怒ったように言う。

「すると、どんな？」

「心の強い人……ですね。」

容姿や体力は、いずれ必ず衰えます。権力や財力は、その人一人だけのものじゃない、いつでも他の人の都合で失うこともある力です……。

だけど心の強さは、誰かからぽんと貰ってくることも出来ないし、逆に誰かに簡単に奪われたりもしないでしょう。一生かけて磨き上げていく、その人の本物の財産だと思っています。

そういう本当の宝物を、しっかり持っている人がいいです」

バルバネスは顎鬚を撫でた。

「成る程……。君は目が高そうだな」

ファティマは、くすりと笑った。

「あ、そうだ。夕方、竜ドラゴンに立ち向かっていった時のラムザ小父さん、とっても頼もしく見えましたよ。格好良かったです。

小父さんがもう二十歳……、せめて十歳若かったら、かなりいい線行ってたと思いますよ!」

「そうか？ はは、は……」

「ふふ、ふ……」

しばし、沈黙があつて。

「十歳……若くなくてはいかんだらうか？」

バルバネスは我と我が耳を疑った。自分の口から出た台詞とも思われなかった。

「い、いや……その！」

取り乱して言い繕おうとすると、ファティマがバルバネスの肩にもたれ掛かってきた。

「ファティマ君!？」

慌てて押し戻そうとすると……、ファティマはもう、熟睡している。ここまでの疲労が一遍に吹き出したようだ。

「おい。……おい」

肩を揺すったり、頬を軽く叩いたりしてみても、もはやちょっとやそつとでは目を覚ましそうにない。

（ううむ、いかんぞ。若い娘が、なんと無防備な……。男というものに対する警戒心が足らなさすぎる!）

地面に横たえてやった方がいいのだろう、とわかつてはいるのに、温かく柔らかい華奢な体を抱き寄せて、手放せなくなってしまった。天使のように無垢な寝顔を見ながら、そういえば今朝この唇で葉を飲ませてもらったのだけ……と意識すると、今更のように顔が赤らんでくる。

バルバネスは少年に還ったようにうろたえた。というよりも――改めて思い返すと、少年の頃にさえこのような気持ちになったことが無いと気付いて、一層狼狽した。

（これは、参った）

ベオルブ家の騎士には代々、“色気よりも食い気”の者が多いという。武芸を好み、大食だが、酒と女には関心が薄い。バルバネスもその系統だった。

幼い頃から、かましい姉三人に寄ってたかって要らぬ節介を焼かれるのに辟易し、女などうんざりだと思ってきた。

舞踏ダンスも苦手、酒も弱いとあって、宴席パーティーで着飾った貴婦人達の相手をするのは苦行に近く、狩りや騎鳥試合トーナメントに汗を流す方がはるかに楽しかった。

九つの年には既に、一つ年下の幼馴染み・マリーソフィア嬢が許婚に決まっていたことでもある。

ソフィアが十八になるとすぐに結婚し、翌年には長男・ダイスダ―グも誕生したのをこれ幸い、言葉巧みに言い寄ってくる女達のことごとくを突っぱねてきた。豊かさの象徴としてふくよかな女性が好まれた十三世紀当時では、ソフィアは痩せすぎで女らしくないぐらいだったから、実はバルバネスは少年愛の趣味があるのではないか……と疑われたほどだ。

ソフィアは主家の姫であるが、バルバネスに対して驕慢な態度を取ったことがない。ひたすらたおやかに、健気にバルバネスに寄り添ってくれた。

勿論、大切に愛おしんではきたのだが、初めから家族の一員であるかのように、妹のように慣れ親しんでいたので、抑えがたい恋の情熱……といったものとは無縁の間柄だった。

（この年になって、自分の息子よりも年下の少女相手に”初恋”などと……。シドの奴なぞが聞けば、顎が外れるほど大笑いしてくれるだろうな）

このまま枕になってやりたいのは山々だが、バルバネスも明日に備えて体力を回復しておく必要がある。適当に誰かと火の番を交替して、眠った方がいいとはわかっているのだが――、しかし、誰と？

ファティマは正体も無く昏々と眠りこけている。昼間は互いに牽制し合っていた連中も、一人か二人だけになれば『触って減るものでなし』などと出来心を起こすかもしれない。……そういう目で見ると、どいつもこいつも信用ならない気がしてくる。

セラモニア
是領人達の日和見主義は骨身に浸みて知っている。騎士ならば女性に敬意を払うだろうか……だがオルタリア鷗国人の騎士は傷が重く、起きているだけでも辛そうだし、イヴァリス畏国人の若い騎士は早くもファティマに首ったけのようだ。ワインバーグは実直な青年のようだが、明日も人一倍力仕事をしてもらわねばならず、出来るだけ休ませてやりたい。

……矢張り、自分が朝まで焚き火とファティマの見張り番をして

いてやろうか。しかし、温かい寝息を肩に受けていると、段々くすぐったい心持ちになってきた。このままではバルバネス自身が一番、何をしでかすかわかったものではない。

（ま、まずい。”不潔な中年オヤジ”に成り下がる前に……何とか……）

バルバネスはもう一度、焚き火の周りで眠る人々を見回して――、（そうそう、そうだった）

ファティマをそうつと地面に横たえ、黒髪の青年を起こしに行った。

「ギータ。ギータ、見張りを頼む」

元隠密の青年は、パツと目を覚ました。

「あ……、これは失礼いたしました」

「眠くなったら、また私を起こしてくれ。無理はするなよ、今は将軍も傭兵もない」

「いえ、もう充分に休みました。僕は二、三日一睡もしなくても平気なように鍛えられています」

ギータが焚き火の前に座った。バルバネスはファティマの傍らに、背を向けて横になる。

「その……見張るといふのは、モンスター魔獣を警戒するとか、オルダリーア鷗国人捕虜達に怪しい動きがないかとかいう他に、ファティマ君に悪さをする奴がいないように、ということもだぞ。嫁入り前のお嬢さんなのだからな」

言わずもがな、とは思ったが、念を押した。

「はい。かしこまりました」

ギータは生真面目な顔で答えた。

まだ動悸がしていたが、目を閉じると、長年の戦場暮らしで身に付いた習性で、たちまち深い眠りに落ちた。

ギータは言われた以上のことをしてくれた。夜の間に、マフラムン竜の残りの肉から出来る限り即席の燻製を作っておいてくれたのだ。

一行は再び、詰め込めるだけの焼き肉を腹に詰め込み、水筒に湯

冷ましを満たして、二日目の行軍を開始した。

多少無理を押しても、ゆうべ竜を倒したのは正解だった、とバルバネスは確信した。昨日よりも共同作業の連係が円滑だ。腰まで浸かる急流や、絶壁に近い岩肌を、皆の体を縄で繋ぎ合って進む時などでも、互いを信用して手助けし合っている。

特に是領人達は元々、社会情勢と自然の厳しさ故、友情や恩義を何年も守り続けることは出来ない代わり、”今、この場”にいる者を仲間と認めれば、素直に協力し合うことの大切さも知っている。

また、ほとんどの者が二十歳前後の体力の絶頂期で、腹一杯食べ、一晩ぐっすりと眠っただけで驚くほど疲労や怪我から回復していた。ファティマは少しでも魔法力が回復すると、すぐにそれを魔法治療に充ててくれたので、午後には全員が、少なくとも片手が使えるようになった。

ファティマは相変わらず、少年のように元気が良い。飛び跳ねるように皆の間を回っては、怪我の手当てをしたり、遅れがちな者に肩を貸したり励ましの言葉を掛けたり、魔獣除けのためによく透る声で歌を歌ったりもした。

進路を見失った時、下で見守る者達の心配をよそに、ひよいひよいと高い木の天辺まで登って方角を確かめ、皆を呆れさせもした。女性にしてはほっそりと引き締まった体付きなのは、余計な肉の付く暇もないほど、いつも活発に動き回っているためらしい。

「嫁さんにしたら尻に敷かれそうだなあ」

と言いながら、本気で尻に敷かれたがっている者は一人二人ではなさそうだ。

（少年愛趣味というわけでは……ないはずだが……）

一番の熱望者を自負するバルバネスは、秘かに自問自答する。

亡妻を重ねているのでもない、はずだ。痩せ型の体型こそ多少似ているが、性格は正反対と言ってもよい。

——バネス！あなた本当は、もっと元気なコが好みなんじゃない？
三姉・エストレーラの勘は正しかったようである。

明朗な気質と行動力で一行を引っ張ってきたファティマだが、更なる隠れた実力を垣間見せたのは、明くる日の未明のことだった。

「凶獣だ!!」
ベヒーモス

見張りの叫び声で、一同は飛び起きた。

一日目より体力も回復し、信頼関係も出来てきたので、この夜は当番を決め、三人ずつ交替で見張りをしていた。

凶獣は竜以上の難敵である。ベヒーモス ドラゴン自然界の生物ではなく、古代に造られた軍用獣だという。ドラゴン竜の角は後ろに向かって寝ているが、凶獣の曲がった太い角の先は前を向いているため、頭突きでしゃくり上げられた時、一撃で致命傷になることもあった。

「ブモーツ!!」

二股に分かれた蹄でドシン、ドシンと地面を打ち鳴らし、凶獣は野営地に飛び込んでくると、まず次々と焚き火を踏み消して回った。

凶獣は火を恐れない。ベヒーモス夜目が利くので、火を消されると人間の方が不利になる。あまり戦力になれない工兵達が、太い薪を引き抜いて掲げ、松明にしてくれた。

今は、武器を持っている者全員が戦える。ドラゴン竜と戦った時よりは分が良い。

とはいえ、魔法兵が一人もないのは難点だった。ネック

凶獣の皮膚はなめし革のように硬く、物理攻撃ではなかなか痛手を与えられない。普段の猛獣狩りでは、長槍である程度動きを封じ込めた上で、魔法攻撃で止めを刺すのが定石だ。セオリ

しかし、無い物ねだりをしても始まらない。歩兵達が戦斧や棍棒で追い込んでくれたところに、バルバネスが躍りかかる。と——、バキンッ!

「!!」

長剣が折れてしまった。ドラゴン竜の首を骨ごと断ち切った時に、刃こぼれしていたようだ。カウンター

反撃の体当たりで、バルバネスは弾き飛ばされた。

「ラムザさん！」

ギータが自分の使っていた、東国風の長刀を投げてくれた。反りが衝撃を吸収してくれるので、剣より折れにくい。バルバネスは受け取って、凶獣ベヒーモスの前足による追撃を迎え撃った。……直後。

「フゴオーッ！！！」

もう一頭の凶獣ベヒーモスが、ギータの背後から襲いかかってきた。

ギータは短刀と小刀ナイフだけで角による攻撃を防いだが、衝撃を逃がしきれず、背中から地面に叩き付けられた。凶獣ベヒーモスが牙を剥き出し、ばねのように体を丸めてギータに飛びかかろうとすると――、

オルタリア
鷗国人の騎士が間に割って入った。

「トオーッ！」

凶獣ベヒーモスの顔を突こうとする、が、凶獣ベヒーモスの頭突きの方が速かった。

ブシュッ！

騎士は革鎧ごと、胸ベヒーモスを凶獣の角に貫かれた。

凶獣ベヒーモスは頭を振って騎士を放り捨て、起き上がって短刀と小刀ナイフを構えたギータに向き直る――、その時。

「汚れ無き天空の光よ、血にまみれし不浄を照らし出せ！」

ファティマが、治療の魔法とは違う、勇ましい響きの呪文を唱えた。ほの白い光球がファティマの両手の間に生まれ、一点に収束して消えたかと思えると――、入れ替わりに凶獣ベヒーモスの頭上に、星が降ってきたかのような眩い光球が現れた。

「ホーリー”聖光”！！！」

ドンッッ！

青白い火柱ベヒーモスが凶獣を撃ち倒した。

「グ……モウウ……」

凶獣ベヒーモスは立ち上がろうとしたが、ぐらりと体が傾いて横倒しに倒れ、動かなくなった。

治療や防御中心の”白魔法”の中で唯一の攻撃魔法・”ホーリー聖光”は、人間に扱える最強の攻撃魔法でもある。

「……！」

しっかりとして下さい、と鷗国語で呼び掛けながら、ギターは騎士を助け起こした。が、既に呼吸も心臓も止まっている。

「立派な騎士様だったべ……」

「敵ながら天晴れな勇士を亡くした……」

すっかり葬送気分になっていている者達を押しわけ、ファティマは騎士の傍らに膝をついた。

「まだ亡くしてませんっ！」

すぐさま、胸から脇腹にかけて開いた風穴に手をかざし、呪文を唱える。

「生命を司る精霊よ、失われゆく魂に、今一度命を与えたまえ！」
「蘇生」！

無残な傷口が見る見る塞がってゆき、騎士は息を吹き返した。

「ウ……ム……？」

周りで固唾を飲んで見守っていた者達も、一緒にほうつと溜め息を吐いた。

「やった……！」

「ファティマさん、すっげえ！」

だが、ファティマは険しい表情だ。

「でも、これで夜のうちに回復した魔法力をほとんど使いきってしまいました。あとはもう、”回復”が一回か二回使えるかどうかぐらいです。皆さん、今日はこれ以上大きな怪我はしないで下さいね」

もう一頭の凶獣を、歩兵から借りた槍で口の中から喉を突き破って倒したバルバネスも、側で見て驚嘆した。

（なんと！竜人族の血でも引いておるのか？）

魔力の強さと、使える魔法力量の上限はおおよそ比例して成長する。何十年も年経た凶獣を一撃で倒すほどの魔力は、普通ならもう限界まで鍛え上げた熟練の魔道士のものだ。が、魔法力量の上限からすると、ファティマにはまだまだ伸びしろがありそうだ。だとすると、常人の数割増しどころか、数倍の魔力である。

並みの人間ならば、数千人、数万人に一人の逸材だろう。が、こ

ここまで突出した才能があると、異能者である可能性も出てくる。

紀元前から、ファラ教神殿やグレバドス教会に追われた者達が、ロマンダ数多く呂国に逃げ込んでいた。魔法剣士や青魔道士、召喚魔道士のように、特殊な技術や思想を持つだけで能力的には他の人々と変わらない者達もいたが、中には、ドラグナー竜人族や蛇人族ラミアのように、体質自体が特別な者もいたのだ。

ドラグナー竜人族は、太古に人に化身した”知恵ある竜”の末裔といわれ、祖霊・土地神信仰の時代には”生き神様”として敬われてきた。

が、魔洗文明時代の人体実験で生まれた蛇人族等は、”不浄の民”として忌み嫌われる。ミュロンド正教派創立から雄帝国時代末期までにほとんど抹殺されたが、その後も時々、先祖返りで生まれてくる者がある。今でこそ殺されることはないものの、隠者として人気がない森の奥などに庵を結び、なるべく人と関わらず、子も残さず、ひっそりと暮らすのが暗黙の掟だった。

「ラムザさん！凶獣ベヒーモスの肉って食べられるんスカ？」

「うん？いや、不浄の肉だ。体に毒になる。食えんよ」

「えー、じゃ、今朝もまた竜ドラゴンですかあ？そろそろ食べ飽きたっスよー」

バルバネス自身は、尻尾が生えていようが羽根が生えていようが、ファティマの魅力は損なわれないと思う。が、周囲の者達を納得させるには、出自を辿って明らかにする必要があるかもしれない。

魔法力が空っぽになってからも、ファティマは何度か”おまじない”で他の者達の怪我を手当てした。

（かなり無理をしておるのではないか？）

顔が青ざめ、口許から微笑みが消えてきたので、バルバネスは心配になった。

昼過ぎ、狼用の罠に足を噛まれた者の手当てをした直後、ファティマはとうとう、立ちくらみを起こして、一歩も動けなくなった。

「……自分の足で歩けなくなったら、置いていくんでしたよね？」

ファティマは肩で息をしながら、笑顔を作った。

「先に行って下さい。少し休んだら、追いかけます」

ギータがファティマの横にしゃがみ、負ぶされ、というように背中を向けた。

「命を助けられました。置いていけるわけがない」

ファティマは首を横に振る。

「自業自得です。自分の力量を把握出来ていないから、力を使いきてしまつて……。オルダリーア 鷗国軍に追いつかれる前に、早く」

オルダリーア 鷗国人の騎士もファティマに近寄った。

「助けられた、それがし 某も」

イヴァリース 畏国人の騎士が

「遅れるようであれば、一緒に置いていつて構わない」

と言え、セラモニア 最年少の統領兵の少年もファティマの手を取り、

「今度は僕が助けます」

「そうそう、ファティマさんに世話になってない奴なんかいないんだから」

落伍者に冷たいといわれるセラモニア 統領兵達が、一人としてファティマを置き去りにしようとしないうことを、バルバネスは嬉しく思った。

南洋人の大男のワインバーグが、体を小さく屈めてファティマの顔を覗き込んだ。

「残るんは危ねえだよ。罾があるっちゅうからには、狼がいるってこつたで……」

「……ついでに、罾を仕掛ける人間も近くに住んでいるということだ」

バルバネスは笑った。

「目的地は近い。もう、連れて行くのは大した負担ではない」

「でも……」

「決まり事なぞというものは、臨機応変に変えなくてはな。出発した時とは状況が違う。思いがけず食糧が手に入って、体力も回復している」

「うんうん、もう竜ドラゴンの肉を一生分食ったもんな―」

誰かが飽き飽きした口調で言ったので、皆声を立てて笑った。

「さあ、ぐずぐず立ち止まっている間が惜しい。行くぞ」

バルバネスは、ひよいとファティマを背負って、すたすたと歩き始める。

「「……あつ」」

スチールホーク

※鈍色鷹に金貨を取られた（※ 鳶に油揚げをさらわれた）。という顔をして、若者達がついてくる。

（見上げた娘だ）

ファティマがいなければ、バルバネスには、生まれた国も身分もまちまちの者達をまとめ上げて、困難な道程を歩き通させることが出来たかどうか。

イヴァアリス

（今の畏国を、このように一つにまとめる道があったなら……）

沈みかけた船の上で、席取り争いをしているようなもの――とかバルバネスには見えない状況が起きている。

今年の冬、雪華騎士団のサダルファス将軍が暗殺された頃から、

イヴァアリス

バルバネスは畏国軍内部に漂う腐臭を強く感じるようになった。

冬季の作戦遂行に長けた貴重な人材が失われたことを憂うべきであるのに、同僚であるランベリーの騎士達はこれを好機と、将軍の所有していた領地や権限を貪欲に奪い合った。

大戦初期と違い、支配地や役職は拡大が頭打ちどころか、縮小しつつあるので、後は味方の失脚や戦死によってしか新規に獲得出来なくなってきたのだ。

サダルファス将軍は味方を裏切ったのだから、領地没収は当然……とランベリーの騎士達は言うが、彼らのほくほく顔を見ると、将軍こそ裏切られたのではないかと思えてくる。自分もいつ足元をすくわれるかわからぬ、と薄ら寒くなった。

ブリマ

王都ルザリアに住まう長姉からも、不穏な噂を聞いていた。

王太子バドリナスと第二王子オムドリア、それぞれの側近達がい

がみ合い、兄弟の仲を裂こうとするかのような言動が目立つというのだ。

第一王子バドリナスは父や祖父に似て勇敢——というか、粗暴といった方がいいほど猛々しく、軍事のことしか頭にない。経済や学問の振興、福祉などに高い関心を寄せる弟のオムドリアの助けがなければ、内政で失敗するかもしれない。

もっとまずいのは、万一バドリナスが戦死でもした場合だ。病弱で心根の優しすぎるオムドリアが、全く軍事に疎いまま王になることがあれば……、

（この戦、負けるぞ）

と、バルバネスは強い危機感を持っている。

「あの、ありがとうございます……」

ファティマは照れくさそうに笑い、バルバネスの首にしっかりと腕を回した。

「……お父さんって、こんな感じでしょうか？」

「……、……」

親しみを感じてくれているのは嬉しいような、親子ほども離れた年の差という現実を突きつけられたのは寂しいような。

バルバネスの広い背中に揺られているうちに、ファティマはうつらうつらと眠ってしまった。

……。

「ラムザさん、代わりましょうか？」

是領兵の少年が、何度目かの声を掛ける。

「いや、いい」

……。

「代わろう……」

「代わりますよ」

「代わらせて下さいって」

……。

「ラムザさん……、」

ワインバーグが、からかう口調で言った。

「……結構むっつりスケベですだな？」

「なっ……！」

若者達がにやにや笑う。

「あー、そういうことでしたか……」

「いけませんねえ、抜け駆けは」

「奥さんいるんでしょう？怒られますよ」

口々に囁し立てたり、口笛を吹いたりする。

「違うっ……、断じて違うぞ！これだから若い奴等は……、そんな目で見ておる連中に、嫁入り前の娘さんを預けられるわけがなからう。ファティマ君は私が責任持って連れ帰る。うむ、父親に代わってな」

だが実の所、凶星だった。バルバネスはもう、他の男には指一本たりともファティマに触れさせたくないと思っている。

「無理しないで下さいよ、お年なんだから。ギックリ腰になっちゃったりして、ラムザさんまでおんぶしてくのは嫌ですからね」

「心配されるほどの年ではないぞ、全く……」

ギータだけが生真面目な表情を少しも崩さず、薬箱を背負って黙々とついてきていた。

彼は察しがいようで、とつくに、バルバネスが本気でファティマに惹かれていることを見抜いていたらしい。最初にファティマの側に残ろうとしたのは、先導者であるバルバネスは前言撤回しにくいのではないかと配慮したのだろう。その後は一度も、代わろうと言わなかった。

わかってきているのは有難いような、気恥ずかしいような。

（心の強い人がいい……か。この娘の目に叶うだけの強さを、今の私は持っているだろうか？）

”勇者”だの”風神”将軍だのと呼ばれはするが、いつの間にか、伯爵とか騎士団長とかいった役職に乗っかっているだけで、真に”勇気”を必要とするような、思い切った挑戦を避けるようになって

はいなかったか。

(ファティマ。 ファティマ 聖母の灯火”……か)

闇夜の天に輝く、しるべの北極星^{ほし}。”北天騎士団”団長である自分に相応しい伴侶ではないか？

この娘を妻に迎えようとすれば、身分やら血筋やら、宗派やら、諸々の込み入った課題に直面することになるだろう。だが、そのくらしいことが解決出来なくて、この国難の時が乗り切れるものか、と思う。

バルバネスの父・カルダックも、植民地の紗国^{ペシャ}や是領^{セラモニア}で現地の間を重用したり、領内に解放奴隷や異教徒を受け入れて開拓村を作ったり、呂国^{ロマンダ}旧教派の修道院を誘致して手工業技術の発展を促すなどして、大胆な改革者だと評されたものだ。

ベオルブ家が豊かだから、そのような”道楽”を試す余裕があるのだ……と言う者もいる。だが、逆だろう、とバルバネスは思う。様々な人材や技術を幅広く受け入れてきたから、ドラコニア領は豊かになり、北天騎士団は精強になったのだ。異民族だ、異宗派だといった”枝葉末節”にこだわって、優秀な人材や制度を取り入れずにいる”余裕”こそは、今の畏国^{イヴァリース}には無いはずだ。

元々、文化習慣や民族構成の異なる七つの国が、それぞれの強味を活かして手を携えたことで、畏国^{イヴァリース}は七カ国の国力を単純に足し合わせたよりもはるかに強国となった。それが一つの国としてまとまった途端、今度は更なる変化工夫を拒むというのは、おかしい話ではないか。

国の中枢の風通しを良くし、守旧頑迷の空気を吹き飛ばしてやりたい……と思いつつ、バルバネス自身が、いつしか家だの格式だのといったしがらみに囚われていたようだ。

今、初めて目が覚めたような気がする。この娘が投げかけてくれる微かな希望の光を道しるべに、前人未踏の領域に分け入ってみようではないか。そして……、

この娘ならば、心身ともに健やかな子を生んでくれるだろう。

もし、それが男子であれば。バルバネスの志を継ぐ……というよりも、国や身分といった枠を超えて、バルバネスが持ち得なかった自由な視点と行動力を備えた、見事な騎士に育ってくれるのではないか。

”ベオルブ家の跡取り”としてはダイスダーグとザルバッグの二人がいれば充分と思っていたが、それとは別に、そんな息子を持つてみたくなった。

（うむ、やってみせるとも）

バルバネスは、気持ちだけは十歳も二十歳も若返ったように、気合いがみなぎってきた。

日が傾いてきた頃――、

「ベオルブ將軍ーッ！」

副官・イスタークの部下の騎士が、バルバネス達を発見して近付いてきた。山道に強い黒韋駄鳥チヨコボにまたがっている。

「よくぞご無事で！」

「うむ、心配を掛けたな。オルダリーア 鷗国軍との距離は？」

「二日行程ほどまで縮められました」

「よし、予定通りここで迎え撃つぞ。麓の四つの村の住民と家畜を砦に避難させるよう、イスタークに伝えろ」

「はッ、かしこまりました！」

すぐに引き返す北天騎士団の騎士を、一行は啞然として見送った。

「うそ……マジ？」

”風神”バルバネス將軍……！？

「北天騎士団団長の……！！」

「道理で鬼みたいに強えはずだぜ！」

イヴァリース
畏国人の若い騎士が跪き、謝罪した。

「御大将とは存じませず、御無礼の数々、誠に申し訳ありませんッ！」

「げっ……、そうだ……！」

他の者達も、さっき冷やかしたことで無礼打ちにでもなるのではないかと、青い顔をして平身低頭する。

「よい、気にするな。あの状況で、將軍も兵士もへったくれもあるか。諸君ら全員が力を合わせてくれたればこそ、こうして一人の脱落者も出さず、生きて戻ることが出来たのだ。礼を言う」

「はッ、勿体なきお言葉、痛み入ります……」

目を覚ましたファティマは、”仲間”から”配下”の顔に代わって跪いている一行を、バルバネスの背中からぼんやりと不思議そうに見下ろしていた。

「さあ、皆立ってくれ。駐屯地まではまだ歩くぞ。もう一踏ん張りだ」

バルバネスが歩き始めると一行は、影を踏むのも恐れ多いというように、先程までよりも離れて、畏まってついてくる。

「ラムザ小父さん、ドラコニアのお殿様だったんですか……」

「遠慮はいらん、最後まで負ぶって行ってやろう」

この娘にも、他の者達のように敬遠されてしまいうだろうか。と、思っていると――、ファティマはバルバネスの耳に口を寄せ、ひそひそと囁いた。

「天下の北天騎士団団長殿でも、風見草セルセタのお薬湯は苦手なんですね。好き嫌いなさってると、長生き出来ませんよ」

「うっ……」

バルバネスは決まり悪そうに、こっそりと囁き返す。

「そのこと、兵士達にはくれぐれも内密にな」

「はい」

ファティマは悪戯っぽく、ふふっと喉の奥で笑った。

二年後、この二人の間に生まれた男児は、ラムザと名付けられた。母と同じ黄金色の髪と碧い瞳を持ち、父の面影そのままに成長した少年――十六歳になったラムザは今、骸旅団に誘拐されたエルム

ドア侯爵の行方を追って、貿易都市ドーターへの道程を急いでいる。

？－3－〔1〕 後編 北極星くバルバネスとファティマ？く（後書き）

読了お疲れ様でした。予想外に下書きよりも長くなってしまいました。したが、番外編ではなくあくまでも本編の一部として、ラムザが受け継いだ遺伝子や、託された意志を描いておきたかったのです。

それにしても、父ちゃんカワユすぎ……。 ”偉大なる勇者” ”天騎士” バルバネスがこんなんでいいのでしょうか。ま、今後、恋愛描写といってもこんな調子です。”年齢制限なし”ですしね。

？―3―〔2〕 貿易都市ドーター くだおれ亭

貿易都市ドーター――。

ガリオンヌ領の東端に位置し、陸路による交易の中継地として発展した都市である。

ライオネル領の貿易港・ウォーギリスを経由して、黒珊瑚海から運河を遡り、異国の商人達が象牙や香料、香辛料、絹・木綿織物等を持ち込んだりもしている。

ラムザと五人の仲間達がドーターに到着したのは、イグーロスを出発して五日目の午前中だ。

「うわあ……。ガリランドの市場よりずっと賑やかだなあ……」
「あつ、見て見て！ 紗国ペシヤの絨毯よ、綺麗ねー」

道の両側を埋め尽くす商店、露店の品々に目を奪われているナツシユとサーシャの頭を、ガストンが押さえ付けた。

「物見遊山に来たんじゃねえつつたろ！」

赤銅色の肌、黒い癖っ毛の南洋人の子供が、ナツシユにぶつかり、異国の言葉で謝って通り過ぎようとした。

「あ」

財布に結び付けた紐がぴんと伸びきって、腰の布帯ベルトを引っ張った。

「この南蛮人ッ！」

アルガスが殴りかかると、すりの子供は雑踏の中へ逃げ込み、瞬間に姿を消した。

ガストンが舌打ちする。

「てめーら、やっぱ、宿で留守番だ！」

ボヤボヤしてつと人買いに拉致られて、遠い雅国とか蓮国とかに売っ払われちまうぜ？」

「あはは。売っ払われるとかは別にしても、ナツシユとサーシャはしばらく休んでいいよ。大分疲れてるだろう？」

でも、この様子だと、僕は動き回っても良さそうだね」

イヴァリース

畏国各地、更には遠洋各国から人の集まるドーターには、髪も眼も、肌も様々な色の者がいる。ここでは、ラムザの豪華な金髪も特に珍しがられないようだ。

イヴァリース

畏国人の大多数は、髪も眼も薄茶色から栗色にかけての色合いをしている。金髪ほどではないが、黒髪も少数派である。

金髪のラムザはただでさえ目立つが、黒髪のディリータと連れ立って歩くと、色鮮やかな対比が注目を浴びる。

——母さん、僕らがイグーロスの街へ行くと、みんなが振り返るんだよ。どうしてだろう？

ラムザは幼い頃、自分の容姿が人目を引く理由がわからなかった。移民の多いマンダレーナ村でも、それ以前に母子三人で身を寄せていたクラバーティン修道院でも、髪も眼も色とりどりの子供達と、団子のようにくっついて遊び回っていたラムザである。

——それはね、君達が世にも稀な男前だからです。

——そうなのかな？ えへへ……。

——そうですとも。我が子ながら惚れ惚れするわ。ラムザは世界で二番目に格好いいわよ。

フアティマ

と、母の他愛もないおだてに乘せられていた時期は、長くは続かなかったが。

ガンダリア ラージヤ

「金髪碧眼の美少年は、雅国の豪族が金に糸目を付けずに買い取ってくれるそうぞ。ラムザ、僕の目の届かない所へは行くなよ」

「はいはい、わかってますって。心配性だなあ、僕の”保護者”殿は」

ラムザはディリータの忠告を軽く聞き流す。

少年達は、街を東西に貫く大通りから一本北の、商人組合通りに入った。搜索活動を始める前に、まず、滞在の拠点となる宿を確保するためだ。

ドーターは坂の多い街で、概ね、日当たりの良い北側の山の手に高級住宅地が広がり、南側の下町に庶民の長屋が軒を連ねている。

日当たりと水はけの悪い南から南東の地区の外れは、不法占拠の掘

バラック

つ建て小屋がごみごみと立ち並ぶ貧民窟街スラムになっていた。

「本当は南の花街とかの方が手掛かりが転がってんじゃねーか？」
ガストンがにやにやしながら言うのと、ラムザは顔を赤くして首を横に振る。

「サーシャもいるんだからね！信用のおけるちゃんとした所に泊まらないと。」

そういう”大人の領域”は、必要とあらば兄さん達が捜査して下さるよ。僕らは基本的に、ザルバッグ兄さんが捜索隊を出すための”言い訳”を提供してるだけでいいの！」

「何だ何だ？及び腰ヨワツキだな。おいアルガス、女子供は放っぽつといて、後でディリータと三人で行ってみつか」

ラムザとナツシュは顔を見合わせる。

「女子供……って……」

ディリータが一軒の宿屋の前で足を止めた。

「ここは、なかなか良さそうだぞ」

一階に食堂と、傭兵の斡旋所が併設されている。旅の商人達と、彼らの用心棒をする傭兵達が、ここで仕事の交渉をしたり、酒や茶を飲みながら情報交換したりするのだ。

店内や、建物周辺の掃除も行き届いていて、清潔そうだ。

「あ、浴場おふろもある！ここにしようよ」

ラムザは俄然、乗り気になって言った。

一階の食堂が人で賑わうのは夕方からだろう。今は閑散としている。

部屋を予約し、差し当たって使わない荷物を預けると、少年達は昼食を食べに再び街へ出た。

雲が低く垂れ込め、湿っぽい西風が吹いている。一雨来そうな気配だ。

露店の果物売りや弁当屋などは、さっさと店をたたみ始めていた。

「どこでもいいーから、早いところ飯屋に入っちまおうぜー」

儲かってるんじゃないか？」

「別に無料タダでなくてもいいけど、こういう記録レコードって挑戦してみたくなるなあ……」

と、ラムザは胃の辺りを撫でる。

「あ。降ってきたよ……」

ナツシュの、つば広の羽根付き帽子に、雨粒が当たり始めた。

「よっしゃ、ここにしよーぜ。さ、急いだ、急いだ」

ガストンが仲間達の背中を押し、小路を抜けて裏通りに面した、小ざっぱりとした定食屋に駆け込んだ。

「いらっしゃいませえー！ 六名様ご案内ー」

店内はさほど広くないが、座席数は意外に多い。ラムザ達は、天井の低い中二階の長卓子テーブルに通された。

「昼食時間帯は、女性に大人気の飲物・甘味付きドリンク デザート おすすめ定食セットが五ギルぽつきり！ 剣士や肉体労働者の皆様にもご満足頂ける”
くだおれ定食”セットが十ギルかつきり！と、なっております」

「あのー、僕、”お好み焼き大食い”に挑戦したいんですけど」

ラムザがさらりと言うと、給仕は目ウエイトレスを点にした。

「えっ……。いいの？ うちのお好み焼きって、そもそも他所より一回り大きいのよ？」

少年達は、一階の客の皿を見下ろした。

「あれならあたし、半分でも充分だわ。ね、ナツシュ君、半分こにしない？」

「うん、そうだね……」

と、サーシャとナツシュの間では話がついたが、ラムザの顔色は変わらない。

「はい。いけると思いますよ」

ウエイトレス 給仕は副店長の青年を呼んだ。

「ちよっと、若旦那！ 若旦那、大変だわ！」

陽気そうな大柄の副店長は、ラムザのほっそりとした体付きをためつつがめつし、

「うーん……君、本気かい？」

「本気です」

「食べきれなくてもお代は払えるのかな？」

「お金は持ってますよ」

と、ラムザは百ギル金貨を見せた。

「自信はあるんだね？本当にいいんだね？」

「はい。新記録、出させてもらいますよ！」

副店長は、力強くラムザの肩を叩いた。

「いよしっ、気に入ったあ！坊ちゃんの男の意地を見せてくれ！そうと決まりゃあ、お友達の皆さんもこちらに来て下さいよ……」

副店長は一階の中央に二人掛けの小卓子テンプルと椅子を出してラムザを座らせ、友人達も改めて、その隣の大卓子テンプルに案内した。

パン、パン、パン！

大きな音で手を叩くと、店全体に響き渡る大音声で呼ばれる。

「さあ、さあ、皆様！本日はご来店誠に有難うございます！」

只今、当店名物”ドーター風お好み焼き大食い”に、久々の挑戦チャレンジ者が現れました！

ご用とお急ぎでない方は、是非是非ご観戦、ご声援よろしく願
いいたしますーっ！

店内にどよめきの声が広がった。

「思い起こせば半年前、格闘集団”凶獣の角”ベヒーモス 主宰者・タイラー

Ⅱワット氏の打ち立てた六枚の大記録……。以来、数多の屈強な男
達を阻み続けてきた、六と四分の一枚の壁！

その絶壁に今、果敢にも立ち向かうは……。なんと！金髪碧眼、瘦
身優美、花も羞じらう紅顔の美少年でありますっ！

まずは、お名前を……。どうぞ！」

「あ、こんにちは。ラムザです。ラムザⅡ……」

ここでベオルブの名を明かすのはまずいと思い、ラムザは金髪の呂
国人移民の多い、母の出身地名を名乗ることにした。

「……ルグリア」

「ほう、ほう。ルグリア村というと、ドラコニア地方の出身だね。生年月日は？」

「聖歴一九三年、※磨羯の月十日（※太陽暦一月一日）」

「ほう、すると十六歳。若い、若いねえー。育ち盛り、食べ盛りだ。しかし我らが”ポリユーム くだおれ亭”のお好み焼きは、モルボルグレイト 大花虫をさえ飽食せしめる容量満点の逸品！」

この華奢な体で、果たしてどこまで戦い抜けるのかっ？皆様どうぞ、ラムザ君を応援してあげて下さいーっ！」

どっと盛大な拍手と口笛、歓声が挙がる。

アルガスが卓子に突っ伏し、頭を抱えた。

「……他人のフリしていいか？」

「今更遅いぞ」

ディリータはとっくに諦めの境地だ。

「おっと、お友達の中に魔道士の方がいらっしやる。ご声援は大いに結構ですが、”ヘイスト 加速”の魔法をかけるのは反則ですよ」

副店長はラムザの友人達に話を振った。

「あ、はい、その……」

しどろもどろしているナツシュに代わり、開き直ったガストンが宣言する。

「おう！そんなイカサマなんざしねーでも、ラムザなら実力だけで楽勝だあ！そっちこそ、最後の一枚に※”ボム 火の玉の爪”（※激辛唐辛子）がしこたま入ってるなんつう卑怯技使ってくんじゃねーぞ！」

「勿論。男の真剣勝負を、そんな姑息な罠で汚しはいたしませんよ。コメント さて。と、いうお友達の強気な評言も頂いたところで……そろそろ、戦いの火蓋が切って落とされる瞬間が近付いてまいりました。

一枚目は、皆様お馴染み、大好評の”スタンダード くだおれ亭定番焼き”であります……」

お好み焼きの大皿と、砂時計が、ラムザの卓子に運ばれてきた。

「この砂時計の砂が三度落^{みたひ}ちきる前に、六と四分の一枚の壁を！ベスラ要塞の城壁の如くそそり立つ断崖絶壁を、乗り越えてゆかね

ばなりません。

挑戦者ラムザ君、覚悟は宜しいかな？」

「はい。いつでも始められますよ」

「それでは、参りましょう……」

観衆のざわめきが一旦、しんと静まる。

「用意……始めッ！！」

砂時計が引っ繰り返された。

「……さあラムザ君、快調に二枚目も完食。

砂はまだこんなに残っております、実にいい速度ですねえ。このまま最後まで頑張ってほしいものであります。

お次は三枚目、貿易都市ドーターならではの、ラーナー蟹とバグロス蛸の夢の共演！”海鮮特撰”だあッ」

表では糸のような小雨が降り続けている。

店内は満席になり、軒下で雨宿りしている人々も、物見高くラムザを見守っている。

「ナツシュ。食うか笑うか、どっちかにしやがれよ」

「食べる方に専念……したいんだけど……」

ナツシュは肩を震わせて、必死に笑いを堪えている。

「いや、はや、豪快！爽快！それでいて、気品をすら窺わせる。

神代の勇者、二刀流の剣豪ラムゼセウスの名が相応しい——まさにそんな、大胆にして華麗なる、英雄的食べっぷりでありますっ！」

十三世紀の畏国ではまだ、突き匙は使われていない。汁物は匙で、焼き肉や乾酪、果物などは切り分けたものを小刀に突き刺すか、手づかみで食べた。

ラムザは左右の手と口を休みなく動かし続けている。

「まっ、ある意味英雄的胆力だぜ……」。

この声高な、わけわかんねー実況解説と観衆の中で、食うことだけに集中できるってなあよ」

ガストンが感心する。

「これは驚きましたねえ。信じがたい光景が眼前で繰り広げられております。この細い体のどこに、大判のお好み焼きが次々と消えていくのでありましょうかっ!？」

魔法を、いや奇跡を見ているかのようであります。畏国七不思議に、八番目を付け加えても良いほどだっ!」

アルガスが忌々しそうに舌打ちした。

「チッ……。何だって平民って奴等は、こんなバカ騒ぎが好きなんだ?」

「しっ……」

ディリータが人差し指を唇の前に立てる。

「……さあ、後半戦に突入いたしました。

四枚目は、精進潔斎中の巡礼者の方々にも安心してお召し上がりいただける”野菜万歳”^{ブラボーベジタブル}！野菜嫌いのお子様にも自信を持ってお薦めいたします。

もともと、健啖そのもののラムザ君の辞書には、好き嫌いなどという言葉は影も、形も見当たらないっ!」

見物客がラムザの友人達に話し掛けてくる。

「おい、あの兄ちゃん何者だい?」^{もん}

「いやー、あんまり大飯食らいなんで、家をおん出されたんっすよ、自分の食い扶持は自分で稼げて。ま、食う方も三人分以上っすけど、剣を持たせりゃ五人分……いや十人分ぐらいの働きは出来る奴っすね」

先に食べ終えたガストンとディリータで、適当に話をさばく。

「……これはいけるっ!記録更新の手応え充分、いよいよ最後の^{ラスト}一頑張りだっ!」^{スパート}

有終の美を飾りますは、恒例の春季限定商品^{メニュー}。色とりどりの春野菜と、菜の花に遊ぶ紋白蝶に見立てた輪切り卵をふんだんに盛り込んだ、”春爛漫”^{メリスプリング}であります。今までの一と四分の一枚分の、超大判だぞっ。

さあ食べられるか、ラムザ君、食べれば新たなる覇王の誕生だ

「っ！」

ナツシュはほとんど窒息しそうになりながら、よじれる腹の皮を押さえている。

最後の一口を喉に詰まらせてむせた、ナツシュの背中をさすってやりながら、ディリータは一時、店内の喧噪を離れて窓の外を眺めた。

(……ん?)

煙幕のように風景をかすませる小雨の中、濡れそぼった一人の剣士が足早に通り過ぎる。

それでも充分怪しい。

普通、剣士は雨に当たることを極度に嫌う。鋼鉄は勿論、腐食しづらい^{ミスリル}霊銀の剣でも、水に濡れ続ければ錆びる。革製の鎧や盾、剣の鞘なども、ふやけて変形してしまうことがある。後の手入れが大変になるのだ。

空模様のぐずつく日にはそもそも外出を控えるし、外出中に雨に遭えば、ほんのお湿り程度であってもすぐに雨宿りするものである。剣士が雨の中を歩く、というのは、余程差し迫った事情があるということだ。しかも、彼はちらちらと後ろを気にしている。

ほどなく――。

恐らくは先に通った剣士を追って、もう一人の剣士が裏通りにやって来た。

中肉中背、よりはやや背が高く、肩幅が広く、胸板も厚いようだ。^{マント}外套の頭巾^{フード}を目深に被っていたが、彼が道の両側の飲食店内の様子に目を走らせた時に、三十歳前後と思われる四角張った顔立ちを、ディリータは垣間見ることが出来た。

その顔に、見覚えがあった。

「……ウィーグラフだ」

五十年戦争末期、彼は病床のバルバネスを見舞って、イグーロスのベオルブ邸を訪問したことがあったのだ。

「なにッ? ……てことは、あいつが?」

「そう。”骸旅団”の親玉さ！」

ディリータの声と、彼が椅子から立ち上がった音は、手拍子と歓声にかき消された。

外套マントを引つ掛けて出口に向かうディリータに、アルガスが続く。
ラムザは最後のお好み焼きを八割方、片付けていた。

(急げ！)

ガストンとサーシャ、ナツシュも席を立ち、手振りでラムザを急かす。

「おおっと、ラムザ君、ここに至って更に速度ベースを上げたっ。目前に迫った勝利を確実なものとせんがため、持てる力の全てを余すところなく振り絞るーっ！」

人だかりをかき分け、少年達は扉を目指す。

「釣りはいらない！」

カウンターコインに硬貨を数枚投げ出し、ディリータが真つ先に店を出て行った。

「釣りはいらない、って……ちょっと、お兄さん！足りないわよ！」
彼にしては珍しく、焦って数え間違えたらしい。

店員が呼び止めた時には、アルガスも表に飛び出していた。

「ナツシュ、おめーが払っとけ！」

ガストンが振り向かず言い、走り去る。

「あー、ごめんなさい。今度こそ、お釣りはいらんです」

ナツシュは十ギル銀貨を勘定よりも余分に置き、サーシャの後ろ姿を追いかける。

ナツシュが扉をくぐるとほぼ同時に、観衆がやんやの歓呼に沸いた。

「やったーっ！！この瞬間、遂に、”くだおれ亭”の長い、長い歴史を塗り替えて、六と四分の一枚の壁が音を立てて崩れ落ちたっ！」

新たな覇者チャンピオン、若き英雄ラムザ君に、皆様、今一度惜しみない拍手をお願いいたします！」

質素な造りの店が割れんばかりの、拍手喝采が巻き起こる。が、ラムザは鉱泉水で喉につかえている塊を飲み下し、お絞りで手を拭くと、慌ただしく立ち去ろうとした。

「すみませんっ。急用が出来ちゃって……」

「ま、ま、つれないことを仰らず。まずは、今の喜びのお気持ちを一言」

副店長は、かなり握力の強い手で、がっしりとラムザの両肩をつかんだ。

（しょうがないなあ……）

ラムザは目で、扉までの最短経路^{コース}を計った。

「ごめんなさい！」

「えっ!？」

突然、副店長の手の中が空になった。

観衆が次々と道を空け、華奢な少年を通す。

……いや、そうではない。

人々はむしろ、ラムザの腕や肩をつかみ、あるいは前に立ちふさがって、引き留めようとしているのだ。ところが、どこに触られたともわからぬうちに、その手をかわされ、姿勢を崩され、すり抜けられてしまう。

ラムザ一人で、もしくはディリータと二人で大人数を相手に喧嘩したことも一度や二度ではない。最小限の力で複数からの攻撃をかわし続けるコツを、体得しているのだった。

無人の空間を突き進むように、ラムザはすいすいと戸口の前まで辿り着いた。

「失礼します。ご馳走様でしたっ！」

よく透る声で挨拶し、ラムザは小雨の中へ駆けていった。

呼び鈴^{チャイム}の余韻が長く尾を引いて、消える。

「……あー、えっへん。伝説を残し、少年は風のように去ってゆきました……」

ラムザⅡルグリア、彼が何者であったかを知る者はありません。

だがしかし、彼の勇姿は皆様方の胸の奥深くに、忘れ得ぬ感動と共に刻み込まれたことでありましょう。

さて！王者は玉座に就いたその瞬間から、次なる野心家達の挑戦を受ける身となる運命^{さだめ}。

次回からはとうとう、六と二分の一枚！六と二分の一枚だっ！

あくなき挑戦者^{チャレンジャー}の登場を、”くだおれ亭”店員一同、心よりお待ち申し上げますーっっ！！”

急に熱気のしぼんだ店内に、副店長の絶叫がうそ寒く流れた。

ラムザが左右を見回すと、曲がり角からナツシュが手招きし、すぐに小路に入った。

ラムザは走る。

横丁に飛び込むと、ナツシュの羽根付き帽子が一本奥の通りへ消えてゆくのが見えた。

外套マントの裾をつかんでくる物乞いの手を、手荒でないように振り払い、その後を追う。

（見失ったか？）

砂利道の路面を注意して観察すると——、三つ次の小路の入口に、小粒の真つ赤な飴玉が落ちている。

ディリータは大抵、ラムザが急に腹を空かせた時に備えて、懷や衣囊ポケットになにかしかの”エサ”を持ち歩いている。咄嗟の機転で、それを目印としてまいていったものらしい。

飴玉の目印を辿ってなお三回、角を曲がった路地裏で、ナツシュが四人の破落戸しろうつきに行く手を塞がれていた。

「えっと……通行料って、どのくらい……」

「そうさな、財布ごと置いてってもらおうか」

「そ、そんな……！」

ラムザは懷から小銭をつかみ出した。硬貨コインの中でも大きくて重さのある、一ギルや五十ガメルなどの銅貨、真鍮貨ひやうを飛礫ひやうと化して叩き付ける。

「うおっ！？」

「ぎゃっ！」

破落戸達が手首や額を押さえる。

その間に、ナツシュは一目散に路地を駆け抜けた。

ラムザも、破落戸達に足払いや体当たりをくらわせて走り抜ける。

「このクソガキやあっ！」

ナイフ
匕首や木剣を抜いて追いつがる無法者達に、ラムザは振り向きざま、もう一発ずつ” 銭投げ” をお見舞いした。

「まだ足りないか？」

指の間に一枚ずつ、計四枚の硬貨コインを挟んだ左手を油断無く構え、ラムザは破落戸達を睨む。

「……、……」

武器を取り落とした破落戸達は、腰が引けている。が、隙あらばラムザに飛びかかろうという意気込みは残っているようだ。

「遠慮なく取っておけっ！」

駄目押しの一撃を浴びて、四人の破落戸はさすがに引き下がった。ラムザはナツシュに追い付く。

何度も角を曲がりつつ南東方向に進むうち、いつしか、安っぽい、いかげんしい歓楽街に差し掛かっていた。

夕方から営業する店が多いようだが、客引きも、客もないではない。

「あらま、これがホントの水も滴る佳い男。ね、あったまってるっしょいな……」

商売柄、目が利くらしく、酒場女達はラムザを女と見間違えはしない。口々に雨宿りを勧め、袖を引く。

そうかと思うと、真っ昼間から赤ら顔をした酔っ払いが、絡んできたりもする。

「いよう、ネエちゃん、いくらだい」

ラムザは酔っ払いの鳩尾みぞおちに、容赦ない肘打ちをめり込ませた。

白目をむいて引っ繰り返った酔っ払いの足の下に、溶けかけた赤い飴玉が埋まっていた。

ラムザとナツシュは、複雑怪奇に入り組んだ小路の奥へ突き進む。ガストンが、きよろきよろと迷っていたサーシャの手を引いて走っていくのが、ちらりと見えた。

「あっ……」

ナツシュが速度スピードを上げた。外套マントと長衣ローブの裾に、点々と泥がはねる。

二つ角を曲がった所でガストンとサーシャに、更にもう一つ曲がった所でディリータとアルガスに、ようやくラムザ達は合流した。歓楽街を通り抜けて、少年達は、うらぶれた番外地の貧民窟街^{スラム}まで来ていた。

ディリータとアルガスは廃材の山の陰に隠れて、不審な二人の剣士を見張っている。

「どうやら、ドーターまで来た甲斐があったようだな」

全員が集合すると、アルガスはポキポキと指を鳴らし、物陰から飛び出そうとした。

「ちよつと待った」

ラムザがアルガスを押し止める。

「放せッ、骸旅団の親玉をとつかまえる好機^{チャンス}だぞ!？」

ディリータがアルガスの口を押さえた。

「ウィーグラフは僕らの腕が通用する相手じゃない。様子を窺って、更に跡を尾けるぞ」

気配を殺し、息を潜め、少年達は二人の剣士の会話が聞き取れる場所まで、そろりそろりと近付く。

「……知らないって言ってるだろ!」

ずぶ濡れになった剣士は感情的^{ヒステリック}に叫ぶ。

少し背の高い剣士――ウィーグラフが彼を掘っ建て小屋の壁際に追い詰める。

「嘘を言うな。お前達がやったことはわかってるんだ。

……ギスタヴはどこだ?どこにいる?」

剣士はうなだれ、ウィーグラフの鋭い眼光から逃れようとした。

「し、知らない……」

「侯爵はどこだ?どこに隠したんだ……?」

ウィーグラフは剣士の襟をつかんで絞り上げ、詰問する。

「言えッ!」

「……」

あくまでもしらを切り通そうとする剣士を、ウィーグラフは藁の案山子かしのように軽々と、ぬかるんだ地面に投げ倒した。

その喉元に剣をつきつける。

「これが最後だ……。どこだ？」

ごくりと鳴って上下した喉に、氷のように冷えた刃が当たる。剣士は尻餅をついたまま、後ずさった。

「さ、砂漠だ……」

「そうか、”砂ネズミの穴蔵”か……」

ウィーグラフは剣を収め、踵を返す。

思わず、アルガスは腰を浮かせた。

「待てッ!!」

「バカ、この……」

ガストンが銀褐色の髪をかきむしる。

「チッ、北天騎士団か」

ウィーグラフは横道に消えた。

「作戦変更だ。もう一人の男を訊問する！」

ラムザも立ち上がった。

「ああ、やむを得ん！」

ディリータ達もラムザに続き、ばらばらと表に飛び出した。

ガストンが、突き技に適した刀身の細い剣を抜く。

「おい、その奴！無駄な抵抗なんざしねーで、神妙にお縄を頂戴しな。大人しく降参すりゃ、お上にも慈悲ってもんがあるぜ」

剣士は絶望的な表情をしたが、討手がまだ少年少女であることに気付き、余裕を取り戻した。口笛の合図で仲間達を呼ぶ。

「ああん？騎士団のガサ入れかと思やあ……、」

「ケツに卵の殻くつつけたヒヨッコどもじゃねえか」

「しかも、かわゆい白兔ちゃんが二人も混じってるとくらあ」

ナッシュは沈鬱な溜め息を吐いた。

「いい加減、聞き飽きましたね……」

ガストンがラムザの指示を仰ぐ。

「おいおい、敵さんバリバリ遠隔攻撃態勢だぜ？どうする、大将」
貧民窟スラムのそこかしこから加勢に現れた盗賊達の内訳は、黒魔道士
とおぼしき者が二名、半弓や長弓を構えた射手が三名。

「ディリータとアルガスで左上の奴らを。君とナツシュで向こう
の三人を抑えてくれ。サーシャは”魔法防御”シエルだ」
ガストンは自動弓ボウガンを宿に置いてきているので、剣だけで戦うこと
になる。

「こいつの相手は僕がする」

使い慣れた長剣をすらりと抜き、ラムザは骸旅団の剣士に向ける。

「殺すなよ、みんな！生け捕って事情聴取するのが目的だ！」

ラムザは盗賊達にもよく聞こえるように、大きな声で言った。

剣士はせせら笑った。

「気の強い嬢ちゃん嫌いだやないぜ。」

おい、いいか！男ヤローどもは皆殺しだ！白兔ちゃん達には傷を付ける
なよ、後でたっぷり可愛がってやるんだからなあ」

「へっ、言われるまでもねえこった」

盗賊達は舐めるような目付きでラムザを眺め回す。

ラムザは盗賊達を睨んだ。

「どいつも、こいつも！僕は男だ。見てわからないか？」

期待を裏切られた盗賊達はいきり立つ。

「何イーッ！？だまぐらかしやがって！」

「まさか、後ろの奴もオカマなのかつ？」

サーシャは言い返したかったのだが、呪文の詠唱に入っていたの
で、無視することにした。

ガストンが薄く笑う。

「ふん、黙ってりゃいいもんを」

黙っているのは、ガストンやナツシュが集中攻撃を浴びることになる
からだろう。

「沈黙の光よ、音の波動のもたらす邪悪より守り給え。」魔法防
御シエ”！」

ディリータとアルガスは、高台の上の弓使いに向かって段丘を登り始めている。彼ら二人を除いた四人を、サーシャの魔法が包んだが、

「ありゃ」

耳に聞こえない雑音ノイズのような振動を、ガストンは感じ取った。彼には魔法が上手くかからなかったようだ。

魔法の成功率や威力は、術者の能力だけでなく、被術者の魔法に対する感受性によっても影響される。

ガストンは普段から、魔法の感受性が低く、回復魔法などの効き目が薄かった。しかし、ということは攻撃魔法への抵抗性も強いということなので、ガストンは気にせず敵魔道士達に接近した。

キインッ！カンッ……ガキイン！！

ラムザと骸旅団の剣士とは、十文字に剣を交えて鏢迫り合いになった。

身ごなしの俊敏さと、拔群バランスの平衡感覚の良さが、ラムザの剣術の特徴ではある。が、華奢な外見に似合わず、単純な力押しでも負けてはいない。

敵魔道士がラムザを標的ターゲットに定めて呪文を唱えている。ラムザを目標の中心に据えると、味方の剣士も巻き添えにしてしまうので、背中側に一步離れた地面に照準を合わせていた。

「闇に生まれし精霊の吐息の、凍れる刃に散れ！」氷撃ブリザド”！」

魔法発動の瞬間に、ラムザは牽制フエイントをかけて横に跳んでいた。ラムザが立っていたはずの地面に、水晶の結晶のような氷柱が凍り付く。

ほとんど同時に、高台の上の弓使いが放った矢がラムザの背後に迫っていた。

ラムザはこれも、僅かに身をひねるだけでやり過ごす。

ぬかるみに足を滑らせた、かと思いきや、前のめりになった勢いで平突きを繰り出す。

たたらを踏んで転倒しかけたのは、骸旅団の剣士の方だ。

（このガキ……女男のくせに……、）

恐るべき反射神経である。

「^{サンダー}雷撃”！」

上空から一条の閃光が落ちてガストンを撃った。

「くッ！」

体全体に痺れるような痛みが走ったが、ガストンの動きを鈍らせるほどではない。

自然に雷の発生するような天候条件下では、^{サンダー}雷撃系魔法の威力は強まる。しかし、ガストンの魔法抵抗性が高い上に、敵魔道士の腕前がそもそもなまくらなのだった。

「岩砕き、骸崩す地に潜む者たち、集いて赤き炎となれ！」^{ファイア}炎撃”！」

雨中では効力の半減する”^{ファイア}炎撃”でも、ナツシュが唱えれば先程の敵魔道士の”^{サンダー}雷撃”よりも強力だ。^{サンダー}雷撃系魔法の得意なナツシュが今”^{サンダー}雷撃”を使えば、一撃で相手を即死させてしまうだろう。

「あちちっ」

^{マント}外套代わりの破れ毛布を更に焦げ穴だらけにされて、魔道士はよろめく。

ガストンは飛来する矢を剣で弾き、魔道士のやせこけた、無精髭を生やした顎を、”最大限の手心を加えて”蹴り上げた。

「オラァッ！」

魔道士は吹っ飛ばされて頭を打ち、大の字に伸びた。

”倍返し”を標語とするガストンにとっては、”ほんの一・五倍程度”の反撃に留めるのは手加減したつもりのものである。

「危ないっ」

サーシャがナツシュの肩を突き飛ばした。

「わ！」

水溜まりの中に倒れたナツシュの頭上を、矢が通り過ぎた。

「あ……りがと……」

ナツシュの笑顔が引きつった。

スラム
貧民窟街の路上には、手鼻でかみ捨てられた鼻水や、痰や、生ごみ等がへばり付いている。それらが混然一体となって溶け込んだ泥水が、長衣ローブと上着を染み通って肌着まで濡らした。

その上に、もう一人の魔道士の”氷撃”ブリザドが極まる。

「うわああーん！」

スラム
貧民窟は斜面を覆い尽くして、階段状に空へと続いている。

アルガスとディリータは、壁や物陰に隠れて矢をかわしつつ、坂の上の弓使い達との距離を縮めていった。

魔道士一人を蹴り倒したガストンが、斜面の下にいる弓使いに突進してゆく。

ディリータは足元の屋根板を押さえている石を拾い、上から弓使いを攻撃した。

斜面の下の方の弓使いは狙いを大きく外し、矢は全く見当違いの土塀に突き刺さる。

次の矢を番える前にガストンが懷に飛び込んで弓の弦を斬り、手で弓使いの首の付け根を打ち下ろして、打倒ノックアウトした。

ディリータの投げた石は、雨漏りの穴を塞ぐ役目もしていたらしい。屋内から赤ん坊の泣き声と、母親の怒鳴る声がした。

「こらアツ、何するだ！」

「すまない！」

アルガスは物陰から物陰へ、隙を見計らって移動する。

ガシャーン！

アルガスのかわした矢が、薙を垂らしただけの戸口に飛び込み、

素焼きの水瓶を割った。

ディリータは壁の陰から外套マントを振った。

ヒョウッ。

矢が外套マントの裾をかすめて飛び去ると、走り出て弓使いの下腹に膝蹴りをくらわせる。

「がッ……」

倒れかかってきた弓使いを肩に担ぎ、ディリータは一段下の通りに放り投じた。

「うおっ!？」

降ってきた味方にぶつかって、もう一人の弓使いは体勢を崩し、屋根の上からアルガスの目の前に転落する。

アルガスは弓使いの首を絞めて落とした。

ラムザ達よりも長い時間、冷たい雨に打たれていた剣士は、指がかじかんでいた。並みの力量の剣士が相手ならば持ちこたえることも出来たかもしれないが、ラムザの正確な連続攻撃をしのぎきるには決定的な不利^{ハンデ}だった。

剣士の手から長剣が弾き飛ばされた。

ラムザは剣士の鳩尾を柄で撃ち上げた。

「……ッ」

剣士は声も立てず、膝を折った。

ナツシュと敵魔道士が、お互いを狙って魔法を唱え合っている。

魔道士としての修行を厳しく積んできたナツシュの方が、術の完成が早かった。

「^{ファイア}炎撃^{フレード}」!

袖口や頭巾から湯気と煙を上げて、敵魔道士は卒倒する。ナツシュの予想よりも痛手^{ダメージ}が大きそうだったが、息はしていた。サーシャが^{ケアル}回復をにかけてやれば大丈夫だろう。

呪文詠唱中の魔道士が余計な行動を取ると、術が途切れ、一から精神集中し直さなければなくなる。ナツシュよりも先に術を完成させることに賭けて、至極無防備になっていたようだ。

「みんな、無事か？」

ラムザが見上げると、坂の上でディリータとアルガスが拳を振った。ナツシュは寒さのためか、惨めさのためか、鼻をすすり上げている。

「うう……ぐすっ……」

「後でお洗濯してあげるよ」

ラムザは何故か、嬉しそうに言った。

「その家がコイツらの”ねぐら”みてーだな。兎に角、取り調べんのは中に入ってからにしようぜー」

弓使いを後ろ手に縛りながら、ガストンは顎をしゃくった。

雨が本降りになっていた。

意識のない盗賊達を縛り上げて、少年達はあばら屋の一つに運び入れた。

ドーターの貧民窟スラムは木造のことが多い。

この家は、元々倉庫の一部だったらしい石積み建物の半地下に、廃材の木の板で屋根を架けて作られていた。

ナツシュはガストンの胴着ベストとラムザの上着を借りて着替える。

「ふえっ……くしゅ！」

「ほらよ、体があつたまる薬だ。飲んどけ」

と、ガストンがナツシュに小瓶を手渡した。

「どうもご親切に……って、これ、蒸留葡萄酒じゃない！？ぼく、お酒弱いんだよ！」

「薬だ、薬！」

飲め、飲まないで揉めているガストンとナツシュを尻目に、ラムザはアルガスに尋ねる。

「こいつらの人相に見覚えは？」

「いや……。あの時は無我夢中で、よく覚えてない。だが、こんな貧相な奴らじゃなかったと思うぜ」

ディリータが部屋の片隅に、すり潰された赤褐色の粉末を見つけた。するめの足に似た干物の切れ端が、すり鉢に残っている。

「それは……！」

と、ラムザの表情が強張った。

「何なんだ？」

アルガスは、見たのは初めてだ。

「食肉草トリフイドの触手だ」

「食肉草？」

「舶来の痺れ薬だよ」

食肉草は南洋の密林の島々に生育する、食肉植物だ。ごく緩慢に

だが自力で移動することが出来、麻痺毒を持つ触手で動物を捕らえては、消化液で溶かして養分とする。

「ああ……、何年か前に、ラーグ公暗殺未遂事件で話題になったヤツか」

「……四年前さ。

ただ有機溶剤^{アルコール}で抽出しただけでも、手足が痺れたり目がかすんだりするぐらいの毒になるけど。精製すれば、ちよつとかすっただけで呼吸器や心臓まで止まってしまうほどの猛毒が出来るんだ」
ラムザは右肩を押さえた。

彼は事件の当事者だったのだ。ラーグ公の嗣子・ハールーシャを庇って毒矢を受け、その凶悪な効果を身をもって知っている。奮闘の甲斐無く、友でもあり未来の主君でもあったハールーシャを失った、苦い記憶を呼び覚まされる品だ。

「聞いたか？ ヤバかったな」

ガストンはナツシュを羽交い締めにして、強制的に蒸留葡萄酒^{ブランデー}を喉に流し込んでいる。

「んむむ……こ、これも一種、毒を盛られてるような……」

「あー？ 聞こえねーなー？」

「んぐーっ！」

ディリータが、弓使いの矢筒に入っていた矢を改めた。矢尻に、赤黒い油のような光沢のある毒液が塗られている。

「子供が拾って触ったりすると危ないな。ガストン、すまないが、矢を回収してきてくれるか」

「おう、わかった。ちやちやつと行ってくらあ」

ガストンはナツシュを放し、再び雨の中に出ていった。

「一介のコソ泥が手に入れるには、値が張りすぎる代物だ。実行犯でなくとも、侯爵様誘拐事件に関わっている連中じゃないかと思う」

と、ディリータは言う。

「事件現場に矢を残して行かなかったのは、毒を使ったことを隠す

ためだったのかな……。最初に毒矢を射かけられたのなら、侯爵様や近衛騎士団の精鋭でも満足に力を出せなかっただろう……。ラムザは唸る。

「くそっ、卑怯者どもめ……。こいつらのせいで……。！」

アルガスの胸に、改めて怒りがこみ上げてきたようだ。

アルガスは、ウィーグラフに問い詰められていた剣士に活を入れた。

「お前達が骸旅団だったのはわかってるんだ。侯爵様はどこだ？どこに監禁されているんだ？言えッ！！」

「……」

「さっきまで、お前達の親玉、^{ボス}ウィーグラフがいただろ？ヤツはどこへ行ったんだッ！？」

押し黙っている剣士を、アルガスは蹴り倒した。

「こ、この野郎！なんとか言ったらどうだ！！」

髪をつかんで引きずり起こし、拳を振り上げたのを、

「よせ、アルガス！」

ラムザが止めた。

「チッ……」

アルガスは腕組みして、尊大に剣士を見下ろした。

「いいか、よく聞け。まもなく、お前ら骸旅団を皆殺しにするために、北天騎士団を中心とした大規模な作戦が実行される。

そうだ、お前達は死ぬんだ。一人残らず地獄へ落ちるのさ。盗賊に相應しい末路だな。

だが、お前は幸せだ。ウィーグラフの行く先を教えれば命だけは助かるぞ。どうだ？」

「……オレは知らん」

再び、アルガスは力任せに剣士を蹴った。

「言葉遣いに気を付けろよ、この野郎！盗賊が貴族にタメ口利くんじゃねえ！」

床に転がったまま、剣士は呻いた。

「オレ達は……盗賊なんかじゃない」

「なんだとお！」

「貴様達貴族はいつもそうだ。オレ達を人間とは思ってない……。
オルダリーア 鷗国との戦で……この国のために……命を賭けて戦ったオレ達を

……用済みになると切り捨てた……。

オレ達と貴様ら貴族にどんな違いがあるというんだ……？生まれ
？家柄？身分って何だ……？」

「誘拐の上、身代金まで要求するお前らが何を偉そうに言うッ！！」
剣士は首を左右に振ろうとした。

「……侯爵誘拐は……間違いだ……。ウィーグラフ様の計画じゃな
い……」

「！？」

「我々は金目当てで……要人誘拐など……絶対にしない……」

ラムザとディリータは、素早く視線を交わした。

「じゃあ、誰なんだ？誰がエルムドア侯を誘拐したんだ？」

「……………」

ディリータが勿体ぶって言う。

「隠し立てはためにならんぞ。お前の目の前におわすお方はな、ド
ラコニア伯爵ダイスダーグ様と、北天騎士団団長ザルバグ様の御
弟君なんだからな」

と、ラムザの衣？からポケット霊銀の方位磁針を引っ張り出し、ミスリル黒翼の白
竜”の紋章を見せた。

「……………！！」

剣士の顔から血の気が引く。

ラムザは、照れずに真面目な顔を保とうとした。

（ディリータってば恥ずかしいことするなあ、もー……。まあベオ
ルブ家の家紋をちらつかすだけで、すんなり情報が引き出せるんだ
ったら、良しとすべきか）

実は——、ラムザは”とある可能性”を失念しているために、デ
イリータの意図に気付いていなかった。剣士の表情にディリータの

懸念したような変化は表れなかったので、この場では、二人の思惑の食い違いはあっても無くても同じことだったが……。

アルガスが重ねて問いたです。

「言え！ お前達じゃないとしたら、いったいどこのどいつなんだッ？」

ラムザは手に汗を握った。もしここでラーグ公の臣下の名前が挙がれば、それを知ったラムザ達の立場は危険になるかもしれない。

が、剣士の口から出たのは、さほど意外な名前ではなかった。

「……ギユスタヴだ」

「ギユスタヴ……？」

ディリータがアルガスに解説する。

「ギユスタヴ＝マルゲリフ。”骸騎士団”の副団長だった男だ」

「矢っ張りお前達骸旅団の仕業じゃねえか！」

剣士は座り直して、アルガスを見上げた。

「ち、違う。我々骸旅団は貴様達を倒すために戦っている誇り高き勇者だ……。ギユスタヴとは違う……！」

「何が誇り高き勇者だ？ このゲス野郎めッ……！」

アルガスは三度目に、剣士を乱暴に蹴り倒した。

「いい加減にしないか、アルガス！」

ラムザはアルガスを制止すると、冷ややかに剣士を見下ろした。

「だが、お前の言い分も説得力に欠けるぞ。」

こんな家の密集した場所で、魔法や弓矢を……それも毒矢など使って、無関係の怪我人死人を出したらどうするつもりだったんだ？

”誇り高き勇者”が聞いて呆れる」

「……」

剣士は唇をかんでいる。

アルガスが尋ねた。

「で、そのギユスタヴとやらはどこだ？」

「……す、”砂ネズミの穴蔵”だ……」

「砂ネズミ……い？」

ディリータが、また解説する。

「余所から来たアルガスにはわからないと思うが……、”砂ネズミ”はこのドーターの北に広がるゼクラス砂漠のみに生息するネズミのことだ」

ラムザもそのことは知っていたが、

「ドーターとゼクラス砂漠の間に集落なんかあったか？」

「今はないが、以前、砂漠の民の集落だった場所ならある。」

ガルテナーハ族とかいったかな。紗国戦争の頃に移住してきた東方民族が住んでいたんだ。黒死病^{ペスト}が流行した時に、暴徒の焼き討ちに遭って全滅させられた……らしい」

黒死病発生^{メカニズム}の仕組みがよくわからなかった時代には、異民族や邪教徒が井戸に毒を投げ込んだのだ……といった類の流言^{デマ}が流れることがあった。恐怖に駆られた群衆がフアラ教寺院や外国人移民村を襲う、悲惨な事件が時々起こっていたのだ。

「……ギュスタヴと侯爵様はそこだな」

ラムザは頷いて、剣士を起こした。

「それで、”金目当ての誘拐などしない”ウィーグラフとしては、この事態にどう対処するつもりなんだ？彼はどこへ行った？」

「……知らん！」

目を逸らすことも出来ず、剣士は叫んだ。

「知らないはずがあるか！さっきまで、ウィーグラフと何を話していた！？」

もう一度、アルガスは剣士を蹴った。剣士は壁に頭を打ち付け、気を失った。

「アルガス……」

ラムザは嘆息した。

アルガスは、水をかけて剣士を気付けようとしたが、ディリータが止めた。

「これ以上は、他の奴の目を覚まさせて話を聞いた方がいいだろう。」

ウィーグラフの行く先や目的については、恐らくこいつは本当に知らない」

ラムザも同意した。

「僕もそう思う」

「……!？」

「ギユスタヴがウィーグラフと対立している……という話はちらほら耳に入ってるよ。」

この男は多分、ギユスタヴの方の一味だな。さっきウィーグラフが、ギユスタヴはどこだとか責めているのが聞こえた。

侯爵様を誘拐したのがギユスタヴだと確かに知っているからこそ、ギユスタヴとは無関係の、ウィーグラフの信奉者だというフリをしたんだろう」

矢を拾い集めて戻ってきたガストンが、外套マントの水気を絞りながら訊く。

「はあ? どーゆうこった?」

「五大領主のお一人を襲ったんだ。並みの強盗・誘拐事件より段違いに厳しく処罰されるはずだよ。直接手を下していなくても、計画に加担しただけで極刑は免れないだろう。むごたらしくなぶり殺しにされた上、野ざらしだろうな」

死刑にも、罪の軽重によって違いがある。

苦しみが一瞬で済む斬首は、比較的”慈悲ある”殺し方で、貴族階級など名誉ある地位の罪人に適用された。

平民の強盗などは絞首刑が普通だった。罪の重さにより、息の根を止めるまでに加えられる拷問――鞭打ったり、焼きごてを押し当てたり、生皮を?いだりなど――の量が変わった。

グレバドス教徒にとっては、処刑後に埋葬が許されるかどうかも、大きな差だ。死後の復活を信じるグレバドス教徒は、遺体を丁寧に棺に納めて終末の日まで保存しようとする。埋葬が許されれば、処刑によって罪は現世限りで精算されたということだ。

火刑に処し、灰まで砕いて川に捨てる。あるいは、斬首・絞首刑

後の遺体を城門の外などに野ざらしにし、野獣・野禽に食わせたり、風雨に朽ちるままにさせる。……というのは、来世の復活も許さず完全に魂を抹殺するという、非常に重い処分を意味する。

「それを恐れて悪足掻きするってことは……、逆に言えば、ギユスタヴが侯爵様を誘拐したって話の信憑性は高いと見ていいだろうね」

ディリータが頷いた。

「ウィーグラフの行方は、こいつらが知らなくても問題ない。骸旅団の方針に違反したギユスタヴを叱責したり、軌道修正を迫ったり出来るのはウィーグラフ本人ぐらいだろうからな。今どこにいうと、ギユスタヴの居場所に向かうだろう」

他の盗賊の一人を叩き起こそうとするアルガスの手を、ラムザは押さえた。

「それから、アルガス。いくら相手が悪党でも、こっちが同じ次元^{レベル}まで下りて暴力的になったんじゃ、騎士らしい振る舞いとは言えないよ。どんな時でも節度を守って、模範を体で示してこそ、騎士は尊敬されるんじゃないかい」

「模範的なやり方って、どんなんだよ？それじゃ、次の奴はお前が泥吐かせてみせろよ」

「うーん……、じゃ、やってみる」

ラムザは少し考えてから、

「ディリータ、君の小刀^{ナイフ}も貸してくれる？」

「ああ、いいが……」

ディリータは小刀^{ナイフ}をラムザに渡すと、弓使いの一人を起こし、壁にもたせかけた。ラムザは少し離れた位置に片膝を立てて座り、弓使いと向かい合う。

「うう……ん？」

顔を上げた弓使いと目が合った瞬間、ラムザの手から小刀^{ナイフ}が飛んだ。「ひッ!？」

丁度首の両脇すれすれに、二本の小刀^{ナイフ}が突き立った。ラムザは革帯^{ベルト}

から棒手裏剣を引き抜いて投げ、続けざまに、両肩と両肘の服の布を壁板に縫い付ける。

「これからする質問に、正直に答えてくれるかな？」
ヒュンツ。

風を切って、また一本、鋭利な手裏剣が耳たぶの皮一枚だけ切って壁に刺さった。

「は……ハイ……」

弓使いは木偶でくのように硬直した。

アルガスが呆れ返る。

「模範的って言えるか？　こういうの……」

ガストンとサーシャも、うーん、と考え込んでしまった。

「にこやかな笑顔で脅迫されてもなー……」

「かえって、すぐまれるより怖いものがあるわ……」

捕らえた者達の話をもとめると……。

彼らは矢張りウィーグラフの指揮系統から外れて、ギユスタヴに従っていた。だが、エルムドア侯誘拐の実行犯ではない。彼らの役割は、ドーター近辺での北天騎士団や市の警備隊の動向を偵察・報告することだった。

実行犯達の三分の一ほどは、ドーターで略奪品を目立たぬよう手分けして売り、食糧や武器を調達している。

現在”砂ネズミの穴蔵”に居るのは、ギユスタヴと、実行犯達の残り三分の二、及び元々留守を預かっていた者達合わせて、三十名弱。

……ということである。

「で、こいつらどうする？　ドーター市の警備隊につき出すか？」と尋ねたガストンに、ラムザは首を横に振る。

「北天騎士団に引き渡した方がいいな」

五十年戦争終結後、市の公務員の給料が物価の上昇に追い付いていなかった。

警備隊の中にも、”袖の下”を積まれれば簡単に犯罪者を放免してしまう者や、盗賊団に機密情報売っている者がいる。

この盗賊達を警備隊に委ねるのは、ギユスタヴに逃げろと警告してやるようなものだ。

「兄さんが搜索隊を派遣していれば、ミニマム伯爵家に協力を要請しているはずだ。手紙を書くよ」

「僕と、そうだな、ガストンで届けてこようと、ディリータが使者を買って出た。」

「うん、頼むよ」

ラムザは筆箱を開け、羊皮紙の紙片に、なるべく小さな字でびっしりと羽根筆^{ペン}を走らせた。

「ミニマム伯爵家にも、ディリータの顔か僕の字がわかる人はいるはずだけど……」

「確かに、てめーの字は一遍見たら忘れようがねーな」
ガストンが深く頷いた。

「そうね、とっても個性的よね」

「こーゆうのは、ズバリ下っ手くそだって言ってやった方が傷付かねーもんだろ。てめー、恋文出す時は絶対ディリータに代筆してもらえよ？」

因みに英雄王ディリータの筆跡は、後世習字の手本になったほど、機械的なまでに整っていて美しい。

「どうせ僕の字は金釘流だよー」

「あら、下手じゃないと思うわよ。几帳面で、読みやすい感じよ」

「と、とにかく……これを持っていけば、確実な身分証になるよね」

ラムザは書き上げた手紙に、家紋の入った方位磁針^{コンパス}を添えて、ディリータに預けた。

「便利だな。そいつを見せれば、ガリオヌ領内どこの店でもタダ食いし放題とか……」

とアルガスが言うと、ラムザは大きく手を横に振る。

「してないって、そんな、ベオルブ家の評判を落とすようなマネは！」

ディリータはラムザの手紙と方位磁針コンパスを懷に収めた。ガストンも外套マントを被り直す。

「よし、行ってくるぜ。ナツシュ、”加速”ヘイスト かけろ！……ありゃ？”ナツシュはぐったりと床に伸びていた。

「あれっばかしで酔っ払っちゃったのかよ？ なっさけねー奴だなー」
「だから、お酒弱いんだって言ったじゃないか！ それが、無理矢理飲ませた人間の言うこと……？」

爪先でつついてくるガストンを、ナツシュは恨めしげに見上げた。

「ここはあたしに任せて、”先生”！ 今こそ特訓の成果を見せる時ね」

と、サーシャが櫛オークスタップの杖について立ち上がった。

「え？」

「あたしも”加速”ヘイスト 使えるようになったの。空き時間に、ナツシュ君に指導コーチしてもらったのよ」

「ああ……、なーんか二人でコソコソしてやがると思ったら……」

「コソコソしてたわけじゃないよ。精神の集中を乱されないように、静かな所で練習してたんだってば」

ディリータが言った。

「そいつはいい。早速頼む」

サーシャは櫛オークスタップの杖を構え、落ち着いてゆっくりと呪文を唱えた。

「翻りて来たれ、幾重にもその身を包め……、”加速”ヘイスト！」

ディリータとガストンはその場で足踏みし、調子確かめる。

「どう？」

「ああ、いい具合だ」

二人は雨の中に走り出ていった。

”加速”ヘイストの魔法の力を借りても、北側の高級住宅地にあるミニマム伯爵邸へは、往復する時間だけで※一刻（※約三十分）はかかるだろう。

「どうしましょ、悪酔いにも”浄化”^{エスナ}って利くんだったかしら……。でも、酔いが醒めたら今度は体が冷えちゃうかしらね……？」
気持ち悪そうにしているナツシュの頭を、サーシャは膝に乗せた。

「少しは楽になる？」

「う、うん……大分……」

ナツシュはもじもじして、照れ隠しにラムザに話し掛けた。

「あ、あのっ、ドーターに来て良かったですね！ぼく達、大手柄じゃありませんか」

「そうかな？むしろ、エルムドア侯や兄さん達を追い詰めてしまったかもしれないよ」

ラムザは窓の枠に寄り掛かり、浮かない顔をしていた。

「え……？」

「侯爵様の居場所を突き止めたのはいい。でも同時に、僕らが侯爵様の居場所を突き止めただろう……ということのをウィーグラフに知られてしまった。彼は、次の行動を急ぐだろうな」

「行動……というത്？」

「それなんだよ。ウィーグラフなら、侯爵様をどうするだろう？」

アルガスが言う。

「不本意だろうが何だろうが、軍資金が増えて困りはしないだろう？ギユスタヴの懷を膨らますはずだった身代金を、骸旅団全体の活動資金にする——ってどこじゃないか？」

「その可能性は薄いと思う。」

ザルバッグ兄さんも仰ったように、ウィーグラフは今まで身代金なんか要求したことはない。逆に、いくらお金を積むと言われても容赦なく貴族達を処分してきたぐらいなんだよ」

「……！ま、まさか侯爵様も……！？」

「わからない。エルムドア侯は決して、評判の悪い領主様じゃないだろう。ウィーグラフはそもそも、そういうお方に手出したことがないからね……」

あるいは、交換条件を何か政治的要求に切り替えてくるかもな。

たとえば、今捕まっている団員の解放とか、包囲されつつある拠点からの騎士団の撤退とか。

何とも……、推測の域を出ないのがもどかしいけど……。何にせよ、金目当ての一分派にすぎないギスタヴを相手にするより、ウィーグラフが侯爵様の身柄を掌握した方が、救出が難しくなるのは間違いないだろう」

ラムザは雨戸の破れ目から、黒雲に閉ざされた空を見つめた。

「この雨が上がれば、兄さん達もきつとすぐに動き出す。これ以上は、僕らの出る幕じゃないな」

アルガスは立ち上がった。

「そんな！いよいよこれからじゃないか！」

「だからこそ、素人が引つ掻き回すのは危ない。こっちの動きに勘付かれて逃げられたり、警戒が厳重になったりすると厄介だ。

侯爵様の消息をつかんだだけで、もう僕らは十二分な仕事をしたよ」

「それだけじゃ不十分なんだ！オレのこの手で奴らをとっちめて、侯爵様をお救いしなけりや意味がないんだ！」

「アルガス。侯爵様の御身の無事が最優先だろう？」

「……っ」

眉根と鼻の頭に皺を寄せ、アルガスはどっかと胡座をかいた。

「わからねえだろ！お前みたいな、名乗るだけで一目置かれるような家に生まれた奴にはよ。物心ついた時には自分の名字が裏切り者の代名詞みたいになってた、オレの気持ちなんか！」

十四人いた一行の中で、侯爵様以外にたった一人だけ生き残って……手ぶらでのこのコランベリーに帰ってみろよ。絶対、オレが侯爵様を売っ払ったんだらうって思われちまう。

いつも、そうなんだ。何かあると真っ先に疑われる。『あの裏切り者の孫ならそのぐらいやりかねん』って、みんなそういう目でオレを見る！

オレ自身の手で奴らに引導渡してやらないと、潔白を証明出来な

いんだ！」

ラムザは微笑んだ。

「わかる……と言ったらおこがましいだろうけど。全くわからなくは、ないと思うよ」

雨に濡れた黄金色の髪を指で梳りながら言う。

「ほらさ、僕のこの髪と眼の色。父さんにも、兄さん達の母上だったマリソーフィア様にも、全然似てないんだ。

庶子だって看板ぶら下げて歩いてるようなものだからね。何かあると、そう、いつも言われるよ。『矢っ張り妾の子は』ってさ。

だけど、みんながみんなってわけじゃない。母さんのこと知ってて、僕を応援してくれる人もたくさんいる。

僕は、そっちの方が大事なことだと思ってるよ。

アルガスが侯爵様をお助けしようとして頑張ってきたことは、少なくとも僕らは側にいてよく見てきたよ。それだけじゃ足しにならないかな」

ナツシュがサーシャに膝枕されたまま、大きく首を縦に振った。

「そうだよ。アルガス君を疑う人がいたら、ぼく達が証言してあげるって」

秋の空のように澄んだ碧い瞳をアルガスに向けて、ラムザは話す。

「僕はさ、自分の髪と眼が栗色だったら良かったと思ったことは一度もないよ。

誰が何と言おうと、母さんの血を引いてることは僕の誇りだ。

いつか逆に、『あのラムザの母さんなら卑しい人だったはずがない』って思われるぐらい、僕が立派な騎士になればいいんだと思う。アルガスもさ。結果を焦らないで、気長にいこうよ。そのうちきつと、『あのアルガスのお祖父さんが悪い人だったはずがない』って言われるようになるともさ」

ラムザはもう一度にこりと笑うと、また、降り続く窓の外の雨を眺めた。

「後のことは兄さん達にお任せして、僕らは宿で待とう。

大丈夫。ザルバッグ兄さんが必ず、侯爵様を無事に助け出して下さるから……」

ぶ厚い雨雲が、絶えず形を変えながら、途切れることなく東へ押し流されてゆく。

雨は当分の間、止みそうになかった。

（矢っ張り、お前にゃわからねえよ）

ラムザの穏やかな横顔を見ながら、アルガスは胸の中で独りごちる。他人から蔑まれることも辛い。だがアルガスにとってもっと辛いのは、いつまでも半信半疑で、心に確かな拠り所を持ってないことなのだ。

結局の所、祖父は裏切り者だったのか……？それとも、無実だったのか……？

焚き火の番をした時ガストンに言われたことぐらい、アルガスはとっくに自分で考えた。どちらかに思い切れるものなら、悩んではいない。

だが、どちらか一方に気持ちが傾く度に、それとは反対の証拠や証言が新たに出て来て、また揺り戻される。今まで信じかけていた人や考え方を、疑い直すことになるのだ。

誰を、何を信じればいいのかわからない不安――。

両親を揺るぎなく信じていられるラムザや、そんなラムザを誰が信じなくとも信じると言い切れるガストン。彼らのように単純明快になれたら、どんなに生きやすいだろうと思う。

何か一つでいい、確かに信じられるもの、誇れるものが自分にもあったなら――。

自分の家柄が誇れるものだと思いたい。あるいは、アルガス自身が武功を立てて地位や名声を獲得し、確固たる自信を持てれば、血筋など気にしなくて済むのだろうが……。

祖父のことは、”過去の問題”ではない。

祖父を信じると言いながら詳しい話をしたがない、父のことも

信じがたくなる。一番身近な、数少ない味方であるはずなのに。

そしてまた、心を決めきれない自分自身のことも、判断力が足りないのではないかと、意思が弱いのではないかと、自信が持てなくなってくる。

唯一人、一度も疑うことなく信じてきた人の命は、理不尽に絶たれた。

（オレ、絶対に手柄を立ててみせるよ。見てくれ！）

服の上からそっと、形見の数珠ロザリオに手を置き、アルガスはその人の面影に誓う。

小降りになった雨の下、数人の騎士達が、貧民窟街スラムに建つ一軒のあばら屋に踏み込んだ。

それを見届けて、人一人やっと通れる幅の裏道から、六人の少年少女達が去ってゆく。

その様子を、※半里セクタ（※約三八〇メートル）ほど離れた歓楽街の一角から、遠眼鏡で観察している者があった。

「ふん、あれか？オヴェリアお姫さんの婿がねとかってえのは」
四十才前後の男だ。年の割には、顔や手に刻まれた皺が深い。への字に結ばれた薄い唇が笑うと、そのつもりは無いのかもしれないが、皮肉っぽく見える。

「聞きしに勝る優男だな。どこぞのキザ野郎が引き合いに出されるわけだ。ま、奴さんやつしとその道で向こうを張るにゃあ十年早いかな？どっちかって言やあ、あの姉貴べつたり甘シスコンったれ坊やの方といい勝負だろ、色んな意味で。……おっと、」

男は、卓子テーブルで香草茶をすすっている相棒を、顔だけで振り返った。「団長殿にチクるのは勘弁してくれよ。あれで存外、子煩悩らしいからなあ」

「……」

年は同じく四十才前後、頬のこけた、陰気な男である。屋内で他に人もいないというのに、頭巾フードを脱がず、暗い鋭い瞳を隠していた。

「……、へっ」

窓辺にいる男は、唇の片端を引きつらせた。

相棒が私語を全くしないのを、退屈なのを通り越して、不気味に思うことがある。

「で、どうする？消すのは難しくねえが、ただの草と違^{スパイ}って後始末が面倒だぜ」

男は左手に持った遠眼鏡でトンと肩を叩き、右手を、腰に吊り下げた武器に伸ばした。

筒に持ち手が付いたような形の、この珍しい武器――”銃”も、遠眼鏡も、機工士達が復活させた古代文明の利器である。

「捨て置け」

と、抑揚に乏しい声で相棒の男が言った。

「あん？いいのかあ？北天騎士団の手柄にさせるのがやべえから、わざわざウィーグラフ焚き付けたんだろが」

「構わん。ザルバッグにしろ、あの半人前にしろ、侯爵誘拐を仕組んだ者の意図とは別個に動いている、ということだ。

エルムドア侯が生きてさえおれば、”戦力の調節”の仕様はある。今は、我々の存在を気取らせぬことの方が肝要だ」

「”二頭の獅子”には互角の潰し合いをしてもらわにやらねえ。どっちみち、あの小僧だって”余分な駒”の一つなんだろ？」

黄金色の髪ベランダの少年が歩いてゆく小路の半ばに、今にも崩れ落ちそうな傾いた露台ベランダが張り出している。

男は遠眼鏡を銃に持ち替えようとした。

「バルク、自重しろ」

と、相棒が言った。

「心配しなさんな。どっかの剣術狂いの坊やじゃねえんだ。直接狙うもんかよ」

「まだ余分と決まっていはいない。オリナスをゴルターナ公が取った時は、オヴェリアはラーグ公の手に残す。あの儒子こしやうにもそれなりの出番があるやもしれぬ」

「ふん……」

バルクと呼ばれた男は、小憎らしげに、少年達の姿を遠眼鏡で追える所まで見送った。

春秋に富む、端麗な容姿に恵まれた大貴族の御曹司に、この冴えない骨張った顔立ちの男は、生理的な嫌悪感を覚えたようだ。あるいは、それは羨望の裏返しなのかもしれない。

「ところで、ローファルよう」

屋根の列を二つ飛び越した酒楼で、怖いもの見たさに窓際に顔を並べて囁き交わしている舞姫達を、バルクはぎょろりと睨みつけた。キャツと笑いさざめいて、化粧の濃い娘達は控え室の奥に引込む。

「なんぼ地の利があるんだか、出張経費削減のためだか知らねえがよ。」

男二人で連れ込み宿に泊まり込んでもいいと思うんだが？」

「……」

ローファルと呼ばれた相棒は無表情だ。

そのようなことに頓着しない男らしい。

「トリフィド」は子供の頃読んで怖かったSF小説の化け物です。FFシリーズのモンスターだとかえって、毒の効果のイメージ等合わないかと思ひ……。 （後で差し替えるかもしれません）

このシーンの敵剣士の言動は矛盾している（ギユスタヴのことでウィーグラフに問い詰められていながら、アルガス達に訊問された時にはギユスタヴの仲間ではないと言う）ので、どっちサイドの人間と見るべきか迷いました。が、ラムザに言わせたように、街中で遠隔攻撃チームは感心しないので、ここはギユスタヴ側の小悪党として描きました。

？-3- 「4」 宿屋にて ？ラムザの特技

「……つくしゅん！」

ナツシュは暖炉の前に椅子を引きずってきて座り、燃え盛る炎に手をかざした。

「大丈夫？ 今、窓を開けたら寒いかしら？」

雨が小止みになったので、換気と明かり取りのためにサーシャは雨戸を開けようとしたのだが、振り返って心配そうにナツシュを見た。

「ん、大丈夫……。お風呂に入って温まったら、大分良くなったよ」

ナツシュは、ベオルブ邸で借りてきたラムザの服に着替えている。魔道士の長衣ローブは他の少年達の外套マントや上着と一緒に、縄ロープに掛けて干しているところだ。

そろそろ※処女ヴァーゴの刻に差し掛かる頃で（※午後四時頃）、窓を開けても室内は薄暗かった。サーシャは燭台に火を灯す。

「薪、追加で買ってきたぜー。ついでに体のあったまる物もんもな」

風呂場から戻ってきたガストンが、足で部屋の扉を閉めた。両手は薪の束と、片手鍋でふさがっている。

「……お酒じゃないよね？」

「生姜檸檬水ジンジャーレモネードだっつーに」

ガストンは鍋の底で軽くナツシュの頭を叩いてから、暖炉の火にかけ、よくかき混ぜて蜂蜜を溶かす。

「あいつ、変わった特技持つてるな……」

よく水気を拭いた剣や小刀ナイフ、棒手裏剣を並べて乾かしている寝台ベッドの端に腰掛け、アルガスはぼそりと呟く。

「ああ……。珍しいよな、騎士で※術ひょう（※手裏剣投げ）が得意なんて奴は。あいつのお師匠さんの方針が独特ユニークだったみてーだ」

ラムザとデイリータがドラコニア城に住んでいた頃の剣の師は、

老剣客ケルガーである。

”無冠の英雄”、”騎士よりも騎士らしい勇士”と呼ばれた、伝説の傭兵だ。

貧しい騎士の家の三男に生まれ、騎士見習いとしての修行は積んだが、実家の財力では長男以外が騎士になることは出来なかった。そこでケルガーは、己の力を認め騎士に取り立ててくれる主君を探して、畏国各地を巡る武者修行の旅に出た。
イヴァリース

数々の武術大会での優勝や、盗賊・魔獣討伐など、武勇譚は枚挙にいとまがない。
モンスター

しかし流浪の旅を続けるうちに、ケルガーはいつしか、僅かばかりの地位や封地を得るよりも、自由な立場で力持たぬ者達の役に立ちたいと望むようになった。『騎士道そのものが我が主』と公言し、主君を持たず、あくまでも一介の剣士として強きを挫き弱きを助ける道を選んだのだ。

生活の糧を得るためには傭兵として雇われることもあったが、騎士道にもとる仕事はいかなる報酬を約束されても引き受けなかったという。逆に、貧しい農民達のためなら、椀一杯の豆粥の恩に報いて命を掛けることもあった。

弟子の数は多くはないが、いずれも強い、名のある剣士になっている。

そんなケルガーも戦場での負傷が元で右足が不自由になり、ひっそりと隠居生活を送っていたのであるが、バルバネスが探し当て、切に乞うてドラコニア城に剣術指南役として迎え入れた。ラムザが七歳の頃のことだ。

最初に会った時、ケルガーはラムザの骨格や肉付きを確かめて、――三の若君は成人なさっても、兄上様方ほど逞しい体格にはなられませんな。

と、きっぱりと言い、バルバネスとラムザを落胆させた。

が、すぐに頼もしく付け加えた。

――だからと申して、兄上様方よりも強くなれないということでは

ございませんぞ。

ケルガーがラムザに徹底して教えたのは、”小さな力を大きく活かす”ことだった。

無論、基礎体力を鍛える必要はある。だが、単純な力任せの戦い方では、華奢な体付きのラムザにはすぐに強さの限界が来てしまう。腕力だけで剣を振ろうとしてはならない。足腰や背中など、全身の力を剣に載せること。自分の体や剣の重心移動によって、重力や遠心力を利用すること。

また、自分一人の力だけでなく、対戦相手の力や、味方の力、地形や気象条件などの自然の力も上手く使うこと。……等々。

ケルガーはしばしば、平らな石の床の大広間や、芝生の運動場だけでなく、様々な場所で剣の稽古をさせた。野原や林、川原、沼地。狭い橋や階段、舟の上……。また、夜の月明かりの下や、雪や嵐の日に敢えて屋外に出ることもあった。

ラムザは初め、それを”いついかなる状況でも戦って勝つための練習”だと思っていた。

が、そうではないとケルガー師は言う。”戦ってはならない時と場合を見極めるための練習”だというのだ。

夏のある日、ラムザはケルガー師の留守の自習中に熱中症で倒れ、嚴重注意されたことがある。素振りの連続回数 of 自己記録に挑戦するうちに、夢中になって、気温の上昇や喉の渴きを見無視していたのだ。

——真夏に水の補給を怠れば、命に関わることもございます。我慢でどうにかなる問題ではござらぬ。仮に、ラムザ様お一人は修行して我慢できるようになられたとして、兵士達や韋駄鳥チヨコボも同じように我慢できると、そうすべきだとお考えになりますか。

ケルガー師に言わせれば、”ありとあらゆる状況に対処する”ことなど不可能である。それよりも、戦いやすい条件、戦いづらい条件とはどのようなものかを知り、なるべく不利な状況に陥ることを避け、有利に戦えるように心掛ける方が現実的だ。

例えば、個人であれば、夜や荒天時に見知らぬ場所ですら一人にならないよう気を付ける。軍隊であれば、水や糧秣の補給をおろそかにしないことや、伏兵や罠を仕掛けられやすい、川を渡ったり狭い山道を通ったりする時は、念入りに偵察した上でなるべく速やかに通り抜けること、といったことなどだろう。

武人に忍耐力は必須の素養であるが、

——根性などと申すものは、いわば最後の砦。始めから頼ってしまつては後がござらん。

一歩間違えば怯懦とも取られかねない教えである。が、五十年戦争も末期を迎え、無謀な作戦が増えて、とかく気合いだの愛国心だのが強調されるようになっていた時代だ。バルバネスは、いたずらに精神論に走ることなく合理的に勝利を追求する姿勢を、学ばせなかったのだろう。

”どんな状況でも勝つ”のは無理としても、技の幅を広げ、様々な状況に柔軟に対応出来るようになるに越したことはない。

ケルガーはラムザに、剣、槍、素手による組み打ち、弓などの武術をまんべんなく修行させた。その中でも、騎士見習いが学ぶには異色だったのが、足技と？術である。

”騎士”というぐらいで、戦場や槍試合では韋駄鳥トナメントに騎乗して戦うのが基本であるから、足技が役に立つ場面は少ないはずである。

が、後方とても治安が悪化している上、生まれの問題からラムザには”敵”が多い。街中で私闘に巻き込まれたり、曲者を捕らえたりする時など、剣を抜かずに事を収めたい場面では、組み打ち術——特に足技が大いに有効だ。

脚の方が腕よりも間合いが長く、筋力もずっと強い。しかもラムザは、平均的な比率よりも脚が長めで、関節も柔らかかった。この長所を伸ばさぬ手はない。

足腰の筋力の鍛錬にもなったし、——あまり誉められたことではないが——幾度も喧嘩を制する決め手になってくれた。

手裏剣は弓矢に比べると射程が短く、打撃も小さいが、咄嗟の時

の牽制などには便利だ。しかしそれ以上にケルガー師が重宝したのは、野戦や野宿の時に小動物や鳥を仕留め、飢えをしのぐ手段となったことだそうである。

——先生！それって、密猟じゃありませんか……？

——そうとも申しますなあ。領主殿の館か教会に寄る機会があれば、許しは乞いましたよ、ははは。

当時のラムザは、よもや自分がいずれ師と同じ道を歩むことになろうとは思ってもよらず、従って、実際に？術の技で食いつなぐ日のことも想像だになかったが……。

ラムザはケルガー師を慕って、どんな稽古にも熱心に励んだ。華奢な体付きにも関わらず、師がドラコニア城を去った十一歳の頃には、既に大人の城兵達でも容易に勝てぬほどの戦士に成長していたのだ。

”強引な力押しだけで物事を解決しようとするな” ”どんなものや技にも使いどころはある” といった考え方は、武術のみならず、日常の生活態度においてもその後のラムザに大きな影響を及ぼしたといっているだろう。

「ケルガー？ 無冠の英雄」ケルガーが先生だったの！？ すっごい……！！」

ナツシュは緑の団栗眼をまん丸にして感嘆したが、アルガスは鼻の頭に皺を寄せた。

「騎士の位も持たない流れ者だろ。ラーグ公爵家とベオルブ伯爵家の跡取りの師匠としちゃ、品がないんじゃないか？」

当時から、そのような批判はあった。が、

「品で戦に勝てるもんだったら、ベスラの決戦で、王族のクロード伯の代わりにラーグ公が大将になる必要なんざなかったらうが」

バルバネスがケルガー師を説き伏せたのも、その点だ。ラムザも、そして故あってラーグ公の長男のハールーシャも、家格だの血筋だのと言っては支持を集められない身だった。実力——それも、軽蔑

され過小評価されがちなことを見越せば、並外れた實力を示すことでしか、立場を確保できない。

「それで、ケルガー師って、今もドラコニア城に住んでらっしゃるの？」

「いや。生き別れの家族の消息をつかんだとか何とか言っ出てって、その後連絡がなくなっちゃったんだよ」

「えー……！ 行方不明者の搜索ぐらい、ベオルブ家の情報網で出来たんじゃない？」

「それが、詳しい事情を話したがいなかったみたいだぜ。……隠し子とかじゃねーか？」

サーシャが楽しそうに言った。

「ケルガーの恋人”って、謎に包まれてるのよね！」

若い頃のケルガー師って、それはそれは男前で、モテたそうよ。なのに想う人がいるとかで、とうとう表向き結婚しなくって……。

だけど、具体的にその想い人が誰だったのかわかってないのよ。

一カ所に縛られるのが嫌で口実にしていただけで、本当はそんな人いなかったんだ、って説もあるし。夫ある身の貴婦人だったって説もあるし……。諸説色々だけど、どれも確証は無いのよ。真相がとっても気になるわ」

「サーシャってホント、そういう話好きだね……」

アルガスはつまらなさそうに、苛々と頭を掻いた。

「有名人の噂話ゴシップなんかに興味はねえよ。だいたいオレが変わってるって言ったのは、手裏剣投げよりも、あっちの方さ」

と、縄ロープに吊り下がっている服を指差した。

アルガスの上着もナツシュの長衣ローブも、泥染み油染みが綺麗さっぱり洗われ、きちんと皺を伸ばして干されている。ラムザが洗濯してくれたのだった。

「火の玉の油の汚れを油で浮かせてから洗うなんて、高等技術テクニクだよねえ」

と、ナツシュが感心する。

「ラムザ君って、お風呂とお洗濯が大好きなのよ。清潔男子よね」

正確には、ラムザが好きなのは石けんの匂いなのだった。

クレリック 神官医だった母のファティマは、常に衛生管理に気を遣っており、イヴァリース 畏国の標準的な――いや、裕福な家庭よりもずっと、頻繁に石けんを使っていた。

こと入浴と洗濯に関してだけは、マンダレーナ村の母の許にいた頃の方が、ドラコニア城やイグーロスの城下屋敷で暮らすようになってからよりも”贅沢”をしていたぐらいだ。

イヴァリース 畏国の気候は穏やかで、温度・湿度が極端に高くなることはなく、あまり汗をかかずに済む。降水量はライオネル領とガリオンヌ領でやや多いが、河川の水量も豊富ではない。そのためか、十三世紀当時の畏国では、入浴も洗濯も日常的な習慣ではなかった。

沐浴というと、湯治などの医療行為か、宗教的な儀式としての禊ぎなど、特別な機会にしかしない者が大半だった。衣類は、肌着などは麻製、富裕層は上蓮国や雅国から輸入される上質の木綿織物も愛用したが、上着や外套などはしばしば、水洗いに向かない羊毛のフェルト不織布で作られていた。

だが、腕白坊主のラムザは日々、ありとあらゆる種類の汚れをくっつけて家に帰った。泥や、池の沈殿物。ヘドロ草木の汁、虫の体液、動物の糞。鼻血に、食べこぼし。油に、煤に、白墨に……。夕食の前に服と体を洗わない日の方が珍しかった。

ファティマも洗濯は好きで、一日に一度や二度なら、笑って洗ってくれた。が、三度目ともなると、

――自分で洗ってきなさいっ！
と、洗濯板と石けんや重曹を持たされ、小川に近い裏口からつまみ出されたものだ。

おかげでラムザは七歳にして既に、大抵の染み抜きマスターの技を習得してしまっていた。

まだ自分の複雑な立場を知らず、思い悩むこともなく、デイリー
タや妹達、村の子供達と日がな一日屈託無く遊び回っていられた頃
のことだ。ラムザにとって石けんの匂いは、満ち足りた幼年時代の
思い出と分かちがたく結び付いているのだった。

ドラコニア城に上がってからラムザは、ちよくちよく自分で洗
濯をした。

伯爵家の御曹司のすることではない、とよく言われたが、ラムザ
には丁度良い息抜きなのだった。器用とは言い難い手先に意識を集
中させ、無心に泥汚れや汗染みを落としていると、もやもやした気
分も一緒にすっきりと洗い流されるような気がした。

初めての狩りで小野豚に止めを刺し損ね、返り血にまみれた後も。
つい先日、ガリランドの街で初めて人を斬った後も。自分の手で血
の染みを洗っているうちに、胸騒ぎが鎮まり、気持ちの整理が出来
た。

少し疲れた時、石けんの匂いに包まれていると心安らぐ。特に、
香草の精油エキスを練り込んだ薬用石けんの匂いは、母が側にいて励まし
てくれているようで、元気が出た。

だが、それだけのことだ。

石けんと香草ハーブの匂いの中は、懐かしい、時々帰りたい場所ではあ
っても、いつもいたい場所ではない。ラムザはもう、血と汗と砂埃、
鋼と革と韋駄鳥チヨコボの飼い葉などの匂いの立ちこめる、騎士の世界の片
隅に身を置いている。

もしも、石けんの匂いに浸って抜け出したくなることがあれ
ば、その時は、剣を捨てて自分も神官医クレリックにでもなるべきだろう。
しかし今のところラムザには、そのような時が来るとは考えられ
なかった。

「週末毎に露台ベランダに洗濯物かかってっから、最初は、”世話女房”
のデイリータの奴が洗ってやってるもんだとばかり思ってたんだ
がよー」

遅れて風呂場から戻ってきたディリータが、眉をひそめた。

「誰が”世話女房”だ」

「そんなく、見捨てるの？一生側で僕を支えるって、誓ってくれたじゃないか！」

と、ラムザは隣で泣き真似をする。

「そいつは軍政面せいせいめんの話だ、バカ」

ディリータはラムザの金髪頭をコツンと叩いた。手拭タオルいで水気を拭いただけで、まだ櫛も通していない洗い髪だ。

「ねえねえ、また三つ編みにさせてもらってもいい？」

と、サーシャが訊いた。

「うん、いいけど……。他人ひとの髪編むのって、そんなに楽しいもの？アルマも、帰省する度に僕の髪結ヘアセットいしたがるんだけどさ」

「楽しいわよ！ラムザ君の髪、サラサラで指通りがいいんだもの。どうして、洗った直後なのにパサついてないの？」

「石けんで洗った後に、ちょっと林檎酢を付けたんだよ」

サーシャはラムザを丸椅子に座らせ、後ろの寝台ベッドの端に腰掛けて、髪を梳かす。

他の四人の少年達は、卓子テーブルを囲んで長椅子や丸椅子に座り、温めた檸檬水レモネードを飲んだ。

「ところで……、俺も平民は嫌いだぜ」

と、出し抜けにガストンがアルガスに話し掛けた。

「ガストン……！？」

ラムザはガストンの真意を計りかねた。

(つづく)

？－3－〔4〕 宿屋にて ？ガストンの弟

「デイリータから話は聞いたぜ。

俺だって、蹴飛ばしてやりたくならあな。貴族っていや、『自分ら平民を食いもんにして、のうのうと結構な暮らしをしてる』……とかっつー目で見てる奴。

何にもわかつちやいねえくせに……」

ガストンは檸檬水^{レモネード}をちびちびと飲みながら話した。

「俺はなー、士官学校^{アカデミー}の給食が質素だと思える奴らが羨ましいぜ。俺ん家の麦粥^{オートミール}なんて、あれの三倍は薄いんだからな。

客が来てる時とか、祭りで村の連中に振る舞う時とかにゃ肉だの甘いもんだのも出すが、普段食ってるもんなんざ周りの百姓の家と変わんねえよ。百姓ん家の方が、採れたての卵とか食える分マシなぐれーだぜ。

お前んとこだって似たよーなもんだろ、サーシャ？」

ラムザの金髪を梳かしながら、サーシャは頷く。

「……そうね。薪や蠟燭^{いえ}だって、実家ではぎりぎりまで我慢して使わないわね」

ラムザは胸に、いや、腹に手を当てた。

「毎食三人前以上平らげてる身としては、肩身が狭いなあ……。今日の昼御飯みたいなのは特別だよ。これでも、いつもは腹八分目のつもりなんだけど……」

サーシャは笑った。

「節制してもそれだけなら、もう、ラムザ君にはそれが神様のお決めになった”適量”なんですよ。少なくとも、食べ物^{食べ物}を無駄にしている^{はい}ないわよね。自分のお皿のものは、菜っ葉一枚、豆一粒だって食べ残さないじゃない」

ガストンが話を続けた。

「別に、俺らが贅沢するために年貢上げてんじゃねーぞ。騎士の側

だって滅茶苦茶な人員削減リストラされたり、恩賞減額カットされたりしたんだぜ。

今かさんでるのは、オルダリア鷗国への賠償金とか、外国からかき集めた戦争借款の返済とかだろ。それに、戦争中に傷んだ橋とか道路とか、港とか粉挽き小屋みてえな公共設備修理の経費じゃねーか。

そんなん、誰が政権取ったって減りやしねーよ。ゴルターナ公でも骸旅団でも、やれるもんならやってみやがれてんだ。

『俺ら貧乏貴族を食いもんにして、のうのうと結構な暮らしをしてる』のは、平民の商人や金貸しの方じゃねーか？

ディリータが相槌を打った。

「そうかもしれんな。」

今は、外貨を稼ぐために飢餓輸出の状態になっている。靈銀ミスリルや石炭のような鉱物資源、麻織物のような工業製品だけでなく、穀類や葡萄酒ワインのような食料品まで……、売れる物は何でも、自国で不足している物でも売らざるを得ない。

国内でも、田舎と町の間で同じ現象が起きている。騎士達が戦時中に作った借金を返すために、一斉に農作物を換金しようとしたから、値崩れしてしまった。それだから一層、多く売らなければ現金を用意出来ない……。

だからといって、町の物価が下がってるわけじゃない。商人達は買い叩いた食料品を、品薄になる時まで蓄えておいたり、より高く売れる余所の国に売ったりするからな。ライオネル領のルドヴィッヒ子爵などは、そうやって稼いだ利ざやで遂には爵位を買い取った、成り上がり者の商人だ」

ラムザは言う。

「ドラコニアでは、麻の栽培を奨励しているんだ。飢えにつながる、食料品の換金を避けるためにね。年貢の一部を麻糸で徴収していて、穀類が不作の時とか臨時に戦費が必要な時とかは、糸の割合を増やして調節してるんだよ。」

糸なら紡ぎ貯めておけるし、綺麗な織物にすれば付加価値が付いて、原料そのままよりはるかに大きな利益を生むからね」

麻織物をドラコニアの特産品に育てたのは、ラムザの祖父・カルダックである。呂国^{ロマンダ}旧教派の修道院を誘致して、染色や機織りの技術を向上させたのだ。事業を継承した”着道楽”の三女・エストレーラは、”歩く広告塔”でもあった。

——いいこと？あなた達にはカワイイ格好する義務があるのよ！ドラコニアの産業発展のために、しっかり売り込んでらっしゃいと、しょっちゅうラムザとアルマに新しい服を仕立ててくる。

が、麻織物の宣伝は口実で、エストの着せ替えと舞踏会^{パーティー}好きは絶対に個人的な趣味だ、とラムザは思う。舞踏^{ダンス}の苦手なラムザは、何度もエスト伯母を避けて城から脱走した。

「賠償金は安かねーよ、そりゃ。けど、長くたって二十年か三十年もすりゃ払い終わる。」

鷗国の属領に戻った是領^{ゼラモニア}を見やがれてんだ。戦が終わった途端に大増税で、反抗する気力体力も残らねえぐらい絞り取られてる。

ベスラの戦で負けてりゃ、王都まで攻め込まれて、畏国^{イヴァリース}だって属国になってたかもしれねーんだぜ？そこから、ランベリーとゼルテ

ニアを取り返すところまで押し戻したんだ。結局、是領^{ゼラモニア}と、紗国^{ペシヤ}の植

民市をなくしただけで、本国の領土は※一坪^{フオルト}（※六ケルター平方三・三平方メートル）だって割譲してねえ。大健闘だろーが」

ナッシュがぼそぼそと言う。

「仕方ないよ。ぼくらが、勝ち戦の時だけ大々的に喧伝して、負け戦の時は平民の人達に広報せずにきたんだもの。」

田舎の方じゃ、戦争が終わるまで、ゼルテニアやランベリーが占領されてたのを知らなかつた人もいたそうだよ。

ずっと勝ってるものだとばかり思ってた、いきなり負けました、賠償金払われます、じゃあ不満が出るのも当たり前だよね」

ガストンはナッシュの首を絞める。

「だから、”ぼくら”ってな誰のこった？

バカな戦争おっ始めたじーさんやひいじーさんの代の人間は、とつくに棺桶の中だろ。」

親父や兄貴達の世代はどーにかこーにか負け戦持ちこたえさせて……、それでどーして、俺やおめーがあいつらに睨まれなけりやならねえ！？ お門違いだろーが！

「ガズドン、ぐ、ぐるじい……こ、これもお門違いじゃないのー？」
ラムザがガストンの手を解いた。

「始めた頃は、”バカな戦”でもなかったんだ。七王国統一から五十年弱で、人口が二倍にも増えて、深刻な土地不足になっていたからね……」

小国同士の絶え間ない小競り合いによる成人男子の戦死がなくなり、労働力が増えて、農業生産量も飛躍的に上向いた。が、それ以上に、人口増加率も急伸したのだ。国内の新農地開拓は、じきに頭打ちになった。

土地不足は、すぐさま食糧不足から飢えにつながるわけではない。まずは相続争いの頻発と、食いあぶれた次男坊以下が都市へ流れ込み、都市でも職にあぶれた者達が犯罪に走り治安が悪化する、という形で問題になった。

王家は最初、交易によって国を富ますことで彼らを養おうとした。^{ペシャ}紗国戦争で植民市を獲得し、東方交易路の安全を確保すると同時に、植民市周辺の土地を開墾する屯田兵として、彼らを起用した。

しかし、それだけでは到底、増え続ける人口を吸収出来ない。グレバドス教会の道徳律、即ち一夫一婦制の普及や十六歳未満の結婚の禁止などによって、人口増加に歯止めをかける試みもなされた。

手を尽くした末に、今のところ人口密度が低く農業生産効率も悪^{ゼラセニア}い^{イヴァリース}是領ならば、大量の移民を受け入れる余地があろう、という結論に達したのだった。

ところが、度重なる^{ペスト}黒死病の流行と、大戦末期の激しい消耗戦のために、終戦直後の^{イヴァリース}畏国の人口は最多時の四分の三以下にまで減少していた。

土地余り、労働力不足の状態になり、若い世代には”開戦当時は土地不足だった”という実感が持てない。そのため『王様が欲張っ

て、必要でもない領土を得るために戦争を始めた』という認識が、特に平民階級では一般的になっていたのだった。

「だったら、尚更……！」

ガストンは銀褐色の髪をくしゃくしゃと掻き回した。

「あいつら、何勘違いしてやがるんだよ！？『何の報酬もなく切り捨てた』とかつつわれたって、そもそも義勇兵ってな、無報酬が前提なんだぜ。傭兵とは違うってのに。身一つで参戦して、その間に支給された武器防具とか、食糧とかにどんだけ経費コストかかってっか知ってんのか？

騎士の方は無報酬どころか、自腹切って戦費捻出してんだぜ。家宝売ったり、借金こさえたりしてまでな。そこら辺の仕組みシステム、わかっって言ってるのかってんだ」

騎士は封地を受領する代わり、毎年一定期間——通常は四十日間ほど——主君の求めに応じて戦う義務がある。

といっても、地元の盗賊団討伐等と、他国への遠征とでは、かかる日数も費用も違う。五十年戦争後期の騎士達の戦費負担は主従契約時の想定よりも重く、防衛戦では戦利品などもないために、戦う度に赤字が増えた。

規定の日数以上に戦う時は、主君がその分の戦費を負担することになっている。が、主君の懐具合も厳しく、”超過勤務手当て”は無いか雀の涙ほど、あるいは後払いにされるのが恒例だった。

このような時、騎士は戦わずにさっさと帰っても義務違反にはならない。だが、戦わずにオルダリーア鷗国に負け、領地を占領されてしまっただけで元も子もないから、義理義務を越えても戦わないわけにはゆかなかった。

「戦功次第では」騎士に取り立てられることも恩賞が出ることもある……という部分が過剰に期待されすぎたな。彼らが勝手に勘違いしたのか、募集人が手っ取り早く人数を集めるためにわざと期待させるような説明をしたのかは、場合によりけりだが」と、デイリータが言った。

ガストンは唇を噛んだ。

「俺は、騎士になるつもりなんかなかったんだぜ。

弟売っ払ってまで士官学校アカデミーに入れてくれなんて、俺が親父に頼んだわけじゃねーのに……！」

ナツシュが首を傾げた。

「え……？ 弟くんを……売り払った？」

「……。あー、てめーは聞いたことねーんだな」

ラムザの髪を編み終えたサーシャが言う。

「『ガストン君の前で弟の話はするな』……って、結構有名な噂よ。どうしてか、までは、あたしも知らないけど」

ラムザが微苦笑する。

「ガストンの喧嘩の半分ぐらいは、弟の話が原因だよな」
目を逸らし、ガストンはぶつぶつと話す。

「次男坊なんだよ、俺は。騎士になるのは兄貴だけで、俺は家を出て傭兵になるもんだとばかり思ってきたっつーのに……。」

親父の上司の知り合いが、出資者スポンサーになってくれやがってなあ。無利息で俺の学費貸してくれた上に、弟のことも騎士見習いとして引き受けてくれるっつって……」

ナツシュはおずおずと尋ねた。

「……それって、有難いお話なんじゃ……ないの？」

「全っっ然有難くねえっ！！」

ガストンは覆い被せるように言い、――卓子テーブルを叩くと檸檬水レモネードがこぼれるので――ドンツと壁を叩いた。

「そいつんとこのお小姓連中ってのがなあ、ラムザみてーな色白で細っこい女男ばかりで……、つまり、そーゆうシュミの野郎なんだよっつ。俺の弟も、蒐集品コレクションに加えられちまったってわけさ！」

「……げっ」

ナツシュは思わず声に出してしまった。

「『げっ』だろ。うちのクソ親父は、言ってみりゃ成り損ないのケルガーだな。ハンパな実力しかねえくせに正義感だけは強えから、

ガキにツケを払わすことになりやがるんだ……」

ガストンには姉が二人と、兄が一人いる。四人姉弟の末っ子だった。……はずだった。

我慢強く大人しい兄とは正反対の、喧嘩っ早い悪ガキだったガストンは、七歳になってすぐに、北天騎士団の千騎長の家の一つ・ローラント家に見習い奉公に出された。幼くして聡明と評判高い若君の許で、しっかりと行儀見習いするように期待されたのだが……。

ところがひょんな巡り合わせから、ガストンは跡取りの君のレオンではなく、その異母兄のリュカオンの従者になった。

リュカは十歳そこその頃から、韋駄鳥チヨコボを乗り回しては近郷の悪童達との喧嘩に明け暮れる”暴走族”だった。そんなリュカをガストンは実の兄以上に慕い、”若君をしっかりと見習って”、ただの悪ガキから立派な不良少年へと成長した。

さて、”立派な暴走族”に育ったガストンが、ある夏の聖母祭の休暇で実家に戻ると、見慣れぬ下働きの母子がいた。村人達の噂では、ガストンの異母弟とその母だという。少なくとも、祖父母がそのように固く信じているらしい。

噂では……というのもどかしいが、父が戦地について留守だったので、真偽を直接問うことが出来なかったのである。

——弟……なのか？母上……。

——父上はそう仰ってるわね。

とだけ、母はあっさりと答えた。ガストンは、それ以上はとても尋ねられなかった。

実は、ガストンの一番上の姉は父の娘ではない。母は、父が当時仕えていた主君の、秘密の愛人だった。子が出来て関係が明るみに出そうになったので、急遽父に嫁がされたのだ。しかも主君はその後戦死するまでの三年間ほど、母に愛人関係を強要し続けたので、二番目に生まれた兄とても本当に父の子なのかどうか……という、曰く付きの姉弟なのだった。

父の性格からすると、また誰かに厄介事を背負わされたか、自ら引き受けたのかもしれない、という気もする。それとも、あるいは……本当は、”押し付けられた花嫁”だった母に不満があったのだろうか……。

”弟”の母に訊いてみると、

――私どものことはただの召使いと思って下さいませ。息子はお館様のご家族の一員ではございません。

と頑なに繰り返すばかりで、こちらも埒が明かない。

正月に父に尋ねると、

――お前の弟だ。

と言っただけで、多くを語らなかった。

事情の詮議は後回しにして、ガストンは四つ年下のひ弱そうな少年を弟と認め、”優しく躰ける”ことに決めた。

――いいか？二度と”お坊ちゃん”なんて呼ぶんじゃねーぞ。

――あの、でも……後で母さんに叱られます……。

――そーか、そーか。……今すぐ俺に殴られるのと、どっちがいい？

――わ、わかりましたよ。……兄さん。

――あー？今なんつった？そんな小せえ声じゃ聞こえねーなー？

――痛、た……やめて下さいよ、兄さんー！

――お？言えたじゃねーか。よしよし。

この弟がいなければ末っ子だったはずのガストンは、兄貴ぶってみたかったのかもしれない。

曰く付きといえ、リュカとレオンの兄弟もだった。

リュカこそ、本来は跡取りだったはずなのだ。リュカの母は、父の許婚だった。しかし財政上の問題から、祖父の命令で父は貿易商の娘を娶らされることになった。若い二人は既に子があることを理由に、あくまでも結婚を認めさせようとしたのだが、引き離され、母は尼僧院に入れられた。生まれてきたリュカは母の実家で育てられ、祖父の死後ようやく、父の許に引き取られたのである。

だが、リュカが”不良少年”になったのは、己の境遇をすねての

ことではない。”剃刀”と形容されるのは、細面で細い目の眼光鋭いという外見の印象のせいだけでなく、弟と同じかそれ以上に頭が切れたからだ。

——俺が”よくお出来になって”は、レオンの奴が苦勞する。

武家の血筋であるリュカを後継者に推す声が、家臣達の間にあった。ローラント家の分裂を防ぐため、身を引いて弟を立てようとしたのだ。

それに、リュカの関心はローラント家の家督相続より、もっと大きなものに向けられていた。遠駆けに行くときよく、見晴らしの良い高台などで、リュカはガストンにも抱負を語ってくれたものだ。

——こんなちっぽけな畏国イヴァリースの、たかだか千騎長程度の領地に縛られるのはつまらんさ。東の果てのように言われている雅国ガンダリアのその先にも、まだまだ広い大地が続いていると聞く。俺は畏国イヴァリースの誰もまだ見たことのない国まで行き、誰も手にしたことのないものを手に入れる。その時は、お前も来るか？

——当ったり前っすよ！リュカの兄キの行く所なら、地の果てだろーが地獄までだろーが、喜んで！

そんな話を、ガストンは実家に帰ると、そっくりそのまま弟にも聞かせた。

——……ってことだ！お前も来るか？

——はい！兄さんの行く所なら、どこへでも！

——よし！じゃあまず、剣の稽古な。

——はいっ。……えいっ！やーっ！とうっ！

——気合いが足りねーっ！もう一遍！

——えいっっ！！やーっっ！！とうーっっ！！

オルダリア

さて、鵬国との大戦も終わりが近いと——恩賞が出ないどころか賠償金の負担を求められることになりそうだと噂を聞くに及び、ガストンは戦地にいる父に手紙を書いた。

このまま騎士見習いの奉公を続けていても、自分が騎士になる機会はもう来ないだろう。それよりも、心当てにしている剣術の私塾

があるのでそこに通わせてほしい、と。卒業生の多くが東方交易路の隊商の護衛になっており、ほとんど貿易商達の寄付と卒業生達の出世払いで運営されているので、学費はさほどかからない。自分も傭兵として働き、多少なりとも家計を助ける。少なくとも、自分の食い扶持ぐらいは自分で稼ぐ。……と。

ずっと父と兄の頭痛のタネだったガストンとしては、珍しく殊勝に親孝行を申し出たつもりだった。ところが……。

——どうしたんっすか？ シーザ兄キもニーナ姉キもシケた顔しちまって？

——ガストン……、あんた、春から士官学校アカデミーに行くんだってね。

——さっき、お館様が推薦状書いてらしたぜ。

——はあ？ 笑えねえ冗談っすね。クソ兄貴だって士官学校アカデミーなんか行つてねえつてのに、なーんで次男坊の俺が……。つて、まさか兄貴の奴、戦死したんじゃ！？

——ううん。もうじき、ランベリーから帰って来るって。

——……なんだ。驚かさねーで下さいよー。けど、マジっすか？ ここんとこ戦費の持ち出しばかりで赤字続きのはずなのに、ウチのどこにそんな金……。

——用立ててくれる奴がいるんだとよ。それが……、

——……げっ！ 俺なんか食ったって、腹壊すだけっすよ。

——あんたじゃね。

——……え？ ……じゃ……、まさかっ！！

明くる正月。

実家に帰ったガストンは、開口一番、

——ふっざけんなこのバカ親父ッッ！！

と罵るなり、父を殴り飛ばしたのだった。

——何をするんだ！

とガストンの頬に平手を張ったのは、父ではなくて、普段は控え目な兄である。

——兄貴はすっこんでろッ！ 親父に話してんだ！ 俺は騎士になんか

ならねえつつつたのに、何でこーなるんだよッ!?

父が訥々と諭したところは、こうだ。

自分も次男で、騎士になるまで各地を転々としてきただけに、傭兵の仕事の汚さをよく知っている。

東方貿易の隊商キャラバンの護衛は、山賊や魔獣モンスターから荷を守るだけではない。時には他の隊商から財貨を強奪したり、少数民族の村を襲って奴隷狩りをしたりもする。そういった強盗行為によって不当な利益を貪っておればこそ、法外な報酬が支払われるのだ。

ガストンは短気で喧嘩っ早く、しかも、性根は真っ直ぐだ。そのような野盗同然の”仕事”は我慢ならないだろう。……

正論である。であるが、

——年貢も上げねえ、悪いこともしねえで、この先どうやって借金返してくつもりなんだッ! ? 他人様のガキ売り飛ばすのは駄目でも、自分のガキなら構わねーのかよ。八方美人したけりゃ、親父が色小姓になりやがれ!

噛み付くように言い募るガストンに、いつの間に後ろに來たのか、弟が取りすがった。

——違うんです。兄さん。

——あ! ?

——僕、とても嬉しく思ってますよ。騎士になるための勉強をさせて頂けること。僕、兄さんやリュカ様のお役に立てるように頑張りますから。兄さんが士官学校アカデミーに行かなくなったら、僕、このお話を断るつもりありませんよ。

——おい……!

——でも、出来たら、僕は兄さんに士官学校アカデミーでちゃんとした学問を受けてほしいと思います。兄さんなら立派な騎士になるに違いないって、信じてますから。

——てめえ……、わかって言ってるのか?

——わかって……ます……。

——……っ!

ガストンは父と兄と弟と、そして、黙って見守っている母の顔を見回した。

「……何だってんだよ……。」立派な騎士”って、どんなんだよ？そんなもん、勝手に期待されたって……俺……俺は……！！
ガストンは弟を張り倒し、壁に掛かっている剣を一振りひっつかんで表へ飛び出した。裏庭に行き、練習台の藁人形をめった突きにする。

（畜生……ッ、どーすりゃいいってんだよ！）

父も兄も、戦士として弱くはない。会う度に稽古をつけてもらってきたから、よく知っている。だいたい、弱ければ激戦の戦地から五体無事に戻って来られるはずがない。

だがそれでも、騎士としてまっとうに職務を果たすだけでは、生活が立ちゆかないのだ。

戦果を上げて、功はほとんど上役のものになってしまう。かといって、戦って倒した相手から戦利品や保釈金を得るならともかく、敵国民といえども農民達町人達に略奪を働く気にはなれない父と兄だった。農民達と変わらぬ貧しい暮らしを体験しているだけに、領民達への理解も深く、無理に年貢を上げることもしない。

ガストンだって、父と兄にそうして欲しいとは思わない。自分ならそうしたいとも思わない。思わないが……。

父や兄を越える騎士になれるだろうか。

”正攻法”で生きていくには、どれだけの实力が必要なのだろう？あるいは、実力以外の何が……？

（何なんだよッ！騎士の責務^{つとめ}ってやつは！！）

ガストンは藁人形の首を斬り飛ばし、空中で鋭い三段突きを入れた。人形の頭はバラバラに崩れて、風に吹き散らされる。

ふと気が付くと、頬が涙で濡れていた。

誰の、何のために泣いているのか、自分でもわからなかった。

「そうだったんだ……。あの、それじゃ、今は……？矢っ張り学

校を辞めて傭兵になりたいとか、思う時もある……？」

ナツシュは遠慮がちに尋ねた。

「そうしてーのは山々だけだよ。ハンパな實力しかねえのにイキがったって、親父の二の舞だからな……。悔しいが、ここで腰据えて力付けた方がいーだろ。……それに、」

と、ガストンは勢いよくラムザの背中を叩く。

「ぶくっ」

ラムザは檸檬水^{レモネード}にむせた。

「面白え奴に会っちゃったからな。ラムザが大将なら、騎士になるのも悪くねーな、って……」

「けほっ……。僕だって、どうしたらみんなの暮らし向きを良くすることが出来るのか、わかるわけじゃないよ。ただ、少なくとも……反乱軍討伐とか、貴族同士の勢力争いとかいった内輪もめに費やされる労力を、もっと生産的なことに振り向けられたら、国全体の利益になると思うんだけどな」

ディリータが腕組みして言う。

「差し当たって、短期的に一番有効なのは、逃亡農民や脱走兵に恩赦を出すことだろう。」

貴族が質素儉約に努め、その分教会の福祉事業に寄付する……とかいうのは、必要ないとは言わないが、分かり易い見世物^{パフォーマンス}に過ぎない。

安定した家と仕事の無い人達に、例えばその日限りの食料や日用品を支給したり、病気や怪我の手当てを受けられるようにしたって、根本的な解決にはならないからな。橋や道路の修理とかの公共事業で日雇いの仕事を提供するのも、その場しのぎに過ぎない点では同じだ。

安定した職に就かせること……。ほとんどの人達は農民だから、農村に定着させられれば一番いい。

逃亡罪なんてのは、自分の身を守ろうとしてやむにやまれず犯すもので、他人に害意を持ってすることじゃない。だが、いつまでも

当てもなくさすらっていれば、そのうち盗みとか詐欺とか、本当に犯罪的なことで食いつなぐしなくなってくる。

中には、もう真面目に働くのがバカバカしくなってしまう者もあるだろう。だが、機会チャンスさえ与えられれば堅気の暮らしに戻りたいと願っている者も少なくないはずだ。恩赦を出せば、戦わずして”賊”の数を減らすことが出来る。

元の村に帰るのが後ろめたいなら、廃村を復興させたり開拓村を作ったりして、新しい村に定住出来るようにしてもいいだろう。仕事安定すれば、結婚して子供を生み育てることも出来て、次世代の労働力も増える。

恐らくラーグ閣下も……というか、ダイスダーグ様も、恩赦を出す頃合いタイミングを計っていらっしゃると思う。骸旅団の幹部をあらかた始末して、組織の体を為さなくなったところで、個々人に訴えかける……というところかな。逆に、先に恩赦を発して揺すぶりをかけるという手もあるが、ウィーグラフの求心力は侮れないからな」

「へえ……。流石、デイリータ。そこまで考えてたのか」
ラムザが感心すると、デイリータは更に付け加えた。

「長期的には、特例にするのではなく、そもそももっと農民達に移動の自由を認めた方がいいだろう。人手の余っている所から足りない所へ、労働力の調整がしやすくなる。領主達も領民が去らないように、生活の質に気を遣うようになって、逃げ出したいと思う者の数自体減るのじゃないかな」

その時、それまで黙って話を聞いているだけだったアルガスが、ぶっきらぼうに言った。

「百姓どもの顔色を窺う必要がどこにある？ 一遍盗っ人になった奴らなんか、全部縛り首にしちまえばいい。平民なんか家畜と一緒にさ。いくらでもまた増える」

ハッと表情を硬くして、士官学校生達アカデミーはアルガスの顔を見つめた。ガストンが眉間に皺を寄せた。

「おい、おい……。さては、ためーんとこ不在地主かよ？ 村の一人

一人の顔も名前も勿論、懐具合まで知っててだぞ。今年年貢上げた
らあいつは冬の間に弱って死にまうだろうなとか、あの娘は売ら
れちまうかもなとか……具体的にわかってても、いくらでも代えが
きくとか思えるのか？」

無責任に騎士階級批判をする者達を嫌いにしても、ガストンは、
汗水垂らして働いている村人達を軽んじるつもりはないのだ。

「甘い顔すれば、奴らをつけ上がらせるだけだぜ。主人に逆らわ
ないように、徹底的に厳しく教え込んでやった方がいい。家畜が死
んだからって同情する気にならないな」

サーシャがぼつりと呟く。

「確かにラムザ君は甘い顔マスクをしてるけど……」

「それは意味が違うと思う……」
と、ナツシュがつつこんだ。

ラムザが言う。

「アルガス。僕はそうは思わないな。そういう言い方をするなら、
僕の方こそ、村や町のみんなに飼われてる番犬みたいなものと思
う。強くなって、いざっていう時みんなを守らなかつたら、それこ
そただの無駄飯喰らいになっちゃうよ」

ディリータは手の平を出してみた。

「……お手」

「わんっ！」

間髪入れず、ラムザはディリータの手を軽く叩く。

ディリータは深い溜め息を吐いた。

「お前に矜持プライドはないのか……？」

「あっ、ひどいよディリータ！自分で乗せといて、落とすかい？」
サーシャも手の平を差し出した。

「……おかわり」

「わんわんっ！」

「いい子、いい子ね」

サーシャはラムザの金髪頭を撫でる。

「えっと……それで、アルガス。君は、どうしてそういう風に思うんだい？」

「どうして……って……、」

アルガスが言い淀んでいると、

「あら！」

サーシャがラムザの襟の中を覗き込んだ。

「すごい。細いのに、腹筋がくっきり……。着やせして見えるのかしら？」

「え？や、やだな。そんな、じろじろ見ないでよ」

ラムザは襟元をかき合わせた。

「ね、そう言わずにお願い！もうちょっとだけ。見せて見せて！触らせて〜！」

「え、ちよつと、やめっ……、くすぐったっ……。そんな、お代官様ご無体な〜っ！」

ナツシュとガストンが二人を引き離す。

「サーシャってば！女の子が、はしたないよ」

「代官より偉い領主の息子のくせして、何言ってやがる」
ディリータも呆れ顔だ。

「真面目に働いている代官の方々に失礼だろう」

ところが、ナツシュは真剣な顔をして頼む。

「……。あの……、ぼくも触らせてもらっていいですか？参考のため」

ぺたぺたと、服の上からへその辺りを撫でる。

「ナツシュは魔法が得意なんだから、筋肉はそんなに鍛える必要ないと思うけど……」

アルガスが舌打ちした。

「チッ……アホくせえ。お前らみたいな、ふざけた連中に話すことなんか何にもねえよ」

ディリータが片方の眉を上げる。

「十把一絡げか？」

「あつ、てめーだけはバカじゃねえってか？ 嫌味なヤローだな！」
と、ガストン。

「バカになれ。ディリータもバカになれ。そおーれ、”マインド
ブラスト神錯乱”ーッ！」

ラムザは、マインドフレイア烏賊妖怪が獲物に呪いを掛ける真似をした。

「やめてくれ……。本気でバカが伝染りそうだ」
ディリータはこめかみの辺りを押さえた。

「アルガスも、バカの仲間にしてやるっ！」

マインドフレイア烏賊妖怪の物真似をして、ラムザはずるずると足を引きずりながらアルガスに近付いた。

アルガスはさっと席から立ち上がる。

「バカバカしい！ オレは一足先に一階の酒場に下りてるぜ。お前らのくだらないお喋りに付き合ってる暇があったら、侯爵様が捕まってるのかい」砂ネズミの穴蔵”の話でも聞き込んでくる」
くるとラムザ達に背を向けた。

「あ、アルガス君！ 侯爵様のことはもう、北天騎士団の搜索隊にお任せしたんだから。ぼくらが聞き込みをする必要は……、」

ナッシュが話し掛けるのを無視して部屋を出、ボタンと後ろ手に扉を閉めた。

ガストンも舌打ちした。

「チッ……。何なんだ？ あの野郎は」

「矢っ張り、侯爵様が心配でじっとしてられないかしら……」

サーシャは頬に手を当てて小首を傾げた。

ラムザは金髪頭を掻いた。

「駄目かあ……。気軽に話せる雰囲気を作ろうと思ったんだけどな。怒らせちゃったみたいだ」

「とつても、気軽に話しようのない話なんではないか？」

と、ナッシュ。

「ディリータみたいに几帳面路線で行った方がいいのかな？」

「さあ、どーだかな。シャレの通じねえ同士でぶつかり合っちゃう

と、抜き差しならなくなるだろ」

ガストンは肩をすくめる。

アカデミー

士官学校生達は、不穏な様子を感じ取ってはいた。

が、この時点でアルガスの意図を見抜いていたのは、デイリータ一人だった。

夜更け――。

物音、にさえならない微かな気配を察知して、デイリータは目を覚ました。

アクエリアス

※宝瓶の刻の半ば（※午前三時）ほどだろうか。

デイリータは呼吸を乱さぬよう、身動きせずに聞き耳を立てた。

暖炉の煙突が低く唸っている。

外の雨と風は止んで、犬の遠吠えが長く尾を引いて響き渡っていた。

ラムザはすぐ側にいる。

ベッド

隣の寝台ではガストンとナツシュが眠っている。ガストンが息苦しそうなのは、ナツシュにのしかかられているのだろう。

衝立の向こうでサーシャが寝返りをうった。

すると、足音を忍ばせてうろついているのは――、長椅子ソファで寝て

いたはずのアルガスだ。

アルガスは、壁に掛けてあるラムザの上着を探っていたが、目当ての物は見つからなかったようだ。

コンパス

財布と、ベオルブ家の家紋の入った方位磁針は、ラムザが身に着けて眠っているのだ。

アルガスが枕元に来て息を殺していると、

「うう……ん……？アル……」

ラムザは寝言を呟いて、もぞもぞと身をよじった。

「……マ……。よしよし、大丈夫……」

無意識に掛け布団を掛け直して、デイリータの肩を抱える。

ラムザの頭が離れた枕の下に手を入れて、そこにも何も無いのを

確かめると、アルガスは諦めたようだった。

上着と外套マントを着込む、衣擦れの音がした。

自動弓の矢筒がカチャリカチャリと鳴った。

門が小さく軋む。

扉が開いて、また閉じたのを聞き届けると、ディリータは再び眠りに就いた。

暁闇の頃――。

ラムザはいつものように、友人達に先がけて起きた。

(あれ?)

長椅子ソファが空いており、アルガスの上着と外套マントがなくなっている。

が、廁トイレにでも行ったのだろうと思い、気に留めなかった。

髪を一本に束ね、長靴ブーツをはき、上着を被る。革帯ベルトを締めて長剣を腰に差すと、手拭タオルいを肩に引っ掛けて、静かに部屋を出、廊下の階段を下りた。

「お早うございます」

「や、お早いねえ」

帳場カウンターに座っている老人は、ちらと顔を上げてラムザに微笑すると、腕組みをして将棋盤チェスと睨めっこを続けた。暇潰しに詰め将棋をしていたのだ。

裏口の外の廁トイレでも、水場でも、アルガスには会わなかった。

ラムザは裏庭で、準備運動の後、剣の素振りを始めた。

雨上がりの空が白むにつれ、他の宿泊客もぽつりぽつり裏口を出入りするようになる。

ディリータも起き出して、ラムザと一緒に剣の練習をする。

最後の星が消え、空全体が明るくなった頃――、

「やべえぞ、ラムザッ!」

窓の雨戸が荒っぽく開け放たれ、ガストンが上半身を乗り出して叫んだ。

他の部屋の客や、向かいの長屋アパートの住人までが、何事かと注目する。

「アルガスがいねえ！ 奴の荷物も、自動弓ボウガンもなくなってる！」
「何だって？ まさか……っ、一人でゼクラス砂漠に向かったのか！」
「？」

？―3―〔5〕　ゼクラス砂漠への道

宿の帳場カウンターで訊くと、アルガスはまだ真っ暗なうち――※宝瓶アクエリアスの三の刻（※午前三時―三時半）頃に発った、という。

ラムザ達は朝食と昼食を弁当に包んでもらい、湯冷ましの水を皮の水筒に詰め込むと、押っ取り刀で出立した。

ドーター市の北門で尋ねたところ、案の定、アルガスは開門と同時に出て行ったそうだ。既に※一時（約二時間）以上経っている。

「しまったな……！アルガスが侯爵様の居場所を知って、大人しく待ってられるわけがない。起きた時すぐ、おかしいと思うべきだったんだ」

砂利道を歩きながら、ラムザは木苺ジャムの甘煮を塗った麺麰パンと、乾酪チーズをかじる。

「ナツシュ、サーシャ、きつくなったら言ってね」

「大丈夫です。アルガス君に追い付くまでは、”加速”ヘイスト使ってもついていきますよ」

今日はラムザは勿論、サーシャ自身の髪も結っている暇がなく、櫛チヨコボも通さずに一本に束ねているだけだ。

韋駄鳥チヨコボを借りたり買ったりすることも、考えないではなかった。

だが、身を隠す場所の少ない砂漠では遠くから目立ってしまうし、韋駄鳥チヨコボの分の水の確保なども難しいので、徒歩でアルガスを追うことにした。

「まっ、多分、急ぐ必要はねえだろーぜ」

と、殿しんがりを歩くガストンがデイリータに囁いた。

「アルガスの野郎、要するに”蚤”なんだろ」

イヴアリス畏国に伝わるお伽話だ。

昔々ある所に蚤がいて、ネズミや犬、韋駄鳥チヨコボなどに駆け比べを申し込んで、次々とこれを打ち負かした。

何のことはない、蚤はいつも競走者の体にくっついて終着点ゴールの一

歩手前まで運んでもらい、最後の一跳びだけを自力で跳んで出し抜いていたのだ。

調子に乗った蚤は、神獣・一角獣ユニコーンに勝負を挑む。

一角獣は蚤の手口などお見通しだ。大河に差し掛かると、橋を渡らず、頭からざんぶと淵に飛び込んだ。

蚤は一溜まりもなく溺れ死んでしまう。

「一人で敵陣に乗り込む度胸がありゃあ、最初はなっから、ラムザの兄貴達や俺らなんか頼っちゃいねーだろ。大方、騎士団の救出隊が来るのを待ち構えて、一番乗りの手柄を独り占めしようって腹づもりじゃねーか？」

「……」

ディリータは無言で頷く。

「俺はなー、始めっからあの野郎は気に食わなかったんだ。

ラムザがベオルブ家の御曹司だってわかった途端にすり寄ってきたりとか、実績もねえ見習い君の分際で百の兵を貸してくれたとか……。

サダルファス家ってのが昔どんだけの名門だったか知らねーが、今のあいつ自身を尊敬リスペクトする気になる人間が何人いると思ってやがるんだ。”家柄”におんぶされなけりゃ何にも出来ねえ蚤野郎が」

「……。アルガスに……話したか？ラムザのお袋さんのことを」

「あいつが庶出だってことだけは。見りゃあ一目瞭然もつぱらだからなー。けど、それ以上は喋っちゃいけないぜ。勿論、おめーのことも」

「……」

ガストンはポキポキと指を鳴らした。

「なーに、心配すんな。もしも知ってあいつをバカにするようなら、そんな例によって例の如く、俺ら悪童連合軍による徹底的な報復措置を……。」

「取るな、取るな。ラムザが迷惑がるぞ」

ガリランド王立士官学校アカデミーの一部では、ラムザが”陰の番長かげバン”であるとの噂が、まことしやかに流れている。

曰く、

「――ガリランド市の警備隊ですら手をこまねいていた、とある暴走族集団グループの党長リーダーが、ラムザの韋駄鳥チヨコボに道を譲らなかつたがために、翌日、簀巻きにされて大木に吊されていた。」

曰く、

「――ディリータの指令一下、いつでも」ラムザ組」千人の舎弟が立ち上がる。

……等々。

「それはさておいて……ディリータ。一つ、てめーに聞きてえことがある」

ガストンはディリータの肩をつかみ、振り返らせた。

「どーして、ラムザに言っただらねえ？」

「何をだ？」

「アルガスの野郎を追っかけるのに、急ぐ必要はねえってことを、さ」

ラムザは二十歩以上先を歩いている。小声で話せば、聞かれることはない。

「……お前は何故言わないんだ、ガストン」

「てめーが言わねえ理由を聞いてからにしようと思っただけ」

「……言っただけでも、ラムザは急ぐさ。アルガスには一人で突入するつもりはなくとも、敵の見張りに見つかるかもしれない。途中で牛鬼ミノタウロスや火の玉ボムに襲われていないとも限らない。奴の単独行動が危険なことに変わりはないからな」

「そいつあ俺も同感だ。けど、もっと他にありやがるだろ」

「しつこいな。他に何があるっていうんだ？」

ガストンはディリータの胸の前に拳を突き出して、立ち止まった。とん、とぶつかってディリータも立ち止まる。

「ラムザはてめーのもんじゃねえぞ」

「何だ、藪から棒に？じゃあ誰のものだ……」

「俺。……なーんて冗談の通じねえ奴に言っと、命が危ねーか」

ガストンはデイリータの剣の柄頭を押さえ、苦笑した。

「忘れちゃいねーぜ。去年、一等最初に俺を見た時のためーのあの目付き。ラムザが笑ってっから、俺らも余裕かましてられたけどな。正直んところ、マジでぶった斬られんじゃねーかとヒヤヒヤもんだったぜ。」

そーんな過保護の”世話女房”殿が、今日はやけに落ち着いてんじゃねーか。こーやってラムザを厄介事に巻き込んでくれやがるあの野郎に、大して怒ってる素振りも無え」

「……」

デイリータは心の中で舌打ちした。

ガストンは論理的な思考を組み立てるのは得意ではないが、その分、直観的な洞察力は鋭い。

「どーも合点がいかねーんだよな。」

ラムザのボケはともかく、てめーが朝起きた瞬間、アルガスがいねえのを怪しまねえってのは。あの朝寝坊野郎が今日に限って早起きってのも珍しいなーと思って、ちよっと覗いてみりゃ荷物がねえだろ。

今にして思やあ、昨日の夜、長椅子ソファで一人で寝るって言った時から様子が変だった。奴じゃ窮屈だろうって、ナッシュが代わってやるってのも断ってんだ」

長椅子ではよく眠れず、途中で目が覚めてしまう。が、それを逆手にとって、いつもよりずっと早い時間に起きたのだ。

「それに、わざわざ卓子テーブル引き寄せて、俺らからすぐには見えねー所に荷物を置いた。」

……頭のいい奴なら、その時点でピンと来てもおかしくねえ」ガストンのにらんだ通り——どころか、それ以前からとくに、デイリータにはアルガスの思惑が読めていた。

いや、そもそも、アルガスをそのように仕向けたのがデイリータだったといっいいい。

この旅の目的が”北天騎士団の搜索隊を助け、エルムドア侯を救

出すること”であれば、捕らえた骸旅団の一味を素人が下手に訊問するよりも、速やかに騎士団に引き渡すべきだ。

しかしディリータの目的は、加えて”それによってラムザの名声を上げること”だ。

ラムザと侯爵の安全に配慮しつつも、なるべく、ラムザの活躍の場を増やす――。

ところがラムザ本人は、陰ながら兄・ザルバッグの力になれば本望らしい。ラムザが”余計なこと”をしたがらないならば、アルガスにさせるまでだ。

”あわよくば独力で侯爵を救出し、己の名を売ること”が目的のアルガスがエルムドア侯の居所を知れば、抜け駆けしてそこへ向かうことは予想がついた。

アルガスを追ってきた、という形を取れば、侯爵救出の現場にラムザを参加させることが出来る。しかも、無謀な友人の身を案じた、というおまけ付きで。

「てめーの脳ミソの中でどーゆう計算が済んでやがるんだか、頭の悪い俺にゃあわかんねーよ。けど、これだけは言えるぜ。

何があいつのためになるかなんぞ、てめーが一人勝手に決めていいこっちゃねーだろーが。あいつの相棒タチならどーして、てめーの腹ん中割って見せて、あいつ自身の意向を確かめねーんだ？」

「……。俺は……、」

その時、

「ディリータ！ガストン！」

ラムザが大声で二人を呼んで手招きしたので、この会話は中断された。

「おう、どーした！……うわ」

行く手を、滔々と渦巻く濁流が遮っている。普段は涸れ川なのだろう、背の高い草が水底に沈んでいた。少年達が見ている間にも、刻々と水かさが増しているようだ。

上流のベルベニア活火山地方も、保水力の極めて低い砂礫の荒れ

地が広がっている。昨日の降雨が一気に流れ込んだのだ。

「こいつぁ、泳ぐのは無理だな……。どっか、渡れる場所を探さねーと」

「投げ縄で向こうの木に届くかな……」

するとナツシュが、雷精錫で羽根付き帽子の縁を押し上げ、胸を張った。

「みんな、何か忘れてない？」

サーシャが、ぽんと手を打った。

「“浮遊”^{レビテ}ね！」

「そういうこと！ さ、固まって、固まって」

ナツシュの周りに他の四人が集まった。

「慈悲に満ちた大地よ、つなぎ止める手を緩めたまえ。”浮遊”^{レビテ}！」
五人全員の体が、地面から※一步^{ドイマ}（※約〇・六メートル）ほどの高さ^に、ふわりと浮き上がった。

「流石ナツシュ！」 小さな大魔道士”だ！”

「うわ、わわ、わ……」

ガストンがナツシュの頭をバシバシと叩いたので、ナツシュは手車^{ヨーヨー}のように上下に弾んだ。

「行こう！ 術の効果の切れないうちに」

ラムザ達は、波立つ砂色の大河の上を歩き渡った。

アルガスは灌木の茂みの陰に腹這いになって、丘の下の方村を観察していた。

と——、

革手袋をはめた手が背後からにゅっと伸びて、アルガスの口を塞いだ。

「……っ！—！」

「しーっ」

ラムザが自分の唇の前に人差し指を立て、碧い眼で微笑んでいる。

「心配したよ、アルガス！ 無茶するなよ」

五人の士官学校生^{アカデミー}達はアルガスと並んで、腹這った。

「無事で良かったわ」

「手間かけさせやがってよー。おい、こいつは返せ」

と、ガストンが自動弓^{ボウガン}を取り上げる。

「『返せ』って、お前でもないじゃねえか。ラムザが言うならともかく……」

アルガスは顔をしかめた。

「誰も、来てくれなんて頼んでやしないぜ」

つば広の羽根付き帽子を脱いだナッシュが、栗色の頭を横に振った。

「そんなこと言ったって、放っておけるわけじゃない！」

ディリータは、石積みの防壁を巡らせた村を一通り見回して、ラムザと頷き合う。

「侯爵様が監禁されているとすれば……、」

「矢っ張り、中央の教会堂……」

「……だな」

素焼き煉瓦^{モルタル}を漆喰で塗り固めた、こぢんまりとした廃屋の家並みの中に、鐘楼を持つ石造りの教会堂は頭一つ飛び抜けている。

かつてここに暮らしていたガルテナーハ族は、多神教^{ベシヤ}のガンダール教の一派で、荒ぶる闘神・ガルタンを奉じていた。紗国戦争^{ベシヤ}当時の移民政策に従って、村が建設される時中央にグレバドス教の教会堂が作られたが、彼らの文化習慣・生活様式はガルタンの教義と分かちがたく結び付いていたので、改宗する者は一人もいなかった。初代の司祭が亡くなると跡を継ぐ者もなく、教会堂はたまに訪れるグレバドス教徒の宿泊所として使われる程度だった。

村が焼き討ちに遭った時、荒れ寂びた教会堂は無人だったためにそれ以上の破壊を免れ、今ではかえって、一番元の姿を留めた建物になっていたのだ。その教会堂の入り口には、つい最近頻繁に出入りしているらしい、無数の足跡がある。

ラムザは友人達、特にアルガスに念を押す。

「滅多なことをすれば、侯爵様のお命に関わるぞ。何か動きがあるまで、ここでじっとしているんだ」

「何か、ってどんなことですか？」

「北天騎士団の人達が到着するとか、それとも、骸旅団の奴らが侯爵様を別の場所へ移動させようとするとか……。どっちにしろ今は、日射しが強すぎる。」砂ネズミ「は夜行性だよ」

ラムザは目の上に手をかざした。革の帽子から日除けの布を垂らしていても、地面からの照り返しで、色白な頬が薄紅く日焼けしている。

石ころだらけの地肌が？きだしのゼクラス砂漠は、昼夜の寒暖の差が激しい。早春でも、午過ぎには真夏のように暑くなる。

「夕方まで体力を温存しておこう。交替でお昼寝しようか」

「昼寝エ！？ここで？」

「アルガス、昨夜はあんまり眠ってないだろ。休んでおいた方がいいよ」

アルガスはラムザの級友達の方を見た。

士官学校生達は首を横に振る。手足が汗ばみ、鼓動が早くなっている、昼寝どころではない。

ディリータがラムザの肩を叩いた。

「こうして寝そべっているだけでも疲れは取れるさ。眠れるなら、お前は眠っている」

「そうかい？じゃ、おやすみ」

ラムザは荷袋を枕にして仰向けになり、目を閉じると、十も数えないうちに規則正しい寝息をたて始めた。

アルガスが不思議がる。

「どういう神経してるんだ？こいつ……」

「こういうの、」心臓に毛が生えてる”っていうのかな……。？ぼくなんか、今はたとえ”催眠”の魔法をかけられたって効きそうにな
いよ」

と言うナツシュに、ガストンがニヤリと笑う。

「ダーラボンの真似ならどーよ？『えー、知ればおのずとその先が見えてきます。ここで学んで実戦に備えましょう……』」

サーシャとナツシュはくすくすと笑った。

「条件反射で眠くなっちゃいそうだわ」

「ダーラボン先生に失礼だよ。でも、そっくり！」

ディリータも喉の奥でくくつと含み笑いだした。ラムザまで、夢現につられ笑いしている。

「何なんだ？内輪ネタで盛り上がるなよ」

一人だけわけがわからないアルガスは、疎外感を感じたようだ。

風も無く、動く物も無い不毛の荒野に、静かに時が流れる。

場違いにのどかなラムザの寝息を聞きながら、緊張と沈黙のうちに※半時ほど（※約一時間）経ち――、

「……おい。何か来たぜ」

一番遠目の利くガストンが、※獅子^{レオ}の方角（※南南西）の地平線を指差した。微かに土煙が巻き上がり、砂金の粒のような影が近付いてくる。

「北天騎士団が来たか？」

と、アルガス。

「いや、一騎だけだぜ……骸旅団の伝令か？」

「ふわぁ……うん？何々？」

ラムザも目を覚ました。

胡麻粒ほどの大きさだった騎手と騎鳥の姿が麦粒ほどになり、韋^チ駄鳥^{ヨコボ}の模様が判別出来るまでになった。

ラムザは息を呑む。

「……三日月^{クレセント}だ！」

「……三日月^{クレセント}？」

アルガスがおうむ返しに尋ねる。

「ザルバツグ兄さんの軍鳥・”新星”^{ノヴァ}の兄弟。父さんがウィーグラフに贈った韋駄鳥^{チヨコボ}さ……！」

普通種の韋駄鳥^{チヨコボ}と野生種の赤韋駄鳥^{チヨコボ}の掛け合わせから得られる二

世は、軍鳥に適するといわれる。瞬発力と持久力、勇敢さと従順さなどの釣合バランスが良いのだ。中でも、冠毛と手羽先、尾羽にかけて赤褐色グラデーションの濃淡模様のある”不死鳥”フェニックスと呼ばれる毛色のものは、乗り手に武運をもたらす吉相として珍重される。

”三日月”クレセントは見事な”不死鳥”フェニックス型の韋駄鳥チヨコボだ。額にも混じる赤い羽毛が三日月の形に見えるところから、そう名付けられた。

十四歳の年の夏、士官学校アカデミーの勉強に使う韋駄鳥チヨコボを好きに選んで良いと言われたラムザは、一通りの調教を終えたばかりの若鳥達を試し乗りしてみても、抜群にこの”三日月”クレセントが気に入った。”三日月”は聖母祭休暇の頃には、愛鳥を失ったウィーグラフに陣中見舞いとして贈られてしまったので、ラムザがもらったのは第二候補の”銀竜”シルドラだった。

”銀竜”シルドラは能力的には”三日月”クレセントに比べても遜色はないのだが、いかんせん、全身が純白の白韋駄鳥チヨコボなのだ。

目立って仕方のない白韋駄鳥チヨコボは、恥ずかしいし、実戦向きでないとラムザは思う。

だが週末ともなると、やけにめかし込んで

——頼む！今だけ”銀竜”ドラちゃんを貸してくれ！

と、拝み倒すようにして借りてゆく学友達が跡を絶たない。

「何イ！？じゃあ、あれは……」

”三日月”クレセントにまたがる剣士の、緑色の頭巾フードが風にあおられた。

「……ウィーグラフだ」

と、デイリータが頷いた。

見習い騎士達の緊張は極度に高まった。

身代金目当てのギスタヴと違って、ウィーグラフがエルムドア侯をどのように扱うかは、保証の限りではない。

（くそっ、どうする……）

アルガスには、大人の騎士達が到着する前に行動を起こすつもりは毛頭無かった。

たった六人ぼっちの見習い騎士達では、侯爵を助けられないばかりか、無駄に命を落とすだけではないか。

他の五人が村に突入することを主張した場合、どうやって思い留まらせるか――？

（ど、どうしよう……）

（どうすればいいの……）

ナッシュとサーシャは途方に暮れた。

ギユスタヴと三十人の手下に加えて、ウィーグラフまでを相手に、たった六人の見習い騎士達に何が出来るのか。かといって、北天騎士団の救出隊が来るまで指をくわえて傍観していて良いものか――？二人の心は揺れに揺れていたが、ある一点において迷いは無かった。

即ち、ラムザがこの難問に答えを出したならば、それが如何なる内容であろうとも全面的に協力する、という点については。

（どうすっかなー……）

”待機”という選択肢はガストンの頭がない。

侯爵を人質に取られた状態で、ギユスタヴとウィーグラフの二人とどのように戦うか？

片方だけでも強敵なのだ。

師と仰ぐリユカならば、このような時どんな戦法を取ったろうか――。数々の喧嘩の経験が、回り灯籠のように脳裏を駆け巡る。

（さて、どうするか……）

ディリータの考えの筋道は、ガストンのそれと似ているが、前提が異なる。

まず、侯爵の身の安全の確保は、必ずしも最優先事項ではないということだ。誘拐事件の黒幕は、むしろエルムドア侯の死を望んでいるぐらいなのだから。

そしてディリータの読みでは、もし戦わねばならないとしても、相手はウィーグラフかギユスタヴ。”どちらか一方だけ”だろう。

侯爵の救出。ウィーグラフの打倒。ギユスタヴの打倒。三者いず

れか一つを達成すれば、功は成る――。

三者全てを満たそうとしているガストンよりも、思案がまとまるのが早い。

(よし……、)

と、デイリータが口を開く前に。

「ウィーグラフは”招かれざる客”のはずだ。彼が村に入れば注意がそちらに向く。その隙に、別の入り口から突入するぞ」
迷いのない声で言ったラムザに、一同の視線が集まった。

「ただし、サーシャは残って。勝ち目が薄すぎる。それから、ナツシュもだ。サーシャを無事に帰す役が一人要る」

「え……」

ナツシュは、サーシャとラムザの顔を見比べた。ラムザの指示なら何でも従うつもりだったが、これは……。

アルガスが遠慮がちに言った。

「四人じゃ、ますます勝ち目が薄いじゃねえか。木乃伊^{ミイラ}取りが木乃伊^{ミイ}になるぜ。”侯爵様”ほどじゃなくても、”伯爵令息”だって立派な人質になっちまうぞ」

遠回しに、反対したつもりだったが。

ラムザは微笑んだ。

「大丈夫。彼と刺し違えても、侯爵様はお守りする。いざという時は、僕も兄さんの枷にはならないよ」

黄金色の髪に縁取られた笑顔の明るさに、少年達はハッと胸を突かれた。

あくまでも斬り死にする。それが叶わなければ、自害も厭わない……という意味だろう。

自殺は、グレバドス教では神への反逆罪と見なされる。自殺者の魂は終末の日に肉体に戻って甦ることが出来ない、といわれ、葬式も営まれず、墓も作られない。

グレバドス教徒にとって単に一命を投げ打つという以上の代償を払ってもいいと、あっさりと言ってのけたのだ。

（お前、矢っ張りファティマ小母さんの子だな……！）
ディリータは目を細めた。

恐らく、四年前のベスラの戦いでファティマが亡くなった時からずっと、もしもの場合は自分も同じようにすると、ラムザは覚悟を決めていたのだろう。

ザルバッグやエルムドア侯の目の前で、城壁から身を躍らせた時、ファティマはどんな表情をしていたのだろうか。多分、今のラムザのように、穏やかに微笑んでいたに違いない。

ディリータはラムザの手に手を重ねた。

「バカ言うな。一瞬だって、僕より先には死なせないぞ」
サーシャも手を伸ばす。

「女の子だからって逃げるくらいなら、ついて来てないわ」

「死ぬ時はみんな一緒です！」

と、ナツシュ。

「ケッ、シケてんなー。どーせなら、『みんなで生きて帰ろう！』とか言いやがれよ」

ガストンが、ナツシュの手をバシッと叩くようにして、その上に手を置いた。

ラムザは、もう一方の手を一番上に重ねる。

「よし！きつと、みんなで侯爵様をお連れして帰るぞ！」

「「オーツ！！」」

アカデミー
士官学校生達は頷き合った。

「……あれ？肝心のアルガス君は？」

と、ナツシュがきよろきよろ見回すと。

「……」

アルガスは立ち上がり、何歩か離れて後ろを向いていた。

「どーした？」

「い、いやちょっと……、シヨンベンだ」

ラムザも立ち上がってアルガスの横に並び、上着の裾をまくる。

「ああ……、そうだね。こういう時は、予め済ませておくものだよ

ねえ」

「おいおいおいっ！こんな時に連れションかよっ！？」
ガストンが吹き出した。

「ぷっ……ははっ！澄ましたツラしてこーゆうことしでかしてくれんのが、ラムザって奴だぜ！ようし、俺も混ぜやがれ」

「え？ちよっと、ちよっとっ！」

ナツシュとサーシャは地面に顔を伏せた。

「もしもーし、大丈夫かアルガスさんよー。すっかり縮こまっちゃまってるじゃねーか」

「う、うるせーっ！」

「そう言うガストンは気合い充分だねっ」

「おう！てめーもなっ」

サーシャは真っ赤になっている。

「男の子同士コミュニケーションの交誼コミュニケーションって、時々ついて行けないわ……」

「ぼくも男だけど……っ、ついて行きたくない……」

しかし、ガストンは見過ごしてくれない。

「こら、ナツシュ！一番ちびりそーな奴が、スツキリさせとかなくていーのか？」

「え？それは、矢っ張り……だからって、みんなの見てる前でなくてもいいでしょ！？あ、そうだ、ディリータ君は？」

ふと気付くと、ディリータは岩陰で用を足して出て来たところだ。

「何だ何だ？てめーら、付き合い悪イぞ」

「どういう付き合いだ。御免こうむる」

ナツシュとサーシャも用意が整った時には、”クレセント三日月”の足音がすぐそこまで迫っていた。

ウィーグラフは村の西門マントに向かっている。

少年達は荷物と外套マントを茂みの陰に置いて身軽になり、東の門に回る。

「今回は生け捕りにする余裕はない。が、息が残っている時は止めは刺すな。万が一侯爵様がもうここにいらっしやらない時は、行

き先を聞き出さなけりや」

門の横の狭い覗き窓から、骸旅団の番人の姿が見える。

「よし、他の奴らに悟られる前に見張りを倒せッ！」

「おうよ！」

と、ガストンが自動弓ボウガンを構えようとした。

「あ、ちよっと待った」

「あ？」

ラムザは自動弓ボウガンをアルガスに渡す。

「……え？」

「侯爵様をお助けする、大事な仕事の手始めだ。君がやりたいよな。そのために持ってきたんだろ」

「……」

「自信がないなら、ガストンに頼むけど」

「……、いや。やらせてくれ」

アルガスは自動弓ボウガンを受け取った。

サーシャが、祈るように両手の指を組む。

「頑張って……！」

アルガスは矢を番え、慎重に、覗き窓の内側にいる番人を狙う。

？－3－〔6〕 砂ネズミの穴蔵 ？突入

東の門に近い、一軒の廃屋の中で――。

「……おい、聞いたか？北天騎士団が本格的に動き出すらしいぜ」
「ああ、聞いたよ。……オレ達はいったいどうなるんだ？」

異様に筋骨逞しい男達が、日陰で札遊びや腕相撲などに興じて退屈しのぎをしている。

体格はまちまちだが、服装は一樣だ。短靴に、裾を引き絞った袴ズボン、丈の短い胴着ベスト。額と手首には緑の布を巻いている。

「殺される前に足を洗って、どこかへ逃げるしかないな」

「ウィーグラフに従っても死ぬだけだしな」

一人だけまだ声変わりもしていない少年が、溜め息を吐く。

「おいら達、一攫千金狙いでかなりヤバイことに首つつこんじやつたんじゃない？地道に”関守”してれば、縛り首の心配なんてなくて良かったのに……」

街道筋の峠や橋のたもとなどで、”関守””橋守”と称して通行料を取る者達がいる。

実際に橋や道路の整備をしたり、山賊や魔獣モンスターを退治したりする自警団が、相応の実費を要求する場合もある。が、大半は、手数料にかこつけた強請りゆす、集りたかだった。

「なーに、ギスタヴの計画どおりに侯爵の身代金さえ手に入れば、こんな生活ともおさらばさ」

少年の叔父か、従兄かという程度に目鼻立ちの似た男が、少年の背中を力強く叩く。

「そのっ通り！」

一際いかつい、身の丈※六尺七、八寸ケルター（※約二メートル）に及ぶ大男が、拳を振り上げた。彼がこの男達の首領らしい。ボス

「分け前は、一人十萬ギルは下らんぞ！」

子分達は涎を垂らす。

「十万ギルか……！たつぷり三年は働かなくていいな」

「あー、焼き肉が山ほど食いてえ。韋駄鳥チヨコボの手羽サシでもいいなあ」
「まずはパーッと酒盛りだろう！かわゆい女の子達を呼んでさ」

と、――。

見張りに立っていた男が、胸を射られて仰向けに倒れた。

「た、大変だッ！！北天騎士団のヤツラだッ！！」

「何とおっ！？」

ばらばらと、合計九人の男達が廃屋の外に飛び出した。

見張りの男も、矢を引き抜いて起き上がる。大した痛手ダメージを受けていないようだ。

（しまった！意外に人数が集まっていたな）

村に突入した少年達は、門まで退いた。相手は、二、三の例外はあるものの、屈強そうな男達ばかりだ。攻撃力は非常に高そうだが、付け入る隙があるとすれば、防具をほとんど着けていないことか。

真っ先に男達の目を引いたのは、矢張り、碧眼白皙、鮮やかな黄金色の髪のラムザだ。

「うおーッ。目の正月ーッ！」

「お花だ、お花だあ」

「こりゃ神様のお恵みってもんだろ」

「オレ様達の日頃の行いがいいってことよ」

毎度毎度のこととで、ラムザはもはや言い返す気にもならない。し、そのような暇もない。

少年達が攻撃の糸口を探っていると――、偉丈夫の首領ボスが前に進み出た。

「何だ、何だ。ガキンチョばかりじゃないか。見逃してやるから、帰って母ちゃんのおっぱいでも飲んでな」

首を曲げて大男を見上げたアルガスは、引きつった笑いを浮かべた。

「……じゃ、そういうことでっ」

思わず後退るのを、ガストンが鋭い琥珀色の瞳で睨み付けた。

「しかあし……、お嬢さん方には、砂漠の旅は辛かろうなあ。我が輩達がここで預かってやろう」

「怖がらないでねー。仲良くあーそーびーまーしよー！」

大男がラムザの方に伸ばした手を、ディリータが長剣を抜いて牽制する。

「おっと、無意味な挑戦はよしたまえ、少年。我ら、タイラーⅡワットとッ！」

「「格闘集団」^{ベヒーモス}凶獣の角」にッッ！！」

「……敵うと思うかね？」

十人の戦士達はこれ見よがしに隆々たる力瘤を盛り上げ、見得を切った。日に焼けた腕や胸がてらてらと光っている。

（（な、何なんだ！この暑苦しくもおマヌケな筋肉達磨^{マツチヨマン}どもは！）

決死の覚悟も挫ける脱力感が少年達を苛んだ、が、今は一刻の猶予もない。

「サーシャ、僕に」^{ヘイスト}加速”を。アルガス、ここは頼んだ！」
「えっ！？」

ラムザは、ディリータとガストンの肩を叩いて合図し、三人で門の外へ走り出た。

サーシャとナツシュも退く。アルガスが、村の門に立ちふさがり、彼らを追いかけようとする戦士達を食い止める形になった。

「翻りて来たれ、幾重にもその身を包め！」^{ヘイスト}加速”！」

サーシャの魔法を受けた少年三人は、外壁の角を曲がった所にある小さな通用口の扉を蹴破り、戦士達に側面から斬りかかった。

アルガスは曲刀を持った戦士と切り結んでいる。入り口の幅が狭いため、というべきか、戦士達の体が大きいため、というべきか、一対一の戦いにならざるを得ない。一人だけが相手ならば、アルガスの力でも持ちこたえることは出来る。

といっても、剣を振るい続け、技を掛け合っていれば、の話だ。

がつぷりと刃を受け止めてしまうと、純粹な押し比べでは競り負ける。

「んぐぐっ……！」

踏ん張っている足が少しずつ後ろへ下がる。

「アルガス君、頑張って！」

たとえ他の奴の鼻^{フア}肩とわかっていても、女の子に必死の声援を送られるのは悪い気分ではない。

「おおりゃーっ！」

アルガスは押し返し、再び斬り合いに持ち込んだ。現金なものである。

その間に、ナッシュは呪文を唱えている。

（サーシャとラムザ君はぼくが守ってみせるっ……！ここが正念場だ……！）

ナッシュの集中力は、いつになく高まった。

「暗雲に迷える光よ、我に集い、その力解き放て！」^{サンダラ} 雷撃” ーッ

！
ナッシュ得意の雷撃魔法、それも日頃より一段上の中級魔法が、更に数割増しの威力で戦士達に襲いかかる。

「うあっ！」

「ぎえーっ……！」

壁を隔てて悲鳴が聞こえた。一人は倒した手応えがあった。

一方で。ディリータとの連係攻撃^{コンビネーション}で一人を斬り伏せたラムザを、素手の拳士が羽交い締めにした。

若い娘ならば、いきなり抱きつかれれば動揺すると思ったのだろうが……、

「ん……？」

腕や腹など、細いのだが思いの外に固く引き締まっている。動揺したのは拳士の方だ。

一瞬の隙にラムザの脚が高く跳ね上がり、肩越しに拳士の顔面を

強かに爪先で蹴った。

よく鍛えられてぜい肉がない、という意味ではラムザの体は固いが、関節や筋肉は実に柔らかい。

「んがッ！」

鼻血を吹いてラムザを手放した拳士に、ディリータが追い撃ちをかける。

「お生憎様っ」

ところが、頭を青々と丸刈りにした髭面の男が、舌なめずりした。「オレ様の好みは『男のように強い可愛い女の子』だ。がっ、『女の子のように可愛い強い男』も同じぐらい好きだぞお、んー？」

ラムザは全身の肌に粟を生じた。

(うげっ……!!)

女と間違えられるのはしょっちゅうだが、男とわかった上で好色な視線にさらされる不快感はまた格別だ。

「俺が闘^やる」

ラムザと坊主頭の男との間に割って入ったのは、ガストンである。

「任せた！」

と、ラムザはガストンの肩を押した。

その頃、

「うわっ！」

アルガスはとうとう、石の防壁の外側に押し出された。

先程ナツシュの魔法をくらった拳士が、首や肩をコキコキと鳴らしながら、門をくぐり、ナツシュとサーシャに歩み寄る。

「よくもやってくれたなあ、おチビくん？」

ナツシュはサーシャを背に庇い、^{サンダーロッド}雷精錫で拳士に殴りかかった。

「やーっ！」

「ふっ」

拳士は人差し指一本で^{サンダーロッド}雷精錫を止めた。

これがただの棒ならば、ナツシュに勝ち目のないことは火を見る

よりも明らかだ。

が、錫の先端の黄水晶が眩い光を放つ。

バシーンッ！

強烈な魔法の雷が、指先を伝って拳士の五体を駆け抜けた。

「ぐっ……！」

よろめいた拳士の額を、

「えーいっ！」

サーシャが思い切り、櫓の杖で打ち下ろした。

「うりゃあっ！」

アルガスもどうにか、曲刀使いを叩き伏せたようである。

ガストンは剣を突きのに構え、滑るようにじわじわと足場を移動させながら、坊主頭の男との間合いを計っている。

「ふん、その細っこい剣がオレ様の鋼の肉体に通用するかな？」

「るっせーんだよ。色ボケ野郎は許しちやおかねー！」

シュンッ！

前触れなく。瞬間に、ガストンの剣が坊主頭の男の間合いを浸食した。

ガストンの突き技の切れは絶品だ。しかも今は、持久力を高め最^フ高速度を維持できる”加速”^{ヘイスト}の魔法がかかっている。

シャ、シャッ！

紙一重で、坊主頭の男は目にも止まらぬ二段突きをかわし……、いや。三段突きだ。

ドッ！

ガストンの細身の長剣は、見事、坊主頭の男の左胸を捉えた。――が。

「ッ……！」

切っ先は※二寸（※六センチ）とめり込まず、ぶ厚い筋肉の鎧に阻まれて止まった。引き抜くことも出来ない。

男は両手で白刃をつかんでガストンの手から剣をもぎ取ると、

「ぬんっ！」

膝に打ちつけて真っ二つにへし折った。

ガストンは地面に落ちていた天秤棒を拾う。

槍術、棒術でも矢張り、ガストンの十八番は突き技である。

ヒュンッ。ヒュ、ヒュッ。

坊主頭の男の豪腕をかいぐりつつ、続けざまに突きを繰り出し

……、

足を払う。と見せかけて手桶を棒の先に引っ掛け、髭面に泥水をぶちまけた。

「わぷっ」

坊主頭の男は目をつぶり、腕を振り回す。天秤棒が折れて、石畳に転がる音がした。

目を開けると――、ガストンの姿が視界から消えている。

と、男の足許に滑り込んだガストンが、短くなった天秤棒で力一杯、下から股ぐらを突き上げた。

「×△◇☆ゝッ！」

坊主頭の男は泡を吹いた。

背中を反らせて跳ね起きたガストンは、駄目押しに坊主頭の延髄を打ち据えて落とす。

「仕置き完了、っと」

これで、戦士達のうち、立っている者の人数の方が少なくなった。
「タイラー兄貴……ッ！」

残っている子分三人が、大男の周りに集まる。

（タイラー？”凶獣の角”……？）
ベヒーモス

どこかで聞いたことがあったような気がして――、ラムザはその名に思い当たった。

（よし！）

ラムザは勝負に出ることにした。

「ガストン、使え！」

折れた天秤棒を握っているガストンに、自分の長剣を投げ与える。

「おいっ!？」

長剣を受け取ったガストンは、怪訝な顔をした。

「一度僕に負けた奴相手に、剣など要らない」

ラムザは左右の掌しょうを構えた。

「何い？我が輩がいつ負けただど？」

「くいだおれ亭」の記録は塗り替えたぞ。食べ比べは僕の勝ちだ。力比べではどうかな？

さあ、来いッ！」

挑発に乗って、大男——タイラーがラムザにつかみかかってくる。
「うおっ!？」

まるで手品のようだった。

ラムザの手が羽根箒で撫でる程度に軽く肘と肩に触れただけで、身長にして※一尺ケルター（※約三十センチ）、体重にして倍の差はあろう大男が、つんのめって頭から投げ落とされたのだ。

「ほら、どうした」

タイラーは、今度は正拳でラムザの胴を突こうとした。が、するりとかわされ懷に入られた瞬間、何をされたかもわからぬうちに、尻餅について仰向けに倒れていた。

「うぬ!」

起き上がりながら、腕をつかんでねじり倒そうとすると、何故かタイラーの方が横に転がって頭を打った。

この”手品”の種は、重心の移動である。

ラムザは相手の力と体重、自分の体重の均衡バランスを利用して、筋力はほとんど使わずに相手の体勢を崩しているのだ。

臂力パワーに頼った戦い方をする敵ほど、進んで我が身を痛めつけるようなものだった。

かといって、ラムザが得意とするのは返し技だけで、積極的に打って出る持ち技は無い……などと思い込めば、手ひどい目に遭うことになる。これからのタイラーのように。

ゴキイッ!

ラムザは関節を極めながらタイラーの体を引き落とし、右肘を挫いた。

いかに筋肉を鍛えようと、防具を身に着けようと、関節は可動域以上に曲げれば折れる。防御力の高い敵に対しては、関節技は時に剣で斬り付ける以上に有効な攻撃になるのだ。

それでも闘志が衰えず、残った左腕で猛然と殴りかかってきたのはタイラーも流石と言うべきだろうが……、

ラムザはかわして、古井戸の縁に跳び上がる。再び突っかかってくるタイラー。ラムザはその左手首をつかんで前のめりに引き倒しながら、前回りに一回転して右足でタイラーの肩に乗った。

トンッ……。

半回転遅れて振り下ろされる左の踵で、首の付け根に鉄槌のような後ろ蹴りを叩き込む。

ゴッ！

ラムザはもう一回転して着地し、タイラーは地面に大の字に延びた。

この間に、棍棒を持った戦士一人が、ディリータとガストンにのされている。

「ううっ……」

残る二名は、最年少の少年と、その親戚の、十人の仲間内では痩せている方に入る青年だった。

彼らは、少年達が戦闘不能になった者には敢えて止めを刺していないことに気付いた。

そこで、

「ウオオォッ！」

比較的弱そうなアルガスに向かっていった。

アルガスは夢中で剣を振るう。

「うっ！」

「ぐあっ！」

二人の拳士は、大袈裟にやられたフリをしてばったりと倒れた。

「……?」

アルガスは、大した手応えもないのに二人が倒れたことを怪しんだが、

（それだけオレの剣技が冴えてるってことか!）

妙な自信を持ったようだ。

ところが、

「あっ……」

ナツシュが石畳の割れ目につまづいた弾みで、少年の鳩尾に雷精錫サンダーロッドを突いた。

「げふっ」

少年は本当に気絶する。

転んだナツシュの手から離れた雷精錫サンダーロッドは、更に、隣に倒れている青年の背中にコツンとぶつかって……、

ビシイッ!

電光をほとばしらせた。

「うっ……動けない者に、追い撃ちとは……」

青年は齒がみして、こちらもガクツと意識を失った。

「わざとじゃないってば〜っ!」

六人の少年少女達は一カ所に集合した。

ガストンが、ラムザに長剣を投げ返す。

「予想外に手間取っちゃったな」

「ああ。気付かれても良さそうだけど……?」

少年達は様子を窺いながら、早足で教会堂の前の広場まで来た。

ガストンは、いつでも撃てるように、弦を巻き上げた自動弓ボウガンを構えている。

「これはっ!?!」

広場に五、六人、緑の服や頭巾を着けた男達が倒れていた。既に絶命している。

「すげえ……!」

アルガスはゴクリと唾を飲み込んだ。

ほとんど争った形跡が無い。一撃必殺だ。

見れば、西の門から広場までの道沿いにも死体が転がっている。

ガストンは、使い慣れたものに近い剣を一振り見繕って、腰にはいた。

剣の持ち主は、一滴の血も流していないばかりか、近寄られた足跡さえないのに息絶えていた。

「まるで、”即死”^{デス}の魔法をかけられたような……？」

と、ナツシュが首を傾げた。

「”北斗骨砕打”か」

と、ディリータが言った。

”聖剣技”の一つで、敵の体内を巡る”気”の流れを寸断し、瞬時にして命を奪うという絶技だ。

「本当なんだな。彼が”聖剣技”の使い手だというのは」

ラムザはキュツと口を一文字に結んだ。

生きている者はいないかと見回すと――、視界の隅に動く影が映った。

ウィーグラフの韋駄鳥^{チヨコボ}、”三日月”^{クレセント}だ。日陰で水瓶の水を飲んでいる。

一昨年の夏にドラコニアの調教所で会った時から比べると、数々の実戦をくぐり抜けて、随分逞しくなったようだ。ラムザが訓練用にもらった”銀竜”^{シルドラ}と同年なのに、ずっと古株のような貫禄がある。

毛艶が良く、古傷には丁寧に手当てされた跡がある。繋がれていないのに大人しく主人を待っている姿勢から、信頼関係の深さがわかる。

（大事にしてもらってるんだ）

ラムザは何となく嬉しくなった。

が、ラムザの注目に気付いた”三日月”^{クレセント}は、頭を低く下げて背中
の羽毛を逆立て、警戒の唸り声を上げた。

「クウルルル……ッ」

ラムザは苦笑する。

（今は”敵”なんでもんな）

その時。教会堂の中で、断末魔の叫びがこだました。

「行くぞッ！」

両開きの扉の片方が壊れた表玄関から、少年達は石造りの教会堂の中に滑り込む。

？－3－〔6〕 砂ネズミの穴蔵 ？突入（後書き）

ランダムバトルでたまーに出くわすレア敵の中でも、特に濃ゆくて印象深かった”モンク十人組”。レギュラー雑魚としてあっちこっちに顔出させてみようかなと……。

それにしても、ムサイもん描いちゃったい！第一部はただでさえ野郎率高くて潤いが足りない（？）というのに……。は、早く女の子がいっぱいの第二部に進みたい……。

？－3－〔6〕 砂ネズミの穴蔵 ？ウィーグラフ

礼拝堂内――。

色あせて砂色になった絨毯が、流血に所々赤く染め直されている。斬り捨てられた亡骸が六体。

生きている人間は三人しかいない。

一人は長い銀髪、薄汚れているが身なりの良い男だ。手足を縛られ、祭壇の下に横たわって昏々と眠っている。

立っている剣士二人は、抜き身の真剣を引っさげ、一触即発の睨み合いを続けている。

「どうだ、ギスタヴ。いい加減に観念したらどうだ？」
息も乱さず言ったのは、骸旅団団長・ウィーグラフ。

「貴様の革命など上手いくものかッ！！」

オレ達に必要なのは思想じゃない。食い物や寝る所なんだ！それも今すぐになッ！！」

声をわななかせて言い返したのは、頬のこけた、目付きの険しい男。ウィーグラフよりも幾分年上だ。

骸旅団副団長・ギスタヴだった。

「お前は目先のことしか見ていない。重要なのは根本を正すことだ」

「……貴様にそれが出来るというのか？」

無理だよ、ウィーグラフ。貴様には絶対に出来ないッ！」

ウィーグラフは一步前に出、ギスタヴは半歩退く。

「言いたいことはそれだけか？ギスタヴ、おわかれだ」
ウィーグラフは両腕を自然に垂らしている。

「……”聖剣技”を使わないのか？」

「お前とは意見の一致したためしかなかったな。同志……とは言いが、苦難を共にした戦友の一人ではある」

「真っ向勝負で決着をつけようということか……、ふっ」

ギスタヴは薄く笑うと、

「なめるなッ！」

剣を右上段に、垂直に振りかぶった。

この構えからの打ち下ろしは、ギスタヴの必殺の大技だ。

鉄兜を割り、甲冑を着けていない人間の体などは縦真っ二つに泣き別れにしよう。

時が凍り付いたように、二人の男の動きが止まった。

明かり取りの高窓から差し込む光に、細かな砂埃が煌めきながら漂っている。

照りつける午後の太陽を、一片の雲が覆い隠し……、剣士達の間を隔てていた光の帯が、緩やかにかげって消えた。

瞬間、ギスタヴの長剣が唸った。

斬った。と見たのは、残像か。

ウィーグラフの剣が果物小刀ナイフほどの長さに縮んだ、ようにギスタヴの目に映ったのは、切っ先が真っ直ぐ彼に向けられていたからだ。

ドッ！

ウィーグラフの長剣は胸甲プレストプレートを突き破り、ギスタヴの背中まで貫通した。

「うあ……う……」

ギスタヴの口から呻き声と血がこぼれた。

ウィーグラフが長剣を引き抜く。

夥しい鮮血がほとばしり、ギスタヴはカッと目を見開いたまま、彼の足許に崩れ落ちた。

その時。

「ウィーグラフ！！」

凜、と透る少年の声が、天井の高い礼拝堂に響き渡った。

踏み込んできたのは、色白な背の高い少女に率いられた、四人の少年と一人の少女。

……ではない。先頭に立っているのは、女のように優しい顔立ち

をした、少年だ。

「侯爵様ッ！」

少年達の一人、アルガスが銀髪の男に駆け寄ろうとした。

「動くなッ！」

ウィーグラフはエルムドア侯に剣を向けた。

「貴様ッ！」

頭に血の上ったアルガスは、構わず前に出なかったが、

「よせッ、アルガス」

ディリータが左腕を横に上げて止めた。

侯爵とウィーグラフとの距離は、充分離れているように見えるが、
”聖剣技”ならば攻撃可能なのだ。

ラムザの長兄・ダイスダークも、”聖剣技”の使い手である。ラムザとディリータは、その間合いも、威力のほども把握している。ガストンは”聖剣技”の実態を知らないが、長年の喧嘩で培われた勘で、侯爵と自分達の置かれている危険を悟った。自動弓ボウガンの引き金にかけた指が動かせない。

ラムザは正面に構えていた剣を下ろし、ゆっくりと、ウィーグラフの間合いぎりぎりまで近付いた。

空気がぴんと張り詰め、そして――。

ブレッシャー

重圧が軽くなった。と少年達は感じたが、すぐに、そうではないとわかった。

ラムザが一人で受け止めたのだ。ウィーグラフの視線を。

ウィーグラフの全身から放たれる闘気が、ぴりぴりと肌を震わすようだったが、殺意の無いその感触は、ラムザには馴染み深くさえあった。

これと非常に近い”気”の持ち主を、よく知っている。今生きている人間の中で、ラムザが最も敬愛する人物――次兄・ザルバッグだ。

ウィーグラフもまた、自分を見つめるラムザの眼差しを真っ直ぐに受け止めた。

少年の瞳は秋の空のように澄んで、曇りのない強い意志をたたえている。

ラムザは気付いていただろうか。

ウィーグラフに殺気が無いのは、ラムザに殺気が無かったからだ、ということに。

長い時間が経ったのか、それとも、束の間の出来事だったのか……、

小さな雲が通り過ぎ、荒れた礼拝堂の中に光が戻る。

ラムザの紅潮した頬に、碧い瞳に、黄金色の髪に、日射しが輝いた。

眩しそうに、ウィーグラフは目を細めた。微笑^{わら}った、ようにも見えた。

「侯爵殿は無事だ。イグーロスへ連れて帰るといい」

ウィーグラフはエルムドア侯に向けていた剣を引いた、が、まだ鞘に収めはしない。

「……どういうことだ？」

ラムザは一步、前に進んだ。完全に、ウィーグラフの間合いに入った。

ディリータとガストンが身構える。

「侯爵殿の誘拐は我々の本意ではない。我々は卑怯な手段は使わないのだ。

……このまま私を行かせてくれたら侯爵殿をお返しするが、どうかね？少年」

アルガスは、剣を持っていない方の右の拳を握り締めた。相手が一人だけと思っただけ、ついさっき予想外にあっけなく二人の敵を倒したためか、気が大きくなっているようだ。

「ふざけるなッ！オレ達にかなうとも思うのかッ！」

ウィーグラフはアルガスを一睨みした。アルガスはびくり、と肩をすくめる。

「お前達はまだ、見習いの分際だろう」

ディリータが、ウィーグラフとラムザから目を離さずに言った。

「よせ、アルガス。彼は本気だ!」

少年達とウィーグラフは、油断無く互いに間合いを計りながら、そろそろと横歩きに移動する。

「う……う……」

祭壇の下のエルムドア侯が呻いた。

少年達が一瞬、侯爵に気を取られた隙に、ウィーグラフは礼拝堂から走り出ていった。

アルガスは追いつがろうとしたが、ディリータが扉の前に両腕を広げ、立ちはだかった。

「行かせるんだ、アルガス」

「なぜ止めるッ!？」

「放っておいても骸旅団は全滅する。わざわざ危険を冒す必要はない!」

「……ぐッ!」

アルガスは、剣を鞘に収めた。

クウェエエーッ。

チヨコボ
韋駄鳥のいななきが聞こえ、駆け足の足音が遠ざかってゆく。

「……はあゝ」

ナッシュはへたへたと座り込んだ。

「何だ、腰が抜けちゃったのかよ? なっさけねー奴!」

ガストンが軍靴バトルブーツの爪先でナッシュを小突いた。

「だって……、だってえー……」

ボウガン
ガストンは自動弓に番えていた矢を外し、ナッシュの頭の真後ろで弦を空振りさせた。

「うひいっ!？」

ナッシュは飛び上がる。

「立てるじゃねーか、コラ」

「ガ、ガストン。寿命が縮むよう!」

サーシャは、エルムドア侯の傍らにしゃがんだラムザの後ろから

声をかけた。

「“回復”^{ケアル}か”活性化”^{リジエネ}をかけて差し上げましょうか？」

「大丈夫。弱っているだけで特に外傷はない」

ラムザは、昏睡する侯爵の手足を縛めている縄^{ロープ}を切った。

エルムドア侯は、この時三十四歳。二十代後半と言っても通用しそうな若さだったが、今は垢付きやつれて、無精髭も伸び、幾らか老けて見える。

「この一週間ほど、ろくに水も食べ物も口になさっていないようだな。おいたわしい……。 ”減速”^{スロウ}をかけて、これ以上の体力の消耗を抑えた方がいい」

ラムザは櫟皮^{コルク}と蠟で封をされた精製薬の小瓶を開け、飲み薬を一口含んだ。

「あら！」

「おい？ お前、何やつ……て……」

アルガスは言いかけて、絶句する。

侯爵の、鼻筋の通った高い鼻をつまんで口を開かせると、ラムザは口移しに精製薬^{ポーション}を飲ませた。もう一口。

「さあ、イグーロスへ戻ろう」

ラムザは笑顔で、友人達を振り返る。

「お、おう……」

少年達は、何故とはなしに目を逸らして、咳払いしたり口笛を吹いたりした。

西日を浴びて、赤い砂礫の大地に見習い騎士達の影が長く伸びている。

「何だか、立ちくらみがするわあ……。過労かしら。あたし、今にも倒れちゃうかも」

サーシャはふらついて、櫟^{オーク}の杖にすがる。

「大丈夫？ 無理させちゃったかな。おんぶしてあげようか？」

ラムザが本気で心配するので、アルガスの分の荷物も担いだディリ

「タは、喉の奥でくっくつと笑った。

「あの薬は苦いぞ、サーシャ。一瓶に風見草セルセタ十株分の絞り汁が入っているんだ」

ナツシユは雷精錫サンダーロッドをつきながらも、自分の荷物をしょって歩きつづけていた。足の裏のまめは痛むが、心は軽い。

「そういえば、あのいかついお兄さん達、どこへ行ったんでしょね？」

侯爵や自分たちの応急手当をして教会堂の外に出ると、格闘集団ベレームス“凶獣の角”と称する十人の男達は影も形もなく雲隠れしていた。

かなりの深手を負わせた者もいたはずだが、死者は一人もいなかったらしい。

「さあなー。体力だけは牛鬼並みにありそーな連中だったからな
ー」

ガストンは自動弓ボウガンでトントン、と肩を叩き、首を捻る。

「あれ見たら、ばく、もう筋肉は諦めたよ……。魔法に専念することに決めた」

と、ナツシユは魔道士用の羽根付き帽子をしっかりと被り直す。

「当分動けないと思ったんだけどな。生け捕りって、加減が難しいなあ……」

ラムザはかぶりを振ったが、エルムドア侯を背負ったアルガスは得意満面だ。

「雑魚どもを取り逃がしたことぐらい、大した不始末じゃないさ。

侯爵様を無事救出した上、副団長のギュスタヴまで仕留めたんだからな！」

ガストンはアルガスの魂胆を見透かして、釘を刺す。

「ギュスタヴを仕留めたのはウィーグラフだぜ。戦果を水増し報告したって、ちよいと調べりゃバレるこった」

「そうだよ。僕らの誰に、ただの一突きでギュスタヴを葬り去ることが出来るものか」

そう言って、ラムザは改めてウィーグラフの实力に感服した。

たった一騎で反対分子の隠れ家アジトに乗り込み、ギユスタヴと二十人余りの戦士達をあっという間に処分したのだ。

（とてつもなく強い人だ。それに、潔い）

無償で侯爵を解放してくれたばかりではない。

その気になればラムザ達六人を片付けることも、簡単だ……とまでは言えないが、不可能ではなかったろうに。

「ウィーグラフ……、流石だな。僕のこと」少年”だって。一目で男だってわかったんだ」

「おいおい、そーゆーことを基準に感心するか？」

「え？だって、初対面で僕を女と見間違えなかった人なんて、ディリータを始め、数えるほどしかないんだよ！」

ラムザは溜め息を吐いた。

「悔しいな。それだけの眼力のある人なら、僕らの実力だって見抜いてたはずだ。」

あんなの、交換条件でも何でも無い。僕らの若さと勇氣に免じて目こぼししてくれただけさ。まるっきり、子供扱いされちゃった……。

ああいう人に本気で闘ってみたいと思わせるぐらいの、戦士になりたいなあ……」

「よく、そんな望みが持てますね。ぼくなんか、さっきの場面を思い出しただけでも心臓がバクバクしますよ」

ナッシュは身震いした。

（あの人を、”逆賊”として討伐するしかないのか？兄さんや僕らは……）

掃討作戦が本格化して旗色の悪くなった今、末端の単なる野盗と変わらぬ者達は、潮の引くように骸旅団から去り始めている。ギユスタヴを粛清したことで、その動きは一層加速するだろう。

ウィーグラフの手許には、どれほどの同志が残るのだろうか。彼がむぎむぎと追い詰められて死んでゆくことは、ラムザには残念に思われた。

バルバネスが贈った”三日月”^{クレセント}を駆って反乱軍を指揮するウィーグラフを見て、『虎に翼を与えて野に放ったようなもの』と亡父を非難する者達が、ラムザには腹立たしかった。

『翼を与えた』のはバルバネスでも、『野に放った』のは誰か。処遇を誤らなければ、その『虎』^{こちら}は騎士団の味方として活躍してくれたものを。

「やせても枯れてもエルムドア侯爵様、噂に違わぬ美男子でいらっしやるわね！早く、元気になったお姿を拝見したいわ」
サーシャは、アルガスの背で眠り続けるエルムドア侯の横顔に、つくづくと見とれる。

「エルムドア侯爵様が”銀の貴公子”なら、ラムザ君は”金の貴公子”ですね？」
と、ナツシュ。

「金の貴公子”ベオルブ伯！^{ゴージャス}豪華な感じね。ラムザ君も大人になったら、こういう渋くて素敵な小父様になるのかしら？」

サーシャがうっとりと言うので、ラムザは背筋がむずがゆくなった。
「だからさー、僕がドラコニア伯爵位を継ぐなんて確定してるわけじゃないってのに」

西南の方角に、一隊の騎影が現れた。旗印は、青地に白獅子の紋章。北天騎士団だ。

ラムザ達は、帽子や杖を振った。

騎兵隊が近付くにつれ、その先頭に、”黒翼の白竜”の旗もたなびいているのが見えた。

と、いうことは――。

整然と足並みの揃った韋駄鳥達^{チヨコボ}が、速歩から並足に速度を落とし、停止した。

見習い騎士達も立ち止まり、姿勢を正す。

若き北天騎士団団長が、鞍を下り、徐に弟の前にやってきた。

「とんだ無茶をしでかしてくれたものだな、ラムザ。

ダイスダーグ兄上始め、ラーグ閣下の重臣の方々が、これがベオ

ルブ家の血を引く者のすることかと、呆れ果てておいでだったぞ。
この兄の面目を潰すつもりか？」

言葉とは裏腹に、ザルバッグの目は愉快そうに笑っている。

自分は、兄の意図を間違って読み取りはしなかった。見事、期待に応えることが出来たのだ。そう思うと、ラムザの胸は誇らしい気持ちでいっぱいに満たされた。

「はい。申し開きの言葉もございません！」

ラムザはにっこりと、晴れやかに笑った。

「バカ者。叱られて嬉しそうな顔をする奴があるか」

ザルバッグはラムザの肩を抱き、こめかみに拳骨を押し付けた。

「すみません、兄さん」

騎兵達が、楽しみに笑い崩れた。

「ラムザ様は、ザルバッグ様の厳しいお叱りを受けて、いたく反省なさっているご様子だった……と、イグーロスへは報告しておきましょう」

騎兵隊の直接の指揮官と思われる若い騎士が、そう言った。

「ああ。よろしく頼む、バスカーク」

バスカークと呼ばれた騎士は、エルムドア侯を鞍籠に寄せさせ、
六人の見習い騎士達にも韋駄鳥チヨコボをあてがった。

「ラムザ、覚悟しておけ。イグーロスへ帰れば、兄上にも雷を落とされるぞ」

「どのような罰でも謹んでお受けしますよ。今夜の夕ご飯を抜かれる以外のことでしたら！」

ラムザがへその辺りをさすると、腹の虫が大きく鳴いたので、騎兵達はまたまたドツと笑った。

遮るもののない砂漠の空に、一番星が輝き始めていた。

イグーロス城内。ラーグ公の軍師・ダイスダーグの執務室にて――

六人の見習い騎士達は、うなだれて、身じろぎもせず立っている。

ダイスダーグは少年少女達の青ざめた顔を、一つ一つ順番に睨め付けた。

「いったい、どういうことだ？何故、ゼクラス砂漠へ行ったのだ？少年達を呼び出しに来た騎士の態度から、誉められるのではないことはわかっていた。

が、それにしても。

ザルバッグの取りなしもあつたはずなのに、ダイスダーグは心底から怒っているらしいのだ。

「黙っていたのではわからん。説明しろと言っている……」

重苦しくのしかかってくる空気を跳ね返すように、ディリータが答えた。

「自分がラムザを無理矢理、誘いました」

ディリータは顔を上げ、暗褐色の瞳をダイスダーグに向けた。

「そうなのか、ラムザ？ディリータのせいなのか？」

ラムザも顔を上げた。

碧い瞳は曇り無く、落ち着いている。

「いえ。自分の意志です。ディリータのせいじゃありません」
ディリータがすぐに言葉を被せる。

「いいえ、ラムザは嘘を言っています。悪いのは……、」

「僕を庇わなくていい。命令違反をしたのは僕の意志だ！」

ラムザはきっぱりと言い切った。

「……。皆が勝手気ままに振る舞うとしたら、何のために”法”が存在するのだ？」

我々ベオルブ家の人間は、”法”を順守する尊さを騎士の規範として示さねばならぬ。

ベオルブの名を汚すつもりかッ？」

「……すみません、兄さん」

ラムザは頭を垂れた。

「すまぬで済むと思うか？」

戦時に無断で持ち場を離れるのは、敵前逃亡と見なされても言い訳は立たぬぞ。

……死罪も覚悟の上だったのだな？」

友人達はラムザの顔色を盗み見た。

兄の目を見つめ、ラムザは肅然と答える。

「はい」

「バカ者ッ!!」

ダイスダーグは机に拳を叩き付けた。

ナツシュは肩をすくめ、ギョツと目を瞑る。

「事の重大さがわかっておるのか！」

侯爵殿の御身に万一のことあらば、災禍はランベリーの領民全てに、いや、畏国^{イヴァリース}一国にも及ぶッ！

お前達の首を斬って晒したところで、何の埋め合わせになるというのだッ!!」

「申し訳……ごいません……」

ラムザは唇を噛んでいる。

ダイスダーグは声の調子を和らげた。

「そればかりではないぞ。お前が命を落とせば、我がベオルブ家にとって……私とザルバッグにとってどれほどの損失となるか、わからぬわけではなからう。

軽々しく死を覚悟だなどと口にせぬことだ」

「ダイスダーグ兄さん……」

蒼白になっていたラムザの頬に、サツと赤みが差した。

と、――。

「もうよいではないか、ダイスダーグ」

案内もなく執務室に現れたのは、ダイスダーグと同じ年頃、黄土色の髪と顎鬚の、身なりの立派な男だった。

ラムザとデイリータはその声を聞くと、即座に跪いた。

他の見習い騎士達には、男が誰であるかはわからなかったが、かなり身分が高いだろうことは察せられた。ドラコニア伯爵であるダイスダーグを名前フリーストネームで呼び捨てに出来る者など、ガリオンヌ領内に何人もいない。

急いでラムザ達に倣い、跪く。

「侯爵を救出した功績は大きい。そう目くじらを立てなくともよい。」

功をあせる若い戦士達の気持ちもわかるというもの。かつては、我らもそうであった」

「……甘やかされては他の者達に対してけじめがつきませぬぞ、ラーグ閣下」

ガリオンヌ領の領主にして、王妃ルーヴェリアの実兄、ベストラルダⅡラーグ公その人だった。

「そなたがダイスダーグの弟か。楽にしてよいぞ」

ラムザは立ち上がり、面を上げる。

「なるほど、亡きバルバネス將軍にそっくりだな……。よい、面構えだ。」

そのありあまる若さと力は、城の警護だけで補えるものでもあるまい……?」

ラーグ公はダイスダーグに目配せした。

ダイスダーグは畏まる。

「……骸旅団せん滅作戦も大詰めだ。お前達の参加を許そう。」

いくつかの盗賊どもの根城アジトを一斉に襲撃する。その一つをお前達に任そう。

追ってザルバッグから沙汰があるまで、屋敷で待っておれ」

「……はい」

「もう下がってよいぞ」

「はい。失礼いたします……」

少年達はラーグ公とダイスダーグに敬礼し、入ってきた時よりは幾分安心した表情で、執務室を出て行った。

ラーグ公は手を後ろ手に組み、ゆっくりと窓辺に近付いた。

「全く、瓜二つだな。あの髪の色と目だけは、母親に似たようだが……父親に生き写しの”頑固者”になるだろうて……」

明るい、麗らかな日射しに溢れた庭園を見下ろしたのは、美しく刈り揃えられた木々や、春の花に植え替えられたばかりの花壇を觀賞するためではない。聞き耳を立てている者がいないか、確かめたのである。

「御意……。誠に、申し訳ありませぬ」

「氣にするな、ダイスダーグ。」

所詮、ギュスタヴもその程度の男だったということだ。侯爵誘拐がガリオンヌ領で行われた時点で、計画変更は避けようがなかったのだ……。

それに、侯爵の命を助けたのは事実。こちらの要求に対して侯爵側も妥協しないわけにはいくまい。結果として、貴公の弟君の行動は我々を有利な立場にしてくれた……」

「国王の命もあとわずか……。事を急がねば……」

ラーグ公はダイスダーグの肩に手を置く。

「ああ、期待しているとも。我が友よ……」

国王オムドリア？世の容態が急変したとの知らせは、妹である王妃から、いち早くラーグ公の許にもたらされていた。

先頃オリナス王子の誕生会の席で倒れて以来、順調に回復に向かっていただけに、側近達に動揺が広がっているという。

王子の後見人は未だ定まっていない。

国王亡き後、その後見人の座をめぐって、ラーグ公を立てる王妃派と、対抗候補であるゴルターナ公を後押しする元老院との間で衝突が起きることは、避けようがなかった。

水面下での攻防は、既に着々と進んでいる。

（それにしても、あの小僧……）

ダイスダーグは今し方の、ディリータの挑むような目付きを思い出した。

嬉しがらせの一つも言ってやれば単純に感動するラムザと違って、ディリータには何を考えているか底知れないところがある。

ラムザを庇った――と見えて、実は彼は真実を語ったのかもしれない。

ラムザは好奇心が強く、勇敢でもあるが、無為に危機感を楽しむ性質ではない。目立ちたがりでもない。率先して、ザルバツグの補助という役割を超えて功を上げようとしたとは思われないのだ。

ディリータが、ラムザが脚光を浴びるような舞台を整えてやったことは、十分に考えられる。

何でもお前の用意した脚本通りに進むと思うなよ、と、挑戦状を突きつけられたように感じたのだ。

いつからだったろう。彼がおよそ少年には似つかわしくない、醒めた、見透かしたような目でダイスダーグを見るようになったのは。

（去年の夏頃から……か？）

いや、もっとそれ以前、四、五年前からだったような気がする。

ダイスダーグは頭を振った。

（気の回しすぎだな。たかが十六の小僧を、買い被るものではない）と、思った。

「おっかなかったあ……。ウィーグラフも恐かったけど、また別の……権力者の威厳っていうか……」

中庭に面した外廊下を歩きながら、ナツシュは胸を撫で下ろす。

「心配ないさ。侯爵様を無事にお助け出来た以上は」

ディリータは笑った。

「それより！」

と、ガストンがアルガスを指差した。

「てめー、黙ってねえで一言ぐらい何か言えよな。」無理矢理誘った”ってな、てめーのことじゃねーか！」

「オレは一緒に来てくれなんて頼まなかったぜ。ゼクラス砂漠には、お前らが勝手に追いかけてきたんだぞ」

アルガスは苦りきって、何度も舌打ちする。

「やめなって、済んだことで言い争うのは」

ラムザが、睨み合った二人に微笑む。

「侯爵様にも大事ななかった。僕らもみんな生きて帰ってこられた。それでいいじゃないか。」

今は、これからのことに備えよう」

サーシャは首を傾げる。

「城市まちの警備じゃなくて、前線に参加できるっていうのは……ご褒美なのかしら？ 罰なのかしら？」

ディリータが答える。

「作戦の内容次第だな。功を立てられれば褒美だが……」

「それに、僕達次第だ。気を引き締めて頑張ろう！」

アルガスは、ラムザの身边に” 旨い話” の匂いを嗅ぎ取っている。

「兎に角、侯爵様を救出できたのもラムザ達のおかげだ。オレも手伝うぜ」

「有難う」

ラムザは素直に礼を言ったが、ガストンは勘繰っている。

「今度は、余計な真似すんじゃないぞ」

「しねえよ！」

ラーグ公直々のお声掛けりで承ることになった任務である。あだや疎かにはすまいと、ラムザは心に誓うのだった。

（そういえば、ハルのお父上に直接お声を掛けて頂いたのって、初めてだったんだ）

ラーグ公は、遂に一度も、ドラコニア城で傳育されている長男に会いに来たことがなかった。

（ハル……）

ラムザは、たった十一年で短い、寂しい生涯を閉じた友を偲んだ。

ラーグ公の長子・ハールーシャは、ラムザと妹のアルマの丁度中ほどに生まれている。

ドラコニア城に預けられた、聖歴一二〇〇年※天秤の月（※太陽暦九月下旬〜十月上旬）、七歳になったばかりだった。

「何、またハールーシャ様のお姿がどこにも見当たらないというのか」

「はっ、申し訳ありません」

ラムザとディリータを連れたバルバネスを、ザルバッグは恐縮して出迎えた。

ザルバッグは、この時二十歳。

昨年アカデミーの春に士官学校を卒業したばかりで、父の留守中ドラコニア城の管理を代行するようになってから、日が浅い。

この頃はまだ顎鬚を伸ばしておらず、面差しに少年っぽさが残っていた。

「だらしないぞ、ザルバッグ。ラーグ閣下の大切なお世継ぎをお預かりする責任を、軽く考えてもらっては困る」

「面目次第もございませぬ」

「まあ、仕方あるまい。儂もお探しよう。お前達はここで待っていないさい」

着慣れない正装をしたラムザとディリータは、庭の片隅の長椅子ベンチに腰掛け、バルバネスとザルバッグの戻りを待った。

灯台下暗し。

実は、ハールーシャは近くの大木の梢に登って、一部始終を葉陰から覗き見ていた。

廁トイレに行くとき見せかけて家庭教師役の司祭をまき、女中達メイドの目を盗んで厨房から持ち出した焼菓子タルトを頬張りながら、バルバネス達の到着を密かに待ち構えていたのである。

（バルバネス様とザルバッグの大嘘つき……！女の子じゃないか、

あれ！)

今日、この先一緒に勉強する友達が二人来るといふことは、ザルバッグから聞かされていた。そのうちの一人、金髪の方がザルバッグの弟だということも。

だが――。

着飾った小さな貴婦人達を見慣れているハールーシャでも、これほど可愛らしい”女の子”を見るのは初めてだった。

この当時のラムザは、父よりも母によく似ていた。色の白い、優しげな顔形は、芸術家が丹精込めて彫り上げた、象牙の彫像のように見えた。

「……」

引き比べて、ハールーシャは世辞にも可愛いとは言い難い子供だった。

本人はそれを、頬いっぱいのおそばかすや、大きすぎる獅子っ鼻や、くすんだ砂色の、固くてぼさぼさした髪の毛のせいだと思っている。

しかし本当は彼も、屈託なく笑いさえすれば、なかなか愛嬌があるのだ。

ハールーシャは態度が可愛くないのだった。

いつも口をへの字に曲げて、しかめっ面をし、他人の言うことには一々逆らう。癩癪持ちで、少しでも気に入らぬことがあると、物を壊したり、大仰に泣きわめいたりする。

もつとも、どちらが卵で、鶏であるかはわからない。

公の場では一丁前にお追従を言う小さな紳士淑女達が、陰では――ラーグ公の一人息子でなければ、誰があんなチンクシャと仲良くするか。

と嘲笑うのを聞いて、一度ならず傷付けられてきたハールーシャである。

今もハールーシャは、こんな夢みたいに綺麗な”女の子”が、みっともない自分を好くはくはないと思った。

どうせ嫌われるなら、表向き愛想良くされて裏で笑われるより、

意地悪をして目の前で泣かせた方が気が楽というもの。

(よし！)

ハールーシャは、手近にぶら下がっていた大きな糞虫の糞をはいだ。

ラムザとデイリータも、この時七歳。デイリータは年の暮れ、ラムザは年明けには、八歳になる。

じっと待っているのに退屈して、子供達は団栗や紅葉を拾い始めた。足許の地面を探るのに夢中で、頭上は見ない。

ハールーシャはそろそろとラムザの真上に移動し、裸にむいた糞虫を襟足に落とした。

「？」

ラムザがくすぐったそうにしていると、

「ちよっと待ってろ」

と、デイリータがラムザの服の中に手を入れて糞虫をつまみ出した。デイリータがラムザと随分親しいらしいことが、ハールーシャには面白くなかった。

ハールーシャは次に、丸めた韋駄鳥チヨコボの糞を落とした。

今度はラムザは察知して、素早く左手で受け止めると――この頃、ラムザは左利きだった――振り向きざまに投げ返す。

「うわっ!？」

僅かに届かず、糞は急な放物線を描いて地面に落ちたが、ハールーシャは肝を冷やした。

「あはは!」

ハールーシャにとって意外だったことに、ラムザが初めて彼に向けた表情は、明るい、棘のない笑顔だった。

「投げ返されて困るようなもの、投げるなよ」

「……ふん!」

韋駄鳥チヨコボの糞は一つきりしか持っていなかった。続けて、ハールーシャは焼菓子タルトを投げた。

ラムザはこれも難なく捕捉キャッチしたが、投げられたものが何であるか

知ると、サツと顔色を変えた。潰れた焼菓子タルトを懷につつこんで、子猿のようにするすると木を登ってくる。

またしても、ハールーシャにとっては意外な反応だった。韋駄鳥チヨコボの糞より実害が少ないはずなのに、ラムザが何故気色ばんだのか、わからなかった。

「君ねえ!」

人形のように端整な顔を、鼻と鼻をつき合わせるほどに近付けて、ラムザは文句をつけた。

「韋駄鳥チヨコボの糞は構わないけど! 食べ物を粗末にしちゃいけないって、母さんに教わらなかったの?」

爽やかな、石けんと芳香剤ボプリの香りにときどきしながらも、ハールーシャは胸を張った。

「ふふん、お前、そんな口を利いていいのか? 僕はハールーシャⅡラーグ。未来のガリオンヌ領主なんだぞ」

「だから何だとおっしゃるんです」

言葉遣いは改まったが、ラムザの細い、形の良い眉はいつそう吊り上がった。

「地上での身分がどんなに高くても、食べ物を食べずに生きていけない人間はいません。」

食べ物を粗末にするのは、命を粗末にすることです。お百姓さんや料理人コックさん達の努力と真心を粗末にすることです!

多くの人の上に立つお方なら尚更、こんなことはなさるべきではないと存じますっ!」

ハールーシャはかつて、同じ年頃の子供に、このように面と向かって理路整然と意見されたことはなかった。

恥ずかしいやら、腹立たしいやら、ハールーシャは真っ赤になつて怒鳴った。

「お、お前、生意気だぞ! 謝れ!」

ハールーシャがつかみかかると、ラムザはひらりと身かわす。

「間違っただけだと言っていないのに、何で謝らなくちゃいけないんです」

か！」

枝から枝を伝いながら、ハールーシャとラムザは喧嘩を始めた。と、いうよりはほとんど一方的に、身軽く逃げ回るラムザをハールーシャが執拗に追いかけているのだった。

ディリータは大人達を呼びに行った。

バルバネスとザルバッグ、それに衛兵や司祭や女中達メイドが、青くな
って走ってくる。

「父上」

俊敏なラムザの足が止まった。と、

「隙ありっ！」

ハールーシャが体当たりをかける。

「わ！」

ラムザは足を踏み外したが、

「うわっ！」

ハールーシャも体の均衡バランスを崩した。

慌てて、バルバネスがハールーシャを、ザルバッグがラムザを抱
き止めた。

「何事ですか、ハールーシャ様！」

「何があったのだ、ラムザ？」

「「だって……！」」

子供達はまだつかみ合わんばかりに、お互いを睨むのだった。

喧嘩両成敗。

ハールーシャとラムザは塔の最上階に閉じ込められて、聖典を五
頁写経ページさせられた。

「お前のせいだぞ」

「ハールーシャ様がいけないんです。それは……話し合いで解決せ
ずに、手を挙げたのは悪かったと思いますけど……」

格子窓から差し込む、冴えた秋の陽が斜めに傾いている。

「お腹空いたな……」

「食べる物持ってますよ」

「本当か！」

「さっき、ハールーシャ様が投げたお菓子」

「……。お前、韋駄鳥チヨコボの糞つかんだ手で取らなかったか」

「汚れてない部分、あげますから」

ラムザは焼菓子タルトを半分に分けて、ハールーシャに差し出した。ハールーシャは黙って、それを口に入れた。

「ディリータも欲しい？」

ラムザは扉ドアの小窓に飛びついて、階段に座布団クッションを敷いて腰掛けているディリータに声を掛けた。

ディリータはお目付役として、鍵を掛けた部屋の外に張り付いていた。暇なので、矢張り聖典を読んでいる。

「僕はいい」

「遠慮するなよ」

「いや……。遠慮じゃなくて……」

「そう？ 気にするほどのことかなあ」

ラムザは表面を少しだけ払って、焼菓子タルトをぼいと口に放り込んだ。

木母の甘煮ジャムのついた指をしゃぶってから、ふと、ハールーシャは尋ねた。

「ラムザの母上が、ラムザに言ったのか？ 食べ物を粗末にするな、って」

「はい。食事中にふざけると、すごく叱られましたよ」

「……。他には？ どんな時に叱られた？」

「自分より小さい子に怪我をさせちゃった時とか。夜中にこっそり虫取りに行った時とか。粉挽き小屋の屋根の天辺に上った時とか……」。

お洗濯したばかりの服を泥んこにして帰った時も、怒ることはありませんでしたけど……。それは大抵、すぐに嬉しそうに洗ってくれるんです」

「！ 母上が、手ずから洗濯してくれるのか？ 御飯を作るのも？」

「母ですよ。時々、ディリータのおばあちゃんや叔母さんってこともありましたけどね」

「寝る前にお伽話をしたり、おやすみの接吻^{キス}をしたりしてくれる？」

「はい」

「そうか……」

ハールーシャは椅子の上で膝を抱えた。

「僕は……、母上にも、新しい継母^{はは}上にも、叱られたことはない。優しくされたことも……。」

母上のことは、ほとんど知らないんだ」

ハールーシャは去年、実母を亡くしていた。それも、不義密通の罪による処刑という形で。

イグーロス城下では様々な噂が乱れ飛んだ。

ラーグ公が、神経質で陰険な妻に飽いて、無実の罪を着せたのだという説。

いや、公妃の不倫は真実で、ハールーシャとてラーグ公の息子かどうか、という説。

”幸いにして”ハールーシャは幼い頃のラーグ公そっくりに成長していたので、この点には疑いを差し挟む余地はなかった。

無論、幼いハールーシャの面前でかまびすしく噂話^{ゴシップ}を披露する者はいない。たまたま耳に入ったところで、話の半分も理解できない。ただ、皆が腫れ物に触るように自分を避けるのは、ハールーシャにも感じられた。

ラーグ公の、新しい公妃への寵愛ぶりを見て、早くも、ハールーシャは後継の地位から外されるのではないかと考える者もいる。

大人達の見方は、自然、その子供達に影響し、”未来のラーグ公”のご機嫌を取ろうとしていた取り巻き達の態度が冷たくなった。わがままいっぱいに育ったハールーシャは、周囲の注意を引き付けておく方法といえ、暴れることしか知らなかった。

ハールーシャをイグーロス城から離れさせ、落ち着いた環境で養育しようという話が出たのは、そのような折のことである。

ラムザも、前公妃の処刑とラーグ公の再婚のいきさつについては、よくわかっていない。

だが、ハールーシャの孤独はおぼろげながら感じ取った。

両親と祖母、叔母夫婦を黒死病で一どきに亡くしたディリータ、ティータと夏の間中一つ屋根の下で暮らしてきたのだ。肉親を失った兄妹の落胆を間近に見ている。

ドラコニア城では母の話はするなどバルバネスに言われた訳が、半分は納得出来たように思った。

「で、ラムザの母上は今どこにいるんだ？一緒にドラコニア城に来たんじゃないのか」

「今は……もう、いないんです」

ファティマは軍医として、バルバネスよりも一足先に是領^{セラモニア}に向けて出発していた。マンダレーナ村の家にも、ベオルブ家の城下屋敷にもいないという意味では、嘘ではない。

「そうか。じゃあ、僕と同じだな」

黒死病大流行の直後だったから、特に説明がない限り、『いなくなった』と言えば黒死病^{ペスト}の犠牲になったのだと受け取るのが普通だ。ハールーシャがしんみりと頷くので、ラムザは気がとがめた。

「ラムザ、お前……」

「はい？」

「お、お前は、ハッキリした奴だな。なかなか、気に入った、ぞ……」

最後の方は消え入るように言って、そっぽを向いたハールーシャを、ラムザは急にいじらしく、可愛らしく思った。

ラムザは正面に回って、ハールーシャの手をしっかりと握った。

「有難うございます。これから仲良くして下さいね！」

につこりと微笑み、あまつさえ、そばかすだらけの頬に口付けした。

「勿論、仲良くしてやるとも！」

ハールーシャはすっかり気を良くした。でれでれとやに下がり、鼻の下をこする。

「ふふん……バルバネス様も、回りくどいことをするなあ。僕に妃を薦めるのなら、そうと言えはいいものを……」

「お妃？何の話ですか？」

「とぼけるな、今更！お前、女の子だろう」

ラムザはぱちくりと目をしばたかせていたが、ハールーシャの言ったことが腑に落ちると、けらけらと笑い出した。

「やだなあ！男の子ですよ、僕」

「バカ言え！嘘つきはなあ、夜中に包丁小僧トンベリが来て、舌を切り落とされてしまうんだぞ」

「本当ですってば」

「ふん、まあいい。そういうことにしておいてやる」

扉の外ではディリータが、声を殺し、腹を抱えて笑い転がっていた。
狭い螺旋階段を、若い司祭がゆったりとした足取りで上ってきた。
鍵束の中から手探りで鍵を探し出し、部屋の錠前を開ける。

「あ、司祭様」

「何だ、フクロウか」

とハールーシャが呼んだのは、彼が十三世紀当時の畏国イヴァリースでは非常に珍しく眼鏡をかけていたことと、視力が弱い分小さな物音にも敏感なことから付いた、やや意地の悪いあだ名だった。

「オルキムと申します。読み書きと算数のお勉強を担当させて頂くことになっています。簡単な怪我の手当てもいたしますが……、そちらでの出番は少ないように祈っていますよ」

紗国人ベシヤの血を引いているらしい、浅黒い肌、縮れた黒髪の若い司祭は、ラムザに自己紹介した。微かに、嗅ぎ慣れた薬草の匂いがする。
「聞いてます。ザルバッグ兄上の、子供の頃からのお友達だそうですね。よろしく願います、オルキム先生！」

オルキムは、北天騎士団の千騎長の家の長男だった。が、病気の後遺症で極端に視力が落ちてしまったために、騎士になることを諦め、聖職者の道を選んだのだ。

城内礼拝堂の司祭は、祭儀や、傷病の治療を行うばかりではない。

城主の秘書のような仕事もするし、城に勤める騎士見習いの少年達の家庭教師役も果たす。

弱視であることや、母親が紗国人^{ベシヤ}であることを理由に、城内礼拝堂の司祭には相応しくないのではないか……と懸念する声もあった。だが、黒死病^{ペスト}による聖職者不足のため、勤勉で学識豊かなこと、ザルバッグと気心が知れていることなどの長所^{メリット}の方が高く買われた。

まずはもう一人の老司祭の補佐という形ではあったが、夏の終わりにドラコニア城に赴任してきた。

「ああ……、大きいびのびとして、とても読みやすい字ですね」
ぶ厚い眼鏡を掛け直して、ラムザの書き写した文章を確かめたオルキムは、微笑んだ。

「そうですか？ 字を誉められたの、初めてです」
書いたものをくすくす笑われるのが嫌で、ラムザは机上の学問には苦手意識があった。が、この一言で、オルキムの授業は頑張ろうという気になった。

「お二人とも、きちんと書けましたね。お仕置きはこれでお終いですよ。ザルバッグ様から、夕餉の前に湯浴みをしておいでなさいとのことです。ラムザ様とディリータ君も」

「はあい」

「え……一緒にか？」

ハールーシャがラムザの顔を見て頬を赤くしたので、ディリータはまた、笑いを噛み殺すのに苦労した。

「よし、行こう！」

ハールーシャはパツと立ち上がり、ラムザの手を引っ張って塔の小部屋を飛び出した。

「あ、走らないで下さい、危ないですよ」

やれやれ……とオルキムは心配したが、子供達がすっかり打ち解けた様子だったことには、一安心した。

が、この後――。

ハールーシャとラムザは風呂場でもう一喧嘩して、就寝前にもう

一度写経をさせられた。

ラムザ君ご幼少のみぎりの生活環境を想像してみました。こういうのって、女性や、既に子供のいる方でないとあまり面白くないでしょうか。あれ？もしかして、読んで下さってる方、男性の方が多い……？？

こんなものでも今後に関わる重要話題を含むので、番外編ではなく本編に入れています。

ところで、FFシリーズの”最恐”モンスターといえば、貴方は何を思い浮かべますか。私は、ずばりトンベリです！『トンベリに舌を切られるよ！』なんて、FF世界の子供なら本気で泣きますね、きつと。

真っ暗な夜のお城の廊下を、トンベリが包丁とランタンを提げて、無言でヒタヒタと歩いてくるところをイメージしてみてください……。恐くて夜中に一人でトイレに行けない子が続出でしょう！よしよし（笑）。

？－4－〔1〕 獅子と竜（ドラゴン） ？子供達の秘密

”初恋”はあえなく破れたものの、ハールーシャは、明るく素直な性格のラムザに懐いた。

自分が説教されても聞く耳持たぬハールーシャだったが、ラムザが連座で叱られるのは応えるようで、次第に大人しくなった。

ひと月もすると今度は、どこへ行くにも、何をするにも

――ラムザが一緒でなければ嫌だ！

と駄々をこねるようになって、ラムザとデイリータは随分と振り回されたものだ。

その日もハールーシャは突然、遠乗りに行くと言い出して、ラムザとデイリータだけを供に、ドラコニア城を飛び出した。

ハールーシャはむすつと押し黙って、ひたすらに韋駄鳥チヨコボを駆けさせた。町人達、農民達が挨拶するのに声も掛けず、目もくれず、村々をつつ切りハルバラ峠を越えて、だだっ広いマンダリア平原に出た。

「ハル様！そろそろ韋駄鳥チヨコボを休ませましょう！」

轡くつわを並べて叫んだラムザに、ハールーシャは返事をしない。かえって、韋駄鳥チヨコボの腹を蹴スリードって速度を増し、ラムザとデイリータを置き去りにした。

ドラコニア城からおよそ※二十里セクタ（※約十五キロメートル）、※半時（約一時間）以上走らせ通しだ。流石に、韋駄鳥チヨコボの足取りに疲れが見え始めていた。

ハールーシャの韋駄鳥チヨコボが岩につまずき、並足に歩調を落とした。
と――。

草むらに身を潜めていた灰山猫クアールが、好機と見てハールーシャに飛びかかった。

ハールーシャと灰山猫クアールは一塊になって、枯れ草の絨毯の上に落ちる。

ラムザとデイリータは刃引きの模造剣・”ナグラロク”を抜いて、
灰山猫^{クアール}を追い払った。

一匹だけの若いはぐれ雄だったようで、早々に諦めて退散する。

「ハル様、しっかり！」

ラムザはハールーシャを助け起こした。

腕に、四本の牙の跡が深く残っている。ほぼ間違いなく、毒に冒
されているだろう。

デイリータが、逃げたハールーシャの韋駄鳥^{チヨコボ}を連れ戻してきた。

「デイリータ、お医者さんと呼んできて」

「わかった！」

デイリータはハールーシャの韋駄鳥^{チヨコボ}を引いて、ハルバラ峠に引き返
そうとする。

「待つて。マンダレーナの方が近い！」

「……、いいのか？」

「だって、このままじゃハル様が……！」

「よし、すぐ戻る！」

デイリータはマンダレーナ村へ向かった。

「医者なんか来なければいい」

ハールーシャが泣き止まないのは、痛みのせいではないようだった。

「僕なんか、このまま死んじゃえばいいんだ。父上も継母^{はは}上も、き
つとそう思ってる……！」

ラムザは首を振った。

「そんなこと……、」

「……ないなんて、どうしてお前にわかる！ドラコニア城に預けた
のだって、僕を厄介払いしたかったんだ！」

三日後、ドラコニア城の近郊で大規模な狩りが行われる。

ラーグ公も来訪するとあって、ハールーシャはここ一週間ばかり
はしゃいでいた。ところが、今日になってラーグ公は、急用のため
欠席すると言って寄越したのである。

「一年だぞ。丸一年も放ったらかしだ！」

会いに来てても下さらないし、遊びに来いともおっしゃらない！いくらお忙しくたって、一度も、顔を合わせる暇もないなんてこと、あるもんか！」

「ハル様、落ち着いて。じっとしてないと、毒が回ります。灰山^{クア}猫^ルの毒は、死ぬほどの猛毒じゃありませんけど……、」

ハールーシャはラムザの胸を叩く。

「ラムザ、お前まで気休めを言うつもりか？」

僕がどれだけ勉強したって、剣の稽古をしたって、何の役にも立たない。

父上は、僕なんか要らないんだ。新しい母上に弟が生まれたら、絶対、弟に公爵を継がせるに決まってる！」

「ハル様……」

ラムザはハールーシャを抱き押さえた。

「気休めは申しません。ハル様の父上と継母^{はは}上^はがハル様を好きか嫌いか、僕にわかるわけがありません。

でも、僕は……、少なくとも僕は、ハル様が死んじやったら、とても悲しい……！」

ラムザは大粒の涙をこぼしていた。

「ラムザ……」

ハールーシャは大人しく眠った。毒が効いてきたのかもしれない。

※一刻半（※約四十五分）経って、ディリータが戻って来た。

ハールーシャの韋駄鳥^{チヨコボ}に乗ってきたのは――、一年ぶりに会う母・ファティマである。

ファティマはすぐ、ハールーシャに解毒薬を飲ませ、噛み傷と打ち身の手当てをした。

「母さん、有難う」

「ラムザ」

ハールーシャの治療が一段落して、母子はゆっくりと向かい合った。ディリータは気を利かせて、韋駄鳥^{チヨコボ}に水を飲ませに行った。

「父さんのお許しなく会いに来てはいけなかったはずよ」

「僕が会いに行ったんじゃないよ。デイリータが呼びに行って、母さんがここに来たんだ」

「あらまあ、屁理屈を覚えたのね。アルマみたい。これは、母さんが一本取られました」

ファティマはラムザの頬に触れた。

「でも……、ここからなら、レーゲンデまでもそんなに遠くないわね。」

レーゲンデ大修道院に行けば、お坊様の中に、白魔法や薬を使える方が何人もいらしたでしょうに。

マンダレーナ村の近くには、医者わたし一人しかいないのよ。
ハールーシャ様を危険にさらしても良かったの？」

「もし、母さんが留守でも、薬草園に入って毒消しと風見草セルセタを取ってくることは出来るでしょ？知らない街でお医者さんを探すより……、」

ファティマにじっと見つめられて、ラムザはうつむいた。

「……。ごめんなさい。母さんに会いたかったんだ」

十日ほど前、ファティマがマンダレーナ村に戻ったと聞いた。その日のうちにも会いに行きたかったのだが、バルバネスは、少なくとも狩りが終わってからだと言った。

「母さんは？母さんは、僕に会いたくなかった……？」
顔を上げたラムザの眼が潤んでいる。

「……、母さんだって、毎日、ラムザに会いたかったわ」

ファティマは、ラムザをきつく抱き締めた。

「大きくなったのねえ！ちゃんと、御飯食べてる？」

「うん！」

「父さんとザルバグ様のお言い付けを守ってるわね？」

「うん。……だいたい」

「ハールーシャ様には仲良くしていただいてるの？」

「うん、とっても。母さんは……、」

少し痩せたみたいだ。とは、切なくて言えなかった。

「母さん……、母さん……」

ラムザは母の胸に顔を埋めて、久し振りに、薬草と石けんの匂いを思う存分吸い込んだ。

ファティマは、一年分の埋め合わせを今すぐしたいというように、ラムザの柔らかい金髪に頬ずりし、何度も、頬や唇に口付けした。

「ラムザの母上……か？」

ハールーシャがうつすらと目を開けた。

「そっくりだ。いないんじゃないのか……!?」

ラムザが返答に窮していると、

「そうですよ。いないことになっている、ラムザの母です」

ファティマは、にこりと笑ってハールーシャに挨拶した。

その夜、ハールーシャの寝室で。

「ハル様。本当は、こういうのは良くないんですよ」

「……。お前、どうして一緒に布団で寝ちゃいけないか、わかってるか」

「ハル様が、色仕掛けで僕にたぶらかされてるんだって、言う人がいるんです」

「“色仕掛け”って何だか知ってるのか？」

「^{かおかたち}顔貌が綺麗なのを利用して他人に気に入られる、ってことでしょう？」

自分が悪く言われるのは構わなかったが、ラーグ公の再婚を非難する者の一部が、

——親子揃って美しいものに弱い。

と、ハールーシャのことまで軽蔑するのが嫌だった。あるいは、——卑しい女の血を引いているから。

と、母や、会ったことのない祖母を侮辱されるのが嫌だった。

「ふふん。どうやらお前は、まだまだ認識が甘いな」

「ハル様はご存じなんですか」

「うん。この間、ちゃんとザルバッグに聞いてきたぞ。教えてほし

いか」

と、ハールーシャは威張った。

「教えて下さい」

「いいだろう。あのなあ、仲の良い男女が一つ布団で寝ていると、子供が出来るんだぞ」

「そうなんですか!？」

そういえば母さんも、父さんが来てる日はアルマや僕に添い寝してくれなかったっけな……と、ラムザは思い出した。

アルマが、夜中に目を覚ますと必ずラムザの布団に潜り込んでくる自分のことは棚に上げて、

——父さんってば大人なのに、一人で寝るのが怖いのか？ 恥ずかしー。と責めると、

——ははは。大人になっても、どうしても弱い所というのはあるものだ。すまんが、今日も母さんは借りるぞ。

と、バルバネスは笑って答えたものだ。

……と振り返って、ラムザは急に不安になった。

「あの……、僕、しょっちゅう母や妹と一緒に寝てましたけど……」

「それは、お前がまだ子供だからいいんだ」

「ああ、そうですね。十六歳にならないと結婚は出来ないですものね。

……。一緒に寝ることの意味はわかりましたけど。それで、ハル様と僕は男の子同士で、子供同士なのに、何が問題なんでしょう?」
「うーん、それがどうも、フメイリヨウなんだ。実際は何も問題はないのだけれど、ジャスイをする者があるんだ、というようなことを言っていたな。あ、ジャスイというのは、意地の悪い疑いということだぞ」

「疑いって? 僕が矢っ張り女の子じゃないかってことですか?」

「そんなところだろう」

「バカげてますよ。疑う人がいたら、いつでも一緒にお風呂に入っ

てあげるのに」

「全くだ。ザルバッグも、そういう噂は気にするなと言っていた。ただし、騎士の家の男子が八歳にもなって、一人で眠れないのは恥ずかしいことだとも、言っていたな」

「それは、その通りだと思います」

ハールーシャは頬を膨らませた。

「別に、一人で寝るのが怖かったり寂しかったりして、ラムザを呼んだんじゃないぞ！

ここなら、タブンをハバカル内々の話が出るからだ」
と、掛け布団を頭まで被って、声を潜めた。

「何です」

ラムザも声を潜め、ハールーシャに顔を近寄せる。

「ラムザの母上に、もう一度会わせろ。いや、一度つきりというのじゃなくて……、何度でも、また会いたい！」

ハールーシャはもじもじと、照れくさそうに言うのだった。

「駄目ですよ！」

「何でだ？ だいたい、ラムザの母上はどうして、バルバネス様やお前と一緒にドラコニア城で暮らさないんだ？」

「お聞きになったでしょう、母の話を？ 父と母の結婚を認めたがらない人がいっぱいいるんです」

ファティマは氏なも無い孤児である。

たとえば形ばかりどこかの貴族の養女に納まったとしても、ロマンダ呂国系の黄金の髪と碧い瞳が栗色になるわけではない。

ロマンダ呂国系の孤児の出自といえば、相場は決まっている。ラーナー海峡の海賊に襲われた村娘や、”出稼ぎ”に來た水商売の女性が産み捨ててゆくのだ。いずれにせよ、”罪人”の子であるという偏見が根強かった。

ファティマの容姿の美しさも、それをひさいでいた母親から受け継がれたものと推察され、賞賛よりは輕蔑の材料となっていた。

また、ファティマがバルバネスに出会った頃は、特に、ロマンダ呂国系住

民に対する不信感の強い時期だった。呂国軍のフォボハム領侵攻に内応したという嫌疑をかけられていたのだ。

「周りの反対を押し切って強引に一緒に暮らせば、父の評判を落とすだけですし、母も気詰まりな思いをするだけです」

「強引でも何でも、一遍ドラコニア城に来てみればいい。実物のラムザの母上に会えば、みんな、きっと好きになるぞ。」

ラムザの母上はすごい美人だ。だけど、綺麗だけじゃないんだな。楽しくて、あったかい感じがする！」

「有難うございます。そうだといいいのですけど。でも、大人には色々仕事があるんですよ。」

母は、城で暮らすのに必要な作法とか、舞踏や文学とか、あるいは領地の切り盛りの仕方とかは、何も知りません」

「これから覚えればいいだろう」

「ある程度は、その通りです。ハル様のお祖父様や父上、その家来の皆様のご意見も、そうでした。母がどこかの貴族の養女になって、貴婦人としての教養をすっかり身に付けたなら、”伯爵夫人”として認めよう……。」

でも、それでは※”羽根を切って韋駄鳥チヨコボを殺す”（※ 角を矯めて牛を殺す）ようなものだというのが、僕の両親の考えなんです。

母には折角、医者として磨いてきた技がありますし、仕事にやり甲斐も持っています。逆に、着飾って舞踏会ダンスパーティーに出たりすることには全然興味ないですし。

たとえば宴会の計画を立てて、実際にお客様をおもてなしするのは、エスト伯母に頼んだ方がずっと上手くやってくれます。それじゃあ何のためにわざわざ苦手なことを勉強しなくちゃならないのか、わからないでしょう。

もし母がドラコニア城で暮らせる時が来るとしたら、母をしきたりの型に押し込めるのではなくて。母の個性を活かしたまま母が父の側にいられるように、しきたりの方を見直すことが出来た時です」

「……」

ハールーシャは面白くなさそうに黙り込んだ。

「……ラムザが一生懸命勉強するのは、母上のためか？ラムザの評判が良くなれば、ラムザを生んだ母上を見る目も良くなる」

「はい……。理由の一つではあります」

「僕の場合は、二の次か」

「そんなこと言ってませんよ」

「だったら、ラムザの母上に会わせろ！」

「しーっ……」

ラムザはハールーシャの口を押さえた。

見回りの衛兵の足音が遠ざかってから、手を離すと、ハールーシャは小声で怒った。

「ずるいぞ。お前だって今日、僕をダシにして母上に甘えたくせに！」

「……申し訳ありません……」

それを言われると、ラムザは後ろめたい。

普段、分別くさくラムザとハールーシャの世話を焼いているディリータも、韋駄鳥チヨコボに水を飲ませて帰ってきた時、目蓋を泣き腫らしていた。

ディリータは母に甘えたくても、もはやこの世で相見えることは叶わないのだ。ファティマに抱き締められると、主人達の手前、大っぴらに喜びはしなかったが、いつまでも自分から離れようとはしなかった。

彼らはいずれも、まだ母が恋しい八歳の子供なのだった。

「ラムザがいい子にしていられるのは、父上と母上に可愛がってもらえるからだ！」

僕は……、僕が少しくらい、ラムザの母上に優しくしてもらったって、減るもんじゃないだろう！ケチ！」

「困りますよ……。隠れてハル様にお会いしたなんて知れたら、母の立場を悪くするだけじゃありません。僕だって、ハル様のお側にいられなくなるかもしれませんよ」

「うーん……。それは困る」

「我慢なさって下さい。僕もこれからは、母に会いたくても、ちゃんと我慢します」

腕組みして考え込んだハールーシャは、ぽんと手を打って眉根を開いた。

「お、そうだ！ マンダレーナ村まで会いに行けば、人目につく。今日みたいに、場所を決めて、ラムザの母上の方からこっそり会いに来てもらえばいいんだ。お前も、バルバネス様との約束を破ったことにはならないぞ」

「それ、昼間、僕が母に屁理屈だって言われたんですけど……」

「とにかく、”その方向で検討”しろ！ 嫌なら、今すぐバルバネス様に言うぞ。ザルバッグにも言うぞ。城中のみんなにラムザの母上のこと言い触らして、会わせるまで暴れてやるぞ」

と、ハールーシャは、子供には広すぎる天蓋付きの寝台を飛び出して、室内履きをつっかける。彼の場合、脅しでは済まない。

ラムザは、ハールーシャの寝間着の端をつかまえた。

「わかりましたよ！ 仕方ありません。ディリータと相談してもよろしいですか？」

「うん、許す。ディリータはお前の参謀なものな」

「相棒ですよ」

「どっちでもいい。よきにはからえ」

ラムザを承諾させると、ハールーシャは満足して、さっさと先に眠ってしまった。

ラムザはあれこれと、段取りを思い巡らせた。ハールーシャのわがままから出たこととはいえ、母に会いに行くことを考えるのは楽しくて、なかなか寝付けなかった。

三人の少年達には、秘密が出来た。

休日の朝早く、少年達がいそいそと庭の花を摘んでいて、

――今日はアルマお嬢様に会いにいらっしゃる日ですか。

と、冷やかされる。という光景が、ファティマがマンダレーナ村にいる間は月に一度程度、ドラコニア城で見られるようになった。

クラバーティン修道院にいるアルマとティータに面会に行き、その往きか帰りの道の途中でファティマと待ち合わせることが多かった。

ファティマが季節毎の野草や木の実を採集するために遠出をするのは、珍しいことではなかった。ファティマの送り迎えには、昔馴染みのワインバーグ夫妻が協力してくれた。

——ファティマ小母様にあげるんだぞ。アルマはついでだぞ。と、ハールーシャは言い訳していたが、口実のはずのアルマとの面会も、いつの頃からか楽しみになっていったようだった。

後になって思えば、これは大変な冒険だった。ドラコニア城とクラバーティン修道院、ファティマと待ち合わせる丘や草原、三点を結ぶ道程は※三十里セクタ（※約二十三キロメートル）を超えた。人目に触れて秘密の漏れることも、少年達やファティマが事故に遭うこともなかったのが、不思議なほどである。

もしかするとバルバネスが、気付いていて”密会”を黙認し、陰から見守らせていたのかもしれない。と、ラムザは考えることもある。

ファティマと一緒に薬草や山菜を摘んで、青臭い草の香りに染まって帰って来る子供達に、バルバネスが何も言わなかったことの方が不自然な気がするのだ。

ハールーシャは見違えるほど熱心に勉強するようになった。

今や、彼には励みがある。

課題をやり残して、貴重な休日時間を潰されたくない、というだけではなかった。

「僕が公爵になったら、ガリオンヌ領内では、髪や肌の色のことで領民同士の争いは起こさせない。必ず、ラムザが堂々と母上と一緒に暮らせるようにしてやるからな」

繰り返し、ハールーシャはそう口にした。

「いいんだよ、ハル。僕と母さんのことは気にしないで。こういうのは、とっても長い時間のかかることなんだ」

いつしか、他人の耳のない所では、ハールーシャとラムザは対等な口調で話し合うようになっていた。

「いいもんか。絶対だぞ！」

ハールーシャは明るく言い切ったが、

「でも、僕はガリオンヌ公爵にはなれないかもな」

溜め息を吐くかわりに、草笛を鳴らした。

「継母^{はは}上に、赤ちゃんが出来たそうだ。

もし弟だったら……いや、妹でも、父上は継母^{はは}上の子供に公爵位を継がせようとするかもしれない」

聖歴一二〇四年の、暖かい春の日だった。

「そんなことないよ。ハルはどこに出しても恥ずかしくない、立派な公位継承者だもの」

「わからないぞ。オムドリア陛下とバドリナス様の例だってある」

王太子バドリナスの戦死。デナムンダ？世王の病死。病弱な第二王子・オムドリアの即位と、ラーグ公の実妹・ルーヴェリアとの結婚――。

聖歴一二〇一年から二年にかけて起こった一連の出来事に、謀略の匂いを感じ取る者もいた。ハールーシャの実母が王太子妃の縁者だったことから、前公妃の処刑にも改めて疑惑の眼差しが向けられていた。

「もし公爵になれなくても、屋敷や家来なんか、全部弟のものになったって構わないんだ。だけど……ラムザだけは、ずっと僕の側にいてくれるよな？」

気弱に目を伏せたハールーシャの肩を、ラムザは力強く叩いた。

「大丈夫。いつでも、何があっても、僕はハルの味方だよ」

「そうか。なら、安心だ」

そばかすに加えて、近頃はにきびも出来るのを、本人は気にしているようだった。が、ラムザは、最近のハールーシャはとても気持

ちの良い笑顔を見せるようになったと思う。

ドラコニア城の城壁を見上げる丘に並んで座り、ラムザとホール
ーシャは草笛を吹いた。

公妃は、※天蝸の月の末（※太陽暦十一月中旬）に出産した。
男子だった。

うーん、離れているからお互いに恋しく思えるのでしょうか。元氣小僧と母ちゃんなんて、四六時中顔を突き合わせてたら日夜果てしない激烈バトルを……（笑）。

「ちゃんと御飯食べてる？」というのは、筆者が一人暮らしをしていた頃の母の挨拶でした。時間やお金がなかったり、気分が落ち込んだりしている時、いい加減なものを食べていると体力氣力が衰えて悪循環になりがち。しんどい時ほど、しっかり食べることの効果を実感しました。（この作品、食べるシーンが多いかも？腹ペコ時代に構想したから……）

私も多分、息子どもと離れて暮らすようになったら同じこと訊くんだろうなあ……。元氣な時は母ちゃんなんかうざったいと思って好き勝手にやってればよろしい、こっちだって息子元氣で留守がいい（?）。元氣でない時こそ、思い出してメシでも食いに来てくれればな、と思います。

？－4－〔1〕 獅子と竜（ドラゴン） ？毒矢

明くる聖歴一二〇五年、正月――。

年始早々、ドラコニア城に近いラーグ公の狩猟林の一つで、ガリオンヌ領内の主だった貴族達を招いて狩りが催された。

年賀の遊興というよりは、合同の軍事演習の色彩が濃厚だった。

”五十年戦争”といっても、足かけ五十三年間のうち大半の期間は、散発的な局地戦が起こるだけだった。

ところが、デナムンダ？世の病死した一二〇二年から、戦況は急変していた。

新王・オムドリア？世は病気がちで意志薄弱。一方のオルダリーア鷗国軍は、老齡のヴァロワ？世に代わって、精力的なラナード王子を総大将に戴き、破竹の勢いでゼラモニア是領からイヴァアリス畏国軍を一掃した。

それまではゼラモニア是領・ゼラモニア鷗国境周辺だった戦場が、一二〇三年にはゼラモニア是領内から、ゼラモニア是領・イヴァアリス畏国境周辺となり、一二〇四年には遂に国境線の内側、ゼラモニアゼルテニア領やランベリー領が戦火に蹂躪されることとなった。

ゼラモニア是領、ランベリーの穀倉地帯をオルダリーア鷗国軍に押さえられたことで、戦力の天秤はいよいよイヴァアリス畏国に不利に傾いた。

イヴァアリス畏国側は総力を挙げての防衛戦の様相を呈し、一二〇四年には平民の義勇兵団も相次いで駆り出されている。骸騎士団が結成されたのもこの年だ。

今回の狩りは、騎士団の士気を鼓舞し、団結力を強めるための行事らしい。

「父上に日頃の鍛錬の成果を見ていただく好機チャンスだな」

「そうだよ。頑張ろうね、ハル！」

ハールーシャとラムザ、ディリータも、弓矢と真剣を携えての参加を許された。

しかし、いざ狩りが始まってみると、少年達はほとんどただの見

学者扱いだった。

この日の獲物は野兎や野豚^{ボーキー}ではなく、竜^{ドラゴン}や牛鬼^{ミノタウロス}などの、^{モンスター}寧猛な魔獣^{モンスター}なのである。少年達にはまだ荷が勝ちすぎるとして、バルバネスが近付けさせなかったのだ。

「つまらないな！父上の近衛騎士団の方に行ってみよう」

ハールーシャはラムザとディリータを連れて、勝手に北天騎士団の隊列から離れた。

雲の多い天気だった。

ラーグ公の近衛騎士団の巻き起こす砂煙が、透かし織りの布のように、光線を浴びて揺れ動いている。

少年達のまたがる三頭の韋駄鳥^{チヨコボ}は、草地を横切り、疎林に分け入った。

「ハル。待って」

急に、ラムザがハールーシャを呼び止めた。

茂みの中に、何か気配を感じる。

「誰かいるのか！」

高く、澄んだ子供の声が、木立と草むらに吸い込まれた。小鳥が飛び立つ。

ラムザは半弓を引き絞る。矢尻と視線が油断無く、流れるように緩やかに移動し……、一点へ照準を定めた。

ディリータとハールーシャは半信半疑だったが、同じ場所に向けて弓矢を構える。

（気のせい……か？）

他の二人の迷いを感じ取ったラムザは、威嚇のつもりで、ほんの少し狙いを外して撃った。

と、――。

ヒュッ。

一条の流星がハールーシャの韋駄鳥^{チヨコボ}の腹に突き刺さった。吹き矢だ。

「クウエエエッ！！」

「うあっ!？」

首と翼を激しく振り、韋駄鳥チヨコボは暴走する。ハールーシャは弓矢を取り落とし、韋駄鳥チヨコボにしがみついた。

「ハル！」

ラムザは即座に自分の韋駄鳥チヨコボの腹を蹴り、ハールーシャを追った。

この間にディリータは、吹き矢の発射された地点を狙い澄まして、矢を放っている。

くぐもった呻き声が聞こえ、黒装束の曲者が、驚くべき敏捷さで逃げ去ってゆく。

ディリータは番えた二の矢を空に向けた。これは、曲者を仕留めるためではない。

パア……ン！

炸裂音が丘にこだまし、赤い煙の花が上空に咲く。

遭難信号の魔法玉を打ち上げたのだ。

「ハアッ」

ディリータも韋駄鳥チヨコボを駆けさせた。

もうはや、ラムザとハールーシャの姿を見失っている。草木を踏み荒らした跡を辿った。

ハールーシャの韋駄鳥チヨコボは無茶苦茶に走った。

韋駄鳥チヨコボもハールーシャも、木の枝や枯れ葉に引っ掛かって、小さなかすり傷だらけになっている。それを追尾するラムザも。

波立ち騒ぐ川の響きが聞こえる。

この先は、滝だ。

「ハル、跳べ！」

駆け足でハールーシャと韋駄鳥チヨコボを並べたラムザが、腕を伸ばした。

ハールーシャが鞍から飛び下りる。ハールーシャを受け止めながら、ラムザも草むらに転がり落ちた。

クウウウーウエエー……！

ハールーシャの韋駄鳥チヨコボの絶叫と、大きな水飛沫の上がる音が、滝壺に飲み込まれた。

ラムザの韋駄鳥チヨコボは引き返してきて、幼い主人に心配そうにくちばしをすり寄せる。

「う……」

「大丈夫か、ラムザ」

「うん。ハルは……?」

「ちょっと足をひねった。でも、大したことない。助かったよ」
ディリータの打ち上げた信号弾の煙が、空にたなびいている。

「良かった……」

立ち上がったラムザの左腕と、左の太腿に、自動弓の矢が突き立った。

「待て！人だ！」

ハールーシャが叫ぶ。流れ矢だと思ったのだ。
が、続けて、今度はハールーシャの脚を矢がかすめた。

（狙って撃っている!?!）

ラムザは、ディリータが持っていたのと同じ、信号用の魔法玉を茂みに放り込んだ。ハールーシャも、信号弾を投げつけた。

これは、最近機工士達が発明した飛び道具だ。予め魔法力を封入しておけば、魔法の使えない人間でも炎や雷による攻撃が出来る。
少年達が携帯していたのはただの信号弾で、音と煙は派手だが、殺傷力は無いに等しい。

が、目くらましにはなる。

「乗って逃げろ！」

ラムザは真剣を抜き、煙幕の中に目を凝らす。

二人乗りでは韋駄鳥チヨコボの速度スピードが落ちる。ハールーシャを確実に逃がし、ラムザは、ディリータや大人の騎士達が駆け付けるまで、少しでも時間を稼ぐつもりだった。

「駄目だ！一緒に……、」

「行けッ、早く！」

体が痺れ、平衡感覚が狂ってくる。

（毒……?）

そういえば、ハールーシャの韋駄鳥チヨコボの暴れ方も尋常ではなかった。
ラムザの韋駄鳥チヨコボは気丈にも、雛を庇う親鳥のように、ラムザの前に立って翼を広げた。

その胸に、喉に、立て続けに矢が刺さった。

「クウアッ！」

「イージス！」

”破邪の盾”の名の通り、主人を邪なものから守って、ラムザの韋駄鳥チヨコボは倒れた。

「ラムザーッ。ハル様ーッ」

デイリータの声は、まだ遠い。

ハールーシャはラムザの弓を拾って応戦したが、手応えがなかった。

ラムザの右肩の骨を、矢が砕いた。

「う……！！！」

長剣が手から離れた。

（いけない！ハルを、ハルを守るん……だ！）
激痛で意識が遠のく。

……イ……イイイ……ン……。

耳鳴りのような空気の振動を、茂みの中の刺客達は感じた。
充滿する赤い煙がゆっくりと渦を巻く。

（何だ？ただの信号弾ではなかったのか？）

と見る間に、急速に風が一点へと収束する。

ヒュルルル……。

魔法だ。と直感したものの、なまじ戦闘経験の豊富な刺客達は、未だかつてこのような術を見た覚えがなかったために、一瞬、対応が遅れた。

その一瞬に、風の核の密度は極限まで圧縮されていたのである。
ビュオオオーッ……！！

「うおおっ！？」

突風が。いや、風の刃が、暗殺者達の鎖帷子を斬り、肉を裂き、

草木を薙ぎ倒して八方へ吹き荒れた。

「うあっ！」

薄紅の強風は、※百歩^{ドーマ}（※約六十メートル）も離れたディリータの所まで届いた。

韋駄鳥^{チヨコボ}を急停止させ、ディリータは鞍の上に伏せる。

「ラムザ！ハル様！」

風が収まるのを待って、ディリータは、韋駄鳥^{チヨコボ}の亡骸の陰に倒れている少年達に駆け寄った。

「僕は無事だ」

と、ハールーシャが体を起こした。

「ハル様、これは……！？」

「わからない。ラムザがやったのか？」

ラムザとハールーシャを中心に、茂みのあった辺りの地面は円く刈り払われ、信号弾の煙はきれいさっぱり吹き散らされて、刺客達はとつくに姿を消していた。

（ラムザが魔法を？しかも……！）

”風撃魔法^{エアロ}”だ。

失われた古代魔術、”青魔法”の一つである。”青魔法”は魔獣^{モンスター}や精霊など、人ならぬものの術を研究して人の技とした魔法で、邪法・禁術として紀元四世紀頃に途絶えたはずだった。

「ラムザ！ラムザ、しっかりしろ！」

ハールーシャとディリータは、気を失っているラムザの体から、三本の矢を抜いた。矢尻が赤黒い毒液に光っている。

ラムザは苦しそうに顔をしかめたが、目を覚まさなかった。

「ハル様は、お怪我は？」

「二カ所ばかりかすただけだ。でも……何だか、だるいな……」
ハールーシャの顔色が青白い。

ラーグ公の近衛騎士団と、北天騎士団の騎士達の声が、ほぼ同じくらいの距離から聞こえた。

意識を取り戻した時、ラムザは柔らかい布団の中にいた。体がひどく冷えている。指一本、思うように動かせない。目蓋も持ち上がらない。声も出せない。

息が苦しい……。

聞き慣れた人々の声が、ひそやかにざわめいている。ドラコニア城に運ばれていたのだ。

「わたし、もう一度”浄化”^{エスナ}をかけてみる」

アルマが泣きながら言った。

「”浄化”^{エスナ}が効かないんです、アルマ様。我々がもう、何度も試しました」

「でも……！」

司祭のオルキムが、医師達や、ザルバッグの部下の騎士達と深刻そうに話し合っている。薬草と、暖炉の煤の匂いがした。

「お兄ちゃん……、お兄ちゃん……」

アルマは涙でべとべとに濡れた頬を、ラムザの手に押し付けた。少し腕を動かされるだけでも、矢傷が灼けるように痛む。

（痛い！痛いよ、アルマ……！）

五感はいつもとより研ぎ澄まされているくらいだった。頭の中もすっきりと冴えている。ただ、体を動かすことだけが出来ない。

「ラムザ兄さん……」

ティータも枕元で泣いている。

「諦めるなよ。何か、方法があるはずだ」

デイリータが、半ば自分を励ますように、ティータを慰めていた。

周りの人々の会話から、段々と、状況の輪郭が浮かび上がってくる。

ラーグ公の別荘に収容されたハールーシャも、昏睡状態だという。あの後、猛獣狩りは急きよ曲者狩りに変わった。結果、ラーグ公やバルバネスの暗殺を目論む^{オルダリーア}鷗国の刺客が複数潜んでいたことが、発覚した。

毒の正体は、^{トリフィド}食肉草の触手から抽出された精製毒であると判明し

た。ところが、食肉草の毒には”浄化”^{エスナ}も効かず、有効な解毒薬も発見されていないのだという。

（えっ！そんな！！）

やむをえず、定期的に”減速”^{スロウ}をかけて延命措置とし、伯母や従兄弟達など、親類縁者の到着を待っているようだった。

”停止”^{ストップ}では、重傷者の場合、魔法が解けても体の活動が再起せず、かえって命を縮める可能性があった。

（ディリータ！アルマ！僕は気付いているんだよ。全部聞こえて
いるんだよ！）

身動き一つ出来ず、意識ははっきりしたまま、じわじわと迫り来る死を待つのは、たまらない恐怖だった。

夕闇が濃くなり、短い冬の日が暮れた。

呼吸が次第に弱く、間隔が長くなってくる。

（苦しい……。母さん、助けて……。母さん……）

ラムザが考えているのは、今はもう、ファティマのことばかりだった。

ファティマならば、ラムザの命を救う方法を知っているのではないか。いや、命が助からないまでも、最後にもう一度でいい、母の声が聞きたかった。体に触れてほしかった。

そろそろバルバネスと兄達を呼んでこようと言って、若い騎士が部屋を出て行った。

息が浅くなり、時々止まる。止まる回数と時間が、増えてゆく。

（母さん……。母さん……。……。）

人々の話し声が一まとまりに溶けて、葉擦れのような、意味のない音の塊にしか聞こえなくなった。その中で――、

「ラムザ！！」

パツと目の前が明るくなったような気がした。それとも本当に、黄金色の髪が照り返す光が、目蓋の裏に差し込んだのかもしれない。

（あっ！母さんだ！）

ファティマは寝台の周り^{ベッド}で右往左往している人々を押しつけて、

枕元に来ると、すぐにラムザの口に息を吹き込んだ。

すうっと体が楽になった。

ファティマは、大きく息を吸い込んでラムザの口に吹き込むことを何度か繰り返すと、

「ディリータ君、代わって！」

「は、はいっ！」

ディリータと交替した。

「アルマ、お兄ちゃんと一緒にお布団に入って！」

「うん！」

アルマは上着を脱いで、ラムザの横に潜り込んだ。温かい、柔らかい体がぴったりとラムザに寄り添った。

「薪をもっとくべて下さい！」

「へい！」

「体を温めて人工呼吸を続けられ、※半時から一時ほど（※一、二時間）で回復する可能性はあります。心臓が止まったら心臓按摩マッサージもして。呼吸が止まってから一時以上経つまでは諦めないで下さい。

ハールーシャ様の医師団の方々にも、そのようにお伝え下さい！」

「了解でありますっ！」

ファティマがきびきびとした声で指示を出すのを、ラムザはこの上なく頼もしく聞いた。

時々ディリータと交替しながら、ファティマは根気強くラムザに人工呼吸した。ラムザが息を吹き返したのは、※三刻（※約一時間半）後である。

薄く目を開けると、額に汗を浮かべたファティマの顔がすぐ側にある。

（母さん）

呼び掛けたかったが、まだ声は出せない。唇が微かに動いただけだった。

「よく頑張ったわね、ラムザ」

ファティマが笑って、ラムザに頬擦りする。

ラムザは安心して、眠りに就いた。

再び目を覚ましたのは、明け方頃である。

隣で眠っているアルマに蹴飛ばされたのだ。

ファティマとデイリータも寝台ベッドに寄り掛かって眠り込んでいた。
肩に毛布が掛けられている。長椅子ソファで眠っているティータにも。

暖炉の前で不寝番をしていた女中メイドと、目が合った。

「まああ、お気付きですか、若様。良かったこと……。お寒うございませんか？」

「ううん。ちよつと暑いぐらいだよ。窓を開けて」

「はい、はい。只今」

女中メイドは帳と鎧戸カーテンを開けて、アツと口を覆う。

「え……？」

寝台ベッドに寝ているラムザからは、ほとんど、トキ色の朝焼け空しか見えなかった。が、塔や城壁の上に、黒い喪章が垂れ下がっているのは目に入った。

喪章――。

「嘘だ！そんな、どうして……？」

ラムザの声で、ファティマとデイリータもうたた寝から覚め、窓の外を覗いて沈痛な面持ちになった。

「ハル……、ハル……、ハル……！」

とめどなく涙が溢れて、枕を濡らした。

ファティマはずっと、ラムザとデイリータの頭を撫でていた。

ラムザとデイリータは、責任を問われてもおかしくない立場にあった。

だが、ハールーシャが口のきける間じゅう、ラムザとデイリータを責めるな、と言いつづけていたというので、何もお咎めは無かった。ハールーシャは死の間際まで、ラムザを心配していた。そして、”聖母様の名前”を呼びづづけていた。――と、ハールーシャを看取

った神官医は、友を想う心と信仰心の篤さに感心していた。
だが、ラムザにはわかる。ハールーシャが呼んでいたのは聖母で
はなくて、生身の、ラムザの母なのだということが。

その、頼みの綱だったファティマの伝言は、どこで途絶えてしま
ったのだろうか？

ハールーシャの心臓が止まったのは、ラムザが危地を脱した時刻
より後なのだ。伝令に走ったのは一人だけではなく、僧侶や従僕、
騎士など、様々な身分の者達が何度となく、ラーグ公の別荘との間
を往復したはずなのだが――。

混乱のさなか、どこで取り次ぎが切れてしまったのかは、わから
ずじまいだった。わかったところで、ハールーシャが生き返るわけ
でもない。

十二歳の誕生日を、ラムザは寝台ベッドの上で迎えた。

無理を押してハールーシャの葬儀に参列したことで、回復が遅れ
ていた。

病床には、アルマがつきつきりてへばり付いている。

「お前、オーボンヌ修道院に戻らなくていいのか？」

「ちゃんと、手紙でシモン先生にお許しをいただいてきたもん。ラ
ムザ兄さんが元気になるまで看病してあげなさい、って。ね、”回ケ
復”してあげる」

「さっき母さんにかけてもらったよ。間隔を置かないと体に負担に
なるんだろ」

「汗かいてない？体拭いてあげよっか」

「母さんが拭いてくれたよ。寝間着パジャマも替えた」

「あのね、じゃあね、林檎むいてあげる」

「もう食べたよ」

「ラムザ兄さんなら、一個や二個じゃすぐにお腹空くでしょ」

寝台ベッドの脇の机に向かって本を読んでいたデイリータが、振り向い
た。

「ちょっと前に、七個も食わせてやった」

「……。今日も冷えるわね。一緒にお布団に入っててあげる」

何もすることがないと、最後にはラムザの横に体を滑り込ませてくるのだった。

「どこが看病だよ。ヒトが動けないのをいいことに、好き勝手にオモチャにしてるだけじゃないか」

「ひ、人聞きの悪いこと言わないでよねっ。誤解を招くじゃないの」
「？何を赤くなってるんだ」

「何って……もう！カマトトぶって妹をからかうもんじゃないわよ」
「かまとと？」

ディリータは机の上に顔を伏せ、両手で腹を抱えている。

「何よ、何よっ。笑うくらいなら、ディリータが少しはラムザ兄さんを教育してあげなさいよ！それともまさか、ディリータがイの一番に、何にも知らないラムザ兄さんで好き放題に遊んでるんじゃないでしょうねっ？」

「人聞きが悪いのはどっちだ。全く、俗世を離れた修道院で何を勉強すると、そういう台詞が出て来るんだろうな……」

「だって……、牧場の動物の世話とかするし……、ディリータはどこで”勉強”したのよ？」

「僕は、まあ、本で色々」と

ラムザは首を傾げる。

「動物？本？……何の話？」

「んもう、信じらんない！十二歳にもなって、どうして、お兄ちゃんの方がわたしより物知らずなのよ。お兄ちゃんなんか、寄宿学校で狼さん達に食べられちゃいなさーい！」

ディリータは真顔になって思案する。

「そういう問題があったな」

「???」

ラムザには、さっぱりわけがわからない。

ハールーシャの喪中で、祝い事は何もしなかったし、祝う気にもなれなかった。が、今年はラムザには、最高の贈物がある。
プレゼント

「ラムザ。お日様が出て来たわよ。歩いてみる？」

ファティマがドラコニア城の中にいる。

「うん」

どの部屋にも、階段にも、庭や架け橋にも、ハールーシャの思い出が染み込んでいる。だが、両脇を支えるファティマとアルマにそれらを語りながら散策する時、哀しさは、懐かしさに変わってゆくのだった。

「この木、枝が折れてるでしょ。ハルが、下りてこれなくなつた仔猫を助けようとして、落っこちたんだよ。ハルは肩を外しちゃったんだけど、仔猫が無事で嬉しそうだった。

ハルはさ……寂しがり屋で、すぐ拗ねるんだけど、根はとっても優しくかったんだ……」

ハールーシャが命と引き換えに、ラムザの願いを叶えてくれたような気もした。

——きつと、ラムザが母上と一緒に暮らせるようにしてやるからな。絶対だぞ。

ドラコニア城の人々は、ラムザが拍子抜けしたほど、当たり前のことのようにファティマを受け入れた。

ハールーシャの言った通り、ファティマの輝くような笑顔が、人々を魅了したのかもしれない。

それに何よりもドラコニア城の人々は、城主と、城主の末息子を深く愛していたのだ。ラムザを鮮やかに死の淵から救った恩人、しかも彼を生み育てた母でもある女性を、疎んじるはずがなかった。

二週間ほどでラムザは、日常生活に支障のない程度に回復し、アルマは洩々、修道院での勉強に戻った。三週間も経つと、騎乗術や武術の稽古も、元通りこなせるようになった。

北天騎士団に随行してランベリーに赴く前に、ファティマはマンダレーナの家を整理するために帰って行った。

ファティマの出発の日。ラムザは韋駄鳥チヨコボの轡くつわを取って、城と城下町を結ぶ跳ね橋を渡り、城下の家並みを通り抜けて、街の外壁まで

母を送った。

「母さん！」

朝市に来ていた行商人達と共に丘を下っていくファティマに、ラムザは大きな、よく透る声で呼び掛けた。

ファティマが振り返る。

「行つてらっしゃい！」

ラムザは手を振った。周りにいた街の住人達や、城壁の上に立つ衛兵達も、微笑ましく手を振った。

ファティマは明るく笑って、手を振り返す。

気持ち良く晴れた日射しが黄金色の髪に煌めいて、遠い丘を越えるまで、いつまでも母のいる場所がわかった。

次に帰って来る時は、ファティマはドラコニア城で暮らせるだろう。ずっと、バルバネスやラムザの側で。——ラムザの胸は温かな希望に膨らんでいて、この時は、これが母の姿を見る最後になろうとは、思いもよらなかったのである。

”次”は無かった。ファティマは二度と、ドラコニア城の土を踏むことはなかった。

その年の夏、戦場から還ってきたのは、長い黄金色の髪の束だけだったのだ。

その後、ハールーシャの弟は幼くして病死した。公妃の二度目の出産は難産で、母子共に助からなかった。

聖歴一二〇九年現在、ラーグ公は三人目の妃を迎えており、未だ世継ぎには恵まれていない。

士官学校附属の幼年学校には、ハールーシャが入学年齢に達するのを待って、二年生から編入するはずだった。が、予定変更してラムザ一人で一年目から入学することになり、ディリータはドラコニア城に留まった。

（僕と別れ別れに暮らした三年間、ディリータは何を勉強してきたのかな……）

新たな任務に緊張する友人達の中で、不安も興奮もなく落ち着いて見えるディリータの横顔を、ラムザは眺めている。

無論、武術や用兵学、歴史や地理や語学など、士官学校アカデミーに入学して申し分のない成績を収めるだけの教養を積んできたのは確かだ。しかし、それだけだったろうか。

ディリータは元々、賢そうな顔付きをしていた。ラムザは暇さえあれば武術の鍛錬に励んだが、ディリータは読書に時間を割いた。剣の腕は互角でも、弓術や※？術（※手裏剣投げ）や、組み打ち術では、ラムザの方が若干上なのである。が、見聞の広さでは、ディリータにはとても敵わない。

ラムザが幼年学校に在学中、週末にはしばしば、二人はマンダリア平原の”秘密基地”で落ち合ったり、ガリランドとイグーロスの間を往き来し合ったりしていた。

会う度に、ディリータが自分を置き去りにして先に大人になってゆく気がして、ラムザはちよっぴり羨ましくもあり、寂しくもあった。

——ねえ！今、何を勉強してるの？

——お前がいた頃と同じさ。

空とぼけたような微笑がまた、大人びて見えた。

ある時、しつこく食い下がると、

——お前を守るために必要なことを、だ。

と、ぼつりと答えた。

——やだなあ……ディリータってば。僕達、男の子同士なのに……でも、嬉しいよっ。その言葉を待ってたんだー！

——こら、離れるバカ！お前こそ、何を勉強してるんだ！？

——あはは！

あの時は冗談にしてしまったが、嬉しかったのは本当だ。

（そうだ。気にすることなんか、何も無い）

ラムザはディリータを信じている。

ディリータが何を考え、何をしたとしても、それは自分のために

してくれることなのだと、信じている。

？－4－〔2〕

“守護天使”

？モグちゃん（前書き）

この回の副題は、「アルマの」お兄ちゃん最強伝説」！その1」
……かな？

ラムザ達がベオルブ家の城下屋敷の門をくぐると、玄関でアルマとティータが待っていた。

「ラムザ兄さん……ッ」

アルマが怖い顔をして走ってくる。

「……のバカあッ！！」

「おっと」

ラムザは、振り下ろされるアルマの両腕の手首を、痛くはないが振り解けない程度の力でつかまえた。

「お前、まだ”モグちゃん”なんか大事に持ち歩いてるのか」

アルマが両手で振り上げたのは、布地のくたびれて色あせた、飛猫^{モグリ}の縫いぐるみだった。

「”なんか”とは何よ！自分の”一の家来”に対してぞんざいじゃない？」

「つまらないことを覚えてるなあ……」

「つまらないですってえ！」

アルマは、母とよく似た、形の良い眉を逆立てる。

（怒った顔まで可愛いなあ）

と、アルガスなどは呑気に見とれている。

「じゃあ、”つまらない”ものなんかに、たった一人の妹を託したのね？兄さんにとって、わたしなんてその程度の存在なのね！？兄さんが死んじやって、わたしが一人ぼっちになったって、どうでもいいんだ！」

「おい、何すねて……」

アルマの^{カラメル}飴色の瞳から涙が溢れた。

「何が、『敵陣に斬り込んで侯爵様をお助けするわけじゃないからよ……。し……。心配、したんだから……。』」

アルマはラムザの胸にすがり付いて泣く。

ラムザは妹を抱き締め、蜂蜜色の髪を撫でた。

「ごめん、アルマ。ただいま。無事に帰ってきたんだから、許してよ。ね」

ラムザはアルマの涙を拭い、ふっくらとした紅い唇に口付けした。

まるで恋人同士のような熱い再会場面に、友人達は”^{シーン}停止”^{ストップ}の魔法をかけられたように硬直した。ディリータ一人が見慣れているので平然としている。

「ディリータ兄さん……。よく、ご無事で……」

ティータがおずおずと近付いてきた。ディリータも妹を抱き寄せ、額に軽く接吻^{キス}する。

「必ず戻るって言っただろ？」

黒髪の兄妹はすぐに離れたが、もう一組の兄妹はまだ固く抱き合っている。

ガストンが見かねて声を掛けた。

「もしもーし。いつまで二人の世界に浸ってる気だ？」

「あ、ごめん」

ラムザは顔を上げたが、アルマは兄の背中に腕を回したままだ。

「てめーら、いつもその調子なのかよ？」

「僕らにとっては当たり前のことなんだけど……。変かな？」

ラムザは金髪頭を掻く。

「ほっぺやおでこにはするけど……」

と、サーシャ。

「ぼくも妹と弟が赤ちゃんの時は、固い物噛んで食べさせてあげたりしましたけど……」

と、ナツシュ。

「あん？てめー、まさか一番上か？似合わねーっ」

「似合わなくても、一番上だよっ」

ディリータが苦笑する。

^{ロマンダ}
「呂国式さ」

「風紀が乱れてるとかじゃなくて、寒い地方では人同士触れ合いを^{スキンシップ}

求めるんじゃないかなあ。親兄弟だけでなしに、親戚とか友達でも、会ったらず抱き合って接吻^{キス}するのが普通の挨拶なんだよ。

あ、そうだ、アルガスの家は呂国^{ロマンダ}式じゃないかい？」

サダルファス家は呂国^{ロマンダ}からの亡命貴族の家系なのだ。

「そうだけだよ……人前じゃやらなかったぜ、ヘンな目で見られるからな」

「矢っ張り、そうかあ……」

ザルバツグ兄さんと一緒にドラコニア城で暮らすようになってから、身内以外に接吻^{キス}するなって、禁止令出されちゃってさ。慣れるまで随分、寂しい思いをしたよ」

サーシャが頬を染める。

「あら。異文化間の相互理解のためにも、挨拶代わりでいいんじゃない？」

「バカタレ、兄貴が正しい！※」^{ガンダリア}雅国では牛に道を譲れ”（※ 郷に入っては郷に従え。ガンダール教では牛は聖なる動物とされることから）だろが！」

ガストンは青筋を立てた。

「ラムザ様……」

「ただいま。ティータにも心配かけたね」

ラムザはティータの頬にも口付けした。

「おいコラ！？言ってる傍から、兄貴の目の前で……！」

「ティータは”身内”だよ。デイリータ達とは兄妹同然に育ったんだ。子供の頃は、四人一緒のお布団でぎゅうぎゅう詰めになって寝たりもしたよな」

アルマは、さり気なくティータとラムザを引き離した。

（知らないでしょ！これも、ティータがいじめられる原因になっているのよ！）

もっとも、知らせないようにしているのはアルマだったが。

イグーロス貴族学院の級友達からの恋文の取り次ぎなどは、一切ことわっている。

花虫モルボル顔負けの食べっぷりや、案山子の方が足を踏んづけないだけマシという舞踏ダンスを見れば、熱も冷めるのではないか——と思い、宴会パーティーの招待に応じさせたこともあったが、期待したほどの効果は上がっていないようだ。花虫モルボルに”ラムザ”と名付けて山盛りの餌を与えるのが趣味になった少女がいるとか、いないとか。

ティータの複雑な胸中を思うと、アルマはラムザに、妹扱いをやめろとも言えないし、やめるなどとも言えない。

「ね、それで、ダイスダグ兄さんは何て？ 鞭で撲たれたりしてないわよね？ とっても怒ってらしたものの……」

あ、そうだ、骸旅団団長のウィーグラフと、副団長のギユスタヴまで相手にしたんですってね。どこも怪我は無かった？」
と尋ねながら、アルマは手際よくラムザの外套マントと上着シャツ、下着まで脱がせてティータに預け、あちこち触って調べる。

「おいおいおいっ！ 心配されるような怪我してたら、お城からここまで歩いて帰ってきてないだろ！ 玄関先で裸に？ 必要がどこにあるんだ？」

ほら、笑われてるじゃないか！」

サーシャとティータが、赤くなってうつむき、肩を震わせている。
「まったく……。お前、やけにヒトの服脱がすの上手いな。どこで覚えたんだ？」

「どこって、修道院の付属病院でお手伝いしてたからに決まってるでしょ。他に何があるって言うのよ」

ラムザはティータから服を受け取って着直した。

「ウィーグラフとギユスタヴは同士討ちしたんだよ。僕らが対決したわけじゃない。

兄さんからのお咎めは無し。それどころか、僕らの腕を見込んで、次の作戦への参加をお許し下さったよ」

アルマとティータは顔を見合わせた。

「また戦場に行くの！？」

「騎士が戦場に行くのは当然だろ。この先、僕が一生の間に何回出

陣すると思うんだい」

「何回だって、心配するわ。待ってる人間には、それしか出来ないもの……」

「もうちょっと、他にあるんじゃないかな？」

と、ラムザは”モグちゃん”をティータの手から取り、アルマに渡した。

「出来たらさ、送り出す時と出迎えてくれる時は、とびっきりの笑顔を見せてほしいんだけど！そしたら、可愛い可愛い妹のためにも絶対生きて帰ろうって気になるだろ」

「……。ごめんなさい、怒っちゃって。兄さんが無事に戻ってきてくれて、本当に良かったわ！」

アルマはにっこりと笑い、もう一度ラムザと口付けを交わす。

（くー、矢っ張り笑った顔の方が何倍も可愛いぜ）

アルガスはラムザを羨んだ。

アルマはラムザの外套マントをひったくった。

「そうだ、お守りの縫い取り、付けてあげる。お友達の皆さんにも」
アルガスは早速、外套マントを脱いだ。

「そうかい、有難う！」

ディリータが手の平を振って、止める。

「中へ入ってからでいいだろう。昼飯は出来ているのか」

「ええ。お友達の皆様も、どうぞ」

ティータとアルマは、見習い騎士達を屋敷の中へ案内した。

ラムザの外套マントと”モグちゃん”を腕に抱えて、アルマは歩く。

砂埃と、汗と、微かな血の匂いがする。

（お兄ちゃん……）

あれは、母子三人がマンダレーナ村で暮らしていた頃のこと――。
草いきれのする、夏の終わりの丘の上で。

アルマは柳編みの籠バスケットを引き摺りながら、ファティマを手伝って、
薬になる野草を探しては摘んでいる。

木剣を打ち合わせる音ものどかに聞こえるような、静かな草原の只中だった。

「やーっ！」

ラムザは、バルバネスに剣の稽古をつけてもらっている。転んでも転んでも、起き上がって父に打ちかかってゆくのだった。

が、何度目かに倒れたラムザが、すぐには立ち上がらない。

「お兄ちゃん！？」

アルマは柳籠バスケットを放り出して、つまずきながら、ラムザに駆け寄った。砕けた岩の破片が肘に刺さっていた。が、ラムザは破片を引き抜くと、また木剣を握る。

「これしき！」 名誉の負傷” だい」

「バカおっしやい」

ファティマは小さな勇者を膝に座らせ、水筒の水で傷口を洗って”
ケアル 回復” の魔法をかけた。

「ははは」

バルバネスもファティマの隣に腰を下ろした。

「ラムザは大きくなったら、騎士になりたいか？それとも、母さんのようにお医者さんになりたいか」

何気ない口調で、父は尋ねた。

「騎士になりたいです！」

と、ラムザは即答した。

「ほう」

バルバネスは満足そうに微笑したが、少し厳しい顔付きになって、重ねて問うた。

「剣は相手を傷付け、倒すためのものだ。医術は人を助けるためのものだ。それでも、騎士の方がいいか」

ラムザは、きらきら光る碧い瞳で、真っ直ぐに父を見上げる。

「母さんが、薬も間違った使い方をすれば毒にもなるって、言っていました。道具や技で、人を助けるのも、傷付けるのも、使う人の心次第だ、って。」

僕は、魔獣モンスターや悪者から弱い人達を守るためにだけ、剣を使います

！」

ラムザは妹の頭を撫でた。

「お医者さんにはアルマがなればいいよ。ね」

「うん！お兄ちゃんが怪我したら、アルマが手当てしてあげる」

「有難う。頼りにするよー」

幼い兄妹は唇を寄せ合う。

「そうか……よし、よし。わかった」

と、バルバネスは膝を打った。

後々になって思えば、その頃、ハールーシャの養育問題が持ち上がっていたに違いない。

数週間後。夕食の後に、バルバネスは大事な話を切り出した。

「えっ、ドラコニア城へ？」

「うむ。ラーグ閣下のお世継ぎの、ハールーシャ様をお預かりすることになった。お前達もハールーシャ様と一緒に、騎士になるための勉強をなさい」

「父さんと一緒に暮らせるんですね？」

「儂はしばらくしたら、また是領ゼラモニアへ行かねばならぬ。だが、儂が留守の間はザルバッグがいるぞ」

「ザルバッグ兄上が！」

ラムザは目を輝かせた。去年士官学校アカデミーを卒業したばかりの、若々しい武人である次兄に、強烈な憧れを抱いていたようである。

「やったな、ラムザ！」

「うん、頑張ろうね！」

ディリータとラムザは手を取り合い、飛び跳ねて喜んだ。

ディリータとティータの兄妹は、この年の春に相次いで肉親を失い、アルマ達母子と一つ屋根の下で寝食を共にしていたのだった。

「アルマは？アルマもお兄ちゃん達と一緒に、ドラコニア城に行くの？」

「アルマとティータちゃんは、修道院でお勉強するのよ」

この時代の畏国^{イヴァリース}には、初等教育のための学校は特に存在しなかった。

公立の学校や私塾等は、概ね十二、三歳以上の青少年を対象としていた。

子供達は、裕福な貴族や商人の家であれば、家庭教師に付いて勉強することもあった。が、大抵は、親の仕事や家事を手伝いながら、生活に必要な技術を身に付けていったのである。

児童向けの教育機関と呼べるものがあるとすれば、教会や修道院がそうだった。神官は、子供達に読み書きや初歩の算術や、宗教道徳や礼儀作法を教えた。

「……母さんも一緒？」

「母さんは、また是領^{ゼラセニア}で兵隊さん達の看病をするの」

アルマは、何かおねだりする時の癖で、バルバネスの膝に寄り掛かった。

「あのね、アルマもね、お医者さんになるのはやめて、騎士になる！ お兄ちゃんと一緒に韋駄鳥^{チヨコボ}に乗ったり、剣の練習したりするの。ね、いいでしょ？」

バルバネスは、普段はファティマに小言を言われるくらい、一人娘に甘いのだ。が、今日ばかりは首を縦に振らなかった。

「アルマ。女の子が騎士になるのは、特別な場合だけだ」

「特別な場合って？」

「男の兄弟が一人もない時や、よっぽど、男の子よりも強い時だな」

アルマは胸を張った。

「アルマ、強いもん！ 口喧嘩じゃ負けたことないもん」
ラムザは苦笑する。

「戦争や狩りは、口でするわけじゃないよ。アルマみたいに、お兄ちゃんが三人もいて、泣き虫の女の子は騎士にはなれないんだよ」
「そんなことないもん。ね、父さん、お願い！ アルマにも、お兄ち

やんと一緒に騎士の勉強をさせて。一生懸命、頑張るから」
バルバネスは優しく笑ってアルマの頭を撫でたが、是^{うん}とは言わない。

「駄目だよ。アルマは白魔法や薬の使い方を覚えて、お兄ちゃんと父さんが怪我をしたら治しておくれ。な？」

「……」

アルマの顔が、くしゃつと歪んだ。

矢っ張り、そう来るか。と、一同が予期した通り――、

「やだ！ヤダ！やだあ！！アルマ、お兄ちゃんと一緒にいいのお！
うわあああゝん！！」

アルマは顔を真っ赤にして、しつかとラムザにしがみ付き、身も世もなく泣きじゃくるのだった。

アルマの不思議なところは、このような時、同じ駄々をこねるにしても、

――母さんと一緒にいい！
とは言わないことである。

物心つかぬうちから、母よりも父よりも、一つ半年上の兄を慕った。

俗に、父親にとって最高の恋人は長女である、という。

バルバネスは年取ってから授かった末っ子、それも初めての女の子を、大層喜んだ。

ところが、”愛しの君”は父親などそっちのけで、幼い兄にお熱を上げているのだった。

お散歩もお風呂もおねんねも、何でも”お兄ちゃんと一緒に”でなくては気が済まない。

たまに、

――よしよし、今日は父さんが。

と誘っても、

――お兄ちゃんじゃなきゃイヤッ。

と、けんもほろろに袖にして、バルバネスを寂しがらせたものだ。

なだめても、叱っても、アルマはラムザと離れ離れに暮らすことを承知しなかった。

ファティマに付き添われて修道院へ行く日になっても、兎のように真っ赤に目を泣き腫らして、今生の別れとでもいうように延々と名残を惜しんでいた。

「週末には会いに行くからさ」

「きつとよ。約束よ……」

鼻水をかみすぎて擦りむけた、妹の鼻の頭に、ラムザは口付けした。女の子達を見送ると、男の子達はバルバネスに連れられて、ドラコニア城に向かった。

ラムザとデイリータは、週末毎に妹達の様子を見に行き、一緒に日曜日の礼拝をした。

クラバーティン修道院には、以前、母子三人で世話になっていたことがある。顔見知りの神官や子供達が多い。

仲良しのティータも側にいることだし、アルマはすぐに新しい生活に馴染むだろうと、大人達はたかをくくっていたのだが――。

ラムザが会いに来る日は、アルマは有頂天になってはしゃぎ、帰る時には執拗に引き留めた。それ以外の日には、ふさぎ込んだり、そわそわと指折り数えたりして、兄を待ち焦がれているのだった。かえって、ちよくちよく会いに来るから、寂しさが募るのではなにか――と、二カ月ほど経って、院長がザルバッグに相談した。

「そういうわけで、来週の礼拝はドラコニア城の礼拝堂でして、その後は兄上とハル様と一緒に、フローラ伯母上の御機嫌伺いに出掛けることになったんだ」

「何よ、それ！お兄ちゃんはアルマより、ザルバッグ兄様とハル様の方が好きなのね！？」

「そうじゃないよ。アルマに元気に暮らしてほしいからだよ。僕だって、アルマに会えないのは寂しいさ」

「じゃ、会いに来て！お兄ちゃんも一緒に修道院でお勉強して！」

「聞き分けのないこと言うなよ」

アルマは、わんわんと声を挙げて泣いた。

「お兄ちゃんの嘘つきい！毎週会いに来てくれるって言ったのに！約束、破るのね！」

珍しく、ラムザは気色ばんだ。

「僕は約束を守る！」

アルマが怯えて泣き止むほどの剣幕だった。

ラムザは、妹をすくみ上がらせてしまったことに気付いて、優しく言った。

「アルマが本当に困った時、僕に会いたいと思う時は、必ず駆け付けるよ。だから、何でもない時は我慢しろよ」

「……」

「ティータがいるじゃないか。アルマにはお馴染みの神官様達や友達がいっぱいいるけど、ティータは慣れない場所で、アルマだけが頼りなんだ。アルマの方がお姉ちゃんだから、いつまでも泣いてないで、しっかり面倒見てあげるんだぞ」

「……わかったわよ」

アルマは、ぷうっと頬を膨らませてティータを睨んだ。が、これ以上兄の心証を悪くしたくないので、ぐずるのはやめた。

次の週の日曜日――。

昼寝をしていたアルマは、夢を見た。

高い柱の上にくくり付けられて、広場を埋め尽くす人、人、人の海を見下ろしている。

憎悪。盲信。好奇心。様々の表情で自分を見上げる、何千何万の顔の中に、たった一人の姿を探しているのだった。

――何があっても、信じて待っている。

そう言った者の姿を。

黒い羽根付き帽子に、黒外套^{マント}。無造作に束ねた長い銀髪。背中に負った聖紋剣^{ルーンブレイド}……、

(来てくれた！)

だが、帽子のつばを持ち上げてこちらを向いた瞳は、緑色だった。金色ではなく。

よくよく見れば、目鼻立ちも背格好も、帯びている剣も、待ち人のものには似ても似つかない。

(……)

夢の中だというのに、猛烈な睡魔が襲ってくる。いや、睡魔などという生易しいものではない。底知れぬ闇の淵へと引きずり込もうとする、強大な邪念――。

今この呼び声に負ければ、二度と戻ってくることは出来ないと、わかっている。だが、一縷の望みを捨て切れずに続けてきた儚い抵抗も、限界に近付いていた。

(あいつが、見捨てた？裏切った？いや……、初めから、計算ずくでわたしを騙していたというのか？)

闇が蠢く。嘲笑う。足許から這い上る。

(もういい。疲れた……。あいつが来ないのなら、もう、わたしが”わたし”である必要はないのだ)

目を閉じて、自分の運命を決定づける文章が読み上げられるのを聞いた。

皮肉なことだ。彼らは死を与えてくれるのだと言う。これまで、渴望し続けて得られずにきたものを。

だが、彼らには無理なのだ。それを可能にするのは、一振りの剣とその使い手のみ――。

思わず、乾いた笑い声を立てた。

”奴”の息吹を、鼓動を、かかってないほど間近に感じる。

(さあ。飲み込んでしまえ。この人々が求めているのは、”お前”なのだから……)

乾留液タールのような漆黒の闇が、歓喜に泡立った。灼けるように凍て付いたかぎ爪が、体の内側から心臓を鷲掴みにする。……

「……っ！！」

アルマは、飛び上がって目を覚ました。

寒気がして、カチカチと歯が鳴っている。

アルマは”モグちゃん”を抱き締めた。

”モグちゃん”は、ファティマの手製の縫いぐるみである。

赤ん坊だったファティマをくるんでいた形見の肩掛けショールが、ある時ネズミに食い破られてしまった。ファティマは薄紅色の布の切れ端を、耳と翼と尻尾に使って、飛猫モウグリの縫いぐるみをこしらえたのだ。

この肩掛けショールは、呂国の伝統的な織り模様の布地で出来ていた。孤児だったファティマが、しかし”捨てられた”とは感じなかったのは、この肩掛けショールによるところが大きい。

地方毎、氏族毎に独特の様式があるので、身許を知る有力な手掛かりになるはずだった。再会の糸口を残していった、と考えられるのだ。

実は、バルバネスはラムザ達兄妹が生まれる前に、ディリータの父・ギータにファティマの身許を調べさせたことがある。

ギータは元は是領貴族の下で働いていた隠密で、主人を亡くしてからは、畏国軍イウアリリスに傭兵として雇われていた。が、これ以上人斬り稼業を続けたくないというので、ドラコニア領で普段は農民として暮らす傍ら、時に応じて領民達の関心事や政策の評判などの情報収集を行う役に就かせた。

ギータは几帳面で、手先も器用だ。丁寧で早い仕事ぶりが歓迎されて、農繁期に一カ月ほど臨時雇いに入っただけでマンダレーナ村の村人達に気に入られ、黒死病ペストで男手を失った家の姉娘と結婚して正式に村の一員になった。

口数が少なく、愛想もないのに、どうやって聞き込み調査などしているのか。と、思うところだが、生真面目で口が硬そうに見えるため、立ち入った話でも問わず語りに向こうから喋る気になつてくれるらしい。

元々彼は、暗殺よりも諜報活動の方を得意としていたようだ。ギ

「タの情報収集・分析能力を、バルバネスは高く評価していた。
が――。」

恩あるバルバネスとファティマのために、ギータは八方手を尽くして探してくれたのだが、^{イヴァリース}畏国国内では全く収穫が無かったのである。大勢の呂国人や、^{ロマンダ}呂国系住民に尋ねても、皆『こんな模様を使う氏族は知らない』というのだ。

余程少数派で、他の氏族との交流が少ない氏族なのだろうか。あるいは、^{ロマンダ}呂国風に見えるだけの偽物で、この肩掛けは身許とは無関係なのだろうか？

^{ロマンダ}バルバネスは更に呂国本国にも人を遣って調べさせたのだが、結果は、謎を深めただけだった。

専門家の鑑定では、様式がひどく古風だという。少なくとも最近二百年以上、他の氏族からの影響を受けていない、という見立てだった。織物の技術は母から娘へと受け継がれるから、二百年以上、男性はともかく女性が余所からこの氏族に加わったことがない、ということになる。

逆に、この氏族の織り模様に影響を受けている氏族もない。辿れる限りでは、ここ五百年以上も、この氏族から余所の氏族に嫁いだ娘はいなかったと思われる。

そして、もっと重要なのは、織り模様が象徴する内容だ。図案化された動植物や幾何学模様の組み合わせは、氏族の歴史や職業などを表すものなのだが……、

専門家が注目したのは、”封印”の結び目と、”^{シルフ}沈黙の精”を表す古代神聖文字が模様の中に隠されていたことだった。

辺鄙な田舎で、たまたま世の中の流れから取り残されたのではない。何か重大な秘密を守って、意図的に他の氏族との交流を断ってきた――血族結婚ばかりでは体質が弱くなってしまいうから、時々”余所者”を受け入れることはあったとしても、氏族の者を、少なくとも女性を外に出したことがない――氏族だろうというのだ。

”何か”とは、具体的に何なのか？

大昔には意味があったとしても、今となってはただの迷信かもしれない。だが、ファティマも、生まれてきた二人の子供達も、極めて高い魔力の持ち主だった。実際に、何か特殊な資質を受け継いでいることも考えられた。

どうやら、ファティマの出生には予想以上に複雑な事情が絡んでいるそう。

ただ、”封印”してきたのは決して悪しきものではないと読み取れる、と言われたことだけがせめてもの救いだった。

といっても、”それ自体は聖でも邪でもないが、人間の手には負えぬもの”だそうである。不吉な判じ物のようだった。

こんな半端な調査結果は、ファティマにも、二人の結婚に反対する騎士達にも知らせるわけにはいかない。

バルバネスはその後、秘密裡に調査を続けさせたが、ファティマの素性は遂にわからず、謎は墓に持つて入ることになった。ただし、ドラコニア城の司祭のオルキムにだけは、将来子供達に必要なだと判断した時は然るべき者に知らせるように、と、死ぬ前に全てを打ち明けておいた。

もしもアルマが、度々見る意味ありげな悪夢のことを父母に話しておれば、バルバネスは愛娘を守るために、もっと徹底的に肩掛けショールの謎を究明しようとしただろうが――。

「母さぁん……」

全身に鳥肌が立っていた。

アルマはこれまでも、悪夢にうなされることがよくあった。

夢の中の”アルマ”は、飢えた化け物なのだ。

場所は、ある時は厳重な魔学防壁バリアーを張り巡らせた檻の中だった。ある時は、夜の貧民窟街スラムだった。

戦う術を持たない子供、女、年寄りとは勿論のこと。歴戦の剣士達や、高度な魔法を操る魔道士達をさえ、片っ端から引き裂き、ひねり潰し、彼らの血をすすり肉を喰らった。”アルマ”を見上げる彼

らの表情は、恐怖と苦痛と絶望に満ちていた。……唯一人の青年を除いては。

銀の髪、金の瞳の魔法剣士。
ルーンナイト

たった一人で化け物の”アルマ”を倒し、無差別な殺戮を止めることが出来る彼の眼差しにだけは、憐れみと哀しみと、そして怒りがこもっていた。

”アルマ”は死なない。何度斬られても、魔法に焼き尽くされても、不死身の化け物の”器”である体は再生する。

人間の姿に戻った”アルマ”は子供のように――夢の中の”アルマ”は子供ではなかったから――泣いた……。

「お兄ちゃん……」

心細くて眠れない時、悪夢の途中で目覚めた時、アルマはラムザの寝台に潜り込むことにしていた。

――よしよし、アルマ。お兄ちゃんが側にいるよ。何にも怖いことなんかないよ……。

ラムザの懷に抱かれていると、安心して眠ることが出来た。夢の続きには必ず”ラムザ”が現れて、”アルマ”を助けてくれた。

そうなのだ。

あの青年は、確かにラムザだった。

姿形は違おうとも、同じ眼差し、同じ魂を持っていることが、アルマにはわかった。

（”夢”……？）

身震いして、アルマは辺りを見回した。

いる……。

”何か”が、見えない、冷たい手を伸ばして、アルマを探している。

アルマは、隣で安らかに寝息を立てているティータを揺り起こそうとしたが、やめた。

（アジヨラ様！聖母様！大天使アルテマ様……！）

得体の知れない、見えざる脅威から守ってくれるものは、神々だ

ろう。アルマは礼拝堂に逃げ込んだ。

定時の礼拝の時間帯ではなかったが、老若男女が敬虔な祈りを捧げている。見習い神官達の歌う賛美歌が、どこからか流れてくる。

静かに落ち着いた、神聖な雰囲気包まれて、アルマはほっと一息ついた。

（気のせい……？アルマが、怖がりの赤ちゃんなの？）
だが。

（違う……！！）

威圧感^{プレッシャー}は真上からのしかかってきた。

アルマは天井を仰いだ。

高い天井に、円く聖画が描かれている。

十二星宮の象徴^{シンボル}と十二使徒を配置した円陣の中央に、風火水土の四大元素を司る精霊——雷精^{ラムウ}、炎精^{イフリート}、氷精^{シヴァ}、土精^{タイタン}を従えて、大天使アルテマが悪魔^{ルカヴァイ}を踏み付け、三叉の聖剣を掲げている絵だ。

平面的な筆致^{タッチ}の聖人達、精霊達の目が、一斉にアルマを見つめていた。アルマは、自分が大天使に調伏される魔物になったように、畏縮した。

（父さん、助けて……！！）

アルマはぺたりと膝をつき、“モグちゃん”を抱えて床に伏せた。傍目には、熱心にお祈りしているように見えたかもしれない。

伝家の”護法剣”^{ディフェンダー}を携えたバルバネスがここに現れれば、安心してきるだろうか——。

突然、アルマは激しく頭を振った。

礼拝堂を飛び出し、修道院の門からも飛び出した。

“モグちゃん”一つを腕に抱き、泣きながら、いつもラムザが韋^チ駄鳥^{ヨコボ}に乗ってやってくる道をひた走った。

王様の軍隊をみんな集めても、法王様の神官をみんな集めても、紙人形ほどの頼りにもなるものか。

（お兄ちゃんなの。お兄ちゃんだけなの！アルマを”あれ”から守ってくれるのは……！）

555
(5)

「……?」

夕食の席で、ラムザは急に匙を休めた。

「虫でも入っていたのか」

と、ハールーシャが愉快そうに尋ねた。

「ハル様がお入れになったのですか」

「ヒトを疑うのか、ディリータ!今日は入れてないぞ」

「失礼しました」

ラムザは心ここにあらず、宙を見つめ、虚空に耳を澄ませていたが、

「……アルマが呼んでる!行かなくちゃ!」

模造剣をひつつかみ、居間の扉も開けっ放しにして、廊下に走り出た。
ナグラロク

「ラムザ?待ちなさい!」

ザルバッグが、ディリータとハールーシャが、ラムザを追った。

ラムザは玄関へは向かわず、裏庭へ行く。

月明かりに白く照らされた庭の片隅に、草に埋もれた、ひび割れた石版がはまっている。

これはドラコニア城が建つ以前からあったものだ。精霊の通り道であるから手を触れぬようにとの、神官の助言で、簡単な柵で囲って祭られていた。

古代技術の産物だという、滑らかで固い人造石の表面に刻まれた神聖文字は、ルーン長年の風雨にさらされて、判読出来ないほど薄れている。だが今、紋様も鮮やかに、ほの白い魔法陣が石版に浮かび上がっていた。

ラムザはひらりと柵を越え、魔法陣の上に飛び乗った。
オーロラ

極光のような光の幕が魔法陣の縁を一巡りし——、その光が消えた時、ラムザの姿も、ザルバッグ達の目の前から忽然と消えていた。

「ラムザ？ラムザーッ！」

ザルバッグの呼び声が城壁にこだまする。

アルマはとぼとぼと、森の中の細道を歩いていた。

クラバーティン修道院からドラコニア城までの道程は、※およそ二十五里（※約十九キロメートル）^{セクタ}。大人の足でも、歩けば半日かかるのだ。

日はとつぷりと暮れ、外套^{マント}を着てこなかった体に、木枯らしが冷たい。

鼻をすすりあげ、自分の体温で温まった”モグちゃん”を空きっ腹に押し付けて、アルマは棒のようになった足を動かし続けた。

「お兄ちゃん……。お兄ちゃん……。」

梟が鳴き、獣が呼び交わしている。

狼も山賊も、アルマは怖くないと思った。”あれ”に捕まることに比べれば。

後ろから足音が忍び寄ってくる。金属が砂を嚙んで擦れ合うような音。

振り返ると――、錆びた鎧を着た骸骨剣士^{スケルトン}が、干からびた皮の張り付いた、骨になった手でアルマの肩をつかんだ。

「きゃあっ！」

アルマは癒しの魔法力を込めた手で、骸骨剣士^{スケルトン}を突き飛ばした。

起屍鬼^{アンデッド}には武器で攻撃するよりも、白魔法や炎で浄化する方が有効だ。

骸骨剣士^{スケルトン}は意外に脆く倒れたが、また起き上がって、緩慢な足取りで近付いてくる。

アルマは走って逃げた。

行く手に、燐光を発する別の骸骨剣士^{スケルトン}が、ぬっと立ち上がった。

こちらは死体が新しいようで、腐臭が鼻をついた。

「きゃああっ！」

道端の土饅頭がひとりでに崩れ、山賊とおぼしき者達の骸骨がぞ

ろぞろと這い出てきた。

アルマは逃げた。いや、彼らによって、ある目的地へ向けて追いつて立てられているのだと、途中で気付いた。

小高い丘の上に、荒れた、古いフアラ教寺院の跡がある。建物や門の石積みは、長い歳月の間に、橋や道路の建設に転用されてしまっていた。

草が生え放題の、むき出しの床石に、赤い魔法陣が輝いている。暗い光が脈打つように明滅するのに伴って、地の底からわき上がるような、低い唸り声が響いてくるのだった。

アルマは、知る限り最も強力な、”魔を祓う呪文”を唱えた。

「お兄ちゃん！お兄ちゃん！お兄ちゃん！ああん！！」

石板が、白く、別の紋様の魔法陣に塗り替えられる。

「アルマ！」

ラムザが立ち上がるなり抜き放った模造剣が、月光に煌めいた。

（ほら。来てくれた！）
デジャ・ヴュ
既視感。

——待たせたな。約束は果たすぜ。

懐かしい声を聞いた気がした。

「お兄ちゃん！」

アルマはラムザの背中に隠れた。

ラムザは骸骨剣士達に斬りかかる。

「オオーッ！」

やっとな歳になろうという子供とは思われぬ、無駄のない、素早い剣さばきだ。

”ナグラロク”とは、絶大すぎる威力のために妖剣とされ、破壊神・凶天使の名を冠せられた伝説の名剣——”滅世剣”をもじった名前である。

練習用、子供の護身用として、使い勝手の良さに定評のある模造剣だ。

骸骨剣士達は枯れ枝のように簡単に叩き折られ、薙ぎ倒された。

が、腕や肋骨の一、二本折れた位では、すぐに起き上がってくる。

ラムザは早口に何か呟き、模造剣ナグラロクを一振りした。刀身が朱色の光をまとう。

ボウッ！

ナグラロク

模造剣に切り裂かれた切り口が燃え上がる。剣が炎を宿しているのだ。

茶色く錆びた剣や槍をかわしつつ、ラムザは七体もの骸骨剣士スケルトンを斬り倒した。今度は背骨や大腿骨を打ち碎いたので、立ち上がれないはずだ。

「お兄ちゃん」

アルマはラムザの背中に抱きついた。が、

「まだだ」

ラムザは緊張を解かない。

膝立ち、あるいは上半身だけになっても、骸骨剣士スケルトン達はなおも起き上がった。炎と煙をくすぶらせて、にじり寄ってくる。新たに、寺院の墓所からも骸骨が這い出してきて、幼い兄妹を取り囲む。きりが無い。

ラムザはアルマを右腕に抱き寄せ、左手に持った模造剣ナグラロクで骸骨達を牽制しながら、呪文を唱え始めた。

本人の弁によると、この時は、習い覚えたばかりの”炎撃”ファイアの魔法を使おうとしたのだという。

しかし、アルマが聞いたのは”初級炎撃魔法”ファイアの呪文ではなかった。畏国の言葉ですらなかった。

発音から古代神聖語らしいとわかる、長い呪文の最後に――、魔法発動の”鍵キーワードとなる言葉”だけは聖歴一二〇〇年現在でも古代神聖語を用いるので、アルマにも聞き取ることが出来た。

「……、”最上級炎撃魔法”！」

ゴウッ！！

兄妹の周りに紅蓮の炎の嵐が巻き起こった。

”最上級”魔法ジャは”魔法反射”リフレクで防ぐことが出来ない代わり、術

者を自動的に魔法結界が守るという特徴がある。

ラムザと、ラムザに固く抱き寄せられているアルマには、熱も風も感じられなかった。

だが、腕をいっぱいに広げた程度の距離から先には、地獄絵図がある。

焼け崩れる、と見る間に灰と碎けて燃え尽きる亡者達が、炎熱に歪んで見えた。

魔法の炎はやがて鎮まったが、立ち木や、枯れ草の野原は燃え続けています。

巨木が真つ二つに張り裂け、火の粉をまき散らしながら、兄妹の上に倒れ落ちてきた。

一方――。

ドラコニア城では人々が総出で、松明や提灯ランタンを手にラムザを探していた。

クラバーティン修道院へも早速、急使が走った。

ザルバッグに呼び出された魔道師や神官達が、ああでもない、こうでもない議論する前で……、石板の魔法陣が再び、白く輝いた。抱き合って気を失っているラムザとアルマが現れる。

「ラムザ！」

「アルマまで!？」

わいわいと人が集まって、裏庭は、物の色がはっきりとわかるほど明るくなった。

ディリータが廊下を急ぎ足で歩いていると、

「あんたね!？アルマからお兄ちゃんを取り上げた元凶は！」

アルマとハールーシャがいがみ合う声が耳に入った。

「げ、元凶とは何だ！」

「あーら、知らない？悪の親玉ってことよっ」

「言葉の意味なんか訊いてない！お前こそ、よくもラムザをいきなり、わけのわからない目に遭わせてくれたな。ラムザの何なんだ！」

「妹よっ！」

「そのぐらい知ってる！」

「なら訊かないで！」

老司祭がアルマを、ザルバッグがハールーシャを取り押さえて、二人を引き離した。

「姫様、おやめ下され」

「ハル様もおやめなさい。淑女^{レディ}に手を挙げるのは、騎士のすることではありませんぞ」

ハールーシャとアルマはまだ暴れている。

「こいつのどこが淑女^{レディ}だ！」

「あんたのどこが騎士よ！」

ディリータが扉を叩き、恐る恐る顔を出して告げた。

「あの……、ラムザが目を覚ましましたよ」

「本当か！」

ハールーシャとアルマは競走でラムザの寝室に押し掛けた。

「お兄ちゃん！」

「ラムザ！」

寝台^{ベッド}の横で看病していた、若い司祭のオルキムが、しーつと唇の前^{ペーペー}に指を立てる。

「ハル様……」

一点先取、とハールーシャはふんぞり返る。

「うん、どうした」

「少し待っていて下さいますか。アルマ、おいで」

今度はアルマが胸を張り、ラムザの枕元に近付いた。

「”モグちゃん”を貸して」

ラムザは起き上がると、寝台^{ベッド}の脇の箆^{ナイフ}から、剣の形をした紙切^{ペーパー}りを取り出した。

後から寝室に入ってきたザルバッグとディリータは、尋ねたいことが山ほどあったが、ひとまず様子を見ていた。

ラムザは”モグちゃん”と向かい合い、勿体ぶって命令した。

「モグちゃん！お前を僕の一の家来に任じ、この剣を授けよう。破邪の聖剣”エクスカリパー”だ！僕がいない時は、お前がアルマを守るんだぞ。わかったな。『はーッ！』」

紙切りを薄い革の鞘に収め、飾り紐で背中にくくり付けてやって、ラムザは”モグちゃん”をアルマの手に返した。

「ほら。僕の”一の家来”を護衛につけてやるよ。これでもう、いつでも安心だろ」

アルマは寝台ベッドに飛び乗って、ラムザに抱きついた。

「お兄ちゃん、だぁーい好き！」

「お兄ちゃんもアルマが大好きだよー」

ラムザとアルマは唇を寄せ合う。

ハールーシャが妬ましそうに爪を噛んでいるのを、アルマはいい気味だと思った。

これにて一件落着、めでたしめでたし。……では、なかったのである。

この日を境に、ラムザは全く魔法が使えなくなった。

左利きには高い魔力を持つ者が多いという。

ラムザが左利きだとわかると、バルバネスはまだ赤児の末息子を幾人もの魔道師達に会わせた。

魔道師達は口を揃えて、

——ご子息には人並み外れた魔道の素質がおります。
と言ったものだ。

ドラコニア城へ来て魔法を勉強し始めてから一カ月足らずで、初級炎撃魔法を使いこなせるようになり、ゆくゆくは長兄・ダイスダイグのように優秀な魔法剣士になるだろうと、期待されていたのだ。

急に強すぎる魔法力を放出したことによる、後遺症だろうか？

しかし神官医クレリックや魔道師達は、ラムザの体には異常は何も無く、依然、極めて高い魔力が感じられるという。

ラムザが魔法を使えなくなった原因はわからなかった。

魔法が使えないならば、左利きは不祥だと言って、ザルバッグは右手で道具を持つようにラムザを訓練させた。

不祥と言えば、ラムザが”最上級炎撃魔法”^{ファイジャ}を使った、荒れ寺の跡のことである。

魔法の猛火に直接焼かれた、半径※十五歩^{ドーマ}（※約九メートル）ほどの地面は、地中の根や虫達まで残らず燃え尽きて、次の年は草一本生えなかった。

黒焦げの裸地に亡者達は灰も留めず、ただ、武具だったろう鋼鉄や霊銀^{ミスリル}が、飴のように溶けて石に貼り付いていた。

——とても子供の……、いや、人間の魔力^{ひと}とも思われぬ。

——禍々しい……。

などと、神官達がひそひそ話でもしようものなら。アルマは、今やラムザの”一の家来”となった”モグちゃん”を抱えてすっ飛んでゆき、文句をつけた。

——禍々しいもんですか！お兄ちゃんは、アルマを守ってくれたのよ！

だがアルマ自身、不吉を感じてはいた。

あの時、ラムザの模造剣^{ナグラロク}がまどっていた炎——、あれは”魔法剣”ではなかったか？

十三世紀現在、”魔法剣士”といえ、”魔法と剣の両方に精通した戦士”のことを指す。あるいは、”魔法剣”と呼ばれる技はあっても、”剣を介して発動する魔法”のことだ。

しかし紀元前には、”剣に魔法の力を上乗せして攻撃する剣技”という意味で”魔法剣”と呼ばれる技が存在した。

元々、命を削ると言われるほど危険な秘術で、使い手は少なかったという。”裏切りの使徒”ゲルモニークがその達人として有名だったために、紀元後は特に弾圧された。魔法剣士達の隠れ里・ファルガバードは廃墟となり、今ではあった場所さえわからなくなってしまった。

また、ラムザがドラコニア城から突然消え、アルマの許に現れたのは、これも失われし古代の高等時魔法・”時空転位”^{デジョン}ではなかったか。

十三世紀現在でも、離れた場所へ一瞬で移動する”瞬間移動”^{テレポ}という時魔法はあるが、移動出来るのはせいぜい、目に見える範囲程度の近距離だけだ。ドラコニア城とあの廃寺の跡のように、※十五里^{セクタ}（※約十一キロメートル）もの距離を一足飛びに移動することは出来ない。

それに、ラムザが骸骨剣士達と戦っていた時間は、※半刻（※約十五分）にも満たないだろう。ところが、ドラコニア城にいたザルバッグ達は、たっぷり※半時（※約一時間）以上もラムザを探し回っていたのだ。ラムザは空間だけでなく、時間も飛び越えたようなのである。

”時空転位”^{デジョン}ならば、然るべき魔法陣を用意すれば、一千里^{セクタ}以上の距離を移動することも、異世界や、過去や未来に飛ぶことも可能だったという。

瞬間移動と、”最上級炎撃魔法”^{ファイジャ}の焼け跡には目撃者が多く、今更隠すことではなかった。が、ラムザが”魔法剣”らしき技を使ったことは、本人も覚えていないようだったし、両親にも誰にも話したことの無い、アルマだけの秘密だった。

唯一デイリータにだけは、後に、ラムザがハールーシャを助けるために”風撃”^{エアロ}を使ったらしいという話と引き換えに、教えた。

アルマは古代魔法に興味を持つようになった。ラムザが魔法を取り戻す手掛かりを、見つけたかったのだ。

十歳になって、クラブーティン修道院から、歴史の古いオーボンヌ修道院へ移ると、熱心に地下書庫の膨大な書物を読み漁った。

「まあ……。それは、アルマが気に病むことではないわ」

オーボンヌ修道院で共に学んだオヴェリア王女は、そう言ってアルマを慰めた。

「アルマのお兄様はきつと、優しいお方なのね。ご自分の力が恐ろ

しくなってしまうれたのだわ」

少女達の師であり、父親代わりともなって親身に世話をしてくれたシモン神父も、同意した。

「左様……。大きな力を持つ者は、また、大きな責任を負わねばならぬのです。身に過ぎた力を振るえば、災いを招き、自らを滅ぼすことにもなります……」。

兄君様はそれを悟られて、無意識のうちにご自身の力を封じてしまわれたのでしょうか。

ご心配召されるな、アルマ様。

いずれ……。兄君様が心身共に成長あそばされ、神の与え賜うた才能を正しい目的にお使いになれるだけの、資格を備えられた暁には……。自ずと、本来のお力が解き放たれるでありましょう……」

(いずれ……。って、いつ?)

十六歳になった今も、ラムザは相変わらず、魔法はからきし使えない。

剣術だけでも、ラムザは滅多な相手に負けることはない、アルマは信じている。が、万一ラムザが戦場で倒れた時、魔法が使えれば危難を避けられたかもしれないとわかれれば、アルマは負い目を感じずにはおれないだろう。

(ディリータも、お友達の皆さんも付いてるし……。大丈夫とは思うけど……)

この小班の中で、ディリータを除いては、ラムザと最も親しいのはガストンのようだ。並んで歩きながら、遠慮なく軽口を言ったり、頭を小突いたりしている。

銀の髪。金の瞳。少し色合いは違うが――。

「……ん? 何だい、アルマちゃん。俺、どっか変か?」

「あっ、いいえ。何でもないの」

「ははーん、さては、俺に気があんのかな」

不敵な薄笑み――。

「そ、そんなのじゃないわ……」

ラムザは妹と友人の間に割って入った。

「お前昔っから、銀髪がお気に入りだよな。だけど、こいつは絶対駄目だぞ。不良だから！」

「おいおい、お言葉だな、ああ？」

「友達としては、面白い奴だと思ってるよ。だからって義弟おとうとに持ちたいかどうかは、まるで別の話！」

「じゃ、四捨五入して、金髪は？」

とアルガスが立候補するのは、誰も聞いていない。

「銀髪がお好きなら、エルムドア侯爵様も格好いいわよー。お元気になるなら、会いにいらっしゃるといいわ」とサーシャがいうと、ラムザは深く頷く。

「イチコロだろ。お祖父様の――、先々代・カルダックⅡベオルブ伯の若い頃の肖像画なんかも、よく飽きずにうっとり眺めてたよな」「違うわよ！ラムザ兄さん以上に好きな人なんていやしないわ。お祖父様の肖像画だって……、兄さんに似てるからよ」

「全然似てないぞ」

「似てるの！」

銀髪の、ラムザでない”ラムザ”が登場する夢の内容を、アルマは誰にも打ち明けたことはない。何か、ひどく罪深く、恐ろしいことのような気がして、ひた隠しにしてきた。

だがいつか、ラムザには尋ねてみたいと思う。

――兄さんの夢の中にも”わたし”が出てくる？と。

ザルバッグに懇々と諭されてクラブーティン修道院に戻って以来、正体不明の気配や視線に怯えることはなかった。悪夢を見ることも、めっきり少なくなった。

”あれ”は子供心の不安が生んだ幻覚だったのだろうか、思うこともある。

しかし一方で、アルマはこうも思うのだ。

もしかするとあの日からずっと、ラムザの魔力は、アルマをあの
”何者か”から守るために使われ続けているのではないかと。そ
して、何の根拠も無いけれど、それが真相であるような気がしてな
らないのだ。

（お兄ちゃんは、わたしの守護^{ガーディアン}天使。

わたしだって……、お兄ちゃんを守ってあげたいのに……）

仕掛けまくった伏線がやっつと起爆し始めました。この4－〔2〕節は主なものだけでも、2－〔2〕、〔3〕、〔4〕－？、3－〔1〕－前・後、4－〔1〕－？などから話がつながっています。：はい。原作でアルマがああいうことになってますので、オリジナル設定としてラムザもおまけに付けてみました。

この物語、色々と次元の違う問題（政治的なもの、神秘的なもの、個人的なもの、等々）が並行して進むので、バランス取るのがとても難しいなーと感じます……！

女中メイドの少女が二人、新入りの後輩を探しにやってきた。

「ねえねえ！これから中庭で、ラムザ様がザルバツグ様と手合わせなさるんですってえ！」

「滅多にない見物よう！」

昼休みの時間なのだが、内気な少女は、壁に飾られた皿や盾に、はたきをかけていた。

「あの……。でも、まだお掃除が……」

先輩二人は、後輩の少女を脚立から引きずり下ろした。

「んもお、トロくさいんだからあ！そんなの、後で手伝ってあげるわよお」

「さつさと来なさいよう」

中庭を見下ろす二階の外廊下に、休憩中の兵士や女中メイド達が集まって観戦している。三人の少女達が、よく見える場所を見つけようとしているうちに、ワツと歓声と拍手が揚がった。

「勝負、ついちゃったんですかあ？」

「ああ、すごかったぜ！ラムザ様が勝ったんだよ！」

「ええーっ！？」

「ああん、歴史的瞬間を見逃しちゃったじゃないのよう！キャリイ、あんたがぐずぐずしてるからよう」

軍服の埃を払いながら、ザルバツグが立ち上がった。

「どうした。もう少し、嬉しそうな顔をしたらどうだ」

ラムザは息を弾ませ、首を振る。

「こんなの、勝ったうちに入りません。

デイリータと二人がかりで、兄さん得意の”破軍剣”も無しで、十五敗してやっと一勝目です。

実戦ならとくに死んでいますよ」

”破軍剣”とは、”聖剣技”や”暗黒剣”と同様、闘気技の一種

である。己の闘気をぶつけて敵の闘気を挫き、戦う力を削ぐ技だ。

「欲深な奴だ」

ザルバッグは笑った。

「まだ力が余っているようだな。ビックス、久々に稽古をつけてやらんか」

と、部下の若い騎士を振り返る。

「いやあ……自分ではとても、今の御曹司のお相手は務まらないであります」

「ウェッジ、どうだ？」

「しばらくお会いしないうちに、とんでもなく強くなれたツス！もう、自分の方がラムザ様に稽古つけて頂きたいぐらいツス！」

ビックスとウェッジは、見習い騎士だった頃から、よくラムザとデイリータの練習相手をしていた。

「何を言うか、現役の騎士がだらしない。ならば……、バスカーク！」

ザルバッグは、中肉中背、目立たない容貌の若い騎士に声を掛けた。

「はっ……。私が、ですか？」

「遠慮はいらん。揉んでやれ」

ラムザも頭を下げた。

「お願いいたしますっ！」

女達は特に騒がなかったが、兵士達はざわめいた。

「どなたですう？」

「バスカークアカデミーウォルフオート殿。北天騎士団で、今一番若い千騎長殿さ。士官学校の出身じゃなくて、現場叩き上げの実力者だって話だぜ」

ラムザとバスカークは一礼し、※六歩ドーマ（※約三・六メートル）ほど間合いを取って真剣を構える。

じわじわと回るように足場を移動させながら、切っ先と切っ先の距離を縮めてゆき――、

キーンッ！

仕掛けたのはラムザの方からだった。小手を狙った撃ち込みを打ち払い、バスカークはラムザの胸に突きを繰り出す。

ラムザはこれを受け流しつつ、逆にバスカークの胸に切っ先を打ち下ろす。

チャンッ。

バスカークはラムザの剣の腹を弾いた。

喉、腹、額と、畳み掛ける突きをかわし、ラムザの胴を薙ぎにゆく。

チャンッ！

火花を散らし、ラムザの剣がバスカークの剣を防いだ。

「速いっ……！バスカーク様と互角だぞ！」

「うわ、あの方達相手じゃ三手ともたないな……」

女中の少女二人は熱狂して、ぽかんと口を開けて試合に見入っている後輩の肩を叩く。

「ねっ、ねっ？ラムザ様、すごいでしょお！」

「戦うお姿でさえ麗しくてらっしゃるのに、どおして舞踏ダンスは苦手なのかしら？」

「あー、それな。若様って、とことん武術が身に染みついてらっしゃるからさ。体を触れ合って他人と向かい合うと、組み打ちの呼吸になっちまうんだな。」

反射的に足払いかけて、女の子すっ転ばせちゃったりするらしいぜ」

「……納得う……」

バスカークは気持ちの良い手応えを感じた。

ラムザの剣は、太刀筋が素直だ。けれんが無い。基本に忠実で、素早く、力強く、正確である。

ラムザの方から奇手を用いはいしないが、道場剣術の枠を超えた技に対応出来ないわけではない。

バスカークはさり気なく、あれこれと”反則技”を試みているのだ。

目つぶしに、剣で日の光を反射させる。ラムザが次に足を下ろしそうな位置の地面を、蹴って決る。狙いを外したふりをして、公式の試合では有効と見なされない、脚への攻撃を仕掛ける。……

ラムザは巧みに罠をすり抜けている。

（なかなか、喧嘩慣れしていらっしやる。……ならば！）

バスカークは突如、当てるつもりで猛然と剣を振り下ろした。決まれば、少なくとも肩の骨が碎ける。

が、――

「！」

瞬間、ラムザは神速の身ごなしを発揮した。

疾風^{かぜ}に流されるようにバスカークの剣は僅かに逸れ、懷に飛び込んだラムザの、深い碧い瞳を間近に見た時には……、

「ぐっ」

バスカークは柄頭で胸を突かれて、息が詰まった。

尻餅をついて倒れたバスカークの喉に、ラムザが剣を突きつける。

「参りました」

再び、おおーっと歓声が揚がった。

木陰の”特等席”で観戦していたナツシュは、ぐっと拳を握り締めて立ち上がった。

「すごいっ！すごいです、ラムザ君！流石、未来の北天騎士団団長ですねえ！！」

「ケッ、大将ってな個人技だけでやるもんじゃねーぞ」と言いながら、ガストンも拍手した。

ラムザは剣を引き、バスカークに手を差し伸べた。

「もう一度。次は、本気で仕合っていただけですか」
見物人達の興奮が静まる。

「え……？手加減してたのか、あれで！？」

「ま、そうでもなけりゃ、第一線の千騎長殿が負けるはずないか」
バスカークはラムザの手につかまって立ち上がる。

「失礼いたしました。では改めて……尋常に！」

しばし息を整え、剣士二人は間合いを取り直して向かい合った。

「はッ」

「ハアッ！」

気合いの声と、金属のぶつかり合う音とが、中庭の空気を震わす。

練習試合の後、屋内に入って二人だけになると、ザルバッグはバスカークに感想を求めた。

「バスカーク。ラムザをどう見た」

「すこぶる真っ直ぐなお方です。良くも悪しくも。まだまだ”奥”はありそうですが、”裏”はほとんど無いようにお見受けしました。

あの方を詐術に陥れるのは、玉菜畑キャベツを信じている小娘をたぶらかすより造作も無いことでしょうね。

おっと、他意はございませんよ」

「あつてたまるか。私の弟なのだぞ」

「ご心配には及びますまい。ディリータ君といいましたか、あの気苦労の多そうな少年が、弟君に足りないものを補ってくれているのでしょう。彼は、ラムザ様が”悪い大人”に籠絡されるのを、体を張って阻んでくれるではありませんか」

エルムドア侯爵を護衛してイグロスへ戻る三日間余りの道中に、バスカークは二人の少年の性格と関係を見抜いていたようだ。

「剣の方は、どうだ」

「先程は、勝ちを譲っていただきました」

二本目の勝負は、バスカークが取っていた。

「謙遜はよせ。まともに仕合えば、お前が勝つのは当たり前だ。一本目は、色々と遊んでおったろう」

「御無礼つかまつりました。なぶるつもりではなかったのですが」

「はは、わかつている。つい、本気にさせてみたくなるだろう」

「身の程を過ぎたことをいたしました。試合でしたからご容赦下さいしましたが、命の奪とり合いであれば助かりませんでした」

ラムザが柄打ちではなく剣の刃の方で斬りかかってきておれば、

更に速くバスカークの体に届いていたはずだ。

その場合、バスカークにもかかわせなかったろうし、ラムザにも、バスカークの体に当てずに剣を止めることは出来なかったろう。

「そうか。実は、あいつが全力を出せば、私でも危ないかもしれないと思う」

ディリータと二人がかりとはいえ、初めてザルバグが敗北を喫したのは、ラムザが何度か実戦を経験したからだろう。

力や技は、既に大人に負けぬほどに育っている。後は、ぎりぎりの死線を見切って、どこまで踏み込めるかだ。

「とはいえ、まだまだ半人前だ。ディリータにしてもな……」
ザルバグは苦笑した。

「あいつには敵が多い。ただに、ラーグ閣下の敵、ベオルブ家にとつての敵のみが敵ではないのだ。お前にはわかんと思うが」

「……はい」

バスカークも庶子だった。

伯父の養子となり、五十年戦争の最も激しい最後の五年間を戦場で過ごしてきた。伯父のたつての遺言で後任に推され、去年二十二歳の若さで千騎長に就任したばかりという、異色の経歴の持ち主である。

「いずれは兄や私の跡を継ぎ、閣下のお役に立つべき奴だ。気を付けてやっているつもりでも、私では目の行き届かない所もある。お前からも、何かと指導してやってくれ」

バスカークは微笑した。ザルバグがラムザを可愛がることは、時に、兄というよりは父親のようだ。

「しかと、承りました」

「すまぬ」

「いいえ。光栄に存じます。北天騎士団の未来を託して頂けるのですから」

バスカークの目から見れば、ザルバグもラムザに負けず劣らず邪気の無い男だ。バスカークは、この純朴な上官に信頼されること

を嬉しく思ったし、その弟にも可憐さを感じていた。

「ザルバッグ様……、今回の件でラムザ様に下されるご処分は、重いものになりそうなのですか」

ザルバッグは顔を曇らせ、顎鬚を撫でた。

「私から今一度掛け合ってみる。が、ダイスダーグ兄の立場も難しいのだ。あいつには、可哀想なことをさせたかもしれない」

午後に開かれる軍議のために、ザルバッグとバスカークはイグーロス城へ登城した。

「はあー……」

客間に通されたナツシュは、羽布団の上に手足を投げ出した。

「ふかふかお布団が気持ちいいー。ちょっとお昼寝しちゃおっかな」
ガストンは、透かし編みの覆いのかかった長椅子に体を沈め、部屋の調度を見回す。

「ハアー……」

天井から銀の飾り燭台が吊り下がり、床には毛足の長い紗国の絨毯と、呂国産の銀色狐の毛皮をはぎ合わせた敷物が敷かれている。

壁には雅国の象牙細工や、色鮮やかな南洋の鳥の剥製や、金糸銀糸を縫い込んだ刺繍画が飾られ、螺鈿の象眼の施された卓子の上には、白磁の花瓶に花が活けられている。

椅子の背もたれや寝台の脚にまで、手間暇のかかった彫刻の模様がある。

「くつろげねーっ！何なんだこの、無駄に豪華な家は！」

「そお？たまにお客さんになるのって、贅沢でいい気分じゃない？」

「てめーも結構なお坊ちゃま育ちだな」

「はは……、ぼくも、窓に硝子がはまってるのは流石にびっくりしたよ」

当時の畏国の建造物では、窓には鎧戸か帳、もしくはその両方が取り付けられているだけなのが普通だった。冬には昼間でも窓を閉め切り、屋内は暗く、空気が淀みがちになった。

しかし、ベオルブ家の城下屋敷の、東の棟は、全ての部屋の窓が硝子張りである。病弱で屋敷の外に出ることが少なかった正妻・マリソフィアが過ごしやすいようにとの、バルバネスの心配りだった。

硝子は高級品であり、硝子窓といえ、寺院の彩色硝子か、ソフィアのような繊細な貴婦人の私室に使われる程度だった。

薄く平らな一枚板の硝子を作る技術の発達していなかった頃なので、格子に仕切られた窓硝子を通して見る庭の風景は、ぼんやりと歪んでいる。

「あー、駄目だ、駄目だ」

ガストンは肩や背中の筋を伸ばしながら、立ち上がる。

「飯食うだけで肩凝っちゃったぜ。戦の前に、余計なことで気疲れしたくねえや。俺は、番兵の詰め所にも間借りさせてもらわあ」
ぶらりと、客間を出て行った。

うつ伏せになって羽根枕を抱えたナッシュは、程なくうつらうつらとまどろみ始める。

「……」

アルガスも、腕を頭の後ろに組んで寝台に寝転がった。

が、ナッシュのように、口の端からよだれを垂らして安穩と午睡することは出来ない。

ベオルブ邸の豪華な雰囲気吞まれて、気持ちこそわそわと落ちて着かないのは、ガストンと同じだった。

しかし、アルガスは目を閉じて、弛緩しようとした。

自分の生活感覚が貧乏くさいことが、侘びしくもあり、恨めしくもあった。

サダルファス家の没落後、母は急な環境の変化と心労のために体を壊し、アルガスが六歳の時に他界していた。以来アルガスには、八歳年上の姉が母親代わりだった。

物心ついた頃から貧乏が当たり前だったアルガスと違って、姉に

はお姫様暮らしの記憶があったはずである。

だが、アルガスの覚えている限り、姉は愚痴一つこぼしたことなく、いつもまめまめしく立ち働いていた。荒れて固い、温かい手で、家族の食事を作り洗濯をし、母を看病し、弟の子守りをした。

降格された父の領地は、それでも、ガストンやサーシャの実家よりもはるかに大きかった。だが、領地からの収入は広さの割には多くなかった。農民達が賦役の手を抜いていたからだ。領主の分の畑は、明らかに、農民達自身の分の畑よりも手入れが悪かった。

——働き盛りの男衆が戦死してしまいましたからなあ。手が回りませんで。

と言われれば、それが怠慢サボタージュの言い訳とわかっていても、返す言葉が無かった。

雪華騎士団と、その友軍の二つの騎士団の壊滅で、騎士と平民の歩兵、弓兵、工兵など、合わせて二千人以上もの死者を出していた。ルオフォンデス地方では、叔父や従兄弟なども含めれば、一人の親族も失わなかったという家の方が珍しいだろう。

ガストンやサーシャの家は、貧小なりといえども領主として信頼され、敬愛されている。しかしサダルファス家は、朋輩ロマンダの貴族達のみならず、領民からさえ、尊敬も同情もされなかったのである。

アルガス姉弟は長年、父と離れ、呂国旧教派の修道院の敷地内にある借家で母と暮らしてきた。母の療養のためでもあったが、修道院の中ならば、世間の冷たい風も隙間風程度にしか吹き込まなかったからだ。

母が亡くなり、葬儀の費用などのために家計がますます苦しくなっていたので、姉弟は借家を引き払い、領地の村の一つで父と暮らし始めたのであるが——。

「おかえりなさい、アルガス。……あら」

着古した父の服からアルガスの服を仕立て直していた姉は、弟を振り返って驚いた。

”ただいま”とも言わずに物音を潜めて家に入ってきたアルガス

は、ぼろぼろに汚れていた。服があらこちら擦り切れて破れ、体にも頭にも、泥と血と韋駄鳥チヨコボの糞がこびりついていていた。

「姉上……、う、ううつ、ううわああっ！！」

張り詰めていた糸が切れたように、アルガスは声を挙げて泣き出した。

姉は、躊躇なくアルガスを抱き寄せた。

「あら、あら。どうしたの？」

引越しの翌日、アルガスは村の中を歩き回り、子供達が遊んでいる場所を探した。すぐに、丘の上の牧草地で大勢の子供達が鬼ごっこをしているのを発見した。

アルガスは近付いていき、手を振って呼び掛けた。

「おい、何やってるんだ？」

子供達は誰も振り向かず、わいわいと騒ぎながら走り回っている。アルガスは、もっと大きな声で呼び掛けた。

「オレも入れてよ」

……。

「これ、どういう遊び方なんだ？」

……。

「あのさ、オレ、アルガスっていうんだ。昨日引越してきたの、知ってるよな？」

……。

「おい！」

アルガスは”鬼”の男の子をつかまえた。十歳か、もっと上だろう。この集団グループのガキ大将格のようだ。

「聞こえてるんだろ！」

「……。聞こえてますよ、お坊ちゃん。サダルファス家は、俺達なんかが直接口を利いちゃいけない、雲の上の名門貴族なんでしょう？」

その声には、冷ややかな嫌味の響きがあった。

「……別に、今は、雲の上ってほどじゃ……。でも、こっちから話し掛けたら返事をするのが礼儀だろ！領主の息子なんだぞ」

「領民を墓に突き落とすのが仕事の領主の、な」

「なっ、何だとう……」

ついさっきまでの楽しいな雰囲気が消え、子供達は警戒するような目付きでアルガスの顔色を窺っている。

「ここにいる連中全員、一家から一人は死人出してるんだぜ。お前のじいさんに連れてかれたおかげでさ。

俺達に威張る資格あると思ってるのか？叩き出されないだけ感謝しろよ」

ガキ大将は丁寧な口調を捨て、高圧的にアルガスを睨んだ。

「な、何だよ……！サダルファス家はなっ、騎士の中の騎士って言われてたんだぞ！ほ、本当なら、お前らみたいな泥百姓のガキと混じって遊ぶような身分じゃないんだぞ！

もういいっ！そっちから頭下げられたって、お前らなんかとは遊んでやらねえよっ！」

アルガスは負け惜しみを言って、ダツと丘を駆け下りていったが、途中で悔し涙がポロポロとこぼれてきた。

それから数日間、アルガスと村の子供達とは、会ってもお互いに無視し合っていた。

アルガスは仕方なく、一人で木に登ったり虫を捕ったり、草木を相手に木剣を振るったりして遊んだ。

そんなある日の午後――。

（あれ……）

アルガスが木の上から見ていると、三歳ぐらいの小さな子供が、林の中に蝶を追ってきた。

足許が危ないな。と思っていると、案の定……、

すってんころーん。

木の根につまずいて転び、頭から真っ逆様に地面の凹みにはまり込んだ。

(ああっ、矢っ張り!)

アルガスは木の幹を滑り降りて駆け寄り、子供を引っ張り起こした。

「びいええええ〜!!」

「あー、よしよし!びっくりしたなあ。大丈夫だ、痛くない!男だろ!……って、女の子かあっ」

アルガスは女の子の服から枯れ葉や土を払い落とした。額がぷっくりと腫れてたんこぶが出来ているが、他に怪我はなさそうだ。

「え、えつと……そうだ、おまじない!姉上がよくやってくれるんだ、効くぞ!ほーら、痛くない、痛くない。なっ?」

アルガスはたんこぶの上に指でそうつと、癒^{フエアリ}しの精霊を表す古代神聖文字の形を描き、膏藥をすり込むように三度撫でた。

「ふええ、ふええ……」

女の子はまだ泣き止まない。

「え、ええーと……。べろべろー。あぶぶー。うみよみよーん!」

アルガスは精一杯変な顔を作って、痛みから気を逸らそうとした。

女の子はキョトンと不思議そうに見ていたが、やがてケラケラと笑い出した。

大人も子供も含めて、村人がアルガスに笑顔を向けてくれたのは、これが初めてだった。

「おっ?面白かったか?よし、じゃあ、とっておきのやつを……」

アルガスは調子に乗った。

「もっけもけー!くっけーっつ!」

……、

「ううえええええ〜ん!!」

「ああっ、怖かったかあっ。ゴメン!」

アルガスが手を伸ばして、女の子の頭を撫でようとすると……、ガッ。

「いてっ……」

その手に、木切れがぶつかった。

例のガキ大将が、血相変えて走ってくる。

「お前、最っ低だぞ！俺達に相手にされないからって、こんな小さい子いじめて腹いせか？」

「違うっ……、いじめてないって！」

「じゃあ何で泣いてるんだ？」

「転んで泣いてたから助けたんだよ！なっ？」

アルガスは女の子に同意を求めたが、元々まだお喋りが上手くないのか、ガキ大将の剣幕に圧倒されたのか、泣き続けるばかりだ。

「言い逃れする気かよ！卑怯者！」

ガキ大将はアルガスを殴り飛ばした。

「流石、裏切り者の孫だな！今まで、チビだと思って容赦してやってたけどよ。根性叩き直してやる！」

「お、お祖父様は裏切り者なんかじゃないッ！！」

アルガスは腰に差していた木剣を抜いて、応戦しようとした。

だが、騒ぎを聞きつけて集まってきた他の子供達までが、我も我もと石や木切れを投げつけてくる。アルガスは怖くなって逃げ出した。

「本当に、違うんだ！後でその子に訊いてみるよ！」

こけつまろびつ、涙と鼻血で顔をくしゃくしゃにしながら家に逃げ帰ろうとする道すがら、出会った子供達も、示し合わせたように石や韋駄鳥チヨコボの糞を投げてきた。

何度か大人の村人ともすれ違ったのだが、彼らは黙って、見て見ぬふりをしている。

アルガスは大人達に助けを求める気になれなかった。うっかり泣き付こうものなら、かえって彼らまで鋤や鍬でアルガスを追い払うのではないか、と思われた。

普通は、一人ではとても太刀打ち出来ない暴力に対抗するには、

”一段上の権力”に庇護してもらうのが良いのだろう。

だが、子供達が制裁を恐れずにアルガスを攻撃してくるのは、村の大人達がサダルファス家に敬意を払っていないからだ。そして、

何故村人達が敬意を払おうとしないかといえば、騎士達がサダルフアス家を軽蔑し、見捨てているからだ。

サダルフアス家の人間は、孤立無援なのだった。

「助けなきや良かった。こんな目に遭わされるんなら……。今度から、泣いてる子がいても、放っとく」

アルガスの着替えを用意し、顔や髪にこびりついた汚れを拭き取り、怪我の手当てをしながら耳を傾けていた姉は、深い碧い瞳でじっとアルガスを見つめた。

「あら。本当に、そう思う？」

「……うん」

「でも、放っておいたらお友達になれないわねえ」

「……。親切にしたからって、必ず友達になれるわけじゃない……」

「そうね。でも、親切にしなければなら、絶対にお友達になれないんじゃない？」

「……」

姉は微笑んだ。

「許しておあげなさいよ、アルガス」

「許す……なんて……。どうやって……」

「嫌なことを忘れろっていうんじゃないの。何か一つ嫌なことがあっても、十まで嫌いになってしまわないってこと……。かしら」

「……？」

「今日喧嘩した人でも、明日は別のことで仲良くなれるかもしれない。

誰かに意地悪されても、その人と同じ集団……家族とか、村とか、国とかの人みんながそうとは限らないわ。中には、仲良くなれる人もいるかもしれない。

触れ合う機会を閉ざしてしまったら、間違いを正していくことも出来ないでしょう」

「……」

「笑ってくれたんでしょ」

「……うん」

「じゃ、その子とはお友達になれそうじゃない？他にも、同じようにすれば笑ってくれる子はいるかもしれないわね」

「うん」

「それにね、もし、一人もお友達が出来なかったとしても、神様はアルガスが他の子に親切にしてあげたのを見て、喜ばれたと思うわ。それから、勿論わたしもね」

「姉上も？」

「ええ。アルガスがいいことをしたのを聞いて、とっても嬉しい。これからもそうしてほしいって、思うわ」

姉は本物の膏藥も塗ったが、湿布の上から、癒^{フェアリー}しの精霊の古代神聖文字を描いて三度撫でる、いつものおまじないもした。

「……そっかあ」

にへへ、と照れ笑いしてアルガスは姉に抱き付き、唇に口付けした。
「姉上、有難う。オレ、今度あの子に会ったら、遊ぼうって言うってみる。それから……他の子達にも、声掛けてみる。誰か一人とでも友達になれば、そこから、他の子とも仲良くなれるかもしれないし……」

「そうよ。まだ引越してきたばかりだもの。これからよ」

姉はアルガスを抱き締めた。

「大丈夫。神様は決して、正しい者をお見捨てにはならないわ。心を強く、明るく持っていれば、そのうちきっと、アルガスのことをわかってくれるお友達が出来るわ……」

姉上のおまじないは、本当によく効く。と、アルガスは思う。傷の痛みも引くけれど、それ以上に、冷たく固くなっていた心に温かい希望が戻ってくる。

村の中央の教会から、夕べの鐘の音が流れてきた。

「あら、もうお祈りの時間だわ」

姉は胸に掛けていた数珠^{ロザリオ}を握り、目を閉じて黙祷した。

母の形見に譲り受けたこの数珠ロザリオ以外には、宝飾品もほとんど手放してしまった。だが、豊かな黄金の髪と、二つの宝石のような澄んだ碧い瞳があるだけで、姉上はどこのお姫様よりも綺麗だ、とアルガスは信じている。

アルガスも、姉と一緒に祈った。

お祖父様の無実が明かされますように。友達が出来ますように。それから、大好きな姉上が幸せになれますように……。

姉は十五歳になっていた。そろそろ、縁談が持ち上がってもおかしくない年頃だ。

美しい、気立ての良い娘なのだ。妻にと望む若者は、それなりにいるようだった。

が、何と言っても、”裏切り者の孫娘”である。親族の強い反対に遭って、諦めさせられてしまいうらしかった。

さて、数日後――。

アルガスは村外れで、あの小さな女の子が一人で小野豚うりばーの縫いぐるみと遊んでいるのを見つけた。

「よっ……。元気か？ぶつけたところ、もう痛くないよな？」

女の子は縫いぐるみを抱えて立ち上がり、後退った。

「この前は、おどかしちゃってゴメンな。今日は、怖いことはないから……」

アルガスはしゃがんで、両腕を広げた。

「おいで。一緒に遊ぼう」

女の子は困ったような顔をして、アルガスを見つめた。

「あのねえ、おうちに帰ってから、助けてもらったって話したの。痛くなくなるおまじないもしてもらったって」

「そっか。有難う」

「そしたら、父さんがね。それは”イタンジュジュツ”だって。神様に怒られるから、お兄ちゃんとは遊んじゃいけない、って」

他の子供達の笑い声が近付いてくる。女の子は怯えたように、く

るりとアルガスに背を向けて走り去っていった。

？－4－〔3〕 数珠（ロザリオ） ？姉上のおまじない（後書き）

ザルバッグの固有技は”破壊魔剣”ですが、悪役っぽい響きが気になってちよつと名前変えてみました。え？わかりづらくなるだけですか？うーん、原作通りに戻すかもしれません。

アルガスの一家は村に馴染めず、それは他の村に移っても同様だった。

姉は十七歳になった。

当時の騎士階級の娘の進路は、ほぼ三通りに限られる。即ち、結婚するか、より身分の高い貴婦人の侍女になるか、修道女になるか、だ。

アルガスの姉は、さる男爵令嬢の侍女となり、家を離れた。

五十年戦争は畏国軍イヴァリースの敗色が濃くなり始め、父は戦地に駆り出されて留守がちになった。

アルガスは一人、村に残された。

最後に落ち着いた村では、執事や代官が”飴と鞭”ならぬ”鞭に次ぐ鞭”で厳しく村人達を監督していたため、嫌がらせを受けることは無かった。

その代わり、村人達はアルガスを恐れて避けた。遠くから姿を見かけただけで、そそくさと道を変えたり、家の中に逃げ帰ったりしてしまう。

笑いかけてくれる人がいないのは、同じだった。

執事達は、忠義心が厚いといえど厚いのだが、父が最初からこの村に居を定めようとしなかった訳が、アルガスにはわかる気がした。執事達は村人だけでなく、アルガスにも厳しかった。

頻りとサダルファス家が栄華を誇っていた頃の話をし、一日も早いお家の再興を、とアルガスをけしかけるのだ。

しっかりお勉強なされ。体を鍛えなされ。百姓どもに甘い顔をなさっては侮られるばかりですぞ、常に気高く威厳を持って。……

一方では”裏切り者の孫”と蔑まれながら、一方では”名門の跡取り”として過剰な期待を掛けられる、不安定な日々。

アルガスは笑うことも、泣くことも出来なくなっていた。

余裕を失い、しかめっ面が癖になってしまった弟を、たまに休暇で帰って来ると姉は心配した。

「寛容さや陽気さだって、騎士には大事な素養だと思うわよ。アルガス、焦らなくなつて、あなたは大人になれば立派な騎士になるわ。もっと自信を持って、自然にしていればいいのよ」

「……。姉上こそ、オレのことなんか心配してる場合なのか？男爵令嬢っていったって、無教養で人使いが荒い、平民の妾の娘だって話じゃないか」

財政状況の苦しい男爵家が経済力を、新興の貿易商が商売拡大のために権力を求めて、強力に手を結び合った結果の”政略結婚”だった。

正妻母子の方が遠慮して別荘で暮らしているのだが、男爵は実は貿易商の娘をさほど愛していないらしい。”金づる”としてだけ大事にされている……という思いが、令嬢とその母を^{ヒステリック}激情的に、陰険にさせた。

母娘は、元名門貴族の娘であるアルガスの姉に辛く当たることでは、^{プライド}自尊心を慰めている……という噂だった。

「そんな風に言われているのね」

姉は溜め息を吐いた。

「結構、いじらしいお方だと思うわよ。……ちよっと、あなたに似てるかもしれないわ」

「どこが！？」

「一生懸命、礼儀作法や文学のお勉強をしていますが、バカにされ続けるのよ。”所詮は成金の孫”って。血筋は、お嬢様のせいじゃないのに……」

だからいつも、精一杯意地を張って、威張って、自分を大きく見せようとなさるのね。背伸びなんかしないで、素直に自分らしく振る舞った方が、ずっと魅力的だと思うのだけど」

「……」

姉はアルガスの頬を両手で挟み、深い碧い瞳でじっと弟を見つめ

た。

「ねえ、アルガス。サダルファス家の再興が、お父様やあなたの幸せにつながるというのなら、わたしも嬉しいわ。」

でも、別に大勢の人に注目される有名人じゃなくたって、人の役に立つ良い仕事をしている人はいっぱいいるわよ。ずうっと眉間に縦皺を寄せて、歯を食いしばって、苦行みたいに頑張り続けなくちゃならないことが、本当にあなたの人生に必要なことなのかしら？

アルガス、わたしが毎日神様をお願いしているのはね、あなたが笑顔でいられるように、ってだけよ」

姉はアルガスの額に口付けした。

その時になってアルガスは、姉がいつも首に掛けていた数珠ロザリオが無いことに気付いた。

「姉上。母上の数珠ロザリオは？」

「ああ……、お嬢様のお気に召したみたいで。少し前から貸して差し上げてるのよ」

苦労の多い日々を支えてきた信仰心、その象徴だった護りの数珠ロザリオが離れたことは、アルガスには不吉な予兆のように思われた。

アルガスが十一歳の年の、正月のことだった。

突然の訃報が舞い込んだのは、およそ二ヵ月後だ。

姉が自殺した、という。

第一報では、男爵夫人と令嬢の度重なるいびりに耐えかねて……ということだった。

「嘘だ！ そんなこと、あり得ない！！」

信心篤く、アルガスが挫けそうな時いつも慰め励ましてくれた姉。意地悪だと評判の男爵令嬢のことさえ可愛く思うほど、優しく明るい性格なのだ。絶望するなど考えられない。

だいたい、買い取られた奴隷でもあるまいに。勤めに嫌気が差したなら、ただ暇乞いして実家に帰ってくればいいだけの話だ。自殺する必要がどこにあるうか。

続く第二報は、輪をかけて信じがたい内容だった。

姉が、令嬢の首飾りを盗んだのだという。罪が明るみに出たのを恥じて自殺した……と。

しかも、遺体と遺品は既に、灰にして野に捨てた後だというのだ。グレバドス教では自殺は神への反逆罪と見なされ、埋葬が許されないのだった。

「そんな……、本当に、よく調べたのですか!？」

忌まわしい罪人の死であるはずなのに、男爵家からサダルファス家に過分の見舞金が贈られたことにも、アルガスは不信を募らせた。これは、何かの”口止め料”ではないのか……?

人の口に戸は立てられない。

更に十日ほどして、”ここだけの”続報がアルガスの耳にも届いた。それによると――、

令嬢はアルガスの姉の数珠ロザリオが気に入り、何やかやと理由を付けて借りっぱなしにしていたらしい。

そんな中で、令嬢が大切にしていた首飾りが無くなった。

令嬢は真っ先に、アルガスの姉を疑った。数珠ロザリオを返さずにいることへの仕返しだろうと思ったのだ。

激しく問い詰めるうちに、誤って窓から突き落としてしまったのだという。

令嬢の祖父である貿易商が、役人に賄賂を握らせ、事件を自殺として片付けさせた。

数日後、令嬢の首飾りは意外な場所で見つかった。嵐で倒れた木スチールホークの上の、鈍色鷹の巣から出て来たのだ。

窓辺に置いてあったのを、光る物を集めて巣を飾る習性のある鈍色鷹スチールホークが取っていったらしい。

姉は、勿論無罪だったのである。

アルガスは一人で、雪の降る道を二日かけて歩き、姉の勤め先に向かった。姉の形見として、何としても数珠ロザリオを取り戻したかったの

だ。

父は留守だった。

他の大人達には、相談しようとは思わなかった。やめろと言われるか、でなければ、一緒に付いてきて姉の無実を訴え、事態をこじらせそうな気がしたのだ。

アルガスだって、腸が煮えくり返っている。だが、謝罪を求めても無駄なのはわかりきっていた。それよりも、せめて数珠ロザリオを取り戻せば、亡骸という寄る辺を失った姉の魂を家に連れ帰ることが出来るのではないかと思った。

まだ子供のアルガスこそ、頭に血が上れば何をしでかすかわからないはずなのだが、そういう自覚はなかった。

町外れの橋で、アルガスはたまたま、侍女を連れて外出中の男爵令嬢に遭遇した。

石橋の袂に住み着いている物乞いの母子が、令嬢に施しを乞うていた。

侍女が財布を出して、なにがしかの金を渡そうとしたが、令嬢は何を思ったか、首に掛けていた数珠ロザリオを外した。

アルガスにはわからなかった。

何故、令嬢は姉の数珠ロザリオを持っていたのか？そして何故、物乞いに与える気になったのか――？

あんな事件の後でさえ、ただ綺麗だというだけで身に付けて歩くほど、無神経だったのだろうか。それをまた、街の人々の目の前で寛大なところを示そうと、見栄を張って恵んでやろうとしたのか。

あるいは、それとも――？

彼女なりに追悼の気持ちがあったのだろうか。困っている人の役に立てることで、少しでも罪滅ぼしにしようと思ったのだろうか。

考えている暇は無かった。

「何とお優しいお嬢様でございましょう。お嬢様に神々と聖人様方の祝福がありますように……」

物乞いが礼を述べるのを聞いたアルガスは、カッとなった。数珠ロザリオに

伸ばされた物乞いの手を邪険に払い、令嬢との間に割って入った。

「返せよ！それはお前が勝手に他人にやっていい物じゃない。

姉上の物なんだ。姉上の、たった一つの宝物だったんだ！

返してくれよッ！この、人殺しッ！！」

令嬢の顔が、見る見る青ざめた。

「返すわよッ！こんなもの！！」

令嬢は数珠ロザリオを引き千切り、河に投げ捨てた。

河は浅く、澄んでいた。雪解け水が流れ込む前で、水量は深い所でもアルガスの膝の下ぐらいまでしかなかった。が、晩冬の水は身を切るように冷たい。

必死に珠を拾い集めるアルガスに、橋の上から物乞いが悪態を吐いた。事情を知らぬ街の人々も、貧しい者への施し物を横取りしたというので、呆れ、嘲笑い、罵った。

返してもらって当然の物を受け取るのに、何故こんな屈辱を味わさなければならぬのか――？

寒さと怒りのために、アルガスの体はぶるぶると震えた。

――許しておあげなさい、アルガス……。

（許せ、だって？）

――神様は決して、正しい者をお見捨てにはならないわ……。

（じゃあ、姉上はどうして殺された！）

グレバドス教の聖印は、聖アジョラを貫いたという三叉の槍をかたどっている。数珠ロザリオに付いた聖印の飾りを、アルガスは血が出るほど握り締めた。

（許してなぞやるものかッ……！今に必ず、貴様らに相応しい報いを受けさせてやるぞ、愚民どもッ！！必ずだッッ！！！！）

灰が撒かれたという荒野の土を一握りと、実家にあった櫛に絡まっていた黄金色の髪を一筋だけ棺に納め、父とアルガスはひっそりと姉を吊った。

鷗国軍オルダリーアがランベリー領に侵攻してきたのは、ほんの数ヶ月後のこ

とだった。

あの男爵の城と町はオルダリア鷗国軍の略奪に遭い、多くの住人達が殺された。令嬢は捕らえられ、兵士達からの暴行に耐えかねて自害した……とも、激しく抵抗したために斬り捨てられた、とも聞いた。

因果応報、ざまあ見ろ——とアルガスが溜飲を下げたかというところではない。

アルガスが想定した”報い”とは、そういうものではなかった。立派な騎士になったアルガスを見て、人々が羨み、賞賛し、こぞって自ら膝を屈して服従する……。かつてアルガスと姉に冷たい仕打ちをしたことで、彼らこそ周囲から非難され、石もて追われ、前非を悔いて居ても立ってもいらなくなる……。

そんな光景を思い描いていたのだった。

改悛することもなく死んでしまうなど、むしろ許せなかった。

やるかたのない憤懣は、成長途上の少年の心の中で、いつしか変質を遂げた。具体的な目標を見失った復讐の対象は、”平民全般”に拡がっていったのである。

身分階級に従った秩序を回復させるのだ。

サダルファス家のような、由緒正しい名家の人間がリーダーシップ主導権を執って、金の力で横車を押す商人ども、貴族支配に反抗する百姓どもを統制してゆかねばならない。

それが己の使命であり、姉への供養なのだ。

……という風に。

自分の姿勢に疑問を感じる時もないではないが、その度に、胸に掛けた形見の数珠が、あの雪降る河での決意を思い出させた。

だが今、アルガスの心は、かつてないほど揺れている。

(何なんだ？ あいつは……)

ラムザは実によく笑う。

どこに行っても、人懐こく誰彼に話し掛け、温かく微笑み合い、くだらない冗談を飛ばし合っては笑い転げている。

羊飼。托鉢僧。船頭。洗濯女。猟師。行商人。辻楽師。……

雨宿りした草葺きの農家で、振る舞われた塩味だけの質素な汁物^{スープ}を旨そうにすすり、膝に上ってくる洩垂れ小僧達と遊んでやり……と、いうよりも一緒になって本気で遊んだりもする。

その一方で、ミニマム伯爵家の豪華な正餐に招かれても気後れせず、作法を守って優雅に談笑したりも出来る。

かと思えばまた、客室に戻った途端、

——ああいう席に長くいると顔が凝る——！

などと、表情筋をほぐすためと称して百面相し、級友達を大笑いさせたりするのだ。

何が面白くて、そんなに笑うことがあるのだろうか？

姉が亡くなってからというものの、アルガスはもう、笑い方など忘れてしまった気がする。

保身のための愛想笑いぐらいしか人に見せることはないし、人から向けられるのも、嘲笑か、営業用の作り笑いだけだった。

「え？何がって……、楽しいよ。色んな人と話すのって、飽きないよ」

ドーターからの帰り道、スウィージ街道に建つ砦の屋上で、ラムザは夕陽を浴びながら言った。

「うーん……、例えば、この石積みさ。大きさや形は色々だけど、たくさん石が上手く組み合わされて、一つの砦として機能してる。どれか一つで全体を支えているわけじゃないし、逆に、どこか一カ所でも欠けたら、そこから弱くなってしまう。

国とか町だって同じことだろ。大勢の人達が、自分の力を活かして色んな役割を果たしているから、上手く回っているんだ。

一生懸命に生きている人達って、みんな、どこかしら光るものを持っていると思うよ。そういうの見つけるとき、嬉しくなる。世の中にはこんな人もいたんだ、こんなお仕事もあったんだ、って。また一人、面白い人と知り合えたなあって……。

僕は、それぞれに好きだな」

ラムザは剣の練習で乱れた髪を解き、風にそよぐままにした。

輝く黄金色の髪に包まれた笑顔は、男ながら、時々どきりとするほど姉に似て見えることがある。

ラムザに、またガストンに、アルガスは姉の話をしてやろうかと思ひもするのだが――、もう一步のところまで口をつぐむのだった。

（所詮、こいつらは”持てる者”なんだ）

父や兄の功績により、最初から好意的に迎え入れられる。

本人の人柄というなら、アルガスの姉だっていつも、会う人毎に微笑みかけてきた。だが、笑顔を返してくれる者はほとんどいなかった。

ひとえに、祖父の不名誉という軛くわが、アルガス姉弟を縛り付けてきたのだ。借金などとは比べものにならぬほど厄介な荷重ヘンデだ。

……と思う。

（そうさ。オレは、自力でのし上がっていくしかないんだ）

エルムドア侯を救出して意気揚々とドーターに引き返したアルガスは、一夜明けて北天騎士団の取り調べを受ける身となり、真っ青になった。

逮捕した骸旅団の一味の者が、侯爵の韋駄チヨコボ鳥車が通る道筋を教え襲撃事件を手引きしたのはアルガスだと、証言したというのだ。

”共犯者”が、裏切らぬという約束に渡した持ち物――手袋がアルガスの物だということは、既に認めていた。

ラムザと友人達がアルガスを弁護した甲斐もあったのかどうか、午後になって容疑は晴れた。が、”真相”は、これまたアルガスを不愉快にさせた。

どうやら、小金をつかまされて侯爵誘拐の手引きをしたのは、アルガスを連れてきた近衛隊長だったらしいのである。

アルガスが侯爵の一行に加わるという栄誉を授かったのは、彼の実力が認められたからではなかった。”裏切り者の孫”として、格好のトカゲの尻尾切りに利用されるためだったとは……。

本当に主人の謀はかりごとを知らなかったかどうか、疑いが完全に解けたわけではない。

功を賞して騎士に叙せられる、などという望みが潰えたばかりか、自分の経歴にまた一つ、不名誉な汚点が上乗せされてしまった。

仕える主人も失って、振り出し以下の再出発である。

（何だって利用してやる。どんな機会も逃さない。……姉上の無念を雪ぐまで！）

珠の数の足りなくなった数珠ロザリオは、今も大切に服の下に身に付けている。

だが、姉が二重の汚名を着せられて消されたあの時以来、アルガスは一度たりとて、神に祈ったことはない。

ガストンが外廊下を歩いていると、裏庭から槍をしごく音が聞こえた。

ラムザとディリータが槍術の手合わせをしている。

ガストンの見ている前で、ラムザはディリータの槍の石突きに胸を突かれて、吹っ飛ばされた。

「あー、やられた！」

派手に転がったように見えたのは、受け身を取って衝撃を逃がしたためらしい。

「本番に持ってくるのは、もうちょっと短いやつにしようかな……」
起き上がったラムザは槍を振り回し、ぶつぶつ言う。

「おめーら、元気だなー」

ガストンは手すりに頬杖をつき、沈鬱な溜め息を吐いた。

「どうしたんだい、ガストン？ここまでの旅の疲れが出た？」

「この家に来たから疲れてんだよ」

ガストンはラムザを手招きし、手すり越しに両肩をつかんだ。

「クソ親父が無理矢理でも俺を士官学校アカデミーに押し込みたがった訳が、ちびつとばかり理解できちまったぜ……」

今の俺って、”御曹司の御学友”で、”前途有望な選良見習い騎士エリート”だったんだな……」

ガストンは衛兵達の詰め所に行ってみたのである。仮眠室で雑魚

寝に混ぜてもらえれば……と思っていたのだが、甘かった。

”若様の御学友”を、兵士達は”若様”に対すると準ずる態度で手厚くもてなした。

自分より年上の兵士達から、尊敬と憧れの眼差しで見られるのに閉口して、ガストンはこれも飛び出してきてしまった。

「けど、やっぱ、親父はバカだぜ。」

戦場に出りゃあ斬るか斬られるかだ。肩書きが剣を防いでくれるかつつーんだ。

分不相応にちやほやされたって、俺は俺さ。ケツがむずがゆくならあな。

この屋敷ん中じゃ落ち着ける場所つつたら、韋駄鳥小屋ぐれえかもな。……まさか、飼い葉桶にまで金箔貼ってあったりしねーだろーな？」

「それが実は、金箔どころか純金製……、」

と、真面目くさって言うってから、ラムザは吹き出した。

「……だったら怖いよねえ。あははっ、まさか」

ラムザはガストンの肩を叩いた。

「わかるよ、君の気持ち！この屋敷って絶対、居住性本位じゃないよ。訪問客の目を楽しませるためっていうか……、ベオルブ家の勢力を見せつけるための造りになってるだろ。」

”御曹司”本人だって、常々窮屈だと思ってるぐらいさ」

「そーか？平気そうにしてるじゃねーか」

「うーん、まあ、慣れかな。もし僕が好きにしていいいなら、もっとなすっきりさせたいところだけど。色々政治的駆け引きだとか、おもてなしの形式だとかの問題があるらしいな。」

それに美術品とかは、散財っていうよりは、そういう形で資産保有してるみたいなんだ。

例えばお祖父様の代に、コレクション収集品をかなり処分して遠洋貿易の出資金にしたことがあってね。航海が無事成功して、元手の何倍もの収益が上がったんだ。それで開墾や治水事業に力を入れて――、僕の

育ったマンダレーナ村も、その時出来た村なんだって」

「ふーん？そんなもんか？」

「んー、僕もよくわかんない。まっ、難しいこと考えるのはディリータの仕事だし」

ディリータが呆れる。

「こらこら。明日にでも僕が戦死したらどうするつもりだ？」

ラムザは芝居がかった仕草で、しっかりとディリータの手を握った。
「そんな！君に死なれてしまったら、もう生きていけないよ！お願いだから、絶対に僕を一人にしないで！」

「わかった、わかったから、そういう台詞は女にだけ言え。鳥肌が立つ！」
さぶイボ

ディリータはラムザの手を振り払った。

「あ、そうだ。飾りっ気がないのが良かったら、僕の部屋においてよ」

「おいおい、自宅しいえで一つ寝台ドミトリーはヤベえだろ」

「そうじゃなくてさ。実は、壁掛けの裏側に小部屋があるんだ」
ガストンは思わず笑ってしまった。ラムザもくすくすと笑う。

「マジか。すげえな」

「すごいだろ。時々、ディリータが”警戒のために”泊まり込んでたよ。実際に役立ったことは無いけどね。ちゃんとしたディリータの部屋だって、どうせすぐ隣にあるのに、つくづく心配性なんだからさ」

ラムザがディリータを振り返ると、ディリータは弁解がましく言った。

「お前が、危機感が足りないんだ」

ラムザはガストンの方に向き直り、

「窓が、通気口ぐらいしかなくて、牢屋みたいな感じがするかもしれないけど。来る？」

「ああ、構わねーよ。”伯爵家のお客様”よりや、”御曹司の用心棒”の方が百倍ハマリ役だぜ」

と冗談めかして言ってからガストンは、改めて物珍しそうに、ラムザの髪を引っ張ったり、頬をつねったりした。

「何だい？」

「んー……、てめー、やっぱ超絶お坊ちゃまなんだなーと思ってよ。
アカデミー学校ん中じゃあんまし意識してこなかったが、本当は、俺なんかがどつき倒していい身分のお方じゃねーんだよなあ……」

「そんな、寂しいこと言うなよ。今まで通り、いつでもどついたり首絞めたりしてよ」

「バカヤロ、それじゃまるで、普段俺がてめーをいじめ回してばっかいるみてーじゃねーか！」

ガストンは早速、ラムザの首を腕で絞めた。

「まるでも何も、その通りだろう」

と、ディリータが片手突きで繰り出した槍の穂先は、ガストンがひよいと盾にしたラムザの鼻先で止まる。

「槍でツッコミ入れんなよ」

「それを僕で防ぐなよ！」

「ハハッ、悪い。どら、貸しやがれ」

ガストンはディリータの槍をもぎ取り、裏庭へ下りた。

「よし、勝負だラムザ！」

「もう。負けないぞ！」

外廊下の手すりにもたれて、ラムザとガストンの試合を見守りながら、ディリータは思いをイグーロス城へ馳せた。

（今頃、軍議の真っ最中だな……）

ラムザの配属が決まったならば、いち早く情報収集して対策を講じなくては。

エルムドア侯誘拐事件に関しては、ディリータには反省点が残った。

多少の危険を冒しても、あの場でウィーグラフを仕留めるべきだったか、と思う。

今日、ラムザと二人がかりでザルバッグと戦ってみて、また今、

ガストンの身ごなしを観察していると、ウィーグラフ相手でも勝算はあった、という感触をつかめる。

アルガスやガストンには、捨て駒になってもらったかもしれないが。

（ギユスタヴがもう少し頑張ってくれば、確実に勝てたんだが……）

侯爵誘拐は、そもその計画ではランベリー領か、でなければ自治独立の気運の強いドーター市の周辺で実行される予定だったのだろう。だが恐らく、“黒幕”——ラーグ公とダイスダーグの筋書き通りでは、自分もただ利用されてエルムドア侯諸共に始末されるかもしれないと思ったギユスタヴは、ガリオンヌ領内での誘拐を決行したのだ。

事件が膝元で起きれば、ラーグ公も警備の不行き届きの責任を問われることになる。また、元より“謀反人”のギユスタヴには、失うものは無い。捨て身になれば、犯罪者と取引したという事実を公にする、とラーグ公を強請ることも出来た。

表立って兵を動かせないラーグ公は不利な立場に立たされ、そこに、ラムザが功を挙げる好機チャンスも生まれたのだが——。

ギユスタヴはウィーグラフに肅清され、ウィーグラフは戦わずして侯爵を解放してくれたため、侯爵救出は誰の功でもなくなってしまうった。

ギユスタヴの方が生き残っているか、せめてウィーグラフにももう少し手傷を負わせていてくれれば、“骸旅団の首領”トップを討ち取ることが出来た。ラーグ公と重臣達に快挙を印象付けただけでなく、伏せようとしても世間にも知れ渡ったろうに——。

クラスメイト級友の死さえも淡々と計算に含めてしまう自分の心を、ディリータは恐ろしいとは思わない。

（手段を選び好みしていたら、あの男——、己の野望のためにあらゆるものを犠牲にするあの男から、ラムザを守り抜くことは出来ない）

ラムザが思っている以上に、ディリータは本当にラムザの命を握っているのだ。

——ラムザはてめーのもんじゃねえぞ。

（俺のものさ。俺が守ってやらなければ、ここで生き続けることの出来ない存在……。）

そして俺は、ラムザのものだ。ラムザを守るという役目が無ければ、今ここにいるはずのない存在……。）

ラムザ達親子と関わりが無ければ、七つの時に身寄りを全て失ったディリータは、妹と二人、路頭に迷っていたかもしれない。物乞いやスリをして糊口をしのぎ、今頃、騎士団に討伐される盗賊達の側に立っていたとしても、不思議のない身だった。

（俺達は、互いに必要不可欠なんだ）

カラランツ。

ガストンの槍が転がった音で、ディリータは考え事から我に帰った。

「やったね、僕の勝ちー」

「くっそー、そんなら……」

ガストンは素手でラムザにつかみかかった。

組み打ちかと思い、ラムザも槍を捨てたが……、

「あれ？くっ、くすぐるのは反則……」

「うるせえ！戦場に反則があるか」

「そっちが、ははっ、その気なら……反撃だっ」

「ぎゃははっ、やめろーっ！」

こうなると、ただの子供のじゃれ合いだ。

（やれやれ、何をやってるんだか……）

子供の時分なら、ハールーシャとアルマが目を三角に吊り上げて飛んでくるところだな、とディリータは思い出し笑いだ。

ハールーシャとアルマは、一方がラムザにくっついていて、もう一方が躍起になって間に割り込んだ。が、第三者がラムザと親しくしているのを目撃すると、今度は一致結託して引き離しにかかっ

たものだ。

ディリータはいつも、一歩下がって彼らを見守り、調停した。

ディリータには、みつともなく”争奪戦”に加わる理由がなかった。

ハールーシヤにも。アルマやザルバツグにも。ガストンら、友人達にも。そして、あるいはオヴェリアであるかもしれないが、いづれラムザの傍らに寄り添うべき女性にも。誰にも代わることの出来ぬ地位を、ディリータはラムザに対して占めているのだから……。

眠い……。かなり頭朦朧としながら書き上げました。細々した辻褄合わせの多い回なのに、詰め切れてないような……。手直しは後にして、とりあえず先に進みます。

私の物語のディリータは、何とかワーカホリックです。ラムザやオヴェリアを、というよりは、彼らを守るという仕事を——自分の才能を愛して悦に入ってる所があります。普段は、それは友情や恋愛とほとんど重なり合っているのですが、時に大きく食い違ってしまう。そこら辺が悲劇の種になってゆきます……。

？－４－〔４〕 出立の朝　　アダマンド村

アルマとティータは見習い騎士達マントの外套を膝に抱え、気もそぞろに、長椅子ソファに並んで座っていた。

「遅いわねえ。ちよつと、様子見て来ようかしら」

アルマが、間仕切りの帳カーテンだけで仕切られた隣の部屋を覗こうとするのを、ティータが袖を引いて止めた。

「アルマったら」

「別に、すっぽんぽんだって構やしないわよ。ラムザ兄さんの裸くらい見慣れてるわよ」

「お友達の皆さんもいらっしゃるのよ」

間仕切りをくぐって、ラムザが現れた。

「全くだよ、はしたない。とても、伯爵家の御令嬢の台詞とは思えないぞ」

ラムザは真新しい、竜ドラゴンの革と霊銀ミスリルで出来た鎧を着て、兜を小脇に抱えている。

「あら！格好いいじゃない。似合ってるわ！」

アルマは惚れ惚れと見とれたが、ティータの顔は曇る。

今は美しく輝く鎧も、帰る時には剣戟の傷と血脂にくすんでいるだろう。いや、それでもラムザが帰ってくれば良いが、もしも戦場の露と消えたならば……。

別室で身支度を整えてきたサーシャとナツシュも、感嘆した。

「まあ、素敵バハムートよラムザ君！」

「うわー、天竜イメージみたいな印象ですね！」

サーシャとナツシュは、鎧は着けずに、魔法で強化された魔道士ローレの長衣を着ている。

アルマはラムザの鎧の胴を撫でて、我が事のように自慢した。

「お正月の狩りでラムザ兄さんが仕留めた竜ドラゴンの革で出来てるのよ」

「へえー……！」

「これ、本物の竜の角？^{ドラゴン}すごい！」

ナツシュとサーシャは、竜の頭に見立てた兜の飾りに触ってみる。

「大してすぐくもないよ。ディリータやウェッジにかなり手伝わってもらったからね」

「それでも、すごいと思いますけど……」

「まだまださ。父さんは、十七歳の時には一人で竜^{ドラゴン}を倒したことがあるそうだよ」

因みに――、

聖歴十七世紀現在、古美術品蒐集で著名なミニマム元伯爵家本家に、一領の華奢な少年用の鎧が伝わっている。

現在では希少種となり捕獲禁止されているレナリア氷竜^{ブルードラゴン}の革と、^{ミスリル}霊銀を主材に、^{ブラチナ}白金、^{オリハルコン}虹輝鋼、^{サファイア}青玉、^{エメラルド}緑玉等で装飾された、優美な芸術品だ。儀式の際に着用されたか、もしくは、観賞のみを目的とした記念品だったらしい。

ベオルブ家の象徴である”黒翼の白竜”に擬した意匠^{デザイン}のこの鎧は、ラムザのものだったのではないかと言われている。

もしそうだとすると、随分痩せ型で、手足のすらりと長い少年だったようだ。

「肩書きが剣を防いでくれることも、あるみてーだな……」

他の三人の少年達も、鎧の着付けを終えて部屋を出て来た。

ディリータの鎧は、ラムザのものとそっくり同じ形状だ。ラムザの方が痩せているので、鎧も一回り細いが。

ガストンとアルガスは、^{ミスリル}霊銀の鎖帷子^{チェインメイル}を着けている。

「”御曹司の御友人”でなけりや、見習い騎士風情が^{ミスリル}霊銀装備使わせてもらえるなんざ、考えらんねー話だぜ。太っ腹だなー」

^{ミスリル}霊銀は青銅や鉄よりも軽く丈夫で、錆びにくく、武具の素材としては高級品だ。その分、値も張る。

「別に。貸すだけなんだからさ」

「死にゃあ返ってこないかもしれねーんだぞ」

アルマは不安そうな顔付きになった。

「縁起でもないことおっしやらないで。折角、安全祈願の縫い取りもしたのよ」

と、まずラムザに外套^{マント}を渡す。

左右の肩の裏側に、聖印の刺繍をした小さな布が縫い付けられている。

「……、左の方を、ティータが縫ってくれたのかな？」

「はい」

「そうだと思ったよ。縫い目が丁寧で、気品が感じられるもの」
アルマが横目でラムザを睨む。

「どういう意味？」

「うん？どうって……、ティータはおしとやかでお上品だから、縫い取り一つにも奥ゆかしさがにじみ出てるなあ、と」

「わ・た・し・はガサツで品が無いって言いたいのかしら、この口は？」

アルマはラムザの口を左右に引き伸ばした。

「ぼふはらーんりもいっへらいひよ（僕はなーんにも言っていないよ）。これが品良き貴婦人^{レディ}の取る態度かどうか、自分の胸に聞いてみたら？」

「……んもう！」

アルマがふくれっ面をするのをぞ知らぬ顔で、ラムザはティータの肩を抱いた。

「ディリータ、妹交換してくれない？ティータの方がよっぽど、深窓の姫君らしいや」

「はは、いくらお前の頼みでも、こればかりはな……」

「あ、ひどーい。ディリータもわたしなんか願い下げってこと？」
すかさず、アルガスがアルマの肩に手を伸ばした。

「オレで良ければ、喜んでもらってあげるぜ」

「それは話が別」

と、ラムザはアルガスの腕をねじ上げる。

「はいはい、御馳走さん。兄バカどものノロケに付き合ってっと、

日が暮れちまうぜ」

ガストンが手を叩いた。

「あ。御免なさい」

アルマとティータは見習い騎士達の肩に外套マントをかける。

「有難う！必ず無事に帰って来るぜ！」

アルガスは、今度はティータの手を握ろうとして、ディリータに手首を押さえられた。

「考えてみたら、合戦の時は揃いの白獅子の外套マントを着けるのよね

……」

アルマはラムザに外套マントを着せ付けながら、悔やむ。

「いいんじゃないか？道中着て歩いてるだけで、御加護がありそうだよ」

「そんなこと言ってる絶対、着替え忘れるでしょ。ラムザ兄さん、そそっかしいもん。」

去年、ガリランドに出発する日だって、肝心の入学許可証忘れて引き返してきた上に、わたしの外套マント着てったじゃない」

「あれは、半分お前が悪い。普通、はい、って手渡されて、実の妹を疑うかい？」

「間違えるってこともあるでしょ！襷フリル付いてるのくらい気付きなさいよ！」

ディリータが喉の奥で笑う。

「どっちもどっちだ」

「何よ。ディリータだって同じ穴の小野豚うりぼじゃない。途中でおかしいと思わなかったの？」

「いや……違和感がないんで、またエスト様の趣向か何かだと……」
「僕がエスト伯母上とは服飾感覚センス合わないの、知ってるよね？」

アルマは、ぱちんと兄の頬を両手で挟んだ。

「気を付けなさいよね。普段、釦ボタン掛け違えてたって、靴下裏返しに
はいてたって死にはしないけど。鎧の付け方間違っていたりしたら、
本当に命に関わるのよ」

いつも見上げていた母と同じ顔を、今は見下ろしているのが、ラムザは不思議なような気がした。

「大丈夫だって。ディリータと同じにしてればいいんだろ」

「ディリータ君の鎧は、ラムザ君とお揃いなんですねえ」
ナッシュはしげしげと二人を見比べた。

「影武者ってことか？」

と、ガストンが無遠慮に言う。

「必要とあらば、な」

ディリータは平然と答えた。

「影”の方がよっぽど、逞しくって大将らしいわよ”
と、アルマがやり返した。

ラムザは屈託なく笑って、妹の肩を叩く。

「あはは、そうかも。僕達、”らしくない”兄妹だな」

「勝手に一緒にしないで！」

青い袖無し胴着を鎧の上に羽織った騎士が、ラムザ達の出立を催促しに来た。

「御曹司。バスカーク殿がお見えでござる」

「はい、すぐに参ります」

アルマとティータは、歩き始めた見習い騎士達についてゆく。

「街の城門まで送るわ」

「きりが無いって。玄関までで充分だよ」

「もしも――、」

少年達が、この後彼らに訪れる運命を知ることが出来たならば、城門までも、戦場までも、妹達を連れて行ったことだろう。

だがそれは、神ならぬ身の知り得ぬことだった。

「いってらっしゃい。皆様のご武運をお祈りするわ。必ず無事に帰ってきてくれるって、信じてるわよ！」

”笑顔で送り出してほしい”と言われた通り、アルマは輝くような笑顔を見せて、兄に口付けした。

「ディリータ兄さん。ラムザ様。お友達の皆様も。どうか、ご無

事で……」

ティータも笑おうとしたのだが、どうしても眉が悲しげに歪んだ。
ラムザは、ぷつと吹き出した。

「ティータ。今、すごく変な顔になってる」

と言いながら、ティータの目尻と唇の端を、むにーつとつまんだ。

「申し訳ありません……」

ティータは消え入るような声で言い、今にも泣き出しそうな顔をした。

「もう、笑うなんて失礼ね！ティータは一生懸命なのに！」

アルマが目吊り上げた。

ラムザは革手袋を脱ぎ、剣だこのある固い手で、ティータの黒髪を撫でた。

「無理しないで。心配してくれる気持ち、嬉しいよ。ティータはそのままでもいいって、そのまま。きつと戻るから、安心して待ってろよ」

にこりと笑いかけて、軽く額に口付けする。

「はい……」

ティータは、先程よりは自然に微笑んだ。

憂いを含んだ、泣き笑いのようなこの時の顔を、少年達は後々ずっと思ひ出すことになる。

アダマンド村――。

ガルシディア湾攻略作戦に参加する騎士、兵士達が、続々と集結しつつある。

先に到着していた者達が、そこかしこにかまどを作って昼食を摂っていた。

「なあ、なあ！御曹司の隣にいた、メチャメチャ可愛い女の子、ありや誰だ？」

「サーシャちゃんとかいう、白魔道士の娘かい？御曹司の級友クラスメイトだろ」

「いや、その娘もまあまあだけどさ。ほら、御曹司と同じ鎧着てる、

金髪で色白の……」

「バカ、その金髪の、女の子みたいに綺麗なのがベオルブ家の三の若君だよ！」

「えーっ！？黒髪の方じゃなかったのか！」

軽輩の、若い騎士や見習い騎士、兵士達が雑談に花を咲かせている。

「“風神”バルバネス將軍の秘蔵っ子って聞いてたけど、お人形さんみたいなんだなー。俺らの任務って楽勝なのかな？」

「こら、恐れ多い。ああ見えて、鬼のように強いって話だぜ。バスカーク隊長から一本取ったそうだよ」

「まさか！？」

「いや、現場で見たって奴が言うんだ」

「ついでに、鬼のように大食らしい。おかわり二十杯は当たり前だとか」

「ぷっ……、何だそりゃ。お前ら、かつがれたんじゃないのか」

「そうかなあ」

「そうだろ。見たか、あの細っこい体」

「じゃあ矢張り、俺達楽な作戦に当たったのかな」

「良かったな、はははっ」

若い兵士達は笑い合う。

彼らの後ろを、容貌魁偉、鰓の張った顔立ちの青年騎士が、熊のようにのしのしと通り過ぎた。

「ふん。知らんというのは、幸せなことだ」

誰に言うともなく独りごちたつもりだったが、応えた者がある。

「いかにも……」

切れ長のタレ目、一見しまりのない口許に、他人をなめたような薄笑いを浮かべた青年が、いつの間にか肩を並べて歩いていた。

立ち話をしている兵士達は、二人の青年の姿を見かけると、目を合わせないようにして道を空けた。

「ガラフか。珍しい所で会うな」

「騎士同士が戦陣で会うのは、珍しくもあるまい？隣の領地しまなんだ。俺だけではないぞ、バトー」

グラフのにやにや笑いの視線の先に、燃えるような赤髪の伊達男が、気取った足取りで悠々とうろついている。

「イクシ！」

バトーがどら声で振り向かせた。

「むさ苦しい面ツラに出くわしたな」

イクシが耳飾りをシャラシャラと鳴らして近寄ってくると、三人の青年の周りに空き地が更に広がった。

「ガハハ、そう言う貴様は、ケバさに一段と磨きがかかったな。軍律違反ものだろう」

「ふん……美的感覚センスのない奴らめ。この俺様に、軍律が怖くて貴様らのような野暮ヤボりたい格好が出来るか」

イクシの鎧装束は、一応、北天騎士団の統一色カラーである青を基調としているが、きらびやかな柄物だ。派手な装いの映える、目鼻立ちのくっきりとした顔に、淡く化粧さえしている。

「畏鴟同舟、か」

人の避けて通る青年達の集まりに、四人目の青年が加わった。

「リュカ」

バトーとグラフは細面の青年を振り返ったが、イクシは、その横に立つ垢抜けた女武者に声を掛けた。

「よお、ニーナ。今日も美しいな」

「どーも」

「リュカに飽きたら、いつでも俺様の所に来い。歓迎するぜ」

「ん。考えとく」

気のなさそうな口振りだったが、バトーは意外に思った。ニーナは、この手合いには鼻も引っ掛けなかったはずなのだが……。

「どういう風の吹き回しだ？本当に、リュカに愛想を尽かしたか」

「愛想尽かしされてんのは、あたしの方だよ」

イクシは眉をひそめた。

「何？リュカ、貴様はもう少し、美しいものの価値がわかる男だと思っていたぞ」

ガラフが肩をすくめる。

「痴話喧嘩は他所でやってくれや。それより、リュカ……矢張り、舟だと思うか」

「舟だろう……。ザルバッグ將軍の弟君が来ているというのは、本当か」

「ああ。さっき、千騎長殿と一緒に川原に下りていった」

「信じられんな。団長殿は……いや、軍師殿は正気か？」

バトーが豪快に笑った。

「ガハハッ、わからんぞ。あの姫さん、可愛い顔の割にとんだ暴れ鳥だ。俺らと同じぐらいの鼻つまみ者でも、おかしくないわい」

「大いに、あり得る……」

にやにや笑いながら、ガラフも頷く。

「あいつのことだ。相変わらず、持って生まれた宝を持ち腐れにしているのだろう。会って一言意見してやろうと思っていたところだ。貴様も後で挨拶に行くか、リュカ？」

と、イクシが誘った。

「そうだな。不出来な弟分の行状も気になることだ」

リュカは、新芽の萌える川の堤に目をやった。

ディリータとラムザは、バスカークと共に川原の岩に腰を下ろした。

「単刀直入にお伺いします。三点同時攻撃ですか」

と、切り出したのはディリータだ。

「そうですよ」

と、バスカークも率直に答えた。

バスカークは枯れ枝を拾い、砂地にガルシディア湾の略図を描いた。

海上の小島、対岸の漁村、峠の砦に、×印を付ける。

「明後日早朝、※双魚バイシースの二の刻から白羊アリエスの刻（※午前五〜六時）頃を予定しています」

ラムザは気の毒そうに労った。

「貧乏くじを引かれましたね、バスカーク殿」

と、いうのは――。

ガルシディア湾攻略作戦は、一度失敗しているのである。

初め、盗賊団の拠点は、エルムドア侯の身代金受け渡し場所にも指定された、海上の小島だけだった。

盗賊団は兵糧や武器の蓄えに乏しい。時間をかけて包囲し消耗させた後、攻め落とせば、騎士団側の被害は少ないはずだった。

ところが、封鎖が完全ではなかった。盗賊団には海賊や元漁師が多数おり、夜半、舟で物資を補給した。

包囲戦は徒に長引いた。先に干上がったのは、包囲していた騎士団の方だ。

兵糧・軍資金の支給が充分でなく、現地調達に頼るところが大きかった。官軍は、半農半漁の貧しい村人達から、床下・天井裏に隠してある非常食や、役畜まで容赦なく没収したのである。

たまりかねた村人達は、峠の砦を占拠して盗賊団側に寝返った。

峠の地形は狭隘で、大兵を活かせない。砦を攻略するには、入り江の反対側から舟で兵を送り込み、まず逆に海上の小島と漁村を攻め落としてから挟撃しなければ、勝利が難しくなった。

「いつものことです。それが私の仕事のようなものですから」

ラムザに貧乏くじと言われたが、バスカークはこういった、尻拭いの役回りに慣れていた。

――負け戦の時ほど、存在感の際立つ男。

と、いうのが、伯父が彼を後任に推した理由だった。

勝ち戦の勢いに乗じて連勝することは、比較的簡単だ。が、負け戦の時、士気も萎え、当初より条件も悪くなった中で連敗を食い止めるのは、容易ではない。

その困難な局面でこそ、冷静に、着実に兵を動かし打開策を実行

に移せる。敗勢濃厚な五十年戦争末期に見出された、貴重な才能だった。

今回も、ガリオンヌ領内各地で行われる一斉襲撃作戦のうち、ガルシディア湾攻略を命じられるだろうことは、バスカーク本人にも、ザルバッグにも予測済みだった。

だが、ラムザがこの任務に配属されたことは、心外であった。

「一番の貧乏くじを引かれたのは貴方ですよ、ラムザ様」

バスカークは漁村の×印を指した。

「ここから上陸する部隊を率いて頂きます。といっても、大将というのは名目で、実際の指揮は副将のリユカオンに任せて下さって構いません。

上陸するまで、海上と海岸、両方からの攻撃に耐えなければなりません。最も、予想される被害の大きい軍です」

ただの捨て駒になりかねない役だ。

率先して危険に身をさらすことで、後に続く士卒の勇気を奮い起こす、”高貴なる者の義務”ノーブルレス オブリージュを果たせということだろうか。

それにしても、ダイスダーグとザルバッグの弟という身分なり、せめて、一人の戦士としての腕前なりを有効に活用できる道が、他にいくらかもありそうなものを……。

しかし、軍師・ダイスダーグの命令なのだ。この人選に背くことは出来ない。

「そのことですが、バスカーク様。村を制圧できるのであれば、必ずしも、舟による上陸作戦にこだわることはありませんね？」と、デイリータが尋ねる。

「は？それは……他に方法があるのでしたら」

「前回の作戦の報告書と、地図が正確であれば、一つ提案があるのですが……」

と、ラムザは驚くべき計画を打ち明けた。

「……。どちらです？このような無茶をお考えになったのは」

「最初に案を出したのはデイリータですよ。僕も、こういう仕事に

うってつけの人達を知らなければ、賛成しませんでしたけど。

……彼らの技量をもってすれば、無茶ではないと思います」

「ええ、そうでしょうとも」

バスカークは半ば呆れ、半ば感心して、ラムザとディリータの顔を交互に見た。

「しかし……、ということは、貴方がたも、彼らと同じ事が出来る自信がおりなのですね。一体、どこでそんな技を身に付けられたのですか？」

「まあ、色々ありまして」

ラムザはディリータと顔を見合わせて、悪戯っぽく笑った。

「無理でしょうか」

「私の権限で変更出来るかどうか……ぎりぎりの線です。とはいえ、無為に戦死者を増やすのは、私とて本意ではありません……」。

充分、検討に値します。現場の地理にもっと詳しい者を探してみましよう」

と、バスカークは立ち上がった。

夕刻、野営地にて――。

ナツシュは頭巾の陰から、おどおどと怯えた目を左右に走らせた。
(き、気のせいかなあ……?)

ちらと、サーシャとアルガスはと見ると、松明の灯の当たらない、天幕テントの陰に隠れて、怖々と周囲の様子に目を配っている。

(気のせいじゃないみたい……)

ナツシュも天幕テントの陰まで後退った。

先程から、目付き顔付きに凄味のある青年達が集まってきているようなのである。

(ど・ど・どうしよう、サーシャに因縁付けてきたりしたら……。矢張り、ぼ・ぼくが守ってあげなくちゃね……)

ナツシュは、ゴクリと唾を飲み込む。

(ラムザ君、ディリータ君、早く帰ってきてーっ!)

ガストンは誰かを探すように歩き回っていたが、やがて、よく見知った顔を見つけて、手を振る。

「リュカ様、シーザ兄キ！お久し振りっすー」

リュカの斜め後ろに付き従っていた、眉間から左の頬にかけて傷跡のある青年が、顔をしかめた。

「ガストン。元氣そうじゃねえか。選良^{エリート}お坊ちやま学校で女男の手先に成り下がっていると聞いたから、もっと腑抜けたと思ってたぜ」

「手先じゃないっすよ。友達^{ダチ}っす！……なっ」

ガストンは、ディリータと並んでやって来たラムザの背中を叩く。

「ご無沙汰してます、先輩方」

ラムザが、にっこり笑って挨拶した。

バトーが早速口を開いた。

「おうおう、ラムザ！偉そうに他人様を呼び付けおって、何様のつもりだ？……って、伯爵令息様だっけなあ。ガッハッハ！」

イクシはラムザの真新しい戦装束を点検^{チェック}し、

「ふむ。悪くはないぞ。だが、まだまだ素材を活かしきれているとは言えんな。俺様が着付け^{コーディネート}してやろうか？」

「いやあ、遠慮しておきますよ。僕はとても、先輩の境地には及びませんから」

ガラフが鼻で笑う。

「そんな婉曲な断り方じゃあ、こいつには通じん。はっきり、孔雀みたいにゴテゴテ飾り立てる趣味はないと言ってやれ。やっど、男に見えるようになってきたんじゃないか。

……柳腰は相変わらずだが」

と言いながら、ラムザの腰に腕を回す。

「やだなあ、ガラフ先輩ってば」

ラムザはガラフの腕を何気なく払って、関節を極めた。

ナツシュが、ひいっと悲鳴を上げる。

「でっ、伝説のガラハット先輩っ！？」

サーシャがナツシュの口を押さえた時は既に遅く、ガラフがにやに

や笑いながら歩み寄って来た。

「“どういう”伝説」を聞いたが知らないが、そのガラフだ。よろしくな」

「こ・こ・こちらこそ・お目にかかれてこーええです……」

ナツシユは鯨張って敬礼した。

「ガハハ、誰も取って食いやせんぞ」

バトーの、熊のように頑丈な手で”軽く”頭を叩かれただけで、ナツシユは脳震とうを起こしそうになった。

アルガスとサーシャは、ひそひそと囁き交わす。

「こっ、この強面のお兄様方は、もしやいわゆる……？」

「いずれ劣らぬ、元”暴走族”よ……」

ラムザはリュカに話し掛けた。

「リュカオン殿。お話は常々、ガストンから伺っています。初めてお会いする気がしませんよ」

「こちら、ベオルブの末の御曹司の武勇伝は聞き及んでいる。

チキンレース
度胸比べでガラフを打ち負かし……、」

ガラフが歯を見せて笑う。

「腰は細いが、肝っ玉は太いぜえ」

「……バトーを蓑虫にし……、」

バトーはガストンの肩をがっしりとつかんだ。

「いつぞやは世話になったなあ、ポーズ」

「なーに、当然のことをしたまでっすよ」

ガストンは不敵に笑い返す。

ラムザはバトーに頭を下げ、ガストンにも頭を下げさせた。

「その節は本っ当にご迷惑をおかけしました！」

「ガハハッ、いいってことよ。オメーの実力は一騎打ちタイマンで見せてもらった！」

「はは……。シャアラ殿にも、お変わりありませんか」

ガラフがからかった。

「変わらぬどころか、ますます見目麗しくなられたよなあ、”おに

「いちやま」ー？」

「少なからぬ者達にくくつと含み笑いしたのを、バトーはどやし付けた。」

「おうっ、今笑った奴ら！十年後に後悔するぞ！」

バトーの許婚・シヤアラザーナは、当年取って九歳である。

リュカは言葉を続ける。

「……イクシの純情を踏みにじった剛の者、とか」

「ガーツハツハツハ！」

今度はバトーとその従者達が大笑いした。

「やかましい！あれを男と思うくらいなら、その嬢ちゃんにだって余計なもんがくつついてないか、疑ってかからにゃならんぜ」

イクシは苦々しくリュカを睨んだ。

「皆さん揃いましたね。今回の作戦を説明しますよ」

丸めた図面を手にしたバスカークが、ラムザとディリータ、そして四人の青年達を、天幕の一つに招じ入れた。

四人の不良騎士達はそれぞれの手勢に、ラムザの友人達に粗相のないようお願い置いて、天幕の中に入る。

どすの利いた返事の合唱を聞いたナツシュとサーシャは、縮み上がって手を取り合った。

「ラムザ君って、交際範囲が幅広いんだなあ……」

「人徳の成せる技かしら……」

さて、車座に座った青年騎士達は、バスカークが地図を広げて話すのを、膝を乗り出して熱心に聞き入った。

「……この策を、ベオルブの御曹司が？」

リュカが細い吊り目を更にすうっと細めた。

「ガハハッ、どうだ、どえらい姫さんだろう」

ラムザは青年達に、挑発的に微笑んだ。

「皆さん方なら、朝飯前ですよね？」

「おう！誰に向かってものを言っとる」

「こうでなくてはな。慣れない舟に詰め込まれて無様に敵の的にな

るなぞ、俺様には似合わんと思っていたところだ」

「上等、上等。……上手くいったら、一晩付き合えよ？」

と、ガラフは例によって人を食った薄笑いを浮かべながら、ラムザとイクシの両方をからかった。

「徹夜でお相手いたしますよ、剣の手合わせか将棋チェスで良ければ！」

ラムザは、肩に回されたガラフの腕の逆関節を固めた。

イクシが渋面を作る。

「ガラフッ、当てこすりはいい加減にしろ！」

「ダーツハハハハ！」

バスカークは驚き呆れて、ラムザと不良騎士達のやりとりを眺めていた。

（おやおや、この狼さん達を手懐けてしまっていましたか。流石、獅子の子は獅子、と申しますか……、）

バスカークはラムザの華奢な外見から、もっと繊細で大人しい少年かという第一印象を受けたのだったが、

（とんだ悪戯仔猫さんでしたね。これは、認識を改めなくては）

翌々日の午後。バスカークの軍から、五十騎ほどの騎兵が分かれて、森の中へ消えた。

？－4－〔4〕 出立の朝 〵 アダマンド村（後書き）

また新キャラ（しかも男）かよ！って感じですね。

この先、獅子戦争時代にかけて、北天騎士団の中に「騎士A」「兵士B」じゃない個性あるキャラが何人か欲しいなど。物語全体で使うキャラのほとんどが第一部で顔見せするので、逆に、第二部以降は原作キャラ以外の新登場キャラは滅多にいないはずです。

……それにしても、個性ありすぎてちよっとお近付きになりたくないお兄さん達です。この不良騎士達との交流のエピソードは、流石に本編に関係ないので詳しくは描きません。

いずれ余裕があったら、番外短編集など書くかもしれません。ラムザの学園生活は、波瀾万丈だったみたいです！？

？－４－〔５〕 盜賊の砦 ？女劍士

※白羊の月（※太陽曆三月下旬～四月上旬）十九日早朝、ガルナ村――。

「そう、本隊との連絡も途切れたのね。わたし達も、もうおしまいのようね……」

深緑の外套マントを着けた女劍士は、まなじりの吊り上がった目を鉛色の水平線に凝らしていた。

「なに言ってるんですか！戦いはまだ終わってないじゃないですかッ！」

「そうですよ。やつら、貴族どもが我々に謝罪するまで続くんですッ！」

緑の頭巾を被った二人の少年は、息巻いた。

しーっ、と、女劍士は唇の前に指を立てる。

緊急時の避難場所でもある石造りの灯台の中には、子供や年寄りや女達が、疲れ切り、荷物を枕に、身を寄せ合って眠っているのだった。

「いいこと？わたし達はここからは、この人達を逃がす隙を作るために戦うのよ」

少年達は不服そうだ。

「どこへ逃げられるって言うんです？どこに行っても、貴族に搾取されて飢え死ぬか、それとも、物乞いや盗っ人になるしかない」

「それがわかっていいるから、彼らも我々と共に戦うことを選んだんじゃないですか！」

女劍士は少年達を諭した。

「違うわね。彼らは、生き延びるために、やむなく”こちら側”に駆け込んできただけ。大義のために命を捨てる覚悟があるわけではないわ」

「それは……」

「望みはあったわ。この人達を受け入れた時にはね。

エルムドア侯の身柄を有効に利用すれば、騎士団を撤退させることも、身代金で戦力を増強することも出来たはず……」

否、五大領主の一人を拘束したという事実を大々的に公表するだけでも、貴族支配の弱体化を示し、騎士団の混乱を誘うには充分だったろう。

「でも、これまでも。援軍の当ての無い籠城は、時間の問題……。それでも、我々にとっては無意味ではない。貴族どもの力を少しでも多く削ぎ落とせるなら、命を投げ打つ価値がある。

だけどこの人達は、我々とは違う。巻き添えにするべきではないわ。可能なうちに、突破口を切り開いて脱出させるのよ」

彼女達は、バスカークの軍勢が近付きつつあることを直接には知らない。ただ、峠の砦を遠巻きに監視していた騎士団の士気が盛り返しているようなので、近々友軍が到着するらしいことは察知していた。

女剣士は少年の一人に、海からの攻撃に待機している、村の男達への指示を言付けた。少年は小雨の中、海岸へ下りて行く。

もう一人の少年は、階段に座って海を見つめ続けている女剣士の肩に手を置いた。

「ミルウーダさん、休んでいて下さい。この雨が止むまでは、騎士団も攻めてはこないでしょう」

「あなたこそ休んでおいたら？」

少年は十四、五歳だろう。まだ子供といっていい。未来あるべき若者を、彼女は今日明日中にも、死出の旅に連れて行くかもしれないのだった。

「兄さんの……、兄さんのやり方が甘いから……」

ミルウーダはつい、愚痴っぽくなっている。

乏しい武器、食糧と共にこの基地を支えてきた、彼女の男勝りの精神力もまた、底を尽きかけていた。

少年は首を振って、ミルウーダの手を握った。

「あなた方兄妹がおられたから、僕達……僕は、ここまで来たんです」

ミルウーダは取り立てて美人というほどではない。

男装の剣士姿が板についていて、色気はないが、若い女性に自然と備わっている瑞々しい華やぎはある。

姉か母のように頼もしい、慕わしい雰囲気、行き場をなくした人々を励ましてきた。

しかし、この少年の眼差しには姉や母を見る以上の好意がこもっていることを、ミルウーダは薄々気付いている。

「一つお願いしていいかしら」

「はい？」

「わたしが死に損ねた時は楽にしてくれる？」

「そのお願いは聞けません。だって僕、ミルウーダさんより後には死にませんから！」

少年は哀しく微笑んだ。

「そう……」

ミルウーダは手を伸ばして、少年の頭巾を結び直そうとした。と――

「敵襲ッ！ 敵襲ッ！！」

銅鑼代わりの大鍋が叩き鳴らされた。

男達は海岸沿いの家々から走り出て、鉛色の海に現れた船団を待ち構える。

灯台に避難している女や子供達は、抱き合って神に祈った。

ミルウーダは兜を被り、緑の布を額や腕に巻いた骸旅団の戦士達を引き連れて、海岸に下りようとした。

が、その時。

「て、敵襲ッ！！」

別の声が叫んだ。

「山側から騎兵隊がっ……！！」

「何イツ、バカな！？」

人々の動揺に、悲鳴に近い次の一言が拍車をかけた。

「た、大将はベオルブッ!!」

誰しも憧れと尊敬の念を持って聞いたことのあるその名が、今この瞬間には戦慄と絶望を生む。

「まさか、ザルバッグがつ!？」

「海から逃げろ!ここは我らが防ぐ!」

ミルウーダは灯台から飛び出した。

鬨の声と韋駄鳥チヨコボの足音が、ドーンと雪崩のように降ってきた。

少々時間を遡って、ガルナ村を裏手から見下ろす崖の上――。

緑の地に”黒翼の白竜”の、家紋の盾を手にしたラムザを先頭におよそ五十騎の騎兵が、小雨に濡れていた。

「……こいつは……」

ガラフの細いタレ目は、今は笑っていない。

「上等だ、グアハ、ハハ」

バトーの野太い笑い声も、乾いている。

高低差、優に※百歩ドイマ(※約六十メートル)以上。ほとんど地肌が?き出しの、足場の少ない、切り立った絶壁である。

「さて、御曹司。運を頼むのは、策とは言わないが……」

リュカが陰しい声で言った。

「勿論。運頼みではありません」

ラムザは岩壁を指差した。

「あそこ、あそこ。二カ所、踊り場がある。三段に分ければ、一段ずつは普段飛び慣れている高さでしょう。中段の岩の割れ目が一番の難所ですが、風向きは我々に味方している」

通常、朝は陸から海に向かって風が吹きがちだ。が、気圧の関係か今は、僅かな土にへばりつくようにして生えている草が、海側から吹き上がる風になびいている。

「あなた方なら、道が見えるはず……」

じっと断崖を見つめていた青年騎士達の瞳に、自信に満ちた強い

光が宿り、口許に不敵な笑みが浮かんできた。

「ふ……」

「成程……」

「これまでで一番の度胸比べになりそうだな！」

とイクシが言えば、

「先陣は俺が頂くぞ、ガッハッハ！」

バトーも今度こそ豪快に笑った。

当然、ラムザにも道が見えている。

（行ける……）

ラムザは騎鳥”黒吹雪”の首を優しく撫でてやった。

ブラックブリザード

イーリス

”黒吹雪”は、”聖盾”を毒矢で失った後、ドラコニア城に帰省

した時の武術の稽古や狩りに使ってきた韋駄鳥だ。”銀竜”や”聖盾”に比べると敏感で気難しいが、ラムザにはよく懐いている。

チヨコボ

シルドラ

イー

ラムザには、岩肌を駆け下りてゆく自分と”黒吹雪”の姿を、途

イメージ

切れる所なく想像することが出来た。

だが、全く道が見えない者達もいる。

（つ、ついてくるんじゃない者達もいた……）

アルガスは激しく後悔した。肌寒さのためだけでなく、足が震えている。

（い……いや、待て。この角度から、しかも雨の中を突いて攻撃されるなんて、賊軍にもまるつきり盲点だろう。敵は総崩れ、味方の大勝利は間違いなし！たなボタ 大手柄の好機！！チャンス）

アルガスは、ぐっと手綱を握り締めた。

（よしっ！やってやるぜっ！！……他の奴らがやるのを見てから、ゆっくり行けば大丈夫だよな？）

ナツシュとサーシャは、隅でこっそり囁き合った。

レベテト

”浮遊”で安全に行こうね……」

「ええ、そうしましょ……」

ラムザは、張り詰めた面持ちで海を見ているディリータに、目で微笑んだ。

（大丈夫。きっと成功させるよ）

ディリータの考えてくれた策だ。

そして何より、大勢の士卒と、村人達の命がかかっている。

（武門の棟梁・ベオルブ家の男子として。”天騎士”バルバネスの息子として……、それが僕の責務！）

ラムザは盾に描かれた”黒翼の白竜”の紋に誓う。

「島攻めの部隊が動き出したぜ、大将！」

小雨に煙る海上に、ガストーンが舟影を認めた。

定刻通りの決行だ。

盗賊団は火矢を射かけてきたり、砦の城壁の上から燃える藁束を投げ落としてくるなど、火計を用いることが多かった。雨は騎士団側に有利に働いてくれるだろう。

ラムザは騎兵達を振り返り、朗々とよく透る声で号令した。

「我々の目標は、あの灯台を制圧することだ。

逃げる者は追うな。降る者は斬るな。

あの屋根に北天騎士団の旗をうち立てることこそ、最大の功と思え」

普段は少女のように優しげな顔が、きりりと引き締まって、父・”風神”バルバネスを彷彿とさせる。

「天佑は我らに有り！行くぞッ！」

兜の面覆いを下ろし、ラムザは韋駄鳥チヨコボの腹を蹴った。

”黒吹雪”は翼を広げ、崖っ縁を踏み切って軽やかに宙に躍り出る。

風をはらんだラムザの外套マントに、北天騎士団の白獅子紋が無いことに、ディリータは今更ながら気付いた。すっかり、着替えさせるのを忘れていた。

だがそれは、この瞬間のラムザの勇姿を何ら損なうものではない。

「ハアッ！」

矢張り黒韋駄鳥チヨコボの”黒旋風”ブラクトルネードにまたがったディリータが、ラムザに続いた。

「リュカ様、お先にっ！」

三番手はガストンだ。

「遅れるな！」

「賊軍の度肝を抜いてやれ！」

「おうっ、野郎ども続けーッ！！」

リュカが、ガラフが、バトーが、イクシが、先を争って断崖から飛び下りた。

後の”英雄王”デイリーターハイラル。

東方外交使リュカオンハーディーズ。

北天騎士団団長・バスカーク配下の千騎長として勇名を馳せるガラハットギャリコ、並びにバティストウターダルハン。

かぶき者の代名詞・イクシャルオルファイン。

彼らの共通項は、チヨコボ韋駄鳥の機動力を活かした戦法を得意としたことである。

この時代、軍鳥はまだまだ貴重品であり、ステータスシンボル地位の象徴としての役割が大きかった。見習い騎士は勿論、正規の騎士でも、乗り替えのチヨコボ韋駄鳥を持っていない者は多数いた。

一人の騎士に二、三人の見習い騎士、歩兵や弓兵などの従者が付き従った十人ほどの小隊が、軍隊を構成する基本単位であり、移動速度は歩兵が基準になった。

ただし、山がちで牧畜を産業の基幹とする地域では、平民の牧童達まで皆騎乗術に長けていることもあった。ガリオンヌ領では、レナリア台地周辺の地方がこの条件に当てはまる。

放牧地の境界線は、農耕地のそれよりも侵犯されやすい。牧童同士や、彼らの長である騎士同士の小競り合いが絶えなかった。リュカやガラフ達は、そのような土地柄で日々の喧嘩に鍛えられてきた荒武者達なのだ。

危険な騎乗術を競う力比べを最初に流行らせたのも、この地方の若者達だったと言われている。

通常、韋駄鳥チヨコボは脚力が重視され、なるべく体が大きく、翼が小さくなるよう品種改良されてきた。

しかし、自然な体の均整バランスが崩れすぎると、病氣や怪我に弱くなってしまう。原種に近い黒韋駄鳥チヨコボや赤韋駄鳥チヨコボと掛け合わせたものの方が、丈夫で軍鳥に向くとされていた。

交配種の韋駄鳥チヨコボの翼は大きめで、騎手の動きを妨げたり、走行中無駄な体力を消耗したりするので、小さく切り落とすこともあった。ところが紗国戦争ベシヤの頃、翼を切るのは虐待である、と、”蛮族”であるはずの塔国トゥルギースの遊牧民達から厳しく非難されたため、ミュロンド法王庁が動物愛護の精神から禁令を発した。

これにより、翼を切る代わりに、なるべく羽根を広げないようにして走ることに集中させる訓練法・騎乗法が発達した。だがその陰で、逆に翼の揚力を利用して障害物などを飛び越えたり、高い所から飛び下りたりする”裏技”が編み出されたことも、必然の流れだったといえよう。

危険な腕試しに失敗して谷川や崖下に転落死する若者と韋駄鳥チヨコボが増え、法王庁は今度は、そのような愚劣な事故で命を落とした者はグレバドス教徒としての葬儀はまかりならぬ、と警告せねばならなくなつた。

しかし、禁じられた事に挑戦するのを英雄的行為と感じるのが、血気盛んな若者達の常だ。禁令が出されたことでかえって、山岳地方に留まらず、全国各地の不良少年達がこの”裏技”を競い合うようになってしまった。

東方外交使リユカオントゥルギースが塔国の山岳武装民族を撃退した頃からやっと、”飛ぶ”騎乗術も正式な騎士の技として公認され始める。

が、獅子戦争前夜のこの時代にはまだ、まっとうな騎士や騎士の卵ならば習得しているはずがない、”暴走族”の技術だったのである。

「ハイアッ！」

ブラックブリザード

ラムザと”黒吹雪”は、点在する足場から足場へ飛び移り、滑り下りつつ、稲妻型に経路を取って瞬く間に絶壁を駆け下りる。

人と鳥とが互いを信頼し合って、初めて可能になる妙技だ。

ラムザとデイリータは、子供時代には母と、幼年学校時代には友と過ごす時間を少しでも長く取りたいがために、自然と危ない近道の仕方を覚えた。

フォード

橋や浅瀬道の無い場所で川を飛び越え、つづら折りの山道を一直線に駆け下り、垣根を跳躍し。障害物の多い岩場も突っ切れば、崖から飛び下りもした。

チヨコボ

韋駄鳥は本来、臆病な草食動物で、少しでも身の危険を感じると逃走する。そのために進化した脚力なのだ。

しかし反面、愛情深く、家族や群れの仲間を守るためには、嘴と爪を使って獰猛といっていいほどの戦いぶりも見せる。

飼主の人間のことも”家族”と見なすようで、ラムザを守って死んだ”聖盾”のように、献身的に主人を庇いもする。

イーリス

信じた騎手を乗せている時は、剣戟の林の中中でも崖っ縁へでも、迷わず飛び込んでゆくものだ。

チヨコボ

若い荒武者達とその韋駄鳥達は、流石に場数を踏んでいる。

段差が大きく、難所が多いように見えても、一カ所一カ所は平常心を保ってさえおれば乗り越えられる難易度なのだ。

レベル

転落する者は一騎もない。

ただ、三名の例外はというところ――。

ナツシュとサーシャ、アルガスの三人は、韋駄鳥共々”物理防御

レベル

”と”浮遊”の魔法をかけてから、最後尾を慎重に降りていった。

が、三分の一程度崖を下ったところで、

「きゃっ」

チヨコボ

バランス

サーシャの韋駄鳥が均衡を崩し、玉突き状にナツシュとアルガスの韋駄鳥を突き飛ばした。

チヨコボ

「わ！」

「うおっ？」

地面から浮き上がっているために、爪で踏ん張って抑止ブレイキをかけることが出来ない。

翼を広げて、せめても速度スピードを抑えながら、ほとんど一直線に滑り落ちていく。

「おおああああー!?!」

「ううわあああー!」

「いやあああーっ!!」

ただ振り落とされないように、必死に鞍にしがみついているだけである。が、傍目には、勇ましく雄叫びを揚げて突撃してゆくようにも見える。

(意外とやるな、ガキンチョども!)

三人に追い抜かれた騎兵達が、韋駄鳥チヨコボの腹を蹴って加速する。

崖下に着地したラムザは、その勢いのまま、右手に槍を、左手に盾を構えて”黒吹雪”ブラックブリザードを全力疾走させる。

「オオオオーッ!!!」

一鳥身遅れて、ディリータとガストンが続く。

村の男達、骸旅団の戦士達が駆け付けた。

村人達は前列にしゃがんで、手にした銚フオークや鋤チヨコボを韋駄鳥の胴の高さに構える。その後ろから、弓使い達がラムザを狙った。

”将を射んとせばまず韋駄鳥チヨコボを”というのは、この時代、決して常套手段ではない。

韋駄鳥チヨコボは高価な財産であり、敵を倒すために韋駄鳥チヨコボを狙うよりは、敵を倒して韋駄鳥チヨコボを奪い、戦利品にしたり、身代金を取ったりするのが普通だった。

調教された軍鳥一頭の値段は、裏取引される成人男子の奴隷五人から十人分以上に相当したという売買記録が残っている。

五十年戦争末期、懷具合の厳しい騎士達が、平民の傭兵や奴隷の人足よりも軍鳥を大事にしたのは、経済的には”当然のこと”だった。

だが、百姓一揆の蜂起軍などは、容赦なく韋駄鳥チヨコボを攻撃の対象と

した。五十年戦争末から獅子戦争の頃にかけて、平民の反乱鎮圧に騎士達が難渋した理由の一つだ。

騎士同士の戦いであれば、韋駄鳥チヨコボは標的にしないという了解ルールの下に、騎兵は高い戦力を振るうことが出来る。また、敵に韋駄鳥チヨコボを奪われたとしても、次の戦いで奪い返すなり、身代金を払って買い戻すなり出来る。

が、追い詰められた農民達は、丹精込めて育て上げた貴重な軍鳥を惜しげもなく倒して、胃袋の足しにしたりしてしまう。

韋駄鳥チヨコボを巡って、騎士と平民双方が、相手を憎んだのである。

骸旅団の戦士達の放った矢は、二本は逸れ、一本はベオルブの家紋の盾に当たって落ちた。

二の矢をつがえる暇を与えず、ガストンの長弓が射手の一人を射倒す。

「ハアッ！」

ラムザとディリータは槍衾——本物の槍は一本もないが——を飛び越え、弓使い一人ずつを槍で突いて仕留めた。

方向転換して、村の男達に向き直る。

骸旅団の団員達は倒すが、村の住人達はなるべく殺したくない。

”武器”を斬り捨て、気絶したり骨折したりして戦闘不能になる程度に、柄の部分で打ち据えて始末を付けようとするのだが——、

(この人達は……！)

ラムザは、ガリランドの街やマンダリア平原で戦った盗賊達とは違う手応えを感じた。

技は稚拙、装備も貧弱だが、気迫が凄まじい。

右脚があらぬ角度に曲がった男が、左脚だけで立ち上がり、六尺棒を振り回す。激痛で、立っていることもままならぬはずだが……。地面に転がった漁夫も、切り口の尖った、柄だけになった銛で再び猛然と突進してきた。

我が身可愛さに悪事を重ねるならず者ではない。仲間や家族を守るために、命を捨てる覚悟でいるのだ。

「御曹司！」

リュカの手勢が追い付いて余裕が出来る、ラムザは面覆いを上
げ、遠くまでよく響き渡る声で叫んだ。

「武器を棄てろ！抵抗しなければ命だけは助けよう！」

顔に当たる潮風が痛いほどの勢いで直滑降してゆくアルガスの真
正面に、槍を構えた男が立ちふさがった。

避けようにももはや、アルガスにも韋駄鳥チヨコボにも軌道修正できない
のだった。

（もう駄目だあつ！姉上ーっ！！）

アルガスは固く目をつぶり、齒を食いしばった。

槍の穂先は韋駄鳥チヨコボの首の羽毛を一つまみ切り、アルガスの耳の脇
※二、三寸カーン（※六〇センチメートル）を通り過ぎた。

韋駄鳥チヨコボは男を跳ね飛ばして止まり、アルガスは地面に投げ出され
た。

緑の頭巾を巻いた男とアルガスは、ほぼ同時に体を起こす。

アルガスは寸時タツチの差で先に槍を拾い、骸旅団の男の喉を突いた。

さも実力であるかのような顔をして立ち上がったアルガスは、後
から現れた剣士二人に向かい、居丈高に気炎を吐いた。

「かかって来い！」

剣士達がひるんだのは一瞬のこと。一呼吸すると、決死の形相で
襲いかかってきた。

（し、しまった）

投降しろと言うべきだった。と、アルガスが猛烈に悔やんだ刹那、
二騎の味方が風のように両脇を駆け抜け、剣士達を斬り倒した。

「敢闘だ、ぼうず！」

バトーの隊の兵士達だ。

「へっ、どんなもんだい！」

アルガスは揚々と拳を振り上げた。

ナツシュとサーシャの韋駄鳥チヨコボも、柴の束や貝殻の山を盛大に蹴散

らして止まった。

「うーん……」

よたよたとよろめいている二人と二頭を、網で捕らえようと、薪小屋の屋根に登った漁夫が狙っている。

バトーが気付いて、戦斧バトルアックスを一振りした。

「うおらアッ！」

柱二本をへし折られて、薪小屋はひしゃげて潰れた。

「どひゃっ!？」

道に落ちて自分の網に絡まった漁夫を、バトーの白黒まだらの韋駄チヨコボ鳥アルデバラン——”牛眼星”という——が踏み倒した。

バトーの熊のような恰幅の良い体を支えている韋駄鳥チヨコボもまた、他の韋駄鳥より一回り大きい。

「オラ、オラ、オラアッ！」

バトーは鋼の戦斧バトルアックスを、軽々と縦横に振るう。

鉄兜を西瓜のように叩き割り、物陰に気配を潜ませている人間を、遮蔽物ごとなぎ払う。

納屋に隠れて隙を窺っていた村人三人は、茅葺きの屋根が吹き飛んだので、慌ててしゃがんだ。

と、頭上を再び、唸りを上げて鉄塊が通過し、手にした木槌や銚が柄だけになった。

呆然とする村人達の目の前に、バトーはズシン、と戦斧バトルアックスを突き立てる。

「おう！降参しろい！」

村人達は戦意喪失して、あんぐりと口を開けたまま両手を挙げた。

「キヤーツ！イヤーツ！来ないでーツ！」

絹を裂くような悲鳴を、イクシは耳ざとく聞きつけた。

見覚えのある韋駄鳥チヨコボが三頭、道端に乗り捨てられている。

（ん？俺様の家来どもか？けしからん！）

日頃、婦女子に危害を加えないことに関しては、子分郎党を徹底

指導してきたイクシである。腹立ち半分、厳しく睨めてきた家来達が則を破るからにはさぞかし美人だろうという期待半分、韋駄鳥チヨコボを駆った。

横道から見習い騎士が二人、飛び出した。

「こら、お前ら！女は手荒にするなど……」

見習い騎士達は切羽詰まった表情でイクシに訴えた。

「手荒くされてんのはこっちです！」

「何とかして下さいよ、若ーッ！」

どうも話がおかしい。

と思つて、イクシが横道を覗き込むと――、

「おおっと」

すんでの所で、土鍋に直撃されかけた。

「助けてーッ！神様ーッ！！」

声は若々しく可愛らしいが、雪だるまのように丸々と中年太りした、逞しそうに日に焼けた漁師のお上さんだ。

泣き喚きながら、樽、壺、椅子、薪と、あらゆる物を手当たり次第に投げつけてくる。石臼まで、投石機の砲弾のように飛んできた。もう一人の従者は、建物の陰にへばり付いて、進むも退くも叶わなくなっている。

（バトーの野郎とタメが張れる怪力オバチャンだな！女に怪我させるわけにもいかねえし……）

イクシは韋駄鳥チヨコボから降りた。的の大きい韋駄鳥チヨコボに乗ったままだど、どこかにぶつけられる危険性が高い。

「奥さん、落ち着いてくれ！俺達や騎士だ。御婦人に無礼は働かないぜ！」

飛んでくる物を避けたり、槍で叩き落としたりしながら、イクシは婦人に近付き、説得しようとした。

「騙されないわよーっ！あっち行けーっっ！」

中年婦人は葡萄棚の支柱を引き抜いて、滅多やたらに振り回した。破壊力はバトーバトルアックスの戦斧に匹敵するものと推定される。

イクシは槍を、壁の陰に隠れている従者に預けた。婦人の隙を見計らって、何とか丸太を取り上げようと思ったのだ。

水瓶が割られ、板戸が破られ、垣根が倒される。

壁板と柱を壊された納屋が、暴れる婦人に被さるように崩れてきた。

「危ねェ！」

イクシは婦人を突き倒してその上に体を伏せ、降ってくる屋根板や柱を背中で受けた。

三歳の幼女であれ八十歳の老婆であれ、危地^{ピンチ}にある女性を助けずにはおれないのは、イクシの習性のようなものである。

こういう時の瞬発力は、鎧を着けていても変わらない。

（くっ……！年齢と体重がせめてこの半分くらいのお嬢さんだったら、庇い甲斐があるんだがな）

頬や顎のたるんだ中年婦人の泣き顔が、目と鼻の先にある。

普段のイクシならば、

——オバチャンなんかお呼びじゃねーツ！

と、おぞけを振るうところだ。

が、今は危急の際ゆえ、非常手段を取った。

婦人を助け起こすと、兜の面覆いを上げ、美女を口説く時専用に行っている特上の笑顔を作った。

「大人しく降参してくれりゃ、何にも乱暴なこたあしないぜ。おねーさん」

婦人は一目で、イクシの凛々しい風貌に魅了され、しおらしく頷いた。

「流石、オレ達の若！」

「美しさも武器だな！」

見習い騎士達は感服した。

と、婦人は突然イクシに抱き付いて、またもやおいおいと泣き始めた。

「仰せに従います、騎士様ー！どうか、どうかお慈悲を……！」

（ぐあっ……！！）

イクシは今度こそ、気が遠のきそうになった。

「わ、わかっている。安心してくれ……」

努めて平静に、婦人をなだめて離れようとするが、婦人は万力のよ
うな腕でイクシをつかまえて放さないのだった。

（流儀貫くのも大変だなあ……）

見習い騎士達はイクシに同情した。

「逃げる者は追うな！ 降る者は斬るな！」

竜をかたどった、同じ鎧を着ている騎士——よく見ればまだ、見
習い騎士のようだ——が二人。一人が手にしているのは北天騎士団
の、揃いの白獅子の盾だ。

ベオルブ家の、”黒翼の白竜”の紋章の盾を持った方が、澄んだ
少年の声で叫ぶ。

銀色の霊銀ミスリルの兜の端から、房飾りとは別に、黄金色の髪の束が垂
れている。

（ザルバグではない！？）

ミルウーダは訝しんだが、

（何者でも同じだ。貴族の中の貴族、ベオルブの一門に連なる者な
ら、誰であれ。）

たとえここで朽ちるとも、お前だけは道連れにしてやる！

と、決意を固めた。

「うあっ！」

ミルウーダはリュカの従者の一人を突き落として、韋駄鳥チヨコボを奪っ
た。

「ぐっ！」

「ケエエーッ！」

弓騎兵一人、韋駄鳥チヨコボ一頭を斬って、黒韋駄鳥チヨコボにまたがったベオルブ
家の少年に迫る。

少年はミルウーダに気付くと、骸旅団の戦士の肩を刺し貫いた槍

はそのままに手放し、腰の長剣を抜いた。

ガッ！

”黒翼の白竜”の盾が、ミルウーダの剣を防いだ。と同時にミルウーダも、少年の剣を盾で受け止めている。

（強い……！半人前のボーヤでも、ベオルブの紋は飾りじゃないわね！）

しばし押し合ってから、二人は離れて間合いを取り直す。

（手強いぞ）

と、ラムザの方も、突如躍りかかってきた小柄な剣士が只者でないことを悟った。

韋駄鳥チヨコボの乗りこなしや剣の扱い方が、堂に入っている。残り数十人という、骸騎士団時代からの古参兵と思われた。

漁村に立て籠もる賊軍の指揮を執っているのは、小柄な若者だと聞いている。

（この人のことか？）

村人達は、殺されないといけないと強固な抵抗はしないようだった。骸旅団の団員達、特にその指揮者リーダーを倒せば、ここでの戦闘は決着するだろう。

（恨みは無いが……！）

他の者達はディリータやリュカに任せることにし、ラムザは闘志の対象を、目の前の小柄な剣士一人に絞った。

ギインッ！

剣と剣が火花を散らしてぶつかり合い、金属の焼ける匂いを立ち上らせた。

緑衣の剣士の剣には、相討ち覚悟の殺気がみなぎっている。

容赦なく韋駄鳥チヨコボを狙ってくるのも、練習試合とは調子の違うところだ。

だが、それだけが原因ではない拍子のずれ——というのか、微妙な読みの狂いに、ラムザは戸惑った。

（……まさか！？）

脳裏に閃いた考えを確認するための行動を、ラムザはすぐさま実行に移した。

ガンッ！

小柄な――、”男にしては”小柄な剣士の兜を跳ね上げる。

狐色の髪が肩に流れ、やつれてはいても肌の滑らかな、輪郭の柔らかい卵形の顔の中から、まなじりの吊り上がった鳶色の瞳が憎悪に燃えて、ラムザを睨み付けた。

（女かッ！！）

？－4－〔5〕 盜賊の砦 ？女劍士（後書き）

「やると思った」でしょう。これってまるっきり、”一ノ谷の逆落とし”ですね。

折角、彼らは”騎士”なのですから、チョコボの能力を活かしたバトルも描きたかったんですけど……。一介の主婦なんです、独創的な軍事センスとか無いんです、すみません！

一応この辺が、オープニングでラムザが久々に会うディリータを見て「あれだけの騎手はざらにいない」と言ったことの説明でもあるつもりなんですよ。

さて、このバトルで”ハートを盗む”を使ってくるのは、本当は敵側のシーフです。

戦場で使用するところが想像し難い技というのは幾つかあって、”ハートを盗む”もその一つ。敢えて想像してみたら……。こんなになっちゃいました。うーん、諸刃の剣だ！？

？－4－〔5〕 盜賊の砦 ？攻防

「降れ、降れ！命を無駄にするな！」

ガラフは兜の面覆いは下ろさずに、降伏を呼び掛けながら進んだ。

「騙されるな！降伏すればそのまま処刑台行きだぞ！戦うしか、俺達に生き残る術はないんだ！」

と、叱咤する声が聞こえた。

（俺”達”ねえ……）

ガラフの細いタレ目と薄い唇は、小バカにしたように笑っている。

予想外の方角からの奇襲で、村人達は浮き足立っている。逃げ散るか、諦めて白旗を掲げる者がほとんどだ。

命尽きるまで捨て身の肉弾戦を挑んでくるのは、緑の頭巾を巻いた骸旅団の者達だった。

「逃げたい奴アとっと逃げろ！女房子供に未練はねエのかア！」

ガラフは、声の聞こえたとおぼしき辺りに向かって叫んだ。

屋根の上から石を投げようとした男を、弓騎兵が射落とす。

緑の鉢巻きを締めた戦士二人と、村人二人の武器を、ガラフともう一人の騎士が槍で叩き落とした。

「降りな」

ガラフの勧告を無視して、男達は斧や山刀を拾い、遮二無二攻め寄せてくる。

（不屈の精神とやらは誉めてやるぜ。だが……、）

火事場のばか力と勢いに吞まれるガラフではない。

（素人が根性だけで戦に勝てりゃあ、職業軍人は要らんわな）

男達の体裁きは、雑で固い。

ガラフには手に取るように次の動作が読めるし、いくらでも隙が見える。

ガラフ達は、男達の腕や肩に傷を負わせた。

「三度は言わんぜ。降れ」

笑いの消えたガラフの表情は、冷たく鋭い。

村人二人はじりじりと後退り、わっと背中を見せて逃げていった。
骸旅団の戦士二人は突撃してくる。

ドンッ！

ガラフともう一人の騎士の槍が、戦士達の胸板を突き破った。

「舐めんな。こちとら騎士^{プロ}だぜ」

リュカは韋駄鳥^{チヨコボ}を降り、骸旅団の剣士と剣を交えていた。

相手の剣士は、元は騎士か傭兵だろう。

剣や鎧が、使い込まれて体に合っている。

剣術も、にわか仕込みの付け焼き刃ではない。

骸騎士団時代からの古参兵か、それとも、五十年戦争後に解雇された軍人か。だが――、

（古株だから強い、とは限らん）

この一年余り騎士として各地の戦場を巡る中で、敵味方を通して――主に、頼りにならぬ味方を通して、学んだことだ。

リュカは、ガラフやイクシ達よりも一つ年上の十九歳だ。自家の封地内の山賊狩り以外で、初めて騎士団の一員として参戦したのは、五十年戦争集結直後の、元傭兵団の蜂起鎮圧だった。

五十年戦争中に武功を挙げた兵団が数多く参加しており、簡単に、早期に決着がつくものと、リュカは樂觀していた。

ところが、いざ戦地に到着してみると、奮戦しているのはリュカのような新参兵ばかりなのだ。隊長達が互いに自軍を動かし渋り、徒に戦鬪を長引かせている間に、勇敢な若者達があたら命を散らしてゆく。

（成る程、そういう仕組みか）

と、苦々しく思い知らされた。

五十年戦争の生き残りこれ即ち、数多の死闘をくぐり抜けてきた強者――という図式は、必ずしも成り立たない。

味方を散々働かせておいて、敵が消耗した頃合いを見計らって漁夫の利を得る、そういった立ち回りの上手い者が小器用に死地を回避してきただけ、ということもある。

また、かつて雷名を轟かせた兵团も、精兵は度重なる激戦の中で斬り死にし、名ばかりの弱兵集団と成り果てていることもある。

（やっておれぬ）

と業を煮やしながらも、リュカが初陣に勝利を収めることが出来たのは、敵も二流以下だったからだ。

つまり、――

一流の傭兵達は、五十年戦争後も引き続き雇用され続けている。運悪く無一文で放り出されても、他の貴族や商人が雇い入れる。

中には、確かな腕を持ちながら革命の理想に燃えて反乱軍に身を投じる者もいるが、

（単純に食いあぶれた挙げ句に犯罪に走るのは、大した腕前と根性の奴ではない）

というのが、リュカの感想だ。

バスカークの千騎隊に編入されたのは願ってもない幸이었다、とリュカは思っている。

経歴や個性に一癖も二癖もある人材が多く、”はみ出し者の掃き溜め”と評してはばからぬ者もいる。が、リュカにしてみれば、カビの生えた昔の功だの、由緒正しき血筋だのを振りかざして偉ぶる石頭がおらず、頗る風通しが良い。

年齢や氏素性によらず、能力のある者が活躍の場を与えられる。

バルバネスや、その父のカルダックが団長をしていた頃からの、北天騎士団の気風である。

残念ながら近年、自由だったはずの北天騎士団の中にも新たなしがらみが生じてきているが、バスカークの隊は、特に北天騎士団らしさが色濃く表れているといえた。

今回の任務も、初めからバスカークが任されておれば、事がこじれる前に決着が付いていたろうものを……と思う。

リユカと戦っている剣士は四十歳前後だ。

騎士や傭兵は体力仕事である。戦士としての全盛期は二十代だろう。

四十過ぎて現役でいるとすれば、個人技よりも指揮能力によるところが大きい。

体力気力は衰えても、経験に鍛え上げられた技で若僧どもを寄せ付けぬ、ということもあるが――、

ザンツ！

リユカの剣が、骸旅団の剣士の喉をえぐった。

「十年”遅い”」

ラムザが女剣士に押されているのが、ディリータの視界に入っていた。

（まずい）

ラムザに女は斬れまい。

力ではラムザの方が優っていても、経験は相手の方がはるかに上だ。遠慮していれば殺^やられる。

「御曹司、替わりな！」

女同士ならば気兼ねは要らぬと、ニーナが韋駄鳥^{チヨコボ}を寄せた。

が――、

韋駄鳥^{チヨコボ}を突いてきた漁夫の銛を斬り払った一瞬の隙に、完璧な間^タ合いでミルウーダの剣が閃いた。

かわせない。

斬られた、と思う寸前、シーザの槍が伸びて白刃を弾いた。

と、見た時には、ミルウーダは弾かれた剣をラムザに振り下ろしている。

「お前じゃ無理だ！」

「ちいっ！」

ラムザは盾を捨て、ミルウーダに組み付いて諸共に鞍から落ちた。双方の韋駄鳥^{チヨコボ}を庇わなくて済むだけ、地上に降りて戦った方が分

が良い。

(甘いこと！)

ミルウーダの体に――特に、無防備になった頭部に攻撃を加えてこないラムザに対し、ミルウーダは仮借のない連撃をたたみかける。ラムザは長剣を両手で構え、慎重に、守勢一方に回っているかに見えた。

が、しかし。

キーンッ！

ミルウーダの剣が、刀身をほんの※七、八寸(※二十二、三センチメートルほど)残して折れた。

「！」

ラムザは、ただ攻撃を払い、受け流していたのではなく、ミルウーダの剣を砕くことに集中していたのだ。

ミルウーダは折れた剣を捨て、ラムザの腰の短剣を奪おうと、懷に飛び込んできた。

素早く滑らかに、ラムザはミルウーダの右腕を絡め取った。

「失礼！」

ゴキィッ！

肩の外れる不気味な音がした。

鎧を着ていても、関節技は防ぎようがない。

「うッ！」

ミルウーダは呻いたが、すぐさま盾を放り出し、残った左手でラムザの剣をもぎ取ろうとする。

ラムザはミルウーダの左腕を押さえた。

「動くな！命までは取らぬ！」

右肩の骨は、関節を外しただけだ。折ってはいない。だが、動き回れば靱帯や神経を痛める。

両腕を封じられたミルウーダは、足払いでラムザを倒そうとする。ラムザはミルウーダの左足も挫いた。

ミルウーダは、しかし、壊れた足で立ち上がる。攻撃を諦めてい

ない。

（それほどまでに、貴族^{ぼくら}が憎いのか……？）

ラムザの背後で、既に深手を負っている少年が、幽鬼のように剣を振りかぶった。

ミルウーダより後には死なないと言った少年だ。

「ラムザッ！」

ディリータが駆け付け、少年の肩に鋭い一太刀を浴びせた。

血飛沫が、ラムザの外套^{マント}やミルウーダの顔にはねた。

胸まで深く割られた少年は、ミルウーダに向かって何か言いたげに、唇を動かした。その口からは言葉ではなく、血の塊が吐き出される。

ラムザはミルウーダの右膝の裏を蹴った。

ミルウーダは、少年の体から流れた血溜まりの中に膝をついた。

ラムザはミルウーダの左腕を後ろ手にねじ上げて、彼女を取り押さえる。

「そこまでだ。周りを見る」

リュカがミルウーダに槍を突き付けた。

リュカだけではない。

イクシ、バトー、ガラフ。皆、灯台の前に結集していた。

灯台の扉が打ち壊され、屋上に北天騎士団の白獅子の旗が翻る。

（あ……！）

ミルウーダは歯がみした。

ラムザは、必ずしもミルウーダを討ち取らずとも良かった。一番の使い手であるミルウーダを一人で引き付けておくだけでも、充分な役割を果たしていたのだ。

（してやられたっ……！！？　こんな、半人前のボーヤに……！！）

兜の中の、ラムザの碧い瞳を、ミルウーダは睨み据えた。

「貴族が何だというんだ。わたし達と貴方達の間どんな差があるっていうの？」

生まれた家が違うだけじゃないの!」

「そうですよ」

「!？」

ラムザはミルウーダの右腕をつかみ、外れていた肩の骨をはめた。
「僕らだって、好きで戦をしているわけじゃありません。これが、騎士の家に生まれた僕らの務めだからです。無用の流血は避けたい」
ラムザは兜の面覆いを上げた。

ミルウーダは、ハッと息を呑んだ。

彼女と互角の死闘を演じた少年は、女でも羨むような、端整で優しげな顔をしていた。

「無用の血を流させているのは貴方達だ。

ひもじい思いをしたことがある? 何ヶ月も豆だけの羹^{スープ}で暮らしたことがあるの?

貴方達貴族はわたし達から全てを奪う! 生きる権利の全てをツ!
剣で命を奪わなくとも同じことだ……!」

ニーナがミルウーダの顎に剣を当てた。

「うるさいね。喉搔っ切られなけりゃ黙らない?」

「殺セツ、殺すがいい!」

ミルウーダは刃に首を押し付けて挑発した。

「よせ」

ラムザはニーナの剣を手の平で押しやった。

剣を向けたニーナの気持ちはわかった。

(強くても、女の人だ。若くて……綺麗な)

女を殺さないのは、慈悲とは限らない。生け捕られる方が、戦死するよりも酷いかもしれないのだ。

「立て」

ラムザは後ろ手につかんだ腕を放さずに、ミルウーダを灯台の中に引っ立てた。

灯台の一階は、怯えた表情の村人達で満杯になっている。

「投降者はこれで全員か?」

「おう」

騎士達は頷いた。

ラムザは村人達の顔を見回し、よく透る声で言い渡した。

「聞け！この村は、北天騎士団が占拠した。武器を棄て……、」

次の一言の意味を、居合わせた人々が理解するには、多少の時間を要した。

「速やかに退去せよ！」

まず、騎士達が笑い出した。

「フッ……」

「ははっ……」

「ガハハ、そういうことか！」

血相を変えたのはアルガスだ。

「バ、バカな！気でも狂ったのか？」

さっさと逃げろ、って言ってるのか！

その言葉で、狐につままれたような顔をしていた村人達も、大慌てで荷物をかき集めた。

「情けをかけるのか。なめられたものね」

ミルウッドが冷ややかに言った。

「情けではありません。節義です。」

降れば命は取らないと言った。あなた方が信じて従ってくれたおかげで、迅速に目標を達成することが出来ました。

「約定を違えるのは、騎士道に反する」

と、ラムザは答えた。

アルガスは腹が立った。

（コイツは、オレ達の苦勞を何だと思ってるんだ！）

みすみす、捕虜を――手柄を手放すというのか。

ラムザには、伯爵家の御曹司という地位もあり、大人顔負けの実力もあるから、敵に寛大にしてやる余裕があるのだ。

身分の低い、それこそ必死で功名を立てようとしている者達の気持しがわかっていない！

アルガスは海に続く扉の前に、両腕を広げて立ちふさがった。

「ラムザ、殺せッ！こいつらは敵なんだッ！こいつらを殺さなければ、次に死ぬのはオレ達だ！一人残らず殺すんだッッ！！」

ラムザは、ひたとアルガスを見つめた。

「アルガス。退くんだ」

「格好付けて、お前は満足かもしれないけどな！こいつらが、有り難がって恩に着てくれるとも思うのか？その女の言い草を聞いたか！生きてる限り、何度でも刃向かってくるだろうぜ！自分以外の人間がこいつらに殺されても、お前は責任持てるのかッ？

殺せ！それが、大将の責任だろ！！」

アルガスも、キッとラムザから視線を逸らさずに言った。

「ちょ……、ちょっと、待って！」

声を張り上げたのは、普段気弱なナツシュだった。

「待って！ラムザ君も、アルガス君も！」

殺さずに捕虜にただけで、約束は守ったことになるでしょう？

後の処分は、きちんと法に照らさないと……！！」

「そうだぞ！法に照らせば、どうせ縛り首が当然だ！」

とまくし立てるアルガスに、ナツシュは大きく手を振った。

「そうじゃなくてっ！勝手に逃がしたって、ただの”逃亡者”としてお尋ね者になるだけじゃありませんか？ザルバッグ様やダイスダ―グ様に事情を説明して、ちゃんとした手続きを踏んで、村で元通りの生活が出来るように取り計らっていただけたらと……」

「こいつらは、生まれた瞬間からオレ達貴族に尽くさねばならない存在なんだ。オレ達の家畜なんだ！主人の手を噛む家畜を生かしておく余裕はないッ！」

ミルウーダがもがいた。

「誰が決めたッ、そんな理不尽なこと！？

神の前では何人たりとも平等のはず！神がそのようなこと、お許しになるはずがない！」

神の名が出たことで、アルガスは激昂した。

——神様は決して、正しい者をお見捨てにはならないわ……。無意識のうちに、姉の形見の数珠ロザリオがかかった胸の上をかきむしっていた。

「家畜に神はいないッ!!」

「……!!!!」

ミルウーダは顔面蒼白になった。

ガッ!!

イクシとガラフの槍が、喉元で交差して、アルガスを壁に押し付けた。

……というよりも、イクシの槍がアルガスの喉を潰しそうになるのを、ガラフの槍が止めた、というべきか。

「大将の決めたことに文句あんのか、ああ?」

イクシの本気の眼光に負けて黙り込んだアルガスだが、まだ口惜しそうにラムザとミルウーダを睨んでいる。

「彼女は……この人達は家畜じゃない。僕らと同じ人間だ」

ディリータは、騎士達に不信と憎しみの目を向けた村人達にも聞こえるよう、強く言った。

「あのう……」

ナツシュは上目遣いにラムザを見た。

「ナツシュ。わかって言っているんだ、僕は」

ラムザはミルウーダの腕をディリータに預け、兜を脱いで村人達と向き合った。

「あなた方、大地を耕したり、海や川の幸を漁すなごったりする人々が国の基礎だと、我が父バルバネスから常々聞かされて育ちました。あなた方が憂い無く日々の仕事に励めるよう守ることが、我々騎士の務めなのだ……」

でも、今の僕には、こうすることでしかあなた方への約束を守る方法がありません。

法はあなた方を処罰するでしょう。ですが、あなた方をそこに追い込んだ者を、法では裁くことが出来ない。”護法の神竜”の紋を

頂く者として、恥ずかしく思います……」

男も女も、子供も年寄りも、皆食い入るようにラムザの端整な顔を見つめている。

「僕には、あなた方の生命財産の安全を保証する権限が無いんです。ただ、生きてさえいれば、数ヶ月以内にも大手を振って村に帰れる見込みがあります。今回の一斉掃討作戦が完了すれば恩赦が発令されて、少なくとも逃亡罪は帳消しになるでしょうから」

「”恩”に着せられる覚えなどないわ!」

とミルウーダが吐き捨てるように言うと、ラムザはちょっと困ったように眉をひそめた。

「僕じゃなくて、上層部の意向がそうだと言っているだけです。そういうものだから、自棄を起こさずに生き延びて下さいとしか、僕には言いようがありません」

ラムザは、手や足を止めた村人達、騎士達をせき立てた。

「時間が無いぞ。今を逃せば脱出するのが難しくなる。早く!」

唇を噛み、憎々しげに横目で睨み付けるアルガスの脇を通して、村人達は海に続く棧橋にぞろぞろと下りた。

騎士や見習い騎士達は、老人や負傷者や、身重の婦人に手を貸して舟に乗せたり、満員になった舟を船着き場から押し出したりする。生存者が残らず灯台から出てゆくと、ラムザはミルウーダの背中も押した。

「貴女もお行きなさい」

「飼い主に盾突く家畜を野に放つの? 殺さなければ後悔するわよ!」
ミルウーダは、あらん限りの呪詛を両の眼から放射して、ラムザの瞳に注ぎ込んだつもりだったが。

秋の空のように澄んだ碧い瞳は、にこりと微笑んだ。

ラムザは自分の肩の外套マントを外して、ミルウーダに頭から掛ける。

「……!?!」

「女の方は体を冷やしちゃいけないでしょう。母がいつも、妹に言い聞かせていました」

違いましたっけ？と、戸惑ったように無邪気に目を覗き込まれて、ミルウーダは思わず溜め息を吐いた。

言っていることは間違っていないが、”敵”にそんな言葉を掛けること自体が間違っている。と、言ってやりたかった。

何だってこの少年は、ついさっき命の取り合いをした相手に、こうも人懐こく微笑みかけることが出来るのか。

ミルウーダはひったくるように外套マントの前をかき合わせ、後ろ歩きに、小雨の降る海岸に下りていった。

「あなたが、あのベオルブ家の一員である以上、あなたはわたしの敵よ。それを覚えておくといいわ……」

「覚えておきます。二度とお会いすることが無ければいいですね」ラムザはもう一度にこやかに笑い、手を振った。

「村の皆さんが盗賊にならないようにお願いします。密漁ぐらいは、バレなきゃ大丈夫ですけど。もう一度会って、討ち取りたくないですから」

ミルウーダは、言い返す気が失せた。

（大貴族のお坊ちゃんって、おつむの造りが違うのかしら？）

ミルウーダを乗せた、最後の舟が岸を離れた。

栈橋に立って見送っていたラムザが灯台の中に戻ると、一緒に舟に乗っている村の女が、感に堪えない様子で言った。

「いやア、若い頃のバルバネス様も男前だったけど……ありゃア、もつといい男になるわあ……」

じろりと一睨みして彼女を黙らせると、ミルウーダはそのまま、まなじりの吊り上がった鳶色の目で、灯台を睨み続けた。

（調子が狂うわね！何なの？あのボーヤは……）

「ナツシュ。頼むよ」

「はい。それじゃあ……、”炎撃”ッ！」
ファイア

ナツシュが空に向かって魔法を放つと――、
パンッ……パ、パ、パ、パンッ……。

信号弾が一斉に着火して、五色の煙が曇り空にたなびいた。

戦闘終了の合図だ。

村人達が全て陸を離れてから合図を出さなければ、わざと逃がしたことが明白になってしまう。ラムザには責任逃れをするつもりはないが、リュカ達が連座で罪に問われることがないように、用心したのだった。

この後は、まず海岸の警備を固めて、海上の小島から落ち延びようとする者を逃がさぬようにし、それから、島攻めの部隊と合流して峠の砦を挟撃することになっている。

が、援軍に駆け付ける前に、砦も陥落するかもしれない。城壁や塔に、ちらほらと降伏の白旗や、北天騎士団の白獅子の旗が揚がり始めている。騎士団は海側から攻めてくるものと見て、骸旅団側は主力を海上の小島と漁村に配備していたのだろう。

ラムザは兵を休ませ、負傷者の手当てや装備の点検をする時間を取った。

「ぼく……納得がいきません」

ラムザの横で、ナツシュは首を振った。

「恩赦が出るというのなら、尚更です。逃亡生活をさせるより、捕虜にしておいた方があの人達の身の安全のためだったような気がするんですけど……」

「見込みが大きい」というだけで、絶対の話じゃない。捕虜にして、矢っ張り処刑されることに決まったら、騙したことになるだろそれに……そもそも、法に照らした処分が確定するまで、あの人達が”捕虜”でいるとは限らないから」

「……？」

イクシが口を挟んだ。

「知らんか？小僧。上に報告される時には、捕虜の数が減っていることがある」

「……え？」

リュカが話を継ぐ。

「本腰を入れれば、先に来ていた連中だけで砦は落とせたらう。恐らく、わざと村人が寝返るまで待ったのだらうな。

その日暮らしの貧乏盗賊団を討伐したところで、戦利品はほとんど無い。恩賞などは元より出ない。赤字の戦だ。

……が、村一つ取り潰せば、それなりの収益が上がる。捕虜を奴隷商に密売すれば、かなりの収益が上がる。

欲をかって手に負えなくなったのでは、本末転倒だが」

「……!!」

イクシが、ふんと鼻で笑った。

「美しくないが、騎士団の内情はそんなものだ。不正を厳しく取り締まって、借金漬けになった奴を盗賊に変身させるのもバカらしいからな……。ラーグ閣下でさえ、ある程度黙認せざるを得んさ。

ああ、バスカーク隊長は流石に、配下に醜悪な真似は許さんぞ」

ラムザが、”村人達をそこに追い込んだ者を裁くことが出来ない”と言ったのは、そういう意味だったのだ。

ガラフが、にやにやと笑う。

「足腰の立たねエジイさんバアさん以外みんな、逃亡したか、抵抗したんで斬り捨てたかしたことになる。珍しくもねエ。

逃げたことにして売り飛ばすよりや、本当に逃がしてやった方が、誤魔化しとしちゃ可愛い部類じゃねエか？」

バトーも言う。

「姫さんが何か間違ったことしたか？」

皆殺しにしようとして出来ん連中じゃなかったが、死ぬ気でかかって来られりゃ、ちいっとばかりキツかったぞ。

戦果がでかいより、損害が小さいに越したことはないわい。お偉方はいざ知らず、前線の野郎どもにとっちな。元手になつるのは命なんだからな！」

騎士団側に死者はいなかった。チヨコボ韋駄鳥四頭と、ミルウーダに斬られた二人が立ち上がれないほどの重傷だが、他は人鳥ともに軽傷だ。サーシャを始め、白魔法の使える者達が、負傷者の治療に忙しく

立ち働いている。

「一つ、間違った気がせんでもないが？」

あのネエちゃんは只モンじゃなかったぜ？」

と、ガラフが尋ねた。

ラムザは答える。

「あの人が骨の髄まで”戦士”だったら、斬りました。

でも、戦場は”女の人”の死に場所ではないでしょう」

「……ふむ？」

ラムザは言い換えた。

「志のために、命も、女性であることも捨て切っているなら……『殺せ』なんて言わず、意識を失うか体が指一本動かなくなるまで、ただ死にもの狂いにかかって来たと思うんです。

あの人にはまだ、怯えがありました。裏返せば、生きたいという望みが」

「成る程ねェ……」

ガラフは視線をニーナに流した。

「……」

ニーナは、ぷいとそっぽを向く。

（正義を行う……それが、己の不名誉、不利益になることであったも……）

ナッシュは長衣ローブの袖で、ラムザの盾に付いている泥や血をこしこしと拭った。

（”黒翼の白竜”、かぁ……）

ディリータは、窓際に腰掛けて海を見ていた。

ガルナ村の村人達と、若干名の骸旅団の団員達を乗せた舟の群れの、舟足は速い。

村人達は、流石に潮をよく知っている。

戦闘水域から遠ざかり、外海に向かってみるみる舟影が小さくなってゆく。

「ディリータ、ごめんね」

ラムザが隣に来て、謝った。

ディリータが立案した作戦では、本当は島攻めの部隊がもっと近付いて充分に展開してから、漁村に立て籠もる敵を漏らさず討ち取る予定だったのだ。

しかしラムザは、功を最大にする道よりも、被害を――敵味方の被害を最小に抑える道を選んだ。

「いいんだ。いつでも、お前の思った通りにしろ。それでどうしてもまずい時は、僕が止める」

「うん」

安心して微笑んだラムザは、急に顔をしかめて脇腹を押さえた。

「くっ……！」

「おい、どうした！？どこか痛むのか？」

慌てて肩を支えるディリータに、ラムザは囁く。

「……すっごくお腹空いた……。いっぱい動き回ったから……」

「……。そんなことだろうと思った」

ディリータは呆れ顔で、いつもの如く手持ちの焼き菓子ビスケットを一包み差し出した。

ラムザは躊躇する。

「えー、いいよ、恥ずかしいよ……」

出撃前に食べてきたばかりなのに……。みんなだって我慢してるんだし……。さっきのお姉さんなんて、何ヶ月も豆だけの羹スープしか食べられなかったとか言ってたらしい……」

「バカ、大将が腹ペコでぶっ倒れる方がよっぽど恥ずかしいぞ！お前のは無芸大食じゃなくて、歴とした”有芸大食”だ。食べろ！」

「……うん……」

ラムザはもともと、皆から隠れるようにして焼き菓子ビスケットを頬張るが、イクシにじっと見つめられていることに気付いた。

「イクシ先輩、何か御用ですか」

「いや、なに。用というほどではないんだが……。少々、目の疲れを癒してただけだ」

「はあ？」

イクシの郎党が、笑いを嚙み殺している。

――、……！！

「えっ？」

ラムザは突然、北の山並みを――イグーロスの方角を振り返った。

「今度は何だ？」

と、ディリータが尋ねる。

（今……、アルマの声が聞こえたような……！？）

？－4－〔5〕 盜賊の砦 ？攻防（後書き）

……、ガン！タイトルが”盜賊の砦”なのに、バトルが村の中だけで終了してるっ！いや、この後、島とか峠の方でもう一戦やらかしたって蛇足ですし……。

原作に沿って話を進めているつもりですが、状況設定などが多少異なるために、時々こういうことが起きます。

しかも……あれれ？小さい頃から友達も多いけど”敵”も多かったこのラムザ君、今更ビビりませんでした。おいおい、キミ、もっとメシのコト以外で（女顔のコトも除く！）悩まんかい！！って感じになっちゃったな……。――

ウィーグラフやミルウーダ個人には惹かれますが、骸旅団に全面的に肩入れする気にはならない……という影響も表れてしまったかもしれません。（かといって、騎士サイドを最悪する気もありませんけど）

明治維新の時や、あるいは巨額の赤字国債を抱える現代日本でもそうですが、政権交代したからといって一般民衆の暮らし向きが劇的に改善される状況にはない……ように思うのです。

単純に、悪い王様や貴族を倒してめでたしめでたし、というタイプの革命物語（例えて言えば、イズルード君みたいな奴がヒーローとしてまかり通る話？）は好みではありません。

権力を握った途端、今までの”正義の志士”達が派閥争いを始めたり、反对者を強引に弾圧する”暴君”と化したり、あるいは民衆の無茶な要求に悩まされたり……といった難しさ、哀しさまで描き込まれているものに読みごたえを感じます。

と、いっても、自分で書くとなると至難の技なんです……。――

？－4－〔5〕 盜賊の砦 ？ベオルブ邸襲撃

同時刻。

ガリオンヌの成都イグーロス。

ベオルブ邸にて――。

「イヤッ！やめてッ、離してッ！！」

緑衣の剣士が、身をよじってもがくティータを荷物のように乱暴に担ぎ、韋駄鳥チヨコボに乗せて駆け去った。

雷鳴が轟く。

裏玄関の前で、目を見開いたまま雨に打たれている死んだ衛兵の顔を、稲光が時折、青白く照らした。

「早くしろッ！」

襲撃者達の指揮者リーダーらしき剣士が、仲間を急かした。

童顔だが、よく見れば見た目ほど若くはないとわかる。ザルバツグと同じ位の年だろう。

ギユスタヴ肅清後の骸旅団副団長・ゴラグロスⅡラヴェインだった。

アルマを引きずってくる剣士は、手こずっている。

「痛いッ！離しなさいよッ！」

アルマはティータよりも抵抗が激しい。

引っ掻く。噛み付く。脛を蹴る。手に触れた物で殴りつける。

異国の風景の描かれた、大きな花瓶が割れて、花と陶器の破片が玄関に散乱した。

恐怖で身がすくんでしまったティータと違い、アルマは必死に暴れ続けていた。

（この悍鳥じゃじゃチヨコっ……、殺したるか！！）

気絶させて大人しくさせてから運ぼうと、剣士はアルマの首を絞める。

「う……！！」

爪を立てても、非力なアルマの腕力では男の腕を外すことは出来ない。が、

（隙ありッ！）

アルマは、勢いをつけて踵を後ろへ振り上げる。丁度自分の尻を蹴り上げるような格好で、剣士の金的に当たった。

「げ！」

腕が緩んだ。アルマは剣士を突き飛ばした、が、自分もよろめいて転んだ。

「兄さんッ！！」

剣士は堪忍袋の緒を切らした。

「クソ女ッ！！」

剣を抜いて振りかぶる。

「待てっ、殺すな！」

だが、ゴラグロスが止めに入るまでもなかった。

血刀を引っさげて屋敷を飛び出してきたザルバッグが、剣士を一刀の下に斬り伏せたのだ。

血飛沫を浴びた韋駄鳥チヨコボは、空の鞍を載せて、一目散に逃げた。

「チッ、ここまでかッ！！」

ゴラグロスも韋駄鳥チヨコボに飛び乗り、退却する。

（伯爵を仕留め損ねたのは痛い。）

が、令嬢を人質に取れば上々だ。

あのはしたなさでは、侍女の娘の方は大した身分ではなかったのかもしれない）

アルマの方こそ”伯爵令嬢”だろうとは、思いもよらぬゴラグロスだった。

「大丈夫か、アルマ？」

「ゲホッ……。ええ、わたしは大丈夫。それよりティータが……」

「ああ、わかっている」

ダイスダーグが、血に染まった胸を押さえ、剣を杖につきつつ、

表へよろぼい出てきた。

「兄上ッ!!」

ザルバッグとアルマに両側から支えられながら、膝をつく。

「わ、私は大丈夫だ……。アルマは……無事か……?」

「はい、何ともありません。ひどい怪我……」

ダイスダークは左肩に刺さっている自動弓ボウガンの矢を抜いた。新たに鮮血が吹き出す。

「ま、まさか、ここを襲撃するとは……。私を狙ってきたか……」

「五人ほど殺やられました……。ティータもさらわれてしまいました」
ザルバッグは歯ぎしりする。

「奴等を追え……。草の根を分けても捜し出せ……」

「兄さん、それ以上しゃべらないで!」

「骸旅団め……」

ダイスダークは、がっくりとアルマに倒れかかった。

「兄さん、兄さんッ、しっかりして!」

”回復”ケアルの呪文を唱えるアルマを、ザルバッグが止める。

「傷が深い。急に回復魔法をかけると、おかしい風に癒着するぞ。

医者任せろ」

戦場で怪我人を見慣れているザルバッグは、落ち着いて止血した。

「誰かッ! 誰か、医者を呼べ!」

ザルバッグの声に、雷鳴がかぶさる。

雨に濡れながら、アルマは震える指を組んで祈った。

(ラムザ兄さん……! 兄さん、早く帰ってきて……!)

ふと気が付くと、爪の隙間に血がにじんでいた。

その夜――。

首尾良くガルナ村の賊軍を一掃したラムザ達は、カラ峠の砦でバスカークの本隊と合流していた。

祝宴――というほどではないが、平素よりは質・量の充実した夕食が供され、葡萄酒ワインがたっぷりと振る舞われ、騎士も兵士も、心地

よく戦勝気分酔っていた。

「あれ？何だ、この行列？」

「ああ、ベオルブの御曹司と手合わせする順番待ちさ」

「へっ？」

「いやさ、アルマ姫が、御曹司より弱い男とは結婚しない！とか宣言してるみたいで……」

「何ッ！？それって、御曹司に勝てばアルマ様を振り向かせられるってことか？」

「さあなー。必要条件ってだけで、十分条件じゃなさそうだな。でも、可能性は出て来るんじゃないか？」

「……俺も挑戦してみようかな？」

並んでいるのは、純粹に力試しがしたい者が半分、あわよくば逆玉の輿……という下心のある者が半分だろうか。列の先頭では――、
「セ・ン・パーイ、もうお終いですか？つれないですよー、ご自分から誘いを掛けておきながら！今夜は朝までとことんお付き合いでするつもりでいたのに……」

「冗談ぬかせ。お前みたいな化けモンと一晩中闘^やりあってたら、こっちの体が保たんぜ」
と、ガラフが次の挑戦者と交替^{タッチ}した。

『勝った人の分だけ聞くから』ということで、名乗りは省略だ。
一礼して、剣と剣を合わせると――、

十手と打ち合わずに、ラムザの剣が挑戦者の剣を叩き落とした。

「うわっ、障壁^{ハードル}高えー！！！」

「ガラフさんでも引き分けがやっとかよ……。バスカーク隊長から一本取ったってのも、ホラじゃなさそうだな……」

「あと、胃袋の方の噂もなー。俺は数えた！御曹司はお代わりを二十六杯してた！」

「酒は弱いって話だから、順番が来るまでに酔い潰しとけば勝てるかも……」

「お前な、そういうセコい魂胆で、姫様に好かれると思うか？」

疲れ知らずに挑戦者達を打ち負かしてゆくラムザを、ニーナが惚れ惚れと見物している。

「ベオルブの御曹司ってば、やるじゃない。強くって、可愛くって、もお最高！食べちゃいたーい！ね、紹介しなよガストンー」

「いいんすか、姉キ、リユカ様放ったらかして」

「いーの、いーの。リユカなんて、近頃とんとお見限りなんだから。美人の許婚が決まっちゃってさ。政略結婚なんか糞喰らえだって言ってたくせに……。本気で御曹司に乗り換えちゃおっかなー」

「ラムザは駄目っすよ。若くてイキのいいのが良かったら、俺なんかどうっすか？」

ガストンはニーナの肩を抱いて、酒を注ぐ。ニーナはつまらなさそうにガストンの手を払ったが、葡萄酒はぐいと飲み干した。

ナツシュがおずおずと尋ねる。

「あの、もしかして……ガストンって”大人”？」

「はあ？別に、したからって急に大人になるよーなもんじゃねーぞ」
「……その余裕の口振りがオトナだね……」

ナツシュは絶海の孤島にいる気分だ。

（き、危険だ。ガストン以上の不良が周り中にゴロゴロ……。ぼく、絶対にサーシャの側を離れないようにしよう）

大分酔ってきたニーナは、ナツシュに絡む。

「こっちの坊ちゃんも可愛いわねえー。本当に十六？二つくらいサバ読んでない？」

「十六ですよー……」

「じゃあ、充分大人じゃないさ。お姉さんが遊んであげよっか？」
と、ナツシュの顎をくすぐる。

「え、えええ遠慮しますうつ。ぼ、ぼく、もうココロに決めたヒトがっ……」

「あららー？ナツシュ君も隅に置けないわねー。ねえ、誰なの？士官学校のカデミーのコ？あたしも応援してあげるから、教えなさい。きゃはっ」

と、サーシャが陽気にナツシュの肩を揺する。

（ああつ、サーシャまで出来上がっちゃってるうー！）

サーシャはぐいぐいと、ナツシュの杯コップに葡萄酒ワインを注ごうとする。

「ほらほら、ナツシュ君、飲み足りないでしょー。こういう時はね、飲めるとこまで飲むの。それで、心に溜め込んでるものぜーんぶ、吐き出しちゃうの！」

「あ、あのねー……。その前に、今食べた物全部吐いちゃいそうだよ……。ぼくもお酒弱いって、覚えてる……。？」

「何よー、あたしのお酒が飲めない？」

「うー、いや、その……」

後退ったナツシュは、通りがかったバスカークの脚にぶつかった。

「はい、それまで。皆さんには、こっちです」

と、バスカークは持っていた水差しビッチャーから、サーシャとナツシュの杯コップに混合果汁ミックスジュースを注いだ。

「いけませんねえ。お酒は楽しく、節度を守って！飲めない人に無理強いしない！」

デイリータ君、後はよろしく頼みますよ」

と、デイリータの手に水差しビッチャーを渡して立ち去る。

そう言うバスカークは、兵士達の間を歩き回りながらあちらこちらで杯を受けてきたはずなのだが、足取りも口調もしっかりとしている。

「隊長は全然顔色変わらねえな……」

「ウワバミだぜえ、あのお方は」

ガストンは、宴の座から離れて手酌で杯を重ねている、シーザの横に腰を下ろした。

「いやー、リュカ様のお気持ちはわかるっす。

姉キはやっぱ、いい女っすから。

リュカ様の剣としちゃ、どーしたってシーザ兄キにゃ敵わないし、女としてもずーっと日陰者……なんてんじゃ勿体ないっすよ。

早いところ、ちゃんと嫁さんにして大事にしてくれる男に拾っても

らった方がいいんじゃないっすか。ねえ？」

「……」

バトーが高笑いする。

「ガハハッ、ぐずぐずしとるとイクシに横取りされるぞぉー！」

「バカ、貴様は声がでかいっ……！」

だが、賑やかな笑い声に掻き消されて、ニーナの耳には届かなかったようだ。

「チッ、何なんだ。どいつもこいつも……」

ふてくされて一人で飲み食いしていたアルガスは、同類がいるのを見つけた。

「成り上がり者の若僧め……ザルバッグ様にお目をかけられておるからと……。御曹司も御曹司だ。そもそも、あのディリータとかいう小僧をいつまでもお側に置いておくのがいかんのだ……」

ダイスダーグが、バスカークの監督に派遣した騎士だ。

「ディリータが、何ですって？」

アルガスは、一人でぶつくさと管を巻いている、中年の騎士に話し掛けた。

「うん？御存じ無いか？実はだな……」

よい聞き手が見つかったとばかり、騎士は長々と物語り始めた。

その頃、砦の一角から持ち上がった噂が、瞬く間に軍団の兵士達に波紋を広げていた。

「ええっ！？ドラコニア伯が暗殺……！？」

「御令嬢が誘拐されたって？」

ラムザは手合わせを放り出し、人ごみを押し分けて、声の聞こえた方に近寄った。

「何だって！？アルマがっ！？その話は、どこから？」

兵士達は互いに指差し合う。

バスカークは兵士達を静めて回った。

「落ち着け！流言に惑わされるな！事実であれば、イグーロスから正式な報告があろう！」

部下に命じて噂の出所を調べさせている間にも、伝令が息せききつて砦に駆け込んできた。

「静粛に！」

バスカークは手を挙げ、士卒の注意を集めた。

「本日早朝、イグーロス城下のベオルブ伯爵邸が、骸旅団の一味と思われる者達による襲撃を受けた。

伯爵は胸や肩などに傷を負われたが、お命に別状は無いとのこと。犯人らが逃走の際に誘拐したのは、アルマ姫ではなく、侍女のテイタ殿だということだ」

兵士達はざわめいた。

「何だ、良かつ……」

安堵の溜め息を吐いた騎士を、ラムザはキッと睨んだ。

「何が良いものかッ!!」

怒りに満ちた、よく透る声が、陣営の隅々まで響き渡った。

しん、と水を打ったように、兵士達は黙りこくった。

平静を取り戻したラムザは、騎士に謝る。

「すみません」

「いえ。自分の失言でありました……」

騎士は頭を垂れて詫びた。

酔いも醒め、真っ青に血の気の引いたディリータが、幽霊のようにふらふらと歩き出した。

「今すぐ帰る」

「ディリータ」

ラムザはディリータの肩を抱き止めた。

「放せ。こうしている間にもチヨコボテイタは……、テイタは……!」

「今夜は月も無い。韋駄鳥チヨコボで夜道を駆けるのは無理だ。明日、空が明るくなったらすぐにイグーロスに帰ろう」

ディリータはラムザの肩に体重を預け、うわごとのように妹の名を呼んだ。

「テイータ……。テイータ……」

しばらくは、咳しわぶき一つする者がなかった。
押し黙った兵士達の影を、松明のかがり火が不安定に揺らめかせた。

？－４－〔５〕 盗賊の砦 ？ベオルブ邸襲撃（後書き）

アルマが使ったのは、痴漢に抱き付かれた時などに有効な、簡単な護身術です。女性の方は覚えておくと……役に立たないに越したことはないんですけどねえ。

？― 第5章 隔てられし想い 「1」 一夜明けて

伽藍の屋根に、すらりと長い手足を投げ出して、少年は北の空に目を凝らしていた。

指先大の乾^{クラツカー}麺^{ツカー}を、群がってくる鳩に一つかみ投げ与える間に、自分は二つかみ口に放り込む。

子供っぽい仕草で指をしゃぶる唇が、紅を差したように赤い。

半分夢を見ているような、眠たげな二重まぶたの睫毛が長く、襟足が細くて白く、長身でなければ女と見間違えられそうな風貌だ。

「あ」

金色の朝焼け雲を背景にはばたいて来る小さな影を見つけて、少年は立ち上がった。

身長、※六尺二寸^{ケルターカーク}（※約一八三センチメートル）ほど。

ほっそりとしたしなやかな体付き、長い手足が縦方向の印象を強めて、実際以上に背が高く見える。

ピーーイー……。

口笛を吹いて、少年は左手を挙げた。

広場や僧坊の上を大きく旋回して、一羽の鳩がその手に舞い降りる。

乾^{クラツカー}麺^{ツカー}をつついている、観賞用の白鳩達とは種類が違う。灰色の伝書鳩だ。

「よーしよし、いい子だね。でも、持ってきたのがつままない報せだったら、焼き鳥にして食べちゃうぞ」

優しい声、甘い笑顔でそんな物騒な言葉をかけられているとは、露知らず。鳩は大人しく、少年の手で足から通信管を外されると、輪を描いて鳩舎に戻っていった。

少年は、中庭を挟んで向かいの建物を振り返った。

まだ朝日の差し込まぬ窓の一つに、紗^{レース}の帳^{カーテン}を通して、立ち話をしている一組の男女の姿が見て取れた。

「へえー……。朝っぱらから、油断も隙も無いったら」

布袋の乾^{クラツカ}麵麩の残りを、少年は気前よく鳩にばらまいた。ふわりと、一段低い^{マント}渡り廊下の屋根に飛び移る。

萌葱色の外套^{マント}が風にめくれて、腰にはいた長剣の、白金^{プラチナ}の装飾が煌めいた。

柄の両端が刃と平行に伸びた、三叉の剣。神殿騎士の剣だ。

足許から鳩を飛び立たせながら、少年は猫のように軽やかに俊敏に、屋根を伝い走る。

たちまち、目当ての窓の露台^{バルコニー}に降り立ち、雨戸^{ノック}を打擲した。

コン、コン。

帳^{カーテン}を開けて少年を迎え入れた、魔道師^{ソーサラー}の青年は、呆れ顔だ。

「イズルード君……。ここを何階だと思っているんです？」

「三階」

イズルードと呼ばれた少年は、けろりとして答える。

「四階です……」

「どっちでも大して変わんないよお」

「ええ、危険だということにはね。打擲^{ノック}をしたって、扉でない所から入ってくるのは礼儀^{マナー}違反ですよ」

「間男」なんて、窓から来るものと相場は決まってるじゃない。

あっと、間男はキミの方か」

イズルードは、若き魔道師^{ソーサラー}と向かい合っていた女剣士を背中側から腕に抱き込み、彼女の肩越しに口を尖らせた。

「誰にことわって姉^{ねえ}サマ口説いてるのさ？王都にいる婚約者^{フイアンセ}ドノに言い付けちゃおっかなー」

イズルードとよく似た整った目鼻立ち、重たげな二重まぶたの女剣士は、首を曲げて弟を見上げた。——といっても、身長※五尺八寸^{ケルター}（※約一七一センチメートル）と、女性にしては背の高い方なので、それほど顔を上向ける必要はない。

「安心おしよ、仕事の話だから。あたしがこんな、キザ男の口車に乗せられるもんかい」

魔道師^{ソーサラー}は、香油で整えた焦茶色の髪をかき上げた。

「口車に乗せるなどとは心外ですね、メリアドール。私は思ったままを口にただけですよ」

「うっげーえ」

イズルードはわざとらしく舌をつき出す。

「それで？ イズルード君。姉上と私の語らいの一時を邪魔するだけが目的で来たわけではないのでしょうか」

「あ、そうそう。主目的は果たしたけど、ついでの用件があったんだっけ」

と、イズルードは內衣^{ポケット}？ から通信管を一つかみ取り出して、魔道師^{ソーサラー}の手の平に落とした。

「今日も恋文^{ラブレター}がたんまり届いてるよ。モテる男は大忙しだねっ」

イズルードの言葉は、半分は嫌味混じりの冗談である。

魔道師^{ソーサラー}は通信管の一本一本を、指輪にしている魔洗石^{マテリア}に当てた。

書信を開いて読む必要はない。金属の筒そのものに、魔法で通信^{メッセ}文^{イジ}が記録されているのだ。中に入れる文書は適当な偽文書^{タミー}でいいのだが、彼は、そこは小まめに、女魔道士と恋愛詩のやりとりなどしている。

”異常無し”の定時連絡ばかりの日ならば、数秒で確認し終えて、ゆっくりと”恋文”の方に目を通すところだ。が、今日は読み取りに時間がかかっている。

「同時作戦の結果報告かな？」

「ええ。思ったより脆かったようですね、骸旅団は。いえ、北天騎士団が矢張り強かったと、言うべきでしょうか……。軒並み負けたか、負ける寸前というところですよ」

メリアドールが口を挟んだ。

「ガルシディア湾が落ちるのは早かったね。」

切れ者だっちは聞いてたけど、ああいう冒険みtainな奇策を使ってくる男だとは思わなかった」

「バスカークの策ではないでしょう。ダイスダーグの、でも。」風

神”將軍の末息子も、ただの可愛いお人形さんではないのですね」

イズルードの紅い唇に、陶然うっとりとした微笑が上る。

「あのコ……剣もかなり出来るんだってね」

起きたまま夢を見ているような目が、妖しく光った。

「ねえ……もしも、消すことに決まったりしたらさ……ボクにくれる？」

「駄目です」

魔道師ソーサラーはあっさりと却下した。

「何で？ どうして？」

イズルードは普段の子供じみた表情に戻って、文句を垂れる。

「何でもどうしても、ありますか。君にやらせると、あからさまな不審事件になってしまいます！ 我々の活動は、表沙汰になっては台無しなんですよ」

「また、それえ？ ギュスタヴだって、ボクが闘やりたかったのにさあ……。ね、ちゃんと事故死に見せかけるからさ」

駄々っ子のような口調と、酷薄な内容との不均衡アンバランスは、この少年と付き合い慣れている人間にとっても薄気味が悪い。

「腕に覚えのある奴等が一撃で斬り死にするような”事故”が、どうやったら起こるんだい」

と、メリアドールは弟をたしなめた。

「一撃でなけりゃいいの？」

魔道師ソーサラーの青年は溜め息を吐いた。

「兎に角ですね……。その顔、その態度、その剣腕うで。君は隠密行動には不向きなんです。いっそ、女装でもすれば目立たないかもしれないかもしれませんがね」

イズルードは皮肉とは受け取らず、にこりと笑う。

「あっ、それ、いい考え。姉サマとお揃いの服がいいなー」

「お前は背が高すぎるよ」

「姉サマが踵ヒールの高い靴を履けば同じ位だよ。可愛い服仕立ててもらっちゃおうよ」

「少しは男の子の矜持^{プライド}つてもんがないのかい、もうじき十七にもなろうってのに」

「だって、退屈なんだもん。みんなお仕事で飛び回ってるのに、ボクはお留守番ばかり。脚がなまっちゃうよ」

イズルードは魔道師^{ソーサラー}に向かって、

「用が終わったんなら、姉サマ返してもらうよ。今朝は手合わせ^{デート}がまだなんだー」

と言い、姉にまわりついて甘える。

「悪いんだけどね、イズルード。これからすぐ、ライオネルに出掛けるんだよ」

「ライオネルう？あのタコ入道と、成金悪趣味オヤジの所にお使いに行くの？姉サマが？」

「あたし一人じゃないよ。父様と一緒にだよ」

「……ボクも行っちゃダメ？」

イズルードの懇願の眼差しを、魔道師^{ソーサラー}はにべもなく撥ね付けた。

「駄目です」

「つまーんなーいなー」

膨れっ面をしたイズルードを、魔道師^{ソーサラー}はなだめる。

「まあ、そうふてくされずに。いずれ君にも、嫌というほど働いていただきます。」

時が来れば、君にぴったりの殺伐とした”お仕事”が山のように出来ますよ。人目も後始末も気にせず、斬って斬って斬りまくればいいような”お仕事”がね……」

「いずれーって、いつ？」

「そうですね……あと一年ほどのうちには」

「一年！」

イズルードは、帳^{カーテン}をサツと勢いよく左右に開いた。

黄金色の光がようやくこの窓にも届き、冷涼なそよ風に乗って朝の鐘の音が流れてきた。

「一年もこんな抹香臭い島で待機してたら、体からキノコが生え

「ちやうよっ！」

言い捨てるなり、イズルードはひらりと手すりを飛び越えた。

「イズルード君ッ？ここは四階……！」

魔道師が慌てて露台バルコニーから身を乗り出す。

身軽な少年は雨樋や露台バルコニーの手すりを足掛かりにして、あつという間に地面に飛び降り、野生の鹿のように駆け去っていった。

「良い子は決して真似をしないように……とでも言うべきところでしょうか」

「良い子にも悪い子にも、ちよいとあれは真似が出来ないよ」

メリアドールも、血を分けた弟ながら、イズルードの脚力には舌を巻く。

成都イグーロス城壁、※双児ジエミニの刻（※午前十時～十二時）――。

「やあ、セヴェリー。お久し振りっ！」

ひよろりと背の高い魔道士の少年に声を掛けられて、胡桃色の巻き毛の少年は振り向いた。

「ウォーゼル君じゃないか。怪我はもう治ったのかい？」

「勿論だともっ。聞く所によると、入学以来僕と熾烈な底辺争たたかいを繰り広げてきたナツシュ君が、ラムザ君と一緒に特別任務で大活躍しているそうじゃないか？のんびり寝てなどいられないよっ」

同じく虚弱体質といっても、ウォーゼルはナツシュとは対照的に、背丈と肩幅だけはある。ゆったりとした魔道士の長衣ローブを着ていると、肉付きの薄さが隠れ、一見、魔法・体術両刀の屈強な肉体派魔道士にも見える。

ために、ガリランド市街で盗賊達と戦った時にも、攻撃を集中されて深手を負った。

「競争意識は、大いに理解できるが……」

巻き毛の少年は溜め息を吐いた。

”気取り屋セヴィ”こと、セヴェリーニィブランシュ。

ゴルターナ公爵夫人の甥であり、公自身の遠戚にも当たる、ゼル

テニア領の名門の貴種である。サラブレッド

うら若き貴婦人達、女学生達の人気を二分する、ラムザの最大の好敵手——を、一方的に自任している。ライバル

確かに、優雅な身ごなしと、詩文・舞踏の才能においては、武骨者のラムザを足許にも寄せ付けない。が、武芸の方はいえ、未だに韋駄鳥チヨコボに乗るのが怖いという赤点騎士だ。

「医学堂病院で休んでいればいいものを」

「そうはいくかい。みんなが一足早く、騎士団の一員として実務に励んでいるというのにつ」

セヴィは微笑する。

「実務と呼べた代物ではないよ。散歩のような見回りと、練兵場での訓練ばかりだ」

「うん、聞いたよつ。屋外実習中心の授業は、学校アカデミーにいる時同様に続いているそうだね。体を鍛えるいい機会だなあ！」

「やれやれ。君のひたすらに建設的な思考法は、賞賛に値するよ」
「いやあ、健全な精神が健全な肉体を育むものと、信じているからね！」

セヴィはウォーゼルを手招きし、耳に口を寄せた。

「気付かないかい？ 僕は今、士官学校生アカデミー”本来”の役割を受け持っているのだ」

「……？ どういうことだい？」

セヴィは一層声を低めて、

「人質だ。王家ではなく、ラーグ公のだからね。いや、同じことかな。今の王家はルーヴェリア王妃の——、ラーグ公の妹君の私物と化しているからね」

「……！ そうか……」

盗賊団討伐に力を割かれている間に、オリナス王子の後見人問題で出し抜かれたくはない。ラーグ公は、ゴルターナ公派の策動を牽制する必要があった。

王立学校の生徒を仮初めにせよ、一地方の騎士団に徴集することは越権行為のほずであるが、王家の実権を握っているのが公妹であつてみれば、許可などは素通りだ。

「ふふ……。顔もろくろく覚えていない大叔母の急病とやらで、ゴルターナの義伯父上から迎えが来た。ドラコニア伯に治安上の理由で断られていたがね。

あまりごねていると、そんなことでも正面衝突の火種になりかねない昨今だ。見舞いの手紙を持たせて、お引き取り願ったよ」

陽気なウォーゼルでも声を湿らせて、

「人質といえば、ディリータ君にはお気の毒なことになったね……」
「どこから聞いた？ 気の毒と思うなら、大きな声では言わないことだな」

「……？ そりゃまた、どうして？」

「敵が、ディリータ君の妹をベオルブ家の令嬢だと思っていてくれる間は、少なくとも命だけは無事だ。が、人質としての価値が無いと知れば、それさえ危うい」

「……っ」

元々血の気の薄いウォーゼルの顔は、蒼白くなった。

「間が悪かったよね。ラムザ君とディリータ君の連係攻撃があれば、刺客の十人や二十人、文字通り朝飯前に退治してしまったろうにな」
「さて、どうかな。聖騎士ザルバツグ將軍もいらしたし、伯御自身、音に聞こえた魔法剣士だ」

「もしかして、ウィーグラフ直々の襲撃だったのかい？ ダイスターグ様と同じく、”聖剣技”の使い手だというじゃないか」

「ウィーグラフは女性を人質には取らない。腕も心掛けも一段劣る奴だ。毒を使ったのさ」

「毒！ 井戸に痺れ薬を入れるとか？」

「毒と解毒薬に関しては、伯は私設の研究所まで作らせているお方だぞ。飲食物には注意を怠ったことがないだろう。……薪だ」

「薪！？」

「ベオルブ邸の総硝子張りが仇になったな」
ガラス
モスフングス

屍毒茸と呼ばれる、死体にだけ生えるキノコの胞子から抽出した麻痺毒だった。

猛毒ではないが、一定量以上吸い込むと、目眩や吐き気などの体調不良が半日から一日ほど続く。

前日、最後に部屋部屋の暖炉にくべられた薪から、毒は夜の間にゆっくりと館の中に充満した。

伯爵兄妹の起居する東の棟は、全ての窓が当時には珍しい硝子張りだった。ガラス隙間風が入り放題の一般家屋に比べて、格段に気密性が高かったのである。

「……なんてことだ！」

ウォーゼルは頭を振った。

「これからどうするんだろう？ アルマ姫のお気に入りの侍女だったんだって？」

「侍女ではなくて、”友達”らしい。ラムザ君が、ディリータ君をそう思っているように。しかし……、」

言いかけて、セヴィは城壁の外を見た。

南の城門の上で哨戒していた士官候補生の一人が、彼方の丘を指差して叫んだのだ。

「おい、見ろよ！ ラムザじゃないか、あれ！？」

砂金の粒のような黄金色の点が、ようやく新緑の色に塗り替えられつつある枯れ草の草原に、ぽつんと一つ星のように光っている。

「どこに！？」

「早いな！ 昨日の今日だぜ？」

城壁の上の士官候補生達は、物見櫓に上ったり、矢狭間に顔を押し付けたりした。

まっしぐらに街道を駆け上ってくる、僅か六騎の韋駄鳥。チヨコボ

先頭を走るのは、黄金の髪を振り乱したラムザだ。鎧は着けず、群青色の軍服姿である。

矢張り北天騎士団の群青色の制服に身を包んだ左右の騎手は、髪

の色が一方は黒で、一方が銀褐色。

ディリータとガストンだ。

大分引き離されていた三騎——アルガス、ナツシュ、サーシャ——が、急に速度を増してするすると追いついてくる。

ナツシュが”加速”の魔法をかけたようだ。

速足から並足に速度を落とし、跳ね橋の上で止まったラムザの韋駄鳥は、羽毛から白く湯気を立て、荒い息をして、足踏みする。

「ドラコニア伯爵末弟・ラムザⅡベオルブだ！ガルシディアより帰参したッ！」

都城の門の周辺は、昨日から警戒が厳しくなり、通行人の取り調べが入念になっている。

が、身分証代わりの方位磁針の、”黒翼の白竜”の紋章を確かめるまでもない。衛兵達も、順番待ちの商人、旅人達も道を空けた。

「お通り下さい！」

丁度遅れを取り戻した後ろ三騎が立ち止まる暇もなく、六頭の韋駄鳥は一塊になってイグーロスの街に駆け込んだ。

？― 第5章 隔てられし想い 「1」 一夜明けて（後書き）

出ました、人斬りイツちゃん。イツちゃってます。

多分、イメージ違いキャラ堂々の第二位ですね（一位が他にいるのかっ！？……と？はい、お恐れながら……）。主要キャラじゃありませんが、一応ご説明をば。

キャラ成分表示その4・イズルード

？ラムザの良きライバル？…ラムザのライバル？1といえば、ウィーグラフというのが衆目の一致するところかと思われれます。じゃあ？2は……ガフのおっちゃん？という説が有力かもしれませんが、私としては、年も近いことですし、イズルード君にもっと活躍してほしいかったなあ。と。（いや、活躍されても屍の山が……ううむ）

原作よりも出番を増やしてみました。ついでに剣の腕だけでなく、大食い度、女顔度、シスコン度などにおいてもラムザの向こうを張れる奴に……してみたら、何かすごくアブナイ感じになっちゃったんですけど……。

？人間凶器！…初めて対戦した時には泣かされました。普通の技の組み合わせだけなのに、何でこんなに強いのか！？とビックリ。プロテスやゴーレムで防御しても焼け石に水で。ジャンプ中は攻撃できないのも困った。手に汗握る名勝負だったと思います。彼とはもう一戦ぐらいしたかったなあ……と、ラムザ君も思ったんじゃないかな。

逆に、数々のすごい持ち技がありながら、あっけなく倒せてしまいうのがクレティアン。彼には……別の方面で見せ場を作ってもらいましょう（笑）。

？狂気の天才！！…このイズルード君は、過去のとあるショッキ
ングな出来事以来、子供返りしてしまっているという設定です。子
供のように単純に周囲から吹き込まれる”正義”を信じているため
に、何のためらいも無く人を斬れるのです。そんな弟を見守るメリ
アドールの、深い苦悩と後悔とは……？

クールなイズルードをイメージしていた方、ごめんなさい。圧倒
的に不評でしょうが、ごく一部の女性読者の方（お世話好きメリ
アドール姉様のような？）は、こういう困ったちゃんを溺愛して
くれそうな予感……。いやハッキリ言って、私だって彼の八歩以内
には近付きたくないです。

ラムザとデイリータ、アルガスの三人がダイスダーグの寝室を見舞うと、寝台の脇で舟を漕いでいたアルマが弾かれたように飛んできて、ラムザに抱き付いた。

「ラムザ兄さん……っ」

泣き腫らした目から、また涙が溢れる。

「アルマ」

昨日の朝からろくに食事も睡眠も摂っていないのだろう。目の下に隈が出来て、やつれて見える。

「敵の根城を落としたそうだな。よくやった……。あとは、ザルバッグに任せて、ゆっくりと休むがいい。ご苦労だったな……」
床に伏したダイスダーグは、首だけ回してラムザを見た。

「兄さん。無理をなさらずに」

「心配するな。大した傷ではない……」

ラムザはアルマを抱き締めたまま、ダイスダーグの枕元に近寄った。

「兄さん、ティータは……、ティータはどうなるのですか？」

「……。奴等の本拠地を発見次第、ザルバッグが総攻撃をかける」

「そ、そんな……！！」

「骸旅団はもうガタガタだ。逃げている者も数十人しかない。頭目のウィーグラフは未だに捕らえていないが、それも時間の問題だろう……」

ラムザの腕の中で、アルマが体を硬くして震えた。

「ティータを……ティータを見殺しにするのですか？」

「心配するな。手は打ってある。」

ティータの身柄を取り戻すまでは総攻撃などはせん。絶対にな……。

実の妹のように想っているティータを、見殺しになどするものか

……」

「……。わかりました」

ラムザは澄んだ微笑を浮かべた。

「兄さんこそ、ごゆっくり。今は、お体を治すことだけお考え下さい。こんな時でもなければ、少しも休もうとなさらないんですから」身を屈めて、ダイスダーグの頬に口付けする。

「アルマ、おいで。お前も休めよ」

ラムザはアルマの肩を押しながら、退出した。デイリータとアルガスが無言でついてゆく。

寝室に一人残されたダイスダーグは、胸中密かに溜め息を吐いた。

(……。あいつめ……)

透き通った、碧い瞳の奥に映っていたものは――、安堵ではない。諦めでもない。

凜然たる決意だった。

(女のように、優しく従順そうな顔をして……。一度心を決めたら梃子でも思うままに動かせぬ強情さも、女のような……。)

開け放した窓から、雨上がりの眩い日射しと、爽やかな風が入ってくる。

(矢張り……。 ” 風 ” を縛っておくことは出来ぬか)

目を閉じて、ダイスダーグは本当に溜め息を吐いた。

「おいコラ！ 待ちやがれよデイリータ！」

「とにかく、落ち着いて！」

玄関の外で、ガストンとナツシュがデイリータを押さえ込んでいる。

「落ち着けだど？ 落ち着いていられるものかッ！」

デイリータは、二人を振り解いては、またしがみ付かれしつつ、ダイスダーグの寝室の前からここまでやって来た。

「ナツシュ、俺ごと” 停止 ”^{ストップ}でも” 不動 ”^{ドシムテ}でもかけちまえ！」

「えー……」

いつの間にか私服に着替えてきたラムザが、ディリータを引き留めた。

「どこにいるかもわからないんだ。あてもなく捜したって意味がないよ」

ディリータはラムザの襟をつかんで、揺さぶる。

「意味がないだと!？」

たった一人の妹なんだぞ!!」

「に、兄さんも……言っていたじゃないか。ティータを見殺しには……しないって……」

と……にかく、今、動いても……

く、苦しいよ……」

ディリータはラムザを放した。

ラムザは肩で息をつく。

「すまない、ラムザ。大丈夫か……?」

「あ、ああ……。ゴホッ、ゴホッ……」

と――、

「オレは”絶対”なんて言葉を”絶対”に信じないけどな」

アルガスが腕組みをして玄関の支柱^{ポール}に寄り掛かり、ディリータに冷笑を向けた。

「兄さんが嘘をついているとでも?」

「ああ、オレだったら、平民の娘を助けるなんてことはしないな」

ディリータは、暗い炎を吹くような目で、ぎろりとアルガスを睨んだ。

「なんだと……!」

アルガスは勝利者然とした足取りで、階段を下りてくる。

「聞いたぜ。お前、貧乏百姓の小倅の、親無し子なんだってな!」

「……!!」

ナッシュはディリータとアルガス、ラムザの顔をきよろきよろと見回し、目を伏せた。

ラムザとディリータの立場が、対等な友人同士ではなく、本来は

主従関係にあるということは知っていた。だが、ディリータのことは、ベオルブ家に仕える下級貴族の子弟だとばかり思ってきたのだ。ナッシュだけではない。アルガスもディリータの身分を、田舎貴族の息子か、もしくは、親の位は高くとも嫡出でないために他人の従者となっているのだと、思い込んでいた。……昨夜、ダイスダークの部下の騎士から話を聞くまでは。

「妹と二人で、花でも売って暮らしてりゃ良かったんだ。分不相応の特別扱いなんか受けてるから、バチが当たったのさ。

ざまあないぜ！」

「き、貴様ッ!!」

ディリータはアルガスを殴り飛ばした。

ラムザが背中から組み付いて、ディリータを止める。

「よせッ！ディリータ！」

「離せッ！畜生ッ、離せッ!!」

尻餅をついたアルガスは、血の混じった唾を吐き捨てると、

「フン、地金を出しやがったな。やっぱり平民は所詮、平民だ。選^{エリ}良教育を受けたって、下賤の本性は直りやしない！」

ディリータ、お前はここにいちゃいけないヤツなんだよ！わかるか、この野郎ッ！」

「言わせておけばッ!!!!」

ラムザが押さえていなければ、ディリータは剣の柄に手を掛けそうだった。

「やめろッ、ディリータ！」

アルガスもいい加減にしろッ!!」

アルガスは、狂乱の体のディリータを無視して、

「ラムザ、目を覚ませ。そいつはオレ達とは違う。わかるだろ、ラムザ。オレ達貴族とコイツは一緒に暮らしていけないんだ」

「侮辱しないでほしい。ディリータは僕の親友だ。兄弟みたいに暮らしてきたんだ」

「だからこそ、目を覚ませ。友達ごっこはもうおしまいだ。」

キミは名高きベオルブ家の御曹司、貴族の中の貴族だ。コイツと一緒にいちゃいけない。

……少なくとも、お前の兄貴達はそう思っているはずだぜ！」

ディリータはラムザを突き放した。

「お前みたいな貴族ばかりじゃない！」

俺はラムザを信じる！」

睨み付けたが、アルガスには飛びかからず、門へ向かって走る。

「待てっつーに！」

ガストンが追いかけた。

ディリータの荒ぶった声を聞きつけたアルマが、サーシャに付き添われて玄関口に姿を現した。

「アルガス。ディリータと喧嘩するために付いて来たのじゃないはずだ。

ティータのこと、可愛いって言ったじゃないか。君だって心配してくれたんだろう？」

ラムザはアルガスの手を固く握った。アルガスは、思わず後ろへ身を引く。

丁度、初対面の時と逆の格好だ。

「おい、おい……じゃあお前、例えば可愛い女の子だと思ったのが男でも、同じように好きでいられるってのか？」

「男女の別は、生まれつき神のお決めになったもの。だけど身分の線引きは、地上の人間が作ったんだ。もしも、絶対不可侵のものだとしたら……、兄さん達はそもそも、僕を弟とは認めて下さらなかったよ」

「……え？」

「貴族と平民の間の壁は、越えられないものじゃない。僕が存在自体がその証だ！」

ラムザは自分の胸を叩く。

「僕の母・ファティマールグリアは平民だ。金持ちの娘でも何でもない、親の名前さえわからない、尼僧院育ちの孤児みなしこだったんだよ」

「……！？^{ロマンダ}呂国系の……、それじゃ、水商売女の捨て子じゃないか！？」

「さあね。お祖母ちゃんがどういう事情で母さんを尼僧院に預けたのかは、会って聞いてみないことにはわからないよ」

「そんなことはどうでもいい。どこの韋駄鳥^{チヨコボ}の骨とも知れない平民の女の息子が、どうして伯爵家の御曹司に収まってるんだ！？」

「アルマと僕は公式記録上、父親の――バルバネスⅡベオルブの庶子であることになっているんだ。この意味がわかるかい、アルガス？」

七王国統一以前は、^{イヴァアリース}畏国でも一夫多妻が普通だった。

頻発する他国との戦争、また山賊や野獣との戦いなどのために男性の死亡率が高く、女性人口の方がずっと多かったのだから、自然なことだった。

正妻・嫡子が優先ではあるが、それ以外の妻子にも相続権があり、そうでなくては大半の家族の生計が立ち行かなくなる。

当時は人口に比して土地が充分に広く、家畜や家財の分与を受ければ、子供達はそれを元手に各々独立して一家を持つことが出来た。^{イヴァアリース}しかし、統一畏国王国が成立して人口が飽和すると、王侯貴族から農民に至るまで、土地の相続を巡る争いが激化した。

オムドリア？世王は、一夫一妻を唱えるミュロンド正教派を後押しすることで、骨肉相食む相続争いを減らそうとした。王自身、デナムンダ？世王の跡目を継ぐに際し、ミュロンド正教派教会を味方につけることで王位継承の正当性を主張したのである。

以後、庶子には父方の家系の家督相続権も財産相続権もなくなつた。

といっても、庶子が社会から全く排除されたわけではない。

正式な婚姻関係を持たずに子を為すことは、親に対しては恥ずべきこととされたが、生まれてくる子供達に罪はないのだ。

庶子は原則として、母方の家系の人間と見なされ、母方の親族か

らの相続権は認められた。ただし、元々女子の相続権は男子よりも優先順位が低い上に、妾になるような女性は夫や正妻よりも家格がずっと下なのが普通だ。庶子は宗教的倫理観から差別されがちな上に、経済的にも苦しい立場に置かれていた。

支配者である騎士階級が戸籍を作成することもあったが、租税の徴収や相続争いの調停を目的としており、主に土地の所有権者を明らかにするものだった。従って、父親と一緒に暮らしているが相続権のない庶子や、農地を持たず普段は都市に出稼ぎに出ている者とその家族等はしばしば、戸籍に登録されない”幽霊住民”になっていた。

より実状に近い”戸籍”を持っていたのは、教会である。教会での洗礼、結婚、葬式などの記録が、当時最も信頼のおける”住民台帳”になっていた。

まだ本人の意思確認が出来ない赤児に洗礼を施すことは、宗派間の不当な信者獲得競争の手段であるとして、批判されたこともある。だが中世においては、貧しさから、望まずに妊娠した庶子などは特に、捨てられたり売られたりすることもまだまだ多かったのだ。どんな子供でも地域社会の一員として登録し、共同体全体コミュニティの宝として守り育てられるようにと、教会は全ての子供になるべく早く洗礼を受けさせようとしたのだった。

さて、ラムザ達の父のバルバネスが、母のファティマに出会った頃には、ダイスダーグ達の母・マリーソフィアの喪の期間もとつくに明けていた。ファティマは第二夫人というよりは、後妻である。

宗教倫理上は、バルバネスが正式にファティマと再婚することに問題はなかったのだが――。

バルバネス達は、とある小さな集落の司祭に結婚の儀式を執り行ってもらった。ところが、それから一年と経たぬうちに集落は山賊に襲われ、司祭は亡くなり、バルバネス達の結婚を記した教会の記録も焼失した。

偶然か。それとも、まさか……？

二人の結婚に反対する者が、そこまで手を回したのか。山賊達を捕らえ、調べたが、そのような形跡は無かった。

考えすぎるな。とファティマには言ったものの、バルバネス自身は考え込まずにおれなかった。

改めて二人だけでひっそりと結婚の儀式をし直しても、同様の”事故”が起こる可能性は否定できない。そうなれば今度こそ、自分達にも責任がないとは言えなくなる。

矢張り、反対する騎士達、特に主君であるラーグ公を説得し、大きな教会で、多くの参列者を招いてきちんとした結婚式を挙げなければ、ファティマとその子供達を正式にベオルブ家に迎え入れることは難しいだろう。

だが、ファティマは既に身籠もっていた。じつくりと根回ししている時間はない。

一体、どうする――。

悩んだ末にバルバネスは、少なくとも子供だけでも確実にベオルブ家の一員とするために、ちよつとした”詐術”^{トリック}を用いた。

庶子は母の家系の人間と見なすという、先の”原則”には例外がある。捨て子や、出産と同時に母親が死亡したり行方知れずになったりして母の身許が不明な場合は、認知すれば父の家系に加えられるのだ。

戦乱などのために天涯孤独となる子供を一人でも減らそうという趣旨の例外則を、”悪用”したとも言える。が、多くの貴族の男性が、仮初めの恋から生まれた我が子の養育を放棄しているのに比べて、さほど罪深いことだろうか。少なくとも、親交のあったクラバーティン修道院の院長は、快く協力してくれた。

ラムザとアルマは、生後すぐに同修道院長に拾われ、附属の孤児院で育った。嘘ではない。

しかし、生みの母の乳を飲んで育ったこともまた、事実なのである。

なぜなら、その孤児院及び、隣接する施療院で、ファティマが働

いていたのだから。

ラムザとアルマは、母の名不明で、ベオルブの名字で公式記録に残っている。

これは当時としては、大変珍しい事例だ。^{ケース}

たとえ親子関係が明らかであり、父の家族と一緒に暮らしていても、庶子は通常、公式の文書には母の名字で記載される。

例えばリユカオンは、ローラント將軍の長男であることは父も家臣達も認めていても、母方の姓・ハーディーズで今に伝えられている。

母の名を明らかにできない、どのような事情があったのかはわからないが、バルバネスは子供達とその母——あるいは、母”達”かもしれないが——に並々ならぬ愛情を注いでいたのだろう。

ベオルブ家の後継者を確保したかっただけ、という無味乾燥^{ドライ}な見方もあるが、ならば何故、マリーソフィアが亡くなってから二十年近くの間、バルバネスは正式に再婚しようとしなかったのか？

公式記録ではない、信憑性の薄い噂話も多い個人の日記などの幾つかに、ラムザの母がルグリア村の出身である、と記したものがあ

る。

もし事実であれば、母の名を伏せた理由はおおよそ推察できる。ルグリア村は騎士の封地ではなく、ルグリア女子修道院の所領なのだ。生まれがルグリア村であるならば、ラムザの母は騎士の娘ではない可能性が高い。

もっとも、必ずしもそうとは言いつれない。薬草学や織物の技術で有名だったルグリア女子修道院に学んだ、良家の娘だったのかもしれない。あるいは、祖母が修道院の宿坊や施療院に滞在中に生まれた娘だったという意味かもしれない。

ただ、ラムザが畏国人^{イヴァリース}には少ない金髪だったことと、ルグリア村^{ロマンダ}が呂国人移民とその子孫の多い村だったことを考え合わせると、ラムザの母は村人の娘だったと考えるのが自然だ。

名もない村娘の何が、天下の北天騎士団団長の心を捉えたのか――？

それとも、逆なのだろうか。金髪のラムザはロマンダ呂国人の血を引いているのだろうという推測から、ドラコニア領内ロマンダで呂国系住民の集まるルグリア村の名前が挙がったのかもしれない。

フォボハム戦役の時に捕虜にした、あるいはラーナー海峡の海賊にさらわれてきた、ロマンダ呂国貴族の娘……という風な想像もできる。

なお、名前もわからぬラムザの母を、“ベスラの聖母”の伝説と結び付けたのは、筆者の全くの空想であり、何ら歴史的根拠はないことをお断りしておく。

何にせよ、バルバネスは母を明らかにせぬまま、ラムザとアルマをベオルブ家に迎え入れた。いつの日にか、彼らの母との結婚が公認されれば、親子は晴れて本当の家族になれるはずだったのだが……。

「残念ながら、両親とももう亡くなってしまったから……僕達兄妹の母の名の空欄は、永遠に埋まることはなくなってしまったけどね」

「そんな……ことが……あつていいはずがない！」
アルガスは服の上から、胸に掛けた数珠ロザリオをつかんだ。

「そんなにおかしなことかな？」

今の身分が固まったのなんて、せいぜいここ百年くらいの間の話さ。今の騎士階級の中にも、七王国時代に農民や町人から出世した家はざらにある。

それに、血筋っていうと注目されるのは、大抵父親の家系だけだ。身分の低い騎士が領民の娘を娶って、そのまた娘がもっと位の高い騎士と結婚して……なんてことを繰り返してるうちに、どんどん血は混じり合ってる。生まれ持った素質に差があるわけじゃない。

人と人を理不尽に隔てる壁を、父さんと母さんは越えていこうとした。

あり得ないはずの理想から僕は生まれ、兄さん達やドラコニア領の人達がそんな僕を受け入れてくれているから、こうしてベオルブ家の一員として暮らしてゆける……」

ラムザはもう一度、しっかりとアルガスの手を握った。

「アルガス。自分の目でよく見て。耳で聞いて。考えて……。平民だったら、デイリータとティータの何が今までと変わるっていうんだい？」

アルマと僕のこと、嫌いになるかい……」

「……」

見習い騎士達とアルマは、固唾を飲んでアルガスの答えを待った。と――。

「放せよ。汚らしい」

冷ややかに毒づいて、アルガスはラムザの手を振り払った。

「売笑婦ごときの血の混じった”雑種”が、正統な貴族に向かって偉そうに説教ぶっこいてんじゃねえよ。今の今までこんな紛いモンを仲間だと思ってた自分に、ヘドが出るぜッ!!」

ラムザの顔に唾を吐きかけて、アルガスは後ろも見ずに屋敷に駆け込んだ。

「アルガス君っ……!!」

サーシャとアルマにぶつかったが、謝りもせず廊下を突っ走ってゆく。

ナツシュは手巾でラムザの頬を拭いた。

「ひどいや……。気にしちゃいけませんよ、ラムザ君! 気にしちゃ……」

「僕は平気だよ、ナツシュ。これぐらい、よくあることさ。どうして君が泣くんだい」

ナツシュは緑灰色の団栗眼から、ぽろぽろと大粒の涙をこぼしていた。

「よくあるだなんて……こんな……、こんな……!」

貴族だといっては唾を吐かれ、平民だといっては唾を吐かれる。

「ぼく、やっとわかった気がします。ラムザ君がみんなに優しい訳が……」

しゃくり上げ、鼻をすすりあげながら、ナツシュは話した。

「ラムザ君、覚えてますか……」

入学して一週間くらいの時に、ぼく、家から届いた荷物を、コワイ上級生の人達に屋上からばらまかれちゃって……」

ナツシュの祖父は、ガリランド王立魔法院アカデミーの学長だ。市内の一等地に実家があるのだが、ナツシュは士官学校アカデミーの級友達と同じ学校生活を送りたいがために、必要最小限の日用品だけを持って寮に入ったのだった。

そこに、心配した母と乳母が、山のように衣類や文房具を送りつけてきた。ガストンやサーシャのような貧家の子弟が多い中で、ひんしゆくを買ったのは当然である。

「いい気味だって、笑って見てる人が多かった……それか、先輩方を怖がって、見ないふりするか……」

すぐく、情けなくて……これからちゃんと、みんなの仲間に入っていけるのか、ふ、不安だった……。

でも……ラムザ君が、すつと横に来て、拾うの手伝ってくれて……。とても……とっても、励まされました……」

ナツシュから事情を聞いたラムザは、分けられる物は級友達への挨拶回りの品として配ってしまえばいいのではないか、と提案した。ナツシュが賛成すると、近くにいた同級生達にも協力を呼び掛け、荷物を拾い集めた。

ナツシュ個人の物ではなく皆の物、という意識が働いたのか、猫ババする者もなく、すぐに運河や塀の上に落ちた物まで全て回収された。

「女子寮の木の枝に引っ掛かっちゃったのも、ラムザ君が取ってきてくれたんですね。」

聞く所によると、実は女子の先輩方に、とってもヒトには言えない無理難題と引き換えに、敷地に入れてもらったのだとか……。

その……ラムザ君がぼくを恨む人だとかは、思わなかったですけど……。その後、話し掛けづらくて……。とうとう一年間、お礼も言えなくて……」

アルマとサーシャが怪しんでいるので、ラムザは弁明した。

「そんな、とんでもないことじゃないって。ちよつと女装させられて、マルガリータ先輩の知り合いの舞踏会パーティーに連れて行かれただけさ。……他の人には言わないでよ」

「その話、後で詳しく聞かせてもらおうわよ」と、アルマは一方的に指切りをする。

「うわああっ、ごめんなさいいっ!」

「気にするなよ」

ラムザの方が、ナツシュを慰めている。

ナツシュは手巾ハンカチで鼻をかんだ。

「ラムザ君は……顔だけ見ればぼくよりよっぽど男っぽくないけど、いつも元気が良くて、のびのびしてて……ずっと、ぼくの目標だったんです。」

バルバネス様に憧れたのも……。

安全な所において、理想論を唱えて他人を非難することは、いくらでも出来ます。お祖父様や父様が前線に立てば、兵をまとめ民を守る、どころか、自分の身一つ守りきれなかったに違いないんです。五十年戦争終わり頃の戦地は、まるっきりひどい無法地帯だったそうですね。

でもバルバネス様はいつでも、理想と現実の間を埋める努力を怠らないお方だったと、伺います……。

姿形だけじゃなくて……ラムザ君は本当に、お父上にそっくりです!
す!

長衣ローブの袖で涙を拭い、ナツシュは微笑わらった。

「ぼくがラムザ君に惹かれたのは、”伯爵家の御令息”だからじゃないかもしれません。」

ぼくは……優しくて勇気のあるラムザ君が、大好きです……」

「ナツシュ……。そんな、立派なものじゃないよ。でも……有難う」
サーシャはしみじみともらい泣きしている。

「そうだったのね……。ナツシュ君が心に決めた人って……」。

頑張っ！心からの愛があれば、性別だって必ずしも、越えられない壁じゃないと思うわ。あたしは応援してあげるわよ」

「は……？こ、越える気ないって！好きって、その、尊敬出来る友達として、って意味であって……！」

ナツシュは泡を食った。

「ああつ、こんな話してる場合じゃなかったですね！それで、テイタさんは……？」

そこへ、三人の女中の少女達が、革の荷袋を抱えてきた。

「若様あ！ご用意出来ましたですう」

「アニー、ベティ、キャリイ。有難う。無理を頼んですまなかったね」

革袋には、携帯食や縄や毛布など、旅に必要な品々が詰まっているのだった。

「そんなあ、お礼なんてえ……接吻一つで」

「ん」

ラムザは三人の少女達の頬に軽く口付けして回った。

女中の少女達は手を取り合って騒ぐ。

「どうしよっ？ね、どうしよお！ほんの冗談だったのにー！！」

「あたし、もお一生ほった洗わなあーい！」

「……」

一番年下のキャリイは、頬を押さえて、目を開けたまま卒倒した。

「きゃっ！？しっかりしてえ！」

アルマはラムザの脇腹をつねろうとした。

（この重罪人っっ！！）

が、その時はもう兄は隣にいない。ビックスに手伝われて、軽装鎧を着込んでいる。

「賊の残党はジークデン砦に結集している模様であります。北に行

く道はもはや封鎖されておりますから、東に回り道するしかないはずであります」

「そうか……。もっとはっきり、どの道を通ったかわかればいいんだけど」

更にウェッジが、毛艶の良い、若い韋駄鳥チヨコボを三頭引いてきた。

「御曹司！犯人どもは昨日の午後、ハルバラ峠を通ったそうッス。

峠の守備隊と交戦して、ティータさんを盾に逃げたって話ッス。確報ッスよ！」

「ハルバラ峠か。わかった！」

ラムザはパシッと拳を手の平に打ちつけた。

「ところで、ウェッジ。それ、何の冗談？」

ウェッジは春祭りの時に使う、剽軽な仮面をすっぱりと頭から被っていた。

「……じ、自分、御曹司に合わせる顔がないッス。アルマ姫とティータさんが危ない時に、ぶっ倒れてて何にも出来なかったッス。面目ないッス！」

ラムザが仮面を取ると、くしゃくしゃに泣き濡れたウェッジの顔が現れた。

「仕方ないだろ。知らないうちに毒を吸い込んだんだから。それより今度こそ、僕の留守中アルマを頼むよ」

「御曹司っ……！いい、命に代えてもお守りするッス……！」

アルマは首を振り、ウェッジに手巾ハンカチを渡す。

「やめて、命に代えてもだなんて。これ以上、誰も犠牲になってほしくないの。死んじや駄目よ、ウェッジさん」

「姫様……！じ、自分なんか……勿体ないッス！姫様のためなら、たとえ火の中水の中……ッス……！」

ウェッジはアルマの手巾ハンカチで、ちーんと鼻水をかんだ。

ナツシュは目を丸くした。

「ラムザ君、これって……！」

「ダイスダーグ兄さんは決して、嘘をおっしゃってはいないと思う。」

だげど兄さんは重職にあつて、いかなる時も公務を優先させなくてはならない。

人質一般に対する人道的措置は取っても、いよいよという時になったら、身内だからといって特例には出来ないと思うんだ。

だから、自由に動ける僕がティータを助けに行く!」

？－5－〔2〕 ベオルブ邸 玄関前 ？風は壁を越えて（後書き）

今回のサブタイトルは、私の好きな歌「EAST ASIA」
（中島みゆき）の一節に因んで。

（歌詞そのまんまでなければOK……？？後で変更するかもしれない
せん。11／7／30）

「ディリータ！待ちやがれ！」

門の手前で、ガストンはディリータに追い付いた。

「てめーにも、ラムザ以外に大事なもんがあつたんだな」

「！」

その一言で、ディリータの足は止まった。

ラムザ以外に大事なものはある。だが、ラムザ”以上に”大事なものは無い。たとえば、唯一人の妹であっても。

（ディリータ……！）

兄の心を知ってか知らずか、ディリータはよく言っていたものだ。

――兄さん、心配しないでね。わたしはね、こうしてアルマとラムザ様のお側で過ごさせていただけのだけで、夢のように幸せなのだから、兄さんはいつでも、兄さんのいいと思ったようにして。わたしのことは気にしないで。……

黒死病大流行の頃は、孤児院も満足に機能せず、身寄りを無くした多くの農民の子供達が都市の路上に迷い出た。すぐに餓死・凍死したり、奴隷商人に捕まって売られたりした者もいれば、年端もゆかぬうちからスリや万引き、売春などで糊口をしのぎ、やがて犯罪者として処刑台に消えた者もいた。

ディリータ兄妹も、ラムザ達の父のバルバネスが保護の手を差し伸べてくれなければ、そうなっているもおかしくなかったのだ。その恩に報いるためには、彼らは何を差し置いても、ラムザ兄妹の身を優先しなければならない。

ディリータも恐らくは、精一杯アルマを守ろうとして、一人さらわれる結果になったのではないか。

「ガストン。俺は……」

「責めてんじゃねーよ。いい傾向だぜ。いっつもかっつもクソ落ち着き払っててめーにも、人情つつうもんが人並みにありやがるじ

やねーか。何か安心したぜ、正直」

「……」

「けど、こんな時こそ、てめーのクソ計算高い脳ミソの出番だろーが。頭冷やして、妹取り返す算段立てねーと」

答えは出ている。

「俺は……ティータを……」

助けに行くことは出来ない。

断腸の思いでそう言おうとした時、ラムザとウェッジが韋駄鳥チヨコボを引いてきた。

「ディリータ！ 犯人達は旧マンダリア街道を回り道して、ジークデ
ン砦に向かっているそうだ。ティータを助けに行こう！」

ディリータは喉を詰まらせた。

（ラムザ。駄目だ！）

ディリータがラムザの側を離れるべきではない。まして、ラムザ
自身がティータの救出に乗り出すなど、危険ばかり多くて何の益に
もならぬことだ。

「さあ、早く着替えて！」

「ああ。行こう、ラムザ……！」

胸の内とは裏腹に、ディリータの口はそう言い、手は私服と軽装鎧
とを受け取った。頭と体が別々に動いているようだった。

「俺も行くぜ、ラムザ。いいな？」

と、ガストンが有無を言わさぬ口調で言った。

「君ならそう言うってくれると思った。心強いよ、ガストン」

「おう、任せとけて！」

ディリータとガストンは茂みの陰で、群青色の軍服を脱ぎ、私服
に着替える。

アルマは、ラムザの左手首に藤色の布を巻いた。

「これ、持って行って。ティータの一番お気に入りリボンの結び紐よ……」
アルマは今まで、ティータの無事を祈って身に着けていたのだろう。

「お願い、今だけでいいの。ティータの騎士ナイトになってあげて！」

「勿論だよ。わかってる」

ラムザは藤色の結い紐リボンに口付けした。

(全っ然わかってないくせに……)

アルマは無性に、兄をなじりたくなった。

「ね……、あたし達の荷物と韋駄鳥チヨコボは？」

と尋ねるサーシャとナツシュの肩に、ラムザは手を置いた。

「ごめんね。今回は、君達を連れて行くわけにはいかないよ」

「そんな、どうしてですか！？ ぼく達は、それは、ガストンと比べたら、友達になって日は浅いですけど。ティータさんとラムザ君を心配する気持ちは一緒ですよ！」

「そういう問題じゃないよ。君達の体力じゃ、ついてこれられない。ここまで帰ってきただけで、もうへとへとだろう？」

急ぎの旅なんだ。その上、骸旅団の生き残りの精鋭と直接対決するかもしれない。命を落とすよ。帰ってから咎めを受けるどころの話じゃない」

「でも……でも……」

「気持ちだけで十二分さ。有難う」

ナツシュの目から、また涙が溢れた。

「気持ちだけじゃ、何の役にも立たない！」

「ううん。力になるよ。その気持ちがきつと、ティータと僕らを守ってくれる。気休めじゃないよ、これは」

手早く身支度を済ませたガストンが、北天騎士団の制服をナツシュに放った。

「ぴーぴー泣く暇があったら、教官センコーどもへの言い訳の一つも考えといてくれや」

「あつ、そうだね！ ラムザ君達が退学になったりしないように、上手く話しておきます。署名集めでも何でもやります！」

「はは、頼むよ」

ガストンとディリータは韋駄鳥チヨコボにまたがった。ラムザも韋駄鳥チヨコボに乘ろうとした時、

「お兄ちゃん！」

アルマがその背に抱き付いた。

「お兄ちゃん……」

「どうしたんだい、アルマ。急に赤ちゃんみたいになっちゃって」
アルマは今日も、小さな子供のように、縫いぐるみの”モグちゃん”を持ち歩いていた。

ファティマが死んだ直後も、こうだった。

「忘れないで……」。

ダイスダグ兄さんもザルバグ兄さんも、優しくしては下さるわ。でも、わたしの”お兄ちゃん”は一人だけなの……！」

「アルマ。いけないよ、そんなこと言っちゃ」

ラムザ一人が”お兄ちゃん”で、他の二人が”ダイスダグ兄様”と”ザルバグ兄様”ではよそよそしいから、全員”兄さん”で統一してはどうか——と提案したのはザルバグだった。

「だって、本当のことだもの……」

「うん。わかってるよ。僕のアルマ……」

ラムザは妹の頭を撫でた。

「そうだ。”幸せの硬貨”^{コイン}、持ってる？」

^{ドラゴン}竜の牙と並んで男の子の欲しがる^{ラッキーアイテム}幸運のお守りが、古代の^{アダマンタイト}金剛鋼硬貨である。

^{アダマンタイト}金剛鋼は、十三世紀の工学・魔学技術では铸造不可能な金属だった。紀元前に铸造されたものや天然に産出するものを切り出し、研磨して、武具や工具、装飾品に加工していた。

ラムザがマンダレーナ村に住んでいた頃、黒銀色に光るロンカ文^{アダマンタイト}明時代の金剛鋼硬貨を、バルバネスが土産にくれたことがあった。

ミュロンド島經由で海路からライオネル領に旅した帰途、機工都市ゴークで、古代遺跡からの発掘品を買ってきたのだ。

「欲しい！アルマも欲しい！」

と、アルマは羨ましがった。

「あらあら。じゃあ、帽子はいらないの？」

アルマへの土産は、外洋貿易の玄関口・ウオージリスで見つけた、真っ白でふわふわと毛の長い、^{アラクーナ}楽国兎の毛皮の冬用帽子だった。

「……。硬貨^{コイン}も欲しいんだもん！うわあああん！」

「欲張るんじゃないですね！」

アルマは声を上げて泣いたが、ファティマは取り合わない。アルマが、何も金剛鋼硬貨^{アダマンタイト}に興味を持ったのでないことを見抜いている。幼いアルマには、兄が大事にするものは何でも、価値ある宝物に見えるらしいのだ。

蛇の抜け殻やら、豆鉄砲やら、アルマが涎を垂らしているのでラムザが譲ってやると、結局三日と経たずに飽きて返してしまう。

しかし、それをラムザが大事そうにしていると、また欲しがる。そんなことの繰り返しだった。

その辺りの対応に慣れていないバルバネスは、娘の機嫌を取ろうとする。

「よしよし、泣くな。次に来る時には、アルマの分も探してきてやろうな」

「あ・な・た。こんな小娘の言いなりに貢がされて、恥ずかしいとお思いにならない？」

「こらこらファティマ、その言い方は、ちと問題があるぞ」

「言い方はともかく、一々泣き落としに引っ掛かってたら、この子はいくらでも図に乗るんですから！」

「うーむ……」

ラムザは、ちょっと考えてから、硬貨^{コイン}をバルバネスの手に渡した。

「父さん、半分こして下さい！」

「半分こか、成る程な。よしよし、じゃあ半分こにしてやろう」

”半分こ”はラムザの好きな”芸”だった。宙に放り上げられた林檎や亀甲果は、きれいに真っ二つに割れて父の手に落ちてくる。

アルマと二人で、また”半分この半分こ”にしてディリータ達兄妹と四人で、分け合って食べる果物やお菓子の味は格別だった。

「まあ、ラムザ。いくら父さんでも、アダマンタイト 金剛鋼の硬貨は斬れないわよ」

「おっと、儂を誰だと思っているね？」

いつもはファティマに、

――何斬ったかわからない剣で、口に入れるもの切らないで下さいな！

と怒られるので、”半分こ”にはオリハルコン 虹輝鋼のナイフ 小刀を使っている。が、この時はバルバネスは、愛用の名剣・”護法剣”ディフェンダー を抜いた。

「ハッ！」

気合い一声、キン、と冴えた音がした。

「あら！流石は”風神”バルバネス様」

ファティマが感嘆の声を上げる。

バルバネスが節くれだった手の平を開くと、黒銀色の硬貨コインは切り口も鮮やかに、二つの半月の形に分かれていた。

「わあっ！有難うございます！」

ラムザは二つになった硬貨コインの片方を、泣きべそをかいている妹に握らせる。

「ほら、アルマ。半分こだぞ」

「半分こ！お兄ちゃんと半分こ！」

「うん、半分こだねー」

アルマは泣き濡れた頬をラムザの頬に押し付け、硬貨コインの切り口を合わせて、上機嫌にキャッキャッと笑う。

「これでいいのかしら？」

ファティマは首を傾げた。

滅多なことでは切れない、壊れないからこそ、固い友情や愛情の絆、困難に挫けない強い意志の象徴シンボルとして幸運のお守りになっている、アダマンタイト 金剛鋼の硬貨なのに――。

「いいんじゃないかね」

バルバネスは子供達を両腕に抱え込んだ。

「ずっと、兄妹仲良くするんだぞ。嬉しいことも悲しいことも、何

でも二人で分け合ってな……」

「持ってるわよ」

と、アルマは”モグちゃん”の帯剣・”エクスカリパー”の鞘に入っていた、硬貨コインの片割れを見せた。

「貸してくれるかい、お守りにさ」

ラムザはそれを、自分の持っていた半分と一緒に、家紋入りの方位コン磁針パスの蓋の中に収めた。

「きつと、返しに戻ってくる。ティータを連れてね」

ラムザは力強く、妹の両肩を叩いた。

アルマは、昨日ティータが誘拐されてから、多分初めて微笑んだ。

「うん……！わたし、信じて待ってる！」

アルマはラムザの胸に飛び込んだ。熱い涙が兄の肩にこぼれ落ちる。ラムザも、妹をきつく抱き締めた。

ディリータの乗った韋駄鳥チヨコボが、せわしく鼻を鳴らす。

兄妹は口付けを交わして、離れた。

ラムザも、ひらりと鞍に飛び乗る。

「ラムザ兄さん。ディリータ。ガストンさん。気を付けて！」

「ティータさんを助けてあげて下さいね……！」

「無事に帰って来てね！」

アルマとナツシュ、サーシャが手を振る。

「「ああ！」」

少年達は韋駄鳥チヨコボの腹を足で締め、発進する。

三頭の韋駄鳥チヨコボは並足から、すぐに速歩になって、ベオルブ邸の門を後にした。

ラムザ達がイグーロスの街の城門まで来ると、番兵達が槍を交差させて道をふさいだ。

「御曹司、お戻り下さい！」

「ラムザ様がいらしてもお通しするなどの、ザルバッグ様からのご

命令です！」

ザルバッグには、ラムザの行動は予測済みだったようだ。先回りさせていたのだ。

「どうしても通る……と言ったら？」

「首に縄をかけても連れ戻せ、と……」

六尺棒を構えた番兵達が、じりじりと三人の少年を包囲する。
と、そこへ。

わーっと鬨の声を上げて、青い袖無し胴着を羽織った少年達の一団が、番兵達に体当たりをかけた。

「こらアッ、君達！？」

ガストンの悪友達だ。

「でかしたッ！！」

と、ガストンは快哉を叫んだ。

三人にとっては思いがけない援軍だった。

城門に駆け寄る三騎を止めようと、詰め所から新手の兵士達が飛び出してくる。

すると、今度は。

「命支える大地よ、我を庇護したまえ。止めおけ！」
不^{ドン}動”ッ！”
城壁の上から呪文の声が降ってきた。

「何ッ！？」

先頭の数名の足が、地面に吸い付けられて離れなくなり、後に続く兵士達が将棋倒しに引っ繰り返った。

城壁の上のウォーゼルが合図に杖を振ると、

「突撃ーッ！」

別の士官候補生達の集団が兵士達に襲いかかった。こちらの指揮を執っているのは、胡桃色の巻き毛の少年だ。

「ラムザ君、今のうちに行きたまえ！」

「セヴィー！有難う！」

「礼は後だ。早く！」

城壁の上で警戒に当たっていた士官候補生達も、我先に梯子を滑り

下りてきて加勢した。

もつれ合って乱戦を繰り広げる兵士達と少年少女達の、青い波間を漕ぎ分けて、三頭の韋駄鳥チヨコボは城門に近付いてゆく。

「跳ね橋を上げろッ！」

検問所の所長が怒鳴った。

「させるかあッ！」

士官候補生達は、門の左右の把手ハンドルをつかんだ兵士達を羽交い締めにする。

「ハイッ！」

三人の少年を乗せた韋駄鳥チヨコボ達は、斜めに上がりかけた跳ね橋を駆け上り、堀を飛び越えた。

すぐさま、

「よし、巻き上げろッ！」

と、セヴィが号令した。

士官候補生達は把手ハンドルを奪い、ラムザ達に追いつくとする兵士達を通すまいと、力一杯、跳ね橋の鎖を巻き上げた。

「ラムザ！」

見上げると、有志一同からの餞別——非常食おやつや傷薬、魔法水エーテルなど——の詰まった袋が、城壁の上から堀を越え、弧を描いて手の中に落ちてきた。

「ラムザくん、帰ってきてねーっ！アタシのために！」

「ガストーン、気張ってこいや！」

「ディリーターツ、元氣出せーっ！」

級友達達が大きく手を振る。

三人の少年達は一度だけ手を振り返すと、二度と振り向かず、韋駄鳥チヨコボを疾駆させた。

「一体、何事だ！この騒ぎは！？」

押っ取り刀で駆け付けた、イグーロス市の警備隊長の前に、セヴィが進み出た。

「僕が代表者です。ご処分はいかようなりと」

ゴルターナ公の縁者である自分を、ラーグ公といえどもおいそれとは処罰出来ないことを承知で、セヴィは余裕綽々、澄まし顔だ。

？－5－〔2〕 ベオルブ邸 玄関前 ？藤色の結び紐（リボン）（後書き）

城門のシーンは、単純な”友情の美談”のつもりではありません。
セヴィ達のやり方には、ちよつと問題があると思います。どの辺が
？……という話は、第6章でデイリータ君から。

？－5－〔3〕 天翔る白竜 ？アルマの戦い（前書き）

「アルマの”お兄ちゃん最強伝説”！その2」です。「暴れん坊御曹司ラムザ君・第2弾」でもあります。（第1弾は2－〔4〕？のVSガストン戦ね）

今回はちょっとヤバげなシーンを含みますので、電車の中等ではお読みにならない方がいいかものです。

？－5－「3」 天翔る白竜 ？アルマの戦い

ベオルブ邸の屋上で、アルガスは手すりにもたれて、風に吹かれていた。

「アルガスさん。こんな所にいらしたのね」

アルマが非常階段を上ってきた。

のろのろと、アルガスは振り向く。

アルマは寂しそうに微笑んだ。

「わたしとも、もう口を利きたくないかしら。ラムザ兄さんと同じ、半分平民の血を引いてるんですものね」

アルガスは首を横に振る。

「一人にしておいてくれよ」

背中を向けたアルガスに、アルマは語りかけた。

「アルガスさん。少し聞いて下さる？」

アルガスさんがどう思ってたっしやるかわからないけど、ラムザ兄さんは、誰にでもあんな話をする人じゃないわ。話したって通じっこない相手には、自分の手の内心の内をさらけ出して見せたりはしない。

あなたのこと、お友達になれる人だっと思ってたってことよ」

アルガスは、姉の形見の数珠を、所在なげに手の中でいじり続けていた。

「……」

「わたしはラムザ兄さんを信じてるわ。だから、あなたのことも信じる」

アルマはアルガスの隣に並び、横顔を見つめた。

「ラムザ兄さんと仲直りして。一緒に、ティータを助けに行つてあげて」

アルガスはアルマと目を合わせず、苛々と手すりを叩く。

「どうして、オレがそんなことしなくちゃいけないんだ。何の得が

あるっていうんだよ」

「何も。何の得にもならないわね。

誰かがお金や勲章をくれるわけじゃない。ただ……」

「ただ？」

「ラムザ兄さんはとても喜ぶわ」

アルマは風を吸い込み、そして吐き出した。

「それだけよ！

誰も強制しないし、ご褒美も出さない。いいえ、そうね、ラムザ兄さんを手伝った方が、私闘に加担した科で処罰されたりするかも。だけど、もしも……そういう損得よりも、ラムザ兄さんと友達でいたいと思う気持ちを大事にして下さるなら、わたしも、とても嬉しいわ」

アルガスは、ようやくアルマの目を見た。

カラム
餡色の瞳で、アルマはにこりと笑う。瞳の色は違えど、兄と、また母とよく似た微笑みだった。

「あのぐらい、ラムザ兄さんは根に持ったりしないわよ。わたしもね。よくあることですもの。

この館の人達だって、みんながみんな、ラムザ兄さんとわたしに好意的なわけじゃないの。でも、あなたがラムザ兄さんに助太刀して下さるって聞けば、快く協力してくれる人はいっぱいいるわ」

非常口の扉をぐりかけて、アルマは言い置いた。

「わたし、ラムザ兄さんの部屋にいるわ。決心がついたら、いつでもわたしにおっしゃってね」

赤い不織布の上履きを履いたアルマは、ほとんど足音を立てずに階段を下りてゆく。
フェルト

屋上に取り残されたアルガスは、何度も首を振り、舌打ちをし、くすんだ金髪をかきむしった。

「あいつには困ったものです」

ザルバッグはダイスダーグの枕元に来て、報告した。

「城門での騒ぎは、ラムザとディリータの計画ではありません。
士官学校生達アカデミーが自発的に蜂起した模様です。」

あいつは、余程友達に恵まれたようすな」

主謀者だと名乗り出たセヴィは、ベオルブ家が仕えるラーグ公家
とは対立関係にある、ゴルターナ公家の縁戚なのである。

（危ない橋を……）

軽傷とはいえ、番兵達に負傷者も出た。ラーグ公配下の騎士の子
弟ばかりであれば、立派な暴動として軍法にかけるところだ。しか
し、ラーグ公こそ、本来何の権限があつて士官学校生達アカデミーを城下に”
拘束”しているのか——という弱味を衝いてきた。

騎士団側に事を荒立てることは出来まい、と踏んでのことだろう
が、少年達には何の益も無い綱渡りだ。ただ、友ラムザに意志を貫かせて
やれる、ということの他には——。

振り返れば、ザルバッグ自身の学生時代には、打算や遠慮拔きの
友情など幾らも感じたことはなかった。

（矢張り、父上の遺志を継ぐのはお前だ）

ザルバッグは、ラムザに次代のベオルブ家の家督を譲りたかった。
生涯独身の誓いを立てたのも、家臣達の無用の争いを避けるため
だ。

（だからこそ、軽々な行動は慎んでもらわねばならぬ）

ダイスダーグが口を開いた。

「今回は、まさかお前がそそのかしたのではあるまい」

「まさか。ランベリーの領主殿のお命は国家の大事ですが、幼馴染
みの娘一人の命は全くの私事。辛くともその程度の分別はつく奴だ
と思っていました。まだまだベオルブ家の男子としての責任が自
覚出来ていないと見えます。見つけ次第イグーロスに送り返すよう、
各地の砦に通達しました」

「よい、構うな。行かせてやれ」

「は？しかし……」

「ラムザのことは、私に考えがある。任せてもらおう。お前はウイ

ーグラフを討ち取ることに専念しろ」

「はっ……。兄上がそう仰るのでしたら」

ザルバッグはダイスダーグの部屋を出た。

廊下の硝子窓^{ガラス}の破れに、応急に板が打ちつけてあるなど、屋敷の所々に襲撃事件の爪跡が残っている。

（今度はティータか……）

四年前の、ベスラ要塞での一幕が、痛ましくザルバッグの脳裡に甦った。

――ザルバッグ様。ラムザとアルマをお願いいたします。

見る影もなく垢付き痩せ衰えていても、黄金色の髪に縁取られた顔には、“聖母”の名に相応しい慈愛と威厳に満ちた微笑がたたえられた。

――北天騎士団とバルバネス様に栄光あれ！必ずや、祖国^{イヴァリース}畏国の平和を勝ち取られんことを！

ファティマの笑顔があまりにも晴れ晴れと輝いていて、宙に走り出る足に何のためらいも無かったので、城壁を蹴った彼女の背に翼が生え、風に抱き止められてこちら側に舞い降りるかに思われた。

だが、そんな奇跡が起こるはずもなく……。

（ファティマ殿……）

ザルバッグは拳を握り締めた。

（同じ結末には、せぬ）

アルマは縫いぐるみの”モグちゃん”を抱えて、ラムザの寝台^{ベッド}にうつ伏せに寝そべった。

アルマの部屋は綺麗に片付けられて、襲撃事件の前と変わらなかったが、ティータが戻るまでは、自分の部屋で落ち着いていることは出来そうになかった。

（今、わたしに出来ることといったら……）

”何もしないこと”。屋敷に籠もり、なるべく人前に姿を現さないことだ。当分、イグーロス貴族学院も休もう。

騎士団内部には、誘拐されたのは令嬢アルマではなく侍女ティータだ、という情報が行き渡っている。犯人達が伝え聞けば、人質としては”役立たず”なティータを解放するよりも、斬り捨ててしまふかもしれない。だが、アルマが姿を隠しておれば、矢張り本当は誘拐されたのはアルマなのではないか……という噂が立つだろう。犯人達がティータをベオルブ家の令嬢だと信じてくれれば、その分だけティータの身は安全になる。

友人知人達にも心配をかけることになるが、仕方あるまい。

今はあまり人に会いたくないのも事実だ。特に、貴族学院がっこうに行けば――。

気の毒がられても余計に気が滅入るだけだ。まして、さっきのアルガスのように、『平民のくせに貴族の真似事をしているから天罰が下った』式の発言をする者がいれば、口喧嘩には自信のあるアルマとはいえ、やり返すにも、やり過ぎすにも氣力を消耗する。

本当は、狭い屋内に閉じ籠もっていたくはない。母を亡くした直後は、ラムザに頼んで、よく草原や湖のほとりに連れ出してもらったものだ。広い天地の間で、風の音や鳥の声を聞いたり、兄と肩を並べて草笛を吹いたりするうちに、心が澄んで鎮まっていた。

しかし、屋敷の中にいるしかないとなれば、一番心安らぐ場所はここ以外に考えられなかった。

城下屋敷のラムザの部屋は、ほとんど使われておらず、あまり生活臭がしない。それでも、どことはなく兄の息遣い、眼差しが感じられる。

長持の蓋を開けると、ファティマの調合した芳香剤ポプリの香りがした。上着を引っ張り出して、肩に掛けてみる。

アルマのよりは一回り大きいが、父や長兄、次兄に比べれば、ずっと寸法が華奢だ。

この細い腕が、いつもアルマを包み、守ってきた。

思春期に入ってからぐんぐんと父に似てきたラムザだったが、ご

く最近まで、男装の少女としか見えなかったものである。

しかしひとたび剣を手を取れば、ほっそりとした五体は鞭のよう
にしなやかに力強く、敵を打ちのめす。

今年の夏ガリランドで開催された、恒例の王立士官学校六校対抗
の剣術大会でも、少女のように優美な姿のラムザが勝利を収める度
に、観戦席は歓声と溜め息に溢れた。

二人の伯母・プリマヴェーラ、エストレーラと共にラムザの応援
に行ったアルマも、一試合毎に惜しめない声援と拍手を送った。

王の代理として臨席したルーヴェリア王妃から、準優勝の栄冠を
授けられる兄を、惚れ惚れと誇らしく見守ったものだ。

ところが、一刻も早く祝辞を述べようと控え室へ下りてゆくと、
他校の選手達の陰口が聞こえてきた。

「矢っ張り毎回、主催校が有利なんだよな」

「あの女男にかすり傷でも負わせたなら、観客が黙っちゃいないだろ。
まともに打ち込めるかよ」

「あの顔でラーグ公の息子たらし込んでただけあるぜ」

「色仕掛けでバルバネス將軍の妾に納まった端女の子なんだとよ。
さぞかし、仕込みがいいんだろうさ」

よっぽど、飛び出して言い返してやろうかと思ったアルマ
を、そろりと後ろから忍び寄ったラムザが羽交い締めにした。

「立ち聞きは感心しないな」

「……っ」

ラムザはアルマの口を押さえたまま、ずるずると妹を人気無い場
所に引きずっていった。

「……兄さんっ。悔しくないの？あの人達、母さんやハル様のこと
までバカにして……！」

「負け惜しみを言う余地くらい残しておいてあげた方がいい。僕、
女顔で良かったなあ」

へらへらと笑っていられるラムザの神経が信じられなかった。兄
が、事なかれ主義の意気地無しだったかと思うと、情けなかった。

アルマは御機嫌斜めで、試合後の親睦会の時、わざと兄から離れて立っていた。

「うわっ、ラムザが女装してる！？」

「バカね、妹さんよ。可愛いー」

「一曲踊っていただけますか？」

「こら、抜け駆けするな！」

アルマの周りにはたちまち人だかりが出来て、近寄りたくともラムザに近寄る隙がなくなってしまった。

ふと気が付くと、一緒にいたはずのティータがいない。

ラムザとデイリータを取り巻く少女達の輪の中にも、見当たらなかった。

大広間をくまなく見渡すと――、

ティータの結い紐リボンを持った少年が、入り口の帳の陰カーテンから手招きして、すぐ廊下に消えた。

アルマも廊下に出る。

「ついて来い。騒げば、黒髪の娘がどうなっても知らんぞ」

「……」

「俺を睨んでも無駄だ」

「そう。あなたはただの下っ端バシリってわけね」

「黙って来い！」

鼓動が速くなっていた。が、アルマはあくまでも堂々と、貴婦人然として少年について行った。

韋駄鳥チヨコボに乘せられて連れて行かれた先は、元は貴族か豪商の別荘だったらしい、郊外の廃屋だった。

「あーらあら、素敵なお屋敷ですこと……。お招きに預かり嬉しゅうございますわ！」

親友のティータまでご一緒させて頂けるなんて、お心遣いに感謝いたします」

アルマは優雅に、大仰に御辞儀をした。

ティータを人質に取った十余名の少年達の頭目^{リーダー}には、見覚えがあった。

今日の試合で何回戦目かに、ラムザに敗れた選手だ。

ラムザを精緻な象牙細工に喩えるならば、彼は、凸凹の軽石を荒削りにした彫刻のような、とても言おうか。美男子だと言えば、世辞でも喜ぶどころか、嫌味と受け取って怒るだけだろう。いかつく大作りで、そばかすとにきびでいっぱい顔は、ラーグ公の長男・ハールーシャを思い出させた。

しかし、顔形は似通っていても、人相というのは表情次第でこうも違って見えるものだろうか。

ハールーシャは、そばかすも可愛く思えるような、？刺とした人好きのする笑顔を見せる少年だった。だが目の前の少年はアルマの口上に、虎狼のように残忍な光を目に浮かべ、荒みきった嘲笑を返したのみだ。

人は、微笑みかけられれば微笑むのでますます好かれ、しかめっ面をされればしかめっ面をするのでますます嫌われる。

彼も、子供の頃からこの御面相だったとすれば、相当に損をしてきたことだろう。

ハールーシャの場合は、ドラコニア城に来てラムザやオルキム師^{リセット}に出会ったことで、悪循環が解除された。

だが彼には、微笑みかけてくれる人はいなかったのかもしれない。

「……なーんて御挨拶は、こちらのお館様には無意味でしたかしらね。淑女^{レディ}を招待する作法もご存じないお方ですものね」

アルマは少年達の顔を一通り見回し、それから、頭目^{リーダー}の少年にぴたりと視線を定めた。

見たところ、少年達の半分強は、頭目^{リーダー}の少年を恐れて嫌々従わされている、といった様子だ。

三、四人は、御機嫌取りの”金魚のフン”だろうか。いずれも、虎の威を借る狐というのか、頭目^{リーダー}の少年よりはるかに小物のようだ。ラムザに対するディリータのように、副頭領^{サブリーダー}もしくは陰の統率者^{リーダー}と

呼べるような者のいない、独裁体制らしい。^{ワンマン}

その分”軽石”の少年はかなりの難物のようだが、一対一^{ツツ}というのは、ある意味戦い易い。

「平民の売女の娘を、淑女^{レディ}とは言わんさ」

「母は神官医^{クレリック}でしたわ」

「色気違いの破戒僧か？」

「グレバドス教の教義は神官の結婚を禁じてはいませんわ。両親は深く愛し合っていましたし、互いに生涯誠実でした。母の血を引いていることは、ラムザ兄とわたしの誇りです」

アルマは薄い胸を張った。

頭目^{リーダー}の少年はククツと笑い、古ぼけた椅子から立ち上がって、アルマに近付いてきた。

「こいつは、なかなか楽しませてくれそうだ。気の強い女は嫌いじゃない」

無遠慮に頬に伸ばしてきた手を、アルマはぴしゃりと、手にした絹の扇子で叩いた。

「まだ、ご招待の御用向きを伺っておりませんわ。」

”天騎士”バルバネスⅡベオルブの娘に！ラーグ公の軍師・ダイスダーグⅡドラコニア伯と、北天騎士団団長・ザルバッグの妹に、何の御用ですの？」

「フン、強がるのは相手を選べ。ベオルブの名を出せば誰でもビビると思うか」

「あら、御免あそばせ。兄より弱いお方って、印象が薄くって。お名前が記憶に残りませんのよ。どちら様でしたかしら？」

少年は、歪んだ薄笑いを浮かべた。

「ダリウスⅡバリントン。フォボハム領主・ゲルカラニスⅡバリントン大公の甥にして、後継者だ」

その名を聞いた瞬間、アルマは悟った。彼の目的も、今アルマとティータが直面している危険の深刻さも。

”武器王”バリントン大公。アトカーシャ王家の縁戚であり、畏^{イヴァリス}

国五大領主の一人である。大公自身は武才よりは商才の人で、外洋貿易で得た収益で強力な傭兵部隊を雇い、武器開発や魔道士の育成などにも力を注いでいる。

だが、“戦争商人”としての手腕と並んで有名なのが、女癖の悪さだ。

惚れっぽい浮気者——などという可愛げのあるものではない。口説く手間などはかけず、目を付けた相手は人妻であれ尼僧であれ、武力財力、権力にものを言わせて強奪してきたのだ。

唯一人の同腹の弟との仲が冷えきっているのも、養子に迎えたダリウスが“甥”ではなく、本当は“実子”だからではないか——という噂があるほどだ。

保護者がその体たらくであるから、息子の放蕩ぶりも推して知るべし。

取り巻き達と愚連隊を組み、酒場に押し掛けて只で盛大に飲み食いしては、喧嘩沙汰を起こすのは日常茶飯事。わざわざ幸せな婚礼の宴に乱入して花嫁泥棒を働くのが、無類の趣味ときている。

実家からも婚家からも見捨てられ、絶望のあまり自殺した娘や、水商売に身を落とすしか生計を立てる道がなくなった娘もいるという、陰惨な噂が聞こえているが……、

にも関わらず、養子縁組を解いてダリウスを廃嫡すべし、との世論が高まることがないのは、彼が武術にだけは人並み外れて秀でていたからだ。

弱冠十三歳にして力自慢の山賊を返り討ちにした、とか、牛鬼をミノタウロス一騎打ちで退治した、とかいった逸話には事欠かない。

フォボハム領の住人達には豪傑を好む気風がある。城塞都市ヤードーで開催される武術大会では、熱狂した観客達による場外乱闘で、毎年必ずといっていいほど死者を出すようなお国柄だ。

多少の酒癖女癖の悪さには——”多少”どころではないが——今後の成長に期待して目をつぶり、武将としての将来に望みを掛けよう、ということらしい。

大戦末期にゼルテニア校とランベリー校が閉校されていたために、
今回が五年ぶりとなった士官学校対抗剣術大会でも、ダリウスは優勝候補の筆頭だった。

それが、二つも年下の、女のように華奢な美少年に敗れて、準決勝にすら進めなかったのである。

自他共に認める唯一の自慢の種を潰された屈辱感は、いかばかりか――。

この後、ラムザ本人も呼び付けて報復するつもりだろう。

アルマだけでなくティータもさらってきたのは、ラムザの無二の相棒であるディリータの力も封じるためと思われる。その辺りは、敵をよく知っているようだ。

しかし、伝え聞く彼の性格から察するに、ただ人質として使うだけが目的ではあるまい。ラムザに痛手^{ダメージ}を与える手段として、まず妹達を痛め付けておこうとするのではないか。

恐ろしく厄介な相手に絡まれた……。

一瞬の動揺を気取られていなければ良いが、と祈りながら、アルマは扇子を広げて口許を覆い、笑った。

「まあ、貴方様が……。ご高名はイグーロスにも聞こえておりますよ。伯父様も、ご自分によく似た立派なお世継ぎをお迎えになつて、お鼻が高いのですってね」

その扇子が、スパツと斜めに斬り上げられた。アルマは面積が半分以下になった扇子を閉じて、頬に当てられた長剣の刃を押し返す。

「気短なお方ね……」

相手は猛獣と同じだ。気迫で負ければ、その瞬間にずたずたに引き裂かれる。

（“口から生まれたアルマちゃん”、未だかつて舌戦で遅れを取ったことはなくつてよ！）

無論、舌先三寸だけで撃退できるとは思えない。

だが、アルマとて、むざむざとただ捕まったわけではない。桃色珊瑚と紅珊瑚をつなげた首飾り^{ネックレス}を引き千切つて袖口に隠しておき、

来る道々、少しずつ珠をこぼして目印にしておいた。ディリータならば、この程度の手掛かりでもきつと見つけてくれるはずだ。といっても、時間が経てば経つほど、珊瑚の珠は子供に拾われたり、踏まれて泥に埋もれたりして、追跡が難しくなるだろうが……。

元はと言えば、対戦相手の中に意趣返しを企みかねない悪質な輩がいたことを見過ごし、兄や伯母達から離れていたのが迂闊だった。が、それは悔やんでも後の祭りだ。

今はひたすら、兄達が追ってきてくれることを信じて、一秒でも長く時間稼ぎをするしかない。

「聞いているなら話は早い。少し遊んでもらおうか。お袋にやり方は教わっているんだろう？」

「母から教わった遊び？ 手遊び唄かしら。修道院で行儀見習いをしていた頃は、孤児院の子供達に喜ばれましたわ。それでも、歌は上手いって誉められますのよ。」

ダリウス様も、伯父様の作られた孤児院の子供達と、よく遊んだりなさるの？」

これも一種の皮肉だ。バリンテン大公は数多くの孤児院を設立し、戦災孤児達を収容したが、人道的配慮からではない。才能のある者を選別し、身寄りが無く使い捨てにしやすい”駒”として、忠実な兵士や隠密に育て上げるためだ。

「口の減らん女だ」

ダリウスは苛立った口調で言った。こちらの流れに乗せられてきたか、とアルマが樂觀したのも束の間、意味の取り違えような命令を突き付けてきた。

「服を脱げ」

アルマは眉をひそめた。

単刀直入に來たものだ。これでは、言葉尻を捉えて話をはぐらかすことも出来はしない。

「呆れた……。ベオルブ家の令嬢に向かって、臆面もなくそんな台詞を吐ける人がいるなんて」

アルマも貴婦人ごっこは止めて、軽蔑の表情を顕わにした。

「いくら五大領主のお世継ぎでも、ベオルブ家と事を構えて、ただで済むと思うの。兄達が黙ってはいないわ。他所で何回こういう真似をしてきたか知らないけど、伯父様だって、今度こそ大目に見ては下さないでしょう」

ダリウスは声を立てて笑った。

「いいや、黙っているさ。ドラコニア伯は賢明なお方だ。わざわざ妹の売値を落としたくはないだろう。伯父貴はむしろ、よくやったと誉めてくれるかもしれん。ベオルブ家の力を手に入れるのに、余計な手間が省けた、とな」

確かに……。

自らの意思によらず純潔を失った娘の名誉を回復する方法は、二通りしかない。即ち、彼女を汚した暴漢を、後付けながら夫と認めるか、あるいは極刑——死刑か去勢刑——に処するかだ。

五大領主の跡取りを処刑するのは、国王への反逆罪でもない限り不可能である。となれば、ダイスダーグなら、大事な”政略結婚の道具”に傷が付いたことなど、ひた隠しにしようとするだろう。あるいは、バリンテン大公家と手を組むのが得策と見れば、これを契機に、正式にアルマをこの卑劣漢に嫁がせることを考えるかもしれない。

アルマは肩をすくめた。

「ものすごく回りとどいけど、それって求婚のつもりかしら？ 告白なら告白らしく、もっと気の利いた台詞が聞きたいわね。いつでも、わたしはラムザ兄より弱い人と結婚するつもりなんて、さらさら無いけど」

また”弱い”と言われたことが、ダリウスの癪に障ったようだ。

「まぐれで一度勝ったぐらいで、つけ上がるなよ」

「じゃあ次は、まぐれじゃないことを思い知らされるわね。ラムザ兄を甘く見ない方がいいわ」

アルマは自信たっぷりに言い切ったものの、一抹の不安が胸をよ

ぎった。

ラムザは全身全霊をかけてアルマを守ってくれる。その心を疑ったことはない。だが、まだ騎士の位すら持たない一少年に、現実的にどれほどのことが出来るのだろうか？

「生意気な女ほど、いい声で泣く」

ダリウスは扇子一本挟んで、長剣をアルマの頬に押し付けた。

「たとえお前の兄貴に、片手で山を持ち上げる力があっても、今この場でお前を守ってはくれんぞ」

アルマは、フツと小さく笑った。長剣を押し返していた扇子をくると外側に回して、自分から刃を頬に当てる。

「わたしはアルマⅡベオルブ。”天騎士”バルバネスと、”ベスラの聖女”ファティマの娘！無法者の刃に屈するような魂を受け継いだ覚えはありません」

アルマの視線が、火花を散らしてダリウスの視線を跳ね返す。

「……」

しばし真っ向から睨み合った後、ダリウスは長剣を引いた。

が、負けを認めての行動ではない。

「おい」

顎をしゃくると、手下の少年達はティータに刃を向けたのである。

アルマは思わず息を詰め、目を見張った。

「どこまで卑怯なの……！あなたなんかがよく、騎士の卵だなんて大きな顔してられるわね！」

「芸のない台詞だ。さっきまでの軽口の方が面白味があったぞ」
ダリウスは嘲笑った。

「綺麗事で飾り立てたところで、所詮、力で他人をねじ伏せるのが騎士の本性だ。お人形さんみたいに可愛いツラしたお前の兄貴だって、薄皮一枚？げば中身は変わらんさ」

「兄は、剣を持たない者を剣で脅したりしないわよ！」

その時、突然、今まで黙って震えていたティータが身をよじり、

激しく首を横に振った。蒼白い頬を剣が傷付け、紅い血の玉がこぼれ落ちた。

「アルマ、絶対に言うことを聞いては駄目！わたしはどうなっても構わないから！」

ダリウスは、少年達の手を押さえ込まれたティータにずかずかと近付き、乱暴に黒髪をつかんで顔を上向けさせた。

「だったらお望み通り、じゃが芋みたいに皮を？いて、二目と見られない顔にしてやろうか？それとも、まずはこの髪を丸坊主にしてやろうか」

「やめなさいッ！」

アルマが叫ぶ。

「やめさせたけりゃ、さっさと脱げよ」

「……」

「お前の言った通りだ。俺は気が短い。ぐずぐずするな」

アルマは、一つ深呼吸した。

声を荒げれば、侮られるだけだ。

「くだらない、取るに足らない男ね……。呪う価値すら無いわ」

目は真っ直ぐにダリウスから逸らさないまま、アルマは晴着^{ドレス}の背中の留め具に手を掛けた。

「アルマ、いけない……！ラムザ様が悲しむわ」

「それは、あなたが傷付けられても同じことよ。ここはわたしに任せて」

アルマは、頼もしくティータに微笑みかけた。

「心配しないで、ティータ。見ててごらんなさい。道端の石ころに躓いた程度に心に留めるのも惜しい、こんな男にはね、”天騎士”バルバネスの娘・アルマⅡベオルブの誇りは、髪の毛一筋ほども傷付けることは出来ないんだから」

どこまでが本気で、どこからが兄達を当てにしたはったりなのかは、自分でもわからなかった。

アルマは生まれてから今まで、ほとんどの期間を、安全で平穏な

修道院の中で過ごしてきた。常にベオルブ家に、父や兄達に大切に庇護されて育ってきたのだ。それほど非道い目に遭ったことはない。 ”実績” による裏付けがあるわけではないが、少なくとも、心意気だけは本気のつもりだ。本気でなければ、はったりにもならない。晴着ドレスが足許に落ちた。ゆっくりと、手袋や靴や、下着も脱ぎ捨てる。

（決して引かない。諦めない。泣いてなんかやらない！）

涙を見せれば、憐憫をかけるどころか、ますます喜んでいたぶってくるような相手だ。

髪を結い上げていた櫛と結び紐リボンも外して、まさしく一糸纏わぬ姿になると、アルマは羞じらうことなく両手を広げ、女王のように毅然とダリウスを睨み据えた。

ティータでさえ、息を呑んだ。

母から呂国人ロマンダの血を引いているために、ほんのりと血潮が透けるように色白なアルマの体は、古の女神像か何かのように、神聖なほど目映く美しく見えたのだ。

「ほう……。これは、これは」

ダリウスは長剣を鞘に収めた。

「たかが十三、四の小娘に、期待なんぞしちゃいなかった。あの女男が地団駄踏むところを見たかっただけさ。しかし……」

品定めするように、アルマの周りを歩きながら、頭の天辺から爪先まで矯めつ眇めつする。

「大抵の女は、怯えて泣くばかりだ。

多少骨のある女なら、口汚く喚き散らす。一生呪ってやるだの、殺してやるだのは聞き飽きた。それこそ、もっと気の利いた台詞が聞きたいと思っていた。

呪う価値すら無い……か。そんなことをほざいたのは、お前が初めてだぞ」

ダリウスは、アルマの正面で立ち止まった。

「佳い女だ。本気で堕としたくなった」

近寄って、顎に手を掛けようとする……、この隙を待っていた。

アルマは、サッとダリウスの腰から短剣を引き抜いて後退ると、腹の底から声を振り絞った。

「思い上がるな、下郎ッ！ お前ごときに、この身に指一本でも触れる資格があると思うの！」

ダリウスは、鼻で笑った。

「その細腕で、剣の使い方は知っているのか？ おい……、」

振り返って、ティータの腕をつかんだ少年に命令するより早く、

「動くなッ！！」

アルマが喝を飛ばした。

短剣の切っ先をくると回して、自分の左胸に向ける。

「それ以上、少しでもわたしに近付くか、ティータを傷付ければ、胸を突きます」

「……何の真似だ」

「操を奪ったくらいは隠せても、死ねば隠し通すことは出来ないわ。お前達に、ベオルブ家の娘を死なせた責任を引き受ける覚悟はあるの」

「バカなことを……。お前が死ねば、黒髪の小娘を守るものは何もなくなるぞ」

「物の順序を考えなさい。その時には、お前達の方こそとっくに手遅れよ。一時の腹いせのために一生を棒に振って、後悔しないのね？」

多少論理に難があらうと、ここは押した者勝ちだ。

矢張り、手下の少年達はダリウスよりも器が小さい。一方的に狩られるだけだったはずの小兎が竜に化けたので、気を吞まれている。

「……」

しばし、再び睨み合って。

「ハッターだ。やれ」

手下の少年はティータの肩を抱え込み、震える手で頬に剣を押し付けた。

ティータの頬から、一筋の血が流れる。

アルマも、眉一つ動かさずに、左胸の小さな膨らみの下に短剣を突き立てた。ティータの頬から流れるよりも幅の広い血の筋が、白い肌を伝って足許に流れ落ちる。

「……っ」

ティータは、思わず目を瞑った。

が、アルマは、ひたりと少年を睨み続けている。足の指の間を浸す血が、血溜まりになり始めた。

「うう……っ」

少年の手の震えがぶるぶると大きくなり、遂に、剣が音を立てて床に転がった。

アルマも短剣を胸から離す。流石に、呼吸が少し速くなっていた。

「腰抜けが……!」

ダリウスは忌々しそうに舌打ちすると、アルマの方に足を踏み出した。

「動くなと言ったでしょう」

アルマがもう一度、短剣を胸に向ける。

「……」

三たび、二人は睨み合った。

「ティータ、こっちにいらっしゃい」

ダリウスから目を離さずに、アルマは言った。

「大丈夫」

ティータはちらりと左右の少年達の顔を窺い、それから、タツと駆け出してアルマの横に来た。

「……、」

ダリウスが長剣を鞘から抜いた。

アルマは油断なくダリウスを睨んでいる。少々間合いが長くなつたところで、アルマが胸を突くより速く、駆け寄ってアルマの手から短剣を弾き飛ばすことは出来ないはず。……だったが。

ダリウスは、突然長剣を投げた。ティータに向かって。

「「!」」

アルマはティータを突き飛ばしながら、自分も床に倒れ込むようにして剣をかわした。

(しまった!!)

と、思った時には、手首を掴んで引き起こされ、羽交い締めによりウスに抱きすくめられていた。

短剣が手から落ちる。

すかさず、ティータが代わりに拾おうとしたが、その前にダリウスが、短剣を手の届かぬ所へ蹴り飛ばした。

ティータも、手下の少年達に取り押さえられた。

「手間取らせやがって」

こうなったら、舌を噛み切ってやる。と、アルマは腹を決めた。自分の、ではなく、ダリウスの、だ。

(さあ、やれるものならやってごらんさいよっ!)

アルマは首をねじって、キッとダリウスを見上げた。……が。

(え……?)

ダリウスはアルマを見ていない。アルマを掴まえた腕を緩めはしなかったが、何かに気を取られて、動きを止めている。

何だろう。ピリピリと、空気が痺れるようだ。急な嵐の前触れにも似て、気圧が変わったように感じた。

遠くで微かに、韋駄鳥チヨコボのいななきが聞こえた。

タ、タ、タ、タ……。

軽やかな足音が近づくにつれ、予感で息苦しくなってくる。

少年達も、アルマとティータも、来たるべき”何者か”を待ち構えて、広間正面ホールの扉を見つめていた。

と――。

ギ、イイイイ……。

両開きの扉が開け放たれ、砂漠の風のような熱気が吹きつけてきた。

？－5－〔3〕 天翔る白竜 ？アルマの戦い（後書き）

わぁお。なにげにアルマも最強伝説。

これってもう、”15R”の領域でしょうか……？

私としては、なるべく表現はセーブしつつも、内容的にはこういう問題にもちゃんと取り組んでいけたらな、と思うのですが。

色事のルールと申しますものは世に様々あって、どの辺まで守るべきと考えるかは時代により場所により、人によってまちまちだと思います。

一夫多妻が普通の国もあれば、重婚が嚴重に処罰される国もあります。古代エジプトでは兄弟姉妹間での血族結婚はむしろ標準的でしたし、逆に、名字が同じだけでもどこかで先祖が同じだから駄目という地域もあったり……。一概に何が正解とは言えません。

ただ、一つだけ揺るがせに出来ない基本ルールを上げるとすれば、「当事者間の合意があること」でしょう。騙したり脅したりとかは、確実に犯罪です。こればかりは、いかなる正当化も成り立たない、決して軽んじることの許されないツボだと思っています。

男性の方、くれぐれも出来心など起こされませんよう。

それから、女性の方！戦時などの強力な悪には太刀打ち出来なくとも。平和日本の、出来心程度の小悪党なら、気合いだけでも充分撃退出来る可能性大、らしいです。いざという時には、落ち着いて一発反撃してやりましょう。ハイヒールで思いつき足踏ん付けるとか、傘で突くとか（振り回すよりかわされにくいんですよ）、耳元で声を限りにギャーッと叫ぶとかでOK。

かく言う私も、痴漢にまんまと逃げられて悔しい思いをしたことがあります……。あのクソオヤジ、しばき倒して警察につき出してやりたかった！思い出すだに腹が立つ！！

否。

熱気と感じたのは、抑えようもしないむき出しの闘気だ。

白の礼服に、金糸に縁取られた黒外套マントという姿のラムザは、肌の粟立つような闘気を全身から放射していた。

試合の時とは桁違いの、いや、質の全く異なる威圧感プレッシャー。

（これが……本当に、ラムザ兄さん……！？）

アルマはまざまざと、聖典の一節を思い起こした。

——その眼光まなざしはあらゆる邪悪なる幻影まやかしを打ち破り、その咆哮は地を震い山を砕く。羽ばたく毎に百の魔獣を打ち倒し、その牙は不死の魔王の心臓をも切り裂かん。……

（お兄ちゃん！）

呼び掛けたいのに、声が出なかった。

普段の穏やかな、人の好い笑顔からは想像もつかぬほど険しい顔付きで、ダリウスの腕に捕らわれているアルマを見たラムザは、ギリ、と歯噛みした。

闘気に加えて、怒気が膨れ上がった。

ラムザに守られる立場のアルマでさえ、天竜バハムートに睨まれた小野豚うりぼうのようにすくみ上がった。

「随分と早かったな」

ダリウスは、アルマをティータの方に突き放した。

ティータにぶつかったアルマは、そのままティータと肩を抱き合った。

ティータも震えていた。

「……」

ラムザは無言で、床に転がっていた長剣を拾い上げると――、ビュンッ！

ダリウスに向かって、真正面から投げつけた。

パシッ。

ダリウスは僅かにかわして、右手で受け取った。柄を握り直し、ヒュッと一振りすると、長剣の切っ先をぴたりとラムザに向けて構える。

他の少年達も、怖じ気付きつつも剣を抜いた。

ラムザも、左手を剣の鞘に掛ける。が、まだ抜き払いはしない。

すると……、

「不動^{ドンムフ}ッ！」

呪文の声が飛んだ。

「!?!」

てつきりラムザを狙ったものと思って、卑怯な、と叫ぼうとしたのだが、魔法はアルマとティータにかかった。余計な真似はせずに見ている、ということか。

どの道、アルマは”浄化^{エスナ}”の他に、高等回復魔法・”邪法解除^{デスベナ}”
も習得している^{マスター}ので、大抵の呪縛魔法は怖くないのだが。しかし…

（魔法が使える人がいるなら、どうして……?）

考えている暇はなかった。

バタンッ!

高窓が開いて縄^{ロープ}が垂れ、サッとディリータが滑り降りてきた。

少年達の注意が一瞬そちらに向いた隙に、ラムザが外套^{マント}の留め針からむしり取った三本の緑水晶の飾りが、光弾となって飛んだ。

「うッ！」

「わッ！」

アルマとティータの側にいた少年達が、手や額を押さえた。

ディリータが彼らを蹴倒し、妹達を背に庇^{マント}った。外套を外してアルマの肩にかけてやると、剣を抜き、叫ぶ。

「ラムザ、やれッ！」

言われるが先か、ラムザは床を蹴っていた。

人に化身した”護法の神竜”が、牙を?いて駆ける。

水のほとばしるよう。だの、流星のよう、だのといった形容が写実的なものであることを、アルマは実感した。

抜き打ちに、まず一人。アルマの目には光る軌跡の残像しか映らぬ間に、更にもう一人の少年を、ラムザの剣は叩き伏せた。

ラムザが手にしているのは、試合用の刃引きの剣だ。死にはしない。が、寸止めが原則の試合と違って、ラムザは容赦なく剣を振り抜いている。骨の一、二本は折れたろう。

キンッ。

一人の剣を受け止めたラムザの横から、別の少年が足払いをかけるようにする。

が、ラムザは剣を受け流しつつ、足払いをかわした足で、後ろ回し蹴りを返した。

「ぐっ」

腹を蹴られた少年は、呻いて吐いた。

剣術試合なら”反則”になるが、ラムザは足技も得意なのだ。喧嘩方式は、むしろ望むところだ。

「くそっ」

少年の一人が、古い座布団クッションを投げつけた。傷んだ生地が破れて、中の糲殻が飛び散る。

ラムザは黒外套マントを翻してこれを防ぐと、身を沈めて鋭い下段蹴りで手近にいた一人に足払いをかける。

跳ね起きながら弾き飛ばした相手の剣を、左手に受け取った。

チャッ。

双手に剣を構えたラムザに、少年達は後退って間合いを広げる。

アルマは目を見張った。

（ラムザ兄さんって……）

自ら好んで喧嘩は売らない。が、

（売られた喧嘩は”高価即金買い取り”だったのね……！）

ディリータは加勢はしない。

アルマとティータの安全を確保し、ラムザを心置きなく戦わせて

やるのが彼の役目だ。

が、ディリータも怒り心頭に発している。

たまたまディリータの方に吹っ飛ばされてきた少年を、待っていたとばかり、肋の折れるほどに踏み倒した。

「浄化^{エスナ}」

息つく暇もない戦いに見入っていたアルマは、やっと我に返って呪いの魔法を唱え、ティータとディリータと共に壁際まで下がった。

手下の少年達が案山子のようにあっけなく薙ぎ倒されてゆくのを、ダリウスは黙ってじっと見ていた。ラムザの身ごなしをよく観察していたのだろう。

他の少年達を全て起き上がれなくしたラムザは、右手に持った剣をダリウスに向け、じりじりと間合いを詰める。

ダリウスもラムザに近付いてゆき――、

キン、カツ、キンッ。

目まぐるしい技の掛け合いが始まった。

試合の時のダリウスの戦い方は、力任せで荒削りだった。華奢な外見から、ラムザを侮っていたのだろう。不用意な大技を仕掛けたところを、あつさりと”^{ヘメド}嵌め取り”で討ち取られた。

ラムザの剣の師・ケルガーは、体が細く単純な筋力では伸び悩むラムザに、敵からの攻撃は防御するよりもかわすように、また、自分から攻撃する時も腕力に頼らず、敵の力を利用するように教えた。その究極型が、”^{ガイド}嵌め取り”だと言っている。

ただかわすのとも、相討ち覚悟の交差攻撃とも違う。敵の攻撃を受け流しつつ、その勢いを反撃につなげる、”返し必殺技”である。仕留めたつもりが仕留められる、手品のような形勢逆転に、初めての者は一様に面喰らう。戦場であれば、何が起きたのかもわからないうちにあの世行きだろう。

ダリウスは流石に懲りたらしく、今は油断がない。こうして見ると持ち技も多彩で、一つ一つの完成度も高いのがわかる。

（大丈夫なの？）

と、アルマは目でディリータに尋ねた。

ラムザの方が押されているように見える。二刀流なら手数が二倍になるというものではないにしても、もっと攻撃する機会をつかめないのか。

（まあ、見ている）

ディリータは、自信たっぷりに微笑んだ。

よくよく見ていると――、

左右の剣でダリウスの攻撃をさばき続けているラムザは、至って冷静だ。焦りを隠せないのは、ダリウスの方である。

（……、そういうこと……！）

試合の時は、ラムザはダリウスに実力を発揮する暇を与えずに勝った。だが今は、ダリウスが全力を振るっているのに、ラムザの体に攻撃が届かないのだ。

手詰まりになったのか、一瞬、ダリウスの手が止まる。

と、ラムザが攻勢に転じた。

ギンッ！ガキンッ！

一撃一撃が重く速い上に、二刀流だ。腕に覚えのあるはずのダリウスが、受け流しきれなくなり、一步、二歩と後退る。

ラムザはダリウスを壁際に追い詰めてゆき――、

ガッ！！

剣を握っている親指の骨を砕いた。

「っ……！！」

ダリウスの手から離れた真剣を、ラムザは宙に跳ね上げた。左の剣を捨てて入れ替わりに受け取ると、上段蹴りで胸を狙う。

ダリウスは両腕で防御したが、防御ごと吹き飛ばされて壁に背中を打ちつけ、ずるりと尻餅をつく。

ラムザはダリウスの剣を逆手に握り直すと――、

ズガッ！

その喉元を押さえ付けるように、刃を斜めに壁にめり込ませた。

「アルマに何をなさいました」

ダリウスの正面に片膝を立て、ラムザは息がかかるほど顔を近づけて尋ねる。

触れれば切れる真剣の刃越しに見るのでなければ、別の意味で背筋のぞくぞくするような、女のように美しい顔だ。だが、今のダリウスには、それがかえって恐ろしい。

「お、お前……、バリンテン大公の甥に、手を下せば……お前も、ただでは……」

「それが何か？」

ゾツとするような冷たい声で、ラムザは聞き返した。

「僕がどうなるかなどは問題ではありません。騎士ならば、己が守るべき者のために倒れる覚悟は、いつでも出来ているものでしょう。」

で？アルマに何をなさいました……」

ラムザは、剣と壁との距離を狭めた。

ダリウスが悲鳴を上げた。

「ゆ、許してくれ！」

これまで散々、力で他人を屈服させてきたダリウスだが、力に屈服させられたのは初めてなのかもしれない。

「許すも許さぬも、何をなさったのかわからないことには判断いたしかねます。ですから、お伺いしているのです……」

ラムザはダリウスの喉仏すれすれまで剣を押し付け、凄い微笑を浮かべた。

「ご心配なく。僕は、妹の名誉を守るために必要な以上のことをしようとは思いませんよ」

裏返せば、必要とあらばダリウスを始め、手下の少年達全員を即刻斬り捨てるだろう気迫を持って、ラムザはダリウスを問い詰めた。

「正直にお聞かせ願いますよう。」

アルマに、何をなさいました？」

「ひっ……」

ダリウスの顔が恐怖に歪んだ。

アルマは正視に耐えなくなった。

「もういいわ！やめて！」

外套マントの裾がはだけないように気を付けながら、兄に駆け寄った。

「何も。名譽に関わるようなことは、何もされてないわ。だから、許してあげて」

ラムザは別人のように鋭い、今にも獲物の喉笛を食い千切らんとする猛獣のような目を、そのまま妹にも向けた。

「何もされていないうちに入るかッ！その格好を見ただけでも、両眼を抉り出してやりたいところだッ！！」

アルマは怯んだが、

「だって……、それ以上はもう、弱い者いじめじゃない！騎士のすることじゃないわ！わたし、そんなラムザ兄さんを見たくない……！」

ぺたんと兄の横に膝をつくど、頬に手をかけて、ぐいと自分の方に顔を向けさせた。

「わ・た・し・が、許してあげなさいって言ってるのよ！文句ある？」

ラムザは数度、瞬きした。

「わかったよ。僕のアルマ」

と言った時には、いつもの穏やかな兄の顔に戻っている。

「よし！」

アルマはにっこりと微笑んで、兄の頬に口付けした。

ラムザも微笑んで、妹の頬に軽く口付けを返した。

「アルマが優しい子で良かったですね」

ラムザは自分の剣を鞘に収めた。

「今日のことはこの場限り。お互いに他言無用ということですが、いかがです。」

僕も出来ることならば、兄達に迷惑をかけたくありません。ダリウス殿も、伯父上のお耳にこのことが入るのは不都合なのではあり

ませんか。

ただし、くれぐれもお忘れなきよう……、」

ラムザは、ダリウスの首を押さえ込んでいた剣を壁から引き抜くと――、

ダンッ!!

股の間の床に突き立てた。

「二度目は外しません」

ダリウスは、白目を？いて失神してしまった。

意識の無いダリウスに危ないかと思い、アルマは剣を抜こうとした。が、床に刺さった剣は、アルマの力ではびくとも動かなかった。

「……。何だか、今になって猛烈に腹が立ってきたわ……！」

顔にいたずら書きしちやおうかしら」

「よせよ。無抵抗になった敵に追い撃ちをかけるのは、騎士道に反する。お前が今言ったばかりじゃないか」

「わたしは騎士^{おこし}じゃないもん」

「またそういう屁理屈を……。やめとけて。セコい報復は、逆恨みされるぞ」

はぁーっと、空気の漏れるような溜め息を吐いて、ティータがへたへと座り込んだ。

「あら、ごめんなさい。怪我の手当てがまだだったわね」

アルマ自身の胸の傷は、喧嘩の間に自分で回復魔法をかけていた。

「アルマ、それより先に、服を着てっ……！」

アルマは構わず、ティータに近付いて頬の傷に手をかざした。ティータも少しは白魔法を覚えているのだが、アルマの方がずっと魔力が強いし、高度な魔法が使える。ティータの頬は元通り、滑らかに戻った。

「傷跡が残ったらいけないでしょ。服なんて、この顔^{メンバー}触れで恥ずかしがる必要ないわよ。四人一緒に温泉に入ったりした仲じゃない」「そりゃ、もう四、五年前の話だぞ」

と、ディリータが流石に顔を赤らめて、アルマの服を拾い集めてきた。

「お前、ちゃんと乙女の羞じらいってものはあるんだろうな……？」

疑わしそうに訊く兄を、アルマは睨んだ。

「バカッ！」

サツと頬が紅潮して、涙がぼろぼろと溢れてきた。

「バカバカバカッ！！」

恥ずかしかったに決まってるでしょ！怖かったに決まってるじゃないっ……！！

もう少し来るのが遅かったら……、もう……、もうっ……！！」

ぷうっと頬を膨らませて、アルマも床に座り込んだ。

「わたし、疲れちゃってもう一步も歩けない！帰りは抱っこしてっ
てね！」

するとラムザは、気の毒なほどしょんぼりとうなだれて、ぎゅっと妹を抱き締めた。

「ごめん。お前に、ここまでさせてしまった……。

もし、お前に何かあったら、僕は……、僕は一生、自分を許せなかったよ……」

アルマの髪を撫でる手が、震えていた。自分は真剣を持った相手と戦うことも恐れはしないが、妹が傷付けられるのは怖いのだ。

「ラムザ兄さん……。わたしこそ、ごめんなさい。元はと言えば、わたしが変な意地張って、兄さんの側を離れたから……。

助けに来てくれて有難う。お兄ちゃん、世界一頼もしい騎士様
よ……！！」

アルマは、ラムザの首に抱き付いた。

「ラムザ兄さん……。一生ついて行くわ！」

ラムザは、ぷっと吹き出した。

「おいおい、実の兄に向かって言う台詞じゃないぞ」

「何よ。そもそも、お姫様の窮地^{ピンチ}に颯爽と現れるのが、実の兄の役

じゃないのよ」

「うーん、そっか。じゃあ、ディリータに抱っこしてってもらうかい？」

「ディリータじゃ意味ないわよ。どうせラムザ兄さんの付属品じゃない」

「こら、こら」

ディリータが苦笑する。

「……。ところでさ。一つ、お願いがあるんだけど」

「なあに？ 兄さん。わたしに出来ることなら、何でも言ってね」

ラムザは、遠慮がちに手の平を差し出した。

「なんか、食べる物持ってない……？」

アルマは呆れて、溜め息を吐いた。

「これさえ無ければ、完璧に格好いいのに……」

「だって、だって。準決勝の辺りからもう、お腹ペッコペコだったんだよ！ なのに、次々話しかけられちゃってあんまり食事出来ないうちに、急いで出て来たんだからさ」

「そんなことだろうと思ったわよ……。はい」

とアルマが晴着^{ドレス}の胸元に隠し持っていた包み焼^{パイ}を引っ張り出すと、

「「あ」」

ほとんど同時に、ディリータとティータも非常食^{おやつ}を取り出していた。

「みんな……。心遣いは嬉しいんだけど。いっつも、こういう事態に備えてるの？」

ディリータとアルマが、ラムザの頭を小突いた。

「お前が言うな」

「だいたい、毎度毎度思うんだけど、自分では何か用意してないの？」

「そんなの、来る途中でとくに食べちゃったよ！」

ティータが、堪えきれなくなってくすくすと笑い出した。

「ごめんなさい」

声は殺しているが、笑い止まない。

「うー……」

決まり悪そうに背を向けて、もそもそと腹ごしらえするラムザの後ろで、アルマはティータに手伝われて晴着^{ドレス}を着直した。

「じゃ、行こうか」

ラムザとディリータは妹達を抱えて、廃屋の外に出た。

「あっ！」

玄関の前で、^{シルドラ}銀竜”が行儀良く主人を待っていた。

”えび天”ちゃんじゃなかったのね!?”

「お姫様を助けに来る騎士^{ナイト}は、白韋駄鳥^{チヨコボ}に乗ってるものだろう?」
とラムザは得意がったが、ディリータが味も素っ気もなく種明かしする。

「えび公が爆睡してただけだ」

自分の黒韋駄鳥^{チヨコボ}・”天狼^{シリウス}”の背にティータを乗せながら、ディリータは笑う。

「妹の特権だな。他の女がそこに座れば、命が無いぞ」

砂糖にたかる蟻のようにラムザの周りに群がっていた少女達を思い浮かべると、あながち大袈裟な、とは言えなかった。

「よく抜け出してこられたわね」

「僕が舞踏^{ダンス}をすっぱかすのなんて、珍しくもないさ。後のことは、セヴィとイクシ先輩が二つ返事で引き受けてくれたよ」

”銀竜^{シルドラ}”の鞍の前にアルマを座らせたラムザは、妹を両腕に挟んで手綱を握る。

「さ、参りましょうか、我が姫!」

「うんっ!」

ガリランドの街の娘達に大いに羨ましがられて士官学校^{アカデミー}に凱旋したアルマは、それまでも増して兄を誇らしく、頼もしく思った。

さて、一つわからないことがあった。

ダリウスは何故、最初から魔法でアルマとティータの動きを封じようとしなかったのだろうか?あるいは、あの時点で魔法をかけるな

ら、何故ラムザを標的ターゲットにしなかったのか？

後でラムザに尋ねてみると、

「力でねじ伏せる」のが流儀だからだろ」

という答えだった。

「悪党は悪党でも、誇りプライドのある悪党だってことさ」

魔法の中には”停止”ストップや”睡眠”スリプルなど、一発で相手を無力化出来るものもある。一旦魔法がかかれば、歴戦の勇士といえども赤児の

ように為す術もなく倒されてしまうこともあるのだ。

だが、ダリウスは自分の武力に自信を持っている。魔法に頼るのは、戦う前から自分の力が相手よりも劣ると認めることになり、それは自尊心プライドが許さない、というわけだ。

「一応、用心のためにコレは着けてたけどね」

とラムザは、大抵の魔法を弾く”魔除けの指輪”リフレクトリングを見せて言った。

「でも、屋敷の門から広間ホールまでの間に伏兵や罠を仕掛けたりはしてなかったし、お前達のこと、縛ったり薬で眠らせたりはしてなかった。だから、小細工は使ってこない相手だったのはわかったよ。

……そうじゃなかったら、わざわざ剣を返してはやらなかったさ」

アルマにはわからなかったが、あれは、”あくまでも力で勝負だ”という、戦士同士の意思確認だったらしい。

「間違っても、手心を加えたんじゃないぞ。僕の可愛い可愛いアルマに手を出すなんて……未遂でも万死に値すると、お兄ちゃんとしては思うけど！」

と、ラムザは妹の額に口付けした。

「ただ、誇りプライドのある人間なら、他人が決めた規律ルールは無視しても、自分ルールなりの規律には従うものさ。その規律の中できっちりぶちのめしてやれば、敗北を受け入れざるをえないだろう。……というか逆に、向こうの規律ルールに付き合っ
てやらない限り、納得せずに何度でもつかかってくる恐れがあるからな」

つまり、こちらこそ、魔道士に加勢を頼んだり、大人の権力に仲裁してもらったりすることは容易い。だがそれでは、ダリウスはい

つまでも負けを認めず、ラムザを恨み続けるだろう。危険ではあっても、剣術試合の制限を超えてなお、ラムザ一人の武術でダリウスに打ち勝つ必要があった。

「心配いらぬ。また来ることがあっても必ず、”本人が”、”力で”、”正面から”戦いを挑んでくるさ。第三者に依頼して闇討ちにするとか、根も葉もない悪評を流すとかいった手段に訴える性格じゃない。」

それから、ディリータの情報によると、彼は伯父上には反発してゐたいだ。無銭飲食とかカツアゲを繰り返してるのも、伯父上のお金で遊びたくないかららしい。

伯父上に泣き付いたりはしないな。むしろ、何かのはずみに大公が今度の一件を聞きつけて、ベオルブ家にいちゃもんを付けようとしても、自分の意地^{プライド}にかけて伯父上に手出し口出しはさせないだろうよ」

最後の台詞は、ダリウスに釘を刺すためというよりは、こちらに不必要な復讐をする気はない、という意味を伝えるのが目的だったらしい。

「ところで、その……もし、わたしが無事じゃなかったら、本当にダリウス殿を斬ってた？」

「勿論。たとえ相手が国王陛下だって、容赦するもんか」
ラムザは即答した。

「まあ……ぶち殺すのは社会政治的にまずいとしても、少なくとも、物理的に二度と悪さが出来ないようにはしてやったな。それも、アルマが許してあげて欲しいとか、事が明るみに出るのは恥ずかしいとか思ふんだったら、やめといったけど」

「まさか！」

と、アルマは胸を反らせた。

「泣き寝入りして悪党をそのままにのさばらせておくなんて、御免だわ。口をつぐんでいる方が、天騎士バルバネスの娘として恥ずかしいわよ。」

そんなことで、わたしの価値に傷は付かない。傷が付いたと思うような男に、夫になってほしくもないわね」

ラムザは笑った。

「ははっ、そう言うと思った。流石、僕の妹だ。……並みの男には、お前をお嫁さんにするのは無理だな」

「当たり前よ。……でも兄さん、わたしが好きになった人は、叩き出したりしないわよね？」

ラムザは泣き真似をする。

「寂しいなー。『お兄ちゃんのお嫁さんになるの！』って言ってきかなかったアルマが、僕以外の男を好きになって離れていっちゃうなんて……。お兄ちゃん、考えただけでも涙が出て来るよ……」

「いつまで子供みたいなこと言ってるのよ。見ようによっちゃ、ラムザ兄さんが一番の”悪い虫”だわよ？」

「そんな〜っ！愛してるよ、アルマーツツ！！……ディリータの次に」

「ちよっつつ、それ本気で言ってるんじゃないわよねっ！？」

……

剣術大会からしばらく経って――。

病床にあるクラブーティン修道院の院長を最後に見舞った時、老神官はアルマに打ち明け話をしてくれた。

ファティマ達母子三人をクラブーティン修道院で預かっていた頃、バルバネスは兄妹の将来を大層案じていた、と。

平民の孤児であるファティマを母に持った兄妹は――、特に、一目で呂国系ロマンダとわかる黄金の髪と碧い瞳に生まれついたラムザは、生まれながらにして、偏見や因習と戦い続けなければならない宿運を背負っている。

バルバネスは、命のある限りは、己の責任でファティマと子供達を守る覚悟だった。

だが、子供達に宿運を戦い抜くだけの強さが無ければ、自分の死

後、親の理想を押し付ける気はない——とも、語っていたという。
ラムザとアルマが、自らの力でベオルブ家の中に居場所を築ける
ならば良い。

そうでなければ修道院から出さずに育て、僧籍に入れるか、民間
の医師として生計の立つ程度の技術を身に付けさせ、ベオルブの名
とは無縁の暮らしをさせるつもりだった、そうである。

「ですが、アルマ様」

と、院長は言った。

「昨年、最後にお目にかかった折……バルバネス様は、あなた方の
行く末については何の心残りも無く逝けると、仰せでしたよ……」
アルマも覚えている。

——ラムザ。いい子だ。強い子だな。お前になら、安心して母さ
んとアルマを託すことが出来る……。

繰り返し、愛おしそうに兄の頭を撫でていた父。父の言葉を励み
に、微笑んでいた兄。

（お兄ちゃんの目は、秋の空の色……）

冷たい雨に洗われて澄んだ、秋の空の色。

その微笑みに宿るのは、凍える冬に人を温める、日溜まりのぬく
もり。

恵まれた春の陽気ののどけさではなく——。

ラムザはいつからあんな風に、微笑んで向かい風の中を歩いてき
たのだろう。

記憶の糸をたぐってゆくと、辿り着くのは、いかめしく壮麗な城
下屋敷の門なのだった。

クラバーティン修道院でもマンダレーナ村でも、ラムザとアルマ
は大人達に慈しまれ、子供達とは対等な、屈託のない友達付き合い
をしていた。

ベオルブ邸に第一步を踏み入れた幼い兄妹は、生まれて初めて、
いわれのない軽蔑や悪意、不躰な好奇の目にさらされたのである。

あの時、ラムザは五歳、アルマは四歳。

アルマが育った小さな世界では絶対的な保護者に見えた兄が、高い玄関をくぐった時は確かに、泣きそうな顔をしていた。

父の背中はずいぶん、冷たかった。

母は、……母はここにはいない。

アルマはもう、何を頼ればいいのかわからなかった。縫いぐるみの”モグちゃん”を抱き締め、兄の腕に固くしがみ付いていても、心は寄る辺なく、この世に独りぼっちでいるような気がした。

だが、今にも涙がこぼれそうになった時、ラムザはアルマの手を強く握り返して、囁いたのである。

——アルマ。アルマ、大丈夫だよ。お兄ちゃんが付いてる。顔を上げると、兄は優しく微笑んでいた。

この手にしっかりとつかまってさえいれば、何も怖くない。心から安堵して、アルマも自然と笑った。

(そうだわ。あの時……)

泣いて父にすぐるのではなく、自らの手で妹を守ると決意した瞬間、ラムザは既に、小さな騎士^{ナイト}だったのだ。

ラムザから引き離されて修道院に入れられた当時は、父を恨みもした。

だが両親亡き今となっては、バルバネスがラムザだけをドラコニア城へやった心が、アルマにも察せられる。

ラムザには柔軟な逞しさがある。

あの時も、アルマ一人だったらどうしただろう。

矢張り、泣きじゃくって父にすがり付いたかもしれない。

あるいはせいぜい、齒を食いしばって涙を堪えるか、邪険な視線を睨み返すかしか、出来なかったろう。

しかし、ラムザは微笑んだ。

心細がる妹に。必ずしも好意的ではなかった家臣達や、兄達に。どこまでが勇気であり、天性であったかはわからないが、アルマには無かった力だ。

——僕だって怖かったんだよ。アルマのおかげさ。アルマがいてくれるから、いつでも、頑張ろうって思える。僕達、お互いに力になってるってことだね。……

そう言って微笑むことの出来るラムザを、何と強いのだろうとアルマは思う。

（でも……お兄ちゃんは決して、無敵でも万能でもないんだわ……！）

ダリウスとの戦いが簡単なものでも、気持ちの良いものでもなかったのはわかる。

しかも、認めるのも気分が悪いが、彼はまだしも、最低最悪の外道というわけではないのだ。形式には大いに問題があるにせよ、ラムザに直接再戦を挑んできたのだから。

己の未熟を棚に上げて陰口を叩く者達の方が、もしかすると、ダリウスよりも厄介であるかもしれない。

負け惜しみを並べて、卑小な自尊心プライドを慰めていてくれるうちはまだ良い。が、負けを受け入れて研鑽を重ね、実力で相手を上回ろうとするのではなく、陰でこそそと汚い手段を使ってでも相手を引きずり下ろそうとしてくるのは、往々にしてそのような輩ではないか。

迂闊にそんな連中を刺激して、万が一にも不様な返り討ちに遭うことは許されない。妹を、そして両親の遺志を守ろうとする身には。戦わないに越したことはない。

また、戦うからには必ず勝たねばならない。それも、正々堂々と負ければ勿論、勝っても恨みを残せば、自分だけでなく、守ろうとしたものも危険にさらすことになる。

何かを守ろうとする者の戦いとは、そうしたものだだろう。

アルマは以降、ラムザがお代わりを三十杯しようが、だらしなく上着や靴を脱ぎ散らかして昼寝してしようが、温かく見守ることにしている。

時々冗談を言うことはあっても、内心では、英気を蓄えるために

必要なことと理解しているのだ。

——ラムザ兄さんってば！何て格好して寝てるのよ。お婿のもらい手がなくなるわよ。

——ふわ……ふ。別に構わないよ。その時は一生、ディリータに養ってもらうから……。

——何でディリータなのよっ！？

——え？何々？『ラムザ兄さんはずーっと、わたしが面倒見てあげるんだから』って？優しいなあ……。……

とぼけた笑顔の裏に、厳しい覚悟があることを知っている。

（背負わなくていい。泣いたっていいのに）

誇り高く直い騎士の魂が、背負うものを投げ出さないということと、生身の華奢な少年の双肩がその重みに耐えきれるということは、別のことであるはずなのに。

それでも、戦い続けることが彼の意志であるならば、アルマはせめて祈るしかない。

（勝って！そして、お兄ちゃんの道を歩き通して！）と。

胸に抱えたラムザの上着が、知らず知らず涙で湿っていた。

（神様。どうか、ティータとお兄ちゃんをお守り下さい。世界一優しくて勇敢なわたしのお兄ちゃんを、どうかわたしの許に帰して……！）

泣き疲れたアルマはラムザの寝台ベッドに横たわって、いつしかまどろんだ。

いつになく寂寞とした気持ちを抱えて、アルガスは屋上から、ぼんやりと東の丘の連なりを眺めていた。

（今までだって、オレはずっと一人だったじゃないか）

自分に言い聞かせてみても、最後に見たラムザの哀しそうな目が、頭から離れない。

（あんな奴！素性も知れない、卑しい平民の息子なんだぞ……、！？）

卑しい平民の息子は、卑しい。裏切り者の孫は、裏切り者。

それは、アルガス姉弟を苦しめてきた偏見そのものではないか。

——アルガスって、お料理上手なんだねえ。いいお嬢さんになれるね。……

——う・ふ・ふ、ほら、脱いで、脱いで！お洗濯してあげるよー。

……

——大丈夫。僕は信じてるよ。君が盗賊の手引きなんかしたはずがない、って。……

ある時は悪戯っぽく、ある時は温かく、微笑むラムザ。

姉が死んでから五年間、誰か他に、屈託無くアルガスに笑いかけてくれた者があったか。

——平民だったら仲良く出来ないかい……。

（あんな顔させたかったんじゃない！オレは、ただ……）

ただ……？

（……。オレ……、ディリータが羨ましかったのか？）

アルガスはディリータが気に入らなかった。

ディリータはいつも、当然の権利と義務であるかの如く、ラムザの一番近くにいます。

世の中のこともラムザのことも、自分一人が全て把握しているのだとしても言う風な、大人びた、分別臭い顔をして。

昨夜ディリータが平民だと知った時、アルガスはディリータへの反感に”正当な”理由を得たのだった。

ところが、一夜明けると。

”たかが平民”にすぎないディリータの妹のために、ラムザは日の出前の薄明のうちに出立した。

——ついて来られなければ、無理するな！ディリータと僕だけで先に帰る！

脇目も振らず韋駄鳥チヨコボを走らせるラムザに、何度も置いていかれそ

うになりながら、アルガスは焦りと苛立ちを募らせた。

そしてとうとう、鬱憤を傷心のディリータにぶつけてしまった――

（兄貴はいけ好かない奴だけど、妹は可愛かったよな……）

聖印の縫い取りをした外套マントを渡してくれたティータの、はにかんだ可憐な表情を、アルガスは思い浮かべた。

初めてベオルブ邸を訪れた日や、エルムドア侯を救出して無事帰って来た日のことも思い出した。

ラムザの友人達と妹達、八人で卓子テーブルを囲んで茶飲み話をしたのだった。ティータは口数少なく、ただ嬉しそうに兄達の会話に耳を傾けていた……。

ラムザに出会ってから二十日ばかりの出来事を振り返ってみると、思えば、同じ年頃の少年達と”仲間の一員”として団体行動を取ったのは、初めての経験だったのだ。

”裏切り者の孫”であるアルガスの人生は、疎外と敬遠の人生だった。

見ず知らずの人間が、たまに親しみを見せてくれることがあっても、サダルファスの名を聞くと、手の平を返したようによそよしくなるものだった。

アルガスにはいつしか、相手に拒まれる前に自分から相手を突き放す癖がついた。

鬼ごっこをする里人の子供達、韋駄鳥チヨコボの駆け比べをする騎士の家の少年達を尻目に、一人、裏山で木剣を振るった日々。

自分は、あんなバカで下等な奴らとは種類の違う人間なのだ。いつか手柄を立て家を再興し、目にもの見せてくれる。……並み居る敵兵や魔獣モンスターに見立てて草木を薙ぎ倒し、空想に心を満たした。

あれは、孤独を認めまいとする痩せ我慢ではなかったか。

（……！）

昨日から何故気が塞いでいたか、アルガスはようやく気付いた。昨日のアルガスは、仲間外れにされたのではなくて、自分から、

差し伸べられた手を振り払ったのである。

ミルウーダを痛罵するアルガスに槍を向けたイクシも、夕べの酒盛りの時には何のしこりも残していなかった。

「おい小僧、何を一人で辛気臭いツラしてる？こっちに来と一緒に飲^やらんか」

「……」

「ほおーう。俺様の酒を断るとはいいい度胸……、」
とイクシが凄むと、

「……もとい、自分の適量は自分で把握しておくべきですよ」
と、通りすがりのバスカークが、すかさずアルガスの杯に香草茶^{コップハーブティー}を注いだ。

リユカも話し掛けてきた。

「隊長に助けられたな。しかし、酒でなくとも、大勢で飲んだ方が美味かろうよ」

「……」

「まあ、無理には誘わん。俺の所の副長も、浮かれた騒ぎの苦手な奴だ。いつもああして、一人で飲んでいる」

だがアルガスは、シーザのように自足していたわけではない。意地を張っていただけだ。

素直に飛び込んでゆけば、いつでもラムザの友人達の輪に加われたのに――。

” 由緒ある名家の跡継ぎとして、身分階級の秩序を正す”。

アルガスの望みは本当に、そんな大仰な大義名分を掲げて生きることなのだろうか。

本当はただ、他愛もない冗談を言ってふざけ合ったり、励まし合ったりする友達がいれば、それで充分だったのではないか？

（オレ、あいつらに非道いこと言った……！）

だが、今までの考え方を偽りだったと認めれば、姉への供養と思

ってしてきたことはどうなるのだろう。

（姉上。オレは、オレはどうすればいい……？）

アルガスは数珠^{ロザリオ}を握り締めた。

記憶の彼方から、姉は微笑む。

——アルガス。心を強く、明るく持っていれば、いつかきっと、あなたのことをわかってくれるお友達が出来るわ。……

——わたしがいつも神様にお願いしているのはね、あなたが笑顔でいられるように、ってだけ。……

（……！！）

明るい黄金色の髪に包まれた笑顔が、もう一つの笑顔に重なる。不意に、涙がにじんだ。

どうして忘れていたのだろう。一番、肝心なことを。

アルガスは、袖口でごしごしと目を拭った。

（あいつは……許してくれる）
多分。

（いや、絶対に……！）

追いかけよう。今なら、まだ間に合う。

ラムザが去っていっただろう東の地平線を見つめて、アルガスは手すりに腕を突っ張り、体を起こした。

と、その時。

「サダルファス殿」

突然、背後から声を掛けられて、アルガスは飛び上がった。

「は、はい？」

振り向くと、ダイスダーグの部下の騎士が立っていた。

？－5－〔3〕 天翔る白竜 ？覚悟（後書き）

おっかねー……。普段は漫才兄妹でも、騎士の家の子供達です。いざという時の覚悟は完了してるだろう、というお話でした。さて、ダリの役どころは、ゲームをプレイした方にはもうバレましたね、多分。”美女と野獣”第二幕は……。気が遠くなるほど先の話です……。 （くらくら）。

？－5－〔4〕 前編 盟友くバルバネスとファティマ？く（前書き）

忘れた頃にやって来る。「ラムザの父ちゃん純情編・Part 2」です。

今回は後書きがミニ短編のようになっていて、長いです。

？－5－〔4〕 前編 盟友くバルバネスとファティマ？く

レーゲンデを通過して、韋駄鳥チヨコボにまたがった三人の少年達は、マ
ンダリア平原に出た。

（くっそお……！化けモンか、こいつら！）

ガストンは息が上がっている。

午前中だけで、徒歩にして二日分の距離を走破している。

人にも韋駄鳥チヨコボにも負担の少ない、軽速歩の経済速度だ。宿駅毎に
韋駄鳥や人を代える急使ならば、駆け足で更に速度スピードを出せるかもし
れない。が、一人の人間が長距離を移動する速さとしては、最高の
水準ベースを維持していた。

リユカの”遠征”に鍛えられてきたガストンでも、経験したこと
のない強行軍だ。

しかしラムザとデイリータは、時々水筒の水を飲んだり頭からか
けたりはしているが、ほとんど汗もかかず、呼吸も乱していない。
ガストンが驚かされたのは、彼らの運動能力ばかりにはなかつ
た。

行く先々で、人々が飲み水や食料、地図を用意したり、誘拐犯達
と騎士団の動向に関する情報を収集したりして、少年達を待ち構え
ていたのである。

イグーロスへ帰る道すがら、既にラムザは各地の友人知人達に協
力を呼び掛けていたのだった。

成る程、これならば大人数を連れ歩く必要はない、とガストンは
納得した。

ティータと誘拐犯達に追い付けば、そこがラムザの行動半径の内
である限り、十人や二十人の戦力はいつでも現地で揃えられるに違
いない。

（舎弟千人を束ねる”陰の番長”カゲバンとかっつーのも、あながち出鱈
目じゃねえや）

ガストンは、背筋がぞくぞくしている。

ティータとディリータに申し訳ないとは思いながら、快い興奮が湧き上がってくるのを抑えられなかった。

ラムザは強い。

初めて出会った日から、そのことは知っている。

けれども、普段のラムザは眠れる獅子——ならぬ、アルマの表現を借りれば”満腹で冬眠中の竜”^{ドラゴン}とでも言おうか。

ラムザが全ての抑制^{セーフ}を外して、気力体力、人望、ベオルブ家の権力財力、持てる力の限りを投入すれば、どれだけのことを成し得るのだろうか。一度見てみたいと思っていた。

図らずも今、念願が叶おうとしている。

(遅れるかよっ……!)

一心不乱に草原を駆けるラムザとディリータに、ガストンは懸命に食らいついてゆく。

(見せてもらうぜ。百分^{パーセント}のてめーを!)

イルグリット村——。

赤銅色の肌をした南洋人の農夫が、村の門でラムザ達を出迎えた。

「そうですか。更に東へ……」

「けれど、ガリランドより東にゃ行ってねえはずですだ。スウィージ街道は昨日っから、蟻ん子一匹通さねえ見張りの厳しさですだよ」

「マンダリア平原のどこかに潜んでいるということは？」

「いんや、旅籠だの、森ん中の木こり小屋だのは、虱潰しに手入れが入ってますだ。多分、レナリア台地の方へ逃げたんでねえかと……」

ディリータがゆとりのない声で言った。

「多分、では困ります。確実な情報だけが欲しいのです」

「アダマンドまで行きゃあ、兵隊さん方がいっぱい集まってるだよ。わっしら村のもんより、兵隊さんの方が詳しくかる」

「……」

ディリータとラムザは目と目を見合わせる。

ザルバグの配下の騎士に見咎められる可能性があるが――。

「俺が聞き出してやらあ」

革帽子を脱いで冷たい井戸水を頭から被っていたガストンが、銀褐色の髪から水滴を振り飛ばして、言った。

「てめーらほど顔が知られちゃいねえ。何とかしてやる。ここですぐずしてても埒が明かねーだろ」

「うん。頼むよ、ガストン」

と、ラムザが答えた。

「大丈夫かい？ 疲れてないかい」

「ケツ、屁でもねーよ」

「”赤将星”^{ベテルギウス}はちよつとへばってきたな。君が”白将星”^{リゲル}に乗るといい。僕の方が軽いから」

荷重の違いだけではないだろう。

同じ年の兄弟韋駄鳥^{チヨコボ}・”赤将星”^{ベテルギウス}と”白将星”^{リゲル}はほぼ同じ能力だ。騎手の疲れの分だけ、韋駄鳥^{チヨコボ}に余計に負担がかかっていたらしい。

「ラムザ坊ちゃま、氣い付けなすってな」

「はい。有難う、ワインバーグ小父さん」

ラムザの手を取った、ごつごつと骨張った赤銅色の手を、ラムザは強く握り返した。

ワインバーグの妻と子供達が、携帯食と、ファティマ直伝の傷薬を少年達に渡す。

「ディリータ君、氣をしっかりと持ちちよ」

「はい……」

ラムザとガストンは、韋駄鳥^{チヨコボ}を取り替えて鞍にまたがる。

三人の少年達は手綱を引き締め、韋駄鳥^{チヨコボ}の腹を蹴って出発した。

「ハッ」

一家で少年達を見送るワインバーグの胸には、十八年前、ラムザの両親の仲を取り持った日のことが思い浮かぶ。

聖歴一一九一年、ドラコニア―。

「お館様ーっ！バルバネス様ーっ！」

一軒の田舎屋敷の庭先で休憩していたバルバネスの許に、ワインバーグはふいごのように荒い息を吐きながら転がり込んだ。

「お、お探ししましただ！」

「どうした？丁度これから、そっちへ行こうと思っていたところだ」
バルバネスは狩を終えたその足で、ドラコニア城から※^{セクタ}八里（※約六キロメートル）ほど離れた小さな温泉村に用意していた、ファティマの家に立ち寄るつもりだった。

ワインバーグは城門の近くで、先に帰された供の者達に会い、バルバネスの居場所を聞き出して急ぎ駆け付けたのだった。

「大変ですだよ！ファティマさんが、矢っ張り尼さんになると言いなすって、一人でお山に行っておしまいなすった！」

「何？」

「わっしら、勿論お止めしただよ。バルバネス様とよくご相談してから決めなすることだと、申し上げただ。けど、タバサがちょいと留守にした隙に……」

タバサというのは、つい先頃結婚したばかりの、ワインバーグの妻の名だ。

「何故また急に……」

「それが……、実は、しばらく前に若殿様が訪ねていらしただよ」

「ダイスダーグが？」

「何をお話なすったかは、わからねえだ。だども、ファティマさん、それからずっと考え込んでいらっしただ……」

バルバネスは、ううむと唸った。

「それで、ファティマはもう俗世と縁を絶ってしまったのか？二度と会えんのか？」

「いんや！いんや……」

ワインバーグは首を振った。

「お館様。どうぞ、ファティマさんに会いに行行ってやって下せえ

まし。訳を聞いてあげておくんなせえまし。わっしには、とてもフアティマさんの本心とは思えねえですだ」

「否やはない。よく報せてくれた」

バルバネスはファティマが向かったという隠者の集落の場所を聞くと、家の主人にワインバークを休ませてやるよう言い、すぐさま韃靼鳥チヨコボに飛び乗って駆け出した。

家の主人が食事と休息を勧めるのを、ワインバークは断った。

「いんや、わっしやあ、すぐに失礼さしていただきますだ」

林檎酒シードルだけがぶ飲みすると、上半身肌脱ぎになって、赤銅色の肩や背中に汗を光らせながら、バルバネスの通った道を走って追った。

ゼラセニア
是領での戦いは小康状態となり、ラーグ公は北天騎士団をガリオ
ンヌ領に引き揚げさせていた。むしろ、自領内での盗賊団や魔獣モンスターの
跋扈が看過出来なくなってきた頃だ。

ドラコニアに帰るに当たって、バルバネスはファティマに、修道
院には戻らず私の家族になってくれぬか……と申し入れた。

最初、ファティマは戸惑いながらも喜んだ。

——バルバネス様が、お父様になって下さるのですか!?

養女にしたいという意味だと思ったのだ。

——いや、その……”お父様”ではなくて、”旦那様”と呼ばれ
たいのだよ。

とバルバネスが言うと、ファティマの美しい顔がたちまち険しくな
った。

——嫌かね。一回り以上も年上のオジサンは。

——年は問題じゃありません。バルバネス様がそういうお方とは思
いませんでした。

妾になるなどまっぴら御免だ、と、ファティマは急に白い目でバ
ルバネスを見た。

決して戯れのつもりではない、天地神明に誓って、正式に君を妻
としたいのだ……と、バルバネスはかき口説いた。

ファティマの怒りは解けたが、代わって、困惑の表情が浮かんだ。
——身分が違いすぎます。

——身分は問題ではない。君の気持ちはどうなんだね？

——わたしの……気持ち……。わかりません。バルバネス様のこと
は、とても尊敬しています。でも……でも、結婚するなんて考えた
こともなくて……。

——今すぐ返事をもらおうとは思わんよ。ゆっくり考えておくれ。

ファティマはレーゲンデ大修道院には戻らず、湯治客の集まる小
さな温泉村で、診療所の老医師の助手をしながら日々を送った。

（ダイスダーグの奴、道理で……）

もうじき二十歳になる長男・ダイスダーグは、花嫁選びの真っ最
中だった。

いずれ話すことになるのだから、バルバネスは、再婚を考えてい
るということを長男に打ち明けた。

一生の大事であるから、お前もよくよく考えて納得のゆくように、
と話した。

その時は、ダイスダーグは特に驚かなかったし、非難めいたこと
も口にしなかった。相手がどんな女性かとも尋ねなかった。

父のことは父のこと、自分のことは自分のことと、突き放して見
ているようだった。

大人になって一人前の男同士になったから、ではなさそうだ。元
々、ダイスダーグは父に自分の意見や感情をぶつけてくることがほ
んど無かった。

次男・ザルバグは、まだ一人で韋駄鳥チヨコボに乗れもせぬうちに、狩
に連れて行けとせがむなど、聞き分けのない時があった。

母・マリーソフィアの病が篤くなってくると、戦地にいる父に手
紙を書いて呼び戻そうとして、兄や家臣達になだめられたそうだ。
十一歳の今日この頃は、背伸びをして父に挑戦的な態度を取るこ
ともある。

しかし、ダイスダーグには手こずらされた記憶が皆無に等しい。

長男は”手間のかからない良い子”だった。

あまり嬉しいことではない。どこか、父に対して他人行儀だったのである。

無理もない、とバルバネスは反省している。

ダイスダーグが生まれたばかりの頃は、デナムンダ？イヴァリース世王の指揮下、畏国軍は連戦連勝していた。占領した是領ゼラモニアの農業生産力も順調に回復しており、戦功次第で出世も恩賞も思いのままだったのである。

武功を立てることが国のため、また家族のためでもあると信じて、若き日のバルバネスは忙しく戦場を駆け巡った。

母親のマリーソフィアは病弱で床に伏せていることが多く、ダイスダーグの養育は、ほとんど乳母や家庭教師達に任せきりだった。伯爵家の跡取りとして四角四面に躰けられ、情を殺すことに慣らされてしまったのかもしれない。

そんなダイスダーグが数日前、珍しく、父に恨めしそうな目を向けた。

花嫁を決めたと、ダイスダーグは言った。

バルバネスには全く意外な相手だった。

縁談は幾つもあったが、バルバネスはどれか一つを息子に押し付けることはしなかった。もしも他に想う娘がいれば話をつけてやろう、とも言った。

もつとも、ダイスダーグは別段迷わないだろう、とバルバネスは思っていた。

義理の伯父――プリマヴェーラの夫――の親戚の、さる王家直属の近衛騎士の娘で、会う度にダイスダーグと親しく言葉を交わし合っている姫君がいたからだ。

家臣達や、ラーグ公の重臣達にも文句の無い娘だった。

ところが、ダイスダーグが選んだのは彼女ではなかったのである。他所様の娘を悪く言いたくはないが、どこが良いのかと首を捻ってしまふ。

極度に無口で、夫を助けて伯爵家を切り盛りする女主人としては内気すぎるように思われる。奥ゆかしいのを通り越して、何につけ反応が鈍くてじれったく、これといった特技があるという噂も聞いたことがなく、容姿もぼつとしない。

ただ、彼女は、その頃ベオルブ家とは反目し合っていた、ラーグ公の財務官の娘だった。

バルバネスには気付かぬ魅力があるのだろうと、思いたい。だが、ダイスダーグがこの年にして、結婚を政治の手段と全く割り切っているのだとしたら、面白くない奴に育ったものだと思った。

——本当に良いのか？

——私には私の考えがあります。私は、父上とは違うのです。

ダイスダーグの暗褐色の瞳に映った、僅かな感情の起伏。それも、さざ波程度で消えた。

あの時は意味を読み取りかねたが、ダイスダーグがファティマに会ったと聞いて、得心がいった。

父が再婚したい女性というのが、まさか自分より年下の、名もない平民の小娘とは思わなかったらう。

母の死に目にさえ武人としての公務を優先させて帰って来なかった父が、今になって私情に走るのか、と憤ったとしても仕方ないことだ。

自分はいくまでも公人として生きる、と依怙地な決意を固めたのかもしれない。

（あいつとは、よく話し合う必要があるな）

反発という形にしろ、ダイスダーグが父に関心を持ってくれたのは、いい機会かもしれないと思った。

だが兎に角、今はファティマのことだ。

ファティマが駆け込んだ寺院というのは、小高い岩山の上に建っていた。

急な斜面を、点在する小さな洞窟寺院や僧庵、貧相な段々畑が覆

っている。

修行僧と、特に敬虔な人々だけが自給自足の生活を送る、ひっそりとした宗教集落だ。

頂上の寺院の麓で、赤銅色の肌、黒い瞳の娘がバルバネスを待っていた。

「お館様！来て下すっただな。ああ、良かった……」

「タバサ」

ワインバークの妻は、木陰にバルバネスを手招きした。

「多分、お館様がいらしたと正直に言っても、ファティマさんは会って下さらねえだ。オラがファティマさん呼び出して来ますだから、ここに隠れていて下せえまし」

バルバネスは鞍を降り、韋駄鳥チヨコボの首を撫でながら木陰に身を潜めていた。

「よしよし……大人しくしておれよ……」

かつて、子供の頃の隠れんぼでも、オルダリーア鷗国軍の精兵を待ち伏せしている時でも、これほど緊張して、時の過ぎるのを長く感じたことはなかった。

やがて、耳慣れた声と、軽い足音が二組、聞こえてきた。

「だから……な？大事なお話ですから、人前ではちよつと……な？」

タバサがファティマをなだめすかして、寺院の門の外に連れ出した。

「あの……それで、バルバネス様は何て？」

「ですから、さア。こういう肝心なお話は、ご本人の口から直に聞いておくんなせえ」

バルバネスが木陰からぬつと姿を現すと、ファティマは碧い瞳を丸くして、アツと息を呑んだ。と、次の瞬間には、くるりと背を向けて走り出す。

「ファティマ！待ってくれ！」

バルバネスは石段を駆け上るファティマに追いつがらず、細い腕をつかんだ。

「離してっ……！」

ファティマは大きく息を吸い込み、助けを呼ぼうとした。

バルバネスは、後で思い出して自分でも呆れるほど、大胆な行動に出た。

ファティマが叫ぶ前に、その口を押さえて華奢な体を韋駄鳥チヨコボの背に担ぎ上げると、

「ハッ！」

韋駄鳥チヨコボの尻に鞭をくれ、一目散に山道を駆け下りた。

「うっひゃア」

タバサは赤銅色の肌にもそれとわかるほど顔を赤らめて、呆然とバルバネス達を見送った。

バルバネスとしては、ファティマがここで寺院の門をくぐってしまえば、二度と話し合う機会チャンスは無いと思ったのである。邪魔の入らない、落ち着いて話の出来る場所まで連れて行くだけのつもりだった。

しかし、ファティマには恐ろしかったろう。

バルバネスの思惑はわからない。このまま強引に連れ去って、腕ずくで妻にするつもりかもしれない、という危機感も持ったろう。

山道の凹凸は激しく、韋駄鳥チヨコボの背は揺れた。

手を離しても声は出せまいと思い、バルバネスはファティマの口を塞いでいた手で、鞍につかまった。

と、

「！」

ファティマはバルバネスの腕に噛み付いた。

「……っ」

バルバネスはファティマを抱えた腕を緩めなかったし、韋駄鳥チヨコボの速度スピードも落とさなかった。

まるで、人さらいの山賊にでもなった気分だ。

（やれやれ。シドの若い頃でも、ここまで無茶苦茶をやったことはなからうな）

バルバネスの無二の親友、”雷神”シドルファスⅡオルランドウ。悪友といってよい。

同じく伯爵家の御曹司でも、女三人の末に生まれた期待の総領息子と、明敏な兄を持つ気楽な次男坊という立場の差は、二人の性格にもくつきりと反映された。

——冗談の一つも言えん男はモテないぞ？

——冗談しか言わん男よりはマシだ！

士官学校時代から、顔をつき合わせば口論ばかりしていた二人だが、何故か気が合った。

シドも、根っからの軽薄な遊び人ではなかったということである。まだ二十代前半、幼いダイスダークから、絵だか字だかよくわからない初めての手紙をもらったばかりの頃。バルバネスは唯一人で、^{セラモニア}是領の城塞都市ウルヴァンの仮統治を任されたシドの許に、^{チヨコボ}韋駄鳥を駆ったことがある。

「シド。シドッ！シドルファスⅡオルランドウ！いるか！」

バルバネスは誰何の必要なく内堀の跳ね橋まで渡り、城に向かって声を張り上げた。

軍装のシドが、自らバルバネスを出迎えた。

「よお、バネス！よく訪ねてくれたな。早速茶を用意させよう。いや、酒の方がいいか？」

「茶も酒も要らん。今日は、事の次第によっては貴様と縁を切りに来たのだ」

バルバネスは、じろりとシドを睨んだ。

「な……何だ？いつにも増して真面目くさった顔をして」「黙れ。身に覚えが無いとは言わさんぞ」

シドは腕組みをし、頬を掻く。

「うーむ……。山ほどあって、どれのことかわからんのだが」

「そういう奴だったな、貴様は……！」

バルバネスは剣の柄に手を掛けた。

「おい、待て！せっかちだな。暴力に訴える前に、何を怒っているのかぐらい聞かせろ」

「ならば言ってみよう。侯爵夫人のことだ」

「ああ」

と、シドはほっと一息吐いた。

「安心しろ。エルムドア侯爵夫人の妹とは、ちゃんと別れたぞ。侯爵夫人にも納得して頂けたのだが、まだお前の耳には入っていないかったか」

「シラを切っているのか？それとも……！」

「別件なのか？他に侯爵夫人というと……」

「ここ、ウルヴァンの元城主！ウルヴァノ侯爵夫人のことを忘れたか！」

「おっ……」

と、シドは手を打った。

「そうか、そうか。お前も目が高いな。脂ののった佳い年増だぞ。お前になら喜んで譲っ……」

バルバネスは、遂に抜剣した。

「貴様という奴はっ……！大任ある身で、セラモニア是領領民に畏国軍の恥をさらす気かっ？

領主の責を代行して投降してきた貴婦人を、礼儀を以て遇さず、監禁し陵辱した挙げ句、物のように他人にくれてやるつもりか！

貴様の助平心のために、セラモニア是領人が矛を逆しまにしてオルダリーア鷗国側に付いても構わんと言うのだな……！」

「こら、早まるな！話せばわかる！」

「問答無用っ！」

仕方なく、シドも剣を抜いた。

「不動無明剣”ッ」

バルバネスは金縛りに遭って、膝をつく。

「くっ……。何故貴様のような不潔漢に”聖剣技”が使えるのか、不思議でたまらん！」

「まあ、落ち着け。俺は確かに女好きだが、未だかつて、嫌がる女を無理矢理手籠めにしたことなどは無い。それは、お前も知っているだろう」

「話に聞いてはいる。が、貴様の女出入りを逐一この目で見たわけではないからな」

「俺はそんなに信用が無いか。悲しいぞ友よ！」

「日頃の行いを振り返ってみろ。友の信用を勝ち得られる己と思うか？」

「……、それはさておき」

シドの説明したところによると――。

ウルヴァノ侯爵夫人は、先代ウルヴァン城の城主の一人娘であった。城主の信頼厚い家臣の一人を婿に迎え、次期ウルヴァノ女侯となるはずだった。

しかし、城主と婚約者を殺して押しかけ婿となった僭主ウルヴァノ侯が、恐怖政治を敷いたのである。

ウルヴァノ侯の目的はウルヴァン城のみにあった。侯爵夫人には結婚後数週間で飽きて、公然と愛妾を城に住まわせていた。

ただ、ウルヴァン城の統治権の正当性は夫人との婚姻関係に依っている。そこで、夫人が逃げ出さぬよう城の塔の一つに軟禁した。

夫人は八年間も、自分の城の中で囚人同然の不自由な生活を送った。

民心は全く侯爵から離れていた。冷酷な近衛兵団の武力を怖れていたに過ぎない。

だから領民はむしろ、ウルヴァノ侯を追い落とした畏国軍イヴァリースを歓迎したのだった。

「……というわけなのだ。夫人にとっては父と婚約者を殺した仇敵でこそあれ、ウルヴァノ侯を夫などと認めてはいないそうだ。

愛人を連れて遁走した侯爵がこのこ舞い戻ってきてても、決して城に入れてくれるなど、街の長老達から嘆願されたぞ」

「なんと……」

「ウルヴァノ侯が巻き返しを計って、色々と工作しているらしいな。侯爵側がばらまいた噂を聞きつけてすっ飛んできたのだろうか……、俺が信じられなければ、適当に城下の人間をつかまえて話を聞いてみる」

「いや、わかった。疑ってすまなかったな」

バルバネスはシドに頭を下げた。

「では、夫人とのことも……？」

「無論、俺が強要したわけではないぞ。彼女の方から側に居てほしいと言い寄られたもので、有難く逗留させてもらっている次第だ。

警護を厳重にして外出を控えさせているのはな、侯爵の間者が暗殺や誘拐を企てるのを用心してのことだ」

「……、手を付けたのは本当なのか……」

バルバネスは深い溜め息を吐いた。

「ははっ、お前はお堅いな。ソフィア殿は果報者だ。それともまさか、楚々としているようで、実は姉上達よりも怖いのか」

「まさか……。お前もいい加減、身を固める気にならんのか」

シドは、少しだけ真剣な表情を覗かせた。

「俺は、本気で愛してもいない女に子を産ませるつもりはない」
わざと、格好をつけて言ったが。

次男とはいえ、ゴルターナ公の重臣・オルランドウ伯の子息だ。政略結婚の申し入れは数限りなくある……。いや裏返して、政略の絡まぬ結婚話は一つとして無い。

のらくらと遊び回っているだけのように見えるが、彼の芯は、曲がったことが大嫌いな質^{たち}である。虚々実々の政争を煩わしく思っているらしかった。

「……。で、気ままな独身生活を謳歌している、と？」

「そういうことだ」

「ふざけた奴だ。一説には、お前がいつまでも結婚しないのは、お父上がお前を枢機卿にさせるつもりだからとも聞くが……」

ミュロンド正教派の”教会の君主”たる枢機卿は、高位の聖職者

であり、妻帯を許されない。

「うーん、そんな噂もあるなあ」

「まさか、事実ではあるまいな。お前のような不埒者が枢機卿に任命されるようであれば、俺は信仰を捨てるぞ」

「まさか。はっはっは！」

シドは手を叩いて笑い転げてから、ぴたりと笑い止んだ。

「お前くらいだぞ、バネス。枢機卿が傾城買いをしようが、聖騎士が修道院を焼き討ちにしようが、おかしく思う奴の方が変人扱いされるご時世だというのに」

「そうか。だが、茶化しながらでも俺の話に耳を傾けてくれるのも、お前くらいだ。シド」

「そうか」

「そうだ」

バルバネスとシドは、ニツと笑い合った。

「中へ入って、茶を飲んでゆけ」

「ああ。馳走になる」

親友同士は肩を組み、石造りの城に入った。

さしものシドも三十になって、とうとう手強い美女に首根っこを押さえられてしまった。

シドの兄には幾人も庶子はいたが、嫡子が無かった。兄が戦死し、父が病没して、あれよあれよという間に、バルバネスよりも先に伯爵位を継承する羽目になったのである。

ソフィアが亡くなる前に一度、シドは妻とよちよち歩きの娘を連れて、イグーロスに見舞いに来てくれた。

——自分から首輪につながれたがる奴の気持ちが変わらんと、思っていたが……。

——わかったか？

——ああ。ようやくな。

母親似の愛らしい娘を膝に乗せたシドは、臆面もなくのろけたも

のだ。

（夫婦の形を取っているから誠があるとは限らない。型に外れた恋だから不実とは限らない。わかっていなかったのは、私の方かもしれない……）

ファティマに噛まれているバルバネスの狩装束の袖には、血がにじむ。

？－5－〔4〕 前編 盟友（バルバネスとファティマ？）（後書き）

アマチュアで良かった、という回です。ワインバーグの回想から始まって、バルバネス視点に移り、更に回想でもう一つ時代を遡る。プロならこんな、無茶な構成は許されません。……って、アマでもあまり許されませんね、読みづらくてすみません！

さて。イメージ違いキャラぶつちぎりの第一位は、シド様だと思います！ごめんなさい！

キャラ成分表示その5・シド様

？強すぎ！…最初にゲームをプレイした時以外、シド様はほとんど使いませんでした。強すぎて、作戦を考える楽しみがなくなるから！彼は、初心者でもクリアー出来るようにとの”最終兵器”です。物語に組み込むにも……。またにも描いたら、指輪物語で喻えるならば、剣豪アラゴルンと賢者ガンダルフを一人で兼ねてしまっているようなお方。

”実力はあるんだけど、若いもんをこき使ってグータラしてる、お茶目オヤジ”ぐらいに設定しとかないと、主人公のラムザの出る幕がなくなってしまうっ！

？女の子に弱い…どこでそんなイメージが出来てしまったかという
と……。

ランベリー城の城門で、見事に美人アサシンのチャームに引っ掛かって、ムスタディオ一撃で倒してくれちゃって。「シ、シド様、シャレにならないっすよー！」ヘイスト状態だから、放つとくと更なる犠牲者が……！

やむなく算術ホーリーで、ラムザ諸共アサシンコンビに止め刺しました。シド様も一緒にくらったけど、聖属性のエクスカリバー装

備ゆえピンピンしてるし……。

いえ、チャームを防ぐン・カイの腕輪装備させなかった私が悪いんです。わかつちやいるけど、もうすっかり私の中じゃこんな感じ…

「このシドルファスⅡオルランドウ様はな。エクスカリバーの一振りで敵を倒し！ウインク一つで女の子を倒し！オヤジギャグ一発で味方を倒す！と恐れられた男だぞ。わーはっはっは……！」

バトルの出撃準備してる時にも、つついこんな会話が思い浮かんでしまったり……。

（音楽…チャーラーラーラーラー……）

ム…シドさん、敵襲ですっ！頼みますっ！

シ…うーむ、今朝から持病の腰痛がひどくてのう……。まあ、女の子達全員が一ぺんずつチューしてくれるというのでもあれば、無理を押して頑張っちゃわないでもないが……。

ラム…（きっぱり）いえ、結構です。シド様はどうぞ、ゆっくりお休みになって下さい。ラッド、マラーク、行こう！

シ…おお、敬老心の厚いことだ。バルバネスよ、お前の息子は立派に育っておるぞ。……さてと、今日のマッサージはだ・れ・に・して・も・ら・お・う・か・な……と。よし、ラファちゃんに決めたぞっ。

メ…（ひそひそ声で）ちょっと、まずいんじゃないの？ラファにふざけたオヤジの相手をさせるのは。

アグ…うーむ、大公とのことがあるからな……。辛いことを思い出させてしまうかもしれん。仕方あるまい、ここは私が代わりに……。

ラヴィ…ダメッ！いけません、アグリアス様、自分を捨てちゃあ！腰痛ぐらい、アタシが”気孔術”でちゃっちゃと手当てしちゃいますからっ！

アリ…いーえ、あたくしが”エスナ”でっ……！

シ…おお？女の子達が順番争いしておるのか？さては、儂の”全剣技”のカッコ良さにしびれておるな、ふふふ。（男性陣に向かって）おーい、矢っ張り儂も出撃するぞ。モンスターども、我が名剣エクスカリバーの下に露と散るがいい！

パーティー一同…はぁ…あ……（深い溜め息）。

すみませんすみませんっ！！いえ、要所要所ではきちんと、長老としての貫禄を示してくれるはずです。

……。それとも、意外と皆さん、こんなイメージでしたか？？

？－5－〔4〕 後編 継ぐ者ゝバルバネスとファティマ？ゝ

岩山の裾野に広がる疎林の中の、枯れ草のしよぼしよぼと生えた川原で、バルバネスはファティマを韋駄鳥チヨコボから下ろした。

秋の陽はまだ色付いてはいないが、急速に西へ傾きつつあった。

川は浅く透明で、落ち葉の動きで下流の方向がわかる程度に、緩慢に流れていた。

ファティマが川を渡って逃げようとしたので、水飛沫が上がり、鏡のような水面は波立った。

バルバネスは、ファティマの両肩を強くつかんで引き止めた。

「ファティマ、落ち着いてくれ。何も乱暴なことをするつもりはない」

「もう充分なさってますっ……！」

ファティマは激しくもがいた。

「君の決意が固いならば、邪魔立てはせん。しかし、私に最後に話し合う機会もくれないというのは、あんまりじゃないかね」

「……」

ファティマは俯いていた。

「バルバネス様にお会いすれば……心が挫けてしまいそうで……」

「おい、おい。私に一目会えばぐらつくような、そんなあやふやな気持ちで信仰の生活に入ろうというのは、神様に対して失礼なことだとは思わんか」

バルバネスを見上げた碧い眼から、どっと堰を切ったように涙が溢れ出た。

バルバネスは川原の倒木に外套マントを敷いて、すすり泣くファティマを座らせると、自分もその隣に腰を下ろした。

ほっそりと華奢な肩を撫で付けながら、ファティマが大人しくなるのを待って、優しい声で尋ねた。

「ダイスダーグに何を言われた？」

「ダイスダーク様に責められたのじゃありません。自分で考えて、決めたことです……」

ファティマは頭を振った。

「バルバネス様は、イヴァリース畏国軍になくはならぬ將軍様です……。わたしのような者がお側に上がれば、お仕事に差し障ります。

わたしは、バルバネス様の枷になりたくありません。多くの人を犠牲にして、自分だけ幸せになれるとは思いません……」

長い睫毛を伝って、ぽたりぽたりと涙が膝に落ちる。

「ふむ？何をどうすると、他人を犠牲にするという結論になるのかわからんが……」

バルバネスは、ファティマの黄金色の髪を撫でた。

「ファティマ。私は”いい年をした小父さん”だよ。春秋に富んだ君に言うのは、少し寂しい気もするがね。君の見た目の美しさにのぼせ上がるほど、若僧ではないのだ。

個人的な感情が責務を全うする妨げになる時は抑えることぐらい、学んでいる。

私はな、むしろ君と結婚することは大勢の人達の幸せにつながる
と、考えておるのだよ」

「えっ……。どういうことですか？」

ファティマには意外な言葉だった。

「ファティマ。騎士の務めは、民を脅かすものと戦うことだ。

私は戦働きしか能のない男だが、近頃ようやく、モンスター魔獣やオルダリーア鷗国の軍隊以上に国を損なっているものの正体が見えてきた。私が一生かけて戦ってゆかねばならぬ真の敵がわかった……。

それは因習だ。形骸化した秩序だ」

バルバネスが”風神”將軍の異名で呼ばれるようになるのは二十代後半、北天騎士団団長の地位に就いてからのことだ。が、その下地は、士官学校を卒業して是領戦線に赴くようになった、二十歳そこそこの頃から作られ始めていたといえる。

バルバネスはある日、駐屯地付近の幾つかの村の村人達が、畏国イヴァリース軍に対し反乱を企てている……との情報を、密告によって得た。

さて、どうする。

いきなり首謀者とされる者達を捕らえて訊問し、もし誤報であっても。あるいは、父に報告して指示を待ったり、草スパイを使って事実確認したりする間にも暴動が起き、それを鎮圧することになっても禍根を残すだろう。

バルバネスは――父のカルダックには後で、無謀だと叱られたが――単身、彼らの話を聞きに行った。

何か困っていることがあるなら、忌憚なく打ち明けてくれ。

始めのうちは警戒していた村人達だったが、ぽつりぽつりと、やがて口々に、畏国軍イヴァリースへの不満を訴え出した。

糧秣の取り立てが厳しすぎる。

その話自体は、初耳ではなかった。兵站部の担当者が、兵糧の徴集が思うように進まない、是領人達セラモニアは吝嗇ケチである、怠惰であると、こぼしていた。

しかし、村人達の言い分を聞いてみると――。

降雪量の多い是領セラモニアでは、そもそも冬の期間が畏国イヴァリースよりも一ヶ月ほど長い。加えて、峠道の雪解けが遅れたり、あるいは春先の増水で橋が流されたりすると、他の村や町と交流出来ない期間は簡単に二、三週間は延びてしまう。冬期の備蓄は、畏国本国イヴァリースでの感覚よりも二ヶ月分ほど、余分に必要なのだ。

特に薪炭材は、野山も道路も雪に埋もれてしまう是領セラモニアでは、冬の間に不足すると、拾ったり買ったりして補充することが困難である。秋のうちに余裕を持って備蓄しておかなければ、食糧品以上の死活問題にもなる。

また、そのような土地柄であるから、塩や砂糖、蒸留酒、酢などの保存料の消費量が多い。軍隊などが一カ所で大量に買い付けると、たちまち値が高騰し、生活を直撃してしまう。

成る程、一々もつともであるとバルバネスは思った。

イヴァリース

畏国の騎士達のほとんどは、渡り鳥のように秋になると本国に帰ってしまうか、冬を越すにしても比較的気候の穏やかな平地の街などで過ごす。厳冬の山村の生活実態に疎かったのだ。

セラモニア

村人達の話から見えてきたのは、山がちな是領という土地では、交通の便の悪さが宿命的な問題点である、ということだった。

イヴァリース

自給自足出来ない物は、畏国人の想像以上に不足しやすく、すぐに値段が乱高下する。冬期に限らず、物資は本国から輸送するなり、大量に出回る時期や場所を見計らって備蓄しておく必要がある。

また、例えば峻険な山を二つ越えた”隣村”よりは、舟で楽に移動出来る数十里も離れた村同士の方が仲が良いこともある。賦役や兵役を課す時は、単純な地理的距離よりも、時間的・文化的に”近い”地域の者同士を組み合わせた方が揉め事が少ない、ということもわかった。

セラモニア

どうやら、是領の村や街は、それぞれが緑の樹海に浮かぶ”島”だと考えるべきもののようだ。と思って、バルバネスは詳細な”海図”の作製に取り掛かった。

それぞれの場所で多く産する物、逆に不足しがちな物は何か。様々な経路の移動にかかる時間、また手段は何か。……

後に北天騎士団団長に就任する頃には、この”海図”が大いに役立つ水準にまで充実していた。迅速に人や物資を集め、最短の経路

レベル

セラモニア

で移動させることが出来たし、是領人同士の住民感情を利用して、

オルダリア

イヴァリース

鷗国の支配下にある村を畏国側に引き入れることもあった。

半年はかかると言われたディアドラ城攻略を僅か三週間で成し遂げた時には、魔法のような早業であると、敵も味方も驚嘆し、バルバネスを”風神”将軍と呼んで誉め称えた。

しかしバルバネス自身は、当たり前のことを積み重ねてきた結果であると思っていたから、絶賛の嵐の中にあっても、大袈裟に世辞を言うものだと聞き流していた。

むしろ、会う人毎に誉められるうちに、バルバネスは不愉快にも

不安にもなった。

自分が”当たり前”と思って実践していることを、他の者達はやっていないのか？

どうも、そのようである。

畏国^{イヴァリース}本国や紗国^{ベシヤ}での軍事経験の長い者ほど、補給を軽視する傾向があった。補給線が長く伸びるのは危険である。とか、備蓄を多く抱えるのは保存や輸送の無駄^{ロス}が多い、現地調達を基本とすべきである。とかいった、平地での”常識”から抜け出せないのだ。

実際には、海路を利用すれば四〜六日ほどで、畏国^{イヴァリース}からは是領^{セラモニア}に安く大量に物資を輸送することが可能なのだが。急流で遡るのは困難だと思われがちな是領^{セラモニア}の川も、風向きが合う時期には、帆を張るだけでほとんど漕がずに上流深くまで辿り着ける。

食糧なども現地での方法に倣って、乾麺^{パン}や干し肉等は固く、漬物等は塩辛く作っておけば、無駄にすることはまず無い。と、いうよりも、そうしておかねばいざという時に不足する。

バルバネスが口を酸っぱくして備蓄の重要性を警告しても、耳を貸さず、砦を放棄せざるを得なくなったり、兵や是領^{セラモニア}の農民達を飢えさせたりするのだ。

また、士官学校^{アカデミー}で戦術の成績の良かった者ほど、理論に囚われて現場の状況に柔軟に対応出来ない、という皮肉な現象も起きていた。バルバネスは、戦術の成績は悪かった。

例えば。一日の移動距離を平野^{セクタ}で何里^{セクタ}とした場合、この地図で甲軍と乙軍が交戦するのは何日後で、戦場はどこになるか……という問題があったとする。

他の者が十日後と答える所で、十一日後という答えを出すのがバルバネスだった。

十日も行軍し続けておれば、悪天候の日もある。最後の方では兵や韋駄鳥^{チヨコボ}の疲労も溜まっている。だから一日ぐらいは余分にかかるだろう。あるいは――、両軍ともただ闇雲に前進しているわけでは

あるまい、斥候を放って敵軍の位置を確かめているだろう。甲軍は動きやすいこの辺りの平野で進軍を止め、布陣して乙軍が来るのを待ち構えるのではないか。

……といった調子で、ついつい”余計なこと”を考えて”正解”から遠ざかってしまう。

——お前は有能な参謀を見つけた方がいい。と、教官からも級友達からも散々言われた。

成る程、俺は間抜けらしい。と、自分でも思ったから、バルバネスは何をするにも、まず他人の話を聞くことから始めた。

先輩の騎士達、村や街の長老達に教えを乞うたし、副官や、千騎長百騎長達の意見もよく聞いた。領民達の暮らし向きについても、^{スパイ}草を使って調べさせるだけでなく、ちよくちよく祭り等の行事に顔を出したり、時には狩人や傭兵の格好でぶらりと街を歩き回ったりして、直接対話することを心掛けてきた。

また、こいつは能力があると見込めば、現場責任者に大きな裁量権を与え、細々した指図はしなかった。

ところが、なまじ己の才覚に自信のある者は、現場の声を汲み上げようとしない。しかもそのような者に限って、これは^{ゼラモニア}是領人自身の問題であるなどと、労力負担や最終責任を現地の人間に押し付けるのだった。

^{オルダリア}長年鷗国に収奪され続けても、彼らは何とか生活してきたではないか。圧制者を追い払う^{イヴァリス}畏国軍に物資や労力を供出することくらい、耐え忍べるはずだ——というのが、彼らの論法であった。

何を寝ぼけたことを、とバルバネスは思う。

何とか生きてこられた、のではなく、それではとても生きてゆかないから、^{イヴァリス}畏国軍の介入を求めたのではないか。

^{ゼラモニア}是領農民達の生活は貧しい。寒さの厳しい土地であるのに、子供達はぼろ雑巾のような弊衣に裸足で、親の畑仕事を手伝っている。木の皮草の根、凶作の年には死者の肉さえ食べて飢えをしのぐ。

ディアドラ城を落とした直後にも、住民達の衛生状態の悪さは目

に余った。すぐさま蔵を開いて、病人や栄養失調の子供達を中心に粥や衣類を配給したり、新しい井戸を掘って安全な飲料水を確保したりさせたほどだ。

もし、イヴァアリス 畏国軍がオルダリーア 鷗国と大差ない搾取を行えば、セラモニア 是領の人々は遠からず、イヴァアリス 畏国軍にも反旗を翻す。

イヴァアリス バルバネスの危惧はそれだけに留まらなかった。

イヴァアリス 畏国の騎士達の感覚が、骨と皮ばかりの赤貧のセラモニア 是領農民達から糧秣を絞り取ること慣れてしまえば、いずれ彼らは、自領の領民達にも同じ生活水準を強いて恥じなくなるのではないか。

イヴァアリス 歳月は流れ、若き日のバルバネスの予感は的中しつつある。

イヴァアリス 畏国の形勢が不利になるや、オルダリーア 是領の諸都市は相次いで自治独立を宣言したり、またイヴァアリス 鷗国に寝返ったりした。

イヴァアリス 畏国の租税率は、アトカーシャ王朝始まって以来最高の水準に達し、なお年々引き上げられ続けている。農民一揆や、盗賊団出現の件数が、飛躍的に増えていた。

「私のしていることは、何も特別なことではない。やろうとさえ思えば、他の者にも出来ることばかりだ。しかし他の者は、やろうと思わんのだな。勝つことを望みながら、みすみす負ける道を選ぶ。いくらでも他に方法のあることを、動かせぬ前提と思い込んでおるのだ。あるいは、他にやりようのあることを知りながら、既得権を守るのに躍起となっているのだ。

君も戦地で、そういう不条理を沢山、目にしてきただろう」

「はい……」

戦場は、いわば医療技術の実験場だった。

日々大量の、様々な種類の怪我人、病人が発生する。

限られた資材や薬で少しでも多くの人々を救うために、医師、薬師達は工夫を凝らし、新しい薬や治療法を発見してゆく。

ところが――。

クレリック 神官医は法皇庁の定めた方法に従い、医療行為を行う。

その法皇庁がなかなか、より有効な、または応急の代用になる薬や治療法を認めない。

効能が確かでないから、という場合もある。が、明らかに旧来の方法より効果がある場合にも、規定が改められないことがある。

しばしば、身分の高い評議委員が、旧法の誤りを認めることで、自分や教会の権威を落とすのを恐れるのだ。

本来、神官医クレリックの制度は、信頼のおける安全性の高い医療を提供するはずのものであった。民間の医師の中には、効能の怪しい薬やまじないを用いて、法外な報酬を要求する者もいる。教会が免状を授けることで、医療の質を保証していたのだが……。

五十年戦争後期頃から、黒死病ペストで優秀な神官医クレリックが相次いで死去し、評議委員会は頑迷になっていった。常に最先端の研究成果を取り入れ続けてきたはずのミクロンド正教派教会の医学は、次第に時代遅れの迷信になり始めていたのだ。

法皇庁の規定に従うことよりも、患者を助けることこそ神の御心に適う。そう信じた数多くの神官医達クレリックが、神官の身分を返上して敢えて民間医となったり、教派全体の統一規定の無い呂国ロマンダ旧教派の修道院に弟子入りしたりした。

ディリータ王の没後、そのような“神官医崩れ”の民間医数百名が“異端者”として処刑され、短期間“医学暗黒時代”が訪れたが、歴史の流れは逆行しない。

助けられるとわかっていても、“邪法”を施すことをためらう神官医クレリックもいる。

しかしファティマは、望む者には法皇庁の規定には無い治療法も用いた。

——大丈夫ですよ。神様は、天罰を下したりはなさいません。きっと、貴方が元気になって、また御家族と神様のために働けるようになることの方を、喜んで下さいます。

と、患者を励ました。

だが一方、命に関わるとしても頑として“邪法”を拒む者もいる。

その時は、ファティマは患者の意思に逆らわなかった。

薬は、百発百中、誰にでもどんな場合でも効くとは限らない。まして、まだ魔学的人体研究の未発達だった時代である。本人の望まぬ治療を行って、もしも効き目がなく死亡したり後遺障害が残ったりした場合、患者や家族に諦めがつかないだろう。

それに、どんな薬よりも本人の気力が症状を左右することも多いのだ。

けれども、効果が無い——どころか、かえって症状を悪化させることがわかっていっているような”治療”を施すのは、たとえば患者本人が満足していても、ファティマには辛かった。

——治る見込みのある方を、神様の国にお送りする時は……本当にこれで良いのかと、悩んでしまうんです……。

ファティマは、バルバネスにそうこぼしたことがある。

「戦場で剣を振るい兵を率いることも、君を妻に望むことも、同じ心の現れなのだ。

私は、相容れないことだとは思わんよ。

私がいつも考えているのは、私の治める領民達、更に広くは祖国の人々が、より幸せに暮らしてゆけるようにということだ。

もし……私の方法が間違っていた時は、ダイスダークがあいつのやり方で、民を守り導いてくれるだろう。あれは、私とはまた全く異なる信条の下に生きる、強い男だ」

バルバネスは剣だこのある固い手で、ファティマの小さな荒れた手を取った。

「ファティマ。私は君に、共に戦う同志であって欲しい。こんなことを言える女性に出会ったのは、初めてだ。

男にも、私の考えに理解を示してくれる奴はそう多くない。南天騎士団のシド……あいつくらいだな、友と呼べるのは……。

私はな、祖国を土台から腐らせようとしている、古い制度や考え方で戦ってゆこうと思うのだよ。

家柄や民族による偏見も、その一つだ」

七つの小国が統一されたことで、人や物、技術の交流が活発になり、^{イヴァリース}畏国は豊かな国になった。

^{ベシヤ}紗国戦争から五十年戦争前期までは身分も流動的で、努力次第で奴隷や小作農から自作農に、傭兵から騎士に、下級騎士から大貴族になれる機会もあると、人々は希望を抱いていた。

ところが長引く戦争の中、一つの国としての連帯感が強まるにつれ、今度は^{セラモニア}是領や^{ベシヤ}紗国、^{ロマンダ}呂国等の諸外国に対して排他的になり始めてしまった。

新たな土地の獲得が頭打ちになると、父祖の土地を受け継いだ二代目三代目達は、身分を絶対視することで自らの利権を守ろうとした。

^{イヴァリース}畏国の文化や産業は、停滞期を迎えようとしていたのである。

「移民や国際結婚を排除することが”愛国的”だとは、私は思わんな。私はむしろ、デナムンダ？世王の建国の精神を見習おうとしているつもりなのだが……」

君は素晴らしい人だよ。髪や眼の色のことや、生みの二親のわからないことで君を卑しむ者こそ、心が卑しいのだ。

だいたい家柄を鼻にかける奴などは、戦場へ出ても、能力も無いくせに威張りちらして無駄に兵を死なせる……。

今この時期に君と出会ったのも、神の思し召しかもしれん。

私自身が当事者として、率先して異質なものを受け入れる姿勢を示し、理不尽に人を苦しめるものを少しでも取り除く方法を探ってゆけるならば、大いに意義のあることだと思う。私達が幸せな家族であろうとすることは、きっと、様々な人達にとって生きやすい世の中を作ってゆく役に立つ」

ファティマは碧い瞳で、じっとバルバネスを見上げていた。

「私のなそうとする仕事が、とても私一人の人生のうちに完成を見ることがないのはわかっている。非常に長い時間と、大勢の人の力の要ることだ。だが、この仕事に私のささやかな力の限りを投ずることは、決して無謀でも無益でもないと思じている……」。

ファティマ。どうか、側にいて私を手伝って欲しい。そして、私の志を継いでくれる子を、共に生み育てておくれ。頼む」

「……」

ファティマは俯いた。

「バルバネス様、ごめんなさい……」

矢張り断るつもりかと、バルバネスは一瞬どきりとさせられたが、そうではない。

顔を上げたファティマは、微笑んで、嬉し涙を拭いた。

「尊敬してるって言ったのに、わたし、バルバネス様のお心がわかってなかったんですね」

ファティマはバルバネスの肩を抱き、白いものの混じる栗色の髪に頬を押し付けた。

「わたしは生涯、バルバネス様のお志に添います。お側にいさせて下さい……」

「ファティマ……」

バルバネスも、ファティマの細い背中を抱き締めた。

バルバネスの韋駄鳥チヨコボは川の水を飲んでいたが、クエと鳴いて二人の方へ歩いてきた。

赤い夕陽が草原の丘に沈む頃、ワインバーグは岩山に辿り着いた。

「だから、かどわかしでねえと、言っとるべ！」

集落の広場に人だかりが出来ていると思ったら、真ん中にいるのはタバサだった。

「オラは逃げも隠れもしねえど。お館様は立派な騎士だ。お話が済んだら、必ず戻って来なさるだよ！」

ワインバーグは村人達、修行僧達を押しつけ——というより、赤銅色の肌の大男がすごい勢いで走ってくると、人々は飛びのいて道を空けた——妻に近付いた。

「タバサ！」

「あーんた！」

神の従順なしもべ達であるから、不当な差別を行わないというものでもない。かえって、異民族・異教徒への迫害が厳しいこともある。

村人達が皆怖い顔をしているので、ワインバーグは警戒した。

「どうしただ？ お館様とファティマさんは？」

「それがさア……」

と、タバサが説明するには及ばなかった。

韋駄鳥チヨコボに乗った二人の長い影が、山道を登って来る。

バルバネスの腕の中にいるファティマが穏やかに、幸せそうに微笑んでいたで、ワインバーグはほっと胸を撫で下ろした。

「いや、お騒がせして申し訳ない」

韋駄鳥チヨコボを降りたバルバネスは、若者のように照れた顔付きになって言った。

「この上あつかましいかとは存ずるが……、ここは一つ、私達に結婚の祝福をして下さらんか」

僧達も村人達も驚き呆れたが、バルバネスの話を聞くと、温かく二人を祝福してくれた。

ずっと後々のこと。

——父さんと母さんはレンアイケツコンだよね。

と尋ねるラムザに、ファティマは笑って答えたものだ。

——とーんでもない。ああいうのは略奪結婚っていうのよ。ワインバーグ小父さん達も、人さらいの片棒担いだのよ。

幼いラムザは不安がった。

——母さん、父さんと結婚したくなかったの？

——ううん。ううん、そうじゃないわ。

ファティマは愛息子を膝に抱え上げ、彼女そっくりの金髪頭を撫でながら言った。

——母さん、ちょっぴり臆病になってたのね。あの時父さんが”さらいに”来てくれて良かったわ。ラムザとアルマの母さんになれ

て、本当に良かった。

——うん！僕もね、母さんが僕の母さんで、本当に良かった！
ラムザは伸び上がって母に口付けした。……

ラムザとディリータ、ガストン。三人の少年達の姿は豆粒のように小さくなって、草原に吸い込まれてゆく。

ワインバーグは目頭を押さえ、鼻をすすりあげた。

（バルバネス様、ファティマ様……。どうぞ、天国から御覧になって下せえ。

坊ちゃまは、まっこと、ええ子に育ちなすった……。お父^と様の勇気と、おっ母^か様の優しさを、確っかに受け継いで……）

指を組み、頭を垂れて、ワインバーグは一心に祈った。

（アジヨラ様。聖母様……。

どうぞ、坊ちゃまをお守り下せえまし。ティータちゃんを助けてあげて下せえまし。

どうぞ、どうぞ……）

目を開けると、砂金のような黄金色の光の点が、丘を越えて消えるところだった。

アダマンド——。

村外れで、韋駄鳥^{チヨコボ}に乗った騎士達がラムザ達を待ち構えていた。

「よお。やっと来たか」

ガラフ、イクシ、バトー、リュカの、四人の青年騎士達だった。

「先輩方……」

「ザルバグ様から、お前をイグーロスに送り返せってお達した」
ラムザは韋駄鳥^{チヨコボ}に足踏みさせながら、

「通して下さい」

「はい、ってわけにいくかよ？」

「では、お願いはしません。通ります」

静かな闘志をたたえた目で、四人を見回した。

「ガストン。やる気か？」

リュカがガストンを見つめた。

「当ったり前っす」

「俺と闘^やって勝ち目があると思うか」

「やってみなけりゃわかんねーっすよ」

「頭の悪い奴とは思っていたが……」

「やりもしねえで引き下がるぐらいなら、コイツに付いてきてねえっす！リュカ様が相手でも、譲らねーっすよ！」

「……バカが」

リュカは佩剣の鞘に手をかけた。ガストンも、左手の親指で剣の柄を押し上げた。

と、リュカは自分の剣を鞘^{ベルト}ごと帯から引き抜き、ガストンに放って寄越す。

「!？」

「餞別だ。持って行け」

リュカの剣を受け取ったガストンは、目を白黒させた。

ガラフがニヤニヤ笑う。

「俺らは通るのを許しちゃいないぜ。だけど、お前らは勝手に通ってっちまうんだよなあ」

バトーが、三人の少年達からは顔をそむけ、大きな声でイクシと

”立ち話”を始めた。

「嬢ちゃんをさらってった奴はグラゴロスと言ったっけなあ、赤孔雀？」

「ゴラグロスだ、筋肉バカ。残党をかき集めながら、ウィーグラフと合流しようとしているようだな」

「ジークデン砦に通じる道というと、レナリア台地からフォボハム平原に抜けて、東から遠回りする路^{ルート}ぐらいしか残っていないだろう」

「ああ。マンダリア平原の要所要所は、もう騎士団が押さえている。アンセルは、自警団がしっかりしているから、軍隊を駐留させる必要がなかったが……」

ラムザの頬が緩んだ。

「先輩方……、有難うございます!」

バトーが肩を揺すって笑う。

「ガッハッハ。何もせんのに、何に礼を言う」

”何もしないで”通してくれることに、だ。

ラムザはにっこりと微笑んだ。

「ま、礼を言われる覚えはないが……くれるってんなら、接吻^{キス}の一つももらおうか」

と、ガラフは相変わらず、ふざけた薄笑いを浮かべている。

「恩に着るっすよ。兄キ!」

ガストンはリュカの剣を背負った。

「しっかり戦ってこい。おめおめと逃げ帰ってくれば、二度と弟分とは思わんぞ」

と、リュカ。

少年達を乗せた三頭の韋駄鳥^{チヨコボ}は、四人の青年達の脇を通り抜けた。ラムザは、ガラフの韋駄鳥^{チヨコボ}と羽根が触れ合うほど韋駄鳥^{チヨコボ}を近寄せると、ガラフの首に腕を回し、唇に口付ける。

「……っ?」

ニッ、と悪戯っぽく笑うと、ラムザは韋駄鳥^{チヨコボ}の腹を蹴って駆け去った。

しばらく三騎の後ろ姿を見送ってから、ガラフはペツと唾を吐いた。

「不味い。所詮、男だ」

「阿呆。自業自得だ」

と、イクシが呆れる。

「口直しといっては何だが……」

とリュカが振り返った視線の先に、シーザとニーナが歩いて来ている。

「リュカ。他の連中に知られる前に、使者は始末しといたぜ」

「注文通りに料理してきたよ」

というニーナは、大きな片手鍋を持っている。

リュカは鞍から降り、怪訝そうな顔をしている他の三人の青年達を見上げた。

「使者は途中で魔獣^{モンスター}に食われて、ここには辿り着かなかった。俺達は何も聞いていない。……よくある話だ」

ふんと、香辛料^{スパイス}の利いた蒸し焼き肉の匂いがする。

豪胆なバトーも思わず後退った。

「おい。”料理”ってな、まさか本当に……」

「待て！それは、美しくないという程度^{レベル}を超えているぞ！」
と、イクシも退く。

「そうか？ なかなかいけるぞ……」

リュカは平然として、鍋の蓋を取った。

三人の青年騎士達の目が点になる。

「……鳩？」

「当たり前だ。あの速さに韋駄鳥^{チヨコボ}で先回りするのは、骨が折れるぞ」
ラムザ達の乗った韋駄鳥^{チヨコボ}は、矢のようにまっしぐらに※双魚^{バイシールズ}の方角（※東北東）へ突き進んでゆく。

青年騎士達は韋駄鳥^{チヨコボ}から降りて、丸焼き肉をむしる。この時代の畏国^{イヴァリース}では、鳩の肉は食用肉としてありふれた素材だ。

「人を食った奴だな」

「だから、人ではないと言うのに……」

かくて、北天騎士団の貴重な伝書鳩が一羽、不良騎士達の胃袋に葬られた。

？―5―〔5〕 夕陽のマンダリア平原 ？幼馴染み

アンセル村――。

自警団の人々の話を聞いてから、ラムザは、庄屋の家の厩舎を覗いた。

鞍を外した三頭の韋駄鳥チヨコボは、充分な餌と水を与えられ、新しい寝藁にうずくまって休息していた。

「有難う、赤毛君」

ラムザは、今度は自家の韋駄鳥チヨコボの寝藁を取り替えている少年に、声を掛けた。

赤い髪の少年は振り返った。

「いいってことよ。金髪の」

この少年も、ラムザという名前なのだった。

ラムザという名前は少なくないので、大抵は苗字やあだ名で区別する。しかし金髪のラムザは、遊び仲間の間では”ベオルブ”の名で呼ばれることがほとんど無かった。

金髪のラムザは、赤毛のラムザに幾らかの金貨を渡そうとした。

「後で自警団のみんなと、美味しいものでも食べてよ」

赤毛のラムザは手を引つ込めた。

「バーカ。お前から金なんかももらえるかよ」

「そう言わずに」

家の主人である、赤毛のラムザの両親が宿泊費用を受け取らないので、息子に預けようと思ったのだが……。

「美味しいもんっていうならさ。ティータちゃんが帰って来たら、お菓子か何か作ってもらおうかな」

「そっか。じゃ、アルマにも手伝わせて、大花虫モルボルグレイトでも食べきれないくらい焼菓子タルトを焼かせるよ」

「お前に食いきれないぐらい、の方がいいや」

「うわ、ひどいなあ」

「晩飯、特大の鍋で煮てるからな。遠慮なく、もりもり食えよ」
赤毛のラムザは、金髪 of ラムザの肩を叩く。

「しっかり力つけて、必ずティータちゃんを助け出すんだぜ」

「うん、きつとだ。有難う」

金髪のラムザは厩舎の外に出た。

納屋の裏手で、鎧を脱いだガストンがぼんやりと切り株に腰を下ろしている。

「ガストン。ディリータはどこに？」

ラムザはガストンの肩に手拭いを掛けた。

ガストンは手拭いをひったくり、首の周りの汗を拭った。

「向こうの草っぱらで呆けてるぜ」

「そう……」

ラムザは夕陽のよく見える、緩やかな西の斜面に目をやった。

ガストンが背中を押す。

「付いててやれよ」

「うん」

マンダリア平原を渡る風が、膝を抱えて夕陽を見つめているディリータの頬を撫でる。

（俺は一体何をしている？ここで……）

ラムザを止めなければならぬ。頭では、わかっていることなのに。

（エルムドア侯の時とは違う）

友人の妹のために。妹の友人のために。貴族が、平民のために――。

ラムザをよく知る者達は、ラムザを理解し力を貸してもくれる。だが、世間一般の見方は異なるだろう。

伯爵家の令息が、一使用人の娘のために。少年が、少女のために――だ。

たとえば首尾よくティータを助け出せたとしても、単なる醜聞だ。

（俺はラムザを守るために在る者。たった一人の妹を犠牲にするとしても、ラムザの不利益になることは出来ない……！）
齒を食いしばって、そう思う。

ところが一方でディリータは、足許の地面が沈み込むような不安と焦りを感じていた。

ラムザは、ディリータが守ってやる必要のある者なのだろうか？
昨夜からディリータは、氣ばかり急いていて、上の空だった。

イグーロスに帰ったからどうなるというものでもないのに、ただ一刻も早くベオルブ邸に戻ることだけを考えていた。ラムザが道すがら、ティータ救出のために人々の協力を取り付けていたことに、氣付きもしなかった。

普段なら、このような手筈はディリータが整えておくところなのだが……。

ディリータの助けが無くとも、ラムザは彼自身の力で采配を振るい、大勢の人間に支えられて動いている。

（俺は……ラムザの何なんだ？）

ディリータとラムザの出会い、五歳の春の終わり頃――。

ある日、隣の空き家の改修工事が行われていたので、ディリータは祖母に、誰か引っ越してくるのかと尋ねた。

近いうちに医者の女先生が住むことになったのだと、祖母は教えてくれた。丁度ディリータ、ティータと同じ年の兄妹がいるから、仲良くしてあげるようにと言われた。

ディリータは喜んだ。

マンダレーナ村には、たまたま、ディリータと同じ年の男の子はいなかった。

付近の村々には同じ年頃の友達がいたが、子供の足では、毎日遊びに行くには遠いのだ。

引っ越しの当日、ディリータは張り切って、二つ隣の村の村外れまで”ファティマ先生”の一家を出迎えに行った。

一人でこんなに遠出をしたのは初めてだ。

街への行き帰りの荷駄チヨコボ鳥車がよく休憩する泉の端で、ディリータはわくわくしながら待っていた。

が、昨夜は興奮して寝不足だった。待ちくたびれたディリータはやがて、暖かな陽気に誘われて、草むらでうとうとと居眠りした。人の話し声でハッと目を覚ますと、母子三人と、南洋人らしき赤銅色の肌の夫婦とが、木陰で軽食を摂っていた。それも、もう片付けるところだ。

（うわあ！綺麗な人……！）

ファティマは、その名の通り、聖母のように清らかに美しく見えた。子供達は、ディリータのいる草むらには背を向けて座っている。

（あれれ？二人とも女の子だぞ。ばあちゃんの勘違いかな？）

ラムザとアルマは、お揃いのゆったりとした上着スモックを着ていた。

どうせすぐ大きくなるからと、ファティマは寸法サイズを大きめに仕立てていたのだろう。ラムザは下に短い股引ズボンを穿いていたのだが、ディリータの目には女物のように見えたのだった。

大人達は荷物をまとめ、荷駄チヨコボ鳥を荷車につないでいるが、子供達はまだ泉の端で遊んでいた。ディリータの方に顔が向く。

（……！！）

”聖母様”の子供達も、天使のように愛くるしい。特に、金髪碧眼の”姉娘”ファティマの方を母親と見比べて、ディリータは顔を真っ赤にした。

（大きくなったら、絶対お嫁さんになってもらおう！）

この当時は、夫の方が妻よりも五歳程度年上なのが標準的である。同い年以下というのは、かなりの不利ハンデだった。

恋敵になりそうな近所の男の子の誰彼を思い浮かべ、

（いや、何たって、すぐお隣っているのは強味だよな！）

と、闘志を燃やす。

余所行きを着てくれば良かったとか、髪に寝癖がついていないだろうとか、急に気になり始めて、ディリータは草むらから出て行

「でもね、お兄ちゃんとは遊んじゃダメ。お兄ちゃんは、アルマだけのお兄ちゃんなの」

「うん……?」

アルマはディリータに勝手な約束をさせている。

「あつ、君がディリータ君だね!どこに行ってたの?」

ラムザが人懐こく、ディリータの手を握った。

「僕、ラムザっていうんだ。今日からお隣に住むんだよ。よろしくね!」

「ああ、よろしく」

ディリータは気乗りのしない握手を返した。

後年、ラムザの語ったところによると。

初対面の時のディリータの印象は、”とても同じ年とは思えないほど落ち着いていて、大人っぽく、利口そうだった” そうである。

真相は、ただ歩き疲れていたのと、興味を失って冷めていた、というだけなのだが。

にこにこ笑っていたラムザは、ふと、心配そうにディリータの目を覗き込んだ。

「あのね。僕、男の子だよ」

「うん。それがどうした」

「わかる?」

「そりゃあ、見ればわかるさ」

ディリータは既に、動かぬ証拠を目撃しているのだから。

そうとは知らないラムザは、尊敬の眼差しでディリータを見た。

「すごい!君だけだよ、僕のこと女の子と間違えなかったの!」

ラムザは道々、会う人毎に女の子と間違えられて、うんざりしていたのだった。

感激したラムザはディリータに飛びついて、口に口を押し付けてきた。

「~~~~っ!」

ディリータの家では、親子兄妹でも、唇に口付けする習慣は無かつ

た。

「あーっ！」

アルマが走ってきてラムザの腕にぶら下がり、頬を膨らませる。

「んもう！お兄ちゃんに馴れ馴れしくしないでね！」

何故に、男の子に唇を奪われた上、そのことで女の子に怒られないくてはならないのか。

五歳のディリータが心に受けた衝撃ショックは大きかった。

出会いの感情にすれ違いはあったが、ともあれ、ディリータとラムザは毎日一緒に遊ぶようになった。

木の上や、川原の岩陰の”秘密の指定席”を、ディリータはラムザとだけは共有した。

そこは、妹達も寄せ付けない、二人きりの遊び場所だった。

「ラムザの父さんは？死んじゃったのか」

「ううん、生きてるよ。時々、会いに来てくれるよ」

「ずっと留守なのか。葉の行商人とか？」

「違うよ。父さんは騎士だよ。剣を差してて、韋駄鳥チヨコボに乗って来るんだ」

ディリータは、ちよつと考えた。

「剣を差してて、韋駄鳥チヨコボに乗ってたって、騎士とは決まってないぞ。傭兵かもしれないぞ。僕の父さんも、この村に住む前は傭兵だったんだ」

「騎士と傭兵って、どう違うの？」

「騎士ってのはさ、普通、村長さんをしてるものだけ。お殿様から土地を預かってて、ほとんどは、先祖代々の家来なんだ。

傭兵はさ、ずっと一人のお殿様の家来をしてるわけじゃないんだ。戦のある時だけ、あっちこっちにお金で傭われるんだ。

自分の村を持ってないのなら、ラムザの父さんは傭兵じゃないのか？」

「うーん？そうなのかなあ」

ラムザは小首を傾げた。

「今度、父さんに聞いてみるね」

しばらく経ったある日。

「ディリータ、あのね！」

木蓮こぶしの木の上の”指定席”に座ったラムザは、得意そうに言った。

「父さんはね、矢っ張り騎士だって。村長さん達を家来にしてる、お殿様なんだって。」

いっぱい村を持って、時々見回りに行くんだ。それで、いろんな村にお家があって、ここはそういうお家の一つなんだって」

「へえ、すごいな！」

ディリータは、ちよつと考えた。

「つてことは、どっかに、父さんがいつも住んでるお家が別にあるんだな。多分、村長さんの家よりもっともっと大きい、お屋敷だぞ。」

ラムザ達は、そっちで父さんと一緒に暮らさないのか？」

「うーん？ そうだね」

ラムザは小首を傾げた。

「今度、父さんに聞いてみるね」

またしばらく経ったある日。

「ディリータ、あのねあのね！」

岩と岩の隙間に流木で屋根を架けた”秘密基地”に入ると、ラムザは嬉しそうに言った。

「父さんがね、近いうちに、父さんのお屋敷に僕とアルマを連れてってくれるって！」

「へえ、良かったな！」

ディリータは、ちよつと考えた。

「ラムザ、引っ越しちゃうのか？」

「ううん。遊びに行くだけ」

「そっか。じゃあ、これからまだまだ、ラムザと一緒に遊べるん

だな。

ところで、お前とアルマだけなのか？ ファティマ小母さんは？」

「うーん？」

ラムザは小首を傾げた。

「母さんも一緒じゃない？」

またしばらく経ったある日。

「ディリータ、あのね……」

裏山に登ったラムザは、やけに透き通った表情をして言った。

「父さん、ドラコニア伯爵様なんだって」

無邪気そうな相棒の方が自分よりも大人びて見えたのは、ディリータにはこの時が初めてだった。

出会いの一件以来、ラムザには”ディリータは賢い”という先入観が深く植え付けられているようである。

——ディリータは物知りだね！

とか、

——ディリータは色々考えてるんだねえ！

とか、ディリータのすること為すこと感心し、尊重する。

実際、ディリータは頭の回転には自信があった。

けれどもディリータの方こそ、マンダレーナ村で暮らしていた頃からずっと、ラムザに劣等感を感じ続けていた。

「いったいラムザはどうして、”何も考えずに”自分の置かれた状況に順応出来るのか。」

ディリータが思うには——考えること、覚えることは、努力すれば誰にだって出来る。余計なことを意識しない、考え込まないでいられることこそ、貴重な天稟ではなかるうか？

たとえば、ある日、腹違いの兄がいることを知る。

二人ともとうに大人の、立派な騎士だ。

やがて、兄達の母は由緒正しい大貴族の姫君だったが、自分の母

は父の屋敷に住むことが許されない者だということを知る。

兄達とは違う黄金色の髪と碧い瞳が、ある種の人々にとっては軽蔑の対象であることも知る……。

——ディリータ、見て見て！ザルバツグ兄上が、竜^{ドラゴン}の牙をくれたんだー！

まるで親鳥の後にくっついて歩くヒヨコのように、戸惑いもためらいもなく兄を慕えるラムザは、何者なのか。

年齢を重ねるにつれ、ラムザを取り巻く環境、彼の立場が、ぞつとするほど複雑で危ういものであることが、ディリータの目にも見えてきた。

ラムザ本人も、全く疑問を感じない、悩まないわけではないのだろう。が、次々と明らかになる驚くべき現実を、ディリータには信じ難い素早さで淡々と受け入れ、乗り越えてゆく。

（俺だったら、とつくの昔にぐれてるぞ）

泥の沼から咲き出る白蓮の花のように、歪まず、垢付かないラムザ。

しかも、ただいつでも恬然と環境に馴染むことが出来るばかりではない。

環境の方を自分に馴染ませる力もある。

人懐こい笑顔と真っ直ぐな心で、いつの間にか周りの人々の心を掴み、味方に引き入れてしまう。

とてもこいつと同じ性質のものにはなれない、とディリータは早いうちに悟った。

ラムザは、行動しながら考えて結論に達する——というか、考えることも行動することも、魂^{ダイレクト}から直接に発しているらしい。

考えてから行動するディリータより一拍子も二拍子も速く、自然に適切な判断を下し実行するところを、ディリータは何度となく見せつけられてきた。

下手に考えていたのでは、こいつには敵わないと思った。

ならばとディリータは、徹底的に考え、疑い、計算し尽くすこと

にしたのだった。

ドラコニア城にいた頃、ハールーシャとアルマはラムザの”一番”になりたがって、しょっちゅう喧嘩していた。

「アルマ、今日はお兄ちゃんと一緒に寝るうー。ね、いいでしょ？」

「うん、いいよ。おいで、おいで」

「やったあ！お兄ちゃん大好きー」

アルマがラムザに甘えていると、ハールーシャがすかさず割り込んだ。

「ラムザ。今日は僕の部屋に来いよ。張り出しに^{テラス}お布団を出して、星を見ながら寝よう」

「えーと、じゃあ三人で……」

「女の子なんか入れてやらないからな」

「えーと、じゃあアルマ、また明日に……」

アルマとハールーシャは睨み合う。

「何よ。ハル様は、毎日お兄ちゃんと一緒にいられるでしょ。アルマはお祭りの間だけだもん。譲ってくれてもいいじゃない」

「アルマは生まれてから六年間も、ラムザと一緒に暮らしてきただろ。僕はまだ一年にもならないんだ。お前が譲るべきだ」

アルマはラムザを見上げた。

「騎士は淑女^{レディ}を優先するものよね？」

「違うぞ、騎士は主君を何よりも優先するんだ。ラムザ、今日は僕と一緒に寝ろよ。これは命令だぞ！」

するとアルマは、悠然と見下したように、

「ふうーん、ハル様ってばお可哀想ー。命令なんかしないとお兄ちゃんをつなぎ止めておけないのね。アルマとお兄ちゃんの仲は、そーんな脆いものじゃありませんからねー、だ」

「なっ……、そんなことないぞ！命令なんてしなくても、ラムザはいつでも僕のことが一番大事だよな？」

「じゃあ、お兄ちゃんに聞いてみましょ。

ね、お兄ちゃんが世界一好きで、いつでも側にいたい人は、アルマだもんね？」

「僕だろ？」

ラムザは深く溜め息を吐いた。

「じゃ、正直に言うけど。僕が世界一好きで大事で、いつでも側にいたい人はね……ディリータだよっ」

ディリータの肩を抱いて、妹達に背を向ける。

「さ、一緒に寝よっか、ディリータ」

ハールーシャとアルマは喚いた。

「何ーっ！？ディリータ、お前、又家来のくせに生意気だぞ！」

「ディリータのくせに生意気ーっ」

ディリータは二人の頭を撫でた。

「そうやって、いつもラムザを困らせるから、一番だと言ってもらえないんですよ。仲良くして下さい」

「……」

ハールーシャとアルマは、また睨み合う。

「わかったよ。アルマも来い」

「わかったわよ。ハル様が一緒でも、我慢してあげる」

ハールーシャとアルマに手を引かれて行くラムザを、羨ましそうに、黙って見送るのはティータだ。

「ティータ。お兄ちゃんと一緒に寝るかい」

「うん……」

はにかみ屋の妹は、寂しく微笑んでディリータについて来た。

ラムザに信頼されることは、ディリータの喜びだった。

だが、ふと気が付けば、ラムザに好かれることが嬉しさの本質なのではないようだ。

ラムザには無い力で彼を支えているという手応えに、優越感を感じてきたのである。

バルバネス亡き後は特に、ラムザ自身の気付かぬ脅威から彼を守っているのは自分だという自負心が、ディリータを満足させていた。ディリータの働きが、地位や金品でもって報われずともよい。誰が誉めてくれずとも——ラムザ本人さえ、ディリータの果たしている役割を知らず、労ったり感謝したりしてくれなかったとしても、よいのだ。

和やかに微笑んでいるラムザそのものが、ディリータの輝かしい勲章であり、生ける戦利品であると思ってきた。

が、しかし……。

夕暮れの草原にぽつねんと座っているディリータは、自分が今何を危惧しているか、わかってきた。

ディリータは、ティータ救出のために奮闘するラムザを止める気にならない。

それは、ラムザを想う心よりも妹を想う心の方が勝っている、ということではなかった。

ディリータはラムザに傾倒している。故にこそだ。

己より強い者、優れた者に魅せられ、かつまた追い付き追い越すべき目標として闘争心を煽られるのは、少年にとってはごく自然な心情——本能といってもよいかもしれない。

騎士道物語の英雄や、雲の上の有名人——バルバネスやザルバツグは、多くの少年達から見ればそうだろう——に、信仰にも似た憧れと尊敬を抱くのも、その現れだろう。

そして具体的な一里塚としては、父や兄を鑑とし好敵手とも見なし、少年は男に成長してゆく。

幼くして父を失ったディリータにとって、最も身近な”強い男”は、常にラムザであり続けた。

ディリータもまたガストン同様、自分の惚れ込んだ少年がどこまでやるか見てみたい気持ちに、抗えないのだった。

その反面、ディリータは恐れている。

（ラムザに、黒い翼は必要なのか？）

全力のラムザを見て、もしも、ディリータの庇護が彼に必要な――どころか、彼自身の能力を開花させる妨げになっているとわかったら？

ラムザが彼自身の背にある白い翼だけで、より遠く、何処までも翔んでゆける者であったなら……！

（たった一人の妹を巻き添えにしてまで、俺がラムザの側にいる意味は……）

ティータは兄のため、ラムザ兄妹のため、頑健とはいえない身心をすり減らしている。

水呑み百姓でも傭兵でもいい、庶民として分相応の暮らしをしていれば、せめて妹には、ささやかながら平穏な日々を約束してやれたかもしれない。

今回のような事件に巻き込むことも無かったかもしれないのだ。

（……）

ディリータは顔を覆い、膝の上に伏せる。

ラムザがディリータにそっと近寄って、隣に腰を下ろしたのが、気配でわかった。

ディリータの方は向かず、黙って夕焼け空を眺めているらしい。

ディリータが顔を上げてラムザの横顔を見ると、ラムザも微笑んでディリータを見た。

何千回も、何万回も見慣れた微笑みだ。

？－５－〔５〕 夕陽のマンダリア平原 ？幼馴染み（後書き）

うーん、男の子心理というのは母ちゃんにはよくわかりません。
何故キミ達は、誰が幼稚園に一番に着くかとか、弁当を早く食べ
終わるかとかいったことぐらいで熱く戦えるのだ！

いや、ぐらいと言っちゃいけない、男はいつでも全力勝負？

女の子の友達同士のように、ただ一緒にいれば嬉しいというわけ
にはいかないみたい……。矢っ張り、活動的・闘争的になるホルモ
ンが女の子よりもいっぱい出てるのか？？

「強敵」と書いて「とも」と読み、「親友」と書いて「ライバル」
と読む世界なんだなあ……。

？―5―〔5〕 夕陽のマンダリア平原 ？草笛

ディリータは夕陽を見つめた。

「綺麗だな。ティータもどこかで、この夕陽を見てるんだろうか……」

「大丈夫だよ、ディリータ。ティータは無事さ」

ラムザも、目を細めて夕陽を見つめた。

「無責任な気休めを言うな」

ディリータは頭を振った。

「人質なんだ。命があるのは当たり前だ」

「……」

五大領主の一人たるエルムドア侯爵さえ、虫の息で救出された。

誘拐犯達が乏しい水や食料を、ろくに人質に与えるとは思えない。

いや、そんなことよりも……。

美少年のラムザを女と見間違えた盗賊達の、舐め回すような視線を思い起こして、ラムザはざわりと総毛立った。

「ウィーグラフならば、ティータを傷付けさせないだろう。いや、そもそも人質を取ることを潔しとしない。きっと、ティータを解放する……」

「そうだね。そういう人だよ」

直接会って、ウィーグラフの気性を肌で感じ取ったラムザは、大いに頷く。

「逆に言えば……、まだティータが解放されていないならば、犯人どもはウィーグラフと合流していない。ティータはウィーグラフの下にはいない……」

ディリータは眉間に皺を寄せた。

「日が沈む……。昼間は、奴らも逃げ回るのに精一杯だろう。だが、夜が来る。盗賊どもも、騎士団も動けない。僕らも……」

どこかでティータが、紅涙を流して同じ夕陽を見ているだろうに。

「大丈夫だよ。ティータは強い子だよ」

ラムザは穏やかな、自信のある声で言った。

「強い？ティータが？」

「そうだよ。とても我慢強い子だよ。」

アルマなんかさ、強気なくせに、すぐ泣くよな。わがままなんだよ。

ティータは、いつでもじっと辛抱して、不平一つ言ったことがない。

きつと、どんなことがあっても挫けずに、僕らが助けに行くのを待っていてくれる」

オレンジ 橙色の夕陽を――天の瞳を真っ直ぐに見返して、ラムザは言う。

「命があれば、充分じゃないか！」

ティータは僕らの妹だ。ずつと、僕らで支えていこう」

左手で長剣の鞘を握り締めたラムザの瞳には、研ぎ澄ました刃のように鋭い光が閃いた。

「ティータを踏みにじった奴があれば、一人残らず地獄に叩き落としてやるさ」

ディリータはハッと息を吞んだ。

女のように美しい、優しいな顔をしていても、ラムザは矢張り男だ。

そんな台詞を口にし、実行に移すだけの、闘う覚悟と力を持っている。

「……違和感を感じていたさ。ずっと昔からな」

「え？」

「お前の側にいることに……」

「アルガスの言ったことを気にしてるのかい」

もしも、ラムザが女であれば。もしくは、女のように優しく繊細なだけの少年であれば。

ディリータは純粹に、ラムザの無邪気な朗らかさを愛おしむことも出来たろう。

たとえ身分は主従でも、ラムザの保護者としての自分の優位性を信じて、甘んじて一生でも影となり尽くせたかもしれない。

だが、男であるラムザに、ディリータは同じ一個の男として、対抗意識を燃やさずにはおれなかった。

「どんなに頑張っても、くつがえせないものがあるんだな……」

「そんなこと言うなよ。努力すれば……」

「努力すれば將軍になれる？この手でディリータを助けたいのに、何もできない……」

こうしてディリータを助けるために動いていられるのは、全部、お前の力のおかげじゃないか……」

人望はもとより、ベオルブ家の御曹司としての権限や財力も、全てラムザが自力で勝ち取ったものだ。

ベオルブ家におけるラムザの地位は、一見、父・バルバネスによって与えられただけのように思われる。

しかしラムザには、権利も放棄する代わりに、ベオルブの名を負う責任から逃れる道もあったのだ。

今頃は市井の医者の見習いとして、母を手伝って薬草を育てたり、病人の世話をしたりしていたかもしれない。

いつもニコニコ微笑んでいる、親切な町医者の先生。その方が、ラムザには似つかわしいような気がする。

だが彼の持つて生まれた魂は、騎士おとしのそれだった。

ラムザは父の志を継いで闘う道を選んだ。

そして見事、父の期待以上に、華奢な双肩に重責を背負って立ち続けている。

どこか途中で、ラムザ本人がもう嫌だと言えば。または意欲だけあっても、兄達や家臣達を納得させるに足る実力が無ければ。

”武門の棟梁・ベオルブ家の御曹司”としての今日のラムザは、存在し得なかった。

引き比べて、ディリータはどうか――。

一介の平民の小倅が己一個の才覚で、御曹司の守り役に取り立て

られ、主を守り妹を養ってきたものと思っていたが……、ディリータの地位こそ、バルバネスとラムザの好意によって恵まれているだけのものではあるまいか。

ディリータはラムザの付属品おまけに過ぎないのではないか？

「僕は”持たざる者”なんだ……」

と、沈痛に言うディリータの肩を、ラムザは抱いた。

「そうじゃないって。君は今、疲れてるだけだよ。」

ディリータにはいつも、いっぱい助けてもらってる。たまには僕が君を助ける番があってもいいだろ」

「……」

ディリータは手に触れた草をむしり取った。

「憶えてるか？親父さんに教えてもらった草笛を……」

ディリータは草笛を吹いた。

ラムザも若草を摘み、ディリータに合わせて草笛を吹く。

自分をラムザの側に置いてくれたバルバネスに、ディリータは計り知れない感謝の気持ちを抱いている。

だが時々、何とむごいことをしてくれたのだと、逆恨みしたくなるのだ。

ディリータはセヴィが羨ましい。

セヴィは同じく大貴族の御曹司として、ラムザと対等な条件で競い合える。折角の立場を、少なくとも武芸に関しては持ち腐れにしている辺り、憎たらしくさえある。

ディリータはまた、ガストンが羨ましい。

ガストンは、ラムザを超える者、ラムザを庇護し支配する者になりたいなどと考えたこともないだろう。ただ仰ぎ見て憧れ、ラムザと行動を共に出来るだけで喜び勇み、手足となって働ける。

けれども、ディリータはラムザに、ごく身近な者として競争心・挑戦心をかき立てられてしまう。

と同時に、常に敗北感を――もとい、同じ闘技場リングに上がる資格さ

え無いという屈辱感を味わい続けねばならない。

生殺しだ。

アルガスのような、友情に飢えている人間が聞けば、贅沢を言うなど怒るかもしれない。

優れた友の側にいる機会を与えられて、その友に好かれて、それ以上何を望むことがあるのかと。

が、しかし……。

過日、ベオルブ邸の中庭でラムザとバスカークが立ち合った時、ディリータはひやりとさせられた。

ディリータにも、ラムザを本気にさせたくて、当てるつもりで真剣を振ったことがある。

その時、ラムザはディリータに斬られた。

アルマがひどくむくれて、すぐに”回復”^{ケアル}をかけてくれたけれど、ラムザの胸には今も傷跡が残っている。

——んもう！お婿のもらい手がなくなったらディリータのせいよっ！

——うーん、男にそういう表現は当てはまらないと思うけど……。

まあ、ディリータが責任取ってお嫁にもらってくれるって言うなら、それはそれで……。

——その女顔^{かお}で言うときゃレに聞こえないのよ……。本っっ当に婿入り先を失うわよ？

——はは、気にするなよ、ディリータ。君のせいじゃない。油断してたみたいだ。……

ラムザは軽口を言って微笑んだが、ディリータは深刻な負けを感じた。——否、勝敗以前の格差を感じたのだった。

ラムザは、かわさなかったのではない。

真剣勝負なのだ。寸止めを前提^{ルール}としていても、過失は起こり得る。決して、気を抜いてはいなかった。

しかし、かわそうとしてかわしきれなかった、のでは断じてない。過失であれば、ディリータは必ず剣を止めようとする。そういう

間合いでかわした……。

ディリータはラムザの剣腕を試そうとしたのに、期せずして、別のものを試した結果になってしまった。

ラムザは、ディリータが自分に害を為そうとするはずがないと、信じ抜いている。

本気で……。

剣技の巧拙の問題ではない。

ディリータがもつと本気で、致命傷を負わせるつもりで斬りかければ、ラムザはバスカークに対して示したような、鬼神の如き反応を返しただろうか？

いや……、あくまでもラムザは、”本気で”ディリータに応えただろう。友を信じる、本気の心で。

それでもディリータが手を緩めなければ、ラムザはディリータに斬り殺されてしまうのではないか。

そう感じたからこそ、ディリータは実際、剣を振り抜けなかった。それは取りも直さず、ラムザの”本気”にディリータは太刀打ち出来なかったということである。

ディリータは、ラムザの友情に感激しても良かったはずだ。しかし、ラムザに微笑まれたディリータの胸は疼いた。

例えば――ディリータにはそんな経験は無いけれど――幼い男の子が大人のお姉さんに恋をして、子供なりに本気で告白したのに、頭を撫でて飴玉をくれて帰されてしまったら、こんな気分になるのではないか。

そんな好かれ方をしても嬉しくない。

たとえ拒まれるとしても、一人の男としてその目に映りたいと願ったら、”贅沢なこと”なのだろうか……。

（努力で天才に比肩し、更には凌駕し得るのか？ いや……だいたいい、努力で、お前と対等に競う機会を手に入れられるのか……）

すぐ隣に肩を寄せ合って草笛を吹いていても、ディリータはラムザの存在を、はるか手の届かない遠いものに感じている。

ラムザは草笛を吹きながら、ハールーシャのことを思い出す。

ハールーシャとディリータと、ラムザと、よく三人で、ドラコニア城を見上げる丘に座って草笛を吹いた。

――ずっと僕の友達でいてくれるよな？ラムザ……。

ハールーシャは頻りに不安がった。

ラーグ公がハールーシャの弟を後継者に選ば、本人達の心がどうあれ、ラムザは弟の臣下にならねばならない。

ラーグ公やダイスダーグに逆らっても、ラムザがハールーシャに仕えることは出来るのだろうか。あるいは、身は弟の臣下でありながらハールーシャに味方することが出来るのだろうか。

いや……、たとえばラムザがハールーシャに付き従うことが出来たとしても、彼の”友”であり続けられるのか？礼儀や規律に引き離されてしまわないだろうか……。

ハールーシャの心配はよくわかった。

立場をあべこべにして、ラムザとディリータの間にも同じ問題が横たわっていることは、子供心にも捉えていたから。

ラムザとディリータの立場は対等ではない。

バルバネスが亡くなった後で知ったことだが、二人の出会いはい偶然ではなかった。

ディリータの父・ギータが元傭兵だということは、ディリータの口から聞いていた。

マンダレーナ村で暮らしていた頃、まだまだ遊びのようなものだったけれど、ディリータの父に武術の基礎の手ほどきを受けた。かなり強そうだった記憶がある。

実は、正確には彼は”現役”だったのだ。それも、ただの剣士というよりは、草しのびに近い技術と役割を持っていた。

町人や農民に混じって生活し、有事に備えて諜報活動など行っている隠密の一人に、ファティマと子供達の警護を命じたらしい。

ディリータの父は、いずれ息子にも自分の仕事を継がせる意向だ

ったようだ。

強靱な戦士も黒死病には勝てなかったが、バルバネスは、遺されたディリータの利発さを見込んで、ラムザの忠実な片腕とすべく教育を施した……。

ディリータは、ラムザの”手駒”として生まれ、育てられてきた者なのである。

——ラムザ君。僕達高貴な生まれの人間は、下々の者と慣れ親しむべきではない。それは恩愛とは似て非なるものだ。かえって、残酷なことだと思ふのだ……。

ブランシュ子爵家のセヴェリーニが言うことに、ラムザは一理を認める。

”気取り屋”セヴィだの、”高貴なる”セヴィだのと呼ばれて、士官学校アカデミーの級友達から敬遠されがちなセヴィだが、芯から高慢なわけではない。

——セヴィー！街に遊びに行かないかい？今、金雀児えにしだ通りに面白い大道芸人が来てるんだって。綺麗なお姉さんの曲芸師だそうだよ。それと、角に開店オープンしたお好み焼き屋さんがとっても美味しいって評判なんだ！。

——大道芸にお好み焼きだって？高貴な僕が、そんな低俗な庶民の娯楽に興味を示すと思うかね、ラムザ君。

——……そうだね。お邪魔して御免ね。

——待ちたまえっ！誰が行かないと言った？

——え？だって今……。

——学生時代は何事も勉強だ。民草の間でどのようなものが流行するか知っておくのも、後学のためだ。さあ行こうじゃないか！……セヴィもラムザも、やがては、級友達とは段違いの上司になる。机を並べ、木剣を交えて共に学んだ級友達にとっては、冗談を言い合うどころか、直接声も掛けられない身分に上り詰めてゆく。

セヴィは予め、級友達と距離を置いて付き合おうとしているのだ。

(でも……)

”友達”というのは何も、お喋りをしたり遊んだり、勉強を教え合ったりして、一緒に時間を過ごす仲間のことだけを指すのではないだろう。

——ラムザ。僕は必ず、ラムザが母上と一緒に暮らせるようにしてやる。そういうガリオンヌ領にしてみせるぞ！……

たとえ立場や肩書きは変わろうとも、現実の生活の中で受け持つ役割に差はあろうとも。同じものを目指して、心が同じ地平を共に旅しておれば、友と呼び得るのではないか。

ラムザはだから、ハールーシャが心細がる度に、自信を持って、心を込めて答えた。

——勿論だよ、ハル。僕らはずっと、ずっと友達だよ。……

(デイリータと僕だって……)

ラムザは、夕陽が好きな理由を思い出した。

マンダレーナ村で暮らしていた幼い頃、父が訪ねてくるのは大抵、日暮れ時だったから。

韋駄鳥チヨコボに乗ったバルバネスの長い影法師を、妹の手を引いて、走って迎えに行ったものだ。

バルバネスとファティマ。ラムザとアルマ。そして、デイリータとティータ。一緒に草笛を吹いたり、花冠を編んだりして遊んだ草原は、黄金色の夕陽に染まっていた。

ラムザにとっては、ごく自然で当たり前な、幸せな記憶の一頁。ページ

しかしその風景を、あり得ないはずだと、あってはならないと、言う者もいる。

”当たり前の家族”でいるために、ラムザの両親は一生闘った。

ラムザは同じように、デイリータと”当たり前の友達”でいる道を、共に探してゆきたいと思う。

(デイリータ。身分は何の隔てにもならないよ。僕らだって、いつまでも、同じ目的のために闘う同志ともだちでいられるよ……)

草笛の音は相和し相重なって、素朴な響きを奏でた。

二人の少年は肩を並べ、丘の彼方に沈む夕陽を見送った。

？―5―〔6〕 魔法都市ガリランド 傭兵斡旋所

翌日、魔法都市ガリランド――。

郊外で、韋駄鳥チヨコボに乗った三人の少年が、ラムザ達を見つけて手を振った。

「ラムザ先輩ーっ！」

士官学校アカデミーの新生入生達だ。幼年学校時代のラムザの後輩達である。

士官学校アカデミーに置いていた、ラムザの所有の韋駄鳥チヨコボを連れ出してくれたのだ。

一頭は、純白の”銀竜”シルドラ。

美々しい見た目だけが取り柄の飾り物ではない。軍鳥として、脚力も胆力も一級品だ。

一頭は、額に白い十字の星がある他は全身が漆黒の、”天狼”シリウス。

ラムザの名義になっているが、ほとんどデイリータの専用だ。

因みに後年、英雄王デイリータは好んで黒韋駄鳥チヨコボに騎乗し、愛鳥は代々”天狼”シリウスと名付けられたという。

最後の一頭は、卵色の胴体に尾羽根だけが赤い、”えび天”。

本当は何かもつともらしい本名があったのだが、皆、”えび天”ニックネームの愛称で呼ぶ。

”えび天”は軍鳥ではなく、長距離走用の韋駄鳥チヨコボだ。

少女達の間には”白韋駄鳥チヨコボの貴公子”の印象イメージが浸透しているラムザである。が、実際には、外出の時は”えび天”に乗っていることの方が多い。

幼年学校在学中イグロスとの往復に使っていたのも、またガラフチキンレースとの度胸比べに打ち勝ったのも、この”えび天”号である。

「有難う！」

ラムザは後輩達に近付いた。

「そんな、お礼なんて……接吻キス一つで結構ですよ！」
ラムザは苦笑した。

「竜の牙はもらえなくても、いいの？」
ドラゴン

後輩達は口々に、

「良くないですよ。ディリータ先輩、竜の牙譲って下さい」
ドラゴン
ファイブカウント

「五秒以上ですよ」

「証人三人以上ですからね！」

ガストンが不審の目で、ラムザとディリータを見る。

「てめーら、何やった……？」

「んー、以前にちょっとした賭けをね」
まえ

「今はそんな話をしてる場合じゃない」

とディリータは、剣の鞘飾りにしている竜の牙をさり気なく隠しながら言った。
ドラゴン

「君達、韋駄鳥チヨコボを連れて北門の外で待っていてくれるかい。市内なかに入る用事があるんだ」

と後輩達に言って、ラムザは鞍を降りた。

「お買い物ですか？ 僕らが行ってきましようか？」

「人探しさ。自分の目で判断したい。城壁や市中の警戒は嚴重なのかい？」

「内壁の通行は監視が厳しいですけど、外壁と内壁の間はそれほどでもないませんよ」
チェック

「じゃあ充分だ」

ラムザは鞆に結び付けていた鍵飾りを、後輩の一人に放った。竜の門歯が三本、革紐でつなげてある。
キーホルダー
ドラゴン

「ほら、竜の牙。小さいけど、僕が仕留めた竜のだよ！」
ドラゴン
ラッキーマン

竜の牙は、男の子なら一つは欲しい幸運のお守りだ。特に、一頭の竜から二本しか取れない、長くて立派な上の犬歯が珍重される。
ドラゴン

「うわっ、有難うございます！」

「頼むよ」

「はい！」

ラムザの後輩達は、一頭ずつ空の韋駄鳥チヨコボを引いて北門へ回る。ラムザとディリータ、ガストンは、ガリランド市内に入った。

ガリランドは歴史の古い街である。市街地の拡張に伴って、防壁が二重に作られた。

内側の防壁に守られた旧市街は、市庁舎や貴族・豪商の邸宅などが建ち並ぶ高級住宅地だ。

余談だが、伝統あるガリランド王立魔法院は内壁の中に建っている。魔法院生には、王立といえども新市街にある士官学校アカデミーの生徒を、”新参者”と小バカにする風潮があった。

ラムザ達は城門を通らず、抜け道から外壁の中に入った。

商業都市のドーターやゴークほどではないが、外壁の外側も更に家々を取り巻いている。

屋上から縄梯子で外壁の内側にも出入り出来る、一軒の長屋の中を、三人の少年達は少々の手数料を払って通してもらったのだ。

（これじゃ俺らも盗賊の仲間みてーだな）

と、こんな”蛇の道”を知っているデイリータに、ガストンは呆れつつ感心する。

ラムザ達が訪ねたのは、傭兵の斡旋所だ。

少年達が慌ただしく扉をくぐると、店番がすぐに受付カウンターに着いた。

「いらっしやい。どんな人をお探しで？それとも、仕事の方をお探しかな？」

「白魔法と黒魔法が両方便えて、体力がある人がいいんですけど」

「お急ぎかい？」

「はい」

ガリランドから北には知己が少ない。魔法兵を一人確保したかった。魔法都市ガリランドであれば、魔道士系の傭兵が多くいるだろうと、少年達は期待したのだが――。

「うーん、今すぐってのは難しいねえ……。丁度、骸旅団討伐作戦で、人が出払っちゃまっててねえ……」

店番は指を舐め舐め、帳簿リストをめくった。

「お、そうだ、一人いるよ。今日これからでも仕事の出来る人が。」

中級程度の白黒魔法両刀、おまけに革鞭と中剣をよく使いこなす、と。”赤魔道士”ってやつだな。……ただし、女の人だがね」

ガストンは頭を掻いた。

「赤魔道士”ねー。”器用貧乏”の同義語じゃねーか」

白・黒魔法と武器をまんべんなく扱う戦士を”赤魔道士”と呼ぶ。どのような場面でもそこそこ活躍できる反面、どれか一つの能力についてはそれぞれの専門職には及ばない。魔法・剣術双方を一流まで極めた”魔法剣士”^{ルーンナイト}を、一回り二回り小粒にしたようなものだ。

「女の人は、ちよつと……」

と、ラムザも難色を示した。すると。

「ちよいと！バカにしておくれじゃないよ」^{フロア}

床続きの食堂からつかつかと歩いてきた女魔道士が、啖呵を切った。「あたいは魔法なんか使わなくなつてねえ。腕つぶしだけだって、そんじよそこらのへなちよこ野郎どもに負けたことなんかないんだ」

二十四、五歳くらい。赤味の強い栗色の髪、左目の下に涙黒子のある女だ。

ラムザ達が振り向くと、氣勢を削がれた様子だった。

「つと……何だい、酒場で会った坊や達じゃないさ。どうしたんだい？」

ガリランド市街で盗賊団の残党狩りをした日の晩に、酒場で話をした女魔道士だったのだ。

ガストンがラムザの顔を見た。

「てめーら、酒場なんか行ったのか？」

「うん、その……」

「俺を誘ってくれりゃ、美味い店に連れてってやったのによー」

「……」

ディリータがじれったそうに足を踏み替えているので、女魔道士は真顔になった。

「急ぎの用みたいだね。話を聞かせとくんね」

階上の宿屋の、女魔道士の部屋で、ラムザはかいつまんで事情を説明した。

「驚いたねえ。坊やが、バルバネス様の末の坊ちゃんだったのかい」

「隠していてすみません。貴族はお嫌いかもしれませんが、ティータには何の罪も無いんです。どうか、力を貸して下さい」と、ラムザは頭を下げた。

「貸しゃあしないよ。頭なんか下げられたって困るよ」と言って、女魔道士は指で輪を作った。

「傭兵はコレで動くもんさね。買っとくんね、あたいの力を！」ほっと安心して、ラムザは微笑んだ。

「有難うございます！」

「だから、礼なんて要らないのさ。出すもんきちんと出してくれりゃあね。とりあえず、ここのツケ払っというてもらえるかい。後は成功報酬ってことで……それと、」

女魔道士はラムザの頬を撫でた。

「あたいは、いい男の依頼しか受けない主義なんだ。坊ちゃんなら、三年後ぐらいに出世払いってどこかねえ」軽く、鼻の頭に口付けする。

「出世払い？……え？？」

色白な頬を真っ赤にして、ラムザは鼻に付いた口紅を拭う。

ガストンが、肘でラムザを小突く。

「てめーこそ接吻魔キスのくせしやがって！普段、散々妹といちゃついでやがるだろ」

「え、え……だって、妹とは全然別だろ……」

女魔道士は手際よく荷物をまとめながら、くすくすと笑う。

「あたいのことはベリンダって呼んどくれ、坊ちゃん」

「あ、はい。よろしく願います、ベリンダさん」

「”さん”は余計だよ」

少年達は先に階下に下りて、宿賃と斡旋手数料を精算した。

ラムザは、銀貨にしては小さな白っぽい硬貨コインを四枚だけ払う。

店番は目を丸くしたが、ガストンも初めてお目にかかった。

五百ギル白金貨だ。

ラムザは、いつも持ち歩いている小銭入れとは別に、大きな財布を持って来ていた。

中身が白っぽく輝いていたので、百ギル金貨混じりの十ギル銀貨だと、ガストンは思っていた。白金貨だとすると……、ざっと見積もっても十萬ギルは下らない。

ラムザは他にも、貴金属や宝石を目立たぬ所に身に着けている。

”軍資金”は、総額二十萬ギルほどになるうか。

（俺ちん家の借金、耳を揃えて返せるだけの金を、ほんの小遣いに持ってやがったのか！三個一ギルの饅頭なんかたらふく食って、『もういつ死んでもいい』ってツラしてる奴が！？）

店番は、階段を下りてきたベリンダに声を掛けた。

「いや、何とも豪勢な若旦那に雇われたなあ、姐さん！」

「年下すぎるのが残念だけどねえ」

と、ベリンダはラムザの肩に寄り掛かる。

「じ、じゃあ行きましょう！」

せかせかと歩き始めたラムザは、同じ側の手と足を一遍に出している。

ラムザの後輩達は、ガリランド市の北門の外で待っていた。

イグーロスから乗ってきた三頭の韋駄鳥チヨコボのうち一番元気のある、

翼の赤い”赤将星”ベテルギウスに、ベリンダが乗ることになった。他の二頭は

替え韋駄鳥チヨコボとして引いていく。

デイリータは、扱い慣れた”天狼”シリウスにまたがる。

ラムザは”えび天”の鐙に足を掛けた。

しかし、ガストンが後ろから、ラムザの髪の毛の束を引っ張った。

「白韋駄鳥チヨコボは、お姫さんを助ける王子様の乗り物もんだろーが。よろし

くな、えび公！」

「クエツ」

”えび天”は、標識の赤い尾羽根を広げて体を揺すり、さっさと鞍に上がったガストンの乗せ心地を確かめた。

ラムザは何も、白韋駄鳥チヨコボに乗るのが恥ずかしかったわけではない。

”セヴィにも乗れるバカチヨン韋駄鳥”と評判高い”えび天”号マイベースは、自儘で、良く言っ物に動じない、悪く言っ鈍感な韋駄鳥だ。乗るのは簡単だが、乗りこなすにはコツが要るのだ。

けれど、ガストンだって別に、見映えを気にしたわけではなかった。

いざ戦闘に突入した時、ラムザが軍鳥である”銀竜”シルドラを操った方が、高い戦力を発揮出来る。ガストンは後列から弓で援護すればよ
いから、走行用の”えび天”で充分だ。

「ん」

ラムザは左手首に巻いたティータの髪留めを、右手と口で締め直した。

「行こう、”銀竜”！」シルドラ

ラムザが”銀竜”の首に手を掛け、鞍に上がろうとすると。

「……と、そうは問屋が卸しませんよ」

聞き覚えのある、若い男の声がした。

群青色の制服の上に鎧を着けた兵士達が、少年達を取り囲む。

「蹴散らすかい？」

とベリンダが革鞭に手を伸ばすのを、ラムザは制止した。

「バスカーク殿……！」

「少々悪戯が過ぎましたね、ラムザ様」おイタ

千騎長の青年はラムザの前まで来て、韋駄鳥チヨコボを降りた。

「兄上様方のお心が、おわかりになりますか」

「わかります。だからこそです！」

「とても、わかっておいでは思われませんが……」

バスカークは深く溜め息を吐き、厳しい目でラムザを見つめた。

「ご自分のお立場を自覚なさって下さい。

たとえ無官の身でも、ドラコニア伯の弟君であられる以上、貴方は
様は一人ではあり得ないのですよ」

「ティータを助けることが出来ないのなら、僕は……！」

「ラムザ様！」

バスカークはラムザの言葉を遮った。

「貴方様は”天騎士”バルバネス將軍の御子息でしょう！」

「……！！」

ラムザは、キュツと唇を噛んだ。

バルバネスは、オルダリーア鷗国軍の捕囚となったファティマを助け出すことが出来なかった。

ラーグ公軍の大將軍としての責任感が私情を押し殺した、だけではないとラムザは思う。もしもファティマ一人を特別扱いにすれば、ファティマはその後一生、バルバネスを許さなかっただろうから。

自ら命を絶ったファティマの気持ちもわかる。”ベスラの聖女”などと呼ばれはするが、死を決意した瞬間に彼女が考えたのは、祖国万民のことではなく、ただ三人の人間のことだけだったろう。

イヴァリース畏国軍が——ザルバッグやエルムドア侯が攻撃をためらえば。それが直接の敗因とならずとも、負けた時、バルバネスと子供達の身の置き所が無くなる。

——すまん、ラムザ。

ベスラ要塞から帰ってきた次兄は、兄弟水入らずになると、一言そう言ったきり項垂れた。

——いいえ……。そのお気持ちだけで、母さんには十二分だったと思います……。

ザルバッグを慰めるためではなく、ラムザは本当にそう思って、言った。

人質を盾に取る方が卑劣なのだ。ベスラは防衛の要所である。人質ごと攻撃しても、やむを得ない犠牲と、兵も民も納得したろう。

父の伴侶といっても、ファティマは実母ではない。公式に妻と認

められてさえない、一平民の婦人に過ぎない。

ファティマが自ら城壁から身を投げたのなら、それでも、ザルバツグは一瞬なりとためらいを見せたということだろう。

（父さん……、母さん……）

ティータを救うことが出来るならば、命を危険にさらすことは何でもなかった。どんな罰を受けようと、他人に謗られようと構わない、と思っていたが……。

（僕の身は、僕一人のものじゃない……）

バルバネスとファティマ、その他大勢の、ラムザを守り育ててきた人々に託された希望を、ラムザは改めて思い出した。

だがそのことは、ラムザの中で、ティータを諦めることにはつながらなかった。

今ここに在ることの意味を思い返したラムザは、それがティータと天秤に掛けて一方を諦めるべき性質のものではなく、二つ揃って一つのことであると、瞬時に確認し直したのである。

「僕は、ベオルブ家の男子として生きてきた責任を、ないがしろにするつもりはありません」

ラムザは真っ直ぐにバスカークの目を見た。

「ですがそれは、ティータを犠牲にしてよいということにはなりません！」

「実に良いお答えです」

嫌味皮肉ではなく、バスカークは言った。

「何か勘違いなさっておいではありませんか。一言も、ティータ殿を見捨てろとは申しておりませんよ」

やんちゃ坊主をたしなめるような、慈愛のこもった微笑みが、バスカークの目にたたえられている。

「情の無いお方に、人は付いてゆきたいとは思いません。自ら動くお方にこそ、他人^{ひと}を動かす力もあるのです。

ですが、多くの者を統べるお方が一々陣頭に立つ必要はありませんし、立つべきでもありませんね。もっと、他人に任せることもお

勉強なさらなくては」

後ろにいる兵士達の一人が、仲間に耳打ちした。

「隊長はちょっと、ヒトを働かせすぎだけどな……」

バスカークは、振り返らずに注意する。

「二列目、左から五番目の人！言いたいことがあるなら、後でじっくり聞きますよ」

「い、いいえっ、何でもないのであります！」

バスカークは地獄耳だった。

「ここにいらっしゃる途中で、リュカ達に会いませんでしたか？彼らを、ティータ殿とゴラグロスの追跡に当たらせませす」

「え……」

「彼らでは不足でしょうか」

「いえ！いえ、そうではなく……あの、それこそ私事のために現役の騎士の方を動かすのは……」

「何をおっしゃいます。副団長・ゴラグロスの捕捉は、重要な公益性のある任務ですよ」

バスカークは、ひそひそと声を潜めた。

「きちんとした名目が立てば良いのですよ。お役所仕事というのは案外、融通の利かせようがあるのです」

「職権濫用って言いませんか？それ……」

「ですから、濫用にならぬ範囲でいかに、お役所仕事を現実の状況に即し、人の役に立てるかが、手腕の問われる所なのではありませんか。ラムザ様も覚えておいて下さいね」

呆氣にとられているラムザに、バスカークは普通の大きさの声に戻って、

「まだ何かご不満がおりますか」

「……」

「あくまでも御自分の体を動かしていなければ気が済まないとおっしゃるのは、ただの自己満足になってしまいますよ？

ここは、私どもを信用していただきましょう。ラムザ様は大人し

く、イグーロスでティータ殿の帰りをお待ち下さい」

ベリンダとガストンは、露骨に不服そうな顔をしている。

が、ディリータには、これで良いのだと安堵する気持ちの方が大きかった。

「……」

ラムザが返事をしないので、バスカークは懷から、丈夫な竜の革のドラゴン縄ロープを引っ張り出した。

「往生際が悪いですね……。本当に、首に縄を掛けて差し上げなくてはなりませんか」

「え、……」

ラムザは後退る。

兵士達が騒いだ。

「御曹司っ！ 観念なさった方が御身のためですぞ！」

「ニコニコしてるうちに従つとかないと、隊長はマジで容赦ないっす！」

と、そのざわめきを破って。

「待って下さい！」

悲鳴に近い、息切れた少年の声でした。

ガリランド市の外壁の外側を、三頭の韋駄鳥チヨコボが駆け足で走っていく。

魔道士姿の小柄な少年が、書簡の筒を高く掲げて振った。

「ダイスダーグ様から！ 書状と、通行許可証を、お預かりしてきました！」

「ナツシュ！ サーシャ！」

もう一人はアルガスか。と、ラムザは一瞬期待したが、違った。ダイスダーグ直属の騎士の一人だった。

「ラムザ君！ 追い付けましたよ、ぼく達。足手まといには、なりません！」

晴れ晴れと、高揚した顔をして、ナツシュはラムザの手に書簡を

渡した。

丸めた書状を開いて読むラムザの頬は、自然と笑み崩れた。

「ダイスダーグ兄さん……、有難うございます！」

ラムザは書状を筒に収めると、唇に、そして胸に押し当てた。

「一緒に、行きましょう！ ティータさんを助けに！」

「うん！ 嬉しいよ！」

再会を喜ぶ少年達をよそに、バスカークはいぶかしんだ。

「私にも拝見させていただけますか」

「ええ、どうぞ」

バスカークは子細に書状を観察した。

（偽書ではないようですね……）

ナツシュとサーシャ以上に人を付けてやることは出来ないが、封鎖されている地域へも自由な通行を許可する手形を与える……という内容だ。

筆跡や紋章に不審な点は見つからない。

だが、本物であるとすれば一層、バスカークの疑念は濃くなった。

（何故……？ ラムザ様の自由行動をお認めになることで、何か益^{プラス}になることがあるか？

ベオルブ伯は私情に流されるお方ではない。だいたいラムザ様が可愛ければ、わざわざ危地に送り出すよりも……、！？）

ぞくりと悪寒がした。

何気ない風を装って、バスカークはダイスダーグの使者に尋ねた。

「貴方は？ ラムザ様のお目付役ですか」

「いいえ。伯爵から、バスカーク様の補佐を仰せついております。

方角が同じゆえ、同道いたしたまでのこと」

「そうですか。お役目ご苦労様です」

顔色には表さなかったが、バスカークの心臓は凍り付いた。

（不覚……！！ 想到して然るべきだったのだ！）

ラムザを止めることが出来ない。

ダイスダーグの”監視”が付いてしまっでは、ラムザのために人

手を割いてやることも不可能になった。迂闊にザルバグに進言することも出来ぬ。いや、事が事だけに、

（ご注進申し上げたところで、取り合って下さるかどうか……？）

頼みの綱は、皮肉なことに――。

「ディリータ君！」

バスカークは、ディリータの後ろ姿に呼び掛けた。

「ラムザ様は貴方の妹さんを助けるために戦おうとなさっている！そのラムザ様をお守りするのは、貴方の仕事ですよ。わかっていますね？」

バスカークを見たディリータの瞳は、暗く透徹していた。

「ようく、わかっていますとも」

辛うじて残された灯火も、ふっと目の前で吹き消されたように、バスカークは感じた。

ラムザの踏み出す道は、星一つ無い闇夜の中へ続くのだ。

「ラムザ様。お気を付けて」

「はい。バスカーク殿にも、ご武運を」

黄金色の髪の少年は、微笑んで、白韋駄鳥チヨコボの背にまたがった。

ラムザそのものが、暗闇に輝く孤灯であるかもしれない。

「ハッ」

五人の少年少女達と、赤魔道士ベリンダは、北へ韋駄鳥チヨコボを駆けさせる。

「ラムザ先パーイ！ご武運を！」

士官学校の新入生三人は、声を限りに声援エールを送った。

春の真昼の日射しは眩しく暖かだったが、風は冷たく速い。今日は寒気がぶり返している。

（ザルバグ様！ダイスダーグ様は、弟君を愛していらっしゃいますか……？）

きらきらと光を振りまいて走ってゆく少年に覆い被さっては通り過ぎる、薄暗い雲の影が、バスカークの目には暗示的に映った。

？ 第6章 兄と妹 「1」 雨の記憶 ？魔法の布屋さん（前書き）

第6章のサブタイトルは、ズバリ『ラムザ君モテモテの巻』かな（笑）。

といっても全然、浮かれた雰囲気ではなく、ここから第一部終盤にかけては切ないシーンが増えます。

涙もろい方はお手許にハンカチのご用意を（泣）。

？ 第6章 兄と妹 「1」 雨の記憶 ？魔法の布屋さん

ざああ……ざああ……。

絶え間ない低い音のうねりが、ミルウーダの疲れた意識を揺り籃のように揺する。

（雨……？）

女剣士は体を丸く縮めて外套マントにくるまった。

（雨……雨は……嫌い……）

彼女の人生の節目節目には、雨が降っていた。

十七年前の夏の終わり、追われるようにして生家を立ち退いた日にも――。

「ミルウーダ。ミルウーダ？」

兄が大声で呼んでいたが、父の書斎にいるミルウーダは返事をしなかった。

揺り椅子にちょこんと座って、空っぽになった本棚を見上げていた。

生前の父は商用で留守がちだった。家にいる間は、暇を見つけては、この揺り椅子に座って娘を膝に載せ、本を読み聞かせるのを楽しみにしていた。

小さな家ではないが、さほど部屋数が多いわけでもない。兄はすぐに、ミルウーダを探し当ててしまった。

「ミルウーダ。ほら、あったぞ。」モルルちゃん」

「……」

ミルウーダは恨めしそうに、礼も言わず、薄汚れた飛猫モイグリの縫いぐるみを受け取った。

”モルルちゃん”を忘れてきたというのは口実なのだ。住み慣れた家に最後のお別れをする時間が欲しくて、わざと寝台ベッドの下に隠しておいたのだ。

兄はミルウーダを急かし、手を引っ張って立ち上がらせた。

「さあ、行こう」

兄がむすっと不機嫌な顔をしているのを、ミルウーダは自分が余計な手間をかけさせたからだと思った。

だが、本当はそうではない。

十四歳の兄は、七歳になったばかりのミルウーダにはわからない事情を理解していた。

即ち、父の商船を襲った”海賊”の正体について、である。

凶報に接した叔父や母は初め、当然、ラーナー海峡の対岸から来た呂国海賊の仕業だろうと思った。

主な積み荷が、東南諸国産の良質な抗魔綿バルダの反物だったからだ。

魔法防御力に優れる抗魔綿バルダは、魔道士の長衣ローブや、戦袍に最適の素材とされる。

リオファネス城攻防戦の際に、大魔道師エリディブスの復活させた”最上級”魔法に手痛い敗北を喫した呂国ロマンダでは、撤退後、抗魔綿バルダの需要が高まった。

抗魔綿栽培の北限は畏国南部のライオネル地方であり、それも、低品質のものが少量採れるに過ぎない。矢張り国内で抗魔綿バルダを産出しない鷗国オルダリアも大量買い付けに走ったため、最上質の塔国産抗魔綿トルギース製の国際取引価格は、一挙に四倍近くまで高騰した。

平時でも、武装商船が海上で他国の貿易船に出会えば、俄に海賊に変じて荷を奪うことはしばしばだった。戦時中は更に、敵国の弱体化と軍資調達を兼ねて、貴族達がそれらの海賊商人達を支援したり、傭兵を雇って直接海賊行為に参加したりした。

リオファネス城攻防戦の記憶も生々しいこの頃、ラーナー海峡には畏・呂両国の海賊船と、それを狩る軍船とが盛んに往来していたのである。

ところが、唯一人重傷で生還した者の目撃証言では、海賊はブラナ氏族だったという。

叔父達は驚いた。

ブラナ氏族は、リオファネス湾沖の大グレディア島を根拠地とする海洋民だ。近年は、ここ、海港レニオール市を治める伯爵が水軍傭兵として雇っていたはずではないか。

しかも再三、救助要請の信号を上げたにも関わらず、それどころか目視でも海賊船が確認出来るほどの距離にしながら、沿岸警備隊の船団は動こうとしなかったという。

どういうことだ――？

この当時――聖歴十二世紀末の畏国近海イヴァリースにおいて、“漁民”、“水運業者”、“海賊”、“水軍傭兵”、を厳密に分類することは難しい。

漁民達は、春秋の風の変わり目などには水運業も営んだし、実入りの少ない冬には“副業”として沿岸部の農耕民の集落から略奪も働いた。また、戦時には水軍傭兵として船団ごと王侯貴族に召し抱えられたりもした。

ブラナ氏族を傭兵として雇っていたレニオール伯爵だが、最近、軍資金が不足しているらしい。報酬が滞れば、彼らはたちまち呂国ロマンダ側イヴァリースに買収され、畏国の商船や農村を襲い始めるだろう。

呂国商船からの略奪だけでは資金繰り出来ず、遂に、自国の商人ロマンダの中から犠牲を選んだものと見える。

秋に租税を徴収してからの後払いという契約で、大量の買い注文を入れ、高価な積み荷を満載した船を海賊達に引き渡したのだった。何故、よりにもよって父が――？

ミルウーダ達の父は、一部で“戦争成金”だと思われていた。

確かに、祖父の代には夫婦二人だけで経営する零細な織物商だったのを、父が一代で大きくした。

が、決して、あくどい荒稼ぎをしたわけではない。

むしろ同業者の中では誰よりも誠実に、良い品を適正な価格で商ってきたし、関税や港湾使用料なども正直に申告して納めてきた。

ただ、商売人の割には口下手で、宣伝・中傷合戦には加わらなかった。潔癖で、貴族に賄賂を贈って大口の注文を取り付けることも

しなかった。

ひたすら真摯に仕事に励んでおれば、実績は自ずとついてくるはずだ——という方針だったのだ。

今回、伯爵からかつて無い大商いを依頼された時も、自分の商売の仕方が認められたのだ、と喜んでいたのに……。

裁判権を司る伯爵自身が仕組んだことでは、ブラナ氏族の”違約”や沿岸警備隊の”職務怠慢”を訴えても無意味だ。いやむしろ、事を荒立てれば残された親族までも、密輸などの濡れ衣を着せられて投獄や財産没収の憂き目に遭うかもしれないなかった。

ミルウーダは夜遅く、難しい話をする大人達を相手に、兄が憤っているのを聞いた。

——伯爵様が黒幕だったというのなら、国王陛下の監察官に訴え出れば良いでしょうッ。父さんなら、父さんなら絶対に、こんな不正には屈しなかった！

——そうだ。……だから命を落とした。

——たとえ命を取られても、曲げられないものはあります！

——自分の命だけでなく、母さんや妹の命まで賭けてもかい？

——……。

——堪えてくれ、頼む。

廊下で訳もわからずにすすり泣いていたミルウーダを見つけると、兄は少年にしてはがっしりと太い腕に妹の冷えた体を抱き締め、軽々と抱き上げた。

——僕がもつと大人だったら……。もつと、力があつたら……。ミルウーダは兄の、肩幅の広い肩に、ぎゅうっとしがみついた。

——お兄ちゃんは、とつても力持ちよ……。

——はは、そういう意味じゃないんだよ。

父は町人ながら、旅の安全のために武術をたしなんでおり、兄にも剣術を学ばせていた。兄も、机に向かって算術や語学の勉強をするよりは、外で体を動かしている方が好きな性質^{たち}だった。

しかしミルウーダは、兄の腕力のことを言ったつもりではないの

だ。

彼女にとって兄は、父の次に、心強く頼もしい存在だった。けれども幼いミルウーダには、そのことを上手く言い表す語彙が足りなかった。……

引越しの日、朝から空は泣き模様だった。

玄関を出ると、兄はミルウーダを片腕に抱え、外套マントに包んで、小糠雨の中を小走りに韋駄鳥車チヨコボまで走った。

幌の内側は薄暗く、ひんやりと湿っており、積み込まれた荷物は少なかった。

方々から借り入れていた出資金や、最近造らせた船の未納分等を返済すると、ほとんど全財産を失った。

この荷韋駄鳥車チヨコボと御者も、叔父の家に着いて荷を下ろせば、彼らのものではなくなる。

ミルウーダは自分の一つきりの行李の蓋を、悲しい思いで撫でた。大富豪というわけではなかったけれど、家業柄、衣類はふんだんに持っていた。

得意先の仕立屋がミルウーダのために、よく流行の服の試作品を作ってくれた。父も娘を可愛がって、雅国の姫君が着るような絹ドレスの晴着やら、ふわふわの楽国兎の毛皮の外套コートやら、航海から帰ってくる度に土産を買ってきてくれたものだ。

ミルウーダは小さなお姫様だったのだ。

しかし数着の質素な普段着以外は、山ほどあった服も帽子も、靴フローチも飾り針フクロも、売れる物は全て売られてしまった。

手許に残った宝物は”モルルちゃん”と、そして――。

「ミルウーダ。これ」

兄は懐から、お揃いの七宝の首飾ペンダントを取り出した。一つは赤で、一つは緑だ。

ぱちん、と蓋を開けると、兄とミルウーダの肖像が精緻な浮き彫りで刻まれている。

「父さんが僕らの誕生日の贈り物プレゼントに頼んであったんだって」

ミルウーダも兄も、※処女の月（※太陽暦八月下旬～九月中旬）の生まれだった。

「大事にするんだぞ」

蓋を閉じて、兄は赤い首飾りペンダントをミルウーダの首に掛けた。……

五年後――。

「ミルウーダ。寒くないか……」

「うん。あったかい」

街道沿いの霊樹ユークォの大本の下に座って、兄妹は通り雨が過ぎるのを待った。

兄の外套マントの中に頭からすっぽりと包まれたミルウーダは、兄の肩に寄り掛かって、小さな子供のように飛猫モークリの縫いぐるみをいじっていた。

「顔が青いぞ。どこか具合が悪いのか？」

「ううん。何でもない」

「歩き疲れたんじゃないのか。……ちょっと足を見せてみる」

兄はひょいとミルウーダの片足を持ち上げ、靴を脱がせた。ミルウーダが嫌がったのは、もう十二歳で、兄といえども異性に素足を見られるのが恥ずかしかったから――ではない。

「まめがすっかり潰れてるじゃないか！早く言えよ。どうしてこんなになるまで我慢してたんだ」

兄はミルウーダの両足の裏に膏藥を貼った。

「ごめんなさい……。だって、これ以上お兄ちゃんのお荷物になりたくなかったんだもの……」

保護者を再び失った兄妹は、母の妹を頼って、峠三つ越えた街に行く途中だった。

仕立屋を営む叔父が商売敵の讒言によって、家財没収の上、鉾山送りにされてしまったのだ。

この頃、どの地方の騎士達も戦費負担がかさみ、赤字を抱えていた。手っ取り早く資金調達するために、富裕な商人を逮捕すれば、

何かしら罪状を見つけて罰金を科した。

大抵の商人は叩けば必ず埃が出たが、叔父にはやましい所はなかった。生真面目だった父とは違い、貴族達への贈答も怠りなかった。しかし、商売敵の方が”袖の下”を多く積んだらしい。

——僕ももう十九おとなです！諦めずに、力を合わせて叔父さんの無実を訴え続けましょう！

頼み込む兄に、元番頭は首を横に振った。

——これは旦那様のご意向なんです。もし坊ちゃんまで罪人にされちゃったら、嬢ちゃんの面倒はどなたが見なさるのです？

母は去年、流行病で他界していた。

兄は振り向いてじっとミルウーダの顔を見つめていたが、やがて膝をつき、妹をかき抱いて号泣した。ミルウーダは兄がそのような激しく泣くのを、初めて見た。……

「わたしがいなかったら、お兄ちゃんの好きなように出来たのに……」

「違うよ。バカだな」

ぽん、と兄は大きな手をミルウーダの狐色の頭に置いた。

「違うんだ、あれは……。兄ちゃんにとって何が一番大事か、わかったのさ。父さんと叔父さんの無念を晴らす機会は、きっと別にある。それよりも、僕の力はまず、ミルウーダを幸せにするために使おう、ってな」

兄は襟元から緑の首飾りペンダントを引っ張り出した。

「こいつだけは売らなくて済むように、頑張るよ」

「うん！わたしも頑張る」

ミルウーダも赤い首飾りペンダントを見せて、笑った。

雨が上がり、雲の切れ間から青空が覗くと、兄はミルウーダに背を向けてしゃがんだ。

「おぶされ」

ミルウーダは素直に従った。

「すごーく久し振りね。お兄ちゃんにおんぶしてもらおうの」

「そうだなあ。昔はよく、父さんを港に迎えに行く時におぶってやったよな。覚えてるか」

「うん」

兄の背中はその頃と同じように、広くて温かい。……

一週間後――。

ミルウーダは、紫電閃く雨の夜道を駆け通した。

「お兄ちゃん！お兄ちゃん！！」

厩舎の扉を叩くと、韋駄鳥達の騒ぐ声が聞こえ、灯りが点った。扉が開くや否や、ミルウーダは兄の胸に飛び込んだ。

「ミルウーダ！？どうしてここに？」

「お兄ちゃん……！」

涙がこみ上げてきて、言葉にならなかった。

「……、とにかくまず、着替えろ」

兄は提灯ランタンを持って先に立ち、梯子を登って中二階の物置に上がった。着替えるといっても、ミルウーダは着の身着のまま持ち物は一つ無かった。生まれた時から友達だった”モルルちゃん”さえ、持ち出す暇がなかったのだ。

兄のペしゃんこの合切袋の中にも、着替えの服などはない。

兄は手拭いと、自分の着ていた上着をミルウーダに手渡した。ミルウーダは服と髪をよく絞り、体の水気を拭いて、兄の上着に着替えた。ミルウーダには、だぶだぶの寝間着ネグリジェのようだった。

「叔母さんの家から真っ直ぐ来たのか。途中で何か食ったか？」

「水だけは……。ずっと雨が降っていたから」

寒さと、今頃になって襲ってきた諸々の恐怖のために震える手を、ミルウーダは提灯ランタンの火の上にかざした。兄の差し出した固焼菓子ビスケットと乾酪チーズのかけらを食べる間にも、カタカタと歯が鳴った。

兄は剣を脇に立て掛け、ミルウーダを抱き寄せて毛布の中に入れると、ちびた蠟燭を少しでも長持ちさせようと、すぐに火を吹き消した。

厩舎の中は真っ暗になった。時折、明かり採りの窓から稲光が差すだけだ。

「どうしたんだ、一体？」

「聞いちゃったの。義叔父さんが、わたしを人買いに売ろうとしてるのを……」

「何だって!？」

ミルウーダを叔母の家に預けた兄は、とある旅商人の一行に簿記係兼用心棒として雇われていた。

いや、旅商人と言うと正確ではない。移動工房、通称”魔法の布屋さん”である。

五十年戦争終期、抗魔綿^{バルダ}に代わる耐魔法性繊維として、寒冷地でも育つ抗魔亜麻^{パサーナ}の栽培が拡大した。

抗魔亜麻は繊維作物としてよりも、油料・飼料作物としてよく知られている。種子から取れる抗魔亜麻油^{パサーナ}は薬用油として軟膏^{エリ}や特効魔法薬^{クサー}の原料になり、油かすは高栄養の飼料として、特に産卵期の韋駄鳥^{チヨコボ}に与えられる。

耐魔法性繊維としての抗魔亜麻^{パサーナ}は、薬品処理・染色等の加工に専門技術が必要とするため、あまり普及してこなかった。工房は魔法都市ガリランドなど、魔道士の多く集まる大都市か、一部の大修道院の中にだけあった。ごく一握りの魔道士や貴族、高僧のための高級品だったのである。

だが、抗魔綿^{バルダ}が品薄だったこの時期には、騎士達が領内での抗魔^{パサ}亜麻の栽培を奨励した。職人集団が各地を巡回し、紡ぎ溜めてあった糸と労賃を受け取って、反物や魔道士の長衣^{ローブ}にまで加工する、移動工房が数多く存在したのだった。

五十年戦争末に独特の、この”魔法の布屋さん”での経験が――培われた人脈や土地勘、主にガリオンヌ領を中心とする各地の騎士団の内情等の知識が――ミルウーダ兄妹が骸旅団の幹部となった時、大いに活かされることになる。

が、それはまだ先の話。

「叔母さんは反対したわ。叔母さんの子供達はみんなまだ小さくて、当分稼ぎにならないから……お兄ちゃんが半年毎にでも帰って来てわたしの養育費を入れてくれるなら、その方がいいじゃない、って。」

でも義叔父さんは、半年後なんて待てない、今すぐお金が要るだろう、って。ほら、一番下の子はずっと咳をしてたでしょ。胸の病気みたいなのよ」

ミルウーダは暗闇の中で、それだけは肌身離さず持っていた首飾^{ペンダント}りを握り締めた。

「黙って姿を消して、悪いことしちゃったかしら？これを売れば、当座の薬代ぐらいにはなったと思うけど……」

「いや。そこまでしてやる義理はないな」

兄はきっぱりと言いつつ切った。

「義叔父さんはかなり酒飲みなんじゃないだろうか？最初に会った日、遠くから来た親戚をもてなすためにしても、飲み過ぎじゃないかと思ったんだ。足りないのは薬代じゃなくて、多分、義叔父さんの飲み代さ。」

でも、そうだな。叔母さんは心配してるだろうから、僕の所にいるって手紙を出そう」

ミルウーダは兄の胸にすがった。

「ね、わたし、お兄ちゃんの側にいていいわよね？お料理だってお裁縫だって出来るし、他の仕事も何でも覚える」

兄はミルウーダの背中を、ぽんと叩いた。

「勿論さ。明日になったら、ゴンザレス親方に頼もう」

ほっと一安心すると、やっと体が温まってきたためもあって、急に眠くなった。

ミルウーダは目を瞑り、兄の胸に掛かっている首飾^{ペンダント}りに頬を押し付けた。

「お兄ちゃん……、もう二度と置いていかないでね。ずっと、ずっと一緒よ」

「ああ。ずっと一緒だ。いつかミルウーダが、兄ちゃんよりもっと頼りになる男を見つけて、お嫁に行くまでは……な」

「お兄ちゃんより頼りになる人なんて、きっと世界中探してもいないわ」

「おいおい、勘弁してくれ。兄ちゃんだって嫁さんが欲しいぞ。いつまでもミルウーダのお守りばかりしてるわけにはいかないんだ」
兄は笑ったが、今のミルウーダには、寒さと不安から逃げ切つてやつと辿り着いたこの腕の中よりも心落ち着ける場所は、何処にも無いように思われた。……

七年後――。

「話って、何？兄さん」

ミルウーダは、気丈で活発な娘に成長していた。

”乳母日傘”^{おんほい}で育てられた子供の頃に比べると、すっかり体も丈夫になった。長旅や忙しい仕事にも慣れ、厚く固くなった手足にまめを作ることもない。

「義勇兵に志願しようと思う」

と、兄は単刀直入に言った。

「そう。矢っ張りね。ウォルターさんも？」

ミルウーダは卓子^{テーブル}を挟んで斜め向かいに座っている、兄の友人に尋ねた。

「んー……」

織工のウォルターは言葉を濁し、卓子^{テーブル}にぽつりぽつり落ちる雨だれを意味もなく拭った。

移動工房に所属して方々を転々としていると、必然的に時事情報^{ニュース}に詳しくなる。

国王の軍政への無関心、国境周辺における近年の危機的戦況を知るにつけ、兄は何も出来ぬ身をもどかしがっていた。

義勇兵募集の布告^{おふれ}を聞いた時から、ミルウーダも心の準備はしていた。

「わたしも行くわ」

旅の間に、ミルウーダは兄から武術を教わっていた。

抗魔亜麻の実の匂いは花虫モルボルを引き付けるらしく、農園や荷韋駄鳥チヨコボ車はしばしば花虫モルボルの群れに襲われるのだ。

兄の予想以上に飲み込みの良かったミルウーダは、兄を除いては一行のどの男よりも強くなった。何度も、先頭に立って野盗や魔獣モンスター達を撃退してきた。

「バカ言うな。戦に行くのは、そこらのゴロツキや魔獣モンスターを相手にするのは比べものにならないぐらい危険なんだぞ」

「そんなの百も承知よ！兄さんが祖国のために命を張るっていうなら、どうしてわたしが志を同じくしちゃいけないの？

ずっと一緒に行くって言ったじゃない……。忘れたの？」

思わず立ち上がったミルウーダを、兄は手振りで座らせた。

「お前こそ、何か忘れていないか」

「何を？」

兄は友人の肩を押す。

ウォルターは咳払いした。

「あの……さ。俺、中古の家と工房を譲ってもらえることになってさ。今回の旅が終わったら、独立するんだ」

「あら、おめでとう」

「それで……。そのう……。ミリィちゃんさえ、嫌じゃなかったら……。お、俺と一緒に来ないか！」

ぽかん、と開いたミルウーダの口が、ゆつくりと弓なりに微笑んだ。

「嫌じゃないわよ。嬉しいわ！」

「……、……」

今度はウォルターの方が、顔を赤くして言葉を失った。

「良かったな」

と、兄がウォルターの背中を叩く。

「うん……。良かった。あの、これ」

ウォルターが卓子テーブルの上に置いた風呂敷包みを解くと、目にも鮮やかな若草色の反物が出てきた。

「花嫁衣装にと思って……」

イヴァリース

聖歴十二、三世紀頃の畏国では、白は死に装束か僧服の色だ。婚礼の衣装には、豊穰と繁栄を表す緑色を使うのが主流だった。

美しい草花の織り模様の入ったこの布を、ウォルターが真剣な表情で織っているところを、実はミルウーダも見ていた。

どこの娘に贈るつもりだろうか、秘かに気を揉んでいたのだ。

「わたしのために……？」

ミルウーダは緑の反物を胸にかき寄せた。

「有難う。そうだったらいいなって、思ってたの」

つり込まれるように、ウォルターも笑った。

「今の俺には、この腕以外に財産なんて無いし……。すごいボロ家なんだぜ、このこと同じぐらい雨漏りする……」

でも、一生懸命働くよ。絶対に、幸せになろう」

「うん……」

俯くと、涙がこぼれた。

「お前を嫁にやるまで——と言ったろう」

兄が重ねた二人の手の上にも、天井から雨だれが落ちた。……

数日後——。

鼻唄を歌いながら、ミルウーダは若草色の花嫁衣装を縫っていた。花嫁衣装といっても、後で普段着に使える程度の、簡素シンプルな意匠デザインだ。だが、真新しい布で自分の服を仕立てることだけでも、嬉しかった。ここ何年も、仕事で何百着と他人の服は作ってきたけれど、自分はずっと古着ばかり着てきた。

降り始めた雨が雨漏りして受け皿に跳ねる音さえ、今は心楽しく、ミルウーダは律動的リズムミカルに針を動かした。と——、宿舎の一階が騒がしくなった。

「大変だ！ウォルターが韋駄鳥チヨコボに轢かれた！」

「お武家の坊々ぼんぼんの愚連隊にぶつかっただらしくて……！」

ミルウーダは、縫いかけの花嫁衣装を放り出して階段を駆け下り、表に飛び出した。

事故現場はすぐにわかった。雨の中、黒山の人だかりが出来ていた。

「どいて……！通して下さいっ」

ミルウーダは人をかき分け、前へ進む。

「うん？あんた、あの人の家族か？」

「見ない方がいい！」

立ちふさがる者の腕の下をかいぐぐった。

「見なくちゃわからないでしょ！人違いかもしれない……し……」
人垣を抜けたミルウーダは、へたりと力無く水溜まりに膝をついた。

雨の音と、人々の話し声とが、空っぽになった頭の中に雑然と反響する。

ざあ……ざあ……。

——それがさ、若様の方もちょっと怪我したみたいでね……。

——轢き逃げっていうより、私刑リンチだったよ。まだ息があったのに、引返してきて何度も踏み潰していったんだから……。

ざあ……ざあ……ざあ……。

——ひっでえなあ……。

——え？あのイカレぼんちか？あー、そりゃ相手が悪すぎる。若い娘さんなんか抗議しに行ったら、逆に言い掛かり付けられて、妾奉公でもさせられるのがオチじゃないか……？

ざざ……ざあ……。

「ミルウーダ……！」

兄が駆け付けて、茫然自失しているミルウーダを抱き締めた。

「ミルウーダ。しっかりしろ！」

肩を揺すり、ぺたぺたと頬を叩く。

「兄さん……」

ミルウーダは虚ろな目を兄に向けた。

「わたしも……兄さん達と一緒に行く……」

ミルウーダの服は婚約者の血の溶けた泥水をたっぷり吸って、重たく濡れていた。……

？－6－〔1〕 雨の記憶 ？骸騎士団

半年後、ゼルテニア領――。

「いい加減にしろ！貴方という人はっ……」

兄が、ギユスタヴという名の頬のこけた剣士に食ってかかっている。珍しくない光景だ。

「元”騎士さ。だから、やってるんだ」

にわか仕込みの訓練を受けた義勇兵達は、”骸騎士団”と名付けられて戦地に送り込まれた。剣術の素養だけでなく、学問も人望もあつた兄は、大隊長を任されていた。

同じく大隊長の一人、ギユスタヴは義勇兵達に評判が芳しくない。農民達を恫喝して作戦に協力させたり、敗残の敵兵を容赦なく狩って武器や糧秣を略奪したりする。

ミルウーダも彼が好きではない。

「自慢じゃないけど、貧乏のやりくりには慣れてます。盗賊みたいな真似をする必要はありません！」

「『素行不良で騎士の位を剥奪された奴なぞが隊長に任命される。平民と思ってなめられたものだ』……」

ギユスタヴはミルウーダを無視して、あさつての方角に向かって喋った。

「……なんてな。甘いんだよ。おめでたすぎるんだ、貴様らは！お綺麗事で戦がやってられたら、貴様ら義勇兵なんかかき集めると思うか？」

俺はな、『祖国同胞のため』なんて腹の足しにもならん甘っちょろい絵空事を信じてる貴様らに、軍隊の現実を教え込んでやる調教師ってわけさ！」

ギユスタヴは目をいからせ、兄を指差した。

「じきに思い知るぜ。俺なんぞはよっぼど、お行儀のいい部類だつてな！」

遠い雷光が、音も無くギュスタヴの青白い顔を照らし出した。……

数週間後――。

ミルウーダは負傷兵に肩を貸しながら、山の中を逃げていた。雨水を含んだ腐葉土は滑り易く、足を取られた。

「もういい。置いていけ……」

「諦めるな！もうすぐ援軍が来る」

ミルウーダは怪我人を励ましたが、自信は無かった。今まで、正規の騎士団が退却戦を援護してくれたためしがない。

「行けよ。兄貴が悲しむぜ、” ミリィちゃん ”」

「わたしも骸騎士団の戦士だ。仲間を捨てて、一人で逃げようとは思わない！」

ミルウーダは男達と同じように鎧を着て、剣を振るった。長かった髪も、肩までに切り落としていた。

「一人でも逃げ切れるかわからねえんだ」

仲間の男は地面に座り込んだ。

「諦めるなって。死ぬ時は一緒だ」

「……。一緒にや死ねないと思うぜ」

シッ、と人差し指を立てて、ミルウーダは茂みに伏せた。

複数の足音が聞こえる。

八人ほどの、傭兵の小集団グループだった。

槍や兜に結び付けられた目印を確認すると、……味方の畏国軍イヴァリースだ。ほっと安心して、ミルウーダは立ち上がり、手を振った。

負傷した仲間に肩を貸し、ミルウーダは傭兵達に近付いた。傭兵達もミルウーダに近付いてくる、と――。

ずぶり。

いきなり、一人が仲間の胸の傷に剣を突き立て、とどめを刺した。

「っ!？」

ミルウーダは絶命した仲間の体を振り捨て、剣を抜く。

(しまった! 鷗国軍オルタリアの偽装か?)

敵陣深く潜入するため、畏国軍の兵士に変装していたのだろうか。そうでなくとも、末端の兵士達の間では、敵味方で装備を戦利品として奪い合っているうちに、目印が入れ替わってしまうこともある。

ミルウーダは二人斬った。

男達より体力は劣るが、小回りの利く体の軽さは、長所でもあった。

が、足場が悪い。ぬかるみに片足が沈んだ。

「！」

戦斧が振り下ろされる。受け止めて踏み止まる臂力は、ミルウーダには無かった。

剣を碎かれ、背中から倒れた。

(殺^やられた！)

とミルウーダは覚悟したが、彼女の命を奪う次の攻撃は来なかった。傭兵達は左右からミルウーダの腕を押さえ込み、兜を脱がせた。余計な傷を付けずに防具を奪ってから、殺すつもりだろうか。しかし、兜は投げ捨てられて坂を転がり落ちていった。

「~~~~~！」

傭兵達の言葉はわからなかったが、何を言っているかは目付きでわかった。

(……!!)

ミルウーダの容貌は女としては十人並み、せいぜい中の上程度だろう。が、男だとしたら頗る美少年だ。

予想以上の拾い物だ、というようなことを言い合っているらしい。

しかも、よく聞けば……。

イヴァリース

(畏国語！？)

オルダリーア　ゼラモニア

訛りがきつく聞き取りづらいが、鵠国語や是領語ではない。

——貴様ら義勇兵を”騎士団”なんておだててるのな。枯れ木も何と違ってだけじゃないぜ。なまじな傭兵団より貴様らの方が実際優秀だ。ロハの上に士気も高い。腕とおつむの未熟を差し引いて

も、釣りが来る……。

ギユスタヴの言葉が鮮やかに思い出された。

——このところ脱走兵が増えてんだ。ろくすっぽ必要経費にも足りん金で駆り出された連中なんぞ、逃げしなに味方からでも追い剥ぎを働いたりするからな。せいぜい気を付けるこつたな……。

(冗談じゃない！)

髑髏が兜を被った旗印の通り、ミルウーダも骸騎士団の一員となつた時から、祖国のために命は捨てたものと思っていた。オルダリーア 鷗国の侵略軍と戦って斬り死にすることは怖くない。

が、友軍に見捨てられ、裏切り——と言うさえ愚かな共食いの餌食になるなどは……。

「くそッ、放せッッ！」

ミルウーダは彼女の体の上に乗るかかってくる傭兵に、足で暴れて抵抗した。すると、傭兵達は躊躇無く彼女の片足を折る。

「うわぁッ!!」

横を見れば、彼らはミルウーダが肩を貸してきた兵士からばかりか、彼女に殺された仲間の死体からも我勝ちに所持品を？いでいる。そういえば、傭兵達の中には、戦利品を巡る味方同士トラブルの刃傷沙汰で死傷する者も少なくないと聞く。

——金品や女の略奪なんかは、別に俺のお家芸じゃない。軍隊の“常識”だ。俺の十倍は凶状持ちの奴等が、ヅラご立派な長官面して兵隊引ッ張ってるんだぜ……。

支給される兵糧等が乏しく、恩賞もほとんど出ないため、敵軍・敵国民から略奪しなければ戦い続けるのが難しい。といっても、まっとうな感覚を持ち合わせた騎士ならば、戦う術を持たぬ女子供を殺したり売り飛ばしたりはしないものだが……。

傭兵達への報酬も不足がちなため、いわゆる“山猫略奪”——私掠を黙認することで報酬に替えている状態だった。

オルダリーアゼラモニア 戦場が鷗国や是領のうちはそれで”良かった”。が、戦線が畏国イヴァリース国内に移り、自国民に対する略奪が目に残るようになってきたため

に、無報酬で働く義勇兵が徴集されたのだ。

ギユスタヴが前の騎士団から除名されたのは、上官の”戦利品”をつまみ食いして逃がしてやったために、不興を買ったのが直接のきっかけだったらしい。

——柄にもない情にほだされたのが、ケチのつき始めさ……。いつか酔った時に、そんなことをぼやいていた。

彼にはまだ、一片の情けがあった。あったが故に左遷された。

(小鬼^{ゴブリン}だって、こいつらほど浅ましくはない……！)

傭兵達の手が、ミルウーダの防具を？ぎ取ってゆく。その手の一つが、男の持ち物には相応しからぬ赤い首飾^{ペンダント}りを、物珍しそうにつまみ上げた。

(あ……)

ミルウーダは思わず、若い娘の声で叫んだ。

「兄さんっ！！」

が、その声は耳を聳する轟音に掻き消されたのである。

地鳴りか、天雷か——否、これは韋駄鳥^{チヨコボ}の蹴爪の音と、兵士達の揚げる鬨の声だ。

援軍が到着したのだ。

「~~~~~！！」

傭兵達はミルウーダを打ち捨てて、山を駆け下りていった。どういう見かはわからぬが、泥と血にまみれた薄汚い”少年”を襲っている場合ではないと判断したようだ。

ミルウーダは乾いた唇を舐め、ペツと唾を吐き捨てて、身震いした。

(助かった……)

折られたと思った足は、脱臼しただけだったらしい。

「う……ぐっ」

自分で膝の関節をはめ、鎧を着け直す。

兜は行方がわからなかったので、殺された仲間のを被った。

「……」

置いてゆけば死者は下穿きまで身ぐるみ？がれ、肉は野獣に食い荒らされてしまうかもしれない。

だがミルウーダ自身、まだ生還出来るかどうかあやしい。死者を連れてゆくのは無理だ。

ミルウーダはせめて、兜を脱がせた頭から遺髪を一房切り取った。仲間の刃こぼれした剣を杖に、立ち上がる。

平地を見下ろせる林の切れ目まで足を引きずって行って、ミルウーダは目を見張った。

（北天騎士団！！）

”黒翼の白竜”に率いられた畏国最強の騎士団が、戦場に雪崩れ込んだのだ。

羽ばたく毎に百の魔獣を打ち倒すという天竜のように、全軍が一匹の生き物の如く動いた。左右の翼が敵陣を切り裂き、孤立した中央の軍を頑丈な顎が噛み砕く。

（すごい……！）

街で噂を聞いた時は、少年達の憧れを理解できなかった。しかし今、眼下に陣容も整然たる群青色の軍団を俯瞰すると、ミルウーダも腹の底から熱い興奮が湧き上がった。

上空を覆っていた雨雲が切れて、光が降り注ぐ。畏国軍の上に虹が架かった。

大自然の劇的演出が合図だったように、浮き足立った鷗国軍は退却に転じる。

（あれが、”風神”將軍バルバネス様……）
ドラゴン ミスリル
竜を象った霊銀の甲冑が、鞍上、きらきらと輝いている。……

数ヶ月後――

野戦病院の外で、ミルウーダは負傷した仲間達を励ましながら、雨に濡れていた。

応急に改装した廃寺の中は満杯で、葉と血の匂い、人いきれがこもっている。入りきらない負傷兵達が、外の天幕の下で順番待ちし

ていた。

ミルウーダ達は、その天幕テントからさえ、はみ出しているのである。負傷者の数に医療班の人手と資材が足りず、全員を治療することは不可能になっていた。

傷が浅いといつては後回しにされ、助かる見込みが薄いといつては後回しにされ、義勇兵達は最後まで待ちぼうけを食わされるのがいつものことだった。

ミルウーダが雨から庇っている少年は、口の中でもそそと呟き続けている。耳をそばだてると、母を呼んでいるのだった。

義勇兵達の志願の動機は様々である。

ミルウーダの兄達のように、純粹に祖国の危難に殉ずる自己犠牲の覚悟を固めている者は、むしろ少数派であると、戦地へ来て気付かされた。

片田舎出身の若者には、志一つを元手に救国の英雄ヒーローとなり、あわよくば騎士に……といった単純素朴な夢を抱いてやってきた者が、呆れるほど多い。

確かに義勇兵募集に際して、平民達の心を釣るために、場合によっては騎士に取り立てられる可能性もある——とほのめかされた。

しかし、その”可能性”の程度を冷静に考えてもみよ。

傭兵の中には、騎士の庶子や三男坊以下など、騎士に準ずる武術と教養を備えた人材が数多くいる。彼らでさえ、大功を立て騎士に列せられることは稀なのである。

一方、出世物語の野望や幻想とは無縁に、もっと切実な現実的必要性に迫られて参加した者もいる。

食い詰めて都市に出たが仕事が無く、さりとて悪事には踏み切れず、義勇兵になれば取りあえずおまんまにありつけるだろうと、出稼ぎのようなつもりで応募した者達。

彼らの期待も裏切られた——と、言うべきだろうか。

地方により人によって、戦況の認識に天と地ほども開きがあったのである。

イヴァリース

畏国軍が押されていることは知っていても、かなり控え目な、樂觀的な情報しか聞いていなかった者が大部分だ。畏国軍が優勢で勝利の詰め段階に入っており、軍糧・軍資金はうなるほどあるが人手がいくらあっても足りない状態なのだ——と信じていた者さえいる。

だが蓋を開けてみると、義勇兵達に与えられた初期装備は、死臭の染み付いたオルダリーア鷗国兵の使い古しや、錆の浮いた粗悪品ばかりだった。兵糧の支給も乏しかった。山菜で水増しした粥や、豆だけの羹スープが一日に一杯だけという日が続くこともあった。

こうなっては、補給は敵軍から——時には沿道の農村から——の略奪が頼りだ。

ところが、義勇兵達の血と命で購あがなった戦利品は、一兵たりとも貸さなかった上役の騎士に一旦徴収され、大半の上前をはねられる。

目の前に食糧や薬や毛布があっても、上官の許可なく手をつければ、官物を盗んだ罪で罰せられた。倉庫の横で虚しく凍え死んだ負傷兵もいたのである。

「う……うっ……」

ミルウッドが抱えた少年は、泣いている。

お腹と背中が皮がくっついていても、父ちゃんや地主様に殴られても、故郷の村で畑を耕していた方が良かった——。

夢破れた者はい、そんな弱音を吐く。

宝の洞窟と思ってくぐる入り口が、人食い凶獣ベヒーモスの巣穴へ続いていることに、人々が気付くのはいつだろう？ 入る者は多いが、財宝を掴んで出て来る者のいないことに——。

後続の志願者は引きも切らず、反比例して、義勇兵達の命はますます軽んじられた。

この少年の所属していた四部隊は、敵軍諸共、味方の弓兵隊と魔道士隊の集中砲火を浴びたのである。

少年は負傷のため発熱していたが、本人は寒いのだろう、がたがたと震えた。

(せめて、雨をしのげれば……)

少年を守っているミルウーダの外套マントも、樹上からの雨だれで、既に全体が冷たく湿っていた。

申し訳なさそうな顔をする医師・看護師達に文句を言っても打開策にはならない。彼らとて万能ではないし、騎士達に逆らうことは出来ないのだから。

と――。

「このくらいの傷、舐めておけば治ります」

寺院の玄関から、神官医クレリックの青年が身なりの良い騎士を押し出した。

「大声を出さないで下さい。他の人達の傷に障ります」

静かな声だが、がなり立てる騎士の声よりもよく透る。

「騎士も傭兵も、民兵ありません。ここにいるのは火急に治療の必要な人だけです。それだけ怒鳴る元気のあるお方には、用の無い所ですよ」

線が細く顔立ちが優しげなので、”若者”だと思ったが、よく見れば三十歳くらいの女性だ。

ロマンダ
(呂国人……?)

瞳が碧く、頭巾からこぼれる髪が黄金色だ。

騎士を追い返した神官医クレリックは、ミルウーダが庇っている少年に目を止めた。

「これは……、早く切開手術しないと、傷口が腐ってしまうわ。麻酔が無いけど、我慢出来る？」

「はい……!」

ミルウーダは少年に肩を貸して、建物の中まで付き添った。

クレリック
神官医は少年に話し掛ける。

「あなた、お嫁さんは……まだいないかしら。お母さんは？」

「生きてます。……多分」

「じゃあ、お母さんの顔を思い浮かべなさい。必ず元気になって帰るんだ、って思うのよ」

ミルウーダが外に出ると、天幕テントの下で兵士達が話し合っている。

「ははっ、ざまあ見ろ」

「あのおっさん、ほんのかすり傷でも”回復”^{ケアル}かけさせるんだ」

「流石ファティマさん、言ってくれるぜ！」

ミルウーダは聞き返した。

「聖母様？」^{ファティマ}

「あの女先生さ。そう呼ばれてる。本名かどうか知らないけど、ぴったりだろ」

戦場の聖母。……

数年後――。

「わたしが何とかするわ、アイラ」

「どうやって？ 仮に今すぐ二十万ギル絞り出せたとして、その後の補給はどうするの。副団長さんの出番かしら」

前回の戦闘で、骸騎士団は多数の捕虜を出した。弱腰な正規の騎士団の退却を援護した挙げ句に、骸騎士団が全て引き揚げる前に砦の跳ね橋を上げられてしまったのだ。

兄は城主に責任を訴えたが、義勇兵のための身代金はびた一文支払われなかった。^{ガメル}

「でも、貴女のせいじゃないわよ！ いくらあのオヤジがケツの穴小さいたって……」

ミルウーダは言い淀んで、顔を赤らめた。

男所帯の軍隊暮らしが長いと、いつの間にか柄の悪い言葉遣いや態度が身に付いてしまう。しかし、アイリーンと二人きりの時は、ミルウーダも女らしい心と言葉に戻った。

アイリーンはミルウーダよりも三つ年上だ。背が高く、剣を振るえば並みの男達より強いが、戦場を離れれば気配りの細やかな、気立てのよい女性だった。

ミルウーダは言い直す。

「いくら、ここのお館様が狭量だって、そんな感情的な腹いせのためになんか達の間を切り捨てるほど単純じゃないわよ。いえ、た

とえ”それ”が原因に絡んでいたとしても、貴女があいつに頼み込めばほんと二十万ギルも出してくれるなんてことは、あり得ないわ」好色な城主がアイリーンに目を付けていたために、出撃前、義勇兵達と城兵達との間でちよつとした諍いいさかがあったのだ。

「少しでもわたしに責任があるなら、黙って見てはいられないのよ」

ミルウーダの兄の苦悩を……。

人命の貴さなどという理想論は、とっくに用を成さぬ時勢と場所柄だ。

兄は口を酸っぱくして、実利を説いた。

単に仲間達を取り戻す方便ではなく、事実、現状では金を払っても他では手に入れ難い即戦力であるはずなのに。

——何故こんな簡単な計算がわからない？負けてもいいのか、あいつは！

苛立つ兄に向かって、ギュスタヴは冷淡に忠告したものだ。

——でかい声で言わん方が身のためだぜ。

——……！

兄は絶句した。

敗色濃厚な畏国軍イヴァリースの中では、もはや、“降伏後”の保身を考えている者がいる。また、それを見越して、オルダリアの鵬国軍が頻繁に離間策を用いた。

自分の命や地位さえ保証されれば、家臣達や友軍の将兵を犠牲にしても構わない。領民が鉄騎に蹂躪されようと、奴隷にされようと、痛痒を感じない。そんな腹づもりの騎士も、いるのだ。

初めのうちこそ鬼だと思ったギュスタヴだけれど、ミルウーダは近頃、彼なぞは守護聖人のように後光が差して見える時がある。

彼は成る程、言動が粗暴で、敵兵に対しては汚い戦法や残虐な徹底殺戮もためらわない。だが最低限、同胞である畏国イヴァリースの百姓達に殺人強盗を働いたりはしなかったし——恐喝することはしよっちゅうだったが——、自分の生命や虚栄心と引き換えに兵士達を犬死にさ

せることもなかったから……。

誰のための、何を守るための戦いなのか？

そんな根幹の目的すら揺らいでいる。

「バカなこと考えないでね。兄さんも貴女が好きなんだから！」

思わず口から飛び出した台詞に、ハッと二人の女は見つめ合った。

「……そうなの？」

「……そうなのよ」

ミルウッドは念を押す。

「でもね、私情で判断を曲げているわけじゃないのよ。もし、それで本当に仲間を買い戻せるものだったら……わたしだって、目を瞑って貴女に恥を忍んでもらうかもしれないわ。

でも、現実的にあいつの懐具合を見積もれば、どうせ無い袖は振れっこないんだから。あいつが何言ってきたても、騙されちゃ駄目よ。わかった？」

アイリーンを説き伏せたものの、二十万ギルを工面する妙案など無いのも事実だ。

ミルウッドは雨の音を聞きながら、砦の廊下をそぞろ歩く。

城主に限らず、騎士達の多くは穀物商や羊毛商から今年の年貢分を前借りしている有様だ。賠償責任を負わせるどころか、借金の申し入れさえ通らない。

といって、ただでさえ資金繰りの厳しい骸騎士団では、自力で解決する手段といえば、敵方の将兵や騎鳥を捕らえて捕虜交換に持ち込むことぐらいだ。兄とギユスタヴは充分勝算があると見て、骸騎士団のみで短時間出撃して敵を攪乱する作戦も城主に打診したが、却下されてしまったし……。

まさか、どこぞの傭兵団がやったように、密偵スパイを匿ったなどと言いつけ、自国民の村を皆殺しにして略奪せよとでも？

「まだ身代金の金策なんかしてるのか？ いい加減、諦めなつて」
ミルウッドの眉間に寄った縦皺を、童顔の男が、ぴんと指先で弾いた。

「城外に取り残された時点で、あいつらは戦死したものだ
な」

「ゴラグロス！ギユスタヴみたいな言い方ね」

「俺は、あんたと兄貴殿のために言ってるつもりだぞ。とっくに無くしちゃったものにこだわってる暇に、今あるものまで無くしかねん……ってことさ」

ゴラグロスの言葉は不吉な予言のように胸に引っ掛かった、が、すぐに様々な思案の底に沈んでしまった。

方々歩き回って団員達や騎士達と話し合ったけれど、収穫は何もなく、やがて夜も更けて……。

ミルウーダが兵舎に戻った時には、見張りの交替で出入りする人々が密やかにざわめいていた。

（ああ、もうこんな時間だったのね……）

ミルウーダとアイリーンは相部屋の寝室を与えられていた。狭苦しい、牢屋のように殺風景な部屋だが、一般の兵士達は大部屋の床に雑魚寝しているのだから、条件は良い。

扉は開いていた。ミルウーダは中に入り、松明を壁に掛けた。

「……？」

人のいた気配が無い。空気が澄んでいる。二段寝台^{ベッド}も上下段とも冷たかった。

日暮れに一旦止んだ雨が、また激しくなっていた。通気孔を流れる風の細い口笛に合わせて、炎が揺らめく。

足音や、抑えた話し声が静まるにつれ、ミルウーダは胸騒ぎがしてきた。

（遅い……）

ミルウーダが眠らずに、寝台^{ベッド}に腰掛けてアイリーンの帰りを待っている……。

横殴りの雨の吹きつける外廊下を、物音を潜めて歩いてくる者があった。

「ミルウーダ。起きているか」

扉の外で、兄が低く、早口に言った。

門を抜いたミルウッドは、アツと口を覆った。

入ってきた兄は髪も服もずぶ濡れで、腕にアイリーンを抱えている。

兄の外套マントに包まれたアイリーンが死体になっていることは、一目で明らかだった。松明に照らされた肌に血の気が全く無く、鳥賊妖ビスコデューモンのように青ざめている。

「どうして……！」

「城主殿に危害を加えようとしたので、やむを得ず斬り捨てた、とか……」

「どういうこと？ 何があったの……！」

「ありのままを公表すれば波乱があるな……皆にどう説明するか……。だが、まずは服を着せてやってくれ……」

「……うん」

ミルウッドは喉にこみ上げてきたものを飲み下して、潰れた声で応えた。

「それから、ミルウッド。身代金を用立てる必要は無くなったぞ」「何よ。アイラを殺したお詫びに、あいつが払ってくれるっていうの？」

兄は首を横に振った。

「一昨日までに身代金の支払われなかった捕虜は、昨日全員処分された……そうだ」

「そ……んな……」

氷のような雨に洗いざらされたアイリーンの亡骸は、冷たく固まっ
っていて、悲しそうに、悔しそうに見開かれた目を閉じさせてやる
ことが出来なかった。……

そして去年、聖歴一二〇八年初頭――。

「諸君。本日限りをもって、骸騎士団は解散する……」

この日も、霧のような氷雨が降っていた。兄の一言毎に、吐く息

が白かった。

幕舎の周りに詰めかけた義勇兵達の間、軽い驚きと疑問のざわめきが走った。

解散式は明後日ではなかったのか？

「ラーグ公の決定に変更はない。三年以上に及ぶ我らの命を懸けた働きに対し、報酬は僅かに三百ギルだ。それ以上、傷病の手当も遺族年金も一切出ない」

三百ギル。格安の宿を利用して、十日程度の旅で使い果たしてしまう金額だ。要するに、故郷への片道の路銀にすぎない。

しかも、”借り物”の武器防具を返して、野盗や魔獣モンスターの潜む野山を丸腰で帰らねばならないという。

騎士達の考えでは、彼らは傭兵ではなく、元々無償奉仕ボランティアが前提の義勇兵である。軍団に所属する間衣食住を保障してやったのだし、帰路の旅費を負担してやるだけでも、苦しい軍資金の中から奮発したつもりだったろう。

だが義勇兵達の多くは、戦功次第で騎士に取り立てられるという触れ込みに期待して応募したのだ。

彼らはほとんどが、貧農か、都市の下層労働者の出身だった。そもそも食い詰めて故郷を飛び出して来たのであって、帰っても仕事の口があるかどうかかわからない。殊に、怪我や病気に冒されておれば、生計の見通しは全く立たない。

「ただ、騎士の称号と諸権利を授かる者を二名増やし、十二名にすると言ってきた。

今日まで骸騎士団に参加してくれた同志の数およそ三千名、その八割までもが散った。その中から、ほんの十二名だ。それを以て我々義勇兵の働きを顕彰したと、体面を繕うつもりらしい。

……ふざけたことを！」

兄は叩き付けるように言った。

「我々は祖国の危難を見かねて立ち上がった義勇の士だ。もとより、官位や報酬が望みではない。我ら十二名の返答は、これだ！」

兄が天幕から引きずり出して高々と掲げたものを見て、おお、とどよめきの声と一緒に広がった。

ラーグ公の伝令の首だった。

「諸君、もう一度初めの志を思い出してほしい！我々は祖国の同胞を救うため剣を取った。我ら畏国の民を脅かすものは何だ？」

オルタリア 鷗国の侵略軍、確かにその通りだった。

だが、彼らに破壊と暴虐を許したのは何者だ？己の職分を果たさず我らに後始末を押し付け、しかも御用済みになると我らを切り捨てようとしている者は？

他人を害する賊徒を狩ることを務めとしながら、自らは勞せずして良民の生活と生存を奪い、罰を受けずにいる者！

それを騎士と呼ぶならば、騎士の称号なぞこちらから願い下げだッ！！」

義勇兵達の与り知らぬことだが、彼らとは全く異なる観点から騎士達の”過誤”を指摘していた人間が、実はラーグ公の側近にもいた。

軍師ダイスダーグである。

ダイスダーグが騎士に推した義勇兵達の顔触れは、今回選ばれたのとは大分違っていた。

功や能力のある者が選から漏れる一方で、物欲名声欲の強い感心しない者も含んでいたから、騎士達はダイスダーグの真意を測りかねた。

——せいぜいが十名ばかりの無駄飯食らいを養う方が、何百何千人の逆賊を生み出すよりは、害が少なからうと存じます。……

騎士・傭兵達への報酬も不足している。始めから報酬の確約の無い義勇兵達に予算を割くことは、尚更出来ない。

となれば、程度の多少こそあれ抗議が起こるのは必然だ。その際恐ろしいのは、義勇兵達が一致団結して騎士達に対し謀反を企てることである。

ダイスダーグの狙いは、彼らを内部分裂させることにあった。

骸騎士団内の各派閥から、敢えて不公平に褒賞を授ける者を選ぶ。己一個の利益を確保しようとする者、それを妬む者、おこぼれに与ろうとたかる者など、様々な思惑の者達が対立し、足並みが乱れるだろう。万が一武力行動に発展したとしても、全員一丸とはゆかず、騎士団による鎮圧は容易になるものと思われる。……

歴史に”もし”は無いというが、ダイスダーグの策が容れられておれば、あるいは骸旅団の反乱は振り出しで失敗しており、ひいてはラムザとデイリータ、二人の英雄の人生も違ったものになっていたかもしれない。

ところが、これまで散々義勇兵達をいのように捨て駒に使ってきた者に限って、ダイスダーグの意見を退けた。

あまりあざといやり方では、民衆の反感を買う。当初の約束通り相応しい者を騎士に昇格させることで、平民達にせめてもの誠意を示す方が得策である……というのだ。

ダイスダーグには片腹痛かったろう。

大部分の者に何ら具体的な補償も無い、口先ばかりの”誠意”なぞ焼け石に水だ。

義勇兵募集は五十年戦争末期の兵員不足を解消した。が、同時に、平民達に前線の現実を見せ、まだしも残っていた騎士への憧れや信頼を粉碎するという副作用ももたらした。

オルダリーア

鷗国への賠償金で国庫は空になり、今後の増税も避けられない。

民衆を納得させるだけの”餌”など用意しようがないのだから、後は厳しく”鞭”を振るうしか――あらゆる手段を用いて物理的に反乱を封じ込めるしかないではないか？

反乱が起これば、賊徒に回った多くの平民達を殺さねばならない。その分、人手を失った農地や都市はますます荒廃し、残された者達の生活を圧迫する。”姑息な小細工を弄して”でも反乱を防ぐ方が、結果的によっぽど”民のため”だ。……

後世の史家や読書人はダイスダーグの論理に批判的であるが、後日、ラーグ公の家中では彼の現実主義的洞察眼が高く評価された。

「骸騎士団改め、我ら”骸旅団”は、我ら自身の志のために戦おう！冠を被った盗賊どもの手から、我らの祖国、我らの生命、我らの未来を取り戻すのだ！」

兄が剣を振り上げると、うおーッ、と嵐のような歓呼と雄叫びが沸き起こった。

兄の志はともかく、方法が正しかったと言えるかどうか、ミルウーダにはわからない。

義勇兵達の心に鬱積した不満や絶望は、兄が大義名分という導火線を差し込んでやらなければ、義憤の形を取って爆発するまでには至らなかったかもしれない。

兄の信望は、十一名の幹部達と義勇兵達の”力”を劇的に一つにまとめ、一斉蜂起に踏み切らせることには成功した。

だが”心”において、骸旅団はその発足当初から、崇高とは言い難い動機に従う者を多分に含んでいたのである。

そのことがいつの日か、彼らの”革命”を挫折させる要因になるだろうことを、歓声と怒号のるつぼの中でミルウーダは既に予感していた。

けれども、怖いとは思わなかった。ただ、引き返せない道に入っただけという感慨だけが、ミルウーダの胸を熱くした。

（たとえば最後の一人になっても、わたしはずっと兄さんの味方よ。どこまでも一緒に行くわ。地獄までだって！）

地獄までも――。

ミルウーダの夢の中にも、雨が降っている。

累々と屍の折り重なる荒野を、どす黒い血溜まりに足をめり込ませ、刃こぼれした剣を杖にさ迷い歩く。

ミルウーダは子供のように、くたびれた飛猫モーグリの縫いぐるみを胸に抱えていた。

おかしいと思ってよく見れば、血まみれの婚約者ウオルター・アイリーの首ではないか。驚いて放り捨てると、それは悲しげに目を見開いた戦友の首に変

わっている。

（神様……）

思わず顔をそむけると、

「家畜に神はいないッ！」

騎士の少年のものになった生首が嘲笑った。

（そうね。わたし達は初めから、神に見放された子供達……）

だから剣だけにすがり、骸の山を踏み越えてゆく。

（雨……雨は嫌い……。お日様は全ての人間を温めてくれるけど、

雨は貧しい者だけを凍えさせるから……）

かじかむ手足に、濡れそぼった鎧が重たかった。

（寒い……。兄さん……。兄さん、どこにいるの……？）

と、――。

後ろから伸びた手が、ミルウーダに頭からすっぽりと外套^{マント}を掛けた。

「体を冷やしてしまいますよ、ミルウーダ」

兄ではない。よく透る、若々しい声。

振り向けば……、

黒雲が晴れて、降り注ぐ光に映える黄金色の髪。雨上がりの空のように澄んだ碧い瞳の少年が、微笑む。

（ベオルブのボーヤ！？）

ミルウーダは飛び起きた。

「あ……」

まだ深夜だ。雨の音と聞こえたのは、レナリア台地に吹く強い風が、灌木の枝を岩にこすり付ける音だった。

仲間達は猟師小屋の床にかたまって眠っている。ミルウーダも再び、外套^{マント}にくるまって体を横たえた。

彼女の敵である、ベオルブ家の少年の所持品だった外套^{マント}だ。

生地が上質で縫製もしっかりしているが、無用の飾り気は無い。大事に使われてきたらしい古び方をしている。

外套マントの両肩の内側には、真新しい聖印の縫い取りがある。

右側の方は、針目が稚拙で不揃いだ。多分、縫ったのは妹だろう。左側の方は、右よりずっと几帳面で綺麗な仕上がりだ。母か姉……は、いなさそうな口振りだったから、

（許婚……かしら）

外套マントには血の跡が染み付いている。ミルウーダを慕い、最後まで彼女を守ろうとして死んだ、味方の少年兵の流した血だ。

しかし、ミルウーダは血の匂いには麻痺してしまっていた。

嗅ぎ取れるのは、健康な若者の体臭と、微かな石けんと香草ハーブの匂い。そしてもっと微かな、女物の香の移り香だった。

（どうして受け取ったのかしら？捨てずにいるのかしら？貴族の情けなど……）

いや、少し違うかもしれない。

——情けではありません。節義です。

あの少年は、まるでお伽話の騎士道物語から抜け出て来たような”騎士”そのものだった。凛々しい姿、潔い態度。敵に対しては勇敢に戦い、婦女子には親切に……。

——女の人は体を冷やしちゃいけないのでしょうか。

（意味わかって言ってるのかしら？あの子……）

冷えは万病の元と言い、老若男女問わず免疫力が落ちる。が、女性の場合は特に、若い頃から気を付けていないと、不妊や難産の原因となったり、閉経後に腰痛や関節痛がひどくなったりするためだ。明日をも知れぬ”お尋ね者”の彼女に、子を産み育て、腰の曲がった老婆になるまで生きる未来がある——あってほしいとでも？

（どうして、貴族てきの中にあんな子がいるのよ……）

ミルウーダは苛立った。

悪鬼畜生の類ばかりだと思っていられば楽なのに。

他人を気遣う心もあり、彼の帰りを待つ家族もある、血の通った人間なのだと意識してしまったら、戦いづらくなるではないか。

はたと、ミルウーダの動悸が速くなった。

ダイスダーク暗殺に失敗したゴラグロスが、ベオルブ家の娘を人質に取って逃走中だと、昼間に聞いた。この縫い取りのどちらかを縫った少女ではないのか？

あの少年の身を案じ、一針一針祈りを込めてお守りを縫い付け――、この外套マントを抱えて不安に眠れぬ夜を過ごしたかもしれぬ少女が、こちら側に囚われている。

（あの子、どうするかしら）

追ってくるだろうか。愛する者を取り戻すために。

（今度こそ、見逃そうとはしないわよね）

先程は、夢の中で名前を呼ばれてどきりとした。

彼がミルウーダの名を知っているはずはない。彼女が何者であるかわかっていれば、北天騎士団団長の弟ともあろう者が、捕らえておきながら見す見す手放すわけがないのだ。

（二度と……会うことがなければ良いけど……）

騒ぐ胸を静めて、ミルウーダは眠り直すことにした。

ざあ……ざああ……。

雨の響きにも似た風の音を子守歌に、ミルウーダは目を閉じる。

（雨……雨は嫌い……。でも……）

無意識のうちに胸元をまさぐり、ミルウーダの手は赤い七宝の首ペンダント飾りを握り締めた。

――寒くないか？ミルウーダ……。

幼子の頃に帰って、冷たい雨から彼女を庇う兄の懷で安らぐ夢に、戦い疲れた女剣士はまどろむ。

？－6－〔1〕 雨の記憶 ？骸騎士団（後書き）

それぞれに感情移入してしまう女剣士達ですが、アグリアスには”憧れ”の要素も多いのに比べ、ミルウーダには”親近感”をより強く感じます。

キャラ成分表示その6・ミルウーダ

？ちよつと弱気…初登場シーンがいきなり、「もうおしまいね」「兄さんが甘いから」と、弱音・愚痴っぽい台詞で始まるミルウーダ。『え、逆じゃないの！？』という感じでした。普通は、挫けかける仲間を叱咤激励して最後まで士氣を保つのが、リーダーの役目では……。

「殺せ」と言うところも捨て鉢な感じ。たとえばアグリアスなら、死んだ方がマシという状況でも、主君のため、仲間のため、最後まで生き延びるチャンスを諦めないのじゃないかなと。（もしも、の話です！そこまで追い詰めませんって）

それだけ、ミルウーダは厳しい現実を見続けてきて、もう疲れ切っているということかもしれません……。

何か、ちよつと気が強い、運動神経が良いというぐらいで、本来ならとっても剣士には向かない人が、頑張って頑張って兄さんに付いてきたのかな……という印象でした。（実際、ゲーム中の敵の中では、特殊技も持たず、さほど強い方じゃありませんし）

私の中では、ティータやナッシュ、サーシャと同じ系列の、”あんまり強くないけど一生懸命なケナゲ組”という位置付けです。

いえ、バカにしているのではなく。私はチートよりもケナゲ大好きですよ！

？頑な…貴族だというだけで激しく憎むミルウーダは、平民だとい

うだけでとことん軽蔑するアルガスといい勝負。

観念だけでここまでの憎しみは持てないだろうな、個人的・具体的によっぼどの恨みがありそうだな……と思ったのが一つ。

もう一つは、裏返せば、そこまで思い込まなければ戦えないぐらい、柔らかない、優しい心を内に押し込めたまま剣を握ってそうだな、と。

女性作家が描く小説や漫画の中の戦いって、「何々を守るため」だの「誰某の仇」だの、強い愛憎絡みのが主流であるような気がします。「恨みは無いがこれも務め」とか、「敵ながら天晴れ、互いに力を尽くそう」とかいうのは、『どうして男って無益な戦いを好むの!？』って風にとらえてしまうのが女性らしい感覚……なのかも。

冷静に相手の人物を見た上で、場合によっては手を結ぼうとか、あるいは、惜しい人材だが大義のためには斬らねば……とかいう判断をするのは、兄さんには出来ても彼女には難しそう、かな。

？普通の女の人…取り立てて美人ではない、という記述にファンの方は気分を害されたかもしれませんが、彼女のためを思っていることです！目立つほどの美人だったら、骸騎士団時代に敵兵や友軍の騎士に目を付けられて、ろくなことは無かったと思うので。

また後で描きますが、「兄さんのやり方が甘い」とか「わたし達が飢えるのは貴族が全てを奪うため」とかいうのも、ちよつと感情的で”女らしい”感性だなという気がします。

個人差もありますが、良くも悪しくも、女性には細やかな性格の人が多いかも。”良く”は、周りの人のちよつとした感情や体調の変化に敏感で、きめ細かい気配りが出来るとか。ちまちました煩雑な事務をてきぱきと抜かりなくこなせる、とか。

”悪しく”は、目先の細かい問題に気を取られがちで、政治や会社の経営など、大局的・長期的な事柄にはあまり関心が向かなかったり、考えるのが苦手だったりとか。

……自分自身で歯痒く思っているの、”女の短所”として目に付いてしまうのかもしれませんが。

そんなこんなも含めて、あんまり剣士とか革命家とかいう柄じゃない、ごく普通の女の人だなあ……という印象です。そういう人が剣を取らずにおれない、時代の哀しさを感じさせるといえるか……。

アグリアスなどは、他の道が選べたとしても自ら望んで剣士になった人じゃないかなと思います。ミルウーダは、事情が許すならば市井の普通の奥さん、お母さんとして生きたかった人かな……という風に想像してみました。

ま、ごく個人的な感想です。特に、男性の方から見るとまたイメージ違うかもしれませんね？

？－6－〔2〕 レナリア台地 ？ベオルブの名

レナリア台地。

土地の起伏が激しく、切り立った岩肌は雨水を留めず、農耕に適さない。

都市は無く、畑も僅かだ。山羊や山岳種韋駄鳥チヨコボを飼育する牧畜民か、猟師がまばらに小屋を建てて住み付いている程度だ。

赤魔道士ベリンダを加えたラムザパーティの一行は、今朝遂に、封鎖線の内側に入った。

イグーロスを出発してから三日目。ティータが誘拐されてから四日目の朝である。

少年達は何度も韋駄鳥チヨコボを降り、道とも言えぬ山道を登った。

「クウウー……」

先頭をゆくラムザクアールの”銀竜”シルドラが、低い警戒の唸り声を出した。

灰山猫の群れが少年達を狙っている。

ガストンが半弓の弦を絞り、ナツシュサンダーロッドが雷精錫を構えた。

と、ベリンダがひよいと”白将星”リゲルの背から飛び降りる。

「無駄遣いするんじゃないよ。坊や達はお姉さんの鞭さばきを見物してな。お代は見てのお返し、ってね」

「へいへい、期待しやすよ、オバチャン」

と弓を引っ込めたガストンを、ベリンダは忌々しそうに睨む。

「自分の体で喰らってみたいかい？」

「あん？怒ってんの？十六の男つかまえてボーヤ呼ばわりする女がおネエさんってな、無理があるぜー」

チツ、と舌打ちしてベリンダは腰に束ねた革鞭を解いた。

ぱたり、と地面に伸びた革鞭は、意外に長い。手許から先端まで、背丈の優に三倍の間合いがある。

「さ、かかったいで！」

ベリンダは一人、ずんずんと灰山猫達クアールに近付いた。ウウーッ、と頭ボス

が威嚇したが、立ち止まらない。

「ギャア―オ！」

灰山猫^{クアール}達は赤髪の女傭兵に飛びかかった。

ビュッ。

風を切って、革鞭が唸る。

「ギャッ」

真つ先に躍りかかってきた一頭が弾かれ、鞠のように地面に転がって、もがいた。

バシッ、バシインッ。

もう二頭続けざまに打ちのめして、三頭目の首を絡め取り、岩に叩き付けて放り捨てる。横に回り込んだ一頭も、跳ね上がった鞭の先端に顔面を殴られた。

赤い革鞭は、岩に跳ね返れば朱色の火花を飛ばし、灰山猫^{クアール}の体に当たれば毛皮を焦がしてきな臭い匂いを立てる。

ガストンがヒョウッと口笛を吹いた。

「炎撃鞭か！」

耐熱性に優れた火竜の皮から作られた鞭だ。強い衝撃によって高温を発生し、傷口を焼く。^{レッドドラゴン}

前後左右、上下、眩惑的な動きを見せる鞭の結界を、灰山猫^{クアール}達は遠巻きに取り巻いて、隙をうかがった。

「とつととお帰りッ」

ベリンダは自分から前に出て、一振りに灰山猫^{クアール}達を薙ぎ散らす。

「ウアウーッ」

灰山猫^{クアール}の群れは、パツと背中を見せて逃げ帰っていった。

「はん、準備運動にもなりゃしない」

ヒュッと手許に手繰り寄せた鞭は、とぐろを巻いてベリンダの手に収まった。

ガストンは手を叩く。

「お見事、アネさん！」

「わかったら、口の利き方に気を付けな。クソガキにゃ手加減しな

いよ」

とガストンを鼻であしらってからベリンダは、つつ、と愛想良くラムザににじり寄る。

「安心しとくんな、好いた男いたぶる趣味は無いよ、優しーく可愛がったげるから、さ」

「か、からかわないで下さいよ、もー……」

ラムザは頬を赤らめて身を引く。

ガストンが冷やかした。

「結構じゃねーかよ。経験豊富なお姉さんに手取り足取り色々教えてもらっちゃえば？」

「あら、もしかして初めてかい？ふうーん……そりゃあ……」

ベリンダはラムザの首に腕を絡ませる。

「ラムザ君、流されちゃいけませんっ！」

「気をしっかり持って！」

ナツシユとサーシャが両側からラムザの腕を引っ張った。

「やれやれ、騎士様ってのはガチガチにお堅いか堪え性が無いか、両極端だねえ。いいじゃないさ、減るもんじゃなし。ねえ？」

「あの、減るとか増えるとかいう問題じゃなくてですね……、助けてよデイリーターツ！」

だが、呼び掛けられたデイリータはというと――。

眉間に皺を寄せ、時ならぬ浮ついた話題をうるさがる様子さえなく、黙々と口を真一文字に結んで歩く。

「おい、デイリータ……」

ガストンはデイリータの肩を叩こうとしたが、ぞわりと背筋に寒気を感じて、手を引っ込めた。

デイリータは抜き身の白刃のような、鋭く思い詰めた殺気の塊になっている。

唯一人の肉親を賊徒にさらわれた怒りと焦りが、他の仲間^{メンバー}に伝わっていないわけがない。

が、ずっと神経を張り詰めたままでは、無為に気力体力を消耗す

る。いざ誘拐犯達に追い付いた時には、精力を切らし^{スタミナ}ているかもしれない。また、彼ら自身がディリータのはやる気持ちに同調して、冷静な判断力を失うことも恐れた。

だから努めて、悲壮にならぬように、平素と変わらぬように振る舞おうとしてきたのだが……。

特に今朝から、ディリータは表情が虚ろで、話し掛けてもほとんど反応が無い。

「ディリータ」

ラムザがディリータの肩をつかんだ。ディリータは構わず歩き続けようとするが、ラムザは彼を立ち止まらせる。

「いつも通りにやろう。僕が一緒だ」

ラムザはディリータの目を正面から見つめて言った。

「……」

ディリータは黙って頷いた。

ラムザも、微笑んで大きく頷いた。

ディリータの殺伐とした気配が幾分和らいだのを感じて、後ろにいた少年達は一安心する。

しかしラムザは、左手首に巻いたティータの髪留め^{リボン}をさり気なく撫でた。

ラムザにも、実際にティータと誘拐犯達を前にして平静でいられるかどうか、自信は無い。

（でも、こんな時だからこそ平常心を保たなければ……。失敗は許されない！）

この先の獵師小屋に続く山道に、昨夕、骸旅団の残党と思われる若干名の武装集団^{グループ}が入っていった——との情報を得た。その中に、女性の姿もあったという。

「あれだ……」

窪地に強風を避けて、石積み^{タタキ}の壁に茅葺き屋根の古い小屋が建っている。

人間の緊張を感じ取って落ち着き無く羽根を震わせたり、鼻を鳴

らしたりする韋駄鳥達チヨコボをなだめながら、少年達は小屋に近付く。

「そう。北側も封鎖されているのか……。我々に逃げ道はないということね」

ミルウーダは仲間を拾いつつ、また騎士団の追撃で失いつつ、南西から落ち延びてきた。ガリランドからベルベニア山脈沿いに北上して、落ち合い場所に決めていたこの小屋で、たった今、北から逃げてきた者を迎えたのである。

「では、ぐずぐずしてられないわ。北へ行く」
「えっ……」

「挟まれたのなら、時間が経てば経つほど脱出は難しくなる。いぶし出される前に、突破しましょう。兄さん達と合流すれば、まだ望みはあるわ」

「ミルウーダ……!」

仲間達は非難と不信の目を向けた。

「あんたは、自分が兄貴の所に行きたいからって、俺達を道連れにするつもりか？」

「もう諦めましょう。大人しく投降した方が……」

ミルウーダは仲間達の顔を見回した。

「投降した方が……? どうなるのかしら。楽に死ねるとでも思うの? 拷問の上、処刑台行きね。向こうは手間が省けたと喜ぶでしょうよ。」

やつらに捕まるぐらいなら、ここで斬り死にした方がマシよつ!」

ドン、とミルウーダは床を叩いた。

「でもね。何も、どこで死のうかって話じゃないのよ。危険でない道はもう無いとしても、矢っ張り北へ行くのが一番、生き残れる可能性が高いわ。」

南にももう、何重にも包囲網が出来上がっている。西はイグーロスの方角、捕まりに行くようなものよ。東の山越えは、土地の猟師

でも滅多にしない……道に迷って凍え死ぬか、魔獣モンスターの餌になるのがオチだわ。

北へ行けば、元々わたし達の本拠地ホームグラウンドよ。兄さんもゴラグロスも生きているのでしょう？土地の人達もしぶとく抵抗し続けているわ、まだ簡単に騎士団に制圧されはしない。海に出て、フオボハム領やロマンダ呂国に渡る道もあるでしょう。

戦うしか活路はないのよ」

ミルウーダは立ち上がり、出発を促した。

と、――。

小屋から出ようとした男が、慌てて扉を閉めた。

「人が来る！」

ミルウーダ達は息を殺し、窓から外の様子を窺った。

「あつ……」

シルド

”銀竜”の手綱を引くラムザの姿を見て、ミルウーダは震える手で口を覆う。

（まるでお伽話ね。勇敢な白韋駄鳥チヨコボの貴公子プリンスが、お姫様を助けに来たというわけ！）

だが、現実になった”お伽話”の筋書きは、ミルウーダにとっては残酷だ。

プリンス

彼女は貴公子に救い出される乙女ではない。

彼に倒されるべき、”悪党”の一人なのだ。

狭い小屋に潜んでいても身動きが取れなくなるだけだ。ミルウーダ達骸旅団の一行は、獵師小屋メンバーの表に出た。

つい四日前までラムザの持ち物だった外套マントを着けた女剣士と再会して、ラムザは戸惑いを隠せない。

「貴女は……！ガルナ村の人達と一緒に逃げなかったのか！？」

「わたしは骸旅団の戦士だ！仲間を捨てて逃げたりするものか！」
ディリータが血走った目でミルウーダ達を睨んだ。

「ウィーグラフはどこだッ！ティータをどこへやった！！」

「ティータ？ゴラグロスが人質にしたベオルブ家の娘のこと？」

「ティータは俺の妹だ！ベオルブとは関係ないッ！！お前達がティータを人質にしても何の意味も無い！

お願いだ、妹を返してくれッ！」

ガストンは脇の下に冷や汗をかいた。

（やべえな。ディリータの奴、らしくねえ！）

人質としての価値が無いとわかれば、むしろ、殺すなり売り飛ばすなりという形で”お荷物”を処分する危険性がある。あくまでもベオルブ家の令嬢だと思わせておいた方が、ティータの身柄は安全なのだ。

案の定、ミルウーダは憎悪と侮蔑でもって応えた。

「貴方達は返してくれるの？貴方達貴族がわたし達から奪った全てものを、貴方達は返してくれるの？」

父を、ウォルターを、アイリーンを……。

「最初に奪ったのは貴方達。わたし達はそれを返してくれと願っているにすぎない。

だが、貴方達は返してくれない。ただ、ひたすら奪い続けるだけだ！

だから、わたし達は力行使する！

諦めなさい！貴方の妹を返さねばならない理由はどこにもないのよッ！！」

「……！！」

口を滑らせたことに気付いたディリータの顔から、血の気が引く。

（いや、こいつらを皆殺しにすれば！）

ディリータの手が無意識に剣の柄に伸びる。

（いけない！）

ラムザは、ティータの髪留めリボンを巻いた左手で、ディリータの右手首を押さえた。

「理由があります！」

ラムザのよく透る声が岩肌に響いた。

「ティータを人質に取っても、騎士団に対しては何の牽制にもなりません。彼女はベオルブ家の血縁者でないばかりか、貴族ではないのです。貴女達と同じ、平民の少女なのですから」

ガストンは哑然としてラムザの顔を見た。

（おいおいっ!?!）

ミルウーダの叫び声が、骸旅団の戦士達に驚愕をもたらした。

「バカな！ベオルブ家の御曹司が、ただの平民の娘を追ってきたというの!?!」

「……何だって?」

「こいつが……!」

戦士達の注目がラムザの美貌に集まる。

「……男^{やろー}だとう!?!」

「驚く要点はそこかっ?」^{ポイント}

思わず、ミルウーダとガストンが同時にツツコミを入れた。

ラムザは気を取り直して、続ける。

「そ……そうです！騎士の家の男子として、僕にも家臣や領民達を守る義務があります。」

よほど政治的、軍事的に価値ある人材でない限り、人質に取られたからといって軍の撤退などの要求と引き替えには出来ないのは戦^{セオリ-}の定石です……。

ですが、ティータは僕の妹の身代わりにさらわれたようなもの。彼女に対しては、妹に対すると同じだけの責任があるものと考えます。

ドラコニア伯の弟には、彼女が”平民の召使い”であるからといって捨て駒にする気はありません。危険を冒しても、自ら引き取りに来たのです。

それに対して、革命軍を自任する貴女達はどう応えますか？戦闘の場に居合わせて巻き込まれただけの、被害者である平民の少女を拘束し続け、万が一にも危害を加えることがあれば、世の人々はどちらに正義があると思うでしょう？

貴女達の指導者・ウィーグラフ殿下の名を貶めないために、ティータを返していただきたい！」

ミルウーダは目を細めた。

「……ここにはいないわよ」

「そのようですね……」

ミルウーダと、武装した四人の男達の後ろに、丸腰の女が一人いる。男達のうちの誰かの妻だろうか。一味の中に女がいたという証言は、彼女のことだったに違いない。

「では、どこにいるかご存じですか」

「教えると思って？」

「僕らに教えてくれる必要はありません。貴女達がそこに行って、今僕が言った言葉を仲間に伝えて下されば」

剣を抜こうとするディリータの手首を、ラムザは強く掴んで放さなかった。

ディリータならずとも、ベリンダもやきもきした。

（思いつきり正攻法だね！けど、それが通用する相手かねえ？）

失敗すれば、みすみす手掛かりを逃がした上、ティータを更なる危地に追い込むことになりかねない。

「泳がせて、仲間の所まで案内させようというわけ？その手には乗らないわよ」

ラムザは首を横に振る。

「ティータを無事に返してもらえるなら、貴女達と無用の戦いをするつもりはありません」

「そっちに用が無くとも、こっちには大ありだわ」

ミルウーダは剣に手をかけ、仲間達に呼び掛ける。

「聞いたわね。この金髪のボーヤはベオルブの御曹司よ。本物の、価値ある人質になるわ」

ラムザは右手を自然に垂らし、左手でディリータの右手首を掴んだまま、油断なく骸旅団の戦士達に目を配った。

「やめておいた方がいいと思います。」

貴女達には、僕を生け捕りにすることは出来ませんよ。僕らにも、貴女達を殺さずに生け捕りに出来るという保証はない。

それより、仲間の所へ行って僕の言葉を伝えたと、約束していただけませんか」

「生け捕ることが出来なければ、首にして騎士団に送りつけてあげるまでよ」

逡巡している仲間達を、ミルウーダは叱り飛ばした。

「見逃してくれるはずがないでしょう！何度こいつらの甘言に騙されてきたか忘れたの？」

ラムザはディリータの腕を放した。

「残念です」

スラッ。

スラリ。

ミルウーダとラムザは同じ呼吸で剣を抜く。

「逃げる者は追うな。それから、この人は僕に任せて欲しい。みんなは絶対に手を出すな！」

「ほざけ。思い上がるなッ！」

ミルウーダが仕掛ける。

ラムザも前に出て、迎え撃つ。

ギインッ！！

二人の剣が鳴ったのが、開戦の合図だった。

ガストンは、斬りかかってきた剣士の剣を払い、飛び込んで素早い突きを入れる。

間一髪、かわされた。と、踏み下ろしたガストンの足がよろめく。朝方の霧で濡れた岩に滑ったのだ。

バシンッ。

フレイムウィップ

ベリンダの炎撃鞭が、振り下ろされる剣士の腕を下から弾き上げた。ガストンはその隙に体勢を立て直す。

（あつぶねー！）

知らぬ間に随分と”お行儀良く”なっていたものだ、とガストンは心の片隅で自戒する。

^{アカデミー}士官学校におけるガストンの剣術の成績は、そこそ良い。が、^{トップクラス}最上層に浮上出来ないのは、彼が道場剣術の規則に馴染めないからだ。

つい、足技や急所狙いの攻撃などで、反則負けになることが多い。また、地面の傾斜や凹凸、草や石や水溜まり等の障害物のある野外では、不用意に大きく動き回らないのが常套戦法だ。足場を気にする必要のない、平らな床や運動場だからこそ使える技——飛び込み攻撃等は、攻めるにも守るにも不得手だった。

曲がりなりにもリュカの愚連隊の斬り込み隊長を務めていたガストンである。場外も反則も待ったも無い、”不良の喧嘩”こそ彼の本領だ。

しかし——。

チャンツ……。

相手の刃を剣の腹で受け、押し返しているガストンに、横から別の剣士が斬りつけた。

キンッ！

ディリータが防ぎ、ガストンと背中合わせに立って、間合いを仕切り直す。

(まず、一人減らさねーと……)

ディリータも同じことを感じているはずだ。

接近戦に対応出来るディリータ、ガストン、ベリンダの三人で、ミルウーダ以外の四人の戦士達を相手取る。ベリンダの鞭が伸縮自在の間合いで広範囲を^{カバー}守備するとしても、苦しい。

”試合”と違って”喧嘩”ならば、例えば相手が転倒した時は追加攻撃の好機だ。が、”止めを刺す”といってもせいぜい、失神させるか骨を折るかして戦闘不能にするまでのこと。

今彼らと戦っているのは、熟練した騎士や傭兵並みの”殺し合い”の達人達である。

剣の腕前は、ガリランドの街で戦った盗賊達や、マンドリア平原でアルガスを襲っていた追い剥ぎ達のような、ただのゴロツキ連中の比ではない。

一対一でも分が悪いほどだ。

ラムザはミルウーダとの一騎打ちにかかり切りで、こちらを援護する余裕はなさそうだ……というより、一人でミルウーダの手をふさいでいるだけで驚異的な活躍といってよい。

ナツシュが、確実に一人仕留めるつもりで、精神集中して呪文を唱えている。と、

「^{ファイア}炎撃”！”

ナツシュの声ではなかった。

非戦闘員だと思っていた女が、魔法を唱えたのだ。

「……！！」

ナツシュは喉を押さえ、咳き込んで血を吐く。

薪を焚き付ける程度の、ほんの小さな弱い炎だった。しかしそれは、ナツシュの喉の奥で爆発したのである。

サーシャがすぐに”^{ケアル}回復”をかけた。

が、呪文も意識の集中も途切れてしまっている。ナツシュの魔法はやり直した。

骸旅団の女は、次の魔法を唱え始めている。

(……っ)

ガストンの心に焦りが生じる。

と、その時、リュカの剣が背中を押した気がした。

——下手の考え休むに似たり、ってな。バカは黙って突っ込め！

^{イエッサー}「合点ッ！」

ガストンは前に飛び出した。

木剣だろうが真剣だろうが、やることは同じではないか。

肉を斬られようと、骨を断てばよい。押して押して押し切って、突破口を開く、それがガストンの戦い方ではなかったか。^{スタイル}

岩や草に足を滑らせようと、ガストンは構わず踏み込んで攻撃を

畳み掛けた。

地面の出っ張りに躓き、もう一度よろめく。敵が剣を振り下ろすのと、ベリンダの鞭が飛んでくると、どちらが早いか。

バシッ。

ガストンは二の腕を浅く斬られたが、炎撃鞭をくらって一瞬動きの硬直した敵剣士の太腿に、一撃を加えている。

「おバカッ！！」

ベリンダの叱責を、ガストンは激励の言葉と受け取っておいた。

キーンッ。

ラムザの突きを、ミルウーダはすんでの所で脇へ受け流しつつ、反撃を狙う。^{カウンター}ラムザも※半寸^{カーク}（※約一・五センチメートル）ほどの見切りで回避した。

今日はお互いに軽装備だ。持ち味の身軽さを活かした、目まぐるしい攻防が続く。が、既に三度も、ラムザはミルウーダの命を奪える好機^{チャンス}を逃していた。

（詰めが甘いのよ！）

ラムザの背後から、もう一人の剣士が斬りかかる。ミルウーダも同時に斬りつけた。

「！」

ラムザは振り向きざま、後ろの剣士の喉を一太刀でかき斬る。

ミルウーダの攻撃をかわして身を沈めた――、いや、地面に転がったラムザの頭上を越えて、返り血はミルウーダの顔に飛んだ。

「っ！」

ミルウーダは血飛沫を避けず、柄を両手に握り直して剣を垂直に突き下ろす。

ガリッ。

切っ先はラムザの上着をかすめただけで、砂利にめり込んだ。

ラムザは体を起こしつつ、ミルウーダの右小手を狙って斬り上げる。が、ミルウーダはかわして左手だけで剣を引き抜く。

今の一手も、小手より脇腹を攻撃した方が有効だったのに――。

（その驕り、いつまで持つかしら？）

ミルウーダは剣を右手に持ち替え、立ち上がったラムザと、互いに切っ先を目の高さに据えて睨み合いながら、相手の左へ左へと回り込もうと足場を移動させる。

（……）

ラムザの碧い、澄んだ瞳に殺気が無い。で、ありながら実は、ミルウーダが思ったほどには隙も無い。

この少年を見くびり、驕っていたのはむしろ自分の方だと、ミルウーダは気付いた。

百万言を交わすよりも、ただ一度肌を重ねれば心が通じ合うこともあるという。

そんなものかどうか、ミルウーダにはわからない。特に亡くなった婚約者ウォルターに操を立てているつもりでもなかったけれど、この年までついぞ、男を知らずに過ごした。

語り合うより、体を触れ合うよりも多くの男達と、ミルウーダは剣を交えてきた。

今では、そう、剣を合わせれば、百万言を交わすよりも深く、相手の人となりがわかる。

ほとんどの男はミルウーダを侮るか、憐れむ。女と――もしくは小柄な若者と見ただけで、彼女の実力を過小評価するのだ。その油断を、ミルウーダは容赦なく衝いた。

だがラムザは、彼女を自分と互角以上の剣士と認めながら、なお、彼女を殺さずに勝つという困難な課題を放棄せずにいる。

（どうして？ あなたは本当に貴族てきなの！？）

ミルウーダの剣がラムザに問う。

応えるものも、また剣だ。

「減速スロウ」！

女魔道士の魔法がディリータにかかる。

「……っ」

体の動きが鈍る、が、ディリータは交戦中の剣士を当て身で突き飛ばして間合いを取る。

サーシャが、敵の唱えている魔法に気付くとすぐに、呪文を準備していた。

「^{ヘイスト}加速”ッ！」

相討ち、になるかと思えた交差攻撃だったが、ディリータの方が早く届いた。

バツ。

首の付け根から一気に血が噴き出して、敵剣士の体が倒れる。

一方、

「^{ブリザド}氷撃”ッ！」

ナッシュは、魔法の威力は落として、術を完成させる^{スピード}速度を速くする戦法に切り替えた。

ビシッ。

ベリンダの^{フレイムウィップ}炎撃鞭に叩かれた直後に凍気魔法を受けて、急激な温度差のために敵剣士の胸甲にひび割れが走る。

「ウオォーッ!!!」

ガストンの渾身の力を込めた諸手突きが、胸甲を破って敵剣士の胸板を貫いた。

残る一人の剣士は、じりじりと後ろ歩きに少年達との距離を広げ、女魔道士の手をつかんでダツと逃走に転じる。

追いかけようとするディリータを、ガストンが押し止めた。

「^ど退けッ！」

「アホッター！俺らの大将を嘘つきにしてーか？」

「しかし！」

「しかしもカカシも無え。ラムザが決めたこったろ！」

さて、そのラムザはと振り返ると――、

いつの間にか防戦一方ではないか。

「！」

ナツシュは雷精錫サンダーロッドを握り締め、呪文の詠唱に入る。と、ベリンダが背後から手を伸ばして、ナツシュの口を塞いだ。

「お待ちっ、よく御覧よ！」

「んむむむーっ!？」

豊満な胸に頭を押し付けられたナツシュは、気が動転して、冷静に戦況を観察するどころではない。

「あれが、負けてるように見えるかい？」

ラムザは落ち着いた、迷いの無い剣さばきで、致命傷を与えずにミルウーダを戦闘不能にする機会チャンスを窺っている。

剣に迷いがあるのはミルウーダの方だ。

ラムザと剣を合わせる度に、必殺の気合いが削がれてゆく。だから、焦ってもいる。

ただでさえ、体力の上で劣る女性の体に、充分な食事や休養を摂れない逃亡生活で疲労が蓄積している。戦いが長引けば長引くほど、ミルウーダに不利になるばかりだ。

しかし、勝負を急げば技が粗くなる。

「!」

ミルウーダの剣が大きく空振りした。

ラムザが見切り損なったわけではない。ミルウーダの手許が狂ったのだ。

前に出すぎたミルウーダの軸足を、ラムザは強かに蹴った。

「ぐっ……」

脛の骨にひびが入ったのがわかった。膝が崩れる、が、ミルウーダは諦めずに前に踏み出す。

だが、勢いが無い。

ラムザの剣がミルウーダの右籠手を叩いた。

腕が痺れて、ミルウーダは剣を取り落とす。

肩で息をつきながら左手で剣を拾ったミルウーダに、ラムザは仕掛けてこない。

「もうやめにしませんか。これ以上の戦いは無意味です」

ミルウーダは頭を振った。

「あなたが悪いわけじゃない……。」

でも、現状が変わらない限り、わたしはあなたを憎む！

あなたがベオルブの名を継ぐ者である限り、あなたの存在そのものがわたしの敵ッ！」

ありったけの憎悪を込めて睨み付けたのに、ミルウーダの視線を受け止めるラムザの碧い瞳は涼しげだ。

「そうですか……。僕は、貴女を敵だとは思いません」

ラムザは構えを解き、剣を自然に下ろした。

「……!？」

ミルウーダの剣が震えた。

ラムザはじっと、真っ直ぐにミルウーダを見つめている。

ラムザを見つめ返すミルウーダの肩が荒く上下し、やがて、呼吸が静まるにつれて切っ先がゆっくりと下がった。

にこり、とラムザは微笑む。

「貴女に、ウィーグラフ殿への言伝をお願いしたいのです。引き受けて下さいますか」

「……。さっきの話？」

ラムザは頷いた。

「それは勿論ですが、ティータのことについては、くどくどしい説得は不要でしょう。」

僕達は”砂ネズミの穴蔵”で、一度ウィーグラフ殿にお会いしました。とても潔い方ですね。国内屈指の大貴族であるエルムドア侯爵様をすら、何の見返りも要求せずに解放してくれました。まして、か弱い女の子を拘束しておく理由はないでしょう。

ウィーグラフ殿は多分、仲間がティータを捕らえたことを知らないだけです。一言、返して下さいと言うだけで、必ずティータを返してくれると思います……。

僕が是非とも聞き届けていただきたいことは、別にあります」

「……」

ミルウーダは引き受けたとも何とも言わなかったが、ラムザは熱心に頼んだ。

「どうか、ウィーグラフ殿にお伝え下さい。」

ジークデン砦に仲間を集めるのは間違っています。分散して逃げ延びて下さい、と」

「「!？」」

ミルウーダも驚いたが、士官候補生達とベリンダも驚いた。

「古来、援軍の無い籠城戦が勝利したためしはありません。結集すれば袋のネズミです。徹底的に殲滅されます。」

それより、バラバラに散開して逃げれば、一部なりと生き延びられる可能性が出て来るでしょう。生きてさえいれば、何らかの形で貴女方の志を活かし続ける道が、きっとあります」

ミルウーダは、信じ難い、という顔をした。

「……分断して各個に叩くつもり？」

ラムザは、首を横に振った。

「裏など、何も。僕は、どうにかして貴女方と、リーグ閣下や兄達とが戦わずに済む方法はないものかと、考えているのです」

ミルウーダは失笑した。

「お話にならないわ」

「何故ですか？革命を起こす以外に答えはあり得ませんか。」

「僕らの何が悪いのですか。何が貴女方を苦しめているのですか？話し合いで解決策を探してゆくことは出来ませんか」

「知らないということはそれだけで罪だわ！」

「あなたが当然と思う世界はあなたに見える範囲だけ。でも、それだけが世界じゃない。」

「あなたが住む世界とは決して交わらない世界に、わたし達は生きているのよ！」

「二つの世界が決して交わらないなら、僕はこの世に存在しませんでした！」

ラムザの声が高くなった。

「僕は”天騎士”バルバネスⅡベオルブと、”ベスラの聖女”ファティマⅡルグリアの息子。」

この身この命ある限り、剣によらぬ道のあることを疑いません！」
チン、と鏢鳴りの音を立てて、ラムザは剣を鞘に収めた。

「そうだったのね……」

呟いたミルウーダは、遠い五十年戦争の日々を思い出した。

”騎士の中の騎士”と讃えられた不屈の將軍と――。傷付いた者達を明るい笑顔で励ましていた、異邦人の神官医クレリックと――。

二つの面影が確かに、目の前の少年の中で一つに重なる。

？－6－「2」 レナリア台地 ？手を取り合えたなら

「僕は貴族だけの味方をする気ありませんし、平民だけの味方をする気ありません。互いに理解し協力し合う関係を築いていきたいと思っていますのです。」

それがどんなに夢物語に近くても、両親を始め、夢で終わらせないために手を取り合おうとした人達に守り育ててもらった身ですから。

今僕が騎士の側に立っているのは、その方が僕を応援してくれる人達の役に立てると思う、というだけの理由からです。だからもし、例えば貴女方の陣営に組する方がみんなの幸せにつながると思えば、僕はいつでもそうするつもりですよ」

「それなら……どうして」

所詮、自分の身が可愛いだけではないのか――？

探りを入れるようなミルウーダの目から、ラムザはじっと視線を逸らさない。

「失礼ながら、貴女方は僕達――今は”僕達”ということになりますが、騎士階級の果たしている役割についてどこまでご存じの上で、革命を起こそうというおつもりですか。」

大戦末期から現在までの増税は、ほとんどが戦費と、オルダリーフ 鷗国への賠償金及び戦争借款返済のための財源です。それから、戦争中に荒れた道路や用水路を整備し直すための公共事業費ですね。

それに、全額が租税に転嫁されたわけではありません。大半の騎士は、爵位以上の大貴族も含めて、戦中戦後に家宝を売るなどして貯蓄を取り崩したり、武器商や穀物商に借金を作ったりしています。私腹を肥やすどころか、自腹を切って領民達への負担を吸収してきただけです」

ミルウーダも実は、骸旅団で何度か、襲撃の対象を誤ったと言わざるを得ない後味の悪い思いをしたことがある。

贅沢をしているという噂の騎士の館を襲ったものの、蔵には三分の食糧や薪さえ残っていなかったのだ。羽振りが良さそうに見えるたのは、目に付く所だけは借金をしてでも取り繕っていたからに過ぎなかった。

奥方や娘達の長持ちの中にも晴着ドレスや装飾品アクセサリはろくに無く、とつくに親戚に売り払ったものを儀式の時だけ借りていたのだとわかった。出てきたのは借用証書の束ばかりで、家財も鎧兜も、軍鳥まで抵当に入っている始末。

襲撃の翌日、どこから聞きつけたのか早速財産を差し押さえに来た金貸しや商人達と、村人達との間で、一悶着トラブルが発生したりもした。

「歳出削減は、農民達にとっては租税負担減に直結しますから、貴女方の目から見ればまだまだ不十分と見えるかもしれません。ただ一方で、ここ十年余りの都市の不況は、実は”騎士達が質素儉約に努めてきた”影響でもあります。

交際費など表立った支出は、礼儀の問題もあってなかなか減らせないものですから。お祭りの日なんかは、以前と変わらず盛装して芸人を呼んで、お客さんや領民達に御馳走を振る舞ったりもしますけど。

でも見えない所では、衣類でも日用雑貨でも、家具什器でも、不要不急のものは買い控えたり、中古品や自家製で済まそうとしたりしています。軍需品以外では、都市の職人さん達への発注はかなり減ったはずですよ。

橋や水車小屋などの公共設備も、ぎりぎり老朽化するまで騙し騙し使っている村が多いですね。農閑期の土木事業が以前より少なくなつて、出稼ぎの仕事の口を探すのも難しい。そうやって職にあぶれた人達が、義勇兵になったり、盗賊になったりして、貴女方の傘下に加わってきたではありませんか」

「……」

「戦争に負けたのも、公共設備整備インフラを後回しにしてきたのも僕達騎士の力不足です。

ですが、責任があるかどうかと、他に方法があるかどうかとは、別の問題です。

オルダリーア

鷗国から再び侵略を受けないためには、賠償金支払いは継続せざるを得ないでしょう。各国からの借款は、アトカーシャ王朝が結んだ契約だとして踏み倒すことも可能かもしれませんが、それをやれば、新政権が新たに資金を借り入れることは難しくなるでしょうね。どの道、増税要因になります。

公共事業費も、増やす必要こそあれ、減らすのは無理でしょう。これ以上道路や用水路を荒れたままにしておけば、産業が停滞して、結局皆さんの不利益になりますから。

それに、職業軍人である騎士階級を無くせば、当然、その分兵役負担なり、傭兵団を雇うための租税負担なりが生じます。

……その辺りの試算もなさった上でのお話ですか」
考える必要性を感じなかったわけではない。考える能力が無いわけでもない。

ミルウーダは元々、商家の娘だ。経理には明るい。

ただ、今はそれどころではないと思ってきた。悪徳貴族達を倒して、活動資金・資材を得、骸旅団の構成員達メンバーを養う。目の前の襲撃計画の立案、実行に追われてきたし、また、そのような実務処理の手腕には自信もあった。兄がしばしば、迂遠と見える方法を取ろうとすることに、苛立ちを感じてさえた。

——ミルウーダ。革命は私怨を晴らすための手段ではないぞ。一人一人の貴族を倒すことが目的なのではない。その先を考えろ。

——そんなこと言って、今を生き延びられなかったら、元も子も無いじゃない！

——それは逆だ。目的を見失い、道を踏み外せば、今を生き延びたところで元も子も無い。

兄は困ったような、憐れむような目をして妹の頭を撫でると、それ以上は何も言わなかった。

子供扱いされたようで、ミルウーダは面白くなかった。

が、改めて思い返せば――。

”目的”とは？兄が思い描いている、”貴族を倒したその先”とは？

肝心な話のはずなのに、詳しく聞いた覚えがない。ミルウーダが聞こうとしなかったからかもしれないが。

ずっと側にいると、何があっても最後まで味方すると、決めたのに……。

――いいのか？ミルウーダはあのままで……。

――仕方あるまい。余計なことを考えさせれば、剣が鈍るだけだ。いつだったか、兄がゴラグロスと話しているのを、立ち聞きしたことがある。

――巻き込みたくなかった……。本来なら戦士になるべきではない、普通の娘だ。モンスター魔獣ならいざ知らず、人を殺すのには向いていない。

――わかってるなら、どうして……。

――今更言っても詮無いことだ。付いてきてしまった以上は、死なせたくな。貴族を憎み抜くことで戦いに集中できるなら、それもいいだろう。我々は、戦い続けることでしか生き残れないのだから……。

あの時も、ミルウーダは反発しか感じなかった。

自分のどこが戦士に向かないというのか？

移動工房時代、剣を教わった時には、筋が良いと誉めていたではないか。

――絶対勝てねえな。カカア天下間違いなしだな。

と仲間達からからかわれるほどの腕前になったのを、自慢げにしていたくせに。

だいたい、ミルウーダは貴族を”憎もうとしている”わけではない。実際、貴族など唾棄すべき連中ばかりではないか。……

(……)

剣を握る手の震えが止まらない。

今こうして、眩しいほど真っ直ぐな目をした少年と向き合っていると、自分がこれまで目を背け続けてきたことに気付かされる。

ミルウーダにこの少年は斬れない。

体力や技術の問題ではなかった。

斬りたくない、思ってしまったている。

いや、今まで斬り捨ててきた騎士達だって、全員が全員、冷酷無慈悲というわけではなかったろう。家族同僚に対しては、良き父良き友として、笑顔を見せることもあったに違いない。

ただ、これまで、そのことは意識に上らせずに済んできた。剣を抜いて戦いを挑めば、向こうだって容赦なく剣を振るってくるに決まっているのだから。

剣を突き付けてくる相手に微笑みかける人間など、初めて見た。

” どうして彼女達の仲間に加わらないのか ” —— など、本来は愚問だろう。

骸旅団は壊滅しかかっている。勝ち目の無い戦いにわざわざ身を投じる者がいようはずがない。

それでも問わずにおれなかったのは、” 彼がそもそも貴族の側ではなく、こちら側に所属すべき人間だったなら ” という期待からだろう。

そうであってくれば、斬れない自分を正当化出来る。

だが彼は、” 勝ち目があれば味方した ” というような答えは口になかった。

天下を取る手段の有無ではなく、その先の構想を—— 目的を問題にしている。…… 兄と同じように。

「僕は確かに、僕の見聞きした範囲で話をしているだけです。ドラコニア領や、国全体の財政状況について兄達から受けた説明などが中心ですから、偏りもあるでしょう。僕の知らない判断材料をお持ちなら、是非教えていただきたく思います。」

ただ、今僕が知っている限りでは、” 贅沢をしている貴族という重石を取り除けば人民の生活水準が向上する ” といった単純な図式

は成り立たないでしょう。

イヴァリース

畏国の民の暮らしを困窮させている、もっと根本的な原因に対して、貴女方はどのような解決策をお考えなのですか」

革命——国家体制が王制から共和制や民主制などに変わる場合だけでなく、王朝交代なども広義に含む、政権刷新——が行われても一般民衆の生活が楽にならない例は、歴史上枚挙に暇がない。

その主な理由は、大まかに分類すると三通りある。

まず一つ目は、これは最も分かり易いだろうが、新政権もすぐに腐敗もしくは機能不全に陥ってしまった場合。

清廉潔白な革命の士も、権力の座に就いた途端、その魔力に毒されて暴君と化すこともある。あるいはそもそも、口では民衆の救済を謳いながら、その実自分が搾取される側から搾取する側に回りたかっただけ、ということもあるだろう。

また、”悪い政府があるのは無政府状態よりはマシ”と言う。たとえ腐っていようと大きな権力・武力が存在するだけでも、犯罪や他国からの侵略に対してある程度の抑止力を持つ。

旧政権の打倒のみを急いで、新政権を構築するための知識や人材が不足していると、十分な統治力を発揮できず、異民族や盗賊団による略奪の横行を許してしまいかねない。

二つ目は、ラムザがたった今指摘したように、公共事業負担によるもの。

権力者の離宮や墳墓の建設、遊興費などといった”税金の無駄遣い”は、目に付きやすく檜玉に挙げられがちだが、必ずしも財政支出の大きな部分を占めているとは限らない。

誰が政権を担当しても、さして減ることがない——むしろ、前政権がいい加減であればあったほど増やさざるを得なくなるのが、公共設備整備のための賦役や資金投資だ。

農業生産力を支える用水路や溜め池、防風・防砂林。工業の基本となる金属や石炭の鉱山、採石場。物流を円滑にする道路や橋、運

河、港湾。盗賊や魔獣モンスターから都市・村落などを守る、防壁や砦。技術開発と人材育成を担う、各種の学校。

……等々、”民のため”を考えればこそ必要な設備は数多い。

しかし人口の大多数を占める農民達は、自分の村の用水路など、生活に直結する工事ならば喜んで参加しても、村から遠く離れた道路や城壁の補修、都市民のための上下水道敷設などには、”これが何の役に立つのか”とか”必要なのはわかるが、今は目の前の生活の方が大事だ”とかいった不満を持ちやすい。”長い目で見れば、回り回って皆のためになる”ことを説明しても、民衆の教養水準レベルの低い時代には、理解を得ることが難しいものだ。

なお、後年ディリータ王は、特に不正を働いてきた貴族や修道院を取り潰して財産没収し、オルダリプ鷗国への賠償金支払いを大幅に繰り上げた。が、人気取りのためにすぐに減税することはなく、腰を据えて交通網整備や、街道・国境沿いの砦の修復、ドルボダル湿原干拓による大規模な農地拡張などに取り組んだ。

当然、批判は出た。だが、これらの事業が功を奏して産業が回復し、治安も改善し、ハイル王朝の長期安定化につながったのである。

そして三つ目、これは比較的目立ちにくいが、一国の政府には如何ともし難い外的要因によるもの。

いかに国内で善政を敷こうとしても、たとえば他国からの侵略を受ければ、防衛費がかさんで財政を圧迫する。

また、全国的な不作の年などにはどうしても、税収も民衆の手取り収入も落ち込む。

これがもつと広域に、大陸規模、全世界規模の異常気象によるものだった時は、緊急輸入によって食糧を賄うことも出来ず、国境を越えた山賊・海賊の襲撃なども頻繁になり、深刻な飢饉が起こる。

このような時には、誰が政権担当しても苦しい状況はさほど変わらない。が、民衆の怒りの矛先は時の権力者に向かうものだ。

実は、聖暦十二世紀末から十三世紀初めにかけては、南洋のラン

カム諸島や紗国ベシヤのハルワタート山など、世界各地で火山活動が活発な時期だった。大氣中に噴出された火山性微粒子エアロゾルが日射を遮り、全世界的に冷害が起こりやすかったのだ。

特に不作が顕著だったのは、元々冬の寒さの厳しい呂国ロマンダや是領ゼラモニア、新覇帝国パラメキアなどの雪国である。

是領ゼラモニアを統治していた畏国イヴァリースも、引きずられる形で財政赤字が悪化した。不作の上に増税を課された農民達が逃亡して盗賊団に加わったり、村ぐるみで一揆を起こしたりしたため、鎮圧のためにますます戦費が膨らむという悪循環に陥った。

ディリータ王の治世の頃には異常気象は終息し、作柄は自然回復傾向にあった。このため、彼の施した農業政策は実際以上に大きな効果を上げたように見え、公共事業投資に対する不満の声を押さえ込んで余りあった。

不作がもう数年続いていれば、ハイラル王朝の滑り出しはもっと困難なものになっていたはずで、ディリータは幸運に恵まれたと言えよう。

——大切なのは根本を正すことだ。……

「根本的な原因……。あなたは、何がそうだと?」

「農地や共有林の地力が落ちているのです。」

ベオルブ家のような、古くから続く領主の家には、長年の税收記録が残っています。十年毎ぐらいの平均値を見た時、同じ場所、同じ品種の作物でも、単位面積当たりの収穫量が減り続けているのです。今では五十年前の開戦の頃より一、二割、百年前の建国当時から比べると三割は少なくなっています。

単純に、その分農家一戸当たりの収入が減っているわけではありませんけど。休耕期間を短くしたり、新しい品種を導入したり、畜産物生産の方を増やしたりと、色々工夫していますから。

ただ、比較のためにごく大雑把に言えばです。同じ面積の土地に同じだけの労力をかけた場合、今たとえ租税を零ゼロにしても、百年前

の税引き後の収穫高にも満たないということです」

連作障害と言って、同じ土地で毎年同じ作物を栽培し続けていると、土中の養分や微生物が偏り、次第に収穫量が減ってしまう。これを防ぐため、穀類と牧草、野菜など、違う種類の作物を輪作ローテーションしたり、堆肥や腐葉土、草木灰などの肥料を投入したり、間に休耕期間を挟んだりする。

しかし、そのようにして地力を維持しつつ使っているつもりでも、数十年、数百年のうちには徐々に土地はやせてゆく。最終的には、耕作を諦めて放牧用の草地などにし、牧草も育たない荒れ地になれば放棄し、新しく畑地を開墾することになるのだ。

こうして、旧文明崩壊後にはほぼ全域が森林に覆われた畏国イヴァリースも、聖歴十七世紀の現代では、既に国土面積の半分以上が草原に変わっているのである。

蓮国の三角州地帯や、アスラン・レンデルタ 雅国の水田などで千年以上もの連作が可能なのは、大河が上流から肥沃な土壌を毎年供給してくれるからで、世界的に見れば非常に稀なことだ。

七王国統一後、イヴァリース 畏国国内では技術交流が進み、農具の改良や多収量品種の普及によって、単位面積当たりの農業生産量が飛躍的に増えた。

だがその分、土壤中の養分をかつてない速度ベイスで消費し、急速に農地が疲弊したのだ。五十年戦争末期には特に、増税に対応するため
に手っ取り早く収穫量を上げようとして、休耕地を少なくしたので、
地力の消耗が加速した。

「それに、戦前に生まれたお年寄りの方にお話を伺うと、皆さんおっしゃいます。秋の薪拾いや、豚にドングリを食べさせるための放牧でも、子供の頃に比べると倍も森の奥まで入らないと十分な量が確保出来なくなった、と。」

近年は密漁や密採取が増えましたから、川魚だって釣れにくくなりましたし、山菜やキノコも見つけにくくなっています」

肥料を還元する農地と違って、共有林からは薪や腐葉土、木の実、

山菜などを採取するばかりだ。土地は痩せる一方である。

また、採取の期間や量を制限しているのは、土地の所有者である騎士というよりは、自然そのものだと言ってよい。生物資源を枯渇させないためには、自然の回復力の上限を超えてはならないのだ。

だが、騎士の支配力の衰えた地域では、人々が我勝ちに動植物を漁り尽くしてしまう、いわゆる”共有地の悲劇”が起こっている所もある。

不作の年にはどうしても、手軽な仕掛けで捕まえられる小鳥の密猟が流行るが、これが翌年、餌である虫の大発生につながり、食害によってまた不作を繰り返したりもする。

「紗国戦争も是領の併合も、新たな土地を確保することで、増え続ける人口を養うのが目的でした。その道が断たれた以上は、国内で開拓地を見つけるか、今ある農地の生産性を上げる工夫をするかでしょう。」

ベオルブ家が治めるドラコニア伯爵領は、比較的暮らしやすい土地だと言ってもらえています。暮らしやすいというと、租税が安いのだろうと思う人が多いですけど、実は全国的に見ても税率は高い方なんですよ。こういうことだかわかりますか？」

「……」

「そう言うとは今度は、土地が豊かで収穫量が多いから税率も高く出来るのだろう、と思われるんですけど、逆です。税率が高いからこそ、農業も商工業も盛んなのです。」

つまり……、たとえば今、単位面積当たり五袋の小麦が穫れて、そのうち一袋を租税として徴収しているとします。税率を半分にしても、お百姓さん達の取り分は四袋半になるだけです。

でも、逆に税率を倍にして二袋徴収したとしましょう。増やした分の税金を使って、用水路を作ったり、見回りを徹底して野盗や野獣からの被害を防いだり、新技術の開発・普及事業を行ったりして、もし同じ広さの農地から八袋収穫出来るようになれば、どうですか？ 租税分を引いても、農家の手許に残るのは六袋と、一・五倍にな

ります。

公共事業を発注したり、村の人達が豊かになった分買い物をよくしたりするようになれば、都市の商人職人さん達の懐も潤います。

ドラコニア領でやっているのは、そういうことです」

英雄王ディリータも統治の参考にした”ドラコニア方式”は、現代風に言えば”高税率高社会保障型”ということになるうか。

農作物に課せられる租税や、街道・運河の通行料等の公共料金は高めに設定されている。だがその分、公共設備が整っているし、治安も良い。

設備だけでなく、制度も充実している。

例えば、天候不順これ即ち不作、即ち飢饉につながるわけではない。

記録を保管、研究したり、農民達との連絡を密にしたりすることで、冷害や病虫害などを予測していち早く対策を立てているのだ。

複数の村の長老から異常気象の兆候が報告された時には、統計的な裏付けを取った上で、その情報を領内全体で共有する。予想される暑さ寒さに強い種類や品種の作物を多く作付けしたり、種蒔きや追肥、収穫の時期を調節したりすれば、被害を少なく抑えられる。

それでも収穫量が落ち込んでしまった時でも、救済措置がある。納税の猶予や羊毛・麻糸などへの振り替え、ごく低利での穀類の貸し付けなどがそうだ。

これが可能なのも普段からの備蓄あればこそで、だてに蓄財しているわけではない。

ドラコニア領はそれなりの広さを持つので、一部の地域で凶作になっても、他の地域からの収穫や前年度からの備蓄で大抵は補える。が、数十年に一度は、全域で不作に見舞われることもある。そのような時は、資産を取り崩して領外や国外から食糧を買い付け、安く放出するなどして対応している。

それでも追いつかず飢饉が発生した時には、教会と協力して、炊

き出しや出張診療などを施す。

この当時は、病院や孤児院、養老院といった福祉施設の運営は、行政ではなく教会の役割だった。

飢饉といっても、餓死者が出るのは最終段階で、まずは栄養失調や過労による病気が増える。修道院の付属病院も忙しくなるので、騎士達は普段より寄付を多くしたり、妻や娘達を炊き出しや看護などの奉仕活動ボランティアに参加させたりした。

騎士階級の女性達は、戦場から負傷して帰って来る夫や息子を介抱するために、医薬の素養を身に着けていることが多いのである。ベオルブ家の代々の奥方達は、率先してその力を領民達のために使うことで規範を示してきた。

神官医クレリックだったファティマは、こういった保健事業の計画・実施に大いに貢献したのだが、いかんせん、バルバネスの妻としては非公認の身だ。そこで、まだ幼いながらも魔法治療や薬学を学んでいるアルマが、”看板娘”として引バックアップ張り出されたものだった。

このように、いざという時の保障が約束されているため、税率が高くても領民達に不平不満はなく、領主を信頼して安心して仕事に励むことが出来るのだ。

勿論、有事の際の備えも必要だが、平素からの予防策の方がより重要であることは言うまでもない。

小麦などで多収量や良食味の品種が発見されると、農民達が一斉に飛びついて、あるいは領主が命じて村ぐるみ単一品種の栽培に偏ってしまい、後から他の品種に長所があったことに気付いても種粃が残っていないこともある。が、これは特定の病気や、猛暑・長雨などの異常気象によって壊滅的な打撃を受ける危険性のある道だ。

ドラコニア領では、多少収穫量は減ろうとも、必ず複数の品種を栽培するよう農業指導している。暑さに強いもの、寒さに強いもの、草丈が低く雨風で倒れにくいもの、虫や鳥に食べられにくいもの……等々、様々な性質の品種を育てて危険要因を分散し、収穫量の安

定化を図っているのだ。また、雑穀や芋類などの救荒作物の栽培も奨励している。

都市から定期的に汚泥や生ゴミ、薪の燃え殻などを回収して農地に還元し、都市の衛生状態の向上と共に農地の地力維持に努めている。

潔斎月の規定を厳格に守るようにしているのも、飢饉の回避や、共有林の生物資源保存を目的とした取り組みの一環だ。

潔斎月とは、グレバドス教徒が聖アジヨラの苦難の旅を偲んで身を慎むべき期間のことで、月の満ち欠けも関係するので毎年変わるが、※双魚の月（※太陽暦二月下旬～三月中旬）を中心として三十から四十日間ほど続く。

この期間には、食事を制限し、特に肉食を断つ。殺生は御法度で、狩や戦は勿論、決闘や武術試合なども行わない。――ただし先制攻撃を受けた時の反撃までは禁じられていないので、規定をすり抜けて戦争や喧嘩をするグレバドス教徒もいたが。婚姻も避ける。

これは、元々は土着の精霊信仰時代からの風習で、食糧の蓄えが乏しくなる冬の終わりの時期を乗り切るための知恵と思われる。この時期に飢えに耐えかねて、繁殖期の野生動物や家畜、山菜などを余分に食べてしまうと、翌年以降ますます食糧難になるからだ。

グレバドス教の習慣なので、強制はしない。が、大食漢が多いことで有名なベオルブ家の男達も、この時ばかりは厳しく節制に努めて臣下領民達に手本を示す。密猟・密採取の摘発も強化する。

ただ我慢させるだけでは息切れしてしまうので、潔斎月の前後の祭りでは領民達に惜しみなく酒食を振る舞うことで、メリハリを付けてもいる。

衣食足りて礼節を知る、という通り、飢えが存在する限り、いかに厳罰化しようとも盗賊に身を落とす者は後を絶たない。だが、日頃から領民達を飢えさせぬような心を碎いておれば、自ずと犯罪も減る。徒に戦費に予算を削られることなく、一層公共事業に力を注ぐことが出来、更に民の生活水準は向上する。……というわけだ。

「父が生前、話していました。

騎士や聖職者が搾取を行っていると、農民達に我慢が足りないとか、互いに非難し排除し合っても、社会全体がますます貧しくなるだけだと……。

誰かだけが頑張っているのでも、誰かだけが悪いのでもなく、今は皆苦しい。話し合って互いの立場を理解した上で、改めるべきは改め、力を合わせて社会全体で豊かになろうとすることが、結局は一人一人が豊かになる早道なのだと。

騎士と平民双方から評判の悪い商人達も、暴利を貪っているという批判は必ずしも正しくありません。交通事情や治安が悪ければ、どうしても輸送に手間暇がかかってしまい、その分商品価格に上乗せせざるを得ませんからね。

今後、物流が円滑スムーズになれば物価は低い水準で安定するはずですが、特に都市住民の皆さんには、食糧生産量そのものよりも、流通量の増加の方が生活改善の急所でしょう。

農村で食べてゆけなくなった人達の多くは、いきなり盗賊になるのではなく、まず都市に出て仕事を探そうとします。それを思えば、道路整備などの公共事業で仕事を提供すると同時に物価の安定を図るのは、犯罪防止策の要でもあるかもしれません。

剣に訴えるのは下策中の下策、最後の手段。本当は、剣を振るわずに済む方法を探すところこそ騎士の務めなのだというのが、父の持論でした」

ラムザは剣の柄頭を押さえた。

「父が更に言うには、皆の生活を豊かにしようとすることは、手段であって目的ではないのだそうです。

本当に大切なのは、人同士が立場の違いを越えて手を取り合う姿勢を身に着けることなのだと……。

今もし、例えば民族や家柄による序列を力押しで解体したとしても、人の心の中から偏見が消えない限り、見えない壁は残り続ける

だろうと。一つの基準が意味を失っても、例えば血筋でないなら、宗派宗教だとか、財力知力だとか、美醜だとか……何か別の基準の格付けが現れて人を縛るだけだということです。

でも逆に、心の中の壁を取り払うことが出来たならば。いかに制度や暴力で押さえ込もうとしても、現実には人と人を隔てるどんな壁だって、自然に形骸化して崩れ去るだろうと。そうなればもはや、人は何物に縛られることも、縛ることもなくなり、心のままに生きられるようになるだろうと……。

どんなに遠い道程に見えても、誰もが自由になるためには他に近道など無いのだと、そう話していました。

僕も、及ばずながら父の志を継ぎたく思っています」

にっこりと、ラムザは透き通るような微笑を浮かべた。

「今すぐ僕を信用して下さいと言うのは、無理かもしれません。

でも、どうか生きていて下さい。

ほんの少しの間お会いただけですが、僕はウィーグラフ殿が好きになりました。それに、貴女のこと」

ラムザに他意は全く無いのだろうが、思わずミルウーダの頬に血の色が上った。

（コラコラッ！ここは”口説く”んじゃないくて”説得する”場面だっつーに！）

（かっ、限りなく反則技に近いものがあるわ……）

（無自覚ってところがコワイなあ……）

傍で見ていた級友達は、目眩を感じた。

「革命の旗を掲げながら、野盗同然に私利私欲を貪る輩もいる中で、本気で世の中をよりよく変えていこうとしている貴女方は、貴重な存在だと思います。貴女方のような人材が徒に失われるのは、この国の将来にとって惜しいと思うのです……。

大丈夫です、生き延びられますよ。

身内の恥をさらすようですが、騎士団は手一杯なんです。貴女方が軍事行動を続ける間はこちらでも戦いますけど、剣を棄てて潜伏し

てしまえば、何年も何十年も追ひ回して逮捕する手間暇はかけていられません。余罪で捕まらない限り、逃げおおせられるはずです。

逃げ場のない砦に立て籠もって死に急ぐような真似は、やめて下さい。いつか別の形で、貴女方の志を活かす方法もあるでしょう。もし貴女方が生きているうちに機会が来なくとも、貴女方の子供達や、これから出会う人達の中に、きっと貴女方の心は受け継がれてゆきます。巡り巡って、必ず世の中を動かす力になるはずです」

「……」

脚の痛みが耐え難くなり、ミルウーダは剣を地面に突き立てて杖にした。それは、ラムザへの攻撃を完全に諦めたということでもある。

（皮肉……ね）

食い詰め者達は、食わせてくれる親分であれば、誰にでもなびく主義主張はどうでもよいのだ。

彼女の”仲間”達の多くよりも、この少年の方が余程、兄に近い位置に立っているかもしれない。あるいは、もしかすると――、貴族に対する憎しみのままに剣を振るってきた、彼女自身よりさえ。

「この場で腹を割って色々話をする気にはなれませんか。

でも、いずれゆっくり話し合います。貴女方から学びたいこと、語り合いたいことはあまりにも多い。

父の志を継ぐといっても、具体的に何から手を付ければいいのか、わからないことばかりです。父だって、五十年以上生きてきても、僕に教えられるほどわかったわけではないと言っていたぐらいですから。僕自身が沢山の人の話を聞いて、自分で考えて、試行錯誤してゆくしかないのだと言われました。

今の僕が何をお約束しても空手形ですけど……、僕がもっと大人になって、ラーグ閣下や兄達にも意見できるぐらいの立場になった時、もし話すに足る相手だと思って下さったら、いつでもお声を掛けて下さい。どこへでも、話を伺いに行きますから。

……”粒辛子”^{マスタード}！」

と、ラムザは斑入りの韋駄鳥チヨコボを呼んだ。

「韋駄鳥を一頭お貸しします。差し上げてもいいんですけど、余計な借りは作りたくないでしょう？どこでなりと乗り捨てて下されば、帰り道はこの子が自分でわかります。」

どうか、ウィーグラフ殿の許へ行って、よろしくお伝え下さい。

ティータを返して下さいということ、ジークデン砦に仲間を集めるより、分散して逃げ延びて下さいということ。それから、あなた方と話し合える日を楽しみにしていると……。

お願いいたします」

韋駄鳥チヨコボの首を撫で、ラムザは頭を下げた。

「……」

ミルウーダはまだ、引き受けたとも断るとも言わない。

ラムザはサーシャを振り返った。

「サーシャ、”回復”ケアルをかけてあげて」

「わかったわ」

が、サーシャが動く前に――。

「ラムザ、待て」

口を挟んだのはディリータだった。

「駄目だ。不確実すぎる。」

彼女が騎士団の警戒をかくぐって仲間の許に辿り着ける可能性は低い。仮に辿り着けたとして、ティータはベオルブ家の娘じゃないとか、ジークデン砦に結集するのは間違っているとか、そんな言葉に骸旅団の連中が耳を傾けると思うか？

彼女が騎士団側に寝返ったか、騙されていると考えるのがオチだ。ウィーグラフなら、あるいは彼女とお前を信じるかもしれない。だがそもそも、ウィーグラフの思想と統率力が末端まで行き渡っておれば、ティータは今頃人質に取られていない。

ウィーグラフにだってもう、仲間達を止める力があるとは限らないんだ。

……彼女を捕虜にし、道案内してもらおう」

「ディリータ……。しかし、僕らを案内すれば、それこそ彼女は仲間を裏切ったことになってしまう」

ミルウーダは今更のように、ラムザが彼女から何も秘密を聞き出そうとしていないこと——彼女の名前さえ尋ねていないことに気付いた。あくまでも、彼女の自由意思に任せるつもりだということか。

「それに、騎士団の人達の目に触れば、もう僕らの一存で彼女の処遇は決められない」

ミルウーダは一兵卒ではなく、一つの拠点を指揮していた隊長だ。騎士団の手に渡れば、厳しい拷問と処刑は免れられない。

「仕方ないだろう。ティータとどっちが大事なんだッ!？」

「力で無理押しすれば、僕らは本当に”身勝手な貴族”になってしまふ!」

ラムザとディリータの視線が真っ向からぶつかり合った。

これまでに無かったことだ。

ディリータは常にラムザの意向を尊重し、滅多なことで異議を唱えはしなかった。ごくたまに反対する時には、必ず、ラムザが納得するだけの理由があった。

「……」

「……」

気まずい睨み合いから先に目を逸らしたのは、ディリータだった。

「……横暴にはならないさ。ティータを返してくれるなら、人質交換しよう。」

僕らが捕らえたんだ。騎士団にも、そのぐらいは認めてもらえるだろう」

ミルウーダは苦笑した。

（無駄よ! 誰が※白韋駄鳥チヨコボと家鴨を取り替える（※貴重なものをつまらぬものの代償にする）ものか）

騎士達がミルウーダの素性を知れば、たかが平民の娘と引き替えにしようとは思わないだろう。また骸旅団の団員達の方も、切り札と

信じ込んでいるものを、初めから命は捨てている同志のために手放すはずがない。

彼女の兄ならば、こちらが黙っていても、人質を解放しようとするだろう。だが、義によって無償で返すならともかく、妹と交換する形になっては、かえって仲間達の反発を招くに違いない。最悪の場合、仲間達は兄とミルウーダを見限り、殺してでも、人質を連れ逃してしようとするかもしれない。

（わたしを人質に取らない方が、あなたの妹は安全よ……なんて言っても信じやしない顔ね）

じり、とミルウーダに近づくディリータの、張り詰めた表情。彼女の兄も我が妹を取り戻すためなら、己が身の危険も、信義も忘れてしまうだろうか……。

ミルウーダはちらりとラムザを見た。

彼に言ってみるか？ 信じて、任せてほしいと――。

（……、！！）

ラムザがミルウーダを逃がして――、失敗した時はどうなる。

ミルウーダが騎士団に捕まり、もしも、ラムザに手助けされたことが明らかになれば。あるいは、仲間達を説得してディリータを返してやる事が出来ず――その可能性が高い――、ディリータがラムザのせいだと訴え出たら？

謀反人を匿ったり、逃亡の手引きをしたりした者も罪に問われる。武家の名門・ベオルブ家の御曹司とはいえ、いやなればこそ、責めを受けずに済むものだろうか。

（それも覚悟の上で……あなたは……）

剣を収め、話し合うことを諦めたくないと言うのか。

革命。彼女の志。

ずっと、”貴族を倒すこと”が彼女の望みだった。人が人らしく生きられる世界を作るためには、それしかないと思ってきた。

だが、もし、剣によって貴族達を根絶やしにしなくても、人と人との手を取り合うことで、身分の壁を取り払ってゆけるならば。そ

んなことが、本当に出来るものなら――。

(それだったら……、わたしは……！)

吊り上がった目に決意の光を宿して、ミルウーダは剣を握り直した。

「兄さんの枷にはならないッ！」

再び斬りかかってくるか。と身構えた少年達の目の前で、彼女は何と、刃を自らの首に当てる。

「……！」

ラムザが手を伸ばしたが、間に合わない。

次の瞬間、夥しい血潮が女剣士の喉から噴き上がった。

(兄さん、ごめんなさい……)

死の淵に沈みゆく僅かの時間に、ミルウーダは青空をやけに眩しく、清々しく感じた。

漠然と、自分は灰色に垂れ込めた雲の下で、冷たい雨に打たれながら死んでゆくものと思っていた。

だが今、最期の瞬間に彼女の目に映るものは――、日の光に煌めく黄金色の髪、晴れた空よりも澄んだ碧い瞳の少年が、駆け寄りながら悲痛な表情で手を差し伸べる姿だった。

(さよなら。真っ直ぐな碧い目の、ベオルブのボーヤ！あなたの中にも、わたしの心は……残るの……かし……ら……？)

ラムザの腕の中に倒れ込んだのは、ただの魂の抜け殻だ。

「……！！」

呼び掛けるべき彼女の名を、ラムザは知らなかった。

剣を抜き身のまま持っていたなら。投げつけるなり、飛び込んで腕をいっぱい伸ばすなりすれば、ミルウーダの剣を止めることはぎりぎり可能だったかもしれない。

害意の無いことを示そうとして、ラムザは剣を鞘に収めたが、そのために、彼女の剣が彼女自身を害するのを防げなかった。

「サーシャ！ベリンダさん！」

手遅れと知りつつ、ラムザは深く抉られた傷口を押さえ、回復魔法

の使える二人を振り返った。

ベリンダが首を左右に振る。

「……っ！」

ラムザは唇を噛んだ。

亡骸になって初めて触れることが出来たミルウーダの体は、思ったよりずっと痩せていて、軽かった。日に焼けた肌も狐色の髪も、埃っぽい風にさらされてカサカサに荒れている。だがラムザには、ミルウーダの死に顔は高貴で美しく感じられた。

鎖の切れた赤い七宝の首飾りが、するりと落ちて岩にぶつかり、ぴん、と蓋が開いた。

女剣士の体をそっと草の上に横たえ、ラムザは首飾りを拾い上げる。

中には、顔付き体付きのがつしりと逞しい少年に小さな女の子が抱き上げられている浮き彫りが、？め込まれていた。

この女剣士と兄が幼い頃の肖像画だとすると、兄の方は今、三十歳ぐらいだろうか。

「どうして……、どうして、こんなことに……」

ぱちん、と蓋を閉じて、ラムザは祈るように組んだ手の中に、赤い首飾りを握り締めた。

古ぼけた霊銀の鎖から、血の雫が滴る。

？－6－〔2〕 レナリア台地 ？手を取り合えたなら（後書き）

原作とは逆に、より厳しい現実認識を持っているのはラムザの方です……！これは結構サプライズ？（といっても、父ちゃん兄ちゃんズからの受け売りでしょうから、そんなに驚くことでもないんですけどね。）

こういう演出にした理由は三つばかりありまして。

第一に、イズルード君の存在。

彼は、世界観によっては正義感の強いヒーローだったかもしれない。その彼が、哀しき思い込み野郎（？）として登場する物語なら……、革命の一筋縄じゃ行かなさも、とつくりと盛り込もうかと。あんまり序盤からこういう話をする、骸旅団がただの逆賊に見えてしまいそうだったので、ミルウーダ視点で騎士サイドの問題点もたっぷりあぶり出してからのこのタイミングとなりました。

第二に、FFT小説は他にも沢山あるので、所帯染みたオバチャンならではの独自色を出せればと。

……ファンタジー世界なんだからそんなとこ気にするなって感じですか（苦笑）。

第三に、現代日本の政治・経済状況と照らし合わせてみた時、単純に”貴族が悪い”というタイプのお話は、若人の皆様のお目にかけるのに建設的でないな、と。

賠償金と戦争借款の返済で破産寸前のイヴァリース……、もうじき一千兆円、国民一人当たり七百万円以上もの赤字公債を抱える現代日本と、似通ったところがあると思います。

収入（税収）よりも借金（国債発行額）の方が多いうるスペシヤルアホな今の状況、ちよつとやそつとの節約や、景気回復による

増収だけじゃ改善しません。もはや誰が政権取ったって、「増税幅を小さくする」とか「低所得者への負担を低く抑える」ぐらいが関の山です。

そりゃ、私だって増税は嫌ですが。でも、増税しない代わりに国債を発行するというのは朝三暮四……どころか、利息が付く分、後で食べるのは二個半とか二個に減ってしまう！

若い世代ほど、「増税ヤダ」と現実的な駄々こねてる場合ではなく、腹括って、どの程度なら負担出来るか、逆に増税しないなら公共サービスどこなら削っていいか……とか具体的に考えといった方がいいと思うんですね。

……なんて、今回やたら堅っ苦しい話をしてしまいました。この章は、後で大幅に書き直し入りそうです。

？—6—〔3〕 辺地の砦 ？泣きたい時は

夕刻——。

うえっ……えええん……。

甲高い子供の泣き声と、男の怒鳴り声。そして、苛立った韋駄鳥^{チヨコボ}達の荒い鼻息と低い唸り声が、ラムザの耳に入った。

四、五歳くらいの男の子を庇って厩舎から転がり出てきた、父親らしき男を、若い兵士が六尺棒で打ち据える。

男の子はますます激しく泣いた。

「どうしました？」

「あつ、御曹司！申し訳ございませんっ！このクソガキが御曹司の御韋駄鳥^{チヨコボ}に悪さをいたしておりましたのでっ！

ほら、お詫び申し上げろ！」

と、兵士がもう一度振り上げた六尺棒を、ラムザは掴んで止めた。

「ちよつと待った。落ち着いて。貴方が大声出すと、韋駄鳥^{チヨコボ}が余計に興奮するじゃありませんか」

とラムザが言うと、兵士の顔からサーツと血の気が引いた。

「まこつとに申し訳ございませんっ！！！」

兵士は力一杯謝った。

韋駄鳥^{チヨコボ}達が、また鼻を鳴らしたり、地面を蹴ったりした。

「だから、落ち着いて下さいって……」

ラムザは、ぱたぱたと手の平を振った。

この若い兵士は、不意の貴賓に粗相のないよう、かちこちに緊張しているようだ。

ラムザ達が今日の宿を乞うたのは、十五人ほどの兵士が詰める小さな砦だった。

人口密度の低い山間地のこと、これでも盗賊団一斉討伐作戦のために人手を集めたらしく、常駐の兵の数はもっと少ないだろう。守備隊長からして半農半武の郷土のようで、砦の中を羊や豚、鶏がう

ろついている。

六人と韋駄鳥チヨコボ八頭もの客を受け入れられる規模の集落が、近くに他には無かったため、まだ日が高いうちに足を休める運びとなった。

「どうしたの？」

ラムザはしゃがんで、男の子と目の高さを合わせた。

「ひつく……いたずらしようとしたんじゃ、ないよう！羽根っ……羽根が、ほしくて……」

古くからある迷信だ。少年達は武運にあやかろうとして、少女達は恋の成就を願って、憧れの騎士の韋駄鳥チヨコボの羽根を手に入れようとする。

「つつかれちゃった？」

ラムザは男の子の腕をまくり、赤黒い痣の上に癒しの精霊を表す神聖文字を指で描いて、膏藥をすり込むように三度撫でた。

「痛くなくなっただろ」

男の子が泣き止んだのは、おまじないよりも、ラムザの笑顔が効いたようだ。

「もしかして、後ろからそーっと柵の中に入った？」

「うん……」

「あのね、韋駄鳥チヨコボに近付く時は必ず前から、優しく声を掛けながら近付くんだよ。後ろから黙って近付くと、怪しい奴だと思われちゃうからね」

ラムザは”銀竜”シルドラの鳥房チヨコぼうに近付いた。

”銀竜”シルドラ、”銀竜”シルドラ。よーしよし、大丈夫だよ」

話し掛けながら横木バーをくぐると、細長い首を抱いて耳の後ろを掻いてやる。

「クウー、クウー……」

”銀竜”シルドラが威嚇のために逆立てていた冠毛や尾羽根をねかせて静かになると、ラムザは抜け羽根を一本探して男の子に渡した。

「はい、どうぞ」

しかし、受け取った男の子の顔は曇ったままだ。

「あのね……、自分で取らないと、お守りにならないんだって」
「そういうものかい？」

父親の羊飼いが、ひどく気まずそうに男の子の袖を引っ張った。

「おい、こら。若様が折角下さったのに」

ラムザは厩舎の中を見回した。

「うーん……じゃあ、僕の韋駄鳥チヨコボだったら白くなくてもいい？」

「うん……」

「それじゃ、矢立草ギサルを一束持って、ついておいで」

矢立草ギサルは韋駄鳥チヨコボが好む飼料用作物だ。やせ土に生育し、地味の肥えた土地ではむしろ、丈が大きく葉・茎の繊維が固くなりすぎて、品質が落ちる。低温に強く、山地や寒冷地に適しており、ライオネル地方などの温暖地域では冬作物として栽培される。

ラムザは自分も矢立草ギサルの干し草を一束持って、厩舎の一番奥まで行った。

「“えび天”、“えび天”。おいで」

“えび天”号は仲間達の騒ぎなどどこ吹く風と、ただ一頭、泰然自若と寝藁の上に丸くなってくつろいでいた。

「おいでー」

男の子が矢立草ギサルの束を振ると、“えび天”はのそりと起き上がって食いついてきた。

“えび天”は警戒心が薄く、初対面の人間の手からでも、すぐ餌を食べる。単に食い意地が張っているだけ、という説もあるが。

——飼主に似たな。

と、デイリータがいつも、からかっている。

“えび天”はフンフンと匂いを嗅ぎ、

(もつとくれ)

と横木バーの間から首を伸ばす。ラムザは矢立草ギサルの束を背中後ろに隠した。

「ほら、今のうち」

男の子は物珍しそうに翼を撫で回し、抜け羽根を探して、一本引

き抜く。まだ抜けきっていない羽根だったようで、”えび天”はキ
ュツと目を瞑って胴震いした。

「はい、ご苦労さん」

ラムザは”えび天”に矢立草ギサルを与え、ぽんぽんと首を軽く撫でてや
った。

「これでいい？」

「うん！」

卵色と白の羽根を左右の手に一本ずつ握って、男の子は喜色満面だ。

「”うん”じゃないだろう。”ありがとうございます”は？」

と父親が男の子の背中を押す。

「あーりーがーとうございまあす！」

「どういたしまして！」

ラムザがボンと肩を叩くと、男の子はウッキヤーツと歓声を揚げて
走っていった。父親が重ねて礼を言い、男の子の後を追う。

ラムザは、青い顔をして項垂れている若い兵士に声を掛けた。

「普通に、ここのお宅でいつもしているように世話してやって下
さい。この子達みんな、体も丈夫だし、そんなに神経質じゃありま
せんよ。餌も、好き嫌いなく大抵のものは食べます。抗魔亜麻パサーナの実
や甜菜の絞りかすとか、矢立草ギサルの干し草とか……」
と言ってから、この砦の韋駄鳥達チヨコボがどれも痩せていて毛艶が悪く、
みすばらしいのがラムザの目に映った。

「すみません。この大変な時に、突然大勢で押し掛けてしまつて
ご迷惑おかけします」

「何のっ、迷惑などと滅相もございません！かの”天騎士”バルバ
ネス將軍の御子息のお役に立てますことは、一生の榮譽なのであり
ますっ！」

ラムザはくすくすと笑った。

「大袈裟だなあ」

「自分は至って本気であります」

と、兵士はあくまでも大真面目だ。

「御曹司、もし……」

「はい？」

ラムザの穏やかな目を見ているうちに安心した兵士は、遠慮がちに申し出た。

「お許し下さるならば、自分も御曹司の韋駄鳥チヨコボの羽根をいただきましたいのでありますが」

「どうぞ。光栄です」

「ありがとうございますっっ！！」

韋駄鳥達チヨコボはうるさそうに羽根を膨らませたが、もう、さして驚かなかった。ラムザは微笑する。

離れて成り行きを見守っていた、下働きの娘達は、ほっと胸を撫で下ろした。もしや男の子が無礼討ちになるか、それとも若い兵士が咎めを受けるかと、はらはらしていたのだ。

「お優しいのねえ」

「それに、女の子みたいに綺麗で……」

「ベオルブ家は武門の棟梁っていうから、若様も武神将オーディンみたいにごつついのかと思ったら」

厩舎から出て来たラムザは、視線に気付いて娘達にも微笑んだ。

娘達は余所行きの笑顔を作り、腰をかがめて挨拶を返す。

「ヤダ、かわいー！」

「今晚、客室に押し掛けてっちゃんおうかしら？」

「あーん、掃き溜めに鶴ね」

女主人が厨房で鍋を叩く。

「掃き溜めで悪かったこと！くっちゃべってないで仕事おしっ！」

きゃあ、と悲鳴を上げて、下働きの娘達は屋内に駆け込んだ。

周りに誰もいなくなると、ラムザはふうっと小さな溜め息を漏らした。

ラムザに接する人々は、彼がいつも穏やかな微笑みを絶やしたことがないように思っている。概ね間違いないが、彼だって、いつでも自然に笑っていられるわけではない。

疲れている時も、悲しい時もあるのだ。

うつ……うえつ……。

あれは、いつのことだったろう——。

ドラコニア城で過ごした最初の冬だ。

ラムザは客間の長椅子ソファに座って泣いていた。

父の長姉・プリマヴェーラが、熱い香草茶ハーブティーと、木苺の甘煮ジャムを載せた薄焼菓子ビスケットを用意してくれた。

「お上がりなさい。気分が落ち着くわよ」

ラムザは伯母の手巾で鼻をかみ、もそもそと薄焼菓子ビスケットを口に押し込んだ。木苺の甘煮ジャムは好物だけれど、この時は塩辛い涙の味がした。

「あらまあ、バネスにそっくり。そうそう、快食快眠が快男児を作るのよ」

伯母は笑った。

ぺろりと皿を空にした頃には、ラムザは泣き止んでいた。

お代わりの香草茶ハーブティーを淹れて、プリマはラムザのすぐ隣に腰を下ろした。

「何があつたの？」

「わからないんです……」

「訳もわからないのに泣いていたの？」

ラムザは首を横に振った。

「わからないからです」

真っ赤に泣き腫らした目で、ラムザは伯母を見上げた。

「伯母上、インバイって何ですか？母さんは、どうして嫌われるのですか？」

ハッとプリマは眉をひそめた。

「初めから話してごらんなさいな」

……事の起こりは、父の三姉・エストレーラに捕まって着せ替えられたところから、だろうか。

「うふっ、カ・ン・ペ・キ！」

エストは甥っ子を抱き締め、食べてしまいそうな勢いで何度も頬に接吻^{キス}した。

「なあってカワイイの！ 見本^{モデル}が良いと創作意欲を刺激されるわね。欲を言えば、髪は伸ばした方が似合うわよ。折角アルマとお揃いの髪飾^{リボン}りも作ってきたのに……アタクシに断りもなく切っちゃうなんて許せないわ！」

「はあ……。アルマと同じこと言うんですね……」

ラムザはこの頃、ザルバッグの真似をして髪を短くしていた。

横で見えていたザルバッグは、苛々と足を踏み鳴らした。

「ラムザ。エスト伯母上の道楽にはキリが無い。付き合いきれんと思ったら、適当なところで切り上げて良いのだぞ」

「ああら、道楽でやってるんじゃないわよ。今は商機^{チャンス}なのよ」

年末年始の祝賀行事が続いており、ドラコニア城には遠方からの客も多い。

エストはドラコニアの特産品である麻織物の販売促進を企画^{プロデュース}しており、自ら新作の意匠^{デザイン}を手掛けてもいた。客の目にとまってくれば、帰りに土産物がよく売れるというわけだ。

「しかし、アルマはともかく、ラムザは男子なのです。外見を飾るのは無用です」

「何言ってるの！ アナタとバネスが無頓着すぎるのよ。見た目だって、外交を上手く運ぶための大事な要因^{ファクター}よ。ハッキリ言って、この点に関してはダイちゃんの方がよっぽど物わかりが良いわね」

「それは、兄上は政治の表看板ですから……。ですが、我々次男坊以下にとっては軍務こそ本分。ラムザは特にこの通り、その、柔弱に見られがちです。飾り立てれば侮られるばかりでしょう」

「美しさだって武器になるわよ。天与の素質は活かしてあげなくちゃ！」

（どっちが正しいんだろう……）

父上が帰ってきたら聞いてみよう、とラムザは思った。

「頑張ってね、ラムちゃん。この春の王都の流行はいただくわよ」

！」

と、エストは鼻息が荒い。

「頑張るって……何をすればいいのですか？」

「間違っても、泥んこにしたり、木登りして破いたりしちゃ駄目よ。お客様に会ったら、にっこり笑ってお行儀良く挨拶。それから、この後みっちり舞踏^{ダンス}の特訓ね！」

うえ。と顔を引きつらせたラムザを、くすくす笑いを噛み殺しながら見ていたディリータだったが、すぐに他人事ではなくなった。

「さっ、次はディリータ君よ」

「えっ！？……ば、僕も着るんですか？」

「髪の色を考えて、色違いで用意したのよ。二人並べば注目度抜群よ」

「いやっ、その……僕はラムザみたいに可愛くないしっ……」

「大丈夫、ちゃんと計算済みよ。ラムちゃんのより甘さを抑えた色^{テイ}調^{スト}でまとめてきたわ。格好いいわよ。絶対似合うわよ。アタクシの見立てを信じなさい！」

エストは有無を言わず、ディリータの服を脱がせ始めている。

相棒には悪いが、エストがディリータの着付けにかかりきりになっている隙に、ラムザはこっそりと伯母の客間から逃げ出した。

普段のラムザは武術の稽古が生活の中心だから、とにかく丈夫で動きやすい、簡素^{シンプル}な服しか着ない。

しかし、エストが持つてくる服は大抵、やたらに襷^{フリル}や玉飾りや刺繍が付いていて、ヒラヒラ、キラキラしている。着心地がくすぐったくて、歩き方までぎこちなくなってしまう。

優雅とはいえない難しい足取りで、ラムザはザルバッグの居間に向かった。中を覗くと、兄はまだ戻っていない。

ラムザが引き返そうとすると、ザルバッグを待っていた、身分ある騎士らしき若い客が呼び止めた。華美な衣装に身を包み、ぴよこぴよこと滑稽に歩くラムザを、正月に付き物の芸人一座の少女が男装しているのかとも思ったらしい。

ラムザはエストに言われたことを思い出して、明るく、礼儀正しく挨拶した。

ところが、好意的に話し掛けてきた客は、ザルバッグの弟だと名乗った途端、態度を一変させて烈火の如く怒った。

ザルバッグの兄弟はソフィアの産んだダイスダーグより他には無い、と言うのだ。

——容色を飾って媚びるしか能のない淫売女に産ませた子を、ラーグ公のお世継ぎに取り入らせるとは！バルバネス様は武門の誉れ高いベオルブの家名に、泥を塗るおつもりか！

客は口から泡を飛ばして、”黒翼の白竜”の家紋の入った飾り針ブローチを、ラムザの襟元から乱暴にむしり取った。

自分だけでなく両親のことまで侮辱されては、ラムザも黙ってはいない。

今はたまたまエスト伯母に着せ替えられただけで、常日頃は着飾って遊んでいるわけではない。兄に従い、ベオルブの名に恥じぬ騎士になるべく修行を積んでいるところだ。……

父に課せられた禁を破って、母のことも語った。

ファティマは腕の確かな医者だ。愛情深く、働き者で、マンダレーナ村の隣人達からも慕われている。自分は母を愛しているし、誇りに思う。父だってきっとそうだ。……と。

そこへ、ザルバッグが戻って来た。

ラムザは勇気付けられた。兄は必ず自分に味方して、不当な暴言・暴行に強く抗議してくれるものと思った。

客はザルバッグに詰め寄った。真剣だが、敵対的ではなく、同情し励ますような口調だった。

下賤の女の色香に迷った父に義理立てせずとも良い。妾腹の弟のためにお前が骨折りする必要は無い……と言うのだ。

ラムザの期待に反して、ザルバッグはすぐには反論しなかった。

ただ、子供の前でする話ではないと言い、怖い顔をして追い立てるようにラムザを部屋の外に連れ出すと、丁度通りがかった伯母ブリマに

預けた。

ラムザは、間違ったことをしたつもりはなかったけれど、兄につまみ出されたことで一気に張りが挫けてしまった。

ラムザは伯母に手を引かれて、泣く泣く奥の客間まで歩いてきたのだった。

「これまでも、気付いてました。母さんが、ここでは歓迎されないみたいだってことは……。でも兄上が、気にするなと仰って下さるから、気にしませんでした。

でも……。でも、お客様の話は本当なのですか？

母さんは父上のお側にいるには相応しくないのですか？僕がここにいるのも、父上と兄上達の不名誉なのですか？

僕は、ザルバッグ兄上と一緒に暮らせるようになって、嬉しかった……。けど、兄上は、本当は迷惑なのに、父上のお言い付けだからずっと我慢しておられただけなのでしょうか……。？」

ラムザの碧い眼に、じわりとまた涙がにじむ。

話を聞き終えたプリマは、溜め息を吐いた。

「それはね、わからなくて正解だわ。ファティマもあなたも、何も悪くないもの」

「……？何も悪くないのに、兄上は怒ったのですか？」

「怒っていたのじゃないわよ、ザルバッグは」

プリマは幼い甥の肩を抱いた。

「あのね、ラムザ。あの人は、ザルバッグの従兄なのよ。ザルバッグ達のお母様の――マリーソフィアのお兄様の息子なの。

だから、ソフィアとザルバッグが好きなのよ。バネスがソフィア以外の女の人を好きになったのが許せないのね。

バネスがあなた達を可愛がれば、その分、ザルバッグ達が粗末にされるのじゃないかと心配しているのよ。バネスには、ちっともそんなつもりはないのだけど……。

ザルバッグはね、決して、あなたを嫌いじゃないし、迷惑だとも思っていないわよ。後で本人に聞いてごらんなさい。

でもね、あの人が従兄として心配してくれる気持ちもよくわかるし、あの人のことも嫌いじゃないから……だから、頭ごなしに余計なお世話だとは言えなかったのよ。

わかるかしら？」

ラムザは、こつくりと頷いた。

「何となく、わかったと思います。」

ハル様とアルマが喧嘩するのと、似たようなものですね？

ハル様とアルマは、僕がどっちかと仲良くしていると、もう一方はものすごく僻むんです。僕はどっちもそれぞれ大好きで、二人にも仲良くしてほしいなあって思うんですけど……」

「そうね。そういうことね」

伯母は笑って頷いた。

「ねえ、ラムザ。ファティマは確かにいいお母様だし、あなたがファティマを大事に思うのは当たり前だわ。

でもね、ソフィアだっていいお母様だったし、今でもソフィアを大事に思っている人も大勢いるのよ。

その人達の気持ちもわかってあげられる？」

「はい。わかります」

ラムザは微笑んだ。

「僕は兄上達が好きだから、兄上達の母上のことももっと知りた
いって思ってます。」

とつても優しく、たおやかで、綺麗な方だつて聞いています。僕もソフィア様にお会いしてたら、きっと好きになつてたと思います！

……でも、母さんはソフィア様の代わりじゃないと思います。

母さんだつて、優しくて綺麗だけど……母さんは元気だしお喋りだし、舞踏ダンスを踊ったり詩を作ったりは出来ないけど、お薬や香草茶ハーブティーや石けんを作るのは得意だから。ソフィア様とは、全然別の役をしているのだと思います」

「それは、勿論そうよ」

プリマはラムザの、母親譲りの柔らかい金髪を撫でた。

「ファティマがバネスの側に来たからって、ソフィアの残したものが色褪せるわけじゃないわ。すぐには無理でも、時間をかければきつとわかってもらえることよ。」

あの人だってね、ちょっと思い込みの激しい所はあるけど、心からザルバッグに味方してくれているから。ザルバッグがあなたを可愛がる気持ちも、必ず伝わるわ。

「だけど、いいこと？ラムザ」

伯母は微笑むのをやめて、ひたとラムザの目を見つめた。

「あなたはこの先、わかってくれない人にもいっぱい出会うわ。自分の言い分を押し通すことだけに一生懸命で、ひとの言い分を理解しようとも、聞こうとさえもしない人に。」

自分の方が間違っていると気付いたら、すぐに直すべきよ。でも、相手の言い分をよく聞いて、それでも納得のゆかない時は、そういう人が力づくで自分の意見を押し付けてきても、泣いて引き下がっては駄目よ。

あなたが正しいと思うことをおやりなさい。おかしいものはおかしいと、譲れないものは譲れないと、きちんと主張なさい。

そしてね……、騎士だったら、自分が譲れないもののためだけでなく、力を持たない他の人の譲れないもののために、代わりに戦ってあげるのよ」

プリマは自分の肩掛けから、白黒螺鈿の翼竜の飾り針ブローチを外して、ラムザの破れた襟元に留めた。

「あなたは今日、お母様の名誉を守ろうとして、精一杯戦ったのね。立派なベオルブ家の男の子だわ。胸を張りなさい」

「はい！」

元気よく答えたラムザに、明るい笑顔が戻ってきた。

「伯母上は、僕とアルマの母さんが好きなのですね？」

「勿論、好きよ。あの唐変木のバネスがよく、ああいふ素敵なお嬢さんを引っ掛けたものだど、感心しているわ。あの子は昔っから、

武者修行以外にとんと興味が無いような顔をしてたけど、ちゃんと女の子を見る目はあったのね。ま、姉達あたくしの育て方が良かったってことかしら？ほ、ほ、ほ……」

と、伯母は自画自賛する。

「有難うございます。僕、プリマ伯母上も大好きですよ！」

ラムザは伯母の頬に口付けした。

「ほほ、いい子ね、ラムザは……」

プリマも、孫に近い年の甥っ子に口付けを返した。……

砦の屋上で、ラムザは丹念に研ぎ直した長剣の切っ先に一番星を載せてみる。

突く、斬る、払う。一通り風を切る感触を確かめて、ラムザは長剣を鞘に収めた。

「ベリンダさん。何かご用ですか」

ラムザは外階段の昇降口に佇んでいる女傭兵を振り返った。

「あ、ううん。特に用ってわけじゃないんだ」

ベリンダは、ぶらぶらとラムザに歩み寄った。

「見てたよ、さっきの。本当に”偉い”お人ってのは、威張んなくても、周りの人間の方で自然になびくだけの徳があるもんだねえ……」
「……」
「……」

あたいが今までお目にかかった中で、坊ちゃんが一番、たつと貴びたくなる貴族様だよ」

ラムザは首を横に振る。

「僕は……父さんの子として恥ずかしい」

形の良い眉をひそめた様子は、謙遜ではなく、苦い自責の念を噛みしめているようだった。

「どうしたのさ？」

「ディリータの状況判断は、いつも正確です。ただティータを助けるためだけなら、あの剣士のお姉さんを捕虜にした方が確実だったでしょう」

階下の外廊下を歩いてきたディリータは、ラムザのよく透る声を耳にして、外階段の下で立ち止まった。

「僕だって……正直なところ、ティータの行方を知っていそうな奴がいたら、片っ端から拷問して泥吐かせてやりたいぐらいの誘惑に駆られます。」

ティータを助けるためだったら、どんな手でも使いたい……。それで兄さん達から勘当されたって、ディリータ、ティータと一緒に田舎で羊でも飼って暮らしていければいいと、思う気持ちはある……。

でも……。でも、昨日バスカーク殿が思い出させてくれました。僕が何者であるか」

「ああ、あの若いくせに食えなさそうな隊長さんかい？」
ラムザはくすりと笑う。

「まあ、食わせ者っぽいところがありますけど。ザルバッグ兄さんの懐刀なんですよ。」

バスカーク殿も庶子だそうです。北天騎士団の千騎長に任命されるまでには、色々と紆余曲折があったみたいですね。だから僕の立場も、父さんや兄さん達の考えも、よくわかるのでしょう」

胸の高さほどの城壁の上に、ラムザは腕を組んでもたれかかった。「父さんが話していました……。領主とか將軍とか、大勢の人の命を預かる役職にある者は、大きな船の操縦士のようなものだ。」

たとえば自分一人なら泳いで通れそうな水路を見つけたとしても、多くの領民達を乗せた領地や、兵士達を乗せた軍隊という船を後ろに残してその先に進むわけにはゆかない……。当然のこととして、船全体が通れる航路を探さねばならないのだと……」

ティータの髪留め^{リボン}を結わえた左手で、ラムザはきつく右腕をつかんだ。

「ベスラで捕虜になった母さんを、父さんがどんなに助けたかったか……。ベオルブ家の財力からすれば、母さん一人の身代金を払うことなんか造作もなかった。」

母さんだって、どんなに僕達家族の許に帰りたいかったか……。でも……でも、二人ともそうはしなかった。僕は、そんな両親の子なんです！

もう、四年も前に心に刻んだはずのことでした……」

城壁の下で、ディリータは唇を噛んだ。

そうだった。ラムザは、他人事だからティータ救出のための”最善手”を見送ったわけではない。

既に一度、身を切られる思いを経験しているのだ。

四年前の初夏のある日――。

ガリランド士官学校附属の幼年学校の寮に、オーボンヌ修道院を飛び出して来たアルマが転がり込んだ。

ベスラから戦況の詳報が届いたのだ。オルダリーア 鷗国軍に占領されたベスラ要塞には、二千人近い民兵や農民達が囚われており、ファティマもその中に入っているという。そして、数少ない騎士身分の捕虜達は身代金等と引き替えに解放され始めているが、平民の捕虜達を救出する目処は全く立っていない――と。

それを聞いたアルマは矢も楯もたまらず、たった一人でチヨコボ 韋駄鳥を駆って兄の許に駆け付けたのだった。

無謀なことを。と、ラムザは呆れた。治安状態の悪い今、ベオルブ家の”伯爵令嬢”が野盗やオルダリーア 鷗国の間者に誘拐されれば、どんな取り引きの材料にされるか。

もつとも、一人といっても、修道院やベオルブ家から供の者が付いていないというだけで、それぞれに護衛を雇った商人達の集団と一緒に街道を旅してきたそうだが。

厳しく叱るべきところなのだろうが、アルマの提案にはラムザも賛成だった。

父と兄達は、”平民の妾”にすぎないファティマを、身代金を払って取り戻すことは出来ずにいる。それを敢行すれば非難を浴び、軍団の統率にも影響が出るからだ。

しかし、ラムザとアルマが自分達に自由に出来る財産を投げ打って身代金を用立てるのは、認められるのではないか。自分達の財産といっても、学費や衣装代等は勝手に減らすことは出来ないかもしれないが、伯母達に掛け合ってみよう。足りなければ、友人知人達に呼び掛けて寄付金カンパを募ろう。……

ベスラの惨状は、幼年学校にいるラムザの耳にも入っていた。

母が生きているとわかっただけでも朗報だったが、捕虜達の置かれた劣悪な環境は、命があるからといって”無事”であるとはとても言えないものだった。

食事を与えられず、水だけは要塞の背後にセベレス湖を抱えているために豊富にあるが、生水のままなのでひどい下痢を起こしてかえって衰弱する者もあるという。昼は土塁を築いたり死体を埋めたりする重労働に使役され、夜はじめじめした地下倉庫か、風雨にさらされっ放しの中庭に押し込められる。女性に対する日夜の暴行も、よっぽどの幼女か老婆でもない限り免れる者はないとのことだった。恐らく二、三週間もすれば、捕虜達の半数以上は死んでしまうだろう。

ファティマは医者だし、非公式とはいえバルバネスの妻であるから、もしかすると他の捕虜達とは違う待遇を受けているかもしれない。が、楽観は出来なかった。

一刻でも、一秒でも早く母を助け出したい。

——やってみよう。

と、いうことになった。

気は逸るが、その日のうちにドラコニア領まで戻るには、刻限が遅すぎ、アルマの疲労も大きすぎた。

ラムザは、夜目の利く伝書鳩を使った速達便で、デイリータに手紙を寄越した。

……そういうことで、デイリータにも協力してほしい。明日、アルマのために護衛と婦人用の小型章駄鳥ミニチョコボを連れて迎えに来てほしい。
……

その頃、ディリータとティータはイグーロスの城下屋敷で、ダイスダーグの妻・クラリエッタの身の回りの手伝いをしていた。

寡黙で内気なクラリエッタは、矢張り大人しい性格のティータを気に入って、何かと目をかけてくれた。

ファティマのことが気掛かりで仕事の手が付かず、失敗が増えたティータを、

――大丈夫よ。バルバネス様がすぐに、身代金を用意してファティマ様を取り戻して下さるはずだから。

と、か細い声で慰めていた。

そういうわけにはいかないだろう。と、ディリータは理屈では理解していた。ラムザ兄妹を止めるべきなのかもしれない、とも思っ

た。だが心情的には、ディリータもラムザ達を応援したかった。子供達、領民達が自発的に動いたのなら、あるいは許されるかもしれない、と甘い期待を持った。

ところが、翌日――。

当時まだ見習い騎士だったビックス、ウェッジと共にガリランドまで兄妹を迎えに行ったディリータは、ラムザの口から全く逆の決意を聞かされることになる。

ダイスダーグから連絡があったのだという。

事態は、兄妹が思った以上に速く進行していた。診療所や野戦病院等でファティマの世話になった農民達、負傷兵達が、とくに寄付を持ち寄ってドラコニア城に陳情に詰め掛け、城門の前に座り込んでいるのだという。

城内礼拝堂の司祭であり、ザルバッグの良き相談相手でもあるオルキムが説得に当たっているため、今のところ暴動には至っていない。が、城門前に居座る人々の数は増え続け、城内の兵士達の中にも正月にファティマに会って同情的になっている者がいるだけに、いつ武力衝突に発展しないともわからぬ緊張が高まっている。

――お前が行って、鎮めてこい。

と、言われたのだ。

バルバネスもザルバッグも、それが一番だベストとわかってはいても、まだ十二歳のラムザに命じるのは酷だとして、あくまでも城代に対応させようとしている。

だが、ザルバッグの信任厚く、人当たりも良いオルキムでさえ説き伏せることが出来ないのなら、バルバネスの姉達や家老など、他の誰を代理人に立てても無駄だろう。”ベオルブ伯爵家の都合”でファティマを見捨てるのかと思われるだけだ。

ファティマの子であるラムザの口から説明するしか、領民達を納得させる方法はあるまい。……

ラムザは、今まさに自分達でやろうとしていたことを、止めさせなければならぬ立場に立たされたのだった。

——どうして!!

と猛反発したアルマも、泣くだけ泣いて、他にどうしようもないと悟ると、今度は頑として兄に付いてゆくと言い張った。

——ラムザ兄さん一人で行かせない。わたしも、母さんの子だもの!

ドラコニア城に向かう道中、普段はお喋りなアルマも、冗談好きなラムザも、終始無言だった。

アルマの小型章駄鳥ミニチヨコボに足並みを合わせるため、どうしても移動速度は落ちる。本当は、アルマをガリランドに残してきた方が速かったのだが……。だが、ラムザがアルマを急かさなかったのは、妹の体力を慮ったというよりは、ドラコニア城に着くのを先延ばしにしたかったからかもしれない。

”えび天”号に乗ったラムザが城門前に辿り着いた時、時刻は既に※天秤リーブラの刻も半ば（※午後七時頃）を過ぎていた。が、夏至の直後だったので、日没までにはまだ間があった。

ラムザはこの頃、声変わりの時期を迎えていて——そのせいだけではなかったろうが——掠れがちな声で、それでも大きくはつきりと話した。

ファティマを心配してくれる者がこんなに大勢いることを、とても嬉しく、有難く思う。

しかしながら、ベスラ要塞には二千人以上もの捕虜が囚われている。ファティマ一人を身代金を払って取り戻せば、身びいきと思われ、兵士達や、ドラコニア領以外の一般民衆に不公平感をいだかせる。ベスラ要塞の奪還は王国の存亡に関わる重要な一戦で、今、畏^{イヴァ}国軍の内部に不和の種を撒くことは出来ないのだ。

ファティマを救うには、捕虜達全員を救う手段によってでなければならぬ。……

——そげなこと仰られても！

と、立ち上がって異を唱える者があった。

——騎士様方の身柄はもう、買い戻されているというでねえか！

それは……今後、占領軍を追い払うための大事な戦力だから。

ラムザ自身、そんなのは建前だと思っ^テいても、そう答えるしかない。

——ファティマ様の働きだって、一騎当千でねえか。騎士でなければ、お払い箱だか？ 若様のおっ母様でねえか！！

……。

言われるまでもない。誰よりもラムザ自身が、叫び出したいほどにそう思っている。思っているからこそ、アルマと二人で、身代金を捻出しようとしていたのだ。

流石に言葉を詰まらせ、ラムザは俯いて涙をこぼした。

アルマがぴったりと兄に寄り添い、背中を支えるように腕を回した。

もう一度顔を上げ、ラムザはダイスダグから教わった通りのことを、最後まで人々に伝えた。

今、バルバネス率いる北天騎士団は勿論、ラーグ公の近衛騎士団や、エルムドア侯の東天騎士団も皆、ベスラ要塞を解放すべく奮闘している。信じて、武運を祈っていてほしい。

そして、各々の持ち場に戻って仕事に励み、畏^{イヴァ}国軍の勝利を後方

から支援してほしい。……

女、子供だけでなく、大の男でも、声を放って泣く者があった。今し方ラムザを責めた者も、地面に突っ伏して許しを乞うた。アルマも、兄にきつく抱き付いたまま、黙って泣いていた。

同じバルバネスの妻でも、これが先代ラーグ公の従妹であるマリ―ソフィアだったなら、すぐにも身代金が支払われて解放されていたはずである。矢張り身分がファティマを切り捨てるのだという思いは、誰の胸からも拭い去ることは出来なかった。

だが、項垂れて立ち尽くしている兄妹に、それ以上詰め寄ろうとする者はいない。

街の城門が開まる前に、と兵士達に促されて、領民達は三々五々、帰り始めた。

城の中に入ったラムザは、泣きじゃくるアルマを氣遣う余裕も、ディリータやオルキムに氣遣われる余裕も無く、

――しばらく一人にしておいてほしいんだ。

とだけ言って、部屋に閉じこもってしまった。

これは、人懐こいラムザには非常に珍しいことだった。

正月にハールーシャを亡くした後などは、一人で思い出すのは寂しいと、ずっと誰彼に側にいてほしがったのに。

ディリータが夕食を持って行っても、アルマと一緒に寝るとごねても、扉の中から返事は無かった。

灯りが点いていないので、もう眠っているのかと思ったが、真夜中過ぎても時々、鼻をかむ音がしていた。

次の日の朝食にも出て来ず、ようやくディリータ達の前に姿を現したのは、昼近くなってからだ。

口を開いて最初の言葉は、

――アルマ、ごめんね。昨夜はちゃんと眠れた？

だった。

――わたしの問題じゃないわよ！

と、アルマは眉を吊り上げた。アルマとしては、側にいて少しでも

兄を慰めたかったらしい。

——お兄ちゃんには、アルマが付いてるから！いつでも……離れている時も、心はずっと一緒だから……。

ラムザの肩に顔を埋めて、アルマはまた泣いた。

——うん。有難う……。

まだ目蓋と鼻の頭が赤い他は、いつもと変わらぬ穏やかな微笑みが、ディリータには悲しかった。……

「僕は三男です。どうしても騎士になる”必要”があるわけではありません。

個人的な幸せを追求するなら……自分と、ごく身近な人達のことだけ考えて生きてゆくつもりなら、初めから修道院で菓の勉強でもしていれば良かったんです。

でも僕は、騎士になって父さんや兄さん達の仕事を手伝いたいと望んだ。ディリータはそんな僕を助けるために一緒に騎士になる道に進み、そしてティータも、ディリータに付いてベオルブ家に来ることに……。

僕は今回、兄さん達では手の届かない所にティータがいても助けられるようにと思って、自ら行動することにしました。それでも、兄さん達とは別の道を取るにしても、それは矢っ張り”みんなで通れる道”でなければならなかった……。

骸旅団のあの人達だって、元はと言えば僕ら騎士の戦後処理が至らなかつたために追い詰められた、被害者なんですから。彼らの事情を顧みることなく、ただ私情に任せて力押しでティータを取り戻そうとするぐらいなら……、そもそも何のために今までティータに苦勞させてきたのか、わからなくなってしまう」

ディリータは目を瞑った。

（そうだ。俺達の……俺の大望^{ゆめ}が、ずっとティータに犠牲を強いてきたんだ）

ドラコニア城で迎えた最初の正月に、ティータに訊かれた。

アルマと一緒に修道院で勉強して、その先はどうなるのかと。尼僧になって、孤児院の子供達や施療院の患者の世話をして暮らすのかと。

まだ五歳だったティータに、バルバネス達は先々のことまで説明していなかったのか。あるいは、説明されたが忘れていたものか……。

ディリータは教えてやった。

そうじゃない。お前はこれからずっと、アルマのお供をするんだ。アルマは修道院で基本の読み書きや礼儀作法を学んだら、次は城で貴婦人になるための勉強をすることになる。お前も一緒に、舞踏^{ダンス}や音楽や、外国語や刺繍を覚えるんだ。ティータは加えて、アルマの身の回りの世話をするために、女官として必要な技術も身に付けなければならぬだろう。

そして、いずれアルマがどこかの貴族の奥方になれば、侍女として一緒に付いて行き、日常の仕事や気晴らしに付き合うのだ。ティータもそのうち、その家の騎士の誰かと結婚することになるのではないか。……

平凡な農民の娘が、お姫様に準ずる暮らしが出来ると言われれば、小躍りして喜ぶ女の子の方が多いかもしれない。

しかしティータは、しくしくと泣き出した。

城で暮らすのは怖い。マンダレーナ村に帰りたいたい、言ったのだ。ティータは元々、引っ込み思案だ。人が大勢いるというだけで畏縮してしまい、祭りや市場の人混みの中に出掛けると、兄の背中にぴったりとくっついて離れないような子だった。

ひっきりなしに使用人達や訪問客が出入りする城での生活、それも、本来ならば身分違いなのにと後ろ指を指されることもある中で、居心地の良からうはずがない。

ディリータはティータをなだめた。

バカ言うな。とても幸運なことじゃないか。普通の農民だったら一生味わえない、美味しい御馳走を食べて、綺麗な服を着て、色々

勉強もしたり、楽しい催し物を見たりも出来るんだぞ。……

ティータは首を縦には振らなかった。

そんなの要らない。緑の丘で、広い空の下で、羊や牛達に囲まれて静かに日向ぼっこしている方が好きだと、言うのだった。

確かに、ディリータ達の方がいいと言えば、バルバネスもそのように取り計らってくれるだろう。

両親と祖母、叔母夫婦が黒死病^{ペスト}で亡くなった直後、旧知のワインバーグ夫妻はすぐに、

——うちの子になるか？

と声を掛けてくれた。

アンセル村の、赤毛のラムザの父も、奉公人としてなら引き取っても良いと、ファティマに打診してきたそうである。だが……。

——でもな、百姓の暮らしに戻るなら、もうラムザ達とは離れ離れになるんだぞ。それでもいいのか？

これは、我ながらずるい切り札だと思った。

ティータは、ほんの半年の差しかないのにお姉さん気取りなアルマにも、よく懐いている。だがそれ以上に、家族以外にほとんど心を開くことがないティータが全幅の信頼を寄せているのがラムザであることは、ディリータもとくに気付いていたから。

甘えん坊で兄の側を片時も離れたがらないのは、アルマと同じだった。だがティータはいつしか、ディリータの背中に隠れていても目は常にラムザの姿を追うようになっていた。

気さくで朗らかなラムザに、兄とは種類の違う頼もしさを感じているようだった。

——ティータ、おいでよ。ほら、犬の赤ちゃんだ。

内気で何事につけ臆病なのに、ラムザが誘うと、新しいことにもおずおずと手を出した。

実の兄として、時に妬けるほどだった。

案の定、ラムザとアルマから離れるのは嫌だと、ティータはもつと泣いた。

——じゃあ、頑張れよ。バルバネス様のご厚意を無駄にしちゃいけないぞ。ラムザとアルマにも、そんなわがまま言うなよ。

——うん……。

ティータは健気に頷いた。

ディリータは意図的に、ある選択肢の存在を伏せていたのだが、やがてそれもティータに指摘されることになる。

オルタリア

鷗国との戦争が激しくなり、アルマ達が身を寄せるクラブパーティー修道院にも負傷兵や戦災孤児達が増えてきた頃、ティータはその疑問を口にした。

優しいラムザが、どうして剣の修行をして騎士になろうとするのだろう。ファティマのように医者になればいいのに……と。

あの時、ディリータは何と答えたか。

——ラムザはさ、なるべく人を殺さないために、騎士になろうとしているんだ。戦争で怪我をした人を助けるよりも、そもそも戦争をしなくて済む方法を探せたら、そっちの方がずっといいだろ。……

(ラムザは志を貫こうとしたただけだ。なのに、俺は……)

貴族に準ずる権利を享受するのは、責任と危険も同時^{リスク}に引き受けることであつたはずだ。その覚悟が足りなかった、ということになるだろうか。

貴族ではないからティータを返してくれ、と頼みながら、主導権を握ると、貴族さながらに権力を行使しようとした。

——お前はここにいちゃいけないかつた！妹と二人で、花でも売って暮らしていれば良かったんだッ！

アルガスの言葉が、改めて胸に刺さる。

ティータの幸せを願うなら、何故、マンダレーナ村に戻って農民の暮らしに甘んじることが出来なかったのか——。

ラムザの志に従うと決めたなら、何故、土壇場で彼の足を引っ張ってしまったのか——。

(くそッ、俺はいったい何者なんだ！俺はいったい……)

ディリータは踵を返し、そっと足音を忍ばせて階段を下りていっ

た。

今はなるべく、ラムザと顔を合わせたくなかった。

「だけど……僕の力は及びませんでした。今日は結局、ティータのためにも、あの人のためにも、何の役にも立てなかった……」

押さえた胸の內衣^{ポケット}に、ミルウーダの赤い首飾^{ペンダント}が入っている。

「あの人、最後に、兄さんの柵にはならないって言った……。自殺すれば神様の御許には行けないのに……。母さんと同じ……。」

僕は……。あの人を助けることも、せめて、この手で殺してあげることが出来なかった！」

碧い眼から透明な涙が溢れて、ラムザの色白な頬を伝い、握り締めた革手袋の拳に落ちた。洗っても取れなかった、彼女の血の跡の上に。

「……。坊ちゃん、幾つだっけ？」

ベリンダは呆れた顔をした。

「はい？十六ですが……」

「若いよね！まだまだこれからじゃないか」

ベリンダはラムザの横に来て、肩を抱いた。

「十六にしちや上等すぎるぐらいのことを、坊ちゃんはしたと思うよ。」

ただ兄さんや仲間のためっていうならね、あのコ、せめて坊ちゃんを道連れにしようと斬りかかってきたと思わないかい。

そうしなかったってのはさ、あのコ、もう坊ちゃんを敵だと思えなかったんだよ。坊ちゃんを斬りたくなかったし、斬られて自分の死を坊ちゃんのせいにしたくもなかったんだ。

通じてた。坊ちゃんの心は、ちゃんとあのコに通じてたんだよ」
ラムザは俯いて、頭を振る。

「あの人の命を救えなかったなら、何の意味があるでしょう」

「あのね！」

ベリンダは勢いよく、ラムザの背中を叩いた。

「あんまり何でもかんでも背負い込もうとするのはね、親切っていうよりやもう、わがままだよ。自分の力で何とかしてやろう、何とかしてやれるはずだって、自惚れてるってことさね。」

あのコは兄さんばかりじゃなくて、坊ちゃんのこと、命を捨てて庇ったんだ。

坊ちゃんの方でどうこう出来なかったんじゃないかって、あのコが坊ちゃんのためにしてくれたことだよ。

その気持ち、しっかり受け取っておやり！」

ラムザはごしごしと眼を拭った。

「そういう、ものでしょうか……」

「そうだよ」

「……。そう……ですね。きっと」

ゆっくりと、ラムザの口許に微笑が上った。

精神の安定を取り戻すと、急に照れ臭くなり、ラムザはベリンダから顔をそむけて鼻をすすり上げた。

「すみません。みつともない所をお見せしてしまいました」

もう母に甘えたい年ではないつもりだが、ラムザはどうも、年上の女性の前では気が緩みがちになるようだ。あの女剣士の姿に母の最期を重ね見て、久し振りに追想に耽っていたためかもしれない。

「いいんだよ。人間なんだもんさ、誰だって辛い時はあるもんだろ。あたいで良かったら、たっぷり慰めてあげるよ」

と、ベリンダはラムザの背中にぴったりと体を押し付け、後ろから首に腕を絡ませて、耳元に息を吹きかけるようにして言った。

「……、……っ」

背筋がぞわぞわとくすぐったくなる。

「あの、その、慰めるって……言葉だけ！お気持ちだけで結構ですっ！具体的行動とか、伴わなくていいですからっ」

ラムザは慌てて、ベリンダの腕を振り解いた。

（し、しまった。今、”女の人と二人っきり”だーっ！！）

無用の厄介事トラフルに巻き込まれないように、女性と一対一になる状況は

避けるべきである——と、日頃ディリータから注意されていたのに。

士官学校ではいつも、ディリータやガストンなど、誰かしら友人が側にいた。女生徒達やドラコニア領の村娘達も心得たもので、ラムザに話し掛ける時は大抵三、四人以上の集団グループを組んで来たから、これまで自分で気を付ける必要がほとんど無かったのだった。

「遠慮しないでさ、坊ちゃんの力にならせておくれよ。一晩も付き合わせてもらえりゃ、大分気を晴らしてあげられると思うんだけどねえ……」

ベリンダはなおも、しなを作ってラムザにすり寄ってくる。

「いえ、その、傭兵としてティータを助ける戦力になってくれれば必要十分なんで……」

ラムザはざりざりと屋上の隅まで後退り、尻餅をついた。

「勘弁して下さいっ！ 僕は、ほ、本当に好きな人とじゃないと、そーゆうコトはっ……」

赤面して、拝むような格好で訴える。

ベリンダは笑い転げた。

「あははっ！ やだよ、無理矢理取って食ったりしないったら」

それから、ふっと真面目な顔付きになってラムザの前にぺたりと腰を下ろし、目を覗き込んできた。

「だけどき、もしそのティータって子が戻って来なくても、あんまり気を落とすんじゃないよ。泣きたくなったら、お姉さんがいつでも胸貸してあげるからさ。ね？」

と、豊かな胸を手の平で包んで揺すってみせる。

ラムザは二、三度瞬きした。

（何か、誤解してるのかな？）

ラムザにとって、ティータはもう一人の妹のようなものだ。かけがえのない存在には違いないが、異性として”本当に好きな人”というわけではないのだが。

しかし、的外れであるにせよ、彼女なりに心配してくれることは有難く思っておくことにした。

「有難うございます。ベリンダさんのおかげで、少し気持ちが落ち着きました」

楽になりはしなくても。

立ち上がったラムザは、ベリンダがハッと驚かされるほど大人びた、穏やかな微笑みを浮かべていた。

「そ、そうかい？なら、いいんだけどさ」

ラムザは一つ伸びをすると、軽い足取りで階段を下りていった。

その後ろ姿が爽やかで、疲れを感じさせないのが、ベリンダにはかえって痛々しく思われた。

（参ったねえ。本気で、商売抜きに尽くしてあげたくなくてきちまうじゃないか）

？－6－〔3〕 辺地の砦 ？人恋う心

「おおっと」

屋内に入った所で、ラムザは階段を上ってきたガストンと鉢合わせた。

「おい、ラムザ。仇は取ってやるぜ」

ガストンは、がしっとラムザの両肩をつかむ。

「仇？」

「アルガスのヤローさ。てめーに唾吐きやがったんだってな。サーシャから聞いたぜ」

今まで、斬られた袖をサーシャに繕ってもらっていたようだ。

「帰ったら即行、しばき倒して便所壺に沈めてやらあ！」

「よせよ。僕の方こそ、アルガスに悪いことしたと思ってるんだ。

あの時は……ディリータをけなされて、黙っていられなくてさ」

「そんなん、友達なら当たったり前だろーが！何でてめーが悪い？」

「ガストン。もしも、何かずっと君が大事にしてきた宝物を、突然がらくただと言われて……代わりにもっといいものをくれるわけでもないのに、メチャメチャに壊されてしまったら、どんな気がする？」

「……！」

ガストンは銀褐色の髪をぼさぼさと掻き回し、首を捻る。

「わっかんねーな……。じーさんのことでバカにされてきたんなら、家柄なんか関係ねえ、自分は自分だてめえって気になりそーなもんじゃねーか？」

「だから、逆に考えればさ。今、自分自身に自慢出来るようなところが無いからじゃないかな？僕は、お料理上手なのとかだって、立派な特技だおさんどんと思うんだけど……、」

「騎士の卵が料理が得意だって、尊敬してくれんのはてめーぐらいだぞ」

「……って、本人も言うんだよな。」

侯爵様救出がアルガスの手柄にならなかったのは、残念だったよ。何か、あいつが自分の力で大活躍して、自信を付ければ、家柄に固執する必要も自然と無くなると思うんだ。でもそれまでは、無理に捨てさせようとしたって、ますます必死になってしがみつくだろ。他に心の拠り所が無いんじゃないやあな。

追い詰めるような言い方しちゃったなあと思ってさ……」

「……成る程、な。ちびつとわかったぜ」

と、ガストンは頷いた。

「あいつ、悪い奴じゃないよ。僕に唾吐いた時、悲しそうな顔してた」

「ううーん……、ま、百歩譲って、てめーにも拔かりがあったとしてもだ。」

やっぱ、悪いのはヤツの方だろ。ヤツ自身にも悪いことしたって意識があんなら、これ以上、てめーの方から謝られたり歩み寄られたりはしたくねーだろーよ。

ヤツの方から男らしくキチッと詫び入れてくるまで待って、てめーの方も男らしくスパッと許す。そのぐれーのカッコは付けさせてやんねーと、面子が立たねえだろ」

「ん……、そんなところかな」

ラムザはガストンの両肩を叩く。

「と、いうことで、くれぐれも早まった報復行動は起こすなよな。」

バトー先輩の時もそうだけど、君は喧嘩っ早すぎるよ！気持ちちは嬉しいんだけどさ……」

ガストンは何故か得意そうに、右手を拳に握って力こぶを盛り上げた。

「おうよ！くくだ考えより、こっちの方が俺の性に合ってたんだ」

「……開き直るなよ……」

ガストンが本当にアルガスを締め上げずにいてくれるものかどうか、ラムザは一抹の不安を感じた。

「あ、ところでさ。ちよつと相談にのってくれるかい？」

「何だ？ 頭脳労働はディリータの担当だろ……って、ヤツがあの調子じゃーな……」

「ううん、ディリータの代役ってわけじゃないんだ。理詰めで考えるより、君みたいな野性の勘で動いてる型タイプの方が、時には直観的に物事の本質を見抜いてるかも思っ

て」
ガストンはラムザの首に腕を回して、締めた。

「悪かったなあ、考えナシで」

「じ、自分で言ったくせに」

ラムザはもがいて、振り解く。

「それで？ 何だよ」

「げ、げほっ……。実はさ。気になってるんだ。サーシャのことが……」

ガストンはまじまじとラムザの顔を見た。

「妹以外眼中に無かったてめーにも、遂に春が来たか！」

「えっ！？ あっ、違うよ、そんな意味じゃなくて！」

普通、女性騎士はほとんど前線には出さないだろ？ 儀仗隊とか貴婦人の護衛とか、でなければ輸送や医療といった後方事務中心で。

サーシャは、女子の内だけで比べても強い方じゃあない。今回みたいな危険な旅に、兄さんや教官方せんせいは、男子の誰かと交代させることを考えなかったのかな？

ナツシュはまだわかるよ、体力は無いけど魔法はずば抜けてるから。でも……」

「さあ？ この班の連中はもう運命共同体ってことじゃねーか？」

「うーん……。それともう一つは、ダイスダーク兄さんの手紙のことさ。」

よく読み返してみたら、通行許可証を発行する理由や目的に一言も触れていないんだ。ティータの名前がどこにも出て来ない」

ティータを保護した時は最寄りの砦に留まり、迎えが行くのを待つべし——との指示もナツシュの口から伝言されたが、書面には書

かれていなかった。

「ダイスダグ兄さんは一体、この一件をどう処分なさるおつもりなんだろう……」

「さあな……。政治家の文章なんてな、いわゆる玉虫色ってヤツだろ。下手に言質を取られねえよーに、臨機応変に予定変更出来る余地を残しつつ……とかつーのが常套手段じゃねーか」

「うーん、そうなんだけど……」

ラムザは腕組みして考え込む。

「俺としちゃ、サーシャやてめーの兄貴より、気になるのはやっぱりアルガスのヤローだな。サーシャの話だと、あいつらが出発した後でヤローもどつか出掛けるみてえだったそうじゃねーか」

「ああ……僕もナツシュから聞いているよ。エルムドア侯爵様のお使いでランベリーに帰るのかと思ったら、そうじゃないらしいし……」

「何か……、またろくでもねー方向に突っ走ってんじゃねえだろーなー」

「うーん……、確かに、アルガスの行方も気になるな……」

眉をしかめたラムザのこめかみの辺りを、ガストンはぐりぐりと指で押した。

「悪ィな。かえって、悩み事増やしちまったみてーだな」

「ううん、有難う」

「いーんじゃねーか、今はティータちゃん助け出すことだけ考えてりゃ。助けた後のことなんざ、後になってから、デイリータに脳ミソ借りろよ。その頃にな、あいつも落ち着いていい知恵出してくれるだろーぜ」

「うん……、そうだね」

ラムザは頭を切り換えて、それらの疑問についてはひとまず忘れることにした。

「ラムザ君、上着の裾がほつれてるわよ。縫ってあげる」
廊下で、サーシャがラムザを呼び止めた。

「ここの家の人にやつてもらおうよ。君はゆっくり休んでたら？」

「縫わせて。何かやっている方が気が紛れていいの」

「そっか。そうかもね」

ラムザ自身、じっと体を休めているよりも、子供の相手をしたり剣を研いだりしている方が気分が楽だった。何もせずにいると、徒に不安や焦燥に悩まされる。

「じゃあ、お願いするよ」

「ええ、お入りなさいよ」

と、サーシャはラムザを部屋に通した。

寝台や椅子が二つずつある。サーシャは今日は、ベリンダと同室なのだ。

サーシャが椅子の一つに座って、卓子に裁縫道具を広げる。ラムザはもう一つの椅子を後ろ向きにして座り、背もたれの上に頬杖をついた。

「やあだ。ラムザ君でもそういう、お行儀の悪い座り方するのね」

「あ、ごめん」

と、ラムザが椅子を回そうとするのを、サーシャは笑って止めた。

「いいのよ。打ち解けてくれてるって証拠よね。ちよっと新鮮な感じ」

「はは……」

ラムザは背もたれにつかまり、椅子を前後に揺すった。

「小さい頃、好きだったな。こうやって、韋駄鳥チヨコボに乗ってるつもりになるの。父さんが木の揺り韋駄鳥もくれたんだけど、こっちの方が想像が膨らむんだ。何度母さんに叱られても、やめられなかったな」

「まあ」

ラムザとサーシャが親しげに笑い合う姿を、ナツシュは窓の外の外廊下から見かけて、足を止める。

（絵になるなあ……。ラムザ君、綺麗だから。女の子の方がかすんじゃないぐらい。ううん、サーシャはかすまないけどね）

ナツシュは懷に手を入れて、首にぶら下げている、小さな巾着袋に触ってみた。サーシャが作ってくれた、”勇気が出るお守り”だ。（そりゃあぼくなんて、ラムザ君とじゃ比べ物にならないよ。体は弱いし気は小さいし、全然、頼りにならない感じだろうけど……）ナツシュの緑の団栗眼は、じつとサーシャの横顔を見つめている。（でもね。ラムザ君はみんなのラムザ君だけど、ぼくはサーシャだけの騎士^{ナイト}になるから……、だから……）

ふっと、ラムザが遠い目をする。

「いつだったっけな。アルマを前に、ティータを後ろに乗つけて、韋駄鳥^{チヨコボ}乗りごっこしててさ。引っ繰り返って、ティータが頭を打っちゃったんだ。ディリータに本気で殴られたのって、あの時だけじゃないかな。

そう……、ディリータ達が家族をみんな亡くして、僕らと母さんの家に住んでた頃だ。ディリータは、ものすごく過保護になってた」それ以前は、妹にいつも付きまとわれるのをうるさがることもしばしばだったのに、その頃は逆に、妹を心配して常に目の届く範囲から離れたがらなかった。

「『バカッ！ティータが死んだらどうしてくれるんだ！』って、まるで悪魔^{ルカヴィ}を見るみたいに憎々しく睨まれちゃって。痛いのも、それがすごい衝撃^{ショック}でね。四人でわあわあ泣いてるから、母さんとタバサ小母さんが、叱るよりまず慰めてくれたよ。

ティータの頭の後ろ、髪の毛に隠れて目立たないけど、ハゲが残ってるんだ。女の子なのに、可哀想なことしちゃったな……」

左手首に巻いたティータの髪留め^{リボン}を撫でながら話すラムザの声が、湿っぽい。サーシャも顔を曇らせる。

ナツシュは溜め息を吐いた。

（そうだよね……。ティータさんが大変な時に。不謹慎だと思われるだけだよ。

お祖父様達を説得して、サーシャをお嫁さんにももらえらな限らないし……）

借金の抵当^{かた}に意に染まぬ結婚を義務付けられているサーシャに、中途半端な期待を持たせても、かえって残酷な結果になるかもしれない。

（そもそも、明日死んじゃうかもしれないから今のうちに……なんて弱気な態度、男らしくないや。カッコ悪いの……）

サーシャに思いの丈を打ち明けよう、という決意を翻して、ナツシュは羽根付き帽子の底を目深に下ろし、すごすごと元来た道を引き返す。

と、ガストンが通路に立ちふさがってポキポキと指を鳴らした。

「おう、探したぜナツシュ！ここで会ったが百年目……」

「え？わああっ、ごめんなさいいっ！」

「コラ、何ビビってやがる？挨拶代わりの、ほんの軽い冗談^{ジョーク}だっつーに」

と、ガストンは挨拶代わりに首を絞める。

「ぐ……ご、ごめんって……」

咳き込んだナツシュに、ガストンは小瓶を手渡す。

「お疲れ様な魔道士の皆さんに、友情の一本。魔力消耗時の栄養補給に！」

「わ……、魔法水^{エーテル}かあ」

「俺からじゃなくて、士官学校^{アカデミー}の連中からの餞別だぜ。よく見ると魔法水^{エーテル}じゃなくて、無認可の魔法水飲料^{エーテルドリンク}らしいけどな。まっ、薬効成分はそんなに違わねーみてえだぞ」

「うん、ありがと」

ナツシュは栓を抜いて、少しためらう。

「魔法水^{エーテル}って……ちよつと苦いんだよね」

ガストンは乱暴に、ナツシュの肩と、瓶を持った手首を掴んだ。

「ああ？つべこべ言うんなら、飲ませてやろうかあ？」

「うわーっ、飲むよ、飲みます！自分で飲ませていただきますうつ！」

ガストンとナツシュの掛け合いを遠くに聞きながら、ラムザは針

を動かすサーシャの手許を眺めた。

（そうだ……。僕には妹の他に、兄上や伯母上達もいるけど。デ
イリータにはもう、ティータだけなんだ）

デイリータ兄妹の母方の親族は、黒死病で全滅してしまった。父
のギータは、元々一族を皆殺しにされた復讐のために隠密になった
のであり、畏国に來た時から天涯孤獨だった。

「サーシャ……有難う」

「え？」

サーシャは手を休めてラムザを見た。

「正直、サーシャが来てくれて助かった。僕は、ティータを物理
的に救い出すことは出来ても、その後、どんな風に接してあげれば
いいのかわかんないからさ。ベリンダさんだって女の人だけど、そ
の……何て言うのかな……」

「そうね。ごく普通の、傷付きやすい女の子の気持ちをわかってあ
げるには、特に強くも偉くもない、”普通の女の子”の方がいいか
もしれないわね」

「あ、勿論、君の白魔法だってとっても役に立ってるよ」

「有難う。嬉しいわ、こんなわたしでも何かの役に立てるなら」

サーシャは小首を傾げた。

「多分……、ティータさんが今一番会いたいのも、一番会いたくな
いのも、ラムザ君とデイリータ君だわね」

「え？……どういうこと？」

「一番好きな人だから……。もし、頼って受け止めてもらえなかった
らどうしようって、とっても怖いと思うの。もしも、責められたら
……それとも、何か今までと変わって、距離を置かれてしまったら、
って」

「責めるだなんて……。どうして」

「だって、ラムザ君達に迷惑掛けることになっちゃったじゃない。
ティータさんを追って、危険な旅をして。無事に助け出せても、”

勝手なことをした”って士官学校の先生方から咎めを受けたり、口

さがない人達から非難されたりするかもしれないのよね。

それに、ただでさえ苦しいでしょうけど……ラムザ君達が心配して心を痛めてるだろうってことが、ますます心苦しいと思うのよね。

自分がもつと気を付けていれば、さらわれなくて済んだんじゃないかとか……いつそ最初から自分がいなければ、とか」

「そんなの、悪いのは骸旅団の奴等じゃないか。ちっとも、ティータのせいなんかじゃない」

「そうだけど、それでも、気弱になってる時は気にするものよ。好きな人に、万が一でも怒られたり……悲しまれたりしたくないわよ」ラムザは頭を振った。

「ティータは僕らの大事な妹だよ。戻って来てくれるなら、とにかく嬉しい」

サーシャは微笑む。

「その気持ちを持って、素直に接してあげればいいのよ。矢張り、一番ティータさんの支えになれるのは、ラムザ君とディリータ君をおいて他にいないもの」

「うん。それに、イグロスで待ってる、アルマもね」

サーシャの微笑みが、苦笑に変わる。

「ええ、それはそうだけど……」

「？」

ラムザはサーシャの手を取った。

「ティータも大事だけど、サーシャ、君もくれぐれも無理はしないでよ。女の子を助けるのに、他の女の子を危険にさらしたくはない。危ないと思ったら、すぐに下がって。僕が守るから」

真剣な眼差しで見つめられたサーシャの頬が、ゆっくりと赤くなる。

「やだ……、”僕が守る”だなんて、一人の女の子にしか言っちゃいけない台詞よ」

「え？ ああっ！」

ラムザは慌てて手を離した。

（しまったあっ！またまた”女の子と二人っきり”じゃないかー
っっ！）

ラムザは顔から火を噴いたが、夕陽と暖炉の灯りで元々周り中が橙色なのが有難い。

「えっと、その！ティーター一人だって守れるかわからないのに、おこがましいかもしれないけど……サーシャだって大切な仲間で、死んでほしくないってことで……、あの、他意はまるっきり無いから！！」

サーシャは照れ隠しに、ころころと笑う。

「もう！」まるつきり無い”なんて力一杯言われちゃったら、つま
んないじゃない。セヴェリーニ君だったら、嘘でもお世辞でも、『
君だけに特別に言ってるんだよ』って顔してくれるのに！」

「はは……セヴィとは意見の分かれるところだよ。僕は、それじゃ
詐欺だと思うんだけど」

「詐欺っていうより、お芝居ね。お姫様ごっこ。その時だけは、自
分がすごくやんごとない姫君になった気分^{プリンセス}にさせてくれるの」

「えー、でも、嘘やごっこで本当に嬉しい？」

サーシャはキュツと唇を引き結んだ。

「……、嬉しくないわね……。嘘の言えないラムザ君だから、本気
で『君だけだ』って言ってもらえる女の子は感激するでしょうね。

ラムザ君の”特別な女の子”になるのって、どんな人かしら」

「さあ？考えたことないや」

いや、考えないようにしてきた、と言った方が正確だろう。

華やかな少女達に囲まれて、

——いいご身分だなあ。一人ぐらいこっちに寄越せ！

と級友達に囃し立てられるラムザだが、実際には級友達以上に自分
が彼女達と縁の薄いことを、常に自覚している。

自由な恋の結果として生まれたラムザとアルマには、恋の自由が
無いのだ。

ファティマが亡くなった翌年の、聖母祭休暇の時。

バルバネスとアルマと、三人だけでひっそりと母の墓参りをした
歸りに、アルマが父に尋ねた。

「ねえ、父さん。もし、母さんと会った時にソフィア様がまだ生きてらしたら、どうなさった？」

ラムザはアルマの喪服の袖を引いた。

「こら、アルマ」

「何よ。お兄ちゃんだって気にならない？ いい子ぶって聞かずにいて、後悔しても知らないんだから」
と、アルマは兄を睨む。

反抗期なのかな、とラムザは思った。

「はは、そうだな。儂に聞きたいことがあれば、今のうちにどんどん聞いておけ」

と言った父は、近頃めっきり健康に陰りが見えてきたようだ。

「ふむ。ソフィアが生きておれば、勿論ファティマを好もしく感じはしたが、自分の連れ合いにしたいという意識は働かなかつたろう。息子の嫁に欲しいお嬢さんだとも思ったかな？ お前達は儂のダイスターグ子供ではなく、孫だったかもしれんぞ」

アルマは更に尋ねた。

「あのね、それじゃあ、もしもよ。母さんとソフィア様が同じ年で、同じ時に会ってたら、父さんはどっちと結婚なさったかしら」

「儂がその時幾つだったかによるな。若い、駆け出しの頃に出会っておっても、ファティマの良さはわからなかったかもしれん。ただ不作法な、小生意気な娘だと思って見逃してしまったかもしれんよ」
アルマはしつこく尋ねた。

「あのね、じゃあもう一つ。もしも、順番が逆だったら？ 母さんと先に結婚していて、母さんが死んだ後でソフィア様に会っていたら、ソフィア様と結婚したいと思ひになった？」

「それは……難しい質問だな、アルマ」

バルバネスは顎鬚を撫でた。

「儂のように、伝統ある騎士の家の跡取りに生まれた者には、結婚は本人同士好きか嫌いかというだけでは決められん問題だ。

今だから言うが、お前達の母さんとの結婚が公認されぬまでも黙認されてきたのは、ソフィアがダイスダーグとザルバッグを産んでおいてくれたおかげだぞ。

それに、儂に達者な姉上達が三人もいてくれたおかげだな」

家督を渡す優秀な後継者を残すことも、大家の統領の義務と見なされる。

また上流階級の貴族にとって、公式行事の運営や、人脈コネの形成・維持に果たす夫人の外交的役割は大きい。

ソフィア亡き後の”伯爵夫人”不在の穴を、バルバネスの姉達――特に、二番目の姉・フローラが何くれとなく埋め合わせた。

フローラはいつもにこやかで、おっとり物腰柔らかく、話し方も何となく間延びしている。一瞥したところ脳天気だとか愚鈍だとか思われがちであるが、あに凶らんや。心理戦においては、どれほど脅してもおだてても、ある一線からは一歩たりとも妥協せぬという、無類の防御力を誇る。

ラムザ達母子の存在も、見えない所で度々、フローラの鉄壁の笑顔に守られてきたらしい。

「もしも先にファティマと結婚していて、ラムザ……どうしても皆にお前を正式な跡取りと認めさせることが出来なければ、後添えを迎えることを考えぬわけにはゆくまいな」

アルマは首を横に振る。

「家門だとか、義務だとかは抜きにして。父さんのお気持ちよ」

「儂が儂である以上、ベオルブ家の当主として負うべき責任を切り離して考える方が不自然だぞ。

が、そうだな……、必ず誰かと結婚しなくてはならぬなら、ソフィアを見て、この人とは仲良く暮らしてゆけそうだと思っただろう。だが、周りの状況が許してくれるのであれば……、儂の意思で積極

的に、ファティマの他に妻を持ちたいとは思わなんだろうよ」

アルマは、母によく似た美しい顔をしかめている。

「……、ソフィア様がお可哀想じゃないかしら？」

おや、とラムザは意外に思った。

父に自分達の母の方が大事だと言わせることが出来れば満足なのでは、ないらしい。

「ソフィア様だって、父さんが好きだったのでしょ。小さい頃から父さんの許婚で……、何か落ち度があったわけでもないのに、父さんは母さんの方が好きだなんて！」

「ソフィアもファティマも、儂の人生のそれぞれの時期に必要な、かけがえのない支えになってくれたと思っておるよ。」

そうだな……、言ってみれば、ソフィアは外套^{マント}で、ファティマは剣^{ツルギ}のようなものか。

それぞれに良い働きをしてくれたとは思うが、もしどちらか一方だけを取るとすれば、騎士ならば剣の方を選ぶだろう」

「「……??」」

「弓の弦は、使う時にはピンと張り詰めて大いに力を発揮出来なくてはならぬし、使わない時には充分に緩めて休ませておかねばならぬ。戦うべき時に存分に戦うためには、どちらも大切なことだ。」

戦う、というのは何も、無法者や外国の軍勢と剣を交えることばかりではないぞ。民を守るために良い政治^{まつりごと}を行うのも、騎士の務めのうちだ。

ソフィアと過ごす時は、儂は戦いを離れて存分に羽を伸ばし、疲れを取ることが出来た。

後から振り返ると、若い頃の儂は随分身勝手をして、あれの寿命を縮めたのかもしれん。長年姉上達に頭を押さえ付けられてきた身には、ソフィアがいつでも一步譲って儂を立ててくれるのが、居心地良くてな。

もっとソフィアをいたわってやれと、散々姉上達に小言を頂戴しておったのに、ろくに氣遣ってやらんで……。

あれが何でもはい、はいと儂の意見を通してくれるのを、大人しすぎて味気ないなどと……今となっては、実に贅沢なことを考えておったよ」

ラムザは吹き出した。

「それってとどのつまり、母さんは悍鳥じゃじゃチヨコで手に余った、って意味ですか！」

「身も蓋もなく言ってしまうえば、な！」

父子三人は、しばらく笑った。

「いや、いや。ただのわがままではなかったぞ。真心持って、耳に痛い意見でも率直に聞かせてくれたのだ。

ファティマに出会った頃には、儂はもう四十近かった。長いこと経験を積み上げて、地位も自分なりのやり方も確立した頃だ。

だがな、もう充分に経験を積んだと思うのはクセモノでな。人によつては、積もり積もったしがらみや固定観念に縛られて、それ以上伸びることが出来なくなる時期でもある。

ファティマは、そこから更に殻を破って新しいことに挑戦する力になってくれたのだ。

無論、ファティマは軍事や政治の専門家ではないから、儂が抱える問題に直接的に解決策をくれるわけではない。しかし、ファティマの物の見方考え方に触れたり、お前達と家族として当たり前に暮らしてゆくにはどうすればいいかと知恵を絞るうちに、実に多くのことを考え直す機会を与えられた。自分がそれまで正しいと思ってきたやり方の、限界を越えてゆくことが出来たのだ。

だが、限界を意識してそれを乗り越えてゆくためには、まず限界いっぱいまで力を出し切ってからでなくてはならぬ。ソフィアが、後顧の憂いなく儂の好きなようにさせてくれたおかげで、そこまで辿り着けたのだと思っておるよ。

そういう意味では、ソフィアが儂をファティマに引き合わせてくれたと言ってもいい」

ラムザは二人の伴侶についての父の告白を、嬉しいような、気恥

ずかしいような気持ちで聞いた。

「もしあの二人が会って話すことがあれば、互いに自分の果たした役割に誇りを持ち、相手の果たした役割に敬意を払うだろうよ。今頃、天国で良い茶飲み友達にでもなっておるのではないか？」

まあ、それでも万が一喧嘩しておったら、少々ソフィアの方に力添えしてやらねばならぬかな。少なくとも、お前達の母さんの方が気が強いことだけは確かだぞ。ははは……！」

アルマは恐らく、自分の将来に不安を抱いていたのだろう。と、ラムザは後日、思い当たった。

病床のバルバネスは口癖のように、

——アルマの花嫁姿を見るまでは死なんぞ。と言っていた。

それに答えるアルマの、

——じゃあわたし、ずっとお嫁に行かない！そしたら、お父様はいつまでも長生きして下さるのね？

という決まり文句は、冗談や親孝行のつもりだけではなかったようだ。

男であるラムザは、自力で自分の道を切り拓いてゆくことも出来よう。

イヴァリース

が、当時の畏国における女性の地位は、未婚であれば父に、既婚であれば夫に付随するものでしかない。結婚が、アルマの人生の方向性を決定するのだ。

最も理想的だったのは、ラーグ公の世継ぎであるハールーシャとの縁組みだろう。

いつの頃からか、“不倶戴天の宿敵”だったはずの二人は、ラムザを仲立ちとして“喧嘩”を楽しんでいるように見えた。

身分の保証という面でも、本人達の相性という面でも、申し分なかったのだが——。

ハールーシャが夭折した時点で、アルマの将来の見通しは、ぐん

と不透明になった。

一人娘を溺愛しているバルバネスならまだしも、異母兄・ダイスダークが当主の座に就けば、どれほどアルマの意思を尊重してくれるだろうか？母方の後ろ盾の無いアルマには、家長の権力に抗うことはほとんど不可能だ。

アルマがまだ十歳そこそこの頃から、イヴァリース畏国各地の青年貴族達は――
―ことによると、連れ合いに先立たれた中年男達も――”ドラコニア伯爵の一人娘”を射止めんと、熱心に恋文や贈り物を届けてくるようになった。

大司教や枢機卿達でさえ、秋波を送ってきた。聖アジョラの没後十数世紀を経たこの頃、末端の神官達の間にも独身主義が普及する反面、本来結婚を禁じられているはずの高位の聖職者が俗世の権門と手を結ぶため、大っぴらに”政略結婚”することも珍しくなかったのだ。

しかしアルマは、美辞麗句や財宝に心動かされることはなく、冷めた目で男達の野心を見透かしているようだ。

ラムザは妹の気性をよく知っている。

アルマは逞しい娘だ。その気になれば、野良着を着て牛の乳を搾ったり糸を紡いだりする生活にでも、旅から旅へ菓を練っては売り歩く生活にでも、たちまち適応するだろう。

諦めて好きでもない男に嫁ぐ覚悟よりは、好き合った男と駆け落ちする覚悟の方を固めそうである。

といっても、同じ血を分けた兄以上に慕う相手が現れればの話だが……。

――でも、それもいいかも。どうせラムザ兄さんより好きになれる人がいないんだったら、兄さんの役に立てるように、好きじゃない人と結婚してもいいわよ。

――バカ言うな！アルマを不幸にしなくちゃ力を保てないほど、弱い騎士にはならないさ。

と答えるラムザこそ、とつくの昔に、無意識のうちに恋を諦めてい

た。

偉大なる勇者、”天騎士”バルバネスの實力をもつてしても、ファティマが死ぬまで——いや死んだ後にも、夫婦としての”実”に”名”を一致させることは出来なかったのだ。

バルバネスの葬儀の際にも、とうとうファティマを正式にベオルブ家の墓所に改葬することは叶わなかった。ただザルバッグの許しを得て、兄妹三人だけで密かに、ファティマの遺髪をバルバネスの棺に納めたに留まった。

庶出という不利を負った二代目であるラムザの場合、周囲に反対される恋をすれば、単にその恋が成就しないばかりか、ベオルブ家の一員としての地位を失う恐れがある。

ベオルブ家の騎士として、父の果たせなかった仕事を引き継ぐのが、ラムザの人生の第一目的だった。

結婚に関しては、余程気の合わない相手でない限り、形式に実態を伴わせる努力をしようと思っている。父がマリーソフィアに對してそうしたように、多分ダイスダークが決めてくれる花嫁を、大事にしよう。

それでも……、ドラコニア伯爵の弟という身分も、両親の悲願もかなぐり捨てたくなるほどの恋に落ちる日が、来るだろうか？

（僕が自分の意思で選ぶ女性……？父さんが母さんを選んだように……？）

出し抜けに、きつい目をした女剣士の面影が目蓋の裏に浮かんた。あっ、と声を上げて、ラムザは胸を押さえた。

「どうしたの？」

「ううん、別に……何でも」

女剣士の遺品の首飾りは、サーシャの膝に載せられた上着の內衣ポケットに入っている。ラムザはひどく落ち着かない気分になった。

「はい、出来たわ」

「有難う」

繕い直された上着を着込むと、ラムザは逃げるようにサーシャの部屋を出た。

まだ動悸が速い。

（今、どうして……あの人のことを……？）

彼女の兄に返してあげられればと思い、ラムザは首飾りペンダントを拾ってきた。だが、

（そういえば僕、あの人の名前も、あの人の兄さんの名前も知らないんだ。こんな小さい頃の絵姿だけで、あの人の兄さんがわかるかな？）

ぱちん、と赤い七宝の蓋を開けて、ラムザは子供時代の兄妹の浮き彫り画を見た。

身心共に頑健そうな少年に、心なしか見覚えがあるような気がする。が、いつ何処で会ったとは、思い出せなかった。

？－6－〔3〕 辺地の砦 ？人恋う心（後書き）

ラムザとミルウーダは、”戦場のロミオとジュリエット”みたいな演出を試してみたかったんですけど……、いかんせん、交流時間が短すぎました。お互いにちよつと気になるなあというぐらいの段階で、儚く立ち消えてしまいましたね。

もつとじっくり話し合う機会があれば、本格的に”好き”になったかもある……という、芽のままの押し花みたいなほろ苦い思い出として、ラムザ君の心に残りそうです。

……それにしても、この頃から既に年上好みの傾向が（笑）。

？－6－〔4〕 焰（ほむら） ？アルマの庭にて

夜――。

隣の寝台で眠るラムザの、規則正しい寝息を聞きながら、ディリータは輾転反側している。

体は疲れているのに、眠れない。

（こうやってディリータを追っている間だけが、俺達と一緒にいられる最後の時間なんだ）

と思うと。

（俺は非道い兄貴だな、ディリータ……）

ディリータが今この時、この夜をどう過ごしているか想像すると、腸が千切れそうだ。一刻も早く助け出してやりたい。

だが一方、ラムザとの別れを考えると、逆に一刻でも長くこの旅が続けばいいのにと願ってしまう。

（セヴィの奴は手ぬるい）

城門での士官学校生達と警備兵達との衝突事件は、純粋に厚い友情の所産^{アカデミー}とは言い難い。

士官学校生達の多くは、処罰されても良いという覚悟があったのではなく、処罰されないだろうという楽観的予測があつてやっただけではないのか。

若者はしばしば、隙あらば既存の権威・権力に反抗しようとする。ラーグ公の強引な徴集の真意に気付いた学生達の間で、不満と不安が募っていたのだろう。友^{ラムザ}のため”という大義名分の下、若い鬱憤^{エネルギー}の奔流を発散させた、という一面は否定出来まい。

心底からラムザに加担する気であれば、乱闘に参加した全員が署名を提出して、ラムザを処罰するなら自分達も同罪に……と沙汰を待つくらいのはすべきだ。

が、ナツシュから事後のあらましを聞いた限りでは、”自首”したセヴィを始め、彼らは皆で責任を引き受けようというのではなく、

責任を問われないようにしようという作戦を取っているようだ。

その結果がどうなると思うのだ。小なりとはいえ、立派な”反乱事件”である。士官学校やラーグ公として、不問に付して示しがつくか。他領の有力貴族の子弟などもいて、彼らを処罰することが出来ないとすれば、罪を被るのはラムザではないか。

ラムザはそれでも、ティータを救う一助となったのなら、級友達に感謝こそすれ、恨みはすまい。が、ディリータには、彼らの無責任さが許せない。

（いや……、そもそもはこの俺のせい、か）

ベオルブ邸の門を出る前にディリータがラムザを止めておれば、何の騒ぎも起こらなかったのだ。

「……」

ディリータは、布団に入ってから何度目かの溜め息を吐いた。

ディリータがティータを連れて、ベオルブ家を退出する。

それ以上に良い幕切れは、考えられない。

たとえ生きて戻っても、ティータの神経はもう限界だろう。

ティータを掠っていったのは、貴族を憎み、報復したいと思っているような連中である。彼女を”ベオルブ家の令嬢”だと思いついでいるとしても、いや、貴族の娘と思えばこそ、貴婦人に対する礼儀をわきまえて遇してくれるとは考え難い。

しかも、事後承認的にダイスダーグの許可が下りたとはいえ、ラムザが私的にプライベートティータ救出に乗り出したことで、どうしても関係を疑われ、好奇と非難の目にさらされることは避けられまい。

ティータの方がラムザを慕っているのは事実であるだけに――ディリータは妹の心の支えを取り上げるのが不憫で、気付いてはいても口出しせずにきたのだが――噂を否定しきることも難しく、何より、本人がいたたまれないだろう。

ティータはただでさえ、城勤めを嫌がっていた。たとえアルマやクラリエッタが慰留してくれたとしても、もはやベオルブ家に留まる気力があるとは思われない。

そして、ディリータも――。

ラムザに対する処罰や風評被害を食い止めるには、ディリータがこの件に関する一切の責任を引き受けるのが一番だ。

むざむざと”あの男”の思いつばに填るのは悔しいが、ディリータのためを思えば、そうせざるを得ない。

恐らく、ディリータが自ら引責する姿勢を見れば、ティータを修道院に入れるなり、二人で農民として新しい生活を始めるなりする資金と身許預け先ぐらいは用意してくれるだろう。だが、無駄な悪足掻きを試みれば、強制的に処分されて路頭に放り出されかねない。

ラムザ宛の手紙と通行証の内容を読んだディリータは、そこに、自分に対する無言の要請を読み取った。

ディリータがラムザと行動を共にするのは当然の慣例と思われ、関係者達の盲点になっている。が、通行証はあくまでも”ラムザに”発行されたものであり、同封の手紙にも”ディリータの同行を認める”文言は無い。通行許可の目的も”ティータ救出のため”ではなく、あくまでも”骸旅団討伐作戦の一環として”という建前のようだ。

つまり、向こうがその気になれば――かなり詐術的ではあるが――ティータ救出は”私事のために勝手に職務放棄してラムザの足を引っ張った”と責められても、形式上、ディリータには弁解の余地が無いのである。

”あの男”がラムザの身柄を掌握しようとするれば、いずれ、目の上の瘤であるディリータを排除しにかかることは、わかっていた。格好の口実を与えたディリータを、所詮青二才と、鼻で嘲笑っていることだろう。

”あの男”――ラムザの長兄にしてドラコニア伯爵、ダイスダーグIIベオルブは。

ハールーシャがいた最後の春だったと、記憶している。というこ

とは、ディリータとラムザが十一歳の時だ。

「ラムザ。……ラムザ？」

ディリータは、ドラコニア城の裏庭でラムザを探していた。

「あつ……、ディリータ」

ラムザはこそそこそと落ち着かない様子で、ディリータを植え込みの陰に手招きした。

「どうした？」

「実はね……」

他に誰かが通るわけでもないのに、ラムザはわざわざディリータの耳に口を寄せた。

「さつき、見習い料理人のお姉さんがね。”大人の味”を教えてくださいるって言ってね。倉庫の裏でこっそり……、」

「うん」

「……これをくれたんだけど」

ラムザがそうと握り締めていたのは、少し溶けかかっていたが、形状と匂いからして含酒糖ブランデーボンボンのようである。

がくつ。ディリータは拍子抜けした。

「ね、これって何？ どうすればいいと思う？」

ラムザは途方に暮れた表情で尋ねる。

「酒が入ってるだけの、ただのお菓子だ。食っちゃえ、そんなもん」

「ん」

が、いい加減に答えた後でディリータは、もしや毒か惚れ薬でも入っていないか、と考え直した。

「待て！ 僕にも半分……、」

と言った時には既に遅く、ラムザは砂糖玉を口に放り込んでいる。

「ん」

ラムザは半分に噛み割った含酒糖ブランデーボンボンを、口移しでディリータの口に押し込んだ。

「何か、甘いんだか辛いんだかよくわかんないね……。大人には、」

こういうのが美味しいのかな？」

「……。 ”大人の味” より、こっちの方がよっぽど問題じゃないか？」

ディリータは手巾で口を拭う。

「あ、またやっちゃった。ザルバッグ兄さんには内緒だよ」

ぺろりと舌を出したラムザには、さして反省の色が無い。

ディリータは頭が痛かった。

一体、ドラコニア城に勤める人間で、一度や二度ラムザに”内緒^{キス}で接吻されたことのない者が何人いるだろう？

幼い頃に身に染みついた癖は、なかなか抜けないものだ。

ラムザの母のファティマは、呂国^{ロマンダ}系の移民村の出身である。呂国^{ロマンダ}では、親族は勿論、ちよつとした友人知人でも挨拶代わりに接吻^{キス}をする習慣があった。しかも、ラムザとアルマが幼少期を過ごしたクラーバーティン修道院附属の孤児院では、寂しがる子供達を安心させるために、職員達はなるべく積極的に子供達と接吻^{スキンシップ}を取るようにしていたのだった。

ラムザの人気には可愛らしい外見も一役買ったろうが、人々を本当に惹き付けたのは、素直で快活な性格だ。しかし知らない人間の目には、女の子のような美少年が人懐こく接吻^{キス}を振りまいて歩くのは、”色仕掛けの点稼ぎ”と映っても仕方ないだろう。

それに、ラムザの方にその気はなくとも、誰かが出来心を起こさないとは限らない。

弟の身を案じたザルバッグは、家族以外への口付けを固く禁止した。が、理由については当たり障りなく、文化習慣の違いとして説明していた。

ラムザは一応、納得した。けれども、未だに”色仕掛け”の意味を理解していない上、異文化・階級間の交流を図ることを己の存在^{レイン}意義と信じる彼は、

（相手が嫌がってなければ、構わないよね）
と思っている。

因みにディリータはというと、ファティマとアルマから親しく接^キ吻^スされるのは嬉しかったので、ラムザだけ拒むわけにもいかないまま、今に至っているのだった。

（“内緒”で済む話か？）

とディリータが心配するのには、もう一つの理由もある。

後日、瀕死の重体に陥ったラムザを救うため、ファティマがドラコニア城に来た時。

——驚いたなあ！みんな、ずっと前々からの知り合いみたいに、当たり前[！]に母さんと話してるんだもの！

と、病床のラムザが興奮気味に語ることの方が、ディリータにとっては驚きだった。

（お前、バレてないつもりだったのか！）

と。

”ラムザ坊ちやまの母上”は、とつくの昔から密かな有名人だった。

ファティマという名前、年齢、出身地、^{クレリック}神官医であること。ラムザと同じく金髪碧眼で、^{ロマンタ}呂国系の大変な美人だといった身体的特徴……等々の基本情報は言うに及ばず。

洗濯と、^{ホブリ}芳香剤の調合が趣味であること。アルマのお気に入り[！]の縫いぐるみ・”モグちゃん”を作ったこと。果ては、ラムザとディリータの夜遊び——虫取りや宝探し——に業を煮やして、遂に二人仲良く”布団巻きの刑”に処した……といった逸話^{エピソード}に至るまで。

一人に”ここだけの話”を漏らせば、たちまち囁き交わされて城中に知れ渡る。

ファティマが登城した時点で、彼女の名前さえ知らない人間がいたとすれば、”潜り”に違いなかった。

バルバネスがラムザに母のことを口止めたのは、彼が事情を充分に理解出来る歳になるまで、周囲との無用の摩擦を避けるため——だと思っていた。

だが実は、”秘密であることにした方が、かえって宣伝効果が高

い”という心理作戦だったのではなからうか——と疑ってみたくもなる。

抜けた所の多いラムザに代わって、自分がしっかりと氣を付けてやらねば……。ディリータは子供ながら、”保護者”としての使命感に燃えていた。

この頃のラムザは、一番母の面影の濃かった時期だ。幼い丸っばい顔から、大人びた細長い顔に変わり始めていて、しかしまだ父や兄達のように雄々しく逞しくはなく、天使のような中性的な美しさがあった。

人目から隠れて耳打ちされたり口付けされたりすると、慣れているディリータでもつい、こそばゆくなってしまう。

いつか厄介事トラブルの種になるぞ、とディリータはハラハラしていたが、よもや”ああいう形”では予想もしなかった。

というのは――。

その数日後。

「ラムザ。……ラムザ？」

ディリータは、今度はイグーロスの城下屋敷の庭でラムザを探していた。

薔薇ローズの匂で、頭の芯がぼうつとするような甘い香りが、植え込みの間の小径を埋めていた。

ラムザの行く先にディリータは心当たりがあった。”アルマの庭”と呼ばれる、敷地の奥の小庭園だ。

思った通り、生け垣の内側で黄金色の光が煌めくのが見えた。

ラムザ、と呼び掛けようとして、ディリータはぎよっと立ちすくんだ。

（ファティマ小母さん！？）

一瞬本気で見間違えたほど、背格好といい、ラムザの横顔は母に生き写しだった。

目の錯覚を引き起こしたのは、この庭の雰囲気のせいかもしれない

い。

バルバネスが愛娘のために作らせた——と思われているが、本当は、この小庭園の主に想定されているのはファティマではないだろうか。草花の種類や配置など、ファティマの好みに近いように見える。

（本物のファティマ小母さんよりも優しそうかな）

目を三角にして腕白息子のお尻をひっぱたく姿を思い出して、アルマの方がはるかに小母さん似だよ、とディリータはにやりと笑う。薔薇の枝々を見比べながらゆっくりと歩き回っていたラムザは、そのうち一本の鮮色の蔓薔薇の下で立ち止まり、背伸びをする。

「何をしている？ラムザ」

「あ、ダイスダーグ兄さん」

ラムザの長兄が現れて、ディリータは顔を出しそびれた。兄弟の会話を邪魔しないでおこうと思い、植木の陰で待つことにした。

「あの枝を取って下さいませんか」

「これか？」

とダイスダーグは七分咲きの花に手を伸ばす。

「その隣のが欲しいんです」

とラムザが指差したのは、まだ開き始めたばかりの蕾の花だった。

「アルマに持って行くのか」

「いえ……」

ラムザははにかんで、首を横に振る。

「そうか、義母上にか」

「はい」

ダイスダーグが義母^{はは}という言い方をしたのが、嬉しかったらしい。ラムザはにこりと笑った。

ダイスダーグは短剣を抜き、所望された枝を摘み取った。

「ほら」

「兄さん……、」

薔薇の枝を手渡されたラムザは、爪先立って兄の唇に口付けした。

「有難うございます！」

ダイスダーグは、呆けたようにラムザの顔を見つめ、弟の白い頬にかかる黄金色のほつれ毛をそっと手の甲で払った。

ラムザは機嫌良く、無邪気に微笑んでいる。

と、ダイスダーグは俄に異母弟を抱きすくめて、強く唇を吸った。始めこそ大人しくされるままになっていたラムザだが、流石にただならぬ様子を感じたと見え、兄の腕から逃げ出そうと身をよじった。

抵抗されて動転したダイスダーグは、ますますきつく弟を抱き締め、離さない。

「兄さん？ 苦し……」

とん、とダイスダーグが軽くラムザの額に触れた。ラムザは目を閉じて、くたりと兄の胸に倒れ込んだ。

(……!!)

”強制睡眠”^{スリプル}の魔法をかけたのだ。

(人を……！)

呼んできてどうなる、とデイリータは思い直し、素早く思考を巡らせる。

ダイスダーグには医薬の知識がある。館主代理が、具合を悪くした弟を自室なり薬の研究室なりに運んで介抱してやると言えば、誰が怪しんで止め立てしようか。

だいたい、ラムザの異常を認めながら、まずその場に居合わせたダイスダーグに声を掛けずに人を呼ぶのは、不自然だ。デイリータが見てはならない場面を目撃したことを、白状するようなものだ。

(ダイスダーグ様に声をお掛けして……、そうだ、ザルバッグ様に報せてくると言おう)

もう一人の弟が来ると思えば、ダイスダーグも冷静になるのではないか。

(上手く出来るか……?)

デイリータは足が震えた。化かし合いに熟達したダイスダーグの前

で、見破られない芝居を演じおおせるだろうか。

（このまま……、これ以上何事も無く、ダイスダーグ様が正気に返って下されば、僕は何もする必要はないんだが）

ダイスダーグはラムザを芝生に横たえ、しばらくはただ、飽かずに黄金色の髪を撫で付けていた。

が、ディリータが祈るような気持ちで見守っていると、ダイスダーグの手はラムザの襟巻スカーフきを解き、襟元を緩めてゆく。

（矢っ張り、やるしかないか！）

ディリータは深呼吸を一つして、木陰から出て行こうとした。その時。

「兄上ッ！！」

ザルバツグの声だった。

ディリータも、そしてダイスダーグも、すぐ側に来るまでザルバツグの気配に気が付かなかった。濃厚な花の香りで、感覚が狂っていたのかもしれない。

何も知らずに眠っているラムザを挟んで、兄弟の視線が真っ向くらぶつかり合った。

アツと声を上げそうになって、ディリータは口を押さえた。

（そう……だったのか……！！）

普通、兄が弟の服を脱がせようとしているのを見れば、急病の診断なり手当てなりしているのだと思う方が、常識的な解釈だろう。

一目で兄の意図を見抜き非難した、そのことでザルバツグもまた、胸の奥深く沈めていた秘密をさらけ出してしまった。

ダイスダーグも、はぐらかせば済んだものを、睨み返したことでザルバツグの洞察を肯定してしまった。

お互いに引っ込みがつかなくなったのだ。

右手を拳にして立ち尽くすザルバツグと、左手にラムザの襟巻スカーフきを握ったまま、弟を見上げているダイスダーグ。

二人、石像のように動かない。

ディリータは胸苦しくなった。

重い沈黙。息の詰まるような甘い薔薇の香り。場違いなほど麗らかな春の日射し――。

香気にひらひらと漂ってきた紋白蝶が、ラムザの鼻の頭に止まった。

「ふ……ふ……」

ラムザは寝言を呟いて、くすぐったそうに首を振る。

紋白蝶が飛び立った。

ザルバッグは無言でラムザを抱き上げ、生け垣の外に出て行った。ダイスダーグの顔を見ないようにして、ディリータもそろりとザルバッグの後を追う。

植え込みの中を近道し、先回りして、ディリータは横道からザルバッグに近寄った。

「ディリータ。ラムザに付いていてやってくれ」

ディリータは素知らぬふりをして尋ねる。

「どうしたのですか、ラムザは？」

「さあな……、しばらく横にして休ませていれば大丈夫だと、兄上がおっしゃっていた」

”睡眠”^{スリプル}の魔法をかけられているだけなのだ。他に答えようがなかったろう。

屋敷に入って長椅子^{ソファ}に寝かせておくと、ラムザは※半刻（※約十五分）余りでむくりと起き上がった。

「あれっ、ディリータ？」

ラムザは首を捻る。

「おかしいなあ。ダイスダーグ兄さんに薔薇を取っていただいて、それから……？」

ぼん、と手を打って、

「もしかして、これが貧血ってものかな」

「お前に限って、あり得ない！」

華奢な容姿に似合わず、風邪一つ引いたことのない健康優良児なのだ。

「じゃあ、一体何だろう……」

ディリータは苦し紛れの言い訳を見繕わねばならなかった。

「……花の香りにむせたんだらうよ」

「へえ、そんなこともあるのか」

”物知りのディリータ”が言うと、ラムザはあっさりと信じた。

「そうだ、薔薇の花は？それに、襟巻スカーフが」

「拾ってきてやるよ。お前はまだ寝てろ」

再び”アルマの庭”に來たディリータは、背筋にゾツと寒氣を感じた。

ラムザの襟巻スカーフと薔薇の枝は、茂みの陰に投げ捨てられて、真っ白な灰の残骸に変わっていた。

高温の魔法の炎で燃やし尽くされたらしい。ディリータの目の前で、見る見るそよ風に吹き散らされて原形を失う。

ディリータは、手頃な代わりの薔薇を一輪摘んで引き返した。

「誰にも口外はいたしませんわ。ベオルブ家の名誉のためではありません。貴方は、ラムザのお兄様ですもの」

ファティマの押し殺した声が夜の礼拝堂から漏れ聞こえた時、ディリータはすぐに薔薇園での光景を連想して、廊下で息を呑んだ。

氣配を消して壁の陰に隠れ、扉から滑り出てきたファティマをやり過す。足音を忍ばせて立ち去ろうとしたディリータの耳に、ダイスダーグの苦悩に満ちた祈りの言葉が微かに届いた。

「ファースラム神よ”……!”」

ハールーシャを庇って毒矢に倒れたラムザを治療するため、ファティマがドラコニア城に滞在していた間のことだ。

ディリータも無論、誰にも言わずに胸にしまっておいた。

ところが、一年以上も経ってから――。

ディリータはその頃、体調を崩し始めたバルバネスの傍らで雑用を務めており、ベオルブ家の過去の日誌や帳簿等の書類に触れる機会が多かった。

ある日、全く別の用件で出納簿を調べていたディリータは、ダイスダーグが購入した薬の研究材料の中に、南洋産の食肉草トリフィドの触手の名を見つけた。ハールーシャの命を奪った猛毒だ。

（ハル様を亡き者にしたのは、実はダイスダーグ様だったのでは……）

あまりにも突飛な、恐ろしい思いつきを、ディリータは慌てて頭から振り払おうとした。

その時、あの夜のファティマの台詞が、鮮やかに脳裡に甦ったのだった。

あれは、ダイスダーグが道ならぬ想いを打ち明け、ファティマがそれを拒んだのだと……そういう場面だったのだと思っていた。

が、そうにしては不自然なところがある。

”口外しない”。

わざわざ念を押さずとも、ファティマは他人の秘密を無闇に言い触らす性格ではない。

それに”口外しない”というのは、

——他人には言わないけれど、わたしは忘れませんよ。

という含みニュアンスも感じられる言葉だ。ダイスダーグを許し、今まで通りの家族関係を保ちたいのであれば、”何も聞かなかったことにします”とでも言いそうなものだ。

”ベオルブ家の名誉のためではない”。

ダイスダーグが妻もある身で父の後妻に横恋慕しているというのは、家門の恥にもなるかもしれないが、どちらかといえば彼個人の名誉に関わる話だ。

”ラムザの兄だから”。

ダイスダーグに己の立場の自覚を促す言葉として、最もありそうなのは、愛する”バルバネスの”子息だから、というものではないか。もしくは、愛する我が子の兄だから——というつもりであればファティマは、ラムザ”とアルマの”兄だから、と言うだろう。ファティマに男児偏重の傾向はない。

（あの言い方は……！？）

ファティマがダイスダークから聞いたのは、何か、本来ならば公表すべきことだった。ベオルブ家全体の進退に影響すること。しかも、ラムザに密接な関係のあること――。

ハールーシャの死の真相、だとすれば符丁が合うではないか？

ディリータは出納簿を取り落とした。

（いや、動機が無い！）

しかし、拾い上げて埃を払い、書棚に戻すまでの間に、動揺は静まっていた。

（……。あり得る……か）

ラーグ公に第二子が誕生した聖歴一二〇四年末頃、公妹ルーヴェリアが生んだ第一王子は既に亡く、生まれたばかりの第二王子も病弱で、とても育つまいと思われていた。

王の異母妹・オヴェリアを養女にする案は、他ならぬオムドリア？世王の口から初めに出了たが、すんなりと支持したラーグ公は、ハールーシャの存在を念頭に置いていたろう。

ハールーシャをオヴェリアと結婚させ、共同統治者として王座に据えるのも悪くない。オムドリア？世の兄・故王太子バドリナスの一派は王太子妃を中心に結束し、ルーヴェリア王妃に反発していたが、王太子妃の従弟に当たるハールーシャが王になれば、懐柔することも出来よう。これまで長男には邪険な態度を取ってきたが、まだまだ子供なのだから、手なづけるのは簡単なことだ。……

ラーグ公の目論見はそんなところだったかと思われる。

ところが、ルーヴェリア王妃とラーグ公の権勢を弱めるべく画策していた元老院から、ベオルブ家に密かな打診があったらしい。

――その節は、王女の婿君にはザルバツグ殿を。

というのだ。

王家とベオルブ家との間には密約が存在する、という噂があった。五十年戦争末から獅子戦争の時代、イヴァリース畏国では公・侯・伯・子・男の爵位を持つ大貴族は、およそ五十人余り。そのほとんどは王家の

直臣である。

男爵程度ならともかく、伯爵位を持ちながら王家以外に臣従しているのは、ラーグ公家に仕えるベオルブ家と、ゴルターナ公家に仕えるオルランドウ家のみだ。

これには二説あって、一説は、ラーグ公家とゴルターナ公家が王家から分家する際に、野心的な王子達がいつか王位を狙うため、有力な家老を引き抜いていった、というもの。

もう一説は逆に、王家が王子達の野心を押さえ込むべく、腹心の臣下を監視役に付けた、というものだった。

ベオルブ家とオルランドウ家、両家の当代の主であるバルバネスとシドが莫逆の友であるため、巷間では”監視役”説に軍配が上がっていた。

実際のところベオルブ家は、王家とラーグ公家、どちらに真の忠誠を誓っているのか？

それは当主のみに代々伝えられる秘伝なのかもしれないし、あるいは、その時々^の当主によって立場が異なるのかもしれない。

バルバネスとザルバツグは、王家に対するラーグ公と王妃の過干渉を、しばしば諫めてきた。一方、ラーグ公の幼馴染みでもあるダイスダーグは、積極的にラーグ公に策を授け、国政への介入を強めてきたように見える。

だが、それも見かけ通りとは限らない。バルバネスとザルバツグは、ラーグ公家のためを思えばこそ主君を諫めているのかもしれない。ダイスダーグは、王家のためを思えばこそ懐深くに飛び込んでラーグ公を制御しようとしているのかもしれない。

ただ、本人達の真意が何処にあるにせよ、その頃ベオルブ家の家臣団は二つに割れかけていた。

ダイスダーグに子が無いため、次に爵位継承するのはザルバツグになる可能性が高かった。そこで、次期当主であるダイスダーグに従い、あくまでもラーグ公家に味方すべしとする者達と、バルバネスの存命中に短期間だけ形式的にダイスダーグに爵位を継がせ、父

と方針の近いザルバツグにさっさと家督を相続させるべしとする者達とが、水面下で激しく意見を戦わせていたのだった。

しかしベスラの戦いの後、ザルバツグは生涯独身の誓いを立てることで、ベオルブ家の家督相続問題に終止符を打った。ダイスダーグにこのまま子が出来なければ、ラムザを養子に据える、という方向で家臣達の一つにまとまった。

元老院も、オヴェリアの婿候補をラムザに切り換えて、引き続きベオルブ家との関係強化を模索していた。

そして、ハールーシャを失ったラーグ公も。オヴェリアという有力な駒を他領の者――例えばバリンテン大公家のダリウスなどに渡すよりはと、ラムザに娶せることに乗り気になっている。

王家、ラーグ公家、ベオルブ家。三者が、それぞれ思惑は異なりながら、目指す所を同じくするようになったのだ。

もしも、この筋書き^{シナリオ}を考えたのがダイスダーグだったとしたら――
！？

ラーグ公とその家臣達は、ダイスダーグがラムザを養子に迎えるのは不承不承だと思っている。父に義理立てして”良き兄”の仮面を被ってはいるものの、異母弟など疎んじており、己を凌ぐほどの権力を持たせたいはずがない。万が一ラムザがオヴェリアの婿として王座に昇ることがあっても、異母弟を信頼して力添えするよりは、己の権勢を喰われることを恐れ、むしろラーグ公家と組んで彼の力を削ごうとするだろう……と。

だが、ダイスダーグが実は二重に仮面を被っており、ラーグ公をさえ欺いているのだとしたら――！？

(……、調べてみる価値がある！)

デイリータは早速行動に移った。

まずわかったのは、ハールーシャとラムザを襲ったのが^{オルダリーア}鷗国軍の刺客であることは、ほとんど疑いを挟む余地が無いということだ。

犯人達の身許の裏付けには、充分な証拠や証言があった。矢張り、

本来の標的はラーグ公やバルバネスら畏国軍の要となる武将達であり、子供達はたまたま近くを通ったのでついでは始末しようとしただけ、のようだ。

食肉草トリフィドの毒は一般人の手に入るほど安価ではないが、多少裕福な騎士や商人であれば誰でも購入出来る程度には市場に出回っていることもわかった。

”ダイスダーグが自ら刺客を雇い毒を与えて、ハールーシャを暗殺させた”——という線は消去してよからう。だいたい、ラムザの方が一時ハールーシャより余程重篤な容態に陥っていたことを思い出せば、偽装と考えるには無理がある。

次にディリータが立てた仮説は、”ダイスダーグが直接手を下さないまでも、偶然の機会チャンスを利用して、ラムザだけを救いハールーシヤを見殺しにしたのではないか”というものだった。

フアティマがラムザの命を救い得たのは、症状のよく似た他の麻痺毒を知っていたからだという。毒蜘蛛に噛まれて呼吸の止まった獵師に、その妻が諦められず息を吹き込み続けたところ、蘇生したという例があるのだ。

薬物・毒物に精通しているダイスダーグが、事件以前から食肉草トリフィドの毒を手許に持っていたのなら、その毒性や治療法も知らなかったものか？

また、食肉草トリフィドの毒の性質は知らなかったとしても。

実はハールーシャの医師団は医療過誤ミスを犯したのだが、ダイスダーグはそのことを指摘して改めさせようとしていない。

”浄化”エスナの魔法が効かぬ毒の場合は、”減速”スロウをかけて体力の消耗を押さえるのが定石である。にも関わらず、ハールーシャを診た医師は”活性化”リジエネをかけてしまった。

”浄化”エスナは生体の持つ毒の分解・排出機能を高める。一方、”活性化”リジエネは体全体の機能を活発にする。通常は、”活性化”リジエネならば大は小を兼ねるというわけだ。

だが、体内で酵素活性を受けてから毒性を発揮するが、分解・排

出はされにくい……といった性質の毒——食肉草の毒もこれに当たる——だと、”活性化”^{リジエネ}をかければ毒の生成速度だけが上がってしまい、どんどん体内に毒物が蓄積されて、かえって危険な状態になる。

更に。仮に食肉草^{トリフィド}の毒に関する予備知識が無かったとしても、ハールーシャを救う気があれば、当日知る機会はいくらでもあったのだ。

人の出入りを記録した日誌に、簡単だが興味深い記述が残っていた。

※天秤^{リーブラ}の刻（※午後六〜八時）頃、一旦ラーグ公の別荘からドラコニア城へ向けて出発したダイスダーグが、途中でドラコニア城から来た伝令に会い、引き返しているのだ。

時刻から考えて、ラムザ危篤の報に呼び戻され、ファティマが到着して治療中だという第二報を受けて帰ったのだろう。

”ラムザは助かる”と確信して引き返したのであれば、ファティマが取った処置の内容も聞いたはずではないのか？それをハールーシャの医師団にも報せようとはしなかったのか？

その後も、ファティマからの伝言を携えた使者が、何度もラーグ公の別荘へと走った。

ディリータの知り得た範囲では、ベオルブ家の家臣や使用人達は皆、ラーグ公の別荘に詰めていたダイスダーグに伝言を届けようとした。確実にダイスダーグに伝えた、とか、伝えられるのを見聞きしたという者がいないため、はつきりとしたことはわからない。が、少なくとも、ダイスダーグからラーグ公や、ハールーシャの医師団にその伝言が伝えられた形跡は全く無かった。

ダイスダーグが伝言を握り潰した、と断言は出来ないものの、握り潰しやすい位置にいたことは確かである。

しかし、それ以上詳しく調べようと思えば、ラーグ公家の使用人達や、ダイスダーグの側近達に当たってみる必要がある、まだ十三、四のディリータには危険すぎた。

そこでデイリータは角度を変え、”ファティマをマンダレーナ村に迎えに行ったのは誰か？”という問題に着目した。ダイスダークがハールシャを見殺しにしようとすれば、たとえ毒の治療法を知っていても自らラムザを救うことは出来ない。そこで、代わりにファティマにラムザを救わせようとした……という可能性が考えられる。

当日は、デイリータもラムザが助かってほしいと願う一心で、不思議に思う暇が無かった。が、後から思い返せば、ラムザの病室に入ってからファティマは、手際が良すぎた。

ファティマは名医だと言われるが、それは、どんな病気でもたちどころに治療出来る、ということではない。

数多くの症例をよく勉強しており、診断が正確だ、という意味である。

勿論、症例だけでなく、治療法も幅広く習得してはいる。が、ファティマ個人の能力や、当時の医療の水準を超えた病気や怪我に直面することも少なくない。

手に負えないと判断すれば、例えばレーゲンデ大修道院の付属病院に紹介したり、あるいはただ痛み止めを処方したり、心の平安のために祈りを捧げたりするしかない時もある。

そのような場合も含めて、診断に迷いや間違いが少ないということだ。的確な診断のためには、無用の回り道もしないが、近道もしない。

病室に入った時にはラムザの呼吸が止まりかけていたから、何も訊かずにすぐ人工呼吸を始めたのは当たり前としても。本来ならば、一段落してデイリータと交替した時にでも、もっと周りの人間から事故の状況と経緯を訊いたり、ラムザの様子を調べたりすべきところではなかったのか？

その必要が無かったのは、ファティマを呼びに行った使者から、事故の状況やラムザの容態について、信用に足る充分な情報を提供

されていたためと推察される。城門からラムザの部屋までは、寄り道もお喋りもせず真っ直ぐ来たそうだから、城に着いてからあれこれと聞いたわけではない。

ところが――、驚くべきことに、ディリータの調べた限り、”誰がファティマを呼びに行ったのか”知っている者は誰もいなかった。バルバネスとザルバグは互いに、もう一方の送った使者が先に連れてきたのだろうと思っていた。どちらの使者も、マンダレーナ村に着いた時には、既にファティマは城に向かったと村人から聞かされて、帰ってきていたのだ。

ドラコニア城の人々は事件後、ラムザを救ったファティマにも感謝したが、ファティマを呼びに行った者にも感謝したがついていた。にも関わらず、自分だと名乗り出る者もなければ、確実に誰某が連れてくるのを見たと言う者もなかったのである。

――若様が良い子だから、天の使いが母上を呼んできて助けて下さったのだ。

などという神秘譚まで飛び出す始末。

だがディリータは、神秘だの奇跡だのは信じない。

これだけ皆が知リたがつているのに、また自分も調べたのに、わからないというのは怪しい。偶然ではなく、わざと秘匿されているのではないか。

ファティマを呼びに遣ったのがダイスダーグであれば――、医学知識もあり、事故の状況報告などが集まる立ち位置にもいたから、彼女に正確で詳細な情報を提供することが出来たろう。

そしてまた、そのことは秘密にしなければならない。ラムザを救うために必要な手を打ちながら、一方でハールーシャを救うためには何の対策も講じなかったとわかれれば、彼の野心が白日の下にさらされてしまう。

以下は、推測と呼ぶにも不確実な、ディリータの想像に過ぎないが――。

ダイスダーグは巧妙に伏せたつもりだったのに、如何なるきつか

けによつてか、ファティマは自分に迎えを寄越したのがダイスダグであると感じたのだ。そしてその意味には気付かずに、夜の礼拝堂で会った時に礼を述べたのだろう。

ダイスダグは狼狽したに違いない。

ファティマが何気なくそのことを余人に話せば、彼がハールーシヤを見殺しにしたことが発覚する恐れがある。

誤魔化すか、口止めするかしようとしたらう。

ファティマは、何故それが隠すべきことなのかと不審に思い、真相を悟って……。

（ファティマ小母さんが生きていればな……）

まどろっこしい調査などせずとも、あの夜ダイスダグと何を話したのか、尋ねることが出来たのに。

あるいは、城内礼拝堂の司祭であるオルキムも、何か聞いていたかもしれないが……。

だが二人とも、たとえ”真実”を掴んでいたとしても、それは自分の胸一つに収めて、誰にも語ろうとしないのではないか。

ここに至る頃にはディリータも、その心が理解出来るようになっていた。

ファティマは騎士の妻だし、オルキムも騎士の子、騎士の友である。神の正義を世にしろしめすことこそ至上とはせず、現実的な影響を考慮しただろう。

ダイスダグがハールーシヤを見殺しにしたのが事実であっても、それを明るみに出すのは詮無きことだ。

ハールーシヤが生き返るわけでもなし、ラムザを始め、彼を偲ぶ人々を一層悲しませるだけだ。

しかも、事はダイスダグを処罰するだけでは済まず、政敵達はこれを好機と、バルバネスやザルバグまでも引きずり下ろそうとしてくるかもしれない。混沌の度合いを深める五十年戦争末期の戦局において、北天騎士団は騎士道的な道德律をよく守ろうとしてい

る数少ない騎士団の一つだった。今ベオルブ家が失脚することは、
国運に関わる損失となろう。

取り返しのつかぬ過ちを責めるよりも、これから起こり得る不毛
な政権争いのために無辜の民の犠牲を出さぬことの方が、大事だろ
う。

それに、社会的制裁こそ加えられずとも、ダイスダーグは既に罰
を受けている。

”聖母”は二度と、純粋な親愛や尊敬の眼差しを彼に向けること
はなかったろうから。

ディリータも、ダイスダーグが主君の世継ぎをさえ亡き者にする
危険人物である可能性を心に留め、今まで以上に用心深くラムザを
見守るまでだ。

……そう結論した。

が――、数年後、ディリータは悔いることになる。

もし外れていれば大変な不敬になる、あやふやな推測にすぎなく
とも、バルバネスの耳にこのことを入れておれば。

もう一つの、もっと忌まわしい陰謀は阻止出来たのではないか、
と。

？－6－〔4〕 焰（ほむら） ？アルマの庭にて（後書き）

場所が薔薇園だけに……、違う、断じてそういう意味ではありません！

難儀な兄弟には違いなのですが……。エディプス・コンプレックスの変形でしょうか？

ベオルブ家の家族構成は、結構悩んだのです。ラムザとアルマがいなければ断絶してしまう、ということは……、

？父ちゃんに、少なくとも男の兄弟がない。ということで、バルバネスには姉ばかり三人という、女嫌いの堅物になりそうな生育環境に……。

？兄ちゃんズに子供がない。たまたま、でもいいのですけど。

”報われない恋をしていて、独身もしくは偽装結婚”……という構図が思い浮かんだのでした。

じゃあ、その相手は……？

王妃様。という案もあったのですが、ルーヴェリアはどうにも意地悪なイメージがあって。

”兄のラーグ公にいいように操られているけど、本当は情け深い女性”……だったら、養女のオヴェリアにもっと心遣いを見せたいと思うのです。

王女様はとても心優しく、かつ寂しい女の子のようですので。ルーヴェリアがちよこちよこつと手紙や贈り物を送ったりしてただけでも、すごく感謝して、『お義母様と争いたくない』『オリナス王子が王になればいい』と身を引こうとした気がします。

そういう素振りが（少なくともPS版では）全く無いところから、ルーヴェリアは養女にお義理程度にも愛情を示さなかった……、むしろ、露骨に邪魔者扱いするのを王様が何とかだめすかして庇っ

てた、ぐらゐの関係だったろうかなー、と。

そのくせ、美人で才覚があるのを鼻にかけて、男どもが自分を崇め奉るのは当たり前……みたいに氣位が高かったりして。

硬骨漢のザルバッグにしてみれば、恋が芽生えるどころか、向こうから色目使われても願ひ下げだっつ、てなものでしょね。

ダイ兄とでも、狐と狸の打算の共闘って感じで、”悲恋”には程遠い……。

……で、こうなりました。この設定における目下の悩みは、意外なキー人物になってしまった母ちゃんに、あんまり可愛げが感じられないこと。ラムザ兄妹に比べると、ボケ要素が足りないからか……？

ディリータがそのことに気付いたのは、今年の夏だ。

聖母祭の休暇で帰省する折、ラムザとディリータはイグーロスの城下屋敷に直行せず、ベオルブ家の墓所に立ち寄った。

剣術大会の準優勝の花冠が枯れる前に、両親に報告したいと、ラムザが言い出したのだ。

ベオルブ家の墓所は、墓碑の林と鐘楼がなければ小さな砦のように見える。いざという時は地域住民の避難所にもなるよう、堀や礼拝堂の造りが堅牢なのだ。

霊園は普段、関係者以外立ち入り禁止だ。亡き領主を偲ぶ一般の参拝者の姿が散見されたが、彼らは礼拝堂の聖母像に献花する習いだった。

ラムザとディリータは礼拝堂には入らず、勝手口から寺務所に回った。

霊園の鍵を借りに行くと、墓守は御曹司の突然の来訪に驚いた。そして言いづらそうに、しばらく悪天候が続いて霊園の手入れを怠っていた、とても御曹司をお通し出来る状態ではない……と、花冠を預かるうとした。

「構いませんよ。じゃあ、僕らで草むしりしていきます」と、ラムザは気に留めない。

すると墓守は、御曹司のお手を煩わすわけにはゆかない、休憩所で茶なりと差し上げよう、その間に清掃するから……と言う。

「お茶は持参しました、父さんと一緒に飲もうと思って」

鍵を貸し渋る墓守の態度に、ディリータは引っ掛かりを感じた。

（何か、見られて困る理由でもあるのか？）

職務怠慢を恥じるのはわかる。が、掃除をしていない程度のことでは、本人が気にしないと言うのに御曹司の墓参りを止めるのは、非礼の上塗りではないか。

「心配しないで下さい。兄さんに言い付けたりしませんよ。どこも人手が足りないのは知っていますから……。今は、生きている人達の暮らしを守るだけで精一杯でしょう」

墓守も、こうまで言われて強情を張り続けることは出来なかった。ラムザとデイリータは鍵を借り、ひっそりと人気無い霊園に入った。

「何だ、充分綺麗じゃないか」

荒野の如く雑草が伸び放題、という程ではない。一週間ぐらい前に、霊園内全体の草取りをしたらしい。

（そう……充分綺麗だ。そして、綺麗すぎない）

デイリータがまず疑ったのは、墓泥棒に遭った、もしくは墓守自身が墓泥棒を働いたのではないかということだった。

掘り返された痕跡を隠すために、急遽その周りだけ草花を植え替えたような墓はないか……とデイリータは霊園内にくまなく目を走らせたが、どの墓も静かに古びて、苔むしていた。

建てられて半年余りの、一番新しい墓標に、ラムザは萎びかけた花冠を供えた。

「悔しかったな。いけると思ったんだけど……。来年はきつと優勝してみせます！」

「贅沢言うな。一年生で準優勝でも、エルムドア侯以来の快挙だぞ」

「戦場には年齢制限も準優勝もないよ。一位と二位じゃ大違いだ」

「それを言ったら、戦場には足技禁止だの、一対一だのいった規制も無いな」

「まあね！デイリータと二人がかりでいいんだったら、そろそろザルバッグ兄さんだっていい勝負が出来そうだね」

ラムザとデイリータは墓標の前に座り、弁当の籠バスケットを広げた。

「これは母さんに。プリマ伯母上配合ブレンドの、今年の苺茶だよ。美味しいよ」

といいながら、ラムザは墓標に薄紅色の香草茶ハーブティーを注ぐ。

「おい、バカ！」

「え？」

「染みになるぞ、これは。親父さんは苺茶なんて飲まなかったろ。ファティマ小母さんがここに一緒に入ってるのは、秘密なんだろう？」

「そうだった……。雑巾借りてくるよ」

ラムザが寺務所に戻る間に、ディリータはお絞りで墓石を拭いた。

（随分白いな……。消毒したみたいに真っ新だ）

草いきれの立ち上る夏の盛りなのに、苔もカビも生えていない。誰か酒でもかけたらうか。バルバネスは生前、さほど酒が好きな方でも、強い方でもなかったが……。

（……、！？）

ディリータは改めて周囲を見回した。

気のせいではない。

（この墓の周りだけ、比較的頻繁に掃除されているんだ）

百姓の子であるディリータの観察眼は、雑草の生え方の差を見分けていた。

ある程度草丈が高くなってから地上部分だけむしり取っても、地中に残った根からすぐに次の葉が伸びてくる。芽のうちに小まめに根から摘み取っておれば、新たに種から生えてくる草はそう簡単に大きくならない。

ある時点で一斉に草取りしても、一定期間後に生い茂る草の量や種類が異なるのだ。

（……。考えすぎだろうか）

世話になった領主だから、自然、供養が念入りになるのかもしれない。ラムザを霊園に入れたがらなかったのも、ただ、彼が神経質なのかもしれない……。

とりとめもなく思案しながら、ディリータは墓石を上から下へ拭いていった。その手が、基壇と地面の隙間から生えている小さなキノコにぶつかる。

ディリータは、焼けた火挟みに触れたように、反射的に手を引ッ

込めた。

——触っちゃ駄目！

幼い頃聞いたファティマの声が、きつく抱き寄せられた時の手と胸の感触と共に、甦った。

——屍毒茸よ。
モスフングス

腕白坊主のラムザとディリータは、ある日、鳥脅しのために畑の横に吊られた鴉の死骸から、何本も奇妙なキノコが生えているのを見つけた。おっかなびっくり、棒でつついて胞子を吐き出させていると、ファティマが慌てて飛んできたのだった。

屍毒茸は、動物の死体にだけ生える、微毒性のキノコである。呼吸器から胞子を吸引すると急性の毒性を示すが、といっても、人間なら目眩や吐き気を催す程度だ。また、慢性的に摂食した場合には徐々に内臓を蝕まれる。小動物や幼児、老人だと、体が弱って他の病気の誘因となる……という。

モスフングス
(屍毒茸が、何故ここに生える！？)

注意深く探せば芝生や雑草の中に、まだ小指の先くらいの寸法のキノコが、そこかしこで顔を覗かせている。

モスフングス
屍毒茸の繁殖力は弱い。死肉を食べる動物の口や爪に付着して、他の死骸に運ばれたり、その動物自身が死んで苗床となったりする。丁寧に棺に納められた遺体に、外から菌糸が入り込むことはまずあり得ない。墓から屍毒茸が生えるのは、埋葬された時既に、遺体がたつぷりと菌糸・胞子に汚染されていたということ——。

(毒殺……！？)

寄る年波に、最愛の伴侶を失った悲しみが加わって、体調を崩した。

誰もがそう思っていた。ディリータも、バルバネス本人さえも。

だが、実は——？

バルバネスの健康に気を配るファティマがいなくなったから、毒を盛り始めた……！？

(そんなことの出来る人間といったら！)

屍毒茸^{モスフングス}は、一名”三年殺しの毒”と呼ばれる。

繰り返し服用するうちに、数ヶ月から数年かけて、頭痛や食欲不振、微熱などの体調不良を示しながら徐々に衰弱してゆき、最後には伝染病や肺炎を患って不自然なく”病死”する。

死の直前には毒を盛るのを止めても病が進行し、残った孢子が体外に排出されてしまえば砒素のように死後に検出されることもないので、毒殺の証拠を残さずに済むという”利点^{メリット}”があるのだ。

だが、屍毒茸^{モスフングス}で人を殺そうとすれば、長期に渡って身近で世話をするふりをしつつ毒を盛り続けなければならない。その陰惨な印象^{イメージ}から、幾つもの怪談や復讐譚の素材となっている。

毒に詳しいダイスダーグの目を盗んで、誰がバルバネスを毒殺し得ただろう？ 当のダイスダーグを除いては……！

（まさか……、まさか……！）

すうっと周りが薄暗く、肌寒くなったように感じ、デイリータは墓標に寄り掛かった。

いくら何でも、デイリータの思い違いではないのか？

あるいは、誰かを——それこそダイスダーグを陥れるために、バルバネスの死後に仕組まれた罠ではないのか。しかしそれならば、仕組んだ者が”証拠”を暴き立てて騒ぎ出してもよい頃だ。

バルバネスは末期には肺炎を起こしており、それ以上手を加えずとも長くは保たなかったはずだ。毒を体内に残すようなヘマを、ダイスダーグが踏むだろうか。

（いや、そうか！あの時……）

バルバネスの死から二日前の、夜のことだ。

アルマがオーボンヌ修道院から戻った頃、バルバネスはもはや食事を飲み下せないほど弱っており、意識のはっきりしない状態が続いていた。

アルマは旅装を解くなり、午後からずっと父の病床に付き添って、湯たんぽを入れ替えたり胸に湿布を貼ったり、甲斐甲斐しく介抱し

た。

——まだ、今にもというほどではないから。

と休ませようとしても、頑なに側を離れず、夕食も寝台ベッドの脇で摂った。気の済むようにさせてやろうと、ディリータはアルマのための簡易寝台ベッドを病室に運び込んだ。

日が暮れて冷え込みが厳しくなったが、暖炉の火を強くすると、バルバネスの乾いた唇から噎れた咳が漏れた。

「そうだ、お薬湯を差し上げましょうね」

アルマは勝手知ったる薬筆筒の引き出しを開けたが、
「あら！こんな時に切らしてるなんて……。とっておいて良かったわ」

と、夏に帰省した時に持ち帰ったらしい粉薬を一包巾着ポーチから取り出して、ぬるま湯に溶いた。

口移しに、喉を湿す程度に一口薬湯を含ませると、バルバネスは弱々しく首を振り、聞き取れるかどうかの声で呟いた。

「……よしてくれ……。……マ」

プリマ、とバルバネスは長姉の名を呼んだようである。

アルマの目に涙がにじんだ。

「お飲みなさいって。好き嫌いなさつてると、長生き出来ないわよ」
怒ったように言い、もう一口薬湯を飲ませる。

どこかで聞いたような台詞に、バルバネスは目蓋を開き、蠟燭の明かりの中に白く浮かぶ顔に目を凝らそうとした。

「ファティマ……？」

震える骨張った手を取り、アルマは自分の頬に押し当てた。

「おお、アルマ……。アルマか……」

「そうよ、お父様。帰ってきたのよ」

バルバネスは愛おしそうに目を細めた。

「美人になったなあ……。母さんそっくりだ。男どもが放っておかんだろう。好きな人は出来たか、ん？」

「出来るわけないでしょ！修道院にいるのよ。周り中、お坊さんし

かないんだから」

アルマは明るく笑ったつもりだったが、目尻から涙がこぼれた。

「そうだった、は、は……」

力無く笑って、バルバネスはまた咳き込んだ。

「もう、修道院には、戻らなくていい。ずっと家にいなさい……」

「ええ、ずっとお父様の側にいて、お世話して差し上げるわよ。でも、街に住んだって、ラムザ兄さんより格好いい人にはなかなか会えそうにないわ。わたしの花嫁姿が見られるのはまだまだ先よ」

「そうか……」

「そうよ。そのためにも、まずはお体を治して、ね？」

「……うむ」

アルマが差し出す薬湯を、バルバネスはゆっくりと時間をかけて、残さず飲み干した……。

（皮肉……だな）

その翌日、バルバネスの容態は一気に悪化した。恐らくあの一杯の薬湯が、バルバネスの死期を早めた代わり、死後に”何者か”の悪事を告発する役目を果たしたのだろう。

（そういえば……）

ファティマの二人の子供達は、父の臨終の間際まで実家に呼び戻されなかった。手紙が行き違ったり、使者が足止めを食ったりして、延び延びになっていたのだ。

——誰か愚か者めが足を引っ張りおったな。

と、ザルバグは見ていた。

ファティマの生んだ愛し子達に会えば、今際の際のバルバネスは感情的になって、彼らを依怙贖した遺言を残すかもしれない。……ラーグ公家とマリーソフィア寄りの家臣の誰かが、そう恐れたのだろうと。

だが、遺言は随分前から文書の形で用意されていた。ディリータも口述筆記で推敲に関わっており、土壇場になって内容が大幅に修

正されるとは考え難かった。

それよりも、バルバネスの死が毒殺であったとすれば。

ラムザとアルマも、母と長兄の影響で医薬に関心が深い。父の病床で懇ろに看病すれば異常に気付くかもしれないから、ダイスダグが遠ざけていたのか――？

（何故、わざわざ……！）

父殺しの大罪を犯さずとも、数年も待てばベオルブ家の家督はダイスダグの手に渡ったろうに。

バルバネスは四十代後半のうちから、

――頭の固くなった年寄りがいっまでも上に居座っておると、組織全体が柔軟性を失う。

と言って、様々な権限を後進の部下達、息子達に譲り渡すようにしていた。

後はラムザとアルマの将来の道筋――特に、縁談――さえ整えてやれば、政治のことはダイスダグに、軍事のことはザルバッグに任せて早々に引退するつもりだと、周囲に意思表示していたのに……。

逆に、それこそが最大の難点^{ネック}だったということだろうか。ラムザとアルマの身の振り方は、王位継承問題とも密接に絡んでくる。まだ弟と妹が子供のうちに、管理下に置いて手懐けたかったのかもしれない。

ファティマの死がきっかけだった可能性も、充分にあると思う。

元老院が余計な口出しをせず、初めからクロード伯ではなくラーグ公を総大将に任命しておれば。そして、軍事には素人の王が、クロード伯の言を容れてゼイレクレ川まで軍を撤退させることがなければ。ベスラ要塞奪還戦の必要は無く、ファティマを始めとする多くの捕虜達の犠牲を出すことも無かったのだ。

無能な王と廷臣達にも、そんな王にあくまでも忠義立てしようとする父にも、決定的に愛想を尽かしたのかもしれない。

（何てことだ！）

ディリータは指先大の屍毒茸^{モスフングス}を握り潰した。

ファティマの黄金色の髪の毛の束を胸に抱いて、安らかに眠っていたはずのバルバネスの亡骸が、土の下でおぞましい菌糸に覆われているのか。

バルバネスの体がすっかり干からびた骨と皮だけになるまで、もう何年かは、墓から屍毒茸^{モスフングス}が生え続けるだろう。

「ドラコニア伯爵の弟君ともあろうお方が、なさることではありません！」

墓守とラムザの話し声で、ディリータは我に返り、急いで手の平^{ヘンカチ}を手巾で拭った。

「いいじゃありませんか。生きている間にもよく、お風呂で父さんの背中流したりしてましたよ」
ラムザが水桶^{バケツ}を下げて歩いてくる。

ディリータは弁当を畳んだ。

「ラムザ。僕らは矢張り、お堂で休ませてもらおう。本来、その人の仕事なんだ。お任せしよう」

「そういうものかな？……じゃあ、お願いします」

ラムザの肩を押して墓標から離れながら、ディリータは心の中で固く誓った。

（お館様、ファティマ小母さん。ラムザは僕が守ります！）

ラムザの命を預かっている――。

ディリータの気負いを、ラムザは”過保護”だと思っている。だがディリータにとっては、少しも大袈裟な話ではなかった。

墓参りの後、イグロスの城下屋敷に戻ったディリータは、ラムザの長持の中を探った。

バルバネスの臨終の時、ラムザが着て帰った上着^{ポケット}。それきり城下屋敷に置きっ放しになっていたのを見つけて、衣^{ポケット}を調べると……、出てきた。アルマがバルバネスに最後に飲ませたのと同じ、粉薬の包みだ。

ディリータは、ラムザを迎えに行った時、彼が野原で父の薬湯の材料を集めているところだったのを覚えていた。参考のために持っていたのだろうか、風見草セルセタの束を懷に突っ込んだ時、ちらりと葉の包みらしきものが見えた記憶があったのだ。

ディリータは密かに薬包を士官学校の寮に持ち帰り、少量を水に溶いてネズミの死骸に塗ってみた。果たして、一週間ほどすると、薬を塗ったところを中心に屍毒茸モスフングスが生えてきた。

恐怖と興奮とで鳥肌が立った。ディリータはこの時、十五歳の少年が一人で抱えるには重大すぎる秘密の証拠を掴んでしまった。

さて、どうすればいい？何が出来る？……

まず少なくとも、ディリータが秘密を知ってしまったことを、ダイスダーグに気取けられてはならない。

口封じのために抹殺する――ほどダイスダーグは短絡的ではないだろうが。

ハールーシャの件もそうだが、当事者間では明白な事実でも、公的に立証するのは難しいからだ。

この薬を調合したのがダイスダーグであること、調合されたままの状態で保存されてきたことは、ディリータや、ラムザ兄妹ならば百も承知だ。が、部外者に対して、例えば後から誰かが屍毒茸モスフングスの胞子を混入させたのではないと証明することはほとんど不可能である。

バルバネスの墓を掘り返せば、遺体が屍毒茸モスフングスの菌糸に覆われていることは明らかとなる。が、それとても、”遺体が埋葬される時に屍毒茸モスフングスに汚染されていた”という事実を示すだけで、”バルバネスが長期に渡り屍毒茸モスフングスの毒を服用させられてきた”証拠とはならない。例えば、死の直前に一杯だけ毒入りの水を飲ませるとか、棺に花を納める時に屍毒茸モスフングスと一緒に入れるなどしただけでも、同じ結果になり得るのだ。

墓守に、ダイスダーグが屍毒茸モスフングスを綺麗に片付けるよう命令したことを証言させる？残念ながら、権力者がその気になれば、拷問や脅迫、買収などにより、いくらでも偽証がでっち上げられる時代だ。

法的に有罪とはならずとも、噂の火消しにはそれなりに手間暇がかかり、煩わしいだろうが、ダイスダーグにとってはそれだけのこと。”名誉毀損”だとして立場を危うくするのは、うっかり騒ぎ立てた者の方だと、よくわかつているはずだ。なまじ人を消すのは、かえって不審の目を向けられ、得策ではない。

ただ、殺されないまでも、疎んじられ、隙あらばラムザから引き離されるだろうことは間違いない。

それよりも、事に気付けば抹殺されかねないのは、ラムザの方だ。ラムザが真実を知れば、ポーカーフェイス何食わぬ顔で兄を慕い続ける演技など出来ないだろうし、しようもしないだろう。正面切って兄を非難し、対決する姿勢を取るのではないか。

ただの奉公人と違って、遠ざけるだけでは済まない。兄に対抗するだけの力を持ち得る立場にある者なのだ。

ダイスダーグにとってラムザは、大事な政治的駒だろうし、ファティマの忘れ形見でもあろう。が、それはアルマでも同じこと。大人しく操り人形にならぬならば、切り捨てるという選択肢も考えられる。

華奢な外見と優しい微笑みのために母親似の印象が強いラムザだが、中身は年々、父のバルバネスに似てきている。養子として支配下に置いたつもりでも、いずれ必ず、長兄の手には収まり切らなくなる日が来る。

その時、兄と袂を分かつことを躊躇うラムザに、ディリータは彼が父とかけがえのない友の仇であると教えてやることになるだろう。そして、二人で力を合わせてダイスダーグと対決することになるだろう。

その日まで――、秘密を守りつつ、ダイスダーグにも負けぬほどの知略を身に付けてゆかねば。

ディリータは深い溜め息を吐いた。

駄目だ。ディリータが付いていなければ、ラムザ一人ではダイス

ダークに敗れ去る危険性が高い。……だが、本当に悔しいのはそのことか？

ディリータは、バルバネスが秘蔵の末息子のために仕込んだ”置き土産”だ。

バルバネスが体調を崩し始めてから亡くなるまでの一年半余り、ディリータは小姓として常にバルバネスの側近くで雑用を務めてきた。その間にバルバネスは、素直すぎるラムザに教えるのは難しい、あるいは早過ぎる知識や知恵の数々を、ディリータに託したのだった。

バルバネスが五十年以上の人生の中で培ってきた、政治や軍事上の経験談なども折に触れて聞かされてきたし、城を訪れる騎士や商人、聖職者達との会談・会食にも同席した。ベオルブ家が所蔵する何百巻という兵書や歴史書、魔学書や、過去の行政記録なども読破した。

それらの内容を、優れた記憶力や理解力で貪欲に吸収してきたのである。

”知”の蓄積と継承が困難な時代のことだ。死亡率が高く、人口の半数近くは二十歳未満だったし、大人でも識字率は二、三割程度だ。人の移動範囲も狭く――噂話の広がるのは速いにしても――正確な情報は伝達されにくい。

ディリータは、当時の同年代の少年達の中では数万人に一人という水準の知恵者に育っていたろう。

士官学校の筆記試験アカデミーテストでは、目立ちすぎないように、わざと何カ所か間違えて成績を抑えているほどだ。全力を出せば、クレティアンのように全回首席になっている。

――ラムザを頼むぞ、ディリータ。あいつの本当の味方になってやれるのは、お前だけだ。……

”ベオルブ家に”仕える家臣達は忠誠故に、または不本意でも一族郎党のために、庶子であるラムザの敵に回ることもあるだろう。ディリータは、一切のしがらみを持たず”ラムザ個人に”忠節を

尽くす者として選ばれた。

しかし――。

バルバネスは、考えなかったのだろうか？主をも凌ぐ力を身に付けたディリータが、その力を自分自身のために振るってみたくなる可能性を。

バルバネスはラムザ同様、本質的に人が好すぎるのかもしれない。あるいは、生まれついて高い身分にあったために、かえって権力欲など持ったことがないからかもしれない。

無論、实际的に、ディリータがラムザから離反することはほとんどあり得ない。

知力は、それを具体化する権力や財力、武力と結び付いて初めて、現実世界を動かすことが出来るのだ。

ラムザ以上にディリータを信頼し、必要とし、しかも彼の力を活かせるだけの地位を持った人間など、そうそういるわけがない。

が、ある頃から、ディリータは自問せずにはおれなかった。

地位も金も要らない。ただ、もしもラムザの許にいる以上に、ディリータに思う存分力を振るう場が与えられるとしたら……、その誘惑に抗えるだろうか？

ダイスダーグを嫌悪し、警戒しながら、一種の憧れを感じてもいる。

ディリータは”禁じ手”に属する技術も教わっているのだ。バルバネスが巻き込まれた、巻き込まれかけた、あるいは見聞きした権謀術数の類なども説明されている。あくまでもラムザを罠に陥らせないため、なのであるが、積極的に敵を罠に陥れるために使えば――。

また、ベスラの戦いは、ディリータの心にも強い憤りを遺した。

国が危うい時に、民や兵の犠牲を顧みず、己の利益を守ることしか頭のない腐った廷臣ども。ラムザがドラコニア伯爵に、あるいは更に王になることがあれば――、

（こんな連中、自分がまとめて蹴落としてやりたい！！）

……いや。ラムザはそうはさせないだろう。

人にはそれぞれ隠れた事情や役割があり、”悪党”や”役立たず”として簡単に片付けてよい人間などいないのだと——罪を憎んで人を憎まず、なるべく穏健な解決策を取りたがるだろう。

人好きなラムザの理想を、デイリータも好もしく思うし、尊重したいとも思う。それでも時々、危険な独り善がりだろうと自戒しつつも、夢想することがある。

俺だったら……どんな手段を用いても……。

デイリータは頭を振って、起き上がった。

そつと寝台ベッドを脱け出し、隣の寝台ベッドで眠っているラムザの枕元に腰掛ける。

アカデミー

士官学校の寮でも時々、デイリータがこうしてラムザの寝顔を見守っているのを、ラムザも薄々気が付いていて、布団を掛け直してくれているのだろうと思っている。

——僕の世話ばかり焼いてて、お婿に行き遅れるよ。
と、デイリータの”過保護”をからかう。

だが、ラムザは寝相の悪い方ではない。随分奇妙な場所と格好でも眠れる特技はあるが、木の枝や韋駄鳥チヨコボの鞍の上で居眠りしていても落ちることはないし、掛け布団だって無意識のうちに自分で掛け直している。

窓の板戸の隙間から微かに差し込む篝火の明かりで、ぼんやりと輪郭のわかるラムザの首を、デイリータはすっぽりと両手で包んでみる。

これは、どうにも心が騒いで鎮まらない時の、儀式のようなものだ。

こうして文字通りラムザの命を手の中に握っていても、ラムザはぐっすりと安らかに眠りこけている。デイリータが自分に危害を加えることがあろうとは、露疑わずに。

矢っ張り、僕の力はラムザを守るためだけに使ってやろう。……

そう思い直し、ディリータは満足して手を離すのだ。

が、今日に限っては、ディリータはなかなかラムザの喉にかけた指を開くことが出来なかった。

（それも、もうお終いなのか……）

たとえ無事にティータを助け出せても、ディリータは金輪際ラムザの許を去り、何の変哲もない農民か傭兵として残りの人生を過ごすことになるのか。

そして、ラムザの行く末は――。

（……。お前は呑気だなあ）

こんな時でも、ラムザはよく食べ、よく眠る。

いや、呑気なのではなく、腹が据わっていると見た方がいいのか。戦の影響で、ラムザはかけがえの無い人を二人衝撃シヨツキンク的な形で失ったし、自らも命を落とした。それでも騎士の――戦いの道を進むと、決めた者なのだから。

幼年学校に入学した頃から、ラムザは喉が痛むと言って、口数が少なくなっていた。一年で背丈が※三寸カウ（※約九センチメートル）も伸びるほど成長著しく、ただでさえ心身共に不安定になりやすい時期だった。

ようやくハールーシャを亡くした喪失感から立ち直り、ディリータやオルキム師ら、ドラコニア城の人々から離れて暮らす生活にも慣れてきた矢先に、今度は母を失ったのだ。

聖母祭休暇の頃のラムザは、それでも、話し掛ければ微笑んだ。誰彼構わず当たり散らすぐらい、もっと荒れていてもおかしくはなかったと思うのだが。生来の人懐こさ故か、よく耐えていたというべきか――。

ただ流石に、自分から冗談を言うことも、声を立てて笑うこともなくなっていた。

そして、武術の稽古に打ち込む気迫が凄まじかった。

あの頃のラムザの太刀筋には、木剣でも本気の殺気を感じた。た

とえ一人でも鷗国軍を皆殺しにしてやりたい、ぐらいの。
オルダリーア

練習相手を務めるディリータやウェッジもよく怪我をさせられたし、ラムザ自身、無茶な体の使い方をして手首や肘の関節などを傷めることが多くなっていた。

かと思えば、自分の内側から湧き上がる凶暴な衝動を恐れ、困惑してもいるようで、礼拝堂で長いこと黙祷を捧げている姿もしょっちゅう見かけた。

——お兄ちゃんがお兄ちゃんでなくなってしまうそうで、怖い。と、アルマがディリータに不安をこぼしたことがある。

ディリータも心配だった。

誰にでも声を掛けて回るような気さくさ、優しさ、剣士を目指すだけの逞しさ、勇ましさが不思議な均衡を保って同居しているのが、ラムザの特徴だったのに。

このままでは、笑顔を失って猛々しいだけの復讐鬼と化すか、あるいは、戦のむごさに打ちひしがれて剣を持てなくなるか、どちらか一方の極端に流れてしまいそうな気がした。

(こんな時、ケルガー先生がいて下されば……)

と、思わずにはおれなかった。

ラムザ達の剣術指南役だったケルガー師は、前年の秋、長年行方不明だった家族の消息を掴んだと言って暇乞いし、それきり連絡がつかなくなっていた。

”無冠の勇者”と呼ばれた元剣豪でありながら、とぼけた好々爺然としていたケルガー師であれば、ラムザが今直面している葛藤ヒントに対しても何らかの示唆ヒントを持っていたかもしれないのに……。

月の明るい夜更け、ディリータは城の中庭で、寝付けないラムザが一心に剣の型稽古をしているのを見た。張り詰めた表情で、まるで見えない亡霊か妖精の戦士を相手に戦っているようだった。

何かに取り憑かれたように剣を振るい続けるラムザの様子に、薄気味悪くなったのだろうか。誰かが司祭のオルキムを呼んできたらしい。

「ラムザ様。もうお休み下さい」

「オルキム先生……」

「一度に沢山練習しても、早く大人になれるわけではありませんから」

「……」

「ああそうだ、礼拝堂に寄っていけませんか。よく眠れる香草茶ハーブティーを淹れて差し上げましょう。正月の間に、ファティマ様から教わったですよ」

「母さんの……」

ラムザはこつくりと頷いた。頬に月の雫が光ったように見えた。目が不自由なはずのオルキム師の方が、ラムザの肩を押して、夜の廊下を危なげなく歩いた……。

そんな状態のラムザに、剣術試合への招待がかかった。

「やめときなさいな。ゼーツタイに罠よ。イヤガラセよ！」

と、伯母のエストは出場に反対した。

「断れば怯懦の謗りを受けるでしょう。」武門の棟梁”ベオルブ家の名が廃ります」

「二重に勝ち目が無いわよ。」

わざわざバネスもダイちゃん達も留守の時を狙い澄ましてくるなんて、もう……。

恥かかせてやろうって魂胆がミエミエ。負けるとわかってる戦はしないのだって、兵法のうちだわよ？」

”剣の守護聖者”アドロメル祭日を記念して催される神前奉納試合で、参加資格は十五歳未満の騎士の子弟だという。このような年齢制限があると、一年の体格や経験の差が非常に大きい年頃のこと、挑戦者は実質十四歳の少年ばかりになる。まだ十二歳のラムザに声を掛けてくること自体に、底意が感じられる。

しかも、主催者である大修道院の司教は、名門貴族出身の厳格なミクロンド正教派だ。バルバネス率いる北天騎士団の、女性や外国出身者の起用など革新的な面を、階級秩序を乱すものとして日頃か

ら批判していた。

その上、ベスラ奪還戦におけるファティマの自己犠牲が民衆にも
てはやされていることも、苦々しく思っているらしい。女性に司祭
の資格を与えることや、司祭の結婚を認めること、また、末端の教
会でミクロン正教派と呂国旧教派ロマンダの祭祀習慣などが融合すること
に、墮落だとして警鐘を鳴らし続けてきたのだ。元々呂国旧教派ロマンダ修
道院の出身で、女性司祭で、結婚して子供もいるファティマが”聖
女”だなどともんでもない、というわけだ。

恐らく、司教の意を汲んだ審判はラムザに不利な判定をしてくる
だろう。

「父上と母さんの名誉に関わることなら、尚更退けません。判定
の必要がないくらい明白な勝ち方をすればいいのでしょう」

「出来るの？」

「やります」

エストは溜め息を吐いた。

「そう。それじゃ、何が何でも勝ちなさいよ」

ラムザは眉をひそめた。

「……伯母上のお言葉とは思われませんね」

それから、長椅子ソファの上で心細そうに飛猫モーグリの縫いぐるみを抱えて小
さくなっている妹に、微笑みかけた。

「大丈夫だよ、アルマ。僕は”鞘無き剣”つるぎにはならない。

ハル様と母さんを奪ったのは”戦”そのものだと思ってる。

僕は、早く戦場に出て鷗国軍オルダリーアをやっつけたいと思って、剣を練習
しているのじゃないよ。戦を終わらせるために、父上達のお役に立
てるようになりたいだけさ。

そこは、間違えないから」

ラムザは真っ直ぐに伯母を見つめる。

「母さんをバカにする人達を叩きのめしたいと、思うわけではあり
ません。

父上と母さんからもらったこの心と体が、騎士に相応しいものか

否か、実際にその目で見てほしいと思うだけです。……そして願わくば、相応しいと示したいのです」

エストは満足そうに笑った。

「ふふっ、わかってるじゃない。ごめんなさいねえ、試しちゃって」ヒラヒラと、羽根扇でラムザの鼻先をくすぐる。

「それでいいのよ。相手が汚い手を使ってきたって、こっちが同じ水準^{レベル}まで降りて泥仕合に付き合う必要なんか無いわ。不公平な判定をしたり、ネチネチ中傷したりする連中なんか、勝手に自分で自分の品位を落とすだけよ。

ただ正々堂々、今のアナタに出来る限りのことをなさい。そうすれば、勝っても負けても、アナタは必ず今より強くなれる」

エストは甥っ子の肩を力強く抱き締め、額に口付けした。

「ベオルブ家の男の子の心意気、見せておやりなさい！」

「はい……！」

試合当日、会場に付き添ったのはエストではなく、二番目の伯母のフローラだ。

「エストちゃんは一、怒りっぽくていけませーんわー」

というのが、その弁だった。

アルマもまだ気分が優れず、“モグちゃん”を手放せないような状態だったので、応援には行かず城で待つことになった。

「お兄ちゃん、頑張ってね」

出掛ける時、アルマは母の青い髪留め^{フアティマ}をラムザの手首にきつく巻いた。^{リボン}

宣言した通り、ラムザは判定の必要もない鮮やかな一本勝ちで勝ち進んだ。矢張り出場者の中では最年少で、体も小柄なラムザだったが、集中力が違った。

がむしやりに勝ちを拾いに行くような焦りや力みがなく、適度な緊張感と冷静な判断力を保っている。両親の名誉のためという気持ち^が、雑念を払ったのだろう。フローラと共に観戦しているディリ

ータの目から見ても、絶好調だった。

しかし、観客の反応の冷たさが、ひしひしとここは”敵地”なのだと感じさせる。

勝っても拍手はまばらだし、神前試合だから野次こそ飛ばないものの、どんなことにでもケチは付けられるという見本市のように、多種多様な陰口が囁き交わされる。

まずは定番の、容色しか取り柄のない妾の子が、よくものこのこと人前に顔を出せたものだ……ということに始まり。

（出て来なければ今頃、逃げたとか卑怯だとか言ってたんだろう。だから”可愛いだけ”じゃない実力を見せに来たんじゃないか）

母を亡くしたばかりだというのに落ち着き払ったものだ、薄情なのではないか。……

（動揺していれば、軟弱だとか言うくせに。だいたい、落ち込んでるはずだと思ったら、呼び付けるなよ）

勝負に懸ける執念が意地汚い、騎士らしい気品が無い。……

（騎士の品って何だ？ 試合なんだから、勝とうとするのが当たり前だろ。反則技を使ってるわけじゃなし。闘志^{ガッツ}が無くて騎士の子と言えるか！）

いつの間にか青筋を立てていたようだ。フローラがこちよこちよとこめかみをくすぐってきた。

（気にしなーい、気にしなーい）

という風に、にっこりと微笑みかけてくる。

声を立てない時のラムザの穏やかな笑い方は、ファティマよりもむしろフローラに似ているかもしれない、とディリータは気付いた。

（フローラ様って、生まれてから一度でもキレたことがあったらどうか？）

フローラが怒りの感情を母胎の中に置き忘れてきたために、次に生まれたエストが激情家になった、という冗談があるほどだ。

エストとアルマが来なくて正解だった、とディリータは思った。彼女らがこの場にいれば、とつくに舌戦による場外大乱闘が始まっ

ていたかもしれない。

奮闘の甲斐あって、ラムザはとうとう優勝までこぎ着けた。本人も、目指しはしても期待はしていなかった結果だろう。

（見たか。見たろう、ラムザの力を！）

ディリータも鼻が高かった。

ところが、最大の陥穽はこの後に待ち受けていたのである。

表彰式の段になって、審査員達がひそひそ話を始め、そもそも出場資格の無い者に優勝の栄冠を授けるわけにはゆかない、と言いついたのだ。

「あらあらー？この子は確かに、北天騎士団団長・バルバネスⅡベオルブの三男のラムザでーすわー。替え玉だとしても仰いますのー？」

「はて？ドラコニア伯のご嫡男は二人だけでは？奥方のマリーソフイア様は十五年以上も昔にお亡くなりのはずですし、金髪でもありませんでしたな」

ディリータは両手を拳に握り締め、立ち上がりかけた膝を押さえた。

（この期に及んで、そこをつついて来るかっ！？）

この当時、庶子は母の家系の人間と見なす慣例だった。つまり、ファティマをバルバネスの正式な妻と認めないならば、ラムザは平民の神官医クレリックの子ということになり、騎士の家の一員ではない。

招待状は少年達にではなく保護者に宛てて、該当する子弟を是非参加させられたし、と呼び掛ける形を取っていた。初めから、どうやっても入賞出来ない仕掛けがあったわけだ。エストは、ここまで見越していたのだろうか？

（大人げないにもほどがある！！）

五十年戦争末のこの頃、財力を背景バックに騎士と縁戚関係を結んだ商人の一部が、商売拡大のために政治や軍事に嘴を挟み、”人の命を金儲けの種にする”と非難を浴びていた。また、黒死病流行ペストのどさくさに紛れ、遺産の寄進などによって領地を増やし、信仰よりも利

殖の追求に熱心な聖職者達もいた。

身分階級を守り、騎士の職分は騎士に任せるべし、とする主張にも一面の正義はある。

だが、文句があるならば親に言えば良い。母の身分と、子が騎士に相応しい文武の修行を積んでいるかどうかとは、別の問題だ。

母を失ったばかりの傷心の子供を、わざわざ公衆の面前に引っぱり出して侮辱する必要がどこにある？ 出場資格を云々するのなら、本来は試合開始前に問い質すべきことだ。

「えーえ、ラムザはマリーソフィアの息子じゃありませんもの。でも、この子の母のファティマだって、神に誓ったバルバネスの妻でーすわー」

その、証は。

審査員長は、意地悪く訊ねてきた。

事故か事件か、バルバネスとファティマの結婚の儀式を執り行った司祭は、程なく火災のために亡くなり、二人の結婚を記録した文書も焼失した。祝福の場に立ち合った村人達は証言を惜しまないだろうが、公式な証明は失われているのである。

（そこまで知っていながら……！）

ディリータは齒ぎしりした。

だが、それに答えたのはフローラではなく、ラムザ本人だ。

声を荒げるでもなく、ラムザは自信たっぷりに微笑んだ。

「両親が神に誓って夫婦となり、互いに誠意を尽くしてきたことは、神がご存じです。」

僕が今日、全ての試合を正々堂々と戦って勝利したことも、神とこの場においでの皆様が御覧になったでしょう。その事実だけで充分です。栄冠による証をいただきたいとは思いません。

伯母上、参りましょう」

一礼して、あっさりと踵を返した。

フローラが、にっこりと優雅に会釈して、ラムザに続く。

ディリータも立ち上がり、ニッとラムザに笑いかけた。ラムザも

笑い返す。

悠々と胸を張って歩くラムザと肩を並べて、ディリータはざわめく会場を後にした。

「ラムザちゃん」

控え室に戻ると、フローラは甥っ子の肩を抱いた。

「伯母ちゃん、お母ちゃんにはねー、ラムザちゃんの頭に、いつでも勇者の冠が見えるわー。御覧なさいな……」

と、大きな鏡の前に連れて行く。

「お母様が下さった、光の冠！」

黄金色の髪に眩しい夏の日射しが躍って、豪華な冠のように光の輪を作っている。

「伯母上……、」

ラムザの表情がくしゃっと崩れた。泣くのかと思ったら、

「フローラ伯母上、大好きです！」

満面の笑顔で、ラムザは伯母を抱き締め、頬に口付けした。

「うふふ……」

フローラは、よしよし、とラムザの背中を撫でる。

コン、コン。

控え室の扉が打擲ノックされた。招き入れると、

「あらー？あなた、ローラント將軍のご長男のー……」

「レオンと申します。それから、僕は次男です。異母兄あにがおります」

兄のリュカオンとよく似た細面だが、レオンの方が目付きが柔らかい。

「御曹司、外はとても気持ちの良いお天気ですよ。もしお気が向くようでしたら、これから一緒に遠乗りに出掛けるのはいかがですか？」

扉が開いて、もう二人、少年達が入ってきた。一人は麵包パンや果物を詰め込んだ籠バスケットを、もう一人は葡萄酒ワインの瓶を抱えている。

「主役拔きの宴会なんぞ、つまらないからな。頭にカビの生えた大人のない所で、ゆっくり昼飯にしようぜ」

「まったく、勝ち負けに資格も何もあるか！」

繰り上げ一位から三位までの少年達が、昼食会以下の午後の行事を放り出して、集まってきたのだった。

「折角ですけど……」

と、ラムザは頭を掻いた。無論、断るわけではない。

「その量だと、僕一人で食べちゃいそうですから。もっと昼御飯を調達してから行きましょう」

少年達は目を丸くした。

「そうなのか？」

「でしたら、まず下町に寄りますよう。いい店の集まっている場所を、兄から教わっていますよ」

と、レオンが笑った。

「気を付けて行ってらっしゃーいなー。大人の方々には、あたくしから適当に御挨拶しておきまーすわー」

フローラはディリータに小遣いを渡して、手を振った。

「はい！行ってきます！」

ラムザはもう、年上の少年達と共に走り出していた。……

（お前はきつと、一人でも翔とんでいってしまおうんだろうな……）

背負うものさえ、重荷ではなく翼に変えて。

ディリータと離れて暮らした幼年学校時代、ラムザは、

——何か、隠し事が増えたね。

と拗ねた。

確かにディリータは、ラムザには話せないような情報や技術を獲得しつつあった。だが、それを言えばラムザの方もだろう。

あの時期を乗り越えたラムザは、表面上は以前にも増して明るく元気に、悪ノリもするようになった。が、その分、大きな悲しみや怒りの力を内に溜め込むようにもなったのだろう。恐らくはそれが、天性の人好きさに加えて、強く意志を支える柱に育っている。

——焼き餅なんか焼かなくなっちゃって……。

凶星だった。士官学校アカデミーの入学式の日、”ヤキを入れる”ために彼をおびき寄せたはずのガストンと、ラムザが仲良く肩を組んで街から帰ってきたのを見て、ディリータは激しく嫉妬した。

ガストンにではなく、ラムザに対してだ。

三年振りにラムザと起居を共にすることになったディリータは、身に付けてきた大人顔負けの知識と知恵を、これからラムザのために役立てるのだと意気込んでいた。

それなのに初日から、ほんの子供騙しに引っ掛かってラムザを一人で危険に晒させた上、彼の力を見せつけられてしまった。

ラムザはディリータの助けを借りずに、自力で事件を解決した。しかも、単に襲撃者達を撃退するのではなく、友に変えるという見事な結末で。

(……)

この先、ディリータがラムザの許を去ることで、彼がダイスダーグにいいように傀儡にされたり、抹殺されたりすれば悔しい。

だが、彼がディリータ抜きでもダイスダーグコントロールの制御をはね付け、新しい味方を作りつつ活躍するのを、片田舎で風の噂に聞きながら生きてゆくなど、それ以上に我慢ならないだろう。

それぐらいだったら、いっそ――。

(今すぐ、この手でくびり殺してやろうか)

一瞬、恋に狂った者のようなことを考え、ラムザの首にかけた指に思わず力がこもった。

その時。

「――！」

突然、ラムザはがばと跳ね起き、息が詰まるほどの力でディリータを寝台ベッドの上にねじ伏せた。

「……あれ？ディリータ？」

寝ぼけ眼を瞬かせて、ラムザは手を緩める。

「眠れなくても、横になってた方がいいよ。明日のために、疲れを取っておかなくちゃ」

ディリータの額に軽く口付けして、また布団に潜り込む。左手首に巻いたティータの髪留めにも口付けし、そっと右手で包み込むと、再びすやすやと寝息を立て始めた。

ディリータは自分の寝台ベッドに戻った。

動悸が治まらない。

(今……、俺は……!!)

戦士としてのラムザの勘が無意識の内に反応するほど、ディリータの発する”気”の性質は、彼の”友”のものではなくなっていたのだ。

ラムザが憎いわけではない。闇討ちにしたって面白くはない。

ただ、本気で彼と戦ってみたかった。根本的には、ラムザを通してしか自己実現出来ない身が、口惜しいのだ。

ラムザの一部となって、共に彼の戦いを戦うのではなく——だいたい、ラムザは彼自身の強い輝きを持っていて、ディリータの思惑には染まらない——、ラムザから独立し、彼をさえ競争相手として自分の戦いをしてみたい。

その渴きは所詮、ラムザの許に留まり続けても、募りこそすれ満たされるはずの無いものだった。

このまま、ディリータの道は閉ざされてしまうのだろうか。何か、何か方法はないのか？

(いや、待てよ?……そうか……、そうだな……)

暗い埋み火を胸に抱えて、ディリータは眠る……。

?—6—〔4〕 焰（ほむら） ?野心（後書き）

はー、しんどかった……。

一介の主婦がマキャベリスト達の超頭脳に迫ろうとするのは、無謀でしたわ。

この辺も、後から大幅に加筆（というより、削減）修正入りそうです。

ところで、ディリータのこの手の悩みは、後々まで続くでしょう。オヴェリアのために力を尽くすのも、愛なのか、野望なのか？ただ、『彼女のためなら、この命惜しくはない』というあのアツイ台詞は、秘密主義の彼には珍しい本音の吐露だろうと思っています。うん。動機はどうあれ、それもきつと立派な真実のうち。

さて、次回はどうとう、ケナゲ組筆頭・ティータが主役。

うわーん、いじらしすぎるよー！不憫すぎるよーっ！！

別の面でしんどいです……。

？－6－〔5〕　いつでも側に　？雪の日の決闘（前書き）

甘いんだか辛いんだか、よくわからん！ハバネロチョコレートな
エピソードを、二回（三回？）に分けてお送りいたします。

？―6―〔5〕 いつでも側に ？雪の日の決闘

――ティータ。ティータ……。

優しく呼ぶ声がする。

（……誰？放っておいて……。このまま、わたしを眠らせていて……）

目覚めることを恐れているティータに、聞き慣れた声がもう一度呼び掛けた。

「ティータってば」

そろそろと目蓋を開けると、まず目に飛び込んできたのは、いっぱい野の花の花束だった。

白詰草。蓮華草。タンポポ、ひな菊、忘れな草……。

「珍しいね。働き者のティータがお昼寝なんてさ。折角、花輪にしてもらう花を集めてきたのに」

「あ……」

木漏れ日に煌めく黄金色の髪。綿雲の浮かぶ青空よりも深い、碧い瞳。医者見習いの白衣を着た少年が、すぐ横に腰を下ろして、微笑んでいる。

ティータは跳ね起きて、その胸に飛び込んだ。

「ラムザ様！」

「へっ？うわーっ！」

二人は草地の斜面に倒れて、転がった。花が散らばり、降ってくる。

「ご、ごめんなさい……」

ティータは体を起こし、きよろきよろと辺りを見回した。

（ここは……）

マンダレーナ村を一望出来る丘の上に立つ、櫟オークの大木の下だった。

緩やかな丘陵地に、そよ風が緑の波をうねらせている。羊や牛達のがんびりと草を食み、群れからはぐれそうになる子羊を、犬が吠

え立てて追いつく。

共有林からは山鳩やカヅコウのくぐもった声が響き、集落の方角からは豚や鶏の鳴き声が聞こえる。

丘の麓には濃淡の緑の継ぎ接ぎ模様が出来ていた。春時き小麦と牧草の草丈が伸び始め、休耕地には色とりどりの野の花が咲いて、蜜蜂や蝶が飛び回っている。野菜畑や、林檎の果樹園も見えた。

石積みを漆喰で塗り固めた壁に、瓦葺きの屋根の農家の間で、教会の鐘楼は頭一つ飛び抜けて目立っている。合鴨が泳ぐ水路の下流には溜め池の養魚池があり、粉挽き小屋の水車が軋みながらゆっくりと回っていた。

「……」

物心ついた頃から変わり映えのしない、故郷の風景に、何故か涙が溢れた。

「どうしたの、ティータ」

ラムザがティータの髪や服から、花と枯れ草を払う。

「怖い……怖い夢を見ていたの……」

ティータは顔を覆った。

「夢？……どんな？」

「わからない。覚えてないわ。思い出したくもない……」
身震いして、ティータは激しく頭を振った。

「ただの夢だよ。怯えなくていい」

ラムザはティータの肩を抱き寄せ、安心させるように撫で付けた。

（ああ良かった、本当に……。夢で……）

ティータは頷いて、涙を拭いた。

「ラムザ様……」

ラムザは笑った。

「何だい、畏まって？」ラムザ兄さん”でいいよ」

そうだ。ラムザは隣の家に住む、陽気で親切な、幼馴染みのお兄さん。……他の何だというのだろうか？

小さい頃には、花冠を編んでお嫁さんごっこをしたこともあった

つけ。

イヴァリース

この当時、畏国の農村の結婚式では、花婿が花嫁を実家まで迎えに行き、門の前で花冠を交換する習わしだった。

——妹はお嫁さんにはなれないんだよ。

——ごっこだからいいの！

——ごっこでもおかしいって。

親友のアルマは大のお兄ちゃんっ子で、いつもラムザを独り占めしたがるけれど、あの時は渋々ながら花嫁さんの役を譲ってくれた。ラムザが編んだ花冠は、ひどく曲がっていて不格好で、今にも壊れそうだった。それでもティータは嬉しくて、その日は家に帰ってからもずっと、布団に入るまで大事に花冠を被っていた。

——母さん、母さん。ティータね、大きくなったら、ラムザお兄ちゃんのお嫁さんになりたいな。

——まあ……。残念だけど、それは無理よ。だって、ラムザ坊ちゃんまは……。

……母は何と言ったろう？五歳の時に亡くした母の顔も声も、もうおぼろげにしか思い出せない。

（どうして、いけないのだったかしら？）

確かに、ラムザの家は特別だ。周りの農家と違って、母のファテイマは近隣の村々の中でも唯一人の医者なのだ。

小麦や野菜ではなく、薬草を育てなければならぬし、乳酪バターを作ったり羊毛や麻糸を紡いだりする代わりに、煎じ薬や軟膏や、薬用石けんを作らなければならないだろう。

けれども、ティータは細かな手作業は得意だ。そのぐらいは覚える自信がある。

ラムザはとんでもなく手先が不器用で、ティータの仕事が丁寧で速いと、いつも感心してくれる。色々と手伝えば、喜んでもらえると思う。

焼き餅焼きのアルマは所詮、妹だ。

何を遠慮する必要があるのだろうか？細いけれど逞しい腕が、しっ

かりとティータを包み込んでくれているのに。

「ラムザ兄さん……」

ティータはもう一度、今度はそうっとラムザの胸に寄り掛かり、大きく息を吸い込んだ。

香草の芳香剤と、石けんの匂いがある。この匂いも、ティータは好きだった。爽やかで、すうっと気持ちが悪く落ち着く。

……はずなのに、何故だろう。今日はぞわぞわと寒気がして、不安に胸が締め付けられる。暖かな春の日射しを浴びて、一番好きな人の腕の中にいるのに。

「怖い……。まだ、怖いの……」

「どうしたんだい、本当に？ 変だよ、ティータ」

「わたし、どこも変なんかじゃないわ！」

むきになって言い返す自分を、我ながら変だとティータも思った。何か、何か嫌なことを思い出してしまいそうな気がする。全てを決定的に壊してしまう、何かを。

「ラムザ兄さん、側にいて……。お願い……」

ティータはラムザの背中に両腕を回して、ぎゅうっと縋り付いた。

「大丈夫だよ。何も心配いらない。僕は、いつでも側にいるよ……」

ラムザは心強く請け合った。剣だこのある、固くて温かい手がティータの頬に触れる。

剣だこ？

ラムザは医者の子だ。どうして、たこが出来るほど剣を練習する必要など……？

しかし、余計な思考は追い払われた。重ね合わされた唇から、じんわりと幸福感が広がってティータを満たす。

面映ゆくなって、ティータは目を閉じた。

ああ。こんな風に優しく口付けしてくれる男性を、他に知らない。
(……え！？)

ざらりと、胸の内にヤスリを押し当てられたような気がした。

他に誰がいるというのか。

父や、実の兄のディリータであるはずはない。ティータの家では、家族同士で唇に口付けする習慣は無い。考えられるとすれば、ラムザの家族のファティマとアルマぐらいだが、彼女達の唇はもっと小さく柔らかくて……。

悪寒が恐怖に変わる。目蓋の裏に差していた、明るい春の光が遠ざかる。

——、そこにあるはずの人の姿を、風景を確かめたくて、目を開けると

「……」

暗い、廃寺の中だった。

真夜中というより、もう明け方に近い時刻だろう。遅く上った月の光が、鎧戸の壊れた窓から細く差し込んでいた。

ティータは、冷たく固い木の床に横倒しに転がっていた。

肌寒いと思ったら、服が破かれ、両肩から薄い胸までむき出しになっている。

慌てて前をかき合わせようとすると、手首に縄が食い込んだ。後ろ手に縛られて、縄の端は柱に括り付けられているのだ。

首を振って顔を背けると、周りで眠りこけている薄汚れた、疲れ果てた男達の姿が目飛び込んできた。

ティータは怯えて目を逸らそうとしたが、視線の遣り場がどこにもなく、体を丸めてぎゅっと目を瞑った。

これは、悪い夢だ。

もう一度眠れば、きっとまた、懐かしいマンダレーナ村の丘の上で目を覚ます。すぐ隣に、大好きな幼馴染みがいて、取り越し苦労だと笑ってくれる。

だって、頼もしい腕の温もりも、清々しい香草と石けんの香りも、ついさっきまでそこに感じられたではないか。

……そう信じたかったのだが、胸のむかつくような、すえた生臭

いにおいが否応なく鼻をついた。

それがもう、自分の服や体に染み付いたものと気付いて、吐き気がこみ上げてきたが、吐くようなものは何もなかった。とつくに空腹感も限度を超え、胃液さえも残っていないらしい。

枯れたはずの涙が、こぼれ落ちた。

(ひどい、ひどい、ひどい……)

王子様の接吻^{キス}で、悪夢よりも悪い現実が目覚めるなんて。

束の間幸せな夢を見たために、気が緩んだのだろう。麻痺していた柔らかい感情や感覚が戻り、ずきずきと痛む。

寒い。体がだるくて、重い。骨や節々が軋んで悲鳴を上げているようだし、肌の表面のあちらこちらがひりひりする。服にも髪にも、泥や血や様々な汚れがこびり付き、ごわごわして気持ち悪い。

ずっと嘔まされている手拭いが唾液を吸うのか、口の中も喉もカラカラに乾いていた。

猿ぐつわを外すと、舌を嚙んで死んでしまうかもしれないというので――実際何度、そうしたいと思ったことか――麺^{パン}麭や干し肉などの固形物は与えられず、水か、時々酒や山羊の乳を飲まされただけだった。

骸旅団の残党によってベオルブ邸から誘拐されて、もうすぐ丸四日になる。体力の消耗が激しく、目に見えてやつれて、みすばらしい格好になっていると思う。

あまりにも日常からかけ離れた、現実味のない四日間だった。

あの春の野原にいる方が現実だということは、本当にあり得ないのだろうか？

儚い期待を持ってもう一度目を開けると、半分欠けた翼に蜘蛛の巣のかかった、大天使の像が月明かりの中に佇んでいた。その微笑は、今のティータの目には悪魔^{ルカザイ}よりも無慈悲に、醜悪に映った。

日暮れ時にこの廃寺に辿り着いてから、ティータが男達の荒々しい手に押さえ込まれ、出せない声で救いを求めて叫び続けているのを、この石の微笑みは黙って見下ろしてきた。

(……)

神に祈る言葉は、もう無い。

ほんの少し前まではその身を案じて思い浮かべていた面影だけに、今は逆にすがるうとしている。

(ラムザ様……。ディリータ兄さん……。早く、早く助けに来て……)

最前夢に見た笑顔が思い出されて、また熱い涙が流れた。

(ううん、来ないで！もう、”わたし”はいないの……)

ここに転がっているのが、彼らが愛おしんでくれたかつての自分と同じ人間だとは、とても思われない。惨めな”残骸”を見つけて絶望されるのは、死ぬよりもっと辛い。

(……寒い……)

すぐそこに、ティータに掛けられていたはずの毛布がある。何とか体を動かせば、被り直せないことはなさそうだが、努力してみる気にならない。

このまま体温を失って、凍え死んでしまえばいい。

……そう思っているはずなのに、迷うのは何故だろう？

もっと決定的な瞬間は、何度もあった。

今この谷底に飛び降りれば。もう一步だけ前に出て剣に身をさらせば。”逃げる”ことは出来なくても、”死ぬ”ことは出来るチャンス機会なら、度々訪れた。

けれどもその度に、一つの思いが土壇場でティータを踏み止まらせてきた。

望みなど持たない方がいいと、これ以上傷付きたくないと思っ
ているのに。それでも、どうしても願わずにはおれない。

もう一度、一目でいいから彼に会いたいと――。

あの日も寒かった。

灰色の空から、雪がちらついていた。

息を切らせて外廊下を走ってきたティータは、中庭にラムザの姿

を見つけた。

ドラコニア城には、三つの大きな中庭がある。建造された当初、城は中央の四角い主塔だけだった。そこにまず、正方形に城壁が拡張され、更に時代が下ってから、左右に張り出すような形で城壁や円筒状の塔が付け足されていた。丘の上に竜が翼を広げているような、雄大で堂々とした姿が、”白竜城””臥竜城”と美称される所以である。

イルグリス川に面した北側を背面とすると、丘はやや左上がりだ。ティータ達が今いるのは、裏門に続く”上の庭”^{アップーヤード}である。

ラムザは刃引きの模造剣・ナグラロクで素振りをしていた。ケルガー師も去り、^{オルタリーア}鷗国との戦況が悪化して騎士達が多忙な中、こうして一人で自主練習する時間が増えていた。

「ラムザ様！」

ティータは無我夢中で、ラムザの背中にしがみついた。

「助けてっ……助けて下さい！」

「えっ？どうしたの？」

”奉公人”が取って良い態度でないのはわかっていた。だが、他にどうすればいいかわからなかった。

アルマはこの頃、小さなクラブ・ティン修道院で学べることは一通り習得し、国内有数の大図書館のあるオーボンヌ修道院に移っていた。ティータはしばしアルマとは離れ、ドラコニア城とイグーロスの城下屋敷で行儀見習いをするようになっていた。

ティータを追って、それなりの身分ある貴族の従者と思われる少年が二人、駆けてきた。兄弟か、従兄弟程度に顔立ちが似ている。

年上の方の少年が、横柄にラムザを睨んだ。

「おい、そいつをこっちに渡せ」

ラムザは模造剣を鞘に収め、両腕を広げてティータを背に庇った。

「ティータが何か、失礼でも？」

「ああ。そいつは、マルトー様にお怪我をさせて逃げたんだ」

「マルトー様？ザルバツグ兄さんの従弟の？」

ダイスダークとザルバッグの母・マリーソフィアの末の妹が、王族に嫁いでいた。その一人息子だ。

「ザルバッグ……兄さん？」

「あ、申し遅れました。僕はラムザ。ドラコニア城主・バルバネスⅡベオルブの三男です」

「え……」

少年達は呆気にとられて顔を見合わせ、それから慌てて敬礼した。

「こちらこそ、御無礼いたしました。お許し下さい」

ラムザはティータを振り返った。

「ティータ、どういうこと？」

ティータは首を横に振った。

「わたし、前の女中頭^{メイド}さんのお家に、お見舞いの葡萄酒とお菓子をお届けに上がるところだったんです。廊下を歩いていたら急に、その、マルトー様に籠^{バスケット}を取り上げられてしまって……。ちよつと遊んでくれたら返す、っておっしゃるから、客室まで付いて行っただけですけど……そしたら、あの……」

ティータは口籠もった。

外出するはずだったティータが、外套や帽子等の防寒着を全く身に着けていない上に、上着の背中^{ボタン}の釦が二つ外れていることは、ラムザもすぐに気付いたようだ。

「……成る程ね。だいたい、事情はわかったよ」

ラムザは頷いて、従者の少年達の方に向き直った。

「僕と一緒に伺いましょう。案内して下さい」

「あ……、はい」

ラムザは頼もしく微笑んだ。

「おいで、ティータ。心配いらないよ」

しっかりとティータの手を引いて、ラムザは少年達の後について行った。

「何だい？そのチビは」

暖炉の前の肘掛け椅子に、優雅に足を組んで座っていた少年は、形の良い細い眉をひそめた。

肖像画でしか見たことのないマリーソフィアによく似て、ほっそりとした優しげな顔立ちの――しかし、どこか冷たい感じのする少年だ。ラムザよりも二、三歳年上だろうか。

「城主・バルバネスの三男、ラムザと申します。お会い出来て嬉しいです、マルトー様」

「ああ……、君のことか。ザルバッグあに従兄上あにが随分目をかけてるって話だけど……ふうん……」

年末年始の、客の多い時期だった。その日も朝から、マルトー達の家族を始め、何組かの客がドラコニア城に到着していた。が、正式な挨拶は、外出中のザルバッグが帰ってから、順にして回る事になっていったのだった。

「それで、何の用？」

マルトーはつまらなさそうに訊いた。

「マルトー様、ティータは……この子は用事の途中なんです。ティータと遊びたいのでしたら、城の者にお申し付け下されば、後でちゃんとマルトー様の客室の係にしてもらうことも出来ると思いますよ。今は、荷物を返してやって下さい。困らせないでやって下さい」

マルトーは首を傾げた。肩の高さで切り揃えられた、黒に近い焦げ茶色の髪が、さらりと流れる。

「何のこと？その子に会うのは初めてだけど？」

「えっ……」

ティータは言葉を失った。

ラムザも怪訝な顔をした。

「そうなのですか？でも彼らは、ティータがマルトー様に御無礼を働いたと言って追いかけて来たのですけど……」

「ああ、ケ빈はそそっかしいから。また何か、勘違いして先走ったのかな？困るなあ」

ケビンと呼ばれた少年は、すぐに頭を下げた。

「申し訳ありません」

ティータは、すうっと血の気が引く思いがした。

この端整な容姿の少年は、平然と嘘を吐くことに慣れている。そして従者の少年達は、突然あっさりと主人に切り捨てられることに慣れているのだ。

「どうなの、ティータ？」

ティータは懸命に訴えた。

「わたし、確かにこの部屋に呼ばれて来ました！バスケットマント籠と外套と、手袋がその長持に入っています」

マルトーは長持の鍵を外し、蓋を開けてみせた。

「僕のものしか入ってないよ。ほら」

「……！」

ティータは青ざめた。が、ラムザは落ち着いている。

「今、戻ってくるまでの間に、別の場所に移すことも出来ましたよね」

「失礼だな、君は。証拠もなしに、初対面の客を疑うのかい？」

「ティータを信じているだけです。それに、マルトー様……ティータが負わせたお怪我というのは、それですか？」

と、ラムザは自分の唇を指差した。

マルトーの唇の端に、薄く血がにじんでいる。

「ああ、これ？さっき階段で転んで、噛んだのさ」

マルトーはしれっと言ったが、ラムザは冷静に指摘した。

「マルトー様。御自分の下唇を、下の歯では噛めないでしょう」

「！」

小さな歯型は、下から上に突き刺さる形で付いているのだ。

「……君はなかなか、利口みたいだな。でも、賢明とは言えないね」

マルトーは、ぺろりと唇を舐めた。

「わからない？僕の父は王族なんだよ。証拠があるが無かろうが、召使いの小娘の言葉なんかが通ると思う？」

ラムザは頭を振った。

「わかりません。どうして、マルトー様が嘘を吐こうとなさるのか。……ティータとしようとしていた遊びって、人に知られたくない種類のものなんですか？」

それは、ティータも気になっていた。漠然と不安を感じて逃げ出してきたけれど、実の所、マルトーは何をしようとしていたのだろうか？

「あの、正直に話して下さい、ティータに荷物を返して下さいなら、秘密は守りますよ。僕だって、内緒で城下に遊びに行ったりして、何度も兄さんに叱られてる身ですから……」

あ、そうだ。ご相談いただければ、退屈な時に街を案内して差し上げてもいいですよ！城に呼ばれるほどの身分じゃない辻楽師や大道芸人さん達とか、口上の面白い飴細工売りの小父さんとか、色々知り合いがいるんです。

そうそう、枕投げも腕に覚えがありますよ。後で勝負しましょうか？」

マルトーは鼻先で笑った。

「やれやれ、本っ当に子供だな」

「……??それは確かに、マルトー様よりは大分子供ですけど……」

「とにかく、無いったら無いんだって。無いものは返してあげようがないな」

と、マルトーは手の甲で追い払うような仕草をした。

「マルトー様……。どうしてですか？本当に、ザルバッグ兄さんや、マルトー様のお父上に言い付けたりしませんって。」

僕、マルトー様にお会いするの、楽しみにしてたんですよ。ザルバッグ兄さんと仲がいいって聞いてましたから。僕もザルバッグ兄さんが好きだから、きつといいお友達になれるだろうと思って……。ティータだって、よく気の付く、とってもいい子なんです。

正直に返して下さい、この先気持ち良くお付き合い出来て、この城での滞在がもっともって快適なものになると思うんですけど。

こういうことで仲良くなれないなんて、すごく残念です」

マルトーは端整な顔をしかめ、苛々した口調で言った。

「僕はちつとも、残念だとは思わないね！大っ嫌いなんだよ。簡単に人を信じられる奴なんてさ」

ラムザも、悲しげに眉をひそめた。

「寂しいことをおっしゃいますね……」

伯母が言っていました。

嘘を吐くことの本当の怖さは、人から信じられなくなることじゃない。人を信じられなくなることだ、って。

他人も嘘を吐いているのじゃないかと疑心暗鬼になって、信じていい人を遠ざけてしまつて。嘘を吐く自分自身にも誇りが持てなくなつて、自分で自分を独りぼっちにしてしまう……って。

こういう意味だか、わからなかつたんですけど……少し、わかつた気がします」

マルトーは肘掛け椅子から立ち上がった。

「生意気だな！じゃあ……見せてもらおうかな。信じることが、どこまで力になるものなのか」

と、壁に掛けていた剣を取る。

「今から、勝負しないかい。君が勝ったら、好きなようにこの部屋の中を探せばいいよ。目当ての物が見つかるかどうかは、わからないけどね」

「むやみに物事の決着を剣に委ねるのは……、」

言いかけたラムザに、マルトーは革手袋を投げつけてきた。

「達者なのは口先だけかい？妾の子の体には、ベオルブ家の勇気の血は流れていないのかな」

「……。わかりました、仕方ありません。見えない”心”に力を与えて”形”にするのが、騎士の役目ですよね」

ラムザはマルトーに続き、雪の舞う中庭に降りた。

乾いた芝生に、うっすらと雪が積もり始めている。

吐く息が、煙のように白くたなびく。

ラムザとマルトーは向かい合い、十歩分ほど離れて、互いに練習用の刃引きの剣を抜いた。

ティータはハラハラしながら、祈るように両手を組んで見守った。

「いつでも、どうぞ」

ラムザが静かに言うが早いか、マルトーが仕掛けた。

速い。が――、

ディンッ！

「――！！」

一瞬後には、ラムザの剣の切っ先がマルトーの顎の下に突き付けられていた。

相手の攻撃を受け流し、あるいは弾き返しつつ、その動作を反撃につなげる。ケルガー師仕込みの返し必殺技、”ハメド 嵌め取り”だ。

挑発に乗せられたことに気付いたマルトーは、苦々しそうに舌打ちし、数歩下がってラムザの剣を弾いた。

「一本勝負だとは言ってないよ！」

「どっちかが負けを認めるまで、根比べってことですか？その方がすっきりしますね！」

改めて間合いを取り、互いに剣を構え直す。

今度は、マルトーに慢心は無い。

突き技を主体に、打ち込んでは素早く引き、ラムザに返し技を掛ける隙を与えない。

ラムザの方から踏み込んで攻撃に出ると、

「――！」

逆に、マルトーの反撃が極まりかけた。紙一重でかわしたが、切っ先にかすめられた上着の肩がほつれた。

(……！)

ティータには武術のことはよくわからないが、マルトーは相当に強い……というのか、ラムザにとって相性の悪い相手であるように見える。

華奢な体格のラムザにケルガー師は、なるべく自分の力を使わず、相手の力を有効活用する戦い方を教えた。気合いだけで力任せの太技を叩き付けてくるような相手ならば、かえって簡単に討ち取るこ
とが出来る。

が、マルトーの戦法はラムザに近いもののようなのだ。矢張り痩せ型で単純な筋力は強くない代わり、スピード速度重視で、多彩な技と手数で攻める戦型らしい。タイプ

技で拮抗しているならば、二歳ほどの年の差の分だけ、リーチ間合いや持久力などにおいてマルトーの方が有利なのではないか。

しかし……、

じりじりと足場を移動させていたマルトーの背中が、常緑樹の壁にぶつかった。瞬間、動きの止まったマルトーに、すかさずラムザが攻め込む。

マルトーはかわし、緑の葉が何枚か散った。

ここはラムザの本拠地だ。ホームグラウンド僅かな地面の傾斜や、植木や外廊下の支柱の位置なども、全て体で覚えている。地の利はラムザの方にあった。

差し引き、戦力は互角というところか。二人とも表情が険しい。緊迫した攻防が続く。やや、マルトーが攻めている時間が長いように思われる。

が、それを優勢と言えるかどうかは、ティータにはわからない。これまで何度も稽古や試合で見てきた通り、”受けて仕留める”のがラムザの基本の戦法なスタイルのだから。

やがて――。

「っ!!」

薄く積もった雪に、マルトーが足を滑らせた。

平らで障害物の無い、練兵場などで試合巧者なのは、マルトーの方だろう。だが、様々な場所や気象条件下での”喧嘩”に慣れているのは、ラムザの方だった。

機を逃さず、ラムザはマルトーの手から剣を弾き飛ばした。もう

一度、剣の切っ先をマルトーの喉に向ける。

「……」

マルトーはまだ、闘志を失っていない。

「ケビン。僕のもう一本の剣を」

ラムザから目を逸らさぬまま、従者の少年に呼び掛けた。

「マルトー様……、ですが」

ケビンは咎めるように言ったが、

「いいから、寄越せ！」

「……」

ケビンが差し出した剣を鞘から抜き、マルトーは一振りした。

立ち木の枯れ枝が一本、すぱりと斬り落とされる。

(……!!)

真剣だ。

それだけではない。

「ケビン、アイオン。お前達も来い」

「マルトー様……」

アイオンと呼ばれた年下の従者の少年も、ためらった。

「来い！」

「「……」」

気が進まぬ様子ながら、従者の少年達も剣の鞘を払う。こちらは、流石に刃引きの剣だ。

とは言え……。

ケビンはマルトーと同じ年か、若干年長のようだ。アイオンは二人よりは年下だが、それでも、ラムザと比べれば半年や一年は大きいだろう。

年上の少年三人を同時に相手取って――しかも、一人は真剣を持っているのに――いかに怠りなく剣術修行に励んできたラムザといえども、どこまで戦い抜けるだろうか？

「ティータ……だったっけ」

「は、はいっ？」

突然マルトーに声を掛けられて、ティータはびっくりと肩をすくめた。

「どうする？君の方が嘘を吐いてるって認めるなら、ここで止めておいてもいいけど」

ティータは考え込んでしまった。

(……どうしよう……)

見舞いの品は、堀に落としたとか、門前の物乞いに施したとも言えば、もう一度もらってくる事が出来るかもしれない。

外套と手袋は、大事に使ってきて愛着はあるけれど、新しい物を買えるぐらいの小遣いは持っている。

敢えて返してもらわなくてもいいのではないか。自分さえ我慢すれば、ラムザをこれ以上危険な目に遭わせなくて済む……。

だが。

「ティータ」

ラムザが、力強い声で確認した。

「ティータは嘘を吐いてないよね。本当のことを言ったんだよね」
迷いは吹き飛んだ。

「はい！信じて下さい」

ティータも、はっきりと大きな声で答えた。

「わかった。じゃあ大丈夫。僕は決して負けない」

ラムザは自信に満ちた笑顔を見せた。

剣の切っ先を柄に引っ掛けて、地面に落ちていたマルトーの模造剣を宙に跳ね上げ、左手に受け取る。

「見ていて」

(つづく)

？－6－〔5〕 いつでも側に ？雪の日の決闘（後書き）

ううー、出来れば避けて通りたかったです。でも、どう考えてもこの局面でティータが助かる要素が見いだせなくて……。

後はせめて、精神的な救いを描くことに心を砕くばかりです。

さておき。それなりに出番のある創作キャラも、やっつとこれではぼ出揃いました。

原作は、歴史物の定めか、おっちゃん率高い気がするんですよ。もっと華やぎ（女性）や活力（若者）が欲しいぞ！ということ、一部のキャラの出番を大幅に増やしたり、創作キャラを投入したりしています。

が、第一部ではほんの顔見せ程度で、本格登場は第二部……どころか、主に第三部以降ですね。オルキム師やケルガー師、赤毛のラムザ君なんか、出て来る頃にはすっかりその存在を忘れられていることでしょう。

これだけ伏線を撒きまくって、そこまで辿り着かなかったら……。いえいえ、しっかり書き通す所存でございます。

？－6－〔5〕 いつでも側に ？わたしの騎士様（ナイト）（前書き）

今回は超長いです。いつもの三話分ぐらいあります。後で多分、区切り直すことになりそうです……。

？－6－〔5〕　いつでも側に　？わたしの騎士様（ナイト）

カンッ。

ケビンの模造剣を長靴の踵で蹴^{フット}って逸らすと同時に、アイオンの撃ち込みを左手の剣で受け流す。その勢いのまま背中側に回って、ラムザはアイオンを当て身でマルトーの方に突き飛ばした。

「うわっ」

辛うじてかわしたが体勢を崩しかけたマルトーに、ラムザは左右の剣を連続して振るう。

マルトーはこれも防いだ、が、ラムザは更に足払いも掛けた。避けきれず、マルトーは雪の上に転んで滑る。

「……くっ」

立ち上がって、服に付いた雪を払う。

（ラムザ様、すごい……！）

感心すべきか、それとも、呆れるべきなのか……。

「対三が”反則”でないならば、二刀流も足技も非難される謂われは無い。

水を得た魚、というのだろうか。剣術試合の規則を離れた喧嘩^ル方式になってからの方が、ラムザの動きは良い。

「いったい、ティータの知らぬ所で、どれだけ”場数”を踏んできたのだろう？」

対してマルトーは、騎士の子らしく作法に則った剣術はしっかりと修めてきたものの、喧嘩には不慣れなようだ。

ティータにも意外だったのだが、必ずしも人数が多ければ有利とは限らないらしい。

ラムザは自分一人の身にだけ気を付けていればよいから、存分に暴れ回ることが出来る。が、マルトー達は互いに、味方にぶつからぬように気を配らなくてはならないから、動きが鈍る。

特にマルトーは、脅しのつもりで真剣を抜いたのだろうが、実際

に取り返しのつかぬ怪我を負わせてもよいという覚悟は無かったものと見える。かえって、思い切って剣を振るうことが出来なくなっていた。

冷気のために、息遣いが目に見える形ではつきりとわかる。ラムザは呼吸を乱していない。相手からの攻撃は受け止めず、かわすか受け流し、自分からの攻撃には相手の力を利用し、なるべく体力を使わない戦い方をしているのだ。まだ当分、余裕を持って戦い続けられそうだ。

だが、ティータは気掛かりだった。

ラムザは確かに”負け”だろう。が、”勝てる”のか？

試合では、真剣ならば致命傷になるだろう技を寸止めにするか、軽く当てるまでだ。

しかし喧嘩の場合は、勝利条件が異なる。

一つには、試合の延長上にある種類タイプの喧嘩もある。試合の様々な制約——本数や制限時間、競技場の広さ、禁じ手等の規則を取り払って、互いに彼我の実力差を納得するまで技を掛け合うというものだ。この場合は、どちらかが負けを認めれば終わる。

けれども、その方法では決着しなさそうだ。

先程から、ティータの見ただけでも、試合であればラムザの勝ちになりそうな技が五、六回は入っている。本人同士にしかわからないものも含めれば、十回以上になるだろう。が、マルトーは意地になっいて、諦めそうにない。

ラムザは狙い所を変え始めていた。もう一つの形での勝利に持ち込む——即ち、相手を物理的に戦闘不能にすることに目標を切り換えたのだ。

試合とは逆で、喉や腹など、本当に危険な部位は攻撃しない。痛みで剣が握れなくなる、あるいは立ち上がれなくなる程度に手足に打撲傷を負わせるか、関節を挫く、一時的に気を失わせる等の”軽傷”の方がむしろ有効打となる。

といっても、こちらも非常に難しい手加減を要求される道だ。

マルトーは、席次は低いとはいえ、王族の末端に連なる者なのである。うっかり後に遺る怪我をさせれば、”子供の喧嘩”では済まない。ラムザがこつてりと父や兄から叱られる、だけに留まらず、ベオルブ家が王家から責任を問われる事態にも発展しかねない。

マルトーも、そんな己の身分を頼みにして、我を張っているのだ。息こそ上がっていないが、緊張のために、ラムザの頬に赤味が差してきた。

「ッ！」

その頬をマルトーの剣がかすめた。

マルトーに”真剣だから”という遠慮がなくなってきた。勝負が白熱すれば、喧嘩に慣れていないマルトーの方こそ、咄嗟に試合剣術そのままの技を真剣で打ち込んで、ラムザに深手を負わせる危険性がある。

(……どうしよう……)

ティータは再び、迷い始めた。

ラムザは決して、降参はしないだろう。その不屈の心を信ずることと、彼の身を案じることは、別の話だ。

少なくとも、真実を語った自分の言葉を撤回するつもりはないし、そうすべきでもないと思う。『見ていて』と言われた以上は、一部始終を見届けることが、彼に力を与えることにもなると思う。

だが、ただ見ているだけで良いのか――？

いざとなればこの身を盾にしても……とも思うが、ティータには、ラムザ達の剣さばきを目で追うのもやっとだ。あつと思つた瞬間には、もう遅いだろう。

万が一ラムザが死んだり、不治の重傷を受けたりすれば、矢張り両家に禍根を遺す深刻な問題になる。かといって、まだ充分戦えるうちに止めに入ったり、第三者の助けを呼びに行ったりするのも、ラムザの戦士としての誇りを傷付けそうだし、マルトーの人間不信に拍車をかけそうである。

ティータには、”止め時”がわからない。

やきもきしていると、城壁の上の歩廊を主塔に向かって歩くディリータの姿が目に入った。

（ディリータ兄さん、こっちを見て！）

ディリータは、声は出さずに手を振った。ラムザ達は戦いに集中していて、気付かない。

ディリータは振り向いてディリータを見、ラムザとマルトー達が剣を交えているのも見た。

（わかった、任せろ！）

胸を叩き、走っていった。

責任放棄したような後ろめたさはあったが、剣には素人のディリータが下手に判断するよりも、兄を信じた方がいいと思ったのだ。

ディリータは加勢するなり、仲裁者を連れてくるか、何か別の手立てで喧嘩を止めるなり、ディリータよりも適切な処置を執ってくれると思う。

ザッ。

ラムザが足を滑らせ、片膝をついた。右の剣を杖にして踏み止まり、左の剣でマルトーの追加攻撃を防ぐ。立ち上がりながら、ケビンの脚を蹴って間合いを仕切り直した。

流石に、ラムザに疲れが出てきたろうか。

だが、マルトーの方も決着を焦っている。最初に手袋を投げてしまったために、手がかじかんできたようだ。

そして、始めは気乗り薄だったケビンも、積極的に前に出るようになっていた。マルトーがラムザに怪我をさせないうちに、自分がケリを付けた方が、穏便に事を収められそうだと思ったのかもしれない。

アイオンは他の二人の妨げにならぬように、踏み込んだ攻撃は控えている様子だ。が、一步引いて冷静に戦況が見える位置にいる分、避けにくい技を正確に仕掛けてくる。

少し、ラムザの呼吸が速くなっている。ディリータは間に合うだろうか？

キキンッ！

ケビンの剣は柄の部分が輪になっている。ラムザは指と柄の輪の僅かな隙間に刃を差し込み、ケビンの剣を絡め取って、左の剣を地面に突き立てた。

「ハッ！！」

剣を引き抜くことに気を取られて防御が疎かになったケビンの鳩尾に、強烈な上段蹴りを叩き込む。ケビンは大きく後ろに突き飛ばされた。

その足でアイオンの剣を踏み付け、地面に立てた剣を支えに、ラムザはアイオンも回し蹴りで蹴倒す。

体勢を崩したアイオンの顔の前に、ラムザにかわされたマルトーの剣の切っ先が迫った。

「！！！！」

（刺さる！！）

ティータの心臓も跳ね上がった、が――。

バシッ。

ラムザはマルトーの真剣の刃を左手で掴んで止め、右手の剣をマルトーの喉元に突き付けた。

「……！！」

マルトーの動きが止まった。剣を失ったケビンとアイオンも、動かない。

マルトーの剣の切っ先は、アイオンの鼻先すれすれで、微かに震えている。

革手袋をしていても、幾らか切れたようだ。刃を伝って、赤い血の雫が雪の上に滴る。

マルトーは切れ長の目を丸く見開いて、ラムザを見つめていた。肩が荒く上下する。

やがて、ゆっくりと、マルトーの手が剣の柄から離れた。

ラムザは掴み取った剣を、地面に放り捨てる。それから、にこりと笑って、右手の剣も下ろした。

そこへ――。

「ラムザッ！マルトー！」

外出から戻ったばかりで、まだ外套マントも脱いでいないザルバッグが、デイリータに案内されて現れた。

「あ、ザルバッグ兄さん」

ずかずかと大股に歩いてくる。

「この、大バカ者どもがッ！！」

弟と従弟の頭をがっしりと押さえ付け、額と額を思い切りぶつけ合わせた。

「いったゝ！」

「あ痛……」

ラムザとマルトーの額が赤くなり、仲良くたんこぶが盛り上がってくる。

「マルトー、どういふつもりだ！年下の子供相手に三人掛かりで……、しかも、真剣を抜いたのか！？」

これが騎士の子のすることかッ！恥を知れッ！！」

「ラムザ、お前もだ！こんな無茶な勝負は受けるなッ！必ず勝てると、自惚れておったのか！？」

「違います！」

ラムザは臆せずに、キツと兄を見上げた。

「では何だ！？」

「ティータがいい子だからです！……それに、マルトー様も」
「……」

弟を睨んでいたザルバッグの目付きが、幾分か落ち着いた。

ザルバッグは溜め息を吐き、ラムザの破れた左の手袋を裂いて脱がせた。

「……大した怪我ではなさそうだが……。礼拝堂に行つて、オルキムに診てもらえ」

デイリータがラムザを連れて行こうとすると、マルトーが呼び止

めた。

「あ、ちょっと待って」

屋内に入り――客室ではなく、部屋続きの従者達の控えの間まで行ったようだ――ティータの外套マントと手袋、籠バスケットを持って来た。

「悪かったよ。謝ろう」

「……」

ぼうっとしているティータを、ラムザが小突いた。

「ティータ。マルトー様を許してあげる？」

「えっ、あっ、はい……それは、勿論……」

荷物を受け取ったティータは、こくこくと頷いた。

ラムザに、ディリータに、尋ねたいことが沢山ある。

だが、既にかなり時間を喰ってしまった。改めて、用事を言いつかっている旨を告げて、ティータは裏門から城外に出掛けた。

さて、午後になり、ティータが茶の用意をしてマルトーの客室に運んでゆくと――。

部屋の中は空っぽで、少年達は中庭にいた。

マルトーとケビン、アイオンの組、ラムザとハールーシャ、ディリータの組の三人ずつに分かれて、降り積もった雪で雪合戦をしている。

「あっ、ティータ、いい所に！手伝ってー！」

「は、はいっ!？」

ラムザがティータに手袋を放って寄越した。

「このぶきっちは、雪玉もまともに握れないんだ！」
と、ハールーシャが呆れ返って言った。

ラムザは手裏剣投げや投石の類は得意なはずだが、いかんせん、握る度に雪玉の大きさや形がまちまちで、制球コントロールに苦しんでいるらしい。

ティータは夢中になって、せっせと雪玉を丸めてはラムザや兄達に渡し、時々は自分でも投げた。

年齢差を埋め合わせる程良い調整ハンデになったようで、接戦が続いた。マルトー達から雪玉が飛んでくることがあったが、ティータを狙う雪玉はふんわりと柔らかくて、当たるとすぐに砕けた。

「ははっ」

マルトーは上機嫌に笑っている。

皆、霜焼けで頬を真っ赤にして部屋に引き揚げた。ぐっしりと濡れた上着を、暖炉の周りに干して乾かす。

ティータは熱々の香草茶ハーブティーを淹れ、菓子麺麰パンを暖炉の上で温め直して、給仕した。

「そういえば、マルトー様。結局、ティータと何をして遊ぶつもりだったんです？ そんなに、人に知られるとまずいようなことだったんですか？」

「ぶくっ……」

ラムザから不意打ちを受けて、マルトーはむせた。

「げほ、げほっ……そ、そのことは深く気にしないでほしいなあ……」

ディリータがマルトーに非難の目を向けた。

「マルトー様っ……！」

「ごめん！もう絶対しようとしなからさ。約束するって。嘘じゃない」

マルトーは、不安そうな顔をしているティータに謝った。

ハールーシャが身を乗り出す。

「ほおう？ディリータが怒るなんて、よっぽど悪いことなんだな。花祭りの花吹雪フラワーシャワーの代わりに毛虫を籠一杯投げて、狩りの前日に全部の猟犬に顔料で落書きしても、呆れただけで怒らなかったのに」「秘密にされたら、余計に気になるじゃありませんかー！」

マルトーはケビンに助け船を求めた。

「参ったな……。何とかしてくれないか？」

「知りませんよ。ご自分で撒かれた種でしょう」

「おい、主人を見捨てるのか！」

「僕はマルトー様の一番の味方のつもりですから。ご自分の言動の責任はきちんと取っていただかないと、マルトー様が成長なさらないと思って、心を鬼にしているんです」
と、ケ빈は笑った。

「教えろー！」

「マルトー様ー」

「ううーん……、弱ったなあ……」

ハールーシャとラムザに詰め寄られて本気で困っているマルトーを見て、ティータもこっそりと笑った。

最初に声を掛けられた時は、マルトーは一見優しそうな微笑を浮かべていたけれど、ティータには何故か足が震えるほど怖かった。
今のマルトーは、少しも怖くない。

その夜ティータは、ディリータに尋ねてみた。自分のしたことはあれで良かったのだろうか？

「僕に報せたことを言っているのなら、そうだな、正しかったと思うぞ。というか、遅すぎたぐらいだ。本当は、マルトー様が真剣を持ち出した時点で、もう”子供の喧嘩”じゃ済まない危険な状態だったんだ。ラムザが何と言おうが、大人の助っ人を呼びに行った方が良かったな。

……いや、そもそも、追われてラムザを頼ったことが間違ってる。もっとしっかりした、大人に助けを求めるべきだったんだ」
と、ティータはディリータに叱られてしまった。

「ラムザは昔っから人好きで面倒見が良かったけど、今はそれだけじゃない。自分やアルマや、ファティマ小母さんがベオルブ家の一員と認められるためには、人一倍立派な騎士にならなくちゃいけないという思いがあるから……。色々、背負い込み過ぎてると思う。気持ちがいくらあったって、能力的にはまだ、お前と幾つも違うな子供なんだぞ。

いいか？ラムザは、みんなのラムザなんだ。これから騎士になっ

て、大勢のドラコニア領の人達や、北天騎士団の騎士、兵士の人達のために働かなくちゃならない。みんなを支えるラムザを支えて、少しでも負担を軽くしてやるのが、僕らの仕事なんだぞ。僕らがラムザの負担になってどうするんだ。

いつまでも、”お隣のお兄ちゃん”のつもりでいちゃいけない。ラムザが優しいからって、甘えるなよ」

その後で、ティータがしょんぼりしてラムザに謝りに行くところ、
「え？心配性だなあ、デイリータは」
ラムザは一笑に付した。

「そんなに危険は無かったと思うんだけど……。ティータにも怖い思いをさせちゃったんだったら、ごめんね」
と、逆に謝った。

”どんな悪党でも誠意を見せればわかってくれるはず”とか、
”死んでも正義は貫く”とか、そこまで頑なに意気込んでたわけじゃないよ。

そうじゃない。マルトー様はそんなに悪党じゃない、ちゃんと友達になれるお方だって、確信があったからね」

「……？」

「傍目にはわかりづらいかもしれないけど、剣を合わせてるとよくわかった。

マルトー様は、本当はかなり強いよ。試合だったら、僕の方は三本に一本……ううん、五本に一本取れば上出来かなってぐらいさ。悪いことしてるって引け目とか、僕やケビンさん達に怪我させちゃいけないってためらいとかがあって、力を出し切れてなかったんだ。あの状態で、マルトー様にも攻撃を抑制^{セーブ}しきれない、僕にもかかせないってことは、まず無かったと思うよ。

それにさ、ほら、ケビンさん達は、仕事だから渋々従わされてるって感じじゃなくて、本気でマルトー様を心配してるみたいだったから。普段のマルトー様が手の付けようもない悪党ってことはなさそうだな、ってのもわかったし、本当の本当にまづいと思ったら、

マルトー様の言いなりになるのじゃなくて、ケビンさん達も止めてくれるだろうと思ったんだ。

マルトー様を”罪人”にしないためにね。

だから、大惨事になる確率ってのは、すごく低かったはずだよ。

もしマルトー様が、僕もケビンさん達もどうなっても構わないってつもりで、まるっきり遠慮無く真剣を振るってくるようなお方だったら、その時はティータを連れてさっさと逃げてた。その程度の引き時は、ちゃんとわきまえてたって。

最後にマルトー様の剣を掴んだ時だって、別に怖くなかったよ。剣って、引くか、押した時じゃないと斬れないんだ。包丁だってそうだろ。垂直に刃を当てただけじゃ切れない。だからほら、剣の刃の上を歩く曲芸なんかが出来るんだ。

マルトー様ご自身が、アイオンさんにぶつけないように、一生懸命止めようとしてたから。もうかなり、剣の速度が鈍^{スピード}ってたんだ。簡単に掴み取れるぐらいにね。

指を斬り落とされるとかいう心配は、全然しなかったよ」

ティータにもやっと、あの時マルトーとラムザの間にどんな心の交流があったのか、おぼろげながら理解出来た。

ラムザの伯母のプリマヴェーラが、いつだったか言っていた。相手を信じ、己を信じることが出来なければ、謝るのは難しい——と。謝って、相手の裁定に身を委ねるのには勇気が要る。

一つ非を認めた途端、有ること無いこと非難され、徹底的に報復されると思ったら、たとえ悪いことをしたという自覚があっても、素直に謝れるものではない。

また、健全な自尊心^{プライド}がなければ、矢張り謝れないものだ。非を認めても自分の価値が致命的に減じることはない——、これから悪い所を改めてゆけるだけの力が自分にはある、そうすることでむしろ、今よりもっと愛され尊敬される人間になれるという自信がなければ、今ある居場所を失うまいとして悪事を隠そうとするばかりだ、と。

だから、赦す姿勢を取ることが、謝りやすい、悪を改めやすい環

境を作るのだ——とも。

——え？赦すというのはどういうことか……ですか？うーん、難しい質問ですね、ラムザ様。算数のようにはっきりとした答えが出せるわけではありませんが……。

若い礼拝堂司祭のオルキムは、ぶ厚い丸眼鏡の縁を押さえながら、考え考え子供達に説明したものだ。

——少なくとも、悪いことをされても我慢して無かったことにする……というのは違うでしょうね。それでは悪事を野放しにするだけです。他の人に被害が拡がってしまいますし、本人のためにもならないでしょう。悪いことを続けていれば、どんどん嫌われて孤立してしまいますからね。

そうですねえ……、聖典に、天国の門をくぐるには、左手が悪事を為したならば左手を切り捨てよ、とあります。これは、現実の刑罰を規定するものでも、悪は徹底的に排斥せよという厳罰主義的な意味でもないと思います。悪いことをした人がいても、その人全体が神様の国から締め出されてしまうわけではない、悪い部分だけを改めれば充分なのだ、地上の人の世においてもそれでいいということではないでしょうか。

丸ごと全部、悪い所ばかりという人は、そうそういないでしょう。逆に、全く欠点のない人というのも滅多にいないでしょうし……。

”悪”を無くすために、いい所も含めてある人全体を排除してしまうのは、あまりにも勿体ない。今は救いがたい悪人のように見えても、昔に何かしらいいことをしたことはあったかもしれませんし、これから悔い改めて立派な人になる可能性は忘れてはなりません。短所と見えたことが、別の場面では長所として活きてくることもあります。

ですから、悪い所は悪い所として反省を促すとして、その人の過去や未来まで否定してしまわない……とか、良い所は認めて誉めてあげる、信じて活かしてあげる……とかいったことになるでしょうか。

僕もまだまだ勉強中の身で、確かなことは申し上げられませんけどね。今お答えするとすれば、そういうことだろうと思います。……ラムザがティータや、彼自身の信念を信じているだけならば、いかにその意志の固いところを見せられても、マルトーにとっては他人事だったろう。

だが恐らく、ラムザが”敵”であるはずのマルトーを信じたことで、心動かされたのだ。

信じられるだけの良心が自分にもあると思い知らされ、マルトーの方もラムザを——ここで剣を手放しても、敗者を無用に鞭打つことはしないと——信じる心のあることを、認めたのだろう。

心において負けを受け入れ、謝る気になったのだ。

「あの、ごめんなさい……余計なこととしてしまつて。ラムザ様を信じてないわけじゃなかったんですけど……。いえ、信じなかったことになるのかしら……？」

「ああ、気にしないで。どの道、結果はそんなに違わなかったと思うよ。」

今回の場合は、僕が戦闘不能に追い込まれたり、大人の仲裁が入ったりしてたつて、”お終い”じゃなくて”中断”になっただけさ。お互いに納得がいくまで、何度でも後日再戦しただろうから……。

で、どうでもいいこととか、間違つたことのために意地は張り続けてられないものさ。僕にとっては、ティータのことは”どうでもいいこと”なんかじゃないもの。絶対諦めなかったよ。だから、いつかは必ず僕の勝ちで終わったさ。

……でも矢張り、今日のことは無茶だったのかなあ。オルキム先生にもお説教されちゃったよ。多分、ティータがデイリータに報告してくれて正解だったんだ」

ラムザは回復魔法で傷の塞がった左手を、握ったり開いたりし、その手をぽんとティータの頭に置いた。

「僕は無理してるつもりなんかないんだけどな。折角勉強して身に付けた力は、持つてただけじゃ何にもならないもの。誰かの役に立

てるなら、どんどん使いたい。

僕で力になれるんだったら、嬉しいよ。ディリータやティータまで、身分だとか仕事だとか言い出したら、僕には”友達”がいなくなっちゃうじゃないか。そっちの方がよっぽどきついつて。

これからも、いつでも頼ってくれていいんだからね。……それから、気の置けない仲間だけの時は、今まで通り”ラムザ兄さん”って呼んでほしいなあ。

ティータは、僕のもう一人の妹だよ」

ラムザはにこりと温かく微笑んで、いつもアルマにするように、ティータの唇に軽く口付けした。

小さい頃から慣れているはずなのに、今までになく胸が高鳴った。マルトーに触れられた時は、逃げ出して来るほど怖かったのに、ラムザに触れるのは怖くない——かえって嬉しい、安心するのは何故だろう？

……いや、逆だ。ラムザ以外の異性に触れられるのが嫌だったのだと、気付いた。

皮肉なものだ。

ラムザはティータを”妹”^{アルマ}と言った。けれども、ラムザが親友や妹のおまけとしてでなく、ティータ一人のために戦ってくれたこの日を境に、ティータはむしろ、はっきりと意識するようになってしまった。

ラムザは”兄”ではないのだと。

ところで、マルトーの嘘つき癖がどこから来たかというところ——。

マルトーの父は、かなりの浮気者であるらしい。

オルランドウ家のシドのような、惚れっぽいことを自ら吹聴して隠そうともせず、それでも良いという相手とだけ付き合う、陽気で開けっ広げな女好きではない。

シドは、

——女の子は泣かせちゃいけない、笑わせてあげるもんだ。

モットーを信条にしているが、マルトーの父は、それぞれに嘘をついて結婚の約束などし、独身時代から相当数の女性を泣かせてきたようだ。結婚後もその傾向は変わらず、マルトーの母は心痛めてきたものの、マリーソフィア以上に内気で従順な性格だったため、表立って文句は言わずにいた。

幼い頃から、マルトーは漠然と居心地の悪さを感じていた。

一見、人も羨む和気あいあいとした家族なのだが、父は何だかんだ用事があると言って、週末や夜でも帰らないことが多い。態度こそ優しいが、妻子のために手間暇をかけようとする努力が見られない。

母は母で、何か悩み事があるようなのに、父の前では明るく振る舞おうとしている。

やがて、マルトーは衝撃的な事実^{ショック}に直面することとなる。

マルトーの乳母の子であり、従者でもあるケビンとアイオンの兄弟のうち、アイオンの方はマルトーの弟でもあると知ってしまったのだ。父は、当然夫も子もあるマルトーの乳母にまで、手を付けたのである。

父は何を考えているのだ――。

母やマルトーにはばれないだろうと、高を括っていたのか。それとも、何とも思わないだろうと――あるいは、その程度のことは甘んじて受け入れるべきだと？

母は？妻は夫に無条件に従うものと、躰けられてきたのかもしれないが。マルトーを傷付けたくないとか、あるいは、マルトーに父のような男に育ってほしくないと思うならば、もっと正面切って抗議してもいいのではないか？

ケビン達は知っているのか。どう思っているのか。

家族ぐるみで献身的に仕えてくれているけれど、内心では父を恨んでいるのではないか。また、彼らの母がマルトーの乳母にならなければ、父の目に留まることもなかったのだ。面倒事の原因となったマルトーのことも、疎んじているのではないか？

そして、家臣達、使用人達は？

父に構ってもらえないマルトーを慰め、よく気晴らしに付き合ってくれたが――、何が”お館様はお仕事が忙しいから仕方ない”だ。父は妾宅や花街に入り浸っているだけだった。

どこまで父の口実を鵜呑みにしているのか、あるいは、父と一緒にになってマルトーを騙してきたのか？

マルトーは、周りの人間が誰も信じられなくなった。

ほどなく、マルトーは表面上”良い子”を演じながら、陰で使用人達や学校の級友達を苛めるようになる。

物を盗ったり、わざと壊したりしては、嘘を吐いてその罪を他人になすりつけた。あるいは、脅したり騙したりして第三者を苛めさせる一方で、それを暴き立て、自発的にしたことだと嘘の自白をさせるのだ。

人がどこまで騙されるものか、また、嘘と知りつつ我慢するものか、試してみたこともあった。が、それ以上に、誰かに嘘を指摘して叱ってほしかったのだ。

そうすれば、それをきっかけに、マルトーも心置きなく周りの者達を問い質せるのに。

嘘を吐くのがいけないことなら、お前達はどうなのだと。何故、マルトーに本当のことを言わないのかと――。

だが、マルトーを責める者は現れなかった。

時々、ケビンとアイオンはたまりかねて、

――マルトー様、もう止しましょう。

と言うこともあったが、

――お前達は、何があっても僕の味方だろう？絶対に裏切らないよな？

と念を押すと、黙った。

歳月が流れ、マルトーの苛めには性的なものも加わる。

マルトーが玩具にした女中^{メイド}が、他に理由も見当たらないのに相次いで解雇された時、マルトーはもうバカバカしくなってしまった。

何だ。わかっていて、放っておかれているのか。

そんなものは、愛情でも忠義でもない。王族という身分を憚って、マルトーという少年の人格を見捨てていることではないか……。

そんなマルトーが掛け値無しに信頼を寄せるのは、従兄のザルバツグだけだった。

率直さは、政治の世界では美質とは見なされず、むしろ問題視される。だが、明朗で裏表の少ないザルバツグの側にいる時は、マルトーは安心出来た。

といっても、胸の内に抱えてきた悩みを打ち明けられるほどに、親交があったわけではないが。

ドラコニア城を訪れたマルトーは、ふと思いついたのだ。

もし、ここで悪さを働けばどうなるだろう？ ザルバツグは気付いて、マルトーを叱るだろうか。

思った通り、ザルバツグがきつぱりと叱ってくれたことだけでも、マルトーは満足だった。が、思いがけず小さな、素直な友を得たことで、マルトーの中で何かが吹っ切れたらしい。

ラムザとの喧嘩があった日の夜――。

――子供同士はとくに仲直りしておりますぞ。親が口出しすることでも、まして、口出しもせずに揉み消そうとすることでもありませんな。

バルバネスの耳に入る前に和解を、と望むマルトーの父を、ザルバツグが呆れて諭していると、マルトーが勝手にザルバツグの居間に入ってきて、父に食ってかかった。

――ザルバツグ従兄^{あに}上に謝るぐらいなら、何故その前に僕を叱ろうとならないのです？ ご自分に跳ね返ってくるのが怖いからですか？ 父上が気にするのは、いつも世間体だけだっ！

――マルトー！！

マルトーがはっきりと父に反抗したのも、父がマルトーに手を上げたのも、初めてのことだった。

翌日、マルトーが額と頬に張っている湿布が痛々しいので、ラム

ザは心配した。

「”おまじない”してあげましょうか？」

しかし、マルトーはぺろりと舌を出して、笑った。

「ああ、これはこのままでいいんだ。父上への当て付けなんだから」
ケビンとアイオンにも、思い切って尋ねてみた。

二人とも、マルトーよりも早くからアイオンの血筋のことは知っていたし、マルトーが知って傷付いたことも、すぐに気付いていたという。だがそのことを口にすればマルトーとの間に溝を作ってしまうのではないか、自分達さえも遠ざけられればマルトーは全く孤独になってしまうのではないかと……と恐れて、何も言わずにマルトーに従ってきたらしい。

「でもかえって、マルトー様を苦しめてきたようですね。もっと早く、こちらからお話すべきでした。申し訳ありません」

「いや、僕はいいんだ。だが、ケビン達こそ、僕を恨んでいるのじゃないか？」

「恨むなんて……。マルトー様のせいではありませんから」

「アイオンの生まれのことはそうだとしても……。随分、嘘の片棒を担がせてしまった」

「いいえ。恨むとすれば、マルトー様をお守り出来なかった、自分の力不足を恨むだけです。マルトー様が本心から悪事を楽しまれているのでないことは、よく存じていました」

「そうか……。アイオン、お前は？」

「僕の兄は、ケビン兄さん一人です。僕はマルトー様の従者で、これからずっと兄さんと一緒に、いつでもマルトー様にお味方する所存です」

「……そうか。そうだろうな。でも……。父のしたことは許せないけれど……。僕にも本当は兄弟がいるのだと……。自慢の弟がいると、心の中で思っているだけでも、迷惑か？」

「……いいえ。有難うございます……」

マルトーは、本物の従兄弟であるザルバッグと同様かそれ以上に、

ラムザと親しむようになった。ラムザの方でも、血のつながりは無いが”マルトー兄さん”と呼んで慕った。

直後の正月にラムザが毒矢に倒れて重傷を負うと、ハールーシャの葬儀の後、家族が王都に帰ってもマルトーだけでドラコニア城に逗留し、親身になってラムザの回復訓練リハビリに付き合った。

これは、マルトーを知る者達には少なからず意外なことだった。マルトーは表向き礼儀正しく、そつなく人付き合いをこなすが、自分から積極的に人と深く関わろうとはしてこなかった。

「なーんか、僕とマルトー兄さんがデキてるんじゃないかって噂があるみたいですけど。」デキてる”って、どういうことですか?」「ど、どうって……。デイリータ! わかっているなら、君が教えてやれ!」

「マルトー様こそ!」

「ちよつとっ! まさか、年端も行かない妹の口から、そんなこと説明させようってつもりじゃないでしょうねっ?」

ティータは、おずおずと手を挙げた。

「あの……。わたし、知ってる……。と思います」

マルトーとデイリータ、アルマの視線が怖いなと怯えつつ、

「恋人同士だって、意味だったと思いますけど……。違った、かしら……。?」

寝台ベッドの上のラムザは、溜め息を吐いた。

「恋人? 未だに、僕のこと女の子だと思ってる人があるのかなあ」

枕元で、マルトーとアルマはもっと深い溜め息を吐いた。

「ザルバグ従兄あに上のご心労は、一方ならぬものがおありだろうな……」

「おわかりただけて?」

優等生のふりをするのではなく、苛めに費やしていた時間や労力を本当に勉強につき込むようになったため、マルトーの学問も剣術も、ぐんぐんと上達した。

そして……。

三年後。

アカデミー

士官学校六校対抗剣術大会の決勝戦で、ラムザを下して見事優勝を果たしたのは、マルトーだった。

”喧嘩”だったら、僕の方が負けてたな」

「謙遜はよして下さい」

「謙遜じゃない」

「はい、わかってますって！」

満場の拍手喝采の中で交わされた会話は、当人同士にしか聞き取れなかったろう。

試合後の親睦会の会場から、ティータとアルマがダリウスの手下の少年達に連れ去られるのに気付いたのも、マルトーだった。すぐにケビンとアイオンに跡をつけさせたために、ラムザとティータは迷わず妹達が捕らわれている廃屋に辿り着けたのだという。

「少しは罪滅ぼしになったかな」

「それは、もう……十二分に」

「じゃあ、免罪の証に、一曲付き合ってもらってもいいかい」

「えっ!?!……は、はい」

マルトーがティータの手を取って踊りの輪に加わると、男子生徒達がざわめいた。

「うわー、誰だよ、あの子……」

「何っ? ティータの妹!? 信じられん!」

「清楚だ! 可憐だ! 素直そうだ! ……全っ然似てねーっ!」
ティータは無言でこめかみを押さえている。

「……」

「あのさ、みんな……。ティータのこと、どういう目で見てるわけ?」

と、ラムザが代弁する。

「おい、ティータ! 紹介しろ!」

「冗談じゃない!」

そっぽを向いたディリータの耳に、嫌な声が入ってきた。

「諸君、順序というものを守ってくれたまえ」

セヴィだ。

「マルトー様は本日の主役だから、謹んで譲って差し上げた。が、権利者の第二位は、当然この僕であるべきだと思うのだがね。よもや異存はあるまいね、ディリータ君？」

セヴィはイクシと共に、少女達の気を引き付けて、ラムザが中座しても目立たぬようにしてくれたのだ。

が、それは手間というよりは役得だろう！……と言ってやりたいところだが、一応世話になった以上は、首を縦に振らざるをえないディリータだった。

「すると、俺様は三番手か？」

と、イクシは燃えるような赤い髪をかき上げながら、ぶつぶつ言う。

「イクシ先輩には特別に、アルマをお貸しますよ」

「おう、これは眼福！噂に違わず、いや、噂以上にお美しいな」
アルマはくすくすと笑った。

「まあ。貴方が、わたしと間違えて兄にちよっかい出したっていうイクシ様？楽しいお方だって伺ってますわ」

イクシは顔を引きつらせた。

「おい、ラムザ。妹に何を吹き込んだ？」

「何って、事実そのままをですよ。例えば、イクシ先輩は美しいものが何よりもお好きで、美的価値を認めたものに対しては決して暴力を振るわない……とか」

「……、手強そうだな！」

会場を一周してきたティータに、セヴィが優雅に一礼して恭しく手を差し伸べると、今度は少女達から羨望のどよめきが上がった。

（ええっ！？）

元々一介の農民の娘に過ぎないティータが、王族のマルトーからダンス舞踏を申し込まれただけでも嘘のような話なのに、次はセヴィだ。

セヴィは、ゴルターナ公の義弟に当たるブランシュ子爵の跡取り

息子である。オリナス王子の後見人の地位を狙ってラーグ公とゴルターナ公が対立している今、ベオルブ家とは”宿敵”と言ってよい間柄のはずなのに。

そして、セヴィばかりではない。

(えええっ!?)

名うての”暴走族”だというイクシまで。

ラムザの友人達の多彩さには、驚かされる。

「ふむ。お嬢ちゃんはどうも、うつむきがちな。もっと自分の魅力に自信を持って、胸を張るべきだぞ。……それから、」
と、イクシはさり気なくティータを帳の陰に引き込んだ。

「口紅をもっと鮮やかな色にすると、表情が明るく見える。俺のを少し分けてやろう」

「えっ……」

イクシが顔を近付けてきたので、ティータは予めラムザに教わっていた通りに、思い切り肘打ちを喰らわせた。

ガッンッ!

イクシはまともに顔面に受けて、鼻血を吹いてしまった。

「あっ、ご、ごめんなさいっ……」

ティータは慌てて、イクシに”回復”^{ケアル}の魔法をかける。

「な……なかなか、元気があるじゃないか。そのぐらいの方が、一層魅力的だぞ!」
^{チャームング}

ラムザの行く所、あり得ないような愉快な事件が起こり、結び付きそうにない人々が手を携える。

これは夢か、何かの魔法か。

だが、奇跡を演出した”大魔術師”の姿はと目で探すと――、壁際で人目を憚るようにこそこそと、丸一個の包み焼^{ホールパイ}なぞかじっている。

しかし、アルマが目ざとく見つけて、ぐいぐいと背中を後押しした。

「ええー? 僕も踊るの? ……どうしても? 」

ティータの前に押し出されたラムザは、頬を掻く。

「えっと……その。……気を付けてよ」

緊張した面持ちで、軽快な音楽から半拍子遅れてぎくしゃくと踊っていたが。会場を三分の一周もしないうちに、

「うわーっっ!!」

足がもつれて、二人とも転んでしまった。

周りの士官学校生達アカデミーがからかう。

「おー。またやったか」

「で、今日の決まり手は？」

「投げ倒しても引き倒してもいないっ！ちゃんと庇ったって！」

女生徒達が集まって来る。

「大丈夫よ、あたし達なら受け身ぐらい取れるから」

「練習しなくちゃ、いつまでも苦手なままよ」

「そうそう。練習しましよ、練習、練習」

だがラムザは、尻餅をついたまま、蜘蛛のようにしゃしゃかと後退った。

「嫌だっ！舞踏ダンスが出来なくなっちゃって死にやしないっっ!!」

側で見ていた、兵法学の教官のダーラボンが笑った。

「ホッホッ、懐かしいですねえ。もう四十年も昔に、バルバネス様がそっくり同じ口調で、同じことをおっしゃいましたよ」

士官学校生達アカデミーがドツと笑った。

「ううー……」

決まり悪そうに顔を赤くしているラムザに申し訳ないと思いつつ、ティータも一緒に笑ってしまった。

思えば、ティータはずっと魔法にかけられて、夢の中を生きてきたのかもしれない。

だって、ティータが持っている一番古い記憶というのが……、

——こんにちは！僕、ラムザっていうんだよ。今日からお隣に住むんだ。よろしくね！

明るい金髪の、天使のように綺麗な男の子が突然目の前に現れた

から、ティータはびっくりした。

その子が人懐こく微笑んで、唇に口付けしてきたのには、もつとびっくりした。

息に木苺の甘煮ジャムの匂いがしていたことまで、鮮明に覚えている。

あれが、夢の始まりの魔法だったのかもしれない。

だから――、

（夢が……覚めただけかもしれない）

と、廃寺の冷たい床の上で震えながら、ティータは思ってみる。

罰が当たったのだろうか。身の程を過ぎた、贅沢なことを望むから。

――ね？ わかったでしょ。

と、剣術大会の後で、アルマは我が事のように得意そうに言った。

「生まれがどうだって、今のティータは、どこから見ても立派な貴婦人レディよ。引く手数多よ。貴族学院がっこうの人達が何て言おうと、堂々としていればいいの。

いずれディリータはラムザ兄さんの片腕として、押しも押されもしない騎士になるわ。貴女だってその妹として、名誉ある騎士の奥方になるのよ。

王族のマルトー様と並んだって、見劣りしなかったじゃない？ 流石に、マルトー様は高嶺の花すぎるとしても……。

あ、そうだ。エスト伯母様は、イクシ様がいたくお気に召したみたいね。かなり派手だけど！ でも、ティータって大人しすぎるから、案外あのぐらい強引な人の方が合うかも、って気もするのよねえ……」

ティータはうつむいて、首を横に振った。

「わたし……、困るわ。騎士の奥方なんて……。ずっと、アルマの側にいるだけじゃ、いけないかしら……」

アルマは頬に手を当てる。

「あら！ やあねえ……ティータったら。わたし達、女の子同士なの

に……。でも、嬉しいわっ」

ひしっとティータに抱き付いて、頬に口付けしたが、ティータが無反応なので溜め息を吐いた。

「……。わたしの、っていうより、ラムザ兄さんの、なんでしょ」
「……」

たちまち、ティータの目に涙が溢れる。

「泣かないで、もう……。あのおボケの腹ペコ大魔神のどこが、そんなにいいのかしら」

「自分のこと棚に上げて……。アルマが先じゃない。『お兄ちゃんのお嫁さんになれないんだったら、誰とも結婚しない！』って言い張ってたのは……」

引っ込み思案なティータが、気兼ねしながらでも泣き言恨み言を言えるのも、アルマが相手の時ぐらいだ。

「そうだけど……。今は、考え直してるわよ。」

世の中は広いもの。ラムザ兄さんより好きになれる人はいなくても、ラムザ兄さんの次に好きになれる人ぐらいはあるかもしれない、って。

それに……。どうせ、自分で選べない可能性高いのよね。だったら義務と割り切って、政略結婚でも何でも、ラムザ兄さんの仕事の助けになれるんだったら良しとするのも、一つの考え方かしらって思うのよ」

「……アルマは、強いよね……。わたしも、わかってるの……。そう思おうと、してるのよ……。でも……。でも……！」

ティータは顔を覆った。

「駄目なの……。！どうしても、自分の気持ちは誤魔化せないわ……。！将来の事を考えると、怖くて怖くて、逃げ出したくなってくるのよ……。！！」

例えば、ラムザと兄の友人達だって、気持ちの良い少年達だとは思う。だが夫になるとなると、恐らく誰であれ、ラムザと比べて不満を持たずにはおれないだろう。幸せになることなど出来ないし、

夫や子供達を幸せにすることも無理なのではなからうか。

アルマは実の妹だから、”二番目に好きな人”でも実質、”結婚出来る範囲では一番好きな人”なら満足出来るかもしれない。が、ティータにはそのような諦めはつきそうにない。

「本当は、ここにいても怖いの……。人から言われなくたって、騎士の家での暮らしはわたしには向いてないと思うわ……。今でも、マンダレーナ村に帰りたい……。

だけど、田舎に戻ったって、いずれ誰かと結婚しなくちゃならないのは変わらないのよね。それならせめて、少しでもラムザ様とアルマの近くにいられる方が、頑張れるから……。だから……。」

アルマは、すすり泣くティータの肩を抱いた。

「わかってる、わかってるわ。大丈夫。ティータにはわたしが付いてるから。」

ティータの納得がゆくまで、わたしの女官でいればいいわよ。そしたら、ティータに求婚する人は必ずわたしを通してでなくちゃならなくなるもの。気に入らない男なんか、みんな蹴ってあげるわよ。

……でも、そのうちきつと、ティータが結婚してもいいと思える人が現れると思うけど」

涙が治まると、ティータは肩を落としてアルマの部屋を出た。

（駄目ね、わたし……）

亡き父からも、兄のデイリータからも事ある毎に言われてきたように、ティータの一家はベオルブ家に返しても返しきれぬほどの恩がある。

本当は、ティータの方がアルマを支えなければならないのだ。

しかし、デイリータがラムザをよく助けているのに比べると、ティータはアルマに助けられてばかりだ。

貴族学院でも、アルマ自身が平民の母を持つ者として偏見を受ける身なのに、毅然として中傷と戦い、ティータのことも庇おうとする。

——そうでもないと思うけど……。

と言ってくれるのもまた、ラムザぐらいだった。

——アルマの世話好きは、あいつの方が寂しがりなの、構いたがりなんだよ。ティータが側にいることで、大分慰められてると思うなあ。ほら、アルマはすぐに怒ったり泣いたりするけど、ティータが一緒だと、一人だけの時よりずっと落ち着いてるよ。……

とぼとぼと外廊下を歩いていると、

(あら?)

裏庭に、ラムザの持ち物が点々と落ちている。歩きながら脱ぎ散らかしていったらしい。

木剣。革手袋。長靴。^{ブーツ}靴下。上着。^{ベルト}革帯。髪^の結い紐。

拾い集めていった先には——。

(まあ!)

ティータは吹き出してしまった。

イグーロス貴族学院の女生徒達が憧れる”白韋駄鳥^{チヨコボ}の貴公子^{プリンス}”は、木陰で”ぐうたら妖怪”と化していた。

だらしなく下着^{シャツ}の襟元と袖口を緩めて、芝生に四肢を投げ出し、正体も無く眠りこけている。口の端から涎さえ垂らして。

(貴女達は知らないでしょう、こんなラムザ様)

ティータをやっかむ級友達に、何となく優越感を感じてしまう。

こういう姿を”百年の恋も冷める”と形容するのかもしれないが、ティータはむしろ、嬉しくなってくる。

ディリータやアルマに助けられるのは、有難いとは思っけれど、駄目な子だと言われているようで、ティータはどうしても落ち込んでしまう。

しかしラムザに対しては、多くのものを与えられ助けられているはずなのに、自分の方が助けてやっている気分になるのだから、不思議だ。

放っておけない弟のようで——アルマなどは、『大きな犬を飼ってるみたい』とまで言う——自分が付いていてやらなければ、と思わされる。

ディリータやアルマや、他のラムザの友人達も、きっとそうだろう。ラムザは”人に与える力”を引き出してくれるのだ。それは、月並みな気休めや激励の言葉などよりも、はるかに大きな励みになる。

ティータは、緩みきって昼寝しているラムザの隣に座った。

上着や手袋を、皺を伸ばして丁寧に畳み、きちんと揃えて頭の横に置く。手巾で、額の汗や、涎ヘンカチを拭ってやる。

それから、

「……、」

きよろきよろと辺りを見回して、誰もいないことを確かめると、手近に生えていた白詰草の花を一本摘んだ。

「……」

自分の唇に押し当ててから、その花でそうっとラムザの唇をついてみる。

「ふえっ……くしゅ！」

鼻もくすぐってしまったらしい。くしゃみをして、ラムザは目を覚ました。

「あっ、ご、ごめんなさい……！」

ティータは慌てたが、ラムザは全く気にせずに、起き上がって大きく伸びをした。

「……あれ。拾ってきてくれたんだ。ティータはよく気が利くなあ」
ティータの黒髪を撫でて、頬に軽く口付けする。

「そんな、別に、わた、たし……」

ますます取り乱して、顔を赤くしたティータに、ラムザは微笑みかける。

「本当さ。どこにお嫁に出しても恥ずかしくないよ」

少し、胸が疼く。

ラムザはあくまでも、ティータを”妹”としてしか見ていない。

”妹”だと思えばこそ、他の少女達のように距離を置かず、親しみ慈しんでくれている。

「……」

ラムザはちよつと考え込むような顔をしてから、もう一度ティータの頬を舐めた。

（お、大きな犬……よね）

ティータは肩をすくめる。

「矢張り、塩辛い。ティータ、泣いてたの？」

秋の空のような澄んだ碧い目で、心配そうにティータの目を覗き込んでくる。

「……ええ、その……そうですけど、もう大丈夫。アルマに、話を聞いてもらっていたの……」

「そう……か。まあ、女の子同士の方が相談しやすいかな。でも、僕で力になれることがあったら、いつでも遠慮無く言ってよ」

「はい……」

”妹”でいい。多分、その方がいいのだ。

たとえ貴族の娘だったとしても、自分の性格や力では、ラムザとは釣り合わないだろう。

好きな人達の役に立てるのが嬉しいのだと、自分の意志でしていることだといっても、矢張り、ラムザは色々と背負い込みすぎていると思う。

ラムザの伴侶に相応しいのは、きっと、彼を充分に休ませ、甘えさせてあげられるだけの包容力のある女性だ。自分では、彼に甘えるばかりで、彼の肩にかかる荷を分かち合えるほどの強さがない。

ティータが得意なことといえば、身の回りの細々した世話を焼くことぐらいだ。もしも彼が剣を棄て、例えば医者とか”お洗濯屋さん”として生きてゆくことを選んだのなら、それでも役に立てるかもしれないが。

時々、そんな場面を夢想することもある。が、その度にティータは、矢張り自分には彼の隣に立つ資格はない、と恥じ入るのだった。それは、彼に志を諦めてほしいと願うことだし、騎士としての彼の力に救われるだろう大勢の人々の幸せを顧みないことになるから。

「ありや」

寝癖が付いて、前髪が跳ねている。

「ティータ、櫛持ってる？」

「あつ、はい。結び直して差し上げますね」

「そう？じゃ、お願い」

黄金色の髪を梳く手に、祈るように心がこもる。

ただ、側にいられるだけでいい。

こうして触れ合ったり、直接励ましや感謝の言葉を掛けたりしてもらえれば、勿論嬉しくて、力になる。

けれど、元気な声で一言、日常の挨拶をしてくれるだけでも、誰か他の人と冗談を言い合って笑う声を聞いたり姿を見たりするだけでも、充分なのだ。それだけで、落ち込んでいた気持ちも、パツと明るく軽やかになる。

もう駄目だ、これ以上頑張れないと挫けそうになる時――気弱なティータにとっては日常茶飯事なのだが――彼のちょっとした微笑みや、何気ない一言一言が、いつも背中を支えてくれた。

恋人や奥方になりたいなどと、大それたことは望まない。ただ側にいて、ほんの少しだけ、勇気や希望をお裾分けにもらえればいい。気丈なアルマなどには大袈裟だと思われるかもしれないけれど、ティータにとっては、それがほとんど生きる原動力そのものと言ってもよかった。

「はい、出来ました」

「ん。有難う」

ラムザがいつも穏やかに、幸せに笑っていられますように。

そして、その笑顔を見続けていられますように。

ずっと、ずっと――。

……ただそれだけを望むのも、罪深いことなのですか。こうして罰を受けなくてはならないほど？

月明かりに青白く浮かぶ大天使の像に、ティータは心の中で問い

かける。

そうかもしれない、とも思えてくる。

ラムザ以外のどんな男性とでも幸せに暮らすことなど出来ない、
というのは、多くの高潔な騎士達、善良な農夫達に対して失礼な話
だろう。

傲慢な心が粉々に打ち碎かれるまで、礼儀も思いやりもなく踏み
にじられても仕方ないのかもしれない。と、自問自答してみる。

この当時、女性が自らの意思によらず貞潔を失った場合は、加害
男性を後付けで夫と認めるか、もしくは極刑に処すれば名誉回復さ
れ、社会的に問題なく生活出来る。

が、犯人が複数で拘束が長期に及ぶとなると、事情が違ってくる。
たとえば法的に名誉回復出来ても、社会復帰はほとんど不可能だ。

このことは、近代的な倫理観からすると理解し難いかもしれない
が、当時の社会情勢を考慮すれば、奇異とするには当たらない。

ごく大雑把に言えば、中世畏国イヴァリースにおいて、貞節とは夫婦間に求め
られるもの、それも一生涯ではなくその時々求められるものであ
り、未婚の男女については身分が低いほど重視されない——という
ことになるうか。

庶民は、恋愛結婚が基本である。これは自由や人権といった理念
の問題ではなく、切実な現実的必要性によるものだ。

家族が生活と生産の基本単位であるために、夫婦は互いに誠実に
協力し合うべきとされ、不義密通の罪は近代よりも嚴重に罰せられ
る。

だが逆に——というより、それ故にというべきか、未婚の間は何
度も恋人を替えるのも当たり前のことだ。

互いに人物を見極め、しっかりと気の場合伴侶を選び取らなけれ
ば、日々の農業手工業などの重労働を協調してこなしてゆくのは困
難であるし、貴重な労働力である何人もの子供達を一貫した方針で
教育することも出来ないためだ。

また、グレバドス教は基本的に離婚を認めないが、病気や事故、

戦争などによる死亡率の高い時代であるから、死別による再婚も多い。

したがって男女とも、その時々相手に誠実でありさえすれば、“前歴”は気にしないのが普通だ。一度や二度の不運な事件が経歴に加わっても、本人に非のないことさえ証明されれば、瑕疵とは受け取られないのである。

一方、王侯貴族や豪商などの富裕層では、妻子には労働力としての価値よりも、血縁に付随する土地所有権や財産権の方が重要視される。結婚は家と家の政治・経済的契約という意味合いが強く、本人同士の意思はあまり反映されず、また特に女性には娘時代から厳しく貞操を守ることが要求される。

ただ、こちらの世界においても、家の都合によって離婚・再婚を繰り返すことは珍しくなかったし、そもそも愛情と無縁であれば独占欲なども薄い。

知らぬ間に他所の種が混じるのは困るが、事件の経緯が明らかにされ、修道院で一定期間の潔斎を経るなどすれば——平たい話が、事件に由来する妊娠や病気の感染が無いことが保証されれば、問題なしと見なされたのだ。

歌や物語などに、生涯一人の人を愛し抜くといった主題テーマのものが数多く残っているために、それがこの時代の標準的な姿であるかのように思われることがあるが、逆である。一人の人だけと添い遂げることが難しかったからこそ、叶いがたい夢物語として人気があったのだ。

さて、しかし——。

例えば、一般市民の若者が募る片想いの末に腕力に訴える……というのと、山賊や海賊の集団が慰み者にするために女性をさらってきて監禁する……というのでは、事情が大きく異なってくる。

まず、盗賊や博徒などはその生活態度からして花柳病シヨックの罹患率が高く、加害者の人数が多く拘束期間が長いほど、それは被害者にも感染する危険性が大きくなる。また、精神的衝撃シヨックの深さから、日常

生活に支障をきたすほど情緒や行動が不安定になる事例も多々見られた。^{ケース}

社会保障の制度が未発達な時代である。身心の不調のために働けない、子が出来ないといったことは即、現在や将来の生活の困窮に直結した。

身分の上下を問わず、生活は厳しい。未婚であれば、全く被害者の落ち度ではなくても、そのような危険^{リスク}の高い娘を敢えて嫁に迎えるほど余裕のある家は無かった。

ある程度富裕な家庭の娘であれば、尼僧院に幾らかの寄進をして、余生を修道女として穏やかな祈りと労働のうちに暮らすことも出来た。

農民など庶民の娘であれば、大抵は実家に籠もり、もっぱら糸紡ぎや機織りなどの屋内労働だけをして過ごした。表に出れば、二次的な被害に遭ったからだ。

病気の正しい知識が普及しておらず、不潔がられて避けられることもあった。噂話などは田舎では隅々まで広まり易く、”本人に狙われるような隙があったのがいけない”といった心無いものは元より、例え同情的であっても、繰り返す事件を思い出させて心の傷を抉る。また、ひとたび”傷物”になった娘にそれ以上失う名誉は無いと思われてか、重ねて近在の男達から欲望のはけ口にされることもあったのである。

日当たりの悪い、煙や湿気のこもりやすい屋内に閉じ籠もるために、骨や肺の病などにも罹りやすく、短命になりがちだった。

それでも、家族が最後まで面倒を見てくれるなら恵まれている。身寄りが無ければ、あるいは家族から見捨てられれば、路頭に放り出されて野垂れ死ぬか、自ら身をひさぐしか生きる術が無くなることもあった。

ティータの場合は、兄のディリータが付いてくれるだろうし、ベオルブ家も全く無情に彼女を見捨ててくことはしないだろうと思われる。エストやクラリエッタが支援している女子修道院のいずれか

か、昔馴染みのワインバーグ夫妻の家にでも預けるぐらいの配慮はしてくれるのではないか。

それを思えば、神は極めて手荒な方法によってではあるが、ティータの願いを叶えてくれたのだと考えられないこともない。今だけ一生分我慢すれば、誰の妻になる必要もなく、苦手な大勢の人の集まる場に出る必要もなく、残りの人生をひっそりと静かに送ることが出来るのかもしれない……、が。

(……)

震えながら、ティータは迷っている。

そこにある毛布を拾おうか、拾うまいか。

生きたいか、死にたいか？

北天騎士団を信じていいのだろうか。何日か、何週間かすれば、必ず助け出されるのか。

騎士団には、人質が”ベオルブ家の姫”でないことは周知されているようだ。何度か騎士団の討手に遭遇したが、”なるべく”人質を助けようとはしてくれているものの、”何としてでも”助けようとするほどの熱意は感じられない。

騎士団の捜査網からこぼれ落ち、どこか遠くの花街や、外国の奴隷商人にでも売り飛ばされてしまったら？もう一生、懐かしい人々の許に帰ることはなく、何年も、ぼろ雑巾のように捨てられて死ぬまで苦しみ続けることになるのだとしたら――。

いや、仮に帰れたとしても、もう元の自分には戻れない。

じわじわと病に蝕まれながら、短い命を終えるのだとしたら。あるいは、もしもの場合、まだ自分だって子供とっていい歳なのに、誰が父親ともわからない子供を、責任と愛情を持って生み育てることなど出来るのだろうか。

修道女になったとしても、好きだった賛美歌の数々も、もう歌詞が虚しく心苦しくしか思われず、再び満ち足りた気持ちで歌う日は来そうにない。

ラムザはデイリータは、アルマは、どんな顔をするだろうか？以前

のように彼らと触れ合ったり、笑い合ったり出来るものだろうか――

答えの出ないことをぐるぐると考えているうちに……、

ティータが眠れずにいる気配を察知したのか、すぐ隣にいた男がむくりと体を起こした。

ゴラグロスと呼ばれている、誘拐犯達の指揮者^{リーダー}だ。

「……」

ゴラグロスは毛布を拾い、しっかりとティータをくるみ直すと、彼女の小さな背中に背中を押し付けるようにして、すぐに眠りに戻った。

(……)

また、否応なく命を引き延ばされてしまった。と、落胆するということとは、死んでしまいたい方に心が傾いているのだった。

犯人達の首魁^{リーダー}だというのに――いや、だからこそか――このゴラグロスという男が一番、ティータに気を遣っていると言えた。

といっても、同情だの、人道的配慮だのではない。そんなものがあるぐらいなら、とくにティータを解放しているだろう。貴重な人質^{ドライ}を死なせてしまつては元も子も無いという、無味乾燥な態度だったが。

水や牛乳が手に入ると、少量であってもまず必ずティータに飲ませようとしたし、なるべく雨風にも当てないようにしている。

一味の他の男達が全く無遠慮にティータに狼藉を働く中で、

――体力を無駄遣いするな。生き延びれば女なぞいくらでも抱ける。胸もケツも無いガキをいたぶって命を縮めるのは割に合わんぞ。……
と言って、必要以外に手を触れようとしらないのも、このゴラグロスぐらいだった。

追い詰められたぎりぎりの状況下でも冷静さを保っているが、彼の統率力をもってしても、自棄になって殺気立っている仲間達をなだめるのは至難の業だった。

どうせ明日にも死ぬのだ、と刹那的な憂さ晴らしに逃げ込もうと

する者。實際、この四日間で二十人近くの敗残兵達が合流したが、また同数ほど騎士団に討ち取られ、最初のベオルブ邸襲撃に加わった者はゴラグロスを除いては皆戦死しているほどだ。

かつて姉妹や恋人を奪われた報復なのだという者もいた。中には、売り飛ばして多少なりと軍資金に替えた方がいいと言う者や、見せしめのためにむごたらしく殺して陣頭に晒してしまえと言う者もいた。死者を大切に埋葬するグレバドス教徒ならば、死体になってもある程度は人質としての役を果たすからだ。

今後の行く先や戦い方を巡って、殺し合いの仲間割れさえ起こりかねず、指揮者のゴラグロスでも、よほど過激になっている者でなければ、

――まあ、好きにしろ。
と、強いて止めはしなかった。

夜間や、俄雨をやり過ごす時、各地の隠れ家アジトで仲間を待つ時など、彼らが休息を取る時は誰かしらになぶられるので、ティータは移動中にゴラグロスの韋駄鳥チヨコボの背でうつらうつら眠るぐらいしか出来なかった。

朦朧とした意識の中で、悔しいが、何度か彼を兄かと錯覚した。ティータの体に負担の少ないように、しっかりと支えている腕。仲間達を叱咤激励し、的確な指示を出し、絶望的に勝ち目の無い逃避行を敢然と指揮し続ける、力強い声。

敵だから恨めしいが、味方であれば頼もしかったろう。運命がほんの少しだけ違っていれば、兄のデイリータだって彼らの側にいて、このような存在になっていたかもしれない。

父のギータがたまたまバルバネスの知遇を得ることがなければ、そもそも、恵み豊かで余所者でも温かく迎えられるマンダレーナ村で暮らすこともなかったろうし、両親の死後、ラムザ達と兄妹同然に育てられることもなかった。

他人事ではないのだ。貧しさ故に売られ、あるいは権力や富を持つ者に虐げられてきた娘はティータであつたかもしれない、貴族達の

横暴に憤って立ち上がった戦士は、ディリータであつたかもしれないかった。

昨夜の明け方頃にゴラグロス^{ジャム}は、仲間達が眠っている隙を見計らって、壺の底に僅かに残っていた甘煮^{ジャム}をかき集めてティータに舐めさせようとした。戦火を逃れようと住民の避難した空き家で、前日のうちに見つけたが、仲間達に分けるには少なすぎるので隠していたらしい。

よりにもよって、木苺の甘煮^{ジャム}だった。ラムザの好物の。

「食えよ。ベオルブ家のお姫さんの口には合わんかもしれないが、そんなに傷んじやいないぜ」
突き付けられた匙^{スプーン}を、ティータは顔を背けて拒んだ。

「何だ、飢え死にたいのか？なら好きにしろ……と言いたいところだが、そいつはどうも気に入らん」

ティータのすぐ隣に腰を下ろしたゴラグロスは、低い声で話した。

「俺は是領^{ゼラモニア}の生まれだ。

ガリオンヌとは比べ物にならんほど、厳しい土地でな。山あいの畑は狭くて痩せているし、冬は長くて雪が多い。人食い凶獣^{ベヒーモス}や竜^{ドラゴン}も巣くつてる。

支配者がころころ代わって、権力を握った奴は、居座れる間に年貢やら女やら、絞れるだけ絞り取ろうとする。

兄弟親戚、何家族か固まって冬籠もりするんだが、春が来るまでに、一家から一人は飢えや病気で死ぬ奴を出した。

秋の収穫が終わるとな、毎年、人買いが村にやって来る。その年々の作柄によって、ガキを売るんだ。

歓迎されてたぜ。遊里に売られる娘なんか、本人も親も喜ぶんだ。きつい野良仕事もせず、綺麗な服が着られておまんまが食えて、家族の助けにもなるんだからな。

……そういう土地さ」

ティータも聞いたことはある。父のギータは、半分是領人^{ゼラモニア}だった。「俺のお袋はな。最初は是領商人^{ゼラモニア}の家に奉公に出て、そこの隠居

のじじいに孕まされて家に帰された。次に鷗国軍が村の近くに陣を構えた時に、兵士の子を生まされた。その後親父と一緒にあって、もう二人ガキが出来たんだが、親父が病気で働けなくなってな。家族を養うために、今度は畏国人イヴァリースの騎士の妾になって、それで生まれたのがこの俺ってわけさ。

イヴァリース その畏国人の騎士が、お袋と俺だけで良かったら、本国に連れ帰ってもっとマシな暮らしをさせてやるって言ったんだが。お袋は親父の側に居たがったし、親父も、ガキは五人とも同じように育ててたぜ。まあ結局、黒死病ペストでお袋と俺しか残らなかったんで、畏国イヴァリースに来ることになったがな。

涙一粒見せなかった……なんてほど、ご立派な母親じゃなかったぞ。だが、それなりに怒って泣いて……笑って、まあまあ普通に一生を全うしたさ」

ゴラグロスはティータの顎に手を掛け、ぐいと自分の方に向けた。「『自分は何にも悪いことなんかしてないのに』とか、思ってるのか。だがな、是領セラモニアほどでないにしても、下々のそういう暮らしの上に、あんたは飢えることも凍えることもなく生きてきたんだぜ。

あんたをなぶり殺すとか、色宿に売っ払って、自分の姉妹なり娘なりと同じ目に遭わせてやりたいって奴もいるが。俺はそんなもんは、不毛な腹いせに過ぎんと思う。それよりもしも、あんたがお屋敷に戻って、自分の命の重さをわかって生きていくことがあるとすれば……、少しは、救われる人間が増えるかもしれんさ」

ゴラグロスはもう一度、匙スプーンを差し出した。

「食えよ」

「……」

ティータは口を開けた。

「そうこなけりゃな。武門の棟梁と呼ばれる一族なら、女でも、不屈の魂とやらを見せてほしいもんだ」

さらってきた人間の言い草か。とは思ったが、謝られたり慰められたりするよりも、何故か、彼の言葉はティータを生き返らせた。

まだ、終わりではない。何か、自分に出来ること、果たすべきことがあるのではないか。

ティータも、アルマにしても、何も知らないというわけではない。見聞きしたことがある、というのと、我が身に体験するのでは、大きな隔たりがあるにせよ。

クラブバーティン修道院の世話になっていた頃。ある嵐の夜、一人の娘が狩人の手によって施療院に担ぎ込まれた。

一時的なもの慢性的なもの、複数の病気を併発して衰弱している上に、産み月間近だった。まだ十代前半だろう、あどけなさの残る顔をして、栄養不良のためか手足は細く痩せこけているのに、胸や腰回りだけが熟しているのが異様だった。

追々、多くを語りたがらない娘がぽつぽつと話したところをつなぎ合わせる――。

彼女は、辺鄙な山あいの、小さな農村の娘だった。

山賊に捕らわれて花街に売られ、半年ほどして、やっこの思いで逃げ出して故郷に帰った時には、家族は疫病で全滅していた。やむなく身を寄せた親戚の家も貧しく、彼女は再び、以前より更に条件の悪い安宿に売り渡されてしまったのである。

十分な食事も与えられず、狭い屋内に閉じ込められ続けたこと。

ろくに休息も出来ぬほど、一日に数多くの客を取らされたこと。安物の有害な化粧品を塗りたくられたり、繰り返し危険な中絶薬を飲まされたりしたこと。……などが重なって、二年と経たぬうちにぼろぼろに体を壊し、郊外の路傍に打ち捨てられたらしい。

もはや行くあても、動く気力体力もなく、三日ほどして灰山猫クアールの群れに食われかけていたところを、通りがかった狩人に救助されたのだった。

しかし彼女は礼を言うでもなく、虚ろな目をして、――放っておいてくれれば、あの灰山猫達クアールも少しはお腹が膨れたのに。

などと、むしろ狩人を咎めたそうである。

治療のためであっても、施療院の修道士達に体を触られることを嫌がるので、やむなく平信徒の女性職員と、アルマ、ティータで世話をした。

当時のティータには、水商売がどういうものかわからなかった。が、娘が自分と幾らも違わぬ歳で、筆舌に尽くしがたい苦勞をしてきたのだということは、察せられた。

娘はますます弱っていった。腹の子も生き甲斐となるよりは、重荷としか感じられないようだった。

生まれてきた赤ん坊が男児だったこともあり、どうしても乳をやるのが怖いと泣いて、一度も腕に抱くことのないまま亡くなった。

赤ん坊もまた、母親の栄養・衛生状態が悪かったためか、生後すぐに皮膚に発疹が出たり、ひどい下痢を起こしたりした。

牛や山羊の乳、砂糖水などだけでは栄養が足りないのです、本当はこのような子には、もらい乳をしてやりたい。しかし、この前年は不作で、付近の農村の女達の間でも、乳の出が悪いのが悩みだった。まだまだ母乳で育てた方が良い小さな子でも、粥や牛乳に切り換えなくてはならないほどで、他人の子にまで充分に乳を飲ませてやれる女はいなかった。

赤ん坊は日に日に痩せ衰えた。すぐに下しては腹を空かせて泣く赤ん坊をあやしなから、ティータも胸の塞がる思いだった。

この子は、母親を苦しめ、自らも苦しんで死んでゆくためだけに、この世に生まれてきたのだろうか？そんな命があってもいいのだろうか？

ところが――。

幼い母親が亡くなって十日ほど経った日のこと。木工職人の妻が、夫に連れられて施療院を訪れた。

赤ん坊を流行り病で亡くした後、心痛のために食事や睡眠が摂れなくなり、寝込んでしまったのだという。

結婚後長年の間、子が無く、諦めていた頃にやっと授かった赤ん

坊で、喜びもひとしおだっただけに、落ち込みも激しかった。再び子を授かるという望みも持てず、何事もする氣力が失せてしまったらしい。

赤ん坊がいなくなってから乳が溜まって、胸が痛いと言うので、^{クレリック}神官医達はこの夫人にもらい乳を頼んでみることにした。

しなびて猿のようにしわくちゃの顔をした、かさぶただらけの赤ん坊である。気持ち悪がられるかと思ったのだが、男児を抱き取った夫人の目に、パツと生氣が戻った。

――まあ、まあ、可哀想に。辛かったわね。よっぽどお腹が空いていたのね。ああ、こんなに一生懸命にお乳を飲んでいるわ。よしよし、いい子ね。強い子ねえ。……

母親を亡くした孤児だと聞くと、夫人はすぐに、熱心に頼み込んだ。だ。

――下さい、この子、私が育てます。

木工職人は渋い顔をした。

――何もこんな、やせっぽちの、病氣の子をもらわなくなつて。

と言ったのは、養子を取ること自体に反対なのではなくて、明日にももう一度亡くしてしまい、夫人が一層悲しむ結果になるのではないかと心配したためようだ。

――病氣だからこそ、守ってあげる人が必要なんじゃないやありませんか。

と、夫人も頑固だった。

ひとまず、夫人には施療院に留まって療養してもらおうと同時に、無理のない範囲で赤ん坊の世話を頼むこととなった。

出来るだけでいい、と言ったのに、何もせず体を休めているよりも、赤ん坊の世話をする方が、夫人は元気になるようだった。夜中でも厭わずに起きて乳をやったり、まめまめしく襁褓を替えたり体を洗ってやったりした。

一ヶ月ほどすると、夫人はすっかり体調も回復し、表情も明るくなった。

男児も赤ん坊らしく、ぷっくりと肉付き良くなり、土気色だった肌もつやつやした薔薇色になった。引き続き飲ませなければならぬ薬はあるものの、今日明日にも命が危ないという状態からは脱した。

木工職人は大層喜んで、男児を正式に養子に迎えることを決めた。施療院の職員達に何度も礼を言って、幸せそうに肩を寄せ合って帰って行く親子を見送りながら、ティータも嬉しかった。

神様の計らいつて、ちゃんとあるんだわ。

あの少女の幸薄い、短い人生も、これで少しは報われたろうかと思っただ。

ならば、自分が今苦境に置かれていることにも、何か意味があるのだろうか？

あるのだ、と思いたい。

(少なくともアルマがさらわれていたよりは、ましよね)

本物の”伯爵令嬢”であるアルマが誘拐犯達の手に落ちておれば、心配し、悲しむ者ははるかに多かったろう。

しかしそのことは、ティータの”手柄”と考えてよいものかどうか……。

襲撃事件のあった日の朝、アルマとティータは体のだるさを感じながらも、身支度を終えたばかりだった。

”曲者”、”敵襲”といった叫び声や、物の壊れる音が聞こえてきた時、ティータはすぐに助けを呼ぼうとしたが、アルマがサツと口を押さえて止めた。

アルマは流石、騎士の娘というべきか、肝が据わっていた。

異状があったなら、屋敷の警備の者は黙っていてもアルマの部屋に駆け付けるはずだ。まずは、襲撃者達に気付かれないに越したことはない。人を呼ぶのは、見つかったからだ。

アルマはティータに目配せし、卓子や鏡台、^{テーブル}長持などを動かして、扉と窓を塞いだ。賊徒が扉を叩き割って乱入すると、椅子や花瓶な

どを振り回して勇敢に応戦した。ティータも、薪や文房具など、手当たり次第に投げつけた。

——どっちだ？

と、賊は仲間で迷っていた。しかも、殺すのではなく、少女達を生け捕りにしようとしている様子だった。

ということは、ここが”令嬢”の部屋であることを知っていて、さらいにきたのだ。

今こそ、何としてでもアルマを守らなければ。

——ザルバッグ兄さん！ダイスダーク兄さん！助けてッ！！

ティータは賊を自分の方に引き付けようと、声を振り絞った。

だがアルマも、ティータを身代わりにすることを潔しとはしない。

——わたしは”天騎士”バルバネスの娘！盗賊ごときに捕らえられはしないわッ！

すぐに、負けじと叫んだ。

——……どっちなんだ！？

——両方ひっ捕まえろ！

と、いうことになった。

結局、ティータは一足先に韋駄鳥チヨコボの背に乗せられてしまい、襲撃者達の会話から、アルマは間一髪でザルバッグに助けられたと知ったのだった。

少しは、アルマを救うための時間稼ぎになったろうか。

しかし、アルマは必死に、怯まずに抵抗していた。一人でも充分、身を守りきれたのではないかという気もある。ティータはアルマを気に掛けつつも、恐怖で体が強張ってしまい、襲撃者達に大した痛手ダメを加えることは出来ていなかった。

とすると、ティータは一人勝手にどじを踏んで、むしろアルマ達に迷惑をかけてしまったのかもしれない、とも思えてくる。

（本当に駄目ね、わたし……）

被害者のはずなのに、何だか自分が悪いことをしたようで、いたたまれなくなる。

アルマに申し訳ない。もう、彼女の女官になることは不可能になってしまった。幼い頃からずっとティータの面倒を見てくれた親友に、ろくに恩返しも出来ず、ベオルブ家を去らねばならないのは、心苦しい。

ディリータにも。アルマに仕えるか、どこかの騎士の妻になるかすれば、兄の仕事の手助けも出来たはずなのに。この先は、全くの荷厄介になってしまう。

ティータは、兄の立身出世の志の強さを知っている。ディリータは、面と向かって足手まといだなどと責めはしないだろうが、ティータの存在が枷となって万全の力を発揮できなくなれば、矢張り悔しがるに違いなかった。そんな兄の姿を見るのは、辛い。

そして、ラムザは……。余人は”たかが平民の召使い”と思っても、ラムザはあくまでも”我が妹”のこととして悲しむだろう。

自分のせいで、彼に悲しい顔をさせたくない。

ラムザには、いつも笑っていてほしいのに。自分は彼の笑顔から力をもらうばかりで、笑う力になってあげられなくて――。

(……)

ティータは目を瞬かせた。

いや。そうでもないのだろうか。

――大丈夫。怖くないよ。……

ふと、石の壁に響く声が耳に甦った。

「先に行つて。その方が安全だよ」

狭い、暗い螺旋階段を怖々登るティータの背を支えるようにして、ラムザは付いてきた。

「この上からの眺めが、ドラコニア城で一番だと思うんだ。アルマにはもう見せてあげたんだよ。この前一度、勝手に修道院を飛び出して帰ってきちゃった時にさ」

裏門の両脇を固める円塔の屋上に、更につき出している、細い見張り塔の中だ。

初めてドラコニア城で過ごす、新年祭休暇の始まりのことだった。階段を登りきると、頭上にぽっかりと丸く、高い青空だけが見えた。次の※宝瓶の月（※太陽暦一月下旬〜二月中旬）でようやく六歳になるティータの背丈は、まだ塔の屋上の城壁に届かなかったのだ。

「よいしょっと」

後から来たラムザは、ティータの頭が自分の頭よりも高くなるように抱え上げた。

「わあっ……!!」

ティータは歓声を上げた。

眼下に、ドラコニアの城下町が一望出来る。家々からの薪の煙で、街の上空にはうっすらと灰色の蓋が被さっているようだったが、高い丘の上に建つドラコニア城の、更に塔の天辺の空気は、きっと冷えて清々しかった。

城壁の上の歩廊や、中庭を歩く人々の姿が、指人形のように小さく見える。

城の裏手のイルギリス川は、近郊の村々や森の間を縫って東西に長く伸び、銀の飾り紐リボンのように輝きながら流れていた。

住み慣れたマンダレーナ村はここからは見えないが、峠に近いレーゲンデの街の城壁と、大修道院の鐘楼は、それとわかった。

はるか彼方には、レナリア台地の山々が青く霞んでいる。

「きれい……!!」

「だろ？秋の、雨が降った次の日の朝だと、もっと綺麗だったんだよ。空気が澄んで、遠くまでよく見えてね。森も畑も、キラキラ光ってて……」

本当はさ、この城壁の上に座ると、最高に気持ちいいんだ。でも、ティータには危険過ぎるよね。見張りの人にもよるけど、大抵、僕でも見つかると思われちゃうんだよな」

城壁に座るところか、一人だったら、この屋上に立ってちよっと外を見下ろすだけでも、ティータには怖かったろう。だが、ラムザ

の肩にしっかりとつかまっていれば安心で、爽快な気分になれた。

「気に入ってもらえた？」

「うん！とっても！」

ティータがにこにこして答えると、ラムザもにっこりと、満面の笑顔になった。

「良かった！ここに来るといつも、ティータにも早くこの景色を見せてあげたいなって、思ってたんだ」

「……いつも？」

「うん。いつも」

では、自分はいつでも、彼の側にいたのと同じだ。

クラバーティン修道院にいる間、ティータはずっと、ラムザと兄から離れているのが心細くて仕方なかった。だが、院長やアルマに心配を掛けたくなくて、不安を表に現せず^{ハート}にいたのだった。

しかし、今のラムザの言葉を聞くと、寂しさが春の雪のように溶け、ひたひたと幸せな気持ち^{ハート}が満ちてきた。彼が見せたかったという秋のドラコニアの風景も、一緒に見たように心に思い浮かぶ気がした。

ティータはラムザの首にぎゅうつと抱き付いて、黄金色の髪に頬を押し付けた。いつもの、石けんと香草の匂^{ハート}いが鼻をくすぐった。

……

あの日の光と風と、腕の温もりは、今もティータを包み込んでいる。

——大丈夫だよ。僕はいつでも、側にいるよ……。

さっき夢の中で聞いた、あれは多分、真実の声なのだ。

夢現に何度か、骸旅団の男達のものではない優しい手が、そうっと励ますように背中や髪を撫でてゆくを感じたことがある。

ただティータの方で、ラムザのことを思い出して勇気付けられているだけではなく、きっと、彼の方もティータのことを想ってくれているのだろう。

どんなに小さくとも、ラムザの中には確かに、ティータだけが占めている居場所があって、彼が喜ぶ時悲しむ時、共に寄り添ってほんの少しだけ苦楽を分かち合っているのだと思う。

不意に、ティータの目に涙がこみ上げてきた。

それは先程目覚めた時とは違って、このような状況にも係わらず、温かい喜びの涙だった。

（生きて……いたい！）

もう一度、あの声が聞きたい。あの笑顔に会いたい。

もう一度でいい、あの腕に抱き締めてもらえれば、ただそれだけで――、

（きつと……これからも、生きてゆける……）

ティータは目を閉じて、浅い眠りに就いた。

どこまで描こうか悩みに悩んで、結局、じっくりたっぷり描き込みました。

”辛”部分も、もっとさらっと流したくもなりましたが、しっかりと描きました。遠い野蛮な時代の話、ではなく、戦争や貧困絡みで現代でも続いている問題ですので……。うー、ほんと、人身売買とか撲滅されてほしいです。

それに、この物語にはもう一人、もっと確実にアウトな女の子がいます。年格好だけでなく性格まで似てそう（気弱そう）なので、ラムザはきつとティータを重ね見て、『放っておけない！』気持ちにさせられたらと思うのです。彼女の救いをちゃんと描くためにも。

一方で、”甘”部分の激甘っぷりも半端じゃありませんでしたね。あまりのくしゅぐったゝさにKOされた男性読者の皆様が死屍累々……。でしょうか。

今後、恋愛シーン等では少女漫画チックな描写を含みます。苦手な方はご注意下さい！？

？－6－〔6〕 風車小屋 ？ミルウーダのために

ゴオオ……オオ……。

バタバタ……ギイイ……ガタン。バタバタバタ……ギイイ……ガタン。

風車が絶えず回り続けている。

フォボハム領との境界に近い寒村の、村外れの粉挽き小屋だ。

フォボハム平原の沿海部では、ラーナー海峡から吹きつける北西の風が年中強い。粉挽きや揚水の動力として、大きな風車が海に向かって幾つも建てられていた。

休みない騒音と振動の中に転がっているティータの耳に、途切れ途切れの話し声が聞こえてきた。

「いいのか？ウィーグラフ。それは……」

「いいんだ」

立て付けの悪い扉の開く音。

「お前達、外に出ろ」

「しかし……」

「出ろッ」

ティータの監視に付いていた二人の男は、部屋の外に出た。扉が閉まる。

「おい、しっかりしろ。私の声が聞こえるか？」

太い、逞しい腕がティータを抱き起こした。

ティータは、また失神していたらしい。

目を開けて、見知らぬ男の顔を間近に見ると、一瞬恐怖の色を浮かべて体を硬くしたが、すぐにすうつと人形のように無表情になった。

「お前の兄が、すぐ側まで来ているそうだ」

ハッ、とティータの褐色の瞳の焦点が、目の前にいる男の顔に合った。

兄と聞いて真っ先に思い浮かべたのは、当然ディリータのことだ。だが、ティータはベオルブ家の令嬢だと思われるはずだ。だとすれば、”兄”というのはザルバッグのことだろうか。北天騎士団の主力隊が近付いているのか？

それとも、まさか……。

「ほんの数人の小隊でお前を追ってきたらしい。無茶な御曹司だ。若いな。……だが、それだけお前の身を案じているということだ」

ティータの目に涙がにじんだ。

(ラムザ様……!?)

四角張った顔立ちの男は、頷く。

「連れ帰ってもらえ」

男は、ティータのむき出しになった肩と胸に、緑の婦人服ワンピースを被せた。

「これに着替えろ。……私の妹の服だ。他に女物など無くてな」

ティータの細い両肩に手を置くと、ふっと痛ましそうな顔付きになる。

「お前は……妹よりずっと小さいのだな」

少しためらったが、節くれだった大きな手をティータの頭に載せ、黒髪を撫で付けた。

「何も余計なことは考えるな。ただ真っ直ぐに、兄の許に帰れ。お前が生きてさえいれば、兄は必ず喜ぶ。わかったか？」

こくん、とティータは頷いた。

”よし”という風に男はちょっと微笑んで、ティータを縛っていた縄と猿ぐつわを切った。

差し出された革袋の水筒から、ティータはごくごくと貪るように水を飲んだ。が、半分ほど飲み干して、この水は貴重なのではないだろうかと、口を離した。

”敵”が相手でも、無意識のうちに遠慮を働かせてしまう少女なのだった。

「心配いらん。井戸の水だ。まだいくらでもある。好きなだけ飲

め」

ティータは、水筒の水をほとんど全部飲んだ。やっと、人心地が付いた。

男はもう一度、ティータの肩を軽く叩く。

「決して早まるな。兄を信じろ。もうじき、この村に着くはずだ。いいな？」

ひたとティータを見つめて言い聞かせ、怯えた、傷付いた目の中にも生氣のあることを確かめると、立ち上がって隣の部屋に出ていった。

扉の向こう側で、直後に、ゴラグロスの怒った声が聞こえた。

「何のつもりだ、ウィーグラフ」

「それは私の台詞だッ！」

先程の男——ウィーグラフも怒りを爆発させた。が、その後は二人とも声を抑える。

ぼそぼそした会話の内容は、風車の回る音に紛れて、ティータには聞き取れなくなった。

「何故、娘を誘拐した？」

ウィーグラフはゴラグロスを睨む。

「我々が逃げるためには、人質を取らざるを得なかったんだ」

「逃げるだけならば、途中で解放することも出来たはず。……むごいことを！」

ウィーグラフは、漆喰のひび割れて？がれ落ちかけた石積みの壁に、拳を押し付けた。

ゴラグロスはそのぽを向いて、彼らの総大将リーダーを斜に見やる。

「お前、アイリーンのことを忘れたか？」

「忘れなぞせぬ……だからこそだ！」

たとえ貴族であっても、女子供を闇雲な報復の対象にはしない。それが、我々骸旅団を凡百の野盗とは隔てている誇りだったはずではないか。

感情的な腹いせのために非力な者を虐げるのが、志ある士おとこのすることか？

ゴラグロス、まさか、お前まで……！」

「ギユスタヴと一緒にするのか！」

なら聞くが、感情的な自己満足のために仲間を危地に追い込むのが、志ある士おとこのすることか？」

「何？」

「よく考えてみる、ウィーグラフ。」

我々骸旅団は仲間の大半を失い、今も北天騎士団に包囲されている。この窮地を乗り切るためには、またとない切り札になるぞ。あの娘はベオルブ家の令嬢だからな！」

と、ゴラグロスはティータを閉じ込めた部屋の扉を振り返った。

「今更あの有様のお姫さんを返したところで、火に油だぞ。」

包囲網から逃げ切るまでお付き合ひ願おうぜ。何かの交換条件を引き出すなり、盾にするなり、危なくなればなるほど役に立つ。もし無理な攻撃に巻き込んで殺すことでもあれば、非難は騎士団の側に集まる。その方が結果的に、骸旅団の評判も落とさずに済むだろうよ」

ウィーグラフは首を横に振る。

「逃げてどうする？ いや、どこへ逃げようというのだ？」

とつくに再起の道なぞ閉ざされている。我々の最後の戦いを、卑劣な行いで汚すな」

「ちょ……っと待て！」

ゴラグロスはウィーグラフの腕を引き、四方の見張りに立ったり仮眠を取ったりしている仲間達から出来る限り遠ざけて、声を低める。

「最後だど？ まとまってどこかに潜伏して、じっくり巻き返しチャンスの機会を窺うために、生き残りをかき集めてるんじゃないのか？」

「どこからそんな甘い見通しを持てるのだ、ゴラグロス。」

残念ながら、我々は天下を一新するほどの勢力にはなれなかった。残された戦力や資金では、どう悪足掻きしたところで、ほんの数ヶ

月ばかり終わりの時を引き延ばせるだけだ。その間になりふり構わぬ略奪や破壊行為に走れば、我々は単なる盗賊に成り下がり、革命軍としての存在意義を無くしてしまう。

それよりも、最後まで義を守って戦い抜く姿勢を貫くべきだ。そうすれば、骸旅団の名と業績は後々まで語り継がれ、後に続く者達を奮い立たせる力とも、指針ともなれるだろう。我々の命を越えた先で、革命を成し遂げることが出来るのだ。現状で思い描き得る勝利の形は、それしか無い。

ただ生き長らえることだけを目的とするならば、エルムドア侯爵を無条件で解放したと思うか？ギユスタヴを粛清した時から、私の覚悟はわかっていたのではなかったのか」

「おいおい、聞いてないぞ！」

「我々是我々の子供達のために、未来を築かねばならない。同じ苦しみを与えぬためにも！」

我々の投じた小石は小さな波紋しか起こせぬかもしれないが、それは確実に大きな波となる。たとえ、ここで朽ち果てようともな！」

「我々に”死ね”と命ずるのか？」

「ただでは死なぬ。一人でも多くの貴族を道連れに！」

「バカな！犬死にするだけだ！！」

「いや、ジークデン砦には生き残った仲間がまだいるはずだ。合流すれば一矢報いることは出来よう！」

「ウィーグラフ……」

ゴラグロスは拳を握り締め、こつん、と軽くウィーグラフの頭を殴った。

「おい、固い固い。相変わらぬ石頭だ」

大袈裟に顔をしかめ、痛そうに手を振る。

「ゴラグロス！？ふざけている場合では……」

「ま、そこがあんたらしいと言やあんたらしいんだが」

眉間に縦皺を寄せたウィーグラフを、ゴラグロスは鼻で笑った。

「※竜は死して牙を残す（※ ^{ドラゴン} 虎は死して皮を残す）……か。そ

の路線で行くとしても、あんたは最後まで生き延びるべきだぜ。

アトカーシャ王家の始祖・デナムンダ？イヴァリース世王はゼルテニア王に十九敗したが、最後に一勝して畏国を統一した。若い頃には、ほんの十数騎の味方とドルボダル湿原を落ち延びて、泥水をすすったこともあるそうじゃないか。

最後の最後までわからんさ。あんた一人でも生き残っていれば、骸旅団は終わりじゃない。また何度でも生まれ直せるだろうよ。あんたが、骸旅団の魂いのちそのものだと言っている。

それにな。それで結局は死ぬとしてもだ。始めっから綺麗に幕を下ろすことを考えて、こごんまりまとめようとしたって、月並みなお伽話にしかならんぜ。本当に人の心を掴んで揺さぶることが出来るのは、最後の一瞬まで諦めずに泥臭く努力し続けた奴の物語だと思う」

「ゴラグロス……」

「まだ諦めるには早い！たとえば、ラーナー海峡の海賊とつなぎを付ければ、ロマンダ呂国に亡命出来るかもしれないぞ」

「しかし、奴等は利にさとい。敗残の我らを匿うよりは、北天騎士団に引き渡して謝礼に換えようとするだろう」

「そこで、あのお姫さんが役に立つんじゃないか」

「あの娘はもう放してやれ。これ以上、骸旅団の名誉に泥を塗るな」「とっくに泥まみれだ。……俺にも不意だったんだがな。殺気立ってる連中になぶり殺しにさせないだけがせいぜいだった。

だが、まとめて”泥”をこそげ落とす方法があるだろう。俺を斬れ」

「！！」

ウィーグラフは目を見開いた。

「本来なら、あんたの方からそう仕向けていてもいいところだ。そうすれば、人質を最大限に有効利用できて、かつ、骸旅団とあんたの名に傷が付くこともない」

「ゴラグロス……。私は、同志を捨て駒にするつもりはない。死ぬ

時は、皆と諸共だ」

「そういうあんただから、生き残る価値があるんだがな！」

ゴラグロスは笑った。

「俺だって、簡単に死ぬ気はないぞ。……というより、とことん生き抜いてやるつもりでいる。そうだな、他には……組織的に我々を支援してきた連中に、何とか脅しをかけられないものかと考えている。俺らが捕まれば芋づる式だぞ、ってな」

「……お前も、気付いていたか」

「ああ。今まで個別に協力してくれているものと思ってきた奴らが、一斉に、やけに跡形もなく手を引きやがった」

「ゴルターナ公の工作員が、政敵の力を削ぐために陰で糸を引いていたものかと思うが……」

「いや……、どうも、やり口に貴族らしからぬ匂いがする。」死の商人” ともか……」

「”武器王” バリンテン大公の差し金か？」

「そうだったら、フォボハム領に逃げ込むことも出来そうだな。なに、尻尾はつかめなくても、つかんだフリをしてハツタリかましてやるさ」

「つくづく図太いな、お前は……」
ウィーグラフは苦笑した。

「とにかく、死ぬなんてことは考えるな。あんたが生きてる……少なくとも、生きてる可能性があるってだけで、”伝説”の効果はでかくなるぞ。たとえあんたが死んでも、あんた本人だとか息子だとか名乗る連中が続々旗揚げしてくれるさ。

ってことで、万が一死ぬ時は、死体を粉々に爆破して誰だかわからなくするぐらいの後始末はきちんとなつてろよ」

本気とも冗談ともつかぬ、齒に衣着せぬ物言いに、ウィーグラフは久し振りに声を立てて笑った。

「わかった。心掛ける」

ゴラグロスは膝を打ち、立ち上がった。

「よし。じゃ、話がまとまった所で、行くか。これ以上は誰も来ないようだ。ここも、そろそろ引き揚げ時だろう」

が、ウィーグラフは腰を上げない。

「……。もう少しだけ、待たせてくれ」

「……ミルウーダを、か？」

「……」

「泣き所だな、あんたの……」

ゴラグロスは頭を振った。

「戦士としてのミルウーダは、無能だとは言わん。が、大将自ら危険を冒してまで回収するほどの人材じゃないだろう。」

「……どうしても言うのなら、俺が残る」

ウィーグラフは胸を押さえ、唇を噛んだ。首にかけた首飾りの、^{ペンダント}ミスリル銀の鎖が、チャリ、と鳴った。

「いや。それには及ばん。もう、潮時だ」

ウィーグラフも立ち上がった時、見張りの一人が叫んだ。

「誰か来るぞ！ 味方だ！」

ゴラグロスはウィーグラフの背中を叩く。

「待った甲斐があったかもしれんぞ」

ウィーグラフとゴラグロスは、風車小屋に到着した者達を迎え入れた。剣士の男と、魔道士の女が一人ずつだ。

「なんだとッ！ ミルウーダが殺^やられたというのか！ ミルウーダ……」

「ベオルブの末息子と戦って、俺達の他は全員……」

と、男は項垂れた。

彼らは一旦戦闘から離脱した後、引き返して仲間の死亡を確認してきたのだった。

”ミルウーダと共に討ち死にすべきだった”と叱責されると思つてか、二人とも蒼い顔をしている。

「すまない」

「いや……お前達の歯が立つ相手ではなかったのだろう。無為に命を捨てるよりは、来てくれて助かった。これから、力になってくれ

……」

ウィーグラフは握り拳を震わせた。

「ウィーグラフ様、ミルウーダの命を奪った小隊がここへ来るのも時間の問題です」

「わかった。ここを撤退する。ジークデン砦に向かうぞ！」

間を置かず、別の見張りが叫んだ。

「敵襲ッ！！北天騎士団のヤツラだーッ！！」

「チッ、早いな！」

ウィーグラフは窓から身を乗り出し、目を凝らした。

八頭の韋駄鳥チヨコボが砂塵を蹴立てて、平原を駆けてくる。うち、二頭は人を乗せていないようだ。

先頭を走る白韋駄鳥チヨコボの毛並みが、強い海風のために透明に晴れた日射しの中、眩しく煌めいて目立っている。

「ここは私が食い止める。ゴラグロス、お前は他の仲間を率いてジークデン砦を目指せ。」

娘はここへ置いていけ！」

「敵は少人数だ。全員で叩き潰そう」

「ミルウーダを殺ったほどの戦士だ。頭数だけつぎ込んでも、無駄に死人を増やすばかりだろう。決戦に備えて、一人でも多くの戦力をジークデン砦に集めた方がよい」

ウィーグラフは、先程までティータの監視に付いていた男達を振り返った。

「お前達二人は、私と来い」

「え……」

「あの娘の兄だ。やましい所が無いならば、共に戦え」

「……」

二人は無言でウィーグラフに従う。

「他の者達は今すぐ発て！」

命令すると、ウィーグラフは表に飛び出す。

「よし、急げ！」

ゴラグロス仲間達を裏口から出した。

最後の一人に、

「ちよっと先に行つてろ。すぐに追い付く」

と声を掛けると、奥の物置部屋に引き返す。

(どうしよう、どうしよう……)

もうすぐラムザに会える。きっと、ディリータも一緒だろう。

いざ待ち望んでいた時が近付くと、改めて様々な不安が湧き上がって、ティータは居ても立ってもいられなくなった。

自分は今、どんな顔をしているだろう。どんな顔をすればいいのだろうか？

鏡と櫛が欲しい、と思ったが、鏡を見れば、やつれた自分の姿に絶望が深まりそうな氣もする。だが、いつ如何なる時でも、少しでも身綺麗にして愛しい人の前に立ちたいと願うのが乙女心だった。

井戸があると聞いた。せめて顔を洗っておきたい。といっても、泥や垢を洗い流したところで、体にこびり付いた”汚れ”はもう落とせないが――。

それと思うと、我が身をかきむしって、蛇のように丸ごと皮を脱ぎ捨ててしまいたくなる。

本当は下着こそ替えたかったが、表向きだけでも整えられるのは有難かった。

ずっと縛られていたためにまだ覚束無い手付きで、ティータはそろそろと緑の婦人服ワンピースに着替えた。

(これ……花嫁衣装だわ)

意匠デザインは、ちよっといい普段着か余所行きかという程度の簡素なものだ。が、生地が上質で織り模様に華がある。丁寧な縫い目の一針一針に、心がこもっているのがわかる。

しかし、所々仮縫いのままで、袖を通した様子がない。婚礼は行われなかったのだ。

あの男の妹はどうなったのだろうか。

ただ、何かの事情で婚約が解消されただけだろうか。だがそれならば、そんな縁起の悪いものを後生大事に取っておくだろうか。見れば、折り畳まれた状態で色褪せたり、染みが付いたりした跡がある。もう何年も経っているのだ。

それとも、妹は亡くなり、その形見だったのだろうか。これは、彼にとって大切なものではなかったのか？

（どうして……わたしに）

もう、花嫁衣装を着る機会など来ないだろう娘に……。

追い詰められ、死にゆく者から託された、”生きよ”という希望なのかもしれない。

この服をくれた、がっしりとした体格の男は、ウィーグラフと呼ばれていた。では、彼が骸旅団の指導者なのだ。

たまたま交代で見張りに付いた男が、憐れんで逃がしてくれる気になったわけではない。首領の決定した^{トツ}ことならば、急いでこちら立ち去る必要もないだろう。むしろ、ラムザ達が見つめてくれるまで出歩かない方が安全だろうと思われた。

緑の婦人服は^{ワンピース}ティータには大きすぎ、歩けばずると裾を引きずって踏ん付けてしまいそうだ。ティータは土の床に座り込み、今脱いだ服を、なるべく汚れや破れを目立たぬように中に折り込んで畳んだ。

（本当に、来て下さるなんて……）

一秒でも早く会いたい、が、顔を合わせるのが怖くもあった。もしもラムザに疎んじられたり、泣かれたりしたら、ティータはもう消え入りたくなってしまう。

けれども、多分、ウィーグラフの言った通りだ。

会えば、何はともあれ、ラムザはまず喜んでくれると思う。いつものように明るく、優しく微笑んで、抱き締めってくれるだろう。そうなればきつと、胸がいっぱいになってしまつて、予め何を考えていても無意味だ。

態度を取り繕うことも、何かを語ることも必要ない。

ただ彼の胸にすがって、思い切り泣こう。

ディリータやアルマに怒られるかもしれないし、今更のようにティータの想いを知ったラムザに困惑されるかもしれないが、もう構うものか。

どうせ、これが最後の機会なのだ。戻れば間違いなく、ベオルブ家を去らねばなくなる。せめて今だけ、イグーロスに帰るまでの束の間だけでも、心ゆくまでたっぷり甘えよう。そうするぐらいの権利はあると思う。

「敵襲ッ！！北天騎士団のヤツラだーッ！！」

叫び声が聞こえ、ティータはハッと、俄に別の不安をかき立てられた。

ウィーグラフはああ言ったが、ただティータの身柄が引き渡されるだけで済むものだろうか。骸旅団の戦士達が、”ベオルブ家の御曹司”を討ち取ることを主張したら？あるいは、ラムザやディリータ達が、復讐を望んだら？

(どうか、……)

ティータは習慣的に指を組んだが、彼女を守ってくれなかった神に、ラムザ達の無事を祈る気にはなれなかった。

(……)

ぽっかりと空いた胸の空白に、別の不安が忍び込む。

何事もなく戦闘を切り抜け、ティータを連れ帰ったとしても、そもそも命令違反なのではないか？

ラムザ達は、盗賊団一斉討伐作戦に参加中だったはずではないか。それも、無断でエルムドア侯救出に乗り出したことへの償いとしてだ。

今度こそ、重い処罰を受けてしまうのではないか。

あるいは、それとも……？

(まさか……、これきり、ベオルブ家には戻らない覚悟で？)

不安が一転して、甘やかな期待に変わる。

”伯爵令息”としての地位も、将来も捨てて、ただティータを救

そんなはずはない、彼はそんなことをすべきではない……. と思いつつも、心躍ってくるのは、この花嫁装束のためだろうか。

どこか遠い、誰にも見つからない所で、羊を飼ったり葉を練ったりしながら、共に暮らしてゆくことが出来るのであれば。ティータは一生かけて、ささやかながら彼の幸せのために力を尽くすつもりでいるが……。

ノック
打擲の音もなく、物置部屋の扉が開いた。

しかし、ラムザ達が来るには早過ぎる。

何をしに来たのだろう？

何かまだ、ウィーグラフの指示で、渡す物や言っておくことでもあるのだろうか。

「……」

「悪いな、お姫さん」

（大將はああ言ったが……）

1016

駒は、みすみす手放す気になどなかった。

後で責めるなりなじるなり、如何様にでもしてくれればいい。命あつてこそだと、ゴラグロスと思う。

どんな手段を用いても、少なくともウィーグラフだけでも生き延びさせなくては……。

（俺達はまだ、終わっちゃいない……。死んでたまるか！）

風車小屋は、川を背にした崖っ淵に建っていた。

野石を積み固めた階段を挟んで上と下に、ウィーグラフ達骸旅団の戦士と、ラムザ達見習い騎士は顔を並べた。

ウィーグラフの”聖剣技”の的にさせないために、少年達は鞍から降りて、韋駄鳥達チヨコボを離れた所に待たせている。

「お前達は……あの時の士官候補生達か？」

ウィーグラフは数奇な巡り合わせに驚く。

赤魔道士ベリンダを除いた五人は、”砂ネズミの穴蔵”からエルムドア侯を救出した時に、一度ウィーグラフと対面している。

「まさか……、お前達が、ミルウーダを倒したというのか……！」

「ミルウーダ？」

と、ラムザは聞き返す。

「ここに来る前に、吊り目の、狐色の髪の女剣士と戦ったろう……。彼女の名はミルウーダ。私の妹だッ！」

「えっ……！！」

今度はラムザの方が、驚愕に言葉を失った。

（ミルウーダ……あの人の名前……あの人の兄さんは……ウィーグラフ!?）

ディリータが叫んだ。

「ティータを、俺の妹のティータを返してくれッ!!」

「ティータ? あの娘のことか? ならば、お前がベオルブ家の?」

ぎろり、とウィーグラフはディリータを睨む。

「彼はベオルブ家と関係ない! 僕がベオルブの名を継ぐ者だ!」

ラムザのよく透る声が、強風と風車の回る音にも負けず響き渡った。
「……成る程。ゴラグロスが間違えたか。だが、全く無関係ではあるまい？」

「ベオルブ家に関わる者ならば皆一緒と言いたいのか？」

「違うとでも？どちらにしても、あの娘は解放するつもりだった。人質に取りはせぬ。」

だが、その前に決着をつけよう！あの娘を返して欲しくば、私を倒してからにするがいいッ！！」

ウィーグラフは右手で剣を抜き、左手に小型の丸盾ラウンドシールドを構える。

「ウィーグラフ！ミルウーダは……、」

言いかけて、ラムザは口をつぐんだ。

自害したのだ。などと、どうして言えよう。

彼女は誰に討たれたのでもない、戦士としてあくまでも強く、誇り高かった……という誉め言葉のつもりだったが、責任逃れのようにも聞こえる。

それに、同じく妹を持つ兄として、我が妹が兄を庇うために自ら命を捨てたと知れば、彼がどれほど悲しむだろうかと思ったのだ。

（ベリンダさんは、彼女は兄さんだけでなく僕のことにも庇ったのだと言った……。

彼女を死なせたのは、説得出来なかった僕の力不足のせいだ）

ラムザは唇を噛み、言い直した。

「彼女は……僕が殺した」

「そうか。……ならば、退くわけにはいくまい。妹の仇を討たせてもらおうかッ！！」

ウィーグラフの闘気が膨れ上がる。

ざわり、と見習い騎士達は肌に粟を生じた。

ウィーグラフの強さは恐らく、北天騎士団団長であるザルバッグにも匹敵する。
バーティ

一行の中で最も強いラムザでも、ザルバッグにはつい最近、やっ
と練習試合で一勝したばかりだ。それも、デイリータと二人掛かり

で、ザルバッグは闘気技である”破軍剣”を使わず通常の物理攻撃のみで戦うという、手加減付きでのことだ。

しかし、今のウィーグラフは心底からの殺気を放っている。遠隔攻撃も可能な上に回避も出来ない、強烈な闘気技である”聖剣技”も、容赦なく振るってくるだろう。

彼の本気の剣の前に、どこまで持ちこたえられるか――？

(ミルウーダ……！)

今聞いたばかりで呼び慣れない名で、ラムザは心の中の女剣士の面影に呼び掛ける。

精一杯、ウィーグラフの怒りと悲しみを受け止めようと思った。

受け止めきれると、自惚れたわけではない。ただ、そのように努めることが、今の自分が彼女に出来る、せめてもの返礼だと思ったのだ。

「お前……ベリンダじゃないか!?」紅蓮の魔女”ベリンダが貴族に尻尾を振るとはな!」

骸旅団の戦士の一人は、赤い髪の女魔道士を見知っていたようだ。

雇い主であるラムザは知らなかったが、それなりに名の通った傭兵であるらしい。

「あたいは貴族につかないんじゃないかと、つまんない男につかないだけさ。ベオルブの坊ちゃんも貴族だけど、いい男だよ!」

「貴族にいい奴なぞいるものか!面喰いめ!」

仲間は罵ったが、ウィーグラフはベリンダの台詞に、さもあるうと思う。

”砂ネズミの穴蔵”で出会った時から、この一見女のように優しげな美少年が只者ではないとは感じていた。”武門の棟梁”ベオルブ家の一員と聞いて、納得がいった。

「まだ、名を聞いていなかったな。ベオルブの?」

ウィーグラフが、一步階段を下りる。

少年も剣を抜き、じり、と一步前に出た。

「ラムザだ。」天騎士”バルバネスの三男、ラムザⅡベオルブ」

「ラムザ、か。……覚えた！」

視線と視線、剣の切っ先と切っ先が互いを捉え合い――、ピタリと静止する。

雲が飛ぶ。風車が回り続ける。

時が、流れてゆく。

（強い……、強いわ、こやつ……。武門の棟梁の名、伊達ではない）

”砂ネズミの穴蔵”でウィーグラフは、少年達を倒すのが不可能だとは思わなかった。が、簡単なことだとも思わなかったのである。あの時、ラムザには殺気が無かった。エルムドア侯の無事さえ確保出来れば、ウィーグラフを倒す意思は無いようだった。が、この華奢な、金髪の少年が本気になれば、負けぬまでも腕の一本ぐらいは捨てねばならないだろう、と感じた。

ウィーグラフは骸旅団の指導者^{リーダー}という立場柄、不必要な危険は冒すべきではないと判断して、あの場では衝突を避けたのだ。

（嬉しい……。のか、俺は……）

今は、戦う理由のあることが。

あの時も、ピリピリと肌を刺すような緊張感が快かった。

戦士としての血が騒ぐ、というのだろうか。

久々に、一軍の将としての責任を離れて、一剣士として剣を交えてみたい強者に会った。それがまさか、エルムドア侯でもザルバツグでもなく、まだ彼の半分ほどの歳月しか生きていない少年だとは……。

（一体どういう修練を積むと、たかが十五、六の小僧にこの目が出来るのか……）

少年は澄んだ目をしている。波静かな、深い水の面を覗くようだ。彼の仲間のうち、小柄な魔道士の少年と、矢張り魔道士らしき少女とは、ウィーグラフの闘気に圧倒されて、立っているのもやっただ。

目付きの鋭い銀髪の少年と、女魔道士ベリンダは、気圧されつつも闘志を奮い立たせようとしている。

あの囚われの少女の兄だという黒髪の少年は逆に、猛り、逸る心を静めようとしている。

ただベオルブ家の少年一人が、己の内から湧き上がるものにも、外から攻め入ろうとするものにも乱されず、平静を保っているのだ。子供のように真っ直ぐな目。

……いや。子供はただ、恐れを知らぬだけだ。恐れを知って恐れぬ者——これは、”勇者”の目だ。

（こいつと戦って死んだのなら、最後まで戦士として命を全う出来たのだな。ミルウーダ……）

彼ならば、戦士としての誇りを尊重し、正々堂々礼と力を尽くして戦ったろうし、敗者に徒に苦痛や屈辱を与えることも無かつたろうと思われる。

（が、礼は言わぬぞ）

私怨私憤の吹き荒れるに任せて、易く倒せる相手ではない。

静かにラムザと睨み合っているウィーグラフの心も、冴え冴えと澄んでくる。

ナツシュの栗色の髪の生え際から、たらたらと冷や汗が伝い落ちる。

黒魔法であれば、剣の間合いの外から先制攻撃を仕掛けられるように思われる。が、実際に出来るものならば、戦い慣れたベリンダがとっくにそうしている。

呪文を唱える隙が無いのだ。

距離はある、とはいえ、呪文の詠唱に入ってから発動するまでの間に駆け寄ることは充分可能だ。発動前に斬られるか、効果範囲に味方を巻き込んでしまう危険性が大きい。

ハッ……ハアッ……。

ナツシュは口を開け、肩で呼吸し始めた。

これは、彼が少女のサーシャよりも気力体力に乏しいことを示すものではない。

サーシャは骸旅団の男達に相手にされておらず、”余波”程度にしか闘気を浴びていないためだ。

確かに、白魔道士のサーシャは、今回は全くの戦力外だろう。彼女の体術や櫓オークスタッフの杖では、ウィーグラフと他二名の熟練の戦士達には、かすり傷一つ負わせられまい。身を守り、仲間の回復役に徹するしかない。

ギイイ……ギイ……ゴ……トン。

ふとした拍子に、風が弱まり、風車が止まる。

ピイイーロロロ……。

どこか遠くで、トンビが鳴いた。

ナツシュの集中力が一瞬途切れた、その瞬間――。

”不動無明剣”ッ!

ウィーグラフの裂帛の気合いと共に、衝撃波が襲いかかった。

「……あう……ッッ!」

ナツシュは雷精錫サンダーロッドにすぎり、それでも体を支えきれずに、ずるりと地面に突っ伏した。

「オオーッ!」

「タアーッ!」

ラムザとディリータが同時に走り出す。

ウィーグラフも一気に階段を駆け下りた。

ガッ!!

すれ違いつつ、ウィーグラフはディリータの剣を丸盾ラウンドシールドで受け流し、ラムザに剣を振り下ろす。

キンッ!

ラムザはその剣から力を吸収し、己の攻撃力に転化して、間髪入れずに斬り上げる。が、すんでの所でウィーグラフの丸盾ラウンドシールドに弾かれた。

(何だ、今のは!?)

ウィーグラフは肝を冷やしたが、

(防がれるなんて!!)

ラムザの背筋にも寒気が走った。

ケルガー師仕込みの返し必殺技、” 嵌め取り”^{ハメド}だ。

相手の攻撃を防御・回避しつつ、その動作を反撃につなげる。この技の速度^{スピード}に対し、更に防御や反撃が出来るほどの反射神経や勘の持ち主は、滅多にいない。

ラムザは、この最初の一撃に全神経を集中させていたのに――。

僅かながら勝機があるとすれば、手の内を知られる前に、” 嵌め取り”^{ハメド}で多少なりとも痛手^{ダメージ}を加えておくことだと思っていた。

高所から攻撃してくるウィーグラフの初手は、打ち下ろしだろうと予想がついていた。はつきりと剣の軌道が読める、絶好の機会^{チャンス}だったのだが。

これで、勝率はぐっと低くなった。

が、動揺している暇はない。

ビュッ!

ウィーグラフの剣が、唸りを上げてラムザの脇腹をかすめた。

(これにもかわすかッ?)

(返せないッ!)

矢張り二撃目以降は、回避するだけでも至難の業だ。返し技を掛ける隙を与えてくれそうにない。

ギンッ!!

ラムザの撃ち込みを、ウィーグラフは今度は剣で跳ね返した。

(重いッ……)

(速い!)

一流の戦士ならば、得手はあっても不得手は無い。

ラムザは痩身で、力任せの戦い方はしないが、といって基礎的な筋力の鍛錬も怠ってはいなかった。

ウィーグラフはウィーグラフで、中肉中背よりはややずんぐりして見えるほど、がっしりと骨太な体格だ。が、筋肉や関節は柔軟だ

し、神経の反応も鋭敏で、立ち回りは素早い。

「ハッ！」

ラムザとウィーグラフが三たび剣を交える、その斜め後ろからディリータが斬りかかる。

ウィーグラフからは完全に死角のはずだ。決まった、かに見えたが――、

バンツ！

ウィーグラフは盾でラムザを吹っ飛ばし、ディリータに交差攻撃を仕掛ける。ディリータは、間一髪でかわした。

（う、後ろに目が付いてるの！？）

傍で見ていたサーシャは、目を見張る。

否。ウィーグラフはむしろ、ディリータには一顧だにせず、ひたすらラムザのみに意識を集中していたのだ。

ラムザとディリータの連係攻撃は、コンビネーション一対の光と影のようなもの。

二人同時に目で追おうとすれば惑わされるが、一方のみに細心の注意を払っておれば、それを完璧に補うもう一方の動きは、長年の経験による勘が正確に教えてくれる。

二人ぴたりと息が合っているための、思わぬ弱点……、もとい。足並みが乱れれば、一人ずつは瞬く間に撃破されてしまうだろう。

二人の強みが最大限に発揮されていてもなお、ウィーグラフは一人で彼らと互角以上に戦えるのだった。

サーシャではとても、手出し出来る力量レベルにない。

ナツシュの肩を抱えて支えながら、

「プロテス物理防御”」

彼と自分に防御魔法をかけると、後は仲間達の戦いを見守るばかりだ。

ウィーグラフの相手は、ラムザとディリータが引き受けるしかないとして。

左右の手に一本ずつ中剣を持った男とベリンダが、両手で長剣を

構えた男とガストンが、それぞれ対戦する。

カンッ！

長剣を弾き上げ、ガストンは敵戦士の懷に飛び込む。

「トオーッ！」

殺^とったり。と思つたが――、敵は片手を柄から離し、ガストンの股ぐらを狙った。

「！！」

ガストンは飛び退く。

（やーね、婿入り前なんだから……ってか？）

心の中で軽口を叩き、余裕を持つとうとするが、どつと冷や汗が吹き出した。

この男は、組み打ちの技も得意らしい。剣を両手で構えているのは、いつでも、どちらの手でも離して素手の攻撃に移れるように、だったのだ。

^{ミノタウロス}牛鬼でも絞め殺せそうな、太い指だ。喉でも金的でも、握り潰されれば一発であの世行きだろう。

ガキンッ。デインッ！

「くっ」

しかし、掴まれることを恐れ、間合いを保って戦おうとすれば、両手持ちの力強い斬撃に押されてしまう。ガストンの剣は^{レイピア}刺突剣ほど突き技に特化したものではないが、細身で、叩き斬るような使い方には向いていない。

^{スピード}攻撃力は、剣に載せられる力や体重に対しては単純に比例するが、速度に対しては二乗に比例する。

ガストンの戦法は、思い切り良く突進しなければ、威力が激減してしまう^{タイプ}性質のものだった。この男とは相性が悪い。

勝利するには、掴まれる暇もないほどの^{スピード}速度と、一撃で確実に仕留めるだけの力をこめて大胆に踏み込まなければ――。

隙を窺うガストンの五感^は、鋭く研ぎ澄まされた。と……、ふわり。ごく微かな甘い香りが、鼻腔をくすぐった。

(なっ……!?)

この香りには、覚えがある。

控え目で、口数少なく、うつ向きがちだったティータ。”伯爵令嬢”ながら悍鳥で、じゃじゃチョコつついついからかいたくなるアルマとは別の意味で、高嶺の花という感じがした。

寂しげな、儚げなはにかみ笑いに似つかわしく、匂い袋の香も柔らかに上品な物だった。

その……移り香。

(こいつ!!)

足が、手が、勝手に前に出ていた。

ビィッ!

ガストンの剣は、敵の肩を浅くかすり、袖を切り裂いただけだ。バリッ。

固い爪が左頬を掻き切り、三本の赤い筋を付けた。ほんの少しかわし損ねておれば、目を抉られていただろう。が、ガストンは瞬きもしなかった。

ドクン、ドクン……。

耳の奥に鼓動の音が響いている。

心構えはしていたつもりだった。だが、いざ現実を突き付けられると、怒りと呼ぶのも生ぬるい衝動が血管を駆け巡った。

ガストンだって、幼少の頃から散々、”悪ガキ”だの”いじめっ子”だのと言われてきた類の人間ではある。

生意気だと思えば子供でも”鉄拳制裁”したし、お高く留まった女の子を泣かせたり、偏屈な年配者に一泡吹かせてやったりすれば胸がスカッとする。

しかし、本当に困っている者、力無い者をいたぶる趣味はない。隔離病患者に石を投げたり、目が見えぬ者から杖を取り上げたりするような輩は”百倍にして”懲らしめてやったし、迷子を負ぶって半日親を探し歩いたこともある。

”仁義ある不良”なのだった。

ティータのように繊細な、いたいけな少女を傷付けて平然として
いられる――ましてや愉しむことが出来る者の気が知れない。

ギリ、とガストンは齒軋りした。

義侠心か、同情か友情か、何と名付けるのかはわからない。ただ、
未だかつて経験したことがないほどの激情が、ガストンを突き動か
した。

即ち、

（死んでもコイツはぶっ殺す！！！）

ザッ。

ウィーグラフはラムザの脛を蹴って足払いを掛けようとしたが、
ラムザはかわし、逆にその足でウィーグラフの太腿を蹴る。

バシッ。

ウィーグラフの膝が沈みかけたのも一瞬、すぐに踏み止まる。

（ッ！”お行儀の悪い”奴だ）

試合剣術の規則ルールに馴染んだ者が、咄嗟に取れる反応ではない。

（崩れないか！）

ラムザの脚は、舞踏ダンスの歩法ステップなどは踏めないが、喧嘩ともなれば多彩
な蹴り技を自由自在に繰り出せる、立派な”凶器”なのだが。

（矢張り……）

（強い……！）

鳥肌の立つほどに。

双方、予期した以上の手応えを感じている。

だが――。

（私は……負けぬ）

（僕は……負けない）

カッ！

剣と剣とが、輝く残像の尾を引いてぶつかり合い、白刃が真昼の
陽光をキラキラと四方にまき散らす。

（（ミルウーダー！！））

？－6－〔6〕 風車小屋 ？ミルウーダのために（後書き）

ゴラグロスのキャラが原作と違います。が、やることは変わりません。というか、むしろこの方が自然なのではないかと思ったので。

原作のゴラグロスは自分一人助かろうとして、ウィーグラフの命令を無視します。でもそれだったら、わざわざ袋のネズミになり、ジークデン砦に向かうよりも、ティータを盾に包囲網を突破して、フォボハム領やロマンダに高飛びしそだな、と。（そうしようとして失敗し、やむなく砦方面に追い詰められたのかもしれませんが……）

それに、『あんたは生き延びるべきだぜ』という台詞。これを誰からウィーグラフに言わせる必要を感じたので。

この要素が無いと、後々の彼の”変節”が非常に見苦しくなります。（いや、だからそういう話なのかもしれませんが……）

でも、自分のためではなく、死んでいった仲間達のために何としても諦めるわけにはいかない……という責任感から出たものだと思えば、彼の行動にも一貫性があることになります。

ウィーグラフは、ラムザの最大のライバルですからね！（生き様的にはディリータの方だろうけど……）ちゃんと筋の通った、身心ともに強い奴であってほしいものです。

ところで、『スピードの二乗に比例云々』と理屈っぽい話を持ち出しましたが。元がゲームだけに、どうせ現実離れした技が出まわります！

バトル中って、本当はほとんど条件反射の世界で、あんまし冷静に解説とか感想とか挟んでる暇もないはずですし……。

少年漫画のノリで読み流して下さい。

「う……う……」

ナツシュの食いしばった歯の隙間から、かすれた呻き声が漏れる。本当は、のたうち回って絶叫したいほどの痛みだ。が、そうしようにも体の自由が利かないのである。

全身の神経が無秩序な信号を発信している。刺すような痛みや、押し潰される重圧感、焼けつく熱さや氷のような冷たさなどが一遍に襲ってくるのは、半分は神経が過剰反応しているためだったが、もう半分は、激しい引き付けを起こして実際に筋繊維があちこちで断裂しているのだった。

ウィーグラフの”聖剣技”を叩き付けられて、体内を巡る”気”の流れをバラバラに寸断され、金縛り状態になってしまったのだ。

肉体的な異常ではないので、”浄化”^{エスナ}では解消出来ない。自然に”気”の流れが整うのを待つしかない。

サーシャが”回復”^{ケアル}の魔法をかけてくれたために、物理的な損傷^{ダメージ}に由来する痛みは軽減された。が、あれこれと考える余裕が出来たことで、かえって苦しくなったようにも感じる。

（矢っ張り、無謀だった……のかな？）

士官学校^{アカデミー}への入学に反対した、祖父の言葉が思い出される。

——ナツシュ。人には向き不向きがある。基礎研究というものは地味で、すぐに画期的な成果が目に見えるわけではない。だが、地道な積み重ねの中から、日々の暮らしや戦に役立つ技術が生まれてくるのだ。”象牙の塔”に籠もって愚にも付かぬ研究に明け暮れている、という批判があるのは承知しているが、ここが我々にとっての”戦場”だ。……

体力の乏しいナツシュが前線に立つ魔法戦士を目指すよりも、高い魔力と旺盛な向学心を活かして学者になった方が、はるかに才能を発揮できるのではないか。……と、王立魔法院の学長である祖父

は論した。

頑なに決意を翻そうとしないナツシュの背中を押してくれたのは、父だった。

——思った通りにやってみなさい。やらずに後悔するよりは、やって失敗した方が、得るものは多いだろうから。……という、消極的な理由からではあったが。

（ラムザ君達と肩を並べて戦おうなんて、過ぎた望みだったのかな。役立たず……どころか、足を引っ張るだけなんだろうか……）

このまま投げ出し^{ギラアップ}て地面に倒れ伏してしまえば、体は楽になるだろう。

でも。

（非力だ……って認めることと！諦めることは違うよ！お祖父様！）

ナツシュは雷精錫^{サンダーロッド}を突き、ふらつく足に力を込めた。サーシャの肩にすがりながら立ち上がる。

たとえ考え直すべきなのだとしても、今はその時ではない。目の前で、友が命懸けの戦いをしているのだ。

（ぼくも戦うつ……！何か、何か今のぼくに出来ることを見つめるんだ！）

ウィーグラフは丸盾^{ラウンドシールド}の縁で、ディリータの胴を薙いだ。

「ぐっ……」

ディリータは腹に力を込めつつ後ろに飛んで、衝撃を逃がす。

体勢を崩したところに、剣による攻撃が迫る。

カシインツ。

ディリータは辛うじて、剣の鞘で弾いた。鉄拵えの鞘が割れる。

「オオッ！」

ラムザが斬りかかり、ウィーグラフの注意を自分の方に引き付ける。
（まずい）

ウィーグラフにはもう、見抜かれている。ほんの何十分の一秒か

だが、ディリータの方がラムザよりも反応が悪いのだ。

本来、体力ではディリータの方が若干上回っているはずだが、今は心身に疲労を溜め込んでいるためでもあるだろう。

が、そもそも、二人は戦法が違うのである。

ラムザ達の剣の師・ケルガーには、決まった教え方の型が無い。弟子の素質に応じて、訓練の内容を^{メニュー}変えていた。

ドラコニア城で修行を始めたばかりの頃、めきめきと腕を上げていくように見えるラムザを羨んで、ハールーシャが自分も同じ練習がしたいと言ったことがある。

しかしケルガー師は、三人の少年達の特徴の違いを説明し、ラムザと同じ練習をしても同じように強くなれるわけではない、と断った。

即ち――、

何か一つの技を教え、百回練習させたとする。

一つのことを考えながら、百回違う動きをしてみるのがラムザ。

一つの動きをしながら、百回違うことを考えるのがディリータ。

百回同じことを考えながら、同じ動きをしようとするのがハールーシャ。

……だというのだ。

――どういうことだ？

と、ハールーシャが更なる解説を求めると、ケルガー師の曰く。

ラムザは理想的な姿勢^{フォーム}を追求して、あれこれと少しずつ違う動きを試し、微修正を繰り返す。そのため、一度修得した技の完成度が非常に高いのが長所だ。

しかし、早い段階で完璧な動作を身に付けるので、悪い動作のどこが悪いのか――裏返せば、敵の弱点や隙がどこなのか、体で覚える暇がない。

あるいは、この先色々な相手から技を教わったり盗んだりする時に、元の使用者でも技が不完全なこともある。素直すぎるラムザ

は、それと気付かずに悪い癖までそっくり模倣コピーしてしまう恐れがある。

……といったことが、短所といえば短所と言えた。

そこで、敢えて正解を与えずに自分で工夫させたり、間違った動きを教えてどが悪いのか考えさせる、といった練習も必要になってくる。

さて一方。ディリータは一つ新しい技を習うと、他の技からどうすれば効果的につながるか、相手の使ってくる武器や技との相性は……といった使い勝手をとことん考える。

そのため、様々な状況を想定した応用的な課題を数多くこなすことで、技の使い道を広げ、より有効な手札として活用出来るようになってゆく。

——僕が一番、バカで単純だってことか。

と機嫌を損ねたハールーシャを、ケルガー師はなだめた。

——そうではござらん。それぞれの役割に相応しい性質に恵まれていると申せましょう。お一人お一人、そのまま伸ばしてゆけば良からうと存じます。……

前線で直接士卒を指揮する将となるラムザには、意図した通りのことを着実に実行する・させる技術を磨く必要があるだろう。参謀役となるディリータは、剣術に限らず何事につけ、あらゆる事態に備えて幅広く対策を考えるのを習慣にしておいた方がよい。

そして、次代のラーグ公であるハールーシャには。

戦士や、勇将、智将としての能力は、あつて悪いわけではないが、必須ではない。

総大将として、どっしりと構えて将兵を督励し、不動の心の拠り所となるのが最も重要な務めと言ってよい。

単調とも思われる稽古を忍耐強く続ける、基礎的な根気や体力を鍛えれば必要充分だ。

なまじ小才があると、現場に任せた方が良いことにまで手出し口出ししてしまい、部下の人材を活かしきれないことにもつながる。

それにハールーシャは、体格や膂力は人並みよりも優れて成長するものと見込まれる。

必ずしも、数多くの技を知っている者が強いとは限らない。ハールーシャの場合は、少数の基本的な技に絞り込んで必殺技の域にまで高めた方が強くなるだろう。今から修練を積み重ねれば、大人になる頃には”来る技がわかっていても防ぎようがない”水準^{レベル}になることも可能だ。

——ラムザやディリータでも？

——左様ですな。

——そういうものか！

と、ひたすら基本の反復練習に励む、矢張り単純かもしれないハールーシャだった。

ディリータは多種多様な”技持ち”である分、ほんの僅かではあるが、ラムザよりも一つ一つの技の練度が低い。※数分の一寸^{カーク}（※一センチメートル未満）の見切りのずれが、何十回、何百回に一回という程度の命中率・回避率の悪さとなって現れる。

”低い”といっても、同年代の少年達の中では一級品^{トップクラス}の腕前ではある。

^{アカデミー}士官学校の学友達との試合や、雑兵相手の戦闘であれば全く問題ない。が、ウィーグラフのような超一級の戦士と競り合えば、”紙一重”が命取りになる。

ディリータはまた、身分柄、そして自分の方が技巧^{テクニック}で上回っているという自負心から、無意識のうちにラムザに合わせようとしてしまう。どうしても、一瞬遅れてラムザに続く形になりがちだ。

更には、選択肢が多すぎるために刹那迷ったり、最適とは言えない技に接続^{スイッチ}したりもし、かえって隙を作ることもあった。

（……っ）

焦りから生じる気の揺らぎを、ウィーグラフは見逃さない。

（いけない！）

ウィーグラフの呼吸から”聖剣技”が来ると悟ったラムザは、咄嗟に丹田に気合いを溜めた。

「”北斗骨碎打”――！」

「破ッ――！」

パシィンッ！

闘気と闘気がぶつかり合い、耳には聞こえない音がはじけた。

（効いたっ！）

ザルバッグの”破軍剣”の見様見真似だ。闘気技である”聖剣技”は回避のしようがないが、矢張り闘気技である”破軍剣”で威力を減殺することは出来るのではないかと思ったのだ。

効果は本家のザルバッグより遙かに劣るとはいえ、ディリータは少なくとも、即死の脅威からは免れた。

（そんな技も使うか！）

ウィーグラフは武者震いし、一步下がって剣を構え直す。

（……）

助けられたディリータは感謝するよりも、こんな時ながら、まだまだ底知れぬラムザの才能に、羨望と嫉妬を感じてしまう。が――、

「ディリータ！ 僕らは友達なんだ――！」

「ッ――！」

ラムザを。ディリータ自身を。そして、二人で共に積み重ねてきた時間を信じて。

胸の内の邪念を吐き出すようにフゥッと深呼吸すると、ディリータは駆け出した。

（む！？）

ディリータの動きが良くなったのが、ウィーグラフにもわかった。ラムザに合わせようとする意識を捨てたのだ。

ドラコニア城で騎士道修行を始めてから早九年。マンダレーナ村で棒切れを振り回して合戦ごっこをしていた頃から数えれば、十一年来の相棒である。互いの戦い方の癖は、体で知り尽くしている。今更合わせようなどと思わずとも、自然に動くだけで息は合う。

何十分の一秒かの時間差が消えた、だけではない。

ラムザが主でディリータが従、という役割分担の固定もなくなり、一瞬先に仕掛けたディリータの攻撃をラムザが援護するなど、剣の応答がより柔軟になった。

ヒュッ。

ディリータの剣の切っ先が、ウィーグラフの耳たぶを切る。

初めて、軽傷ながらウィーグラフの体に剣が届いた瞬間だった。

(ほう……)

だが、流れ落ちる血の熱さが、ウィーグラフをもまた加速させる。
(面白いッ！)

「っ！！」

ガストンは左肩に、ともに斬撃を受けた。肩当ての上からではあったが、骨にひびが入ったようだ。膝にも痛みが走る。

身を沈め、衝撃を和らげつつ受け流すべきところを、無理に踏ん張ってしまったのだ。前に出ようとする気持ちが強すぎるのである。

(くそッ……！)

直前まで危ぶんでいたディリータと、同じ状態に陥っている。いや、常に一步引いて冷静さを保つことを心掛けているディリータに比べると、血の気の多いガストンは、感情の制御がずっと下手だ。

強い想いは、訓練の時には集中力や忍耐力を高めてくれるだろう。が、実戦本番においては、余計な気負いや力みは邪魔物にしかない。

怒りに我を忘れて狂戦士バーサーカーのようになってしまえば、攻撃力や速度スピードは多少上がるかもしれないが、無駄に体力を消耗したり、我が身や味方を傷付けるばかりだ。判断力を失っては、特に、格上の相手には勝てない。

ガストンもそうだが、ラムザとディリータの組コンビも、ベリンダも、それぞれが五分五分よりも手強い敵と対戦している。ナッシュが復活してやっと、僅かに優勢と言えるかどうかだ。これ以上一人でも

脱落すれば、連鎖的に全員が負けてしまう。怯んでもいけないが、慎重を期さねばならない。

左肩を傷めても、利き腕ではないので著しく不利になったわけではないが、これで諸手突きは使えなくなった。右片手で、得意の三段突きを主力に戦うことになる。

ヒュン、ヒュッ。

左右、上下に揺さぶりをかけ、隙を作って止めを刺す。勿論、一撃目、二撃目もただの目眩ましではなく、三下であればそれだけで充分仕留められるほどの攻撃力はあるのだが――。

ビュンッ！

かわされた。

「！！」

右腕を絡め取られかけ、強引に振り解く。袖が千切れた。

戦型を讀まれ始めている。

力を絞り尽くした三撃目の後は、どうしても体勢が崩れがちだ。つまり敵にとっては、三連撃をしのぎできれば、逆に格好の反撃の機会が訪れることになる。

(……)

焦っては勝機がますます遠ざかるが、焦るなという方が無理だ。

一体、どうする――。

と。トン、とベリンダが背中にぶつかり、百八十度くると回転して、強制的に対戦相手を入れ替えた。

「！？」

文句を言う暇も無い。

キ、キィンッ。

二刀流の男の連続攻撃を、ガストンは左右にさばき、反射的に踏み込んで突きを繰り出す。

男は飛び退ってかわした。

ベリンダの炎撃鞭では、二刀流の男の固い防御を崩せず、攻めあぐねていたのだった。

が、成る程ガストンならば三段突きの応用で、二刀の攻撃をかくぐってなお反撃を仕掛けられる。二刀流は守備にも威力を発揮するが、懐きりぎりに飛び込んだ時の対応手段を考えれば、組み打ち術の男よりは攻略しやすいと言えるだろう。

一方、近い間合いの方がより危険な組み打ち術の男に対しては、ベリンダならば炎撃鞭や魔法で距離を置いて攻められる。

これで、少しは分が良くなった。

ヒュウッ。バシンッ。

ベリンダは長剣の攻撃を鞭で牽制し、間合いを取りつつ、口の中で呪文を唱えている。

並みの魔道士であれば、呪文の詠唱だけに専念しなければ魔法を完成させることが出来ない。予め防御魔法を掛けておくか、味方に庇ってもらうかでもしなければ全く無防備になってしまうところだ。武器の扱いにも長けた赤魔道士ならではだろうか。

ジュッ！

組み打ち術の男が、手の皮が焼け焦げるのも構わずに炎撃鞭フレイムウィップを左手で掴んだ。力任せにベリンダを手許に引き寄せつつ、右手の長剣を振りかぶる。

戦い慣れた戦士ならば、魔法発動の頃合いタイミングはわかる。発動前に斬り伏せるか、術者本人も効果範囲に巻き込んで相討ちに持ち込むか、することも可能だが――、

「魔法反射」ッ！

ナツシュの声が響いた。魔法の盾がベリンダを包む。

ベリンダは、かえって懐に飛び込んで体当たりをかける格好で、

長剣をかわした。

「雷撃」ッ！

バシィッ！！

電光が、長剣から伝って大男の全身を駆け巡ったが、見えない盾に守られたベリンダは無傷だ。

「……、」

男の手から長剣が落ちた。膝から崩れ落ちながらも、男は力を振り絞り、ベリンダの首と胴を羽交い締めにして引き倒す。

「……っ！」

ベリンダは咄嗟にどちらにも腕を挟んだので、一瞬で骨をへし折られるのは何とか免れた。

が、反撃の手段も失ってしまった。腕を外そうともがくが、びくとも動かず、怪力に締め上げられて息が詰まる。

ナツシュが急ぎ呪文を唱え始めたが、間に合うかどうか。しかし――、

「やーっ!!」

サーシャが駆け寄って、思い切り櫂オークスタッフの杖を振り下ろした。

普通の状態であれば、かすりもしないだろう。が、今は、地面に倒れて動けない男の顔面を直撃した。

それで充分だった。

僅かに緩んだ腕の隙間から逃れて、ベリンダは跳ね起き、腰の中ミドル剣ソードを抜く。

「ええいッ！」

男の腹に突き立てて、止めを刺す。

ビクン、と体を痙攣させた組み打ち術の男の目から、すうっと生氣が消える。

「助かったよ」

下がって咳き込みながら、ベリンダはサーシャに礼を言った。

（やれやれ、心中なんか御免だよ！ラムザ坊ちゃんぐらい好い男となら別だけどね！）

だが、一息つく間もない。

「ベリンダさん！狙えますか？」

ナツシュが叫んだ。

「任せときな！」

返事を聞くや、ナツシュは呪文を唱え始めた。

「……暗雲に迷える光よ……、」

ベリンダは、ガストンと二刀流の男との攻防を注視しながら、踊るように足踏みステップを踏んだ。

「……我に集い、その力解き放て！」サンダラ 雷撃” ツー！”
パシンッ……。

魔法の雷はまずベリンダに当たり、見えない盾に弾かれて――、
ビシャアッ！

ガストンと交戦している二刀流の男に、背後から襲いかかった。
直接狙ったのではガストンも巻き込んでしまうため、”魔法反射リフレク
”のかかったベリンダを介して、魔法の発動地点を調節してもらったのだ。

ガストンにも”魔法反射リフレク”をかけてから敵を直接魔法攻撃する、
という手もあった。しかしガストンには魔法がかかりにくい上に、
かかったとしても、既に何ヶ所か負傷している彼に対し回復魔法も
使うことが出来なくなるのは、得策ではないと考えてのことだ。

カツ、キインッ。

すかさずガストンが追加攻撃を仕掛けたが、魔法を浴びつつも、
二刀流の男は左右の剣で防いだ。

ヒュンッ。

三撃目をかわし、反撃に転じようとするが――、

「ウオオオォーッ！！」

ガストンはつんのめるようにして、更にもう一步踏み込んだ。

執念の四段突きだ。

ガストンの剣が敵戦士の喉を突き破った。が、ガストン自身も姿
勢を崩し、足を滑らせて転倒した。

受け身を取って立ち上がったガストンは、ヒョウツと鋭く口笛を
吹き、身震いする。

最後の攻撃が外れておれば、ガストンの方が危なかった。捨て身
の一撃だったが、力を出し惜しんでは勝てなかったらう。

さて、ラムザ達とウィーグラフの戦況はどうかと、振り返ると――
――。

「!！」

ラムザとデイリータは、息つく暇も与えずにウィーグラフを攻め続けている。ウィーグラフは防戦一方に回っているかに見えた。

が、これはミルウーダ戦の時と正反対だ。一見押しているように見えるラムザの方が、絶望的に形勢が悪い。

二人が百分、いや百二十分の力を出し尽くしているのに、決定打はおろか、有効打すらろくに入っていないのだ。

ラムザの頬に赤味が差し、息が弾んできている。ウィーグラフはまだ、呼吸を乱していない。いずれ少年達の方が体力を切らし、手詰まりになった時が、即ち敗北の時だ。

(世の中は広えな……)

ガストンは剣を握り締め、歯噛みした。

ガストンだって、リュカの愚連隊の斬り込み隊長として、弱くはないつもりできた。士官学校での剣術の成績も、良い方だ。

だが一步社会に出れば、騎士団にはザルバッグやバスカークのように、士官学校の最上層の少年達よりも段違いに強い騎士はざらにいる。これから敵として戦うことになる野盗、逆賊や、外国の軍勢の中にも、ウィーグラフのような達人、豪傑の類はまだまだ幾らでもあるだろう。

今すぐ彼らの水準に追い付きたいと望んでも、叶うわけではない。また、その必要もない。

「ガストン君、”回復”を……」

と、サーシャが近付いてきたが、

「いや、まだいい」

ガストンは手を振って、断った。

肩と頬の怪我の他に、二刀流の男と戦っている間に脇腹や太腿などを斬られていたが、いずれも浅い傷だ。

「それよか、合図したら、なるだけ強力な呪文唱え始めてくれや。目ェつぶってな」

「え？」

「見れば、ビビって集中力が途切れちゃうかもしれないから」

「……わかったわ」

ガストンが何をするつもりなのか心配ではあったが、今の閉塞状況を打開出来るのであれば任せようと、サーシャは何も訊かずに引き受けた。

ガストンは右手に剣を構え直し、鷹のように鋭い琥珀色の瞳で、機会を見逃さぬようにじっとラムザ達の戦いを見守った。

——腕一本と、命と交換ってところかな。

”砂ネズミの穴蔵”でウィーグラフに会った後、彼の力量をどう見たか尋ねると、ラムザはそう答えた。

——てめーでも流石に、無傷じゃ勝てねーか……。

——ううん、そうじゃなくて。こっちの命を捨ててかかってやっとな、彼の腕一本取れるかどうかってところだな。

——……！そんなに強えか？

——うん。すごいよ。ずっと、ザルバッグ兄さんほど強い人は世に二人といないと思ってきたのに……いるものだね。ああいう人と戦えるぐらい強くなりたいよ。でも、今すぐってのは無茶だったろうなあ。悔しいけど、今日は見逃してくれて命拾いした。……

あと一手、いや半手でも届きそうなのだが、ぎりぎりのしのぎ合いの中では、その一手が遠い。

どうせラムザ達が負ければ、ベリンダやガストンでは数手ともつまないし、ナツシュやサーシャなどは歯牙にも掛けられないだろう。

ならば——、

（なったらーじゃねーか。”捨て駒”によ！）

ガッ。

簡易な造りの、革の兜の縁が、乾酪のように斬られた。

ラムザは兜を後ろに脱ぎ捨てる。

元々、鉄兜さえ断ち割るウィーグラフの剣技の前には、無いより

ましという気休め程度にしかない代物だ。半壊状態では、視界を遮られる不利の方が大きい。

その一瞬の動作の間にも、デイリータが追い詰められる。

ガストンが、肘でトンとサーシャを小突いて、走り出した。

ガキンッ！

ウィーグラフの横薙ぎを、デイリータは剣を両手で握って受けたが、それでも押されて片膝が沈んだ。

と、そこに――、

「エエアアッ！！」

割り込み参加した第三の少年を、ウィーグラフは無造作に斬り伏せようとする。

矢張り、ガストンにはとてもかわせない――、いや。かわそうとせず、ガストンは傷めた左腕をウィーグラフの剣の前に出した。

ブンッ！

上腕で鮮やかに斬られた腕が、宙に飛ぶ。

「ひっ……！」

口を覆って悲鳴を飲み込んだナツシュの横で、サーシャは目を瞑って呪文を唱え続けている。

「ぐう……ッ！」

ガストンは歯を食いしばり、落ちた左腕を拾い上げる。

わざと斬らせて、剣の勢いを弱めたのだ。

生じた僅かな隙に、デイリータが膝を沈めた状態から、ばねを利かせて前に飛び出した。

「タァーッッ！！」

渾身の斬り込みも、ウィーグラフに盾で防がれた。が、バクッ。

耐久限度を超えた丸盾が、大きく割れて凹む。

「……空の下なる我が手に、祝福の風の恵みあらん！」
サーシャの魔法が完成する。

「上級回復魔法”――！”」

溢れ出る血が止まり、斬り落とされた腕を押し付けた傷口が、ピタリと塞がる。ぴくり、と指が動き、ガストンは左拳を握り締めた。ウィーグラフの腕前が水際立っていることを見込んでの賭けだった。

火傷や、戦槌で叩き潰された傷のように、傷口の組織が滅茶苦茶に壊れてしまった傷には、魔法治療の効果は薄い。が、表面積のごく狭い切り傷・刺し傷や、心臓麻痺などのように内臓組織の損傷がほとんど無い場合は、かなりの重傷であっても、直後ならば魔法で跡形もなく回復出来ることもあるのだ。

無論、ウィーグラフの出方によっては、避けることも出来ず回復も間に合わない致命傷を負う、という覚悟はあったが。

サーシャの魔法がガストンを回復させている間にも、
「オオオーツツ！！！」

ラムザがウィーグラフに突進する。諸手突きチエックメイトの構えだ。

ウィーグラフも片手突きで迎え撃とうとする。

王手を託された剣がウィーグラフに迫る、が――。

（届かないっ！？）

ベリンダは眉をひそめた。

今のラムザは速度スピードと攻撃力を最大限に高めるために、防御も回避も捨てている。ガストンとディリータチャンスが作ってくれた、最初で最後かもしれない機会チャンスなのだ。

だがウィーグラフの方が、腕と剣を足した長さリーチが長い。筋力の差からすると、相討ちにさえ持ち込めず仕留められてしまうのでは――。

「！！！」

黄金の髪と靈銀ミスリルの剣が、真昼の太陽の光を反射し、一瞬ウィーグラフの目が眩んだ。

瞬間、ラムザは片手を剣から離し、体を半身に捻って踏み込んだ。諸手突きから右片手突きに切り換えたことで間合いリーチが伸びる。それでも僅かに及ばないか――、

いや。ラムザが離れたのは右手だ。

ラムザは左片手突きで、ウィーグラフの剣を背後に滑らすようにすり抜けた。革鎧の隙間を突いて、剣の切っ先がウィーグラフの肩の付け根を捉える。

ダンッ!!

ラムザとウィーグラフが同時に踏み込んだ振動が、地面に響き――

交差した二人の影が止まった。

(やった……の?)

目を開けたサーシャは、早鐘を打つ胸を押さえた。

貫通はしていないが、ラムザの剣はかなり深くウィーグラフの肩に刺さっているはずだ。剣を振るえなくなるほどの損傷^{ダメージ}は与えていると思うが……。

(やられた……か?)

剣を拾い直したガストンは、目を細めた。

ガストンは決着の瞬間を見ていなかった。首筋を斬られるか、至近距離から闘気を叩き込まれるかしておれば、今にもラムザの方が倒れるかもしれない。

一同が、固唾を飲んで見守っていると――。

ぽたりぽたりと、鮮血がラムザの剣を伝って流れ落ち始めた。

バラリッ……。

一本に束ねていた黄金色の髪が解けて、風に広がる。ウィーグラフの剣は、ラムザの首の後ろで、結び紐をかすめただけだった。

(やった……!)

ナツシユの肩から力が抜けたが、ベリンダやディリータの険しい表情を見ると、手放しに喜べる状況ではないようだ。

誰も動かない。

迂闊に動いた瞬間、ラムザとウィーグラフが”相討ち”になるとわかってからだ。

ラムザがもう一押しすれば、ウィーグラフの右腕を切り落とせる。

が、切り落とされるのを構わず闘気を集中させれば、その僅かな時間でも充分、ウィーグラフはラムザの命を絶てるだろう。

ウィーグラフが先に動いた場合も同様で、ラムザの命は殺れても、その代わりに確実に腕を持っていかれる。

ウィーグラフは革帯ベルトの後ろに短剣も差していた。仕掛ける時機タイミングを誤れば、左手一本でも、ラムザばかりかもう一人二人倒される恐れがある。

（何故斬らん……？）

（貴方こそ……）

ウィーグラフとラムザは、しばし、間近に睨み合っていたが。先に動いたのはラムザの方だった。

ゆっくりと、剣を引く。

ウィーグラフの右腕がだらりと下がり、傷口から血が溢れ出す。

「話したいことがあります、ウィーグラフ殿」

ウィーグラフの目を正面からじっと見つめて、ラムザは静かに言った。

ウィーグラフは壊れた丸盾ラウンドシールドを投げ捨てる。

その手で、右手の長剣を持ち替えるのではなく、肩の傷を押さえた。

「聞こう」

？－6－〔6〕 風車小屋 ？妹は帰らず

ラムザの張りのある声は、吹き荒ぶ風と、風車の回る音の中でも、よく透った。

「これ以上の命の奪い合いは無駄です。

ジークデン砦に仲間を集めても、あなた方は徒に全滅するだけです。少しでも騎士団の損害を増やせればそれでも構わないと、お考えですか。

でも、実際に犠牲を払うのはほとんどが末端の士卒です。農村から徴集された兵士や、傭兵達、自らも借金に喘ぐ下位の騎士達……貴族に組するならば彼らも同罪とお思いになりますか。日々の生活を守るため、家族のために一生懸命働いているだけの、あなた方とほとんど変わらない人々を道連れにすることに価値がありますか？それよりも、骸旅団を解散させ、個別に逃げ延びるように命じては下さいますか。

”骸旅団”という組織が雲散霧消すれば、騎士団は戦勝を宣言出来ます。ゴルターナ公との抗争が本格化すれば、個々の団員を厳しく追跡する暇もなくなるでしょう。幾らかなりと生き残って、あなた方の志を活かすまたの機会を待つことも可能だと思います」

ウィーグラフは探るように、ラムザの真っ直ぐな目を覗き込んだ。「これは異なることを……。この場で私を斬れば、お前達の勝ちだ。

騎士団の犠牲を抑えたくば、そうすべきではないのか」

ラムザは首を横に振る。

「こちらこそ、異なることをお聞きしました。では翻って、僕を斬り、兄達を斬り、ラーグ閣下を斬れば、あなた方の戦いは終わりますか」「何？」

「終わりませんでしょう。ザルバッグ・ベオルブや、ベストラルダ・ラーグという人間を討ち取っても、誰か別の者が新たに”北天騎士団団長”や”ガリオンヌ公爵”という役職に就いて、戦は続行さ

れます。

それはこちらにとっても同じこと。ウィーグラフ・フォルズという人を斬っても、骸旅団の構成員を全滅させても、あなた方を戦いに駆り立てているものが根本的に解消されない限りは、第二、第三の骸旅団が現れるばかりでしょう。

組織や制度は、剣では斬れません……まして、人の心は。裏返せば、組織や制度を作り直すことさえ出来れば、必ずしも人を斬らなくても良いはずですよ」

ウィーグラフの目付きが陰しくなった。

「では何故、妹を……ミルウーダを殺したッ！」

ラムザも眉をひそめた。

「命を奪おうと最初から考えていたわけじゃありません！僕はミルウーダにも、今と同じことを話しました！」

ウィーグラフは目を細める。

「聞かなかったろう……妹は」

「聞き入れてくれませんでした……だからこそ、貴方をお願いしたいのです！」

ラムザの声が大きくなった。

「ウィーグラフ殿！指導者である貴方が方針を考え直して下さらなければ、あなた方の中でも志や能力の高い人ほど、貴方に殉じて死んでゆくことになるでしょう。」

僕はこの国の未来のために、優れた人材が徒に失われるのは惜しく思います！」

「この国のため……だと」

「真の敵は、人同士ではないでしょう？戦時中に荒れた農地や交通網を整備し直して、国全体を覆っている窮乏を解消すること……誰が政権を担うとしても、それが本当の戦いになるはずですよ。内戦は人材を消耗し、残された人達の負担を増すばかり……。」

もし、僕ら貴族が政治の主体であり続けるとしても、効果的に国力を回復させようと思えば、民から広く問題点とその解決策につい

て意見を聞くのが近道になるでしょう。あるいは、あなた方が新しい政治体制を打ち立てたとしても、ある程度は既存の制度や経営手法（ベウ）を利用することになるだろうと思います。

異質なものを排除し、根絶やしにしようとするよりも、様々な能力や考え方を持った人を幅広く味方に取り入れた方が、組織は柔軟に、強くなる……それが、父祖から引き継がれてきた、北天騎士団を”畏国最強”（イヴァリース）たらしめている秘訣ですから。

話し合いによって協力の方法を模索しようとするのは、理想的というよりもむしろ、現実的な道だと思っています」

ウィーグラフは頭を振り、負傷した右腕に力を込めた。

「矢張り、お前はわかっていない。我々が剣を棄てない理由を！話し合いに何が期待出来る？お前がそれを願ったとして、実現出来るのか？出来はしまい？」

「ですから、今は勝手ながら、唯々あなた方が生き延びて下さることを願っています……」

今の僕は無官の身で、何ら具体的なお約束が出来る立場にありません。でも何年かして、もっと大人になれば、あなた方のような勢力と独自に交渉することも、ラーグ閣下との橋渡しをすることも可能になってくるでしょうから。

僕は、僕を育ててくれたドラコニア領や、（イヴァリース）畏国という国の人達に幸せになってほしい。そのために必要だと思えば、ラーグ閣下は勿論のこと、あなた方やゴルターナ公や、他の誰が相手であれ、協力を惜しまないつもりです」

「……兄達に逆らってもか」

「……場合によっては、そういうことになるかもしれませんが」
傍で聞いているガストンは冷や冷やした。

（おいおい、随分きわどい発言だな！この場（オレら）にや仲間しかいねーからいいよーなものの……）

騎士団関係者の耳に入れば、”謀反の恐れあり”として排斥されかねない。それだけ、腹を割ってウィーグラフと話し合おうとしてい

るということだろう。

だが、ラムザの考え方自体は、斬新というよりはむしろ、古風といえるかもしれない。

七王国時代の騎士達は”小なりといえど一城の主”という意識が強く、主君よりも家臣領民との結び付きを重視する傾向にあった。

主君から領地を拝領するといっても実態は、先祖代々受け継いできた領地の支配権を、自分よりも力の強い騎士に追認し庇護してもらうのが主流だった。

”二君に仕えず”というのも、同時に二人の主は持たぬというだけで、生涯、更には子々孫々まで一人の主君に奉仕し続けるという意味ではない。より領地を安泰にしてくれる、あるいは己の能力を活かしてくれる主君に乗り換えることも稀ではなかった。

戦時に主君の寝首をかって敵方に走るなどは論外であるが、作法を守って職を辞し、他の主君の許に移ることは、変節や裏切りとは見なされなかった。むしろ、より良い統率者リーダーを見極める目を持たなければ、家臣達に見限られてしまう。縦の主従の関係、また横の同盟関係も、その時々イザアリスの状況によって目まぐるしく変化した。

しかし、アトカーシャ王家が畏国を統一すると、騎士達も安定志向になった。

加えて、自治独立の気風を弱めるべく、王家は地方豪族達の地縁を解体しようとした。封地替えを行ったり、遠い地方同士の貴族に婚姻関係を結ばせたりして、地元イザアリスに縁故の薄い支配者を各地に送り込んだのだ。

中央集権のためのアトカーシャ王家の施策が、格上の者の顔色ばかり窺って領民達を顧みない騎士を増やした一因だったと言えよう。ベオルブ家は”武門の棟梁”と呼ばれるだけに、戦国の武将気質を色濃く保っていたのかもしれない。

「ですが今のところ、あなた方に生き延びてほしいと願うことは、兄達の方針に反してはいないと思います。

兄達だって、無用の争いをしたいわけではありません。出来れば

話し合いの機会を持ち、あなた方の意見を政治に反映させたいと望んでいるはず……」

ウィーグラフは哄笑した。

「ハッハッハッ！これは傑作だッ！お前の兄達が争いを起こしたくないだど？」

ラムザの神経を逆撫でする笑い方だった。

「兄さん達が好んで戦いを仕掛けているとでも？」

「青いな！執政者の手なんぞ黒い血で汚れているものだ。」

ダイスターグが我らを生かしておくわけがない。草の根分けても捜し出し、口を封じねばならぬ理由があるではないか！」

今度はラムザの方が、ウィーグラフの真意を探ってじっと目を覗き込んだ。

「……何のことです？」

「知らんのか？幸せな奴だな……、」

ウィーグラフは数歩後退り、パイッと鋭く口笛を吹いた。

軍鳥・^{クレセント}“三日月”が、少年達を蹴散らす勢いで疾走してくる。

「「！！」」

飛び退った少年達の目の前で、ウィーグラフは愛鳥に飛び乗り、風車小屋の裏手に向かって駆け去る。

「待てッ！」

後を追うラムザに、デイリータが続いた。

「ハイアッ！！」

ウィーグラフの掛け声と共に、^{クレセント}“三日月”はいっぱいに広げた翼に強風を受け、谷川を跳び越えた。

一息に対岸に渡ったウィーグラフは、剣を左手に持ち替え、吊り橋の縄を切って落とす。踏み板が端からばらけて次々と谷川に落ち、飛沫を上げた。

ラムザが叫んで、呼び止める。

「ウィーグラフ殿ッ、今のはどういう意味です？貴方は何をご存じなのですか！」

「ダイスダークに正義があるとでも？ 正義とはそれを語る者によってころころと変わるものだ！」

「兄さんを愚弄するのかッ！！」

ウィーグラフは剣を鞘に収めると、韋駄鳥チヨコボの首を巡らせ、ラムザに向き直った。

「エルムドア侯をギスタヴに誘拐させたのは誰だと思う？」

それはお前の兄・ダイスダークだ！ 勿論、聖騎士ザルバグ殿もそれを知っているだろうッ！！」

「なっ……！！？」

思わず崖っぷちに身を乗り出したラムザを、ディリータが後ろから引き止めた。

「バカなッ！ 何故、兄さんがそんなことをしなければならないッ！？」

「国王亡き後の覇権を巡り、二人の獅子が争おうとしている！」

一人は白獅子・ラーグ公、もう一人は黒獅子・ゴルターナ公。二人は誰が味方で誰が敵なのかを見極めようとしている。

しかし、他人の頭の中を覗くのは難しい。ならば、いつそ亡き者にし、その領地に息のかかった者を送り込めばいい！

革命に疲れた愚かなギスタヴは、お前の兄・ダイスダークの甘言に釣られて侯爵殿を誘拐した……！」

ラムザは我を忘れて、ディリータの腕を振り解こうとする。ディリータはしっかりとラムザを羽交い締めにして、彼が谷川に落ちないようにした。

「嘘だッ！！ 誇り高きベオルブ家の人間が、そんな卑怯な事をするものか！」

「自分の目と耳で確かめるがいい！ さらばだ、ベオルブの名を継ぐ者よ！」

ウィーグラフはくると背を向け、韋駄鳥チヨコボの腹を蹴った。

「待てッ、ウィーグラフ！ その言葉を訂正しろッ！！」

ラムザは声を振り絞った。

「ウィーグラフ!!!」

だが、肩幅の広い後ろ姿は土手の向こう側へと消え、叫び声は虚しく崖の岩肌に響く。

（ダイスダグ兄さんが、まさか……!? でもウィーグラフ殿も、嘘を言うような人には見えない……）

ラムザはデイリータの顔を振り返った。

「君は……衝撃シュツクを受けていないんだな。……気付いていたのか？ 本当のことなのか……!?」

「……そんなこともあるかもしれないとは、思っていた」

「……信じられない……。彼の思い違いじゃないのか。誰か、他の人間が仕組んだってことは考えられないか？」

「そうかもしれないし、そうじゃないかもしれない。それよりも、今は……」

ラムザは頭を振った。

「そうだった。……ティータを迎えに行こう」

少年達は頷き合う。

騒ぐ胸を静めようと手で押さえると、チャリ、とミスリル鎖が鳴る音がした。ラムザは、ミルウーダの形見の赤い首飾ペンダントりを內衣ボケット?に入っていたことを思い出した。

（返しそびれてしまった……。彼と、また会う機会があるだろうか？）

ある。

漠然と、でありながら、確信にも似た予感がした。

ウィーグラフ……フ……。

ラムザの声がこだまする。

「クエ……?」

「三日月」は立ち止まり、振り返って首を傾げた。

「あいつを覚えているのか、クレス」

ウィーグラフは愛鳥の首を撫でた。

クレセント
”三日月”は元々、バルバネスからウィーグラフに贈られた韋駄^{チヨ}鳥^{コボ}なのだ。ベオルブ家の調教所にいる間に、あの少年を背に乗せたこともあったかもしれない――。

そう考えたウィーグラフは、はたと思い当たった。

(……そうか。あの時の……)

五十年戦争最後の年の、聖母祭の頃。

ウィーグラフは義勇兵補充のために、前線を離れてイグーロスで活動していた。

充分な質と人数の人材が集まらず、苦勞していた所へ、既に北天騎士団団長の地位をダイスダーグに譲って療養中のバルバネスから、陣中見舞いとして駿鳥が届けられた。

クレセント
それが、”三日月”だった。

ウィーグラフは礼を述べに、ベオルブ家の城下屋敷を訪れた。

骸騎士団団長として、貴賓扱いで屋敷の中に通されたウィーグラフだったが、他の訪問客達は錚々たる高位の騎士や聖職者、大商人ばかりだ。大勢の供の者達を連れ、高価な見舞いの品を携えた彼らに比べると、何の変哲もない花束一つ持ったのこのこと見舞いに来た自分が、ひどく田舎者のように思われてきた。

気後れして引き返そうとすると――、

「あら」

蜂蜜色の髪の少女が、悪戯っぽく微笑んで話し掛けてきた。

「素敵な花束持って、どなたをお探しかしら。もしかして、わたし？」

十二、三歳ぐらいだろう。まだまだ幼い顔付き体付きだが、つい見とれていなくなるような美少女だ。

ウィーグラフの方でも、珍しく悪戯心を動かされた。

「ええ、そうです。どうぞお受け取り下さい」

大真面目な顔で跪き、恭しく少女に花束を差し出した。

「やだ、もう、お立ちになって！お見舞いのお客様でしょ？」

頬を染めてうろたえる姿も可愛らしくて、もう少しからかってみた

くはあった。が、普段冗談など言い付けられないウィーグラフには、それ以上のやりとりを続けるのは無理だった。

「ははは、すまない」

「お帰りになってしまふの？ お急ぎの御用がおりかしら」

「いや、急ぐというわけでは……」

「でしたら、もうしばらくお待ちになっていて。貴方みたいな若い方とお話するの、喜ばれると思うの。きっと、元気付けられるわ。毎日毎日、見舞いと称して勝手な陳情とか売り込みに来るタヌキ親父ばかり相手にしたら、治る病気だって悪くなっちゃうわよ」
遠慮のない口を利く娘だ、とウィーグラフは驚いた。身なりも良
いし、ただの女中^{メイド}ではなさそうだ。

「じゃあ、これはお預かりします。どうぞごゆっくり」

ウィーグラフを休憩室^{ラウンジ}に連れ戻して、よく冷えた香草茶^{ハーブティー}を出すと、少女は花束を持って立ち去った。

※一刻余り（※三十分ほど）もして、ウィーグラフの方こそからかわれたのではと思い始めた頃、騎士見習いらしき少年が来て、バルバネスの病室に案内された。

先程の少女は寝台^{ベッド}の端に腰掛けて、館の主と親しげに歓談していた。ウィーグラフが部屋に入ると、立ち上がって目礼し、入れ替わりに出て行く。

枕元の花瓶に、彼が持って来た花束が活けられている。が、どうにも不揃いで、仕事であれば落第点だろう。矢張り、ただの侍女とは思われない。

（……童女趣味？^{ロリコン}）

しかし、類稀な美少女ではあったが、愛人というような色気は感じられなかった。親戚の娘を行儀見習いに預かっているといったところか、と見当を付けた。

ウィーグラフはこの時、バルバネス自身に娘がいることは知らなかったのである。

屋敷全体の壮麗さと比べると簡素^{シンプル}といってよい、広い寝室の中に

は、バルバネスとウィーグラフ、そして出入り口近くの机の脇に座った騎士見習いの少年、三人だけになった。

（不用心ではないのか）

と、ウィーグラフはまず思った。もし、訪問者に害意があれば……。すると、枕を背もたれにして寝台ベッドの上で上半身を起こしていたバルバネスが、ニヤリと笑った。

「残念だな。健康な時にお会い出来ておれば、貴公のように気力体力の充実した使い手には、是非とも手合わせ願いたかった」

ウィーグラフは、カッと頬を赤らめた。

見透かされた。

体は古い病みたりといえども、勘は鈍ってはいないのだ。

壁に掛けられた武器は単なる装飾品ではなく、手入れの行き届いた、実用的な名品ばかりだ。室内にそれ以外の飾り気がほとんど無いのは、武器を振るった時邪魔にならぬようにだろうし、騎士見習いの黒髪の少年も、並みの大人に引けは取らぬ強さのようだ。

咄嗟の備えとしては、それで充分だろう。

無闇に身辺の警護を固めるのは、猜疑心や小心さを表すばかりで、見苦しい。

「み……身に余るお言葉です。とても、イヴァリース畏国最強と謳われる騎士団を率いてこられた大將軍のお相手が敵う腕ではございません。

ですが、お望みとあらばこれから機会があります。ゼルテニアやランベリー、ゼラモニア是領を取り返すまで、バルバネス様にはまだまだ御壮健でいて頂かなければ」

バルバネスは顔をしかめた。

「本気でそう思いか？」

「……は？」

「世辞は止して下さい。とうに引き時だ。儂も、この戦自体もな。ゼルテニアとランベリーまではどうにか取り戻せよう。だが、ゼラモニア是領まで望むのは欲をかきすぎだ。

本当はもう今から十六、七年前にも、停戦の機会チャンスはあった。ロマンダ呂国

軍が撤退した直後だ。

あの時、是領^{セラモニア}を中立地帯として講和しておれば、傷は浅くて済んだものを……。是領^{セラモニア}や鷗国^{オルタリア}の領地を惜しんだがために、その後の戦死者や戦争借款を膨大に増やした。

強硬論を唱える輩は、義勇兵を使い捨てることの恐ろしさがわかっておらん。和議を結ぶ潮時を逃せば、今度こそこの国は滅ぶぞ」

今の畏国^{イヴァリース}は、吹雪に閉ざされた家の中で薪が尽き、家具や床板まで燃やし始めたようなものだ。出所を見ずに、新たな薪が豊富に手に入ったと喜んで景気よく火にくべてしまえば、家そのものが壊れて確実に凍え死ぬ。

……厳寒の、是領^{セラモニア}の冬を経験したことがない王宮の連中には、そもそもこの喻えの深刻さからして伝わらんが。

と、バルバネスは言った。

その、意味するところは――。

義勇兵の主な供給源となっている、都市の失業者達は、決して”余剰労働力”ではない。

各地の農村は荒廃しており、本当は、人手はいくらあっても足りぬほどのだ。

だが、度重なる増税のために農民達の生活は苦しく、逃亡したり、若い働き手を出稼ぎに出したりせざるを得なくなっている。

都市の職人達などの暮らしもまた然りだ。

様々な物資や設備の、潜在的な需要は大きい。だが、特に富裕層である騎士達が軍需品以外への出費を手控えているために、仕事が回ってこないのだ。

騎士達は、戦闘能力だけで義勇兵達の価値を評価し、軽んじがちである。

しかし、彼らはそもそも、本業を離れて不得手なことをしているのだ。彼らは、あるいは羊飼いとして、あるいは陶工としては、優秀な働き手であるかもしれない。にも関わらず”無能な連中”として粗雑な人海戦術などで彼らを使い潰せば、いざ戦後の復興事業に

着手しようとした時には、各種の産業の担い手が不足してしまっている。

影響はそればかりに留まらない。

未婚の若者達が兵士や出稼ぎ労働者として大量に流出してしまつたために、近年、農村では子供の数が減っているのだ。都市部でも、貧しさ故に家庭を持つ余裕がない若者が多い。

数が少なくなれば一人一人がより大切に育てられるので、死亡率も減る。そのため一概には言えないが、この傾向が長引けば、十年後二十年後に労働力不足になることも必至だ。

戦のことしか頭がない者は、女性や若年者まで投入した総力戦も視野に入れているが、冗談ではない。現在でも、従来男手が担ってきた重労働を高齢者や女性が負担し、過労から彼らの健康状態が悪化しているぐらいなのだ。この上直接、戦闘に駆り出して死なせれば、人手が払底し、畏国イヴァリースという国は空っぽになってしまう。

「社交辞令は無用だ、正直なところをお聞かせ願いたい。」

ウィーグラフ殿、義勇兵団の長として、貴公は現状をどう御覧になる？」

真摯に問われて、ウィーグラフとしても、忌憚のない考えを詳らかに語った。

義勇兵志願者の質が、初期に比べると目立って落ちている。

国難を打開しようという士気は低く、単に日々の糧にありつきたいだけの食い詰め者が大半を占めている。若すぎる者や、働き盛りを過ぎた者、健康状態や素行に問題のある者も増えてきた。

義勇兵による兵員補充にも、限界が来ているのだ。バルバネスの言う通り、ゼルテニアとランベリーを奪還するまでが精々だろう。セラモニア是領まで取り返せという楽観論には、到底賛成出来ない。

また一方、終戦を迎えた時の彼らの行く先についても、憂慮している。

元々帰る場所の無い者や、帰っても食べてゆけない者がほとんどなのだ。傷病のための手当や、就職先の斡旋などの保障が無ければ、

彼ら自身や彼らの家族が生活に困窮することは目に見えており、犯罪の温床ともなりかねない。

しかしながらもし、例えば屯田兵として廃村の再開発や新農地の開拓に従事するとか、橋や道路修復の土木作業員に充てるとか、集団で公共事業等に雇い入れてもらえるならば、ここまで培ってきた組織力^{チームワーク}を活かして、高い生産性を発揮出来るものと思う。……

バルバネスはたっぷり※半時余り（※一時間以上）も、時折具體的な質問等も挟みながら、熱心に耳を傾けていた。

話が一段落して、あの少女が再び冷たい香草茶を持って来た頃になって、ようやくウィーグラフは、当初の目的だった韋駄鳥^{チヨコボ}の礼を述べた。

「そうか。貴公ならば乗りこなせるだろうと思った。末の倅の奴も欲しがっておったようだが、あれはどうも気位の高い、乗り手を選ぶ韋駄鳥^{チヨコボ}だぞ。良い韋駄鳥^{チヨコボ}だと思えるのであれば、貴公が良い騎手なのだろう」

「……ザルバッグ様の下にも、ご息がいらっしゃいましたか」

「ん？ うむ、来年士官学校に上がるところだ」

では十四、五歳だ。ダイスダグとザルバッグの母・マリーソフィアはそれよりずっと以前に亡くなっているから、腹違いということになる。

「ああ、お気になさるな。物には執着の淡い奴だ。未熟者の訓練に付き合わせるよりは、戦場で貴公のような一流の戦士に使ってもらえる方が韋駄鳥^{チヨコボ}も本望だろうと、言っておった。底意は無いだろう」

バルバネスが再婚したという話はいぞ聞かないので、庶子のはずだ。しかし、老將軍の口振りは自慢げで、後ろ暗い存在だとは微塵も思っていないようだった。

「韋駄鳥^{チヨコボ}の一頭や二頭進呈したところで、大した力添えにならんのはわかっておる。が、他の騎士達にも義勇兵にもっと敬意を――少なくとも関心を払ってもらおう契機にはなるかと思っただけ」

ウィーグラフは改めて、バルバネスの心遣いに感謝した。

会話が途切れると、ふと、バルバネスは中庭に面した、涼しい風の吹き込んでくる窓の外を眺めた。

「バカバカしいほど華美な屋敷だ。そうお思いにならないか」

「はい、思います」

ウィーグラフは正直に答えた。

「ははは！」

バルバネスは愉快そうに笑った。

「遺言で、資産の一部なりと民に分けることも考えた。だが近頃では、儂が下手な手を打つよりも、倅の奴に任せた方が良いと思うようになった。あれは多分、儂などよりよっぽど、ベオルブ家の富や力の役立て方がわかる奴になる。」

ああ、いや、これは親バカの戯言とお聞き流し下され。ははは……」

（成る程、成る程……）

今になって思い返すと、色々と合点がゆく。

あの時の蜂蜜色の髪の子が、本物の”ベオルブ家の令嬢”だったのだ。

そういえば、あの金髪の少年とよく似ている。そうと思って見れば、バルバネスの面影も無いではないが、二人は基本的に母親似なのだろう。

冗談とはいえ伯爵令嬢に花を捧げようとしてしまったとは、他人に見られていたらと思うと汗顔ものだ。

そして、バルバネスが念頭に置いていた”息子”とは、長男のダイスダーグではなく、あの金髪の三男坊のことだったのだろう。

バルバネスが亡くなり、跡を継いだダイスダーグがラーグ公の軍師になると、戦後の義勇兵達の処遇案は白紙撤回されたと聞いた。バルバネスの慧眼も我が子に対しては曇るかと、ウィーグラフは少なからず失望させられたものだ。

一斉蜂起に踏み切った時、ウィーグラフの頭には、あの日のバルバネスとの面談のことがあった。

病身を押してわざわざ時間を割き、話を聞いてくれたバルバネスが、何らの対策も講じようとしなかったとは思われなかった。実際、ラーグ公や、オムドリア？世王にも働きかけて、戦後処理の準備を進めていたらしい。

大功ある”天騎士”バルバネスにすら為す術がなかったのなら、他のもっと権限の小さい、聞く耳も持たぬ騎士達に何を掛け合っても無駄だ。実力行使以外に自分達の主張を通す道は無い、と腹を決めたのだったが……。

影のようにぴったりと息を合わせて、ベオルブ家の御曹司の相棒を務めていた黒髪の少年にも、見覚えがあると思った。

それもそのはず、あの時病室の入り口に詰めていた騎士見習いの少年ではないか。

彼は人形のようにじっと動かず、本を読み続けていて、部屋の調度の一種のように存在感を消していた。

しかし、何気なく彼の手許を見ると、頁がほとん^{ページ}ど進んでいなかった。居眠りしていたわけではなく、主人と客との会話を漏らさず聞き取ろうとしていたのだろう。

恐らくバルバネスは、秘蔵の末息子の補佐役とするために、彼を側に置いて社会勉強させていたのだ。

（お前の最後の相手があいつで良かった。……そう思っても非道い兄ではあるまい、ミルウーダ）

騎士道精神のかけらも持ち合わせない者の手にかかって、なぶり殺しに遭ったのでもあれば、悔やんでも悔やみきれぬところだ。

——お兄ちゃん、置いていかないで。……

遠くにいて妹を想う時、真っ先に思い浮かぶのは、何故かいつも雨に濡れそぼった痩せっぽちの少女の姿だった。

（まさか、兄ちゃんの方が置いていかれるとはな……）

ウィーグラフとミルウーダの年齢は、七歳も離れている。本当は、

間に弟が二人と妹が一人生まれていたのだが、いずれも二歳になるまでも育たなかった。

赤ん坊のミルウーダを初めて抱き上げた時、今度こそ元気に大きくなるように、自分が守ってやろうと、子供心に誓ったものだ。

医者の見立てでは、ラーナー海峡に面した港町の、冷たくじめじめと湿った気候に加えて、実家が織物商でいつも細かな綿埃の立ち込めていることで、胸から病気になり易いのだろうとのことだった。天気の良い日はなるべく屋外で過ごした方が体が丈夫になるというので、妹を散歩に連れ出すのが、少年時代のウィーグラフの日課になった。

使用人達に任せると、すぐに糸を引くほど厚着させて乳母車に乗せてしまい、運動にならない。それに、父はしょっちゅう船旅に出て留守がちだったし、母は店を切り盛りするのに忙しかったため、小さな妹は兄に懐いていた。大きな飛猫モイグリの縫いぐるみを抱えて、ちよこちよこと何処にでも付いて来たがったのだ。

晴れた冬の日にはよく、レニオール港を見下ろせる日当たりの良い丘の上に出掛けた。

風が強く波の荒い、寒流の海だ。南のバグロス海は紺色だが、北氷海の水は、暗い色の翡翠のような濃い深緑色をしている。

大小の漁船や商船、軍船が白波を蹴立てて行き交い、浜辺には水揚げされる魚のおこぼれを狙って、ウミネコや鴉が群れ飛んでいた。湿度が低い日には、遠くグレディア島の影も見えた。

ここにいと、海や空の色で、移ろいやすい天気の変わり目がよくわかる。北風が強くなってきたり、雨が降り始めたりすると、妹を外套マントの懷に入れて、大事に抱えて帰った。

――坊ちゃんだって充分過保護ですよ。

と言われたが、外にいる間ずっと遊んでやっていたわけではない。

大抵は、一人で花輪を編んだり、縫いぐるみの”モルルちゃん”を相手にままごとをしたりしているミルウーダの横で、ウィーグラフはひたすら木剣を振るっていた。

「お兄ちゃんはいっつも、剣の練習をしてるのね」

「交易路は危険だからな。海にも砂漠にも、盗賊がいるし、畏国イヴァリースにはいない魔獣モンスターもウヨウヨしてる」

「お兄ちゃんも、父さんみたいに旅に出るの？」

「ああ。父さんよりもっともっと遠くの国まで行って、店を大きくする。今は雅国ガンダリアの絹織物とか、楽国アラクナ兎の毛織物とかは、紗国ベシヤの中継ぎ貿易都市で買い付けしてるんだ。本当は現地まで行けば、もっと安く大量に、色んな種類の商品が手に入るはずさ。

織物や毛皮だけじゃない。珍しい宝石だって……。雅国ガンダリアには紅玉ルビーや猫目石の鉱山がいっぱいあるんだ。象牙や珊瑚や、淡水真珠の細工物なんかも綺麗だぞ。

「ミルウーダは何が欲しい？」

妹は小首を傾げた。

「……父さんよりもっと遠くまで行くってことは、父さんよりずっと長く留守にするってこと？」

「うん？まあ、そうなるけど……」

「あのね、お土産はいらない。ミルウーダも、お兄ちゃんと一緒に旅をする！南の海で鯨を見たり、駱駝とか、象にも乗ってみたいな」
背中に飛び付いてよじ登ってきた妹を、ウィーグラフはひよいと肩車した。

「そっか。それもいいかもな。よし、じゃあ、盗賊も魔獣モンスターも、兄ちゃんが全部やっつけてやるからな」

「ううん。わたしもね、剣を覚える。それで、お兄ちゃんを守ってあげるね！」

「え？お前にそんな、危ないことはさせられないよ」
「覚えるの！」

勇ましいのやら、兄が恋しいだけの甘えん坊なのやら、わからなかった。ただ、思えばその頃から既に、後々の運命は決まっていたのかもしれない。

ずっと、妹には平和な、穏やかな暮らしをさせてやりたいと願っ

てきた。

それなのに結局、安全とも安楽とも言えない移動工房での生活にも連れ歩くことになったし、もっと危険な義勇兵にもなり、遂には、共に貴族支配に反旗を翻す”逆賊”になるところまで来てしまった。十歳過ぎる頃から、

――子供扱いしないで！

と煩がられることも増えた。が、生まれたての、ふにゃふにゃの赤ん坊だった頃から見守ってきた兄としては、妹は幾つになっても小さく、危なっかしく見えるのだ。

「わたしを埋める時には、これを着せてね」

移動工房時代の知り合いに預けていた、僅かばかりの持ち物を引き取りに行った時、ミルウーダは縫いかけのままの花嫁衣装を広げて言った。

「まだ、取って置いてあったのか……」

ウィーグラフは眉をひそめた。

「ウォルターを忘れるとは言わん。だが、いつまでも後ろばかり向いていないで、別の幸せを見つけることは出来るだろう」

ミルウーダは首を横に振った。

「前を向いているから、こうなったのよ。」

骸騎士団にいる間に、よくわかったの。このままじゃ、どこまで行ってもわたし達は奪われる側……。いいように利用されるだけだわ。

幸せは、戦って勝ち取るしかないんだ、って。もう沢山よ。わたし達みたいな思いをする人間を、これ以上増やさないためにも」

「しかし、勝つつもりでいるなら……」

「お願い。そうしてくれると、思いたいの」

ウィーグラフは妹の頬を両手で挟み、窓の外に向けさせた。

「ミルウーダ、現実をよく見ろ。あれが……”反逆者”の末路だ……」

その家は、城壁の近くに建っていた。

城門の上に、文字通り完膚無きまでに鞭打たれ、切り刻まれた赤
けの骸が、槍に串刺しにされて晒されているのが見えた。

身分の高い騎士や聖職者を殺害した者、あるいは殺人強盗の常習
犯など、重罪人は見せしめのために酷たらしく公開処刑される。そ
して、亡骸を弔うことも許されず、獣や鳥に食い荒らされ、肉が腐
り落ち、骨さえ風雨に碎けて朽ち果てるに任されるのだ。

「お前をあんな姿にしたくない……。」

今ならまだ間に合う。考え直せ。

お前だけでも生き延びて、どこかで幸せになってくれると思えば、
私は命尽きるまで心置きなく戦える。兄の希望のために、そうして
はくれないか」

「あら。とつくに手遅れでしょ。もう騎士団に刃向かって、人を殺
しちゃったわ。それがばれなくなつて、元骸騎士団員だつてだけ、
兄さんの妹だつてだけでも、立派なお尋ね者じゃない？ 無抵抗にむ
ざむざ捕まるよりは、戦う方がまだしも未来が拓ける可能性がある
わよ」

「む……、」

「兄さんと一緒に戦うのが、今のわたしの幸せよ」

ミルウーダも、彼らの”革命”が成功する可能性の低さや、敗れ
れば墓を作ってくれる者も無いことをわかった上で、せめてもの慰
めがほしいのだろう。

ウィーグラフは妹の肩を抱き寄せ、深々と溜め息を吐いた。

「どこで育て方を間違えたのだろうな……。」

「ううん。間違つてなんかいないわよ。とつても感謝してるわ。ず
っと、わたしを育ててきてくれたのは兄さんだもの……。」

兄さんは、わたし一人じゃなくて、もっと大勢の人を幸せに出来
る力を持った人だつて、信じてる。わたしは、兄さんにこそ生きて
いてほしい」

ミルウーダは、兄の胸に掛かっている緑の首飾ペンダントりに手を置いた。
「もし、わたしが先に死んでも、諦めないで最後まで戦い抜いて。」

兄さんが心のままに生きていくれる限り、わたしの心も、兄さんと共に生き続けるんだと思って……。

それが、わたしの願いよ」

ウィーグラフは、妹をきつく胸にかき抱いた。妹の体は相変わらず細く小さくて、健気な決意のほどはともかく、戦士としては矢張り頼りなく感じられた。

「ミルウーダ……！バカな……バカな奴だ、全く……」

「そうかもね……」

腕の中でミルウーダは、ふふ、と声を立てずに笑った。が、頬擦りした狐色の髪には、不覚にも涙がこぼれ落ちた……。

（生きる……か）

ゴラグロスにも、あのベオルブ家の少年にまでも言われた。

（おお、生き抜いてやるとも）

あの少年も、ザルバッグもラーグ公も。敵対する者全てを斬り伏せ、生き延びる。

死に向かって収束しかけていたウィーグラフの心に、ふつつつと新たな闘志が湧き上がってきていた。

ウィーグラフは襟巻スカーフきを外して、右肩の傷口を縛った。深手ではあるが、すぐに仲間達に追いついて回復魔法を掛けてもらえば、問題なく治るだろう。

（あいつ……）

あの瞬間、少年には、ウィーグラフの腕一本と命とを交換することに迷いは無かった。

ためらったのは、ウィーグラフの方だ。

殺すのが惜しい——と、感じてしまっていた。ほんの心持ちだが、踏み込みが浅かったのだ。命を奪えるだけの攻撃を仕掛けておれば、ウィーグラフの腕も使い物にならなくなっていたはずである。

少年の方でも、多分それがわかったために、話し合いに一縷の望みを持ったのだろう。

だが、勘違いしないでもらいたいものだ、と思う。

手を組む気なぞはさらさら無い。たとえば、妹の仇でなかったとしてもだ。

あれは、仲間^{みかた}であるより、好敵手^{てき}であってくれた方が張り合いがある種類の逸材だ。

あの少年には、まだまだ”伸び代”がある。今日は相棒の黒髪の少年と二人組でやっとだったが、ゆくゆくは、一対一でウィーグラフと互角に戦えるほどに成長するだろう。彼が充分に大人の、一人前の戦士になってから、改めて力の限り仕合って雌雄を決したい。

(手強い……、末楽しみな奴だ。この続きは、いつか必ず……。

その時まで、他の誰にも討たれてくれるなよ。ラムザⅡベオルブ
！)

ウィーグラフは”^{クレセント}三日月”の腹を蹴り、^{はやあし}速歩で駆けさせた。襟元から飛び出した緑の首飾^{ペンダント}りを服の中に押し戻し、仲間達の後を追って、一路ジークデン砦を目指す。

「ウィーグラフさんは……？」

風車小屋の裏手から戻って来たラムザとディリータに、ベリンダが声を掛けた。

ラムザは首を横に振る。

「逃げられた……というか、今回もまた、見逃してもらったんだろ
うな……」

地面に座り込んで休んでいたガストンが、呆れて言う。

「つたりめーだ。つつーか、追っかける方が無茶だぜ。ああいう化けモンの後始末は、矢っ張り化けモンのためーの兄キに任せといて
……、」

と、小屋の扉を指差す。

「早く迎えに行ってやれよ。お姫さんがお待ちかねだ」

「うん」

ラムザは頷き、今更のように躊躇するディリータの肩を押した。

ふらふらと立ち上がりかけたナツシュの長衣ローブの袖を、サーシャが引いた。

「ここは、ラムザ君とデイリータ君だけで、水入らずの方がいいでしょ」

「あ……、そうですね。ぼくらは、外で待ってます」

ラムザとデイリータが風車小屋の入り口をくぐると、ベリンダはガストンに話し掛けた。

「無茶はあんたもさ！わざとウィーグラフさんに斬られに行くなんて、いい度胸だよ」

「それって、誉め言葉？」

「一応ね」

「接吻キス一つ分ぐらいにゃ値する？」
と、ガストンは軽口を利く。

「図々しいねえ！」

と言いながら、ベリンダはガストンの銀髪を払って、額に口付けした。

「どーも」

ナツシュも、おずおずとガストンに尋ねた。

「ガストン……、腕、大丈夫なの？」

「おー、屁でもねーよ。流石、”上級回復魔法”ケアルガはよく効くぜ。腕以外の傷まで全部治ってら」

ガストンは、ずつと押さえていた左腕から右手を離そうとして、
「……と思ったら、ありゃ？実は、腕が反対向きじゃねーか。こいつは、もう一遍斬ってくつつけ直さねーとなー」

ナツシュとサーシャの顔が、サーツと青ざめた。

「うわあああああー！」

「いやあああああー！」

二人の様子を見たガストンは、声を立てて笑った。

「……なーんてなっ。冗談だ、冗談ジョーク！ほれ、この通り」

外側に向けていた掌を裏返し、肘を曲げ伸ばししたり、拳を握った

り開いたりして見せた。

「……っ！」

ナツシユはつかつかとガストンに近付き、非力な拳を握り締めて、ポカリと頭を殴った。

「ああ？やる気か、てめー？弱虫君のくせしやがって……、」

ガストンはナツシユの襟を掴んだが、言葉に詰まった。

「ふっ、ふざけていい時と、悪い時があるよっ！」

ナツシユは緑の団栗眼から、ぼろぼろと大粒の涙をこぼしていた。

「無茶してさ……さっきは、ほ、本当に、怖かったん、だから……う、ううっ……」

ガストンはナツシユを放して、頬を搔く。

「あー……、そのー、何だ。悪かったよ、悪かった。メソメソすんなって、おい、女子供じゃあるめーし……」

泣き崩れたナツシユの背中を、ガストンがポンポンと軽く叩いてやっているとー。

風車小屋の二階の窓が慌ただしく開き、ラムザが身を乗り出して叫んだ。

「おかしいぞ、ティータがどこにもいないんだ！みんなも来て、探してくれ！」

「えっ……！？」

級友達とベリンダも、石段を駆け上がって風車小屋の中に入った。

「ティータ！どこだ、ティータ！！」

ディリータは半狂乱になって、妹の名を呼び続けている。

梯子を登った屋根裏部屋にも、地下の貯蔵庫の中にも、ティータの姿は無かった。

「まさか……」

身投げでもしたかと、サーシャは裏手の窓から川を覗き込む。

「そんな、縁起でもないー！」

ナツシユはサーシャが落ちないように、後ろから腰を引っ張った。

「あの野郎、ウソだったのか？」

外の韋駄鳥小屋と納屋も見てきたガストンが、舌打ちする。

と……、

「坊ちゃん、ちょっと、こっち！」

奥の物置部屋から、ベリンダがラムザを呼んだ。

「これ……！」

隅の棚に、藤色の女服ワンピースが置かれていた。

「……間違いない。ティータの服だ……」

こんな時でもきちんと畳んであるのが、いかにもティータらしいと、ラムザは思った。

そっと手に取ってみると、まだ微かに温もりと湿り気がある。

（ついさっきまで、ここにいたんだ……）

大股に近付いてきたデイリータが、無言でラムザの手から服をひったくった。

なるべくきれいな面が表になるように畳まれてはいたが、全体を広げて見ると、破れや汚れがひどい。中身がどのような扱いを受けてきたか、如実に物語っていた。

「……」

後から来たサーシャは、思わず目を背けた。

ラムザも俯いた、すると……。

「……確かに一度、解放されたんだ」

縄ロープと、猿ぐつわだったらしき手拭いが、切られて落ちていた。

しゃがんでみると、光の加減で、砂埃や糞殻の積もった床の上に足跡が付いているのもよく見えた。棚の周辺には小さな裸足の足跡があるが、部屋から出入りした足跡は、大人の男達のものばかりだ。

「自分で着替えて……、その後で、また誰かに担ぎ出された……？」

「誰か、って……？」

ナツシュが首を捻る。

「わからない……。でも、少なくとも騎士団関係者や、近所の村の人が来る暇はなかった。骸旅団の連中には違いないだろう。命令系

統が混乱してるんだろうか……」

立ち上がったラムザの肩に、蒼白な顔をしたディリータが寄り掛かった。

「どうしてだ？ どうして、こんなことになった？

教えてくれ、ラムザ。どうして、ディリータがこんな目に……！」
拳を握り締め、ラムザの胸を叩く。ぎゅっと睨った両の目尻から、一筋ずつ涙が流れる。

「しゃんとおしよ！ まだ、お終いじゃないだろ！」

ベリンダが、苛々した口調で言った。

「女の人生、こんな所で終わりやしないよ。生きてりゃね、生きてさえいりゃあ、取り返しのつかないものなんか何にもありやしないんだから。兄貴のあんたがそんな態まねで、どうすんだい。これからちゃんと助け出して、支えておやりよ！」

ラムザは、親友の肩をきつく抱いた。

「そうだよ。ディリータ、ジークデン砦へ行こう！

きっと……ディリータが、僕らを待ってる……」

噛み締めた唇の端に、塩辛く血がにじむ。

？－6－〔6〕 風車小屋 ？妹は帰らず（後書き）

次回からやっと、第一部最終章。舞台は運命のジークデン砦へ…
…！

と、いうところで、どうやら時間切れのようです。

来週から妊娠三十七週、もういつ生まれてもおかしくない時期（臨月）に入ります。予定日までまだ一ヶ月ほどありますので、もう一、二話いけるかもしれませんが、一応これが出産前最後と思って御挨拶しておきます。

ここまで、長々いお話を読んで下さってきた皆様、有難うございます！再開まで二、三ヶ月ほどかかるかと思いますが、この続きにも気長々々お付き合い下されば嬉しいです。

？― 第7章 雪のジークデン砦 「1」 正義は星座

いつも、側に居た。

離れ離れになる時が来るなんて、考えてもみなかった。

だから一度も、口に出して約束したことはない。

『ずっと友達でいよう』とは……。

） ・ ） ・ ） ・ ）

星の明るい、静かな夜のことだった。

ラムザは父の晩酌に付き合って――といっても子供なので、暖炉の火で温めた牛乳^{ミルク}を飲みながら、酒の肴の相伴に与っていた。

父の居間の壁に掛かった護法剣^{ディフエンダー}をしげしげと眺めていると、バルバネスは愛剣を手に取り、その鞘を燭台の灯りに照らして見せた。

「ここに何と書かれているか、読めるか」

黒塗りの鞘には、古代神聖文字らしき銀色の飾り文字が刻印されている。

「いいえ」

「昔の言葉で、『正義無くして剣を抜くことなかれ』と書かれているのだ」

バルバネスは護法剣^{ディフエンダー}を手を持ったまま、再び長椅子^{ソファ}に身を沈めた。

「だがな。本当は、そんなことを言い出せば、我々騎士は決して剣を振るうことは出来ぬ。正義のある戦いなぞ、在りはせんのだからな」

「えっ!？」

ラムザは驚き、悲しそうに父を見た。

「どういことですか……？」

正義のために戦う騎士になりたいと願って、この一年余り、ドラコニア城で文武の修行に励んできたのに。

「持ってみろ」

と、バルバネスは護法剣の柄をラムザに向けた。
ディフェンダー

ラムザは両手でしっかりと柄を握り、恐る恐る剣を抜いて、目の前に真っ直ぐに立てた。

伝家の名剣は、ずしりと手に重い。手入れが行き届いて、刃は鏡のように曇り無く磨かれていたが、微かに血の匂いが立ち上ってくる気がした。

ラムザは、ごくりと唾を飲んだ。

「怖い」

「……はい。怖いです」

目を伏せた末息子の金髪頭を、バルバネスは満足そうに撫でた。

「恥じることはない。むしろ、それでこそ騎士の子だ」

そう言ってラムザの手から剣を取り、鞘に収め直す。

「扱いきれぬ重い剣を持てば、間違って自分が怪我をするかもしれんし、周りの人間に思わぬ怪我をさせてしまうかもしれん。恐れるのが当たり前だ。」

強がって怖くないふりをしたり、ましてや、強くなった気になっ
て嬉々として振り回すようでは、かえって騎士として行く末が暗いぞ。

お前はちゃんと、心の中に見えない鞘を持っておる。それが、正義の心だ」

バルバネスは、ポンとラムザの胸を叩いた。

「見えない鞘……」

「そうだ。」

剣はあくまでも、”力”そのものに過ぎん。人を傷付けることを目的に作られた、恐ろしい力だ。正義は剣ではなく、鞘の方にある」

バルバネスは笑った。

「そうそう、ずっと以前にシドが訪ねてきてくれた時、お前は自分の背丈よりも大きい聖王剣エクスカリバーを持とうとして、下敷きになって大泣きしたんだったな。岩をも断つという名剣だ。鞘から抜けておれば、首が切れていたかもしれんぞ」

「そうなのですか？」

「覚えていないか。まだ三つぐらいだったからな。」

剣に鞘が無ければ、触れるもの全て——強きも弱きも、敵も味方も、振るう者自身をさえも傷付けてしまう。世界を滅ぼすという凶天使”ラグナロクのことを、”鞘無き剣ひのぎ”と呼ぶだろう？

やむを得ず使う時の他は、危険な刃を包み込み、無益に傷付く者の無いように守る——鞘の働きこそ、正義の本質を表すものだ」

バルバネスは、あまり酒に強くない。他人と話をする時も、酒よりは茶の方を好む。酔えれば何でもよいというような飲み方はしないが、ただ時々、本当に美味しい酒をちびりちびりと飲みながら、ごく親しい友人や家族の前でだけくつろぐことはあった。

「昔々はな。まるで狩りでもするように、人同士が当たり前に争い、奪い合う時代があった。人がまだ、せいぜい家族や氏族程度の小さな集団で生活していた頃のことだ。……今でも、未開の地にはそんな暮らし方をしている民もいるが。」

あそここの連中は狩りをするのに良い縄張りを持っている、ねぐらに食糧を貯め込んでいる、美しい娘がいる。それを分捕ることに、何の疑問もためらいも無かったのだ。

だが昔の人にも次第に、ちまちました小競り合いに明け暮れるのは労力の無駄遣いだとわかってきた。

より多くの人間が協力して、外敵や自然災害に備える——例えば、集落全体を柵で囲って交代で見張りをするとか。皆で溜め池を作るとかいうことに力を使った方が、もっと安全に、豊かに暮らせると気付いたのだな。

そうして段々に集団が大きくなり、村が出来、国が出来ていった。

さて、そこでだ。

大勢の人間が一緒に暮らしてゆくには、ルール約束事が必要。

集団の中にいれば一人一人は皆の力で守られるが、そのためには、一人一人も自分勝手なことをするのではなく、皆のために力を使わねばならん。

”皆の幸せを考えて行動する”ことが、正義の基本だ。

ごく単純に”正義のために戦う”と言えば、”同じ集団の仲間を守るために戦う”という意味だろう。

ルール決まりを破って仲間を傷付けたり、物を盗ったりする者を懲らしめるとか。仲間の一人でも外敵から攻撃されれば、皆で立ち向かうとかいうことだな。

だが、聖アジヨラの教えに則ればだ。本当は、地上に生きるものは全て——異民族、異教徒や、我々が普段”害獣”と呼ぶ生き物であつても、広い意味では”仲間”なのだ。

たとえ誰かを守るためであつても、別の誰かを傷付けたのでは、真に”皆”で幸せになることは出来んな。

厳密には、戦えば必ず正義に反することになる。理想的には、誰も傷付かない、誰もが納得出来る解決策を見つきたい。

正義の心を持って戦う——というのは、なるべく戦わぬように心掛けることだと言える」

ラムザにもやっと、得心がいった。

「剣を抜いた時には、もう正義は破られている——ということですね」

「そうだ。だが、一度剣を^{ひとたび}抜けばそれでお終いというわけではないぞ。抜いた後でも、再び収めるために鞘は必要だ。

どこまでで剣を収めるのか？懲らしめるだけで良いのか、息の根を止めるか。それとも、後ろにいる一族や仲間にまで責任を求めるのか？

剣を持つ限り、常に鞘も忘れてはならんということだ」

「父上、では、騎士は何のために戦うのですか？ 剣を抜くのもやむを得ない時というのは、どんな時ですか？」

バルバネスはまた笑った。

「お前達が悪さをした時のことを考えてみればよい。

まずはザルバッグが、ぶん殴ってでもお前達を止める。その後でオルキムが、何故いけないのかを丁寧^{ていねい}に話してくれる。

「そうだろうか？」

「……はい」

ラムザは首をすくめた。

（いきなり問答無用で拳骨を降らせてくるのは、勘弁してほしいんだけど……）

大抵、悪戯の発起人はハールーシャで、ラムザとディリータは否応なく付き合わされるか、むしろハールーシャを止めようとしているぐらいなのだが。

しかし事情を説明しても、ほとんどの場合、『主君に責めを負わせるとは何事か、諫められなかったお前達が悪い』で片付けられるのがオチだ。

もつともザルバッグは、士官学校生時代の演習の折、野営地に飛び込んできた野猪^{ワイルドボー}を鉄拳の一撃で仕留めた……という逸話の持ち主である。幼い弟相手には、あれでもかなり手加減しているらしい。

「オルキムはな、あの分厚い眼鏡が必要になる前は、ザルバッグよりも強かったのだぞ。ミュロンド島で司祭になるための勉強をしていた頃も、素質を活かして神殿騎士を目指さぬかと勧められたそう^うだ。

だが、聖職を志した時から、何があっても二度と剣は振るわぬと決めておるのだ。あくまでもグレバドス教の教えに基づいて、何事も友愛の精神と知恵でもって解決することに全力を傾けると」

ミュロンド正教派は創立初期に、聖職者は武器を持つてはならぬと定めた。ところがその後、異教徒や異分子に物理的に対抗するために、神殿騎士や異端審問官などの”戦う聖職者”を組織内に擁す

ることとなった。

そこで用いられたのが、『魔法や、素手による格闘で戦えば、規則には抵触しない』という理屈である。

紗国戦争の頃には更に、聖印を象った三叉の剣は聖具であって武器ではない……という言い訳が考え出され、数多の神殿騎士団がフアラ教徒やガンダール教徒との血生臭い抗争の先頭に立った。

紗国人の母を持つオルキムには、そのような”抜け道”の行き着く先の危険が、並の畏国人イヴァリースよりもよく見えていたのかもしれない。

「立派な若者だとは思うが……、残念ながら、正義は”盾”にはならぬ。いかに心掛けが良くても、それで他人の剣を防げるわけではない。

”話せばわかる”のが理想だが、現実には、話し合う暇も無い時や、こちらの實力を示さねば話し合いに応じようともせん相手もいる。

なるべく戦わぬようにするといっても、目の前で悪事が行われておるのに、加害者が自主的に剣を引いてくれるまでただ待っているわけにはゆくまい。それでは、被害が大きくなるのをほったらかしにしてしまう。

不当に傷付けられそうになっている者を守るために、応急処置として力に力で対抗するのは、”善”ベストではないが”まし”セカンドワーストな方法ではあるだろう。

オルキムは、騎士の職務のそうした性質を毛嫌いしてはいない。自分では捨てた道だが、その道を進む他人への理解は持っておる。

そういう奴に、ザルバッグの側に付いてもらいたかったのだ。ザルバッグは、ほれ、お前もわかると思うが、血気に逸ってやり過ぎることもある。

儂が留守の間に城を任せるには、まだ若いかもしれんと心配しておったが……オルキムが色々と助言してくれるおかげで、上手くいつているようだ。

力無き正義は実効性に乏しいし、正義無き力は暴走してしまう。

二人三脚で、真価を発揮するということだな」

「はい」

ラムザはにっこりした。

ザルバッグとオルキムの関係は、自分とディリータの関係に似ていると思う。

農民出身のディリータが、いや、そもそも呂^{ロマンダ}国人の血を引くらしい自分がドラコニア城で暮らしてゆくには、今後とも困難が伴うだろう。だがザルバッグとオルキムを見ていると――途中で聖職者の道に転向したオルキムと、騎士として参謀役になるだろうディリータとでは、立場が違うにしても――自分達も大人になればこんな風になるのかな、と明るい見通しを持って将来を思い描くことが出来た。

「でも、父上。ザルバッグ兄上も、正義感が強いと思いますけど」

「いや、少し違うな。あれは、悪を憎む心が強いのだ」

バルバネスは苦笑した。

「”悪い奴をやつつける”のは一見、正義と表裏一体のようだが、実は全く別のことだぞ。

剣で物事を解決しようとすれば、どうしても誰かを傷付けてしまう。何かを守るつもりが、壊すものばかりが多い結果になってしまう。って、正義には程遠い」

バルバネスは顎鬚を撫でた。

「ザルバッグはまだ、融通が利かぬというか、『悪の小なるを以て見過ごすなかれ』という方針のようだな。

儂も若い頃はそうだった。が、それで後味の悪い思いをしたことがある。

まだ士官学校^{アカデミー}の学生だった頃、密漁の現行犯を目撃してな。逃げるのを追いかけて、棒で打ち据えて捕らえたのだ。

そやつは儂に頼み込んだ。後でどんな罰を受けても構わないが、今はこの魚を持って村に帰らせてくれ、とな。病気の父親に、どうしても食べさせてやりたいのだと……。

だが儂は、沙汰を決めるのは領主たる父上だと突っぱねて、城に連行した。

自分の手で悪者を捕らえることが出来て、得意になっていたのだな。手柄を父上に誉めてもらいたい気持ちもあった。

ところが、牢に拘束して沙汰を待っているうちに、その父親は亡くなったのだ。

後悔したぞ。犯罪といっても、人殺しほど他人に迷惑をかけることではなし、何故魚の一匹ぐらい見逃してやらなかったのか……。あるいはせめて、罰は後でしっかり科すにしても、何故すぐに仮釈放してやらなかったのか。

その村には後で、密漁せずとも新鮮な魚が食べられるように、養殖池を作った」

ラムザは頷いた。

その話は聞き覚えがある。いつだったか、それこそオルキムがザルバッグを諫めるために話していたのだと思う。

「誰かをやっつけることは、問題の解決に必要とも十分とも限らない。”懲らしめ”られるまでもなく悪いことなのはわかっていても、背に腹は代えられぬ場合もある」

「……??」

「ふむ、そうだな……。例え話をしよう。

ある島に、三人の巨人がいた。木の実を採ったり魚を釣ったりして仲良く暮らしておったが、巨人達の体が大きくなるにつれ、食べ物が必要なくなってきた。

三人はそれでも仲良く収穫を分け合い続けたが、ある時とうとう、三つに分けたのではぎりぎり生きてゆくにも足りぬところまで食べ物が減ってしまった。

さて、どうすれば良いかな？ 誰も、進んで友達を殺したくはないだろう。

運命を神に委ね、誰か一人が飢え死ぬまで食べ物を受け合い続けるか？ それとも、誰か一人が我が身を犠牲にして他の二人を救える

か？

大抵は、どこかで我慢出来なくなつて誰か一人を……もしかすると二人を殺して、残りの者で生き延びようとするだろう。殺して食べ物を奪わずとも、食べ物奪えば殺すことになるから、結果は同じだ。

正義が剣にあるものだ――”悪者を倒すこと”だと思っていると、このような時、”誰をやつつけるべきか？”という発想に囚われ易い。

あいつは一番怠け者だとか、最初に喧嘩を吹っ掛けてきたとか、”死んでもよい悪者”を決めるために粗探しを始めてしまう。

だが、どうしても誰かを犠牲にするしか道は無いものだろうか？何か、もっと良い解決策があるのではないかな？

「……三人分の食べ物があれば争う必要は無い、ってことですね！」バルバネスは大きく頷いた。

「そうだ。

例えば今まで自然採集だけに頼っていたのなら、畑を耕して作物を育ててみれば良いかもしれん。他にも、大きな舟を作つて遠くまで漁に出るとか、もっと広い他の島に引っ越すとか、方法は色々考えられるな。

相争うよりも、力を合わせて新たな富を生み出した方がずっと良い。とつくの昔に気付いたことのはずなのだが……、”喧嘩”の規模が大きくなると、忘れてしまうようだ」

「父上。三人の巨人というのは、三つの国のことでしょう」

「うむ……。イヴァリースセラモニア オルダリーア畏国、是領、鷗国。

開戦したばかりの頃は、我らの父祖も、正義無き戦いのつもりではなかったのだ」

七王国統一から五十年が経つた畏国では、人口が増え、土地不足が深刻だった。貴族から農民まで、土地の相続や隣地との境界決定トラフルを巡る揉め事が頻発しており、貧困や治安悪化の原因になっていた。

そんな時、オルダリーア 鷗国の支配の下で重税に喘ぐゼラモニア 是領が、イヴァアリース 畏国に庇護を求めてきたのである。

自然の厳しいゼラモニア 是領では貧しさ故に、将来に向けた公共設備投資をする余裕が無く、しかし、インフラ 公共設備が整備されなかったためにいつまでも貧しさから抜け出せない、という悪循環があった。

一国で独立するには力不足のゼラモニア 是領は、イヴァアリース 畏国の技術力と資金力、労働力に期待を寄せていたのだ。

ペシャ 紗国戦争に勝利したイヴァアリース 畏国は、農工業や土木、医学、数学など様々な分野で、東方から新しい知識と技術を吸収していた。また、交易によって――特に、植民市とした貿易港・シヤマルⅡツアスタから上がる関税収入によって、外貨準備を積み増していた。国民生活は苦しくなりつつあったものの、国家としては、オルダリーア 鷗国よりも遙かに豊かで魅力的な宗主国だったといえる。

「『土地無き民』を抱えるイヴァアリース 畏国と、『民無き土地』を抱えるゼラモニア 是領の思惑が一致したのだ。

イヴァアリース 人を移住させて、森を開墾したり、道路や堤防を作ったりすれば、ゼラモニア 畏国国内での争いを減らせる。是領の人々の暮らしも楽になる。

それだけではない。イヴァアリース 畏国が是領を統治することは、実は、オルダリーア 鷗国にとっても益のある話のはずだった」

オルダリーア 鷗国が是領を併合したのは、ルザリア王国がゼルテニア王国を下して七王国統一する直前のことだ。勢いに乗ったアトカーシヤ王家がゼラモニア 鷗国にまで版図を広げようとすることを恐れ、緩衝地帯となるゼラモニア 是領を一足先に押さえたのだった。

ところが、ゼラモニア 是領はオルダリーア 鷗国にとって、モルボル “迎え花虫”と化していた。（※農園などで、モルボル 花虫の食害を防ぐために飼って縄張りを守らせる花虫。時として飼料代が食害を上回るため、転じて、維持経費が利益を相殺しかねない事業や雇い人などのこと。主に傭兵団を指して言う）

ゼラモニア 鷗国とて、ゼラモニア 是領に投資しなかったわけではない。
ゼラモニア 是領の農民達はオルダリーア 鷗国の支配を苛政だと思っていたが、実際には、

治水や交通網整備に掛ける公共事業費が鷗国本国からの持ち出しになつていたのである。いづれ農林業や鉱業の生産力が向上すれば、資金回収出来るという見積もりだった。

だが、税収は計画通りには伸びず、むしろ鷗国の支配に不満を持つ自治都市の反乱や盗賊団の鎮圧に戦費がかかるなど、収支は遅々として改善しなかった。

「鷗国の王位継承は、開戦の口実に過ぎん。」

商人が値切られるのを見越して売り値を吹っ掛けるのと、同じだな。鷗国本国まで攻め込む姿勢を見せておいて、まあ是領だけで手を打ってやるか……という。

冷静に考えれば、畏国にも鷗国にも、山がちな是領を間に挟んで相手国を支配するのは難しい。

本国まで攻め入られる恐れがないとわかれば、鷗国は”損切り”のつもりで是領から手を引くだろう。元々、畏国からの侵攻に備える”防波堤”とする以外に、是領を支配する利点はほとんど無くなつておつたのだから。

……という算段だったのだがな。

国は、一人の巨人とは違う。一つの意味の許にまとまって動いてるわけではない」

畏国に庇護を求める是領貴族達は、『是領人は皆鷗国の支配を憎んでおり、畏国が出兵すればこぞって味方するだろう。戦いは早期に決着する』と請け合つた。

が、現実には、是領人達は一枚岩ではなかった。

五十年余りの支配の間に、文化習慣も、血縁関係でも鷗国に近くなっている地方もあった。また、善政を敷き是領の民に慕われる鷗国人領主がいる一方、”解放軍”である畏国の騎士達の中にも横暴な者はいた。

日々の生活が苦しい是領では、人々は目先の利益になびきやすい傾向がある。それゆえ、戦の大勢が決すれば一気に片が付くものと見込まれていた。が、逆に地域毎、それどころか氏族や個人毎に意

見が分かれ、混乱が続いたのである。

「戦は思いのほか長引いた。そこで勝利を焦って、本当に鷗国オルダリーア本国に攻め入った頃から、互いに食うか食われるかになってしまったのだ。」

是領ゼラモニアの領有権の問題だけでは済まなくなった。相手を完全に叩き潰さねば、安心出来なくなってしまうのだな」

ラムザがお代わりの牛乳ミルクに蜂蜜を垂らしていると、バルバネスは言った。

「渦が出来るまで匙スプーンでよくかき混ぜてから、手を止めてみる」
「……？」

「手を止めても渦は消えず、今度は匙スプーンの方が押されるのがわかるだろう」

「はい」

「戦も同じだ。一度勢いがつけば、止めるのが難しくなる。」

どんな良い目的のために始めたつもりでも、戦をすれば必ず人死に出る。死んだ本人や家族にとっては”少々の犠牲”では済まぬ。報復を求めれば、血が血を呼び、双方とも恨み憎しみを募らせてゆく。たとえば自分が剣を収めても、相手は収めてくれるのか……という恐れも抱く。

欲も出て来る。折角手入れをした土地を手放したくはなくなるし、戦費がかさんでくれば、相手から戦利品なり賠償金なりむしり取るまで勝とうとするだろう」

バルバネスは溜め息を吐いた。

「鷗国オルダリーアから撤退した頃には、もはや国全体としては、戦を続ける益メリットは無くなっていた。」

黒死病と戦争のために人口が減って、土地を増やす必要は無くなった。是領ゼラモニアの人々の暮らしも、劇的に改善したというほどではない。それに、是領ゼラモニアから鷗国オルダリーア人の支配者達を追い出すのは”解放”だとしても、国境を越えて鷗国オルダリーアの農民達に犠牲を出したのは紛れもない

”侵略”だ。

当初の正義は失われ、あるのはただ、個人個人の恨みや欲ばかりになっておった。

いや、初めから正義なぞ所詮、自分勝手な欲望を覆い隠すための仮面に過ぎんだと言う者もある。

だが儂は、正義がそこまで虚しいものだとは思わんよ。

確かに、『もつともな理由があれば戦ってよい』わけではない。だがせめて、『もつともな理由なしには戦ってはならない』という意識が広まるだけでも、大分、自分勝手な戦いを減らす役に立っておると思うぞ。

少なくとも、『力のある者は何をしてよい』という考え方が大手を振ってまかり通る世の中よりは、不幸になる人間が少なく済んでおるだろう」

バルバネスは肩幅の分ほだけ護法剣を抜き、曇りの無い鏡のような刀身を見つめた。

「『どうすれば良かったのか』はわからん。

戦をすれば、どうしても犠牲者を出す。だが戦をして土地を手に入れないければ、栄養失調や、犯罪や私闘で多くの犠牲者を出していただろう。

交易で富を増やしたり、東国の灌漑技術で畑を広げたり、国内で出来ることはとつくにあれこれと試みられた後だったのだ。他に、どんな解決策があったのか……。

だが少なくとも、『今どうすれば良いか』はわかる。

一日も早く停戦し、国内の産業の立て直しに力を振り向けることだ。このままですると不毛な消耗戦を続けておれば、勝利者は誰もいなくなる。三国とも弱って、呂国ロマンダや新覇帝国パラメキアの属国になりかねん」

キン、と音を立てて、バルバネスは剣を鞘に収め直した。

「お前も、もう九つ……か」

「はい」

「お前達の母さんに会ってから、かれこれ十年、どうすればこの戦

を終わらせることが出来るかと、いつも考え続けてきた。

一つ一つの作戦には、勝たねばならぬ。負ければ、話を聞いてもらえないからな。味方の畏国イヴァリースの騎士達にも、鷗国オルダリア人達にも……。戦を続けるか止めるか、主導権を握るのは勝った方だ。

しかし、闇雲な、なりふり構わぬ勝ち方をして、話は聞いてもらえぬ。常に騎士らしく節義を守って戦い、剣の収めどころを見失ってはならぬのだ。

とても難しい、矛盾した仕事だ。

母さんの、医者の仕事とも似ているな。血を見ないわけにはゆかぬが、血が流れるのを平然と見ておれるようでは、患者を助けることは出来ん。なるべく流す血が少なくて済むように、怪我や病気が治って自分の仕事が必要とされなくなるようにと、心を配っている」

バルバネスは、母親似の愛息子の頭に手を置いた。

「父や兄弟達の仇を討てと、一人でも多くの鷗国兵オルダリアを倒せと、子供達を教え育てる騎士もいる。……その方が多いかもしれん。

だがな、ラムザ。”武門の棟梁”ベオルブ家の男子であればこそ、”正義”の意味をはき違えんではない。

儂とて、沢山の戦友や部下達を失った。が、儂の方も大勢の鷗国オルダリア人達を斬ってきたのだ。一方的に恨む筋合いはない。敵の首を供えることではなく、和議を結びこれ以上の犠牲を食い止めることこそ、彼らへの手向けになると思っておる。

お前も、騎士となり儂の仕事を継いでくれるならば、一緒に考えてくれ。どうすれば、なるべく争わずに、人と人々が仲良く暮らしてゆけるのかを」

「はい」

ラムザは深く頷いた。

「”皆のためを考える”と言えば一言で済むが、具体的にどうすればいいかとなると、五十年近く生きてきた儂にも、これぞという答えは出せん。あちらを立てればこちらが立たず、なかなか、全員が全員満足出来る道は見つからぬものだ。

だが、こうして儂の考えてきたことをお前に話しておけば、お前が今の儂ぐらいの年になる頃には、儂よりもう一步だけ良い答えに近付けるかもしれん。

それをまた、お前がお前の子供達に話して……そうしてずっと探し続けてゆけば、いつか、どんな事にも争わずに済む答えが見つかるかもしれぬ。

正義というのは、見果てぬ夢だな。だが、見るに値する夢ではあると思う」

バルバネスは立ち上がり、換気のために窓の鎧戸を開けた。冷たい外気が部屋の中に流れ込んでくる。

月の無い晴れた夜空に、冬の星が煌々と瞬いていた。

「あるいは……正義というのは、あの空の星座のようなものだと言ってもよい」

「星座……」

「そうだ。天に輝く道標だ。みちしるべ

どこまで行っても星そのものには辿り着けないが、それを目指して進むことで、地上の道を過たずに歩んでゆける。

星を手にとることが出来ると思うのは、愚か者だ。だが、決して手が届かぬからと、星を見上げることをやめれば、人は闇夜に道を見失ってしまうだろう」

「……」

ラムザは白い息を吐きながら、じっと神妙な面持ちで星空を見上げていた。

「お前にはまだ、難しい話だったかな」

「はい……よくわかりません。でも、わかるようになるまで、今日の父上のお言葉をしっかり覚えておきます」

「うむ。それで良い」

バルバネスは剣だこのある大きな手で末息子の肩を叩くと、窓の鎧戸を閉めた。……

？― 第7章 雪のジークデン砦 [1] 正義は星座（後書き）

お久し振りです。再開第一話は、決戦前の小休止……のつもりが、なにげに難易度特Aで、手こずりました。

登場人物は父と息子の二人だけ、場面はずっと暖炉の前、という動きの少なさ。それでいて、物語のタイトルに絡む重要テーマが語られる、という……。

さて、”正義とは何ぞや？”という問いに対する答えには、大きく分けて二つのタイプがあるように思われます。父ちゃんがここでもラムザに語ったのは別の、もう一つの考え方について、後で活動報告で触れておこうと思います。

？一七二〔2〕 夕陽に還る

ジークデン砦には、雪が舞っていた。

昨夜から強い寒気が流れ込み、気温は冬に逆戻りしている。夜半から降り始めた雪は今朝になっても止まず、周囲の森の木々や、まだ枯れ草に覆われた草地の上に、※四寸（カーク）（※約十二センチメートル）ほどの深さに降り積もっていた。

山合いの峠道を守るこの砦は、七王国時代に、ガリオンヌ公国がフォボハム大公国や呂国（ロマンダ）からの侵攻に備えて建築したものだ。七王国統一後は、山賊の襲撃を警戒した農民達の避難所となる程度で、小規模な戦闘しか経験したことがない。そのため、建築様式が旧式である。

紗国戦争を経て、畏国（イヴァリース）の築城技術は大幅に進歩した。

例えば、ジークデン砦の城壁は角が四角いが、五十年戦争中に新築・増改築された城や砦の多くは、四隅や城門に円塔を持つ。角が円い方が、掘り崩しと呼ばれる攻城戦法に強いし、攻守の死角も出来にくいのだ。

また、紗国戦争後（ペンシャ）に造られた城の歩廊や塔には、内側向きの壁が無い。これは、万一敵に外城壁や塔を占領された時、内城壁や主塔から攻撃して奪い返し易くするためだ。

ジークデン砦が骸旅団の手に落ちたのも、この建築様式の古さが一因だった。それは逆に、彼らの最後の牙城となったこの砦が、守り抜き難いものであることも意味する。

その弱点を補う”切り札”を、今彼らは握っている。……つもりだった。

砦の城門の上に渡された木の張り出し歩廊に、副団長であるゴラグロスが黒髪の少女を引き立て、盾に取っていた。

一週間前、成都イグーロスのベオルブ邸から誘拐してきた少女。ジークデン砦を包囲する北天騎士団、その陣頭で指揮を執る団長・

ザルバッグの妹だ。

……と、ベオルブ邸を襲撃した実行部隊の隊長だったゴラグロス
リーダーは思っている。

だが、本当は違う。

この黒髪の少女の名は、ティータ。ベオルブ家の令嬢・アルマの
コンパニオン女官とすべく共に教育されてきた、平民の娘なのだ。

韋駄鳥チヨコボにまたがったザルバッグと、背後に控える将兵達は、その
ことを知っている。彼女には、人質としての政治的価値はほとんど
無いと。

とはいえ、痩せ細り、怯えた褐色の眼ばかりが大きく見える少女
の姿は哀れを誘った。

誘拐された時に着ていた服ではなく、まるで花嫁衣装のような、
ワンピース緑の晴着姿だ。もっと大人の女性の持ち物だったのだろう、まだ十
四歳の少女には寸法サイズが大きすぎて、小柄な体が一層小さく見える。
後ろ手に縛られているが、猿ぐつわは嵌められていない。氷点下
の空気の中で、浅く速く震える息遣いが、可視的にわかる。

これで、青ざめた唇から『助けて』と、か細い悲鳴でも漏らせば、
士気を萎えさせる効果は抜群だろう。それを期待して、猿ぐつわを
外してあるものと思われる。

勝ち気で誇り高いアルマであれば、逆に『わたしに構わず攻撃し
なさい！』と、得意の口八丁で味方を鼓舞し敵を罵ったに違いない。
必要と思えば、足手まといにならぬよう舌を噛み切って自決するこ
とも厭わなかったろうが――、

内気なティータには、命乞いをせぬよう耐えているだけでも精一
杯だろう。いや、身がすくんでしまって、声も出せないのかもしれ
ない。

（また、この場面を迎えることになろうとは……）
ゴラグロスとティータを見上げるザルバッグの顔は、険しいという
よりは無表情だ。

士卒の手前、平静を装っているものの、心中穏やかではない。

四年前の夏、ベスラ要塞の城門の下で。今と同じように見上げたのは、ラムザとアルマの母・ファティマだった。

あの時、どれほどファティマを救いたかったか。

己に差し出せるものであれば、全てと引き替えにしても良かった。地位も財産も、矜持も、生命も。

だが、何千という味方の将兵、その背後にいる何百万もの国民の命と天秤に掛けることは出来ない。

それは、騎士の家に生まれた者には決して許されぬ行いだった。

誰よりも、ザルバッグが救わんとする彼女自身が許さなかったろう。恐らくは、その場にいない父以上に、自制心を試された。

それでも――。

それが、道ならぬ想いゆえとわかっていても――。

手を下せずにいるザルバッグに、ファティマは微笑みかけ、城壁から身を投げた。辛い決断を、彼女自身に引き受けさせてしまったのだ。

「さっさと、ここを立ち去るんだッ！この娘がどうなってもいいのかッ！」

ゴラグロスがティータの首に剣を押し当てる。

「我々北天騎士団は貴様らの脅しなどに屈したりはしないッ！！」ザルバッグは断固として言った。

残念ながら、人質が自分より身分の高い者でもない限り、人質を取られたことを理由に敵の要求を呑んではならないことは――特にそれが軍事的要求である場合――兵法の定石である。これは、主に二つの理由からだ。

一つには、一度でも要求を呑めば、敵をエスカレート増長させるため。

『人質を取れば要求が通る』という前例を作ってしまうと、敵は更なる人質を取り、次々と新たな要求を突き付けてくるだろう。目の前の人質を救っても、将来的により多くの人間を危険にさらすことになりかねない。

頑として要求をはね付ける姿勢を貫き、人質を取っても無駄だと

思い知らせば、敵も効果の無い手段は選ばなくなる。

二つには、人命はかけがえが無い。故にこそ、目先の情に流されて軍事的判断を曲げることがあってはならないのだ。

一人の人質を救うために、何十人何百人という兵士達や、彼らが守らんとしている何千何万もの民に犠牲を強いるのは不公平だ。

その人質が、例えばエルムドア侯のような要人であれば、多少の人的損害を出しても救う意義があるだろう。あるいは、せめて本物の伯爵令嬢であるアルマであれば、政略結婚の”道具”としてでも、政治的価値があると見なされたかもしれない。

あるいは、いつそ赤の他人であれば、『騎士団は無辜の民を見捨てない』という意思表示として、助けでも良かったかもしれないが……。

”身分は低いが親交がある”というのは、一番救い難い条件だ。^{パターン}救えば、単なる身びいきとの謗りを免れない。いや、実際、身びいきそのものだろう。

（それを救うための、”この部隊”なのだろうが……）

とザルバッグは、ダイスダーグに授けられた兵士達のことを思った。

「おかしなマネはするなよ！

この砦の中には火薬がごまんと積まれているんだ！お前達全員を吹き飛ばすだけの量はたっぷりあるんだぞッ！

わかったら、さっさと行けッ！」

ゴラグロスは、別の角度からも揺さぶりをかけてくる。

（はったりか？それとも……）

ザルバッグは見極めようとした。

”ザルバッグ個人として”は、ティータを助けてやりたい。だが、”北天騎士団団長として”は、人質の救出は最優先事項ではなかった。

たとえば、人質に取られたのが実の妹のアルマだったとしても、彼は己の職務を忘れることはないだろう。

骸旅団との決着は、何としてもここで付けねばならぬ。今ウィー

グラフを取り逃がせば、これまでの戦いが水の泡だ。また延々と戦死者や民間人の犠牲者を出して、戦い続けることになってしまふ。

もし、ウィーグラフを始め、骸旅団の生き残りが全て砦の中にいるのであれば、急がずに人質救出に手間暇を掛けられる。攻城戦の基本は、包囲戦だ。退路・補給路を断ち、じっくりと腰を据えて待っていれば、戦わずとも敵は飢えて自滅する。それまでの間に、説得と交渉を重ねたり、突入の機会を窺ったり出来るだろう。

だが、ウィーグラフが砦の外にいたのであれば、ぐずぐずと足止めを食ってはいられない。挟撃されるおそれもあるし、砦の中の連中は捨て身で自爆攻撃を仕掛けてくるかもしれない。

しかし、そうと見せかけて、砦からの脱出を計ろうとしているのかもしれない。

「貴様では話にならん！貴様らの大将は何処にいる？ウィーグラフを出せッ！」

「早く退けッ！さあッ！！」

ザルバッグとゴラグロスの睨み合いが続く。

そこに水を差したのは、闖入者達の登場だった。

「ティータッ！！」

砦の角を曲がって、ディリータが姿を現した。

「兄さんッ！！」

ティータは身を振り、声のした方を見た。

ディリータは周囲の状況を確認しようと、素早く視線を走らせる。その目が、一点に釘付けになった。

ザルバッグのすぐ後ろに、エルムドア侯の近衛騎士団員であるはずの、アルガスがいる。

（何故、奴がここに……！？）

自動弓を手にしたアルガスは、ディリータと目が合うと、ニヤリと笑った。ベオルブ邸の玄関先で喧嘩別れた時以上の、優越感に満ちた冷笑だった。

ディリータの胸を、不吉な予感がよぎる。

その時。

「ティータ!!」

よく透る声が、砦の城壁に響いた。

ティータの目が丸く見開かれる。

(あ……)

待ち人は、来た。

本当に、彼女を追ってきてくれたのだ。

骸旅団の弓兵の一人が自動弓を向けたが、

「ティータ、今助ける!」

黄金色の髪リボンの少年は怯まず、ティータを力付けるように頼もしく微笑んで、手を差し伸べた。その手首に、ティータの藤色の髪留めリボンが巻かれている。

「ラムザ様……」

瞬きを忘れた両眼から一筋ずつ涙がこぼれ、小さく呟いた唇に微笑が上る。

(……!?)

ゴラグロスリボンは訝しんだ。

ティータの体がゆっくりと前に傾き、抱き押さえているのが難しくなったのだ。

もがいたのなら反射的に腕に力が入るが、触れている部分の筋肉は緩めたまま体重の重心だけを移動されると、対応しにくい。

ティータはそんな、武術の極意を知っているわけではなく、無意識の動きなのだが――。

(……ッ!!)

ザルバグは胸を突かれた。

まるで、四年前のベスラの悲劇を再現するかのよう。

ティータは何の迷いも無く前に足を踏み出す。

足下が見えていないのか。それとも、もう充分に心満たされたからか。

褐色の瞳に、ただラムザの姿だけを捉えて。

一歩、二歩……。

その先に訪れる結末を、ザルバッグは見るに忍びなかった。

「構わん、やれ！」

号令してサツと左手を振り下ろすと、間髪入れずに弓兵達が矢を放った。

骸旅団の弓兵達も同時に矢を放ったが、人数が違う。

「うッ！」

「ぐあッ!!」

城壁の上の骸旅団員達は、一気に半数ほどに減った。

北天騎士団側にも負傷者は出たが、いずれも致命傷ではない。

ラムザも一瞬、彼を狙う弓兵に意識を集中し、飛んできた矢をかわした。

再びティータに目を戻したラムザは、信じがたいものを見る。

ビュンッ!!

アルガスの自動弓が唸り、ティータの胸を深々と射抜いたのだ。

ラムザに気を取られ、彼が無事だったことに安堵していたティータは、自分の身に何が起こったのかわからなかった。

強い衝撃を受けて背中がゴラグロスの体にぶつかり、気が付くと、胸に矢が突き刺さっていた。

「……あ……」

喉に込み上がってきた大量の血を吐きながら、ティータは膝からくずおれる。

ティータの目の前が、真っ赤になった。

(紅い……)

紅い……夕陽。

(ここは……?)

カラーン、コローン……。カラーン、コローン……。

香ばしい干し草と麦の穂の匂いのする風に、日暮れ時の鐘の音が

柔らかに溶けてゆく。

丘陵地の麓に、懐かしいマンダレーナ村の家々と、背高のつぼの教会の鐘楼が見えた。

（ああ、わたし……帰ってきたのね……）

帰ってきた？今まで、どこに行っていたのだっけ？

「メエエー……」

仔羊が、もこもこした毛皮を脚にすり寄せてきた。

（そう……迷子になったこの子を捜して、マンダリア平原へ……）

ティータは仔羊の背中を撫でた。

（さあ、帰りましょう。父さんと母さんが待ってるわ……）

ティータの父と母も、彼女の帰りを待っているはずだ。

黄金の海のように輝いて波打つ、麦畑と牧草地の間を縫って、ティータは家路を辿る。

（すっかり遅くなっちゃった。おばあちゃんがもう、作ってくれたかしら？）

今日は、母と叔母が”あの人”の家に手伝いに行っているから、ティータが夕食の準備をしなくてはならなかったのに。

ぽつんと小さく見える我が家の煙突から立ち上る煙は、細く薄く、消えかかっている。もう夕食は出来上がっているのだろう。

（明日になったら、囲いの石積み崩れた所、ワインバーグ小父さんに直してもらおう）

南洋人の隣人は、力持ちだ。あつという間に元通りに戻してくれるはずだ。

今夜一晩くらいは、万が一赤山猫や狼が襲ってきても大丈夫。元は傭兵だった父の武術の腕は、錆び付いてはいない。

（あら……？）

兄のディリータが羊の群れを率いて、一足先に村に戻ろうとしている。数頭の牧羊犬が忙しく周りを走り回り、兄の隣では、親友のアルマがひっきりなしに何か話し掛けている。

楽しそうな親友と、迷惑そうな兄を遠目に見て、ティータはくす

りと笑った。

お喋りで、わがままで、手が焼ける……などとうるさがっているけれど、その実、ディリータは彼女とその兄の世話を焼くのが大好きだ。

（お似合いだと思うのだけど）

そんなことを言えば、当人達は力いっぱい否定するに違いないが。

（夢……よね）

長い夢を見ていた気がする。

アルマがお姫様で、ディリータは騎士見習いで、自分も一緒にお城で行儀見習いすることになって……。

（そんなこと、あるわけないじゃない）

確かに、アルマ兄妹の父は騎士だ。けれども、アルマの兄はとても優しい、人懐こい少年で、血塗られた剣の道を歩むには向かない。だからこそ、兄妹は医者之母と一緒に、こんなひなびた片田舎の村で暮らしているのではないか。

何の変哲もない農村の毎日が退屈になって、つい、そんな空想を試してみたのかもしれない。

そうだとしても、ほんの少し試してみただけ。本気で、この村での暮らしに飽きることなど、あるはずもない。

ティータは、生まれ故郷のマンダレーナ村が心から好きだ。

素朴で親切な村人達も、実り豊かな農地も、村を囲む広い空と草原も。

単調な繰り返しのように思われる日々と歳月にも、四季折々の、人の営みの節目節目の、美しい律動がある。

この小さな村で生まれ育ち、また子を生み育てて一生を終えることに、何の不満も無い。

ずっと、この村で生きてゆく。

緑薫る風の中で。愛しい人の側で――。

（あれは……）

分かれ道の袂に立つ櫟オークの樹の下で、もう一本の道を歩いてきた誰

かが立ち止まり、こちらを見上げた。

医者白衣を着て、野草をいっぱい積んだ籠を背負っている。

（ファティマ小母さん……？）

いや、違う。ほっそりとした華奢な立ち姿ではあるが、女性にしては背が高いし、肩幅もある。

（あ……！）

夕陽に煌めく黄金色の髪の少年は、微笑んでティータに手を振った。

仔羊がびよこぴよこと飛び跳ねて、坂道を駆け下りてゆく。ティータも駆け出して、たちまちそれを追い越した。

少年は籠を地面に下ろし、両腕を広げる。

ティータは迷わず、彼の胸に飛び込んだ。

細いけれど逞しい腕が、しっかりとティータを抱き止める。

「おかえり、ティータ」

よく透る低い声が、耳に心地良い。

白衣に顔を埋めると、嗅ぎ慣れた、石けんと薬草^{ハーブ}の匂いがした。長い間胸の奥にしまい込んできた言葉も、今なら素直に言える。

「ラムザ様、もう離さないで！わたし、ずっと……」

（ずっと……お側……に……）

とさり。

軽い音がして、ティータの小さな体はゴラグロスの足許に崩れ落ちた。

鮮血が見る見る雪を溶かしながら、赤い大きな水溜まりを作り、張り出しの床から溢れて城壁を染める。

「ティーターッッ！！！！！！」

ディリータの悲痛な叫び声がこだました。

「あ……！！！！！！」

ラムザは、たった今日の前で見た光景が信じられなかった。

悪い夢のようだ。いや、これが現実でなごらうものか？

目が覚めれば、昨日の宿を借りた田舎屋敷の中で、これからティータを助けに行くところだということは――、いやそもそも、ティータが掠われたのが夢だということはないのか。

自分は今、城下屋敷の中庭でうたた寝をしていて。目を開ければ、すぐ隣で寝顔を見守っていたティータが、はにかみ笑っている……。

だが、肌を刺すように凍て付いた空気も、戦場に漂う鋼と革と血の臭いも、ひしひしとこれは夢ではないのだと告げていた。

「何てこった」

後から来たベリンダが小さく呟き、

「……!？」

「……!！」

ナツシュとサーシャが悲鳴を呑み込んだ。

「どーして、こうなりやがる……!？」

ガストンも、怒ったり悲しんだりする以前に、まず状況が理解出来なかった。

「な、なんのつもりだ……?」

城門の上でゴラグロスが呆然としていると、

「撃てッ!!」

ザルバッグの再度の号令で、二段目に構えていた弓兵達が一斉に矢を射た。

「ぎゃあッ!」

「うっ……」

城壁の上の、まだ立っていた骸旅団員達も、ことごとく倒れた。

「ぐあッ!」

ゴラグロスも胸や脚に矢を受けながらも、気力を振り絞り、意識を失うことだけは辛うじて避けた。

「く……、クソッ……!」

よろめいて、城門塔の屋内へと後退る。

そこへ、駆け足の韋駄鳥チヨコボに乗った伝令がやって来た。

「ザルバツグ將軍閣下、山道に新たな敵兵が出現しました！人数は約五十名ほど。中にウィーグラフらしき顔を見かけたとの報告です！」

「わかった、すぐに行く。……後は任せたぞ、アルガス」

ザルバツグが愛鳥・”新星”^{ノヴァ}の首を巡らすと、その場にいた騎士と弓兵のほとんどは彼に従う。

ラムザがその背に呼び掛けた。

「兄さん……どうして……、どうして、ティータを……！」

（どうして、だと？）

ザルバツグは拳を握り締めた。

（わからないというのか、それが！お前に……！）

それではティータが浮かばれぬ、と思った。

だいたい、今はそんな私事を取り沙汰している場合ではあるまい。制止を振り切ってイグーロスを飛び出したことに始まり、叱ってやりたいことは山ほどある。帰ったら、こっぴどと絞ってやらねば――。

その機会が二度と訪れないかもしれない、とは露疑わず。ザルバツグはラムザを無視して、韋駄鳥^{チヨコボ}の腹を蹴り、駆け去った。

「兄さん」って……え？兄ちゃん^{あん}が、ベオルブの若様……！？」

戸惑った声の聞こえた方に、ラムザが目を向けると。

アルガスの後ろに残った兵士達の中に、身長に見合わぬ大剣を持った少年と、槍使いの男の姿があった。初陣の日にガリランドの酒場で出会った傭兵達だ。

見知った顔は、それだけではなかった。

「へっ、また会うとはなあ、お坊ちゃん」

その、ガリランドでの初陣で逮捕したはずの、盗賊ではないか。確か、ギリアムという名だったと記憶している。

（何故、ここに……！？）

囚人兵だ。頬に焼き印がある。死刑もしくは終身刑に相当する重罪人を、危険な戦闘の前線に立たせ、戦功を上げれば刑を減免する

制度があるのだ。

よくよく見れば、居並ぶ百人余りの兵士達のうち、ごく一握りの弓兵と魔道士を除いては皆、傭兵か囚人兵ばかりのようだ。

（この部隊は、いったい……?!?!）

しかし、疑問に思っている暇は無かった。

「アルガス……よくも……よくもッ、貴様アッ!!」

ディリータが剣の柄に手を掛け、ラムザより前に飛び出した。

「ディリータ、待て」

ラムザはディリータをきつく羽交い締めにして、引き止めた。

「なんだ、やろうっていうのか? いいだろう、相手になるぜ!」

アルガスが嘲笑い、挑発する。

ディリータは、ギラギラと怒りに燃える眼でラムザを睨んだ。

「放せ。止めるなら、お前も斬るッ!!」

「止めてない。”待て”と言っただけだ」

ラムザの腕を振り解こうともがいていたディリータは、ハッと動きを止めた。

静かな中にも底冷えのする声音と、ディリータの腕を強く掴んでいる手の震えから、ラムザも激しい怒りを必死で押さえ込もうとしているのだとわかった。

ラムザは食い入るようにアルガスの目を覗き込んだ。

「……」

その顔が歪み、碧い眼の目尻から涙がこぼれ落ちる。

「何故、こんなことを……? アルガス、何故だッ!!」

「ラムザ、お前の兄貴の命令だぜ。何故はないだろ?

たかが平民の小娘のために、お前は騎士団の誇りを捨ててあいつらの要求を飲むっていうのか?」

ラムザは首を横に振る。

「『人質を巻き込む危険性^{リスク}はあるとしても、賊を討て』という意味だろうッ。君の腕なら充分、敵だけを撃てたはずだ!

それなのに、君は……、わざと狙ったんだな!？」

”砂ネズミの穴蔵”で、狭い覗き窓から中の見張りを射倒したほどなのだ。

ティータの頭越しにゴラグロスを狙ったが、的を外した——のであれば、もっとうろたえたり、申し訳なさそうな顔をしたりするはずだろう。

だがアルガスは、全く悪びれないばかりか、得意そうな笑みさえ口の端に浮かべている。

「ティータは……ティータはデイリータの妹なんだぞッ！僕にとっても、もう一人の妹みたいなものだった！それを……君は……！」

何かの間違いであってほしかった。

アルガスがいかに平民嫌いとはいえ、数週間行動を共にした仲間の身内を殺して平然としていられるほど、非情な少年ではないと思っていた。

せめて、言い訳の一つも——”正当化”しようとするなら、非を認めている証拠だ——聞きたかった。

ところが、アルガスの口から出た言葉は、思いがけないものだった。

「矢っ張りな。お前は平民に肩入れしすぎだ。すっかり、その下郎の兄妹に毒されちまってるんだ。……ダイスダーク様のおっしゃる通りだぜ」

その目には、ラムザを憐れむような色があった。

「な……に……？」

「兄貴といっても、ザルバッグ様のことじゃない。ダイスダーク様さ」

アルガスは自慢げに胸を反らせた。

「ダイスダーク様に頼まれたんだ。お前の目を覚ましてやれってさ！未来のドラコニア伯爵の友人に相応しいのは、泥百姓の息子なんかじゃない。オレみたいな、由緒正しい名家の人間なんだ、ってな！」

「……！！！」

ラムザとデイリータは、白昼に亡霊でも見るように、あ然として
アルガスの顔を見つめた。

（ダイスダーグ兄さん……ッッ！！）

？－７－〔２〕 夕陽に還る（後書き）

連載開始当初からとても描きたかった、また、描きたくなかったシーンです……。

ああ、ティータ！短い人生だったけど、ラムザ兄妹と関わったことは不運でなく、幸せだったと思っていてくれたらいいな……という思いから生まれた、まさに”幻の”ハッピーエンド。

こんなのだったら良かったのにね……。

「いい加減に気付いたらどうだ！『違う』ってことにな！生まれも違うなら、これからの人生もまったく違う！宿命って言うってもいい！」

そいつらは、ベオルブ家にいてはいけなかったんだ！」

アルガスは小高い築山の上に立ち、ラムザとディリータを傲慢に見下ろした。

「ああー？てめーは違わねえってのかあ？」

ガストンが剣の鞘に手を掛け、ずかずかと前に出ながら啖呵を切る。

「なーにが名家だ、とつくの昔にカビの生えた先祖の手柄話以外に自慢のねえ蚤ヤロ……もがっ！？」

ナツシュとサーシャが、両側からガストンに組み付き、口を押さえた。

「駄目だよ、喧嘩売っちゃ！ディリータ君とラムザ君が我慢してるんだ！」

しかし、ナツシュの制止も虚しく、アルガスはディリータを嘲る。
「悔しいか、ディリータ！自分の無力さが悔しいだろッ？」

平民出のお前には事態を変えるだけの力はない！そうだ、そうやって嘆き悔しがることしか出来ないんだ！

はっはっはっ、いい気味だぜ！！」

ディリータはラムザの腕を振り解こうとする。

「言いたいことはそれだけか……？それだけかッ、アルガスッ！！」

「さあ、かかってこいよ！家畜は所詮家畜だっことを教えてやるッ！」

「アルガスッ！殺してやるぞッ！殺してやるーッッ！！」

ラムザは懸命にディリータを押さえ込もうとした。

「挑発に乗るな！ダイスターグ兄さんの思うつぼだ！」

「もはや同じだろうッ！ここまで来れば！！」

ウツと言葉に詰まったラムザの視線が、宙に泳いだ。

(……確かに……)

ラムザはもう一度、アルガスをじっと見つめた。

「それが……ダイスダーグ兄さんのご意向なのか。この機会に、デ
イリータを処分することが……？」

「そうさ！ バルバネス様は、お前が三男だから甘やかしてきたかもしれ
ないけどな。ダイスダーグ様の養子になって、ベオルブ家の跡
を継ぐなら、はじめを付けるべきだぜ！」

デイリータは齒軋りした。

迂闊だった。命まで取られることは無いと思っていた。ティータ
を連れてベオルブ家を去れば、充分だろうと……。だが、相手は実
の父さえ謀殺した男なのだ。

いや、デイリータの油断とは言えまい。

余程の自惚れ屋でなければ、この展開は予想しないだろう。ラー
グ公の知恵袋であり、ひいてはラーグ公と公妹・ルーヴェリア王妃
を通して国政にも関与していると言われるダイスダーグが、まさか、
たかだか十六歳の少年を本気で抹殺しにかかるとは。

ある意味、そこまで才能を評価してくれたのは、望外の栄誉と思
うべきか。

だが、それを彼にしては露骨すぎる手法で、ラムザにもはっきり
とわかる形で突き付けてきたということとは――。

「……」

ラムザは、しばし目を瞑り、唇を噛んでいた。が、やがて、深呼吸
を一つして、ぐいと袖口で涙を拭う。

「よく……わかった」

ガストンが非難の目を向ける。

「おいっ!？」

アルガスは嬉々として、ラムザに笑いかける。

「そうか！ わかってくれたか！」

だが、目を開けたラムザは、雨上がりの秋の空のように澄んだ碧

い瞳で、キツとアルガスを見上げた。

「ディリータは殺させない。ダイスダーク兄さんがそういうおつもりなら、僕はベオルブ家を出る。どうしても兄さんの許に僕を連れ帰りたいければ、首だけにして持って行くんだな！」

「……………?!」

ラムザの級友達も、アルガスも驚いた。

「……………」

驚かなかったのはディリータだけだ。

「な、何故だ……………？北天騎士団を裏切るっていうのか！」
アルガスが狼狽して叫ぶ。

——裏切り者！

不意に、ラムザの耳に幻聴が響いた。

(うッ……………!?)

「裏切り者！今更のこのこと、何をしに現れた？」

黒髪の男が、こっちに剣を向けて叫んだ。

「裏切る？俺は徹頭徹尾あいつの味方だぜ。貴様こそ、あいつの右で何をしていた？」

奴の手下の魔道士は、応答の無い通信機の画面を見つめて呆然と
している。

「バ、バカな……………。メタルヒットマン機械兵部隊が、全滅……………!？」

「おいおい。俺相手に、オモチャの兵隊なんぞが足止めになると、
本気で思ってたのか？」

思わなかったからこそ、奴が直々に出向いてきたのだろうな……………。
いつか、こいつとは決着を付ける時が来ると思っていた。

「……………化け物め……………!」

「俺はまだ、人間のつもりなんだが……………。正真正銘の化け物の手下
に言われたくないぜ」

「……………?」

「何だ、知らんのか。おめでたいな」

「く、くそッ！やれ！！」

魔道士は、左右に連れている三頭竜ティアマットに命令した。

グオンッ！！！！

二匹の三頭竜ティアマットの、合計六つの頭が同時に雷を吐く。戦闘艇でも叩き落とされそうな、超高圧電流だ。

だが今の俺には、左手に持った剣を鞘ごとかざすだけで事足りる。バリバリバリッ！！！！

紫電が剣に絡み付く。

パキンッ！

粉々に碎け散った鞘が、六枚の薄い光の盾を形作り、魔法の息ブレスを受け流す。

グルッ、グルルルウ……。

三頭竜達ティアマットは首を低くし、歯を剥き出して威嚇した。

「抜く手間が省けたな」

「その剣……！どうやって手に入れた……！？」

「どうもこうも、”あの魔法”を使ったに決まってるだろうが」

半透明の刀身の切っ先を、俺は魔道士に向けた。

「おい、三下。下がってろ」

「あ！？」

「”右の聖剣”と”左の魔剣”が殺り合う場に、他の奴が生きて立つていられるか」

俺の言葉に、奴が頷いた。

「ふむ。そうだな。邪魔者は失せろ」

淡々と言い、剣を垂直に立てて構えた。

この気配は……！！？

「逃げ……！！」

警告は間に合わなかった。

赤黒い靈子光オーラとして視える衝撃波が同心円状に拡がり、魔道士と二匹の三頭竜ティアマット、そして奴の後ろに居並ぶ兵士達を切り刻んだ。

「暗黒破碎刃」……ッ！！何が”聖劍”だ！

「貴様！！」

「時間稼ぎのお喋りは、もう充分だろう」

……見抜かれていたか。少しでも気を抜けば、俺の方こそ、あいつに辿り着く前に人間でいられなくなりそうだと。だが……。

「我らの主は、血を欲しておられる。まだまだ足りぬ」

「あいつは俺に、それを止めるよう望んでいる！」

時間が無い。

聖都はほとんど全域が次元の穴に飲み込まれている。だが、時空の門を閉ざそうとする力と、こじ開けようとする力とは拮抗していた。

せめぎ合う力の奔流は竜巻のように、飛空艇や摩天楼をバラバラに引き千切りながら空に巻き上げ、命あるものの絶えた街に火の粉の雨を降らせている。

「折角、魔力が回復するまで待ってやったのだ。全力であがき、そして絶望しろ。お前の恐怖と苦痛を、主は殊の外お喜びになるだろう」

奴は普段使いの聖紋剣を鞘に収め、もう一振りの剣を抜いた。

剣——いや、まるで柄だけにしか見えないあの武器は、もう一つの”鞘無き剣”^{（つるぎ）}。 ”究極の剣”^{（アルテマウェポン）}だ。その攻撃力は、使い手の生命力に比例するという。

ヴヴ……ンッ。

槍ほどの長さもある靈子光^{（オーラ）}の刃が現れた。色が漆黒なのは、奴が既に人外である証。

「そいつは光栄だが、辞退しておく。捧げたければ、貴様自身の血をぶちまけろ……と言いたところだが、貴様らだと本気でやりかねんな。血の一滴も残さずに消してやる」

これ以上あいつを待たせることは出来ない。

危険でも、全開で行く。

「『虚栄の闇を払い、真実なる姿現せ、あるがままに！』……」

呪文に応じて剣に魔力が流れ込み、半透明の刀身が青白く輝き始める。

一瞬、刃に映った金の瞳が、こちらを見つめ返した。

(……!?) ”僕” じゃない!!)

ラムザは瞬きした。

(何だ、今のは!?! 白昼夢か? こんな時に……!!)

やけに生々しかった。

今見た映像と、その意味について考えることを頭から振り払うように、ラムザは一つ身震いし、アルガスを睨んだ。

「だから何だ? こんなこと、許されるっていうのか!」

アルガスも頭を振った。

「な、何をとち狂ってるんだ!?!」

ベオルブ家は武門の棟梁だ! 長として果たさねばならない役割や責任があるッ! お前でなければ出来ないことがたくさんあるんだ! それが出来ない奴の代わりに果たさねばならない!

それを、お前は……、一時の私情に流されて、一生を棒に振るつもりか!?!」

「一時の私情……? そうじゃないよ」

ラムザは揺るぎのない声で言った。

「僕はラムザⅡベオルブ! ”天騎士” バルバネスと、”ベスラの聖女” ファティマの子だ!

”僕にしか出来ないこと” を果たすため、ダイスターグ兄さんとは袂を分かつ!」

「なっ……!!?!」

アルガスが呆然としている隙に、ラムザはガストンに目で合図した。

(行ってくれ!)

「!!」

ガストンはすぐに悟り、くるりとラムザ達に背を向けると、強引にナツシュとサーシャの手を引いて走り出した。

「へっ？」

「えっ……！」

脇を駆け抜けた少年達を見送って舌打ちしたベリンダに、ラムザは懷から引っぱり出した財布を丸ごと放った。

「ちよっとっ!？」

「ベリンダさん、仕事は終了です。残念ながら、テイータを助けることは出来ませんでした。これから始まる戦いに、貴女は関係ありません」

赤い髪の女傭兵は、受け止めた財布をポンと一度宙に投げ上げると、ラムザの横に来て懷に押し戻した。

「やだよ、つれないったら。」手切れ金”なんか受け取れないね」

その手で、ついとラムザの顎を撫でると、自分の方に首を曲げさせ、軽く口付けした。

「死なれちゃ困るんだよ。”出世払い”してもらうんだからさ」

「……。ベリンダさんこそ、死なないで下さいよ。幽霊になっても取り立てに來られそうで、怖いです」

ラムザは、唇に付いた口紅を拭った。

「当ったり前さね！」

とベリンダが言ったのは、『死なない』という意味か、それとも『死んでも取り立てに行く』という意味か。

いずれにせよ、アルガスの後ろから見ていた、一部の兵士達の攻撃力が上がったことだけは確かである。

（くそっ、ガキのくせに……!）

（おーおー、いーいご身分だなー）

（ブツ殺す!!）

ラムザは再び、アルガスに向き直った。

「嬉しいか、アルガス？ 念願叶って、百の兵の隊長だ。

わからないのか？ デイリータを始末すれば、次は自分の番だとい

うことが！」

「ああ!？」

「バカなことをしたな、アルガス。」

ダイスダーグ兄さんは現実主義者だ。リアリスト古い血筋だけで、今現在有力な家系でもない、ろくに実績もない君をいきなり重用すると思うかい？

百の兵といっても傭兵と囚人ばかり、隊長は新米の余所者……。

君は、君達は捨て駒にされようとしているんだぞ！」

ラムザは兵士達にも聞こえるように、大きな声で言った。

『詐欺師は騙されたがっている人間を騙す』という。

ベオルブ邸に置き去りにされたアルガスは、極度に不安な心理状態にあった。

ラムザとデイリータを追いかけていって謝るのは、非常に勇氣の要ることだ。

まずそもそも、身体能力の高い彼らに追い付けるのか。一人でさ迷っている間に、盗賊や魔獣モンスターに襲われるかもしれない。

仮に追い付いて合流出たとしても、今度こそ極秘任務でも何でもない、私的な命令違反である。一緒に処罰されるかもしれない。

いや、それでも、ラムザが彼を許して快く仲間に加えてくれさえすればいい。充分に報われるのだが――。

もしも、今までの考え方を翻して非を認めたのに、ラムザに拒絶されればどうなる？アルガスは、進むことも戻ること出来ず、居場所を失ってしまう。

その点、ダイスダーグ――の、部下だと言う騎士――に提示された道は、アルガスに都合の良いものだった。

心の拠り所としてきた価値観を改める必要は無い。デイリータへの反感は正当化され、ラムザとの友情は、彼の兄でもある、押しも押されぬ権力者が保証してくれる。

……”都合が良すぎる”と疑ってみるべきだったろう。

ダイスダーグ本人に会って話を聞くなり、書面で一筆言質を取る

なりしておくべきところだった。

だが、アルガスは心身とも疲れ切っていた。

疑うだけの、冷静な判断力が鈍っていた。いや、疑いたくなかったのだ。折角目の前にちらつかされた希望を、自らの手で壊したくないという意識が働き、障壁ヘッドルの低そうな解決策に釣られてしまったのである。

ディリータのみならず、ティータを排除することには、流石に抵抗感があった。しかし、彼女の存在がラムザの心を惑わしているのだ、彼の立場を危うくするのだ……と吹き込まれば、そういうものかと納得させられた。

——全て、御曹司のためなのです。一時は恨まれても、いずれ、感謝される時が来るはず。……

その囁きは、アルガスの良心を麻痺させる、魔の呪文となった。ラムザが涙を流してアルガスを睨んでも、罪悪感に胸が痛むどころか、彼を間違った道から救い出してやらねばという”正義感”が一層燃え上がるばかりだ。

「僕はダイスダーク兄さんの操り人形にはならない。利用されるだけの人生なんてまっぴらだッ!!」

「利用されるだけだど？ ふざけるなッ!!」

お前は誰にでもヘラヘラ笑いかけて、それで”友達”になった気でいるかもしれないけどな！ 本当は、一段高いところから周りの連中を見下ろして、一方通行に”恩恵を垂れてやっている”だけだ。ベオルブ家がベオルブ家として存在するために、利用してきたんだ！

「……」

アルガスの指摘は、ラムザの耳に痛かった。

ラムザはこれまで、身分の垣根を”越えて”様々な者達と交流を持つよう努めてきたつもりではある。だが、垣根を”取り払う”ことは出来なかったのだ。

「いや勿論、下々の連中だって、ベオルブ家を盾として、その庇

護の下で生き続けてきた。持ちつ持たれつの関係を築いてきたのが悪い訳じゃないさ。

「だけど、お前には本当の意味での”友達”なんか一人もいやしない。お前は、”親友”と称するディリータでさえ利用してきたんだ！」

「僕が……ディリータを？」

「そうだろ！お前の親父さんに拾われた身のディリータが、本気でお前に逆らえるわけがない。それを知っていて、いつでもものうのうと甘えてきたんじゃないか！そんなもの、友情でもなんでもない！」

「……」

それは違う。と、ラムザは言いたかった。

違うのだ。確かにラムザは長年、認めたくなくて、目を背けてきた。ディリータが”主人”であるラムザに逆らえないことから、ではなく……。

だが、そのことを口にすれば、恐れていた時が現実に来てしまいそうだと。

「だから……、だから……！」

「……貴様ごとき、浅ましい臆病者が、ラムザの”友達”になってやると？」

侮蔑の色も顕わに、ディリータはアルガスを睨んだ。

「貴様なぞッ！マンダリア平原で、野垂れ死にさせておくんだった！！！」

また飛び出しかけたディリータを、ラムザは取り押さえた。

「ディリータ、よせ！あの時は、こんな結果になるなんて誰にも予想出来なかった。目の前で困っている人間を放っておけないだろう！」

アルガスもディリータを睨んで、言い返す。

「だったら、次からは捨てておけ！友好的な人間だけとは限らないからな！」

もつとも、お前に”次”はあり得ないけどなあ！！」

ラムザは首を振った。

「アルガス、もう止める。君はダイスダーグ兄さんに騙されているだけだ。」

許すことは出来ないが、今ならまだ、見逃してやる。

一緒に行こう……とはもう言わない。でも、ランベリーに帰ればいい。

ここまで聞いても、デイリータを斬るつもりでいるのなら……、僕も……、君を斬らずにはおれなくなりそうだ……ッ!!」

「ラムザ、お前こそ、バカな真似は止めろ！オレと一緒にダイスダーグ様の許に帰るんだ。な？」

もう一度首を振ったラムザの目から、また涙がこぼれた。

「デイリータ、復讐にとらわれるな。今は、生きてこの場を切り抜けることに集中しよう」

「……。お前の指図は受けん」

デイリータは、肩を抱き押さえているラムザの腕をつかみ、引きはがした。

「俺は誰の言いなりにもならん。誰にも利用されんッ！

アルガスにも、ダイスダーグにも！ラムザ、お前にもだ!!」

「……!!」

いつかこの時が来ることを、ラムザは恐れてきた。

デイリータが、心において対等な”友”であるが故に、ラムザに臣従する立場に甘んずることが出来なくなり、独り立ちして離れていってしまうことを。

「……」

「……」

ラムザはデイリータを放した。

デイリータが剣を抜く。

「お前はベオルブ家に戻れ。これは俺の戦いだ。お前の手は借りん」
ラムザも剣を抜く。

「悪いけど、貸すとか借りるとかじゃなくて、僕も僕の戦いをする

ただだから。勝手に横で戦わせてもらうよ。

利用されるのが嫌なら、利用すれば？何てったって、僕らの連係攻撃¹って最強だもんな。使わない手はないだろ？」

ディリータの顔が歪む。

「……バカが！！」

「そんなの、とっくにわかってるって。君に、もう何百回となく言われ続けてきたんだものさ」

ラムザは肩をすくめ、くすくすと笑った。

が、それを見たアルガスは青ざめた。

「バツ、バカな……！三対百だぞッ！？勝ち目があると思うのか！！」

その問いかけに、思わぬ所から応える声が上がった。

「四対九十九ならどうだ？」

槍使いの男が、兵士達の中から進み出て、ラムザを背に庇うように立った。

「俺は御曹司の側^{がわ}に付くぜ」

「紫電^{ライトニング}”さん……！！”」

ただに目前の戦いが、文字通り桁違いに不利だというだけではない。契約に反して敵に寝返れば、生き延びても今後、傭兵として仕事が取れなくなってしまうのに。

「流石、バルバネス様の秘蔵っ子だ。大戦中、ほとんどの貴族は、俺達傭兵や義勇兵を、使い捨ての”駒”としか思ってなかった。だがバルバネス將軍と、ファティマさん達北天騎士団^{チーム}の医療班は、俺達を”人間”として扱って下さったんだ。

バルバネス様のご遺志を継ぐのがダイスダーク様か、御曹司か、考えるまでも無え！

”紫電^{ライトニング}のキース”、御曹司に助太刀出来ることを誇りに思うぜ」

キースが槍を構えて見得を切ると、

「五対九十八だね！」

大剣の少年も走り出て、ラムザとディリータの横に来た。

「えーと、”大剣遣いのルーク”だ！今からベオルブの若様を助けて有名になるんだから、覚えとけよ！」

威勢良く言ってから、ラムザの横顔をちらりと見た。

「若様、生き残ったら、家来に取り立てて下さるよね？」

「しかし……」

「お願いだから、『うん』って言って下さい」

ここでアルガス達と戦えば、ラムザはもう”ベオルブ家の御曹司”ではなくなる。それどころか、北天騎士団に盾突いた”反逆者”として、お尋ね者になってしまうだろう。

だが、今必要なのは、そんな言葉ではあるまい。

「うん、わかった。必ず取り立てるから、死ぬな！」

「やったあー！」

ルークと名乗った少年は、大袈裟にはしゃいだ。

「後は……もういねえか」

キースは油断無く、傭兵達を見回した。

「いつでもおっ始められるよ、坊ちゃん！」

ベリンダも、炎撃鞭フレイムウィップを腰の革帯ベルトから外した。

（こういう時は、確か……）

ラムザは、剣の師・ケルガーに教わった、”正しい挑発と牽制の仕方”を思い出した。

——誰しも、敵の思い通りにはなりたくないものでござる。『命惜しくば道を空ける』などと言えば、かえって『何を』といきり立たせてしまいます。ですから、敵を怯ませたい時には……、

ラムザは先頭に歩み出、ヒュンと一回転させて風を切った剣を、中段に構えた。

「死にたい奴だけかかってこい」

？－7－〔3〕 愚かな勇士達 ？三対百（後書き）

作中、デイリータはしょっちゅうラムザをバカバカ言ってきました。親愛表現でもあり、彼の自負心の表れでもあったでしょう。

それも、もはやこれまで。かくて竹馬の友（竹チヨコボの友……？？よくわからん！）二人の道は分かれゆくのでありました。

いよいよ始まる、『最強コンビ解散記念・ラムザチーム壮絶百人斬りの巻』！！……の前にまだ色々。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1671m/>

ゾディアックブレイヴ・ストーリー 黒翼の白竜 ～小説FFT獅子戦争～

2011年10月10日03時22分発行